日本名著全集
江戸文藝之部第五卷

近松名作集 下

この巻の装幀——

背及表紙意匠　黒木勘藏氏案（番附・紋章摸刻）

見返し前附　小杉未醒氏畫

同上後附　森田恒友氏畫

背文字　渡邊新三郎氏筆

扉文字　近藤雪竹氏筆

箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

近松名作集 下 目錄

解題

黑木勘藏

本卷は近松名作集上卷のあとをうけて、正德元年作者五十九歲の時からその絕筆に至る迄の代表的名作、世話物十一篇時代物十三篇合せて廿四篇を收めた。これによつて大近松の圓熟時代の代表的傑作をすべて知り得ると共に、上卷と併せ見れば、こゝに我邦空前の大劇詩人の全貌を窺知し得る事と思ふ。

作品選擇の標準及び校訂の方針は上卷と變る處はない。以下簡單に本卷所收の廿四篇について解題を加へる。

冥途の飛脚（忠兵衞 梅川）

正德元年三月五日から「新いろは物語」の切として竹本座上場。時に作者五十九歲。

大阪淡路町の飛脚宿龜屋の養子忠兵衞が新町槌屋の抱へ梅川に馴染んだ揚句金に窮して遂に友達

丹波屋八右衛門の江戸よりの爲替金五十兩迄費ひ込んだ。尤も之は八右衛門にも苦境を告げて一時融通の諒解を得たのであつた。然るに八右衛門は新町の揚屋越後屋で大勢の遊女に取卷かれて忠兵衛の惡口を散々言ひ散らした。之を立聞いた短氣の忠兵衛は赫怒の情抑へ難く、遂に出入の屋敷へ屆ける筈の三百兩の爲替金の封印を切つて、養子の時の持參金であると稱へて五十兩を八右衛門にたゝき付け、二階から下りて來て此狂態を止めようとした梅川の身請金を支拂ふ。二人は相携へて廓を出で、奈良の旅籠三輪の茶屋と廿日許り諸方をうろついて遂に親里新口村に入込み、舊知の農夫忠三郎の家に忍び入り、こゝで實父孫右衛門と餘所ながらの對面をする。此場面の孫右衛門の世間への義理と忠兵衛に對する肉親の愛情との葛藤は極めてよく描かれてゐる。忠三郎の情で裏道から御所街道へと落ち延びようとした二人は、程なく代官の手に捕へられて了ふといふ筋。

近松の世話物中最も著名な作の一つであるが、此實說が不明である爲に劇化の程度も判然しないが、比較的實說に近からうといはれる「好色入子枕」(正德六年刊)の記事を摘んでいへばかうである。忠兵衛は大和の豪農增田忠左衛門の長男で、男女の雙生兒の片破れであつた。美男で世才にたけてゐた。隣家の因州浪人の娘お吉と密かに相契つて居たが、お吉の父はさる醫者に嫁せしめようとしたので、お吉は其緣談を破らうとして父の手文庫なる持參金を盜み取つた所へ父が來たから當座遁れにその金を垣一重隔てた忠兵衛の庭に投げた。お吉は父の背打に恐れ慄いて氣絕したまゝ蘇生しなかつた。忠兵衛は世間から惡評を受けたので、父忠左衛門は表面勘當として窃かに知るべを

便つて龜屋の養子とした。忠兵衛はお吉の事に懲りて身を愼んで居たが、或年その當時流行の凧を揚げ、それが槌屋の屋根に落ちたのが縁で、梅川と馴染み、互に深くなり金に詰つて爲替金を私して梅川を請出し、大和路を指して行く途中追手の爲に召捕られ、十二月五日千日の刑場で忠兵衛は刑せられた。梅川は尼となり伏見の片ほとりに庵を結んで忠兵衛の菩提を弔つたといふ。

凧の取持つ縁などは餘りに奇縁過るが、表面勘當の體で龜屋の養子となつたについては右のやうないきさつもあつたかも知れぬ。併し梅川の末路は小說的に潤色されてゐて事實でないことは寶永七年九月刊行の「御入部伽羅女」の記事が之を裏書するやうに思はれる。卽ち梅川は忠兵衛と共に捕へられて入牢したが寶永七年の春には赦されて新町の廓に返り咲きをしたものと見えて、

此廣い大阪にも珍しく、今年の春より梅川といふ新町の女郎籠入してより久しい事ぢやが、不思議なるかな手足爪先のあの美しさ、髮の結ひぶり、いつにても爪を隱すは猫の變化に疑ひなし、こなた衆も國へ土産に、女郎の道中といふものを見ておきやれと、爰にても見立てられし處へ、槌屋の梅川、それ來たはとて、人の山高きが故に貴からず、器量をもつて貴人、數萬の中を八の字もどきゆりだし道中（御入部伽羅女、巻三、第十飛脚は月にお三度大盡）

といつて居るし、また同書巻五、第十九義理より深い槌屋の梅川の條に

かけまくも槌屋の梅川、くもりなき其身の仕合、佛神の御加護にて、世間廣き御惠みに、あひに相生の松よりすぐれしはやり女郎、京へ歸る名殘とて、あなたこなたへ暇乞ひ……。

とある。梅川には罪は無いので放免されて新町で二度の勤めに人氣を湧かせ、それより京都へ歸つたらしく、決して忠兵衛に心中を立て抜いたのではなかつた。それ故に正德元年正月京都都萬太夫座の二の替り「けいせい九品淨土」で梅川は山本かもん、之に對して三度飛脚龜屋忠兵衛（花岡文左衛門）は端役で、梅川には他に情夫があつて廓を抜出る手段として色仕掛でこの忠兵衛に連出してもらひ、馬方六藏に殺されて金を取られ、梅川は越前の三國で二度の勤めをするといふ仕組になつて居るのも、梅川の性格を原事實に表れる人物に近く脚色した爲であつたらう。こゝに我々は虛實皮膜の藝術觀に立脚して事件を美化し淨化した大詩人の才筆とその人格とを歎美せざるを得ないのである。

劇の場面としては封印切と新口村が最も勝れて居る事は言ふ迄もないが、趣向の上に於ては上の巻段切で堂島屋敷の金を懐にしてうか／＼と米屋町迄歩むのは「重井筒」の四つ辻の段と相似た點があり、新口村の段は後の「博多小女郎波枕」の中の巻心淸町の段と一脈相通ずる親心の切なる表現を描いたものである。次に有名な下巻道行の「翠帳紅閨に、枕並べし閨の内、……」の文句は寳永元年刊行の「松の落葉」第二巻の稲荷塚四つ門から出て居る。今參考として左にその全文を掲げる。

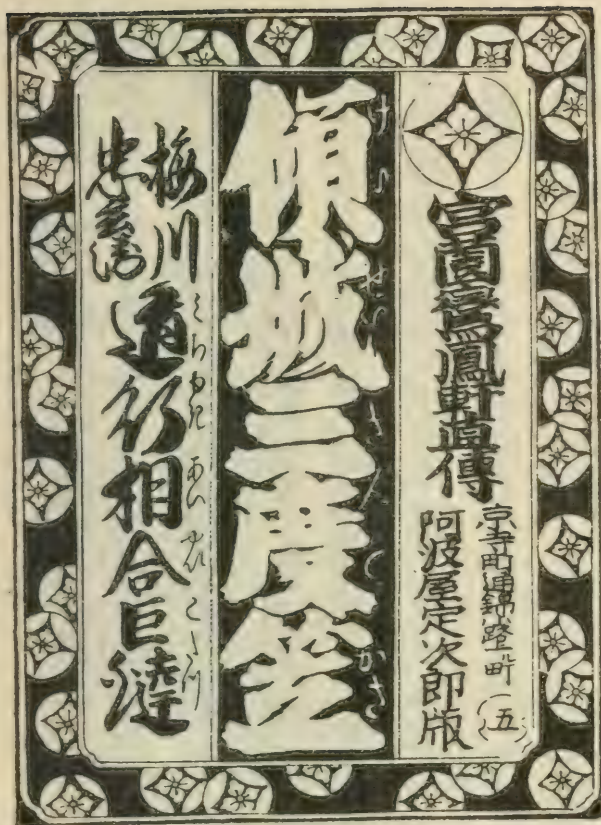
二上り翠帳紅閨に、枕並ぶる床の内、馴れしねまきの夜すがらも、四つ門の跡夢もなし。さるにても我がつまの、秋より先に必ずと仇し言葉の人心、そなたの空よと眺むれど、それぞといひし人もなし、夏もはやすぎ窓の、秋風冷かに吹き落ちて、よしや思へばこれとても、逢ふは別れなるべし、世をも人をも恨むまじ、たゞ身の程を思ひつゞけて、我ひとりまろねの床こそ淋しけれ。

これは元祿十二年に初代中村七三郎が京都で江戸歸りの名殘狂言として演じた「稻荷塚」の所作唄で、その詞章上の原據は謠曲斑女であると思ふ。

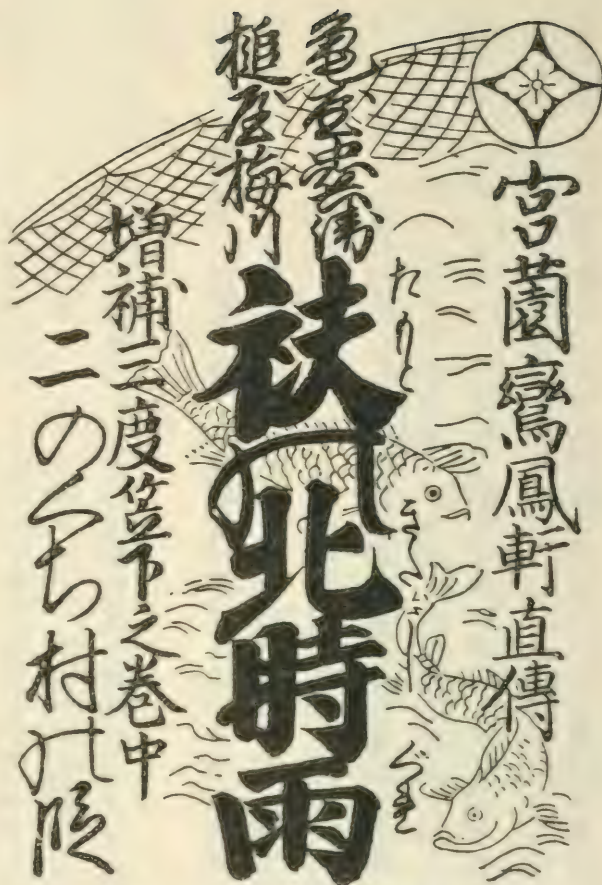
「傾城三度笠」正本

次に本曲の改作として第一に擧ぐべきは紀海音の「傾城三度笠」である。この作は正德三年十月二十日から曾根崎新地芝居で興行された豐竹座の操芝居「播州曾根松」の切に出したもので、出勤の太夫は豐竹若太夫（後の越前少掾）多川源太夫、豐竹左内、豐竹喜代太夫等で相當に好評であつた。今原作と相違する要點をいへば、忠兵衞は五歳から龜屋に養はれ、養母の姪に當る大和三輪のおとらと許嫁になつて居る。然るに忠兵衞が商用で江戸下りの留守におとらは叔母を尋ねて、忠兵衞には新町の梅川といふ馴染があつて自分の事は毛頭心

にない、自分は三年越し契つた在所の新兵衛と夫婦になり度いからと懇願して許される。江戸から歸つた忠兵衛はこれを聞いて、梅川を請出して男の顔を立てるといふ、處が梅川は友達の利右衛門

宮薗節正本「三　度　笠」

が身請するといつて既に手附金を渡したと養母から聞き、爲替金を懐中して新町の揚屋へ行き、利右衛門の心底も汲まずに罵詈したり足蹴にしたりするが、利右衛門の眞情を知るに及びその情誼に感じ、梅川を戀敵の田舎者には渡さないと爲替金で身請をすませて三輪の新七の許に身を寄せる。新七夫婦は叔母の恩を思つて二人をかくまひ、殊に新七の父新兵衛は身を犧牲にしても二人を助けようとしたが遂に捕へられるのである。筋は通つてゐるが、忠兵衛は非常に冷靜な打算的の人物として描かれ、全體に理智的であり、義理づくめであつ

て、原作に見るやうな温かい人情味と詩趣とが無い上に、文章もひどく見劣りがして、兩作者の劇詩人としての優劣を明かに示して居る。

宮薗節正本「二の口村」

更に上記の二篇をつき合せて改作したのが安永二年十二月廿三日から豐竹此吉座で上場された「けいせい戀飛脚（こひびきやく）」で、作者は菅專助・若竹笛躬である。上下二巻より成り、上巻は生玉の段、飛脚屋の段、下巻は西横堀の段、新口村の段に分れてゐる。龜屋におすはといふ忠兵衛の許嫁があるのに、分家の從兄の利平が戀慕して、忠兵衛が梅川に熱くなつてゐるのを利用して中の島の八右衛門と共謀して忠兵衛を陥れて養家を追ひ、おすはも本家も共に我物としようとするを梅川の兄の忠兵衛が救ふといふ上巻の筋は、「三度笠」のおとら新七の關

係を一層技巧的にして一段作品の價値を低下させたものである。それにも拘らず飛脚屋の段と新口村の段とは舞臺上に何度となく繰返された。そして又此作が歌舞伎に入つて「戀飛脚大和往來」と改題されて興行される事となつた。寛政八年正月大阪の角座興行が始めで、今日に及んで居る。而して更にこの「大和往來」が操に逆輸入され、天保元年閏三月北堀江市の側の操芝居に於て「戀飛脚大和往來」の外題で新口村の段を竹本雛太夫と竹本氏太夫とが語り、其後操でも前の「けいせい戀飛脚」と並び行はれるに至つた。

最後に本曲が他の流派に及した影響を一瞥するに、一中節の語り物として今日に傳へられる「三度笠相合籠道行」と題する典雅哀婉なる樂曲の詞章は「冥途の飛脚」の「相合駕籠」を流用したもので、作曲者は都半仲である。而して半仲が後に獨立して宮古路豐後と稱へて豐後節の開祖となるに及んで更に之を轉用したものと見えて豐後の正本にも同じ詞章が殘つて居るが、曲節は絶えた。同じく曲節の絶えたものに正傳節の「增補三度笠道行明日の噂」がある。寶暦十三年刊行の「春富士都錦」に載つてゐる。上記の道行文を多少改修したに過ぎない。又宮薗節の正本に道行より二の口村迄を三段に仕立てたものが殘つてゐる、大外題は「傾城三度笠」であるが、詞章は近松の原作を增補したに過ぎない。江戸の劇場で用ひられた梅忠の淨瑠璃としては次の諸曲がある。

寛政元年三月　市村座　艷容垣根雪　富本豐前太夫連中
寛政八年三月　河原崎座　燕鳥故郷軒　常磐津兼太夫連中

寛政十一年九月	森田座	三度笠戀の乘掛	富本延壽連中
文化九年六月	森田座	道行浮名の時附	常磐津兼太夫連中
天保八年九月	中村座	道行情の三度笠	常磐津文字太夫連中
天保十四年正月	中村座	道行故郷の春雨	清元延壽太夫連中
天保十四年九月	市村座	其名巳浪花梅忠	常磐津文字太夫連中
弘化二年九月	市村座	道行故郷の露雲	清元延壽太夫連中

この外にもまだあるが、餘り煩瑣である上に此場合左程必要でもないから略して置く。

校訂用原本は七行五十四丁本。

吉野都女楠

正德元年九月十日から竹本座の勾欄にかゝつたもの。

詩材を太平記から取つた作で、楠木正成の湊川戰死より楠木正行の旗擧げに及び、後醍醐天皇が吉野に皇居を定め給ふに至る頃迄の間の出來事を取扱つてゐる。正行が母と共に、坊門宰相邸から遁れさせられた後醍醐天皇を天神の森にお迎へして吉野に御案内申上げるといふ第四段の切によつて題名をつけたものと思はれるが、女楠の活動は僅かに此一段だけであつて、作としての主要なる

内容をなすものは足利尊氏の臣小山田前司一家の悲劇で、この前後に櫻井の遺訓、坊門宰相の暴戻なる振舞、名和長年の活動などが取合せられてゐるのである。

「吉野都女楠」七行本

故に作の中心は第二段の切求塚身代りの段より第三段の東寺の首實檢の段、一條大路梟首の段、前司自刃の段迄である。而して求塚身代りの段は今日も歌舞伎で演じられる福地櫻痴居士の「求女塚身替新田」（明治廿五年三月歌舞伎座上場）の原作であると共に、首實檢の段は後の寺子屋の段に深い關係を有するのである。この一段は新田義貞の情義に感じて求塚の戰場で義貞と名のつて大森彦七に討たれた小山田太郎高家の首を京都東寺の尊氏の本陣に於て、十八年前に武士の意地を以て勘當した父の小山田前司が實檢するのであるが、その樣子

を寫した「近々と立寄り右へ廻り左へ向き、ためつすがめつ見れば見る程、疑もなき我が子の高家」といふ句は、寺子屋の段で松王が首桶を引寄せて「眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て」といふ名文句の粉本となつて居るのみでなく、「生顔と死顔は相好が變るなどと身代りの贋首、それもたべぬ、古手な事して後悔すな」といふ松王のせりふは、本曲の「これ前司殿、生き顔と死に顔とは相好の變るもの」といふ大森彦七のせりふの燒直しである。

校訂用原本は七行九十丁本で、十一行三十三丁本を對校用とした。附けていふ、從來淨瑠璃の正本は八行本が行はれたが、此淨瑠璃を初めて大字七行本として刊行し、爾來丸本は七行本となり、これより以前の當り淨瑠璃をも七行本に再版するに至つた。

夕霧阿波鳴渡

寛文十二年に京都の島原から大阪の新町へ鞍替をして此廓で全盛をうたはれた名妓夕霧が萬人哀惜の裡に廿七歳を以て世を去つたのは延寶六年正月六日の事であつた。そこで大阪道頓堀の荒木與次兵衛座ではその翌二月三日から「夕霧名殘の正月」といふ外題で追善劇が興行された。伊左衛門に坂田藤十郎夕霧に霧浪千壽で、伊左衛門の傾城買の仕打が無上の大出來で、これが實に藤十郎の出世藝となり、又この芝居は年内に四度繰返し、それより一周忌・三年・七年・十三年・十七年忌

といふ風で、藤十郎が世を去る迄に十八度も繰返された程であつた。
處が一方に於て貞享元年夕霧七年忌を當込んで新作されたものに「夕霧七年忌」がある。近松卅二歳の時の作で、「名殘の正月」の後を承けて、夕霧歿後七年を經過した伊左衛門の荒んだ境遇と夕霧との間に儲けた薄命な娘おせきと伊左衛門が溺れた難波といふ夕霧に瓜二つといはれた遊女とを中心とした純世話物で、伊左衛門に藤十郎難波に千壽が扮した併し「七年忌」は此時限りで其後は又前の「名殘の正月」が歌舞伎の舞臺に繰返されたが

三世相
作者 近松門左衛門

「三世相」巻頭

それは當然の事で、この作へは夕霧が出ないので物足りない上に、特に七年忌を當込んだ際物で、夕霧劇としては傍系に屬するが故である。

次いで夕霧の戯曲は貞享三年五月刊行の竹本義太夫の正本「三世相」である。「夕霧三世相」「遊君三世相」及び「夕霧追善物語」共に異名同曲であつて、これ亦近松の作である。夕霧の淨瑠璃としては最初のもので、夕霧の九回忌を當込んである。奈良の樂人狛左京が夕霧と契つて二人の間に春姫といふ子迄あつたが、夕霧死後春姫は左京の許で育てられた。然るに繼母の迫害を受けて父の不在の折に殺されようとするを老臣望月六郎左衛門に救はれて辛うじて虎口を脫し、大阪新町で夕霧の妹女郎に逢つて母の供養を營み、又その墓前で夢の裡に夕霧が現世で多くの男を迷はせた罪によつて地獄の呵責を受けて居る樣を見る事などがある。一方父左京も悪人の爲に一時家を奪はれて流浪したが、のち世に出で父子再會して春姫は官女に召さ

「三世相」巻尾

れ。夕霧は盛大な追善供養を受けて成佛するといふ筋であつて、時も場所も人も構はないお家騒動物式の夢幻的な佛臭い作柄である。同じ材題を同じ作者が扱ひながら一方歌舞伎の方では既に純世話」として脚色されてゐるに拘らず、かういふ風な淨瑠璃を作つたといふ事は頗る奇異に思はれるが、これは近松の筆も未だ若く、且義太夫の藝風と操に對するその頃の一般の好尚と又操本來の特質とに制約された結果による點が多かつた故と考へる。

然るに其後廿餘年を經過して義太夫の藝は圓熟の域に達し、近松亦歌舞伎の方面に於て青年時代から世話物について鍛へた腕を操の方面に於て揮ふ事となり、先づ「曾根崎心中」に大成功を收め、引續いて世話淨瑠璃を作つてその筆いよ〳〵圓熟巧妙の域に達した場合に作られたのが實にこの「夕霧阿波鳴渡」である。夕霧劇としては本曲は前を受けて後を開く、大切な位置に立つ作である。上卷吉田屋が最も名高く、後の歌舞伎や淨瑠璃の夕霧物は皆こゝから出てゐる。

外題年鑑には本曲を以て寶永七年七月廿四日から「根元曾我」の切として竹本座上場としてある。併しこれは疑はしい。何となれば若しさうだとすれば「鸚鵡か杣」にその外題が出て居なければならぬ筈である。此書は寶永七年の翌正德元年秋刊行された竹本筑後掾の段物集で、筑後掾のこの時迄の語り物の外題の殆んど全部が網羅されて居り、寶永七年の諸作は勿論、正德元年三月の「冥途の飛脚」迄も載つて居るのである。然るに「夕霧阿波鳴渡」だけは見當らずして、正德二年九月刊行の筑後掾の段物集「鸚歌が薗」に始めて出て居る。茲に於て本曲は正德元年秋から同二年秋迄の

間の作であらうとの推測は當然起らざるを得ない。而してこの推測を合理的ならしむる有力な傍證ともいふべきは、本曲の大團圓にある「扇屋夕霧、憂ひ却つて悦びを、語り傳へて三十五年、又五十年五百年……」といふ句である。外題年鑑に從つて從來の人々の如く三十三年忌を當込んだ作と說明しようとしても、この句が邪魔になる上にそれらしい暗示すらも作中のどこにも見出せない。然るにこれを夕霧歿後の三十五年目を利かせたものとすれば何の不自然もない事になり、而してその三十五年目は實に正德二年正月に當るではないか。して見れば前の推測はいよ〳〵動かない事となる。故に私は本曲を以て正德元年末又は同二年初春の作と推定する。

改作物について一言添へて置く。寶曆元年四月豐竹座上場の「浪花文章夕霧塚」はその一である。浪岡橘平・淺田一鳥・安田蛙桂の合作。阿波の兒島侯の侍衣笠主計が、大阪新町の夕霧に溺れた爲に處刑されようとするのを、兒島侯へ出入の大阪の藥種商藤屋了哲に救はれてその養子となつて伊左衞門と名乘つたが、夕霧との關係はなほ持續するといふ風に仕組み、これに兒島家の重寶定家の色紙紛失問題、伊左衞門の許嫁である平岡左近の娘おとせの貞烈な働などを取合せてあるが、改惡も甚しいといはざるを得ない。而してこの作を更に飜案したのが「傾城阿波の鳴門」（明和五年六月竹本座上場、近松半二等作）で、これには德島の玉木家の寶刀國次の詮索をする十郎兵衞夫婦を助ける人物として藤屋伊左衞門は配せられて、原作の面影は全くない。それに對して安永九年に作られた「廓文章」は、同じ改作でも原作の面影を相當に傳へたもので、この後操芝居では度々繰返され

て居り、叉歌舞伎に用ひられた事は言ふ迄もない。

最後に豐後節系統の夕霧物について見るに、その原據は宮古路豐後の正本「夕霧阿波鳴渡」である。

「夕霧」宮古路豐後正本

これは近松原作の吉田屋の段の文をそのまゝ取り、夕霧伊左衛門の口說のあとに夕霧の身請を簡單に附加して一段物に纏めたものである。富本節の「一㑹夜障子梅」（天明四年正月森田座上場）から清元の夕霧となつた同名の語り物は此系統を引いた詞章である。これに對して常磐津の夕霧といはれる「其扇屋浮名戀風」（寛政二年六月市村座上場）は義太夫の「廓文章」の系統を引いたものである。

六行二十六丁本を校訂用原本とし、八・九行三十丁本を對校用とした。

嫗山姥

正德二年七月十五日から竹本座上場。時に作者六十歳。

坂田忠時の女糸萩が佐與中山の宿に於て旅宿の料理人となつて世を渡つて居る碓氷荒童丸といふ勇士の助太刀によつて、父の仇として年頃狙つた半正盛の臣物部平太を討ち、相携へて此處に宿泊中の源頼光に投じ、荒童丸は召抱へられて貞光と名のり、糸萩は敵の首を討つた重代の刀を捧げ、頼光はこれを鬚切膝丸と名づけて源家の寶刀とした。糸萩の兄時行は遊女荻野屋の八重桐に溺れて功名を妹に奪はれたのを愧ぢて自殺した。處がその魂魄が八重桐の胎内に入つて懐姙する。八重桐は山中に隱れて山姥となつて生み落した子を怪童丸と呼んで育て上げる。一方に於て頼光は正盛の讒言によつて一時京都を落ち、美濃で冠者丸の身代りによつて危難を遁れ、信濃の山中で季武と主從の約を結び、それより山姥に逢つて懐舊談を聞き怪童丸を召抱へ、江州甲掛山に分け入りて妖怪を退治し歸洛して恩賞を受けるといふ筋である。

第二段の荻野屋八重桐は當代の名優荻野八重桐の舞臺姿を人形劇によつて復現しようとしたものであるといはれ、またその長ぜりふは、「しやべり山姥」と稱へられて今猶本曲が舞臺に生命を有する場面の中心的興味を構成するものであるが、劇の系統上から見れば元祿十二年の近松の作「傾城

佛の原」の梅房文蔵（坂田藤十郎の役）の戀物語、及びこれを轉用した「天鼓」（元祿十四年、近松作）の呉服の中將身の上話などの二番煎じである。また第三段の冠者丸身代りの場は謠曲「仲光」の系統を引いた「忠臣身替物語」（元祿二年、近松作）によつたものであり、第四段は謠曲「山姥」を原據とする事は言ふ迄もなくして、題名も亦これに基くのである。

校訂用原本は七行八十四丁本で、十行三十五丁本を參照した。

長町女腹切

この淨瑠璃は大阪の長町に女の切腹といふ珍しい事件があつたのに、お花半七の情死を取合せて脚色したものであると言はれる。

處でお花半七の情死の實說については、關根只誠の「戲場年表」はこれを元祿十二年八月七日の事であるとし、お花は歌舞伎井筒屋かめの抱へで半七は道修町の刀屋であつた、そして心中の際男は咽を突いたが其場では死に切れずして三日目に死し、女は腹を切つた後咽を突立て即死したとある。併しこれについては他に傍證が無いから何とも言ひ兼ねるが、お花は本曲の筋にあるやうに寧ろ京石垣町井筒屋の遊女であつたといふ方が事實で、「戲場年表」の說の方が、逆に淨瑠璃によつて潤色されて居るやうにも感じられる。

次に此淨瑠璃の著作興行年月については安永八年板の「外題年鑑」には元祿十三年正月六日とあり、自然近松の世話淨瑠璃の嚆矢であると言はれて來た。併しこれは誤りである。其理由を簡單にいへば、第一に此淨瑠璃の中卷に「賣買高い此節二貫目ぢかい廿兩」といふ句があつて、これは金貨廿兩替には銀貨二貫目近くを要するといふ意味であるが、元祿十三年頃は金一兩は銀六十匁替であつて當らない、然るに正德元年四寶字銀といふ粗惡な銀貨が行はれるに至つて銀八十匁を以て金一兩替と迄銀貨は下落したのであるから、此作は乃ち正德元年以後でなくてはならぬ事となる。而して更に有力なる第二の證とすべき手がかりは中卷の

仲居のまんが供して通るあれは澤村長十郎。あつたら男をやがて大阪へ下り舟。歌流金子も難波津へ。咲くや此の花其の花の。噂も戀の種ぞかし。

とある點で、歌流は神崎歌流、金子は金子吉左衞門のことで、長十郎と共にこの三人が程なく京から大阪へ下るといふ意味をこめてある。澤村長十郎は元祿十四年に京夷屋座初舞臺の役者であるから、元祿十三年に出る筈がなく、この點から見ても外題年鑑は誤つてゐる事となるが、さて前の銀貨問題と關聯して、正德年間に於ける件の三人の移動を見るに、長十郎は正德二年の顏見世興行(十一月廿七日)から大阪の光山座に、また歌流と金子とは同じく此年の顏見世から大阪の嵐三十郎座に出勤して居る。(役者懷世帶)而して作中に秋の季節に關する叙事のある點を併せ考へて正德二年秋の作と推定してよからうと思ふ。

此淨瑠璃は上卷京堀川の刀屋石見内の場、中卷石垣町井筒屋の場　西石垣茶屋の場、道行、下卷大阪長町甚五郎内の場に分れて居て、刀屋石見の手代半七が深く契つた井筒屋のお花の急場を救ふ必用な金の才覺に窮して、大阪長町の伯母からさる大名の若殿へ上る爲だといつて細工を頼まれた信國の刀の中身をすりかへて、その賣りへぎの金を融通したが、とても遁れぬ身の上と覺悟し相携へて驅落し、事情を叔母に告白して死なうとしたが、伯母が代つて自害するといふので、信國の刀にまつはる因縁に牽かれて半七の伯母は孤兒の甥を助ける爲に犧牲となるといふのである。氣の通つた慈悲深い人で、しかも雄々しい武家の血を引いた處のある半七の叔母の性格が最も鮮かに力強く描き出されてゐる。中卷井筒屋の場で半七がお花の繼父九兵衞に向つて二十兩の金を投げつける條は「冥途の飛脚」の封印切の場に似通つてゐる。

享保十六年正月十三日から大阪の角座で興行した「雙紋刀銘月」は此作を改作して二番續の歌舞伎に仕立てたもので、お花に藤井花松、半七に佐渡島長五郎で、その心中道行を宮古路豐後が出語りにし　大當りを取つた。その詞章は現存するが、本曲の道行を改修したもので、骨は同一である。又豐後の正本として傳はる「雙紋刀銘月」の中卷は此作の中卷井筒屋の場と同じである。明和元年五月竹本座上場の「京羽二重娘氣質」（近松半二・竹本三郎兵衞作）も本曲の改作である事は改めていふ迄もあるまい。

八行三十七丁本によつて校訂した。

おさん茂兵衛　大經師昔曆

有名なおさん茂兵衛の姦通事件を脚色したもので「外題年鑑」（明和板）には寶永三年九月二十一日から竹本座興行となつてゐるが、此作の大團圓が「當年未の初曆めでたく、開き始めける」といふ句で結ばれてゐるのは、正德五未年春の作たる事を暗示するもので、天和三年に處刑された二人の三十三回忌を當込んだ作と見るべきである。

おさん茂兵衛の實說については、水谷不倒氏の近松傑作全集卷之四大經師昔曆の解題の中に次のやうに見えてゐる。

大經師の家は京都烏丸通り四條下る所にあり、主人は意俊（以春は憚りて字を變へたるもの）といふ、女房さんといふ者同家の手代茂兵衛と密通し、これが媒介をなしたる下女の玉と共に丹波國氷上郡山田村に潜伏しゐたるを召捕となり、天和三年八月九日詮議の末、さん玉の兩人は町預け、茂兵衛は手鎖にて三人とも更に茂兵衛の兄七兵衛へお預けとなり、翌十日さんと茂兵衛とは牢舍、玉は意俊にお預けとなり、同年九月廿二日三人共洛中引廻しの上粟田口に刑せられぬ。さて處刑の次第は、本犯なるさん及び密夫茂兵衛に磔、肝煎したる玉は獄門にかゝり、茂兵衛には兄弟三人ありしが、中宿をしたる者共と追放せられ、意俊は大經師の家斷絕してこゝに一件落着したりといふ。右は京都所司代にて密通者處罰の判例に供したる書留の大要（「趣味」第四卷第三號の春靄生の寄書に據る）なりといへば、事實として信ずべきものなり。

とある。貞享三年刊行の西鶴の「好色五人女」の巻三中段に見る暦屋物語の結末にも「……粟田口の露草とはなりぬ。九月二十二日の曙ゆめさら〳〵最期いやしからず、世語りとはなりぬ。」とあつて、その年は天和三年らしく作中に暗示されて居る。又寶永元年刊行の「落葉集」巻五踊音頭の部に載つて居る小豆庄兵衛作の「おさん茂兵衛」も貞享元年初秋の盂蘭盆におさん茂兵衛及び玉の新精靈が精靈棚の前に還つて來る事になつて居るから、處刑を天和三年として居るわけである。然るに近松は「すでに貞享元年甲子の十一月朔日、來る丑の初暦けふより廣むる古例に任せ」と書き出して、作中の事件を實説や前の諸作よりは三年繰下げて貞享新暦頒布の際に始まるといふ風に仕組んである。近松が三十年以前に同じく貞享新暦頒布を當込んだ作を「賢女手習并新暦」と題したのに對して、今この作を「大經師昔暦」と題したのは、一種の好對照をなして居るかに思はれる。

此作は西鶴の五人女に據る處は多いが、女主人公たるおさんの性格には頗る相違がある。即ち茂右衛門と姦通後五百兩の金を用意して駈落し大津の濱で入水したと書置を殘して人目をくらまして不義の快樂に耽るといふやうなふて〴〵しい、又徹底した處いおさんは、近松の作にはこれを見る事は出來なくて、おさんの姦通は、夫以春に生恥をかゝせて懲らしてやらうとの一念から出た事が、全く思ひがけない暗闇の人違へであつたので微塵濁らぬ心であつたといふのである。兩作者の相違を比較する上にはこの兩作はよい實例である。またおさんの親道順夫婦やお玉の伯父赤松梅龍なども近松好みの人物として描き出されて働いてゐる。

下巻「おさん茂兵衛こよみ歌」の中のサイモン（祭文）の節付以下の暦づくしは「大經師おさん歌祭文」の茂兵衛が玉を仲立として以春の江戸下りの留守におさんに送る戀文の暦づくしの文に似た點が多い、この祭文はその結末の「京でおさんと好色の、五人女の一の筆、世の口ずさみ一昔、かかるあはれは又も世に來るまじ……」との句によつて處刑後約十年、即ち元祿五六年頃作られたものかと考へられるが、すれば此祭文も近松の作に幾分の影響を及したと言へる。又同じ「こよみ歌」の中の「强きおきめに粟田口、蹴上げの水に名を流すおさん茂兵衛が新精靈……」の句は前に言つた踊音頭の「おさん茂兵衛」から取つたものである。故に參考迄に本曲に關係のあるその前半を左に掲げて置く。

おさん茂兵衛

小豆庄兵衛作

比は貞享元年まだ初秋の盂蘭盆に、なき人かへる魂祭。精靈祭の棚經の、聲にひかれてお客人、我も〳〵と來る中に、はたち許りの若男、女精靈召具して、うたふ小唄の細々と、戀には闇がましぢやと謡ひつれ、下女只一人召連れて、精靈棚の一間なる、手島蓙にぞ直らるゝ。亭主出を見るよりも、これは見馴れぬお客人、お名は如何にと尋ぬれば、問うてたもつて嬉しやな、尋ねてたもつて恥しや。强きうき目に粟田口、蹴上げの水に名を流すおさん茂兵衛が新精靈、恥しながら來りたり。今一人の下女の名は、魂は冥途へ通へども、魂魄こゝに止りて、文の使ややりくりを、したる科にて是もまた、同じおきめに逢ひしぞや。亭主出を聞くよりも、

扨は左樣でましますか、さこそ冥途で中よくも、夫婦一處に添はれうの、但し氣儘に添はれぬか、愚かの人の問ひ事や、二世とかねたる中なれば、夫婦一處に所帶する住所こそ悲しけれ。賽の河原を西へ行き、地獄のずしといふ處に、無間の釜で茶を沸かし、血の池の水つるべあげて、猛火盛んにもやし立て、往來の亡者にお茶まゐれ、お茶をまゐれと袖を引く。(下略)

又正德五年正月大阪の嵐三十郎座で、おさんに嵐三郎四郎、おさん父嵐三十郎、助七大島道右衛門、以春山村義右衛門、母霞波たきえ、茂兵衛坂東彦三郎といふ役割で「大經師」の狂言が興行されて居るが、近松の作との關係は明かでない。

此淨瑠璃の上卷大經師内の段は、近世に至つて操では度々繰返されてゐて私の知る處でも天保から慶應迄に於て大阪の文樂座其他で十回以上も興行された。

元文五年十一月作者近松の十七回忌追善として此作を竹本座で「百日曾我」の切として興行した時に「戀八卦柱曆」と改題して出した。尤もこの改題された稱呼のまゝでも後に度々繰返して上場され「昔曆」と併び行はれた。此他に「貞享元年情昔曆」といふ改題のものもあるが、此外題は餘り世に行はれなかつた。

七行四十五丁本によつて校訂し、八・九行廿六丁本を參照した。

嘉平次　おさが　生玉心中

正徳五年八月一日から「持統天皇歌軍法」の切として興行されたもので、時に作者六十三歳。
大阪松屋町九之助橋の茶碗商一つ屋五兵衛の悴嘉平次は許嫁のおきはを嫌ひ、伏見坂町柏屋の抱へおさがと深く契つた。嘉平次は金策に窮した結果却つて惡友長作の詐僞にかゝつて進退に窮し、死を覺悟してさがと牒し合せ、五月節句の夜大和橋の自分の支店で落合つた。こゝへ父五兵衛が尋ね來て強意見の上、情の金を置いて歸ると入違ひに長作が來て暴力を以てその金を奪ひ去る。いよいよ絶望の極に達した嘉平次は、さがと相携へて生玉社内に於て心中するといふ筋である。

上卷天滿社内淸水屋の場は「曾根崎心中」上卷の生玉社頭の場に似た仕組であつて、彼の德兵衛に對するこれの嘉平次、彼の九平次に對するこれの長作は共に並行した相對的人物であるのみならず、惡漢長作については作者自身も「嵐の芝居の曾根崎の狂言が、面白うて再々見るとぬかしたがよう見覺えた。取りも直さず油屋の九平次、惣じて狂言淨瑠璃はよしあし人の鑑になる、おのれはかたりの手本にするか師匠の九平次より倍越した大かたり」と嘉平次に罵らせて居るのでも知れるやうに、全く九平次型の敵役である。次に中卷大和橋の嘉平次出見世の場で、五兵衛が嘉平次におきはとの結婚を無理に承諾させてその固めの盃にとて嘉平次の差出す萩燒の大皿へ、腰に下げた瓢から酒を注ぐぞと傾けてから〳〵さら〳〵と酒にはあらぬ一歩銀を山とあけて「慈悲知らぬ親の酒を見よ、誠の慈悲の味ひを飲みて知れや……この酒飲んで方々の恥辱をすゝぎ、無明の酒の醉さませ」と言つて泣く條は「心中二枚繪草紙」の中卷で市郎右衛門が荒神へ供へた神酒德利から酒と思

つて壹步銀をつぐ趣向からの脫化であるが、場面の活躍は前者の比でない上に、慈父の眞情が溢れてゐて、親の慈親を描くに特に勝れた筆を持つてゐた近松の作中でも稀に見る緊張した場面で、實に本曲の頂點を示すものといふべきである。

二人の情死に關する實說は明かでないが、本曲にあるやうに五月節句の事であつたと傳へられてゐる。

校訂用原本は七行四十七丁本。

父は唐土 母は日本 國性爺合戰（こくせんやかつせん）

正德五年十一月一日（淨瑠璃譜の頭註には十五日からとある）から竹本座に上場されたもので、空前の大當りをとり三年越十七箇月興行を續けた。のみならず此の作は時の劇壇に非常な刺激を與へ、歌舞伎の方面に於ても翌享保元年秋には京都の都萬太夫座、享保二年三月には大阪の嵐三十郎座と荻野八重桐座、享保二年五月には江戶の中村座市村座共にこの「國性爺合戰」を演じて一層人氣を湧かせたといふ有樣であつた。又操の方では紀海音はこれをもぢつて「傾城國性爺」を作り、近松自身も引續いて「國性爺後日合戰（こくせんやごにちかつせん）」（享保二年二月）を出したがこれは當らず、更に間を置いて享保七年正月「唐船噺今國性爺（たうせんばなしいまこくせんや）」を作つたがこれも失敗に終つた。然るに「國性爺合戰」だけは人氣があつ

て享保五年正月、享保十六年五月、寛延三年七月といふ風に二度目三度目四度目と相當な年月を隔てては上場され、慶應末年迄に大阪の操芝居だけで私の知る範圍のみでも約三十回繰返され、かくして今尙舞臺に生命を有する名作である。

明朝亡命の臣鄭芝龍と肥前平戶の田川氏との間に生れた一子鄭成功が父に從つて支那に渡り明朝恢復のために活動し我國へも援兵を求めたが成らずして、のち臺灣に據つて長く淸朝に對抗した著名な事件を材題としたもので、その荒筋は次のやうである。明朝思宗皇帝の時右將軍李踏天が韃靼王に內通して其軍勢を引入れて王城を陷れ帝を弑した。大司馬將軍吳三桂は亂軍中に我が兒を犧牲にして幼太子を助け、之を奉じて九仙山に隱れた。皇妹栴檀皇女は辛じて敵手を遁れて日本の平戶に漂着し舊臣鄭芝龍老一官の子和藤內に救はれた。老一官は帝を諫めたが用ひられなかつたので亡命して日本に渡り日本人を妻として和藤內を生み、既に廿餘年を過したのであつた。然るに今祖國の難を聞くや妻子と共に本國に渡り、前妻の女錦祥女の夫甘輝の居城獅子が城に赴き援助を求めた。甘輝は容易に肯じなかつたが錦祥女と和藤內の母との貞烈なる死に動かされて和藤內と同盟を結び、韃靼軍を擊破して李踏天を屠り、九仙山なる太子を迎へて明朝を再興し、和藤內は功を以て國性爺延平王に封ぜられるといふに終る。

此作の主人公を和藤內と呼んだのは、和(日本)でも唐(支那)でも無いといふ洒落からで、これが「父は唐土母は日本」と外題に角をつけたわけであらう。「國性爺」の「性」を性とよむのについて

は。穗積以貫は作者が支那めかさんが爲に南京などの例に倣つた遣り方であるが、若し正しく唐音に從ふならば國性爺と呼ぶべきである（難波土產）と言つて居るし、水谷不倒氏は「上方訛り殊に女詞にはせいの音をせんとはねて讀む癖は他にもあり、例へば傾城の假名をけいせいといはずけいせいんとはねて讀む類なり。この訛りを利用し支那音めかしたる例の作者の頓才なるべし」（近松傑作全集卷三）といつてゐる。併し本居宣長の「玉かつま」卷九つねに異なる字音のことばの條に

もろこしの國の、明の代の明を、ミンと呼ぶも、唐音なり。今の代の淸を、シンといふは唐音の訛なり、淸の字の唐音は、ツインと呼べり。又明の代のとぢめに鄭成功といひし人を、國姓爺と稱ふ。この姓の字をセンといふも、唐音にスインといふを訛れるなり。さてこの國姓爺といふ稱は、國姓とは當時の王の姓をいひて、此人明の姓を賜はれるよしなり、爺は某老某丈などいふ老丈のたぐひにて、たふとめる稱なり。

とある。鄭成功は永曆帝から明帝の姓朱氏を賜つて國姓爺と稱へられたのであるから「國性爺合戰」の「性」は當然「姓」であるべきだが、京都の菊屋板十行本の正本以外の諸正本や操芝居の番附は皆「性」の字を用ひてあるから、本集も亦慣用に從つて敢て改めずに置いた次第である。

本曲の眼目は三段目獅子が城の場であるが、その重要人物たる和藤內の母の義烈な死は事實によつたものである。齋藤拙堂の「海外異傳」や朝川善庵の「鄭將軍成功傳碑」にも芝龍の妻田川氏が節に死して一子成功を激勵した事を叙してある。この事實を劇化したのであるが、その手法は「碁

國仙野手柄日記
信濃掾
山本飛騨掾
作者錦文流
正本屋
藤九郎

盤太平記」山科閑居の場の切に似て、しかも彼よりは一層悲壮であり、一段と場面が活躍して居る。
この段を長崎の譯司周文二右衛門が漢譯して支那へ送つたのも有名な話である。

野　仙　國」

この作が大當りを取つたのは、材題が斬新にして時人の耳目を聳動するに足る事件であつた事、當時としては極めて珍しかつた支那を舞臺として彼土の生活人情等を俗受けのするやうに描き出した事、支那人と比較して日本人の特質を描きお國自慢に氣焔をあげた事、主人公國性爺が濶達にして一本氣で義に勇み武勇に勝れしかも祖國を忘れぬといふ日本人好みの陽性の人物であつた事、場面の變化に富み剛柔善悪の人物の配合宜しきを得た事等の色々の條件を擧げ得るであらうが、要するに詩材結構文章共に近松の作中屈指の雄篇である。この作によつて筑後掾歿後の竹本座の危機を救ひ

同座の基礎を固め得たのは、國性爺の成功を生でいつたやうなもので頗る興味深い現象であつた。

此作より前に國姓爺を材題とした浄瑠璃として作られたものに「國仙野手柄日記」といふのがある。錦文流の作で、山本飛騨掾座に於ける信濃掾・岡本今文彌の正本である。著作年代は明かでないが正本の終りに「山本彌三五郎受領手づま太夫山本飛騨掾太夫今文彌正本」とあるのによつて見れば、彌三五郎が飛騨掾を受領後間もない頃のものであると考へるが、彼の受領は口宣案によれば元祿十三年十一月廿五日である點から推すと、此作は同年末か翌十四年春

手柄日記「

頃の作と考へてよいと思ふ。雲南の龍明王が韃靼王の爲にその居城を圍まれたので、皇女梅だら女は圍みを脱し一日本に渡り智勇兼備の士を語らひ父王を助けようとして御影の沖に船がかりし高樓

に遠目鏡をすゑて往來の武士を目利し、こゝに鷲尾遠矢之助氏照同矢柄之助輝景の兄弟を得る。兄は色事師、弟は大力無双の勇士である。二人は彼地に渡つて奇計と武略とを以て韃靼軍を敗つて龍明王を救ひ、その功で兄の遠矢之助は太子となり、弟の矢柄之助は國姓爺となつたが、本國からの迎があつたので別れを告げて歸國し、兄弟が多年父の敵として狙つてゐた大友彈正を討果すといふ筋である。水がらくりなどを盛んに用ひた荒唐無稽のものであるが、近松の「國性爺」より先にかういふ作のあつた事は注目すべきであり、殊に彼の梅だら女と此の梅檀皇女とは頗る類似して居るし、又これの第五段の呉三桂の山蜂を入れた竹筒の計略は既に彼の「手柄日記」に用ひられて居るなど、兩者の間に多少の關係はあつたとも見られるので、今日迄餘り世間に知られて居ない作である故茲に一言して置く次第である。

校訂用原本は七行九十丁本で、七行百三丁本と十行五十四丁本とを對校用とした。

鑓の權三重帷子

享保二年八月廿二日から竹本座上場。時に作者六十五歳。有名な近松三姦通曲中の最も勝れた作であるのみでなく、彼の作中傑作の一に數ふべきもの。

雲州松江侯の茶道の師淺香市之進の江戸詰の留守中、表小姓笹野權三は若殿御祝言の振舞の際眞

の臺子の茶の湯を勸め度い希望で、市之進の留守宅なる妻のおさゐにその傳授を懇願する。おさゐは權三を愛するの餘り長女との婚約を條件として之を許すこととし、夜中數寄屋に會合する。この時おさゐの性來の妬情勃發による狂態の爲に庭へ投出した二人の帶を、おさゐに戀慕して忍込んで居た川面伴之丞に握られる。權三が切腹しようとするをおさゐは「間男といふ不義者に成り極めて市之進に討たれて男の一分立てて進ぜて下され」と無理に「權三が女房、お前は夫」といつて相携へて駈落し、三十七の女と廿五の男とは相許し合つて諸方を流浪する。歸國した市之進は直に舅岩木忠太兵衞の宅を訪うて別盃を交し、義弟甚平と共に妻敵討に出かけ、遂に伏見京橋の上で二人を討果すといふ筋である。

上卷の切數寄屋の段が最も名高いのであるが、下卷の口忠太兵衞玄關先の段も勝れた場面で、義理と人情との纒綿の極致が描き出されてゐて、讀者や觀客を泣かせずにはおかない。

此作の實說については「月堂見聞集」の享保二年の條に次のやうにある。

一、七月十七日夜五つ時分、大阪高麗橋にて妻敵討有之、雙方雲州松平出羽守御家中

妻敵　近習中小姓　池田文次　年廿四歲

女　正井宗味妻　とよ　年卅六歲

實夫　茶道役　正井宗味　年四十八歳
とよ親　小林幸左衛門
幸左衛門子　同　彌市郎　年卅四歳
宗味子三人　姉　くめ　年十三歳
弟　鐵太郎　年十一歳
妹　よそ　年八歳

右は文次とよ兩人、六月八日に國許を駈落仕候而、同二十三日に大阪へ着、宗味は六月二十七日に江戸發足、七月十三日に大阪御奉行所へ相斷、同十七日討レ之、小林彌市郎儀兩人之非道を怒り、宗味をすゝめて大阪へ同道仕、文次旅宿を尋出し、兩人をそびき欺き、方人顏して宗味等ねらふ由を申、今夜の中に大阪をひらき、京都へもかくれ可レ申歟と諫む、兩人實と心得、高麗橋迄出る處を宗味待かけ討レ之、文次が衣類は越後ちゞみの帷子染紋あり、紫縮緬の帶、疵は大小十二ケ所、とよ衣類は、絹ちゞみ帷子黑繻袂の模樣、上帶黑繻子、下帶白縮緬、疵一ケ所けさ切り、

宗味は足に一ヶ所疵有り、是は文次が止めを刺し候時に下よりなぐり候疵の由、彌市儀は兼て助太刀不レ叶故に、兩人相果候を見て、直に國許へ歸り候。鐵太郎は朋輩の玉井紹知預置、姉妹は祖父小林幸左衞門預り（下略）

大阪では歌舞伎でも操でもこの事件を一夜漬にして興行しようとした事は、同じく此事件を綴つた浮世草紙の「女敵高麗茶碗」の次の序文で明かである。

難波の芝居に八つの櫓先をあらそひ、盆替りの間もなく、場所の働き目を驚かし、實にや好色橋辨慶とは、近松門左が思ひつき、浮世は夢の浮橋と、吾妻三八が趣向の外題なり。是ぞ因果はまはり燈籠の、嵐になびき吹き傳へたる女敵討、名高き橋の咄しをそのまゝ、取りつくろはずたて掛けて、高麗茶碗と此書をいふのみ。

時に　享保貳つのとし七月廿一日

吾妻三八は此時片岡仁左衞門と新地櫻橋北の芝居の相座本であつたから、此座で演じたものと見えて、一夜に作つた妻敵討の狂言が大出來であつたと「役者三幅對」（享保三年正月刊）に出てゐるが、近松の「好色橋辨慶」の方は外題は揭げたが都合によつて實演に至らずして一旦之を撤回し、改めて此事件の主人公を俗謠で知られた槍の權三に假託して趣向を立てて事件後一ヶ月餘にして上場したものと思ふ。同じ事件を取扱つた浮世草紙に前にあげた「女敵高麗茶碗」の外に「雲州松江の鱸」（享保二年作、作者未詳）及びこの影響を受けたと思はれる享保三年の序文のある「亂脛三本鑓」（西澤

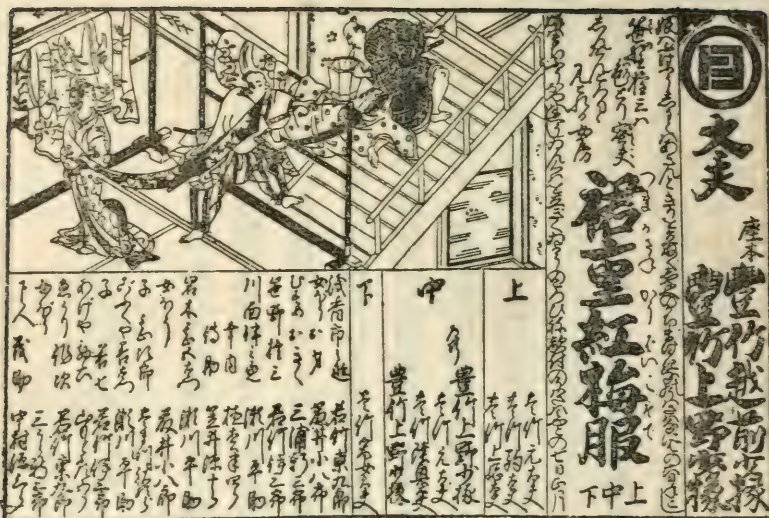
「雲州松江の鱸」より

一風作）等あれど、近松の作は是等の影響を受けたとは思はれずして、上記の事實を基礎としつゝ事實に捉はれずして、例の虚實皮膜の態度で立派な作品を作り上げたのである。

　而して此作の男主人公として用ひられた鑓の權三は古く俗謠で知られた人名である。寶永元年刊行の「落葉集」卷之五祇園町踊之唱哥の中に

　　鑓權三　男をどり　大阪にあり

二上り　そりや〳〵そりや〳〵、やりの權三ははすはにござる、谷のやつとんと、さゝやでやあ、そろへにかゝる、しなへてかかる、どうでも權三はぬれ者だ、油壺から出すやうな男、しつとんとろりと見とれる男、磯の千鳥を追つかけて、石突つかんでづんづとのばしやる〳〵、さあさゑいさつさ

「操番附」

さつさ、ゑいさつさ〳〵、さつさどうでも權三は
よつどつこいよい男え。

とある。斯く謠はれた鑓の權三は昔の鑓踊をよくした美男の若衆俳優であつたのを（或は俳優絲より權三郎の略よりの權三からやりの權三と訛つたのかとの説もあるがどうであらう）近松は槍の名手といふ風にしたのではなからうか。

又「重帷子」とつけたのは太平記の師直艷書事件で世に知られて居る「さなきだに重きが上の小夜衣わがつまならぬつまな重ねそ」の古歌の心を取り、討たれた時間夫は越後ちゞみの帷子、女は絹ちゞみの帷子を着てゐたのを利かせたものであると考へる。

延享四年二月十三日から豐竹座で興行された「裾重紅梅服（つまがさねこうばいこそで）」は淺田一鳥・但見彌四郎の合作で、此淨瑠璃の改作であるが、結構文章共に遙かに原作に劣る。

校訂用原本は七行四十九丁本、對校用十行廿五丁本。

山崎與次兵衛壽の門松

享保三年正月二日から竹本座上場。時に作者六十六歳。

零落した難波屋與平が新町で全盛をうたはれる藤屋吾妻の意氣と、その情夫山崎與次兵衛の男氣とに感奮して、金儲けの爲に江戸へ出立の際、廓の外で與次兵衛の戀敵藥屋彥助に傷を負はせて去る。與次兵衛は男の面目上寃罪を身に引受けて父淨閑の許に監禁の身となる。吾妻は廓を脱走して尋ねて來る。與次兵衛の妻お菊と父淨閑との情によつて二人は駈落する。與次兵衛は當てなき心勞と父との妻との眞情に精神的大刺激を受けた爲に發狂し、吾妻はこれを介抱しつゝさまよふ。江戸に下つた與平が大金を儲けて歸り、吾妻を身請して與次兵衛に添はせ、與次兵衛も恢復するといふ筋。

此作の上卷は吾妻が與平母子の乞を容れて與平に逢つて情をかけてやる場面が中心であるが、ここに吾妻の理想的の名妓たる容姿と言動と人柄とを描いて、これによつて與平を感奮興起させ、また與平と與次兵衛との應待の間に男と男との意氣の投合を示してゐるが、この二つの條件が第二段の葛藤の因となると共にまた大團圓の解決の動機ともなつてゐるのであつて、それが爲に近松の他の

世話物に類を見ない義侠的の精神に富んだ作柄となつて居り、自然任侠的な與平といふ人物が頗る重要な一人物として働いてゐる。この點が後に「昔米萬石通」（享保十年正月、西澤一風・田中千柳作）を經て「雙蝶々曲輪日記」（寛延二年七月、竹田出雲・三好松洛・並木千柳作）と改作されて男達物と展開する要素となつたのである。併し本曲の眼目は中巻淨閑内の段である事は言ふ迄もない。將棊の段は趣向としては「源義經將棊經」（寶永三年近松作）の第四段軍法將棊經の二番煎じで「碁盤太平記」の碁盤の條の類型であるが、場面の緊張して行くさまが隙間なく描かれて、後段の升落の段との二場を通じて、近松好みの澁い底光りのする慈父の典型たる淨閑の面目が遺憾なく浮び出てゐる。町人として世間への體面も大切であり、若い者の將來も考へてやらねばならぬとは十分承知してゐながらも、抑へ難きは子を思ふ親心である、まさかの時には子の身代りにならうとさへ思ふその本然的の慈愛の發露が新口村の孫右衛門よりは一段と積極的である有難い親である。

さて此作の男主人公ともいふべき山崎與次兵衛は槍の權三や丹波與作や薩摩源五兵衛などと同じく俗謠で名高い人物で「落葉集」巻四古來當流踊歌百番中の第一番に

本調子 吾妻うけ出す山崎與次兵衛、請出す〳〵山崎與次兵衛、今は思ひの下紐とけて、廓住ひのうさつらさをば、聞くもなか〳〵うらめしや〳〵、聞くもなか〳〵うらめしや、しようがの〳〵、これ〳〵これ〳〵しましよかの、そつこで請出せ三百兩、二口合せて六百兩、すつとしよてんびん、はり口ちんからり。

と出て居る。斯く元祿期に踊歌に迄謠はれた山崎與次兵衞については次のやうな巷說がある。山崎與次兵衞といふのは攝州河邊郡山本村の豪家坂上與次右衞門の替名である。彼は大阪新町の富士屋與三兵衞の抱への名妓吾妻に打込み、九軒町の井筒屋太郎左衞門方で揚詰にして贅を盡して遂に身請をした。それを歌に作つて謠つたのが、あづま請出せ山崎與次兵衞、うけだせ〳〵山崎與次兵衞、そつこでうけ出せ三百兩といふ唄で、其頃の女郎の身の代金三百兩は珍しい事で、今の千金より幅が利いたといふ。

以上は「澪標(みをつくし)」の要旨であるが、西澤一鳳は異說を立てて居る、彼のいふ處では山崎與次兵衞は實在の人物ではなくて、大阪新町の吾妻に溺れた淀屋辰五郎をモデルとしたのである。辰五郎は北濱の家屋敷が闕所となり大阪を追放されて八幡へ引籠つたのであるが、八幡といへば直に山崎が連想されるので、こゝに山崎與次兵衞といふ名を假設し又父を淨閑と呼んだのは、山崎から思ひついて連歌師の山崎宗鑑をもぢつてつけたのである。その上宗鑑の職人歌合の油賣の歌に「宵ごとに都に出づる油賣ふけてのみ見る山崎の月」に因んで雛與平を油賣としたのである。而して雛與平が吾妻を見そめるといふ趣向の原據は京都智惠小路上立賣の富豪の子息灰屋紹益の妻となつた六條の廓柳町林屋の吉野といふ名妓に懸想して彼女の一夜の情に深く感じ、且つ我身のはかなさを歎いて桂川に身を投げて死んだといふ京七條通りの鍛冶駿河金彌の弟子仁藏の話と河村瑞軒が材木の取引で巨利を占めた事柄とを取合せたものであるといふ。(傳奇作書續中、後集中)巧妙な說明であるが淀屋

辰五郎の傳說に附會し過ぎたやうな感じもする、辰五郎が吾妻を二千兩で身請して妾としたのを「其頃大阪にての風聞專らにて、吾妻請出せ山崎與次兵衞、歌に作りて狂言の仕組に淀屋が替名をば山崎與次兵衞と出したり。」とある「元正間記」によつたやうに思はれる點もあるが、それにしては前の「そつこで請出せ三百兩」の歌の大切な句が生きないやうにも思はれて、「澪標」の方にも捨てがたい點もあり、結局正體は不明になる。但し作の系統から見れば「椀久末松山」の飜案であり、椀久・辰五郎・與次兵衞は同型の人物であつて、こゝに色々の憶說も生れる餘地がある。

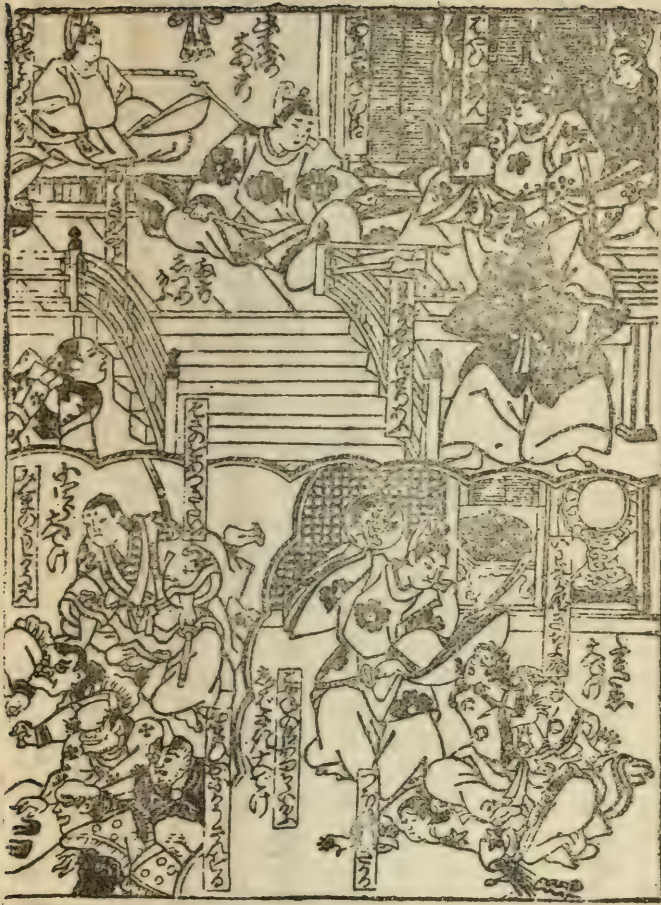
七行四十三丁本によつて校訂した。

日本振袖始

享保三年二月廿二日から竹本座上場。

近松の作中神代の材料を取扱つたのは此作のみである。素盞嗚尊瓊々杵尊の妃木花開耶姫を戀慕して鰐香背の臣の言に從ひ暴力を以て之を手に入れようとされる。稀代の惡女岩長姫と化して現れた出雲の簸の川上鳥上の嶺の八岐の大蛇といふ惡鬼がその隙に乘じて十握の寶劍を奪ひ去る。尊はその贖罪の爲に先づ蹈山に棲む疫神の首領三熊野大人以下の四百四病の疫神を平定して無病息災の手形を得、更に天兒屋根の臣の諫言を用ひて單身出雲に到りて稻田姫を救ひ、八岐大蛇を退治して

寳劍を奪還し給ふといふ筋で、第四段目に尊が稻田姫の熱病を平癒させるために兩袖の下を切開いて關腋の脇明けとする、これ日本に於ける振袖の始であるといふ條がある、題名の因つて出づる所である。

「日本振袖始」

第三段の蘇民將來巨旦將來の事は「備後風土記」などに見えて居て古い民間傳說であるが、素盞嗚尊を祭つた祇園牛頭天王とは最も深い關係があつて、世に知られて居る信仰であるからこゝに用ひたので、本曲中最も人情味の出て居る場である。

此作は本年（享保三

狂言本より

年）京都の榊山四郎太郎座で、原作と同じ筋で演じられた。役割のおもなるものは天津兒屋根の臣柴崎林左衛門岩長姫霧波瀧江、咲耶姫富永玉桐、三熊野大人澤村音右衛門、巨旦將來坂東又十郎、蘇民將來坂東彦三郎、稻田姫淺尾みやこ、素盞嗚尊榊山小四郎。そして淨瑠璃を都太夫一中。都若太夫・都三中、三絃を千原新六が勤めて居るのは珍しい、多分道行を語つたものであらう、

此淨瑠璃が文化三年七月大阪御靈の操にかゝつた時には近松梅枝軒・佐川藤太の手によつて增補された。

校訂用原本は七行八十三丁本。

曾我會稽山

享保三年七月十五日竹本座初日。

曾我兄弟の復讐を材題とした所謂曾我物の戯曲は謠曲淨瑠璃歌舞伎を通じて見れば非常に多數に上り、恐らくは同一材題に基づく戯曲の數の多い點に於ては他に類例を見ない程であらう。自然近松の作中にもその數は決して少くはない。本曲は言ふまでもなくその最も著名なものゝ一であるが、この外にも左の諸曲がある。

世繼曾我　天和三年刊
曾我七以呂波(義經追善女舞)　元祿九年刊
團扇曾我(百日曾我)　元祿初年刊
根元曾我　元祿初年カ
曾我五人兄弟　元祿十四年刊
大磯虎稚物語　元祿十五年刊
本領曾我　寶永三年刊

加増曾我　寶永三年刊カ

曾我扇八景　寶永三年刊

曾我虎磨　寶永七年刊

是等の諸曲はいづれも「曾我會稽山」よりは前に出たものであつて、しかもいづれも直接間接多少の影響を本曲に及して居るのであるから、自然本曲は近松の曾我物としては集大成されたものであると共に又渾融潤熟の妙境に達したものといふ事が出來るかと思ふ。古來本曲を近松時代物の三大傑作の一であるなどとさへ稱へられたのも、あながち過當の評でもないと思はれる程の手際の作柄である。

此作の第一の特長は曾我兄弟の復讐前後の、廣い場所に亘つての複雜な出來事を建久四年五月二十八日寅の一點より同二十九日卯の上刻迄晝夜十二時(とき)の間に縮寫して活躍の趣致を全曲の上にみなぎらせた點にある。第二には曾我兄弟以外の人物、殊に蒲冠者範頼巴御前朝比奈二の宮夫妻禪師坊等の活動が目ざましく描き出されて、これが兄弟の復讐といふ事件の焦點を鮮かに浮出させるために渦を卷いて居る事である。

福地櫻痴居士の「十二時會稽曾我」(明治廿六年五月歌舞伎座上場)は本曲の改作である。

七行九十三丁本によつて校訂した。

傾城酒呑童子

享保三年十月二十五日から竹本座興行。

此淨瑠璃は本年九月三日落着の大阪新町茨木屋幸齋の處罰事件を賴光四天王時代の世界とし、大江山酒呑童子退治に附會して脚色したものである。茨木屋幸齋の一件については「浪花青樓志」「過眼錄」などにも見えて居るが、左に神澤其蜩の「翁草」卷四所載のものを引用して參考に供する。

浪華新町傾城屋茨木屋幸齋事身の程知らぬ奢を極め、己が居間は金襖水晶の障子輝きわたり、宛も宮殿の如く、朝夕掛盤にて饗膳の式に等しく、日々に獻立を以て料理を伺ひ、庖丁人山海の珍味を整へて之を饗す。あまた抱への傾城打掛姿にて配膳給仕す。己が心に叶はざる料理をば足を以て膳蹴返し、身には錦繡を衣とし、ラツコの敷皮梨子地の曲彔、その過差高位の人にも超え、其頃八文字屋自笑が出せし草紙にも、傾城籠昭君と題せし五冊ものに、其驕りを書けり。我家の裏に公儀地の有りしに、それへ能舞臺を建てゝ、常に猿樂を翫ぶ。かやうの類重ね／＼超過して、享保三年に廳所へ召呼ばるゝ處に虛病を構へて出でず、仍りてまづ手錠をかけ、所へ御預けになり、幸齋家内を改めらるゝ處に、金銀財寶の高は未だ考へず、傾城の抱へ太夫三十七人、引舟三

十七人、禿三十七人、天神四十二人、禿四十二人其外局女郎など大勢これあり、凡そ家內の人數五百人許りなり。同九月三日幸齋並に悴多助牢舍仰付けられ、御詮議の上大阪三鄕御拂ひに相成り、而して幸齋は京都島原に來て娘の名前にて暫く潜居しけるが、大阪にての奢りの事喧しく人口に在りて、京にても粗ゝ御沙汰あるくらゐなれば、島原にも住みがたく、跡を匿して去りぬ。

（下略）

序にいふが、此作の太四郎といふ人物は卽ち前の實說の悴の多助をモデルとしたのである。多助は父とは異つて性質溫厚にして風流の嗜もあり、且つ世才にも長けてゐたので、島原の揚屋町の者が取持つて桔梗屋といふ絕家の株を買ひ、次第に繁昌するやうになつたといふ。

そこで近松は此事件を當込んだ浄瑠璃として本曲を作るにあたつて、新に筋を立てたのではなくて十一年前の自分の舊作「酒呑童子枕言葉」（寶永四年九月）を改作して間に合せたのである。「酒呑童子枕言葉」は五段より成る時代物であるが、其筋はざつとかうである。花山天皇の寵妃弘徽殿の女御がかくれ給うたので、平安盛は女御と容姿の酷似してゐる中納言高房の女三の君を入內させて君寵を擅にしようとする。併し三の君は渡邊綱の媒酌で鳥飼少將と婚約が定つてゐるから、綱と保昌とは少將に納れようとする途中で、姫は大江山の酒呑童子にさらはれる。（以上第一段）山科の花山寺へ隱遁遊ばした花山院は三の君と瓜二つといふ高房の養女右近を召される事となつたが、弘徽殿の怨念が祟をなすのが第二段。第三段は加藤兵衛の訴へにより、賴光は兵衛の女橫笛を誘拐した

北白河の廣文に嚴命を下して江州鏡山のひはだの長の許に責られて居る横笛を救はせる。兵衞廣文等が尋ねて行つて見れば、折しも横笛は勸めを厭つて自害を企てて重態である。で、廣文も申譯に切腹し、その女を兵衞に横笛の身代りとして養女に遣す、これが第三段。第四段は賴光四天王酒吞童子退治のため大江山入、童子物語。第五段童子退治。

これに對して本曲は第一段は全然同文、第二段も正本によつては同文、第三段は改作であり、第四段第五段のみが新たに作られた部分で、こゝに前に擧げたやうな事實をほゞそのまゝ用ひて茨木屋幸齋の放恣驕奢な生活を描いてゐるが、それでも横笛・加藤兵衞・廣文などの人物は同一の名稱であるのみならず、境遇關係も同一である。さればかう比較して見れば「酒吞童子枕言葉」に於て全體の筋の上から見て不自然の挿入の如くに思はれる第三段鏡山ひはだの長内の段は或は茨木屋の驕慢を暗示して世の注意を促したものではなかつたらうかとさへ思はれる程であつて、兩篇の關係は頗る興味あるものと思ふ。

外題は、新町の通語で吉田屋を鉢好、茨木屋を童子と呼んだのでそれを利かせた上に「酒吞童子枕言葉」を改作して世界を酒吞童子退治の賴光時代に取つたのでかくつけたものである。

七行八十七丁本によつて校訂したが、これは流布本とは稍異るにより、流布本の本書と相違する部分、乃ち初段の三の宮をさらはれる條及び二段目の口をイ本として倂せ掲げて置いた。思ふに八十七丁本が原形で、こゝにイ本として掲げた流布本は後に補修されたものであらう。

博多小女郎浪枕

享保三年十一月二十日より竹本座興行。

京都の商人小町屋惣七が商用のため筑前へ下る途中、門司の沖で海賊船に乗合せ、彼等のために海中に投込まれたが、不思議にも九死に一生を得て博多に行き、柳町の奥田屋で年來馴染の遊女小女郎に逢ふ。こゝで圖らずも前の海賊連と再會して、あはや血の雨を降らさうとしたが、その張本毛剃九右衞門は首領たるの襟度と機智とを以て咄嗟に小女郎を身請して惣七に與へて一味たらん事を求める。惣七は大苦悶の末、國禁の罪を小女郎の戀に代へて毛剃の配下となり、不自由なく同棲したが、遂に召捕らるゝに及びて自殺するといふ筋。中卷の京都心濟町惣七借宅の場で、惣七小女郎が壁を隔てて父惣右衞門と訣別する條は「冥途の飛脚」の新口村から脱化した趣向である。

今日でも舞臺に生命を有する「毛剃」の原作であつて、海賊を取扱つて居るといふ點に、近松の他の諸作に類例を見ない異彩を放つものであるが、その實說については從來不明であつた。私はこれについて先年雜誌「邦樂」第五卷四號(大正八年七月刊)に考證文を揭けて置いた。同誌は今では殆んど手に入れ難いやうであるから、こゝにその要點だけを摘出して置く。

濱松歌國の「攝陽落穗集」に「享保四年十一月、唐船密商者五人、高麗橋にて三ヶ月さらし、野

江に於て鼻をそぎ、其後銀錢等を遣され、御拂に相成候は、珍しき仕置なり」とあるのがその原據だらうと言つた人もあつたが、これは信じ難い。それよりは注目すべきは「月堂見聞集」卷の十享保三年の條下の次の記事である。

閏十月十九日（享保三年）朝六つ半時に、大阪御屋敷にて今度長崎表拔買の者に被レ爲ニ仰付一候趣、北條安房守樣御屋敷にて、拔買の科人御召出し、其町々年寄五人組家主共被レ爲ニ召出一、安房守樣飛騨守樣御立會にて被レ爲ニ御渡一候、扱又殿樣御入被レ遊候て後、御役人方より本人町人共へ御申渡し有之由、罪人總高六十四人、內御預け三十人許

京東石垣二條行當り田中屋半兵衛事　辰砂源兵衛

同油小路通二條上る町　福島屋仁左衛門

右兩人は閏十月十九日朝、牢屋敷にて死罪に被仰付候。

長崎者　さつまや嘉平次
肥前者　石垣八右衛門
肥前者　米屋平兵衛
大阪者　小倉屋善右衛門
大阪者　難波屋仁左衛門
小倉者　若松屋市兵衛
小倉者　岩崎三介

右七人閏十月廿一日より三日の内、高麗橋にて鼻をそきさらし、夫より御追放。

野村久左衛門　清左衛門　勘左衛門

右三人の者方々へ住居仕候抜買頭にて候へ共、其同類訴人いたし、御公儀様より御穿議の多そくに相成申候故御褒美として家財の内西ケ一被ニ召上一、残り本人へ被レ下候而御赦免、何方に住居仕候共御構無之候。

傾城　かつ山　年三十一歳計

右は野村久左衛門、小西又兵衛両人かけ持の女房に被ニ成居一候、尤抜荷少々づつ自分に賣買仕候、これも御構無之御赦免。

京大宮通七條よしこ名ル者
傾城　江口　年二十歳計

右は大阪者久左衛門と申者妻にて御座候、男走り行方知れ不申候、是も御構ひなく御赦免。

油小路六條上る町きつこ名ル者
傾城　名は不知

右は油小路二條上る町福島屋仁左衛門妻、諸色道具被下御赦免。

三條□橋東
きく　年四十歳計

是も御構無レ之御赦免。

大坂　平野　櫻井和尚

右は傾城かつ山伯父にて御座候、久左衛門をかくまひ置候、御尋の始不存由いつはり申候、其科に依て御預け置被遊候、是も御召出し出家之役に候へば久左衛門命たすけ度一筋御聞届被遊、無レ構御赦免。（下略）

拔賣防止に關してはこれ以前から其筋では頗る心を盡して居たのであつたが、享保三年閏十月に及んで一網打盡的にこの拔賣仲間を處罰したのが件の記錄となつて表れたものである。その中で特にこゝで注意すべきは閏十月二十一日から三日間高麗橋で鼻をそいでさらした上追放された嘉平次以下の七人で、これが近松の作の毛剃一味のモデルとなつた徒輩であると思ふ。近松はこの珍しいさらし者があつたのでこれを種にして趣向を立て、一ヶ月後の十一月廿五日から「博多小女郎浪枕」と題して竹本座に上場したと解釋してよいやうである。近松が作中に使つた海賊の名を上記の者どもの名と比較して見るに、

長崎者さつまや嘉平次……………長崎者彌平次
肥前者米屋平兵衛……………德島の平左衛門
大阪者小倉屋善右衛門……………上方おぐら屋傳右
大阪者難波屋仁左衛門……………なにはや仁左
小倉者若松屋市兵衛……………市五郎
小倉者岩崎三介……………三　藏

かういふ風に當嵌められるかと思ふ。それでは肝腎の毛剃九右衛門はといふに、これは肥前者石垣八右衛門の「八」を「九」にかへて、そして拔賣頭であつた野村久左衛門を利かせたものであらう。（八右衛門は俗に「けぞり」と渾名されたともいふ）のみならず作中の一文字屋の江口丸屋の勝山など

いふ名も、野村久左衛門小西又兵衛兩人かけ持の女房といふ傾城かつ山、大阪者久左衛門妻傾城江口とあるをその儘利用したのである。また作の結尾に「重ねて惡事を止炙の、顏に燒鐵入れぼくろ、耳そぐ鼻そぐちみどろちんがい追拂ふ」とあるのは「高麗橋にて鼻をそぎさらし夫より御追放」とある事實によつて作者一流に書き流したものであり、傾城ともに向つては「汝等は流れの身、彼奴等に添ふは勤の慣ひ科にあらず、行先とても構ひなし」と仰渡しになつたのも「御構無ㇾ之御赦免」と申渡された事實によつたものと思ふ。

此淨瑠璃の改作としては寛政元年五月九日から北堀江座に上場された「博多織戀錘」（菅專助・中村魚眼）が世に知られてゐる。その他歌舞伎の方にもいろ〳〵改作飜案もあるが今はそれには及ばない。

校訂用原本は七行四十丁本。

平家女護島

享保四年八月十二日より竹本座上場。時に作者六十七歳。

平重衡が南都燒討から都に凱旋した事に筆を起し、清盛の横暴を緩和しようとして重盛が苦心する事、清盛は後白河法皇に對し奉つて不臣の振舞の多かつた天罰と、俊寛の妻あづまや少將成經の

情人千鳥を虐殺した祟とによつて熱病にかゝつて悶死する事、鬼界が島の流人の生活、その赦免されて歸る折の狀況、牛若丸が女裝して母常磐御前の館に忍び込み、心を合せて色じかけで源氏一味の徒を糾合しようとする事、宗清とその女松が枝との情によつて常磐母子は虎口を遁れる事等を敍し、文覺が源氏の蜂起平氏滅亡の經路を夢見るといふに終る。

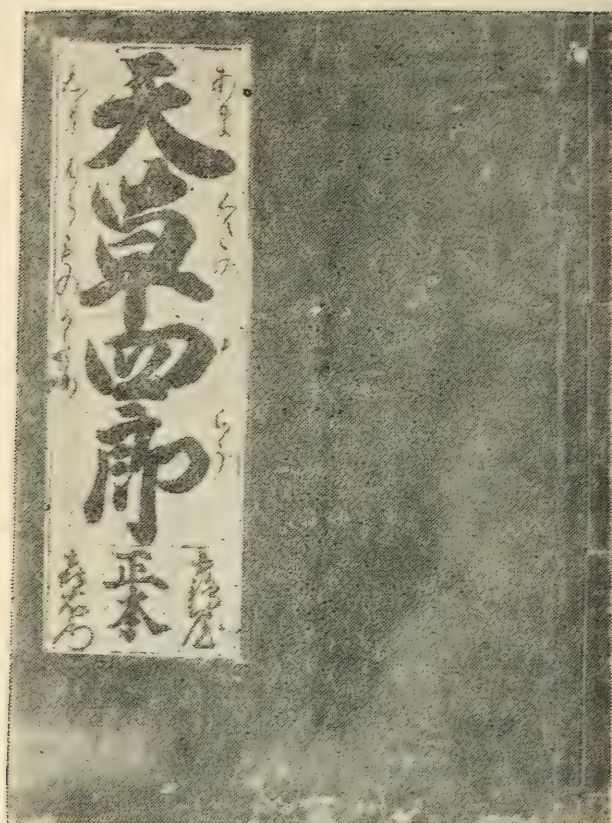
作者自筆「平家女護島」草稿

第二段鬼界が島の段は後には歌舞伎の舞臺にも上せられた名高い場面であるが、こゝは謠曲「俊寛」に依つた事は言ふ迄もない。併し少將と千鳥との情事を設けて場面を色どり、且つ俊寛に對して平家物語や謠曲には見られない特殊の性格を與へてゐるのが注目すべき點であり、これがやがて「俊寛島物語」で名高い

「姫小松子日の遊」（寶暦七年二月作）の原據ともなつたのである。

次に第三段朱雀御所の段は清盛の妾となつた常磐が色に耽つて多數の男を引入れる有様を描いてあるが、それは「朱雀の御所の邊を通れば貴賤に限らず、男たる者かいくれに行方なく、再び影も見る事なし」といふ有様で、「朱雀の御所は女護の島」と言はれ、題名さへもこれに因んだ程であつて、全篇の山とも見られるが、こゝには有名な吉田御殿の巷說が取入れられて居るものと思ふ。

「天草四郎島物語」正本表紙

校訂用原本は七行八十四丁本。

傾城島原蛙合戰

享保保四年十一月六日竹本座初日。

藤原秀衡の四男高衡蝦蟇仙人の幻術に長じ、賴朝の討手を遁れて入洛し、七草四郎と稱し、部下の獅子木佐仲太と共に妖術と黄白とを以て森宗以大矢野松右衛門等以下無學の士民を迷はして徒黨とし、更に智謀に富みたる浪士手塚幡藥を一味に加へようとしてその女更科が島原桔梗屋に遊女となつて居るのを身請して恩を賣り、その代償として父を說かせる。然るに更科は

七草四郎を父の仇と狙ふ葛西清治と相許した仲である。然るに葛西と七草とは手塚の浪宅にて圖らず出逢ひ、更科を囮として交々手塚に迫る。幡樂は義理と人情とにからまれ、二人の射合ふ矢先に貫かれ、更科を清治に託して死ぬ。四郎は一味と共に九州七草城に籠つて共勢が盛んであつたが、更科と清治の妹琵琶姫とは畠山重忠の助を得て城内に紛れ入り、清治と内外相呼應して邪宗の徒黨を滅すといふ筋である。三段目の手塚浪宅の段で、更科が立歸つて戸外から兩親を呼ぶ場面は「合邦内の段」を聯想させられる趣向であり、幡樂が雙方から射合ふ矢の中へ飛込む條は最も緊張した技巧を示して居る。

天草四郎の島原の亂を材題とした事は言ふ迄もないが、此作の藍本となつたものに寛文六年八月

刊行の「天草四郎島原物語」であると思ふ。これは流派不明の古淨瑠璃の正本であるが、肥後の國天草の住人大矢野甚兵衛の一子天草四郎が切支丹宗徒を集めて天草城に據つてその勢猖獗を極めたが、寄手の板倉・細川・松倉・鍋島等の諸侯の軍が奮戰して遂に之を陥れるといふ顚末を六段に綴つたものである。近松はこの作を材として、七草四郎を奥州秀衡の四男高衡の後身に作り、それに禁裏御池の蛙合戰の事等を取合せて想を構へたものと思はれる。又作中の主要人物の一人である傾城更科の抱主を桔梗屋としたのも、彼の茨木屋幸齋の悴が島原で桔梗屋といふ廢家の株を買つて再興し、日に〳〵繁昌したので、その桔梗屋を當込んだものであらうかと思ふ。

延享四年八月二十三日から竹本座で興行した「傾城枕軍談」(並木千柳・三好松洛・竹田出雲合作)は本曲の飜案で、世界を秀吉時代に取つて趣向をこらしたもので、外題の角書に「都變名島勘左衞門、故郷呼名七草四郎」とつけてある。

七行七十七丁本によつて校訂した。

井筒業平河内通

享保五年三月三日から竹本座上場。時に作者六十八歳。

伴大納言宗岡が惟喬親王に謀叛を勸め奉るに始まり、嘗て惟喬親王を位につけようとしたが失敗

して死んだ紀名虎の白骨が惟喬の招魂の秘法によつて再生し、御所を脅かし奉つたので、業平は紀有常と共に天皇及び二條后を奉じて難を避ける事、河内の高安家の老母の苦肉の計、生駒姫と井筒姫との戀爭ひ、生駒姫の伯父大炊之介の奸惡、紀有常の妻二條后の御身代りに立つ事等幾多の波瀾を描き、遂に惟喬惟仁の位爭ひを少年相撲の勝負によつて決定するといふ筋である。

これより先、業平の河内通を材題としたものに元祿初年の刊行と思はれる宇治加賀掾の正本「河内通」があつて、その中に井筒の怨靈と高安なる白露姫との業平に對する戀爭ひを描いてある、この點は本曲の第四段「怨靈振分髪」に影響があると見れば見られるが、一篇の題材結構は寧ろ近松が青年時代に加賀掾のために作つて與へたと推定される「惟喬惟仁位諍」（天和元年以前の作）の後篇と見るべき作柄である。この「惟喬惟仁位諍」は文徳天皇の第一の皇子惟喬親王の外叔父たる紀名虎は、第二の皇子惟仁親王との位爭のための右近の馬場の競馬に敗れたのがもとで憤死するといふのが主想であるが、本曲の發端に於て「名虎は大力弓馬の達者たりしかど、天の時至らず、競馬相撲の勝負にまけ終に無念の此の世を去る」とあつて、それから名虎の再生といふ段取りとなるのが、即ち兩作の關係を語るものである。因にいふ惟喬惟仁位爭ひに競馬相撲を行はれた事は、「平家物語」卷八名虎相撲の條に見えて居るが、本曲に於てはこれを少年相撲にしたのが作者の技巧である。

校訂用原本は七行八十七丁本。

雙生隅田川

享保五年八月三日より竹本座上場。

吉田少將行房とその妾班女との間に梅若松若といふ瓜二つの雙生兒があつて、梅若は早くから御臺の子として育てられてゐた。行房は、義兄常陸大掾百連が比良嶽の靈木を伐つた祟で、天狗に魅入られて自ら誤つて御臺を殺害した上に松若は天狗にさらはれ、その上自分も百連の奸計にかゝつて死し、吉田家は破滅する。梅若丸は流浪して東國に下り、人買猿島惣太の兇手にかゝつて夭死する。惣太は吉田家の舊臣淡路七郎の成れの果てで、主家に辨償すべき一萬兩の金を得ようとして人買となつたのであつたが、故主の幼君を手にかけたと知るや、自害して腸を摑んで天に抛ち、天狗となつて松若を尋ね求めて吉田家を再興しようといつて悲壯な最期をとげる。一方に於て班女は狂女となつて我子の梅若の行方を尋ねてさまよひ出で、山伏法界坊に導かれて隅田河畔に來り、淡路の七郎の妻唐糸の物語を聞き一本柳の下に我子を弔ふ。折しも淡路の七郎の化現の天狗が松若を携へ來て母なる班女の手に戻し、これによつて吉田家は再興するといふ筋である。

謠曲「隅田川」を本とした作であつて、殊に第四段はその飜案である。又この作は後世の「法界坊」や「松若」の濫觴をなすものとして注目すべきである。

七行八十一丁本によつて校訂し、十一行三十二丁本を參照した。

心中天の網島

享保五年十二月六日から竹本座に上場された。天滿お前町の紙屋治兵衛と曾根崎新地紀の國屋小春とが、享保五年十月十四日即ち十夜回向の時に、大阪郊外なる網島大長寺のほとりで情死した事柄を脚色したものである。

六間間口の紙屋の主人で從妹のおさんといふ貞實な女房を持ち勘太郎お末といふ六歳と四歳になる子供の父でありながら、三年來紀の國屋の小春に熱中して情死迄も覺悟した治兵衛は、小春との仲を抱主から堰かれてゐる。治兵衛の兄粉屋の孫右衛門は藏屋敷の侍に扮して小春に逢ひ、治兵衛の事を斷念せよとさとす。折から忍び來て窓越しに二人の對話を聞いて興奮の極狂態を演じる治兵衛に對しても意見を加へ緣を切らせて伴ひ去る。然るに約十日後、治兵衛の戀敵太兵衛が小春を身請するといふ噂を聞いて、小春の氣質と今の心境とを察知するおさんは衣類迄も質入して所要の金を調へて治兵衛の顏を立て小春の命を救はうとする。折惡しく舅五左衛門が來て此體を見るや嚇怒して强制的におさんを離別させて連れ歸る。治兵衛は遂に小春と共に網島大長寺の境内で情死するといふ筋である。變化に富む各場面の間に有機的統一が保たれ、その中に活動する主要人物の性格も

「雙扇長柄松」番附

よく描き別けられて、近松の作中有數の傑作であり、又心中悲劇の一典型といふべきである。

寶暦五年七月七日から豐竹座に上場された「双扇長柄松」（並木永輔・淺田一鳥・難波三藏・三津飲子・黒藏主。豐竹上野合作）はこの改作であるが、結構散漫文章拙惡にして原作の俤は少しもない。長柄の一つ松の枝に辭世を書いた一雙の扇を吊してその傍で縊死するといふ結末によつて題名をつけたのである。同じく改惡の一例として擧げ度いのは明和六年七月廿八日から竹本座で興行された「中元噂掛鯛」で、作者に三好松洛・竹本嘉藏の二人である。上卷山崎の段、中卷八百屋の段、道行夢路の千日參り、下卷醬油屋の段と分れて居るが、これ亦結構散漫の愚作である。是等に較べれば、同じ改作でも安永七年四月廿一日から北の新地芝居で興行された

「心中紙屋治兵衞」(近松半二・竹田文吉作)の方が出來がよい。大體の骨は原作によつて居るが、當時の見物の氣に入るやうに、叉舞臺の上を賑はすやうにと増補改修が施され、浮む瀨の段、新地茶屋の段(河庄の段)長町の段、紙屋內の段、道行、跡と分れて居る。寛政以後操芝居で「増補天網島」の外題で度々繰返されたものはこれであり、叉歌舞伎で演じられる「紙治」「河庄」などと呼ばれるのもこれから出てゐる。

此作の成立については翁草に「享保五年の冬、近松翁住吉新在家の酒樓に遊びてありし時、俄に大阪より芝居者來り、ゆふべ網島の大長寺に男女の情死あり。何卒速に大阪へ歸り、淨瑠璃に作りて給らば、あす一日の稽古にして明後日より興行せんとて、ひたすら賴みければ、早駕籠に乘りて大阪にかへり、駕籠より下りて其儘に筆をとり、かごにて走り歸りしまゝ書きつけしとて『走り書き』と書き出し、直に『謠の本は……』と書きつゞけ云々」とある。これについては西澤一鳳始め、好事家のこしらへ事との反對說もあるが、眞否は別として著名な挿話として添へておく。

七行四十三丁本によつて校訂し、十行廿四丁本を參照した。

津國女夫池(つのくにめをといけ)

享保六年二月十七日より竹本座上場。時に作者六十九歳。

外題の角書に「後太平記四十八巻目」と掲げてあるのでも作の世界と題材とは大凡推測出來るであらうが、足利義輝が酒色に溺れて三好長慶に弑せられたので、淺川藤孝は一旦出家した義昭入道を強ひて還俗させて將軍とし、諸國の軍勢を召集して三好松永を滅すといふのが大筋になつてゐる。併しその中に藤孝の家臣冷泉造酒之進と義輝の室の侍女清瀧との戀物語を挿み、相通じた二人は義輝の室をかくまふ爲に兩親の許に行つた時始めて兄妹たる事を告げられ、慚愧懊惱の極死を決したが、造酒之進の養父冷泉文次兵衛が舊惡を懺悔して二人の死を救ひ、その妻と共に攝州福島の女夫池に身を沈める顛末を第三段に描き、この一段を全篇の山とし、題名も亦こゝに因んだのである。

處でこの第三段目の道行の跡なる文次兵衛浪宅の段から切の女夫池の段迄は若き女の盲目的の熱烈な戀を描いた點に於て、又意外に意外の重なつて遂にめぐる因果の自然の成敗を示す點に於て、且又舊惡懺悔によつて最後の解決を示す點に於て近松の作中稀に見る因果的技巧的の場面であつて、後の文耕堂や並木宗輔などのやうな技巧派の巧んで描く場面の先驅をなすやうに思はれる。而して此中で清瀧が造酒之進とは兄妹と知れ、畜生道へ墮ちたかと歎き悲しみながらも、軒端に戯れ狂ふ牝牡の同じ毛色の猫を見て「あの猫も兄弟かア、羨し、兄弟夫婦と契りても、人も咎めずそしられぬ、猫になり度い／＼こちや猫ぢや」といふ有名な條は、元祿元年近松三十六歳の時都萬太夫座の二の替り狂言（正月狂言）として書いて與へた「今源氏六十帖」の中にある、水木辰之助の扮した姫松がその戀人幾世之助が兄と知れても思ひ切れずに猫になり度いと思ひ、遂にその一念で猫の所作

をするといふ有名な場面を轉用したものである。また文次兵衛が驚くべき舊惡を告白して浩酒之進に向つて汝の親の敵はこの文次兵衛であるといつて人々をあつと言はせる趣向は寶永四年京龜屋座

「今源氏六十帖」より

の二の替りに興行された「けいせい石山寺」の狂言で浪人樋口勘助が高野より下向して女房に座敷の眞中へ蒲團を敷かせ白裝束に袈裟をかけ、朋輩忠右衛門を討つて其女房を呼び迎へた惡事を懺悔して、その脇差を兒息子三之助に渡して斬られようとする場から出たものであるといはれる。第四段の「千疊敷其世語」は出語出遣で舞臺裝置を大がかりにした操本位の場面であつて甚だ好評であつたので、寛保二年四月再興行の時は「室町千疊敷」と改題した。

此作が竹本座で評判を取つたので、同年の盆興行に京都の都萬太夫座では作者佐渡島三郎左衛門が同じ外題で之を歌舞伎に仕立て、三好長慶宮崎義平太、松永彈正松本友十郎、淺川藤孝勝山助十郎、造酒之進染の井半四郎、清瀧霧浪おのへ、大淀山本かもん、文次兵衛澤村長十郎などの役割で興行し、また大阪の中座にも此年九月廿八日から上場された。

七行九十五丁本によつて校訂した。

女殺油地獄（をんなころしあぶらのぢごく）

享保六年七月十五日竹本座初日。

大阪本天滿町河内屋德兵衛の次男與兵衛が、番頭上りの繼父德兵衛の寛容なのにつけこんで次第に增長して放蕩無頼の不良漢となり遂に實母の勘當を受け、日限りの借金の返濟に窘しめられて同町内同商賣の豐島屋の女房お吉に金の無心を言つたが斷られたので彼女を慘殺して一時巧に犯跡をくらましたが結局露顯して召取られる次第を脚色して次のやうに上中下三卷に仕立てたのである。上卷は野崎參りの場面で、與兵衛が馴染の遊女の事で會津の武士と大喧嘩をして散々な目にあひ、お吉の世話になる。こゝへ伯父の山本森右衛門を出して後の伏線としてある。中卷は河内屋の場で、與兵衛の兄太兵衛が訪ね來て德兵衛と共々與兵衛の放埓をこぼし、與兵衛を勘當するやうにと强く

すゝめて去る。そのあとで外から歸つた與兵衞は金の事で徳兵衞と衝突して繼父を足蹴にして天秤棒で打擲する。折柄歸宅した實母おさはが之を見て與兵衞を勘當する。下卷は三場に分れ、第一場は五月四日夜の豐島屋の場。豐島屋七左衞門は掛金を集めて歸り、お吉のすゝめる酒を一杯ひつかけて又掛取りに出かける節季の急がしい店頭の模樣から徳兵衞とおさはとが相次いで尋ね來て與兵衞の事で義理の立て合ひから、結句おさはの眞情吐露となる、こゝには親の慈悲がよく描かれてゐる。二人が去ると與兵衞が入代つて金の無心から遂にお吉を慘殺する凄愴な場面（題名はこゝから出てゐる）第二場はお吉を殺して掛金を掠奪した與兵衞が、內心には恐怖を抱きながら色里で浮かれる模樣。第三場は豐島屋內の場で、非業の死をとげたお吉の三十五日の逮夜の供養の席で、いよ／＼天命のがれ難く證據が擧がつて與兵衞が召捕られるといふに終る。

かういふ風で筋は割合に簡單であるが、放逸無慚の與兵衞の性格が活躍し、また徳兵衞の篤實で主思ひの寛容な人柄や、お澤の子を思ふ慈愛の心情などがよく描き出されてゐて、近松の世話物中でも異彩を放つ屈指の傑作である。全體に寂しい緊縮した感じの多い上に、お吉殺しの場が餘りに寫實的に物すごく血なまぐさいので、當時は受けなかつたやうであつた。で、その眞價が認められるに至つたのは近年の事のやうに思はれる。

實說は明かでないが、この作中に示されて居るやうに五月四日夜の殺人、三十五日逮夜頃犯人捕縛といふ經路の事件であつたらうと推察される。此作の下卷に「油屋の女房殺し、酒屋にしかへて

幸左衛門がするげな殺し手は文藏憎いげな」とあるので、歌舞伎にも仕組まれた事は推知される。これは本年七月七日から大阪中座で興行された「契情八棟造」の狂言で、幸左衛門は座本の竹島幸左衛門、文藏は佐川文藏をさすのであらう。殘念な事には當時の繪入狂言本を見ないから筋を知る事が出來ない。

校訂用原本七行五十丁本、對校本十行二十六丁本。

信州川中島合戰

享保六年八月三日竹本座初日。

信州諏訪明神に參拜した武田信玄の世子四郎勝頼と長尾景虎の息女衛門の姫との情事を惡意ありて村上義淸が表沙汰とした爲に甲越の兩雄は戰端を開く事

いせいけ」

となり、村上は漁夫の利を占めようと企てる。相携へて走つた勝頼衛門の姫の急を救はうとして野猪の爲に不具となつた山本勘助は、武田信玄の三顧の禮に感じて桔梗原の茅屋を出でてその軍師となる。景虎は重臣直江山城と山本勘助との姻戚關係を利用して勘助の老母を囮として勘助を招かうと苦肉の計をめぐらしたが、老母の剛骨なる振舞のためにその計畫は失敗した。のち村上は勝頼と衛門姫とによつて殺され、川中島に對陣中の甲越兩雄も山本勘助の働きで和睦するといふに終る。第三段は「輝虎配膳」の原作であり、勘助の妻おかつの吃りの仕打は「傾城反魂香」の「吃又」の轉用である。

足曳」より

享保六、七年頃に京都の[illegible]屋座で興行した「けいせい足曳山」は此作を歌舞風に仕立てたもので、

信玄に辰岡染右衛門、輝虎に三保木儀左衛門、衛門姫に尾上菊五郎、直江に山本彦五郎、妻からあや坂東豐三郎、勘助母榊山小四郎、玉とよ辰岡久菊、勘助榊山四郎太郎等の役割であつた。

校訂用原本は七行七十八丁本。

心中宵庚申

享保七年四月二十二日から竹本座上場。近松翁七十歳の時の作で世話淨瑠璃としては最後のものである。

お千代半兵衛が宵庚申の夜に生玉の大佛勸進所に於て夫婦心中をした事を脚色したもので、竹本座上場と同じ年月の四月六日から豐竹座で上場された紀海音の作「心中二つ腹帶」と同一材題によつたのである。

二人の心中は本年四月六日の朝だとの說もあるが、西澤一鳳は次のやうに言つてゐる。

お千代半兵衛の心中は享保丑年（六年）四月五日宵庚申の夜六日の朝の事なり。寅年（七年）四月六日より豐竹座紀海音作にて心中二腹帶を出す、同四月廿二日より竹本座近松門左衛門作にて宵庚申を出す、然れば同年同月に淨瑠璃出て十六日違ひ、竹豐兩座張合に出せしなり（下略）

とある。そして二人の心中の動機となつたお千代の姑去りについても、淨瑠璃の作意と實說とは頗

る相違するといふ事柄について、同じく一風は「傾奇作書」拾遺、上、の中にかう記して居る。

大阪新靱町の八百屋半兵衛嫁お千代と心中情死したるを直に宵庚申として出せしは誰もよく知りたる事にはあれど、予幼少の時新靱の老人の語に聞きしは、實說も淨瑠璃の如く、只違ひあるは、八百屋の姑婆は虫も殺さぬといふ程のよき人なり。伊右衛門といへる老人もあながち惡人ならねど、兎に角若い女好にて、下女雇女を孕ませる事度々にて、嫁お千代を口說く事甚しければ、姑に是を告けれど、まさか男の半兵衛には此事もいひ兼ね年月を過す內、半兵衛は用事有つて遠方へ行き、長らくの留守中なれば、舅伊右衛門かゝる折にこそ本望を達せんとてか晝夜とも透間さへあれば嫁をくどく。老婆是を氣の毒に思ひ、常盤町の伯母の方へ預け、世間の人の問ふ時には、連合の惡性よりとはいはれず、よん所なく嫁の身持家風に合はぬ故預けしなど答へけり。半兵衛歸宅の上は仔細なく、お千代も呼戻せしが、伊右衛門ます〳〵煩惱の犬の如く、人目をかまはず口說き聞入れざるを根に持ちて養子聟半兵衛すこし仕あやまちも仰山に罵りけるにぞ、老婆も種々と諫言しけれど、伊右衛門は猶道立ち、物言ひの絕えぬ故、義理にせまつて、暇を出し、宵庚申の夜逢にはかなき情死をしたりとぞ。淨瑠璃に書く時には老婆を惡人にせぬ時は、憎み增さぬ故にや、門左衛門の作意より、善人却つて惡人といはるゝも老婆の不幸なるべし。

すれば、事實よりは淨瑠璃の方は人物の上に性格の相違があり、自然心中の動機も作者の構想によるものと見てよいと思ふが、興行上の時日に關しては、豐竹座が先づ一周忌を當込んで上場し大評判であつたので、竹本座もこれに倣つて、この「心中宵庚申」を出したものであらうと考へられる。併し十六日の立後れのために、興行上に於ては失敗に終つたと傳へられて居るが、兩作を比較して

見るに、その出來ばえに於ては、近松の方が海音に勝つて居る事はいふ迄もない。それは上卷と中卷とを比較して見れば容易に知り得る事で、「二つ腹帶」の堅い潤ひのない作意が柔げられ、温められ、人情美化された點に於て、遙かに近松の作の方が味があるやうに思はれる。併し先鞭の功は海音にあるから、詳しい事は後の「淨瑠璃名作集」の中の「二つ腹帶」の解題の條下に於て述べる事とする。

校訂用原本は七行四十七丁本。

關八州繫馬

享保九年正月十五日から竹本座上場。近松は「心中宵庚申」を書いて後、松田和吉の「佛御前扇車」(享保七年九月)及び、竹田出雲・松田和吉合作の「大塔宮曦鎧」(享保八年二月)を添刪したのみで、新作の筆を執らなかつたが、七十二歲の老筆を呵して三年目で此淨瑠璃を作つた、處がこれが翁の絕筆となつたのである。

平將門の遺子將軍太郎良門は源氏を滅し、亡父の遺志を繼いで天下を覆さうとの大望を企て、妹小蝶を源賴光の室の侍女として住込ませ、筧の竹筒を通して互に内外の情況をしめし合せて賴光を討たうとした。然るに小蝶は賴光の弟賴信を戀慕してその戀敵たる詠歌の姬を除かうとして術策を

弄し、頼光の弟出羽冠者頼平その犧牲となりて、餘儀なく良門の一味となるに至る。これが爲に頼平の乳兄弟箕田二郎の忠死となりて頼平兄と和解し、四天王等と共に葛城山に良門を攻滅し、小蝶にのり移つて源家に禍を及した土蜘蛛の惡靈を退治するといふ筋である。

近松の作中最長篇にして、結構の雄大なる變化の裡に統一を保てる等實に作者として老衰を知らなかつたと思はれる大劇詩人の最後の作品として恥かしからぬ雄篇大作である。

第四段の小蝶の怨念が土蜘蛛の妖精と化して頼信の室を惱ます條は謠曲「土蜘蛛」の飜案である。また第一段の御閨の段で頼平が烏帽子の掛緒を切らせる條は楚の莊王の絶纓の故事から出てゐる。卽ち說苑復恩篇に

楚莊王賜ニ羣臣酒一、日暮酒酣、燈燭滅、有下引ニ美人之衣一者上、美人援絶ニ其冠纓一、告レ王趣レ火來上視ニ絶纓者一、王曰、賜ニ人酒一、使ニ醉失一レ禮、奈何欲レ顯ニ婦人之節一、而辱レ士乎、乃命ニ左右一曰、今日與ニ寡人一飲、不レ絶ニ冠纓一者不レ懽、群臣百餘人皆絶ニ去其冠纓一、而上レ火、盡レ懽而罷、後晉與レ楚戰、有ニ一臣一常在レ前、五合五獲首、卻レ敵卒得レ勝レ人、莊王怪問、乃夜絶レ纓者。

とあるのを飜案したのである。

七行八十九丁本によつて校訂し、十二行三十三丁本を對校用に供した。

忠兵衛 梅川 冥途の飛脚

近松門左衛門作

地 澪標難波に咲くや此の花の。里は三筋に町の名も佐渡と越後の間の手を。通ふ千鳥の淡路町龜屋の世繼忠兵衛。今年二十の上はまだ四年以前に大和より。敷銀持つて養子分後家妙閑の介抱ゆゑ。商賣功者駄荷積り江戸へも上下三度笠。茶の湯俳諧碁雙六フシ延紙に書く手の角とれて。 地酒も三つ四つ五つ所紋羽二重も出ず入らず。無地の丸鍔象眼の國細工には稀男。色のわけ知り里知りて暮れるを待たず飛ぶ足の。飛脚宿の忙しさ荷を造るやら解くやら。手代は帳面算盤を兩口ともにどや／＼と。下萬兩の遣繰も貸家普請の取遣り。居ながら金の自由さは。一歩小判や白銀に フシ翼のあるが如くなり。 地町廻りの狀取立て歸つてそれぞれと。留帳つくる所へ。誰そ賴まう忠兵衛宿にゐやるかと。案内するは出入の屋敷の侍。 詞手代ども慇懃に。ヤア是は甚内様。忠兵衛は留守なればお下し物の御用ならば。私に仰せ聞けられませ。お茶持ておじやとあひしらふ。いや／＼下りの用はなし。江戸若旦那より御状が來た。これお聞きやれと押開き。來月二日出の三度に金子三百兩差上せ申すべく候。九日十日兩日の中其の地龜屋忠兵衛方より。右三百兩請取り内内申置き候事ども埒明け申さるべく候。則ち飛脚の請取證文此の度上せ候間。金子請取次第此の證文忠兵衛に渡し申さるべく候。 地是此の通り仰下された。今日迄屆かぬ故大事の御用手筈が違ふ。なせ斯様に不埒なと フシ鼻を。しかめて言ひければ。 詞ハヽ御尤々々。さりながら此の中の雨續き。川々に水が出ますれば道中に日がこみ金の屆かぬのみならず手前も大分の損銀。 地若し盗賊か切取か道からふつと出來心。萬萬貫目取られても十八軒の飛脚宿から辨へ。芥子程も御損かけませぬお氣遣あられなと。言はせも果てずこれさ。 詞言ふ迄もない御損かけては忠兵衛が首が飛ぶ。日限延びては御用の間があくにより。 地それ故の穿鑿迎ひ飛脚を遣して。早速に持參せいと徒士若黨も刀の威光。銀拵へも胡散なる フシ詑り散らして歸りしが。 詞又賴みませう／＼。中の島の丹波屋八右衛門から來ました。江戸小舟町米問屋の爲替銀。添狀は屆いたが銀はなぜ屆きませぬ。此の中文を進じても返事もござらず。使をやれは酢の蒟蒻のと何時屆けさつしやるぞ。 地此の者に渡して人をつけて下され。手形戻そと申さるゝサア。金子請取らうと立ちはだかつて喚きける。主思ひの手代の伊兵衛駈がね體にて。 詞これお使。八右衛門様が其

のそうに理窟くさい口上はあるまい。五千兩七千兩人の金を預つて。百三十里を家にし江戸大阪を。廣う狹うする飛脚屋。地そこ一軒ではあるまいし遲い事もなうては。今でも旦那歸られたらば此の方から返事せう。五十兩に足らぬ金あた嗇しう言ふまいと。かさから出れば氣を呑まれ フシ使は眞面目に歸りけり。地母妙閑は衝立の側離るる事も納戸を出で。詞ヤア今のは何ぞ。丹波屋の金の屆いたは慥か十日も以前の事。なぜ忠兵衛は濟さぬの。今朝から二軒三軒の金の催促聞いて居る。地親父の代から此の家に金一匁催促得ず。終に仲間へ難儀をかけず十八軒の飛脚屋の。鑑と言はれた此の龜屋。皆は心も付かぬか。詞忠兵衛が此の頃の素振がどうも呑込まぬ。昨今の者は知るまいが地體是の實子でなし。もとは大和新口村。勝木孫右衛門といふ大百姓の一人子。地母御前はお死にやつて繼母かかりの白棄に。惡性狂も出來るぞと父御前の

思案でこれの世取に貰ひしが。世帶廻り商賣事何に愚かは無けれども。此の頃はそは〳〵と何も手に付かぬと見た。意見のしたい事あれど養子の母も繼母も。同然と思はうかせは〳〵言ふより言はぬ身を。恥入らせうと思うて目をねぶつても聞き所。見所は見てゐる。詞いつの間にやら大氣になり。延の鼻紙二枚三枚手に當り次第。重ねながら鼻かみやる。過ぎ逝かれし親父の話に。鼻紙びんびと使ふ者は曲者ぢやと言はれたが。地忠兵衛が内を出さまに延紙三折づつ入れて出て。何程鼻をかむやら戻りには一枚も殘らぬ。身が達者なの若いのとてあの樣に鼻かんでは、どこぞで病も出ませうと フシよまひ言して入りければ。地丁稚小者も笑止がり早う歸つて下されかしと。待つ日も西の戻り足オクリ店續しへ頃に成りにけり フシ籠の鳥なる。地梅川に焦れて通ふ廓雀。忠兵衛はとほ〳〵と外の工面内の首尾。心は蜘蛛手かくなわや十文色も出て 來る

は。南無三寳日が暮れると足を空に立歸り。門口には着きけれども留守の内に方々の催促使妙閑の耳に入つては如何樣の。首尾になつたも氣遣はし誰ぞ出よかし内證を。とくと聞いて入り度しと我が家ながら敷居高く。内を覗けば飯炊のまんめが酒屋へ行く體なり。彼奴は木で鼻もぎどう者只は言ふまじ濡れかけて。騙して問はんと思案する間にによつと出る。樽持つた手を確としむればあれ旦那樣のと聲立つる。詞アヽ喧しいこりや粹め。俺が首だけなづんでゐる。思ひ内にあれば色外に現る〻。地目つきをそちも見て取つたか可愛らしい顏付で。氣の毒がらすはどうぢややいやい フシ寧そ殺せと抱付けば。詞ムヽ嘘つかんせ毎日々々新町通ひ。のべの鼻紙二折三折。結構な鼻をかまんすもの。なんの私等に手洟もかみたうあるまい。地あの嘘つきが振切るを又抱付いて。其方に嘘ついて何の德。實ぢや〳〵と言ひければ。詞それが定なら晩に寢

所へござんすか。地ヲヽ成る程〳〵忝い。それについて今ちよつと問ふ事ありといひけれども。それも寝所でしつぽりと聞きませう必ず騙しにさんすなえ。そんなら私はお湯沸いて。腰湯して待ちますと フシ言ひ捨て振切り走りけり。地忠兵衛うそ腹立ち頬ひてゐる所に。北の町からいかつけに來るは誰ぢや。詞ヤアヽ中の島の八右衛門。地彼奴に逢うてはむつかしと。東の方へ出逢へばこれ忠兵衛。外すまい〳〵と聲かけられ。詞ヤ八右衛門此の中は久しい。昨日も今日も一昨日も。人やろ〳〵と思うて何やかやと延引した。地目切と寒いが親父の疝氣は婆様の癪は。アヽいかう酒臭い過しやるな〳〵。明日は早々人やらうヤれそが言傳したぞや。近日一座致し度いとたくしかくれば八右衛門。詞おけやい。口三味線に乘せかけても乘る樣な男でない。そちが商賣は三度でないか。身が方へ上つた江戸爲替の五十兩は何として屆けぬ。五日三日は料簡もあるぞかし。心易いは格別高駄借かくからは大事の家職。十日に餘れど埒明かず今日も使をやつたれば。手代めが爲高な返事した。よもや脇へはさうあるまい八右衛門をなぶるか。地北濱靭中の島天滿の市の側迄。親爺とも言はるゝ八右衛門。なぶつてよくばなぶられうが金は今日請取る。但し仲間へこたへうか先づお袋に逢はうと。內へ入るを引止めさりとては誰つた。これ手を合すたつた一言聞いてたも。拜む〳〵と叫けば又口先で濟さうや。詞梅川をだましたと男の意氣は違うた。言ふ事あらばさあ聞かうと。地にが〳〵しくきめつけられ。これ其の聲を母が聞けば死んでも一分立たぬ事。一生の御恩ぞさりとては面目ないと フシはら〳〵と泣きけるが。地何を隱さう此の金は十四日以前に上りしが。知つての通り梅川が田舍客。詞金づくめにて張合かける。此方は母手代の目を忍んで。僅か二百目三百目のへつり金。地追ひ倒されて生きた心もせぬ所に。請出す談合極つて手を打たぬばかりといふ。川が歎き我等が一分既に心中する筈で。互の喉へ脇差のひいやりと逸したれども。死なぬ時節かいろ〳〵の邪魔ついて。其の夜は泣いて引分れ明くれば當月十二日。其方へ渡る江戸金がふらりと上るを何かなしに。懐に押込んで新町迄一散に。どう飛んだやら覺えばこそ段々宿を頼んで。田舍客の談合破らせ此方へ根引の相談締め。彼の五十兩手附に渡しまんまと川を取留めしも。八右衛門といふ男を友達に持ちし故と。心の中では朝晩に北に向ひて拜むぞや。さりながら如何に懇なればとて。先に斷り立て置いて使へば借るも同然。跡では如何と思ふうち其方からは催促。嘘に嘘が重つて初手の誠も虛言となれば。今何を言うても誠には思はれじ。されども遲うて四五日中外の金も上る筈。如何やうとも仕途つて。一錢一字損かけまじ此の忠兵衛を人と思へば腹

も立つ。犬の命を助けたと思うて料簡頼み入る。是を思へば世の中に處刑者の絶えぬも道理。此の上は忠兵衛も盗みせうより外はなし。男の口から斯様の事言はれうものか推量あれ。喉より劍を吐くとても是程にはあるまじとスヱテ絞り。泣きにぞ泣きゐたる。地鬼とも組まん八右衛門ほろりと涙ぐみ。詞言ひにくい事よう言うた。丹波屋の八右衛門男ぢや料簡して待つてやる。首尾ようせよと言ひければ地忠兵衛土に額を着け。忝い〳〵父二人母三人。親は五人持つたれども其の恩よりは八右衛門。貴殿の御恩忘れぬと フシとかうは涙ばかりなり。地さう思へば満足サア人も見る其の中と。立別れんとせし所に内より母の聲として。ヤア八右衛門様か忠兵衛是へ通しましやと。聲かけられて詮方なくオクリもぢ〳〵へ連立ち入りにけり。地母は律儀一遍に。先程はお使又御自身の御出で御尤々々。詞これ彼方の金の届いたは十日も以前何として延引ぞ。胸にとつくと手を置いてよう思案して見や。遅う屆けば飛脚は入らぬ。何が其方の商賣ぞ。地サア今渡して上げましやと言へども渡す金はなし。八右衛門も底意は聞くこれお袋。恥かしながら八右衛門が五十兩や七十兩。急に入る事もなし是より直に長堀迄參れば。明日でもと立たんとすればいや〳〵。詞大事のお金預れば氣遣で夜も寝られず。地なう忠兵衛きり〳〵渡しやとせり立てられあつと言ふより納戸に入り。うろ〳〵しても金はなし入れもせぬ戸棚の錠。あける顔してぴんといふ フシ鍵の手前も恥かしく。地胸に願立て神おろし狂氣の如く氣を揉みしが。ヤレ有難や此の樽箱に燒物の鬢水入。これ氏神と三度頂き紙押廣げくる〳〵と。駿河包に手ばしこく金五十兩墨黒に。似せも似せたり五十杯。母には一杯參らせし フシ其の惡智惠ぞ勿體なき。詞これこれ八右衛門殿。今渡さいでもすむ金ながら母の心を休める爲。地男を立てる其方と見て詮方なう渡す金。さつぱりと請取つて母の心を休めてたも。詞包は解くに及ぶまじいらうて見ても五十兩。どうしてたもると差出す八右衛門手に取つて。ハテ誰ぞと思ふ丹波屋の八右衛門。請取るに仔細はないこれお袋。江戸爲替屆に請取りました。地不動參りに待ちますると立つ所を妙閑誠と思ひてやこれ忠兵衛。詞仕切爲替の作法は金と手形と引替へ。若し御持參なきならば一筆ちよつと書かせましや。地物は念ぢやと言ひければ。ヲヽそれ〳〵母は無筆の一文字も讀まれねども。しるしばかりに一筆と硯出して目くばせすれば。易い事易い事忠兵衛文言これ見やと。筆に任せて書き散らす。詞一つ金子五十兩請取申さず候。右約束の通り晩には廓で飲みかけ。我等は幇間實正明白なり。何時なりとも騒ぎつと參上申すべく候。地依つて紋日の爲鬢水入件の如しと。阿呆のたらふ〳〵書き散らしさらばお暇申さうと。表へ

出づれば妙閑は書いた物こそ物言へと。又だまされし正直の親の心や佛の顔も。三度飛脚の江戸の左右 フシ待つ夜もやう／＼更けにけり。地表に馬の鈴の音こりや／＼駄荷が着いたぞ。中戸々々と聲高に手んでに葛籠かたけ込む。忠兵衛親子機嫌よくサア拍子が直つた來年も仕合馬。馬子衆に酒よ煙草よと。硯扣へつ帳付けて フシ家内どんどと賑へば。地手代の伊兵衛けうとげに。詞なう堂島のお屋敷から。金三百兩九日に來る筈前狀が上つた。何とて遲いとお侍の甚内殿が。睨め付けて歸られた何と／＼と言ひければ。地宰領が打飼より其の三百兩合點。是急々の御用今夜中にお屆け。方々の爲替金高八百兩ぐわらり／＼と取出す。忠兵衛愈勢よく白銀は内庫へ。金子は戸棚へ母者人私は直に此の小判。お屋敷へ持參する人の金を預れば。表も氣を付け早う締め火の用心が一大事。戻りはちつと遲うても駕籠で行けば氣遣ない。夜食しまうて早や寢よとした金懐中に羽織の紐。結ぶ霜夜の門の口出なれし足の癖になり。心は北へ行く／＼と思ひながらも身は南。西横堀をうか／＼と氣にしみ付きし妓が事。米屋町迄歩み來てヤア。詞是は堂島のお屋敷へ行く筈。狐がばかすか南無三寶と引返せしがム、我知らずこゝ迄來たは。地梅川が用あつて氏神のお誘ひ。一寸寄つて顏を見てからと。立歸つてはいや大事。此の金持つては遣ひたからうおいてくれうか。往つてのけうか地カヽリ往きもせいと。一度は思案二度は不思案三度飛脚。戻れば合せて六道の冥途の飛脚と 三重

中之巻

歌 ゐい／＼鳥がな 引 鳥がな。浮氣鳥が月夜も闇も。首尾を求めてあはう／＼とさ。フシ青編笠の。紅葉して。炭火ほのめく夕べ迄思ひ／＼の戀風や。戀と哀れは種一つ。梅かんばしく松高き。オクリ位は。よしや引きしめて哀れ深きは見世女郎。フシさらさ禿がしるべして。橋がかけたや佐渡屋町越後は女主人とて。立寄る妓も氣兼せず底意殘さぬ。フシ戀の淵。地身の憂きしほで梅川もこゝを思ひの定宿と。餘所の勤めもかきの本 フシ島屋をちよつと島がくれ。詞申しきよさん。今日は島屋で彼の田舍のうてずに。せびらかされて頭が痛い。忠様はまだ見えぬかえ。地せめての所縁にこなさんの。顏が見たさに貸しに來たと。入るさの門の障子戸も フシ明くるあしたの形見かや。さつてもようござんしたあれ二階にも女郎樣達が大勢遊びにござんしてお客待つ間の酒事。拳をしてござんするこなさんもお氣晴しに。一拳して酒一つ傍輩樣もござんすと。地上る二階の隙間風男交ぜずの火鉢酒。拳の手品の手もたゆく。詞ろませさい。とうらい。さんな。地同じ事とよ豐川に。聲の高瀬がさす腕には。はま。さんきう。ごう。りう。すむゐ 地それ／＼なんと。地體一つは鳴渡瀬樣。あれ梅川樣のござんした。な

うよい所へ來て下んした。こなさん拳の上手。背から千代歳様に仕付けられて無念な。敵取つて下んせ フシ銚子直しやと言ひければ。地アヽうたての酒や拳をする氣もあらばこそ。此の梅川が今の身を少しは泣いて貰ひたや。田舍の客が身請の事今日も今日とて島屋にて。理窟をつめて强請言腹が立つやら憎いやら。とは言ひながら是は先。忠兵衛様は後手といひ宿の精力一つにて。手附も渡し約束の日限切れるも言ひ延し。今日迄は繋がりしが忠様も世帶持。養子の母御の手前といひ屋敷方歷々の。町方を引受けて東路かけての大事の商賣。如何なる事が邪魔になり田舍の客に請けられては。我が身一つは死んでも退けう天神太夫の身でもなし。さもしい金に氣がふれた見世女郎のあさましさと。世間の嘲へ傍輩の掃部殿を始めとして。格子女郎衆の手前もあり。忠様と本意を遂げとやかう人に謠はれし。面が晒き度うござんすと フシ泣きしみゝづきて語るにぞ 地一座の女郎身の上に 思ひ合せて尤と フシつれて涙を流せしが。詞アヽいかう氣がめいるわつさりと淨瑠璃にせまいか。禿どもちよつと往て竹本頼母様借つて來い。いやさきに髮附買ふとて聞きましたが。芝居から直に越後町の扇屋へ行かんしたげな。私は頼母様の弟子なればよう似た所を聞かんせサア三味線と夕霧のオクリ皆を〱 今に フシ引きかけて。地傾城に誠なしと世の人の申せども。それは皆僻事譯知らずの言葉ぞや。誠も嘘も フシ元一つ。地たとへば命擲ち如何に誠を盡しても。男の方より便なく遠ざかる其の時は心やたけに思ひても。かうした身なれば フシまゝならず。地自ら思はぬ花の根引にあひ。かけし誓も嘘となり。又初めより僞りの勤ばかりに逢ふ人も絶えず重ぬる色衣つひの寄るべとなる時は。始の嘘も皆誠とかく只戀路には僞りもなく誠もなし。緣のあるのが フシ誠ぞや。地逢ふ事叶はぬ男をば思ひ〱て思ひが積り。思ひざめにもさめるものゝ見ェテつらや所在と恨むらん。地恨まば恨めいとしいといふ此の病。勤めする身の持病かと。地聲に浮世を投首の フシ酒も。しらけて醒めにけり。地中の島の八右衛門九軒の方より淨瑠璃聞付け。ヤア皆聞知つた妓の聲窄花車内にかとつつと入り。柄差靡逆手に取り二階の下から板敷を。ぐわた〱と突き鳴らし。詞女郎衆おんまりぢやこゝにも人が聞いてゐる。いかなる男でそれ程に戀しいぞ。男が無うて淋しくばお氣に入らずと。是にも一人貸してやろかと喚きける。地梅川はそれとも知らずデモ逢ひ度いが定ぢやもの。憎いなら來て叩かんせ。詞きよ様下は誰さんぢや。イヤ大事ござんせぬ中の島の八様と。地聞くより梅川はつとしてこれ〱彼のさんには逢ひともない。皆様下りて下さんせ私が二階に居る事を。必ず〱言ふまいぞ。そこらは粋ぢやと打頷き オクリ皆々〱座敷に出でければ。詞ヤア千代

武格呑込招柿　國々の御參詣　梅川殿に留
の口島屋を貰うて往なれたげな。忠兵衛も
まだ見えそもない。花車や爰へ寄らつしや
れ。地女郎衆も禿どもも忠兵衛が事につき。
耳打つて置く事がある爰へ〳〵とひそ
〳〵すれば。ハア、何事やら氣遣なといへ
ども二階の梅川に。悪い噂も聞かせんかと
フシ皆氣を配る折節に。地忠兵衛は世を忍ぶ
心の氷三百兩。身も懐も冷ゆる夜に越後屋
に走着き。内を覗けば八右衛門横座をしめ
て我が評判。はつと驚き立聞きす二階には
梅川が。心をすます壁に耳フシ漏るゝぞ仇
のはじめなる。地斯くと知らねば八右衛門。
詞かう言へば忠兵衛を憎み猜むやうなれど。
睨みぞあの男が身の成る果がかはいゝ。
尤千兩二千兩。人の金をことづかり暫時の
宿を貸すけれども。手金とては家屋敷家財
かけて十五貫目。廿貫目に足らぬ身代。大
和の親が長者でも。聟入へ養子に遣すから
は高の知れた百姓かゝい。此の八右衛門も
若い者の習で。一年に五百目一貫目揚屋の
座敷も踏まねばならぬ。身にも應ぜぬ忠兵
衛が梅川に上りつめ。島屋の客と張合ひ五
月より以來大方は揚詰。身請も此の頃極り。
百六十兩の内五十兩手附渡したげな。地そ
れ故に方々の屆け金が不埒になり。當る所
が嘘八百いかう小尻が詰つて來た。今でも
梅川がサア出るに極らば。借錢もあらうし
泣いても二百五十兩。天から降らうか地か
ら湧かうか。盗みせうより外はない。彼の
手附の五十兩何處から出たと思召す。詞身
が方へ來る江戸爲替中で取つて遣うたを。
それとも知らず請ひに行き養子の母御がい
としぼや。上つたは知つてなり渡せ〳〵と
せつかれて。忠兵衛が戻した小判お目にか
けうかと。一包取出し。コレかう見た所は
五十兩。地さらば正體あらはして獄門の種
御覽あれと。包を切つて切りほどけば燒物
の鬢水入主も一座の女郎もはあゝとばかり
に怖氣たち。身を縮むれば二階には。顔を
借に摺り着けてフシ家を潰して退きたがり。
地短氣は損氣の忠兵衛傾城は公界者。五十
兩のめくさり金取替へた借上。若い者に恥
かゝせ川が聞いたら死にたかろ樣の三百兩
五十兩引拔いて。面へぶち付け存分言ひ我
が身の一分川が面目。雪いでやらうア、さ
れども是は武士の金。殊に急用地殊に大事
の堪忍と。手を懐へ贅度かとやせんかうや
しようけ鳥。鵤の嘴の齟齬ふフシ心を知ら
ぬぞ是非もなき。地八右衛門水入取上げ。
詞これも買はば十八文。如何に相場が安い
とて五十兩を二分五厘替へ。神武以來無い
事。友達さへこれなれば他人を騙るは御推
量。此の次は段々に巾着きりから家尻きり、
果ては首切り如何にしても笑止な。地あの
如くに亂れては主親の勘當も。釋迦達磨の
意見でも聖德太子が直に教化なされても。
いかな〳〵直らぬ癖で此の沙汰はつとし
て。寄せ付けぬやうに頼みます。梅川殿、
も吹込んで此方から挨拶切り。島屋の客に

さらりつと請けさせて了ひ度い。皆あの流が心中か女郎の衣裳を盗むか。ろくな事は出かさず片小鬢剃りこぼされ　大門口に曝され友達の一分すてさする。人でなしとは彼が事。可愛ゆくば寄せて下さるなと語るを聞けば梅川も。悲しいといとしいと身の果敢なさとかきまぜて。胸ひき裂ける忍び泣きアヽ刄物がな鉄でも。舌を切つても死に度いとスヱテ悶え伏したる苦みを。地した。には各推量してひよんな心にならんした運の惡い梅川樣。いとしぼいは川樣お一人に止めたと。下女御料理人うら若き。フシ禿も袖を絞りけり。地忠兵衛元來惡い蟲押へ兼ねてずんと出で。八右衛門が膝にむんずと居かゝり。詞これ丹波屋の八右衛門殿。常々の口ほどあつてヲヽ男ぢや見事ぢや。三人寄れば公界忠兵衛が身代の棚下してくれる忝い。コリヤ此の水入も男同士。母の心を休めるため受取つてくれるかと。謎をかけて渡したを此の忠兵衛が五十兩。損か

けうかと氣遣さに廓三界披露して。男の一分すてさする。但し又島屋の客に賄賂取りて。梅川に藥を焚きあちらへやらうといふ事か。措いてくれ氣遣すな五十兩百兩。友達に損かける忠兵衛ではごあらぬアヽ。八右衛門樣八右衛門め。地サア金渡す手形戻せと、金取出し包を解かんとする所を。八右衛門押へてこりや待てやい忠兵衛。詞餘程のたはけを盡せ。其の心を知つたる故意見をしても聞くまじと。廓の衆を頼んで此方から除けてもらうたらば。根性も取直し人間にもならうかと。男づくの懇だけ。五十兩が惜しければ母御の前で言ふわいやい。戯譃な手形を書き無筆の母御を宥めしか。是でも八右衛門が届かぬか。其の金嵩も三百兩手金のあらうやうもなし。地定めて何處ぞの仕切金。其の金に疵をつけ。八右衛門したやうに鬢水入では濟むまいぞ。但し代りに首やるか逆上りつめる其の手間で。届ける所へ届けて了へエヽ、性根の据ら

ぬ氣違ひ者と。割つつ砕いつ叱れどもいや／＼仁義だて措いてくれ。詞此の金を餘所のとは此の忠兵衛が三百兩持つまいものか。地女郎衆の前といひ身代を見立てられ。猶返さねば一分立たぬと。包ほどいて十二十三十。始終つまらぬ五十兩くるくると引つ包み。これ龜屋忠兵衛が人に損かけぬ證據。サア請取れと投付くる男の面へ何とする。詞忝いと禮いうて返し直せと地投戻す。己れに何の禮言はうと。又投付けつ投返しフシ腕まくりしてぎしみ合ふ。地梅川涙にくれながら梯子かけ下りなうすつきり私が聞きました。皆島八樣のがお道理ぢやこれ手を合せる。梅川に免して下さんせとフシ聲を。あげて泣きけるが。地情なや忠兵衛樣なぜその樣に逆上らんす。そもや廓へ來る人のたとへ持丸長者でも金に詰るはフシある習ひ。地此處の恥は恥ならず何をあてに人の金。封を切つて撒散し詮議にあうて牢櫃の。縄かゝるのといふ恥と此の恥と換へ

らるか。恥かくばかりか梅川は何となれといふ事ぞ。とつく心を落しつけ八様に詫言し。金を束ねて其の主へ早う届けて下さんせ。私を人手にやりともないそれは此の身も同じ事。身一つ捨てると思うたら皆胸にこめてゐる。年とてもまあ二年下宮島へも身を仕切り。大阪の濱に立つてもこな樣一人は養うて。男に憂き目かけまいもの氣を鎭めて下さんせ。あさましい氣にならんした斯うは誰がした私がした。皆梅川が故なれば忝いやらいとしいやら。心を推して下さんせと。口説き立て〳〵小判の上にはら〳〵とフシ涙は。井出の山ぶ。きに露置き。地忠兵衞氣も有頂天。前後括らぬ間に合ひ蓮敷金の事思出し。詞はて喧しい。此の忠兵衞をそれ程たはけと思やるか。此の金は氣遣ない八右衞門も知つて居る。養子に來る時大和から。敷金に持つて來て餘所へ預け置いた金。地身請の爲に取戻した花車玆へと呼び寄せ。先へ手付

に五十兩。今百十兩合せて百六十兩。是川が身の代これ又四十五兩。いつぞやしめた帳面買ひがかりの借錢。五兩は遣手九月からの揚錢。萬事十五兩程と覺えたが。算用がやかましい廿兩で帳消しや。此の十兩は此方へ御祝儀やら骨折ぶん。りんも玉も五兵衞も壹兩づつぢや來い〳〵と。金錢降らす邯鄲のフシ夢の間の榮耀なり。地サア今の間に埓明け今宵の中に出るやうに。頼む〳〵と言ひければ主俄に勇みをなし。無い程は無いも金有る段には有る物かは、氣を死なさう事でない。川樣嬉しう思はんしよ。ヤ大事の金を持つて行く。りんも玉も供しやとフシ引連れ走り出でにけり。地八右衞門は濟まぬ顏誠とは思はねども。只さへもらふ此の小判返す物をいはれぬ辭儀。五十兩慥に請取つた手形を返すと投出し。詞梅川殿よい男持つてお仕合。妓樣達これにと地金懷中し出でければ。私等もいざ歸りましよ。川樣目出たうござんすとオクリ皆宿〽宿

へぞ歸りける。地忠兵衞氣を急いて花車はなぜ遲いぞ。五兵衞行つてせつてくれと立ちに立つてせきけれども。詞イヤ身請の衆は親方がすんでから。宿老殿で判を消し。月行事から札取らねば大門が出られませぬ。まちつと隙が入りませう　地エヽそこらを早うこりや頼むと。又一兩投出すおつとまかせと足輕く。走る三里の灸よりもフシ小判の利きぞ應へける。地サア〳〵此の間に身拵へべた〳〵した取りなり。帶もきりりと仕直しやとめつたに急けば何ぞいの。一代の外聞傍輩衆へも盃事。暇乞もわけようしてゆるりと出して下さんせと。何心なく勇む顏男はわつと泣出し。いとしや何も知らずか今の小判は堂島の。お屋敷の急用金此の金を散らしては。身の大事は知れた事隨分堪へて見つれども。友女郎の眞中で可愛い男が恥辱を取り。其方の心の無念さを晴し度いと思ふより。ふつと金に手をかけてもう引かれぬは男の役。かうなる因

果と思うてたも。八右衛門が面付員に付けに
むかす顔。十八軒の仲間から詮議に來るは
今の事。地獄の上の一足飛び踏んでたちや
とばかりにて フシ縋り。付いて泣きければ。
地 梅川はあと様ひ出し フシ聲も涙にわな
くと。地 それ見さんせ常々から言ひしは
該の事。なぜに命が惜しいぞ二人死ぬれば
本望。今とても易い事分別据ゑて下んせな
う。詞 ヤレ命生きようと思うて此の大事が
成るものか。生きらるゝだけ添はるゝだけ
高は死ぬると覺悟しや。地 アヽさうぢや生
きらるゝだけ此の世で添はう。今にも人が
來るため此處へ隱れてござんせと。屏風の
陰に押入れア、私が大事の守を。内の簞笥
に置いて來た是が欲しいと言ひければ。詞
ハテかゝる惡事を仕出して。如何な守の力
にも此の科が遁れうか。地 兎角死身と合點
して我は其方の回向せん。其方は此の忠兵
衛が回向を頼むと屏風の上。顔を出せばハ
ア、悲しやいまくしい。ちやつと措いて

下さんせいやな物によう似たと。屏風にひ
しと抱き付き フシむせ返り。てぞ歎きける。
地 越後主從立歸りサアどこもかも埓明いた。
お出の轎手近ければ西口へ札が廻つたと。
言へども夫婦はわなくとさらばくも顫
ひ聲。お寒さうなが酒わいの。酒も咽喉を
通りませぬ。目出たいと申さうかお名残惜
しいと申さうか。千日言うても盡きぬ事其
の千日が迷惑と。ゆふづけ鳥に別れ行く榮
耀榮華も人の果。果は沙場を打過ぎて。跡
は野となれ、相撲の足に、任せて 二流

忠兵衛 梅川 相合駕籠 下之卷

地クセ 翠帳紅閨に。枕並べし閨の内。馴れし
歌 衾の夜すがらも。四つ門の跡夢もなし。
さるにても我が夫の。秋より先に必ずと。
仇し情の世を頼み。人を頼みのオ フシ綱
切れて。夜半の中戸も引替へて。人目の關
にせかれ行く昨日の儘の鬢つきや。髪の髷
のほつれたを。スヱテ わけて進じようと櫛を
取り。手さへ涙に凍えつきオクリ冷えたる。

足を大股に相付の郎輿の。駕籠の息杖來
きてまだ。續く命が フシ不思議ぞと二人が
涙。河端口。地 開けぬ關には暫しとて。駕籠
の簾なあけてさへ膝組み交す駕籠の内狹き
馴れおりし夜の。逢瀬に似たは似たれども
フシ 炭の埋火いつしかに朝の霜と。置きかへ
て夜半の道に呼ばれては。こたふる野邊の
禿松。ホオクリ過ぎし。其の夜か思はれて。い
とど涙の フシ種ならん。地 何くどくと思
ふぞや。是ぞ一蓮託生と慰めつ又慰みに。
比翼連理の薄情オクリ露さへ絶えぐ晴れ渡
り。露の草生に風荒れて朝出の鐘や火を責
ふ。野守が見る目恥かしと。駕籠立てさせ
て暇をやる。値の露も命さへ惜しからぬ身
はいへ惜しからず猪も惜しまぬ徒歩跣足。フシ
惜しむは名殘ばかりぞや。歌 終に着馴れぬ綿
帽子。私が顔よりこなさんの。風にこれを
と風防ぐびらり帽子の紫や。色で逢ひしは
早や昔。今日は眞身の女夫合。鄭まば剛フシ
庚申。スヱテ 庚申堂よと伏拜み。振返り見る。

久しうお目にかゝらぬと。つつと入れば嚊、と思しく誰でござるぞ。詞これのは今朝から庄屋殿へ詰められ。今は留守で御座るといふ。ムヽ忠三殿におか樣は無かつたが。アヽ私も三年此方はどれでばしござるぞ。跡にこれの内へ嫁入して。前方の知る人はどれがどうも知りませぬ。ヤアほんに皆樣は若しや大阪ではござらぬか。これの親方孫右衛門樣の繼子忠兵衛殿と申すが。大阪へ養子にいて傾城買うて人の金を盗み。其の傾城連れて走られたと言うて。代官殿より御詮議。孫右衛門樣はとうに親子の久離を切り。構はぬとは言ひながら眞實の親子なれば。年寄つての氣苦勞これのは馴染の事なれば。地若しも此の邉うろたへて。見附けられてはいとしい事と内外へ氣をつけらるゝ。庄屋殿から呼びに來る寄合の印判の。節季師走に此の在所は傾城事で煮え返る。なうたてのお傾城殿やと フシ遠慮もなくぞ語りける。地忠兵衛はつと思ひ如何にも／＼大阪でも其の取沙汰。我等は夫婦連で年籠りに參宮の志。懐しさに寄りましたちよつと呼うで來て下され。立ちながら逢うて歸り度い。地大阪者と言はずに賴みますと言ひければ。扨はいかうお急ぎか往て呼うで來ませうさり乍ら。鎌田村のお道場へ京のお寺のお下り。毎日のお讃歎先から直にお道場へ。參られたもいさ汁の下。さしくべて下されと フシ襷がけして走り行く。地跡の門口梅川がはたと鎖して鑰かけ。是はほんの敵の中大事ないかと言ひければ。詞忠三郎といふ者は百姓に稀な男氣持つた者。地賴んで一夜逗留し死ぬるとも此の所。故鄕の土に身をなして生みの母の墓所。一所に埋まる嫁姑の未來の對面させ度いと。目もうろ／＼となりければそれは嬉しうござんせう。さり乍ら私が母は京の六條定めし此の間詮議に人が往きつらん。日頃眩暈持ちなればどうならんした事やら。ま一度京の母樣にも一目逢うて死にたいぞ。地チヽ道理とも我も其方のお袋に。聟ぢやというて逢ひ度いと。人目なければ抱き合ひ フシ涙の。雨の橫時雨袖に。餘りて窓を打つ。地ハアヽ降つて來たさうなと西受けの竹櫺子。反古障子を細目にあけて見やる野風の畠道。後しぶきに降る雨はかたけて急ぐ阿彌陀傘。道場參り打連れしはあれ皆在所の知つた衆。先なは樽井端の助三郎是も在所の口利き。あのお婆は荷持瘤の傳が婆。アヽいかい茶飲みぢやがの其處へ見える剃下は。昔は大貧乏。年貢に詰つて娘を京の島原へ賣り。大盡に請出され奥樣に供り。聟のかけて田も五町倉も二箇所の分限者。同じ傾城請ける身が我は其方のお袋に。憂目をかける口惜しい。あの爺は弦掛の藤次兵衛。八十八で一升飯殘さぬ。今年は丁度九十五。其處へ來た坊主は鐵立の道庵。あいつが鐵で母ぢや人を立て殺した。思へば母の敵ぢやと フシ憂きにつけての恨み言。地あれ／＼あれへ見えるが親父

樣。あの緋の肩衣が孫右衞門樣かほんに目許が似たわいの。それ程能う似た親と子の。言葉をも交されぬ是も親の御罰ぞや。お年も寄る足許も弱つた。今生のお暇と手を合すれば梅川は。見始めの見納め私は嫁でござんする。夫婦は今をも知らぬ命百年の壽命過ぎて後。未來でお目にかゝりましようと口の内にて獨語。諸共に手を合せ フシ咽び入つてご歎きける。地 孫右衞門は老足の休み〳〵門を過ぎ。野口の溝の水氷辷るを止る高足駄。鼻緒は切れて横樣に泥田へかはと轉け込んだり。ハア悲しやと忠兵衞もがけども騷げども。身を顧て出もやらず梅川あわて走り出で。抱起して裾絞りどこも痛みはしませぬか。お年寄のおいとしやお足もすゝぎ鼻緒もすげて上げませう。少しも御遠慮なさるゝなと フシ腰膝撫でて痛はれば。地 孫右衞門起上り誰方やら有難い。詞 お蔭で怪我も致さぬ。若い上臈のおやさしい年寄と思召し。嫁子もならぬ介抱。寺道場へ參つてもこれ。こゝの一心が邪見では參らぬも同然。此方がほんの後生願ひもう手を洗うて下され。地 幸ひ宴に藥もあり鼻緒は私がすげましようと。懷の鼻紙を取出せば梅川は。好い紙がござんする紙捻撚つて上げませうと。延紙引裂きし其の手許孫右衞門不思議さうに。詞 先づ此方はこゝらに見知らぬお人ぢやが。誰方なれば此のやうに懇にして下さると。顏をつれ〳〵眺むれば梅川いとど胸づはらしく。詞 アヽ我等は旅の者私が舅の親父樣。丁度お前の年配で恰好も其の儘。地 外へする奉公とは更更以て思はれず。お年寄つた舅御の臥し惱みの抱きかゝへ。給仕は嫁の役御用に立てば私も。なんぼうか嬉しいもの連合はなほ親御の事。飛び立つやうにもある筈此の紙と。此の紙と。換へて私が申し受け連合の肌に付けさせ。父御に似たる親父樣の形見にさせたうござんすと。鼻紙袖に押包む。フシ 涙ぞ色に出でにける。言葉の外に孫右衞門つく〴〵と推量し。流石恩愛捨て難く老の涙にくれけるが。詞 ムヽ此方の舅にこの爺が。似たと言うての孝行か。嬉しいうち腹が立つ年長けた悴を仔細あつて久離切り大阪へ養子に遣せしに。地 根性に魔がさいて大分人の金を過り。詞 擧句に所を走つて此の在所まで詮議の最中。誰ゆゑなれば嫁御ゆゑ。地 近頃愚痴な事なれども世の譬にいふ通り。盜する子は憎からで繩かくる人が恨めしいとは此の事よ。久離切つた親子なれば善いにつけ惡いにつけ。構はぬ事とは フシ言ひながら。大阪へ養子にいて利發で器用で身を持つて。身代も仕上げたおのやうな子を勘當した。孫右衞門はたはけ者阿呆者と言はれても。其の嬉しさは。どうあらう今にも捜し出され。繩かゝつて引かるゝ時好い時に勘當して。孫右衞門は出かした仕合ぢやと褒められても。其の悲しさはどうあらう今から思ひすごされて。一日も先に往生させて下されと拜み願ふは今

參る如來樣御開山。佛に壺はつかぬぞと。土にどうど平伏して フシ聲を。ばかりに。泣きければ。地梅川も聲をあけ忠兵衛は障子より。手を出し伏拜み。身を揉み歎きしづみしは フシ道理とこそ聞えけれ。猶も涙を押拭ひなう血の筋は悲しい。仲の能い他人より。久離切つた親子の親みは世の習ひ。盗み騙りをせうよりもなぜ前方に内證で。詞かう〳〵した傾城にかうした譯の金が入ると。密かに便宜もするならば親は泣寄り親子なり。殊に母も無い悴。詞隠居の田地を賣つても首繩は付けさせまい。今では世間廣うなり養子の母に難儀をかけ。地人に損かけ苦勞をかけ孫右衛門が子で候とて。引込んで置かれうか一夜の宿も貸されうか。皆彼奴が心から其の身も狹い苦をしをる。嫁御に迠憂き目を見せ廣い世界を迯け隠れ。知音近付親子にも。隠れるやうに身を持ちなしろくな死にもせぬやうに。此の親は生みつけぬ憎い奴とは思へども。可愛ゆうござるとばかりにて スヱテわつと消え入り。泣沈む フシ分けたる。色血筋ぞ哀れなる。涙の隙に巾着より銀子一枚取出し。詞これは難波の御坊の御普請の奉加銀。今ここに有り合せた嫁御と存じてやるでもなし。地只今のお禮のため此の途にぶらついては。詞よう似たとて捕へるぞ連合は猶以て。是を路銀に御所海道へかゝつて一足も早う退つかしやれ。此方の連合にも言葉こそは交さすとも。ちよつと顔でも見度いが。いや〳〵それでは世間が立たぬ。地どうぞ無事な吉左右をと涙ながら二足三足。行きては歸りなんと逢うても大事あるまいかい。詞なんの人が知りませう逢うてやつて下さんせ。アヽ大阪の義理は缺かれまい。地どうぞして逆樣な回向させなと懇に。親みますると咽返り。振返り〳〵 オクリ泣く〳〵。〳〵別れ フシ行く跡に。地夫婦はわつと伏轉び スヱテ人目も忘れ。泣きゐたる フシ親子の仲こそ果敢なけれ。地忠三郎が女房雨に濡れて立歸り。詞待遠にござりませう。こちの人は庄屋殿から直に道場へ參られ。地それ故逢ひも致さずもう雨も晴れかゝる。追付け今に戻られうといふ處へ忠三郎。息を切つて駈來りこれは〳〵忠兵衛樣。詞親父樣の話で段々を聞いて來た。此方の事で此の在所は大阪から聞者が入り。地代官殿から詮議ある劍の中へ晝日中。運の盡きたお人ぢや此方の樣を見附けたやら。既に在所家並の片端から屋搜し。親父樣を今搜すこれから私が家の番。親父樣はいとしや早う脱かしてくれよとて。狂亂になつてぢや鍔の口とは只今サア〳〵裏道から御所街道山へかゝつて退かつしやれと。言へば夫婦は狼狽ゆる女房は譯知らず。詞わしも一所に退きましよか。地阿呆らしいと引退けて。夫婦に古簑古笠や雨のあしべも亂るゝ心。死しても忘れぬ此の情 フシ深く忍びて出でにけり。地忠三郎先づ嬉しと息をついだる所に。庄屋年寄先に立ち代官所の捕

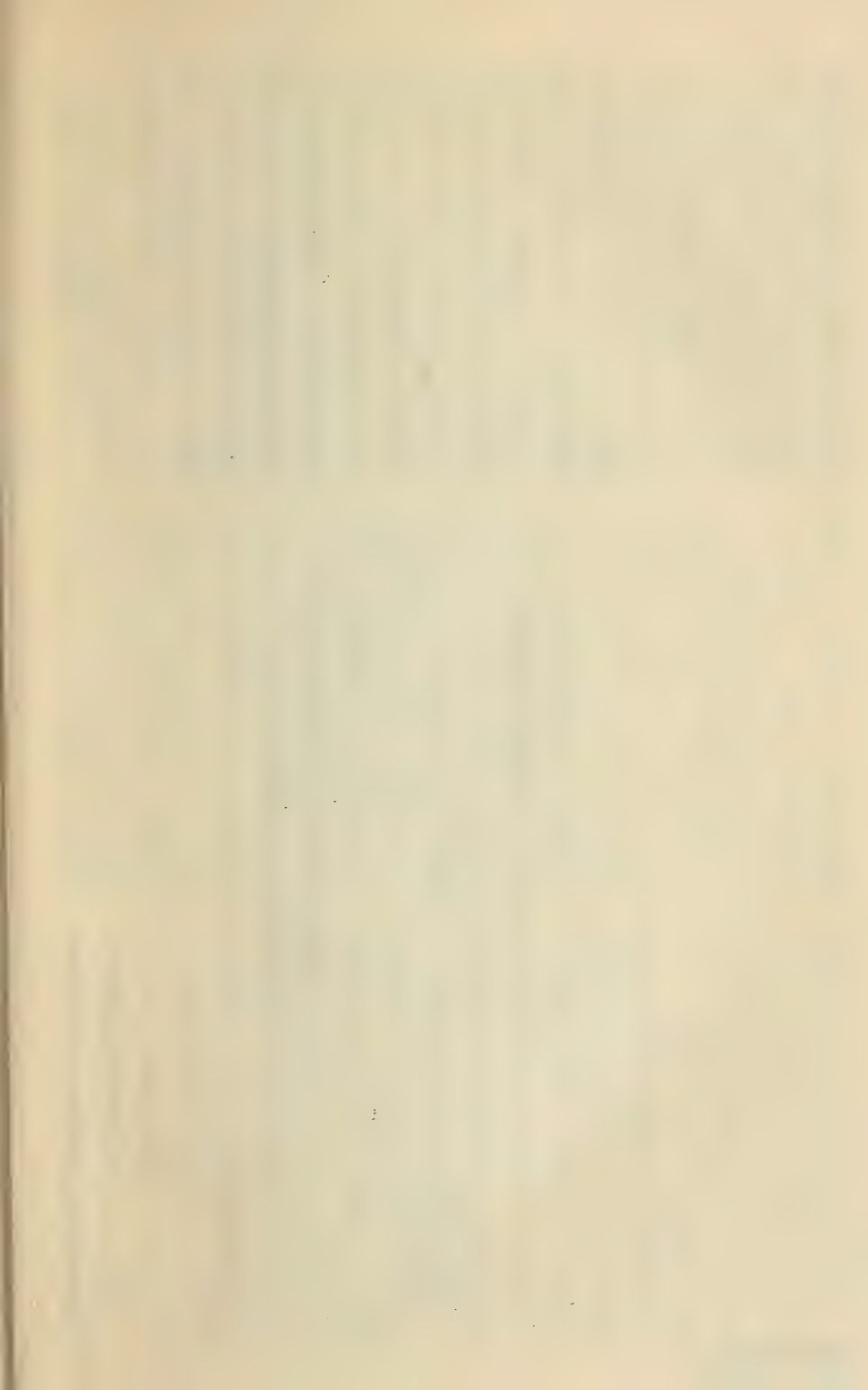
手の衆。忠三郎が門口背門口二手になりどやく\と込み入つて。莚をまくり簀子を破り唐櫃米櫃灰俵打返してぞ探しける。土間かけて二十疊にも足らぬ小家。いづくに隱れんやうもなし此の家は別條なし。野道を探せと言ひ捨てて茶園畠の間々をかり立ててこそ 三重へ 通りけれ。地 親孫右衞門は跣足にて。どうぢやく\忠三郎善か惡か聞きたい。詞 アヽよいく\氣遣ない。夫婦ながら何事なうまんまと落しました。地 ハヽア有難い忝い如來のおかけ直ぐに又。道場へ參つて御開山へ御禮申さう。なう嬉しや有難やと二人打連れ行く所に。詞 龜屋忠兵衞槌屋の梅川。地 たつた今取られたと北在所に人だかり。程なく捕手の役人夫婦を搦めて引き來る。孫右衞門は氣を失ひ息も絕ゆるばかりなる。風情を見れば梅川が夫も我も繩目の科。眼も眩み泣き沈む忠兵衞大聲あげ。詞 身に罪あれば覺悟の上殺さるゝは是非もなし。御回向頼み奉る親の歎きが目にかゝり。地ナヽロ 未來の障これ一つ面を包んで下されお情なりと泣きければ。手拭引き絞りめんない千鳥百千鳥。泣くは梅川川千鳥水の流れと身の行方。戀に沈みし浮名のみ難波に。殘し止まりし。

右之本令吟覽頭句音節墨譜等不殘毫厘令加筆條可有開版者也

竹本義太夫 〔竹本〕〔博教〕

重而予以著述之本令校合候畢全可為正本者歟

近松門左衞門

京二條通寺町西へ入町 正本屋 山本九兵衞版

吉野都女楠

近松門左衛門作

序 往を尋ねて來れるを知る。大權聖者の未來記見つんべし。東魚來つて四海を呑む。西鳥來つて東魚をくらひ。海內既に一に歸し再び九五の御位。後醍醐の帝と重祚ある。逆臣相模入道が一族滅びて後。足利治部大輔尊氏卿か朝家を恨み奉り。東國勢を引率し矢矧鷺坂竹の下。數萬度の軍に驕誇り己れと征夷將軍に押し成つて。帝都間近く攻入りしを新田左中將義貞。楠判官正成。詞平張良が肺肝よりオロシ〽出でたる如き。名大將。地命を風前の塵にかけ義を金鐵より堅くして。駈破り駈惱まし千變萬化の合戰に。さしもの尊氏終に打負け筑紫を指して落しほの。八重九重や都の內。ドツと萬歳をこそ唱へけれ。地時に建武三年五月十五日。新田義貞早馬を立てて奏聞ある。詞抑朝敵尊氏大友少貳を從へ。九州の軍兵五十萬騎。兵船數千艘にて攻上り尊氏が弟直義。山陰山陽の大勢陸路を打つて雲霞の如く。播州の赤松敵に與し白旗の城に立籠り。官軍を遮り候を義貞備後備中に支へ。挑み戰ひ兵庫に。敵船早や須磨明石を蹈過え候と追々に注進頻なり。地天皇大きに驚かせ給ひ。楠判官正成をすぐやがて〽御前に召されける。地扨義貞が注進事急なり。罷り向つて合戰を致すべしとの勅諚。詞楠畏つて奏せしは。數年の軍に疲れたる御方の小勢。敵方は新手の大勢勝に乘つたるに驅合せ。常の如くの合戰は味方打負け申さん事決定。先づ新田殿をも召返され君は比叡山へ臨幸なり。正成も河內に退き敵を都へおびき入れ。河尻を差塞ぎ籠の鳥の如くにして。兵粮を留め敵軍次第に疲れ落ちん。所を新田殿は山門より押寄せ。正成は搦手より攻上り眞中に包んで。一揉みに揉ならば朝敵一戰に滅びん事。正成が方寸の內に覺え候。詞軍は必ず一旦の勝負を見る事的れ。始終の勝こそ肝要にて候へ。地縱へ官軍百度負くるとも。地正成一人生きてありと聞召さば。聖運終に開かるべしと。思召され候へとフシ世に賴もしくぞ奏しける。地坊門の宰相清忠御簾の前につつと出で。詞ヤア臆したるか楠。尊氏が多勢に閑怖して。一戰にも及ばず河內へ退き。君を比叡山へ臨幸なし奉れとは。命の惜しさに帝位を輕しめ申すよな。詞總じて新田義貞勾當の內侍に思ひを殘し。都に心引かるゝ故軍手ぬるく敵にきほひ付きたるに。詞剰へ河內へ引かんとは鎌倉の樣子がゆかしいか。伊賀の國の住人大森彦七盛長といふ武士。尊氏に與するといへども楠に讎ある故。思切して味方に力を加へんとの內通あれば。地味方

の勝利目前にて御邊等が命に。氣遣の無い事は此の宰相が請合ふ。早々發向有るべしと。ヽ嘲り顔して申さるゝ。地楠元より私の怒りに忠を忘れぬ良雄。いよ／＼面を和げ。詞御にては候へども其の大森彦七が內通にて。味方勝に極らばなほ以て正成向ふ迄も候はず。地さり作ら詩歌管絃は殿上の御翫賞。弓馬合戰の道は武門の諫言に任せられ是非に都を明け渡し敵に一旦勝を與へ重ねて。畢竟の勝を御覽あるこそ。謀を帷幄の中に運らし勝つ事を千里の外に決す。籌策にて候と子房が秘藏孔明が骨髓。殘る方なく奏せらる宰相大きに色を損じ。御邊が言ふ迄もなく弓馬合戰の道なればこそ。賤しき汝等禁庭へ召さるゝ條有難しとは存ぜずや。先年御邊千早赤坂の城郭にて。六波羅の大勢を傾け相模入道亡びしも。全く武略の手柄にあらず君の賢運天に叶ひ。宗廟社稷の大小の神祇王法を守護し給ふ故。殊に今度は目に見えたる勝軍。

地大森がお蔭にて手柄すべきは此の度はや打つ立てとありければ。軍法不覺の卿相雲客口々に。敵の內通あるからは天の與へ此の時。是非々々楠驅せ向ひ朝敵尊氏一戰に攻め滅し。宸襟を休め奉れと。衆議一決の勅定は フシうたてかりける御運なり。地正成も此の上はさのみ申すに及はずと。御前を立ちけるが是ぞ最期の合戰と。思ひ定めし忠臣の屍は永に消ゆれども。義は碎かれぬ楠と。朽ちせぬ。名をこそ 三重 止めけれ フシ元來正成。智仁勇を兼備し死を善道に守る良將。今度の合戰味方必定負軍。討死の時極れりと本國へも立歸らす。直に五月十六日ありあふ手勢五百餘騎。嫡子帶刀正行十一歲。兄が馬に押並へて打ちければ。舍弟正季一族和田の新發意源秀。同新兵衞尉紀六左衞門恩地の左近馬物の具を地輝かしオクリ心のヘ花も フシ咲きかくる。地櫻井の宿に着きけるがまだ雲凝りて五月雨の。稍夕立と降る雨は瀧の落つるが如くにて。

人馬の足を立て兼ね。生田の森に打入れてこゝ暫く晴間を待ち居たり。雨に蛙寄る是蹈の池堤を急ぐ蓑笠は。早苗の賤かと見捨つれば下部二人に長持舁かせ。四十餘りの女房の雨に爭ふ淚の雫。しをれ綻びし走り來る下部ども長持どつかと下し。詞エヽどう因果の夕立や日も暮も明かれぬ。いざ來いあの森で少し晴して行くまいか。コレそこな女子殿。地長持預けた蔭めされと フシ二人は森へぞ走りける。地女とかうにかきくれて歎き沈みて立ちけるが。思寄りある顏つきにて長持の棒取つて捨て。石を拾ひてちやう／＼／＼。叩く手先に力なき女力も念力の。天や見通す錠の穴錠前離れ落ちければ。なう有難やサアお出と蓋を取る手に縋り付き。廿歲ばかりの上臈の淚ひまなく息こもり。顏にばら付く亂れ髮。柳櫻をこきまぜて フシ水に浮めし如くなり。地いざ下部どもの來ぬ先にと抱き出せばアヽ嬉しや。此の池こそ自らに菩提を勸むる功

德池よ。其方も數珠を持つてかお肌に御本尊かけてかヲ、ほぞんかけたる時鳥。あやめの沼は水淺しとフシ深みを尋ねさまよひたる。正成馬上より遙かに見付け。あれ〳〵身を投ぐる女あり敵か味方かいづれにもせよ。源秀駈付け助けられよとありければ。承ると和田新發意眦を僞うて走り寄る。其の丈六尺七寸古への辨慶も。あざむくばかり鬼の樣なる赤入道。二人はあはやと手を合せ。飛入る所を引寄せて確かとだく。なうさうせいでも死ぬる身をせめて身體に疵付けず。死なせてたべと飛入るをこれ上﨟。殺す程ならなんの止めう。あれなるは楠判官正成物のあはれを見捨てぬ氣質。仔細とつくと聞屆けよとの使なりと言ひければ。扨は楠殿とや自らこそ。新田義貞の妻勾當の内侍なり。お情に新田殿の陣屋へ送りたべかしと。宜ふ處へ二人の下部立歸り。ヤアウ長持の錠捻ぢ切つた。己れ取逃がし手振で歸つてこちとが命あるものか。こつちへうせうと取付く所を源秀二人が首筋引摑み。手振で歸れば取らるゝ命此所にて取つてくれんずと。眉間にかつぱと打込めば五體を摑む妻戀フシ泥に醉うてぞ失せにけり。其の陣に楠親子馬乘放し。とかういたはり給ひければ内侍も涙にくれながら。常々夫の物語楠判官正成は。慈悲第一の大將と聞きしに變らぬ御情スヱテ何と報じ參らせん。一年猿樂見物の時。伊豫の國の住人大森彦七盛長とやらん。自らに心をかけ坊門の宰相を仲立にて。地威勢でおどし文でぬらし。色かへ品かへフシ口說きしを。つれなく返事も致さぬ間に新田義貞の妻となりたるは。上樣よりの勅諚天下晴れての夫婦ぞや。それに此の度義貞西國發向の留守を窺ひ。宰相理不盡に亂れ入り先約は大森。仲人の宰相義理が立たぬの何のとて。無理無體に長持に押入れて送らるゝ。なうやる方なさ便なさ乳人が慕ひ來るとは知らず。頭も上らず息もならぬ長持を。搖るやら振るやら打付け通る其の聲。胸に應へ目もくら〳〵と幾度か死入りし。火の車に載せて行くフシ地獄の迎もかくやらん。此の上のお情に我が夫の陣屋迄。送り屆けて給はれと乳人諸共手を合せフシかきくどき。さてぞ泣き給ふ。正成打頷きさこそ〳〵。我大内を出でしより斯樣の事あらんとは。宰相が言葉の色にて察せしなり。義貞の御陣所へ送り申すは易けれども。宰相斯くと漏れ聞かば陣場へ女中を召されしと惡し樣に奏聞し。叡慮を以て御夫婦の仲を裂かば御恥辱を招くに似たり。それ〳〵源秀兄より都へ御供し玄惠法印に預け參らせよ。道中人に悟られぬ用心第一。とく〳〵とありければ合點合點智略はお家。勸學院の雀任せておけと小躍りして。郎黨二人が具足を脫がせ長持に入れ替さし擔はせて。これ内侍樣も乳人御も慮外ながら下女にして。我等は叉此の體と内侍が編笠の上に衣かづき。

仁王のやうなる大入道五日歸りの花嫁と。しやならく\と振りかけてサァ腰元衆。早うおじやと夕かけも。眼は朝日照る月のフシ都の方へと急ぎける。地正成道に見送つて。嫡子正行を招き涙を浮め。汝幼くとも能く聞き置け。忝くも我帝に賴れ奉り。命を敵の矢先にかけ身を戰場に抛つ事。譽を取つて名を殘さん爲にもあらず。子孫の榮華を願ふにも非ず。朝敵を滅し國家安全の。叡慮を休め奉らんと義を重んずるばかりなり。今度の合戰味方必定打負け。王法忽ち傾き御代を奪はれ給はん事。鏡に照らすが如くなれば。地我一つの謀を以て樣々諫め申せども。坊門の宰相横しまの理をすゝめ。君用ひさせ給はねば力なく打つ立ちたり。父が一期の名殘の軍花々しく戰ひ。一戰に腹を切るべきぞお事は是より故鄕に歸り。父が最期と聞くならばいよく\身を全うして。廿にも餘る時金剛山を要害として。住吉天王寺に打つて出で。近隣を掠し

討手向はゞ一命を。養由が矢先にかけ義を紀信が忠烈に比べ攻め戰ひ。君を御代に立て參らせ父が憤を散ぜん事。如何なる佛事孝養も是にはなどか勝るべき。今生にて汝が顏見る事も是迄ぞ。必ず詞を忘るゝなと勇氣撓まぬ弓取も。恩愛父子の憂き世の別れ涙をスエテはらく\とぞ流しける。詞正行聞きも敢ず口惜しき父の仰やな。楠正成が嫡子正行こそ負軍を考へ。道より逃げて歸りしと世の嘲りに落ちん事。地尻の上の恥辱候殊に親の討死と。思ひ定めし軍場を見捨つる子や候べき。是非御供に連れられずば我等一騎駈拔け。詞敏達天皇の後胤。井手の左大臣橘の諸兄公の末葉。河内の判官が嫡子帶刀正行。生年十一歲と名乘つて能き敵に駈合せ。引つ組んで刺違へ冥途の道の先駈と。地思ひ詰めたる正行敵の旗をも見ぬ先に。歸れとは恨めしや幼くて戰場の。妨となるならば只今茲にて腹切らん。介錯してたべ人々と芝の上にどうどゐてフ

シ摩も。惜まず泣きければ。在りあふ軍兵感涙にフシ鎧の袖をぞ絞りける。正成も共に涙は先立てども。詞わざと聲を荒らげ。ヤァ弓馬の家に生れて討死するが珍しきか。お事を年月養育せしは。地戰ふべき所に進せよとては育てぬぞや。天下に功を立つるこそ良き弓取とは名付けたれ。傳へ聞く西天に獅子といふ獸あり。其の獅子子を生んで三日の內其の子を。數千丈の岩壁より眞逆樣に投落す。獅子の機分なき子は。岩角に身を破つて當座に死す。勢備る獅子の子は中よりひらりと跳返り。身を全うすと傳へたり。地我が子の心を見る事は畜類とても斯の如し。今諸國八方に鋒つたる敵の中。幼き汝を返す事彼の岩壁に抛つ獅子の子よりも猶危し。汝勇士の機分備らば。數萬の敵の鋒先の岩石も。凌ぎて碎く獅子の勢太平の御代と跳ね返せ。吉野初瀬の名木も老木は次第に枯るれども。零るゝ種の色

香をつぎ花の名高き山ぞかし。二葉の苗を残すこそ巌とならん楠が。長き世迄の フシ 形見ぞと。鎧の引合より一巻を取出し。詞 是ぞ我が祕する所の軍術。此の書を讀みて道を得ば。父正成が存らへあるも同然ならんと。一巻を手に渡しザア。地 此の上にも聞分なく。腹切らば切れ供せばせよ。父が言ふ事是迄と馬引寄せゆらりと乘り。思ひ切つたる心にもゆゝしき我が子の武者ぶりを。見るも限りと目に朧き涙に手綱くりこへて フシ 駒を。ひかうるばかりなり。地 正行も理に當る親の教訓せん方も。涙をおさへ御詞一々承り候と。一巻取つて押頂き乳人の恩地に馬引かせ。手綱かいくり打乘つて親子此の世の別れの詞。さらばとだにも言はゞこそ欲を忘れ情を知り。義に逞しき大將は百萬騎に圍まれても。恥辱の死はせぬものぞ 地 此の理に背く武士は。勝も誠の勝ならず スエテ 恥を子孫に殘すなり。心得たるか正行承り候と。互に駒を引返し東西に

別れしが。ふり返り〳〵親は我が子の身の行方。子は又親の最期の末思ひ包みて弓取の。泣かぬを今の涙とは。餘所の袂にせきかくる湊。川へぞ 三重〽 寄せにける フシ 明くれば五月。地 廿五日尊氏の軍兵海手山手百萬餘騎。楯を鳴らし箙を叩き鬨をどつとぞ揚げたりける。地 楠手勢七百餘騎同時に鬨を作り立て。多勢が中に割つて入り喚き叫んで 三重〽 戰ひける フシ 味方は小勢と。地 いひながら一命を義路にかけ。名を末代に止めんと思ひ切つたる勇士ども。北より南へ追ひ靡け西より東へ割つて通り。息をもつがせず攻めかくればさしもの大勢支へ兼ね。須磨の上野へさつと引き フシ 後陣の勢をぞ待ちゐたる。大森彦七盛長駒かけ据ゑ大音あげ。詞 鬼神ならぬ楠某が一軍に。正成兄弟首取つて敵味方の目を覺さん。彦七を手本にせよと廣言吐いて討つてかゝる。正成も駒驅寄せなに大森とや。合はぬ敵不足ながら志の優しやと。地 まつしぐら

に驅出す此の勢に氣を失ひ。迯鞭打つて引返すきたなし返せと追つかけしは。早瀬の鮎を鵜の鳥の フシ 追うて廻るが如くにて。地 程なく追詰め盛長が。上帶摑んでどうど打付け首を掻かんとせし所へ。地 藥師寺十郎同じく次郎左手右手よりむずと組む。しやもの〳〵しと兩手を伸べ。地 草摺摑んで捻合ふ間に大森小脇をそつと拔け フシ 跡をも見ずして迯失せけり。詞 大事の敵を漏せしも汝等故と。兩脇にしつかと挾みゑいやうんと締め付くれば。地 目口より血を流し一人一所に伏したりける。是を見て吉良石堂高上杉六千餘騎。楠を討留めんと八方より喚いてかゝる。正成元より討死と思ひ定めし晴軍。望む所と太刀さしかざし。討つて出づれば正季正員和田五郎宗徒の兵拔連れ〳〵死物狂ひの拜み討。當る者を幸ひに薙立て〳〵 三重〽 追廻す フシ されども敵は。地 百萬餘騎入れ替へ〳〵攻立つれば。七十三騎に討ちなされ正成今は是迄と。一

桟敷に走り入りこれ園庭の最期場こゝ心静かに最後を待て如何に方々。詞押最期の一念によつて善悪の生を引くといへり。九界の間に何か御邊の願なると問ひければ。弟の正季から〳〵と笑ひ。只七生迄同じ人間に生れ出て。朝敵尊氏を滅さんこと我等が願の一つなりと。言はせも果てず正成嬉しげに打頷き。罪業深き悪念なれども我も同様に思ふなり。地いざや同じく生を替へ此の本懐を遂せんと。言ひもあへず押肌ぬぎ氷の刄一文字。脊骨をかけて引廻せば。宗徒の一族十六人従ふ兵五十餘人。我も我もと刺し違へ同じ枕に伏したりし。惜しかりし惜しむべし日本無雙の名將の フシ最期の程ぞ潔き。地聞もすかさず大森彦七大勢引具し込入つて。一々に首掻き落しナヽ目出たし心地よし。抜かぬ太刀の高名楠が首尊氏公に奉らば。三箇國は取れたるもの目與心を通はせし。勾當の内侍も坊門宰相が計らひにて。今宵我が手に入る筈うまい事の摑み取り。早う内侍の顔が見度いといふ所へ。女房二人先に立て長持を舁入れさせ。宰相殿のお使と聞くより彦七大きに悦び。詞ナヽ満足〳〵。人目を憚り長持とは宰相殿の一作。さりながらいとしい君の箱入氣の詰るもおいとしい。地先づ〳〵御見と蓋を明くれば恥かしげに。薄衣深く首かくし。籬の梅の早咲の フシ雪に埋れし風情なり。彦七猶も心浮かれ其のおほこながたはうまし。そさまを我が手に入れんため此の度の軍も。某が手を砕き御實檢へ楠一家を討留めたり。詞是より義貞が首搔切らんは鷙鳥を刺すよりいと易し。世になき新田に心中を立てんより。地日の出の我等に靡かれよ色こそ黒けれ心は伽羅。先づ我が陣屋へ同道して新枕の酒宴せん。いざさせ給へと肩にかけ二足三足は歩みしが。アヽラ不思議や今迄輕き上﨟の。俄に重き小夜衣我が妻ならぬ念力か。大盤石を肩先に畳みかけたる如くにて。九牘たつとも働かずヤヤヤ痴者ござんなれと。太刀に手をかけ振仰向けばコハ如何に。和田の新發意源秀くわと見開く眼の光。二面の鏡研ぎ立てて フシ額に着けたる如くなり。地大森わな〳〵顫ひ出し。楠々下にそつと下し。逃入らんとする所をこれ〳〵彦さん手が悪い。詞幾瀬の心を盡すとは僞りか何處へ往かんす。いとし可愛と言はんした言の葉に露かいな。ヲヽ辛氣臭じさりさんすはや秋風かと。地見上げ見下す高入道。しやなら〳〵の八文字は フシ仁王を搖がす如くなり。地彦七五體縮めども弱味を見せじと大音上げ。詞ヤアヤア源秀智仁勇を兼ねしといふ。楠さへ討取つたる彦七。言はれぬ腕立せんよりも腹を切れとぞ呼ばはりける。源秀今は堪られず長持の棒おつとりのべ。ヤイ禮儀知らずの國賊。楠一族國のため君のため死を善道に守つて。潔く切腹せしを何ぞや汝が。討留めしなんどとはどの頬げたから吐出した。いざ来い源秀が手並を見せんと討つてかゝ

る。盛長篇も口へらず。侍たる身が坊主を相手にする物かと言ひ捨てて逃けて行く。詞ヤアヤア出家侍犬畜生餘すまじと。ほつ立て〱叩き立て八方微塵に打ち立つれば。四邊に近付く者もなく皆ちり〲に逃けてけり。さもさうず〱是より河内に立越え正成の最期を傳へ。重ねて義兵を擧ぐべしとかひなき首を取集め。怒れる眼にはらはらと涙つらぬく玉鉾の。道は生田の森の露末の雫や末の世に。譽を。永く傳へける。

第二

地曾の謀浅るゝ時は軍利なし。外内を窺ふ時は災制せずとや。坊門宰相清忠が内通ゆゑ湊川の合戰破れ楠正成討死すと雖も。總大將新田左中將義貞。西の宮に御陣を召され士卒をなつけ給ひければ。馳せ集つて味方の勢 フシ 四萬餘騎とぞ聞えける。

地侍所長濱六郎左衛門松明持たせ陣屋を廻り。四人四五人搦めさせ義貞の御前に引つ据ゆ。詞彼奴ばら今夜近邊の田畑を荒し。御馬の飼料に穢せし青麥か。盗み刈取りしを搦め取つて候。見せしめの爲首切つて。獄門にかけ候はんと言上す。義貞聞召し。抑今度の合戰は朝敵を滅し。民安全になすべしとの勅諚なれば。賣買耕作に妨けすべき由。諸軍勢に相觸れ所々に立てたる高札を背きしは。敵方のあぶれ者か但し盗賊か白状させよと御意ある。地雑兵寄付引つ立てサア大將の御前なるわ。眞直に申すべし。僞らば首捻切らんときめ付くる。詞これこれ粗忽なされな我等も此の國の大將。ヤア大將とは。いや〱巾着切の大將。地鉄の靈術と申すもの。詞是は花見の開帳の、又は兩國假芝居人立多き所にて。人の懐中の廻り手が觸ると此方の物。資金入らずの商賣此の軍始まつて。國中のよい衆は家財かけて逃け拵へ。此の所は如何な事我等が仲間びつしやりほん。御法度を背きしはいつそてんほの皮巾着。お根付衆に咎められ フシ 括られましたと申しける。地其の次なる大男。うぬが面付只者ならず。眞直に白状せよ。のたばらばしやつ面をはつてはつてはり廻さん。ヤ、餘りはる〱御意なされな。はりが過ぎて此の態我等は博奕の御取。此の頃續く不仕合鍋釜疊釣お前に鍵味噌桶迄はたけ出しせん方盡きて二三日麥をかるたの方に張り。ひねつても〱一すより上目なく。擧句に今夜三け張に フシ 縛られましたと泣きにける。地三番目は若き出家三衣に似合はぬ盗人。仔細を申せと詰め付くる。されば愚僧は明石潟。蓮尊寺といふ淨土寺の後住に。無海と申す法師なるが學問の憂き晴しに。ふと室の津へ出かけ梅花の移りを嗅ぎそめて。誹香の匂氣語りさ欠伸は百八煩惱菩提いつそおやまに宗旨を變へ好色修行と志し。通ひつめた其の擧句がそれはいかい赤栴檀の。阿彌陀尊迄質屋へ飛ばし手暗目暗に調へ。今少しに手づかへふつとした出來心。後悔先へたた

き金只今斯様の責め念佛に逢ふ事も。出家の身にはあぬまい事あぬまい〳〵。フシアアぬまいだとぞ語りける。地遙かの後に年の頃廿餘りの女房。盗み取つたる青麥を背中に縛り付けられて。恥かしげにぞ泣居たる義貞つく〴〵御覽じ。詞彼が體盗みすべき者とも見えず。仔細ぞあらん眞直に申すべしとありければ。女ちつとも騷がず。ハア、地仔細と申して麥を盗みしより外の仔細もなし。早々法に行ひ給へとフシ恐れもなげにぞ答へける。詞義貞猶も訝しく。仔細を言はずんば往還に曝らし諸人に恥を知らすべきぞと宣へば。地女はわつと計にて暫し涙に暮けるが。アヽ是非もなや盗みするも夫の恥包まんと思ふ爲なるに諸人に面を曝さん事。恥を招くか情なや然らば包まず申すべし。詞妾が夫は足利尊氏の相傳の侍なるが。聊の事あつて主親の勘當を受け。此の國の土民となり忍びて暮す憂き身にも。地此の度の合戰これ屈竟の時節到來。御許しなくとも戰場に馳せ加り。分捕功名譽を顯し。主の不興父御の勘當許されんと。思ひ定めし我が夫の心はやたけに逸れども。鎧一領あるにこそ手綱ゆりかけ乘つたりとも。一町も飛ばぬ野飼の瘦馬。住むもわびしき菰垂の宿より。鬨の聲矢叫びの音微かに聞ゆるその時は。齒ぎしみしての無念がり側で見るさへ胸せかれ。己れやれ二世と交した大事の男此の儘にては果てさせじと。樣々に思案し麥を盗んで兵糧の。便よくば陣所に忍び寢入りたる軍兵ばらが。詞太刀物の具思ふまゝに盗み取り我が夫に打着せ。自らも太刀脇挾み夫婦諸共軍して。名を後代に揚ぐべしと思ひし事も徒に。地かゝる縄目にあふ事も夫の武運の拙さ故。仔細といふも此のあらましとても存らへ果てぬ身ぞ。憂き物思ひさせんよりはや〳〵殺して給はれなう。御慈悲なるわ人々とスヱテ聲も惜まず。歎きしはフシ目もあて。られぬ風情なり。義貞も稍落涙あり。詞ヲヽあつぱれ武士の妻にてありけるよ。命がけの盗みして。夫の武勇を勵ます心感じても猶餘りあり。罪を赦し義貞が。着捨の鎧太刀をも添へて取らすべし。地それ〳〵と宣へば御召替の錦の直垂、黄金作の一腰女が膝にぞ置かれける。サア〳〵歸つて物の具させ明日の合戰には。義貞が陣に向つて打つてかゝれ。敵ながらも見物せんはやとく〳〵と宣ひて。縛の縄を解かせらる女はアツト頭を下げ。情ある御大將有難き御恩の程。何と報じ奉らんさりながら。我が夫は正しく尊氏公の御家人。すは合戰に及ばん時今賜つたる鎧を着し。太刀を持つて義貞公に向はるべきか。詞用捨しては尊氏公への不忠。是非なく一矢仕らば恩を知らぬ弓取と。末代迄の笑ひ草御恩は却つて仇となる。地只御慈悲には自らを盗一ぺんの科に落し。はや〳〵殺して給れと。首差延べて泣き居たる。フシ心の内こそ淸しけれ。義貞なほも感じ給ひヲヽ其の心を察し

てこそ。詞態と最前より夫が假名實名をも尋ねず。互に知られず知らぬ相手。名乘つて勝負を遂ぐる時いづれに用捨のあるべきぞ。さ程の事を汝に敎へらるゝ義貞ならず。地入らざる詮議に時移れりはや／＼歸れと太刀鎧。手づから取つて賜びければ押頂き脇挾み。お情は是迄明日の合戰には。夫婦諸共心を合せ。恐れ乍ら御運によつて御首を。賜る事も候べし御ゆるしあれ御免あれと。御前を罷り立つか弓。引きは返さじ武士の妹背の。義理ぞ三重頼もしき
シ已に其の夜も。地明け行けば勝に乘つた尊氏の軍勢雲霞の如く。湊川より討つてかゝる義貞も西の宮より取つて返し。生田の森を後に當て入亂れ攻戰ふ。太刀の鍔音鬨の聲。如何なる修羅の鬪諍もフシ是には過ぎじと夥し。地小山田太郎高家は心ばかりは春の花　身は埋木の力なき野飼の馬の繩手綱。ちぎれ具足もあらばこそ剰へ女房の。昨夕に出でて歸らぬは心許なき氣遣さ。足に任せて此處彼處在所を尋ね求塚。小松原より振返ればコハ如何に。遙か向ふの山々に中黒の旗二つ引兩。巴の旗も輪違に東へ靡き。西へ靡き磯山風に翩翻して。馬煙矢叫び天に響き地に充ちて。新田足利の國爭ひフシ今を限りと見えたりける。地アヽ羨しき殿原が合戰や。せめて古具足の一領もあれかし。取つて投げかけ何百萬騎が中なりとも。只一揉に斷破り兩陣の目を驚かせんものを。詞何をいうても浪人の紙子頭巾に鍬一挺。思ふにかひのあらばこそ貧は諸道の妨と世の諺も我が身の上。地ニヽ無念口惜しやと。拳を握り牙を噛みスエテ男泣にぞ泣き居たる。地かゝる所へ女房は危き命を免れ。降つて湧いたる太刀鎧に見せて悦ばせんと。足早に歸りしがヤアこちの人此處にか。詞このなりは何ぞいの。嘸待兼ねてであらうと思ひ。いきせきして戾つた地これ私ぢや女房ぢやが。なぜに物言はんせぬ氣合が惡いか高家殿と抱き起せば涙を抑へ。詞ヲヽ氣合もどうでようはない。ヤレ女房あの向ふの山々に。入違ふ旗を見よ今ぞ合戰眞最中。地あの軍中には主君尊氏公父前司殿もおはすらん。正しき主君老いたる父が天下別目の晴軍と。命を惜まず戰ふを子の身として安閑と。見物して日を送る是が無念にあるまいかと。言はせも果てずコレ／＼／＼詞其の泣き言はもう入らぬ。これ見さんせと太刀鎧投出せば。高家横手を丁ど打ち。鎧引寄せつく／″＼見て。地矢留り金物押付板。發傳高紐上卷附。太刀は鳥首兵庫鎖ムヽ是は大將の拂ひ物。詞大抵では賣るまじきが但し損料でばし借つたかと言へば。女房くつ／＼と噴出しアアつがもない。日がな一日玉綿繰つて錢二十取るや取らぬもの。八百年の手間賃でもなか／＼買はるゝものかいの。馬の草も無き故に昨夕義貞の領内の。青麥盗み刈りたるを番の者に摑められ。殺さるゝ筈なるを流石に義貞は哀れを知つた大將。夫の身の

上簡桶け、命を助け其の上に此の太刀具足。地サア早う出立つて手柄してござんせと。綿嚙取つて着せんとす高家突退け。詞ムヽ誠に義貞は五常を守る名將物のあはれを知る事。敵味方の隔てなき人と聞く。義貞に貰うた鎧を着し。直に義貞に打つてかからん事心よからぬ軍なれば。思ひ切つたる功名もなるべからず。地エヽよしない情を受けたりと。悔み顔にぞ見えにけるエヽ此方とも覺えぬ。義貞程の大將がさもしい運襯受けうとて。何の情をかけられうそれ故此方の名も問はず。用捨なく我を討てと鎧に念を入れ給ふ。義貞の目の前此の具足着し働き。あはよくば義貞をしてやらうと思ふ氣は無いか。エヽ後れた人やと急きければムヽ分別した合點あり。詞一度着して見せすんば。其方を騙などとさみせられんは男の恥。地サア小山田太郎高家が出陣と鎧取つて投げかけ上帯高紐小踊りして。引締め／＼太刀脇挾み立上れば。ヲヽあつぱれ武者振よい男私も傍に草臥うて、追付け其處へと立歸れば。詞これ討死は軍の習ひ。生きて歸れば仕合先づ今生の暇乞。地必ず泣くなコレ武士の妻になるからは。そこは合點死出の山路の一二の駈け。後れはせまいと別れしは。はや修羅道の先陣と後にぞ。思ひ（三重）知られける（フシ）傾く日影。

地西の宮大手の合戰入亂れ。人馬四方に馳せ違ひ喚き叫ぶ其の聲は。山を崩すが如くにて官軍既に戰敗れ。堪へつべうは見えざりけり大將義貞唯一騎。返し合せ／＼十六度迄駈け散らし。御身をきつと見給へば。數箇所の矢創馬鞍に立ちし矢は。枯野の薄に異らず。エヽ軍の勝負今日に限るべからずと。追來る敵を切拂ひ／＼。求塚の小松原（フシ）心靜かに打ち給ふ。高家それぞと見るより大音上げ。詞大將軍と見奉る正なう後を見せ給ふ。引返して勝負あれと追つかくれば振返り。地日本一の義貞に聲をかくるは小ざかしと。鐙にかけてはつたと蹴散らし。漂ふ所をひらりと飛下り。片手を伸べて一突つけば木枯に。案山子の倒るゝ如くにて横投にどうと伏す。詞義貞すかさず弦走にのつかゝり。首を掻かんとし給ひしが鎧出立つく／＼と御覽じ。ムヽウ天晴己れは痴者かな。義貞に易々と組敷かれん力とは覺えず。何とて我を組敷かぬ定めて仔細あるべき。さり乍ら汝が主の尊氏を組伏せたらんは知らず。汝如きの侍を五十百首取つても。さのみ義貞が手柄本望とも思はず。地サア仔細を語つて名告れ／＼と宣へば。コハ御諚とも覺えず。如何に大將なればとて。態と敵に組敷かるゝ者や候べき。詞足利尊氏の家の子小山田前司高春が一子。小山田太郎高家地不足の敵と思召さば。只首討つて棄てさせ給へとスヱテ擽手な緩めて働かず。詞いや／＼此の物の具は夜前女に與へし。義貞が着捨の鎧摂は見いたよな。地恩を報ぜん志しをらし優しさよ。さり乍ら天下に比ぶる義貞が命。詞僅の鎧

一領にて助からんとて取らせはせぬぞ。主親の勘當につき望ある者と聞き。目を驚かす功名して本望を達せよ。地只今にても詞[?]反し義貞と今一勝負。せばせよかしと宣へども小山田は涙にくれ。詞重ね〲の御情冥加の程も恐しく。申し上ぐる詞もなし。地言ふにかひなき此の高家がかせ首、義貞公の御手にかゝり申す事。如何なる先陣先駈にも勝つて身に過ぎたる譽。勘氣の父が聞くならば。さぞ悦び フシ申すべし。此の上の御芳志に。はや首討つて棄てさせ給へと。申し切つたる雨眼に フシ涙を流すぞ道理なる。詞エヽ義理ばつたる男子やと。地取つて引立て塵打拂ひ。義貞に助けられしと人に語るな我も人には語らぬぞと。手負ひし馬を引立てて靜かに打つて過ぎ給ふ。武將の氣質讃つて フシ古今に譽るゝ理なり、小山田は茫然と。義貞の仁心心に浸みて立つたる所に。詞大森彦七盛長手の者五十騎ばかり、どつと馳寄せ大音あげ。赤地の錦の直垂中黑の鎧は。敵の大將義貞遠目にも見違へず。地射取れや〳〵と矢先を揃へ横ぎる雨と射かくる矢先。さしつたりと小太刀を拔いてはらり〳〵と 三重 切落す フシ されども鎧の。地隙間々々矢ずくめにすくめられ。今は是迄我義貞の命に代り。其の隙に易々落し情の恩を報ぜんと。手綱[?]に駈上り。詞遠からん者は音にも聞け近き者は目にも見よ。清和天皇の後胤新田左中將義貞。十善天子に頼まれ奉らせ屍を戰場の土に埋む。地功ある大將の最期の體よつく見置いて手本にせよと。高紐切つて解く所を大森主從下り重り。斬伏せ〳〵 フシ抑へて首をぞかいたりける。地直垂切つて押包み官軍の總大將。詞新田義貞を伊豫の國の住人。大森彦七盛長討取つたりと名乘りしは。地嚴しうこそ聞えけれ此の譽に驚き。馳せ散つたる味方の勢大將を討たせては。一人も生きて詮なしと八方より引返す。詞義貞を取つて返しヤア〳〵國士討する狼狽武者。誠の義貞これにありと斬つてかゝり給へば。地イヤ義貞が二人あるものか。新鍍古銀[?]同じ通用これで堪忍仕ると。地一散に逃げて行く味方の大勢追つかくるを。大勢抑へて暫く〳〵後は聞ゆる傳人[?]。愚痴愚癡の狼狽者かゝる者の敵陣に。あるは味方の利運ぞと嘲笑を示す謀。智謀はるながら天に入り波をも潜る尼が崎。山崎過ぎて名將の譽は。雲井の桂川打越え。かけ越え。濱り越えて世に立越えて並なき。我が立つ杣や都の富士西坂。本にぞ入り給ふ。

第三

地周の武王は木主を作つて殷の世を傾け。漢の高祖は義帝を尊んで秦國を滅す。されば尊氏將軍天理を恐れ。後伏見の院宣を申し賜り朝敵の名を遁れ。忠戰の鋒先鋭くして。兵庫湊川の合戰に打勝ち楠正成に腹切らせ。新田義貞を驅散らし馬鞍休め物の具も。脱ぎて耕とく花の都。東寺を假の館城 フシ大將の。御所とぞ定めらる。地猶も

兵糧洛中を犯す事もやと。口々の警固怠らす生き殘る義貞一家。重ねて討手を向ふべし先づ〳〵軍の疲をはらし。樂みを諸人と共に樂む酒宴の興。詞此の度の合戦に。分捕功名の帳面を聞かせ。地コハリそれ〳〵に御褒美ある。仁木細川吉良石堂。南部桃井高上杉武田赤松畠山。澁川岩松一色荒川地小笠原此の人々をコハリ始として。外様の大名小名御家人は言ふに及ばず。雜兵端武者に至る迄太刀刀馬鎧。金銀時服の御褒美昨日今日の足輕も。知行の感狀賜つて首一つが一筆に。千石になるもあり數にもあらぬ首取つて。御褒美を貪れども僅か銀子三枚甲。拾うて被せても地明けき。名大將の賞罰とオクリ仰がぬ〳〵人こそフシなかりけれ。地爰に大森彦七盛長腹卷に直垂打ちかけ。揉烏帽子引立て血まぶれの甲箱御前に差出し。詞敵の大將楠討死の後。總大將新田義貞西の宮の軍破れ。味方の多勢に取卷かれ求塚の上に駈上り。腹切らんと致せしを。某矢ずくめにして討伏せ首取つて候。殘る軍兵落行く所を播磨路迄追ひかけ申せし故。地御帳にも付け申さず只今實檢に供へ候と。蓋を取れば錦の直垂袖をちぎつて包みしは。大將軍の首のしるし伺候の諸武士横手を打ち。さては義貞を討つたるか今度の譽は盛長一人。弓矢の冥加に叶ひし侍。お手柄〳〵フシあやかり者とぞ羨まる。地尊氏暫く思案し給ひ。詞錦の直垂を着し新田左中將義貞と名乘りたるを。それぞと知つて討つつらめそれに虚言もあるまじ。さり乍ら此の尊氏も義貞も。同じ清和の後胤八幡殿の嫡孫。地敵味方とはなつたれども共に一家の源氏の棟梁。殊に天皇に頼まれ參らせ官軍の總大將。相隨ふ門葉に大館大井田里見鳥山。大島堀口脇屋の歴歴數を知らず。詞譜代重恩の武士も多かるべし。義貞程の大將が討死せんに。我先にとかけ合せ冥途の供とて一人も討死せぬさへ不思議なるに。殘る軍兵播磨路迄遁けたるは心得がたし。一歳楠が贋首を以て欺き。義貞の智略に乘せられ京童の笑草。地にた〳〵しき首どもをまさしげにもかけたりと。落書を立てられ六波羅の愚將どもが。恥かきしと聞及ぶ。彼等は天性武略智謀備へたる英雄。引くも駈くるも理に當り生きるにも死ぬるにも。勝負の損得を守る名將。如何なる謀をや構へつらん。卒爾にもてはやし義貞にてなくんば味方の恥辱は言ふに及ばず。汝不覺人の名を取るべし。方々如何思はるゝフシ評定。あれとぞ仰せける。詞大森つつと出でいや御評定迄もなく。生捕の者に見せ御尋ね候はば。實否早速知れ申すにて候とこざかしげに言上す。尊氏大きに笑はせ給ひ。イヤ生捕に問ふなどとは名も無き者の首の事。命を捨てて働き入り生捕らるゝ程の者なれば。よつく大將義貞に忠信深き侍よ問はれて誠を言ふべきか。若し御邊運盡き敵に生捕られ。味方の謀を問ふならば有の儘に言はんず

な。覺束なしと宣へば。盛長は詞なく赤面したるばかりなり。大將重ねて我義貞と一家なれども使者の通路ばかりにて。総に直に對面せず見知りたる人あらば。申されよと宣へば諸大名立寄り〳〵。關東以來此の度の合戰にも。遠目に見たるばかりにて近付きし事なければ。おほろげの事は申されずと更に實否は極らず。小山田前司高春末座より伸び出でて。見れば面ざし顏のかゝり若年の昔勘當せし。我が子の小山田太郎高家に。似たりと見たる親子の縁六十の老眼にも。紛ふ方なく胸に浸みはつと驚きゐたりしが。さあらぬ體にて心を鎭め。新田殿の御貌は先年鷹狩の折柄。一兩度も見參らせ大方に覺え候と。近々と立寄り右へ廻り左へ向き。ためつすがめつ見れば見る程。疑もなき我が子の高家南無三寶。勘當して十八年此の世に存らへ在るならば。此の度の合戰に大將の御目に。及ぶ程の功名せよかし。それを品に勘當赦し御前もとゝのへ老が世の。子孫の榮えを見んものと。頼し心の綱も切れそゞろ。涙の零るゝを。ハアヽ老眼の霞み定かならずと目を押拭ふ其の中にも當家譜代の身をもつて敵の大將義貞と。名乘つて死せしは心得ず。申す詞に差當り前後にくれたるばかりなり。大森彥七つつと出でこれ〳〵前司殿。生貌と死貌は相好の變るもの。其の母前して大概似たらば似た通り申し上げられよ。凡そ道具の目利でも。只一言で千貫の道具が僞物になる事もあり。粗忽言うて盛長が。功名を消すまいぞと色を變へてぞ申しける。前司重ねて御前に向ひ。面體よく似たるとは存すれども。某が心にて決定しても申されず。所詮一條大路の獄門にかけ。諸人の噂をうかゞはゞ是非明白に顯れ。義貞に極らば味方の勝利盛長が功名。若しさもなき首にて候はば六十に餘る前司めが。粗忽を申して面目なしと獄門の木の下にて。腹かき切つて伏すならば恥は某に止つて。盛長が不覺もなく味方の恥辱も候まじ。此の實否を糺す事某に任せ下さるべしと。望み申せば尊氏卿然らば兎も角も計らふべし。さり乍ら都方は義貞贔負の萬民。詞も直には受け難からんと宣へば。さん候壽永の昔木曾殿北國合戰に。手塚の太郎光盛齋藤別當實盛が首を取りしかども。名乘らねば名も知らず見知る人もなかりしを。樋口の二郎が朋友の好しみに語りし詞の色。染めたる墨の鬢髭を洗ひてそれとは存じて候。友達の好しみにさへ心を明かすは人情の習ひ。殊に義貞は情ある大將好しみの者も多かるべし。北の方は勾當の內侍と申す內裏上臈斯くと傳へ聞き給はば忍ぶに餘る涙の袖。諸人に紛れ給ひても思ひは外の色に出で。其の隱れあるべきか。實盛が髭を洗ひしはそれは篠原池の水。是は情の底意なく誠を顯す涙の水に。洗はせて御覽候へと。申しもあへず首を持ち御前を立

ちけり　三重

内侍狂女の段（十一行本）

一セイ詞へうたてやなこれ御覽ぜよ、や迄の。るがす折つてかたげし此の枝。風の誘へばこそ一葉も散るなれ。たまたま心すぐなるを、我こそ我を地くる。フシ狂はすれ。詞狂じたる。秋の葉の、荻の音づれ今か、今かと田面の雁よ。歌へ君が玉章翼にかけて。我が手に渡せ渡せや渡せ。フシ八橋の。地澤邊に匂ふ杜若花菖蒲。似たりや新田と聞けば懷しやなう。詞ヤアヤア童どもは何故に立騷ぐぞ。なに新田左中將義貞といふ大將軍に打負け。敵に首を取られて獄門にかかり給ふとや。あら識しからずや。地其の中將といふ人は。元より弓馬は家の藝。雲の上人に変りては。歌連歌の道にも達し。鞠は曲鞠の品々迄暗からず。又酒盛などの折からは。詞いで人々に亂舞舞うて見せんとて。水干の直垂取出し。衣紋乾しう着ないて。地緣塗取つて打被ぎ。手拍子人に囃させ。扇おつ取り鳴るは瀧の水。絕えず滴たり絕えず滴たの。地落ち來る瀧の。青羽の嵐にキヤ、地上のへ櫻はちりぢり、アヽ地あさましや散るは櫻か我にお れよ。あの獄門こそ涙の種。廻に嚴しき棺長刀劍の林の雨しき中の。梢に掛けし花の顏ばせ。日も寒がり色變るとも契りは變らじ我こそ妻の勾當の内侍。詞なになう内侍と召さるゝかや。いで參らう。地思ひ出せばはや昔。人目忍ぶの袖打ちかざし逢ひ初めし夜の睦言も、ハナ語り盡さぬ鐘の聲。色地鐵扇の山に響きて森の小鳥八聲の鳥。曉の明星が、西へちろり東へちろり、ちろりちろりとする時は。扇押取り刀指いて從なうよ。戻らうよと言うては妻戸に佇みし。ゑにしなきりゝんな。君が心に秋風吹かば。往なうとも。戻らうとも何とも其方の御計ひと。地いうては小腰に。抱付きて。地結ぶの神の仲立は比翼連理も磯枕。朽ちせぬ仲を葛の葉の。恨は風の科もないもの、誰が手にかけて宇津の山。フシ蔦の葉島亂れそめ。狂ひ出でたる。歌我が身は何と樹の葉の。ハルフシ露よりも消え、お情や、背は枕重ね夜中は歎き。詞起きて空見れば、稚児小やうな傾城が。紫、五手に据ゑて一つ參れ我が殿。二つ參れ此の殿三つ目の肴には。白瓜唐瓜から梨子から梅 地西王母が、フシ園の桃。地百年千年の御命惜なくも失ひし。詞それでも修羅の敵は誰そ。夫義貞と申すとや。夫の敵いざ討たん。地持つたる柳を劍と定め薩摩の僧は焦るゝ紅葉。地言ふにかひなき狂女なれども夫の弓矢の烈しき嵐になれて。揉まれて、四方の櫻の四方へぱつと。寄り來る警固、指手も引く手も武士のハヅミ物狂ひとてフシ咎むるか。地よし咎めても威しても歎きても口說きても。獨りは歸らじ我が夫たべ。夫たべなう人々と。かつぱと伏して泣き沈むフシ涙の。袖も黑髮も亂れ。心ぞあはれなる。地警固の下部棒振廻し騷がしき氣違ひめ。

詞眞鳥立退けと追拂ふ前司押へて。さなせそ〳〵いふ事ありと立寄りて、扨は義貞の北の方にてましますな。如何に狂氣し給ふとも年月馴染の夫婦の仲。顏容も忘れ給ひしか心を鎭めてよく見給へ。義貞にては候はじ歎を止め歸り給へ。地正體なやと諫むれば。うたての人の言ひごとや。伊勢の濱荻難波の蘆。所に變るは草の名よ。異國は知らず本朝に名も一人身も一人。又と二人は無き人なるをさもなき首を何故に。委くあん〳〵と高札に。詞新田義貞と記したる其方こそ狂人よ。地我は元より氣違ひのこほさぬ水のあはれを知らば。さのみ人目に嘩さずともあの首を妾にたべ。煙となして亡き跡の。菩提を弔ひたう候ふとスヱテ袖に縋りて歎かるゝ。ヲチヽ御歎きといひ御不審はさる事なれども。此の首は實長が討ちは討つて候へども義貞とは見え難く。外に似たる者のある故暫くして實否を糺さんため。地斯くの通りといふ所に東の辻に人立して。是も女の物狂ひ眉かき暗り黑髮も。おどろにばつと振りかたけたる笹の葉の。亂れ心やフシ狂ふらん。地あら憚りや恐れを知らぬ京童。詞忝くも我か殿御は。源氏の大將左中將義貞。參内の道そこのけとこそ。歌なつかしや我が夫の。雲井を出でしは卯月の空。秋より先にフシ必ずと夕の。歎は重れど。地聚め夜積りの恨めしや。[illegible]門にたが更級の月日[illegible]。後世弔ひ自らも死出三途を伴はん。御首たゞなう冥闇の人。お情あれ人々と獄門の木に抱き付き フシ人目も。分かず泣き給ふ。地以前の狂女走り寄りこれの。詞義貞殿の妻といふ御身はそも何人ぞ。地ヲヽ聞きも及び給ふらん勾當の内侍とは自らよ。詞イヤ眞の勾當の内侍とは妾が事。御身は定めて[illegible]者か一夜妻。親の情を忘れ[illegible]暮ふは優しけれども。詞菩提を弔ふは本妻の役お首は我に下されと。押退くれば押退けて。詞さいふ御身が一夜妻か遊女か。詞あなき事な申されそ勾當の内侍とは。大内の女官御代にたつた一人の女。詞義貞殿の本妻我ならで誰あらん。物に狂ふも夫ゆゑ本性は違はぬぞ。詞すゝ眞の内侍ならば。義貞殿の參内の出立有樣覺えしか。忘れしか。地よもや知らじと宣へばなう忘れんとすれど忘られぬ。其の出立は[illegible]。前後の[illegible]の敷。金銀にて中黑のしるしを打つて金札。大立擧の鎧當黃金作の太刀刀。赤地の錦の御着長妾が取つて着せければ。搖つて上帶ちやうど締めにつこと笑うて。詞天晴我ながらも弓取かな。今日の軍に手柄を[illegible]て名を末代に止めんと。地馬引寄せてゆらりと乘つたるはなう。大將軍にまがひなし近づく敵の關の聲。味方に轟く攻鼓[illegible]打つ波。寄せ來る勢を[illegible]切り[illegible]大敵を見て勇む事。荒鷹が雉を見て鳥屋を。潜るに異ならず。雨や霰と飛來る矢を。上る矢には潜い潜り下る矢には飛上り。向うて來る矢は小太刀を以て。切つては落し受けて

は拂ひ。はらり／＼と切拂ひ須彌の四方の四天王。魔醯修羅が放つ矢を一度に切つて大海に。拂ひ落すが如くにて フシ面を向くる敵もなし。詞かゝるゆゝしき武士の運盡き弓も矢も折れて。修羅の奴と成り給ふ後世弔ふ者は我ばかりと。獄門に取付けばイヤ／＼／＼。詞それは軍の出立。大内の事を知らぬ身が。地内侍とは僞りと引退けてはわつと泣き。押退けてはわつと泣き籬の菊の狂ひ咲き。花を爭ふ蝶鳥の フシ露にしをるゝごとくなり。地前司聲をかけエヽはしたなし先づ暫く／＼と。二人を左右へ押分け。詞首は一つ内侍は二人。是非一人は僞りなり。これ後に來た上﨟義貞と札は打つたれども疑はしき事あり。心を鎭めて能く御覽ぜと。地獄門を取下し見するもあへなき生首を。なまめく膝にかき載せて一目見てさへ馴れし夜の。面影だにもまがはぬもの能く／＼見れば園原や。ありとも知らぬ死顔にぞつと怖さのァ、恐しと。拂ひのけて身を顯はし。いや／＼是は人たがひ。目許口元義貞殿には似ても付かず。地扨て我が夫宣ひしは。軍は時の運いつ討死も測られず。敵に向ふ度毎に帝より賜りし。蘭奢待の名香内甲に炷きしめん。鬢の髮に名香薫る首取りたりといふ人あらば。詞義貞が討死と思へとの御詞。地軍の騷ぎにあさましい下郎の首と取違へ、誠のお首は勿體なや叢に埋れしか。尋ねてたべ人々と歎き給へば以前の狂女進出し 地エヽ口惜しや如何に見知りなきとても。下郎の首とは僞りぞや我が夫は身貧にて。名香は炷かねども弓取の心の花は。梅櫻よりかんばしく仁義に命を捨てしもの。既に恥を與へたるか情なやいとほしやと。首抱き寄せて伏轉び フシ聲も。惜まず泣きゐたり。地前司飛びかゝり取つて突退け。首の髻を摑んで涙をはら／＼と流し。詞六十の老眼に見しも違はず。我が子の小山田太郎高家にてありけるよ。お事は連添ふ女房な。我こそ彼が父。足利尊氏卿には譜代相傳の御家人。小山田前司高春生年六十七歲。地命長ければ恥多しとは我が身の上に知られたり。十八年以前彼奴は其の時十二歲。猪狩の御供せしに。年ふる猪の驀進すを誰かある。詞あの猪射止めよとの御諚。太郎こざかしげに小弓に矢をはけ向ひしを。尊氏はつたと睨ませ給ひ。小腕にて仕損ぜん罷りしされと宣ひし。御詞も終らぬに弓と矢大地へ投付けしを。いよ／＼立腹まし／＼誰に當つて拋ち。年にも足らで慮外者親前司はなきか。あれ引立てよと御怒り。それより君の御不興なれば親も則ち勘當して。地十八年の春秋は風の便りも フシ絶え果てし。首も性あらばよつく聞け。世間の親の勘當は遊女博奕酒の沙汰。それさへ親は子を思ふ子心にも弓矢の道。主君に向つて意地を立てたる御憎しみ親の身では憎い半分。嬉しいが父半分の勘當ぞや、詞今度の軍に義貞方の名ある兵、首取つて來れかし君の御前は言

ふに及ばず。天下の武士に褒めさせ。我も世上の親たる者に羨まれん。今や來る／＼と毎日の高名帳。夜はくつて明日を待つ親に孝なく義も知らず。所領恩賞に恥をかへ敵に手を下げ膝をつき。義貞に降參し知行に命を捨てしよな。とても捨つる命をなぜ尊氏に奉り。名の爲には捨てざりしぞ親は年寄る子は犬死。小山田の苗字の譽譏が末の世に殘すべき。エヽあさましやと齒がみをなし。持つたる首をかつぱと投げ スヱテどうど坐して。泣きけるが。思へば汝は義貞の郎等。我は尊氏の御家人親子ながらも敵味方。首なりとも一太刀と振上げて打ちかくる。女房縋つてなう悲しや。內侍樣も止めてたび給へ。親の勘當受けし身は未來も闇に迷ふと聞く。勘當御免なき上に親の手づから子の首に。刄を當て給はゞ迷ひの上の迷ひなり最期の樣を聞分けて。許しのお言葉かけ給は。名僧知識の引導もそれにはなどか勝らんと。口說き立て／＼ フシ歎けば。さすが親心。言ふ事あらばはや語れと フシ咽び。入りたるばかりなり。女房猶も涙にくれいたはしや我が夫の。詞今度の軍は高家が主親の勘氣を赦され。昔に返るは此の時と軍兵に交わり。幾度か出で給へども浪人の貧しき身。地鎧一領あらばこそ素裸武者の鬪刀。拾ひ弓に拾ひ矢島に使ふ野飼の馬。打てどもあふれども飼はねば瘦せて脚立たず。いかなる猛き武士の三條小鍛冶が劍にもせよ なう貧苦の敵は フシ防がれず。憤を切らんとし給ふを妾樣々力を付け。兵糧秣の志盜み刈りし青草の。畠は敵の領內高手小手に縛られ。詞大將の前に引出し罪に沈む筈なりしに。敵ながら義貞は情ある大將。身の上を聞屆け命助かる其の上に。召替の錦の鎧太刀刀迄賜り。此の恩ありとて必ず我を庇ふな。それ故夫が名は問はぬと。地仁義深き御詞語り聞かせし我が夫の。心魂に浸みたるか御命に代り。我源の義貞と名乘つて敢なく討れ給ふ。縱へ千金萬金を述べたる鎧太刀にもせよ。高家程の侍が賤に臨んで死すればとて。鎧一領太刀一振に目がくれてそもや命が捨てられうか。是ぞ誠の情の死とは夫の事。恩を忘れ義貞を討ち奉らせ。尊氏公より大國を賜つて榮華を極むる果報より。地義理と情に命を捨て獄門にかゝるこそ武士たる者の果報なれおいとしや御最期迄。心にかゝるは父御の不興。御免あるとの一言の息をお顏に吹きかけて。親子の緣を二世迄も。結んで進ぜてたび給へと。縋り摑き寄せ抱き寄せ フシ消え入り／＼泣きければ。內侍も扨は我が夫の命の親ぞと諸共に。スヱテ屍を捕へて打ち泣き。地警固の匹夫下部迄 フシ袖を絞らぬ者はなし。地父の嗣司も慈歎の涙にかきくれゐたりしが。詞エヽあつぱれ我が子や出來したり。たゞ殘り多きは十二歲より一日安堵の思ひもなく。貧苦で死なせし可愛さよ。地情にもせよ義理にもせよ。義貞を助けし子の親は。主君尊氏へは不忠の者。

と言ひければ。ヲ、我等は小山田太郎高家と申す者の妻。新田殿の情を受け夫高家は討死し。自らは尼となり勾當の内侍樣と一つ住居の其の中にも。天皇樣を奪ひ新田殿の御本意をと。思へども女業せめての便に御力を。付け參らするばかりなりと語れば長年大きに悦び。是ぞ御運の開くる時折しも番の者は喰ひ醉ふ。此の塀一重踏破り易々奪ひ奉り。吉野の奥に皇居をする。根來法師熊野武者を語らひ。吉野十八郷を都と定むるものならば。北國西國靡く事案の内ぞと餡餅の。荷ひ棒にて塀一間どう〳〵どうと突き崩し。つつと入れば犬の聲々一犬吠ゆれば萬犬に。番の者ども目を覺まし起上れどもひよろ〳〵〳〵。よろり〳〵とよろめきながら南無三塀を破つた。又六めか丸太めか。一討にしてくれんと。拔連れ〳〵入りけるは フシ危かりける次第なり。地既に夜半の番替り引連れて客相檢見の爲に來りしが。詞ヤアウ番の者は一人もなく。塀押破りしは心得ず。地敵の忍びの入りけるぞ込入つて討取れと。喚いて入らんとする所に又太郎大肌脱ぎ。詞棒提げつつと出で。我等は酒賣の又六と申す者。誰とも知らず十人ばかり我等が酒餡飲み喰ひ。番衆にも振舞うてまんまと拋込み。錢も拂はず塀を破つて入り候。我等が爲には喰逃の敵。奥に氣遣なさるゝな是へ追出し申すべし。地酒臭い者を合圖に討取り給へと言ひければ。ヲ、出かした〳〵急いで是へ追出せ。承るとつつと入り無二無三に追立つる。三人の醉ざめども逃出づればそりや討取れと取廻す。詞イヤ我等は御内の傳五平。地傳五平でも酒臭いはしれ者なりとはたと斬る。我等も御家來源藏。やれ〳〵彼奴も酒臭い。詞拙者は軍太こいつは取分け酒臭い。地一人も通すなとフシ片端切つて捨てにけり。地又太郎飛んで出でお手柄お手柄裏門は大方仕舞。表門の酒臭さ鼻がもげていにまする。皆々表へお廻りヲヽ心得た。詞分身を利かせよと フシ表門へと駈出す。地其の隙に高家が女房天皇の御手を引き。走り出づれば數多の犬跡先を取巻いて。吠えかゝれば又太郎打漏されの今井の四郎。手なみを見よと餡も餅も投出し。虎の尾を踏み毒蛇の口。犬の背中を躍り越え大和路さしてぞ 三重

天皇徒歩路の御幸

タヽキ世は末世に及ぶとても。日月は地に落ちぬ。ならひとこそ思ひしに。我等如何なれば。王位を出でてかくばかり。人臣にだに交らで。雲井の空をも迷ひ來て。地行方いづくとフシ白露は。草葉の上に置きもせで。袂に寒き秋の霜菊月も末つかた。故宮を忍び出で給ひ。あやしの賤の神詣に。フシオクリやつさせ〳〵馴れぬ。菅の笠。ハルフシ雨を含める。孤村の樹。地夕べを送る遠寺の鐘。哀れを催す時しもあれ御いたはしや先帝は。スヱテ梁園の昔の御遊。華軒香車の外を出でさせ給はぬも。いつしか馴れぬ旅脛

巾オクリ千歳の。坂と詠せしも。フシ耳には
觸れて手にふれぬ。憂きふし繁き竹の杖。
長年一人御供にてオクリ知らぬ。野山を此處
彼處。迯らせ給ふ御有様フシ餘所の。見る
めも恐れあり。地こゝは何處と里人に。い
ざ鳥羽暇秋の山。岩に碎くる瀧川のどう。
どう／＼どつと寄せ來る追手の聲かそれ
か。あらぬかいやフシ待てしばし。あれは
野もせに誰招く案山子の陰に落人の。鳥よ
り先に驚きてフシ共にむら立つ鷺の森。急
ぐとすれど。玉鉾の。習はぬ道の嶮しきに
御足も缺け損じ。御草鞋に流るゝ血は草葉
に染めていさら川。フシ紅葉しがらむ如く
なり。地あはれげに昨日迄。玉樓金殿の床
に坐し。長地月に戯れ色香に染み花やなか
りし玉體の今日は生駒の苦莚。片敷く袖に
御涙。スエテせきあへさせ給はねば。さしも
に猛き長年も。涙は胸に關戸の院。こゝは
名高き山崎の。龍に亂す荻薄オクリ踏み
分け。泣く／＼狐川東の空を眺むれば。あれ

／＼宇治の川霧たえ／＼の。瀬々の淺瀬に
童の小手さしつるゝ聲々に引。歌故郷戀し
や。わがふる。さとの。柴の庵も。なつ
か。しや。いほりもしばの。柴の庵もな
つ。かしや。戀しゆかしとフシ聞くからに。
げに九重も遙々と跡に名殘の男山。榮ゆく
事もありこしに今の憂き目を。三津の浦。
西に霞みて∧淡路潟フシ須磨の關守。呼
びおこし通ふ千鳥のちり／＼／＼と。寄せ
來る／＼。波も寄せ來る面舵取舵拍子揃へ
てさ。舟歌面白や／＼さつさ。堺の浦遠く。
帆を十分に地あけた處が。面白いよの。
何に譬へん五手船。フシ汐風寒く吹き通ふ。
笠も袂もひら／＼／＼。ひらの若江も過ぎ
行けば。日影もさがる藤井寺。はや告げ渡
る鐘の聲金。剛山もフシはるかなる。地ワキ
あれ御覧候へ霞みて見ゆる高嶺こそ。志貴
の毘沙門にて渡らせ給へと奏聞すれば。シ
テ主上御手を合せ禮拜あり。佛法擁護の本
地の月垂迹和光の影清く。再び朝廷明かに

四海を照させ給へやと。丹誠無二の御祈り
神慮も暗に量られて。フシたゞ頼め。年ふ
る松の。ことぶきを御代にゆづりて高安
や。それにはあらで是も亦沖津白波立田越
夜半にや君が一時雨。雲行く空を木陰かと
濡れて。佇み三重∧給ひけり
フシ取傳へたる。地梓弓光陰矢の如く楠正成
が百箇日。立つや其の名も忘れ形見の一子
帶刀十一歳。父が最期の無念さの胸に止り
骨に徹み。幼心に只一騎弔ひ軍思ひ立ち。
鎧の袖に小櫻の花を手向の法の駒。曉深
き星の影共に耀く銀覆輪。コハリ鞍の山形
山道の小石雜りの小笹原。そよ吹く風にく
りかけて取つたる手綱濃紫。藤井寺を弓手
になし馬手へさら／＼しと／＼／＼。かつ
し／＼と歩ませて神の昔も念力の。示現は
今も。地あら人神フシ天神の。森にぞ着き
にける。地あら不思議や後の方に女の聲。
詞までよ／＼と呼びかけたり。地何者なら
んと振返れば衣引きからげ腰刀。長刀かい

込み追ひかくるは母上なり南無三寶。我を止めんためなりと一鞭くれて駈けさする。息をばかりに走り付き鞍の鞖をむずと取る。とめても引いても駈馬の二三十間引摺られ。やれ物が憑いたか帶刀母にも知らせず何處へ行くぞ正行。母は息切れ死ぬるをも構はぬか、馬を留めぬか倅めと。叫び給へば正行馬より飛んで下り。土に手をつき頭を下げ。父の忌の明き候へば弔ひ軍仕り。尊氏と打果さんと思ひ立ち候。御暇申さぬ段眞平御免下されとスヱテ差俯向いてぞ居たりける。母はとかうも涙にくれ。エヽいかに幼ければとて。十に餘れば大人役などさほどにも辨へなき。栴檀は二葉より香しといふ譬もあり。正成の子ならずや日本半分切取つたる尊氏に。お事一騎斷向ひ一太刀合する迄もなく。多勢が中に取卷かれ當座に討たればまだしもよ。生捕となつて面縛せられ恥辱の上に命を失ひ。いつの世にか天皇様を御世に立て。父亡魂の本意をば遂ぐるぞや。親の敵討たんとて。輕々しく身を捨つるは端侍の上の事。父御前の櫻井より汝を歸し給ひし時。生先迄の教訓を母にも語り聞せしが。百日經つや經たずにて其の諫を忘れしか。一族語らひ軍兵揃へ。菊水の旗眞先に押立て。古今無雙の名將と呼ばれたる足利尊氏に。一あぐみあぐませんとは思はずして。一騎武者の働に如何なる手柄をしたればとて。其の名を揚ぐるばかりにて。天下の爲には益もなし。幼くとも楠正成が子六十餘州を重荷に持ち。大事の身とは思はぬか恨めしや情なや。サア歸れはや歸れ。重ねてからは口では言はぬ抓め〳〵するぞ覺えてゐや。是についても正成殿。今三年世に存らへお事が十四十五にならば。かく憂き世話もせまいもの果敢なの浮世やあさましやと。諫め口說きて泣き給へばさしもに勇む正行も。母の歎きにじき父の顏を今見る心地して。母の膝に抱き付き〃シ聲も。惜まず泣きゐたる親子の。歎きぞ哀れなる。

かかる所に又太郎長年天皇を負ひ參らせ。森を目にかけ來りしがヤア心得ぬ。夜はまだ深きに幼き身に。物の具かため女も長刀橫へしは。ムヽウ側の山賊よな。幸ひ幸ひ彼奴を威して。夜道の案内させんと思ひ。こりや〳〵山賊。熊野詣の同道に病人あつて迷惑なり。夜明迄看病すべき所やある。送つてくればきつと禮をせんと言へば。母聞きもあへずいや〳〵我等は山賊にてはなし。熊野道者の御病人とは殊勝にもおいとしし。我が宿所は三里ばかり。折節是に馬もあり。召されて御入り候へかし。いや志は嬉しいが人を忍ぶ我々。其の中に夜明けては氣の毒。三里行けば隱れもなき楠に緣ある故。方々を賴む迄もなしと行き過ぐればこれ申し。楠に緣ありと宣ふは誰方ぞ。是こそ正成が妻や子にて候へ。扨はさうか我こそ隱岐の國。名和又太郎長年と申す者。負ひ奉りしは忝くも後醍醐

の天皇と。いふより母子ははつとばかりしさつて額を地につくれば。君も泥土に下りさせ給ひ汝は帯刀正行汝は母。いつれも正成が形見かや。妻子を御覧あるにつけ父が忠節をこそ思召し出せとて。正行が髪かき撫でて。龍顔に御涙をスヱテ浮め給ふぞ有難き。扨坊門の宰相反忠にて君を擒となり給ふを。小山田が妻と心を合せ奪ひ奉りし有様詳しく語り。尊氏方の追手の軍兵千騎ばかりあれ。あの松明事急なり先づ御逃の館迄。急ぎ御幸なし申さんと言ひければ。正行かぶりを振つていや〳〵。我等が館へ君を入れ奉り。追手の勢を引受け狭間も切らぬ塀一重。溝同然の埋れ堀一日も堪へず攻落されば。敵に分量を見さかされ後日の合戦成り難し。此の所につつ支へ追手の大勢打散らし。出合頭の初軍に敵に一しほ気を付けて。頭構ます程ならば重ねての軍に一の足踏まんは必定。是非此の所に喰止めて、一合戦とぞ申しける。母上睨んで

ヤイ小癪者。たつた今意見した其の舌も引かぬに御前とも憚らぬ利發たてなそれなんぞ。兒と云うても大事ない長年殿。武勇といひ年かさお事に習ひ給ふべきか。假初ながら大事の所彼方の下知に任せてゐやと。睨めつけ給へば又太郎年に足らぬ正行殿此の所にて戦はんとは。勇あつて頼もししさり乍ら。味方は貴殿と某只二人。追手の勢一千餘騎。死物狂はそは知らず勝つべき道理更になしと。言はせも果てずアヽさな宣ひそ。無勢なりとて戦はずんば戦ふ時節はあるべからず。父正成は三百騎に足らぬ小勢にて。十萬騎の敵を幾度か破りたり。軍は奇正變化にあり。時はや寅の一點我計略をめぐらさば。千騎は愚か何萬騎も。駈破つて見せ申さんと廣言はけば母上。エヽ小賢しや童なら童のやうにしてゐや。出るまゝの軍法だてサア味方二人で。千騎の敵に勝つべき智略があらばいうて見や。道理が悪いと正成の子ではないぞ

サア。申せ〳〵と問ひかけられ。さん候總じて子供の諍にも。強きは弱きを侮つて油斷の負をするものなり。君等人の御身にて御供とても一兩人。千騎に餘る追手の兵多勢を頼みに油斷するは必定。我等と長年兩人は向ふの松原に隱れ入り。母上は君の御供して。天神の社に忍び。上を始め各下着の小袖を脱いで。裏表一幅〳〵に解き放し。本社末社の鉦の緒とともに大旗小旗の尺に切り。石を括つて森の梢此所彼所に投げかけ〳〵。敵寄せ来るとも靜まり返つてほの〴〵明けの朝風の。霧のひま〳〵森の木隙に。旗の手のひらり〳〵とひらめくを小勢と見る者あるべきか。一呑に侮つて油斷したる追手の勢。と胸を衝いて色めく所を御宮の大太鼓。鬨聲に打ち給はば先陣より崩れ立ち。後陣も共に亂るべし其の時我々小松原より横合に切つて出で。十方無盡に切散らさば。陣を割られし敗軍の踏留つたる備なし。多勢却つて仇となり人

にて人をせき塞がれ。同士打友打度を失ひ八方へ逸散つて。味方の勝利正行が掌に握つたり フシ母上。如何にと言ひければ。詞いや〳〵それも一圖の軍法。若し又敵の大勢が此の森へはかゝらず。汝が籠る松原へ先にかゝらば如何せん。地ヲヽ其の時こそ松原の泊り鳥を追立てん。明けぬ先より立つ鳥は歸雁列を亂るなる。隱し勢と心得取つて返して此の森へ。かゝる時には彼の手段鳥と旗とに處されて。中に漂ふ寄手の眞中只一斷に蹈散すは。敵を殺すより猶易く骨を折らずの勝軍。案の内に候と申し上ぐれば天皇も。あつぱれ正成が子なりけり末頼もしき若者やと。忝くも感涙に御衣を絞らせ給ひければ。又太郎は卅五歳十一歳の正行に。今日の大將軍御下知に任せ候と。手を束ねたる武士の フシ弓矢の禮こそ正しけれ。地母は悅びヲヽ出來した〳〵。詞總じて大將は必ず弓矢を帶する物。母が其の心にて持つたるは長刀ならず。地是見

よと鞘を取れば弦を外せし村重籐。お事を慕ふ忙しさ箙負ふ間もなかりしぞ。薄なりとも押切つて鏑矢射るは軍神の祭ぞやと。弦袋添へてたびければ取つて頂きあれあれ。詞追手の松明近付きたり夜明とて程もなし。母上は我が君を社の森へ御供あれ。地敵は小勢と侮るとも味方は必ず大敵とて恐るゝ事あるべからず。何萬騎寄するとも亂るゝ迄は音するなと。下知する聲も若綠松原指して 三重〽 入りにけり フシ追手の大將。地山口入道嫡子八郎久國。二男九郎宗重其の勢一千餘騎揉みに揉うで驅せ來り。詞此の松原こそ怪しけれいうても二人か三人か。叢の蟲を取るより易かるべし骨折つて何かせん。松明を踏みしめし松原をおつ取巻き。地しめ寄せて討取れと犇く所に正行長年。木の根を搖り梢を動かし弓の弭にて驚かせば。驚かされて數萬の鳥聲を立て鳴騷ぐ。詞山口親子大きに驚き。塒の鳥の俄に騷ぐは。此の松原に天皇方の軍兵隱れ

ゐるに極つたり。地ふかく〳〵と近付き寄り切立てられては惡しかりなんと。大將を始め諸軍勢進み兼ねて控へたる。童心の楠が智恵一つに廻されて。一千餘騎の兵のとまぐれ亂れ狼狽し フシ智略の程ぞ恐ろしき。山口入道聲をかけ。詞あれ〳〵東も白みたり天神の森に陣を取り。備を立てて攻寄せん。いざ來いと見渡せばこは如何に。地朝霧深き森の木の間色々の旗飜り。嵐に靡く有樣は只花紅葉の如くなり。南無三寶前にも敵後にも敵。いづくに命を遁れんと。大將始め諸軍勢。具足顫ひのがたく〳〵がた フシ鳴子を引くに異らず。地合圖を違へず神樂太鼓どう〳〵と打つ聲に。そりや攻鼓なう怖やと主は下人の後に屈み。子は親を楯にして腰を拔かし氣を失ひ。逃げ惑ふ眞中へ名和又太郎長年。楠帶刀正行と名乘りかけ。割り立ておん廻し火水に。なれとぞ 三重〽 戰ひける フシ臆病神に。地眼も眩み二人を千騎萬騎と見て。逃足落足深田

に踏ん込み岩根に乗りかけ。我が打物にて死するもあり片時が間に手負死人三百餘騎。生きたる者は落失せて殘り少なに成りければ。詞矢攻にせよと山口兄弟。森に向つて立並び矢種を惜まず射かけたり。地味方には弓一張矢は一本もなかりしに。正行思案し刈捨てたる稻かき集め。五尺ばかりに束ね上げ社人の烏帽子淨衣を着せ。木の間にそつと立てければ。すは天皇よ餘すなと。指取り引取りさん〴〵に射る矢先。藁人形に止まつてフシ針を植ゑたる如くにて。地味方の矢種と成りたりし幼心に孔明が。昔を耳に觸れつらん フシ頓智の程こそやさしけれ。地エヽ目出たしと又太郎矢をかなぐつて大音あげ。詞いかに寄手の人々。早天よりのお出隨分馳走申せとて。新田殿の御意を受け本間孫四郎。鏑矢少々持參せり何なくとも賞翫あれと。地矢つぎはやに射かけしは。嵐に雪の飛ぶ如く面に立つたる山口兄弟。弓手右手へ射伏せられ一陣白けてさつと引く 詞所を。正行親子打物かざし。きたなし返せと追つかくれば。山口入道隙間を見て。女中やらぬとむんずと抱く。正行すかさず上帯摑んで宙に差上げ。地ゑいやつと井出の深みの泥水へフシ眞逆樣にぞ打込んだる。地殘る軍兵恐れをなし四方へぱつと散亂し近付く敵こそなかりけれ。軍の手合せ門出よしと勝鬨の聲太鼓の聲。松に神樂の千代萬歲と君を馬に駕し奉る。長年は項羽が勇。正行は孫子が智母が教は孟母が仁。これ大將の智仁勇。合せて三つの三吉野や。吉野の内裡に御幸なる。

第五

地神風や御裳濯川の流絶えせぬ神國のしるし。後醍醐の天皇楠正行が守護によつて。吉野山に皇居あり新田義貞馳せ參じ。都造りと聞えしかば北の方勾當の内侍。千草の頭の中將洞院左衛門督心を合せ。三種の神寶内裡に殘り給ひしを盜出し奉り。神璽寶劍は内侍の身につけ參らせ。小山田が妻御供すれば内侍所の璽の御箱。頭の中將左衛門督兩人擔ひ奉り。人眼忍べば是も亦蓋を フシばなんと烏羽玉の。夜道に同じ山陰や三輪の里にぞ着き給ふ。地鳥居の前なる御手洗の水舟石に御箱を据ゑ。内侍は寶劍を神木の杉にかけ。暫し休らひ給ふ處に覆面したる男子。詞同じ出立十人許り道端に蹲ひ。我々は近邊の土民ども。今度天皇樣吉野山に入らせられ。新田殿楠殿内裡を吉野に御造營なさるゝに就き。天照太神より傳りたる内侍所樣と申す御寶を。只今吉野へ御供遊ばす由。お公家樣のお身にて御太儀千萬。まだ是より廿四五里中々御足つゞくまじ。地賤しき下々の身ながらも日本の地に住む冥加のため。其の御箱を吉野迄肩に載せ申し度し。息をかけるも恐れに存じ。皆々覆面致し垢離を取り身を清め候。仰付けられかしと フシ思ひ入つてぞ申しける。詞兩人聞き給ひ擦々奇特の志。これこそ内侍所璽の御箱とて。天照太神の御魂御影

の眩りし御鏡、地汝等が肩にかゝらせ給ふ事よくも冥加に叶ひたる。果報の者ども有難く存じ、擔ひ造り奉れと宣ふ處へ、六尺豊の大男是も覆面頭ばかり出し、詞我等も當所の百姓冥加のため寳の御箱、吉野迄昇き申し度し。鼻息かくるも恐れに存じ覆面も致したり。御許し下されと望めば兩人。ア、望みの者は貴人にても其の身の祈禱昇き奉れとありければ、ハア有難し、これ其處な衆先肩でも後肩でも、いづれも寄つて片はなされ。片はなは我等一人吉野迄同道。先へ着いて覆面取り近付になるべし。道中萬事申し合せう。サア地來いと言ひければ各ひそ／＼囁いて、いや其の方が相肩に我々は成るまい。こつちの組へ渡すかさなくば其の方一人か。いか樣とも好き次第知らぬ者同士交る事は、此の方はいやぢやいやぢやと言ひ放す。詞ヤア珍しい。知らぬ者同士相肩いやとは錢を取る出駕籠ぢやと思ふか。冥加のため身の祈禱願ふは誰も同じ事、どうも我等一分立たぬ。嫌ふには樣子があらうそれを聞かうと理屈づめ。アア小むつかしい何の樣子。見た處お手前は人間外れの丈高息。肩が合はぬによつての事どうでもならぬと言ひければ。ム、聞えた。肩が合はねば昇くまいお供すれば同じ事。詞サア皆寄つて昇き奉れと。引つ添うて我等はお供と身拵へするを見て。いやいや所詮此の方構はぬ、供なりと昇きなりと汝がざんまい皆來い／＼と立歸るヤア遣らぬ／＼と道中に。大手を擴げ踏んばたかり。詞拙者と同道いやがるは面こそ見えね。大方それと知つたな。尤々御所柿と澁柿とは皮剝かいでも知れるもの。これ見よ和田の新發意源秀といふ御所柿と。覆面を取つて捨て毘沙門立にすつく立ち。ヤアうぬは坊門の宰相柿、可惜や生れはよけれども。持なし惡さに澁柿に劣つたな。公家ならば公家のやうに柿本の流を汲み。腰折歌でも詠さずして。地身にも熱せぬ武家交り終に刄に刺通され、串柿とならん笑止さよと、コシかんら／＼とぞ笑ひける。宰相覆面取つて捨てエ、口惜しや。詞勾當の內侍を大森彥七盛長に授けんと、契約せしを己れに邪魔を入れられ、天皇を押籠め尊氏より恩賞を受けんとすれば、あの尼めに奪はれ今又、三種の神器を奪ひ、尊氏公へ奉らんと欲する所、地又妨ぐる推參者是程迄仕込みし事。本意を遂げで置く可きか。下り坂の楠新田に與せんより、運に乘つたる、尊氏公に從へ取次せんと言ひければ、詞源秀大口開いてかッら／＼と笑ひ。ヤイ尊氏は名大將、うぬらが樣なる不忠の臣還かな用ひられんや。天子に向つて弓引く朝敵の名を恐れ、後伏見院第二の宮量仁親王を御位に立て、吉野の內裡は後醍醐の天皇、京の內裡は新帝と崇め義貞とも和睦し。一家の交り元の如くあり度き願ひ。玄恵法印を以て奏聞ある。內奏の爲只今某吉野殿へ。參る折柄出會ひしは。地汝等が因果の木まぶり楠

に残つて烏の御食とならんより。熟柿首ゆすり落し踏潰してくれんと。飛んでかゝれば下人ども一度にはらりと取廻し。詞ヤア奇怪なる雑言。己れこそ赤面の熟柿坊主。踏潰して退けんと弓手右手より取付けば。ム、此の源秀を熟柿とな。熟柿にたかる眼白ども。地捻ぢ殺して見せうかと引寄せて片端より。首筋掴んで一締しめてはかつぱと投げ。縮めては投げつけ。投付け〳〵宰相に飛んでかゝれば敵はじと フシ山を指して逃げて行く。地源秀餘さじいつ迄か。身は遁るべき三輪の山 オクリ 檜原を〽別けて追ひかくる フシ二人の女中。地公家達も何事か起りしぞ所は三輪の御神前。是は神代の御寶守りめも盡き給ふかや。神力を添へ給へと スエテ あわて給ふぞ道理なる。地かゝる所に大森彦七盛長。手勢引具しどつと馳寄せ。年來心を盡したる内侍はおれよ。我が生公家はらひつ揺れ。來ると引伏せ引伏せ フシ二人に縄をぞかけたりける。地捕

其の櫃は心得ず何かある明けて見よと。いふより早く郎等ども御箱に縋れば。兩人涙を流し聲を上げ。やれ情なや勿體なや。それこそ忝くも我が國の御寶内侍所。十善の御身にさへ拜み給ふこと叶はず。不淨無禮の手を觸れんとは忽ち眼くらんで。立竦みに死なんあさましや。情なや其處立退けと泣き給へど。詞振事をかしい神より怖い軍神の。眞先かける兵になんの罰といふまゝに。地からげの布を切解き蓋を取れば恐ろしや。コハリ御箱の内鳴動して電光。天地に輝き神鏡。朝日の ナホス 登るが如く フシ遠空に。上らせ給ひける。近付いたる雑兵ども忽ち悶絶血を吐いて仰向に反つて死してけり。詞無道の盛長ちつとも恐れず。よし〳〵さはらぬ神に祟りなし。心をかけし女を連れて歸るばかりに。罰も祟りもあるべきかと走り寄つて内侍を。引つ立てんとする所に。地杉に懸けたる寶劍の鞘を離れて秋の光。大に驚き地に鳴渡り盛長が頭の

上。閃きかゝり追廻し〳〵。劍の刃風神風の 三重 逃ぐるを追うて〽千早振る齋垣も越えて逃げて行く フシ吉野の敕使北畠の准后親房卿。新田義貞楠正行三種の三祇。御迎ひに來り給ひしが。三輪山の震動何事かと。急ぎ馳付け。こはそも如何にと驚き騒ぎ。兩人の縄を解き給へば内侍は夢の心地にて。小山田が妻の情にて逢ひ見る今の嬉しさと。盛長宰相が悪逆詳しく語り フシ嬉し泣きこそ道理なれ。地足利尊氏三社の神の靈夢蒙り。吉野殿へ參らんと此の所に行きかゝり。驚き給へば新田楠すは大將と大將との。相手づくぞと身構へして既に危く見えし所に。詞和田の新發意宰相が首提げア、これ〳〵粗忽せまいと。眞中へ駈入り。先づ悪人一人は滅びしと。首投出し義貞に向ひ，尊氏卿朝敵の科を。晴し申すため。地量仁親王を御位に立て京の内裡と崇め。御醍醐の天皇を吉野の内裡と敬ひ。新田足利和睦して帝を守護せしむべきとの願

ひ。玄恵法印の取次我等其の御使と。地中す詞の中より白雲棚引き異香薫じ。杉の梢にかゝりしは不思議なりける次第なり。雨資童子の御相好。妙なる御聲あざやかに。地天に二つの日なし地に二人の王なし。量仁親王に新帝の位を授け。後醍醐の天皇は院の御所と仰ぎ。帝都は尊氏是を固め。吉野の都は義貞守護し奉れとの神敕なり。我が國三つの寶のあらん限りは。國富み民も豊かにて敵する者のあるべきか。寶劍の威徳疑ふ事なかれと宣ふ所に 地有難くも寶劍は盛長が首を刺貫き。虚空に閃き歸らせ給ひ。元の鞘に納りしは フシ有難。かりける次第なり。地ツメ見よ〳〵惡魔降伏の寶劍は勇神璽は智。我内侍所は仁の鏡。智仁勇の三寶も佛法僧と王法の。民安全に守るべしと御託宣のうちよりも。御形は鏡と現じ内侍の袖に移らせ給ふ。天下一統源氏一統太平國に太平の。君が威光は萬々歳治まる。御代こそ久しけれ。

七行大字直の正本とあざむく類板世に有といへ共又うつし成故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直之正本にあらず故に今此本は山本九兵衛治重新に七行大字の坂を彫て直之正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本筑後掾 竹本（壺印） 博教

京二條通寺町西江入町 山本九兵衛版
大阪高麗橋壹丁目出店 正本屋 山本九右衛門版 （印）

夕霧阿波鳴渡

近松門左衞門作

地年の内に春は來にけり一臼に。餅花開く餅つきのにぎ〳〵はしや九軒町。嘉例の臼取吉田屋の フシ庭の竈は難波津の 地歌の心よ蒸籠の湯氣の大杵。昇夫の長兵衞が大汗で。やあゑい。中居の萬が臼取のさッ。やあゑい。さッやあゑいさッ。地さつさつけ〳〵。ハッア木遣で搗きやれな。先づ惠方棚神の棚鏡とる〳〵遣手衆の 顔に取粉の面白いとて妓衆の笑ひ。禿が手折る柳の枝の。春も近づく。年も近づく。やがて廓も フシ谷の戸も。ハルフシ出でて初音の鶯の。地羽づくろひの君もあり。正月買の 〽大々盡。太夫樣より附屆。門を賣る聲山草や。ちよつと祝ひましよ裏白樣。こゝまめで御座んせの春永に。いよしもかはらぬ御見まで。逢瀨を契る餅は杵。

ついて離れぬお客を祝ひ。臼へ入れます。ます〳〵全盛。座敷は善哉。庭には節季候こりや又目出度い。揚屋の餅つき。紋日の長持お客に大盡持。これや又にぎ〳〵女郎衆にやり持。お家は金持大々福福。松吹くふく〳〵松風や松うる。響こそ 三重〽戀風の。フシ其の扇屋の。金山と。名は立ち上る夕霧や秋の末よりぶら〳〵と。寢たり起きたり面痩せて。スヱテ藥も日數ふる雪の。重らぬ先の養生と。勤めも心まゝなれど。深き好みの吉田屋は。足許輕き道中や。地暖簾くゞるも力なく今日は目出度うござんす。アヽしんどうやと腰打ちかけ。我が身を横に投入の フシ水仙淸き姿なり。地喜左衞門機嫌よくこれは〳〵太夫樣。御氣色もよいかして聞いた程痩せもなされす。お顔持もずんどよい先づ今日は嘉例の餅つき。格子へお出なされてより去年の今日迄。伊左衞門樣とお二人一度もお外れなされぬに。今年の餅搗ばつかり伊左衞門樣は流浪遊ばす。お前は御病氣嘉例を外す所。此の喜左衞門頭痛八百。ちよつとなりとも呼びまし度いと願ふ折柄。詞今日のお客は四國のお侍。頭巾で頭は見えねども角前髮のお小姓らしい。地その器量のよさおほこさ。道頓堀の若衆方女方ひつさらへてもけもない事。四國西國隱れない夕霧といふ太夫に。近付になり度いとてわざ〳〵大阪で御越年。お氣合に構ふとて初對面はお勤めなされぬも存じながら。呼びに進ぜた流石お馴染の喜左衞門。否應なしのお出。身祝と申しどつといふた餅つき。詞かゝも尻餅ついて悦びます。これ杉冲之丞。中の間へいて善哉祝や。地こゝは冷えます太夫樣 フシ先づ御座敷へと言ひければ。地アヽ私が氣色も良いが良いにはたゝねども。伊

左衛門様と二人づれ一度も缺かさぬ今日の日なれば、命の内に一寸半でも左衛門様に逢ひたい 此方様達の顔見度いと思ふ折ふし呼びに來たを幸に。爰迄は來ました座敷は氣儘に勤める。さう思うて下んせ何が扨お氣任せ。どうなりともりように やらしやんせとオクリ座敷へ〳〵こそは出しけれ フシ冬編笠も垢ばりて。紙衣の火打袋の風。風吹き凌ぐ忍ぶ草。フシ忍ぶとすれど古の。花は嵐り。顔にっ今日の

寒ここを喰ハソしばる。思出し所もかみさび て鐺詰りし師走の果。胡散らしく吉田屋の内を覗いて。喜左衛門宿にか。ちよつと逢はう。喜左衛門地ノ\とフシ鼻に。扇の横柄なり。地男ども口々にヤア彼奴は何者ぢや。風の神か鳥威しの様なざまでなんぢや喜左衛門に逢はう。百貫目も借ふ大盡のいふ様な。棒まかれなと言ひければ。ヲヽ百貫目がそれ程貴い物でもない。喜左衛門といふべき者でいふ程

に逢はせてくれい。地どりや逢はせてくれう。こんな目に逢せてくれうと。竹箒持つてかゝるを喜左衞門飛下り。強請者か知らぬ粗相すな。誰方でござると笠を覗いて、ヤア伊左衞門様か。何と喜左。是は夢か七つか。地扨お久しや懐しや。京大佛の馬町に御逼塞と承り。霧様よりは數通の御狀。飛脚も二三度奈良大津迄尋ねさせ。たつた今もお噂先づお馴染の小座敷で二年積るお物語いざお通りと袖引けば、詞ア、紙衣襴が荒い〳〵。これ引けば破れる摑めば跡にしはす坊主師走浪人。昔は遣が迎ひに出る今はやう〳〵地長刀の、草履を覗いて編笠のフシ中の座敷に通りしが。地お寒からうと喜左衞門。縮緬に紅絹裏の小袖をふはと打ちかくる。詞ア、是はいはれぬ。寒晒の伊左衞門少しも苦しからねども。志を着致すと、地戴いて着る有様喜左衞門つく〴〵見て、エ、浮世おや藤屋の伊左衞門様に。此の吉田屋の喜左衞門が着せまする小袖。假令蜀江の錦でも戴いて召しませうか。眞に涙がこぼれますと目をするを見て否これ喜左。詞此の紙衣の仕合さら〳〵無念と存ぜぬ。總じて重たい俵物材木でも牛馬が負ふは珍しからぬ。犬か猫が負うたらば是はと人が手を打たう。我等も其の通り紙衣の袷一枚で。七百貫目の借錢負うて。ぎくともせぬは恐らく藤屋の伊左衞門。日本に一人の男。此の身が金ぢやそれて冷えて堪らぬ。地ヤアウ此の身が金とは忝い、喜左衞門が餅搗に大きな金がお入りなされた。これ嬶まだ蓬萊は飾らねども。先づ正月の心三寶飾つて持つておじやとて入りければ、内儀はあつと様に穗長折り敷く橙、柑子。蜜柑や何や榧搗栗おゆかしや〳〵、久しぶりで御無事なお顔お嬉し様やと出でければ。伊左衞門とかうの挨拶涙ぐみ、詞夫婦の衆が懸に蓬萊と迄氣がつけども。夕とも霧とも言ひ出さぬ。ほのかに聞けば夕霧が身が事を氣病にして。命危しと聞及びしが。いかう重いか但し無常の夕霧と。消失せて了うたか。地歎きをかけまいと言出さぬか。誓文で泣くまい語つて聞かしや。泣かぬ〳〵といふ聲もフシ氣遣ひ涙に濁りけり。いや〳〵是はお道理。霧様の御氣色秋の頃はさんざんで。詞勤もお引きなされしが寒に入つて少し御快氣。地則ち阿波のお侍正月もなさるる筈で。今日是にと言ひも果てぬに伊左衞門。詞ヤア〳〵それは眞實か。地はて嘘か誠か隣座敷。覗いて御覧なされませ。伊左衞門はつと急いたる顔色にて スヱテ暫し詞もなかりしが。詞なう内儀。天地開け始りて、誠ある傾城と迦陵頻の雄鳥は稀にかいたも見た者ない、地總嫁の様な傾城めに微塵も心は殘らねども。詞知つての通り彼奴が腹から出た身が悴。しかも男子で明ければ七つ。元の遣手玉が才覺で里に遣つたとやら。今日來たは其の悴が事に就いて來たれども。地定めて里に遣つたも殘り捻殺

してかな棄てつらん。阿波の侍といふは合點此の前我と張合つた。阿波の大盡平といふ者。倩思へば傾城買より紙屑買がましぢや。金出して此方へ取る物は狀文ばつかり。七百貫目が紙屑では富士の山の張拔も樂な事。仕合の惡い時は何で損をせうも知らぬ。無用の涙で紙衣の袖濡した。繼目が離れぬ先に罷歸ると立たんとす。アヽ餘り御短氣奧のお客は平樣では御座りませぬ。いや〳〵平でも壺でも此方仕度ようござると 地 立上るそれはお前の慳貪と申すもの。先つ夕霧樣に逢はせましよ。いやとても慳貪なら。夕霧より蕎麥切に致さうと。拗ね まはる其の中に奧座敷より手を叩く。詞 あれ充來はどこにぞと。地 言ひつゝ出づる内儀につれて襖の陰より差覗けば。二人馴れにし床柱 フシ 凭れかゝるも形見ぞと。地 忘れもやらぬ物ごしは慥に彼の人何がなしほに庵を立つて。逢ひたや見たやと心もせきそむけて向ふ客の顏。さも大名の小姓だち風よしの衣裳つき。はつはの鮫鞘象眼鍔若紫の炮烙頭巾。懐中より香包名木火鉢に薫らせ。喚是へ來やれ。身なんどが樣な奉公人は。殿の御前に相詰め。たまさか遊興所へ參るも氣晴しといふ内に。第一は夕霧殿に戀ある故。君の機嫌のよい樣にお身を賴む。一つ飲みやれ肴せんと。地 ひらり紙花七九寸木枕に打敷いて。横になるとの阿波大盡夕霧が裲襠に。兩足ぐつと入れければ扱もなめたり〳〵。詞 此の夕霧に足もたすはこりやちつと慮外さうな。それ程足が苦にならば打折つて棄てたがよいと。地 言ひ捨ててつつと立ち次へ出づれば伊左衛門。ちやつと寢ころぶ肱枕 フシ 空寢。入りして高鼾。地 はつとばかりに夕霧我が身を共に裲襠に。引纒ひ寄せとんと寢て スヱテ 抱付き縮寄せ泣きけるが。なう伊左衛門樣〳〵目を覺して下んせ。私や煩うて疾うに死ぬる筈なれど。今日迄命存らへたはま一度逢はせて下さるゝ。神佛の控へ綱これ懐しうはないかいの。顏が見たうは無いかいの日を明いて下んせと。揺起し〳〵抱起せばむつくと起き。詞 横さまに取つて投げ。これ夕霧殿とやら夕めし殿とやら。節季師走こなたの樣に隙ではない。七百貫目の借錢負うて夜晝稼ぐ伊左衛門。此の樣な時寢ねばならぬ。地 邪魔なされな總嫁殿と。ころりと臥して又ごう〳〵と空鼾。ムヽウ身に覺えはなけれども恨があらば聞きませう。寢させはせぬと引起す 詞 これ何とする。此の體でも藤屋の伊左衛門。今の如く奧座敷の侍に。踏まれたり蹴られたりする女郎に近付は持たぬ。地 こゝな萬歲傾城。萬歲ならば春おじや フシ 通りや〳〵と言ひければ。詞 ムヽウ此の夕霧を萬歲とは。ヲウ萬歲傾城の因緣知らずか。侍の足にかけて蹴らるゝを。萬歲傾城といふぞや。地 誠に目出度候ひける。しかも足駄履いて蹴るやら。年立ち歸るあしたにて。誠に目出度う候ひける。詞 聞えたかさり乍ら何も身す

さ。あの様なよい衆には蹴られても損はいかぬ。欲を知らねば身が立たぬ。よく若に御萬歳や年立ちかへるあしだにて。誠に目出度う候ひける地町人もける伊左衛門もける。　ける〳〵けると蹴散かし。詞是喜左餅でも米でもやつてやりやと。地煙草引寄せ吹く。地煙管のッシさらぬ。體にて居たりけり。地夕霧わつと噎せ返りエ、こな様とも覺えぬ。此の夕霧をまた傾城と思うてか。わいな夫ならやないか

いの。明ければ私も廿二十五の暮から逢ひかゝり。何年になる事ぞ。儲けた子さへまちつとで早七つ。誠をいはゞ今頃は一門中の狀文にも。伊左衛門内よりと書いても人の咎めぬ事。私に恨みがあるならばこな樣ッにも恨みがある。詞去年の暮から丸一年二年越しに音づれなくッそれは誰故の病氣じそれ故に此の通り、痩せ衰へが目に見えぬか。煎藥と練藥と鍼と按摩で漸うと、命繋いでたまさかに逢う

てこなさに甘ようと。思ふ所を逆様なこりや憎らしいどうぞいの。私が心變つたら踏んでばかり置かんすか叩いてばかり置かんすか。是死にかゝつて居る夕霧ぢや。笑ひ顏見せて下んせ拜んます。エヽ心强い胴欲な僧やと膝に引寄せて。叩いつ撫つつ聲をあげフシ涙。亂れて髮はどけわけも。住根もなかりけり。地伊左衞門も涙にくれ詞ヲヽ過つた外にさして恨はなけれども。命に代へぬ大事の女房奥座敷の若い者。我が物面がむつとして思はぬ腹立據てたも。地我とても憂き身の體誠の正體見給へと。小袖くるりと脫ぎければ肌に袷の破れ紙衣。四十八枚彌陀の顏。つぎは平等施一切フシ胴顫ふこそ哀なれ。伊左衞門涙を抑へ。詞扨かの倅は無事で里に居る事か。なんとしたぞと言ひければ。されば其の子を里に遣りしと申せしは僞り。まゝならぬお身の上苦勞にさせます氣の毒さ。地彼の阿波の大盡平岡左近といふ人と。私とが仲の子と言ひかけて塗りつけて見たれば。詞人は愚かなまんまと誑され受取つて。腹は借り物武士の胤と寵愛にあふと聞くにつけ。地身の憂き時は色々の怖い智惠も出るもつと。語りもあへぬに伊左衞門ムヽウさもあらう事。詞さり乍ら我が古への手代ども。其の子をつき立て母へ訴訟し。藤屋の家を取立てたいとの談合あり。地どうぞ譯をいうて取返す。思案がしたいといふ所に。奥より内儀色違へなうおとましや〳〵。お二人宴の話が奥の座敷へ筒拔け。お客様が不興顏直に逢うて言ふ事ありと。今こゝへお出なう喜左衞門殿こちの人と。皆々怖がりひそめく所へ客は刀を提げ。地アヽこれ伊左衞門殿夕霧殿。驚く事は少しもない。地これ其の遊樂と頭巾を取れば突出し鬢の下髮。鼈甲挿櫛さしもの倅ども呆れて不審晴れやらず。詞ヲヽ如何にも不審のたつ筈。男に化けたる其の間は何のそのと思ひしが。女子の姿を顯して此の中でもの申すはおはもじ乍ら。彼の阿波の大盡平岡左近が本妻雪と申すは我が身の事。夕霧殿の假の情連合の子を誕生とて。此方へ請取り言はゞ我が悅ぶ子。腹も痛まず苦勞せず產んでもらひし忝さ。あだにもせず守り育て。手習讀み物弓鎗までも器用にて。地國隣りの土佐駒牽かせ乘つた姿は。天晴平岡左近が世嗣。七百石の主なりと御家中の褒め者さぞ見たからうし見せたし。一つは彼の子が冥加のため夕霧殿を請出し。一所に伴ひ。フシ暮さんと。心根も聞かんため鐵漿落しつゝあられぬ樣で。詞只今聞けば我が連合を誑して。地伊左衞門の子を突き付けたと聞くよりはつと胸塞がり。夫の武士は廢つたエヽ恨めしい夕霧。男に化けたを幸ひ飛びかゝつて刺通し。我も死なうと刀を取りは取つたれども。詞死んだ跡で此の事が傾城に悋氣して。阿房死と言はれてはいよ〳〵男の名を出すと。止るも殿御を思ふ故。無い事さへいふ世のさがな

さ。阿波の平岡左近こそ。町人の子を傾城に突き付けられたと取沙汰し。殿様のお耳に立てば好い仕合で御改易。地阿房拂か切腹か死しても惡名消えばこそ。此の所を料簡しあの子を其の儘下されば。侍一人の取立生々世々のお情ぞや。我人我が子は大事のもの殊に思ふ人の子を。思はぬ人の子といふは何しに心よからうぞ。それは流れの身の辛さ。侍の妻には又此の樣な憂き事あり。詞女子と生れし此の因果女御更衣になるとても。羨しうは思はぬと地心の底を口說き立て。涙わりなき物語。夕霧夫婦吉田屋のフシ一家袖をぞ濡しける詞伊左衞門つつと出でハヽア賢女かな貞女かな。左近殿とは夕霧ゆゑ遺恨はあれどもそれは私。拙者も彼の悴を力に。出世の望ござれども。武家のゐ々には換へられず。進ずるといふ迄もなし。以前夕霧が申す通り。左近殿の御子息伊左衞門が子ではござらぬ。アヽ忝い夕霧殿もさうぢやぞや。はて主の合點の上からは私が否とは申されぬ。地さりながら命の內。ちよつと見せて下さんせとスヱテ涙に咽ぶぞ道理なる。地チヽ心得た〳〵。萬事胸に込めました身請の事も吉田屋と。近々に談合しませうあの子が成人するにつけ。伊左衞門殿も樂みサア契約の固めの盃。いよ〳〵あの子はこつちの子平岡左近が總領。さらり〳〵と手を打つてフシ廓でざゝんざ珍しし。地日も暮れかゝれば若黨中間駕籠つらせ。詞阿波の旦那のお迎ひ。地これ下人も忍ぶ此の姿元の男となりふり作り。頭巾大小印籠巾着亭主さらば。詞夕霧ことは追付け是より便宜せう。萬事頼む地受込みましたと。膝を屈める腰屈める。腰元連れゐるを引替へて。昇去が送る大門や。口をきこより奥樣の深き。情や三重〽立歸る。

中之巻

フシ春や延寶。六年と明渡る世も昔の京。難波の今朝は珍しき妻子引具し舊冬より。上本町の道場の玄關構へ借座敷。お國の御用あら玉のフシこゝに年とるまめ男。地阿波の國平岡左近と宿札も。門の飾に時めきてフシ武家は綺羅ある春なれや。地表の物見に女中の聲々申し奥樣。珍しい大阪の正月を。始めて見物致しお國へ歸つてよい話是もお陰と悦ぶにぞ。詞チヽ〳〵そち達が言ふ通り。主のお陰は忝い。御用について左近殿我々連れて僅か逗留の旅宿へ今朝から禮者の絶えぬ事。地皆殿樣の御威光。左近殿は源之介連れて。詞天滿とやらの神明樣へ惠方參り。地親の子とてしほらしい六つや七つで馬に乘る。追付け左近殿の名代御奉公勤めるを。見るであらうと御悦の所へ。旦那のお歸り前供走る黒羽織。すつ〳〵素槍栗毛の馬。のつし熨斗目に麻上下親に續いて源之介。明けて七つの乳呑まう饅頭形の中剃も。目許賢きうなる松千代を嘶ゆる土佐駒に。手綱かいくりしやん〳〵〳〵。轡の音はりりん〳〵。りんと据り

し詩戰フシ物見の前を乘廻せば。詞これ〳〵源之介戻りやつたか目出たい〳〵地さぞ馬上が寒からうおとなしい出來しやつたと。招かれて源之介申し母樣。詞惠方參に天滿へ寄つたら。是買うて來ましたと。土人形の天神手綱に持添へ。私が是持つて居るのを道通りが見付けて。父樣を見知つて居るやら。親は太夫買ひ子は天神買ふと言うて笑ひました。地俺にも大きな太夫買うて下されと。あどなき詞に腰元ども氣の毒がり。 これしい〳〵と目まぜすれば源之介。詞ヤイ駄賃馬のやうにしい〳〵とは不調法な。 侍の乘馬はこれ此の樣にはい〳〵。地はい〳〵〳〵と親の心も白泡かませ。門内へ乘入れし フシ振いたいけにおとなしし。地今の詞に腰元衆口を閉ぢて奧樣の。機嫌を窺ふ體なれば。詞これ〳〵源の話を聞いたか。道通りが左近殿を太夫買ひといふたげな。此の前大阪お屋敷役の時。新町通ひに夕霧といふ太夫に馴染をかけ。源之介を儲けたは定めて皆も聞きつらん。人の見知るも道理大名高家も母方の吟味はなし。大事ないとは言ひながら。地あの子が心は此の雪を生みの母と思うてゐる。必ず〳〵夕霧が子といふ噂禁制ぞや。其の夕霧をも請出しあの子がお乳に置く筈。傍輩並におしらやと仰せも果てぬに腰元中口々に。詞ア丶奧樣の餘り結構すぎました。我我がなんぼ沙汰を致さずとも。あの傾城のはしやれ者それを言はずにゐませうか。地お袋ぶつて鼻高うお家を有り度いまゝにして。奧樣を踏み付けるは今の事〳〵。詞まだそればかりか下地がにやこい旦那樣。小舌たるうしかけたらぼつかりと喰付いて。田もやらう畦もやらうで。奧樣はうつそり地鼻あいてしまはんしよ。小無益しいあた分の悪い。こりや御無用に遊ばせと焚付けらるゝ女心 詞ア丶いへばさうぢや俺は甚い阿房ぢや。祈りも退けたい戀の敵持つて來てあてがふは。盜人に藏の番磁石に針。地皆に氣をつけられてはやもや〳〵と腹が立つ。後に悔みの出るは定請出す事を止めにやらう。皆出かいたよういうてくれた。詞扨はいよ〳〵止めになされますか。はて止めにせいで何とせう。ア丶氣がさつぱりとなりました。おりん殿好い氣味か。私や痞が下りました。おしゆん殿は何と。こちや銀拾うたより嬉しいと。地身に德もなき法界悋氣フシ是ぞ女の習ひなる。地あれ北から十文字の道具。お藏屋敷の小栗軍兵衛樣年頭の御禮。御一門の中でも彼方は堅いそりや〳〵と。物見の簾下す間にはや玄關に物まう。詞どれい小栗軍兵衛御慶申す。地旦那幸ひ宿に在りいざお通りと言ひければ。軍兵衛玄關に立つてこれ家來ども。詞御用について左近殿と申し合する事あり。暫く隙が入るべきぞ。 屋敷へ歸つて八つ時分迎ひに來い。ない。其の中ちと早く來いない。地油斷するなと入りければ。地若黨始め草履取挾箱フシ皆々宿所へ歸りしが。

地道具持の槌右衛門。一人殘つて臺所覗き。詞誰ぞ頼みませう。飯炊の竹呼び出して下されと。いふ所へ馬取の角介苦い顔して。やい槌右衛門汝や見事武家に奉公するかやい。此の角介が僅かな切米の内五百ためといふ錢を取替へた。冬年一言の斷もせず。今も先づ身に逢ひ度いといふべい所。竹を呼び出しくれとはの大い者たの。地錢の濟む迄足を取ると槍の柄に縋り付く。待て角介槍持が槍を取られては。槌右衛門が首がない。五百や六百で賣る首ぢやないならぬ。ヤア取つて見せうと 地諍合ふ最中。竹走出でヲヽ角介殿道理ぢや。錢は竹が濟す堪忍して下され。エヽ情なの性惡男めや。世間を見て恥を知れやお小人町の久六は。詞こなたより若い人八軒屋の總とたつた一年懇して。小錢ためて宿持つて。冬年も鶴が橋のおばゝへ。大きな鏡に小蒲添へて据ゑられた、地藤の棚の捨兵衛は此方ほど險よ賤うなども。お稜ひの運策御番詰

り人の氣に入り雇はれて。眞性者と言はれた故片町のふりを内へ呼び入れ。師走にひろめがあつたこそや。詞是でこそ女房の肩も怒るわいの。此方と言交して明けて四年。給分一文身につけず皆此方に入れあける。地それに何ぢやよい年して。長屋へ比丘尼引入れ日が暮れると濟ぜせり。まだ其の上に稲荷あたりの裏屋小路を覗き廻り。擧句に此の頃は夜見世狂ひも付いたげな。私とても木竹ぢやなし悋氣もし度い腹も立つ。エヽ憎いとは思へども。詞アヽさうぢやない。女子に生れた因果ぢや。男のさがを顯すまいと隨分私が身をつめ。地三度つける油も一度つけ。雪踏履くを草履にし草履はくを跣足でしまひ。鍋釜の墨搔くにも此方の髭に入ると思ひ。能い所をのけて置く我が身の事には元結一筋買はぬは。男を大事にかける故ぢやないかいの。女房には苦勞をさせ栄耀が餘つて色狂ひ。聞えぬ人ぢやとしめ泣きに フシ恨み口說くぞ不便な

る。これ此處の御奉公は中途に參つて馴染はなし。お國迄も御内衆か戀名立てるが悲しい。詞此の上張の裕を脫ぐ。角介殿これで濟して下されと。地帶を解かんとする所へお殿元のりん走り出で。これ〳〵竹。詞其方の心底奥樣物見よりお聞きなされ。扨扨奇特な。上々迄も女たる身の鑑と殊なうお感じなさるゝ。奥樣にもちとお氣のすまぬ事あれども。地其方を手本にお心が納つてお嬉しさ。師匠とも思召し御褒美に。此の鳥目百疋下さるゝ。詞扨角介は慮外な。餘所の大事のお道具に手をかける狼藉千萬。重ねて此の事言ひ出さば旦那樣へ仰せられ。打首になさるゝとの御意ぢやといへば。地頭かく介佛頂面。竹は悅びアヽ冥加もない有難い。兎角お禮はよい樣にと頂き〳〵。詞これ槌右衛門殿これ持つて往なつしやれ。地何を見込みに此の樣に可愛いぞと。賞への鳥目百疋を。直に男に槍持に過ぎたる。妻が 三重 やさしさや フシ人の情に。

夕霧が。地思ひも寄らぬ此の春の。子の日を縁から根引の松に 小オクリ かゝる。藤屋の伊左衛門我が子の顔の見まほしく。習はぬ駕籠の片端を隠れて忍ぶ頬被り。夕霧も簾越子を見る今日の嬉しさより。夫に別るゝ物うさは フシ上本町にぞ着きにける。詞宿札を見て喜左衛門。誰方ぞ女中方頼みませう。ハウどれからぞと腰元出づれば。私は九軒町吉田屋喜左衛門と申す者奥様よりお頼みなされし扇屋夕霧身請の事。随分と駈廻り金子は當月一ぱいに。お渡しなさるる約束でゐいやおうと首尾なり。只今是へ同道。地扨々節季の忙しい中私の働き。春の用意正月のお客の詮索。錢金の諸拂押詰めての節分。大豆で打出す鬼の首 フシ取つた様にぞ申しける。詞成程奥様にも其のお噂。扨はあれが傾城殿かと駕籠を覗いて。地ハウアウ傾城といふもの始めて見たやつぱり常の女子ぢやと。走り入つて奥様々々。詞傾城が參りました。ヤア姦しい皆物見から聞いてゐた。傾城々々と言ふまいぞ。今よりは源之介のお乳の人。侍町人の歴々につきあうて。心も至り目恥かしい。地耻相して笑はれな盃の用意せよと。ひそめく聲に左近勝手へ入りければ。詞これなう擽て申せし夕霧の事。吉田屋の喜左衛門が埒明け連立ち來たとの案内。地なんと此の事がやうな悋氣せぬ。氣の通つた女房は御座んすまいがと笑はるれば。チヽ御奇特々々さり乍ら。座敷に堅い軍兵衛が居らるゝ今内へは呼ばれまい。表に置いても目に立つ。どうかかうかと思案半ば。門前には喜左衛門ア、甚う冷い。夕霧様は御病氣後早う内へ入れまし。火になりとも當てましたい。詞頼みませう／＼と地呼ばはる聲若黨中間ばらばらと。小栗軍兵衛迎の者と。奴の聲揚屋の聲。遣手はなくて傾城に フシ槍侍交り喧しゝ。地稍日もたけて軍兵衛お暇申すと立出づる。左近親子送つて出て色代あれば軍兵衛。詞チヽ源之介殿おとなしうござるよ。追付け殿の御用に立ちめされう。随分弓馬の稽古精出し申さうぞ。地永日々々と オクリ暇々ごひして歸りけり。地左近親子立閾に立休らひて見送る體。伊左衛門遙かに見て。あれは我が子か昔の伊左衛門ならば。人の子になさうか大小こそ指させずとも。數多の手代若い者若旦那とかしづかせ。京大阪の町人の誰にかは劣るべき。侍とても負けまじき母親の駕籠を父親が舁き。我が子の門に這ひ蹲ふ我親に背きたる。其の罰ひつしと思ひ知り。悔み涙に頬被りの フシ手拭。浸すばかりなり。地奥方も端近く。なう／＼喜左衛門か。その駕籠これへと他事なき風情それを力に夕霧は。駕籠も思ひももれ出でて平様お久しうござんす。奥様のお慈悲にてあのお子のお乳母に。附けらるゝ筈ながらのらぞんざいの私が身。氣色もしかしかはかどらねど先づ若子様を見たさにと。つく／＼と打守り。詞あれ喜左衛門様扨も氣高いよいお子や。聞及びしより

おとなし様常體の者の子が。七つや八つでかうあらうか。地人は筋目が恥しい流石父様のお子程ある。父様のお心がさこそと推量せらるゝと。表の方へ目を配れば伊左衛門も首のばし。魂ぬけてみどり子のフシ袖に。飛び入るばかりなり。地左近夫婦は氣もつかずサア喜左衛門。詞先づ少しなりとも金子渡さういざ座敷へ。これ源之介。あの人はわが身の乳母馴染をかけていとしがり。此の母も同然に。大人になつても乳母は見捨てぬものぢやぞや。地吉田屋こちへとにこやかにオクリ打連れ／＼座敷へ入りにけり。地夕霧四邊を見廻しなうなつかしやさつきにから。抱き付きたうてならなんだと。縋り付いて泣きければ伊左衛門も走り入り。思はず知らずやれ可愛い者やと。だき付く所を源之介飛退き。詞やい駕籠舁め。穢いなりで侍にだき付く慮外者めと。脇差に手をかくるアヽ／＼申し眞平々々御免なりませ。私が悴に丁度お前程ながござれど

も。少い時から人手に渡し。見度い／＼と係ずる折節。地お前を見付けどうも堪へられず。心亂れて慮外の段御免遊ばし。あこぎな申し事なれど。お侍のお慈悲に。父かといふて私にだき付いて下されませと。額を疊にすり付けてフシ手を合せてぞ泣きゐたる。地何の汝を父といはうおりや父様に言うて來うと。駈け入る所を夕霧だき止めこれ申し。乳母が始めての御訴訟頼み上ぐると泣きければ。詞乳母の言やる事ならいうてやらう、父様なうとだき付くを。地ナヲ添いとゝぢや／＼と嬉し泣き。夕霧も羨しく序に私も母というて下されかし。詞ヲヲいうてやらう是は母様。地ヲヽわしが子ぢや是は父様おれが子ぢや。二人が中の思ひ子の親子夫婦の寄合は。又今生では叶はぬと泣いつ笑うつ様々にフシ寵愛。こそは道理なれ。奥より左近が聲として。藤屋伊左衛門。／＼と呼ぶ聲す南無三寶と逃出づれば。續いて左近走り出で袖を控へて。詞

これ古へ參會せし。阿波の大盡と異名を呼ばれし平岡左近。其方に恨はなけれども夕霧に言ふ事あり。それにて聽聞致されよとがばと突退け涙を浮め。エヽ僞多き遊女の習ひ驚くべきにあらねども。是程迄ようも／＼此の左近を積りしな。此の子は伊左衛門が悴とは。先年死したる遣手の玉が話にて。とつくより聞付け無念とも口惜しとも心一つに堪へ兼ねしが。いや／＼改めては侍の身分立たず。殊に此の子も。我々夫婦を誠の父母と思ひ睦しく。不便さも増す故に緣でかなと諦め。二世と連添ふ妻にも深く包み。夕霧が生んだる某が實子と僞りしかば。流石女房の優しくも夕霧が心を憐み。乳母と名付け此の内へ呼び取りしは皆此の悴が可愛さ故。それに何ぞやあさましい體にて忍び入り。親よ子よのと名乗りあひ。知らぬ子に智慧つくる。ヤレ。幼くても此の子はな。馬に乗り槍つかせ生先立身樂む身の。悴に恥を與へん爲か左近が武

士をすてんためか。色に迷ひ馬鹿つくし女どもが手前も恥かし。詞エヽ恨めしや是非もなや悴を返す連れ歸れ。町人の子に刀脇差無用なりと引寄せて。もぎ取る所へ奥方は走り出で。なう情なや此の子が事は我とても。直の話を聞きしかども調べてはお侍の一分廢ると思案して。貰ひ切つたる此の子なり今返しては武士が立たぬ。一寸も放さぬと抱き上ぐるを引放し。詞身を立て名を立て。一分を立つるといふも子孫のため。地實子を持たぬ此の左近誰が爲に身を惜まん。一分すてる合點と大小もぎ取り突出す。いや／＼たとへ此方は戻しても。契約して子にしたからは此の客が返さぬ。夕霧も戻さぬと取付くを引退け。縋り付くを引放し夫をもどく見苦しと。奥方引つ立て玄關をフシはたと。戸さして入りにけり。地伊左衛門も夕霧も スヱテ前後にくれて途方なく。詞源之介泣き出しコレ父様母様。おりや駕籠舁の子ではないわいの。地傾城の子にはなりともない父様の子ぢやわいの。母様の子ぢやわいの。 こゝ明けてくれやい侍ども。あけをれやいと泣叫び玄關の戸をとん／＼と。敲く楓のわくらはに フシ答ふるものもなかりける。地夕霧息も絶え／＼ながらこれ源之介合點しや。詞眞實そなたは左近殿の子ではない。母こそは夕霧てゝごはそれ藤屋伊左衛門。さもしい人と思やるな江戸迄も知られて。左近殿より大身の武家に親類もあるぞいの。地かゝ故の御浪人そなたも憂き目見せまじと。左近殿の子といひしが誰の親と假親の。心はさしも違ふかや。左近殿も其方をふも憎うはあるまいが。我が身の無念一旦の腹立に。いとしい其方を フシ捨てらるゝ。あの父様や此の母は今の如く人中で。踏まれぬばかりに恥をかき。言ひ下げられても其方を抱くが嬉しい。逢ふが嬉しい肉身分けし本の子は。かうもいとしいものかいの母が此の氣色では。もう逢ふ事はなるまい父様の事頼むぞや。せめて一年しつとりと一つ寢臥しもしたいぞと。かき口說きしみ／＼とフシ眞實。つくす憂き涙。地源之介聞分けて。此方が本のかゝ様か父様は此方か。傾城でも駕籠舁でも本の親がいとしいと。涙交りの笑ひ顏 フシ血の筋見えてあはれなり。ヲヽ出來いた／＼侍とても貴からず。町人とても賤しからず貴い物は此の胸一つ。氣遣せまい伊左衛門が妻子。憂き目はさせぬ力落すな／＼と。言へども我も力なくスヱテ只茫然と成りにけり。地吉田屋喜左衛門駕籠舁雇ひ是非なしともお笑止とも。參りかかつて我等の迷惑。詞外の事ならば何とぞ思案も致すべきが。申しても霧様は親方がかり。殊に病中大事のお身。地先づ連れ歸つて扇屋へ手渡しせねばお爲にも如何。いざ召しませと舁き寄する。扨は再び別れて廓へ歸るかや。ハアウとばかりにかつぱと伏し。既に息も絶えんとす伊左衛門抱き起し。吉田屋は印籠の。氣付さま／＼看病し

フシやう〳〵性根つきけるが。昔より幾人かかうした身の憂き難儀。話にも聞きつれど是程の辛い事。重なれば重なるかや今逢うて今別るゝ。あの子をせめて相駕籠でいざおじやとだき寄するを。地引放しそれは喜左衛迷惑。詞これ世にも人にも恨なし。左近も言はゞ丸三種。女房が情といひ誰が親子三人に仇する者は無けれども。地親に逆ひ財を費し身を奢りたる其の報ひ。あれあの天道に睨まれて何處にて身の立つべきぞ。百里來た道は百里歸る。昔の榮耀ほど憂き目を見ねば罪消えず。男故の苦勞と思ひ歸つてくれよと泣き諫め。地膽し乘すれば皆々と言ひ度い事山數なれど、せき來る涙せき來る胸命の内に今一度。顔ばせ見せ度い逢ひ度い末期の水をあの子の手から。賴む〳〵と夕霧の名に立ちかはる夕霞見送り。見送る門々の。松に太夫が面影を殘して。別れ 三重〳〵歸りける。

下 之 卷

おひの由〳〵夕べあしたの。鐘の聲寂滅。爲樂と響けども聞いてナ。驚く人もなし 引合ノ王野邊より。あなたの。友とては血脈。一つに數珠一。連是が。冥途の友となる。詞エ、物貰ひでも目かりを利かしや。是程育者の出入やら御子の御符のと。居門からて逢いて。地七種囃す間もないが目に見えぬか。通りや〳〵と言ふ所へ梅庵御見舞四枚肩。下りるの衣長羽織、フレ醫者は奥へ ご通りける。詞伊左衛門編笠傾け小聲になり、やれ源之介。母が氣色が惡さうな。地命の内にま一度見せ度く此の妻にて來れども。最早見せる事も見る事も。成るまいと呼けば源之介。早う逢ひ度い事ぢやとて、ヱヱ父に縋りて泣きゐたり。詞梅庵様お歸りと。表へ出づれば滑手杉 家内の上下ついて出で、病氣はどうでござります 梅庵頭を振つて。耆婆扁鵲でも叶はぬ。物に譬へて言はば乾上つた土器に。燈心一筋とほいて風吹きに置くやうな物。今日の日中か遲うて初夜眠り。最早毒も何も構はず氣任せにしたがよい。ア、惜しい人ぢや。夕霧々々というて。親方にいかい金儲けてやつた女郎なや。達者な内に此の梅庵あの人を一年持てば。今頃は匙執らいでも樂するもの。地あつたら金を彼の世へやる。是が本の來世金ぢやと。言ひすて歸れば扇屋一家は打濕れ、フシ返答する者もなし。地ヤレ源之介醫者の言ひ分聞いたか。もう叶はぬ思ひきれ。ア、悲しやどうぞ母様の。死なしやれぬやうにして下されと フシ取付き歎くぞ不便なる。地扇屋了空夫婦。涙片手に蒲團手つからお上に敷き。詞今の相の山が奥へ聞えて。太夫の思に是へ出て聞き度いとおしやる。地是へ這入つて面白い事唄うて聞めて下され。あつと親子は笠傾け奥を見やれば夕霧は。裝著の曾我へて夕べ待つ間の玉の緒の。今ぞきれ行く息づかひ。遣手禿に手を引かれ、オクリ門にへかゝりし其の妻ハル親子は目もくれ、地胸常かり流るゝ涙を

夕霧も。それと見るより飛び立つ如く。心を胸に積み疊む蒲團の上にかつぱと伏し。思ひを涙に通はせて人目を中に憚りのフシせきたぐるこそ哀れなれ。地サア／＼相の山早う／＼と言ひければ。あつと涙の玉鬘。唄ふ聲にも血の涙。子は安方の囀りや。引

あひの山

あひの山へ夕べあしたの。憂きつと。め花。一時の眺めとは知れども。迷ふフシかすかすの。地文にそめても誠はうすく思ふかへとするがなる。富士も麓の戀の山我踏分けて我迷ふ。夢の中戸のフシ夢枕。月を惜みし夜半もあり。辛い座敷を貰はれて冷泉餘所に。行く身を。後の人に、ちよつと鹿島の神も知れ。しんぞ嬉しさ可愛さの。フシ身にもこたへて忘れめや。初手二度迄は。ふる雪の。地罪も恐れぬ無理起請。神も佛も二つの耳に小オクリ嘘と。誠を呻きの橋の蜘蛛手に物思ふ格子叩くを相圖にて稀の御見も離れし。何を歎くぞ歎きても身は十年の勤め、出舟の今日の名殘の床明日の。地朝込枕より。フシ跡より遣手の責め來るは、フシ呵責の責より、なほ辛く仕舞太鼓の音迄も。寂滅爲樂とフシ響くなり。地死出の山路は誰とても一つ泊りの旅の宿。浮世隔つる淀川此の世に浮名更科や。姥捨て親すて身を捨てゝ櫻花かやちりぢり／＼引へ五つでは絲をよりそめ六つや難波に此の身沈めて八つで遣手に付き添ひ。九つで戀の小使。十や地十五のフシ初姿。髱入れずの。地髮ふさ／＼衣裳のこなし。心利發で道中ようて。戀知り譯知り文の文章。思ひり／＼とし。床は伽羅々々詞沈や麝香の薫までも。今の手向と燻する。種蘇きすてし。撫子の花の盛りをフシ餘所に見てスエテ惜しや三途の川霧と。消ゆる其の身も人目にも。昨日今日とは今迄にフシ数珠を手に取る事もなく。地何をか後世の土産ともいさ白露の仇し野や。あひの山野邊より。彼方の。友とては樒。一枝一雫これが。冥途のハルフシ友となる。地導となれや此の言葉。形見ともなれ回向となれ。迷ふな我も迷はじと。思ひをこめし一節にフシ聞く人。哀れを催せり。

地扇屋夫婦情深くなう此方は聞き及ぶ。藤屋の伊左衛門殿さうな。忍ぶ事も時による。娘とも思ふ夕霧が。臨終の心が滿足させ度い早う逢うて下され。アヽ忝いと走り寄り詞太夫又逢ひに來たわいの。伊左衛門様私や死ぬるわいのう。地母様死んで下さるなと。縋り付けば家内の上下。わつと一度に聲をあげフシ泣きしづむこそ道理なれ重き。枕に手を合せ。地旦那様少い時より御苦勞に預り。御恩も報ぜずフシ死にまする。是さへはかなう御座んすにいとしい男可愛い子に。逢はせて下んすもう私や佛でござんすとてもの事に伊左衛門様の手で。詞此の髮切つてもらひ佛の形になつて。地親子の手から水を水をといふ聲もフシ絕

えぐ〳〵にこそなりにけれ。地ヲ、髪飾りは假の戯れ。佛の三十二相とはあら木作りの卒塔婆をいふ。只今某が切る髪は阿字の一刀。彌陀の利劍を以て煩惱の覊絆と觀念せよと。指添拔いて二人添寢の寢亂れ髪。ふつつと切れば源之助あつたら髪をと身に添へて。フシ 悶え伏してぞ歎きける。詞重ねて樒の水を携へこれ夕霧。人界は一生造惡の娑婆世界。地わけて遊君流れの身は。面に紅粉を飾つて數多の人を迷はし。綾羅錦繡を身に纒ひ多くの酒を酌み流し。煩惱の種を植ゑて菩提の根を斷つとは遊女の事。地此の水は極樂の八功德池の水と思ひ。雨甘露法雨聚衆生故と聞く時は。是を飲んで心身を濡し九品の淨刹に往生し。半蓮を分けて待つて居や。是其のしるしと同じく髪を押切つて。親子夫婦の手向の水フシ あはれにも亦賴もし。 かゝる所に吉田屋の喜左衞門。六尺に金箱持たせ 詞是は平岡左近様の奥方お雪様の御使 夕霧を請出す所其の筈違ひ是非もなし。されども代金八百兩。其の爲の金子なれば外に使はんやうなし。御病氣以ての外の由此の金にて請出し。一時なりとも廓の外にて。往生させませとのお使なりと 地いふ所へ。下袴の若い者金箱數多昇げさせ。詞これ〳〵扇屋殿。我等は藤屋伊左衞門様の御老母。藤屋妙順様よりのお使。伊左衞門様は父御の御勘當今は此の世に亡き人なれば。お袋様の我が儘に勘當御免はなり難し。夕霧様には御一子迄ある事嫁御孫御に勘當はなし。藤屋妙順が嫁を廓の内にて殺されず。一時なりとも廓を出し。外にて往生させまし度いとのお願ひ。金子二千兩持參致す。地サア〳〵片時も廓を出して下されと。競ひ勇めば扇屋了空。尤なれども金子を取つて隙を遣るとは。詞行末の年月無事で勤める女郎の事。今死ぬる夕霧に大分の金銀取つて。隙をやるは此の扇屋は盗人と申す物。殊に全盛して親方に。大分儲けてくれた此の太夫。地命さへあらうならば。此の扇屋が身代半分は入れまする。此の金子夕霧其方にやる。臨終に金やるとは異な事申すやうなれど。詞此の金では萬部の經も讀まるゝ。跡の追善遺言めされサア〳〵暇をやつた。廓を連れてお出でなされと。地切れ離れたる行き方は流石所に住めばなり。今を限りの夕霧につこと笑ひ。詞アヽどなたも〳〵有難いお志。お禮申して下されませこれ源之介。此の金は親方殿より下された。地其方にかゝが讓りぢやゆゝしい町人になつて。父様の名を揚げてたも。わが身の出世を草葉の蔭より見るならば。萬僧供養にも勝りて。母は佛になるぞや。さりながら。伊左衞門様源之介に妙順様を並べて。三尊の來迎と拜み度うござんす。ヤ妙順様呼びに走れと立騒ぐ。いや呼びにやる迄もなし。氣遣がつてアレ門口にと。手代伴ひ入りければなう花嫁御珍しや〳〵。嬉しい對面誠の佛は西方のお迎ひ。此の妙順はこ

五百番の内

嫗山姥

近松門左衛門作

漢に三尺の斬蛇あつて四百年の基を起し。秦に太阿工（上）市あつて六國を合す。古の君子是を以て自ら衞ると。子路が諂ひし劍の舞。返す袂も面白き。我が神國の天叢雲。百王護國の御守 オロシ 〽偃す民こそ。目出度けれ。地されば今上 天暦の帝御代知食す慈愛。波靜なる遠江枝を鳴さぬ時津風。濱松の宿の邊に當つて。空に紫の雲氣靉き半年の間に曳々たり。是に清和天皇の正統攝津守源の頼光十八歳。斯くと傳へ聞き給ひ唐土の張華が名劍を得たる例。疑もなく此の邊に天下の重寶と成るべき。名劍埋れあるに極つたり。尋ね求めて父滿仲の武功を繼ぎ。源氏の子孫に傳へんと同年の若者渡邊の源五綱に御心を合せ。近隣の宿々二夜三夜泊り鷹野に事寄せて。在所尋ぬる名劍の フシ小夜の中山に。お宿を召されける。地其の頃胤子女院の御弟高藤の右大將高藤とて運の舊家に生れながら當今の御外戚。姉女院の威勢を借つて中納言の右大將に經上り。榮耀奢身に餘り當國の名所を遊覽し。今宵此の宿御泊と宿割の侍肱を張り。むら〱と立掛り 詞ヤア〱當宿に。此の家ならで御本陣になりさうな家なし。先立ての宿札何者ぞ。幕も札も早々撤くれと呼ばはりける。亭主驚きこれ〱粗忽なさるゝな。忝くも攝津守頼光 地源氏の大將の御宿札と制すれども。なんの頼光源氏でも毛蟲でも。清原の右大將殿御威勢には敵ふまじ。伸し張らば幕引斷り。宿札打割り引捨い出せと罵りける。詞渡邊の綱聞きもあへず。何條光に打つたる宿札指でも差さば踏殺さんと。躍出づるを頼光暫しと鎭め給ひ。同じ武家にもあらばこそ長袖に勝つて譽ならず。殊に彼は 右大將女院の弟。朝家に敵するなどと讒ぜられては不覺なり。地宿に此の家を立出で脇宿に一宿せん。汝殘つて穩便に明渡すべしと。手廻少少御供にて。裏の小道の松陰よりヲクリ山路に通らせて出で給ふ フシ時刻移ると。地頼光の宿札引拔いて。清原の右大將殿御泊と高々と押立て。引並べて右衞門督。平の正盛同じく泊と フシ宿札二本ぞ立てたりける。地渡邊今は堪りかねて躍出でて下人ばら。取つて突退け大音上げ。詞清原の右大將は。右衞門督正盛と名を二つ付けられしか。先に打つたる宿札替ゆる法はなけれども。主君頼光若輩なれども。勇氣寛濶く。縮者の右大將に張合ひ後日の讒を受けん事。犬に食はれし同然とおとなしく宿を替へられしに。定めて是は平家の大將正盛な。地彼と相宿召さるゝからは頼光も相宿と。正

盛か席札取つて引抜き、叩き割んとする所
へ平の正盛。怒れる聲にてはつたと睨み。
詞ヤア己れは頼光が下人綱といふ童よな。
此の度右大將殿東の名所御遊覽に。御同道
申すからは相宿の席札誰に憚る事あらん。
主從ともに口頭蒼も切れぬ小忰ども。元の
如くに札立て直せ。但し割られば割つて見
よと太刀の柄に手を掛くる。渡邊莞爾と笑
ひ。ヲヽ源氏の憤ひ御邊の樣なる相手は。
大人の手を出す迄もなく前髮立の子供の謫
取。主君頼光に宿を明けさせ右大將の宿を
籍つて。御邊溫くり泊らんとや暖な事。地
右大將一家の外踏込まば空臑薙がんと。席
札微塵に踏碎き仁王立に立つたるは。金輪
際より忽に　フシ生拔いたるが如くなり。地
正盛そゞろ恐しく身は顫へども押鎭め。己
れ生けて置く奴ならねど高官の御同道。騒
動も畏あり妾は某大人しく宿端に別宿す
よつく性根に覺えて居れと。臆ぬ顏にて立
歸れは渡邊は見向もせず。右大將の宿入の

中押割つてのさく〳〵と羽交伸したる夕鴉、
泊ぢやないか旅籠屋の門賑。はしく　三重へ
暮れかゝる　フシ上り。下りの旅人の。地粹
と野暮とに揃れて揉まれて共擂の。招く薄
もおじやれ〳〵が　フシ戀をよぶ、假の契も
末かけて　歌へ其方百切りおりや九十でも。
心次第の　フシ莚枕。　フシ笠も預る。地股引
洗ふ、洗足の湯と膳立とぐわつた菱屋の門
構。本陣宿の忙しさ數多の出女下男。中に
若葉の喜之介が蹟の季よりも角前髮。地氣
も取れて顏の色白瓜膾夕飯の　拵へ急ぐ薄
刄の音のちよつき〳〵ちよき〳〵〳〵。ち
よつきり切盤百人前を夢の間に。仕立て濟
して息休　フシ煙草喫へて立ち居たる。地下
女の小絲忙がしげにこれ野良松　詞暇の無
い旅籠屋奉公。殊に今日は清原樣とやら麥
藁樣とやら。お公家樣の大客。上つ方は物
靜で御料簡もあるべきが。下々の辨に口惡
く。膳が遲いの何のとていぢらせてたもん
なや。地なぜにきり〳〵働きやらぬ煙管は

わしが預ると。引奪れば喜之介エヽ小喧し
い　詞男の仕事がもどかしさうなこれ。料理
したり水汲んだり椀拭いたり門掃いたり。
打つたり舞うたり此の手一つで百足の代も
仕る。貴樣の樣に毎夜々々旅人寢屋へ引入
れ。煮燒もせぬ加減のよい味い手料理振舞
うて。呷く程錢儲けて緩と朝寢召さるゝ
と。詞我等が仕事は格別　歌溜めた錢緡脫い
たり差いたりせまいか。さればいの。ヲヽ
フシ嘘ぢやないとぞ笑ひける。　詞ムヽ是は
聞き所。なんぢや毎夜帶解き勤するとの云
分か。これそんな小糸ぢやないぞや。傍輩
衆は面々に勤次第に錢金貯め。親里貢ぎ身
に一重も飾れども。地私は此方を思ひ染め
面倒見よう見られうと。賴もし盡の言替せ
若し末の緣ありて。一所にも暮したいと隨
分と身を嗜み。旅人の酒の挨拶肴に小唄謠
うたり。僅の錢を頂く時は淚が飜れて口惜
しけれど。若い此方が奉公の身で義理順義
もあるものと。一錢も身に付けず皆此方に

いふも闘路の朝烏 フシ飛立つ心ぞ道理なる。それ／＼奥から行燈提げて誰やら来る。怪しめられなと目弾しちやつと忍べば小糸戻らぬ顔拵へて。座敷取置く王箒 フシ紙屑拾うて居たりけり。地敵の平太燈火背けこりや女物頼まう。詞明日のお立は明六つ。其の點に合ふ様に月代一つ頼みたし。上手な髪結あるまいか。アイ／＼お易い事。どりや呼んであげましよと起たんとすればいや／＼。些様子あつて男はならぬ。地女の髪結あるまいかといへばはつと心付き。詞なう／＼お前はお仕合せ。私は地猫町代の娘。詞髪月代一通りは小鬢剃際中剃逆剃剃刀。詞お顔はたつた一剃刀にごしく／＼。詞耳なりと鼻なりとお首なりともころりつと剃落して上げませう。詞アヽ忌々しい氣味悪い。地仇口きかすとはや剃れと。剃刀出し髪おつさばき椽先の水桶に。頭浸して紅葉ばの焦るゝ小糸の心の内。喜之介は襖の陰今や出でん／＼。と互に目配せ氣を通しこれ／＼頭がまだ揉めぬぞ。かう剃りかゝつて氣を急く事は些ともない。揉めぬうちに剃りかゝれば剃刀が外れると。いへども更に氣も付かず。消ゆる命は歴取に 地落つる雫のはかなさよ。詞サア今が大事の盆窪。備かんせと髪撫上ぐれば喜之介は。襖を密つと締め明けに後に立つても親の敵覆をかけぬは口惜しと睨ふ色を女は悟つて。申し旦那様。お前は強さうなお侍。定めし人斬らんした事もあらうの。テヽ斬つたとも斬つたとも。地チヽその斬つた坂田が娘糸萩。親の敵といふより早く抜討の。首に連ねて髭一房。兩膝かけて一太刀に フシ水を切つたる如くなり。地サア仕果せた立退んとかひ／＼しくも首提げ。女を小脇にしつかと抱き フシ一散にこそ落失せけれ。地右大將が侍ども何事と走り出で。南無三寶平太討たれ候と。呼ばはる聲に高藤駈出で地踏鞴踏んで。詞エヽ口惜しや無念やな。正盛に向つて詞なし。地よし地を潜り雲に入るとも高藤が威勢にて。搦捕らで置くべきか追つかけ討ちとれ者どもと。怒れる聲は松吹く風月日に擬ふ日の轄の。小夜の中山手分して上を下へと 三重ヘ返しける フシ二人は漸々。地宿端まで走りつき。詞振返れば追手の提灯八方を取巻きて。落ちんすやうこそなかりけれエヽ口惜しや。生中追手に討たれんより御身を害し。腹切らんとは思へども敵に首を取返され。我等が首をも渡さん事屍の上の無念なり。地誰が泊か知らねども爰を頼んで刺違へ。死骸を隠して貰はんと砕くるばかり門の戸叩き。詞粗忽ながら我々は親の敵を討つて。立退く折柄追手厳しく候へば。何方かは存ぜねども御庭を借り切腹仕り度く候。御慈頼み奉ると大音揚げてぞ申しける。地所こそあれ頼光の泊の宿。渡邊聞くより飛んで出で。實否知らねど敵討とは心地よしと。手づから門を押開きサア聞うたおはひりやれ。攝津の守頼光の旅宿。かくいふは渡邊

搦捕れサア地這入らんせ泊らんせ泊りおりやないかえ。旅籠の料理はお望み次第頭から爪先まで。刻んで〳〵さく〳〵汁。眞二つに胴切り。血腥い燒物冥土の道は合宿なし。焦熱地獄の水風呂も沸いてござんす。ざつと行水阿鼻地獄。泊らんせ〳〵フシ泊りおりやないかと招きける。地右大將高藤遁れ難に駈け來り。詞ヤア臆したるか正盛。頼光渡邊なればとて鬼神にてもあらばこそ。後詰は高藤と地いふより正盛悍り出し。乗込んで踏潰せ承ると切つて入る。源氏方にも餘さじと。兩勢どつと入亂れ火水に。なれとぞ三重〽戰ひける。地頼光は忍びの旅小勢の供人大半討たれ。貞光渡邊只二人攻來る敵の眞甲腕骨。胴切縱割車斬蓮立て〳〵三重〽追捲るフシさしもの大勢。地しどろになつて見えけるが近郷の農人浪人右大將が威勢に與し。我も〳〵と入替へ〳〵オクリ射る矢は。〽雨の如くなり。地貞光も渡邊も心は彌猛に逸れども。飛道具を防ぎかね何と貞光。詞若し我が君に掠矢でも當つては末代の瑕瑾。一先づ落し奉らんと彼方此方と見廻れども。皆高塀に圍は堀裏門堅く鎖したり。ヤア此の門一つ押破るは易けれども。後より寄手の込入るも喧し。上へそつと持上げて蹴込の下より落し申さん尤と樓門高き二十尺に餘りし四角柱。二本を二人が面々に引抱へて。ヤアえいやうんと軋ぐればさしもの大門礎離れ。天より釣つたる如くなり頼光も笑はせ給ひ詞門を衛る金剛力士仁王を家來に持つたれば。我が行く先は關もなし女は兄が行方を尋ね。地兄弟打連れ來れ一足も早や落ちよ。我は美濃路を上るべし汝等も粗に切散らして追付けと。悠々として退き給ふフシ御有樣ぞ不敵なる。地其の隙に寄手の軍兵餘すまじきと込入つたり。兩人今は心安し雜人ばら一人宛。切つては手間遠はか行かず後日に此の門建直して遣るばかりと。門柱引放し手ん手に提げ大勢を左右に受け。醉象が岩を割り飛龍の波を叩くが如くはらり〳〵と三重〽薙立つる地ツメ馬も人も堪らばこそさしもの大勢打挫がれ。高藤正盛力なく後をも見ずして逃去れば。ヤヽ面白し心地よし君に追付き奉らん。疾う〳〵急げどう〳〵〳〵どうど踏んだる街道も武勇の道も一筋に。古參の渡邊新參の碓氷の貞光奉公始め。門に手柄をあらはして仁王二天に四天王出づべき兆と聞えける。

第二

地松浦潟領巾麾山の石よりも。積る思は猶重き岩倉の大納言兼冬公の御娘。澤潟姫と申せしは源の頼光と。御緣邊の契約も互に待てば久方の。月日重なり年も經ち情盛も徒に。右大將高藤が讒言故。頼光は行方なく御文の音信さへ。スヱテ枯野に弱る秋の蟲。世に便なき憂き節に。地若し御疑慮の事もやと。御寢間の奉行寢ずの番。女中の外は男混ぜずの大役は。フシ女護の島に。異らず。地お局の藤浪御側に立寄り。詞なう爰な

お子、なぜに浮き〳〵なされませぬ。これ程大勢集つて浮世噺の高笑も、皆お前を勇めの爲お煩でも出た時は。親御樣への御不孝 地日頃のお氣に似合ひませぬと。勇められても勇まぬ顏。詞アヽ又局の氣詰な意見聞きたうない、日本國の花紅葉を今此の庭に移しても。なんの心が勇まうぞ。地吉日極り賴光樣へ嫁入して。今頃はお腹に帶をも結ぶ筈を。あの右大將づら奴に妨げられ。剰へお行方知れず。何處を當所に一筆の。問はせの文さへ フシ長枕。地此の長の夜を誰と寢よおりや泣くまいと思へども。涙が如何も堪忍せぬこらへてたもとはら〳〵と。玉を貫ぬく御目許。腰元茶の間仲居まで御道理樣やと諸共に フシ貰ひ。涙にくれければ。地お局は氣の毒がり。詞アヽなんぞいのお力はつけもせで。和女衆までめろ〳〵と忌ま〳〵しい置いてたも。ヤアそれはさう煙草賣の源七はまだ見えぬか、氣さく者の通者今にも來たら、御姫樣交らに遊び興

して遊ぶまいか。地こりや氣の替つた思ひ付き早う煙草が來れかし。煙草々々と待つ宵の。松葉煙草の柔こき ヲクリ 女中〳〵仲間ぞ賑しき フシ昔は色に。上り詰め。地今は浮世に下り坂田の時行と。埋れし名も父の仇晴さんと思ふ志。厭かぬ夫婦の中をさへ三行半の生別れ。袖は涙の革行李を今は身過と引擔け。刻。煙草 フシ油引かすと賣り步く。そりや煙草が來たわと腰元中早う〳〵と呼入れ 詞これ源七先づ此の革籠は預る。尻塞も下しやいのお姫樣より御意がある。此方も以前は歷々で惡性故に仕損ひ。その姿になりやつたげな。傾城とやら廓とやら大內には珍しき。三味線の一曲を常々にお望みゆゑ。コレ三味線も調へ置くサア〳〵所望とありければ。アヽつがもない。尤以前は傾城の一つ買も仕り。三味線鼓弓淨瑠璃文作野良一卷の諸藝なら 地此方へ任せておく座敷に吉野の山の連彈も。昨日の昔今日は又吉野煙草の刻賣。股引懸で三味線

とは。茶漬に鯷の御望みひらさら御免と逃出づるを。女房だち引留めて其のいひ樣がもう面白い。何をいふもお氣慰め平に賴むと強ひられ。地源七下地好の道てんぽのかはやりませうと。箱より出す三味線の。地絃は昔にかはらねど彈く其の主の成れの果。親の撥騎 ナホス 紙胸の音色優しく 三重 〳〵彈きなせり。紙衣の袖に。置く露と。共に離れし妹背の中。あはれ昔は全盛の。松の位も フシ冬枯れし。風呂敷包。行く先は。知らぬ旅路にとぼ〳〵と。スヱテ 築地の蔭に休らへば。ヤア 地珍しい三味線。なんぼ大內方でも洒落の浮世に廻り來る。車寄より立ち聞けば。ハヽア 詞不思議やあの小唄は。我が身廓にありし時坂田の藏人時行殿に馴初め。地作り出せし替唱歌。彼の人ならで誰が傳へた懷しや、どうぞ差込み見たいものぢやと出放題に聲張上げ。詞是は浪花の遊女町に。誰知らぬ者もない傾城の右筆。濡一通の狀文なら恐らく私が一筆で。叶は

ぬ戀も假名書筆。びらりしやらりのかすり置主様御女房者。後家尼人の女房まで段々の書分は。私が家の傳授事。若しそれな譯用なら。ツヽあ賴みあれとぞ言ひ入れたる。奥には女中目を忍ばさつても嬉しい寶物。いざ呼入れて痴話文書かせてお座。更科樣御呼んでおしや。あいと答へて二人連にて走り出で。おこれなう傾城の右筆殿は此方か。此の頃此の書者何やらそもじに御頼あり。此方へいざと手を取れば。ハア 地 御用とは何ならんお目もじさまにとく賴み。庭の飛石すなくへ。ちよこくくと奥座敷へ。[illegible]の遠慮も無く居たる。内裡上﨟に塲うてよぬ。ツシいづれそれしやと見えにけり。地 煙草盆の源にも何心なく側近く。顏と顏とを見合すれば。ヤア [illegible]とし女房南無三寶とこ隱れ。女はそれと水臭き男畜生人でなし。赤恥かゝせて退けうかと飛立つ胸も人目[illegible]心も碎き折々に ソシ後目に睨むも戀なれや。地 經君何の

氣もつかずこれなう紙衣。そなたの物ごし褄外れ如何樣常の女子でなし。さうした姿になりやつたは定めし深い譯あらん。一河の流も他生の緣包まず語りやとありければ。詞 アヽ何方かはお優しいお詞。お尋ねなくともいひたうてくく胸のたぐる折しも。さらばお咄し申しませう。恥しながら私が昔はうき河竹の傾城。荻野屋の八重桐とて太夫仲間の立者と。いはれし程の全盛の末も遂げぬ仇戀に。登り詰めて此の通。地 夜なくく變る大盡の中にも坂田の此とて。水揚の初日よりふと逢ひ初めて丸二年何か互の浮氣盛登る程にける程に。（登る程にく。イ）切利[illegible]の中二階夜晝なしの床入に。[illegible]樣と異名を受け水も漏さぬ仲なりしに。詞 又同じ廓に小田卷といふ太夫。彼の男に行きつきて[illegible]書いたる痴話文は大方馬に七駄半。船に積んだら千石船。中に寢せたら[illegible]えいやらさ。木遣でも音頭ても[illegible]つても呪うても微塵けもない二人が

仲いよく募つて逢ふ程に。小田卷大きに腹を立て忘れもせぬ八月の。十八日の[illegible]上り月は山より朧染の。裾ひらりと取つて捨て。白無垢一つに引拔き脛もあらはに驅來り。私が膝にふうわりとんと居懸つて。これ八重桐。あんまり見られぬ嫌ちやぞや。[illegible]ア。男をたもるかたもらぬか否か應か否か。二つに一つの返答が聞きたいと。詞 [illegible]づくしを引摑む。此方も一期の大事ぞと弱身を見せず[illegible]。詞 小田卷とこそ[illegible]とやらひかりは喰はぬ出直しや。地 [illegible]い日本にあの人ならで男はないか。よし無いにせよ有るにせよそれ程[illegible]かしい[illegible]。何故に先に惚れなんだ男盗人いき傾城と。いひ樣取つて投げ付くれば明障子打破り。繼三味線を踏碎き欄より下へころくくと 連枯樣まで二けかゝり。木瓣南天めつきりくく切石の上へ眞俯向。鼻は一石六斗三升五合五勺。そりやこそ喧嘩が始つたへ事の此方の太夫樣に。引をつけては叶ふま

い加勢をやたといふた程に。遣手引舟仲居飯炊出入の座頭按摩取。巫女山伏に占屋さん雪踏片足に下駄片足。草鞋掛て來るもあり。臺所から座敷迄大夫樣の仕返しと。彼處では叩合ひ此處では摑合ひ蹴合ひ。茶碗煙草盆あたる物を幸に。打めく打破る踏碎くめり〳〵ぴしやりと鳴る音に。そりや地震よ雷よ。世直し桑原々々と。我先にと逃さまに水擂盥にこけかゝり。座敷も庭も水だらけになる程に。南無三海嘯が打つて來るわ喃悲しやと喚くやら。秘藏の仔猫を馬程な。鼠が咥へて駈出すやら。屋根では鯨が躍るやら。神武以來の悋氣爭。フン此の事世上に隱れなく。地彼の男は其の場より親御樣の勘當受け。我が身も廓を夜逃して根本遊路の浮名となる。鍋の蓋取る杓子取る馴れぬ世帶の其の日過ぎ。男奴故で御座んする。アヽ詞あんまりしやべつて息切れた。お茶一つ下さんせとぞ語りける。地姫君を始め腰元衆。扨心中の女郎やたとへいかなる身になつても。思ふ男と添ふからは面白からうと宣へば。詞されば末を聞いて下さんせ。其の男の父親が。闇討に討たれ敵討たねば叶はぬと。私とは緣を切り行方もなう別れて。親の敵を狙ふとは跡方もない赤嘘。地我が身に秋風立ちけれども何を機に退かれもせず。親御樣の死なんしたを屈竟一の托言に。敵討との口上は釋迦でも一杯參る事。まんまと私を誑す女房には紙衣を着せ。其の身はちやんと榮燿らしい若い女中に立交り。三味線彈いて居けつかり、くさりくさるを見る樣な。日本國の鬼御前の因果を一つに固めても。我が身には及ぶまい初對面の皆樣へ。ありし昔の懺悔話。お恥しやとばかりにておろ〳〵。淚にくれければ。サヽ詞道理々々身にかゝらぬ此方とさへ。聞たうて堪られぬ。さりながら構へて短氣な心を持ちやんなや。地まだ話したい事もあり奥へ通せと姫君は。御簾の内に入り給へば。サア苦しうない奥へおじや。此方へ〳〵と人々はオクリ皆々〳〵一間に入り給ふ。地後見送つて八重桐さらば奥へ、參つて。憎さも憎し男の懺悔。いうて退けうと入らんとするを。時行取つて引戻しはつたと睨め。エヽ詞さすがは廓の女ちやな。親の敵を討つまでと相對づくの離別ならずや。只今の詞は誰にいふ當言。未だ敵の行方は知れず心を碎く夫の體。地兒ともも思はずこれが榮燿に引當てゝ。面白さうな仇口。エヽ恨めしやとばかりにて無念淚にくれければ。女房いよ〳〵嘲笑ひムヽ詞あのまがまがしい顏わいの。親の敵は當人あるぞ。此方の妹御糸萩殿とやらんが。先月廿三日小夜の中山で討ち給ふ。物部の平太は敵ではないかいの。時行はつと驚き。御妹が敵平太を討つたるとは必定か。一定か實か確。氷の荒童といふ人を語らひ。易々と討つて源の賴光樣を賴み。駈込みしとは日本に隱れない事と聞きもあへず。南無三寶地天道にも見放され。弓矢神にも捨てられし。口

惜しの運命やとスヱテ我が身を摑んで泣きるたり。地女房側に立寄つて。これなう今悔んで濟む事か。詞忝くも賴光樣。妹御を匿へ給ふ遺恨によつて敵の主人右衛門督平の正盛。清原の右大將と心を合せ。賴光樣を讒訴し。地勅勘の身となり給ふこれ程大きな騷動を。今迄知らぬとは狼狽者の浮名を。世間へ觸れうといふ事か。前後を思案して下んせ。日頃の心に似合はぬの。エヽ疎しい世に連れて。心までが腐つたかとスヱテ縋付いて泣きければ。地時行突立ち。扨は敵故賴光の御難儀となつたるとや。妹に先越され。親の敵は討たずとも。正盛右大將は敵の敵なり。いで二人が首とつて賴光の御恩を報じ。名字の恥を雪がんと跳出づるを引留め。それ／＼それは悉皆氣違か。討つに討たるゝ程ならば賴光樣に油斷があらうか。彼等は威勢眞最中討たれぬ仔細があればこそ。日陰の御身となり給ふ此方が今駈出して心易く首取らうとは重ねて恥がかきたいか。此方が今迄色好み（いたづらで）〔山本版七行本〕娘をころりと墮したと。首をころりと落すとはフシ雲泥萬里と恥しむる。地時行はうど行詰りアツアさうぢや過つた。然らば是より賴光の御行方を尋ね。御家來となり御威勢を藉つて正盛か。首引抜かんと駈出づるを又引留め。地たつた今恥しめた舌も引かぬに無分別。武勇正しき賴光樣。御內には渡邊の源五綱とて。一騎當千の兵。同じく碓氷荒童。鬼も欺く其の中へ生溫い姿をして。妹に先越され敵を討たぬ無念故。御奉公致したいとはいはれうものかいはしやるか。御取上もない時は地すご／＼とは戻られまい。棒戴いて戻ろより往かぬ方が遙に優し。どうぞ分別はないかいの。エヽ情ないお人やとフシ突倒してぞ泣き居たる。地時行道理に責められて行きつ戻りつ齒噛をなし。拳を握り立つたりしが。もう此の上の分別なしと革籠の中より。氷の樣なる鎧通押取り。腹にぐつと突立て。脊骨をかけて引廻す。女房これは狂氣かと。スヱテ縋り付けばアツ／＼音高し／＼。詞御事が今の惡言は伍子胥が吳王を諫めたる。金言より猶重し。恐らく此の一念項羽紀信が。勇氣にも劣るまじと思へども。地時來らねば力なし。それ迄だ／＼存らへ臆病者腰拔と。指さゝれんは無念の上の無念なり。詞我死して三日が內御身が胎內に苦みあらば。我が魂宿りしと心得十月を待つて誕生せよ。神變稀代の勇力の男子となつて。今一度人界に生れ出で正盛右大將を滅さん。地御事が身も今日より常の女に事かはり。飛行通力あるべきぞ深山深谷を住家とし。生るゝ子を養育せよさらば。／＼と請共に。劍を拔けば紅の。血は夕立を爭ひしフシ最期の念ぞ凄じき。あら不思議や切口より焰の塊 女房が。口に入ればうんとばかり其の儘息は絶えてけり。地斯る處に若侍五六十無二無三に群つて。館の四方を押取巻き。詞ヤア／＼兼冬。右大將高藤公より

汝が姫を召さるれども。頼光と縁組とて承引なき傑悍り千萬。それによつて姫を引立て來るべしとの御使。亂れ入つて奪取れと。喚き叫ぶ其の聲に。兼冬公驚き給ひ。ヤア主ある娘を奪はんとは人畜類の右大將。返答するに及ばずあれ追散らせと宣へども。地 いふにかひなき公家侍防ぐ方なく見えたる所に。伏したる女むつくと起き表に立つたる奴原を。取つては投げ〳〵姫君の在します。御簾を閑うて立つたるは フシ 宛然。鬼女の如くなり。地 正盛が家の子太田の太郎。數にも足らぬ下司女何事か仕出さん。あれ引出せと下知すれば。何某を女とや。ヲヽ女ともいへ男なりけり胎内に。夫の魂宿り木の梅と櫻の花心。妻となり子と生れ思ふ敵を空蟬の。體は流れの太夫職。一念は坂田の藏人時行その證これ見よと二抱餘りの掠の木を片手捩にエイ。やつと捻折つて寄り來る奴ばらばら〳〵〳〵。はらり〳〵と擁立つるは人間業とは 三重 見えざりけり。フシ 此の勢に。地 恐れをなし返し合はするものもなく フシ 皆散々に落失せけり。ヲヽさもさうずさもあらん我が魂は玉の緒の。お命恙なく行末待たせましませと姫君に一禮し。今よりは我何國を其處と白妙の三十二相の容顔も怒れる眼物凄く。島田解けて逆樣に忽ち夜叉の鬼瓦唐門。檜門四脚門塀も築地も飛越え跳越え跳越え飛越え雲を分け行方も。知らずなりにけり。

第三

地 佞人の詞は甘き事蜜の如く。人を損ふ事刃より猶速なり。清原の右大將平の正盛に荷擔し。源の頼光武勇に誇り狼藉者を引込み。民家を騷し我々が手の者大勢討取り。剩へ都まで切上らん企。上を輕しめ下を傾け候と。再三讒訴しきりなれば。遂に寧成乳虎の牙にかゝつて。郅都蒼鷹の忠臣の翼も折れ。勅勘の身となり給ひ美濃の國に能勢の判官仲國は累代の被官といひ。內緣深き好によつて ヲクリ 暫時へ忍び在します。地 判官の妻小侍従一子冠者丸十六歳。夫婦親子等閑なく。家内の男女勞り仕へ奉り。御心置く方も フシ 夏過ぎ秋も始めなる。西面の欄干に。色々の燈籠を飾らせ。詞 此の夕暮の御徒然と御盃を參らすれば。地 頼光も淺からぬ淺茅が露に燈籠の。光合ひつゝ玉しける昔の秋を思出で。數盃を傾け興に入り。長歌作り朗詠し ヲクリ 謠ひ給ふぞ面白き。

燈籠の段

フシ 數々廻る盃の。影に映ふ燈籠の。色を換へ品を換へ切籠太鼓のなりもよし。籠に入れたる造花 ヲクリ 桔梗。蓮葉藤の花風に。揉れして。フシ 百合の花。歌 あの奧山の。一本薄。いつ穗に出でて亂れ。亂れあふひの フシ 花菖蒲。我が思は深見草 小ヲクリ 誰か。憐と白菊や紫苑岩菲に罌粟繡線菊の花桶に。枝垂櫻や絲櫻(柳イ)。フシ 水なき空の。釣舟も。焦るゝ色の。紅椿手鞠山吹。杜若。歌仙の姿置揚に。文字を透のすかし燈籠額燈籠。

フシ手際優しき。花葛フシ振分髪を比べこし井筒燈籠井戸屋形ハルフシ退屈へ\はるゝ朝顔の花の臺の輪々毎にフシ灯す燈火きら〳〵と。さながら秋の。地螢飛び交ふ宇治川の網代燈籠簾子燈籠洲濱團扇團扇。扇車に水車。フシ油煙に。つれてくる〳〵と廻り燈籠。影燈籠。月も更け行く夜嵐に。ウ廻れ〳〵品よく廻れ風車。小車の。花見車に忍びの車ア丶〳〵百夜の車。餘所に主ある袖引くな。袖褄引くなフシ女郎花。地戀を草ハル美人草。フシ四季に色ある造花。ハル手を盡。してぞ飾りける。

地頼光は甚た興に乘じ酒宴。酣の折柄。詞渡邊の綱碓氷の貞光御前に罷出て。詞さて此の度判官殿の忠節にて。我々まで安堵の儀淺からず候へども。何時までかく悠々としてもあられず。御大將は疎あらん忝くも六孫王の御孫。攝津守源の頼光。郎等には先づ此の渡邊綱。碓氷の貞光。地一席にたゞ二人なれども兩腕に百人宛。胴骨にも百人づゝ。押取つて此の座にばかり六百騎。何を浮々待ち給はん。詞覊道には方人多く直なる道には入る者少し。右大將が威勢を縮つて平家富の世となりなば。正盛門盛が一族にし萬民の歎遁かるまじ。詞兩人が勸誡つて都の體をも窺ひ。諸國の御家人語催し科なき旨を披聞し。彼人ばら。々に推薦し御本意遂げさせ奉らん。詞如何にしても此の樣に安閑と暮しては。節骨たるんで精根盡果て。地聲へはフシ早やお暇とぞ申しける。地綱も罷召し我もここぞ思ひつれ。さあらば兩人は伊勢路紀の路へ赴くべし。我は又北國にかゝり源氏志の勢を集め。都九條六孫王の誕生水にて出會はん。詞門出といひ貞光には未だ上盞の盃せず。名乘の一字を讓る上は向後源氏の家の子ぞと。御盃を下さるゝ貞光しさつて頂戴し。天が下に二人ともなき大將軍を主君に持ち、下地の勇力十倍増し。詞一騎當千と思召されと三杯續けてつゝと乾す。地能勢の判官座を立つて。詞目出度し〳〵。貴殿渡邊殿の武勇に肖り申す爲。其の盃を一子冠者丸に下されかしとありければ。詞お辭宜も申すべけれども武勇に肖り給ふ爲。地お望に任せんと差す盃を冠者丸。嬉さ〳〵敬ふ體母は見るより打驚き。鉄を顏に押當てゝスヱテ包行顏も。おのづから。シ聲に現れ色に出で。地人々これはと御座敷興覺めてこそ見えにけれ。詞判官見かね御祝儀の折柄。不吉の落涙狂氣したるか。罷立てと引立つる。渡邊止めて。ヲヽ尤々。貞光の盃不足に思はるゝ事。母御の氣には道理至極。爰は綱が頂戴せん。冠者殿いざ差し給へといひければ。地母はやう〳〵涙を押へ御不審は御理貞光殿をゆめ〳〵輕しむにても候はず。我が身の運の拙さと彼の子が果報の薄き事。日頃くよ〳〵思ふ事思ひあまりて涙が溢れ御祝儀をさまさせしぞや。御大將にも綱殿も御存じ貞光殿への物語。妾は初小侍從の局として。御父滿仲公に宮仕へ。源氏の胤を身

詞にも虚言なく心にも懸子なし。御身も亦僞なく眞直に返答あらば。語るべき事あり心底聞かんとありければ。ア、地今めかし何事か存ぜねども。常にも僞り申すにこそ殊に大事の盂蘭盆の。年に一度のお客の精靈佛の前にて露程も。虚言のお返事致さうか フシ語らせ給へと仰せける。詞判官點頭き懐中より文一通取出し。コレ是見られよ。頼光是に御座の由右大將傳へ聞き。急ぎ詰腹切らするか但し密に刺殺すか。首打つて出すに於いては。一子冠者丸は由緒ある者なれば。源氏の大將と奏聞し。取立てんとの文に起請を書添へ越されたり。地されども某かゝる非道に與すべきか。頼光を密に落し奉り。右大將より咎に遇はゞ腹切るまでと。心に藏め打投ぐつて置きけるが。詞御身昨日の口說事。たまたま滿仲の若君を誕生せしかひもなく。平人の判官が子と埋るゝ冠者丸。明暮本意なく悲しゝと水に棲む蝌斗まで思ひつゞけて悔みの體。母たる身にては道理なり。畢竟此の判官が爲には我が子にて子にあらず。現世の親とは御身の事。地頼光を失ひ冠者丸を世に立つべきや。後悔なき樣に心の底を眞直に。聞かまほしゝとありければ小侍從はつと胸塞り。文繰返し緣返し。顔を傾け目を塞ぎ胸に手を組み差俯き。思案とりどり樣々にスヱテ暫く應答もなかりしが。ア、詞實さうがやものなう判官殿。假令頼光樣を助け落しても。斯く詮索する右大將御首を見ずしては。雲の裏にもよもや助け置くべきか。時には冠者丸も世に出です。地一も取らず二も取らず源氏の破滅。此の時なり。痛はしながら討ち奉り冠者を源氏の大將軍。清和の系圖を繼がせんは我が身の幸あの子が果報と。いはせも果てずヲヽ皆まで聞くに及ばず。詞さこそ思ひて尋ねし事御首討つは今日の中。地用意せんと立つ所をこれなう。御身の爲には相傳の御主。世の譏天の咎佛神の怒も恐ろしゝ。自らが一女刀に賺し寄つて刺通さん。場所は此の持佛堂千に一つも仕損ぜば。聲を掛くるを合圖に駈着けて首取り給へ。ヲヽ潔し然らば御身討たれよ。次の間に忍び居て聲次第に駈出でん。必ず急くまい氣遣なされな首尾ようとヲクリ別れて〳〵座敷に立出づる フシ跡見送つて。北の方恥しや男も女も愼むべきは舌三寸。子を思ふ餘りの詞に心を見探されし疑受くるも尤詞の言譯眞しからず。所詮御身代に冠者丸が首討つて頼光の御難を救ひ邪なき誠の心。此の佛こそ證據ぞと貞女の道を守刀。袂の下にフシ押隱す。數珠も我が子に。別れの涙。地今日一日を現世未來。詞今障子を颯と明けければ冠者丸立出で。日は佛事の日とは申し乍ら。片親にてもある者は分きて祝日。地目出度くお顏見せ給へと。莞爾なるを見るにつき母は心も亂るれど。さあらぬ體にてヲヽ此の祝日に。詞髮をも結はず取上髮は何事ぞ。頼光樣は何方にまします。さん候築山の涼み所に御入。

我等もお側にありけるが。残暑凌ぎ難く行水いたし髪も解き。地自髪に取上げ見苦しからんと。つと掻撫づる手付手元も今の間の。記念と思へば胸逼り。フシ物いふ聲もしどろなり。詞これ冠者丸現世の親より未來の親が先づ大事。地行水せしこそ幸ひ帷子着替へ身を清め。御經誦んで父精靈へ手向け。詞若き身とて。無常の命いつ何時の定めはなし。自他平等の回向しや。地あつと應へて冠者丸親の襲ぬる死裝束。其の身はそれとも白帷子フシ思染めぬぞ哀なる。地能勢の判官仲國は妻の小侍從頼光を。騙討に討たんとは蟷螂の斧。却つて御佩刀にかかり顯れては一大事。あら氣遣はし胸安からずと傍間の妻戸に窺へば。靜にお經の聲聞ゆすはやこれぞ頼光の御聲。かく御心を許されし上は何事かあらん。物音のそよともせば妻戸一重蹴破つて。唯一討と鯉許拔きかけて耳を澄て控へたり。冠者丸は一心不亂誦む御經の日も長けたり。アゝ嘆くまい後れまいと母は刀をするりと拔き。後に立つは立つたれども。髮黑々と色白に讀誦の辯舌爽に。百人にも優れし性質見るに目も眩れ心消え。太刀振上げし手も弱りフシ涙の。闇に迷ひしが。地扨可哀やな後より此の母が。斬殺すとは露知らず。慈眼視衆生福聚海無量と誦むが不便やな。親を殺す子にばかり天罰當るは何事ぞ。我が如く子を殺す親にゝ罰の當れかし。奈落に早く沈みなば此の世の思はせまいものと。太刀振上げては泣き沈み消え入つては又振上げ。聲をも立てずかつぱと伏しからりと投げし太刀よりも。胸を切裂く思の刃フシ涙。玉散るばかりなり。地御經も早讀誦の時刻過ぐれど討つも討たれず。詞詮方なき判官殿は在はせぬか。出會ひ給へと呼ばゝればさしつたりと妻戸蹴破り飛んで入る。冠者丸も飛退り。互に顏をきつと見合せフシ呆れて。詞はなかりしが。地母は泣く／＼聲をあげ御不審は尤やれ冠者丸。詞右大將より頼光を討ち奉れ。御事を源氏の大將と仰がんとの内通。地判官殿の名の大事御身を害して頼光の御首と。敵を遁し御難儀救ひ。御身も母も末代に女の道忠孝の。名を止めんと此の太刀を幾度か打付けん。／＼とはしたれども愛しい可愛に目も眩み。どうでも母はえ討たれぬなう判官殿。はや／＼彼の子を討つてたべ。詞こりや健氣なお主といひ元は兄。地お命に代るは本望なり譽なり。母方が賤しうて未練の最期と笑はるゝな。目を塞ぎ手を合せ尋常に討たれてたもと。口說き給へば冠者丸顏色さつと蒼くなり。わな／＼顫ひヤアなんと我等が此の首討たんとや。親分ながら判官殿はもと他人。賴みにしたる一人の母情なや憎らしや。最初の頰にも美よ爽よと宣ひしが偽か。首討たるゝ科ありとも助くるこそ親の慈悲。つれない母や恐ろしやと。遁げんとするを母飛蒐つて引留め。エヽあさましや口惜しや。ヤア科あつて討たるゝ程ならば母が此の身

中の。盛者。必衰の堺かと。我が身に問へは我が答。否にはあらぬ。稲葉山。後に見なして何時か復。世にも青野が原ならば。今は昔の世譚と思ひ續けて行末は。垂井赤坂青墓もフシそれぞとばかり夕まぐれ。地松の嵐のとう〳〵。さら〳〵さつと吹下し。雲の往來も餘所よりは早暮過ぎて物凄く。名をだに知らぬ山中に茫然。として三重へ立ち給ふ

フシ草木茂つて。地嵒々たる岨陰横折れし。枯木の枝を見上ぐればこは如何に。老若男女の血汐の生首梢にひつしと懸けたるは。フシ只熟柿の生つたる如くなり。地頼光ちつとも臆せず。詞ム、言はれぬ狐狸ども。落人と侮つて魂を拔かんとな。地シヤもの〳〵と髭切拔きかけ。瞬もせず守りつめて立ち給ふ。時に向ふの木蔭より小山のやうなる大男。丸太舟を漕出す如く滑くつて歩み寄り。頼光の足許へどつかとすわりし有樣は。追剝の大將と ノシ看板打たぬばかりなり。地頼光ものさばり聲こりや〳〵男。詞うぬが面相只者ならず商賣も合點なり。某は善光寺參詣の上方者。路銀を斷らし一宿すべき樣もなし。近來無心千萬ながら。和主が常々盜み蓄めし。金銀衣類はいふに及ばず。身に纏ひし古緞袍腰に差いた候しも。地はや〳〵拔いて渡せ命ばかりは助けてくれんと。いはせも果てずから〳〵と笑ひ。詞ヤアラ丁稚奴が味をやろよ。身が一席の台詞の裏を食すは曲者、意地張つて大怪我まくらんより。うぬが緞袍腰に差いた赤錆も。早く爰へまけ出せ。渡さぬだてを吐出さば。こりや。地此の首の連中に加へん。西の枝か東の枝か。サア〳〵望めと詰めかくれど頼光返答も仕給はず。詞ア、此の程の旅疲とろ〳〵と寢てくれんと。地岩角に駈上り。首二つ三つ引摑んで飛下り。ヲ、日本一の枕ごさんなれと兩足ずつと踏み延し。寛に臥したる御有樣 フシ不敵にも赤怖ろしい。地山賊今は堪りかね柄に手を掛け拔かん〳〵と悶けども神武智勇の名將の三德兼備の威に壓され眼も眩み腕瘻れ。覺えず顫ひ出でけるが。這の山賊ほうど呆れ我十餘年の今日迄。多くの者に出會ひしが一度も斯樣の不覺は取らず。詞さもあれ御身只人ならず。地包まず語り聞かされよ。なう底の知れぬ相手ぢやと フシ舌を。卷いてぞゐたりける。詞頼光打笑ませ給ひヲ、さもあらん。凡そ此の土に生ある者我が名を知らぬ事やある。源の滿仲が嫡子攝津守頼光ぞと。地聞くよりはつと飛退り頭を大地にすり着け。ア、勿體なや〳〵。詞さればこそ始より世の常ならず見奉り候。扨は平の正盛。淸原の右大將が讒言にてかゝる御身となり給ふよな。地所こそあれ此の處にて遭ひ奉るも宿世の御緣。我は卜部の熊武と申す山賊の張本。向後一命を擲ち君に仕へ奉らん。御沓取とも思召され給へかしと。思ひ入りたる言葉の末頼光御氣色斜ならず。ヲ、頼もしし然らば今日より主從ぞや。子

孫に長く武功を傳へ幾千代かけし壽に。卜部の季武となのるべしと宣へば。有難し有難し昨日までは追剝。今日よりは忝くも源氏の郎等卜部の季武御供申す。山も谷も草も木も皆我が君の御領内。此の山の獸も鳥も蟲も皆傍輩。懸けたる首は傍輩の烏殿への置土產。さらば〳〵と見返るや山路。返るや 三重 謠フシ〽一洞空しき谷の聲。山高うして海近く。谷深うして水遠し。前には海水瀼々として。月眞如の光を挑げ。後には嶺松巍々として風常樂の夢を破る。刑鞭蒲朽ちて螢空しく去る。諫鼓苔深うして。鳥驚かずとも フシいひつべし。心は昔に。變らねども。地一念化生の鬼女とや人は陸奧の。長地信夫の山にあるかとすれば今日は甲斐が嶺木曾の山。昨日は淺間伊吹山。フシ比良や横川の花曇。雪を擔ひて。山樵の。樵路に通ふ花の蔭 小オクリ憩む〽重荷に肩をかし。フシ月を伴ふ山路には。地雪月花を弄ぶ。心は賤の目に見えぬ鬼とや人のいはゞいへ。謠〽よし足曳の山姥が山 地廻りするぞ苦しき。暮るゝも早き山蔭に行き暮れ給ひて賴光。道なき方に踏紛ひ。里は何處と誰にかも東西分かず立ち給ふ。御供の季武四邊を見廻しャ。詞あれに柴刈る女休らふからは人里もはや遠からず。屈竟の案内者これ女此の山は何といふ。麓の里へ下る者導せよといひければ。地是は信州上路の山の巓。御覽の如く道もなく麓の道とて東北は。五十餘里秋田の地。地幾重の谷嶺繩を渡して橋となし。怖しや唐土の蜀棧。天竺の流砂。葱嶺とやらん難所にもまさるとかや。詞北は越後越中の境川。これも谷二つ越え。十里に餘れば今日の中には思もよらず。地おいとしや我等が方に泊めましたう候へども。何れも若き殿達此の柴嬶が栖家は。お嫌であらんといふ風情。不束ならぬ山人の。フシ薪に花とはこれならん。詞賴光打笑みイヤそれは逆樣。あらくましき若者ども其方こそ厭はれん。地行暮れたる山道柴刈はおろか山姥の栖家でも。苦しからずと宣へばはつと駭く容顏にて。詞ムム扨は自らが山姥と見えけるか。山姥とは山に栖む鬼女。地よし鬼女なりとも人なりとも山に住む女なれば。さ見給ふも道理や ウタヒ〽そも山姥は生所も知らず宿もなし。たゞ雲水を便にて到らぬ山の奧もなく。人間ならずと地フシ恐るれど。地或る時は山柴の山路疲るゝ肩助け。里まで送る折もあり又或る時は織姫の。五百機立つる窓の梅枝の鶯絲繰り綿繰り紡績の。宿に身を置き人に傭はれ手間仕事。櫛さへとらぬ亂髮 フシ女の鬼とは理の。世を空蟬の。唐衣 地千聲萬聲の。碪に聲のしつてい〳〵。しつていからころ槌の音。谺に響く山彥も皆山姥が業なりと。思ふも見るも人心。謠〽煩惱あれば菩提あり佛あれば衆生あり。衆生あれば 地山姥も。などかはなから フシざるべき。地都に歸りて夜語にせさせ給へや。終夜語り參らせんと庵に。誘ひ 三重〽入りにける

フシ小高き所を。地しつらひ頼光を請じ奉れは。詞いや〳〵左樣になさるゝ者ならず。一夜の程は軒の下にも明すべし。見申せば一人住みの女性此方へお構ひなく。渡世の營せられかしと辭し給へば。地いや紅は園生に植ゑても隱なし。大將軍の御骨柄まがふ所候はず。詞誠や源の攝津守殿は。清原の右大將平の正盛等が讒奏にて。御身を危め流浪へ流離ひ給ふとは。山の奥にも隱なし。それとも名乘り給ひなば。自らが身の上をも語り參らせん。地定めて旅疲何をがな御饗應。折節山々の木の實も皆落果てぬ。詞實に思ひ付きたり筑紫宰府の山に。毬栗一枝昨日迄ありしもの。是を取つて參らせんと表に出でしが振返へり。必ず〳〵奥の一間を覗き給ふな見給ふな。地追付け歸らん待ち給へと。岩根を踏む事飛鳥の如く山深く。飛んで入りにけり。詞季武横手を拍つて。筑紫宰府迄五百餘里。今の間に歸らんとや。地彼奴が仕方言分始めから飮込まず。君の武功を押へんと魔障變化のなす所。追掛けて討留めんと駈出づるをやれ待て。詞變化と知つて立騷げば彼に心を奪はるゝ。此の方は靜まつて却つて彼奴を誑し。地鏖殺に退治せんさもあれ彼が詞に從ひ。奥の一間を見ずに置かんも後れたりと。主從覗き見給へばあら凄まじや。五六歳の童五體の色は朱の如く。蓬の産髮四方に亂れ。餌食と思しく鹿狼猪を引裂きて積み重ね。木の根を枕に臥したる樣實の鬼の子これなんめり。知らず我羅刹國に來るかとフシ身の毛。いよだつばかりなり。地時を移さず主の女栗を手折つて振搗け。歸る所を頼光膝丸を拔放し。はたと打てばひらりと外し。ちやうど斬ればはつと開き退つて睨む容顏變り。角は三日月兩眼は寒夜の星と輝けり。怒れる面にはら〳〵とフシ翻るゝ涙にくれながら。うたてやな恥かしや恨なき我が君に。仇をなさんと思はねども。御太刀影に驚きて自性を顯し候ぞや。此の上は力なき枯野の薄穗に出でて。身の上懺悔フシ申すべし。詞我元は遊女の身。坂田の何某と後世をかけし契の中。夫の父なる物部といふ者に討たせ。其の敵討たん爲飽かぬ別の梓弓。夫の運命拙くて妹に先越され。親の敵を討たぬのみか其の事故に源氏の大將。漂泊の御身となり給ふ。地今生のこの身にて此の鬱憤晴れ難し。腹搔切つて魂魄汝が胎に宿り。日本無雙の大力一騎當千の男子と生れ。敵の餘類を滅さんと天に訴へ地に叫び。スヱテ誓の刄に伏したりし。地それより我が身も唯ならぬ子を望月の影深く。人倫離れし山に籠れば。何時の間にかは山巡り一念の角聳ち。歌江戸眼に光る邪正一如と見る時は。鬼にもあらず人にもあらず名は山姥が山巡り。春は三芳野初瀬山高間の山の白妙に。擬ふ霞もそれかとて花を尋ねて山巡り。秋は淸き空の色。かはらぬ影も更科や。フシ姥捨山の。名に賞でて。月見る方にと。山巡り冬はさえ行く比良が

嶽越の白山時雨行く雲を起して雲に乗り。雪を誘ひて山巡り巡り〳〵て我が君に 巡り逢ひしも我が夫の フシ念力通力神力にて。地渡邊の綱碓氷の貞光只今これへ招くべし。詞哀れ我が子をも譜代の家人と思召し。敵御征伐の御馬の口をも取るならば。父が一期の素懐を遂げ母が鬼女の苦患を遁れ。地成佛得脱疑なし二世の苦み助かるも。只大將の御慈悲と角を傾け手を合せ フシ平伏して。こそ泣居たれ。地かゝる所へ綱貞光木草押分け。詞ヤア我が君是に御座候。兩人今夜信濃路を通りしに。誰がいふともなく源の頼光は。此の山の彼方にあの谷の此方にと。地手を取つて引くが如く覺えずこれ迄參りしと、申し上ぐれば頼光鬼女の神變委しく語り。フシ奇異の思をなし給ふ。地扨兩人を季武に引合せ 詞此の上は女が望に任せ。汝が一子に主從の契約せん。地これへ召せと宣へば母は悅び。快童丸快童丸と呼びければ。あいと答へてつつと出で。どつかと坐したる顔の色。詞なう母樣あれは何處の叔父樣ぢや。地土産貰はう嬉しいと。手を叩いて悅びし フシ愛敬ありて凄じき。詞地宛然愛染明王の笑顔かとあやまたる。母立寄つてヤイ慮外者。あなたは常々いひ聞かせし源の頼光樣。今日より御事が殿樣御奉公精出しましよと。地申しやいのうと數へられ。はつと手をつき一禮し。詞隨分奉公精に入れ。敵の首は幾つでも。地引拔いて上げましよと。生先見えたる廣言にフシ御悅は淺からず。詞母重ねてあの岩窟に熊猪を追入れ置き。折々力を試し見れば。御覽候へあの如く引裂き候、地これお目見えのしるしに相撲所望といひければ。ずんと立つて窟の口に立てたる磐石。輕々と取つて投げ退け兩手を擴けつつ立つ所に。内より荒熊飛んで出づるをどつこい任せとしつかと抱く。熊事ともせず捻付けんとすれどもいつかな動かばこそ。摑みつけばこぢ放し組付けば押伏せ。呻き哮る喉笛を二つ三つ叩きつけ。ひるむ所を取つて押へ片足摑んでくる〳〵〳〵。二三間かつぱと投げ。フシ母がア、草臥れた乳が飲みたい母樣と膝にぞもたれける。頼光甚だ御喜悅あり。詞郎ち例なき強力母が子にてありしよな。只今冠させ坂田の公時と名付け。四王天の四天を表し貞光季武綱公時、地頼光が家の四天王四夷八蠻を切靡け、源氏の威光四海に照さんしるしぞと。各さゞめきあひ給ふ。綱貞光詞を揃へ。詞君は知召されずや。近江の國高懸山には惡鬼栖んで國民を惱し。折々は都方へもあらはるゝ故。諸國の武士に惡鬼退治の宣旨下るといへども。お請け申す者もなし。武勇に長ぜし武士鬼神退治あるにおいては。勳功勸賞望みに任せらるべしとの高札所々に立てられたり。地此の勢に惡鬼退治思召し立ち給へと、勸め申せば頼光それこそ武運開くべき瑞相。多くの人數無用なり主從五人山續に分け入つて。鬼神が自在に身を變じ千騎とならば千騎を

討ち、萬騎とならば萬騎を討ち天下泰平の忠義をあらはし。敵を滅す前表はや打つ立てと進み給へば。詞公時悦びヲ、鬼神退治面白からう。これ人々公時は。生所も知らず宿もなき山姥の子なれば。地産所も山產屋も山。育つ所も山なれば山道の先陣仕ると。地眞先に立つて出でければヲヽ出來したく。心にかゝる事はなし母はもとより化生の身。有るとも無しとも陽炎の影身に添うて守りの神。これ迄ぞ公時これ迄ぞ我が君。暇申して歸る山の。峰。にいざよふ月かと見れば。まだ中空に暮れぬ日影の暮れしも通力。庵と見えしも輪廻を離れぬ妄執の雲水。流れ〳〵て谷に音あり フシ梢に聲ある。風に消え〳〵。嵐に散り〳〵ちり積つて山姥となれる。地鬼女が有樣見るや〳〵と峰にかけり谷に響きて今まで此處に。あるよと見えしが山また山に山巡り。山また山に山巡りして行方も。知らずなりにけり。

第五

詞一聲 瑤臺霜滿てり。一聲の玄鶴天に啼く。巴峽秋深し。五夜の哀猿月に叫ぶ。物凄じき山路かな 引。地かくて賴光四天王を相具し。鳥も通はぬ高懸山。屏風を立てたる如くなる。惡所を嫌はず主從五騎木の根に取付き岩間を傳ひ。足に任せて行先も フシ次第々々に道暗く地山とも谷とも知れざれば。とある木の根に腰打掛け スヱテ 少時休らひ給ひける。賴光仰ありけるは斯程嶮しき山中を。はや二三里も過ぎぬれど何の不思議なき事は。必定世俗の虛說ならん。實否を糺し重ねて取卷き討取るべし。地いざ開陣せん人々といはせも果てずあら怖しや。虛空に數萬の聲ありて不思議なきや不思議ありや。思ひ知らせん思ひ知れ。ゑい〳〵どつと笑ふ聲 フシ波の打來る如くなり。地時に向ふの松が枝に五尺餘りの女の首。鐵漿黑に色白く眼の光輝くと。川邊の氷一面に朱を流せしが如くにて。につと由ばむ容顔は フシ身の毛も。よだつばかりなり。詞季武進出でよう〳〵どうも〳〵。鬼の娘に御見もじ此の季武めが思の種。八幡一夜のお情あれ心中づくなら後ともいはず。地今目の前に陸奥の千曳の石と我が戀と。重き思を比べよと大石を。えいやつと片手に摑んで投げつくれば。變化の首は其の儘に掻消す樣にぞ失せにける。地時に山河震動して雷電稻妻夥しく。二丈餘の惡鬼の象火炎を降らし枯木を投掛け。地石上に突立ちしうぞくだつばがん〳〵がつと。呼ばはる聲に此處の山蔭谷蔭岩蔭。松の木の間に散亂し。數多の眷屬一度にどつと喚いてかゝる。さしつたりと賴光髭切を差翳し。數萬の中へ亂れ入り喚き叫んで 三重へ 戰ひける フシ通力自在の。地變化だに名劍の德に恐れ大半滅び失せにける。詞大將破顏鬼怒をなし。賴光を目がけて飛んでかゝるを公時表に立塞り。ヤアさせぬ〳〵。顏の赤いが自慢か。そつちの顏が赤ければ俺が顏も眞赤いな。

母様よりの譲の力の鹽梅見よと 地夕日に輝く黄葉の何れを夫と紅の。兩手を掛けて組んだれども。二丈に餘る鬼神の姿二尺に足らぬ公時が。膝節迄も居かばここ幾年經りし楠の根を。纏ひたる朝顔の朝日に消ゆる命の程。危くも亦不敵なり。鬼神苛て片手を伸べ公時が。胴骨摑んで輕々と差上げ。微塵になれと投付くれば宙にひらりと跳返り。落樣に鬼神の兩足一つに摑んで羽交締。大地にどうと打付け 起上がるを踏倒し打伏せ。捻伏せ毆伏せ馬乘にしつかと乘り。一息ほつと吐いたりしは惡鬼に優りし勢。實に山姥の御子息。フシいや〳〵どつとぞ褒めにける。地渡邊季武貞光なんど我も我もと馳集り。千筋の繩をぞ懸けたりける。ヲヽ心地よし潔し只此の儘に都へ曳け。合點ぢやまつかせ公時が胴より太き大綱を。しつかと摑んでヤア 音頭遣るぞえ。本綱中綱木遣でせい。ヤア天魔のひよえい。地ゑい〳〵天魔の通力を。悉く滅して凱陣。

あるこそ 三重目出度けれ。かくて帝都には高懸山の變化の討手。諸卿詮議ある所へ。大納言兼冬公參内あり。抑も某が聟源の頼光勅宣の御高札に委せ江州高懸山に分入り。變化を生捕り入洛仕つて候へども。勅勘の身を憚り某を以て奏聞仕り候。地早く侫臣の實否を糺され。賞罰を願ひ奉るそれ〳〵とありければ。公時が繩取にて三人四方を取圍み。庭上に引据ゑたる鬼神は怒り喚く聲。宮中に鳴渡り帝を始め月卿雲客。宮女上下の男女迄 フシおそれ慄くばかりなり。詞關白忠平御階近く出で給ひ。變化退治の武功叡感淺からず。此の恩賞によつて頼光出仕御免あり。早々鬼神の首を切り淀河の柴漬に。沈むべしとの綸言なりと詞も未だ終らぬに。詞渡邊居丈高になりからからと笑ひ。こは一天の君の勅諚とも覺えぬものかな。もとより罪なき頼光が御免ありとは何の事。鬼神退治の恩賞は望み次第との御高札によつて。我々一命を擲ち鬼神を

生捕り候へども。未だ洛中に平の政盛といふ恐ろしき鬼神栖んで。科なき者を讒し國土を騷し候。彼奴を我々に賜つて此の鬼神と一所に退治仕らん。是第一の望なりと憚りなくぞ申しける。地關白殿を始め在りあふ諸卿色を損じ。威勢旺の正盛假令如何なる過ありとも。誅せん事叶ひ難し。何にても外の義を望むべしとありければ。詞貞光を始め季武公時口々に。叶はぬ望をまだまだと申しても無益の至り。此の方御無心申さぬからは其方の御用も承らぬ。此の詮合さらりつと元へ戻し。此の鬼神の繩を切解き庭上に放ち。我々も腹掻破り共に惡鬼と現れ。禁裡はおろか日本國に仇を爲さんと地既に繩を切らんとす卿相雲客あら怖や。やれ待て渡邊麁相しやるな。貞光殿季武殿。公時とやら好い子ぢやや頼む繩解くな。鬼を放して堪るものかと 御簾や几帳に身を縮め フシ顫ひ慄き給ひける。地關白道理に服し給ひ奏聞衆議判力なく。檢非違使新を蒙

りて正盛に繩をかけ。四天王に渡さるゝこは有難しと引伏せ。詞サア一人は片付けたり。とても事に清原の右大將高藤といふ。大悪人の鬼の棟梁も賜らんと。詞言上すれば諸卿目と目をきつと見合せ。固唾を呑んで在します關白殿眉を顰め。詞忝くも高藤は女院の御弟。如何に罪科あればとて。右大將の官人武士の手へ渡されし古例なし。此の義に於ては叶ふまじと宣へば。ムヽ御尤々。ならぬ事を是非とは申さず。地さらば鬼の繩解けとつつと寄ればアヽ／＼氣の短い。渡邊殿談合せう綱殿と。周章騒ぎ給ふ所へ右大將つつと駈出し。詞ヤア推參なる童ども。己れ等が如き匹夫の分にて某を滅さん事。蓮の絲にて大石を釣下げんとするに似たり。早く其の場を立退くべしと嘲笑つて立つたりける。綱は堪らず駈出で高藤が。諸膝掻いてどうと引敷き。ヤア匹夫とは誰が事。己れが罪は天下一統存じの所。白状に及ばずと高手小手にぞ縛めたり。

地時を移さず舅中納言兼冬卿　賴光を誘引し參内あれば叡感甚だ麗しく。源氏の本領舊の如く鎭守府の將軍に任ぜられ。兼冬の姫澤瀉姫四位の女官に補せられ。御祝言の吉日まで フシ勅諚あるぞ有難き。地扨右大將の配所は鬼界が島へ。正盛は鬼神と共に誅すべしとの綸言。こは有難しそれ計らへ承ると。正盛を引出し首宙に打落し。

殘る鬼神は四天王が嬲殺の手玉ぞと。貞光季武雨足とれば公時片手に角を持ち。曳々聲して曳く程に。難なく首を捻切つて左右へさつと。退いても退かぬは夫婦主從一門一家。緣者親類豐なる流を汲んで源の。民も繁昌國繁昌五穀豐饒の民繁昌。蓬萊國の秋津島治まる御代とぞ祝ひける。

右此本者以太夫直傳寫之
文句音節等悉校合加祕密
令開版者也

竹本筑後掾

大阪御堂筋北久寶寺町　正本屋仁兵衛留

長町女腹切

近松門左衛門作

地例の童の言の葉にいひよろ品もよし蘆の。難波の京の物語今の狂歌に取りなせし。京童の口ずさみ落首浴外とりぐに。其の一節を繪草紙や。下立賣を堀河へ引廻したる角屋敷。刀屋石見何某とて諸役御免の受領、職、折紙太刀の御用迄御所は勿論屋敷方。男たる身の魂の御刀脇差。拵請取所と大看板。見世は弟子に打任せ。誰が下人やら頭やら。放し目貫の性よしもつい燒きつけて惡性に。身を研ぎへらす奉公や跡のこじりの帳面の。つばめ合せと親方が フシ鞘鳴りするぞ道理なり。地主人石見は禪門の白い天窓に黑眼。仕事場を見廻つて。詞ヤア己が足音聞いたやら皆細工に精が出るよ。煙草ばかりが仕事ぢやないぞ。彼岸過ぎたりやめつきりと日が短い。夜仕事さしよにも此の油の高さでは儲ける程皆戻ろ。地ヤ、戻る序に戻橋の鍔は戻つたか。一條の御所樣の菊鍔も。九月の御用ぢや合點か。黑鞘が出來たらば烏丸殿へ渡しておじや。二口屋のはみ出し猪熊の革柄 なぜに遲いと毎日二三度使が走る。醒井の靦紋もまだ入れてやるまいな。三條小橋の下細工菖蒲作りの拵も。五月からの誂へ何として出來ぬぞ。長刀直しを研いだらば。辨慶山の町へ持つていけ。兩替町の銀作り御池の町のふち頭。小川通りの背鰄今日明日に持たしてやれ。詞さつきにわせた下の町の酒屋のかみ。入婿が入る引出物にしたいが。地娘が望む道具ぢやと大切先の大刀物。地身ばかり買うて去なれたは後家鞘に極つたと。堅い親仁の輕口もフシ刀屋とてや古身なり。

地重手代の忠二郎旦那の前に帳面控へ。左介喜八は算盤のさゞんの九月節供前。算用の高見合して 詞ヤア。此の半七の大のらめは。帳面も埒明けず今朝から爰へ面出しせぬ。何所へうせた又祇園狂か 宮川町か灘手か。地傍輩どもが知つてをろ。穿鑿せいと喚かるゝ。イヤ半七は昨日から頭痛するとて鉢卷で小座敷に寢て居まする。なんぢや頭痛ぢや。若い身で又しては頭痛のつかへの何のとは皆茶屋酒が過ぎるから。粥でも欲いて喰はしたか。ナイ粥の事は扨おき重湯も咽へ通らぬと云うて。やう〳〵と今朝酒の燗して飲んで見て。地どうでも色いない酒は飲まれぬと。苦い顏し乍ら中椀にたつた三杯と。言へば主も興さめて。叱る心も拍子ぬけヲクリ笑ひ〳〵暮せし秋の日の。フシ西山近き。染浴衣。愛宕參りに袖を引かれた。フシ是も仇なる世の勤め。四條の水に名を流し、身の憂き數を積みあけし石懸町の井筒屋の。お花よ盛り戀盛り フシ身を

賣る品はかはれども。地刀屋の半七と深い中ごと正銘の。互の誠研ぎ入れて締めた心の諸捻り其の柄糸のほつれそめ。我が親鮫のつれなさを。スヱテ問ひ談合も中絶えし。地いとし男も親方がかり首尾はどうぞと案じほれ。顔の見たさも遣瀬なく舁夫雇うて草鞋がけ。浴衣を假の旅出立。ぼんぼり綿もひねくろしく背中に皺の寄るべなき。石見の見世へ賴みませう。ハヽ詞こりや旦那さんで御座りんすか。内方に居さんす半七殿に。一寸逢ひたう御座りんす。親方ぎよつとし。はていかうりんす〳〵と云ふ女子ぢや。和女は半七が女房か。ハアつがもない私は大阪者。半七が叔母で御座りんすアレ未だりんすぢや。ムウ大阪の叔母御とは。伽羅細工の甚五郎の内儀か。アヽ其の伽羅伽羅。何かの御禮にとう参る筈なれども。地主は細工の人寶貧な世帶の隙無しで。今日迄の御無沙汰大事の甥が出世の門。祝ひ月を心がけ愛宕かけての上り舟。乘合の窮屈さとろ〳〵と寢よとすりや。うしろからせゝるやら前からは毛の生えた大きな足を突出すやら。歯切するやら寢言やら。可笑いことの數々は山崎から連もあり。あがつてお山を一息に嵯峨へ下りたりや仕合と。旅釋迦樣の開帳の相伴やらおこゞやら。籠屋で支度して。直に是へと出次第の口は手管に馴々しく。皆樣御免。アヽしんどうと腰かけて。煙管取る手も粗略に。皆樣半七の傍輩衆か。辛苦な仕事で御座りんす。繻子の肌着に色更科の。叔母と名乘りて刀屋に フシ見するは胡散者なりし。ソレ詞喜八。叔母が逢ひに上られたと。半七に知らせてやれ。誰ぞ茶を進ぜぬか幾人をつても氣が附かぬと。地云ふ内に半七はそつと起きて障子の隙。覗けば馴染のお花なり。南無三寶扨は内々苦勞にした。慾づらの繼父めが年切增の强請言。急々にせがむと見えた。其の工面に來たさうな。何にもせよ出過ぎたこと。逢ふも危なし逢はぬも叉。仕舞の附かぬ。我が身ぞと。夜着引被りスヱテ生きたる心地はなかりけり。地親方は正直一ぺん半七はなぜ出ぬぞ。詞頭痛でまだ起きられぬか。他人では無しなう叔母御。寢所へいて逢はつしやれ。お山狂ひで酒やら何やら過ぎる故。地煩ひ暮して物も喰はぬ。少意見して下され。そりやそこへ案内せいと。下地は好に据ゑる膳 フシうまい首尾とぞなりにける。地やゝ時過ぎて是も亦愛宕參りの花お札。風呂敷包下人に持たせ。刀屋の石見樣とはこなたか。大阪甚五郎が女房半七に逢ひたい。叔母が來たとおつしやつて下されと。云ひ入るれば家内の上下喫驚して。ヤアこりや何ぢや門にも叔母。内にも叔母。騙か狐に極つたと。不審がるやら怖がるやら中にも亭主は一理窟。ヤア詞ざわ〳〵と喧しい。奥へ聞えりや詮議がならぬ。默れ〳〵と小聲にて。地おもての叔母御通らしやれこゝへこゝへと云はるゝにぞ。綿帽子取つてしとやかに。詞是はまあ

まあ結構なるお内方。ついしか御出入申さねば何誰様が何誰様やら。コレ其所な前髪殿。地盆一枚貸さつしやれ。わたしが事なりや心まで奥様へ上げまする。樋の上の切荒布花の都へこんな物 フシお恥かしやと差出す。地叔母の年配恰好を見ればどこやら面ざしも。半七によく似たり扨は奥なは似せ者めと。思へども念の爲。詞是は〳〵云はれぬこと。女房どもは寺參り戻つたら見せませう。してつきも機もなう半七に。何用あつて上られたと云へば。叔母は打笑ひ。いや半七にさのみ用もなけれども。旦那様へ少お頼み申す事。つれあひ甚五郎上らる筈なれども。お屋敷方の御用は多し飛脚でも如何とて。扨私が上りしと下人に持たせし風呂敷より。棒鞘の一腰を取出し是はこれ。信國とや。さる大名の若殿へ藏屋敷から上げらるゝ。大切な拵物大阪にも彼是と。職人衆も多けれど京細工と申し甥子が爲。内方へ頼みます。注文は此の通。さぞ方々の請取御忙しいは存じながら。どうぞ近々に頼み上げまする。此の序に半七めが顔も見たさ。地何やかやに上りましたと差出せば。石見は脇指注文見合せ。是は此方の商賣。心得たとずつと立つてこれ叔母御。懲しがらるゝ甥がざまを見せませう。暫く其處にと云ひ捨てて思ひがけなき一間の障子。蹴破つてつゝと入る。二人ははつと驚いて。狼狽廻る胸ぐらを両手に摑んで。ヤイ詞半七のいき掏摸め。ようも〳〵親方を踏附けたな。あの女が來た時からござりんすが呑込まれぬ。りんすの正體顯れた。お山やら惣嫁やら厚皮面な晝日中。大阪の叔母で候と目利の家へ似せ者を。ぬく〳〵と寢所へ迄手引させ。主に一杯。己れめは旨い所を喰うたな。地親代々の刀屋を太皷持にするのみか。座敷を揚屋に仕くさつたお禮申すと突倒し。柄差鞘押取つて散々に撲ち擲く。叔母は此の體聞くよりもはつと人目の恥かしさ。憎うもあれども甥子が難儀思ひやられて何とがな。此の場の首尾をと氣を碎く。半七花は身の科を云ひくろめんと眞顔にて。詞申し〳〵旦那様。お氣が違ひはしませぬか。私は兎も角も叔母者人を打擲あり。必ず後悔なさるゝなと云はせも果てずヤアゝ。盗人猛々しく其の樣にてなつてさへ。まだ惣嫁めを勞るか。主の身代空になし天道を掠めをる。ヤイ天罰と云ふもので大阪の叔母が上られた。地目の前へ連れていて叩き殺して腹をいる。サアうせぬかと杖振上げはた〳〵と打つ音に。叔母は悲しく走りより旦那様暫くと。取附けば振放し縋りつけば突倒し。とかうする間に思案して 詞ヤアこりやお吉か。そなたは此所へどうして來た。コレ申し旦那樣。あれは私が妹と地云へば旦那は興さめ顔。半七は猶合點せず花はきよろ〳〵狼狽へる。袖を控へてコリヤ妹。ヤイお吉これ姉ぢや。姉が顔を見忘れたか狼狽者と睨めつけ。目まぜで知らすれば漸々と

心附き。ハアほんに姉様。〳〵。〳〵ぢやと フシ云ふ聲慄ふばかりなり。地叔母は色目を悟られじと。詞ヤイ大膽者。五條の木賃宿へ行きはせで。地姉さへついど來ぬ内へ騙りらしいこと云うて。來た故にこんな事旦那樣のお山ぢやと。御覽じたも御尤。今日も愛宕でわたしをお袋とはか云ひませぬ。それも道理ぢやあの人は腹がはりの姉妹で。十五違ひ半七が爲には叔母なれど。年は甥より二つ下叔母甥のよしみとて。親しうするを知らぬ目で。女夫と見るに、フシとがはなしと。非の入りさうな事どもを。いひくろめたる情の程二人はあつと嬉しさも フシ夢に夢見る如くぞや。地主の石見まんまとくひ。ムヽウ詞二人ながら叔母御か。よい年して不調法過つた免してもらを。地叔母御怪我は無かつたかと背中さすれば彼方向く。チヽ若い人の道理々々。そちらな叔母様頼みます機嫌取つて下され。これ半七。詞言譯してくれともぢ〳〵と勝手へ出で。地皆の奴等うつかりとなぜ茶漬でもして出さぬ。腹の立つた舉句ぢやにけんどんを取りに遣れ。マア盃を出して置け。むつかしからう己は出見世へいてゐるぞ。はれやれ腹の立つ綺ひぐちに。叔母をも知らいで見しらしたと オクリ足早。へにこそ出でにけれ。地跡見送つて半七は。叔母の前に手をつかへ何にも態と申しませぬ。面目ないと有難いと胸は二ツに裂けますと。悔み歎けばお花も涙にしみ〳〵と。私は四條石垣町。井筒屋と云ふ茶屋に花と申す勤の者。半七樣とは末々まで面倒見あふ契約に。ちといき詰つた憂きふしの談合に。逢はひで叶はぬ事あつて横着な此の有樣。叔母樣なら大事の甥を。唆かすとのお憎しみそこも許して下さんせ。いとしいが唯因果ぞと フシ共に。かこちて泣きければ。叔母も同じ涙にくれさう見た〳〵。詞つれあひは大阪で伽羅屋といへば。町のよい家屋敷方。人に知られて世の有爲無常。此の叔母とても知つて居る。地色事は若い役此の上にどの樣な。生きる死ぬるの場になりても。やくたいもない氣を持つまいぞ。世間多い心中も銀と不孝に名を流し。戀で死ぬるは一人もない。流れの身には取分けて。悲しい事酷い事、そこを死なぬが心中ぞや。眞實男可愛くば五度逢ふものを三度逢ひ。二度を一度になす時は親方も機嫌よく。戀に身をうつ フシ事もない。地二親もない半七叔母一人甥一人。元は知行も取つた筋藏人の弟子と朽ち果つれど。可愛いとも不便とも思ふ者は此の叔母一人。末かけて頼みます。今日叔母が上らずば二人の命は有るまいもの。有難や。忝や愛宕參りの一驗。佛神のお蔭ぞと意見も親は泣寄の。二人が肝にこたへつゝ スヱテ泣くより外の事ぞなき。地叔母は重ねてやれ半七。涙ついでに今一度泣かねばならぬ此の脇差。見知つてゐるかと差出せば。半七棒鞘の柄引きぬき。刀心を見れば信國。裏目釘の穴際に風と云ふ字

の一字銘。横手を拍つて是は扨。我が家の重代ぞや親の祕藏が年を經て。廻り來るも不思議なり再び武士に立返る。瑞相なり嬉しやと押戴く脇指を。叔母引つとつてからりと投げ。なう情なのさふらひや。武士になれとて見せはせぬこの脇指故家筋の。かう零落れた因縁咄小耳にも聞きつらん。お花とやらも繫がる人。悲しい咄の一通りを聞いてたも。詞もと我々は伊勢の龜山者。先祖は猪瀨文平とてあの子が爲には祖父樣。お持炮の鐵砲大將百五十石取つた人。同じ家中に高木宮內とて。八百石取る旗頭互に無二の中なりしが。上方の取賣が此の脇差を賣りに來て。諸傍輩の附合に祖父さへも望みにて。買求めたい心ざし彼の高木も望をかけ。代物問へば三百貫の折紙。心安さの當座の座興。とは云ひながら高木が麁忽。文平お身の身代では高い物ぢやがお買やるかと。ふつと言ひしも互の不運。苦笑ひにて一座は濟みその取沙汰の國一杯。いはれぬ猪瀨が齒も立たぬ刄物好して高知行の。高木殿と張合うて人中で恥辱うけ。あれでも武士かと言囃す。此の脇指を買はひでは一分立たぬ祖父樣の。武具馬具衣裳夜の物まで代なして。三百貫の折紙代一倍增。二百十兩に買求め直に刀心に一字銘。高木に勝つとの心にて風と云ふ字を彫記し。地明くれば九月十五日登城の道に待ち受け。高木遣らぬと聲をかけ尋常に討果せ。屋敷へ歸つて祖父樣は娘子供に暇乞。命に替へし此の信國必ず人手に渡すなと。お腹へぐつと押立てて右の脇まで一筋に。地唯一言の義によつて身上をフシ果されたり。地そなたの父樣は叔母が爲には兄樣。其の折しも江戸番直に江戸より浪人あり。永々の憂き苦勞悲しい暮しが病となり。いよ〳〵つらき其の中にも遺言にて此の脇差。詞乞食する迄放すなと藥も飲ます祖父樣の。第三年同じ月に病死ぞや。地悲しいともつらいとも。情なやお袋も亦歎き死に。跡に殘るは叔母と其方。また九ツの頑是なし叔母が心を推量あれ。三年に三人まで同じ月に死ぬる事。不思議と思ふ氣が付いて刄物の相性見る人に。詞目利して貰ひしに。祖父樣父樣同じ火性。刀は水の流れ燒以ての外不吉の脇差。寸は一尺四寸五分。地間尺は災難是を其の儘持つならば。三代迄は祟るとある占方に驚いて。捨賣に賣放し廻り廻つて十三年め。詞お屋敷方より此の脇差拵へ仰付けられて。孫子の其方の眼にかゝるとは。はや親ちの打擲の難儀に逢ふもこれ不思議。地武士羨しと思やんな一言の咎めより。親祖父の命を絕ち子孫迄零落しは。前世の業とは思へども。愚痴な心にあさましい此の脇差がないならばと。科ない刄物に恨が殘りスエテ折つても捨てたい氣なれども。地今では大名のお腰の物。家の敵の此の脇差。主人の樣に撫でさするその時々の身過ほど。悲しい物はなきぞとよ子にも甥にもたゞ一人。奉公大事に勤めてたも。い

としの身やと搔き口說き。膝にもたれて泣きければ半七も伏沈み。お花も退かぬ身の上と語るも聞くも主の內。頷き合ひつ喟きのフシ忍び。泪ぞ哀れなる。詞ヤアうか〳〵話してあれ見世鎖し時。叔母は直に伏見迄夜中でも舟はある。來年のお祓には必ず下りや。此の脇差の拵。注文の通り隨分急いで下してたも。地旦那殿內方樣へよいやうに賴むぞや。お花女郎にも緣でがな。又やがてやと出でければ。詞イヤわたしも東。道迄お供致しましよ。ア、折角來て素戾りか。これ半七叔母は粹ぢや。跡でしつぽりと話しやいの。イヤ〳〵別に話す事もござりませぬ。そんなら祝うて口濡して往しや。イヤ最早お茶も飲べました。ハテ茶ばかりで濟むものか。しんこの樣な物なりと茶の子甥の子。のこ〳〵振舞や半七と。二人引寄せ寢所の。障子の中に押入れて。叔母は氣とほり堀河通り。一條通りの高瀨舟直に。大阪へ 三重へ 下りける。

中之巻

フシ名は堅く。人は和らぐ石垣町。前には戀の底深き。淵に憂身を先斗町。都の四季の月花を。こゝに フシとゞめて通路や。地馴染々の色遊びの。中にお花は忘れても。わすれがたなや刀屋の半と深きつま戀に。なつく八乳の繼三味線。心くらべの連彈に思ひの色を忍び駒。忍ぶに餘るフシ涙かな。浮氣烏と。そやされて。月夜も闇も此の里へ。光滿寺と云ふ坊主客。お花に馴れし鶯のほけきやうとも念佛とも。知らぬが佛の斗帳ぞと井筒が暖簾撞木杖にてひらりと上け。詞太郎內にか。四五日お目にぶら下らぬ。エ、珍しいどつち風が吹いたぞい。イヤ〳〵どつち風でもない今夜はしよざいの無常風沙汰はない事葬禮の戾り。ちよつと寄りたし心はせく。地どうせうか斯う燒香場を。そろ〳〵に遣つてすて引導も何云うたやら。不便や今日の亡者もろくな所へ往くまい。是もお花へ心中と。等の賴さき遠慮なくこ鬚口寄せて賴ずりは。山葵おろしに煮拔の卵いたそな フシ顏の痛々し。地お花が浮かぬ顏つきに 花車も亭主も氣の毒がり。コレお花どうぞいの。お寺ならば大黑。茲ではわつさり惠比壽顏して見せましや。サア笑やいのと迫立つれば。詞アヽ太郎おだまり〳〵。あれは我等に甘えるの。腹立つ所が猶うまし。詞かゝ家二階へ連れておじや。今宵は妓衆の總揚げ見事な事か。古手な肴取り置いて蒲燒一種で飲明かす。鰻四五本裂かせに遣りや。南無阿彌陀佛と騷ぎ立て。フシ皆々二階へ上りける。地既に傾く宵月の夜も早四ッ半七は。銀の才覺ならず者と。茶屋には堰かれ親方に見限られつゝ筒井筒。心の水もかへ乾して流れ歩きにとぼ〳〵と。格子の蔭に身を潛めお花がよすがを待ち居たる。こゝに誰とは白髮まじり金柑天窓に無用の提燈。門口にてふつと消し。詞ハア太郎左衞門樣お宿にか。花めが父西陣の。地九兵衞でござると辰巳上り

に言ひければ。亭主夫婦ヤア親父來てか。こちへ〳〵と茶釜の前太郎左衛門顔顰め。詞此の頃段々云ふ通り。其方が娘お花が事。ぞも〳〵小女郎の時分から手形の表丸十年。親方に損もかけず追付け年季も明くぞや。なれども勤のならひ小間物屋の煙草屋の。紙屋で候呉服屋で候の。酢の蒟蒻のと借錢が今の金で七八兩。地その上親父も長者ではなし。あの子にかゝる身でないか。がらり廿兩ま一年切りまし。居なりに居れば借錢も先づ其の分。賣買高い此の節二貫目ぢかい廿兩。詞其方が手取に溫まれば兩爲と思ひ世話やけども。かの柄巻屋の半七と云ふ蟲がさいて。何の彼のと入性根お花が一切呑込まぬ、是からは勝手次第。半七と云ふ職人の弟子こゝらあたりの拂ひさへ。埒明かず。東塞りになつた者。打ちみしやいでも粒三文ないは知つて居る。あの樣な極道と腐り合うたお花が行末流浪は知れた事。詞小さいからの馴染なれば。よい事聞く樣にはござらぬ。どうぞ意見でも召されぬか。地壁に馬乘りかけては明くべき埒も明かぬもの。前びろに手形しよう爲に フシ呼に遣つたと語りける。地門口には半七聞けば悲しさ無念さの。格子の柱嚙みひしぎ スエテ齒をくひしばり泣き居たる。親父は横手ちやうど打つて。詞扨々苦々しい。親方殿にお世話をかけ不孝者と申さうか。地その刀屋め知つて居る。ならず者の大將菰被りの下地。地イヤ花めはどれに居る。爰へ來い用が有る。引きずりに往てお客の前で恥かゝさうかと。昔作りのつこど聲お花は人目の恥かしく。アイあの盃藤さんさよさん預つて下んせと。言ひすて下りる箱梯子。詞ヤアとつさんか夜更けて何しにござんしたと。地そばへ寄るを突倒し。詞ヤイ不孝者。親方殿お話で一から十迄聞屆けた。半七めと云ふ騙めと夫婦にしては。年寄つた此の親が鼻の下が干上る。廿兩と云ふ金が天から降るか地から湧くか。地騙奴が挨拶はらりしやんと切つてしまひ。年切増して奉公するか否と云へ分別有り。サア〳〵どうぢやと腕捲り フシ摑み付くべき顔色なり。地お花ははつと胸塞り スエテ暫し。涙に暮れけるが。詞なう父さん。傍輩衆は内證客さん達の手前もあり。地さもしいことを言はんする。勤する身の親達はどの口聞いても可愛や親ゆゑ苦勞をする。定めの年も近づく届いた男を見定め。末の片附心がけ身を安樂にして見せいと。云はぬ親は御座らぬ。節季々々にせびらかし足らいで又年を切増し 地男に迄添はせまいとはあんまり酷うござんする。ほんの親より繼父は猶大事と嗜み、隨分孝行盡せどもこなさん私に微塵も憐みはござんせぬ、殺しなりと何樣なりと。分別次第にさあんせ。半七樣と挨拶切り勤はせぬとばかりにて。人目も恥ぢず大聲あげ身を悶。えてぞ泣きゐたる。地傍若無人の繼父ゑせ笑ひ。詞よう吐かすな。盜人の晝寢も當がある。おのれが母に

何の見込はなけれども。おのれを賣つて喰はう爲女夫になつた。今の詞は誰が教へた半七の掏兒めに習うたか。地べり／＼しやべる頰けた譃はないて仕舞はんと。むしやぶり付くを井筒屋夫婦。年の內はこちの物疵付けさせぬと振放す。思ふ男に添はれぬからは殺しや／＼。ヲヽ殺しかねうかと。撲合ひ揉合ひ大喧嘩破れかぶれと半七。裾ひつからげ井筒屋の庭へつか／＼。柄卷屋の半七と聲をかけ。九兵衛を取つて突きのけ眞中にどつかとすわり。詞コレ親父。其方はお花が繼父酢につけ粉につけ憎いのも理り。此の半七を掏兒の騙の強盜のとは。いつ騙りした盜みした。半七が目には其方を人賣と見たもがりと見た。よし夫は兎も角も。お花は己が女房すべい奉公仕舞うては。繼父でござらうがもがり殿でござらうが。主のある女房分別して物を云へと。地せきくる顏の青疊フシ叩き散らして詰めかくる。詞ム、ウ刀屋の半七とは其方か。どれ顏見よう。はれよい男の、江戸元結に繻子髷天窓付は兩替町。內證は曾我殿見せかけ力身置いてくれ。此の年まで敗毒散一服飮まぬ此の親父。ゆすりはたべぬァヽ慮外ながら。親も許さぬ女房とは栗田口へ往きたいか。此の娘女房に持てば小判がいるが合點か。小豆粒程な細金さへないざまで。何ぢやお花を女房ぢや。いきがたりとは其の事。地いつそ手をよう巾着かフシ屋尻切れとぞ喚きける。詞半七ぐつとせきあげ。ムムウよう言うた小豆粒は持たねども小判と云ふ物持つて居る。來年の給分廿兩濟すからはお花は身が女房と。地紙入より金廿兩取出し。サア金でし小判といふもの近付になつて置けと。めつかうに投付くる。ヤイ詞半七。あの娘はまだ五十年が百年が顏に色氣の有る中は。奉公さして喰はねばならぬ。地千兩道具の娘を廿兩の目腐金で。女房に持たうやべかこまあなるまい何所で盜んでうせたやら。後の穿鑿喧しい。おのれに呉れると投げつくる。詞イヤ金貰はう好みがない。おのれに呉れると投返し。地投げつけ打ちつけ摑みあひお花はわつと泣出す。太郎左衛門つゝ立ち詞コレ半七。お花はこちの奉公人親父とのせりふなら何所ぞ外で仕たがよい。門には大勢人だかり客の邪魔して貰ふまい。地それ男ども追出せ心得太兵衛長兵衛五介。ばら／＼と立ちかゝり無理フシ無躰に引出す。地お花は譯も正體も涙乍らに取付くを。どこへ／＼と押分くる。親父を中の關守の雪駄片足に奈良草履。足にはたらぬ半七が髻をつかんで引つたてしはオクリ目もあてへられぬフシ次第なりサア地親父も先づ歸つて諸事談合はあすの事。ハツアそれもさう然らば明日參りませう。申すまでは及ばぬが。詞花めを敷居より外へ手放して下さるな。ヤイそこな不孝者。おのれ明日來てなんとする待つて居れ。エヽ地いきせい張つて咽が乾くとごぶり／＼と煮えばなの。茶びん天窓を振立

てゝフシ河原を西へと歸りける。地斯る哀の最中二階の階子ぐわた／＼＼。藪から坊主の佛頂顔お花そこに何して居る。詞さつきの押への盃はいつの世に戻る事。總體今夜はそなたが顔浮々せいで酒が飲めぬ。地氣を替へて西石垣の關東屋で騷がう。太郎山衆貸してだも。ハア殘りの子供は西石垣が天竺へも御同道。地お花一人は我等が內。手放しては內證に氣遣ありまの。いふな／＼。詞皆迄云ふな湯の談合か。湯治するなら遣ひ錢見事な事かと金三兩。衣の下より投出せば。是こそほんの忝け有馬の湯のだんこ。歌やれゆのだんこ／＼今は有馬の湯のだんこしよんがゑ。西石。垣へと 三重 ＼騷ぎける フシ同じ所も西側は。祇園丸山前にうけ。芝居の櫓時さ夜も。行きかふ人の提燈は月も。フシおろかと照渡り。見おろす／＼。地おろす駕籠からぬつと出た。焙烙頭巾の窗昔殿は。藥師如來の引合せ壺屋の客と脈をとる。それ／＼／＼花車も亭

主も槌で庭掃く人呼びに。走る足許おかるぢやないか。詞お玉ぢやないか。お玉やあい。はて是から呼んで届くものか。わけもない事云はん紋紗の衣着て。ぞめき姿ののら坊主。後姿見た樣な。チヽそれよあれは愚僧が五人組。萬年寺の同宿忍び戀路の揚みどり。ふかみどりやの小丁稚が。一中節の川風に聲も廣がる扇屋の。仲居のまんが供して通る彼は澤村長十郎。あつたら男をやがて大阪へ下り舟。歌流金子も難波津へ。咲くや此の花其の花の。フシ戀も戀の種ぞかし。地苦のない女郎の仇口を聞くにも增る涙の雨。お花は一切氣も浮かす因傑の河原幾萬人。ぞめきの中に彼の人がもしやと目をも花色の。長範頭巾しよんぼりと番屋の蔭にたゝずみしは。慥にさうぢやア、ちよつと逢ひたい。云ひたい事も山衆の手前と客の手前もはかりかね。床柱に打凭れ フシ念佛申して紛らかす。地料理人の傳介盃を下に置き。詞ヤア花樣の念佛で思ひ出した

事がある。三味線小歌も古めかし。町方に流行る阿彌陀の光と云ふ事して。御一座の妓樣方どれにても阿彌陀如來に當つた者が。豆腐と酒と買ひに行く役人。色里に無い圖な騷ぎ。妓樣方いかにと云へば。地ヲヲ是はめづらしい早う／＼と紙押廣げ。蜘蛛の巢御免延紙引きさいて錢の高。もみ闇は惠方果報後に無理云ふまいぞ。サア今が大事の所と鼠噛してしめあけに。詞さようまどうぢや十六文。お仕合／＼。藤さまは三十六文小めろの林は十文。地それははまなみさゞ波や。滋賀樣たつた二文か。お杉になんぼ悲しや己は三百ぢや。詞エヽ儘よ前垂質に置かう迄。ヲヽ云やる迄ない錢がなくば 地布子をはぎさんしませ。是も如來ははづれた。サア是からは花樣さり／＼もみ闇明けさんせ。アヽ忙しい何ぞいの。私がやうな因果人がなんの阿彌陀になるものか。これ見さんせと押しひらけば。地そりやこそ云はぬかサア花樣が阿彌陀ぢや。

詞名代は叶ひませぬ妓樣に豆腐買はして居乍ら田樂喰べませう。地きつう座敷が酒落れて來たサアフシ面白いと笑ふにぞ。地お花は何がなかこつけに出たいは心一杯。猶も色目を悟られじとア丶迷惑。詞そんな事に今まで歩いた事なけれども。てんほのかは往てのけう。其の間に用意しておかんせ。地ヲ丶用意擂子鉢刷毘擂子木斜に構へ。待つて居ります早うく〵。詞ハテそこらは合點ぢやと。地妾も下女に二世かけし男の爲や徒歩跣足。つひにきなれぬ置き手拭急けばまはる。小褄ほらく〵杉が前垂かり橋を。フシ足もしどろに行き過ぐる。地半七は番屋の蔭ちらと見るよりコレく〵く〵。爰に居ると招かれ。ヤア半さんかいの。逢ひたかつたと抱合ひスエテとかうは涙ばかりなり。詞コレ泣いて居ては濟まぬ事。今宵中に大阪迄退かねばならぬサアおぢやと手をひけば。マア待たんせ先刻の小判どうしての才覺ぞ。詮方なさに怖い事などさんせぬか。有樣云うて落付かせて下んせ。云ふ迄もない事此の身になつた半七を粉にはたいても一步一ッ誰が貸さう。先度の脇指三十二兩に賣拂ひ。地銘なしの下坂寸も燒もかはらぬを。八兩で買替へ二兩で銘を彫らせ。拵へ濟して大阪へ下し。詞其の賣へぎの廿兩たとへ首になるとても。もう取返しのならぬ事。此の上ながらも罪に遭はば我一人。地叔母婿叔母にも難儀をかけすそなたの行末頼むため。心ざすは大阪。誠に和女の繼父が盜人と云つたも嘘でない。我か身で我が身が恐ろしいと。語ればお花も身を顫はし。サアそんな事であらうと推量に違はぬ。いとしや私故種々にお身を狂はする。詮議の時は皆私が業にして身を遁れて下さんせ。詞ハテ罪にあふとも逃るゝとも。分け隔てはないわいの。地ほんにさうぢや女夫ぢやものとスエテ又締寄せて泣く中に。地跡の二階に花樣遲いこりや豆腐に買はれてか。迎ひに往けと聲々の南無三寶。見付けられては足元暗き井堰の石に踏みくじき長き紅絹裏足纒ひ走るとすれど夜中の太鼓。どんく〵ぐりの辻を出づれば建仁寺。だらりが鳴るぞだらつくまいぞ。駕籠よく〵と呼ばれども無いか聞かぬか耳塚の。西に錢座の名のみにて小錢なければ草鞋も。二足を小判一兩で買うて。穿く身ぞ三重哀なり。

おはな半七道行

ハルフシ幾夜々々の。憂き勤。七枚起請そら誓文。日本國の神さんを欺した罪か欺された。人の恨かねたみぐさ。つひに我が身の下り舟。スエテ乘後れたる淀堤。淀の河水行く末は。いかなる罪に大阪の。道がどこやらフシ何里やら。ハルフシ身は初雁よ。初霜に。寢亂れ姿忍ばしとオクリ前垂。取つて丸ぐけの襷をぢみな抱帶。しやんと結んで引締めて。フシオクリ歩むと。すれど。行き馴れぬハルフシ道はかどらぬ。女旅。これも何ゆゑ男山。作りし罪は山崎の。スエテ麓はあれよ

あはれけに。いつか都へ歸る山。春は梢に。いろ〳〵の。花咲く山にと山巡り。地となりは靑し夏山の。かしは散るてふ卯の花や山時鳥山あひの。景色の花に顔つくる。笠を傾け。山めぐり秋はさやけき月影の。到らぬ山は無けれども。地わけて名高き山かげの月見る方へと。山めぐり扨又冬は。遠山の。霙もてくる雲のあし。上地賢き雁は南向き。北を後に山のこす。山又山や峰白し。雪を誘うて山めぐり巡り〳〵て フシ山姫の。山家交りの淨瑠璃も。夕限りの口癖や。長地今日は姿を町風にやつすとすれど隱れなき帶の枚方。近くなる。松原過ぎて河邊を見れば。あれ〳〵〳〵五ッばかりの子を眞中に。フシ乘合舟の女夫づれ。思ひなき身の高笑ひ。餘所のつまごと羨し。歌流れわたりの。情であろと。網の目にさへ戀風が溜る荻の。荻の上風。身に染々とせめて一夜は嘘なしにほんの女夫と。フシいつの世に。いはれつ云はん。情なやと抱き締めたるそぎ袖も。フシ涙にひたすばかりなり。間夫で逢うたも一昔。それ覺えてか一昨年の十七日のおぼろ月。宵の我酒にほの〴〵と二人火燵のじやらくらを憎や。拾烏に起されて。あかぬ別れの朝より。日文血文の付届け。半太夫いよしごけんと書いたるはほだしの種か。カン花すすきほんに誓文フシいとしさに。幾夜の夢を。結び文。方様まゐる フシ花よりと思ひ。まゐらせ候べくの。わけの盃色見えて。わきていづみの思はくは只逢ひまして。〳〵。又の御見をまつかしく ハルフシその言の葉も。地昨日といひ今日と暮して飛鳥川。流れの里ははる〴〵と跡に長柄の。夕あらし。髮のおくれのはら〳〵〳〵。共に亂るる我が心燹ある身は恐ろしの。お城も近き難波江のよし。あし知つてはまる身を。意見は釋迦に京橋の此方の森を隱家と誓く。勞を 三重〽晴しける。

下之巻

フシ急ぐとすれど。地秋の日の短かきあしの難波潟。京橋より暮れかゝり問へど隱れも長町の。伯母の家造常々の咄に大方かぎあてゝ。伽羅細工の甚五郎樣は此方かと。くゞりあくればア、いかにもこれが甚五郎。詞どれからぞと云ふ叔母の聲。イヤ京の半七下りましたと。地お花諸共つゝと入る。詞ヤア是は〳〵珍しい。文の來たは一昨日間もなう何の用あつて。地ヤ連も有るさうなどなたぢや是へとあひしらふ。叔母樣お久しうござんす。詞いつぞやお目にかつた花と申すもの。御無事で目出度う御座んすと。地腰打ちかくる二人の體心得がたく思ひけん。ハアようこそとばかりにてフシ不思議。さうにぞ見えにける。地半七色を覺られじと。詞お花ことも奉公の年明き。和泉の親許へ歸る道幸ひ同道致しました。イヤ先づそれはさう。地誂への脇差先樣は侍衆お氣に入つたかいらぬか萬一お氣に入らいで。甚五郎殿や叔母樣に難儀のかゝる

事あらば。其の難を私が身に受けうと存じ参つた。其の次第が氣遣などうで御座ると言ひければ。詞アヽ爰な人つがもない。細工かお氣に入らぬとて何の此方や其方に難儀がかゝる物ぞいの。其の上悦びや一昨日下ると其の儘。お屋敷へ持参めされしに。地柄まはり緣頭鞘の塗。萬事殊の外御意に入り。甚五郎が女房はよい甥を持つた仕合者。後々はお屋敷の御用も仰付けられ。出入させとの御懇いよ〳〵細工に精出しやと。聞くより二人は手を合せ。エヽ有難い忝い。天道のお助け命拾うたお花悦びや。詞ヲヽ嬉しうござる胸の痞がずつと下つた。詞ヲヲ道理々々。武士を相手の商賣大事に思ふ其の冥加。詞今日また俄にお屋敷から脇指について。何やら急なる御用とて甚五郎殿を召に來て。地晝過ぎから參られ今に於て歸られぬ。定めてお悦びに刃渡しの御祝儀。お振舞が有るさうな定めし醉うて戻られうと。云へば半七色違へ。詞ムヽ脇差に就いて急用とて又呼に來ましたか。地サアお花京から道中云ふ通り。かう有らうと思ひし事我は是に待ちうけ。甚五郎殿に對面し脇指の御祝儀身に受けて祝ひ。運に依つて今宵中にお屋敷へ。召出されうも知れぬこと。そなたは此のあたり旅籠屋に一宿し。明日は早々親許へと云ふ聲付もしを〳〵と。さうしては半七が一分は立たねども。アヽなんとせう暇乞ぢやと。胸に手を組み俯向きて フシ涙を。隱すばかりなり。お花も涙に聲憚ひ。聞えぬ事云ふてくだんする。悦びも悲みも二人が身に引受ける。約束ぢやないかいの。甚五郎樣に逢ひまして有無の事を聞く迄は。私は爰を動かぬ。叔母樣も女子ぢやが男の一世の大事の時。見捨てられうか。コレ半七樣。惨い事云ふお人やとス エテ恨み喞ちて。泣きければ。詞二人の顔をつく〴〵見て。其方衆が云ふ事は何の事やら此の叔母は。すつきりと合點がいかぬ。此方のつれあひ甚五郎殿は武士附合して堅い人。半七も侍筋行儀强い若い者と。常々自慢し置きしにそれにお山を同道し。初めて對面させられうか。地一町北はみな宿屋二人ながら早う往て。甚五郎殿に逢ひたくば半七ばかり明日おじや。夫婦にも成畢せ首尾よい後はお花とも對面さしよ。今にも歸られ此の體見せ。大事の甥をつれあひに見限らするが口惜しい。此の世話やむも大切さサアフシ はや〳〵と氣をせけば。御憐みの忝さ涙が溢れ有難し。詞然らば叔母御へ一寸内證申す事有りと。にじり寄ればヤア待ちや。地歸られうかと思ひあぶ〳〵すると。庭におりて潜り戸のかけがねをしやんとかけ。サア何事ぞ氣遣はし語りや聞かうと云ふ所へ。甚五郎遽だしく門叩いて。いま日が暮れて門しめる明けよ〳〵と云ふ聲に。そりや情なや歸られた如何せん。借屋の路地へも廻されず押入には夜着布團。何所へ隱さんかやは隱るゝ。帷子入れて夏過ぎし空長持に秋の鹿。つまもこがれて

諸共に フシ押隱すこそ哀なれ。地蓋を押へて聲立てまいと欠伸ながら。詞アヽとろとろと假寢の。寢耳にけはしい叩きやうと。地くゞり明くれば甚五郎せきにせいたる顏色。血眼になつて駈上り。詞ヤイ女房ども。甥の殿に掛つて此の甚五郎が身代破滅。命の大事になつてきた。此の脇差折紙附正銘の信國を。今の世の廢物下坂にすりかへ。銘を似せて突きつけた。地先は武家方出入の門。盗人は女房の甥此の甚五郎が。存ぜぬと言ふ言譯ならず。京へ詮議に登つては駈落者と町内へ。付屆にあうては人中で口利かれす。死ぬるより外文殊の智惠にも能はぬと。脇指からりと投出し フシ溜息ついたるばかりなり。地叔母ははつと胸塞り。扨は半七が身に覺ある詞のはし。思ひ當つて途方にくれスヱテ暫し。應答もせざりしが。地半七元より覺悟の前長持の蓋押上げ。出でんとするを睨みつけ〳〵。脇差取上げなう甚五郎殿。詞わしは女子の物の道理は知らねども。ついて廻る身の因果は。大名高家智者學者も免れず。地是は正しく半七めが業なれども。半七がして半七はせぬ心。詞何を隱さん元彼の信國は。常々語りし我が家に三代迄は祟ると云ふ。地性にふさはぬ脇差一目で是はと思ひしが。詞武士の上こそ刃物の相性町人職人に成り果て。地何の咎めの有るべき親もない一人の甥。是をつてに一國のお細工の得意つけたさに。私がさもしい心から律義至い半七に。惡根性が付きそめ身の大事仕出したも。いきまはつて三代目の手に觸れしその祟。知つてゐながら此の叔母が押事したる其の咎め。因果とほかは フシ思はれぬ。地恥かしうござる甚五郎殿。男を養ふ女子も有る。廿年足らず連添うて何を男の爲もせず。身の難儀をかける事怨にあらう惜からう。それが悲しい面目ない。許して下され甚五郎殿と。夫の膝にどうど伏し フシ聲も。惜まず歎きしはことわり。過ぎて哀れなり。地甚五郎も男氣の夫婦の中に何の面目。女房の甥の仕業存ぜぬと云うて。此の甚五郎が立つものか。見ず知らずにも義理に依つて命を捨つるは男の役。氣遣するな首切られうが。半七牢へ入らうが。皆我が科に引き受け。半七に憂目は見せぬと心は利發に逸れども。差當つて相手づくスヱテ思案に暮れてぞ見えにける。女房は手を合せ。アヽ情の末とて忝い。侍衆は斯樣の事を皆御存じ。脇差のいはれを申し叔母一人の科に落し。此方にも半七めも罪を脫れて下されと。脇差取つてするりと抜き、地本のは信國是は下坂。作は替れど燒刄寸尺一對なれば。一家に祟るは同じ事是故に父樣が。人を討つて其の刀でまつ此の樣に押肌脫ぎ。地逆手にとつて左の脇ぐつと立てゝと云ふ詞。直に突きたて右へさつと引廻す。是はいかにと甚五郎縋付けば半七夫婦飛んで出で。叔母樣狂氣か情ない。身に覺ある故に死に來た半七と。詞ヤイたわけも脇差に取付く〳〵を突除けて。

のそちを殺す程ならば。なんの叔母が長口上自害をもするものか。手の悪い事したれども駈落して身も隠さず。叔母婿の難儀を思ひ身を捨てて来た心。さすが筋目程あつて。せめても是はでかしたな。そちが父御は我が兄様。最期の時に頼りし甥なれど。着替一ッ帯一筋何を優しき事もなく。預りしかひも フシ なかりしに。詞大事に代る命其方には遣らぬ。皆兄様への奉公ぞや。叔母さへ死ぬれば科は一人に極つて。脇差は上り物外に御詮議は残るまい。刃物の祟も三代済む。地行末目出度う出世して親祖父の名字を継ぎや。サテ早う往きや〳〵と。深手に息もきれ〴〵の血汐に落つる涙の體。花はわつと咽返り半七は猶涙にくれ。叔母叔父は親同然磔にかゝるとて。一寸も退きませぬと。取りつけば甚五郎。詞エヽ不合點な。其方が爰に狼狽て叔母に犬死さするかと。地二人を取つて突出しかけがねくるるしつとゝおろせば。なうそんなら退きませうま一度逢はせて下されと。夫婦は門に打凭れスエテ聲を揚げてぞ泣き居たる。叔母は苦む息づかひ。ナウ甚五郎殿。詞人立のない前に早う死にたい止は。どこぢや 地どこぢやと問ゆれば。涙ながら甚五郎。女なれども武士の切腹止とは勿體なし。介錯せんと立寄ればいや〳〵。詞人の切つたと我が切つたは。疵改めに顯れて此方の言分むつかしい。急所を教へて 地下されと男増りの自害の體。夫はいよ〳〵心くれ。爰を爰をと我が喉吭を。指せば領き振上る。手も弱りはたと落ちて。太股に突立る刄振上ぐれば突外し。肩先がばと突込んだり。左手へはづれ右手へはづれ苦む顔色。夫は悲む南無阿彌陀。南無阿彌陀佛の聲を力に咽のくさりを一刀。うんと許り目もくれなゐの薄もみぢ。夜明の嵐に散失せし フシ はかなき最期ぞ是非なけれ。地歎の聲は何事かと向ひ隣裏借屋。潛戸蹴放し駈入つて。やれ女の腹切自害よと。組中年寄月行事。町代夜番が棒ちぎり木ばつたくさばにおく霜の。はかなき命南無阿彌陀南無阿彌陀佛疑なき。西方極楽浄瑠璃に語りて哀れを留めける。

右之本令吟覧頌句音節墨譜
等不殘毫厘令加筆候可有開
版者也

竹本義太夫

重而予以著述之本令校合候
畢全可爲正本者歟

近松門左衛門

京二條通寺町西入町
正本屋　山本九兵衛版

大經師昔暦

作者 近松門左衛門

上巻

唐猫が男猫呼ぶとて薄化粧。するはしほらしや。猫さへも。つまゆゑ忍ぶに我が身は。何と唐打の。エイソリヤ綱より。とけぬ契りぞや。じやれてそばへて手鞠とれ〳〵ま一つ二つ。三つ四つ五つ六つ七つる八つる九ほんほとをんゑ。ゑいころ〳〵。フシころり炬燵にしなだれて。懐くも己が。戀ならん。それは昔の女三の宮是はおさんの當世女。夫の名さへ春を以ては色香に鳴る。梅の暦の根本大經師以春とて。袴入らずの長羽織家居も京のどうぶくら。諸役御免の門作り フシ名高き四條烏丸。すでに貞享元年甲子の十一月朔日。來る丑の初暦けふより廣むる古例に任せ。主以春は未明より。禁裡院中親王家五攝家清華の御所方へ。新暦を獻上し方々の目出度酒。嘉例の如く去年の如く。十德着ながら フシ炬燵に。とんと高いびき。算用場には手代ども進上暦の枚包。江戸大阪の下し暦地賣子供の取捌。一門振舞祝儀の使。かまどの霞餘の雪。春めき渡る擂鉢の音。今日の霜月朔日をフシ元日とこそ祝ひけれ。おも手代助右衛門。此の家の束ね綿の小紋の羽織。主も心を奥縞の袴本渡の昆布の皮。こはばつたる顏付にて。ヤ旦那はまたお休みか。夜の中から方々の勤くたびれはお道理。申しおさん樣。茂兵衛めが戻つたら代らうと存ずれど。何處にのらをかはくやら。二條向お屋敷方の進上暦が遲なはる。一息に廻つて來ませう。嘉例の通御一門來お出なされう。御臺所か姫君の樣に。猫ちやうらかしてござつても濟まぬこと。これ玉。同じ樣にそれ何ぢや。奥の臺子も仕かきや。庭の小座敷も掃除しや。炬燵に火を入りや。違ひ棚のほこり掃うて。雙六盤將棊盤。碁石の數もよんで見て。手水鉢に水入させ手拭もかけかや。煙草盆に切炭いけて膳立をして椀ふいて。お給仕に差合はう夕飯早うくてしまやと。一口に千色程。まだ面倒な其の猫めぎやあ〳〵とほえるが能で。鼠一疋取りはせず。雄猫見てはびろ〳〵と屋根も垣もたまらぬ。重て屋根でさかつたら 四つ足括つて西の洞院へ流してくりよと。なんの掛も構ひなき猫に澁口の。茶の間中の間隅々見廻し。それ久三挾箱。暦配る家によつてはお引が出る。只取ると思ふな給分に引きつぐ。斷つて置いたぞと フシ打ちつれ表に出でにけり。おさん玉が顏見合せ。なんと今のを聞きやつたか。おんなじ物のいひ樣で。茂兵衛の樣に物柔かにいうても事は調ふ。

あの人も氣に如才はなさゝうなが。地體の顔が悄然に慳貪に見える故。詞も愛想がなさゝうな。なんと助右衛門男に欲しいか肝煎つてやらうか。エヽおさん様いやらしい事おしやんすな。あんな男持たうより牛に突かれたがまし。同じ手代衆の内でも茂兵衛殿の様な。假初に物いふも。愛想らしうていつ腹立顔も見せず。ほんにあの様な男持つ女子は果報でござんす。ほんにいやればさうぢや。地猫にも人にも相縁奇縁の紅粉屋の赤猫は。見かけから優しう此の三毛をよび出すも。詞聲を細めて恥かしさうに見えて。こいつが男にしてやりたい。又向ひの練物屋の灰毛猫は。憎らしいぶとうな形で遠慮會釋もなう。屋根の上を馬せめる様に。こはい聲して此三毛を呼出す。先途も下立賣のかゝ様と。親子たつた二人ゐる椽先の庫の屋根で。此の三毛をかはいけにそれは見られたことかいの。あんまり憎さに竿竹持つて追つたれば。おれを睨んだ目許のこはさ。こりや三毛よ。惡い男持つなよ。灰毛猫が濡れかけたら一度が大事振つて退け。此のさんが従者婿よい男猫濡はそぞろ。地チヽかはいやと猫撫聲。にやん〳〵おまへる女猫の聲。洩れてやよそに妻戀の男猫の聲々。三毛は焦れてかけ出づる。地ヤイいたづらもの。大勢男猫の聲がするあの中へ往てなんとする。エヽ氣の多いやつぢやな。こりや男持つならたつた一人持つものぢや。間男すれば磔にかゝる女子の嗜み知らぬかと。地だきすくめても爪立ててかきつくをあいたしこ。放せば放れてかけ出づるヤイ間男しのいたづらもの。粟田口へ行きたいなと。後の我身を魂が。先に知らせて祝ひ日に フシ追つかけ奥に入りければ。地玉も續いて立つ所を以春むく〳〵起きあがり。後だきにひつたりと。サア詞美しい女猫とらへたと。乳のあたりへ手をやれば。アヽこそばあ。又しては〳〵抱付いたり手をしめたり。一度が定おさん様に告げてどこもかしこも紫色に成る程つめらせます。アヽ地うるさやと振放す。どつこいやらぬ。本妻の悋氣と饂飩に胡椒はお定り何とも存ぜぬ。紫色はおろか身中が樺茶色に成るとても。君故ならば厭はぬ。むごいぞゑむごいぞゑ。詞毎晩々々寝込に御見舞申せども。一度も本望遂げさせぬ。汝故に此の以春名をかへて鎌足の大臣。地玉をとる思案ばつかり。今夜こそいやといはさぬウタヒ一つの利劍を拔き持つて。かの海底に飛び入るぞ フシおうか〳〵とだきしむる。どうなりとさしやんせこちやおさん様にいふ程に。あれおさん様〳〵。やれやかましい其の外おさん鰐の口。口のついでに口々と顔を寄すれば門口より。頼みませうと臺に据ゑたる鋼鉗。詞あれお客が有る退かしやんせ。いや大事ない鉗持參は女中客といふ所へ。地駕籠乘物下立賣のお袋様。お出の由を案内す。南無三寶姑の古鉗。是はならぬと フシ云ひすてゝ逃げて奥にぞ

かけ入りける。地程無く駕籠をかき入るればおさん端迄出迎ひ　詞母様ようござんした。父様はなぜ遅い。さればいの父様は。一昨日花の本の連歌の會に夜をふかし。少し風邪氣の有る上に。風早宰相様の朝茶の湯。彌風をひき添へそれでえござらぬ。地先づ／＼今日は毎年變らぬ初曆商賣繁昌めでたい／＼。詞以春殿はどこにぞ。悦びで有らうの。推量して下さんせ。御所方方々御嘉例の九獻に醉うて裏の數寄屋にねてゐられます。サア地先づ奥へござんせ。りんやはつお供太儀ぢや。晩にはこちから送らせましよ。六尺ども往なしや〳〵とフシ親子伴ひ入りにけり。地未だ公を出過ぎぬ氣立傍輩の。下手につくも我からの。茂兵衛は早天より曆配りてさき〴〵の。びんび酒の麹の花ちろ／＼目にて立歸り。詞アヽ歩いたことかな。七介休みや。御一門衆お出ならすぐに袴も着てゐて。地こゝで一服樂しみぎせる。さらば醉を醒さうかとフシしばし寛ぎ休みしが。炬燵の間より是茂兵衛。こゝへおじやと呼ぶ聲はおさん様。はつと居直りたつた今歸り。詞少酒氣もござれども。若し急な御用もやと云ひければ。さぞくたびれでは有らうが。急に噺すことが有る。地こゝへ／＼と膝もと近く小聲に成り。詞父様の方に面倒なことが出來て。談合したいといふこと。地恥をいはねば理が聞えず。知りやる通りの御身代下立賣の居屋敷を。詞町衆の加判で。一昨年三十貫目の家質に入れたげな。それでも昔の株の家。物入續いて此の春又町へも隱し。内證で八貫目の質に入れたを前の銀方が聞付け。それとはなしに此の月の三日限りに。家渡すか銀立つるか。返事次第に五日には目安上げると。足もとから鳥の立つ様に俄に町へ屆けたといの。地いとしや父様の家渡すも大事ない。目安つけるもかまはぬが。家一軒を兩方へ質に入れたが顯はれては。此の岐阜屋道順が一分が廢るとて。ほろ／＼泣いてござるげな。詞それで色々扱ひて此の三日迄に二貫百目の利をやつて事はすむに極つて其の上で銀がない。やう／＼と一貫目は黑谷のお寺で借出し。まあ一貫目が打つてもみしやいでもないといの。以春様にいうたらばつい埒は明くけれど。地父様も母様も婿に無心云ひかけては。大事の娘にひけがつくと。お年寄のフシ我が強く。以春様へは鼻息も知らすことが叶はぬ。助右衛門にいうたらば又例のしかみ顔。眉間に皺よせて。其の足で以春様にいふは定。詞我が夫をさしおいて手代にいふは何事と。結句物に尾鰭がつく。此の月末にはさるお公家衆の御知行納り。二十兩戻る金が有る。是はおれも知つてゐる廿日程の間のこと。地頼むはそなた許り一貫目調へて。親達の苦を晴してたも。エヽ無念な男の身ならば是しきに親達に苦はかけまい。娘産んだ親も損。女子に生れた身も因果とエヽしみ〴〵くどき頼みける。地茂兵衛も一杯機嫌。は

れやれ姫御前と申す者はお氣が細い。詞五十貫目百貫目でも有ることか。仰山さうにそれ程の銀ぐど〳〵おつしやる事がいの。旦那の印判一つ問屋へ持つて參れば。江戸の爲替二貫目や三貫目常住取遣致します。物ならたつた廿日の間お氣遣なされますな。地今日の內一貫目急度調へ進じませう。私が少しの間横道致せば事がすむ。というて盜するでもなく人の目を掠めること。よし盜すればとて身の欲に付かぬは天道が明かなり。お前とてもお主親の恥は娘の恥。舅の恥は婿の恥。詞二人のお主の恥をすゝぐは畢竟お主の奉公。落ちついて奧へござりませ。アヽ嬉しい〳〵物はいうて見ようもの。かゝ様にも囁いてお心を休めう。そなたに任せた頼むぞや。こりや女子ども。お料理がよくば早う御膳出しませと。フシ勇みて奧に入りにけり。地茂兵衛とつくと思案を極め。他人さへ頼まるゝつまる所が主の爲。たとへ仕業は曲るとも。心はさ

つぱり拭ひ漆の刀掛。主人以春の巾着を明けて奪ふも紫袱紗。印判そつと取出し。いつの間にかは助右衛門戻つて後に有るぞとは。見ず白紙を押しひろげ。地文言銀目は跡にも書け。先づ印判をとしつかと押す フシ背中に目のなきうたてさよ。地茂兵衛それ何すると。聲かけられてびつくりせしが。ハア詞助右衛門か。天道は恐ろしい見付られてのけた。一貫目程入用有つて旦那の名代で銀を借る。此の月中に當が有る廿日程の間目ねぶつてたもるか。其方の氣では傍輩の首切らるゝも厭ふまい。地茂兵衛科は極つた。括りなりと殺しなりと フシ勝手にしやと投げ出す。詞チヽいきずりめ勝手にせいでおかうか。男ども皆おじや。旦那お出なされと呼ばはれば。地家內の上下何ごとやらんと フシ立騷ぐ。詞助右衛門鼻ゑしかめ。旦那是御覽なされ。お前の印判盜み出し白紙に押す曲者。大經師の家を覆し主を賣らうも知れぬやつ。地請人に預けて

の括し上げてとひしめければ。おさん親子ははつと許り肝にこたへ胸にしみスヱテ色違へする許りなり。以春大きに驚き。詞扨々日頃程にもない見違へた根性。總じて所帶方商賣事二人に任せ置くからは。事によつて主の印判押すまい物ではなけれども。助右衛門にも知らさぬは私欲有るに極つた。どうした心で印判盜んだ。助右衛門それいはせて聞きや。地エヽなまぬるい旦那殿とたぶさを取て蠑螺殼。二三十くらはせサア フシぬかさぬかとねめつくる。地茂兵衛も髮解きむしられ。チヽまだ撲て〳〵踏んでくれ。主の印判盜むとはだいそれた此の茂兵衛。さり乍ら今日迄茶屋の見世へ腰掛けずかるたの打ち樣存ぜず。人並に着替は持つせう身體は粉にはたかれても。茂兵衛が口から言譯せぬ。おさん樣お袋樣詫言など遊ばしたら。未來迄のお恨み。詞ヤイ助右衛門。天道が物をおつしやれば己れがつらを

打返し。許して下され茂兵衛樣と拜ませいで無念なわい。地口惜しいわと齒ぎしみしスエテ顏を。傾け泣きゐたり。詞以春もさすが剛染の下人。いかさま廿年見落しも無い奴。俄に惡心有る筈なし。地言譯せい〳〵といへども更に返答せず。仲居の玉はかねてより。茂兵衛に心をかけ命も棄てんと思ひこむ。志をやあらはしけん主人の前に手をついて。詞是は皆私が頼みし事。茂兵衛殿に科はなし。岡崎にゐられますわたしが伯父樣。浪人の營みに暮しかね。五百目餘りの借錢に乞ひ詰められ。腹を切るとの便あんまり悲しさ。あのお人を頼みまし銀才覺してもらひます。地慈悲心餘つて身の難儀眞平御免なりませと フシ誠し。やかにいひければ。地おさん親子は幸と玉出來しやつた有樣にようやつた。人の爲の仕損ひ殊に大事の祝日。連添ふ女房姑が一生の詫言。許してやつて下されと手を合せても合點せず。詞以春彌腹を立て。扨はうぬらは密通か。此の大經師は禁中の御役人侍同事の町人。不義の上に主の印判盗み押す大罪。今日ははや日も暮れる明日請人を呼びよせ。地段々穿鑿すること有りヤイ男ども。詞隣の明星の二階へ追ひ上げ下にきつと番をせい。地油斷するなと言ひつくる。おさん親子は有樣に。いうてよかろか惡かろか。心定めぬ浮草の。茂兵衛は下々に引立られてわるびれぬ性根フシたゞしく哀なり。女どもさびしからんお袋今宵はお泊りなされ。詞舅殿の氣色見舞がてら。我等下立賣へ參つて萬事具に咄しませう。それ女房ども頭巾おこしや。是助右衛門。戻りは定めて夜が更けう地皆早う寐ませ。門もしめて火の用心傳吉提灯七介來い。隣の明星に氣をつけよと フシ云ひつけ表に出でければ。地助右衛門は方々の。かけがねしめて部屋に入る臺所には有明の。四角行燈六角堂の鐘こう。〳〵と 三重へ ふくろ夜や フシおさんは母御を。寢入らせて。心もしめる寢間着の露。玉が常の寢所の布團も薄き茶の間の隅。四尺屛風を押しのくれば。玉はねもせず寢所に。スエテ只つゝほりと起きゐたり。ハア是はおさん樣。詞御用が有るならお寢間からお手を鳴しはなされず。見苦しい寢所へ何の御用でござります。ムウそなたもまだ寢やらぬの。別に用はなけれども茂兵衛の難に逢やつたは。皆此のさんが頼んだ事。地それをどうして知つてやら岡崎の伯父にかこつけ。我が身の上に取りなし言譯してたもつた心ざし。餘り〳〵嬉しうて禮いひに來たわいの。地前の世の姉か妹か死んでも恩は忘れぬと フシはら〳〵。涙をこぼしける。詞是がまあ勿體ないお禮受けう覺えもなく。お前のお頼みなされたやらどうした譯やら存ぜねども。さつきの樣に申せしは私が心有つての事。いや〳〵譯を知らずには側から出て言譯しやる筈がない。御尤々々御不審の立つ筈。そんなら懺悔致しましよ。地體わたしがあの人に骨身に染んで

ほれまして。地二年此の方くどけども器量に似合ぬ公道な。堅くろしい偏屈な生れつき。奉公の内はいかな事女子の手をも握らぬの。女子の顔は明いた目で。見ることもいやぢやのと愛想づかしばつかりで。やさしい詞もフシかけられず。エヽ聞えぬ嫌はれた。憎い／＼と思ふやさきさつきの難儀。見やつたの。玉が罰があたつたよい氣味と思ひしが。いや詞さうでない恨といふも戀から起つた憎しみ。戀こそ叶はずとも惚れたは定よ。地こゝで心底見せいではと我が身を捨てた此の玉を。まだ不便とも思やるまいほんに怨めしうござんする。詞それにまあおさん樣の前なれど。さもしいきたない卑怯至極な旦那樣のお心。茂兵衛殿への當りは皆悋氣から起つた事。私にきつう惚れたとて。隙さへあれば抱き付いたり袖引いたり。隙を取つてこゝを出よ餘所にそつと園うて在所の親も養はう。地小袖やらう銀やらう。うるさやいやゝ聞きともない事ばつかり。詞わたしが身さへ清ければ御夫婦いさかいさせまいと。今ならでは申しませぬ。よその夜咄にわざと夜を更かして。表の男部屋の二階から此の屋根傳ひにあれ。あの引窓の繩を傳うてわしが此の寢所へ。大方毎夜さござんする。餘ンりで腹は立つ見限り果てた旦那殿。悉皆盗人の行儀かおさん樣へ知らせまし。町中へも斷つて出處で恥をかゝせます。必ず恨みさつしやるなと此の女子に叱られて。すご／＼と我が家の中戸を内から叩いて。戻つたぞよ／＼と。地お寢間へござる後姿可笑しいやら憎いやら。かゝつたことではござんせぬ。詞所にわたしが茂兵衛殿の肩を持つた故。扨は二人が密通か禁中の御役をして。侍同然の大經師が家で不義者めとの憎しみは。悋氣の當り丁度割符が合ひました。今夜も憤に忍ばつしやるは知れたこと。地今宵こそ聲立ててお前に告げうと覺悟を極め。帶も解かずに此の通りお前も嘸お腹立。いかに家來なればとて侮つたほれ樣ぢやと。思へば腹が立ちますとフシ涙を流し語りける。地おさん溜息横手を打ち。詞扨も／＼今の世の賢女とは其方のこと。男畜生とはつれあひ以春殿。女房一人守つてゐる男とてはなけれども。地あんまり女房を阿呆にした踏み付けた仕方。涙がこぼれて腹が立つ。詞なう此の上に無心が有る。そなたとおれと代つてこゝにおれを寢させてたも。いつもの格で以春殿がござる時。泣いつ恨みつくどかせ。今宵は玉の鼾きやるかほで夜の明くる迄だいてねて。内外の者の見る前。地幸ひ母樣泊つてなり生恥かゝせて本望遂げたい。其方の寢間着の綿袍も貸して寢代つてたもらぬか。詞それはお易い事なれど召付けぬ木綿夜着。お肌が冷えてたまるまい。エイなんのいの。昔の井筒の女とやらは妬のほむらに提子の水が湯となつた。男の恨みに身が燃えて寒さ冷たさ厭はぬ平に賴む。詞そんならばともかくも隨分拔から

しやんすなと。猶引き包む此の屛風。火を吹消してうば玉のオクリ玉は〳〵奥にぞ入りにける　フシ科なき科に。地埋れし茂兵衛はつく〴〵と思へば玉が志日頃つれなき此の男をスエテ女心に恨みもせず。仇を恩なる　フシ詞の情。恥かしゝとも面目なし。たとへ此のまゝ死するとも一生一度肌觸れて。玉が思ひを晴させ情の恩を送らんと。目ばかり出す深頭巾明屋の二階忍び出で。主屋の屋根を四つ這の姿を人に咎められ。又此の上に盜人と名をや埋まん柿葺。昨日の雨の乾かぬに今宵の霧の淺じめり足の踏處も上滑りそろり。〳〵と。引窓の下を。覗けば常闇にオクリ何の〳〵先途は見えねども。家の勝手は覺えたりそれを心の力繩。手繰る心も細引と　フシ共に切れ行く心地なり。足音よそに知られじと柱をさすり壁を撫で。目は明きながら盲目の杖を失ふ如くにて。敷居を一つ二つ越え三つ暦の細工所の。次の茶の間に玉が寢る疊はいづく摺り足の。屛風にはたと行きあたり。びつくりしたる膝顫ひおさんもはつと胸騷ぎ。スエテ身も顫はるゝ空寢入。屛風そろ〳〵押しやつて夜着にひつしと抱きつき。搖り起し〳〵。搖起されて驚きの今目の覺し風情にて。頭を撫づれば縮緬頭巾サア是こそと頷けば。男は今日の一禮の聲を立てねば詞なく。手先に物をいはせてはスエテ伏拜み〳〵心の。たけを泣く涙。顏にはら〳〵落ちかゝる其の手を取つて引寄せて。肌と肌とは合ひながら心隔たる屛風の中。緣の始は身の上の　フシ仇の始と成りにける。地すでに五更の八聲の鷄門の戸けはしくとん〳〵〳〵。詞旦那お歸り。はつと消え入る寢所に汗は湖水を湛へたり。詞やい〳〵戻つた明けいやいと。地呼ばはるは以春の聲。助右衛門目をさまし。どいつらも大臥と提げて出でたる行燈の光り。顏を見合はす夜着の内ヤアおさん樣か。茂兵衛か。はあはアヽ　三重

中之巻

フシ京近き。地岡崎村に分限者の。下屋敷をば兩隣中に挾まるしよげ鳥の。浪人の巢の取葺屋根。見る影細き釣行燈太平記講釋。赤松梅龍と記せしは玉が爲には伯父ながら。奉公の請に立ち　フシ他人向にてくらしけり。講釋果つれば聞手の老若出家交りに立ちかへる。詞なんと聞事な講釋五錢づつには安　物。あの梅龍もゝう七十でもあらうが。一理窟ある顏付きアヽよい辯舌。楠湊川合戰面白い胴中。仕方で講釋やられた所本の和田の新發意を見る樣な。いかい兵でござつたの。地何れも明晩々々とオクリちり〴〵〳〵にこそ別れけれ。大經師助右衛門駕籠を先に押立て。梅龍宿におゐやるかと明けんとすれば門の戸は早しめたり。ハテ門しめたしめぬとて盜人に取らるゝ物も有るまいがと。割るるばかりに戸を敲く梅龍内よりつこど聲。詞かしましい何者ぢや。此の家に對はない。講釋ならあす來い〳〵。イヤ講釋聞きたうない。大經師以春手代助

右衞門ぢや。地急に逢はねば叶はぬと頻りに叩けばせはしない。明くる間も有る物とによつと出でたる檜尾の合總。紙衣の廣袖革柄の大脇指。詞ヤ助右殿。地夜中にけはしい何の用でござるといへば。詞なんの用とはをさめ過ぎた。此の中毎日人をこし。そなたが請に立つた玉が事につき用が有るといへども。酢の蒟蒻のと我儘いうて顏出しもせぬ請人が。どこの國に有ること。此の月朔日明くれば二日の曉。旦那外より歸りの門口。擦り違うて手代の茂兵衞めが內儀おさん女郎を唆かし走り出で。やれ〳〵と云ふ內に行方が知れぬ內を詮議すれば。玉めが寢所におさんぢよろと茂兵衞が寢た體にて。玉めはおさんの寢間に入り代つて寢てゐた。然れば主人の內儀の。間男の媒した玉めなれば同罪は遁れぬ。地おさん茂兵衞を尋出す迄請人といひ內證は伯父姪ぢやげな。其方にきつと預けに來た。二人の者が磔なれば玉は獄門。慥に預けたそりや駕籠入れと。舁き込む所を梅龍棒端つかんで二三間押戻し。詞是お手代。此の赤松梅龍が姪などを。むさと前垂奉公などに出す物ではおりない。二親も無いやつ漸伯父が太平記の講釋。暮六つから四つ時分迄口をたゝいて一人に五錢づつ。十人で五十錢の席料を以て露命をつなぐ。素浪人の伯父が力には。絹氣を引張らせて腰元奉公に出すこともならぬ。大經師の家は常の町人とは違ひ。國王大臣も一年の鏡となさるゝ曆の商賣。日月の廻りを明らかに記す物なれば。畢竟月日に奉公さすると觀念して。大經師御手代衆參る奉公人玉。請人赤松梅龍と判を据ゑたは姪が不便なればこそ。國許では人並に武士の眞似をして。鉢坊主の手の內程米も取つた此の梅龍。預け者には受取り渡しの作法が有る。此の家僮か三間に足らぬ小借屋。めぐりに細溝掘るや掘らず薄壁一重塗つたれども。身が爲の千早の城郭。六波羅の六萬騎にも。落されまいと思ふ所にどこへ見苦しい駕籠舁が泥臑。地サア改めて渡せと辯舌は講釋事の道理は太平記。形は安東入道がフシ理窟をこねるもかくやらん。詞あた仔細らしい威立置いてもらを。武士でも侍でも此の助右衞門はなんともない。地改めて請取れと駕籠打明け。高手小手の縛り繩引つ立てゝ引出す。玉は涙に目も顏も水より出たる如くにて。伯父樣面目もござらぬとわつと叫びし顏を見て。鬼の樣成る梅龍も涙を咽にギンつまらせて齒がみを。なすぞ道理なる。地玉は恨の身をふるはし是助右衞門。詞物には料簡品も有る。地おさん樣茂兵衞殿一所に退いての上なれば。間男でないといふ言譯はなけれども。かう成り下つた初りは以春樣の惡性と。そなたの心の佞人から。詞おさん樣にほれた間男と云ふはそなたぢや。腰元のかやをだまして。何やかや取らせて頼んだを知つてゐる。もう言はう〳〵と思うたれどいや〳〵人の損ねること。とかくおさ

ん様に疵さへつけねばよいと思うて。此の玉がきつと目になつて。おさん様の側を一寸も離れぬ様にしたによつて。かやめもいひ出す折が無かつたやら私をけぶたさうにして。其方の文を燒いて捨てをつたも見てゐる。それを妬に思うて針を棒に取りなして。地此の樣にしなした。己れを磔にかけ。かやめがまつ此の様に縛られ獄門にかゝる奴なれど。此の玉が慈悲心一つで助かつた。此の頃是をいはうとすれば言ひ消し言ひ消し人でなしめ。慈悲が仇になつたかとスエテかつぱと伏して。泣きければ。詞ふんばりめ。血迷うて何ぬかす。地請人慥に預けたと云ひ捨てて立歸る。梅龍飛びかゝりほんのくぼ引摑んで引き上ぐれば。足を爪立て是なんとする。詞なんとするとは縛るさへ有るに町人の分で。なぜ本繩に縛つた。急度訴へて處刑にする奴なれど。御免なれとぬかして解きをるか。〳〵と締めつくるあいたゝ。詞只の町人と違うて。禁中のお役をすれば本繩にかけても大事ない。解いてほしくばそつちで解け。ヤアうぬめは繩付で預くるさへ。昔から無い作法に禁中の御用を聞く町人は。本繩かけても大事ないとは。どこから出た掟ぢや。地上を輕しめた慮外者。どうしても大事ないと駕籠の棒引拔いて。力に任せ七ッ八ッ片息に成る程ぶちのめされ。詞己れ助右衛門をぶつたぞよ。チヽぶつた。身がぶつたが誤りか。町人の分で本繩かけたが誤りか。地御裁き所で埒明けろサアうせうとひつ立つれば。そんなら待ちをれ解いてくりよ。チヽ解かせいで置かうかま一つ棒を喰ふかと。きめ付けられて不承々々に繩ひつほどき。詞こりや慥に預けた。所の庄屋にも斷つて歸るぞ。一寸でも取り逃したら請人共に首が飛ぶが合點か。地まだ願をきゝをるかと頬桁三ッ四ッ喰はせて。玉が手を引き内に入り フシ 繫金はたとしめにける。地駕籠の者ども笑止がり今のはいかう痛みませう。地駕籠でお歸りなされといへば助右衛門顔をかゝへ。此の筈〳〵。今年はこゝが金神に當つた。地それでこれ方祟。殊に今日は土用の入り。それで跡がきつうどよむ。暦のことは押されぬと オクリ へらず〳〵口して歸りけり フシ むすぼれて。地なまなか辛き亂苧の。おさん茂兵衛は夢にだに。戀せぬ中の戀と成り。スエテつれて走りし其の日しも。茂兵衛が肌の紙入にたつた三歩のかねてより。思ひもあへぬ フシ 旅の道。おさんの肌着代なして。白無垢一重憲法に。裾模樣ある蘆に鷺足に任せて奈良堺。大津伏見をうか〳〵と。夫婦にあらぬ夫婦の樣神佛にも人間にも。疎まれ果てし身の上やと。互の心恥かしく顔打上げて顔と顔。見合せ顔を赧めては フシ 涙の。外に詞なし。詞なう茂兵衛殿。とてもわしらは今日あつて明日ない身。命を命と思はねどもいとしや玉はどうなりやつたと。案ずるは是ばかり。地只ゆかしいは父樣母樣なんぼ思ひ諦めても。逢ひたうござ

るとむせ返りスエテ歩みかねて泣きければ。ヲヽ逢ひたいはお道理我とても。お目かけられしお主筋お名殘惜しさは同然。詞こゝが彼の玉が在所岡崎。あれあの行燈の出た所が則ち伯父の宿。是にたよつてお里の便宜玉が噂も。聞かうと存じ參りしが。地内の首尾を聞合せず案内するも粗相なりと。軒に立ちより窺へば。内には玉が泣聲のわけも聞えずくどきごと。伯父梅龍が聲として。ヤイ玉。

詞 此の本は是伯父が毎夜講釋する。太平記廿一巻目尊氏將軍の執權。高の師直と云ふ大名鹽冶判官と云ふ。是も歷々の武士の妻に心をかけ。末代迄惡名を殘し。鹽冶判官もそれ故命を失うたは。もと侍從と云ふ女が媒から起つた事。おさん殿と茂兵衛と眞實の間男で　いに極つても。二人連て駈落めさつたは定よ。此の二人に何方で逢うたりとも。萬一此處へ尋ねてござつたとも。必ずく物いふ

な見ぬ顔せい。かういへばつれない水臭い様なれどさうでない。間男と云ふ浮名の立つた二人の中へ。媒といはるゝ其方と三人寄つた。そぶりなりとも人に見られてはそりや一ッ穴のいたづら狐。一所に寄つたは扨こそ玉が媒で。おさん茂兵衛が不義は極つたと。いひ立てられては彌科が重うなる。こゝをよう合點せい。つれなう當るはお爲ぢやぞ。此の事故にそちも憂き目の恥に逢ひ此の如く預けられた。然れば同罪は遁れ難い。地首を斬られ手足をもがれ試し物に成るとても。主と頼んだ人故命惜むな梅龍が姪ぢやぞ。最期を清う死んでくれと聞ゆれば玉が聲。詞それは氣遣さしやんすなとうから覺悟極めてゐる。伯父一人姪一人わしが死んだら伯父様の。地さぞ便りなう思召そ茂兵衛殿はどうしてぞ。いとしいはおさん様どこにどうしてござるやら。常がはかない正直な心を知つたわしなれば。何かに思ひやりますと泣き入れば梅龍も。ヲヽ詞そちがいとしいはおさん殿。身は下立賣の親御達の。歎が思ひやらるゝと。地内に伯父姪くどき泣き外に二人が立聞いて。涙をもらす戸の隙間。聲なき冬のきり／＼す フシ壁に縋りて泣きゐたり。地血筋が結ぶ親子の契り。おさんの親道順夫婦娘の浮名隱れなく。命がつらき老後の恥人に面も合はされず。月出ぬさきの心の闇。黒谷の菩提所へ徒の夜道の女夫連。小媼が下げし風呂敷や フシ包む涙にとぼ／＼と。地行過ぐる軒の下二人しく／＼泣聲の。耳に留れば立ちどまり。お媼あれ合點のいかぬ何者やらと。疎き老眼すかして見る。行燈の陰に茂兵衛見付け。あれおさん様詞下立賣の親爺様。地ナウ父様かいのと走り寄り。取り付く所をついと退き。詞ヤイ畜生に父様と。いはるゝ覺えは地ないわいやと。わつと泣く／＼振上げて。打たんとももがく杖の下母はあこがれ火を吹きけし。娘を袖に押圍ひ。詞なう親爺殿おさんめは逃けました。地もうこらへて下されと影をかくすは母の慈悲。打つ杖は父の慈悲心かはると子や思ふ。哀れは同じ涙の闇。迷ひの上の迷ひなり。道順不覺の涙にくれ。詞ハァ道順が未來も早知れた。一人娘の事なれば聟を取つて。家を嗣がする筈なれど近年諸國の金も濟まず。家屋敷をも人手に預ける逼塞の身。此の跡を娘に渡し苦勞さする可愛さに。一代切に家を捨て嫁入させた親心。先とても其の合點道順が娘ならば。地拵へらぬ土産も入らぬ。育てた親に見込が有る。娘の心が土産ぢやと慕はれた根性に。畜生の魂がいつの間に入り替つた。恨めしや情なや。アノ詞池に棲む鴨や鴛鴦を見よ。軒に巣をくむ燕も。雌一羽雄一羽。女夫番は生有る物の習ひぞや。地父親さまざまの毛色を産むは犬猫ならでどこに有る。親は犬には産みつけぬ猫になれとは誰が育てた。詞畜生に對して詞は交さぬ。是は我が獨語。とてもかう成るからは山の奥

にも身を隱し。地遁るゝたけは遁れもせず京近邊を狼狽へ。今の間に召捕られ洛中を引渡され。親が大事に産みつけて撫で育てた體を。鎗で突かれて死にたいか體にも恥がかきたいか。詞生けうが死なうが此の道順は。悲しいとも思はねば涙一滴こぼれねど。地嫗の泣きやるが悲しいと。わつとばかりに堪へかね餘所をも恥ぢず大聲上げ。女夫は老の息切れに フシむせ返りてぞ歎かるゝ。地茂兵衛は平伏してとかうの詞泣くばかり。おさんは母に抱き付き二人に不義の誤りは。微塵程もなけれども本の因果のまはり合ひ。言譯立たぬ品と成り京洛中に畜生の名を流し。詞の當つた此の上に。誓文立てん樣もなし。父樣のお腹立ち母樣のお恨みも。私可愛い上なれば來世をかけて形見の詞。我々は天の網とても遁れぬ命の内。親達に逢ふからは木の空に曝されて。屍を鎗で突かれても思ひ置くことござらぬと。口說き歎けばまだぬかす。詞其の鎗で突かせまい木の空へ上げまいと。地思うて胸を焦すわやと フシ又絕え。入つて泣き沈む。地母は涙の數珠袋袱紗物取出し。詞是一歩二ッ白銀も少し有る。いとしやいかう肌薄な路錢につきて脫ぎやつたの。是を茂兵衛に渡して駕籠に乘せて京の地を。地一足も早う立退いて必ず〳〵悲しい事。聞かせて泣かせてたもんなと。泣く〳〵渡せば フシ押戴き。詞忝うござんする。中に着た淺黃縮緬は奈良の町で賣放し。此の上に着た蘆に鷺。此の秋お前の下されて。地未來迄も母樣の形見と思うて着ますれば。寒いとも覺えず見つけらるゝをそれ切りの。命の内は袖乞でも顧みないは後世のこと。是は其の儘とめ置いて死んでの跡の弔ひと。歎けば母もア、悲し。又死用意ばつかりをと盡きぬ涙の露霜の。白きを見れば夜も更けて。出でたる月は冴えながらフシ親子の袖ぞしぐれける。地茂兵衛はかきくれ物をもいはずゐたりしが。詞我等男の面を下げ斯樣の業を仕出し。のめ〳〵存らへ在る事も。おさん樣のお命を何卒と存ずる故。お宿許へおさん樣を御同道なされ。地お命助け下されば科を私一人に受け。物の見事に死にましたい御料簡賴み上げますと。手を合せ泣きければ。ア、詞愚かしいことといふ人ぢや。我一人生き存らへ言譯が立つ程なれば。二人生きても同じ事。取違ようがどうしようが以春と云ふ男持ちながら。其方と肌觸れ寢たは定形は生れ變つても。地此の惡名は削られぬ。其方はいかう狼狽が來たさうなと。恥ぢしめられて茂兵衛もアツアさうぢや。ハア詞あれ三條通の車の音夜明といふて程もない。行く先當處は無けれども私在所。丹波の栢原迄落ちて見るばかり。サア地暇乞なされませと。いへども親子一生の生死を爭ふ今はの別れ。月出ぬ先は顏見えすいつそ思ひ切るべきに。見かはす顏は見きられずなまなか月も恨めしく。母は悶えてこれ親爺殿。詞脈のあがつ

た死に病もしやと藥は盛つて見る。天にも地にもたつた一人の大事の娘。見付けらるゝと殺さるゝ手放してやられうか。ござれ爺嫗附添うて死なば親子一時にと。氣ゝ狂亂の口說事道順も堪へかねて。詞それはおしやる迄もない。いか成る大病難病でも藥一味の加減にて。助かるもある習ひ息の絕えた死人でも廿四時は待つて見る。唐天竺日本國の名醫の藥を浴せても。天下の法を背くといふ大病にはかなはぬぞや。たつた一つの賴みには以春の方へ手を入れて。心を宥め見るばかり。地もし其の內召捕られすは最期といふ時は。白髮頭を大地の底へすりつけて。命乞も身替りも願ふといふは其の時よ。なまじい親がかくまふと聞えては先に我が立つて。許したつても許されぬ親下人にも見放され。憂目をすると聞えてはけには先に憐み有り。詞ヤイおさん。畜生よ犬猫よと叱るとて恨むるな。願かけぬ神もなく祈らずと云ふ佛もなく〳〵三光天を拜むとて。地七十に成る道順が朝每垢離を取る時は。總身の骨は氷れども娘が處刑に逢ふならば。此の苦みを百千萬重ねても物の數かはと。こらへて月日を拜するはあの月天子の照覽有り。利生は無下にはよも成るまい。詞茂兵衞賴む煩はすな。是こゝに銀子一貫目。家質の利息のたし銀に。黑谷の和尙樣より借つたれども。地世間張つて何にせん家を町へ突出し。寺へ返す此の銀やるというてはやられぬ。貰ふというては貰はれまい。道順が淚にくれ狼狽へて落いたぞ。落した物は拾ひ德罰があたれば落した者。拾うた者に罰はないお嫗おじや歸らうと。女夫せき上げ咽び入り二足三足立ち去れば。おさん茂兵衞わつと泣き銀取り上げて額にあて。あんまり深い親の慈悲却つて冥加が恐ろしい。なう父樣母樣と呼び返せば振返り。詞なんにもいふななんにもいふなさらば。地〳〵の泣き別れ父が歸れば母が止め。母が歸れば父が止めおさん茂兵衞は步みかね。名殘惜しさに立止り小高き土手に伸上り。二人見送る影法師賤が軒場の物干の。柱一本に月影の壁にあり〳〵映りしは。憂き身の果ては捕はれて フシ罪科。のがれぬ天の告。地母は驚きなう爺樣情なやこゝに磔が。詞悲しやお嫗。おさん茂兵衞が影法師。地天道の力にもかなふまいとの知らせかと。スヱテ又堪へかねて泣く聲に。地內より玉は潜り戶明け顏さし出す其の影の。同じく壁に映りけりあれ又此所に獄門が。あさましや此の首の其の名は誰と白露の。玉ではないかおさん樣さらば〳〵の聲の中早黑谷の後夜の鐘。生滅々と響きくる。果は寂滅爲樂ぞと名殘。悲しき 三重

下之卷

春立つと。フシ去年の雪げを。其のまゝに。地霞むも山の奧丹波軒の氷柱も解け渡り。谷の水音しつたん〳〵。ほん〳〵〳〵と鳴る鼓。詞さい德若に御萬歲と御代も榮えまし

ますありきやう有りあら玉や、年立ちかへる朝より。水も若やぎ木の芽もさし榮えけるは。誠にめでたう候ひし。京の司は關白殿。退位の御門日のもく内裏。王は十善神は九善。萬やすく〳〵。浦安が木の下にて。正月三日の寅の一點誕生まします。若夷子商ひ神と。現れ給ひて商繁昌守らせ給ふは誠にめでたう候ひける。ハヤメやしよめ〳〵。京の町の優女賣つたる物はやしよめ。賣つたる物は何々。大鯛小鯛鰤の大魚鮑榮螺。蛤こ〳〵。蛤こうと賣つたる物はやしよめ。京の町のやしよめ其所をば打過ぎ。詞側の棚見たりや。側の棚見たりや。豆に小豆。大根蕪。加賀の牛蒡毛牛蒡。辛子の粉山椒の粉。辛い胡椒召さいの。やしよめ〳〵。京の町のやしよめと賣りためて千貫。つなぎ立てゝ萬貫。地惠方の御藏ずつしり納めて。家も福々爺様媼様父様母様。和子様姫御前產みならべてふく〳〵ふく〳〵。フシ ほゝんほんとぞはやしける。詞チゝあ

でたい〳〵よう祝やつた。とゝ様かゝ様御無事な萬歲祝ひましよ。地なほ御壽命は百包。盆に入れてさし出すおさんの顏を不思議さうに。詞ハア是は奥様お久しうござりまする。御機嫌よう變つた所で正月をなされまする。アゝつがもない。わしは萬歲に近付はないわいの。なんの私等を見覺はなされますまい。每年お庭で舞ひましてお前はお上に結構な布團しいて。腰元衆つらりと並べて御見物なされました。京烏丸大經師の奥様よう覺えて居りまする。田植が御好きでござりました。地なんと一つ舞ひましよかといへばおさん胸騷ぎ。詞目かどの强い人ぢやの。每年の事でも此方はすきと覺えぬ。地必ず〳〵何方でも沙汰してたもんな。わしが里の父様此所へ去年から逼塞してござる故。此の頃漸う見舞に來た。詞此の在所でわしは島原の傾城が。請出されて來てゐると。庄屋にも誰にもいうて置く。もし人が問うたりとも島原で見た女郎ぢや

というてたも。少様子も有る程に京ではなほ沙汰なし。地頼むぞや〳〵さらばまちつと祝はうと。錢ざしぬいて五六十半紙二枚に漏すなと。我が名を包めば惜しからず。ハア詞重ね〳〵おめでたい。二三日中に京へ出まする。烏丸へも參り御嘉例の如くお手代衆。地助右衛門様茂兵衛様とお盃致しましよ。御無事な通り咄しましよと出でんとすればなう是々。詞其の烏丸でなほ隱したい。アゝ酒に醉うたら忘れてひよつといやれば惡い。地此の春はもう烏丸へは行かしやんな。來年めでたうわしが上つて祝ひましよ。烏丸の代りに此所で盃出したいが。折しも酒をきらした是で飮んで下されと。二三匁の豆板二ッ飮ませぬ樽の口塞ぎ。ハアなんの是で申しませう。本の樽より結句木樽に醉ひましたと。うまい目にあふ萬歲の フシ舌鼓打つて出でにける。地おさんも浮世恐ろしくうつかりと成る所へ。茂兵衛も色青うして立ちかへる。詞エゝき

り〳〵戻りはせず。此の身に成つて恵方參り所か。地たつた今毎年京へ來る。得意の萬歳がきて不思議立てたを。につこらしう嘘ついて往なせごとは往なせたが。どうやら此處にも怖氣が立つて長うゐらりよと思はぬと。語れば茂兵衞もあきれはて。詞サア〳〵盆も正月も一時に來ました。天知る地知るでこつちこそ見知らね。今の萬歳の格で。栗賣の柴賣のと丹波から京へ出る者は多し。あれが言ひ是が聞き知れたも不思議でござらぬ。助右衞門めを始め旦那の一家が隣在所に宿取つてゐるげな。其の上たつた今但馬の湯入りを乘せて通る駕籠舁が。面妖な事をいひました。大經師のおさんが奥丹波に隱れてゐる樣子が知れて。京のお役所からこゝの代官所へ解状が着いて。在々を尋ぬる其の使の早駕籠を乘せて。老の坂の下り口から二里の間を壹貫四百。地七百づゝあたゝまつたとたつた今いうて通りましたとフシ身を慄はしていひければ。地ハテなんとせう今迄が不思議の命。されども父樣母樣の歎の程がおいとしい。一日でも存らへるが孝行。今夜の中に退かうでは有るまいか。詞いかにも〳〵かのお心ざしの一貫目二百目遣うて。殘る八百目此の家主助作に預け置きました。大事のお慈悲の此の銀を此方とわしがきつと抱かへて死ねばとて。人の寶になす事は冥加に盡きると思ひ今寄つて申したれば。追付け持つていかうと申す。地此の銀を腰に着け。丹後の宮津に兄弟同然の者が有る。其所迄どうぞ退きませうそれ迄に運盡きて。死ぬる期に極つたらば。日頃申す通り惡縁と思うて下されませ。私故に大事のお身を棄てさせましたと涙ぐみスヱテ打ちしをれて見えければ。地又同じ事ばかりそれは互の因果づく只忘れぬは二人の親。扨いとしいは幼馴染の以春樣。こなたもわしも微塵濁らぬ此の心。言譯して死にたいと又さめ。フシ〳〵とぞ泣きゐたる。家主の助作案内もせずつつと入り。詞ヤア新六樣さつきは御出でなされた。預りの八百目たゞ置くよりはと。少手廻し致し急にはどうも調はぬ。一兩日待つてもらひましよ。こな樣もあんまりな。地あの樣な傾城殿請出した上に。銀遣ふといふ樣な昔の心おやめなされと云ひければ。詞いや是助作さん。あのさんの入用ではないわいな。皆わしが入用ぢや勤の身はな。全盛する程世間が張つて辛いものでごんす。懇な客から借つた銀で。今宵中に返やさねばわけが立たぬわいな。其代りにあのさんの勘當が許りて大阪へ往なんしたら。夜でも夜中でもいうてごんせ。地八百貫目や八千貫は誓文くつされフシ利なしでやすんといひければ。詞あの通りあの通り。近頃御苦勞千萬ながらどうぞ頼み存ずる。ムヽいかにも聞き届けたそれ程急など知らなんだ。地七ツ過暮迄にきつと持つて來ませう。女夫の衆の請取とる必ず内にござれや。ヲヽ動きもしませぬと約束堅き。銀が

敵と知らざりし フシ身の成る果てぞあさましき。扨々とろりと一ぱい參らせた。詞今の傾城の物眞似芝居御好の一德。地銀請取ると其のまゝかけ出して急いだら。夜の中に七八里は心安い宮津に落着き。切戸の文殊の法印樣に母方の緣あれば。賴むに引きはなされまい。そろ〳〵用意と帶しなほし身拵へする中に。鐵棒の音人足頻りに近付きたり。詞ヤア氣味惡いハアなむ三寶口惜しい。助作めに出しぬかれた。地おさん樣もう遁れぬ未練な働き遊ばすな。ヲヽ覺悟した合點ぢやと。表を見れば捕手の役人。助作を先に立て捕つた〳〵。捕つた〳〵と亂れ入る茂兵衞臆せずつゝと出で。詞見苦しいお侍。合口一本さゝぬ町人手向ひは致さぬ。悴の時より柔術當身を稽古して。すはといはゞ腕は細くとも。お侍の五人や七人は慮外ながら。ぎやつと言はせてのめらせやうも知つたれども。元の起りは主人の勘氣。主人に手向ふ同然と思ひ手向ひは仕らぬ。此の女中に付き申譯あれどもそれも入らぬもの。不義ならば不義にしてサア尋常に括れ。地捕つた〳〵と引伏せ〳〵高手小手。顏色變ぜず縛られし男も女も健氣さに。捕手の武士は我を折つて フシ哀れといはぬ人もなし。おさん凉しき目の中にて助作をはつたと睨み。詞エヽさもしい土百姓。汝少しの慾にめでてよう訴人しをつたな。申し殿樣。あいつに八百目の銀を預け置きました。地かうなつた身に金銀は入らねども是は親の情の銀。京へ上して黑谷へ上げて下されませと。いひもきらぬに助作まが〳〵しき顏つきにて。詞アヽ恐ろしい女ふ。いつ汝に粒三文も借つた覺はない。五十日ばかり家貸して。宿賃の米の味噌のと算用したらば二三百目來る筈ぢや。地八百目預けたとは生騙めと。爭ふ所を茂兵衞繩取引立て。助作が橫腹はつたと蹴倒し。詞是しきの目腐銀。おのれ風情に僞いはうか。よい〳〵汝にくれた。地八百目の銀うぬが根性相應に。現世は長者と悅んで閻魔の前で算用せいと。面骨三ッ四ッ踏みつけ〳〵フシさらぬ。顏にてゐたりけり。かくと聞くより助右衞門嬉しげに走り付き。詞私は此の度お願ひ申上げし御領內助作が從弟。京大經師以春手代助右衞門と申す者。御苦勞千萬におさん茂兵衞御搦め下され。我々主從本望大悅仕る。地繩付二人請取り早々上り申したし。お渡しなされ下されと謹んで陳べければ。詞役人氣色をかへ其奴引きのけ。推參至極な繩付を渡せとは汝に賴まれ捕りはせぬ。京都より解狀によつて搦めとる。すぐに京の牢屋へ引渡す。殊に段々詮義ある者。慮外をぬかしたら地汝ともに搦めると叱られて助右衞門。揉手をして退く所へ赤松梅龍。早駕籠にて馳け着け首桶提げつか〳〵と出で。詞我等は大經師以春が下女。玉と申す者の請人卽ち伯父。赤松梅龍と申す者。此のたびおさん茂兵衞駈落の事ゆめ〳〵兩人の不義はなく。此の玉が

よしなき言葉を聞きちがへ嫉妬の心餘つて。地間違の誤りにて思はず不義の虚名を取ること。詮ずる所玉めが口からなす業科人は一人。則ち玉が首討ッて參るからは。兩人の命御助け下さるべしと蓋を取れば玉が首。おさん茂兵衛は一目見て。早先立つたかはかなやとスヱテ消え〲とこそ成りにけれ。代官の役人手を打つて。詞ハア丶早まられた梅龍。此の兩人の囚人は科の實否定まらず。京都に置いて中立の女。其の玉を證據に詮義あらば事の次第明かに顯れ。地兩三人共に助かる事も有るべき物を。肝心要證據人の首を討つて。何を證據に詮義有るべき知邊もなし。殘念々々二人の罪科は極つたり〲。首も一所に京都へ渡せ早早罪人引きませい。承るとひつ立つれば梅龍つゝ立ち地だんだ踏み詞エヽ〲早まつた仕損じた。地七十に及ぶ梅龍が出來したてして一生の誤り。むだ〲と腹切るもひとり物に狂ふに似たり。相手がな欲しやなあ。ヤア助右衛門よい相手。汝を切つて人を殺した過りと。共に罪科に行はれんとするりと拔いて打ち付くれば。眞甲をしてやられフシ朱に成つて迯げたりけり。地首を取らずに置かうかと駈け出づるを大勢取りつき。狼藉させぬ粗忽させぬとだきとむる。狼藉合點ぢや放せ。〲と駈け出すも止るは老の力にて。止らぬ物は科人を引行く駒も目に涙。轡にかゝる白泡の哀れを。殘す　三重

おさん茂兵衛こよみ歌

乘る人。も乘せたる駒も。遂に行く。フシ道とは知れど。最期日の。今日か明日かの我が身には。我のみ消ゆる心地して。數多の人のフシ命乞。それを杖とも柱暦の紙破れて。向ふ其方は都の惠方。ふたりが身には金神と。思ひ返せば胸塞り。月塞りの駒の足オクリ隙行く。駒の世のたとへ八十八夜は及びなき。スヱテ年は十九と二十五の。名殘の霜と見上ぐれば空に。知られぬ露の雨はら〲ほろ〲繩目に傳ひ。フシ鞍壺に傳ふ涙の十方ぐれフシオクリ泣く泣く引かれ。行く姿フシよその見る目も。哀れなり。人目盗みて現れて。地不義ぢやのなんの庚申今日は明日の甲子と知らで逢ふ夜の其の報。世上の口に謠はれて。合せて見てもあはぬ中。丸い苧桶に角の蓋。眞苧績みためて。綯ひまぜて今は我が身の縛繩。譏を受けん情なや。サイモンおさん茂兵衛にいふやうは。由なき女の悋氣故。なんの咎なきそなた迄。あれ不義者と危日フシつひに命のほろぶ日。湯殿始に。身を清め新枕せし姫始。かの着衣始引きかへてひかるゝ駒のくら開。スヱテ思へば天一天上の。ギン五衰八專間日もなしたゞ何事も坎日と聲も。涙にかきくるゝ。歌茂兵衛やう〲顏を上げ。こは愚かなりおさん樣。火に入り水に入ることもさだむ因果と諦めて。せめて未來の黑日を遁れ。二季の彼岸に到らんと念じ給へや南無阿彌陀。南無阿彌陀佛を帆にあげて。

共に弘誓の　ウフシ　船乘よし。紅蓮の井戸掘焦熱の。地獄の釜塗よしなやと急がぬ。　冷泉道を。いつのまにユリ。　越ゆる我が身の死出の山死出の。田長の。　フシ田がりよし。野邊よりさきを見渡せば。過ぎし冬至の冬枯の。木の間〳〵にちら〳〵と拔身の槍の恐ろしや。　シテ　あれで其方の身を突くか。ワキ是でそもじを殺すかや。シテ　血忌も今は僞りと。　二人二人は顏を打合せ。くどきこがれて泣く涙　フシ馬の尾髮やひたすらん。フシまた冴えかへる。夕嵐雪の松原此の世から。かゝる苦患に往亡

日。島田亂れてはら〳〵ハヅミ顔には。いつのフシ半夏生。縛られし手の冷たさは。我が身一つの寒の入。ギンハルフシ涙ぞ指の。爪取りよし袖に氷を。フシ結びけり。スヱテつく〴〵物を案ずるに。シテ々、キ我は劍の金性の。刄にかゝる約束か。ワキわしは土性墓の土。何とて墓に埋まれず。シテ逢に木性の木の空に。ワキ屍を曝し。シテ名を晒し。二人なんどナホス小歌に作られて。強き處刑に粟田口。オンド蹴上げの水に名を流すおさん茂兵衛が新精靈。恥かし乍ら手向草。同じ罪科の下女が名の。玉は冥途に通へども。魂魄此の世に止つて共に浮名はくだすとも。冥途は主從一所にて娑婆で手なれし玉が業。無間の釜で茶をわかし。往來の人の。回向うけ。我が身の悟り。フシ開く日。ア、慨くまじ今更に。何くよ〳〵と凶會日の。悔むもよしな引寄せて。ハルフシ結べば露の。命にて解くれば元の道芝に。やがて亥子や五里六里十死も過ぎて〽是ぞ此の小川通りは三途の河。

串の町さへ近づけば見キ群集取々の。暦が噂繰返す思へば私が嫁取よし。我が昔の元服よしの日取りもよしや蘆に鷺。裾の模樣も給に寫し。筆に列ねて末の世に語り。續けて三重〽聞き及ぶ。

フシ道順夫婦。地群集の中を押分け〳〵。犯せる罪が重ければ又慈悲といふ名が重し。磔にも獄門にも此の爺媼を代りに立て。二人を助け下されやれ。おさん可愛いやと縋りつけば警固の者寄つたら打つと追ひ拂ふ。黑谷の東岸和尚衣の袖をまくりあげ。韋駄天の如く飛來り。詞出家に棒を當てたらば五逆罪〳〵。サアおさん茂兵衛此の東岸和尚が助けたと。地持ちたる衣をフシ打ちかけ〳〵肘を張つて立ち給ふ。詞役人頭腹を立て。罪科極つたる囚人を助けるとは。上を輕しめたる御坊の仕方かなはぬ〳〵。それ衣ひつぱげとどつと寄ればア、是々。出家侍悟りは同然。助くると云ふ義理は三世に亘る衣の德。愚僧が念願相叶ひ二人が命下さるれば。これ現世を助かる衣の德。もし又罪に沈んでも。愚僧が弟子になすからは未來を助かる衣の德。未來でも現世でも助かると云ふ文字二つはなし。サア助けたと呼ばゝる聲。諸人わつと感ずる聲。道順夫婦の悦の聲は。つきせず萬年暦昔暦新暦。當年未の初暦めでたく。開きはじめける。

七行大字直之正本とあざむく類板世にありといへ共又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直の正本にあらず故に今此本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本筑後椽 竹本(道印) 博教

正本屋 山本九兵衛版

大阪高麗橋壹丁目 山本九右衛門版

嘉平次おさが 生玉心中

近松門左衛門作

上巻

次第〳〵今に傳へて老松の。〳〵。かはらぬフシ色を頼まん。地其の松が枝の宮柱今に榮えて數萬人。心々の願立に。神のお身さへア丶急もじの。まして流れの憂きふしや。日毎に變る身の勤。今日も苦界の神詣道頓堀を天神へ。駕籠も一里を飛梅や。フシオクリ社の〳〵めぐり浮れ出でハルフシ見渡せば。數々の。花屋植木屋立並び。色賣る〳〵。花の色賣る我も色賣る身は仇花の小オクリ花に。價の高下があれば。勤の品も段々の。スヱテ品々有るも道理や。花と色とはもと一つ。されば身を賣る金の名を。フシ花代とこそ名付けけれ。先づ鉢植の作り松すんと流しの一枝は。太夫の威勢備りて。恪氣の嵐手管の雨無理な。口説の霜雪もフシ騒がず痛まずいやましに。ハルフシ情の緑。はびこりて。松の位と譬へられしも憎からず春立ち。冷泉行けば。色失せて。さびしき梅も捨てられず。是天職の姿にて一夜流れの軒端の梅の。あだな袂にハルフシ香をとめて。歌さんさ思ひの種かいの。根からいやなら。添ふ氣ぢやないに。騙されてにくや。つらやを逆様に。客に泣かせて後朝の。別れあやなき菖蒲草。フシ扇女郎に準らへて牡丹畠の名盡しに。大臣も目を遣手の玉が。忍ぶ戀路を石臺の。女蘭夫蘭は呂州の姿。白と眺めて白牡丹しやんとしてから。フシいやみなく。しかも色香の深見草。歌思ひ切れとは。死ねとの事か。江戸生きて添はれぬ浮世なら。いつそ煙に成りたやな。辛氣もやして待宵に。似たりや似たり。フシ桂仙花。しばし休らふ。木蔭を宿の枝は木槲我が身は茶槲。うるさき里の勤ぞと。誰かは黄楊や白槇や樅。南天に小手毬にいとし。男と射干の。扇の形に末廣の。地逢瀬を祈る神垣に拍手ならぬ柏屋の我が名もさがの若楓。戀草千草思ひ草。眺めらるゝも眺むるも。同じ色なる袂百合。扇かざして神々詣。安井生玉清水坂を。しやならしやなら〳〵〳〵ちよこ〳〵走り。しやんとして見よや。歌柏屋さがははすはにござる。詞戀の意地酒ヤトン〳〵。手もとでかゝる。押へてかゝる。どうでもさがは濡者ぢや。地油壺から出すよな女房しんとろとろりと見とれる女房。詞すねる男を追つかけて。地そこら〳〵をずんずと呑ましやる〳〵。サアエイトン〳〵。エイトン〳〵〳〵〳〵。しんぞナホス一夜はフシお手枕。日影色どるさつき棚。草の異名はさまざ〳〵によむともよしや葦簾西の茶屋から我を呼ぶ。せはしないとて見遣して見すつる。花や三重〳〵恨む

らん フシ色の動の。憂きふしの。峠を越え二伏見坂戀のないにも習ひとて。あたら儕を柏屋の。さがは大和の一見客が。今日は天滿の社内の茶屋で酒と出かけて遊ばんと。一昨日からの揚續け。空も雨氣の駕籠の桐油。賣木の花に氣を晴し フシ清水屋にこそ入りにけれ。詞茶屋には待ちかねエイさが樣。駕籠の衆なんとして遲かつた。お客樣は待ち焦れたつたひとり飲んでぢや。いざ先づあれへといひければ。さればいの。こつい客の癖に揚の日は半時も。側に置かねば損の樣に吸付いてゐたさうな。それで勤の續くものか。是駕籠の衆賴みます。わしは雨氣で頭痛がして。寢んでゐると間に合せ。盃の相手になつて。日頃の手並にいきつかして下んせ。地どつこい氣遣なされますな。任せて桶でも盥でも呑みつけてやりませう是おか樣。詞精出して豆腐燒かつしやれ。鱣も四五本燒かつしやれ。地冷飯も燒かつしやれと からけおろして入りにけり。さがは主の側に寄り。詞さつきにいうておこした。蜆川の嵐の芝居へ便宜して下んしたか。樣子はどうでござんすぞ。なんの如在致しましよ。お前からの書付を其のまゝ持つてやりました。心中の狂言の口上の所。すぐに觸れてもらうたと。使はとうに戻つたがもうお出でなさるゝ筈。定めし狂言に見とれて。地それでかな遲いかといひつゝ炙る豆腐より フシさがが心や焦るらん。地假初の薄茶茶碗もなじみては。濃茶茶碗屋嘉平次はさがが情の錦手に。染付けられて親兄弟の意見も耳に蓋茶碗。フシ深編笠も隱れなく。地さがは見つけて是爰ぢや。爰ぢやと招けばちよこちよこ走り床几に腰を打ちかけて。側へ寄りたい抱きつきたい言ひたい事のわくせきも。主が見る目憚りて。他人向なる折柄に奥よりなんぞお肴。銚子替やゝと手をたゝくあゝいと引くのがお定まり。蒲鉾梅干粋な花車。氣を通して立ちければ。のう二日逢はぬはどうぢやいのと。顏差入るゝ編笠のフシ下こそ戀の宿りなれ。地嘉平次もなつかしさ。詞此の中は田舍客で平野屋にぢやと聞いたゆゑ。往きか戻りに顏見よと濱側を用有りげに。地往つ戻つ入りもせぬ和中散買うたり。心太屋の水機關もさう〳〵見ては居られず。うろ〳〵すれば長町脇の子供が見知つて。ありや〳〵。東の難波燒が坂町通ひ。詞柏屋通れば二階からちよいと招く。のつ是なんとしよと 地惡口いへばあたりからはきよろ〳〵見る。親の内へは行かれぬ首尾。出見世にも尻据らずいつその事遠がけに。蜆川の芝居の曾根崎の狂言見て。醬油屋の德兵衞と我等が思ひ引合せ。憂きを晴す合點で。其の通り一筆書いて小辨を賴うで置いて來た。詞その文見てか。けふ爰へおじやつたは天神樣の御利生。地神も佛もなじみが本。親仁の見世の燒物に一文宛でも天神樣。お馴染ゆゑぢやといひければ。詞さればいな。其の文見ると嬉し

うて。客を勤めて此の天滿といふ思ひつき。幸ひと此の清水屋は。わしが前方扇風呂にゐた時からの近づき故。爰を頼んで芝居へも呼びにやりました。地それについても父御さんの内方へもまた行かれぬ首尾と有る。これ逢ひたい見たいはわしとても。ほんに／＼寢た間にも忘れねども。遂には末で女夫に成る大願ではないかいの。詞其の間が互の辛抱。人は次第に身を持ちあげるがほんなれど。扇風呂のさがともいはれた身が。晦日節季は前垂がけで。裏屋背戸屋慳貪屋三界かけ取にありく樣な。地勤するのも澤山に逢はうため。こなさんが大和橋の濱納屋借つての出見世も。わしが近くに居ようため。懇な宿では斷わりたて出見世へ泊りに行く夜さは。女夫所帶をする心。同じ寢るのも身につく樣で嬉しい。詞されども一度は父御さんのお耳へ入らねばどうもならぬぞえ。聞けば姉御さん。堺筋の鹽町邊に縁付してごんすとや。此の姉さんなど頼みまし。前方から父御さんによう思はれて下んせ。昨日の晦日も内に居さんせず。地わけの惡い評判きけば頭髮一筋づつ。拔かるゝよりも苦しうて。氣をもんでももがいても身は裸なり工面はならず。詞大方は四日迄とわしが請合置きやした。私ひとりなら死んで成りと了はうが。地こなさん惡ういはするが口惜しい悲しい。茶屋の勤する者は人の小息子唆かし。惡道に引入れるの不孝者にしてのけると。十人が十人で。町の衆は思はんす涙がこぼれてうとましい。私可愛が定ならば。父御さんとも兄弟御とも首尾ようして下んせと。涙ぐみたる親身の詞 フシ更に。勤と思はれず。地嘉平次も共涙。詞今に始めぬそなたの心底過分々々。ハテたつたひとりの父親なり。一ッ屋の五兵衞とて若い時は男を磨き。物の筋道六義を立て無理をいふ人でもなく。子供が少しの色遊。五百目壹貫目遣うたとて悔む人ではなけれども。どうともかうとも叶はぬ事が有るぞいの。今迄は隱したが。弟の幾松とおれとが間に。十八に成るおきはといふ妹が有る。もとは在所一ッ屋の叔母の娘。後々は此の嘉平次と。從弟どし女夫にする約束で。藁の中から養ひ。死なれた母の肝精で物も書き縫針。綿もつむ機も織る。算用もやりをる顔も十人なみなれど。地そなたをのけて此の世界に女子が有ると思ふにこそ。綿をつまうが機織らうが。おきは愚か中將姫の再誕が。蓮の糸で一重羽織おりやるとて。見向きもする平でない。されども親の契約小さい時から許嫁。今日祝言明日祝言とせがまるゝ。詞一理窟こねたの。是親仁樣。わしや畜生ぢやござらぬ。胤腹分けねど兄弟。妹よ兄樣といひつつも。夫婦に成るは犬鷄のする業。男も立てた一ッ屋の五兵衞は。畜生を子に持つたといはせては私も不孝。此方も一分すたる事ならぬ／＼と云ひ破る。そこらを詰まらぬ鎌親仁。ヲヽこりや出來した。イヤよ

ういうた。ヤイ畜生吟味する根性で茶屋者と腐り合ひ。親にも知らせず夫婦に成る極めして。行先が借錢だらけ。人に疎まれ指さゝる、是が又人間か。五兵衛が目には畜生と見えるわい。茶屋者と緣切つておきはと女夫に成る迄。門詰も踏まさぬと打たれぬばかりの首尾なれば。地主家へとては禁制。姉婿は他人なりずんど堅い商人。一人の弟は眼病氣とひ談合も誰とせう。いろは茶屋から坂町かけて負うた門は七八軒。銀高僅か壹貫目餘り。身を刻んでも當なければ。駈落か自害と思ひ定めた所になう。詞生身に餌食天道人を殺さず。覺えてか此の前。扇風呂でそなたの事で大喧嘩した。西國橋の印傳屋の長作。地味な事で其の喧嘩から。両方心底見屆け齒の根も喰ひあふ懇親。彼奴は所帶持なれば少しの取替もしてくれる。此の長作が肝煎で中國のお屋敷 。親仁の店から錦手乾山音羽燒の。皿の鉢の茶碗のと。十五六兩が物賣つてくれ。晦日にお銀が渡る。請取書いておこせと四五日先に取りに來た。定めし昨日請取つつろ。詞今日嵐の棧敷に侍衆に附いてゐた。おれも芝居を立ち樣に棧敷の裏から音信て。すぐに爰へ來てくれとかた〴〵約束して來た。今では此の平に命もくれる挨拶。筈ちかへる男ぢやない。芝居果に長作が銀持つて來るか。爰へもぱつとはずまうし。こちが出見世の仕舞は少し取る懸も有る。二百目あればざゝんざ。伏見坂から道頓堀。一厘殘さず物の見事にしまうて。待つてるや節句から面も笠も脫がせう。ヤ借錢の笠は脫いでも傘は放されぬ。又降つて來た。南無三寶あれ見や。地あの菅笠着て來る女房。鹽町の姉ぢや人。目の惡い角前髮は弟の幾松。詞ムウ〳〵ほんに恰好がよう似やした。それ〳〵爰へござんすこなさん逢うてもだんないか。いかな〳〵俤も見せともない。地あの幾松が手を引いて來る腰の太い。尻のひよつと出た女子。姉の內の竹といふ飯炊。あいつが見た事聞いた事。其の日の中に大阪中に事觸。こちが取沙汰何のかのと親仁に告げるいやさに。少し濡れかけて騙したりや。詞惚れられ自慢でもう其の事を觸れあるく。それであいつが夕を筒抜と附けて置く。そなたも姉の知つてぢやげな。アヽうるさ。地どこぞにちよつと隱れ笠隱蓑なき身の置き所。駕籠の雨桐油打明けて。二人が膝を組み合せ オクリ 身を抱き〳〵合ひて身を忍ぶ。地 姉はそれとも道のべの清水が見世に暫しとて。フシ爰借ますとぞ休らひける。地奥には猶も飲みしこり踊るやら謠ふやら。騷ぐどさくさ若草の妻もこもれる駕籠の中。あられぬ姿顯れて姉や弟の見咎めん。さがは奧より尋ねんかと怖さに猶も身を寄せて。締め合ふ中の冷汗は。桐油もる雨の如くにて フシ肌着も。絞るばかりなり。地奥の客がだら聲にて。詞こりやさがは何してぢや色がなうて呑めぬわい。頭痛がしようば爰へ來て寢やしやれ。どり

やお迎に自身お馬を出されうと。表へ出づるひよろ〳〵足駕籠の者ども生の酔。さが様〳〵。迷ひ子になつてか。返せ〳〵さが様返せ。ヤア愛にか。酒飲むまいとて手が悪いと。姉に取付く手をもぎ放し。エイ狼藉なさがとやらぢやござらぬぞ。こちや道通り。雨宿りに茶屋の見世へ腰かければ。賣物と思やるか。阿呆くさいと叱られて南無三寶。嵯峨のお山と取違へ愛宕山へ登ろとした。御発〳〵のちろ〳〵目あたりを見廻し探こそな。愛宕山から見下ろせばさがは一めに見付けたぞ。駕籠から帯の端か見えるぞさがを捜し出さうかと。寄らんとすればァヽこれ〳〵出まする〳〵許さんせと桐油の蔭より這出て。こなさん達だまして隠れんぼしたればつい捜し出された其の代りになんぼ成りと飲まさんせ。どこのお内儀様やら麁相な酎へてくだんせ。みんなごんせ〳〵と奥に入れば嘉平次は。さがを放れし嵯峨松茸。より殘されし風情にて フシ駕籠に縮んでゐたりけり。

姉はもとより商屋の妻と成る身の目も早く。ちよつと見るより一寸やらず駕籠なは弟の嘉平次。拗情ない身持かな。引きずり出して叱らう。いや〳〵供の下女が見る所。さながら若い者人中で恥もかゝされまい。身の成る果が可愛い父様がいとしい。おきはが心が無慚なと。さま〴〵胸にせめ餘るスヱテ涙は屏にはや漏れて。なう幾松。そなたは仕合なよい時に目を病んで。あさましい事見やらぬ。今のお山が今日一日は奥の客に身を賣りながら。座敷を忍んで駕籠に隠れてゐた體は。外に深い人にあふ手管とやらで有らうが。お山はお山の道にもせい。其の深い男は。誰ぢや知らぬが有るまい事ぢやないかいの。定めてこちの嘉平次もまあの通り。嘉平次の悪性ではお山と相駕籠で。桐油の下に屈んでゐようも知れまい。見るめも悲しいあさましい。是といふも親の恩を忘るゝゆゑ。心もみだらに身を持ち崩し人にも人といはれぬ。父様や母様に娘は有り息子は有り。何を不足におきはといふ子をもらうて。乳母を取り守をつけ憂き世話がやみたかろ。小さい時から女子の手業も教込み。心も誠實に育てあげ。嘉平次と夫婦になしたらば身代の藥なり。商の勝手も能く。繁昌もさせたいと嘉平次がいとしいばつかりに。世話をやんでやみ死の。母様の恩を フシはや忘れ。可愛いけにおきはもほんの天竺浪人。見世の若い者どもあの女子始として。とやかう評判する時は。姉が耳へ八寸釘を打たるゝよりも猶こたへる。若しも自然此の駕籠にお山と嘉平次と乗合つてゐる所。今の客が見付けて引きずり出して踏むとても。何と言譯有るものぞ。見こそせね聞きこそせね。定めてさい〳〵行く先で恥をかきつらう。其の身ひとりの恥かいの親兄弟は何になれ。來世の便はなけれども。あの人故に迷はつしやる母様がいとしいと。慈悲の涙も

目に餘る駕籠に當ててのくどきごと。嘉平次は身も縮み。命も縮まる許りにて フシ消えも。入りたき心地なり。幾松は嘉平次が駕籠にありとも氣もつかず。詞エヽ曲もない兄きの心今ならでは申さぬが。私が眼病もあの人ゆゑ聞いて下され有る事か。おきはとそちと夫婦になれ其の代りに家屋敷こ商の株ともに親仁の跡を嗣がする。合點せい〳〵と道ならぬ事耳かしましく。所詮わしが死ぬるか不具にして下されと。山上樣へ願をかけたれば御利生で此の病。つい時花目の顔すれど。目は綿繰で繰る樣で。譬いて物もいはれぬ。天滿に上手の目醫者が有るとつれてお出でなされしゆゑ。道すがら物語もと是迄は參りしが養生はしませぬ。私が盲になつたらば。兄樣のひとりして見世の事も取捌き。内に身が据つたら。自らおきは樣と一つになる氣も出來ませう。地エヽわしら迄身を捨て。是程に思ふとは思ひやりも有るまい。きこえぬ所存な兄きやとスヱテ目をかゝへて泣きければ。供の竹が差出口。詞嘉平次樣といふ人は嘘つきの骨頂。わしにもきつう惚れてゐるいつぞ日の暮に出見世へ來て。思ひを晴らさせてくれと口說かつしやるいとしさに。お使の序に寄つたれば。今宵は遁れぬ客が有る重ねてこちから便宜せう。心ざし嬉しいと錢三十程包んで懷へ入れらるゝ。むつと腹が立つて來てわしや店屋者ぢやないぞや。身を賣る女子ぢやないぞや。肌觸れねばきかぬと喚いたりやこりや。誠の契は重ねて約束のしるし是ぢやというて。引寄せしつぼりと頰ずりして。サア往ね往ねと突出さるゝわしも名殘が惜しうて。跡のぞいて見たれば氣味惡さうに。見世の手水鉢で頰を洗うてけつかつたと。地語れど二人は餘りの事紛らす耳の餘所の町。風に嵐の芝居果てオクリちらし〳〵太鼓の聞ゆれば。南無三寶長作が來ぬ先に。姉も往んで下されかしと飛び立つばかりの駕籠の中。今にも來たらば何とせうのめ〳〵とも出られぬ首尾。出ねばぐわらりと筈ちがふ氣をもんでも詮方なく。何御存じなき天神を フシ俄に賴むばかりなり。地約束なれば長作暖簾の書付見て。ムウ淸水屋は是ぢやな。詞少たのも道頓堀の茶碗屋嘉平次は爰にか。約束の通り長作が來たというてたも。地嘉平次〳〵といふ聲に姉弟驚く其の中にも。姉は知つたる駕籠の中。思ひやりては諸共の心。遣ひぞ殊勝なる。さが聞き付けて走り出で。詞ヤア長作樣久しうごんす。さがどのか嘉平次が來るからはこなたも爰にと思うた。我等は今日侍衆の相伴で。嵐の芝居から直に鯉屋へいく筈で是。袴の體なれど嘉平次が何やら内々の一物。今日入らいで叶はぬ持て來てくれといふ。棧敷の事武士の前。おうとはいうたが何の事ぞ。つんと此方に覺がない。地嘉平次はどこにぞ早う逢うて聞きたいと。いへどもさがは姉の前駕籠にともいはればこそ。詞いやちよつとあそこ迄追つ付けて

ごさんしよ。今日入らいで叶はぬとは私も聞いたが。あの様の賣物をこな樣が取次いで。屋敷方へ賣らんした其の銀が十何兩とやら昨日渡る筈ぢやげな。請取もいつて有るとの事。大事なか私に渡さんせ。さなかまちつと地酒でも飲んで待たんせと。いへば長作ヤア〳〵。詞大それた事いひますの。酒所でござらぬ。エヽいかに身が術ないとて不器用な氣に成り居つた。いかにも賣物は取次ぎ銀高壹貫貳百三拾目代。拾六兩惜にあれに手渡しして。則ち自筆印判の請取を握つてゐる。地體是は九之助橋親五兵衛の店の賣り物。銀は己れが使うて親の手前の算用立たず。地此の長作を横道者にせうとは底意の怖い盗人。此の物騒の世の中こなたの所も裏は野ぢや。内の勝手は知つてゐる。必ず用心さつしやれ。身があつければどのよな事。しようも知れぬと眞顔の言分さがはつと色違ひ。姉弟は猶身にかゝる難儀を察して駕籠の中。くわつとせき上げ

身をもがきエヽ無念や騙られた。姉の手前が恥しいいつそ驅け出で。踏んで腹を癒ようか出ては姉の恥辱か。早う歸つて下されかしと千萬碎く氣の働。胸の轄に怒の火焰。フシ駕籠もゆらめくばかりなり。地長作駕籠には氣もつかず。詞是さが殿驚く事ではない。地體あの氣な生れつき。それを知らずに仇惚して此の長作は捨てられた。酷いぞや〳〵。なんと元へ戻しておれが懇してやらうか。嘉平次などとは違うた十貫目や拾五貫目は。手の悪い事せずに見んごと今でも〳〵ぢや。地こなたも憎かろ筈がないとしなだれ寄つて手を取れば。アア詞いや〳〵無禮過ぎた置かんせ。あれ町の御内儀樣も見てござる。勤の者はあんな者かと蔑みが恥しい。たとへ平樣が盗人で有らうが強盗で有らうが。いとしうて〳〵命をやつた此のさがぢや。なんぼこなたが佛程正直でも顔も見たうないわいの。サア先づ一旦さういはねばわけが立たぬ。それ

もこちに合點ぢや。今に嘉平次が大盗人しをつて。一ッ屋の五兵衛鹽町の姉が首にも繩付き。其の身はこなたの裏の西の方に。鳥のとまつた樣に首ばかりになつた時。長作樣懇しようといはうより。地今思ひ切つたれば彼奴も仕合此方も徳。どれ前の樣にむつちりと肥えてか嘉平次めが。吸取つたか。肌を見たいと懐へ手を入るゝ。取つて突退け小見ともない置かしやれ。地言ひにくけれど此のさがと。平樣とは一心づくで逢うてゐる。こなたの樣な口先ではないぞやと。地おろ〳〵涙の腹立聲。嘉平次はもう是迄堪忍袋も破れかぶれ。飛んで出でんとする所へ。姉の内より迎への丁稚大息ついで申しお家樣。ちやつとお歸りなされませ。早う呼んでこいと旦那樣は門に出て待つてござります。早う〳〵とせきかくる。アヽ詞心許ないけたゝましい何事が起つた。こりや爰は公界ぢやぞ誰も人の名はいはず。地樣子ばかりちやつといへ構へ

て人の名をいふなと。心の利いたる姉の利錢。使はるゝ丁稚も俊轄者、角屋敷の親仁様がお出でなされて。彼の板圍の惣領殿が一昨日から在所が知れず付居借錢乞。親仁様も一分立たぬお前の留主も合點がいかぬ。兄弟の事なれば日罾者にかこつけ惣領殿を、かくまへたに極つた姉も共に勘當ぢやと。喚き散してござりました。それで走つて來ましたアヽ フシづつなやと息をつぐ。アヽ 詞そんなら往なざなるまい。行かいで叶はぬ所も有り、見捨て難ない事もあれど。男も女子も親の命には背かれぬ。殊に夫の呼使。アヽ女郎様お邪魔 地しましたと怪我の振にて駕籠にはつと行きあたり。詞ハア駕籠が有るとは氣がつかなんだ。是に限らずうろたへては鼻の先なことに氣がつかぬ事が多い。商ひ物の請取なら。買主の手へ渡りさうな物が。中使の手に握つてゐるとはの。是も氣のつかぬ事と。地教へる智恵や天神を フシ伏拜みてぞ歸りける。地嘉平次

働る方もなく。駕籠踏散し躍り出で長作が髻取つて引据ゑ。詞此の嘉平次を盗人の騙のとはどの頬桁で吐かいた。先は武家方中取したと思はれては出入がならぬ。先づ請取書いて渡せ銀取つてやらうと。うま〳〵とよう喰はせたなあ。今のは身が姉ぢや人。駕籠にゐるのも見付けてぢや。地姉のまへでよう恥を與へた。人かと思うてはまつた。涙がこぼれて口惜しいとスヱテ齒がみをなして泣きゐたり。詞チヽ成程姉とは一言で見てとつた。買主の方へいくべき手形が中にとまつて有るとは、なんぢや女の猿智惠、先へは此の長作が請取して上げた。地あれは身が方への請取。汝も小才な奴ぢやもの。詞銀も見ずにあたゝかに請取をせうわいなあ。エヽさもしい騙めヤイ。詞銀がほしくば穢い云ひかけせうより奇麗に家尻切れいやい。拵も巧んだ〳〵今思ひ當つた。嵐の芝居の曾根崎の狂言が。面白うて再々見るとぬかしたがよう見覺えた。取りも直さず油屋の

九平次。總じて狂言淨瑠璃は善惡人の鑑に成る。地汝は騙の手本にするか。師匠の九平次より倍越した大騙。此の春おのれに三百目銀借つた。懇親の中手形もいらぬとぬかしたれど。よい中の垣と預り證文してやつた。それに引きつぐ台點なら差引して算用せい。詞こりや油屋の九平次。醤油屋の徳兵衛を。だました格を出したらばちつと頤をくひちがよう。ちよつと手をつけるが最期ぢやぞ長作と。腕まくりしてねぢ寄れば。ヤアぴこ〳〵するない。わやにしてもさせぬ〳〵。手形の銀は手形の通り取る所で取つて見しよ。ヲヽ三百目の手形に十六兩はえ遣るまい。遣るまいとはどうして。先づかうしてやるまいと面甲はうどくらはする。地ヤア二歳め打たれてゐようかと打ちかくる。腕捻ぢ上げひつくり返せば起きあがり。むしやぶりついてたゝきあふ。さがはあせつてなう喧嘩々々と呼ばはる聲。客も駕籠も醉つぶれさせぬ〳〵と

割込んで。ひよろつく足を踏みこかされ。支人踏んだは堪忍せぬと相手がどれやらめつたぶち。大道へまくり出で大蓋も泥まぶれ。駕籠の者もちんば引く。さがは嘉平次圍はんと身を捨てて駈け廻る。喚く人聲雨の音 三重瀧を流すに〽異らず。地祝子宮仕棒突き散し。社内の騒ぎ狼籍千萬出でよ〳〵と制すれば。どやくや紛れに長作は フシ行方なく逃失せたり。地茶屋は思はぬ踏立はや日も暮れた御門がしまる。お客様もはやお立ち。さが様は大事の身。駕籠の衆早う乘せて往なつしやれ。お客様も傘貸しましよか。但しお駕籠借りましよか。詞いや〳〵駕籠は錢が出る。ただ貸す傘を借らぬが損さがは夜晝身どもが揚。道の間も算用の内。地駕籠に附いて歸らうと跣足に成つて出でければ。さがは心も暗紛れ。なんとしてぢやどこにぢやと見廻せばア、悲し。平は鬢もかき亂れ亂る、雨の藤の蔭。濡れて立つたるおぢきなさ勤とて口惜しい。大事の男をぶちた、かせ。濡れしをる、を見てゐながら我が身は駕籠に乘る事か。エ、ま、ならば飛下りて共にだいても濡れう物と。見やれば男も目を合せ。焦る、中の憂き涙いとゞ雨こそしきりなれ。詞なう駕籠の衆先づ待つてや。わしや此の桐油がうつとしい。身は濡れても厭はぬ。是を爰に捨て置いて俄に雨に逢うた人。着て下されば本望。地是はさがもらうたと手を上げて引き絞り。疊んでひらりと捨てければ。平は立寄り拾ひ取り押戴きて雨に著る。田蓑の島のやもめ鶴。鳴いて立ちたる哀れさに。ア、忝い誰かは知らねどよう拾うて着て下んす。わたしも其の下に暫しが程の雨宿り。こなさんも其の通りその雨桐油を一樹の蔭。他生の縁でござんすと。駕籠は見かへる嘉平次は見送る中に降る涙。つれなや神の梅の雨降りへだ。ててぞ
三重〽別れゆく。

中之卷

フシ心々の。商ひもみな世わたりの大和橋。下行く水の泡よりも色にぞ銀は消えやすく。際は素燒の明德利今日の菖蒲の節句にも。見世指身皿とやかくと。人も火入や灰吹も碎けて物や思ふらん。地繁昌の地の紋日さへ更けて淋しき五月闇。駕籠の者どもも提燈さげ。嘉平次が見世割る、ばかりに叩けども。誰そと咎むる人氣もなく頻に叩けば家主。紺屋の若い者ども大欠伸して出合ひ。誰ぢや。やかましい。一年に一度の五月の節句我人皆休んでゐる。嘉平次殿は晦日前から爰には居られぬ。二日の晩方ちよつと戻つてそれから影も見せられぬ。掛乞衆なら昨夜乞うたがよいわいの。節句しも何事ぞ。惣じてそこは出見世で火を焚く事も御法度。主家は松屋町九之助橋の角。一ツ屋の五兵衛殿隱れはない。いや掛乞ではござらぬ。伏見坂町柏屋のさがと申すが。是も二日の夜から見えませぬ。今日で四日樣々にしても知れませず。こんな所に

よもやとは存じながら嘉平次樣とは深い中。地念の爲でござるといふ所へ理窟臭い白髪交り。詞嘉平次殿はまだでござるか。歸られたらいうて下され。西國橋印傳屋長作から參つた。手形の銀子不埒に就いて。明後日お願ひ申しますと。アヽ聞くに及ばぬ。爰は出見世の店貸。何事も存ぜぬ本宅へ〳〵と。地取合はねばせん方なくフシ皆東へと走りける。地紺屋の者ども呆れはてなんと淸介。詞此のさがといふお山見やつたか。ムヽそなたは終に見ぬか。再々爰へ泊りに來たそれは〳〵よい女房。いかにも〳〵嵯峨の釋迦。毘首羯磨の御作というてもだんないと。地いへばひとりが頷いて。ムヽそれで聞えた嘉平次の。赤栴檀と打笑ひ。しむる門口しん〳〵と川音更けて靜なり。世の中に。秋果てよとてつきし名か。今は身にさへ秋のさが。平とふたりが二日の夜身の憂きまゝにふつと出て。どこをとぼ〳〵行く先のステあてもない駕籠かりの世に。死なねばならぬ信濃紡の絲よりも。心が細く氣も弱く廣い國をも我と我。心で狹く住みなせしフシ日本。橋にぞ着きにける。詞なう平樣。どれ顏見せさんせ。いとしや漸々に氣が暗うならんす。どう思うてざいの此の樣にうか〳〵と。唐高麗を歩いたとて壹貫目と上つた銀。降り湧かう筈もなし。地其の中に見付けられ見苦しい目にあふ時。難波燒の嘉平次が死んでものけず。茶屋の銀負うてあのざま見よといはれた時。詞此の頃天滿で姉御さんのおしやんす通り。地御一門迄面よごしとても生きぬ覺悟の上。早う死なうぢや有るまいか。詞アヽ思へば姉御さん。こなさんを大切にいとしさうなお詞。さがといふ名は聞いてなり大事の弟を先度の奴が。地殺し居つたか怨めしいと憎みを受けうが悲しいと。手に取付いて泣きければ。詞チヽ今宵は延ばさぬ合點なれど先づそつと出見世へ行て。裁刀でも用意しわが宿と名づけた出見世の門口。夫婦手を取り最期の門出する心。嬉しや通りの人にも逢はなんだ。地サア這入りやと戶を押して南無三寶。詞つひ引摑さいて出たれば。親仁からか家主からか門に錠をおろした。地こりやかう有る筈とあたりを尋ね。栗石拾ひ。力に任せしやん〳〵しやん。しやん〳〵〳〵と打つ響きあたりはしん〳〵遠音のこだま。紺屋に聞きつけすは盜人より棒よ。提燈と若い者どもかけ出る音。さがを後に羽織の下。裾を被きの海人ならで人の見る目も覺束な。詞ヤア嘉平次殿。此の中はどうぢや。際の日に商人の見世を捨ててどこへぬつくり這入つてぞ。書出しやら掛乞やら今宵迄も尋ねて來る。返答にも困つた。エヽわけの惡いお人ぢやなう。尤々。京の淸水燒にずんと安い仕舞物が有ると聞き。人に先を越されまいと俄に上つて漸今朝下つた。日頃弱點の有る此の嘉平次。さぞ逃げた走つたと評判でござらう。親仁も商ひに精出すとていつにな

い機嫌で。今夜は出見世に泊れといはるゝ。どこも首尾になりました。家主殿の錠さうな。地サア鍵が有るなら明けて下されとてもの事に火ももらはう。行燈に點して下され。詞何かと皆の御苦勞。其の代りに今度の清水燒には利がある。わつさりと地振舞はうとさがを圍うて身を背け。此の期になつても口利口 フシ後を見せぬは兵なり。地其の間に錠明けて是火も點し付けました。茶でも所望にござらぬかと表へ出れば嘉平次は。後退りして入替り。詞もう休んで下され明日お目にかゝらう。地いかうねむたい寢まするど。はたとさして内よりかけがねしやんと締むれば。さがは溜息身をふるはし。早う死んでのけたいとスヱテ呟くも只涙なり。地表には猶不審を立て小脇に打寄り。詞今夜の歸り合點がいかぬ。言分といひのみこまぬ。清介は親御に此の樣子知らせておじや。地まつかせとかけ出すこちも是で二度起きた。ま一度起きるは定のものと フシ呟き内に入りにけり。地嘉平次表に氣を付けサア向ひの門も締つた。是迄こそ太儀なれ何處に何の障りもなし。ふたりかう並べば夫婦住ひし同然なり。詞是爰がそなたの内ぢやぞや。エヽ口惜しい世間廣う内へ入れ。親にも逢はせ町へも廣め。そなたに世帶を打任せ商ひも仕擴げ。嘉平次が女房は勤の者の風はない。何程の大世帶でも捌きかねまい女房ぢやと。いはせうと思うたに叶はぬ事は叶はぬ物。たつた僅か壹貫目餘りの。銀の瀬戸を越しかねて。浮名を取つて死ぬる事。無念なわいのと齒ぎしみしスヱテ頭もあげず泣きければ。詞さればいのわしとても。一日なりと父御樣に御奉公、地姉御樣を姑御とみやづかへせうものと。明暮の願ひ事叶はぬのみか此のしだら。及ばぬ願の逆罰か。詞此の前さる人に三世相見てもらひしに。先生で佛前の茶湯の茶碗打ち割りし報有り。愼めとの物語今思ひ合すれば。地こなさんの此の商賣を打破つて身を果す。茶湯の茶碗打割りし。因果がめぐり來ましたと又伏沈み泣きゐたり。地ハテかう成る身の三世相ろくな事が有る物か。夜半も過ぎたいざおじやと既に出でんとする所へ。嘉平次用が有る爰明けいと門叩く。詞誰ぢや。夜更けてやかましい用があらばそこからいへ。たわけ者。親の聲を知らぬか。五兵衞ぢや明けい。地はつといふより仰天したつた一間の濱納屋を。さがが素振も見せともなし。どこに隱さん道成寺の鐘はなけれど即座の智惠窓の貫に帶をきつと結びさけ。サア取りついてぶら下れと共に手をかけ筒井筒。井筒にあらぬ釣瓶おろし。千潟の沼を踏む足も フシ淵に沈むが如くなり。さあらぬ顏にて只今臥せる折柄。詞何事の御用がなと門の戸あくれば親五兵衞。常に好きの大脇差遠慮せずにこちおじやと。手を引入るゝは養ひ嫁のおきは。思ひがけなき嘉平次こりや何事が起つた。さががさぞ悲しかろと挨拶も何する

やら　フシ聲も。上漏るばかりなり。地おきはは道々泣きたる顔親も涙を目に一ぱい。詞ヤイ痴漢め。己れ商人の又してはノヽ。見世を明けて餘所あるき晦日前物際は。武士の軍の虎口ぞい。跡の廿八日より出見世を出で。朔日は天滿にて阿呆をさらし。大事の五月の節季を捨て今日迄はどこにゐた。たつた今家主より知らされし。清水燒の仕舞物買に京へ上つて今朝歸り。親仁も機嫌がよいとは。五日にも十日にも親に顔をいつ見せた。さがとやらが顔さへ見れば親の顔も兄弟の顔も。おのれは見たう有るまい。鹽町の姉が禮に來て親子兄弟菖蒲の盃するとて。今日の節句は嘉平次の顔が見えぬとうぬが事くやんで。かはいや泣いて歸つた。さりながらこりや。此のおきはが顔ばつかりは否でも應でも　地一期見せねば叶はぬと。いへばおきははわつと泣き。エヽ情ない嘉平次樣。いやなもの私が無理に添はうといふにこそ。お前の心が不定で外を家に

なさるゝゆゑ。親仁樣の御苦勞一ッ屋の家も立ちませぬ。心さへ据つて家を踏まへる覺悟なら。おさが樣を呼入れてとかくお身の立つ樣に。わしや在所へ戻つて尼になりとも成りますると道を正して泣きければ。さがは聞くより氣も亂れいとしやあのお人も。心の内は妬ましかろ。わしが離る事もいや父御のも尤なり。エヽ死にやうが遲かつた今潮が差いて來て。此の身を取つても行けかしと。身を悶えてあこがるゝ。嘉平次は只何事も親の慈悲。御免とよりは一言も泣いて。俯向くばかりなり。五兵衞大きに腹を立て。詞何事も親の慈悲とは。扨は此の親は慈悲を知らぬと思ふよな。ヲ慈悲知らぬ。慈悲知らぬ親持つたが不祥。ヲ此のおきはにも親が有る。おのれと夫婦の約束で人の娘をもらうて。こつちの息子が合點せぬそつちの娘を返すと。すごノヽと戻して一ッ屋の五兵衞が世間へ面が出されうか。親に恥を與へる子に慈悲とはどこへ。

エヽあさましい根性。二本差すを侍一本差せば。町人とばかり思ふか痴漢者。大小は此の胸に有る。武士に劣らぬ五兵衞と今日迄人に笑はれぬ。其の倅が胴性骨茶屋の銀負うて逃げ隱れ。死んでも恥がぬけはせぬ。おのれが身は廢つても此の五兵衞は立て通す。此のおきはと夫婦になれ。サアどうぢや。サア否か應かの返事せい。いやといふと此の脇指こりや。はてびつくりするなおのれは斬らぬ人も斬らぬ。おきはが母は身が姉父は他人。おきはを妾にする代り身が腹に突込んで。一ッ屋の五兵衞が一分立てゝ見せう。サア返事。地サアなんとと抜きかけて責めつくる。おきはは柄に取付いて伯父樣殺す事はない。わたしが死ねば十方が濟みますと。縋り止めて泣き叫ぶさがが悲しさ身に迫り。死に手は爰に只一人父御前の目の前で。死んで見せんと涙の帶　地たぐり取付き上らん。ノヽと心ばかりに力なく。足は泥に引きしまり帶は中より

ふつつと切れ。蘆邊にどうと落水と共に フシ涙ぞ流れ逝く。地とても死身の嘉平次親の心を休むるは。やすい事〳〵是一生の孝行をさめと觀念し。詞ハア丶誤り入つて御尤。若氣の至り言ひ交せしを捨て難く。今迄お心背きしは不調法。是より魂入れかへ御意を背かず。いかにもおきはと祝言と。地いへどもさがは心を知らず誠と聞いて恨みやせん。死際迄僞る事親をだますか勿體なやと。思へばせきあげ聲どもりいひさし。てこそ泣きゐたれ。詞いや〳〵今迄幾度かたらされた。其の心底に極つた證據が見たい。ハテ證據とてなんと致さうぞ。チ丶證據には今宵すぐにこちへ來て。祝言の盃せい。それは餘りな親仁樣。申交はした女にもとくと合點させ。どこも首尾よう埒明けた證據。明六日の晝迄待つて下されといへば。親も打頷き尤々。然らば祝言は其の上。姉も呼寄せ一家集り盃せう。只今心の定つた證の盃。一つ飲んで身にさせ。いや出見世で終に酒飲まず酒とてはござらぬ。チ丶サウあらうと思うて酒は身が持參したと。羽織の下より一升入の祕藏の瓢簞取出し。サア親の酌一つ飲め地あつといふより素燒の盃取出す。詞いや〳〵小さいそちが飲むは知つてゐる。鉢でも茶碗でも大きな物で一つ飲め。さのみ深うはたべませぬ。地どれか是かと茶碗尋ぬる其の音を。聞くにもさがが袖しぼる露の萩燒大皿出し。慮外ながらと受けければてうど飲めと。瓢簞傾けつぎかくる酒にはあらぬ糀の色。花の壹歩のから〳〵〳〵。さら〳〵〳〵と七八十。皿堆高く盛り上ぐる子は呆れつつかりと。親の顔のみ打ち守れば。親はわつと聲を上げやれ。慈悲知らぬ親の酒を見よ。誠の慈悲の味を飲みて知れやと泣きければ。ハア丶有難しとばかりにて。親の膝に打ちもたれ。聲も惜まず歎きしは フシ性は。善なる涙なり。包むに餘る親心。不便やかはいや此の春より。うろたゆる體を見て。詞此の酒一献飲ませたく幾度か思寄つたれど。いや〳〵氣の定まらぬ間は却つて毒酒とひかへたり。地此の酒飲んで方々の恥辱を雪ぎ。無明の酒の醉さませ。身どもは年より氣丈にて病といふ事知らねども。五六日は汝ゆゑ。胸も痛んで フシ不食する。詞とかく人の親には病となるも子の心。藥となるも子の心。今宵の意見を聞入れて彌々心を持直し親の藥となつてくれ。地長生したいと思はねども。せめて三十二三迄とつくと見たて。人になして死ねば樂ぢやと咽せ返り。成人の子を引寄せて。背中を撫でて泣きくどく フシ親の。心ぞ哀れなる。地嘉平次も人々の心の中を思ひやり。一言もなく差俯向き。落つる涙は盃の是も上越すばかりなり。おきはも涙にくれながら晦日の夜から昨夜迄。案じて一目もおよらずお心疲れお身の毒。歸つてお休みなされませ。詞チ丶歸らう。これ嘉平次。此の脇差は死んだ母と身どもが祝言の時。聟引出物

として舅よりもらひ。枕許の守刀となしたるゆゑ家内に何の怪我もない。地起縁のよい船指今宵は身どもがおきはが親に成り代り。聟引出に取らすると仇とは知らぬ凡夫心。サア今宵こそはや歸つて明日の晝迄ゆるりと寝よう。やい嘉平次埒明き次第起しに來い。明日顔見よう。さらば〳〵と立出づる。さらばは誠のさらばにて明日見る顔は死顔の。生顔見るは親と子のオクリ是ぞ〳〵此世の別れなる。地嘉平次は親の影隠るゝばかり見送つて。内に駈入り窓の下覗けばさがは消え入るばかり。泣きしみづいて音もせず是々。詞萬事皆聞いてであろ恭いといはうか。悲しい事といはうか是で結句嘉平次が。親の冥加に盡きるわいの。いや〳〵そりやこなさんの不孝といふもの。今の酒とは金さうな。どこも首尾よう仕舞うておきは樣と夫婦になり。親御の心を悦ばせて下さんせ。わし一人死ぬれば濟む。地どの道からどういうても。只こなさんがいとしい惡う聞いて下んすなと。眞實見えたる涙の體。詞ア、ひとり死なせてよい物か。もらうた壺歩は百ばかり銀さへあれば何談合も仕易い。假令どうなればとて其方を捨て。おきはと添ふ氣は微塵もない南無三帶が切れたか。地表から廻つておじや。勝手知るまい連れに行かうと表を明けて出る所に。印傳屋の長作屈竟の者連れて。詞ヤア嘉平次。親五兵衛は爰にぢやげな逢ひたい〳〵。わけもない長作何時ぢやと思ふ。親仁が爰へいつわせた事がある。用があらば明日なりと明後日なりと。松屋町へ行て逢へ歸れ。〳〵と押出す。是何とする。親仁に逢ふもそちが用。内々の手形の銀子不埒ゆゑ。明後日お願ひ申すと斷に越したれば。松屋町へ行けと有るそれゆゑ自身行つたれば。親仁は是へわせたと有る千も萬もいらぬ。銀戻すか戻さぬかと無體に内に入りければ。地嘉平次先へ駈込んで壺歩を隠さん〳〵と。皿の上に中つくばひ前打合せ合せても。膝の間より顋るゝフシ金は金にて銀ならず。詞ヤ嘉平次見事な。町人は神佛とも主君とも。額に戴く一歩を腭にはさんで股が冷えよう。さ程澤山な一歩を戻すまいとはそりやわやぢや。綺麗にしやんと渡せ〳〵。コリヤ長作。十六兩たゞしられそれがそもとに嘉平次が。うろたへ始め命沙汰に及んだ。お願ひ申さば申上げ仔細の有る此の一歩。地粉にはたかれてもやる事とならぬ。チヽ此の長作が粉にはたかれても取つて見せう。詞ヤアしやらくさい常々の嘉平次とは違うた。口廣い事いふと思ふな。命を先へ出して置いて取つて見よ。チヲ取つて見せうと。つかみつく手を地むんずと取り。見世の小隅へはつたと投げつくる。起きあがつて組付くをまつかせとひつかゝへ。上に成り下に成り見世の燒物皿茶碗。花入粉微塵五重の塔西行法師も痛手を負ひ。ちやほの鷄飛んで散り蹴爪にけられて長作が。ころぶ所をどうと乘り。備

前鉢にて天窓の鉢覺えたか。〳〵と打ち砕かれて錦手の。目鼻血みどろちんがいに嘉平次の生盗人。出あへ〳〵と呼ばはつて フシ闇に紛れて迯げ失せけり。地エヽ嬉しや〳〵一期の本望遂げたぞ。親の御恩の一歩を汝にのめ〳〵取られうかと。見れども〳〵皿打明けて一歩はなし。詞ハアヽ今のどやくやに同道めがつかんで走つた。サア地嘉平次死物狂ひ一寸もやらうかと。もらひし脇差ぼつこんで駈出でんとする所に。紺屋の手代若い者どや〳〵と門口に。詞嘉平次殿あんまりな。たま〳〵歸つて何ごと仕出す。地兎角の評議は明日一足も出させぬと。外より門口はつたと締め夜明迄張番と。棒突き並べて動かせず。譯を聞いて下されと斷つても詫ても。理立たねば男も立たず。一分立たねば一歩もなし。死ね〳〵と來る死神の引手は爰ぞと窓の子を。ふまへてひらりと飛ぶ所を涙の袖にひつたりと。抱きとめてどうぞいの。どうとは死ぬるばつかり足音しやんな泣聲すなと。身より餘りて涙川せきもとゞめよ岩をこし。番は闇魔倶生神。紺屋の虎落劍の山。先には死出の大和橋踏むは三途の泥の海迷ひ。こがれて 三重

嘉平次おさが道行　下之卷

南無阿彌陀〳〵。南無阿彌陀佛南無阿彌陀〳〵。ギン南無阿彌陀〳〵。南無阿彌陀佛南無阿彌陀〳〵。南無阿彌陀佛を フシ頼みても。西を背後に歩み行き極樂淨土に背くとも。利劍卽是と聞く時は死する刃も彌陀の緣。南無阿彌陀佛の フシ聲細ヽ。ハルフシ心ぼそさや。來世迄。かう手を引いて行く事か。もしや離れはせまいかと引き合ひし手を引寄せて。スヱテなほ抱きしめて泣きつくす。けふの祝の菖蒲の露も。われが袖には憂はしや辛や端午の紙幟。神にも世にも捨てられて菖蒲刀の切先に。かゝる契の惡緣と。返らぬ道を辿り行く。涙の雨に星消えて可愛い其方いとしい殿御。長地顏も見せぬか五月闇命も世をも我が身をも今ひと時に堀詰の。あれ井戸にも女夫有るわいの。そちも妹脊はかはらねどこちは釣瓶の繩切れて。横に切れゆく道筋の是六道の新道と オクリ花屋が。辻にしよんぼりと。本フシ憂き數々を今宵しも。ハルフシ數へ盡して。下寺町の。後夜の響も身にしみ〴〵と。今ぞ二人が一生の夢の寢覺を松屋町。是が父御の通りかや我が生れも此の筋の。親兄弟も此の身とは フシ知らで夢をや結ぶらん。結びとめてもとまらぬは。わしが人魂生玉坂の。草にやつるゝ白露をあこがれ出づる玉かとて。拾へば消ゆる初螢夜は思ひに燃ゆれども。晝は名に負ふ遊山所の。貴賤群集のだてつくし人を勇めの藝づくし。地茶屋が藁屋の軒續き。竹の柱に節こめし。稽古淨瑠璃太平記。箏のつれ歌引きかへて松にはげしき。雨風や我は初音か時鳥。冥途の友と鳴きつれて。いとゞしをるゝ フシ袂かな。地それ覺えてか此の春の。花の紋日を此の

床で二人寢覺の小盃。そなたま一つおれ一つさはる手元に萬歳が。あいもきようある相の山花は、相ノ山散りても。根に返る人は。歸らぬ死出の山。死して歸らぬ。道ぞとは今の憂き身を歌ひしか。三途の瀨戸の。フシ燒物盡し。親は堅手の茶碗と茶碗。我疵付けて我と我が名をや流さん恥かしの。我が噂も明日よりは。スヱテ歌祭文を身の上に。サイモン坂町邊のナ通り筋。柏屋内におさがとて。年は廿の。ヨイ花盛り。客衆々の揚詰を。貸すのもらふの暇なきつらい勤の中に扱。深かい願ひは一ツ屋の。ユリ嘉平次故に身をはめて。變るまいとの七枚起請オクリ書いて。二人がナホス取りかはす。ハルフシ小指の血潮。杉原に押して心をみかきもり。衞士の焚く火と品かはるかの小林が舞ひ扇。是も浮世のウタヒ形見こそ今はあだなれ松風や。無常の風も立騷ぐナホス辨財天の鰐口の。鰐の口より恐ろしき。追手の聲のあれ〳〵。追はへて爰に北向の。八

幡宮の燈明もおのれとしめり行く先は。罪業の程思はれて ギン呵責おそろし鬼踊の。スヱテ寺の藪垣物すごく。身をふる。はしてぞ立ちにけり。

地さがは涙に行きやらずなう夜明に間もあるまいが。どこで死なうと思うてぞ。詞ヲヲ馬場先の松原を最期場と志し。來事は來たがあれ見や。星さへ一つない雨空。たとひきれいに死んだりとも血潮の體を雨に打たれ。地むさいきたない死顏と笑はるゝも口惜しい。此の茶見世を最期場に極めんと。羽織打ち敷き座を組めば共に寄添ふ床の上。サア、詞今が最期ぞや。臨終の一念は無量劫を引くといふ。なんにも心にかゝらぬの。アヽくどい事。思ひ合うたこなさんと一所に死ぬるわしぢやもの。うき世の本望遂げたれば。思ふ事も悔む事も露程もないわいのと。地いへば平は猶泣出し。そこをいはうといふこと。詞今死ぬる今迄も我は親の顏を見る。親兄弟の事ばかりいひつ

づけて我は死ぬるぞや。そなたも父母持つた身今日が日の最期迄。地父とも母ともいひ出さぬは我に未練を見せまいため。嗜み深いそなたぢやと思うて涙がこぼるゝと。語ればさがはわつと泣き。忘れてゐた物ひよんなこと母樣ゆかしうござんすと。男にひたと取り付いて聲の下行く涙の流れ袂に。たまる哀れさよ。詞ヲヽ出來しやつた言うて了ふは懺悔の一つ。地罪を助かる種ともなる。サア夫婦が親の事いふ其の詞を冥途の引導。一時も急がんと氷の刃するりと抜き。詞既に血潮と鹽町の畠傳ひにあれ誰やら。地南無三寶見知りの有る柏屋の提燈。サア寸善尺魔いかゞせんとうろたゆる。さがは賢く茶見世の園。葦簀ひろげてぐる〳〵ぐる。平もぐる〳〵ぐる〳〵まきに。ふたり簀卷の妹脊川。流れの智惠も才覺も フシ今宵限りのうき身かな。地親方柏屋半兵衛小辨諸共方々と尋ねかね。詞エヽ下司の智惠は跡から。紋付の提燈で尋ぬるは無分別。

さぞ小辨もしんろかろ俺もくわをぬかしたっ爰でしばらく休まうと。地蠟燭消えて立寄るも。同じ茶見世の床の上 フシそれと知らぬぞ是非もなき。地小辨しく／＼泣出し。いとしやさがさんどうしてぞ。傍輩といひ姉女郎ほんの姉さん妹と。兄弟の契約してあのさん便りに勤めたに。もし心中などして死なんしたらわしや木から落ちた猿。親方さん賴みます。早う尋ねて下さんせとスヱテ縋りついて泣きければ。詞ヲヽやさしい事よういうた。親方の身になつて見い。かはいいばかりかさが死ぬると大きな倒れ。年のまはり合せで損するも有る事。それは糸瓜ともおもはぬが。聞えぬは嘉平次。此の半兵衛を男でないと思うたか。さがをつれて退く手間でおれがうちへ駈込み。まつかう／＼した首尾で死なねばならぬ難儀。男と見かけて賴むとたつた一言いうて見い。人にも知られた柏屋の半兵衛。いや知らぬといはうか。ほんにやれ／＼家財賣つても救ふ心底。地胸の扉に鎖がなうて無念なわい。詞アヽ是も跡へん今いうて返らぬ事。さあ小辨。中寺町から藤の棚ま一ぺん尋ねうといふ所へ。地西東より大勢つれ。あの茶見世に泣聲はさがと嘉平次。サアヽしてやつたぬかるなとばら／＼と立ちかゝり。半兵衛小辨にむさぼり付く。死なば嘉平次一人死ね。詞大事の奉公人よう殺さうとしたなあと。髻取るやらひつぱるやら提燈あげて顔と顔。ヤア半兵衛でないか町の衆か。エヽ悠長な人に世話をやかすことぢやないわい。さがが事を仕出せば損といひ大きな町の騷ぎぢや。サア立て／＼。いかい皆の苦勞ぢや。草臥れた上に小辨がめろ／＼泣くので共に氣が落ちて來て。少爰で休んだ。どうでこいつら死なうわい。地つんと足が進まぬと歸る柏屋止まる柏。命枯葉の夜嵐に。フシ又東西へぞ別れける。地人影なければ嘉平次も。さがも葦簀ほどいて溜息つき。今のを聞いてか聞きやつたか。詞半兵衛が情の詞エヽ男ぢや過分な。小辨がやさしい心ざし。地忝いと嬉しいと。胸に餘れば聲に漏る フシ二人が歎ぞ至極なる。アヽ何のかのと隙どる程涙の種。サア今ぢや念佛申しやと引寄すれば。さがはわつと泣き出しまちつと／＼まあ待つて下されと スヱテ前後不覺に取り亂す。詞待つてくれとは命が惜しうなつて來たか。アヽ今になつて愛想づかしいうて下んす。命惜しいほどなら高で身をうつこともない。地逢ひ始めて今日が日迄鳥の鳴かぬ日はあれど。顔見ぬ日もなかつたに死ぬる今夜に限つて顔さへ見えぬ雨空。未來の暗さが思はれてそれが悲しうござんすと。歎けば男も涙ぐみ。詞ヲヽ道理我とても。地今生の名殘ま一度顔も見たけれど。燈とては夏草にせめて螢の影でもほしい。ヲヽ思ひ當りしと小石拾うて脇差の。鍔を火打の石の火の光待つ間の命の樂み。下緒の總のしげ糸を。火口となしてかち／＼かち。

かつしと打つてふき付くる。火かけも息も徴にて互に見かはす顔と顔。永い別れになつたかと。わつとばかりに縋りつき大聲。あけて歎きしは理。せめて哀れなり。地既に明け行く烏の聲泣く〳〵胸を押し擴げ。サアなんにも思ふ事はない。ヲヽでかした〳〵と拔いたる脇指取り直し。南無阿彌陀佛と刺通せば。うんとばかりのりかへる。ぐつと刳れば手足をもがき。又刺通せば身をもだえ刳り。くり〳〵目もくるめき。婆婆に出る息絶え果てゝ。つひに冥土に引入れたるあへなき最期ぞ〳〵あはれ成る。地死骸を繕ひ血刀よつく押拭ひ。同じ刃と思へども守りにせよとの親の讓。此の刄に死するは最期の不孝。二世迄夫婦抱へ帯。契は先の世〳〵迄もかさぬる床の竹簀垣。死顔見せじと押包む羽織も空も黒羽二重。床几をがはと踏みはづせば。色も變じて目くるめき フシ忽ち息は絶えてける。地ツメ惜しや五日の花菖蒲花の髗を血に染めて。ギン戀の刃に伏見坂の世語り。とこそなりにけり。

國性爺合戰

近松門左衛門作

序詞花飛び蝶駭けども人愁へず。水殿雲廊別に春を置く。暁日靚粧す千騎の女。紅唇翠黛色を交へ。土も蘭麝の梅が香や。桃も櫻も長へに。花を見せたる南京のヲロシ〽時代ぞ盛り。盛んなる。地抑大明十七代思宗烈皇帝と申し奉るは。光宗皇帝第二の皇子代々の譲りの絲筋も。絶えず亂れぬ青柳と。本フシ靡き從ふ四方の國。寶を積んで貢物。歌舞遊宴に長じ給ひ。玉樓金殿の中には三夫人。九嬪二十七人の世婦八十一人の女御あり。凡そ三千の容色顏を悦ばしめ。群臣諸侯媚を求め珍物奇翫の捧物。二月中旬に フシ瓜を。献ずる榮華なり。地爰に三千第一の御寵愛華淸夫人。去年の秋より懷妊あつて此の月御産の當る月。君の叡感臣下の悦び。聖壽四十に及び給へども世繼の太子在さず。兼て天地の御祈禱此の度に驗あり。王子誕生疑ひなしと產屋に明珠美玉を列ね產着に越羅蜀錦を裁ちスヱテ御產今やと用意ある。中にも大司馬將軍吳三桂が妻柳歌君。此の頃初子を平產し殊に男子の乳なればとて。御乳付の役人其の外乳女侍女阿監。役々の官女付添ひて。掌の上の フシ珊瑚の珠とぞ傅きける。時に崇禎十七年中呂上旬。韃靼國の主順治大王より使を以て。詞虎の皮。豹の皮南海の火浣布部支國の馬肝石。其の外邊國島々の寶庭上に並べさせ。使者梅勒王謹んで。韃靼國と大明國古へより威を勵み。國を爭ひ軍兵を動かし鋒先を交へ。互に仇を結ぶこと。且は隣國の好みに違ひ且は民の煩ひたり。我が韃靼は大國にて七珍萬寶くらからずと申せども。女の形餘國に劣つて候。地此の大明の帝には華淸夫人とて隱れなき美人在する由。我が大王戀焦れ深く所望に候へば此方へ贈り給つて大王の后と仰ぎ。詞大明韃靼向後親子の因をなし。長く和睦致さんと式の如くの貢物。地數ならねども鎭護大將梅勒王。后御迎ひの爲 フシ參朝とこそ奏しけれ。地帝を始め卿相雲客。今に始めぬ韃靼の難題すは諍亂の基ぞと。宸襟安からざる處に。第一の臣下右軍將李蹈天進みいで。詞今迄は國の恥辱を愼み隱し置き候。去んぬる辛の巳の年北京五穀實らず。萬民饑渴に及びし刻。某密に韃靼を頼み。米粟數百萬石の合力を受け國民を救ひ候ひき。其の返報に何事にても。韃靼の望み一度は必ず叶へんと堅く契約仕る。君今四海を保ち民を治め給ふも。一度韃靼の情によつてなり。地恩を知らねば鬼畜に同じ御名殘りはさることなれども。とく〳〵后を送られ フシ然るべしとぞ奏聞す。地大司馬將軍吳三

桂待漏殿にてとつくと聞き。御階欄干踏散らし李蹈天が膝元にどうと坐し。詞不便や御邊は何時の間に畜生の奴とはなつたるぞ。忝くも大明國は三皇五帝禮樂を興し。孔孟教を垂れ給ひ五常五倫の道今に盛なり。天竺には佛 因果を說いて斷惡修善の道あり。日本には正直中常の神明の道あり。韃靼國には道もなく法もなく。飽く迄に喰ひ暖に着て。猛き者は上に立ち弱き者は下につき。善人惡人智者愚者の別ちもなく。畜類同然の北狄俗呼んで畜生國といふ。いかに御邊が賴むとて數百萬石の米穀を合力して。此の國を救ひしとはいぶかしく／＼。地民疲れ飢に及ぶは何故ぞ。上によしなき奢りを勸め宴樂に寶を費し。民百姓を責苛り。己れが榮華を事とする其の費をやめたれば。五年や十年民を養ふに事を缺かぬ大國の德。詞叡慮も計らず公卿詮議にも及ばず。懐姫の后をかろ／＼しく。夷狄の手へ渡さんといふ心底聊心得ず。地契約は御邊との相對。上に知ろしめさぬこと畜生國の貢物。內裏の汚れ取つて捨てよ官人どもと。北狄を事ともせず國の威光を見せたるは。管仲が九度フシ諸侯の會も斯くやらん。地韃靼の使梅勒王大きに怒つて。詞ヤアヤア大國小國はともあれ。合力を得て民を養ひし恩も知らず契約を變ずるは。此の大明こそ道もなき法も無き手に足らぬ畜生國。地軍兵を以て押寄せ帝も后も一くるめ。我が大王の履持にする事日を數へて待つべしと。席を蹴立て立歸る李蹈天引止め。詞暫く／＼憤り尤至極せり。某先年貴國の合力を受けて。一粒も身の爲にせず。國を助けしは忠臣の道なるに。今又約を變じ兵亂を招き。君を苦しめ民を惱まし剩。恩を知らぬ畜生國といはせんは御代の恥國の恥。地此の度臣が身を捨て君を安んじ國の恥を淨むる忠臣の仕業。これ見給へと小劍逆手に拔持ち弓手の眼にぐつとつき立て。眼蓋をかけてくるり／＼とくり出し。朱になつたる睛ひつ摑んでなう御使者。詞兩眼は一身の日月左の眼は陽に屬して日輪なり。片目なければ不具者。一眼を抉つて韃靼王に奉る。地國の恩を報ずる道を重んじ義を守る。大明の帝の忠臣の振舞是候と。笏にすゑて差出せば。梅勒王押戴き。詞アア天晴忠節や候。只今吳三桂の言分にては。否とも兩國權を爭ひ合戰に及ぶ所。天下の爲に身を捨てて事を治め給ふ事。神妙々々。地忠臣とも賢臣とも申すにも餘りあり后を迎へ取つたるも同然。我が大王の叡感使に立つたる某も。面目是に過ぐべからずフシはや御暇とぞ奏しける。地叡慮殊に麗しく。李蹈天が眼を抉りしは伍子胥が餘風。吳三桂が遠き慮は范蠡が趣あり。兩臣政を正す我が國は千代萬代も變るまじ。韃靼の使ははや本國に歸すべしと宴樂殿に入り給ふ實に佞臣と忠臣の表は似たる紛れ者。目利を知らぬ南京の君が。榮華ぞ三重へ例なきフシ爰に帝の。地御妹。栴

檀皇女と申せしは。スエテまだ御年も十六夜の。月の都の宮人の胤や此の世に降る露の。フシ玉をのべたる御形。管絃の道書の道文字も働く口吟み。日本で歌と云ふけなが男女を和らぐとや。爰にも戀の中立は變らぬ物と詩を吟じ。年よりひねし御心兄帝奢りの様。色に耽り酒宴に誇り。朝政し給はぬ御意見の種にもと。行儀正しき御身持お伽の女官召寄せて。浮世咄も賢きの。フシ耳は戀する。目は睨む。心が伽羅の炷きざしのフシ思ひ埋みてあかさるゝ。地長生殿の方より出御なりと呼ばはつて。二十歳限りの后達二百人。梅と櫻の造り枝百人づつ片別けて振りかたけ。左右に召具し入り給ひ。詞なう妹君。我萬乘の位に卽き。臣下多き其の中に右軍將李踏天は終に朕が命に背かず。明暮心を慰むる第一の忠臣。御身に心を懸くると聞く。幸ひ朕が妹聟にせんと思へども。御身更に承引なく今日迄は打過ぎたり。地然るに此の度韃靼國より無體の難儀を云ひかけ。旣に合戰に及び國の亂れとなるべき所。吳三桂などが忠臣顏口先の道理は誰も云ふ事。李踏天が左の眼を抉つて宥めし故。使も伏して歸つたり。詞國の爲君の爲身を捨てて不具となる。末代無雙の忠臣賞せずんばあるべからず。地是非に朕が妹聟北京の都を讓らんと約せしが。御身承引あるまじと此の花軍を催せり。詞賢女だてしてすん／＼とすげなき御身が心を表し。梅花を味方に參らする。朕が味方は櫻花女官どもに戰はせ。櫻が散つて梅が勝たば御身が心に任すべし。地櫻が勝つて梅花が散らば御身の負に極つて。李踏天が妻となす。天道次第緣次第。勝つも負くるも風流陣懸れや懸れと宣旨あり。下知に從ふ梅櫻フシ左右に分つて備へける。地勅諚なれば姬宮もよし力なしさりながら。心にそまぬ夫定め左右なう引くべきやうもなし。詞花も我身も魁けて。當今の妹栴檀皇女緣の分けめの晴れ軍。地大將軍は我なりと名乘りもあへぬかざしの梅。誰が袖ふれし梢には群れ居る鶯の翼にかけ散らす。羽音もかくやと梅が香も。芬々と打亂れ。フシ受けつ流しつ戰うたり。下詞姬君下知しての給はく。柳渦く木影には風ありと知るべし弱き枝には莟をもたせ。强きに花を開かせよ。うつらふ枝をば諸にかへて互に力を合すべしと。花に慣れたる下知によつてナホス喚いて蒐れば花を踏んで。同じく惜しむ色もあり。只一文字に頭に挿せば二月の雪と散るもあり。落花狼藉入亂れ軍は花をぞ三重＼／散らしける。地かねて帝の仰によつて。心を合せし女官達梅方わざと打負けて。枝も花も折亂され フシむら／＼ばつと引きければ。地勝色見せて櫻花ナヲ姬宮と李踏天。御緣組は極つたりと數多の女官同音に。勝閧揚ぐる頻伽の聲宮中響き渡りしは。千羽鶯百千鳥オクリ囀り＼／かはす如くなり。地司馬將軍吳三桂鎧甲さはやかに出立ちて。偃月の鼓會釋もなく振廻し。梅も櫻も散々

に薙散らし御前に畏り。詞只今玉座の邊に合戰ありとて鬨の聲殿中に響き。宮中以ての外の騷ぎによつて。物の具固め馳せ參じ候へば扨馬鹿らしや。御妹栴檀女と李踏天か縁定めの花軍とは。天地開けて以來斯るたわけた例を聞かず。君知ろしめされずや一家仁あれば一國仁を興し。一人貪戾なれば一國亂を起すといへり。地上の好む所に從ふは民の習ひ。此の事を聞及び山樵土民の嫁取聟取。此處にても花軍彼處にても花軍。喧嘩鬪諍の端となり花は散つても打物業。誠の軍起らん事鏡にかけて見る如し。地只今にも逆臣起り宮中に攻入り。喚き叫ぶ鬨の聲は聞ゆるとも。すは例の花軍と馳せ參る勢もなく。玉體をやみ／＼と逆臣の刄にかけん事。勿體なしともあさましとも。フシ悔むにかひのあるべきか。地其の逆臣佞臣とは李踏天が事。詞君は忘れ給ひしか御若年の時。鄭芝龍と申す者佞臣を擯け給へと。諫め申すを逆鱗あり鄭芝龍は追放たれ。今老一官と名をかへ日本肥前の國。平戶とかやに住居致すと承る。地鄭芝龍が傳へ聞き。日本迄大明國の御恥辱ならずや。詞先年大明饑饉の時。李踏天が邪智を以て諸國の御藏の米を盜み。君に憐みなき故におのれ韃靼の合力を受け。地民を救ふと云ひなし國中に散らし與へ。萬民をなづけ謀叛の臍を堅めしと。知ろしめされぬ愚かさよ。地彼が左の眼を抉りしは是ぞ韃靼一味の相圖。御寬候へ南殿の額。大明とは大きに明かなりといふ字訓にて。月日を並べ書きたる文字。地此の大明は南陽國にして日の國なり。韃靼は北陰國にして月の國。陽に屬して日に譬へし左の眼を抉つたるは。地此の大明の日の國を韃靼の手に入れん一味の印。使も敏く其の理を悟り悅んで立歸る。積惡奸曲の佞臣早く五刑の罪に沈めずんば。地聖人出世の此の國忽ち蒙古の域に落ち。尾を振り皮を被らぬばかり畜類の奴となり。天地の怒り宗廟の神祟りをなし。其の罪帝の一身に歸せんこと拳を以て。大地を打つには外るゝとも。呉三桂がこの詞は違ふまじ。恨めしの叡慮やと泣いつ。怒りつ理を盡しフシ詞を盡して奏しける。地帝大きに逆鱗あり物識顏なる文字の講釋。理を付けて云ふならば白雪却つて黑しとも云ふ義あり。詞皆李踏天をそねみの詞。事もなきに甲冑を帶し朕に近寄る汝こそ。地逆臣よと立ちかゝつて御足にかけ。呉三桂が眞甲を踏付け給へば不思議やな。コハリ御殿頻りに鳴動して勅筆の額ゆるぎいで。大の字の金刀點。明の字の日偏。地微塵に碎け散つたるは フシ天の告かと恐ろしゝ。呉三桂猶身を惜まずヱヽ情なや。詞御眼も暗みしか御耳も聾たるか。大の字の形は一人と書いたる筆畫。一人とは天子帝の御事。其の一人の一點とれば帝の御身は半身。明の字に偏なければ日の光なき國は常闇。忝くもあの額は御先祖大祖高皇帝。御子孫繁昌御代萬歲と宸翰を染め給ふ。地宗廟の神

の御怒り恐ろしと思召し。道を正し非を改め。御代を保ちましまさば。君に拋つ呉三桂が一命。踏殺され蹴殺されても厭はとこそ。土ともなれ灰ともなれ忠臣の道は違へじと。御衣に縋り大聲あげスヱテ涙を。流し諫めしは健々の。鑑と聞えける。地かゝる所に四方八面人馬の音。貝鉦鳴らし太鼓を打ち。鯨波の聲地を動かし　フシ天も傾く許りなり。地思ひ設けし呉三桂高樓に駈上り。見渡せば山も里も韃靼勢旗を靡かし弓鐵砲。内裏を取巻き攻寄せしは潮の滿來る如くなり。地寄手の大將梅勒王庭上に乘入り大音揚げ。詞抑我が國の主順治大王。此の國の后華淸夫人に戀慕とは謀。懐妊の后を召取り大明の帝の胤を絕さん爲李踏天が眼を抉つて一味の證を見せたる故。地時を移さず押寄せたりとても敵はぬ呉三桂。帝も后も搦め取つて味方に下り。韃靼王の臺所に蹲ひ炊水でも啜つてフシ命をつげとぞ呼ばはりける。詞ヤア事をかし。　百八十年草木も搖がぬ明朝を。攻破らんなんどとは大海に横たはる。鯨と蟻の狙ふに異ならず。地あれ追拂へ追拂へと駈廻つて下知すれども。我が手勢百騎許りの徒士武者ならで。公家にも武家にも誰あつて。下り合ふ味方のあらざればスヱテ拳を握つて立つたる所に。地女房柳歌君水子を肌に抱き乍ら。后の御手を引立てなう口惜しや御運の末。公卿大臣を始め雜人下郎に至る迄。李踏天に一味して御味方は我々許り。無念至極と齒噛みをなす。地アヽ悔むな〳〵いうて全なし。但し后の體内に帝の胤を宿し給へば大事の御身。一方を切拔けて君諸共に。某御供申すべし其の子も爰に捨置き。お事は一先づ御妹を介抱し。海登の港をさして落ちよ〳〵といひければ。　心得たりとかひがひしく栴檀皇女の御手を引き。金川門の細道を　フシ二人忍びて落ち給ふ。地いで是からは大手の敵を一當あてゝ追散らし。安安落し奉らん御座を去らせ給ふなと。言ひ捨てゝ駈出で明朝第一の臣下。大司馬將軍呉三桂と名乘りかけ。百騎に足らぬ手勢にて。數百萬騎の蒙古の軍兵。割立て。追廻し無二無三に切入れば。韃靼勢も餘さじと。鐵砲石火矢隙間なく。矢玉を飛ばせて三重〽戰ひける　フシ其の隙に。地李踏天弟李海方。玉體近く亂入り帝の御手を兩方より確と取る。后夢とも辨へず。天罰知らずの大惡人御恩も冥加も忘れしかと。縋り給へばヲヽ汝とても助けぬと。取つて突退け氷の利劍を御胸にさし當つる。君は怒れる龍顏にスヱテ御涙をかけ乍ら。地寶に刄の鏽は刄より出でて刃を腐らし。檜山の火は檜より出でて檜を燒く。仇も情も我が身より出づるとは。今こそ思ひ知られたれ。地鄭芝龍呉三桂が諫を用ひず汝等が諂ひに誑され。國を失ひ身を失ひ末代に名を流す。口に甘き食物は腹中に入つて。害をなすと知らざりし我が愚かさよ。汝等も知る如く夫人が胎内に。十月に當る我が子あり誕生も

程あるまじ。月日の光を見せよかしせめての情とばかりにて フシ御涙。にぞくれ給ふ。詞アヽならぬ〳〵。大事の眼を抉出したは何の爲。忠節でも義理でもない。君に心をゆるさせ韃靼と一味せん爲。眼球一つが知行になる。君の首が國になると取つて引寄せ。地御首を水もたまらず打落しサア。李海方此の首は韃靼王へ送るべし。汝は后を搦め來れと言捨てゝ フシ寄手の陣へぞ駈入りける。地司馬將軍吳三桂敵數多打取り。難なく一方切り開き君を落し奉らんと。立歸れば南無三寶。御首もなき尊骸朱になつて伏し給ひ。李海方后を搦め引立つる。ヤア味い所へ出合うたな。我が君の弔ひ軍齋にこそ外れたれ。非時を喰はうと飛びかゝり李海方が眞甲。二つにさつと切割つて后の縛め切り解き。涙ながらに尊骸を押直せば。地代々に傳はる御國讓り御即位の印の印綬御肌にかけられたり。エヽ有難し是さへあれば。御誕生の若宮御位心安しと。鎧の肌に押入れ一先づ后を御供せうか。先づ御體を隱さうかと。難儀は二つ身は一つ打碎かんと敵の勢。一度にどつと亂れ入るさしつたりと切拂ひ。込入ればなぐり立て打伏せ薙伏せまくり立て。走り歸つて今は是迄事急なり。地御死骸は兎も角も一大事は御世繼と。后の手を引き立出づれば此の頃生れし我が水子。乳房を慕ひわつと泣く。エヽ邪魔らしいさり乍ら。己れも我が世繼ぞと引寄せて鉞の柄に。確と結び付けこりや。父が討死するならば成人して若宮に。忠義の根繼となれ。我等が家の木まぶりと振擔げてぞ 三重〽落人を フシ切止めんと。地敵の兵慕ひよれば踏留まり。切捨て打捨て引く潮の海登の港に着きにけり。地是より臺洲府へ渡らんと。見れども折節船一艘も。渚に沿うて立つたる所に。四方の山々森の蔭。打ちかくる鐵砲はオクリ横ぎる〽雨の如くなり。地吳三桂は札能き鎧飛びくる彈丸を受けとめ〳〵。后を覆ひ圍へども運の極めや胸板に。はつしと中る玉の緒も フシ斷れて敢なくなり給ふ。地吳三桂もはつとばかり前後にくれて立つたりしが。御母后は是非もなし十善の御子胤を。胎内にてやみ〳〵と泡となさんもいひかひなしと。地劍拔持つて后の肌押しくつろげ。脇腹に押當て十文字に裂き破れば。血潮の中の初聲は玉のやうなる男子皇子。嬉しも嬉し悲しも悲し。やる方涙に母后の袖引きちぎり押包み。抱き上げしが待て暫し。地取卷きたる四方の敵死骸を見付け。若宮を隱し取つたりと行末迄探されては。宮を育てん樣もなしと篤と思案し。我が子引寄せ衣裳を剝ぎ。宮に打かけ參らせ劍取直し。水子の胸先刺し通し〳〵。地后の腹に押入れ天晴おのれは果報者。よい時生れ合せて十善天子の御身代り。出來しをつた出來いた娑婆の親に心殘すな。親も心は殘らぬぞといへども殘る憂き名殘り。鎧の袖に若宮を。包む涙に咽せ返りオクリ別れ〽行くこそ哀れ

なれフシかくとは知らず。地柳歌君栴檀女を誘ひ。湊口迄落ち延びしが前後に敵みちみちたり。サア是迄ぞ遁るゝたけと。繁る蘆間をかきわけて フシ身を忍びてぞ隱れ居る。詞李踏天が侍大將安大人。手勢引具しどつと駈寄せ。今の鐵砲慥に后か吳三桂に中つたと覺えしと。あたりを見廻しこりや見よ。后を仕留たわハア腹を切りさき。嬪妃の王子まで殺した。 忠節立する吳三桂。主君を捨て名を捨てゝも命惜しいか。彼奴は人前廢つた。地此の上は彼が妻の柳歌君。栴檀女を尋ぬるばかり眼を配れ功名せよと。フシ四方に別れ走り行く。地中にも降達と云ふ我武者もの。いで栴檀女を召取り一人の手柄にせんと。 鎧の上に蓑打掛け。海士の小舟に棹さして フシ入江々々を漕廻り。地此の蘆の蔭が氣遣ひと押分くる櫂の先。 柳歌君しつかと執り力に任せ跳返せば。 舟端を踏外し眞俯向にかつぱと沈み。地浮上らんとする所を櫂も折れよとたゝみかけ。打てば沈み浮めば打ち。 息もつがせず泥龜の。 泥を泳ぐが如くにて フシ水底潜り落ち失せけり。 地エヽ無用の拔駈殊に舟迄仰付けられた。渡りに舟とは此の事と。 船中に隱し置いたる劍取つて横たへ。 栴檀女を乘せ參らせ我も乘らんとせし所に。地何處より這上りけん降達鎧も濡雫。 戟提けて二十騎ばかり餘すまじと追ひかくる。ハア忙がしや御覽候へ。敵手痛く追ひかくれば暫し防ぐ其の間。 舟底に隱れましませと。 拾ひし劍と腰の劍 フシ二刀にふつて待ちかけたり。 地降達程なく駈付け憎くい女め。 櫂で打つた返報と。 長柄の戟おつ取りのべて突つかくる。ヲヽそつちから當てがうた此の劍こつちからも返報と。 切つて廻れば二十餘人女一人に切立てられ。 陸に惑へる蘆邊の鴨。 一羽も立たず討たるもあり。 痛手を受けて逃ぐるもあり。 柳歌君も降達も。 數ヶ所の深傷朱になつて一村蘆を押し分け〳〵。追入り追込み互の眼に血は入つたり。前後も分かぬ盲打ち岸の岩角切先に。雷光石火の命を限り危かりける 三重〳〵 有樣なり。地降達戟も切折られ。 躄寄つてむんずと組み。柳歌君が持ちたる劍。 捥取らん〳〵と捻合ふ足を踏みためず。 のけ樣にかつぱと伏す直に乘つて乘懸り。 さし通し〳〵首ふつゝとかき切つて。 莞爾と笑ひし心の內 フシ嬉しさ類なかりけり。 詞なう〳〵姫宮樣お身には怪我もなかつたか。 舟はそのまゝ其處にかと。 よろぼひ寄つて此の體では船中のお供はならぬ。 又敵が寄せ來ればもう何うも敵はぬ。 潮に任せ何處迄も落ち給へ。沖へ舟の出る迄は此の女が陸に控へた。 地敵何萬騎寄せたりとも命限り腕限り。さりながら主從二度の對面は御緣と命ばかりぞや。 隨分御無事で〳〵。地南無諸天諸佛別して八大龍神。萬乘の君の姫宮の御舟を守護し給へやと。 舟ばり取つて押出せば。地折しも引汐の名殘を何と柄

檀女涙しをるゝ汐風に龍神納受の沖津風。沖を遙かに流れ行くあら心安や嬉しや。よし此の上は生きのびても我が身一つ。死んでも誰を友千鳥生死の海は渡れども。夫の行方子の行方。君が行方は覺束波の浮世の海を越えかねし。渡りかねしといはばいへ此の。一心の疾風船。仁義の櫓權武勇の楫は。折れても折れぬ沖津波寄せ來る鬨の聲かとて。劍にすがつてたぢたぢ〳〵。よろ〳〵よろぼひ寄る方の。磯

山おろし松の風亂れし髮を搔上げて。あたりを睨んで立つたりし。和漢女の手本紙筆にも。　寫し傳へけり。

第二(はまづたひ本イ)

緜蠻たる黃鳥丘隅に止まる。人として止まる所に止まらずんば鳥に如かざるべしとかや。爰に大日本肥前の國松浦の郡。平戸の鄕に釣垂れ網引き世を渡る。和藤内三官といふ若者あり。妻も同じ海士の業藻に住む蟲の我からと。仲人なしの手枕に括り枕と締合

ひし。小睦といへる名に愛でて。フシ世を睦しく暮しけり。地そも此の和藤内が父はもと日本の者ならず。大明國の忠臣。大師大爺鄭芝龍といつし者なりしが。暗き帝を諫めかね自ら長沙の罪を避け。此の日の本に筑紫潟老一官と名を改め。浦人に契りをこめ此の男子を儲けし故。母が和國の和の字を用ひ。父は唐人唐の聲をかたどつて。和唐内三官と名乘り。二十餘年の春も立ち秋も過行く十月の。小六月とて暖かや。備中鍬に魚籠提げ身の活計と夕凪に。フシ夫婦連立ち出でにけり。地見渡せば沙頭に印を刻む鷗。沖洲にすだく浦千鳥。潮の干潟を勘返し。蛤ふんで色々のオクリ貝とり。小褄しよぼ〳〵濡れて。拾ひし貝は何々ぞ。寄生虫。小螺子。淺蜊貝。汐吹き上げの。簾貝ちらと見染めし姫貝に。一筆書きて送りたいらぎ口明けて。ほや〳〵笑ふフシ赤貝に心。よせ貝アヽいたら貝。君は酢貝と吸付けど。フシ我は鮑の。片思ひ。憎やそもじの蟷螺に喰はせたいぞや桑螺貝。梅の花貝櫻貝寢もせで獨り赤螺の。フシ誰を待てとや。人の海松食忘れ貝。我が二人寢のとこぶしは。身に蜆貝祝貝門出。よしの螺貝はフシ悦びの。貝とぞ取りにける。地中に一つの大蛤日影に口を打開き。取る人ありとも白泡の汐を吹いて盛上げしは。實にや蛤能く氣を吐いて樓臺をなすと云ひしも。斯くやと見とれ居る所に。磯の藻屑に飛渡りあさる羽音おもしろく。下り居る鷸のきつと見付け。嘴怒らしフシ只一啄と狙ひよる。詞ヤアいはれぬ鷸殿看經もする身で是がほんの殺生かい。蛤も蛤口をくわつと破戒無慙。地飛付いてかちかち〳〵。啄く所を貝合せにしつかと喰締め動かせず。鷸は俄に興さめ顏引つしやくつゝ羽たゝきし。頭をふつて岩根に寄せ打碎かんず鳥の智惠。蛤は砂地の獲物汐の溜りへ引きこまんと。尻下りに引入るる羽ぶしを張つてばつと立ち。一丈許りあがれども吊られ落ちては又立上り。ばつと立つてはころりと落ち。鷸の羽掻き百羽掻きフシ毛を逆立ててぞ諍そひける。地和藤内つく〴〵見て備中鍬からりと捨て。詞アツア面白し。雪折れ竹に本來の面目を悟り。肱を切つて祖師西來意の輪を開きしも尤かな理りかな。地我父が教によつて唐土の兵書を學び。本朝古來名將の。合戰勝負の道理を考へ。詞軍法に心を委ねしに。今鷸蛤の爭によつて軍法の奥義一時に悟り開けたり。蛤は貝の堅きを頼んで鷸の來るを知らず。鷸は嘴の鋭に誇つて蛤の口を閉づるを知らず。貝は離さじ鷸は離れんと。前に氣を張つて後を顧みる隙なし。爰に望んで我が手も濡さず二つを一度に引摑むにいと易く。蛤貝の堅きも詮なく鷸の嘴の尖りも地遂に其の徳フシなかるべし。地是ぞ兩雄鬪はしめて其の虚を討つと云ふ軍法の祕密。唐土には秦の始皇。六國を呑んだる連衡の謀。本朝の。太平記を見るに後醍醐の帝。天下に王

として蛤の大口開きし 政 取縮めなく。相模入道と云ふ鴫鎌倉に羽叩きし。奢りの嘴するどく。吉野の千早に潮を吹かせ申せしに。楠正成新田義貞二つの貝に嘴を閉攻められ。むしり取つたる其の隙に乘つてうつせ貝。蛤ともに摑みしは逸物の高氏將軍武略に長ぜし所なり。地誠や父一官の生國は大明韃靼鴫蛤の國爭ひ。今合戰最中と傳へ聞く。哀れ唐土に渡り此の理を以て彼の理を摧し。攻戰ふ程ならば大明韃靼兩國を一呑みにせん物をと。目も放さす工夫を凝し。思ひそめだる武士の一念の末ぞ逞しき。地理かな此の男子唐土に押渡り。大明韃靼を平均し異國本朝に名を揚けし。延平王國性爺は フシ此の若者の事なりけり。地小睦遠目に喃々もう潮がさいてくる何をきよろりとしてぞいのと走り寄つて是は扨。詞鴫と蛤と口吸ふか女夫といふ事今知つた。どうやら犬の樣で見ともない。どりや 地放して取らせうと笄ぬいて口押割れば。鴫も悅び蘆邊をさして滿ちくる潮に蛤の フシ則ち隠れ沈みけり。

もろこしぶね(イホ)

ハア時雨さうないご歸らうと。見やる洲崎に楫を絕え搖れ寄れば珍らしい作りな舟。詞鯨舟でもなし。唐の茶舟か何ぢや知らぬと舟底見れば。唐土人とおぼしくて二八餘りの上﨟の。地芙蓉の顏容柳の眉袖は涙の汐風に。化粧も剝けて面瘦せて。哀れにも美しく雨に萎れし初花に。フシ目鼻を付けし如くなり。詞小睦小聲になりありや繪に書いてある唐の后。淫奔して流された物ぢややわいの。アヽさうぢや〳〵よい推量。俺は惡う合點して。楊貴妃の幽靈かと思うて怖かつた。何でもよい女房ぢやないかいな。ムウいやらしに唐の女房が目につくか。親父樣が蛤の樣に唐にござつて。此方もあつちで生れたら。あの樣な女房抱いて寢さしやらうが。日本に生れた因果にわしが樣な女房持つて口惜しからうの。ハテひよんな事ばかり。なんぼ美しうても他の女房の 地衣裳付頭付。辨財天を見る樣で勿體なうて氣が張つて。フシ寢られはせぬとぞ笑ひける。地其の隙に上﨟濱邊におりて夫婦を招き。詞日本人〳〵。南無きやらちよんのうとらやあ〳〵とありければ。地小睦ふつと笑ひ出し。ありや何といふお經ぢやと腹を抱へてをかしがる。詞ヤイ〳〵笑ふなあれは日本人爰へおじや。賴みたいと云ふ事とおしのけて立寄れば。地上﨟涙にくれながら。詞大明ちんしんにようろ。君けんくるめいたるりんかんきう。さいもうすがすんへいするともこんたかりんとんな。ありしてけんさんはいろ。とらやあ〳〵 地とばかりにてスヱテ又さめ〴〵と泣き給へば。地小睦は濱邊にころりと伏し フシ腹筋捻つて堪へかぬる。地和藤内は常々父が詞の唐韻覺え。はつと手を突き頭を下げ。詞うすく〳〵うさすはもう。さきがちんぶりかくさくきんないろ。きんにやう〳〵と手を打つて。

地互にしみ〴〵手を取組み。スヱテ悲歎の涙睦じし。地小睦くわつと急上げ胸ぐら取つて是男。詞唐人詞聞きたうない。いかに淫奔すればとて何時の便宜に唐三界。餘りな稼ぢや。やいそこなとらやあや。こつちの大事の男をようも〳〵きんにやう〳〵にしたなあ。日本の男の鹽梅は喫うて見る事もなるまい。地此の鹽梅喰うて見よと備中鍬振上ぐれば和藤内ひつたくり。詞ヤイ目を明いて悋氣せい。是こそ日頃語りし父一官の古への主君。大明の帝の御妹栴檀皇女。國の亂にて吹流され給ふとの御物語見捨て難なく悼はしゝ。直に我が家へお供せば庄屋の斷り。代官所の詮議何のかのと喧し。地兎角親父と談合おぬしは内へ歸つて早々是へ同道せい。人の見ぬ中早う早うといひければ小睦もはつと手を打つて。扨も〳〵おいとしや同じ日本の内さへも。王位高貴の姫君は荒い風にも當ぬと聞く。ましてや是は見ぬ唐土の王胤のあさましき御姿や。所々多きに爰へお舟の寄る事も。主從の御緣深き故。追付け親父樣呼うで來ませう。アヽお愛しのとらやあや。きんにやう〳〵と涙にくれヲクリ家路にこそは歸りけれ。フシ斯くとは知らず。地一官夫婦不思議の瑞夢蒙りしと。當國松浦の住吉に詣で歸るさの濱傳ひ。喃々〳〵と地聲をかけて招寄せ。栴檀皇女亂國を遁れ御舟是へ流れ寄る。悼はしき有樣と聞きも敢ず一官夫婦。あつと頭を地に着けて。詞御聞及びも候はん某は古への鄭芝龍と申す者。只今の妻や子は日本の者にて候へども。舊恩を報ぜずんば忠臣の道立つべからず。某こそ年寄つたれ此の倅兵事軍術を嗜み。御覧の如く骨太に生れ付き大膽不敵の剛力者。今一度大明の御代に翻し。冥土に在す先帝の宸襟を安んじ奉らん。地御心安く思召せと世に賴もしく申し上ぐれば。皇女御涙にくれ給ひ。扨は聞及びたる鄭芝龍とは御身よの。地李蹈天が惡逆韃靼國と心を合せ。兄帝を失ひ國を奪ひ。妾も既に害せられんとしたりしを。地呉三桂夫婦の臣が介抱にて。今日の今迄惜しからぬ露の命のつれなさを。賴むとばかり宣ひて又さめざめと泣き給ひ。地互に通ずる詞の末。緣につるれば唐の物悔の八千度繰返す。フシ昔語りぞ哀れなる。地母も袂を絞りかね實に誠斯樣の事を承らん兆にや。詞今朝曉夫婦かはらぬ夢の告げ。軍は二千里を出でて西に利ありといふ事を。まざ〳〵と見て候。ヤア和藤内。此の夢を考へ君御出世の忠勤を勵むべし。いかに〳〵とありければ和藤内謹んで。只今某此の濱にて鴫の鳥と蛤稀代の業を見受けしより。軍法の蘊奥を悟り開いて候。地千里を出でて西に利ありとは大明國は我が國より西に當つて千里の波濤軍法の法の字は三水に去と書く。三水は水なり水を去るとは此の出汐の水に任せ。早く日本の地を去るべしとの神の告。我等が本卦師の卦に當つて。詞師は軍の義なり。

坤上坎下の卦體。一陽を以て衆陰を統ぶるといつぱ。我が一身を以て數萬騎の軍兵を從へ有つ大將。今三水の滿潮に早く日本の地を去つて。地南京北京に押渡り浮世に存へあるならば。呉三桂と軍慮を合せ李蹈天が賊徒を滅し。軍勢催し韃靼へ逆寄に押寄せ。韃靼頭の芥子坊主。捻首引抜追伏せ。切りふせ。御代長久の凱歌を上げん事和藤内が心魂に。フシ徹する所。地天の時は地の利に如かず地の利は人の和に如かず。吉凶は人によつて日によらず。此儘直に御出船道すがら島々の夷を語らひ案の中なる軍せん御出陣と勇しは。三韓退治の神功皇后艫船に立たし荒御前を。今見る如き勢也。地父は大きに感心しチヽ潔し頼もしし。誠や一粒の花の種は地中に朽ちず。終に千輪の梢に上るといふ本文。フシ實に一官が子なるぞや地我々夫婦も同船にて御供申すべきが。詞大勢は目に立つて所々の渡海の番所。國の咎め恐あり。夫婦密に藤津の浦より出船すべし。地お事は是より乘出し便りよき小島に姫宮を預け置き。舟路をかへて追付けよ。親子が忠心正直の頭に宿る神風は。船中何の氣遣ひなし。出合ふ所は唐土に隱れなき。千里が竹にて相待つべし。急げ〳〵と姫宮にお暇申し　オクリ夫婦は〳〵遙かに別れ行く。

地和藤内姫宮の御手を引き。元の唐船に移し乘せ參らせ。押出さんとする所に。女房息を切つて走り付き。船の纜と取り。詞ムウ内には親父樣母樣も皆お留守。異な事と思ひしに道理こそ是ぢや物。親子篤と談合しめ。親御の國からお内儀呼び。此の小睦を置去りに親子夫婦四人づれ。唐へ身代引く氣ぢやの。餘酷いつれない。何の見落仕落がある。唐高麗は愚かの事天竺雲の果迄も。共に連れんと言ひかはした二人の中。仲人もない挨拶ない二人が胸と胸とに。起請も誓紙も納めてある。地なんぼう飽れた中なりとも今迄の情に。せめて同じ舟に乘せ。五里も十里も沖中の波に沈めて。鱶や鮫の餌になりとも。夫の手から殺して下され藤内殿と。舳板を叩き泣きくどきスヱテ放さん氣色はなかりけり。地エヽ大事の門出不吉の泣面。其處立退け目に物見せんと櫂振上ぐれば。姫宮あわて縋付き。止め給ふを押しのけ櫂も折れよと舷端敲き。威に打つを身に受けて。打たれて死ねば本望と。濱邊にどうど臥轉び聲も。惜まず歎きしが。詞エヽ是でも死なれぬなア。よし〳〵今は是迄結構者も事による。地此の海底に身を沈め嗔恚は嫉妬の大蛇となつて。もとの契りは今日の仇今に思ひ知らせんと。石を袂に拾ひ入れ巖の肩に攀上れば。駈上つて和藤内抱きとめて。詞ヤイこりや粗相すな心底見付けた。軍なかばの大明國事太平に治まる迄。姫宮を汝に預け日本に止め置かんと思へども。筋なき女の心を窺ひ態とつれなく見せたるぞ。是四

百餘州と釣替の姫宮をしつかと預置くからは。男の心替らぬ證據。姫宮に仕へ奉るは舅に孝行夫に仕ふる百倍ぞや。地命にかけて頼入る。國治まつて迎のお船のお供せよと宥むれば聞入れて此方には氣遣ひせず。地隨分無事でござれやと。いへども弱る女心。せめて一夜の覺悟もせず夢見た樣な別れやと。夫の袖に縋付きスヱテわつとばかりに。泣叫ぶ心の。内ぞやるせなき。地和藤内も胸塞り。至極の思ひに目も眩み フシ共に心は亂るれど。地斯くては果てじいざさらば。さらば／＼の暇乞柄檀女も涙ながら。詞追付け迎ひの輿を待つ。其の時伴ひ歸るべし必ず早うと宣へば。地畏つて和藤内泣く／＼舟を押出す。暫又纜に取付いて言ひ殘せし事のあり。暫くなうと引留むる。エヽ聞分なしと引切つて舟を深みに漕出せば。詮方波に身を浸し。只手を上げて舟よなう。舟よと呼べど出舟の。かひなき巖に斷上り。足を

爪立て延上り。見送る影も遠ざかる。唐土の望夫山我が朝の領巾麾山。今の我が身の我が思ひ。石ともなれ山ともなれ。動かじ去らじと搔口説き涙限り聲限り。互に呼ばれ招かれて姿を隱す汐曇り聲を。隔つる沖津波沖の。鷗磯千鳥泣きこがれてぞ三重〽

（千里が新 イ本）

江戸別れ行く船路の末も。不知火の。筑紫は雲に埋めども跡に。擁護の。神風や千波萬波を押切つて。時も違へず親子の舟フシ唐土の地にも着きにけり。地鄭芝龍一官は故鄕へ歸る唐錦。裝束引替へ妻子に向ひ。詞我が本國といひ乍ら時遷り代變り。天下悉く李蹈天が引入れにて。韃靼夷の奴となり。地昔の朋友一族とて誰を尋ねん樣もなく。司馬將軍吳三桂が生死の所在も知れざれば。詞何を以て義兵の旗を揚げ。何國を一城に立籠るべき所もなし。然るに某去る天啓五年此の國を立退き。日本へ渡

る時二歳になりし娘の子を。乳母が袖に捨置きしが。其の子が母は產落して當座に死す。地斯くいふ父は八重の汐路の中絶えて。いつ父母も知らぬ身が育てば育つ草木の。スエテ雨露の惠に長ずる如く。詞天地の父母の助けにや。成人して今五常軍甘輝といふ大名。一城の主の妻となる由商人の便りに聞及ぶ。賴む方は是ばかり。親を慕ふ心ありて娘さへ承引せば。聟の甘輝もやす〱と賴まるべし。是より道の程百八十里。打連れては人も怪しめん。地我一人道を變へ和藤內は母を俱し。日本の漁船の吹流されしと。頓智を以て人家に憩ひ追付くべし。詞是より先は音に聞ゆる千里が竹とて虎の栖む大藪あり。江戶地それを過ぐれば潯陽の江。これ猩々の棲む所。風景聳えし。高山は赤壁とて。昔。東坡がフシ配所ぞや。それよりは甘輝が在城。獅子が城へは程もなし。其の赤壁にて待揃へ。萬事を牒合はすべしと。方角とても

白雲の。日影を心覺えにて東西。へこそ〽三重別れけれ。地教に任せ和藤內人家を求め忍ばんと。かひ〲しく母を負ひたづきも知らぬ岩巖石。古木の根ざし瀧津波。飛越え跳越え飛鳥の如く急げども。末果てしなき大明國。人里絕えて廣々たるフシ千里が竹に迷ひ入る。地和藤內ほうどくわを抜かし。詞なう母者人。此の臑骨に覺えあり。もう四五十里も來ませうが。人にも猿にも逢ふ事か。行けば行く程藪の中ムウ合點たり。方角知らぬ日本人。唐の狐がなぶるよな。地魅さば魅せ宿なし旅は行着き次第。小豆の飯の相伴と根笹大竹押分け。踏分け猶奧深く行く先に。怪しや數萬の人聲攻鼓攻太鼓。喇叭太平簫高音をそしらォクリひやう〱。とこそ聞えけれ。地すは我々を見咎めて敵の取卷く攻太鼓か。又は狐のなす業かとスエテ茫然たる其の折ふし。コハリ空凄まじく風起り。砂を穿ちどう〱どう。竹葉颯と卷立て〱吹折る。竹はナ

ホス劍の如くフシすさまじなんども愚かなり。地和藤內ちつとも臆せず讀めたり〱。詞扨は異國の虎狩な。あの鉦太鼓は勢子の者。爰は聞ゆる千里が原。虎嘯けば風起る猛獸の所爲と覺えたり。廿四孝の楊香は孝行の德によつて。自然と遁れし惡虎の難。地其の孝行には劣るとも忠義に勇む我が勇力。唐へ渡つて力始め。神力ます〱日本力及で向ふは大人氣なし。虎は愚か象でも鬼でも一挫ぎと。尻引つからげ身づくろひ母を圍うて立つたるは。西天の獅子王も。フシ恐れつべうぞ見えてけり。案に違はず吹く風と共に荒れたる猛虎の形。ふし根に面をすりつけ〱岩稜に爪とぎ立て。二人を目がけ嘯みかゝるを事ともせず。コハリ弓手に摑り馬手に受け。捩つて懸くれば身をかはし撓めば。ひらりと乗り移り。上になり下になり命競べ根競べ。聲を力にゑいゑい〱。虎の怒り毛怒り聲ナホス山も崩るゝ三重〽如くなり。地和藤內も大童虎も

半分毛を毟られ。兩方ともに息疲れ石上に突立てば。虎も岩間に小首を投け。大息ついだる其の響。フシ吹鞴吹くが如くなり。母藪蔭より走出で。詞ヤアく和藤内。神國に生れて神より受けし身體髪膚。畜類に出合ひ力立てして怪我するな。地日本の地は離るるとも神は我が身に五十鈴川。大神宮の御祓納受などかなからんやと。肌の守りを渡さるれば實に尤と押戴き。虎に差向け差上ぐれば。神國神秘の其の不思議猛りに猛る勢も。忽ち尾を偃せ耳を垂れ。じりくと四足を縮め。恐れわなゝき岩洞に隱れ入る。尾筒を摑んで跳ねかへし。打伏せく怯む所を乘懸り。足下にしつかと踏まへしは天斑駒素盞嗚の。尊の神力天照フシ神の威徳ご有難き。地かゝる所に勢子の者群り來る其の中に。大將と思しき者大香上け。詞ヤアく汝奴は何國の風來人。我が功名を妨ぐる。其の虎は忝くも主君右軍將李蹈天より。韃靼王へ獻上の爲狩出したる虎なるぞ。早々渡せ異議に及ばゝ打殺さんしやぐわん フシくと喚きける。地李蹈天と聞くよりも願ふ所と笑つぼに入り。詞ヤア餓鬼も人數しほらしい事ほざいたり。身が生國は大日本風來とは舌長し。左程欲しがる虎ならば。主君と頼む李蹈天とやら石花菜とやら。爰へ突出し詫言せい。直に逢うて用もある。さもない内はいかな事ならぬ。くと睨付くる。ヤア地物ないはせそ討取れと一度に劍をはらりと拔く。心得たりと守りを虎の首にかけ。母の傍に引据ゆればフシ繫ぎし如くに働かず。地ヲヽ心安しと太刀さしかざし群る中へ割つて入り。八方無盡に フシ割立てくく撫捲くる。地勢子の大將安大人官人引具し立歸り。詞おのれ老耄餘さじと一文字に切懸る。地猶も神明擁護の驗神力虎に加はつて。むつくと起きて身慄ひし。敵に向ひ齒を鳴らし猛りうなりて飛蒐る。こは敵はじと安大人勢子の者が差いたる劍。狩鉾數槍手に當るを幸に投付けく 三重へ 打ちかくる虎は神力自在を得。劍を宙に引咬へく。岩に打當て微塵になす。刄の光り玉散る霰。氷を碎くに異ならず。打物盡くれば官人ども色めき立つて逃げまどふ。後より和藤内どつこいやらぬと顯れ出で。安大人が素首を摑んで差上け。くるくと振廻しゑいやつと打付くれば。地岩に熟柿を打つ如く フシ五體ひしけて失せにけり。地此の勢に官人ばら跡へ戻れば惡虎の口。先へ行けば和藤内仁王立に突立つたり。詞アヽ申し御堪忍。地御免々々と手を合せ フシ土に喰付き泣き居たる。詞和藤内虎の背を撫でて。うぬらが小國とて侮る日本人。虎さへ怖がる日本の手並み覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が悴。九州平戸に成長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮栴檀皇女に巡りあひ。三世の恩を報ぜん爲。父が故鄕へ立歸り國の亂を治むるなり。サア命惜しくば味方に付け。いやといへば虎の餌食。

否か應かと詰めかくる。ナウ何の否でござりましよ。韃靼王に從ふも李蹈天に從ふも。命が惜しさ向後お前の御家來ども。お情賴み奉ると地に鼻着けて畏る。地ヲヽ出來した〳〵さりながら。我が家來になるからは日本流に月代そつて元服させ。名も改めて召仕はんと。指添の小刀はづさし是も當座の早剃刀。母も手々に受取つて。並ぶ頭の鉢の水揉むや揉ますに無理無體。片端剃るやらこぼつやら。緜鬢厚鬢剃刀次第。瞬く間に剃りしまひ二櫛半のはらけ髮。頭は日本髭は韃靼身は唐人。互に顏を見合せて。頭冷づく風引いて。嚔々。村さめ〳〵と フシ涙を流すぞ道理なる。地親子どつと打笑ひ。揃ひも揃うた供廻り名も日本に改めて。詞何左衞門何兵衞。地太郎次郎十郎迄面々が國所。頭字に名乘二行に立つてほつ立てろ。コハリ承り候と。お先手の手振りの衆ちやく忠左衞門東蒲塞右衞門。呂宋兵衞東京兵衞。遲羅太郎白城次郎ちやるなん四郎。ほるなん五郎うんすん六郎すん吉九郎。もうる左衞門じやが太郎兵衞。さんとめ八郎英吉利兵衞今參りの御供先。跡に引馬虎斑の駒母を助けてナホス孝行の。名を取り口取り國を取る譽は。異國本朝に。踏跨げたる鞍鐙。虎の背中に打乘つて威勢を。千里に顯せり。

第　三

地仁ある君も用なき臣は養ふ事能はず。慈ある父も益なき子は愛する事能はす。大和唐土樣々に道の巷は別るれど。迷はで急ぐ誠の道赤壁山の麓にて。親子三人巡り合ひ我が聟とばかり聞及ぶ。五常軍甘輝が館城フシ獅子が城にぞ着きにける。地聞きしに優る要害はまだ冴返る春の夜の。霜に閃く軒の瓦鯱鉾天に鰭振りてスエテ石壘高く築上げたり。地濠の水藍に似て繩を引くが如く。末は黄河に流れ入り樓門堅く鎖せり。城內には夜廻りの銅鑼の聲喧すく。矢狹間に弩隙間なく。所々に石火矢を仕掛け置きすはといはゞ。打放さん其の勢 フシ和國に。目馴れぬ要害なり。地一宮案に相違し亂世といひ。斯る嚴しき城門事々しく。夜中に敲き聞きも馴れぬ舅が。日本より來りしなんどいふとも誠と思ひ取次ぐ者もあるまじ。地假令娘が聞きたりとも二歲で別れ。日本へ渡りし父と如何なる證據を語るとも。容易く城內へ入れんことかたかるべし。如何は。フシせんとぞ嘆きける。地和藤內聞きもあへず。詞今更驚く事ならず一身の外味方なしとは。日本を出づる時より覺悟の前。遂に見ぬ舅よ聟よと親みだてして。不覺を取らんより賴まれうか賴まれぬか一口商ひ。否といはゞ卽座の敵。地二歲で別れし娘なれば我等とも行逢姉。彼奴孝行の心あらば日本の風も懷しく。文の便りもあるべきに賴まれぬ心底。我竹林の虎狩に從へし島夷を。地軍兵の元手にして切靡ける程ならば。五萬や十萬勢の付くは隙いらず。何の人賴み此の門蹴破り不孝の姉が首捻切り。

犟の甘輝と一勝負と。躍り出づれば母縋りつき押しとゞめ。詞其の娘御の心入は知らねども。夫につれて世の中の儘にならぬは女の習ひ。父とは親子御身とは胤一つ。地他人は自ら一人にて海山千里を隔てゝも。繼母といふ名は遁れず。娘の心に親兄弟戀慕ふまい物でもなし。其の所へ切込んで日本の繼母が妬みなりといはれんは。我が恥ばかりか日本の國の恥。詞御身不肖の身を以て韃靼の大敵を攻破り。大明の御代に返さんと大義を思ひ立つからは。地私の恥を捨て我が身の無念を堪忍し。人を懐け從へ一人の雜兵も。味方に招き入るゝこそ。軍法の フシ元と聞く。地況して犟の甘輝は一城の主。一方の大將是を味方に頼むこと。大方にてなるべきか心を フシ修め フシ案内せよと制すれば。詞和藤内門外に大音上げ。五常軍甘輝公に直談申したき事あり。開門々々と敲きしは城中響くばかりなり。當番の兵士聲々に。主君甘輝公は大王の召によつて。昨日より出仕あり何時御歸りも計られず。御留守といひ夜中といひ。何者なれば直談とは推參至極。いふ事あらばそれから申せ。御歸りの節披露して取らすべしとぞ呼ばはりける。一官小聲になりいや人傳に申すことならず。甘輝公が留守ならば御内室の女性へ直に逢うて申すべし。日本より渡りし者と申せば合點のある筈と。地いひも果てぬに城中騷ぎ。我々さへ面も拜まぬ御臺所。對面せんとは不敵者殊に日本人とや。油斷するなと高提灯銅鑼鐃鈸を打立て〳〵。塀の上には數多の兵鐵砲の先揃へ。石火矢放して打ちみしやげ フシ火繩よ玉よと犇きける。地奥へかく〳〵と聞えけん妻の女房樓門に駈上り。詞アヽ騷ぐな〳〵。聞屆けて自からがそれよと聲をかくる迄。鐵砲放すな粗忽すな。ナウ〳〵門外の人々。五常軍甘輝が妻錦祥女とは我が事。天下悉く韃靼の大王に靡き。地世に從ふ我が夫も大王の幕下に屬し。此の城を預り守り嚴しき折も折。夫の留守の女房に逢はんとは心得すさりながら。日本とあれば懐しし身の上を語られよ。聞かまほしやといふ中にも若しや我が親か。何故尋ね給ふぞと心もとなさ危なさに。懐しさも先立つて兵ども粗相すな。むさと鐵砲放すなと フシ心遣ひぞ道理なる。地一官も初めて見た娘の顔も朧月。涙に曇る聲を上げ。詞粗忽の申し事ながら。御身の父は大明の鄭芝龍。母は當座に空しくなり父は逆鱗被り。日本へ身退く其の時は二歳にて。地親子名殘の憂き別れ辨へなくとも乳母が噂。物語にも聞きつらん我こそ父の鄭芝龍。日本肥前の國平戸の浦に年を經て。今の名は老一官。詞日本で儲けし弟は此の男。是なるは今の母。地密に語り頼みたき事あつて。成果てし此の姿恥を包まず來りしぞ。門を開かせたべかしと スヱテ染々口説く詞の末。地思ひ當りて錦祥女扨は父かと飛下りて。縋りつきたや顔見たや心は千々に亂るれど。さすが一

城の主甘輝が妻。下の見る所涙を押へて一々覺えある事ながら。證據なくては胡亂なり自らが父といふ。證據あらば聞かまほしとっ 詞 いふより兵口々に證據〳〵出せ〳〵。證據。證據ハテ親子といふより別にかはつた證據もなし。地 そりや曲者よと鐵砲の筒先。一度にはらりと突懸くる和藤内かけ隔て。詞 無用の鐵

砲ほんともいはせば撫切りにしてくれん。地イヤしやつめともに遁すなと火蓋を切つて取り圍み。證據證據と責めかけてァシ既に危く見えけるが。詞一官兩手をあけてア、是々。證據は其方にある筈。一歳唐土を立ちのく時。成人の後形見にせよと、我が形を繪に寫し乳母に預置きつるが。地老の姿は變るとも俤殘る繪に合せ。疑を晴れ給へなう其の詞がはや證據と、肌に放さね姿繪を高欄に押開き。柄付の

鏡取出し月に映ふ父の顔。鏡の面に近々と寫し取つて引比べ。地引合せてよく〳〵見れば繪にとゞめしは古への。顔ら覚ある翠の鬢鏡は今の老衰れ。頭の雪と變れども變らで残る面影の。目もと口もと其の儘に我が影にもさも似たり。父方譲りの額の黒子親子の證據なし。扨は噂の父上か。なう懐しや戀しや母は冥途の苦の下。日本とやらに父上ありとばかりにて。便りを聞かん知邊もなく。東の果と聞くからに。明くれば朝日を父ぞと拜み。暮るれば世界の圖を開き是は唐土是は日本。父は爰にましますよと繪圖では近い樣なれど。三千餘里のあなたとや此の世の對面思ひたえ。若しや冥途で逢ふ事もと死なぬ先から來世を待ち。歎き暮し泣き明し二十年の夜晝は。我が身さへ辛かりしよう生きて居て下さつて。父を拜む有難やと聲も惜まぬ嬉し泣き。一官は咽返り樓門に縋りつき。見上ぐれば見下ろして。心餘りて詞なく フシ盡きぬ。涙ぞ

哀れなる。地武勇に逸る和藤内母諸共に伏沈めば。心なき兵も零す涙に鐵砲の フシ火縄も湿るばかりなり。地稍あつて一官我々是へ來る事。詞聟の甘輝を密に頼みたき一大事。先づ〳〵御身に語るべし門開かせて城内へ入れてたべ。なう仰せなくとも是へと申す筈なれども。此の國未だ軍半ば。韃靼王の掟にて親類縁者たりとも。他國者は城内へ堅く禁制との掟なり。されども是は格別こりや兵ども。地如何せんとありければ料簡もなき唐人ども。いや〳〵思ひもよらぬ事ならぬ〳〵。詞歸去來〳〵。びんくわんたさつ。ぶおん〳〵と地又鐵砲を差向へば。人々案に相違して フシ呆れ果てゝ見えけるが。地母進み出で尤々。詞大王より掟とあれば力なしさり乍ら。年寄つた此の母(はゝイ)に何の用心入るべきぞ。かの姫に只一言物語りするばかり。妾一人通してたべ誠浮世の情ぞと。地手を合せても聞入れずいや〳〵。女とて宥免せよとの仰は

なし。詞然らば我々料簡して城内にある中は。縄をかけて縛置き繩付にして通せば。韃靼王へ聞えても主君の言譯我等が身晴れ。地急いで縄をかゝれよそれがいやなら。詞歸去來〳〵びんくわんたさつ。フシぶおんおんと睨めつくる。詞和藤内眼をくわつと怒らし。ヤイ毛唐人。うぬらが耳は何處に付いて何と聞く。忝くも鄭芝龍一官が女房身が母。姫の爲にも母同然。犬猫を飼ふ樣に縄付けて通さんとは。日本人は鈍な事聞いて居ぬ。こむつかしい城内入らいでも大事ない。サアござれと引立つる母振放し。それ〳〵今いひしを忘れしか。大事を人に頼む身は幾度か樣々の。憂き目もあり恥もあり。縄は愚か足桎手梏にかゝつても。願ひさへ叶はば瓦に金を換ゆるが如し。地小國なれども日本は男も女も義は捨てず。縄かけ給へ一官殿と恥ぢしめられて力なく。用心の腰縄取出し高手小手に縛り上げ。親子顔を見合せて笑顔をつくる日本の。フシ人の

育ちぞ健氣なる。地 錦祥女も堪へかね歎きの色を押包み。何事も時世にて國の掟は是非もなし。母御は自らが預る上は氣遣ひなし。何事か存ぜねども御願の一通り。お物語承り夫甘輝に言聞かせ。何とぞ叶へ參らせん。詞 扨此の城の廻りに掘つたる濠の水上は。自らが化粧殿の庭より落つる遣水の。末は黄河の川水と流れ入る水筋なり。地 夫の甘輝に聞入れて御願ひ成就せば。白粉解いて流すべし川水白く流るゝは。目出度き證と思召し勇んで城へ入り給へ。又御願ひ叶はずは紅を解いて流すべし。川水赤く流るゝは叶はぬ左右と思召し。母御前を請取に門外まで出で給へ。善惡二つは白妙と唐紅の川水に。心を付けて御覽ぜよ。さらば〳〵と夕月に門の戸きつと押開き伴ふ母は生死の境。菩提門を引き替へ是は浮世の無常門。貫の木丁とおろす音。錦祥女は自ら暮れて泣きは唐土女の風。和藤内も一官も。泣かぬが日本武士の風。大手の門の閉開に石火矢打つは韃靼風。一つに響く石火矢の音に。聞くさへ三重へ はるかなる。夢も通はぬ。唐土に。通へば通ふ親子の縁。恩愛の繩結び合ひ。結ぶ縁の縛繩かゝる例は異國にも。まれに咲きだす雪の梅。色音は同じ花の香の。聲にも通ふ事入らざりし。地 錦祥女は孝行深く。母を奥の一間に移し二重の繩三重の網。山海の珍菓名酒を以て。重んじ待遇す有樣は又上の榮華とも又高手小手の縛めは十惡五逆の科人とも見る目いぶせく痛はしく。樣々に宮づかへ誠の母と勞はりし フシ 心の内こそ殊勝なれ。詞 腰元の侍女ども寄集り。コ なんと日本の女子見てか。目も鼻も變らぬが可笑しい髪の結樣。變つた衣裳の仕樣若い女子もあれであらう。襟も裾もはら〳〵ほらほら。ぱつと風が吹いたら太股まで見えさうな。アヽ恥かしい事ぢやあるまいか。いや〳〵とても女子に生れるなら。こちや日本の女子になりたい。何故といや。日本は大きに和らぐ大和の國といふげな。何と女子の爲には大きに和かなは好もしい國ぢやないかの。ホウ有難い國ぢやのと。フシ 目を細めて頷きける。地 錦祥女立出で是面白さうに何いふぞ。おなたは自らとは生さぬ中の母上なれば。孝行といひ義理といひ。誠の母より重けれども國の掟せん方なく縛め搦めるおいとしさ。詞 韃靼王へ聞え良人に咎めもあらうかと。宥免もなき難儀といふは我が身一つ。何れも頼む食物も違ふとや。お口に合ふ物伺うて。進ぜてくれよと宣へば。コ いや申し如才もなうお料理も念入り。龍眼肉のお飯。お汁は家鴨の油揚豚の濃汁羊の蒲燒牛の蒲鉾樣々にして上げても。なういま〳〵しい其樣な物嫌々。縛られて手も叶はぬつい握飯をしてくれと御意なさるゝ。其の握飯といふ喰物は何の事やらどうも合點參らず。皆打寄つて詮議致せば。日本では相撲取りをおむすびと申すげな。地 それはおなたが尋ねても。折

卑下せアヽそりや御卑怯な詞が違ふ。是程の大事口より出せば世間ぞや。詞思案の闇に漏れ聞えて不覺を取り悔んでも返らず。お恨みとは思ふまじ成れ成らざれお返事ヲヽサヽ只今と責めつくれば。詞ムウ急に返答聞きたくば易い事/\。如何にも五常軍甘輝和藤内が味方なりと。地いふより早く錦祥女が胸元取つて引寄せ。劍引拔いて咽吭に差當つる。地老母周章て飛蒐り二人が中へ割つて入り。持つたる手を踏放し娘を背中に押しやり/\。仰向に重なり臥し大聲上げて。詞是情なや何事ぞ人に物を頼まれては。女房を刺殺すが唐土の習ひか。心に染まぬ無心を聞くも。女房の緣ある故と心腹が立つての事か。但は狂氣かたまたま始めて來て見たる。母親の目の前で殺さうとする無法人。日頃が思ひやられた味方をせずばせぬ迄よ。今迄と違うて親のある大事の娘。是怖い事はない。母にしつかと取りつきやと。地隔ての垣と身を捨てゝ

圍ひ戴けば錦祥女。夫の心は知らねども母の情の有難さ。怪我遊ばすなと フシばかりにて共に。涙に咽びけり。詞甘輝は思つてヲヽ御不審尤も。詞全く某無法にあらず狂氣にも候はず。昨日韃靼王より某を召し。此の頃日本より和藤内といふえせ者。匹夫下賤の身を以て智謀軍術逞しく。韃靼王を傾け大明の世に飜さんと此の方に來る。彼が討手誰ならんと數千人の諸侯の中より此の甘輝を選出され征討將軍の官に任じ十萬騎の大將を賜る。和藤内が我が妻の兄弟と今聞くまでは夢にも知らず。彼奴日本に傳へ聞く楠とやらんが肝膽を出で。朝比奈樊噲とやらんが勇力ありとも。我亦孔明が膽に分け入り。楚の項羽が骨髓を借つて一戰に追つて追ひまくり。和藤内が月代首提げて來らんと。廣言吐きし某が。地一太刀も合せず矢の一本も放さず。ぬく/\と味方せば五常軍甘輝が日本の武勇に聞怖たする者でなし。女に絆され緣に引かれ腰

が拔けて弓矢の義を忘れしと。韃靼人の雜口にかけられんは必定。然れば子孫末孫の恥は遁れ難し。恩愛不便の妻を害し女の緣に引かれざる。義信の二字を額に當てさへばりと味方せん爲。詞ヤイ錦祥女。留むる母の詞には慈悲心籠り。殺す夫の劍の先には忠孝籠る。地親の慈悲と忠孝に命を捨てよ女房と。理非を侮らぬ勇士の詞。すゝ聞分けた身に適うた忠孝親に貰うた此の體孝行のため捨つるは惜しいとも思はぬと。母を押しのけつゝと寄り胸押明くれば引寄せて。見る目危き氷の劍なう悲しやと駈隔て。押分けんに詮方なく退けんとするに手は叶はず。娘の袖に喰付いて引退くれば夫が寄る。夫の袖を啣へて引けば。娘は死なんと又立寄るを口に啣へて引寄つ。鼬を捕ゆる如くにて母は目もくれ身も疲れ。わつとばかりにどうと伏し前後。不覺に。見えければ。地錦祥女縋りつき一生に親知らず。終に一度の孝行なく何で罰を遁らうぞ。詞

なせて給べ母上と口說き歎けばわつと泣き。なう悲しい事いふ人や。殊に御身は娑婆と冥途に親三人。殘り二人の父母は産落した大恩あり。中に一人の此の母は憐みかけず恩もなく。うたてや繼母の名は削つても削られず。今爰で死なせては。日本の繼母が三千里隔てたる唐土の繼子を惡んで見殺しに殺せしと。我が身の恥ばかりかは普く口々に日本人は邪慳なりと。國の名を引出すは我が日本の恥ぞかし。唐を照らす日影も日本を照らす日影も。光に二つは　なけれども。日の本とは日の始め仁義五常情あり。慈悲專らの神國に生を受けた此の母が。娘殺すを見物し。そも生きて居られうか。願はくは此の繩が日本の神神の注連繩と顯れ。我を今絞殺し屍は異國に曝すとも。魂は日本に導き給へと聲を上げ。道もあり情もあり哀れも籠るくどき泣き。錦祥女は縋りつき母の袂の諸涙。甘輝も道理に至極して。不覺涙に暮れけるが。やゝあつて甘輝席を打つて。ハツア是非もなし力なし。母の承引なき上は今日より和藤内とは敵對す（イますナシ）老母を是に留め置き。人質と思はれんも本意ならず。輿車用意して所を尋ね送り返し參らせよ。いや送る迄もなく。此の遣水より黃河迄よき便りには白粉流し。叶はぬ知らせは紅を流す約束にて。迎ひにお出ある筈いで紅解いて流さんと　常の一間に入りにけり。母は思ひに。かきくれて。思ふに違ふ世の中を立歸りて夫や子に。何と語り聞かせんと思ひやる方涙の色。紅より先の唐錦。錦祥女は其の隙に瑠璃の鉢に紅解き入れ。是ぞ親と子が渡らぬ錦中絶ゆる。名殘は今ぞと夕波の泉水にさら〳〵〳〵。落瀧津瀨の紅葉と浮世の秋をせき下し。共に染めたる泡沫も紅くゝる遣水の、落ちて黃河の流れの末。和藤内は岸頭に簑うち被き座をしめて。赤白二つの河水に心を付けて水の面。南無三寶紅が流るゝ。扨は望は叶はぬ。味方もせぬ甘輝奴に母は預け置かれずと。踏み出す足の早瀨川。流れをとめて行く先の。濠を飛び越え塀を乘越え籬透垣踏破り。甘輝が城の奥の庭　泉水にこそ着きにけれ。先づ母は安穩嬉しやと飛上り。締めの繩引きちぎり甘輝が前に立ちはだかり。五常軍甘輝といふ髭唐人は和主よな。天にも地にもたつた一人の母に繩かけたは。おのれをおのれと奉つて味方に賴まん爲たるに。もつてうすれば方圖もない。味方にならぬは此の大將が不足なか。第一女房の緣といひ其方から從ふ筈。サア日本無雙の和藤内が直付に賴む返答せいと。柄に手をかけ突立ちたり。ヲヽ、女房の緣といへば猶ならぬ、御邊が日本無雙なれば我は唐土稀代の甘輝。女に絆され味方する勇士にあらず。女房を去る處もなし。病死するまで便々とも待たれまい。追風次第にはや歸れ但置土産に首が置いて行きたいか。イヤサ日本の土産に汝奴が首を

と。両方抜かんとする所を錦祥女聲をかけ。ア、〳〵是なう〳〵病死を待つ迄もなし。只今流せし紅の水上を見給へと。衣裳の胸を押開けば九寸五分の懐劍。乳の下より肝先迄横に縫うて刺通し。朱に染みたる其の有様母は是はとばかりにて。かつぱと伏して正體なし。和藤内も動顚し。覺悟を極めし夫さへ不覺に驚くばかりなり。錦祥女苦しげに。母上は日本の國の恥を思召し殺すまいとなさるれど。我が命を惜みて親兄弟を貢がずば。唐土の國の恥とかうなる上は女に心引かさるゝ。人の誹はよもあるまじ。なう甘輝殿親兄弟の味方して。力ともなつてたべ父にも斯と告げてたべ。もう物いはせて下さるな苦しいわいのとばかりにて　消え〳〵。とこそなりにけれ。甘輝涙を押隱しヲ、出來いた〳〵。自害を無にはさせまいと。和藤内が前に頭をさげ。某先祖明朝の臣下。進んで味方申すべき身の女の縁に迷ひしと。俗難を憚りしに。我が妻只今死を以て義を勸むる上は、心清く御味方大將軍と仰ぎ。諸侯王に準へ御名を改め。延平王國姓爺鄭成功と號し。裝束召させ奉らんと武運開くる唐櫃の。二重の錦羅綾の袂絆の裝束。章甫の冠花紋の沓。珊瑚琥珀の石の帶莫耶の劍金を磨き。絹傘さつとさしかくれば。十萬餘騎の軍兵ども幢の旗幟の旗。吹抜き楯鉾弓鐵砲鎧の袖を列ねしは。會稽山の越王の　再び出でたる如くなり。母は大聲高笑ひ。ア、嬉しや本望やあれを見や錦祥女。御身が命を捨てしゆゑ親子の本望達したり。親子と思へど天下の本望。此の劍は九寸五分なれど四百餘州を治むる自害。此の上に母が存らへては始めの詞虚言となり。再び日本の國の恥を引起すと。娘の劍をおつ取つて咽にがはと突立つる。人々是はと立騷げばア、寄るまい〳〵とはつたと睨み。なう甘輝國性爺。母や娘の最期をも必ず歎くな悲しむな。韃靼王は面々が母の敵妻の敵と。思へば討つに力あり。氣をたるませぬ母の慈悲此の遺言を忘るゝな。父一官がおはすれば親には事を缺くまいぞ。母は死して諫をなし父は存らへ教訓せば。世に不足なき大將軍浮世の思出是迄と。肝の束を一抉り切りさばき。サア錦祥女此の世に心殘らぬか。何しに心殘らんといへども殘る夫婦の名殘。親子手を取り引寄せて國性爺が出立を見上げ。見下し嬉しげに。笑顔を娑婆の形見にて　一度に息は絶えにけり。鬼を欺く國性爺龍虎と勇む五常軍。涙に眼は眩めども母の遺言背くまじ。妻の心を破らじと國性爺は甘輝を恥ぢ。甘輝は又國性爺に愧ぢて萎るゝ顔かくす。亡骸をさむ道の邊に。出陣の門出と生死二つを一道の。母が遺言釋迦に經。父が庭訓鬼に金棒討てば勝ち。攻むれば取る末代不思議の智仁の勇士。玉ある淵は岸破れず。龍栖む池は水涸れず斯る。勇者の出生す國國たり君君たる。日本の麒麟是な

ゐわと異國に。武德を照しけり。

第　四

地唐土の便り今やと松浦潟。小睦が留の間
募は唐の假宮相住を。近傍隣家も浮名たて
唐と日本の汐ざかひ。ノンちくら者かと疑
へり。地夫も今は國性爺と名を改め。數萬
騎の大將軍と聞くからに。我も心の勇みあ
り。地若衆出立ちに態を變へ無付け髪の大
たぶさ。翡翠の大髱ふつさりと鬢宜の息子
か脊藥賣か。女とよもや水淺黄の股引しめ
て。羽織着て、朱鞘木刀眞紅の下緒。
花の口紅雪の白粉。菅笠深く腰高く。フシ
足元輕き濱千鳥。フシ濱邊傳ひを。日參の。
聲。松浦の住吉や。フシ神前にこそ着きにけ
れ。地充滿其願と祈誓をかけ手を合はする
と見えけるが。ひらりと拔いたる居合の早
業。神木の松を相手取り。木刀翳し躍りあ
がつて聲をかけ。ゑい。やつたう〳〵ゑい
ゑいたう。ゑいやつたう上段下段の太刀さ
ばき。陽炎稻妻獅子奮迅。足とり手の內四
寸八寸身の開き。踏込んで打つ入身の木刀。
古木の松の片枝を。ずつぱと切つて落せし
は フシ今牛若ともいひつべし。地何時の間
にかは栴檀女森の陰より走出で。詞ナウ
ナウ小睦殿。毎日々々時を違へず變つた風
俗今日といふ今日跡を慕うて見付けしが。
詞誰に習うて此の兵法器用な事やと言へば。
詞いや師匠はなけれど夫の打太刀。習はう
より慣れての事。地唐土の便り心許なく。
お迎舟は參らずとも。お供して渡らんと此
の明神へ吉凶を祈り候へば。詞是見給へ
木刀にて此の松の木の眞劍の如く切れたる
は。神納受の驗と申し。両國の便船時節も
よく候と。地申し上ぐればそれは嬉しし賴
もしゝ。片時も早く戾してたべとスヱテ御悅
びは淺からず。詞御心安く思召せ。總じて
此の住吉と申すは。船路を守護の御神にて
神功皇后と申す帝。新羅退治の御時汐干珠。
汐滿珠を以て。御舟を守護し舟玉神とも申
すなり。地昔唐土の白樂天といひし。人口
木の智惠を計らんと。此の秋津洲に渡り給
ひ。詞目前の景色を取載す。地青苔衣を帶び
て巖の肩にかゝり。白雲帶に似て山の腰を
廻ると。詠じ給へば大明神賤しき釣の翁と
現じ。一首の歌の御答へ。スヱテ苔衣。着た
る巖はさもなくて。きぬ着ぬ山の帶をする
かな。と詠じ給ひし御歌に。ぎつと詰つて
樂天は。フシ雲より本土に歸るとかや。地國
を守りの御神の。其の御歌は苔衣我が身に
受けて旅衣。いさとて二人打連れて船路。
遙けく 三重〽 なりふりや。

栴檀女道行

唐子髷には。薩摩櫛島田髷には。唐櫛と。
大和唐土打混ぜて。さしも慣はぬ旅立や。
舟と陸とを行道は笠捨てられず懷に。枕
をたゝむ夢たゝむ。スヱテ千里を胸にたゝみ
こみ。女心の强弓も。男故にぞ引かれ行く。
我は故鄕を出づる旅。君は故鄕へ戾る旅ォ
クリ一葉に〽見せて栴檀女小睦が勇め力に
て。地大明國へと思立つ フシオクリ心の〽內

こそ。遥かなれ フシ親と夫とを。持ちし身は。何か歎きは有明のオクリ月さへ。同じ月なれど。なう二人見馴れし。フシ閨の中。名残數々大村の。地浦の濱風一村雨はさら〳〵と晴れても晴れぬ我が涙。袖に包みて袂に拭ふ。鏡の宮に影とめて。スヱテ泣かぬと人や見るめの浦。フシ振りさけ見れば久かたの。月も行く末の空遠く。歸るさ何時ぞ天津雁誘へや誘へ。フシ我が夫も二十五筋の琴の絲。結び契りし年の數。いざすががきて箱崎の。松とし聞かば。我も急がん。磯邊傳ひに寄藻搔く。海士の子供の打群れて。彈き石投饒又丁か半。三つ四つ五つ數へては フシ幼な遊びも睦まじく。七瀬の淀に行く水も。昔の影や隠れんぼ。鬼の來ぬ間と謡ひしも濡れて乾かぬ旅衣。唐土舟を。松浦川。渚ちかの浦風に。そなたの フシ方を見給へば。磯にたぐりの廚川波にゆらるゝ釣舟に。シテ地 鬢つら結うたる童子一人。網はおろさで釣竿の。フシいと悠々と眠り來る。ツレ詞 なう〳〵お兒。我我は唐土へ渡る者。好からん方まで乗せてたべとぞ仰せける。シテあら何ともなや。一人は唐土人一人は筑紫人。女性の身にて唐土へ渡るとは戀しき人のあるやらん。地二千里の外故人の心。三五夜中にあらねども影を洩らさぬ月の舟。とく〳〵召され候へとはや差寄する水馴棹。二人不思議の縁と打乗りて。焦れ行方も白波に。フシ風まで長閑けき海の面。ワキ地 續きて見ゆる八十島を異國の人の家産に。スヱテ教へてたばせ給へとよ。シテ地 童子舳板に立上り海原遥かに指さして。如何に旅人聞き給へ。先つあれに續くは鬼界十二の島。五島七島中にもあの。白き島の。多く群れ居るは白石が島。此方に煙の立昇るは硫黄が島。扨又南に高く。霞かゝるは千どの島なり。あれは古へ天照神の。住吉の明神に笛吹かせ。舞楽を奏し二神の遊び給ひし所とて。二神島とは申すなりなう。フシ唐土人とぞ語らる。二人フシ語る間に。敷島のはや秋津洲の地を離れ。それより先の島々の。上フシ島かと見れば雲の峯。山かと見れば空の海。風はなけれど蜑小舟。天の鳥舟いは舟の。空走りゆく。如くにて。山なき西に山見ゆる月に。先だち日につれて日の本出でし秋風の。立ちもかはらず其の儘のスヱテまた秋風に吹かるゝ フシ南江の。港に着きにけり。地人々舟より上り給ひ。誠にお兒の御情坐したる様なる舟の中。かゝる波濤を時の間に渡し給へる御方は。如何なる人にてあるやらん。シテ詞 人がましやな名もなき者。我日の本に昔より住み馴れたれば住吉の。地海童子と申す者。暇申して此の童は。住吉に立歸り歸朝を。待ち申さんと。二人夕波の汀なる蜑のオクリ小舟を漕戻し。追風に任せつゝ沖の方に出でにけりやナホス沖の。方へぞ 三重

碁立軍法 （九仙山イ本）

フシ傳へ聞く陶朱公は句踐を伴ひ會稽山に

籠り居て。種々の智略を廻らし。遂に呉王を滅して。勾践の本意を。達すとかや。昔を問へば遠き世の。例も呉三桂が。今身の上に白雲の。山より山に。身を隠し、太子を育て奉る。移れば變る苔莚。宮前の楊柳寺前の花。嶺の枯木に立ちかはる夕の霧の間には我が身を以て褥とし。鸞輿鳳車の輦も蔦の。錦に織りかへて。朝の露のほとりには。谷の猿の肩に駕し。早二歳は昨日今日。暮るゝも山明くるも山。我が名も君が顔も。人目を包む雲水に。虹のかけ橋とだえして。深山烏やぬえこ鳥。梢に來鳴く鸚鵡さへ。昔をまねぶ聲はなし。水遠くして山長く。根笹茅原檜原。峨々と聳えし崔嵬の山路に。疲れ行末は名にのみ聞きし。江化府の。九仙山に攀登り。暫し。イむ。松風も。馴れてや。友と化馴れし。龐眉白髪の老翁二人石上に碁盤を据ゑ。黒白二つの石の數三百六十一目に、離々たる馬目連々たる雁行。傍目もふらぬ碁の勝負。心は蜘蛛の。空に繋れる絲に似て。身は空蟬の枯枝となり。浮世を離れし手談の技。中間禪の高臺かと太子を石壇に移し參らせ。枯木の株に頤もたせ。見とるゝ我も諸共に。餘念の塵をや拂ふらん。呉三桂輿に乗じ。なう〳〵老人に物申さん。市中を離れし座隱の遊び面白しさり乍ら。琴詩酒の三つの友を離れ。碁を打つて勝負を爭ひ給ふこと別に樂む所ばし候か。翁さして答もなく。碁盤と見れば碁盤にて碁石と見

る目は碁石なり。大地世界を以て。一面の碁盤となすといへる本文あり。心上の須彌山是にあり。大明一國の山河草木。今爰より見るになどか曇らん。一角に九十目四方に四季の九十日。合せて三百六十日。一目に一日を送ると知らぬ愚かさよ。面白し〳〵。天地一體の樂みに二人對ふは何事ぞ。陰陽二つあらざれば萬物調ふ事はなし。勝負は扨如何に。人間の吉凶は時の運にあらずや。扨白黑は。夜晝。手段は如何に。軍の法。切つて押へて跳ねかけて。軍は花の亂れ碁や。飛交ふ鳥。群れ居る鷺と譬へしも。白き黑きに夜晝も分かで昔の斧の柄も。白らとや朽ちぬべし。翁重ねて曰く。今日本より國性爺と云ふ勇將渡つて。大明の味方となり只今軍眞最中。是より其の間遙かなれども。一心の碁情眼力にありありと。合戰の有樣目前に見すべしと。宣ふ聲も山風も，

碁石の。音にぞ響きける。呉三桂はつと心付き。實に〳〵爰は九仙山。此の九仙山と申すは。四百餘州を目の下に嶺も微かに。おぼろ〳〵と雲かと見れば一霞。麓に落つる春風の。風のまに〳〵。吹き散らす。空は。彌生の半ばなる。柳櫻をこきまぜて。錦に包む。城廓の。ありありとこそ。見えにけれ。何國の誰が籠りしぞ。門高く。濠深く。塀々に掻楯突き。要害嚴重を。帶びたりし。昂々たる。高櫓。揚る雲雀や。歸る雁。花と見つゝも色々の。旗に翼や休むらん。打開に照

めて討つは楠流。二人 倶利伽羅落し坂落し屋島の浦の浦波も。爰に寄手の勢強く揉立て〳〵 三重 切立てられ 地 城中さしてぞ引いたりける。時分はよしと夕暗に 日本秘密のほうろく火矢。撃つて放つ其の響須彌も崩るゝばかりなり。楯も櫓も海士の焚く。藻鹽の煙か狼煙か火攻は秋の村紅葉。楚人の一炬に焦土となんぬ。咸陽宮ともいひつべし。國性爺勝鬨の駒の手綱を掻繰つて。輪乘をかけてくる〳〵〳〵くるり。〳〵と乘り廻し巡る月日に ナホス 僞りのなき世。なりけり神無月。時雨て過ぐる。閩の道に綸門高き 地 頃にそ。道も國性爺が切取りし福州の大將城。軒の霰は。錦と玉を色どる初霜。實交りの夕霰。吹きくる上に降積り。堀も櫓も埋れて ナホス 雪の眺めは。ソン 面白や。地 其の外閩州建州南國の府。三十八所切取つて。[illegible]を侍舗に所所に附城築き。兵糧軍兵込め置いて。威勢は天の氣に顯れ手に取る。

樣にぞ見えにける。シテ地 呉三桂悅喜の餘り身をも人をも打忘れ。太子を抱き奉り フシ 城ある山へと走り行く。ワキ地 二人の老翁引は止め愚かなり〳〵。詞 日本一瞬に見ゆると雖も。各百里を隔てたり。汝此の山に入つて一時と思ふとも五年の春秋を送り。四年に四季の合戰を見たるとはよも知らじ。地 斯いふ中にも立つ月日太子の成長汝が身の。面影をよく水鏡。水清ければ影清し汝忠あり議あり。心の鏡に映り來る我は光照高皇帝。我は青田劉伯溫。二人 住家は月の中に立つ桂の裏華吹返し。シテ地 智見の目には上十五。ワキ地 下十五夜と見つれども。シテ地 案宅は心亂れ碁の。フシ 石とやこゝな見るらん。ワキ詞 又水中の遊魚は。ワキ地フシ 釣針と疑へり ワキ詞 雲上の飛鳥は。シテ地 弓の影とも驚けり。ワキ詞 一輪も下らず。シテ地 萬水にても上らねば。二人コハリ 盈ちては虧くる影あれば 虧けても盈つる月を見よ。暫しが程の雲隱れ遂には晴れて天照らす。日の本和國の神力にて太子の位は早出づる日と。宣ふ御聲は松吹く嵐。佛ばかりは松立つ山の峯の嵐に吹き。ナホス 隱れてぞ フシ 失せ給ふ。シテ地 茫然として呉三桂。夢かと思へばまどろます。言にも五年の月日を經たる驗にや。我が顔には髭伸びたり。太子の暫時の間に御脊丈も立伸びて。早七歳の。御物ごし。呉三桂。〳〵と召さるゝ御聲おとなしく。雪の御山に鶯の初音を聞きし思ひでにあい。〳〵あいと頭を下げ。天を拜し地を拜し。嬉しさ足も定まらず。一世夢の心地せり。地 御前に手を束ね。古への鄭芝龍が一子國性爺。日本より渡つて味方の義兵を起すとは。昔にこそ承れ。春秋五年の軍功明かに。大明半國は取り返し候へば。詞 國性爺に案内して。君是にまします旨を告知らせたく候と。申しも敢へぬに遙かの谷の向ふより。詞 なう〳〵それなるは。司馬將軍呉三桂にてはなきか。呉三桂〳〵と呼ばはる方をよく〳〵見て。御

身は吾の鄭芝龍が。是は是は呉三桂。命あれば珍しや。一子國性爺が故郷の妻。栴檀皇女を御供せしと。地招きあへば姫宮も。懐しの呉三桂。おことが妻の柳歌君命かけての忠節にて。浮世を渡る浮かれ者日本へ吹流され。一官親子夫婦の標不思議に二度逢ふ事よ。柳歌君は何國にご嬰兒は何となりにけるぞ。早う逢ひたい逢はせてたべとスヱテ焦れ給ふぞ道理なる。詞されば其の時の深手にて。我が妻は空しくなり。后も敵の鐵砲に命を落し給ひしゆゑ。胎内を斷破り。我が子を害し敵を欺き。太子は山中にて。地安々育て フシ参らせし。地早七歳の生ひさきは是に渡らせ給ふぞと。語るに付けて姫宮も。わつとばかりにどうと伏し人目も。わかぬ御歎き フシ思ひ。やられて悼はしゝ。地一官籠を見返つて。詞あれ／＼梅勒王奴が姫宮を見付け。數千騎にて追つかくる年寄骨に力身を出し踏留つて命限り。防ぎ支へんと遮れども。宮の御うへ危なし／＼。それへどうぞ退けたいが此の山不案内谷を越す道はあるまいか。いや／＼此の山めぐれば六十里。谷深うて底知れず。是へも呼ばれず其處へも越されず。エヽ如何せん何とかせんと虚空を拜し。地只今奇瑞を現じ給ふ。御先祖高祖高帝。青田の劉伯温。神仙微妙の力を合せ。非常の危難を救ひ給へと。太子諸共一心不亂に祈誓あり。姫宮小睦も手を合せ南無。日本住吉大明神。詞[illegible]海無量と丹精無二の心ざし。天も感應地も納受。洞口より一筋の雲無心にして靉けば。天のかけ橋鵲の渡せる橋や。葛城の久米の岩橋夜ならで フシ夢路を辿る。如くにて渡るともなく行くともなく オクリ 向ふの峯に上り着き。フシ足もわな／＼顫ひけり。地程なく賊兵雲霞の如くどつと馳寄せ。詞あれ／＼太子呉三桂も見えたるは。思ひも寄らぬ希ひらり。地網綱て鯨を取るとは此の事。的になりたる奴原。やれ弓よ鐵砲よ フシ打取れ射取れと犇きける。詞梅勒王下知をなしやれ待て／＼。後には廣し退き場はあり。弓鐵砲は叶ふまじ。こりや見よ終に見ぬ雲橋。必定國性爺奴が日本流の計略橋。懸橋なんどといふ物ならん。敵に食物あてがふは愚かの軍法。地續けや者ども渡れや渡れと五百餘騎。押合ひ詰合ひ我先にと。ゑい／＼聲をかけ橋の半は渡ると見えけるが。山風谷風颯々と雲のかけ橋吹切つて。大將始め五百餘騎。どた／＼どたと落ち重なり面顔打割り頭を碎く。泣いつ喚いつ彌が上 フシ谷をも埋むるばかりなり。詞呉三桂鄭芝龍。得たりかしこし心地よしと。地大石大木當るを幸ひ。投げかけ／＼打ちつくれば。一騎も殘らず刹那が中人の鮨とぞなりたりける。詞中にも大將梅勒王。岩根を傳ひ葛をたぐり這登れば。呉三桂遊仙の碁盤提げこりや。此の碁盤は葛諸で練つて石より堅く。苦うて口に合はすとも一口喰ふか。おのれが一目めをもつて御無用の碁の相手。地碁勢を見よと頭を出

せば丁と打ち。面を出せばばたと打ち。ぶち付け／＼脳も鉢も打砕かれ微塵になつてぞ失せにける。ヲヽ／＼本望々々。本朝にもかゝる例は。先例吉野の碁盤忠信。夫は榧の木是は葛藷の九仙山。先手が味方へ廻りくる四つ目殺しに中手を入れて。翅鳥に懸けて打留つて。攻手掛手詰切つて。手詰のせきを勝軍敵のはまを拾ひ上げ。國も御代も打ちかへで手を盡くしたる劫もあり。忠義の道はまつ斯う／＼。道は斯うよと打連れて福州の。城にぞ入りにける。

第五

泰山を挾んで北海をこゆる事は能はず。王の王たらざるは能はざるにはあらずとかや。延平王國性爺兵を用ふること掌にまはすが如く。五十餘城を屠り武威日々に熾んにして。妻の女房故郷より栴檀皇女を供し参らせ。九仙山より呉三桂太子を御幸なし申せば。十善天子の印綬を捧げ。永暦皇帝と號し奉り。龍馬が原に八町四方の木城をからくみ。陣幕外幕錦の幕。陣屋の上には日本伊勢兩宮の御祓大幣を勸請し。太子を別殿に移し参らせ。其の身は中央の床几にかゝり。司馬將軍呉三桂散騎將軍甘輝同じく左右の床几に坐し。韃靼大明分目の勝負軍。評定取々なり。呉三桂團扇取直し。凡そ謀は淺きに出でて。深きに至るに如くはなしと竹筒一本取出し。此の筒に蜜をこめて山蜂多く入れ置きたり。斯の如く數千本拵へ先手の雜兵に持たせ。立台の軍する體にて筒を捨てて逃退かば。貪慾熾の韃靼勢。食物と心得拾ひ取らんは必定口を拔くと齊しく數萬の山蜂群り出で。賊兵を毒痛せしめ。漂ふ所を取つて返し八方より討取るべし。是御覺候へと口を拔けば數多の蜂鳴り羽ぶいてぞ出でにける。賊兵あざ笑ひ淺はかなる童蒙の謀計。捨てて恥かゝせよと積重ねて火を付けん。其の時筒の底に仕掛けたる。故火の薬鳴渡り飛散つて。十町四方の數萬に生殘る者は候まじと。火縄を筒に差付くると齊しく飛んだる飛火の仕懸け實にもかうとぞ見えにける。五常軍甘輝果物入れたる花折一合取出し。呉三桂の奇計尤。又某が謀。斯の如く折箱二三千合も拵へ。様々の菓子餅酒肴詰め。各是に鴆毒を入れ陣屋に貯へ並べ置き。陣所近く敵を引受け。戰負けたる體にして十里許り引取るべし。韃靼が例の長追ひ。勝誇つて陣屋に込入り此の食物に眼くれ。貪の山に入りたりと軍將雜兵。我先にと摑み喰はんは必定。唇に觸ると齊しく片端に毒血吐き死に血ぬらずして掌にしてくれんと。面々軍慮心を砕き。評議とり／＼區々なり。國性爺打頷き。何れも一理ある計略。批判申すに及ばずさりながら。國性爺が魂に徹し忘れ難きは。母が最後の一句の詞。韃靼王は汝等が母の敵。妻の敵と思込んで本望遂げよ。氣を撓ませぬ其の爲の自害なり

との詞の末に骨に浸み五臓に徹し刹那も忘るゝ事はなし。地千變萬化の謀も何かせん。只無二無三に攻入つて韃靼王李蹈天に。押並べてむずと組み。ずた〳〵に刻んで棄てずんば。假令國性爺が百千萬の軍功もつ。君の忠も世の仁義も母の爲には不孝の罪と。鏡の樣なる兩眼に淚をスヱテはら〳〵と。流しければ吳三桂甘輝を始め。一座の上下諸共に、皆々。袖をぞ濡しける。地錦祥女の身乍らも。故鄕を忘ぜず生國を重んじ。最期迄日本の國の恥を思はれし。我も同じく日本の產生國は捨てまじと。あれ見給へ天照大神を勸請す。詞某殿矢より出でて數ケ所の城を攻落し。今諸候王となつて各の傳きに預る事。全く日本の神力によつてなり。然れば竹林にて隨へし島夷ども。日本頭に作り置く。彼等を眞先に立て日本の加勢と披露せば。元より日本弓矢に長じ武道鍛錬隱れなく。韃靼夷懼怖して二の足に成る所を疊みよせて乘取らんと。此の頃我が女房に牒合せたり。ヤア〳〵源の牛若。地軍兵揃し是へ〳〵と團扇を上ぐれば。あつと答へて立出づる小賊が髮の初元結。諸軍勢の元服頭。大和淺黃に唐錦フシ花やかなりける出立なり。假御殿の幔幕より姫宮走り出で給ひ。詞なう〳〵國性爺に。此の旗は御身の父一官の旗印。地此の書付も一官の筆心元なき文言と。出し給へば床几を下つてスヱテ讀み上ぐる。我愁ひに明朝先帝の勅恩を報ぜんと。再び此の土に歸參し功もなくフシ譽もなし。老後の餘命幾許のコハリ樂をか期せん。今月今夜南京の城に向つて討死を遂げ。美名を和漢に留むる者なり。ナホス鄭芝龍老一官。行年七十三歲と。詞サア讀みも終らず國性爺すつくと立ち。敵に念なく入つて來た。地母の敵に父の敵。智略も入らず軍法も何かせん。方々は兎も角も身に迫るは國性爺。只一人南京の城に乘込み韃靼王李蹈天が首捻切り。父が最期の場を換へず。討死して父母が。冥途の旅を同道せん今生のお暇乞と。飛んで出づれば。詞兩大將袖に縋つてアア曲もなし。甘輝が爲には妻の敵舅の敵。吳三桂が爲にも妻の敵嬰兒の敵。チヽそれ〳〵何れも敵に輕めなし。天下の敵は三人一所。地サアこいと駈出づる。此の三人の太刀先には。如何なる天魔鬼神も面を。向くべき三重方もなし地鄭芝龍老一官。夕暮暗き黑革縅すすどけに出立ちて。南京城の外廓の大木戸叩いて。國性爺が父老一官と申す者。詞年寄膝骨弱つて人並の軍叶はず。さればとて若殿原の軍咄。安閑と聞いてもゐられず此の城内に推參して。速かに討死し素意を達したく候。地あはれ李蹈天出合ひ此の白髮首を取つてたべ。生前の情フシならんとぞ呼ばはりける。地城の中より六尺豐の大男優しゝ一官相手になつて取らせんと。木戸押開き切つてかゝる。心得たりと二打三打打つぞと見えしが。つゝと入つて首打落し大きに不興し大音上げ。詞一官年寄つた

れども斯樣の端武者に逢ふ首持たず。李蹈天出合はせよ外の者が出でたらば、何時までも此の通りと城を睨んで立つたりけり。韃靼大王壽陽門の櫓に顯れ出で、國性爺が爺老一官とは彼奴めよな。問ふべき仔細數多あり殺さずとも搦取つて引いて來れ。地承ると四五十人棒ずくめに取廻し。隙をあらせずめつた打ち捻伏せ〳〵縛り付け。城中さして引いて入る フシ無念といふも餘りあり。地程なく甘輝吳三桂國性爺を眞先に。大手の門に馳付くれば引續いて六萬騎。小蘇を後陣の大將にて今日を死戰と押寄せたり。國性爺下知をなし、未だ生死も知れず殊に此の南京城。四方に十二の大門三十六の小門あり。一方にても明いたる方より落失せんは必定。地四方に心を配つて討てと合圖に手を配り。鐘を叩き門の扉[illegible]天も傾く計りなり。地小蘇が勇む劒術の。牛若流の小太刀を以て一陣に進出で。相手選ばず時選ばず。所も選ばぬ此の若武者死にたい者で相手ぞと。思ふ樣に廣言し。多勢が中に割つて入り。火水を飛ばせて ヨ戰ひける。地賊兵數多討たるれども、七十萬騎立籠つたる南京城 フシ落つべき樣こそなかりけれ。地國性爺は如何にもして。父の生死を知るべしと駈廻つても詮方なく。陣頭に大音上げ。「我唐土へ渡つて五年の間。數ケ度の合戰終に無刀の軍をせず。今日珍しく劒の柄に手もかけまじ。馬上の達者劒術得物の韃靼勢。寄つて討てやと招きかくれば。地憎い廣言打殺せと。我も〳〵と喚いて蒐る。引寄せて劒捻取り叩き捻ぎ打ちみしやぎ。鉾薙刀もぎ取り〳〵。捻曲げ押曲げ折碎き。寄くる奴原頭に障れば蹈殺し。手に觸るを捻殺し。絞殺しては人礫。騎馬の武者は馬共に一つに摑んで手玉に上げ。四足を摑んで馬礫。人礫馬礫石の礫も打雜り。人間業とは 三重見えざりし 地さしもの韃靼攻寄せられ。すは落城と見えたる所に。一官を盾の表に縛り付け。韃靼王を先に立て李蹈天進出で。ヤア〳〵國性爺。汝日本の小國より出で。唐土の地を踏荒し數ケ所の城を切取り。剩へ大王の御座近く。今日の狼藉緩怠千萬。是によつて親一官を斯の如く召捕つたり。日本流に腹切るか但親子諸共。地直に日本に歸るに於ては一官を助くべし。承引なくばたつた今。目の前にて一官を引張切りにせん。兎角の返答はや申せと高聲に呼ばはれば。今迄勇む國性爺。ナヲはつとばかりに目も眩み力も落ちて打萎れ。地諸軍勢も氣を失ひ、陣中ひつそと靜まりけり。地一官齒噛みをなしヤイ國性爺。狼狽たか後れたか。七十に餘る此の一官命存へて何になる。母が最期の詞健氣なりとて。父にも語り吹聽せしを忘れしか。[illegible]せし一大事。此の[illegible]が一つに[illegible]て仕損ぜしといはれて。地末代の恥辱[illegible]の國に惡名止めんは日本の恥ならずや。三重

なれども汝が母は生れ故鄕を重んじ。日本の恥と云ふ字に命を捨てしを忘れしか。是程の手詰になり。此の親が目前に八つ裂にせらるゝとも。目もふらず飛びかゝつて本望遂げ。大明の御代になさんと思ふ根性は何處で失うた。エヽ未練なりあさましとスヱテ地蹈鞴踏んで制すれば。地國性爺父に恥しめられ思ひ切つて。大王目懸け飛んで出づれば李蹈天。父に劔を差當る。はつと氣も消え立留まり進み兼ねたるしどろ足。びつくともせぬ國性爺フシ前後にくれてぞ見えにける。詞甘輝吳三桂互にきつと目配せ。つゝと出で韃靼王の前に頭を下げ。斯まで仕畢せ候へども御運強き韃靼王。一官擒め取らるゝ事國性爺が運も是迄。末頼みなき大將我々兩人が命を助け給はらば。國性爺が首取つて差上げん 御誓言にて御返答承らんと。地いひも敢ぬに韃靼王。ヲヽ〳〵神妙々々といふ所を飛びかゝつてはつたと蹴倒し絞上ぐれば隙をあらせず國性爺。飛びかゝつて父が縛め捻切り捻切り。李蹈天を取つて押へ父を縛りし橋の面。まつ其の如く高手小手に縛りつけ。三人目と目を見合せて。アヽ嬉しやと喜ぶ聲フシ國中響くばかりなり。地諸軍勢勇みをなし太子姫宮御幸なし奉れば。御前にて彼奴原則ち罪科に行ふべし。詞東國とはいひながら韃靼國の王なれば縛りながら笞打ちして。本國へ送るべしと。地左右に分つて五百鞭。

半死半生フシ打ちすゑて引退けたり。地ナ是からが李蹈天元の起りの八逆五逆十惡人片身恨みのない様に。國性爺は首引拔かん。兩人は兩腕と三方に立ちかゝり。聲をかけて一時にゑいや。うんと引拔き捨て永曆皇帝御代萬歲。國安全と謌くも大日本の君が代の。神德武德聖德の。滿ちて盡きせぬ國繁昌民繁昌の惠みによつて。五穀豐饒に打續き萬々年とぞ祝ひける。

右此本者以太夫直傳寫
之頌句音節墨譜等不殘
毫厘令校合候畢尤加祕
密全令開版者也

竹本筑後掾

大阪 御堂筋 北久寶寺町 正本屋 九兵衛 版

鑓の權三重帷子

近松門左衛門作

ハルギンフシ君八千代國は。治まる御留守にも。弓馬嗜む梓弓 馬の。庭乗り遠乗りと。遙かに出でし フシ濱の宮。鳥居通の流鏑馬馬場。並木に落つる風の音とゞろ〳〵と フシ打つ波も。地乗分けつべき器量こそ。表小姓の數々の中にも笹野の權三とて。武藝の譽世の人に。鑓の權三は伊達者のどうでも權三は好い男。謠ひはやらす フシ美男草。地女若二つの戀草を飼ひに飼うたる月毛の駒。前輪取つて轡強く ギン雪嚙み碎く白泡に。三䑓よしや尾は青柳の。しつたりしたりした〳〵。かつし〳〵と フシ歩ます る。大坪流の鞍の内。稽古に心染手綱かいくりかいくり乗り拍子。はいとかけたる一聲に。轡口放す奴が髭も。共にはねたる驟足や下ナミ袴の裾に風受けて小波寄する須彌の褒しつ〳〵と。乗戻し引廻し乗る。袖摺の フシ紋も女松の十八公。其の年頃の振袖の東染模様替紋は。フシ 家中で誰の娘ぞや。地お乳母らしい千小風呂敷。權三見る目の綵薄ちらりほらりと馬の先よける。挨して邪魔をする。權三それぞと見し人の。フシ心に覺えあら駒も。色にそばへて足早き。はい〳〵聲をかごとにて。馬ぞ迷惑痴話の鞭打ちくれ。〳〵驅けさする。ハヅミ轡の音はりりん〳〵。泥障の音ははた〳〵〳〵。叩く嵐や ナホス馬場先の ハツミ榛の。笹原さら〳〵。さら〳〵さつと乘飛び。〳〵〳〵 フシ乘殺ばせ。蹄を陸地に着けばこそ。二町五反の馬場の内。息をもつかず半時ばかり達者を見せてぞ乘せめ馬の フシ鞍も鐙も。地汗になり乘り止むれば小者馬取。もうお仕舞かと走り寄る。ナホスヤイ丁稚。其の外汗に成つた。一走歸つて着替の袷持つて來い。地馬取ども共の間宮へ行て休息せい。ないといふより中間どもも休む方には フシ足早く。地立去る跡につる〳〵と立寄つて足の爪先。鐙共に確と取り。ハ久しうござんす權三樣。御無事で目出たう御座んする。これ見ぬ顔もよい加減にしたがよいぞや。可愛そに馬も骨折らせ。今日一時に稽古せねば叶はぬか。さ程私がいやならば最前から避けずとも。なぜ此の馬に踏殺させて下さんせぬ。エ、こな權はなう侍のぬけ〳〵と。地よう嘘を吐かしやんすと。睨む目の中おろ〳〵と コシ女は涙脆かりし。詞これお雪殿。人にこそよれ川側伴之丞殿の妹御。君傾城を誑るやうに權三が嘘を吐くものか。少しも心變らねども下々の奴等撒かうため。地中間め等が見付けうかと馬に乘る心もせず。氣が宙を[illegible]やうでこれ此の如く汗かいた。詞地體乳母

よい藝覺えて仕合と人をけなす口雜。權三氣立を能く知つて。ヲヽサ小身者の馬の手入飼をろくに飼はぬ故。見かけばかりで爰はの時の用に立たぬ。御身達は大身人手は多し飼は良し。すはといふ時騁強く歩み勝つはお身の馬。祕藏めされと言ひければ。ム、其の言分は先度二の丸櫻の馬場で。其の月毛に此の馬が歩み負けた當言な。サ一馬場せめて勝負せう。サア乘れ／＼と氣をせいたり。イヤサヽ心得たと言ひ度いが今迄乘つてお見やる通り。人馬共に草臥只今歸宅。重ねて／＼小者ども來いやいと。言へどもいつかな聞入れず。イヤ草臥とは負け用心。勝負せねば堪忍せぬと。手綱を操つて乘り出す權三も今は力なく。馬には一息つがせたり我が身の汗も入り方の。月毛の駒に標符繩寄の手綱操り控へ。繰り緩め左右に輪をかけ違へ。互に負けじと二三遍入れかへ／＼乘つたりしが。權三が馬は逸物の口を切つて角を入れ。ハウツとかけたる聲の内一散に駈出す。件之丞が栗毛馬鞭影に尻込して。打つでも引いてもしやくつても前膝かいて高嘶きし。躍上り跳上り鞍に溜らず件之丞。肩風返しにどうと落ち。木の根に腰骨打當てあいた／＼といふ聲に。馬取中間草履取主人の恥も打忘れ。一度にどつとぞ笑ひける。權三驚き飛んで下り怪我は無いかと立寄れば。こりや權三相手はお主が月毛馬。此方へ讓せ切つて乘つてる。馬を讓せあいた／＼。腰を撫め中間とも。うち寄も首が危いと。權三が方を尻目にかけ相手知れずの一人腹。權三もいはれぬ挨拶と身を控へて立つたる所に。運轉番の岩木忠太兵衞。六十八でも生得堅き赤銅月代剃り立てて。ヤ御兩人是にか。御宅へも參るべきによい所で御意得た。東御家老衆より御狀到來。此の度若殿御祝言相濟みお悦び。お國に於て當月下旬近國の御一門方御振舞。御馳走のため眞の臺子の茶の湯なさるべしとの事。是によつて我等が聟淺香市之進も留守なれば。御家中弟子衆の中眞の臺子傳授の方へ。御廣間本式の飾物等勤めさせ申せと。御留守御家老衆より仰付けらるゝとは申せども。誰方が傳授なされたも存ぜぬ故御尋ね申す。此の度の御用に立てば第一は御奉公。其の身の手柄聟の市之進も本望。何と御兩人聞覺えもあつて茶の湯の名を取らうなら。此の度なりとぞ語りける。我慢者の件之丞。ハア、眞の臺子易い事。傳授許しは受けれども。祕事は如何でもない事。色々我等存じて居る。數年の稽古は此の度御用は拙者承る。心易う思召せ。それは先づ珍重權三殿は御存じないか。されば存じたとも申されず存ぜぬとも申されぬ。總じて是は茶の湯の極意。家々の傳多けれども師匠市之進一流は。東山殿より嫡傳。一子相傳の大事なれば。權三體が茶の湯で傳授許し受けう筈も御座らねども。師匠の咄聞きはつつた儀もあり。大

概非の入らぬ程の御用の間には合せませうと。詞の中より伴之丞。ハテ詞斯程大事の晴の御用。間に合せで濟む物か。此の御用は伴之丞が一人して勤むる。地忠太殿其の通り心得召されと言ひければ。詞いや我一人のまゝにもならず。娘ながらも市之進女房彼が所存もあるべき事。假初ならぬ眞の臺子の傳授事。誤り有つては殿の恥諸事談合づくがよい筈。サア地御兩人御歸りかいさ御同道致さうか。兎も角もと伴之丞殿むがく〳〵腰を引く。地忠太兵衛面憎く。詞此方は腰をお引きなさるゝが疝氣でも起つたか。されば〳〵拙者程の馬の名人なれども。龍の駒にもけつまづき。馬から落ちて落馬致したと。地片言やら重言やら忠太兵衛可笑しさ。彼奴嬲つてやらんと思ひ。詞馬から落ちて落馬したとはいかう念が入つた落馬。痛むが道理何方も落馬が流行やら。生駒新五左が瘧も。妙藥一服でかげもさゝず落馬致す。我等は今朝他所へ参り。大事の精進をつひ落馬致した。地此の樣に落馬の流行る時。むさといひ分などなさるゝな。首が落馬致さうぞと。詞口いふも茶の湯者を鼻に。持つたる身〳〵の習ひ。フシ昨日は今日の。初昔世の口に合ふ茶の名所。人は氏より育ちかや。淺香市之進の留守の宿。おさゐは流石茶人の妻。地物數寄もよく氣も伊達に三人の子の親でも。華奢骨細の生れ付き風しのばしくゆかしくの。フシ三十七とは見えざりし。地數寄屋廻りの掃き拭ひ下女中間にもいろはせず。茶筅さぬ綺麗ずき路次の飛石敷松葉。石燈籠は苔蒸して。巖となれる手水鉢植込の。ウタヒ木の下蔭の落葉かくなる迄夫婦存らへて。子供の末を高砂の。松のナホス榮えやフシ断ろらん。地中息子虎次郎棒竹横たへ。年季の角介杖提げ路次の中に走り入り。ウタヒ景清是を見て。物々しやと夕日影に。打物閃かいて切つて懸れば怺へずして。双向いたる兵は四方へばつとぞ逃げにけるゑいやつとう。フシ〳〵とぞ打合ひける。詞ヤイ〳〵〳〵。傍輩にあがけよ其處なぬく奴。見事男の數に入りながら江戸の供さへ得仕をらず。少い子を相手にして。怪我でもさするお數寄屋の壁に。疵でも付いたら何とする。これ虎次郎。其の母親を相手にして日がな一日[illegible]あがき。一々に衣に付け父様お歸りなされたら。地きつと告げる待つてゐや、叱られていや付け。惡あがきはしませぬ。私は侍ぢや[illegible]ひ習ひます。これなう、共方ももう十ぢや。其の合點が行かぬか。侍は侍知れた事、さりながら父様を見すいの。御前もよく御加増迄下された。武藝は侍の役珍しからぬ。茶の湯が上手になさるゝ故。人の用ひ奔走もある。少い時から茶杓の持ちやう。茶巾さばきも習うて置きや。長々の留守の中。子供が惡う育つたと言はれては。詞母が浮名も恥かしい男の子は男の手。祖父様へ行て大學でも讀み習や。馬鹿よ地供して暮方に連れて戻れと。内外迄に氣を

配る。留守こそ心つくしなれ。お菊はさすが姉だけの。「母様いかいお世話。些とお休みと差出す。海老茶茶碗の音羽山おとなくれたる摂を見て。ア、孝行なよういやつた。おとなしう成りやつた。妹のおすては乳母と遊びに出たさうな。行水も仕舞うてお此の髪は誰が結うた。まんが細工と見えたり。髷がまちつと下つた額もけんで愛想が無い。髱の出しやう髪付で能うも悪うも見せるもの。顔の道具相應に眉が女子の大事の物。前髪もおうではない母が直してやりましよと。開く櫛箱鏡臺の。此の鏡より世の中は人こそ人の鑑なれ。人の摂見て我が摂の。善きも悪しきも身の手本。繪に書く筆のすさみには。京や大阪の上臈も。心で見れば今姿に吉野。初瀬の。花も見る。東御持つての朝寝髪。湯上り顔や洗ひ髪。人にな見せそ亂れ髪。寝亂髪の枕にも。寝顔は猶も。慎しや。容儀は生れ付なれば只嗜みは黒髪の。めでたからんこそ。女はめやすかるべしと徒然草にもあるといの。兎角女子は髪かたち千筋と撫づる櫛の歯に。身持行儀の解きほどき子を思ふ手につや〳〵と。見かはす程に見えければ。それの。格別よい子になりやつた嘘ならその鏡見や。親の目は贔屓目他人が證據まん来いよ。顔拭きの杉もちやつと来て。お菊が髪つき見てくれい。あい〳〵と走り出で是は〳〵。奥様いかいお上手額つき髪つきで。下地のよいお顔が猶美しうならしやんして。女子でさへ辛氣が湧く裸身をむつくりと。抱いて寝たいと褒むるもあまり杉がにたと手を打つて。ア、さうちや。日頃の不審が今晴れた。私が鏡で顔を見て木地は随分上げれども。人が惚れぬ異な事と思うたが。髪の結ひやうばつかりであつたら此の身が埋木ちや。慮外ながら奥様の手に二三日かゝつたら。お國中の男は秋風に薄の穂。靡けてやろとぞさゝめきける。親の子を褒むるはいやらしけれど。此のやうな娘を大兵の男に添はせるは妬ましい。常々つくづく思ふには。御家中にて聟を取らば。表小姓の笹野權三様に添はせたい。器量はお家一番武藝ようて茶の湯も。弟子衆に精くはたない。そして氣立といふものが萬人にも憎まれぬ。いとしらしい氣質。男の生際生締といへばお菊は聟殿の。申しかゝ樣。權三様は大人で叔父様のやうにあらう。わしやいや〳〵と頭振る。ア、わけもない母は三十七の酉。父様は一巡上の酉で四十九。これ十二違うても夫婦我が身位のやうな子を持つた。權三様は一廻り下の酉で二十五。其方は酉で十三。十二の違ひは恰度よい似合ひ頃。まあ二三年して祝言も直し鍋つめたらしつくりの其[illegible]ほんに四人酉の年是も不思議。權三様は[illegible]殿御に持ちや。其方がいやなら母が男に持つぞや。ほんに市之進殿といふ男持たねば。人手に渡す權三様ぢやないわいのと。

子を寵愛の隙立無く。時の座興の深戯も過去の フシ悪世の縁ならめ。地サア此の上に衣裳着せ變へ化粧させて見せうぞと。娘自慢の鼻脂 ウ手を引き／＼奥にぞ フシ入りにける。地玄關に物まう。茶の間のまんがどれいと應へ出迎へば。笹野權三樣存たせ。詞岩木忠太兵衛殿は是に御座らぬか。ア、毎日御見舞なさるれど今日はまだ見えませぬ。ム、然らば奥樣へ申してくりやれ。此の中は御無沙汰。御留守何事なく珍重に存じまする。ちと申したき事御座れども。委細は忠太殿迄申し入れませう。此の一樽は上方の名酒。幼い方のお慰お見舞の印と。お序に申してくりやれと。地言ひ置き歸ればア、申し先づ暫くと走り入る。女房はや立聞いて。御口上聞いた／＼。待受けたやうな事苦しうない。お通りなされと申しませと。楊筒鏡臺片付けて塵掃く羽根の二つ羽も。比翼の悪縁底深き。笹の權三は遠慮ながら フシ常の居間にぞ通りける。詞是はようこそお見舞と申し子供方へとお心つき。珍しい御持參折々玄關迄お出で下されても。態とお目にかゝる事もなし。地して御用とは何事か親忠太兵衛迄もなく、直にお話遊ばせと隔てぬ挨拶まめやかなり。權三手を突き御親切忝し。忠太兵衛殿か御舍弟甚平殿を以て申す筈。近頃慮忽の願ひながら。今度御祝言お振舞の御馳走。眞の臺子の飾市之進弟子中との御仰渡し。常々市之進殿お物語一通りは聞覺え。未だ指圖繪圖の卷物。傳授口傳許し印可を受けされば。押放して眞の臺子覺えたとは申されず。天下泰平長久の御代。斯様の事を勤めねば武士の奉公秀で難し。地數年の懸望今度の大願。卷物拜見を許されば。生々世々の御厚恩と額を疊に押下げて。フシ師弟の禮儀見えければ。詞扨も扨も御熱心御奇特な御心入れ。此の傳授は一子相傳にて我が子の外へは傳へられず。のがれぬ弟子は親子の契約あつての上。繪圖卷物も渡す事。詞それにつき序がましい近頃粗相な。詞から棒と申さうお寢耳に水と申さうか。思召も如何なれど。折がな／＼と豫々心にこめし故申出して見まする。姉娘のお菊を。こな樣へ進ぜたいと常々私が望み。今も今とてお噂申せし折柄。から申せばどうやら臺子の傳授と換へ／＼にするやうで。娘の威も落ち大事の傳授の詮もなし。それはそれ。是は是の談合で。菊を其方へ進ずれば聟は子の相傳。詞市之進聞かれて滿足第一私が想聟。押し出してよい女房といふには限りのない事。先づ十拜目鼻揃うた秘藏娘。添はるゝ殿御はこな樣除けて外にない。詞なんと合點して下さんすかと。言へども恥かしげに差俯向いて返事せず。サアどうでござんすぞ。ハテなんの是が恥しい。扨は娘がお氣に入らぬか。ムウ頭振らしやんすは否でもない。ニ、知れた。疾うから外に約束があるさうな。さうぢや／＼主ある花は是非がない。あつたら男に戀がさめたと。立退けば。ア、是は

ある。お子達方もあるからは。賽金出して御祈禱さへなさる、じやござらぬか。人の爲の善い事は山伏入らずの御祈禱。首尾よう相濟み相應のお禮。そこは乳母が呑込んだ此方も背は盗むまい。表面ばかりの取繕び偏に賴み上げまする。始めての長口上ホ、ホ、〳〵アウおはもじやとしやべりける。是なう。其方の心に長ければ聞く耳には猶長い。此方の奥樣は。禮物取つて評議する奥樣ぢやござらぬ。殊に酉のお年で此方のやうな長鳴きが忌み事ぢや。早う往んで下されと愛想なければ手持惡く。ム、ウ私は戌で丁六十。鎭頭へ歩いて。棒に當らぬ先に。長吠せずと往にましよと迯吠。してぞ歸りける。奥には得手に。法界悋氣瞋恚の怒綱切れて。鬱め兼ねたる折節。父岩木忠太兵衛。只今是へと若黨先へ告げければ。家內恐れ鎭まりて。おさゐも可笑しからねども。親に愛想の笑ひ顏。ヲ、市之進の留守皆機嫌ようて滿足。虎やすてめが能く遊んで。昔寢をせず睡たい。歸つて早う寢たいというて。連立つて歸つた。夜が短い。早く寢せて貰く起し貰おがかせたが萬病圓。姉は奥にか。娘の子は十三四から端近く出されがよい。姉やすてめはお身に似たか。虎めは市之進に生寫し。こりや。市之進江戸より歸つたというて。母が側へちやつと行けと。孫寵愛の戯れ。ヲ、久しう遊びやつた。祖父樣祖母樣やかましからう。奥へいて姉と並んで寢ねしやや。乳母よ寢冷させまいぞ。ヤい角介。戻つたら何故石燈籠に火は點さぬ。日が暮れたお目に見えぬか。女子とも。祖父樣のお慰み今の名酒をちと上げませともてなせば。いや〳〵名酒より何より數寄屋の庭。毎日見ても見飽かぬ。市之進の物好心が伸びて面白い。ヤ倂て內意噺した爺の權三。娘の藤子の願ひにはわせなんだか。如何にも懇望なされし故。卷物渡す約束に極めました。出來た〳〵。若い和郎の奇特な。諸藝の心掛賴もしい。仕損じあれば市之進の誤り殿の恥辱。秘傳讀さず傳授めさ。さり乍ら家の大事譯知らぬ下々にも。一言一句聞かせまい隱密々々。更けぬ先に歸らう提灯とぼせ。皆宵から休ませ夜番に留守を申付きやれ。又明日見舞申さう。ヤイ角介。男といふは汝一人。門背戸に氣を付けい。何をいうても昔でも鼾角介だと。老の戯言夕闇に。歸れば跡は。門の戸を。さすが數寄者の庭の面。若葉の木立物ふりて。踏石ほの暗き燈籠の。火かげ宿借る熊笹の露は螢か蛙の聲の啼く。茅屋が軒に音づれて。しよろ〳〵流れ水の音。夜もしん〳〵と更けにけり。おさゐは縁先に案內は寢入りほつしりと。何を思ふと詰め手の無きが我が家の取得にて。淚も袖に落ち次第。エ、思案する程なましい。大抵の男を可愛い娘に添はせうか。我が身が連添ふ心にて吟味に吟味。思ひ込うだ稀男なれ

嘆きに來る其の覺えがごさんすの。是は迷惑左樣の覺え微塵もない。いやあるいやある。媒が口を添へればつい埒の明く樣に。内證しやんとしめてある。エ、〳〵〳〵女の身の果報さには。表面ばかりに目がくれて、胸の中を知らなんだとわつとばかりの。、腹立涙。是皆からくら〳〵燃え返るを。姑が浮の惡氣と浮名がいやさに笑顔作つて、塞へ貰ふつつりと緒が切れた。是見よがしの其の帶は定紋の三つ引と裏菊と。小むしたゝるい引ん並べ誰が縫うた。誰がやつた。噛み斷つて退けうと飛びかゝり武者振り付く。ハテ此の帶には樣子がある。ヲ、樣子が無うては。樣子といふが妬ましい互に泣くやら叩くやら。帶ぐる〳〵と引つ解き疊かけて擲り。打ちヱ、嫁らし手が穢れたと。手繰つて庭にひらりと投げ。拾へといはぬばかりなる思ひの闇ぞ詮方なき。二人の影はばら〳〵髮如何にしても此の態。帶解いても居られずと庭に出でんとする所を。ア、〳〵帶に名殘惜しいか。不承ながら此の帶なされ。一念の蛇と喰つて腰に卷付き離れぬと引つ解いて投出す。權三餘りにむつとして二重廻りの女帶。致した事御座らぬと。同じく庭に投出す。すかさず拾ひ伴之丞聲を立て。市之進女房笹野權三不義の密通數寄屋の床入。二人が帶を證據。岩木忠太兵衛に知らすると言ひ捨て拔けて出づる聲。南無三寶伴之丞め矢八幡遁さじと。刀引ん拔き障子蹴破り飛んで出で。覺範の火の影うすく。探し廻ればは波介が狼狽へ廻るをしつかと捉へ。伴之丞は何とした。私を捨てて出られた。エせめて汝を冥途の供と。肝の束をぐいぐい〳〵。挾ればぎやつとばかりにて二刀にぞ止りける。直に逆手に取直し左手の小脇に突つ込む所を。おさゐ縋つてこりやどうぞ。不義者は伴之丞。身に曇りないお前が何の誤り死なうとは。ア、愚かなな。二人が帶を證據に取られ。寢亂髮の此の態。誰に何と言譯せん。もう伴が顯つた此方も人畜の身となつた。エ、〳〵無念やと泣きければ。親はお前も私も人間外れの畜生に成つたか。如何なる佛罰三寶の冥加には盡果てた。あさましい身に成り果てたか。はあつとばかりにどうと伏し消え入る。樣に歎きしが。エ、是非もない。最早や此の二人は生きても死んでも廢つた身。東に御座る市之進殿女房を盗まれたと。後指を指れては。御奉公は愚か。人に面は合されまい。とても死ぬべき命なり只今二人が間男と。いふ不義者に成り極めて。市之進に討たれて男の一分。立てて進ぜて下されたら。なう忝なからうと又伏し沈むばかりなり。いや是不義者にならず此の儘で討たれても。市之進殿の一分立て。死後に我々曇りない名を擧げば。二人共に一分立つ。如何にしても間男に成り極るは口惜しい。ヲ、いとしや口惜しいは尤なれど。跡に我々名を清めては。市之進は

女敵を討誤り。二度の恥といふもの。不承ながら今愛で女房ぢや夫ぢやと。一言いうて下され思はぬ難に名を流し。命を果すお前もいとしいはいとしいが。三人の子をなした。廿年の馴染には。わしや換へぬぞと わつとばかり歎き。くづをれ見えければ。権三も無念の男泣き。五臓六腑を吐出し 鐵の熱湯が。喉を通る苦しみより主のある女房を。我が女房といふ苦患百倍千倍無念ながら。かう成り下つた武運のつき是非がない。権三が女房。お前は夫。エ、く\/\ いま\/\しいと縋り合ひ 泣くより。外の事ぞなき。サア 家門の目の醒めぬ中夜も短し。はや立退かんと引つ立つれば。可愛や三人の子供が。母が今此の態で。住馴れた屋敷を退くとも知らず。何事か夢に見てすや\/寝入る寝顔に。暇乞をと泣きければ。エ、 未練な市之進に首尾よう討たるゝよい。未練の願ひ何があると。引立て門を明けんとすれば。門外に提灯人足扉ぐわた\/\大音あげ。岩木甚平 笹野権三に逢ひに來た。誰も臥さつてけつかるか明けよ\/\と呼ばはつたり。ハア、悲しや弟の甚平門からは出られぬ。裏門はなし塀高し飛んづ押しつうろつく間に。家内は起きる門は叩く前後に目をつく茨垣。ヤア 悪人めが狐穴我が身に締の御利生と。二人手を組む生死の巻命の境四斗樽に。六道四生ぎつと詰つて動かれず。跡へも先へも酒樽と。共に逆様さかとんぶりころ\/\頭は轆轤。時は夜明の七つ頭。二つ頭に足四本。胴は一つの酒樽にあ。ゆむ無明の酒の酔。是ぞ冥途に通ひ樽。契りは偕老同穴と一つ棺に一つ穴。どこぞに埋んで桶の輪かと言はねど。物がいはせたる。

権三おさゐ道行　下巻

鑓の権三は伊達者でござる。油壺から出す様な 男。しんとんとろりと見とれる男。どうでも権三は好い男。花の枝からこぼれる男。しんとんとろりと見とれる男。いとしい男。戀ひ慕はれし。二挺の弓の本弭の放さぬ先に弦斷れて。引かれぬ方に引かれ行く 一人\/\留守宿の。床の内。心も澄みて目も冴えて。辛氣々々の空悋氣。つひに我が身の あだし草。世の譏り草。浮草に。淺香の水の濡れそめて まどひては。故郷忘れぬ 二人が涙。湧きて出石の山はあれど 戀の。病は驗なき。但馬の湯桁數ふれば。我とそもじは五つと七つ十二違ひの月更けて姉とも言はゞ岩枕。交す枕が思はくも。影はづかしや 野邊の草。其方は人の女郎花。俺が口から女房とは。身の恥曝しいたづらに。染めぬ浮名の村濃の濡れ。泣くこそ哀れなれ。ふり上げ見れば源の。鬼神退治の大江山峯は青葉に包まれて。谷も尾上も。しん\/\と山の。猿さへ愛想なくくすみ切りたる。松の下蔭。藪の小蔭の一在所。あれ\/\\/\\/\寒搗く唐碓の音か。一

十ばかりで齒黑振袖それでも戀の一節や。閨
歌へ大工どのよりナウ。かぢやが憎い。閨の掛金鍛冶がうつションガヘ。なう鍛冶がうつ。閨の掛金鍛冶がうつションガヘ。なう掛金の。關の鎖の　フシ解けそめて。迷ひそめしは誰ゆゑぞ。若い殿御を我ゆゑに。くづをれ姿二腰のその一腰は道芝の露の。價と消え果てて。一本薄刈り殘す。腰の廻りは秋の暮。さびしや悲しいとほしと　フシ抱き合ひては泣くばかり。ハルフシ國に親と子。東に夫思ひは千筋百筋の。我は涙の麻桛繰る　キンハルフシ眞苧を繰るとや。世の噂手でせきかぬる。フシ川水に。洗ふ帷子播磨潟。ろくに寢ぬ夜の目もとほ〳〵と　カヽリ埃。まぶれの髮かたち。鹽燒く浦の海士にも劣る。山田島の　歌烏威しさりとは烏威し。粟の鶉や澤田の田鶴。ひよ〳〵と。鳴くは鴇小池に棲むは鴛鴦。鴛鴦の。しかも孀の夫の　ナホスフシ留守もり。男鰥の憂き住居。鳥の上にも歎かれて。フシいよ〳〵と涙の種ぞかし。跡にゆふ立つむら〳〵雲にさつと吹き來る。風の音野邊の。薄のそよぎ迄。我を追來る追手かと。歌露の笹原ヤツトン〳〵。連立ち走る踏分け走る。礒の千鳥をほつかけて。キン石突摑んでずんずと伸しやる〳〵サアゑいさつさ。ゑいさゑいさゑいハルフシ笹葉の槍の穗先に。ハルフシ外す小鳥も。無かりしに今は羽風も恐ろしく。舟は乘合人目せく徒歩路。急げどはか行かず。何をしるべに難波津の名は住吉も住みうしと。世の憂きふしの伏見山　キン樂めぬ袂も捨つる身は。心ばかりを墨染の里に。忍びて三重へ送りける。

フシハルさりともと。地昔は末も賴まれき。老は憂き身の限りぞと古歌の詞も思ひ知る。岩木忠太兵衛玄關前。淺香市之進方より。小袖簞笥挾箱葛籠長持。其の外嫁入道具一式積重ね。不義人の諸道具。フシ返納と呼ばはり散して歸りけり。地母は持病の血の道におさゐが事の其の日より。癪に搭に胸痛みいとど枕も上らぬに。詞なんぢや道具が戻つた。地聟とも孫とも緣切れたか情なやとよろぼひ出で。なう聞く事も見る事も悲しい事ばつかりと。葛籠にかつぱと抱き付きスヱテ絕え入るばかりに見えけるが。地如何なる天魔の障碍ぞや此のやうな事仕出す。さもしい氣は微塵もなく。眞正者の孝行者子も尋常に育てて。詞か〻樣聞いて下され私は娘もたんと持つ。嫁入の時の諸道具を一色も散さず。子供躾ける便に。小身の我が夫に餘り苦にかけともないと。いふ詞が違ふにこそ。地廿年になる道具古びもせず持ちなす此の心で。そもや惡事をなんのせう。物の魅入か報いかと　フシ又口說き立て泣きけるが。市之進の身に成つては口惜しい筈なれど。餘りにこれはつれない子供に讓つてくれもせず。見苦しい門に積ませて我が子の恥は思はずか。詞ヤイ中間ども下女どもよ餘り人の見ぬ中。地はやはや內へ運んでくれと。歎きあせれば忠太兵

術。これ〱お婆。聞いてゐればぐどぐどと何をごくにも立たぬ事。市之進には誤無い男一所に討つて棄てる。女の諸道具市之進が留めて何にせう。人間外れの女穢れし道具武士の家が穢るゝ。中間ども片端に叩き割り火をつけて燒いて了へ。畏つたと棒さい槌鋤鍬鉞提げ〱立ちかゝる。母は堪へ兼ね手を廣げ待つてくれ〱。なう祖父樣道具惜しうはないけれども。今生でも來世でもおさゐが顏はもう見られぬ。手に觸れた道具せめて一色は老の形見に殘したし。屋敷を壓落する時も唐高麗に居るとても。さぞ忘れぬは子供が事常々やり度いやり度いと。思ひし念も不便なり。一色づつも殘して子供に取らせて下されと。葛籠引寄せ簞笥に縋り聞え悲しみ泣きければ。これお婆。今是が悲しいとは。お身も我もま一度大きな悲しみ聞かねばならぬ。其の時二人は何とせう。年寄つては憂き事を聞くが役と覺悟して。ぢつと涙を堪忍めさ。身も堪忍々々と一途に堅き國武士の咽に涙ぞつまりける。何と思案して見ても此の道具受取つては。傍輩中の思はく他國の聞え。若黨中間ども煙高いは憚り。一色づつ取分け燒いて棄ていと言ひ付けられ。迷惑ながら主命葛籠簞笥挾箱引散らし打碎き。海士の焚火と燃え上り。煙に見えぬ俤に母は消も身を悶え。可愛やおさゐが嫁入の時。まあ爰で門火を焚き。千秋萬歳と祝ひし其の道具。門火の跡で灰となす母が身體諸共に。薪となしてくれぬかと。歎を見ては下女下婢。若黨小者に至る迄皆々袖をぞ絞りける。殘つたは長持一つ取分けて燃せと。開く二人の孫娘姉妹抱合ひ泣きゐたり。祖父も祖母も夢心地やれ〱危なや命冥加な孫どもや。若し火を付けたらよいものか。堅い父御の言ひ付けか何故に聲を立てなんだ。器用に生れ付いたよな。花紅葉のやうた子供を。母めはようも見捨てたと嘆き。撫でて泣きければ。おすては何の頑是なく母樣に逢ひ度い。母樣呼うでと泣くばかり。姉のお菊はおとなしく。父樣は母樣を斷りに行くと仰しやる。祖父樣祖母樣頼みます。代りに私を殺して母樣助けて下されと。父樣に詫言をと膝に凭れ伏しければ。ヲヽよう言うた母はさ程に思ふまい。虎次郎はなぜ越されぬ。娘を母に付けるは離別の作法。こちに隔ての心はない。孫三人を朝夕に見たらば憂さも紛れうもの。此の子は父御の四十二の二つ子にて母がお捨と付けたが。今は父母兄弟が世の捨者に成つたかと。口說き繰言身も萎れ。枯木のやうなる祖父の顏涙に分ちなかりけり。泣くな〱大事ない。なんぼ母めが捨てても祖父や婆が可愛がる。甚平といふ叔父がある。サア來い〱と手を引いて。泣く〱奥にぞ入りにける。茶筅髮。いひがひもなき身なれども。武道を磨く霰釜。たぎる心は運次第。淺香市之進歸

國を直に門出と。三人の子を片付けて　フシ氣は廣けれど。先づ暫し。フシお國の内は憚りの。笠深々と舅の門。今迄とは事變り案内なしも無禮なり。物もうも角だつ。詞乞一禮のつてもがなと玄關見入り立つたる所に。舅忠太兵衞痩骨高く引つ提げ。鍋の鉉捩り反りに反つたる朱鞘ぼつ込み。一文字に駈出づる。ア、申し〳〵と袖引留め笠取つて捨てければ。詞ヤア市之進今朝は畜生めが諸道具。孫娘二人受取り申した。旅出立は暇乞と見えた。お出過分　地追付け吉左右待ち申すと言ひ捨てて駈出づるいや申し。詞御顏色も常ならず氣遣千萬。巨細承り届くる迄は慮外ながら放しませぬ。なう市之進御自分江戸より下着の節。娘さゐめが提首をお目にかけいで口惜しい。悴甚平は其の日より尋ねに出る。年寄つても忠太兵衞腰膝立たぬ身ではなし。刀の刃に血も付けず高枕でも寐されず。一人物にも狂はれず。相手がなと存ずるに。最初不義の諚據を取つて我等にも匂らせ。國中に沙汰をした事顯れは川側伴之丞。詞彼奴を斬つて老後の思ひ出お放しやれと駈出づる。ア、これ〳〵。詞御心外尤乍ら御老人の腕先。萬一伴之丞に討たれさつしやれば。此の市之進先づ女敵を差措き。舅の敵を討たねば叶はず。取交ぜ迷惑は拙者一人。平に〳〵御料簡。詞御厚恩に受けますると差俯向けば。なうこれ市之進。詞斯程根性の腐つた女房の親でも。忠太兵衞が討たるれば舅の敵を討つ氣よな。是は曲もないお尋ね。たとへ女は畜類に成りたりとも。舅は舅に極つた忠太兵衞殿。敵があらば討たいでは。そりやお尋ねに及ばぬ事。市之進ア、御心底　地身に餘り忝いと。大地にどうと老體の跪きたる感涙に。市之進も是はと手を束ね。涙にくれし聟舅　フシ武家の道こそ正しけれ。サア〳〵婆にも逢うて暇乞の盃。兄弟の娘ま一度顏も見たからう。詞草鞋がけの體態と奥へは申さぬ。やい〳〵市之進のお出で皆來いやいと呼ばはれば。ヤ申し少い奴らによく申し付けたが何と吠えは致さぬかな。イヤ〳〵器用者ども　地そこは氣遣ひめさるなと。フシ玄關に坐しければ。フシ母は二人の。孫娘。左右に具して立出づる。長地中に盃酒肴盆正月の節振舞。三人の子の誕生日一家寄合ふ祝ひ日の。座敷は座敷に變らねど。揃はぬ者は人の數。五人顏を見合せて物をば言はぬ目禮に。涙嚙む顏付は逆剛ぶより哀にて。酌取る下女が袂迄　フシこぼさぬ酒に絞りけり。詞母は涙の堪へ精盡き果ててわつと泣き。可愛や此の子供が父御の言付覺えてか。目に涙は持ちながらおとなしいを見るにつけ。あの業人の畜生の人でなしの腹から。此のやうな器用な子を何として生み出した。人並の根性さげてくれたらば。母も子も揃うたれ。忠太兵衞夫婦は子も孫も生み揃へた。手柄者といはせぬか。詞娘の子は母方づきと二人ばかり遂つて。虎を殘して下さるは。地岩木

手箱にて見付け。地彼奴も一刀と思へども一時には手に及ばず。先づ是は後日の沙汰と言はせもあへずそれ／＼＼／＼。詞鼻の先に置きながら二人の敵は手が屆かず。初日の敵後日の敵といふ分ちは知らず。助太刀頼まぬといふ市之進の女敵一人は。地岩木甚平が助太刀討つたお見やれと。腰兵糧の器物引つちぎり。押開けば伴之丞が首。フシ洗ひ立てゝぞ持つたりける。地市之進是はと手を打てば舅夫婦大きに悦び。金輪際の敵憎しといふは彼奴が事。詞但し御扶持人上へは何と許へた。いや許へるに及ばず彼も身の蜂拂ひかね。お暇申し捨て駈落致す所を。因州境にて思ひの儘に討取りました。手柄々々なう市之進。敵討の門出に是程の吉左右あるべきか。忠太兵衛が指圖甚平を連れられい。尤いふに及ばぬ事助太刀して本討手の名に疵つけな。地畏つたお暇と立出でんとする所に。十ばかりなる旅人の門柱に陰隱れ。奥を覗いてちらめくを。市之進きつと見やり心得ずと走り出づれば。中息子の虎次郎凛々しげなる旅裝束。詞汝この態は何處へ行く心入れ。小癪者めと小腕取つて引出す。イヤとゝ様の供して行く。姉様おすては女子なり。私は男敵討つ親を一人やるは武士でないと。地先に立つて走り出づるを引止め。詞報は汝を生んだ母親を斬る心か。かゝ様なんの斬るものぞ。かか様を連れていた權三めを切つてくれる。地どうでも行くと意地張つたり。詞やい惡い合點。叔父様も父様も出て行けば。祖父様祖母様御年寄姉やすては女郎の子。そちを後に殘すは若し權三めが來た時。斬らせうと思ふ用心。隨分休齋に茶の湯を習ひ。時々これへお見舞申し。お二人へ孝行兄弟どもに氣を付け。權三めが來たらば切つて捨てい但し一人殘るが怖くば。地連れて行かんと宥めたらせば。詞如何にも一人殘りましよ。跡の事氣遣せず。必ず手柄遊ばせと地聞分けのよき利發者。舅夫婦は目もくれて女子男打揃ひ。すぐつたやうな子供の成人。見たい心もなき母めは如何なる畜生ぞや。不便とも思はぬ。斬るなりとも突きなりともやがて本望々々と。スヱテ涙ながらの フシ暇乞ひ。地兄弟三人膝々に。權三めは斬殺し。母様は息災で連れて戻つて下されさらば。〳〵とつ様と言へども父はさらばとも。言はんとすれば目もくれて胸に。八色の雲閉づる故郷。離れて三重へ別れ行く。

ハルフシ月に誰。寢て見よとてや伏見とは。船に寄せたる里の名の。橋の夕暮來て見れば。本フシ涼しくの文字かたどりて。京を持ちたる京橋に。一ツ流れの御祓川末吹く風も。フシ秋涼しき。權三おさゐは。三日とも。同じ所に足止めて。長地あるにゐられぬ梓弓伏見に暫し墨染の秋の櫻か入相も。明日をば知らず一日の命。命と聞き捨てて。スヱテ難波の方に思ひ立ち。キン人目を忍ぶ乘合に。空居睡の船漕げば。傍に茶船を漕ぎつ

れて温飩蕎麥切。フシきり〳〵と押廻し。地豆腐奈良茶と茶を賣るも。宇治の川水落ち添ひて ギン昔を胸に涙ぐむ フシ女。心ぞ哀れなる。地市之進は御幸の宮甚平は三栖の里。毎日そんじようそこ〳〵と。相圖をしめて甚平一人。京橋の夕日影船どもを見廻し。詞ずんど早う出る船があらば。地乘り度いと。乘手に目をつけ見廻せば。詞早いが好きなら此の船。初夜が鳴ると出します。おういから狹さうな。狹い事は御座らぬ。若い旦那殿とおか樣と苫の蔭に屈んでぢや。あの側が廣いあそこに置きませう。イヤ居所はどうなりとしてゐようが。初夜といふてはもう遲い。明日の晝船に致さう。そんなら勝手。船はこつちの。乘る身はそつちの。地強ひはせぬといふ中に船中とつくと見廻し。顏は見えねど十が十是に極つたと。嬉しさ足も飛上れど。苫の蔭より見付くるかと。態とゆる〳〵橋の上。涼む顏して二三遍心祝ひの神の鬮。市之進が旅宿へと フシ足を飛ばせて走りける。地苫押除けて 詞ハツア大事の物忘れたコレ船頭殿。こち二人は上げて貰を。人に賴まれた大事の買物銀まで受取り。乘急ぎするとてとんと忘れた上げてたもれ。してそれは何處迄買ひに行かつしやる。ヲ、あれは。何とやらいふ町ぢや。ヲ、。それ〳〵。撞木町のあちら。藤の森の先ぢや。ハア此方も餘程の事いうたがよい。爰からなんぼあると思はしやる一里半ござる。其の中に舟は出てしまふ。地上げる事は成りませぬと フシ情もなげに取合はず。詞イヤ遲くば構はずとも出してたもれ。地二人分の運賃は拂うて上る。平に賴むと北南の見世先。橋の上に目を放さず。詞爰な旦那殿はうろ〳〵と詰らぬ事をいふ人ぢや。乘せもせぬ運賃取つては一分立たぬ。矢張り乘りてござれ。それは慘い船頭殿。今のやうに跡から乘手もあれば狹うなる。平に上げて下され賴みますると詫びければ。狹い事氣遣ひして下されな。明日の朝大阪迄。滿足に屆けりやよい。地今宵一夜はおか樣も胴切にして。旦那殿もこま〴〵に刻んで片付けて乘せまする。そこらは構はずふんぞつて。のたれてござれといふ事も。フシ心にかゝる一つなり。地おさゐ萬氣にかゝり。詞ナウ船頭殿。物には情といふ事あり。人を乘せず運賃取れば船頭の一分立たぬとや。我々とても人に銀をことづかり。その買物を渡さねばどうも一分立ち難い。これ手を合する。地是非とも上げて下されと詞をつくせば聞分けて。詞そんなら早う上つた。ア、地過分々々と二人手を引き氣もせく足許。詞此方衆は怪我しさうな。雁木に蹟き。おか樣の大跳に又。疵の付かぬやうに 地用心々々と。常船頭の戲言も フシ今日こそ胸に應へけれ。地床の蔭に身を潛め。詞甚平が爰にあるからは。市之進も此の邊に居らるゝに必定。サア〳〵 地二人の望叶うた覺悟あれと言ひければ。地ア、それは覺悟の前。閨を出づる

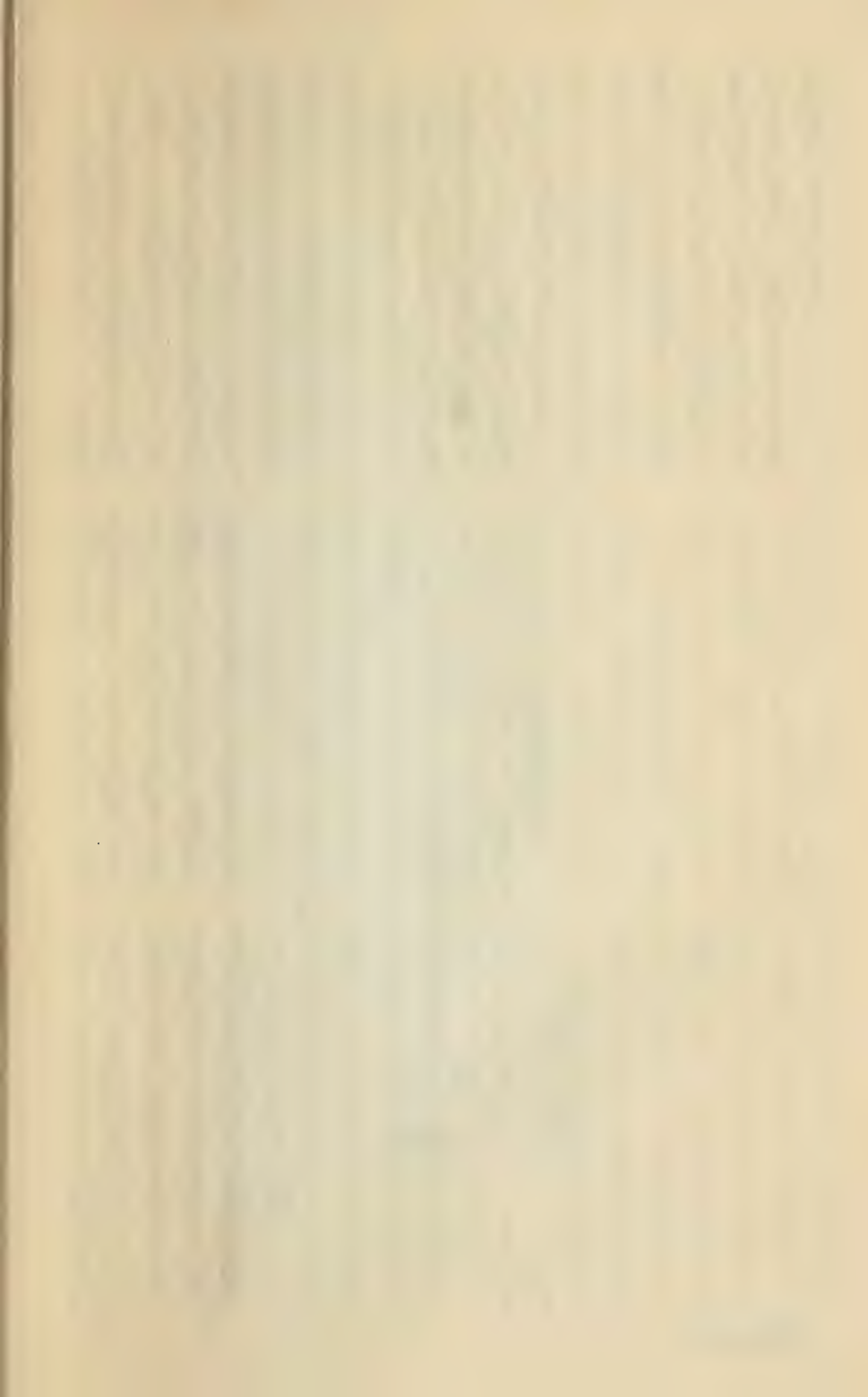
其の夜より夫に進ぜた命。惜いとは フシ思はねども。若し弟の甚平が手にかゝらばロ惜しい犬死。甚平と見るならば随分と遁るゑが。市之進殿への奉公。私や貴方が恋かうしても居られまい。詞今夜はどこに泊らうぞ。ハテ三栖の端か油かけか。地そろ／＼京へなりとも上らうと。夕べの空もはや暮れて。ヨウ軒端／＼軒端にとぼす火は ハル フシ切子燈籠。色々の。地花の錦蓋し判じ物。見世に涼みの芝居話や踊子の。十二三から八つ九つの娘。やさしや。黒い羽織の腰巻に。野郎帽子の濃紫。揃ふ拍子や容振もよく。ヨイヤサそれ。／＼。それ。／＼やつとせ。クドキ ハエイ／＼。難波江の。蘆のかりねの一夜さへ永き契りと結びはすれど。ゆるさぬ縁の関の戸や。いつそやまぺと思へども。一期さる丸との誓紙のあれば。天智天皇ばち恐ろしく。親の育家もそこはかとなく餘所の人丸頼まれずして。直に大江の千里を越えて凄き深養父中押分けて。たんだ振れ振れた袂で切れさ。ナホス地踊り姿の。なつかしや。ハルナウあの踊子を見るにつけ。地園の子供もあの年配。生きたか死んだか傾ふか。可愛や今年は踊るまい。放れ／＼になり果てて。どこで死んでもあさましい。子供の水も受けまい湯灌葬礼たがせうぞ。とてもなら今死んで。此の燈籠を六道の中有の明りに迷ひを晴れ。せめて未来が助かりたいと。歩き／＼の口説きごと。男も心かきくもり空は今年の旱天にも。袖には誰が雨乞の身を知る雨ぞ果しなき。地市之進が嗜む備前國光運こそ来れ我が妻に。此の世の緣は薄柿の帷子高く捻ぢからげ。甚平とは跡先に引別れたる夕べの雲時は冥途の西の下刻。運こそ北の橋詰にて行合うたり。詞笹野權三淺香市之進が女敵。地覚えたかといふより早く打ちかくる。ヲ、待受けたりと差上ぐる。左手の小腕水もたまらず切落せば。飛びしさつて武士の役。作法ばかりと一尺八寸抜合せて刃向うたり。スハ暴れ者切つたわ切つたわ。喧嘩よ棒よ。踊子どもに怪我さすな。詞お吉様ア。おせん様ア。半兵衛ヨ。権介ヨ地人を呼ぶやら逃げるやら隣町八丁九丁町。十番切の五月闇 フシ夜討の入つたる如くなり。地女は甚平をちらりと見て望みは夫の切先弟に討たれ犬死としばし身を引く フシ橋の蔭権三が踏ん込み討つ切先欄干に切込んで。咬へ止めたる刀を捨て。エ、竹がな一本。一手使うて鑓の權三と名を取る印。諸人の形見に殘さんもの。足取なりとも見物せよと。刃を潜る無刀の働き。オクリさすが／＼なりける フシ手負ぶり。一生一世の念力に切込んだる右の肩先。胸板を筋かひにはらりずんど斬られても。猪身を引かぬ最期の身振。橋はさながら紅葉の稀にあふせの敵と敵踏ん込み。／＼五刀。斬られて反向に返せども。武士の死骸の見事さや フシ迯疵更に無かりけり。地市之進女を見失ひ。南無三寳と北へ走り南へ戻り。どこへ失せたと小隅々を唐猫

の。鼠を捜す眼の光。橋には死骸のたを打つ。折しも七月中旬血は流れて滔々と。月こそ浮べ伏見川 フシ 立田の川とぞ紛うたる。甚平姉を引つ立て來れば。詞 ヱ、助太刀の其方に討たるゝは口惜しい。夫の手にかけくれまいか。や市之進程の仁。誰が助太刀。を討つものぞと橋の中へ突出せば。なう懐しやと寄る所を片手なぐりに腰のつがひ。くわらりずんと切下げられ。フシ あつとばかりに臥したりける。帶ひつ掴んで面引上げ。見れば子供の不便さと憎し／＼の恨みの涙。胸に浮むを打拂ひずんど切下げ取つて引つ伏せ。肝先踏まへぐつと刺いたる我が切先。右の踵を蹴かけずつぱと切れども覺えばこそ。直に男が胸板踏まへ ツメ 止めはいづれも一刀。鑓の權三が古身の鑓。寢も古寢話も古し。歌も昔の古歌なれど合の。笹原一夜さ話 キン 其の鑓の柄も永き世の御評判。とぞ成りにける。

七行大字直之正本とあざむく類板世にありといへども又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直之正本にあらず故に今此本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本筑後掾 竹本 博教 (花印)

正本屋 山本九兵衛版

大阪高麗橋壹丁目 山本九右衛門版 印

山崎與次兵衛壽の門松

近松門左衛門作

上卷

歌 筑波根の峯より。落つる。瀧の白玉。一二三四。五六七八。ナホス フシ九軒の町に。地 羽かはす。比翼の羽子板木欒子も脣入れては色になる。戀の二葉の禿松。フシ 枝と枝とを遣羽子も。地 三四いつも末ながき。返事に賜るゝ門の松。抱への松あり客も待つ先づ新町の初子の日。松澤山に深契。千代も根引は フシ 絶えすまじ。詞 コレ〳〵新助。いやといふ物無理に突きやつてそれ見やの。羽子を松へ突きとめやつた。地 元の樣にして返しやと袖に取付く禿ども。ナウ 詞 取付きやんな男に突かすりや留るとは。頭から知れた事。地 珍しさうにと探放し。手を捕いてほつほらほ此方や知らぬ。あべかこの新介と走つて内へ駈込めば。そりや〳〵逃すな捉へよと。羽子から起る諍は フシ 飛ぶが如くに追うて行く。ハルフシ 情口説の。崩出づる。雪間に素足伽羅薫る。霞の袂紅の帯 冶泉 雲の。上着を。ゆりかけて。新艘突出し出立榮え。歌 紺に霞含に薄染淺黄。織物縫物染物畫し。小紋二重染。二重染淺黄。鹿の子に鶸鹿の子。紫鹿の子に經る年の憂さをも。芥子の紅鹿の子。極彩色の フシ 越後町。三筋に三つの。春立てば。松若緑梅時節。やりが前垂茜さす天も醉うたり人も醉ふ。初盃の内祝ひ。過ぎて濃艶の妓揃へ。フシ 雪駄の音のしやら〳〵と。地 春めくうちに葉は色の司や藤屋が内。ヲ 地 吾妻といへる名木の。松には續く花もなき。戀と。悧發を目の張に。情こまるゝ道中は。往來の人も フシ 立留り。地 花を見捨つる雁も。歸り廓の晴れ處。身にも年にも恥もせず。七十ばかりの古婆の古綿帽子の前冠り。春知り顔に七つ屋の藏の戸出づる鶯茶の。布子の袖を摺れ縺れ附纏ひ行く足許。遣手のかやが聲高に。詞 是妄な婆樣。此の廣い道を何ぞいの。高砂の尉と姥が離別したやうななりで。太夫さんに摺れ縺れヱイ嫌らしい小舌たるい。彼の後から同じ樣について來る若い男は。昇夫の風とも見えぬ此方の連か。地 とつとゝ退いてもらはうと押しやれども腹立てず。詞 ヲヽお道理樣や御免なりませ。音に聞えた吾妻樣お慮外ながらしみ〴〵と。お話し申したい事御座りまして廓をぶら〳〵致します。どうぞお聞入れなされてお情に預かれば。地 婆が後生も助かります大事の〳〵の太夫樣に。嶋の幸い梅干婆がすいこな奴と思召そ。ハシ お恥かしやといひければ。詞 ヲヽいや。口合をやらるゝ。是女郎樣たちの在盧を見掛けて。嫐の祖母のといふ騙りことは古い〳〵其の

傾城の遣手。是口が黒い見ておきや。ナウ怖い事いうて下されな。騙り事いふ様に見えますか。アヽ貧乏はせまいもの。連合は船場で隠れもない。千貫目の廻しもした難波屋の與左衛門。傾城の恋が滞り。大阪を仕舞うて八幡へ引込み果てられた。其の難波屋の婆でござる。地あの傾遊りは獨り息子。千貫目の大釜の湯氣で育つた奴なれど。詞今では銭一貫の廻しもならず。地難與平／＼と。其の日過の日傭取り騙りと見ゆるもお道理と。老の繰言目に涙。問はず語りに古を。フシ思出したる風情なり。地引舟禿遠慮なく。ホヽ、踊歌に謡ふは婆の事か。色歌ゐい／＼山崎ナ／＼。八幡山崎難與平のお婆。ヤア此の誠に金を出せさ。フシ盆にござれと笑ひける。地吾妻は始終貰泣き皆の衆は何笑ふぞ。詞聽であらうがあるまいが勤めする身の習ひ。落ちめと聞けば見捨てられぬ吾妻を見込んで頼むとは。愛しらしい婆さん傾城冥加聞く氣でごんす。地爰は人立

繁山。ちよつと横町の小店をかりの揚屋町。爰へ／＼と手を取れば涙を流し。忝や／＼。詞お端申す事とても此の祖母が此の年で。何の願ひござりましよ。月とも星とも思ふはあの與平め。日外や人に雇はれ此の新町へ文の使の序に。吾妻様を見染めてホヽ／＼ホヽ。親の口からアヽおはもじ。恋病に煩ひます。家主隣の聞えもあり。御器提げる瑞相かと。叱つて／＼追出しても退けうかと存じたれども。アヽ昔の身ならば若い者の手かけ妾のといふ最中。申しにくい[illegible]夫婦たち一年二年買詰めても。何處の痛[illegible]にもならぬ身代其の氣で育つた奴の事。地アヽ可愛やどうぞしてやりたいと。母が痩我ら子の望みも金銀といふ強者には。又してもへしつけられ見殺しにする子の命。詞氣遣ひするな情を商賣になさるゝ吾妻様。歎き申してお盃載かしよそれで思ひ切りをれと。地彼奴を連れ附纏ふも子の可愛いさ。母が命の一夜さの傾城代にもなるならば。

今でも死んで見せませう。押付けがましい事なれど。ちよつとばかりのお盃是で上つて下されと。袖から出す小半入りの徳利に餘る親心。かけ盃の蒔絵の猩々笑ひ高じて涙の種。泣く事知らぬ遣手さへ フシ彼方向くこそ哀れなれ。地聞く程吾妻押俯向き。粋な婆さんわたしが言はう詞がない。與平様は何處にぞ顔が見たいござりやせと。呼ばれて祖母も一時に千年を延ぶる門松の。影に隠るゝ難與平。フシ指を喰へて這出づる。詞袖口取つて引寄せ惚れた／＼と人ごとに。誠もない口癖さへ勤めする身は先づ譽。與平の様な男を頼はしたは此の吾妻。嬉しうござんす忝い。命にも代へ身にも代へ逢ひ通したい物なれど。戀というてはちよつとの詞もかはされぬ深い男があるわいな。山崎の與次兵衛様と申して新艘の初床より。地面白いと悲しいと譯のありたけしつくして。勤めは名ばかり夫婦というて今一人と。外には漏らす水もなし。というて

母御様の御眞實。切いお前のお心入れ立ちながらの盃に。醉流さんも本意でなし。詞これ重山預けた物それ爰へ。地あいと答へて引舟が袂の内の袱紗物。色こそいはね山吹の十兩ばかり一包。是も可愛い山様ゆゑ譯のある金なれど。母御様へ進ぜます。詞與平様の身の廻り立派な大盡に仕立てゝ下さんせ。渡り並の客に身を賣るは傾城の習ひ。地枕をこそ交さずとも年月の物思ひ。酒で流して下さんせと渡す小判を難與平。吾妻が膝へどうと投付け。詞胴慾にござる曲がないおりや金にや惚れぬ。貧な者と侮つて金で口を塞ぐのか。我等が宿は庭かけて七疊半。貧乏神のお旅所といひさうな住居。師走正月も同じ布子一枚なれど。傾城に金貰うて揚屋へ往たといはれては。此の難與平人中へ面が出されうか。地戀にかこつけ物取りとは目利が違うた吾妻様。七十に餘る母迄各に顔まぶらせ。無念にござる。許して下され母者人と聲を。忍びて泣

きけるが。アア地よう思へば恨みしは不調法。詞追付け與次兵衛殿に請出され奥様に備はるお身。我等は日傭取内方へ雇はれて。沙汰でもすればお身の爲に惡いと。後を大事になさるゝは尤々。氣遣ひなされなふつつりと思ひ切りました。地鼻の先ばかりで戀せぬ證據は是なりと。腰の小刀ひんぬいて既に小指に押し當つれば。吾妻取付き待つて下され誤つたと スエテやう〳〵に押し留め。詞金進ぜたは過りなれど。身の納りを思ふなどとさうしたさもしい吾妻ぢやない。地與次兵衛様には稚馴染の本妻あり父御様は隱れもないいしんぢよなり。妾から起るお宿のもや〳〵悋氣やら御意見やら。跡の極月の二十日前ちよつと逢うてそれからは。不首尾〳〵の文ばかり舁夫揚屋の付屆。初紋日の買論もわしが獨の胸算用。年のある上年切増し男の恥を包む程。身儘のならぬ此の苦患。廓で婆になる吾妻。可愛いと思うて下されと。恥も哀れも打明けて。

つがなく難す正月の涙も。顔に憎からず。絞る袂の上一重裲襠脱いで帶解く。逢ふ夜の床の温まり又逢ふまでは冷まさじと。深い中着は烏羽玉の黑羽二重の蛇の目の紋。與次兵衛様のお小袖暫しも身は放さねど。是がわしが心一ぱい是を着て。詞表向の客になつて下んせと。地小袖渡せば難與平是が誠のお情。私戀は叶うたとスエテ押戴いて泣くばかり。地母は始終つくりと。のうお傾城の詰開は。むつかしさうな事やとてフシ耳を澄ますご殊勝なる。地與平涙押拭ひお前に逢うて眞實の。涙といふ物覺えました。金の草鞋で尋ねても。二人とない女郎に思はるゝ。地與次兵衛殿はあやかりもの着物を戻しませう。代りには以前の小判貰ひましたと。取る手を母がはつたと打ち。詞ヤイ卑怯者。今の詞がはや違ふ難波屋の家に瑕付けるか。下卑た奴めと叱られて頭掉り。いや〳〵身の慾に致すにこそ。吾妻様と與次兵衛殿是程の深い中。聞捨て

ては男が立たぬ。此の金を此の儘置けば揚屋の庭錢埃になつてすたります。地小判と見れば小判吾妻様の身の油。金をおれが預つて此方も身から油商ひ。どか儲すればどか損するついと江戸へ下つて。十兩を百兩百兩から貳百兩。貳百兩から五百兩段々儲の商ひ拍子。千兩にするは三つ羽の征矢。關東廻しの商の筋道は我等が家。吾妻樣根引にし與次兵衛殿とお二人悦びの顔を見て。今日の情の御厚恩を送らねば。此の難與平立たぬ〲。常々金がな〲是を買うてかう賣つてと。心當の事どもあり。江戸の道中二歩では高砂野宮。母じや人は横堀の妹聟に預けりや緩りゝ、其の内金も上しましよ難與平が立身。吾妻樣の御出世。與次兵衛殿の本望。千里一飛び一拍子 フシ 一器量ある男なり。地 聞けば聞く程頼もしい御心底此の吾妻に戀ある身で。與次兵衛樣に末長う添はせうとて俄に江戸の思ひ立ち。二人が中の結ぶの神さん。門出の盃しみ〲

お禮申したし井筒屋へ伴ひましよ。地母御様はどうぢやへ。イヤ與平が望み叶へば此の世からの生佛。太夫樣おさらば。地いよいよ頼み上げまするとと與平が脊中しとゝ打ち。こりやあやかりもの嬉いか〲と。興を持たせて和らぐる。母は幇間子は大盡はつと打ちたる露よりも。太夫が情いたゞいて ヲクリ 歸るさへ急ぐ フシ 長持急げ いそ〲 賑々揚屋町。遣引舟がアレ〲太夫さん。詞 阿波座からうるさい和郎が見えるぞゑ。地 ほんに〲贅吐きの彦さん。しかもづぶ〲醉うた足許。見咎められて猪恩口とオクリ ただ〲寄邊の井筒が本。内證花車に吹込めば。込んだとはかの與次兵衛が小袖をかりの難與平。見馴れぬ揚屋の大騷ぎ スヱテ 戀ぶるひして見すぼらし。地 足はどれても目角は強き袴肩衣横筋かひ。町一ぱいをひよろ〲と直にどれ込む井筒が座敷。吾妻は煙管の吸口閉ぢ物もいはずにあちら向く。與平は人に見られじと炬燵の内へ顔さし入

れ。被く浦團の綴子より フシ 五緡緞の事ぞ思はるゝ。彦介花車を引捉へ。詞 コリヤ花車様お聞き給へ。正月は新春の御慶目出度申納め候。この〲此の鼻は新酒の醉紛れ積る恨みを申し始め候。ナなんと。否か。面白い。其處な遣手も能う聞け。いかな吾妻殿でも。太夫樣でも。畢竟直段の高い總嫁ぢやないか。何と。いやか。いやとは申されまい。それに山崎與次兵衛には賣つて。此の薬屋の彦介には何故賣らぬ。一文一錢値切らぬ拙者を。如何なる者とか思ふらん。忝くも桓武天皇無體の後胤。攝州津の國服部の住人薬屋の彦介。・大阪に五間口の店も所持仕る。貸藏も持参つかまへさ。大金持を知らぬかナ。アヽ慮外作ら。否とはいはれまい。都島原上林の高橋に金遣うて髮切らせた。伏見撞木町桝屋の高尾に。又したゝか遣うて。心中に生爪を放してくれた。まだ鼻もそいでくれた。耳をそいでくれた。大々盡の彦介。山崎の與次兵衛に

仕負けて藤屋の吾妻に。三度四度ふられては此の彦介一分立たぬ。半分も立たぬ。今日から三日ひこずる擱んだ。相場の高い總嫁の買初仕り。金銀米錢ぐわらり。〳〵と撒散したら吾妻がくるり〳〵と廻らざ賭ぢや。サア〳〵買うた地フシとしなだれ寄れば。吾妻むつと頰がまちひつしやりとみしらせ。詞エイあた贅張つた聞きともない。其の高橋とやら高尾とやらは。其方の樣なうつそりでも。金さへ遣へば髮も斷ろ爪も放そ。京や伏見は知らぬが此の。新町の傾城は魂が違うた。恐らく此の吾妻はいかな〳〵。一生身揚り仕暮しても。其方の樣な意地腐りに。小判の梃でも動く女郎ぢやないぞや。がや〳〵口きく男の。地意地ならば手柄に吾妻を廻して見やとすんど立つ。詞ムヽ張の強いに猶惚れた。此の彦介は吾妻を廻して見しよ。廻るは〳〵。遣手めが面がぐる〳〵廻るは。宴の家も廻るぞよ。廻るは〳〵山姥が。詞山又山に山廻。

面白い。地どうでもかうでも吾妻殿をフシ奥へ連れてと引立つる。地どれに下地の無意氣力是はどうぞと引退くる。引舟に向ふ風花車は彼方へ押込んで。遣手も取つて[illegible]梅の落花狼藉。[illegible]えぬ[illegible]與平齒切りをしても堪忍ならず。彦介が足首を炬燵の内より確と取り。うんとしむれはあいたゝたゝ。詞ヤレ足首が 地ちぎるゝわと目は顰むれど口減らず。詞此の傾城には狼があるさうなと、地顛もぢろを引倒し蒲團押退けつゝと出で。熟柿臭い彦介が。鼻の先に澁柿のフシ澁い顏して立跨がる。詞ヤ此奴何ぢや。何者とは眼明け人ぢや。男ぢや。男といふ物見て置け。うぬは何者。藤屋の彦介といふ男見ておけ。ヤ生臭い男畜ぼはり。おけ〳〵置いてくれ。額に毛拔も當てる者が。いとしぼけに女郎衆背つて何の男。サア男が定なら俺とせい。サアせぬかい。いやせぬかい。地男同志の喧嘩といふ作法へてやろとつつと入り。小腕捲上げ引摑いで遡と

んぶり。ぎやつといはせづでんどう腹這にはつたと反らせ。腰骨を七つ八つうんと云ふ程踏付けて。鼻唄に懷手吾妻つく〴〵可笑しさ堪へ。フシ笑を殺す笑止顏。地彦介漸う起上り。詞聞えた〳〵。與次兵衞が間謀者彦介を踏んだぞよ。山崎與次兵衞覺えて居れ。したが踏まれても此方に七歩の勝。正月早々俺が身代。踏廣げてくれたな。殊に今年は庚の年。犬は土に寢るもの年八卦に叶うたコリヤ。地人の巳午が惠方ぞと臑を張つて立ち歸れば。踏まれてさへあの頭。人を踏んだらどうあろとオクリ跡は笑ひの賑ひや。詞正月買の驅初め節の下では三味彈き。梯子の陰では寶引節分豆撒け鬮。寶相楊子橋。壁と祝うてどこも吉年男。鐵の子抱いて福積んで若恵比壽にか野。權現景清でこすらぬ、總供。喰摘に土器。さすぞ盃るよつと押へて去年より今年はみづ〳〵〳〵〳〵。若みんづりの井筒屋と フシわきて賑々。賑へり。地粋の粋を

通つたる續の山崎與次兵衞。篝火を焚はせて西口より。舁夫がいきつて旦那お出といふより家門。これや目出度いと跣足で飛んで門口迄。福の神のお迎ひ。ちやうさやようさや千歳樂萬歳樂。地奥の座敷に フシ設けの炬燵。亭主蓬來内儀は銚子娘は土器。こゝな牛蒡も身祝ひ太夫樣も御全盛。お蔭で我等も仕舞は緩るり鑵子で。先づ大福の口明に變つた咄がごんすると。」吾妻は與平を與次兵衞に引合せ。ありし有樣一々を語る詞に與次兵衞。詞扨て意趣ある葉屋の彦介。どうがなと存ずる折節來い與平殿。此の以後は何時迄も心安う御意得ませう。地お手上げられいと一禮す見馴れ言馴れ聞きなれぬ。詞遣ひも第一は。足の痺に難與平只フシあい〳〵とばかりなり。詞御律義で重疊々々。江戸へとの思立ち尤々。吾妻が事は苦になされず。地一廉の儲して仕合の上洛。門出に夜もすがら歌飲めや謠へや一寸先は闇の 地夜とともに母が案じて居りませう。いかい御造作與次兵衞樣。吾妻樣皆樣つらりと連立てたお暇申すと立出づる。餘りといへばけたたまし。今宵一夜は苦しかるまい。いや〳〵一分はすの始まり。油斷は稼ぎの大毒と帶引解けば吾妻取付き。」寒い折から御遠慮無う矢張り小袖を召しませい。道中も大井川とやらいふ川は。いかう危い事ぢやげな。地御無事で吉左右待ちまする。やがてと別れ與次兵衞も見送つて與平殿。詞山崎には兄弟ありと此の與次兵衞御心便りに思召せ。意外ながら江戸にも兄弟ありと思召し。互の無事は状通と。地フシ別れし跡は戸障子しめ。月も雲井に寢靜まり フシ松に。嵐は。靜して。地與平は九軒を一足二足三番太鼓打ちやみて。廓淋しき折こそあれ。待伏せしたる葉屋の彦介。蛇の目の紋を知るべにて與次兵衞と見るよりも。躍し蹴してはたと切る。ひらりと外し難與平。扨は宵の白痴者意趣返しの待伏せかと。つゝと入つて跳倒し小刀を逆手に滅多突き。眉間を突かれのた打つて。ヤレ人殺しと聲立つる。見付けられては出世の邪魔と。おくれを見せぬ難與平 フシ風を追うてこそ逃げ失せける。地町中俄に騒出し棒よ熊手よ提灯出せ。大門打てといひしめけば彦介はうろ〳〵と。詞相手は山崎與次兵衞。井筒屋の客めぢやと 地喚き立つれば與次兵衞。聞くより胸にはつしと塞へ與次兵衞是にと立出づる。聲を知るべに彦介は後よりしつかと抱留め。詞相手に捕へた組伏せた。騒ぐまいといひければ。地吾妻引舟遣手まで。狂ひ出づれど放さばこそ。ハアはつとばかりの涙さへ何と。なる身の三重

中　巻

ヘ覺束な。フシ罪なくて。地配所の月を見んといふ。古人の物好如何なれや。日影も見せぬ座敷牢九軒町の喧嘩は。葉屋の彦介手負ひし事。代官所の沙汰となり。相手山崎與次兵衞と訴ふれば。與次兵衞も男の義理難與平とは顯さず。我が身の科に引受け

親浄閑に預けられ。相手の疵は養生し死ぬるか本腹か。二つ一つの左右次第我も生きる瀬死ぬる瀬を。定めかねたる飛鳥川。フシ明日が日知らぬぞ力なき。地一家の内に取分けて女房お菊の物思ひ。一日も氣をつめぬ人。頰も出ようが何がな心慰みと。炙る餅も我が胸も。共に焦るゝ。フシ庭傳ひ。障子明くれば與次兵衛。色も青ざめうつとりとフシ氣あひ。悪氣に傍向けり。詞二三日はお食も進まぬ。何處ぞ悪くば薬でも参りませ。地體お前の短氣が妾が明暮苦になつた。若し私にいたづらあらば。先の相手を切りも殺しもなさるゝ筈。ハテ傾城は賣物幾人にも貰らいでは。よしない法界悋氣から此の難儀も起つた。但其の吾妻と私と一つに思うて下さんすか。地こんな事知つたらば一寸も出すまい物。悋氣せいで今では悔しうござんすと。ナヲス恨みまじりのうろ／＼涙。詞いうてたもるな／＼。一天下の人よりも和女一人に恥かしい。さりながら石清水八幡宮も照覧あれ身は斬らぬ。なれども彦介めが與次兵衛やらぬ覺えたかと仕懸けた喧嘩、身が斬つたも同然、殊に其の切手とは男同士の義理ある中。地奈落の底まで此の與次兵衛が切つたになつて。相手が死んだら切らるゝ覺悟。とはいへ彦介めが左程の疵ではなけれども。強請つて金にする奸計とは鏡にかけた事。見す／＼金で買はるゝ命。此方の藏の金銀では買はれぬさうな。預けられたは母の名目。皆[illegible]親に不孝の罰と。フシ投首するぞ不便なる。詞されば私が父様も夫をいうて浄閑が聞えぬ。吝いも事による。千兩二千兩入ればとて獨子の命に代へらるか。地然る[illegible]離るればつい埒の明くこと。口惜しい此の治部右衛門浪人の身でなくばと。くい／＼いうて悔言。多分今日も見えませう父様の袖引いて。恥しめて言はせたら何程吝い親父様も得心なうで何とせう。アレ父様の聲がする。やがて能い事聞かせましよ。詞もう往にやるか又後に見舞うてたも。地いとしや寂しからうのと夫婦の顔も打萎れスヱテ涙隔てゝ引立つる。明くる障子の明りにもフシ暗む心ぞ哀れなる。地與次兵衛見舞として毎日淀の渡し舟。梶田治部右衛門は相親家の聟を思ふも娘の爲。老の心を悩ませども父浄閑はさもなくて。詞ヤ治部殿お出で。サ昨日のさしかけの將棊勝負付けましよ。アこざれ是は餘りな浄閑老。拙者が毎日老足を運ぶも。與次兵衛事氣遣ひさ。將棊さしには参らぬ。地昨日の勝負は何方へなりとつけてお仕舞／＼といへども。いや／＼馬鹿めが事は運次第。昨日は駒動かせず置きました。詞サアござれ／＼。然らば勝つても負けても是一番。昨夕から盤の上とつくと見定め。工夫した相手とさすはこはもの。お手は此方かサア遊ばせ。先づ飛車先の歩を突きませう。ヤ此の成金してやらうでの。かう寄りませう。浄閑頭を叩いて。ハアゝ南無三。此の馬落ちた謡深田に

馬を駈落し。引けども上らず打てども行かぬ望月の。駒の頭も見えばこそナホス難しいなつたと　フシ案じける。地お菊盤の側に寄りこれ父様。詞彼方の方が落ちれば此方も落ちる。兩方の睨合で何時迄も埒明かぬ。迷惑する駒はたつた一枚。浄閑様のお手には金銀がたんとある。慾を離れて金銀さへお打ちなさるれば。これ此の父様の向ふの浄閑様の此の馬は助かる。地どうぞ手にある金銀を打出させます様に。思案して見さしやんせ。合點かくと袖を引けば治部右衛門打首肯き。詞チヽくく能う智恵付けた飲み込んだと。地いへども浄閑氣も付かず。詞親ぢやと思うて助言いふまいくく。又ちよつこりと歩で相致そ。ムヽシテお手に何々。浄閑が手には金三枚銀三枚。歩もござる。此の歩で廻したら未だ金銀が殖えましよ。いかい金持羨しいか。金持とは此の角が睨んで居る。斯う寄つたらば金銀出して打たずばなるまいぞ。でも金銀は放さぬ。桂馬をあがろ。治部右衛門堪へ兼ね。ハテいかい吝嗇坊。澤山な金銀握りつめて何になさるゝ。來世へ持つて往かるゝか。是御覧なされ。此の飛車を斯う引けば。天にも地にもたつた一枚の此方の此の王が。片隅へ座敷牢の如く追籠められ。今の間に落つるが金でも銀でも打散らして。圍うて見る氣はござらぬか。我等が吝いは知れたこと。座敷牢へ入らうが都詰にならうが。金銀は手放さぬ。歩あしらひで見しらせう。此方も歩を以て夫に首を提げらるが悔みはないか。構はぬくく。先づ逃げて居ませう。コレ其の内に香車の鑓を以つて鑓玉に上げらるが。それでも金銀出すまいか。勿體ない事鑓玉に上げられうが。獄門に上らうが。手前の金銀は放さぬくくと。地兩馬強き慾の皮側でお菊は氣を揉みて。包む涙も手見せ禁　フシ命手詰と見えにける。地治部右衛門腹立ち顔盤中の駒掻寄せ引摑み浄閑が眉間にぐわらりつと投付けたり。お菊はつと驚けども浄閑はびくともせす。治部右衛門膝立直し。詞恥を知れ浄閑。相親家はもと他人駒を面へ投付けられ。咎めもせぬ恥知らずにいふも國土の費えなから。將棊に事寄せ金銀出して扱ひ。與次兵衛命助けよといふ當言。合點せぬお主でなし。夫に首を提げられ鑓玉に上げられても。金銀とては出さぬとは。治部右衛門に氣を焦らせ面白いか可笑しいか。其方も獨子此方も獨娘。兩方共に懸替なし。聟を子と思うて居るが嫁を娘と思はずか。與次兵衛が切られたら可愛やお菊が歎かうと思ひやつてたもらぬは。エヽさりとては恨めしい。縁組の時婆がとゞめて小身なりとも侍に縁組みたい。何ぼう分限者金持でも。町人とは馬が合ふまいとくれぐ留めた。否々名に觸れた山崎浄閑。武士交りもする仁と。地我一人情ばつて此の頃婆が恨ごと。お主が吝い無慈悲から五十年添ふ爺婆の。夫婦合迄不和に成り。我が子の命に替へぬ

金銀さぞや親類縁者が餓死するとも構ふまい。我こそ浪人主人持つた一家もあり。物知らずと緣を組み一門の名を汚す。無念至極と許りにて喘上げ。〳〵泣きければ。詞淨閑もしば〳〵目。地侍の親が育てゝ。武士の道を敎ゆる故に武士となり。町人の子は町人の親が育てゝ商賣の道を敎ゆる故に商人となる。侍は利德を捨てゝ名を求め。町人は名を捨てゝ利德を取り金銀をためる。是が道と申すもの。地如何なる大病難病も病には療治さま〴〵ある。國法で取らるゝ命には人蔘で行水させてもいかないかな助からねど。金銀では助かる命の買はるゝ金銀。詞大事の寶といふ事を與次兵衛めが知つたれば。此の難儀は仕出さぬ。何ぼう惜み貯へても死んでは帷子一枚とは。此の淨閑も知つたれども。地死ぬるまで金銀を神佛と尊ぶ。是が町人の天の道。金の罰の當つた奴まだ此の上に借氣もなう。金出して如何なる天罰大難にかな

遭ひ居ろかと。可愛い程猶出しかねる。吝い名を取る此の淨閑金銀ばかり惜むでなし。塵灰まで惜しい物。たつた獨の世悴の命。惜しうなうて何とせうと。坊主頭を將棊盤スヱテとんと投伏し泣きけるが。地治部右殿のお恨みも聟可愛さとは存ずれども。左程に思召すならば。なぜ日頃フシ引寄せて。意見もして下さつたら斯樣の事は出來まい物と。我が子の痴氣は思はず聟がかりの恨みが出る。子故には愚鈍になり不調法申すも存ぜぬ。與へ參る治部右殿。アヽ死んだ婆は果報ぢやと。涙に咽び立ちければ聟も恨みいふこともスヱテ泣く〳〵〽表へ立出つる。フシ跡にはお菊。地將棊盤どこへ取付く島もなき。淨閑樣のお詞の道理は聞えたやうなれど。金銀なければお命ない。あの内藏の金箱も用に立てねば將棊の駒も同じ事。アヽ慈悲のない親御やと浮世の賴み涙にくれ。無常心や入相の鐘物。淒く三重〽暮れ渡る。フシ雁の數讀む。朧月。地泊り

鳥の寄る邊なき。藤屋吾妻がわくせきの。思ひを乘せて在所駕籠。スヱテ淀の川水流れの身。海道行くも山崎。歸るも山崎へ。假が内の。畦傳ひ。フシそりや打渡す。丸木橋。地見なれぬ目には恐しく。長地駕籠を留めて下り立ちて所體作るも町風に。譯なき夜半の松の風。裾吹返し呼びかはし。戀の山崎そんじよう其處と人の敎へし家並も。所稀なる家造りの裏門塀のかゝりまでフシ扨は妾ぞと知られける。詞駕籠の衆此處が與次兵衛樣のお屋敷。塀越に見ゆるがお部屋さうな。地いとしやあれに押籠められてこそわしや彼處へ往くぞや。詞ちつと隙が入らうとも必ず待つてや。戻りも賴むぞや。烟草がなくば進ぜうか。地つい往てこうと裾輕く。フシ寄る程塀の高ければ。伸上り〳〵。伸上りても燈火の影も通さず隙間なき。用心嚴しき内の體。嵐と共に路次の戸を敲いて吾が胸蹄る。耳を壁に押當てゝ。聞けどひつそと音もせず何時迄斯うして居

たとても。誰が知らせの便りもなし。吾妻が來たと呼ばうかと。フシ冷え渡り冴えかへる。佇む足は釘氷身も座敷牢いとしや寝てか起きてかと。お菊が見舞ふ駒下駄に フシ飛石傳ふ足音の。サア逢ぢやと飛立つばかり。詞與次さんぢやないかいな。あるにもあられず吾妻が見舞に來たわいなと。地聞くよりお菊はつとして。扨も太い傾城め。どうする事ぞ試みんと内より壁を懷かしげに。ほと〳〵敲けば。フウ聞えたり。詞定めし何處も締つて入る事もなるまいと。妾が心に思ふ事こま〴〵と此の文にあり。篤くと讀んで自筆の返事見ますれば。地今生の本望と塀越に投込んだり。アヽ誰が拾はうも知らいで女房のある男の屋敷。遠慮もないと開けば見知つたり〳〵。朧月にも見違へぬ吾妻が筆。仔細らしい一つ書。詞此の剃刀は妾が研ぐ心の刃。もしもの折は必ず〳〵さもしい者の手にかゝらず。潔い御最期り〳〵。時は逢ふと日は同じ日。最期所はかはるとも來世は一つ蓮葉に。永き契りを目出度しと。地エヽ此の剃刀の入れざまは。何うぞお命助けたさ。女房舅が泣きしみづき。父御様とも爭ふ程の大事の命。澤山さうに死ねと書いた此の文に。目出度しは何ぢやの。詞男どもにいひつけ叩き出してくれうか。イヤそれ程夫の名が立つ。地直に逢うて言うて退けうと フシ路次の戸開き立出づれば。ナウ與州様か懷かしやと。縋り寄る手を確と取り。詞音に聞えた吾妻殿か。今の文も見ました。わしや與次兵衛殿の女房菊といふ者。遙々の所能うござつたの。定めて主に逢ひたかろの。知らしやる通りの難儀でアレ。あの座敷に押込められてはござれども。おれが逢はせぬ。アヽ此の菊が逢はせぬ。吾妻殿には疾うに逢うて禮いふ筈。此方故に大事の家業も餘所になり。地内は野となれ山となれ夜を日についでの里通ひ。親御の不機嫌世上の惡口。此の度の難儀それ見たかい。いよ〳〵人の嘲り。詞我とても女の身贔が立たいである物か。夫の恥辱さがない女房といはれまいと。嗜んで居ればお菊は奇特な。悋氣せぬ賢女賢女と。賢女ごかしの拜み倒しに逢うて。吾妻殿に睫讀まれ居るわいの。此方を女郎かと思へば鬼か天魔か。此の剃刀で人の男に死ねとは。死んでよくば此方一人死んだがよい。大事の男の膚は荒されぬ。地心の底は見探されぬ。世間に惡う謡はせ。生きる死ぬるの難儀も誰ゆゑぢや。詞傾城殿和女ゆゑ。地生傾城の恥知らずと積る恨みの高聲に。與次兵衛も障子そつと明け。彼方も此方も道理詰。道理のないは我ばかり二人の心思ひやり。顏は焚火の冷汗に フシ消えも失せたきばかりなり。地いかな程お恨みお叱りもお前に逢うて此の吾妻が。申し上げう詞はない。引く手數多の身の上さへ。悋氣妬みは女の常。お心堅い フシ町育ち。地誠なき傾城めが瞞しての賺しての。憎や〳〵

はお道理ながら。詞與次兵衛樣に逢ひましたは女房にならうとも。手かけ妾にならうとも申し交した事もなく。勤めばかりも馴染だけ夜を日にますお愛しさ。女子のなづむ風俗。よい殿御持たしやんした奥樣。お世話はお前お一人。此の度の騒動も人違ひ頼もしづくで。お身の難儀もわしから起る相手もやがて死にをなけな。地悲しいは我が身一つ知らせて覺悟もさせましたく。廓を忍んで此の有樣。見付けらるれば見せしめに逢ふも合點。詞相手が死んだら自害させまし。妾もお供と剃刀も用意しました。お主の名も流さず妾も情の御恩に。地命捨つる心ざしお前の御縁は妨げぬ。たつたま一度お顔見せて下さんせ。其の日を直に塞ぎます。ナ、お慈悲でやと懐中の、剃刀咽に押當て。娑婆の名殘りと泣きゝ、思ひ切つたる哀れさに。地お菊はやう〳〵胸開け、袖引きとめて是吾妻殿。詞義理にも命捨てうとは僞りにはない事。心底がいとしい主も定めし逢ひたからう。沙汰なしにそつと逢はせましよ。地アヽ有難い料簡深いお菊樣。大事の殿御を澤山に抱いて寢ました堪へてや。詞ハテ取返へされはせまいしそれだけ此方の仕合せと、心とけたる[illegible]次の中。地お菊〳〵と呼ぶ聲は舅の淨閑。鼠取の桝落し手に持つて鼠は何處にと立出づる。アレ父ヽ親仁樣折かおるい先づ暫しと、吾妻を屏の小蔭に隱し。詞まだお寢も遊ばさず夜更けて何でござります。イヤ別の用はない是見やお菊。若い奴等が仕掛けて置いた桝落し。ばつたりと響いた故明けて見たれば、鼠は逃げて往んだと見えて桝の内には何にもない。是でつく〴〵世の中の悟り開いた。中の餌食を頼みにして油斷すれば。落しにかゝつてつい殺さるゝ。思ひ切つて餌を捨て。逃げて退けば其の鼠が命を助かるばかりか。親鼠同鼠女房鼠もあるであらう。此の一家一門の鼠どもが悦び。別して老鼠の親鼠が心の休まりはいかばかり嬉しからうぞ。地若し若鼠の分別なしに、逃げた跡で親鼠が又落しにかゝらうかとよしない意地を立てをらうが。いかな〳〵親鼠は老功で落しにかゝる事もやない。詞定めて伯父鼠もあらう。其の巢へ這入んで此處らさへ影を見せねば鼠落しも音なしになつてすむ。此の度の桝落しに能う懲りて夜る毎に桁走り。盃嚙つたり親の小判咬へて盗んだり、暴れ廻る事ふつ〳〵止め。後には白鼠の富貴と榮えるを。親鼠が見る嬉しさどうあらう。詞欲鼠の狼狽鼠。此の合點が往かぬかと。地おりや此の頃夜が寢られぬと。スヱテ涙に聲をふくませば。如何にも〳〵。詞お慈悲な舅御[illegible]私は逢しませう。チヽ滿足々々すつと胸が開いた此の頃心に此の事ばつかり持佛へ參つても佛の顔も見えなんだ。地嬉しや今宵から心靜かに看經せうと。念佛力の後姿すゝ見るに、心ぞ遣瀬なき。地與次兵衛走り出て聲を知るべのかたじけ涙。お菊は舅の足跡を

手に縋いて吾妻樣與次兵衛樣。詞今のお慈悲を聞かしやつたか。早う爰を退く程がお心安め孝行。地淨閑樣の起請は此の菊が居るからは今迄より猶氣をつける跡に氣遣ひ遊ばすなお前に誰ぞ附けたいが。アフどうかなと案ずれば。詞これお菊樣それには此の吾妻が居る。命を捨てゝ出た廓二度歸る心はなし。地お前さへ御料簡お供せよとあるなればわしや忝い。廓へは歸らぬとスヱテ思ひ詰めたる詞の末。地ヲヽそんなりや跡先首尾がよいサア更けぬ先にと引立つれば。與次兵衛袖を打拂ひさうでないさうでない。詞人の父としては慈にとゞまり。人の子としては孝にとゞまるといふ。預り者が駈落し先の相手が死ぬれば。忽ち親は下手人に捕られ首劍ねらる。假令先が無事でも取逃したる咎めにて。それ程の罪は親父樣の身にかゝる。其の難を厭はぬ慈悲心親父は親の道が立つ。地與次兵衛は今日迄始終親の氣に違ひ。剰へ親を身代りに逃げて命助かり。百年千年生きるとて人交りもならねば。天地の内には住まれぬ。詞お心をもどくでなく歎きをかくるが面白うはなけれども。地矢張此の儘死なせてくれ命を捨てゝ一生の孝行がして死にたいと。スヱテ聲を上げて泣きければ。是も亦お道理と二人もフシ心破りかねフシ泣くより外の事ぞなき。地淨閑内より聲を上げ。お菊〳〵。詞不孝者めが落ちまいといふさうな。エヽ〳〵情ない哀れ知らず。七十になる淨閑が。もがられたといふ外聞わるさ。人にこそ知らせね。内證手を入れ二百兩迄扱うても。足元見て千兩でも聞かぬといふ。淺疵とは聞いたれども人の生身どうあらうかと。親の案じはどう思ふ。地將棊で心を紛らせば結句側から氣を付けて。思ひ出す程フシ胸苦しい。地宵から心粉にはたいた桝落し。量つても量られぬ。親の歎きを思ひやれ一生子でも居るまい。一度は親にもなりをらう。胸の中が知らせたい落つるか落ちぬかはや吐かせと。聲あらけても泣顔は壁より。外に洩れにけり。地與次兵衛涙に平伏して。詞有難いお詞どうも此の與次兵衛。地眞平御免と伏沈む。詞ムヽよい〳〵。年寄つた親を持つ者は一日も親を先立て。其の身息災で年忌追善。弔ひたいと願ふぞや。地汝は親に弔はれ歎きがかけて見たいか。サア此の匕首皺腹へ突込んで。望みの通りにしてやるぞ。南無阿彌陀佛といふ聲に申し〳〵落ちませう。待つて下され親仁樣とスヱテどうと臥して泣きゐたる。詞ムヽしかと落つるか。何の僞り申さうぞ。ヤレ嬉しや落付いた今迄の不孝皆許し。三十年の孝行をたつた一度に受取つた。地死んだ婆も嬉しからうお菊には親がある。淨閑にはお菊がある。跡には少しも氣遣ひすな。詞連の女中がありさうな嫌がるとも灸すゑさせ。酒呑ませて下さるな。馬では人が面を見る高くとも駕籠に乘れ。地頼みまするとそこ〳〵に心は

下筋百筋の。縞の財布を投出しさらばとばかり フシ言ひさして跡は。涙に咽びけり。地與次兵衛なほも有難き親の恩と妻の思ひ。別れの辛さに恍惚と。氣抜けの如くよろ／＼とスエテ前後も分かず見えければ。ウ是吾妻ぢや合點か。あれは奥樣お菊樣。さらばとせめて言はんせ。地エヽ氣の弱いお人やと力をつくる我が身も。人目を深く忍ぶ夜のいざ相駕籠とさゝやきて。袖打拂ふ春の霜 フシ駕籠の衆おじやと招きけり。ウ地お菊の聲もうらがれて。 なう何方に落付いても其の儘御無事の便りを待つ。泊り／＼の朝晩に冷えぬ樣に頼むぞや。何やらいひたい事どもが胸にはあれど口へ出ぬ。只御無事で息災でといふより外は泣くばかり。フシ誠をいはゞ。我こそは。夫を連れて退くが道。何ぢや妬み憎んだ人。 相駕籠でやる妬ましさ羨しさと悲しさと。涙の筋は多けれど。愛しいばかり一道に。見送る駕籠も遙々と。 さらば。 ／＼なうさらばの聲を紛らす後夜の鐘。 跡へ戻るは雲の足。先へ急ぐは駕籠の足。せめて肩して留めもせず。戀の重荷に小附して親子の哀れ打乗せて別れ。行方や 三重

与次兵衛吾妻道行　下卷

歌 春に育つも花誘ふ。 蝶は菜種の味知らず。菜種の蝶は花知らず。知られず知らぬ中ならば。浮れ初めまい。狂ふまい物ナホス味氣なや。 △地吾妻立寄りヲヽ嬉しやお心も鎮まつたか。詞アレ御覧ぜよ蟲でさへ番ひ離れぬ揚羽の蝶。我々も二人づれ粋な同士の中々に。お心弱やと勇むれば。(歌吾妻請出せ山崎與次兵衛。 キン請出せ／＼山崎與次兵衛。 何時か思ひのナ下紐解けて。昔思へば憂や辛や。 憂や辛や忍ぶ昔も憂や辛や。 △地情なや誰あらう山崎與次兵衛樣とて人々に。後れぬ髮の亂れ心吾妻が顔も見忘れて。スエテ現なやと制すれば。○歌其方は藤屋の吾妻かの。 與次兵衛に揉まれて。色の ギン惡さよいとしさよ。オクリ近い／＼内には必ずと フシ請けて。 繋さしよ世帶して。 地子供儲けて二人が連れて 小オクリ お乳が。肩くまおてゝが日傘。肩で風切る山崎に。 親の御恩を振捨てゝ。 其方の世話になりふりも。本フシ昔には似ぬ男山今では人も秋篠や。 長地外山の松よ事問はん待つが辛いか別れが憂いか待つも別れもせぬ樣に。親の許した女房は。義理と情の二面。スエテかけて思へどかひもなく。半太夫今は野末の放れ駒。昨日はあづまに戀を乗せ。今日は故郷のフシ焦れ泣き。我から狂ふ秋の葉の。亂れて袖に置きもせず。 ハルフシ寢もせで露の。 たま／＼も。待たるゝとも待つ身になるな親と子の。便りを淩ぐ山崎の妻もさこそは亂れ髮。いうた詞が力ぞや フシわしが馴染は。三重の帶。 長い夜すがら引き締めて妬み悋氣の心なく。 預かる物は半分の主は忘れて居さんすか。 過ぎし月見は井筒屋で底意限なき夜と共に。 踊り明かした面白さわしや百迄も忘りやせぬ。 踊歌

忘れぬ物よ。見あかぬ君が。外八文字の道中姿。目つきで ギン殺す。所體になづむ。ギン傾城こまめにたらひが女房。請出したらひの フシ底拔けて。影も宿らぬ。きぬ〴〵の親を悲み妻を戀ひ。心一つを二しなに。名乗りて過ぐる。杜鵑 フシ己が父に似て。父に似ず。子は色里に初音ふる。ウヲヽキ儘は穢ねど大晝と。△花車が轟く口舌の門。遣手が叩く。△禿が睡り。二人皆夢の間の境涯と。フシ破れば不粋もなかりけり。フシかくは知れども。槹の絆の。蓮を亂す山風。烈しき親の諫めの詞。妻が別れの一言葉身にしみ〴〵と戀しやと。互に手に手を取りかはし フシ聲も惜まず泣きゐたる。地夕陽嶋に程もなく。西北に風起り東南に向ふ雲の足。コハリ梢木の間もはら〳〵〳〵。小川の水音さら〳〵さら雲の羽袖もひら〳〵と。彼方へ靡き。此方へ靡きくるり〳〵くる〳〵くるりとハヅミ廻り廻るや。月は行けども。

果てしなき思は目前親の罰。當つて砕くる男の姿走れば走り留まれば留まり。狂はぬ袖も亂れ心命。つれなき流れの身 ギン流れ渡りの世の中に。暫し留まる賤が家の軒を。尋ねて 三重〽 悩みけり

フシ鶯渡淵梅に。名を取り松繁り。地紅葉の錦晝さへや夜見世を新にお許しと。疾しや遅しと見に累四郁の町の軒深く。燈火星の如くにて。三五以上の月の顔オクリさす汐影のわけもよき局。〳〵の手拭は濡れぬ隙こそ。フシなかりけり。地太鼓は打たで大門に轟く馬の高嘶き。井筒が許へ乘戯の客は八幡の雜與平。威勢美々しく飛下るれば亭主迎ひの槌で庭。はくまい九郎左見忘れか。詞富正月には造作の上。地貴殿が南國に雜與平。以前は金銀内大臣今日參るは内證に。樣子も金もある大臣罷通るとすつと入る。詞にさうよお珍し先づお茶烟草と輕薄に。油載せたる燈臺もはや立ちかはり蠟燭の。フシ流れの里ぞ氣散じなれ。九郎左近うと招き寄せ。詞知らるゝ如く此の正月藤屋の太夫に貰うた金。直に東に芽を出して入いたおすのどが儲け。馬の脊骨も折りかひあつて此の度罷歸る所。太夫吾妻は廓を過出し。闇な破りし科人と行方を求め搜さる由。道中すから承る。恩を受け詞を背ひし此の與平結置いては男立たず。地歩を請出し世を僥うしてやらん。吾妻が年期の證文あらん此方へ貰ひたし。金に換へて今宵の中に首尾する樣九郎左御差配々々と。ちよつとの露もしつぽりと フシ家内潤ふばかりなり。詞お目出度い〳〵御聞きとあるからは申すに及ばずさりながら。不思議な事がござります。今日暮方に田舎めいたる浪人衆。吾妻は爰に居られずとも手形なりとも身請がなしたい。地金はなけれど一腰の宇多の國行。二尺許りの大刀物折紙共に引換へと。奥の座敷に居られます親方へはまだ知らさず。お前と一所に親方へ フシいうて見まし

よと立出づる。表の騒ぎは薬屋の彦介どか〳〵と入り來る。詞コリヤ珍しい旦那。とれたか〳〵。果報な九郎左金儲けうなら我等に廻れ。輕いお出が身請の談合強いか〳〵。知つた通り此の春早々。山崎の與次兵衛めに小鬢先をちよつられた弓矢八幡堪忍せぬ氣。代官所へも訴へ親淨閑に御預け。内證から手を入れて段々と詫言する。金銀で扱へば百萬兩でも聞かぬ男。コレ見よ疵も平癒した。與次兵衛めは憎けれども。親めが心が不便さに許してやつた。其の禮とて目くさり金樽代としてよこした。酒戻しはせぬ物ゆゑまあ受取つて置いたぢや。吾妻めが關破りも。與次兵衛が唆しお預けの内を連れて逃げた。淨閑は其の祟りに吾妻與次兵衛尋ね出す迄。道具諸色に封印付け嚴しい閉門。聞けば與次兵衛めは野倒死したげな。出れば其の儘切らるゝ首仕合者ぢやあるまいか。扨談合は吾妻が事。關破りの科人こいつが命も助からぬ。佛性に生れ付いたが彦介が病ぢやわ。是も助けて取らせたい。先づ吾妻めが手形を請出し。跡では緩々行方を尋ね飯でも焚かせ。すゝぎ洗濯。手足擦らせ一生は養ひ殺しにする覺悟。地彦介なりやこそ斯うもいへ相談して埒明けい。コリヤ現銀ぢやと五十兩亭主が前へ投出す。與平始終を聞きすまし御免と襖押開き亭主々々。詞吾妻が身請は身が先ぢや。地金子は是ぞと持せたる。千兩包みの木地の臺前にずつしり飾らせたり。前後の爭ひなさるれば此の浪人者は一番と呼ばはつて座敷に出で。身請の代金此の一職三千貫の折紙と。共に投出す態恰好中身は見ねど與次兵衛が。物語の治部右衛門。擬なしと雖與平。シ口を閉ぢて覗ひ居る。地亭主九郎左は福徳の三方論議に行當り。兎角は親方料簡次第呼びにやらうか身が參らう。それは御九郎左〳〵とフシ獨語して駈出す。地跡は互の睨み合ひ彦介は手懲した。與平が顔の氣味惡く心も心ならねども。見つきはきつい服部育ち。烟草盆引寄せて烟吹出す佛頂面。烟管で逃ぐ灰吹をフシ叩いて返事を待ち居たる。地吾妻が親方勘右衛門亭主に連れて座敷に出で。詞様子は九郎左物語り吾妻が手形を身請とは。遂に廓にない格にて。兎角のお返事申しがたし。何れへ手形上げましても。此の事世間に流布あつて駈落させた跡にても。金さへやれば濟む事と惡い性根を吹きこまれ。地そこにも駈落爰にも逃げた又しては關破りと。廓の騷動親方仲間の難儀なり。此の相談はなりますまい。一旦吾妻が顔を見て其の跡では能い樣にと。聞きもあへず聞えた〳〵。詞樣子は知らずに此の彦介早速吾妻を尋ね出し。地身請はおれがが詞を書うた罷歸るとすれど立つ。さゝはさせぬと雖與平小鬢取り引かついてどうと投げ付け背にしつかと打跨り。詞逃足も往に足も達者に生れ付いた男。動かば頭微塵に砕く合點か。藤屋の勘右衛門千萬々の詞に聞き出しお

妻が顏を一目見たらば其の座で身請は違ひないか。何の虛言申しませう。末に年期の少ない吾妻。今迄金は儲けてくれる僞は申しませぬ。ム、面白い代官所の首尾も別條ないか。其の段も此方より申し下せば相濟みます。珍重々々。下々ども其の革葛籠持つて來い。亭主二つを開かれよ。地あつと葛籠の紐とく〳〵。中より吾妻與次兵衞フシ正氣になつて立出づる。地彥介はびつくりし親方亭主も與覺め顏。治部右衞門は包みかねヤレ與次兵衞か治部ぢや〳〵。無事な顏見てフシ嬉しやと跡はいはずの悅び淚與次兵衞も頭を下げ何事も御免あれ。親淨閑へお詫言。詞賴むに及ばぬ淨閑の心入れも聞いてゐる。吾妻もいかい苦勞めさつた。ナウ親方殿此の一腰に引換へて。地吾妻を身どもに下されと手をつけば。吾妻も久しい九郎左樣。旦那樣へお詫言スヱテ賴みますゐると泣き居たり。詞與平勇んで彥介を取つて引立て。おのれよう聞け此の與平が江戸へ稼ぎの根本は。吾妻殿を請出して廓の苦患を助けんと。思ひ込んだる一商ひ。五百貫目に間のない金手間隙入らず儲け蓄め。立歸る道すがら與次兵衞殿にもお目にかゝり樣子は段々聞屆けた。おのれを切つたは此の與平。與次兵衞殿に難儀を見せ金銀大分取つたな。地打ちのめしても腹癒ねど。目出度き時節ぢやとつとゝ歸れと突放せば。詞アヽ有難や正月も此の座敷で取つて投げられ。跡は切られて今日は又。殺さるるかと思うたがお助けは忝い。地三度數か合ひましたと逃出づるを治部右衞門。腕挫ぎに取つて投げ。詞おのれはとうも往なされぬ。淨閑が言譯させ。閉門御免請けねばならぬと手ばしかく縛り上げ。身請は濟んだか與平殿。地いやまだ濟まぬ。金子に千兩一枚の。手形に換へてと難與平親方が前に置く。詞勘右衞門頭掉り。來二丁には年も明き身任せになる吾妻。千兩といふ金取つては人の思はく男が立たぬ。金取らずともと申したけれどよもや左樣はなされまい。跡六月をば三百兩殘りは入らぬと突戾す。地與平素より氣散じ者出來た出來た。手形は取つた金取つた吾妻が身請濟みました。其處で請出す三百兩打つておけ。しやん〳〵。ま一つせい。しやん〳〵。すつつとせい。詞コリヤ亭主。此の千兩は始めより身請に當てた。一錢でも殘しては本意ならず。三百兩は亭主にはづむ。コリヤ忝い。二口合せて六百兩。打つておけ。しやん〳〵。四百兩殘つて氣にかゝる地寄つて祝へとばら〳〵〳〵フシ金は座敷に色變へたり。揚屋の男女別ちなく。押合ひへし合ひ拾ひ取り皆取り込んだか目出度い目出度い。祝うて三度しやん〳〵と手拍子に口拍子。仕合せ拍子の三々九度。末は千秋萬年も變らぬ。妹脊を重ねける。

近松門左衛門作

序詞天照大神に奉る。四月九月の神御衣は。和妙の御衣廣さ一尺五寸。荒妙の御衣廣さ一尺六寸長各四丈。髻糸頸玉手玉足玉の緒のくり返し。神代の遺風末の世に惠をおほふ秋津民。千早振袖廣戈の國平けく御す。天照大神の御孫。天津彦火瓊々杵尊と申すこそオロシ代々に王たる。始なれ。地久方の日の神の御影映りし八咫の鏡。是を見る事吾を見るが如くせよとの神勅にて。民値みの仁の道。百王の後迄も内侍所と崇めらる。地さて又御先祖伊弉諾尊より御相傳の十握の寶劍。これ勇の形義の理。御叔父素盞嗚尊猛く勇める御器量とて。此の寶劍を預り王を後見ましませば。神璽に不測の禮智あり三種の寶の神德に。家に樂み野に耕し。手拍つて謠ふ土民迄。式を越えざる玉垣のフシ内つ。御國ぞ道廣き。地三十二臣の棟梁藤原の大祖天津兒屋根の臣。御前に正笏し。詞王既に寶祚の御位。天下萬民の父母たる御身。夫婦妹脊の道缺けては王道いかゞ行はれん。御心に入り御目につきたる女あらば。夜の御座に召入れられ然るべしと奏聞あれば。地耻かしげに御顔を打赤め。二柱の御神始め給ひし夫婦の道。色を好むは僻事ながら。詞去年の冬豐明の燎の影。垣間見し面影の身に立添ひて忘られず。地露のかごとに名を聞けば大山祇の臣が娘とや。深山の立木野邊の草瞬かぬ方はなけれども。引くにひかれぬフシ戀草の。種を誰かは植初めしと。貴き賤しき戀の癖スヱテ浮世。恨みの御詞。兒屋根の臣を始め伺候の群臣一同に。詞こは勿體なき御仰ち。何事か御心に叶はぬ事や候べき。折しも大山祇御前にあるこそ幸ひ。御分の息女御宮仕へに參らせ。叡慮を慰め申されよはやはやお受けとありければ。大山祇謹んで臣娘二人持ち候へども。姉岩長姫は容貌醜く不束にて。心まで拗々しく。親の目にさへ疎ましき生れつき宮仕へは思ひもよらず。妹木花開耶姫容貌心さま姉と變り。地女の數にも入るべき者。宣旨違背候はじと勅答も終らぬに。鰐香背の臣といふ奸曲の佞臣。高遣戸荒らかに引開け大山祇の前にどうと坐し。詞これ山祇。御邊が性根はあるかないか胸の中を捜して見よ。開耶姫には忝くも。素盞嗚尊御心をかけられ。此の鰐香背の臣がお使にて御所望ありしは何と〳〵。娘を天子へ上げたくば上げて見よ。又素盞嗚尊へも上げさせて見せんず。地度性根を定めよと御前とも憚らず。袴の裾けはらかし禮儀をくづして責めかくる。詞大山祇ちつとも臆せず。いはれぬ人の性根穿鑿。先

綱も戀に紅のもみに揉うてぞ三重へ暮急ぐ。フシ月も眞澄の。御曲鏡惡魔降伏の御祈り。今夜始めて御戸開き薄輝く瑞籬に。御神樂採物うたひ物御魂の鏡世を照す、磐戸開けし始め迄爰に覺えて君と臣。心も合に大山祇の妹姫、姿容貌は名に顯れて是ぞ木花開耶姫。此の日の本の寶物拜むといふも稀の事。心の障りない樣に姉樣へは沙汰なしに。いざとて局腰元や中居なんどをお供にて、賢所に參詣あり。スヱテ添しと正直の。其の一筋を御注連繩。フシ神も受けさせ給ふべし。心しづかに姫君。幣奉り再拜し。詞なういづれも能う拜みや。あの眞中に月日の如く。照輝かせ給ふこそ御鏡と申す物さうな。地右は神璽の御箱左の箱は十握の御劍、則ち三種のお寶物。詞中にも八咫のお鏡は正眞の天照太神樣。萬の願も叶ふと聞く。地いかなる御緣か帝樣より。自らに度度の御玉章我とても恐れながら。貴なる君がおいとしう思ひ沈みし戀の海。天津兒屋根の奏聞にて内裏へ召さるゝ筈なれども。地詞姉岩長姫樣の法界悋氣が邪魔となり。何のかのとて遲なはる姉樣の氣が和らげば。自らが戀も成就する邪險なお心やむ樣に。立願賴むと宣へば。早苗の局が御尤御尤、詞岩長姫樣のお根性のわるさと申し。私はじめ眉目のわるい女子も多けれと。扨も〳〵念頃に見度もない。お顏ならとりなりなら交りなしの本惡女とはあのこと。惚れて進ぜる男はなし滅多腹が立てのわんざん。どなたの御意見でも聞入れの有る氣質でない。地賴むは神樣サア、腰元衆も願かけやと力をつくれば姫君も。猶伏拜み〳〵顏ふり上げて。詞ヤア是は不思議なあれあれ。地御神體の中に此の世にござらぬ母上樣。年月經てもお顏は忘れぬお年もよらずみづ〳〵と若やいで。唇は動けどもお聲は聞えぬ。自らを憐み神の惠みで見え給ふか。胴慾な姉君に意見してたべ母上なう懷しやゆかしやと。鏡とは名を聞くばかり世にひまらねば見始めの。向ふ我が影映るとも、地白木綿かけし神前は フシ涙悼る哀れさよ。地御拜も終り瓊々杵尊若し彼の人や詣でしと。高殿の御簾押しやり叡覽あり。姫はそれとも瑞籬に打ち傾きし後姿。御覽もあへず御心騷ぎどん〳〵轟く御胸は。神樂太皷の現なき形は八咫の鏡の中。爰にといはぬばかりにて、映り向ひし御俤。あれ戀しき君よと飛立つばかり抱付かんも手は屆かず。折られぬ花の開耶姫あるにもあられず是申し。詞及ばぬ雲の上人樣恨みと申すも恐れながら。姉に妬まれ責められ憂き目辛き目地神を祈り歎くをも。憐みの御心なくなま中にお姿ばかり。お詞もかけられぬはしたゝるいがお嫌ひか。あつさりがお好きならどうなりと御意次第。いとし可愛のお文は。誠かほんか覺えてかいのとの給へば。君も憧れほく〳〵と首肯き給ふ鏡の影。詞ム、其の御心底なれば。添うて猶戀しいのび〳〵なはこちやいや〳〵。地今宵は館へ

歸らず夜の寢殿に只一夜。枕もいらぬお褥のはしに宿かりたいとざゝめけば。君もせかるる御心穗に顯れて聲たてぬ。袷に書く柳糸櫻。うなづき合ひつ招き合ふ戀は フシ昔もなまめかし。地早苗の局もどかしくアヽ辛氣。詞口でばかり濟む事かお側へ寄つて抱付いて。地仕やうもやうもありそな事と氣をもめば。地いや待ちや〳〵合點がゆかぬ。あれが誠の

我が昔ならば、召したる衣の襟付が右簡の嘗左簡に見ゆるは外より映る影ぢやもの。エゝほんにだまされた。地抜かれてのけたと氣も脱けて、人々とほんと月夜に釜の二度恨む後より、姿にノヽと物蔭の、御簾をしるべにふり返りハア是ぞ我が戀我が思ひと。走寄りすがり付き。言の葉もなく。科もなく、互ににつこりにこ〱瓊々杵尊。笑顔と笑顔打ち重ね引き寄せだき寄せ締寄せて フシ几帳にまつはれ入り給ふ。地局を始め腰元下婢こ、こぼれかゝり乗りかゝり覗きさゝやき羨むも。女心の珠旒物見だけきが フシ色ぞかし。誰が斯くとも。岩長姫。我に隠れて妹が内裏へ参るは曲者と。衣打ち被き只一人。御殿を見れば女房達奥を覗きひそめく體。扨は妹めと帝と寝くさつたエゝ妬ましい羨しい。見居けておのれ引裂いてくれうものと。うつほ柱に身を隠し聞くとも知らで女房達。詞此の事構へて姉御へ隠しや。もし耳へ入つて怖い顔に瞋恚もやさばなうこはや〱。地さりとは違うた御兄弟。妹君は天下の美人姉御の面は何に譬た。詞鼻口に蓮切鼻。眼は釣眼に鉢額。耳は木耳頤は栄螺殻に脊尻に鰐足あるきぶりは家鴨の所知人。詞ごしは破れ鍋あの様な醜女と、夫婦になる男はよく〱の運の悪き。それでも枕をならべて側にがさりと寝たらば、地毬栗頭髭いばら髭 どさと打ちおろしの荒鍵、顔木鐘破鐘、突く様で 鯛す様でしつくりぼつくりがつくりしやつくり寝返り フシ打つたら寝られまいと 地どつと笑へば岩長姫。詞ヤイそれや誰が事ぢや。ま一度ぬかせ。地顔顕て〱蹴散さうと御殿もゆるぐ雷鳴聲。わつと平伏し女房達。世直し〱桑原と フシ生きたる心地はなかりけり。詞うぬらは暇な任せに人の顔の講釋か。よう妹を連れて來て姉の戀の上褥はねさせたなあ。地わらはが大事の戀君とねく〱寝させて置かうかと。走廻るを早苗の局いだきとめ引据ゑ。詞これ岩長様たとへ醜しき土民でも。身を慎み世を憚つるは女の嗜み。大山祇の臣の姉姫君はどこぞ大内、人の謗りを思召さぬかあさましや、人のいふが誠かうそか偽りのない天照大神の神鏡に顔の映るを見給へと。地香取付き押立て〱八咫の鏡にさしむけたり。コハリあら恐ろしや魑魅不昧の蕊に照らされ、内ふ如夜叉の相顕れ、まさに映る悪鬼の面、眼は酸漿牛の角上下の牙は劒の如く。見る人はつと氣を失ひ フシ暫し。絶え入るばかりなり。地我と我が身の鏡の影始めて驚く氣色にて。あきれ果てゝ見えけるが。詞ヤイ局。鏡に映るわらはが顔は何と見た。アヽ形ばかりは人なれども心の鬼のしるしには。悪鬼に見えしといふより早く飛びかゝり。地髻を摑んで膝にひつしき。エゝ口惜しや神明の幣に。詞四大五臓を探され正體見られし腹立や。地生け置いて己れら人に語れば我が身の仇と。雨の腕ゑいと引きあげ。二つにさつと引裂きしは フシ薄紙裂く

か如くなり。地なう怖やと腰元下婢身の毛を立てて逃げ惑ふ。ヤア逃ぐるとて逃がさうかと。大手を擴げて追廻はすフシすさましかりける勢なり。地折しも天津兒屋根の臣奉幣に參りかゝつて。詞此の有様見るよりつゝと駈隔て。ヤア心きたなし岩長姫。妹なれども開耶姫は后妃の位恨み妬むも恐れなるに。詞剰へ宮中といひ三種の神器の寶前にて。神も君も憚からず法を知らぬは畜類同然。汝も大山祇の娘ならずや。恥を見ぬさき罷出でよとはつたと睨んで怒り給へば。岩長けら／＼と嘲笑ひ棟梁の臣何ともない。討たれうが斬られうが。本望遂げすは動かぬと睨みかへす瞳の光。地人間ならぬ鬼畜の相扨こそ變化ござんなれ。いで物見せんと掛巻も。賢所に駈上り神鏡抱き奉り。頭に捧げ口には天津太祝詞。悪女が眉間に差向け差當て。千早振る。／＼和光の稲妻閃き渡つて。岩長姫の暗き心の巌も碎くるばかり。五體を縮め身をふるはし。驕慢我慢の勢ひ絶えてよろ／＼と。足弱車の廻り歸れば追立てられ。追廻し／＼。又立戻ればおう／＼大床フシさして追下す。地かゝる騒ぎのあるぞとも。知らでや素盞嗚おのづから。戀にフシ揉まるゝ御姿。開耶姫を奪取る迄と人目を包む通路の。門も築地も飛越えて恐るゝ闇は恐れなく。もしもや我を咎むかと驚く物は風の音。忍ぶにつらき月影のさしもに猛き御心も。わりなき思ひにかきくれて爰よりや入るべき。彼處よりや入るべきと前後に迷ひ立ち給ふ。詞上臺盤の方に呼ぶ聲しきりにて。恐ろしや凄しやと。逃出づる上臈を袖に控へてこれこれ。詞いかなる騒動ぞ通ひさまと言へば。なう申し岩長姫は變化にて。地今は鬼の正體顯れ早苗の局を引裂き。御座の間近く入らんとせしを。兒屋根の臣様御鏡を以て追拂ひ。地御殿の騒ぎなう怖やといひ捨て散り／＼フシばら／＼にこそ逃出でけれ。詞ムウ扨はきやつめが討手を蒙りし。美濃の國の悪鬼が化身よな。退治延引の間を窺ひ十握の寶劔を盗み。此の日の本に鬪の魔を倒らん爲の悪巧の所爲。丸が預る寶劔を盗まれては末代の不覺。葦原國の武勇の破滅我が恥辱と。地寶殿に駈上がり御前の戸封ゐいやつと捻切り。御劔を御身にしつかと携へ。ヤア神通自在もなさばなせ寶劔は渡さじと。獨りごととして在す處に。思ひもよらぬ簾中より天稚彦つゝと出で。詞内裏に悪鬼顯れしと承り。御跡慕ひ駈着けたるか尋ね申したりいざ還御と申しける。ヲヽ出來した／＼。一大事は此の寶劔。汝供奉し館に納め油斷なく守護し奉れ。地我は此の穢れに開耶姫を奪取り。追付け伴ひ歸らんと。うたてや御劔をやす／＼と渡し給へば押戴き。詞仕おほせすや彼の悪鬼と申すは。天にあつては雲の八衢に棲み。地にあつては八方八隅に遍滿し八色八面の悪蛇。此の寶劔を奪はん爲。大山祇が娘と生れとつくに取るは易けれども。相殿にまし

ます鏡の威光におされたり。地八萬年が其の間念をかけたる此の寶劍。望み叶ひし嬉しやな岩長姫は我なりと。いふ聲も山彦の鬼女と顯れつゝ立ちたり。尊いらつて牙を嚙みエ、口惜ししたばかられし。八萬年の望なりとも半時持たせ置くべきかと。御怒りに顏色もあら／＼すさまじや荒神の。天の蠅切拔きそばめ。禁裏雲井の樓閣の。神殿本殿廊下渡殿御階のもと。切りかけ／＼ほつ詰められて通力の。電光石火水の月。前に顯れ後に消え。震動雷電頻りにて。内裏も虚空に廻るかと兒屋根の臣を始として。雄走の臣速日の臣。三十二臣四方を堅めもらさじ物をと詰めかけたり。惡鬼が身より火焔を放せば尊の劍の電光。恐れて虚空に飛上り。地其の高さ七多羅樹たとへ天地は覆るとも。取つたる劍は返すまじと。逆手にとつて柄頭より。ナホス地鬼一口に呑むぞと見えし。コハリ朝拜殿に尊あれは齋機殿に惡鬼あり。齋機殿に斷入り給へば新嘗殿に惡鬼あり。新嘗殿を追詰め給へば。殿上晝の御座ナホス夜の寢殿を行違ひ追廻し。惡鬼の叫喚尊の雄詰。太刀音足音ゑいや聲大地も裂くる三重ばかりなり地惡鬼が飛鳥の翔りをなせば。尊は射る矢の早業猛く。又に追詰め兩腕切り。彼處の詰りに兩膝薙ぎ。踏伏せて首打落し。太腹胸骨五體を八段に切碎き。膓をずた／＼に切りさばき見給へども。呑んだる寶劍あらざれば勇みに勇む素盞嗚の。彌猛心の力もつきフシあきれ。果てゝましますに。コハリ魔風どつと梢を鳴らし。切離れたる八つの死體うごめき出でて集り寄り。一團の火焔となり寶劍をひつ包み。響渡り鳴渡り。ナホス車輪の如く舞上り。フシはためき閃めき飛んで行く。地尊は身をもみ拳を握り翅なければ飛行なき。虚空を睨んで立つ空に。雲を巻込む颶風さら／＼／＼どう／＼／＼。四大海のあら波の。天にさか卷く如くにて其の行く方は天さがる。カカリ國の果島の果海龍王の棲家まで。探し求めず置くべきかと無念の涙。はら／＼はら／＼。兄弟の月讀日讀も照覽あれ。寶劍を取らずんば都に歸らじ地は踏むまじと。誓ひを堅め踏堅め。踏んだる土や粗金の金鐵の德備つて。强きを破り難きを割り。硬きを碎く牛頭天王。末世の惡魔疫神を防ぐ。神威ぞ有りがたき。

第二

地萬古目前の境界懸河渺々として巖峨々たり。山復山何れの工か青巖の形を削り成せる。水復水誰が家にか碧潭の色を染出せし。天より降りし殯山見上ぐる峯も森々と。萬木雲を貫けば月日の影も目に見えぬ。フシ鬼栖む山ぞ恐しき。地厄神の首領三熊野大人眷屬部類の惡鬼邪神に圍繞せられ。黑雲に跨り坐し。猛虎の吼ゆる如き大聲にて語つて曰く。詞抑も蘆原國の始め天照大神に責付けられ。我等が類人民に仇をなさじと。手形の誓ひなしけるに。地我其の時は八重の汐合に隱れ棲み。彼の手形に外れし故。

此の度當國當山に住居し。風水山嵐霧霞と變じ。人民に邪氣を吹きかけ惱まし煩はしめ。氣をのみ血を啜るに日本人肥えて血の味あまく。眷屬の汝等まで腹を膨らす事唐土天竺に勝る。詞然るに素盞嗚尊といふえせ者。討手を蒙りあれ〳〵あれを見よ。麓に數萬の軍兵鏃を揃へ。鉾襖を作つて攻上る。そも素盞嗚なればとて何程の事あらん。地通力自在は此の度水を卷上げ火焔を降らし。身を隱さば芥子に入り。顯れば天に跨がり。軍兵蹴殺し踏殺し。力立する天稚彦が細首引き拔手足をもぎ。尊を捕つて八ツに引裂き梢に曝し。日本を魔國にせん。勇めや進め眷屬ども。怨々やつと喚く聲。雲に谺の木の葉を鳴し。麓に響く鬨の聲。石を降らせて雨交り土風山風 三重 一セイ〽 尊の昵近天稚彦。拔駈の功名し目を覺まさんと夕闇に。地物の具取つて肩にかけ。同じ毛の甲の緒をしめ。コハリ丈なる駒に鞭くれて。舍人も連れず只一騎。陣所を出でて鬼

神の棲む繁みを目がけ歩ませたり。春雨の足もしどろに雲深き。地嶮岨巖壁九十九折。三儀に吹來る風の音に。駒は頻りに高嘶きし。地フシ身顫ひしてぞ立つたりけれ。詞ヤア怪しからぬ空の雨風。鬼殿そびをかはるるな。ムヽそれ好いた面白いと。地鐙ふんばり鞍かさに突立ち上がり大音上げ。詞只今先陣の若者を誰とか思ふ。忝くも天地開闢の御神。伊弉諾伊弉册の尊の御子。天照太神の御弟神武勇力の譽れある。素盞嗚尊の膝下去らず。天稚彦とは我が事。手形外れか手形を背くか。三熊野大人蟲とやらんに見參せん出合へやつと呼ばはつて。地山を睨んで控へしは。如何なる天魔疫神もフシ恐れつべうぞ見えてけり。地山はひつそと靜つて答ふる物は嵐の音。エヽ聞いた程もない鬼ども。一疋も面出しせぬは天稚彦が怖いか。出でよ〳〵と乘廻し〳〵乘据ゑてひらりと飛下り。詞折角寄せても先陣の證據なくては後日の不覺と。地指添拔いて

松の荒皮押削り。腰指の石筆嚙濡し。今月今日當山に先陣をかくるといへども。詞臆病の鬼ども一疋も出合はず。近頃弱味噌鬼味噌の汁かけ鬼。喰殘す殘念々々。地素盞嗚尊の御內。天稚彦十八歲と フシ大文字にぞ書いたりける。地時に山谷鳴動し。コハリ古木を吹折る一嵐 頭の上に落ちかゝり。一丈餘りの鬼の腕朱ぬりの熊手といひつべく。毛は金銀の針ばり〳〵。甲の鉢をナホスむんずと摑んで引上げたり。ヤアしほらしい引かれはせじと兩足しつかと踏みしめて。錣に手をかけうんと留ればゑいやと引く。ゑいや〳〵おう〳〵わんと引いつ留つつ人力魔力。詞暫し勝負は粗金の。土を離れて引上げしは フシ釣瓶を釣つたる如くなり。地太刀を逆手につけども斬れども手答へなし。さしつたりと取直し切つて放す忍びの緒に。主は大地へどうと落ち。甲は雲間に引入て。虛空にどつと笑ふ聲 フシ山も。崩るゝばかりなり。地臆病の矮高慢者。鬱香背

大きに腹を立て。天稚に先陣越されし奇怪と、軍勢引具し一散に馳來り。詞軍大將を出し拔き制法を破り。拔駈せんとは推參と聲を荒らけ罵れば。いやさ手柄は仕勝ち、味方同士の腐言いふ手間で。鬼に向つて一句も出るか聞きたいく。地ヲヽ覺えがなうて大將がなるものかと靈越詞をおすりおけ。詞抑惡鬼追討の勇將、素盞嗚尊の執權、軍大將鰐香背の臣とは我が事なり。名を聞いてさへびつくりせう。顯れ出でて怪我せうより。怖くば何奴も出をるなといかめしげに呼ばはれども。フシ胴はわなく顫ひけり。地諸卒を下知して天稚彦。さしつめ引きつめ射かくる矢先。惡鬼も堪へず爰の梢かしこの雲間。異類異形に身を變じ。土石を飛ばせ火焰をはなち。人畜兩陣入亂れ火水を散らして三重〵挑み合ふ。地寄手は大軍四方八面に切立てられ。鬼だまいにくわつくと フシため息ついてぞ控へたる。地其の中より犢牛の二疋づれ。鐵杖提げ三

熊の分身隱れなき。詞滅鬼積鬼といふ早業。鰐香背が名乘りやうしやらくさく人臭く。鼻がひこく香しゝ。サア出て勝負せい。地汝等が世話にいふ如く我等が煎餅嚙む樣にっがりく嚙んで呑まんずと大口あいてぞかゝりける。詞に似ぬ鰐香背がたくふるうて逃げんとす。天稚彦草摺とつて引戻し。詞敵に聲をかけらるゝは弓矢とる身の好む所。軍大將のお働き見物せん所望々々。地一戰と突出されてふるひく拔合せ。二打三打うつと見えしが。滅鬼積鬼がちらつく早業。打立てくぼつ立てられ。エヽ血醒い鬼どもむさいくとかいふつて。味方の陣へ逃入りしを フシ笑はぬ者こそなかりけれ。地勝に乘つて追かけ來るを天稚隔て渡り合ひ。上段下段に斬結び。飛鳥の翔の手を碎き。弓手馬手へ切散らしをめいてかかる眷屬ども。得たりやおうと聲をかけ。當る者を幸に落花微塵に 三重〵斬散らす。フシ大將二熊。地三尖二刀の鋒かるくと横

たへ。づしりくと搖ぎ來る。鰐香背きつと見るより何でも爰は思案所。彼奴を討つて天稚に鼻あかせ、今の面目雪がんものと。胴をすゑても齒の根が合はず。間近く來ればびつくり狼狽。アゝく待ちやく草鞋の緒が解けたと、屈むる弱腰むつと取り、うんと差上げくるくと振廻し。大地へどうと打付け既にかうよと見えるが。天稚すかさず飛びかゝり只一討と振上ぐる、太刀の柄むずと摑んで引寄せ兩の膝に引敷いたり。ヤアどつこい汝に敷かれうかと。跳返さんくと揉合へども。大磐石を負ふ如く フシ眼も飛出るばかりなり。地素盞嗚遙かに御覽じ百獸の洞の内。獅子のたける如くにて一文字に驅着け。二熊が項を摑んで輕々と差上げ 岩壁にどうと打付け胴骨をしつかと踏んで突立ちあがり。怒れる御聲にて。詞汝いかなれば我が國に溢れ出で。岩長姫と生をかへ。丸が預り奉る寶劍を奪取り。神國の寶を失ふは國を傾けん爲か。丸が勢

を押へんためか。蛇上にて呑んだる寶劍。地何國にか隠せし出せや出せとはつたと睨み。退散魔軍の御足にかけ。寶劍出せと踏付け給へば。通力自在の三熊も天孫自然の威力に押され。苦しげなる息をつぎ。詞あら畏れあり何故にか。此の國の神寶を奪ひ奉るべき樣更になし。彼の寶劍と申すは出雲の國簸の川上。鳥上の嶺に億萬劫を隠れ棲む。八岐の大蛇と申し。一身八頭の大蛇奪ひ取り、鱗の皮肉に隠し置く。彼の大蛇を滅し給はば寶劍再び神寶となり給はんこと疑なし。地全く我等が奪ふにあらず命を助け給はれと。はら／＼零す血の涙。鬼の泣くのは人よりも フシどうずけなうて哀れなり。地尊あざ笑はせ給ひ。詞當座の命を遁れん爲。丸を欺く愚か／＼。汝が奪はぬ證據を出せと踏付け給へば。アヽ申し申し御嬉び御もさりながら。天地の間の悪鬼悪蛇、同類同性とは申せども司る役々に變りあり。我等は疫神の首領四百四人の眷屬ども。人間に四百四病を與へ。業の盡きる命は取り。非業の者は殺し申さず。神は正直鬼神には橫道なし。世界の人が無病で死なぬ例もあれ。微塵も偽り申さず末世末代の人間、尊の御名を稱する者守護神となり申さん。地今の一命お助けと首領が頭を下げければ。在合ふ眷屬一同に。御免々々と泣く聲は。數千疋の犬狼。ヲン一度に吼ゆるが如くなり。地尊得心まし／＼ヲヽいしくも申したり。助くべき物ならねど。詞寶劍は八岐の大蛇が取りたると告知らせし恩賞に依つて眷屬に至る迄。此の度の命を助け置く。重ねて我が國に仇をなさじと誓ひの手形。地天照神の御神勅に任すべしと。肩骨つかんで投退け給へば。有難し／＼命助かる手形なら千枚でも致さんと。眷屬どもゝ活々と喜び勇み跳ね廻る。フシ鬼踊とも云つつべし。地△鍔香背天稚聲をかけ。詞ヤア／＼御前なるわ靜まれと。地一紙の卷物着到硯一疋へ、罷出で、名乘つて手形仕れ。○あつと答へて步みくる オクリしらが。交りの蓬の髮。杖に縋つて フシ屈み腰、地△彼奴は鬼のコハリ家老かや。いかなる病の神やらん、さん候某は冬の雪の夜秋の霜、寒氣の折々蟲となり。鍔香背殿の腰の廻り。御見舞申せしお馴染の疝氣の神。御見忘れは曲もなし。當代人間賢しくして鍼へ、上れば搾の實足へ下ればふじ三里灸と鍼とに行方なく。近頃慮外なナホス小袋に屈みまするが顔しかめ。手形捺してぞ フシ入りにける。コハシム次に出でしは目の内まで。眞黄に染まる朽葉色、木の葉衣のうらぶれて黄なる涙に袖濡れしを。天稚きつと目利して、疑もなき黄疸神、汝の手では判の色も違ふべし。念を入れて手形おせコハリ○扨も見臓お見立の奇なるかな妙なるかな。別けてはどうも口なし色。只御推量お暖物、我等が禁物名を聞いても蜆汁、殼も怖いおら怖やと手形捺し／＼押分けて。ぶり／＼懐ひ出でたるを、鍔香背早く聲をかけ。我

も目利は劣るまじ。邪氣瘧の眞最中と。見た旨は三寸ナホス違はせぬ　フシいかに／＼と問ひかくるコハリ○いや／＼大きな薬違ひ。某は中風の神名は半身と申す者。桑の箸さへナホス左の手　フシ口をゆがめて入りにける　地△縮いて見えしは水膨れはつたり／＼腹の皮。可笑しさこらへて天稚彦。言はねど水腫脹滿神　二人申すに及ばぬ鬼の口とつてかも瓜山牛蒡。薬喰の其の印おせばおす手に水たりて。判も薄墨片隅から亂れ髪にしで切りかけ。氣へん／＼と咳上げて。鉢巻水鼻誰やらん。地○されば候某は。暑や寒やの風の神。手療治の生薑酒敗毒散に追出され。一汗さつと流れかゝりし橋杭の。悔の八千度百度も　フシ送られましたとコハリ捺しにける。其の外癰疔腫物の一統。虚勞陰去火動神。腹痛頭痛の頭神。急難急病内損外損。臓内癖瘕の神に至るまで殘らず手形を顯せば。巻軸は首領の三熊。左右の大手をしつかと捺し葦原國の人民は。無病息災延命と。ナホスいふ聲ばかり一紙に殘り。立舞ふ霧の殘山惡鬼は。フシ消てえ失せにけり。地尊は猶も御威勢り。慶賀の聲や勝鬨の。謡聲に打添ふ松の風。／＼靡く草木や日月のナホス旗を。なびかせ三重へ歸洛ある。フシ尊の御威勢。地隱れなく天津兒屋根の臣勅諚蒙り。梓河原に平張打たせ。文武の下司左右に從へ棟梁の臣下の預り。天の逆矛屋形紋の錦に恭しく。其の身は床几に悠々と　フシ尊を迎へ待ち給ふ。地先陣の天稚彦いきりきつて走り付き。詞ハア兒屋根の臣の御出かと棧敷の前に膝をつき。君此の度惡鬼を鎭め御凱陣隱れなく。悅びの御迎へと相見え。御念入る段御苦勞千萬。いやはや近國の悅び。お通りの道筋。土民姥嚊童までが御恩のため道を清める。箒よ土よと足を空に駈廻り。所々の領主郡主が出迎ひ／＼。一樽を捧げ御馳走。御内の我々迄行先の御酒で道捗參らず。此の棧敷尊おれより御覽じ。又隙取つては都入延引す。先へ走りて斷り申せとの仰せ。兎角御隙のとれぬ樣に。一刻も早く御歸洛あるが御馳走。ざつと御悅のお盃ばかり。お吸物など御無用。諸軍勢も認めよし。何にもお構ひなさるゝな。はれやれ大きなお心遣ひ。地ヤはや御旗の手の見えたれば御馬も近付き候と。聲もはやり雄素盞嗚のお馬も進む轡の音。凛々たる威風　フシあたりを拂つて見えにける。地天稚かくと披露申せば手綱を控へ。詞是迄の出迎ひ過分々々。思ふ儘に惡鬼を鎭め國靜謐推量せられよ。片時も歸洛急ぎたく殊に凱陣の路次。馬上用捨に預らんと。乘出し給へば天津兒屋根飛んでおり。詞端出の注連縄渡して道の眞中を遮り。尊に向つて大音上げ。詞和君も二柱の御子。天照神の御弟なれば御存じの事ながら此の注連縄は日の神窟を出で給ひし時。我等が先祖此の縄を引廻し。又な窟へ入り給ふなと奏せし故。神も此の縄越え給はず。長く此の國に留り給ふ御注連縄。地サアならば越えて

見給へ都の方へは一足も叶ふまじ。日月の御旗を渡し遠き韓國根の國へも。逐電あれと案に相違の顔色。尊を始め諸軍勢フシ呆れ果てたるばかりなり。尊馬より下り立ち給ひ心得ぬ事を聞くものかな。詞誤りあつて越ゆるならば。法を越え制を背くとも謂つゝべし。宣旨に任せ惡鬼を鎭め手形をせさせ。凱陣する素盞嗚何事か誤る。踏越えて入洛せんサア來れ軍兵と。既に御足を上げ給へば兒屋根の臣太刀に手をかけ。詞ヤアこれ〳〵。誤りなしとは猿の頰笑ひ身の上知らず。美濃の國の惡鬼退治を功に立てられんとは愚か〳〵。其の爲にこそ日月の御旗を預け軍勢を付けられし上は。それ程の手柄はなうて叶はぬ筈。シテ葦原國三の寶の其の一つ。十握の寶劍和君の好色戀慕より。化生に奪はれ給はずや。地既に出陣の時此の寶劍取らずんば。帝都の土は踏むまじと。天に仰ぎ地に向つての誓言はサア。覺えてか忘れてか。誓ひを背き手ぶりで歸つて神の式を越えんとや。僅か細き繩なれども一筋是を引く時は。内あり外あり上あり下あり四方あり。繩を取れば内外上下の別ちなく。闇も同然是。一心を表する繩。心に注連を引く時は。主從親子忠孝禮義の別ちを知る。是を別つを神ともいひ人ともいふ。分ち知らぬを鳥類。畜類とフシ名付けたり。今畜生の數に入つて越えたくば越えられよと一言四海を覆ふの詞。道理かな末代日本文武の政を司る。攝政關白の元祖。春日大明神と顯れ給ふはフシ兒屋根の臣の御事なり。地誠の道理にせめられてさしもに猛き素盞嗚も。雲を放れし雷の桑の立木に挾まれて。苦しむ形も斯くやらんしを〳〵として詞なくスエテ差俯。向いておはします。詞鰐香背旗竿取つて掻込み。アヽ正直過ぎたり我が君。常々申すは爰の事。帝の爲に親同然の御身がら。開耶姫の戀慕少女一人さへ御手に入れず。剰へ御命を的にかけ。惡鬼退治の討手過分とも御太儀ともいふことか。息もつかせずまだ寶劍が足らぬとは。悉皆帝の使ひがらし。地下郎下人を居らても禮をいひ賃を出す。德もなき無駄働き同じ手間では此の御旗を押立て。棟梁顔する兒屋根の臣を討つて捨て。直に都へ斬入り瓊々杵帝を追下し。君御位に卽き給はゞ。后も寶劍も居ながら天下は御心の儘ならずや。エヽ言ひがひなき御所存や。御謀叛思し立ち給へと鰐が魅入りし惡性根。尊殆ど打頷き。馬引寄せよ旗上げよと御謀叛のフシ氣さし顯れたり。地天稚彦鰐香背が持つたる旗竿ひつたくり。御膝元につゝかゝり大地を叩いて。詞エヽ〳〵口惜しの御所存やな。厄神どもに手形をさせさせ給ひしは昨日今日。其の手形は何の爲。日本の人民を惱まさじ。國の妨致すまじとの手形ならずや。今御謀叛の思ひ立。天下を覆すは國の妨げ民の煩ひ。鬼畜に劣りし御心。地甚深不識の了智を具へし兒屋根の臣を輕んじ。蟲同然の鰐香背風情に言廻され。天

ア、何のいの。腹痛ますに此方に產んで貰うた子。地 それ程の苦をせいではと。娌中の睦しき巨旦將來鼻に皺よせ仔細顏。詞 これ賤機。百姓の忙しい最中。爰らへ來てべら〳〵と隙入れて貰ふまい。地 いふ事濟んだらお歸りやれと フシ 愛相なき詞つき。詞 いかにも御意の通り人の手も我が手にしたい時分。此方の蘇民殿作るべき田畑はお前に取らるゝ。殘つて半畝か一反に足らぬ所。一日か半日にはつい鋤きしまひ。永の日を遊んで居て行末の詰らぬ事。どうぞお情に半分ならずば。せめて三分の一田地戾して下さる樣に。五百機樣まで申せとの事。まだ此の上に添へて進上と申さば御機嫌もよい筈。地 取返すと申すは御氣に入らぬと知りつゝも。言はねばならず申すも迷惑。我が物故に骨を折るとは我々夫婦。詞 ヤ何がなお土產と思ひ寄る珍しき物もなし。此のお守は聞きも及びなされたか。素盞嗚尊樣寶劍とやらを失ひ。大内を追出され流浪のお姿で。二三日此方にお宿を召され。明日か明後日出雲の國へお立との事。則ち是は尊樣のお寶疫神の誓紙の手形。地 是を頂戴せし人は。惡病雜病を遁れ。萬の災難を拂ふお守。宇賀石の夜泣御老體の父御樣。御夫婦も戴きて息災延命なる樣に。暫しが中申し下し借受けて參りしと差出す錦の袋。巨旦將來悅び三度戴き。是ぞ內裏に傳はる三つの神寶の其の一つ。神璽と申す天下の寶。詞 四五日以前南風烈しき夕暮。蓑笠悄れし旅人一夜の宿と賴みしを。非人か又は盜人の引入れかと思ひ。叩かぬ許に叱りこくつて追出した。エヽ殘り多い。聞けば素盞嗚尊蘇民が方に泊めたげな。蘇民の癡者。此の寶を奪ひ取り。帝へ上ぐれば御褒美恩賞方圖は知れぬ。是をぬつくりと持たせて置く其の律義から貧乏する。今巨旦が手に入れば招かぬ福德。此の寶を以て我も巨旦大王と呼ばれ。大國所領の主となる時。蘇二三枚敷の田地は。地 掘分しようと歸つていへとつゝと立ち。入らんとするを五百機驚きわゝり付き。あんまりな無理無體。きたない慾心持たうより。いつそ綺麗に盜みしたがよいわいの。サア返しやるかサア如何ぞ。エヽ男をもどく出過者とはつたと蹴のめし入りければ。ヲヽ踏まれうが撲たれうが非道をさせて見ては居ぬ。賤機樣恥かしい常住我儘ばつかり。明けても暮れても言合うてゐるわいの。待つて下され。取返して遣らうぞやと續いて フシ 奥に入りにけり。地 賤機あきれ氣も上り。エヽ悔しい事をした。心を宥め田地を取る輕薄に。大事の〳〵天下に一つの御寶を借り參らせ。ふか〴〵と手に渡せしは何事ぞ。詞 此の身をすん〴〵に刻まれうが微塵に碎かれうが。取戾して尊樣へ差上げいで置くものか。多年の恨夫婦が胸に積れども。獨子を養はれ慘う辛う當らうかと。無念を押へ打過ぎしは宇賀石といふ質を取られ居るゆゑ。地 其の無得心からは定めて宇賀石も殺してがな

棄てつらう。サァ其の守り戻しや。但しそれへ踏込んで聊爾をするが合點かと。思ひ切つたる面色にも我が子は如何にと四邊にフシ目をぞ配りける。地巨旦將來宇賀石小脇に提げ。詞こりや。此のがきめ養ふも田地取らう爲。女房の腹に總領が芽づくつた。彼奴は入らぬ連れて歸れと投出す。ヲヽ返さずとも連れて行く。此の子を取れば氣が廣い最う樂ぢや。これ巨旦殿兄御殿。蘇民將來を弟と思ひ侮つても魂があるぞや。今の寶は申すに及ばす。田も畑も藪も林も。今の間に取り返して見せう地待つていやと駈出づる。五百機走出で宇賀石が兩足しつかと抱き。待つて下され賤機樣。總領に立てんと契約で貰うた子。今戻して二人の親世間へ顔が出されうか。身にやどりし子胤を湯水と流し捨つるとも。世繼は此の子其の儘置いて我々が。一分立てゝ下され守りも何も呑みこんだ。此の五百機が返さずと引留むれば。なう恐ろしや大事の子。火燗

の中から拾ひ上げたと思ふもの。片時も安に置かうか。サァそこを放しや。イヤ放さぬと兩方義理と恩愛に。源手詰の宇賀石がスエテ母樣なうと歎く聲。地巨旦將來守刀提け詞ヤイ女め。胎内に總領持ちながら彼奴をとめて何にする。地放してやらずば此の餓鬼奴胴中より切放す。サァ何とこりやこりや／＼と閃かす。刃も危し放しもやらず只はあ／＼とフシ身を冷す。地エヽあた面倒なと振上ぐる刃の影。流石は生さぬ母心我が子を悲しみ堪へかねて。放す拍子きる拍子二つ拍子の間違ひに。跡を切つたる切先機框に切込んで。拔かん／＼と悶く間に母どつこいと搔潜り。嫂の手をもぎ放し頭の堅き宇賀石と。抱きしめ／＼。こけつ轉んづ走り行く心。嬉しや三重歌在所女郎衆は皆よい聲で一に麥唄ナ二に茶摘唄。三に早苗唄四に仕事唄。歌で石臼かろ／＼とサンヤレコナホスフシさかろ／＼と。地鋤鍬の柄や長き日に畑打つ腰も肩脱ぎて。暖かげ

なる春の水井出の。樋の口フシせき入れて。爰にかしこに小田返す。東田も五反田。西田も五反田。フシ中の畦道。來る人は。地巨旦蘇民兄弟の父食保の長。齢も今年米壽の田畑見んとて鳩の杖まだ足許は若草に。上る雲雀の水鏡顔は。老いても目性よく。耳こそ少し遠山松の。霜雪經ても膝腰は。根張強なる柳蔭四方をフシ詠めてやすらへば。地嫂五百機敷物かたけ。詞おういおうい。是はまあ／＼お年寄のいつの間にやら。人も連れず危なや／＼。地爰で少しお休み酒はあがらずお慰みにせんじ茶でも。茶辨當云付ましよといへども耳の餘所に吹く。詞ナヽ風もなうて長閑な。去年のいつからか久しう田畠を見ぬ故に。よろり／＼と出たれば又わつさりと氣が晴れた。堤の芝が青々と躑躅杜鵑花が早や咲いたの。さればさ／＼梅櫻が散れば蒲公英花は絶えぬ。氣の養生になりまする。ヤア／＼なんといやる。アヽしんきやの。是梅や桃や櫻が散れ

ば菫蒲公英花は絶えず。氣の養生と申す事。ヲヽ〳〵よう知つてぢや。梅干を酒醴で喰へば痰の薬さりながら。もう此の年で養生して何にしよ。腰膝抜けず心面白い時。ころりとやれば果報々々。イヤ〳〵まだ十七八年も置きまし。腰膝立たずは抱いて歩きます。ヤ何ぢや十七八の腰元置いて抱いて寢さしよ。ハテ譯もない途でもないことやんな。いかな過強い腰元も此の爺と寢たらば。破れ障子で骨ばかり味もしやゝりもおじやるまい。地なう恥かしや〳〵と笑へば嫁も噴き出し。畑うつ賤も鍬を捨て フシ腹をかゝへて笑ひけり。詞やれ〳〵をかしい親父樣。あんまり笑うて胸さきも晝さがり。地休み時いざこいとオクリ皆々〳〵打連れ立歸る。地四邊を見廻はしアヽ思はぬ笑に老の憂を忘れしぞ。なう面は笑へど心の底はをかしうない。詞此の堤の四方八町に五町。家に傳はる我が田地隱居の時三つに割り。二分は總領役そなたの夫巨旦將來に讓り。三分一は弟の蘇民將來。あの樋の口から向ふの松迄一霞讓りし上田。口に榮耀身に奢り皆他人の手に渡し。身代ちんふらりと聞くより内へも寄せ付けず。田地を見るも情なく此の遊足はむけねども。地今日ぶらり〳〵と是へ來て。アヽ重代の田地餘所の物になしたよな。此の地の底にまします埴安地神にも見放され參らせしと。歩み來る跣釘針を踏むごとく。一入臑もよろめきて。無念におじやる悲しいと。涙に老を嚙みませてスヱテ聲をも咽に詰らせり。地五百機ひつしと身に響き。おいとしや道理や夫の慾心一つより。弟御の憂目親御の歎き。いへば夫の惡名包むが道か云ふが道か。誰に語りて智惠をかる フシ人も涙にくれけるが。地いや〳〵夫を世上にそしらせ女の道はよも立つまじと。思ひ定めしこれ申し。詞蘇民樣の讓りの田地一寸も他人へ渡らず。親御樣の御意見にて兄御より弟御へ。憐みあれば御一家素直に睦じし。地是ようお讀みなされやと地をかきならし指を筆。書付く砂のこま〴〵は磨る墨よりもあり〳〵と。一字殘さぬありのまゝオクリ盡きぬ。眞砂も フシ讀盡し。父は驚く鳥の跡。誰が呼子鳥何時の間にかは巨旦將來。後の畔の楓に突立ち。きつと見付ける眼は更にそれとも知らぬ嫁舅が。鼻の先ついたる鍬追取のべこがばと打立て土埃かきまぜる土煙り。はつと飛びのく顔に砂。かゝる子を持ち男持つ フシ嫁舅こそ笑止なれ。地倅へ情なき無法者。女房の頬先張りこかし。詞何も知らぬ舅に男の身の上よう告口ひろいだなあ。砂に書いて見せうとは其の惡智惠を身が持てば。まだ分限になるわい。地物書くほで打折つてくれんと飛付く所を父摑みつき。元首押へてこりや畜生め。詞たつた今聞いて驚いた。數年ぬつぽりと親をよう瞞したなあ。女房を恨みすともうぬが大惡人慾の。魂はなぜ恨みぬ。弟の田畑貪り取り。養ふとはどの親。此の親を養ふに何程の田

畑かいる。着せる着物の中入は蒲簾の穂さもしい事ながら。朝夕の膳部も五穀はあるかなし。皆檪の實野老の根、地親にさへ是なれば身の始末さぞあらめ。若い者のよい合點と、苦い口を甘い顏して見せつるは、己れを人と思ひし故。可愛や弟の蘇民を裸にし。生きる間もない親に疎ませ中を斷つ。さぞや蘇民が親を恨みん不便さよ。詞宇賣石を返さばねだれ取つた大分の田島。地何故付けては返さぬぞ。人を損ひ獨世に立ちたいとて立たれうか。地神の鳥居の二柱一人は立たぬ。敎とかや。地天子の御寶八咫の鏡と申すは。詞善惡を照し給ふ神の御心地内裏にばかりあると思ふか八咫の鏡は面々が戴く。あの天にまし〱て。善惡を明らめ罰も利生も頭の上に。忽ち來るとは知らずなか。詞我が背中の垢穢れ我は見ねども人は見る。地心の内も其の通り根性を直してくれ。親は他人の善人より子の惡人が可愛いと。怒つゝ泣いつ氣を揉上げ。口說き歎きの親心思ひやられて哀れなり。地巨旦眉を蹙め。詞女めよう頰げたを叩いたなあ。これ親父。から生れ付いた巨旦今更產みもなほされまい。よしない子の世話やまうより身を苦にめされと。地叫んでも喚いても耳へはとう〱瀧の音。急迫せば猶聞えず。何ちや其の面つき待つてをれ。蘇民に知らせ一國に生恥かゝせんとよろぼひ出づる畦道。サア通つて見やと鍬よこたへ立塞がる。詞己れが遣らぬとて往くまいか。地此の道からと立戾れば又行く先を立塞ぎ。ならば手柄に通つて見やと振廻す鍬の先。父が頭骨はつたと打たれて畔の崖よりどうと落ち。絶え〱喘に息つかひ。女房顏に縋り付き。詞狂氣か巨旦殿。親御に鍬でもついたらば雲の果でも言譯はあるまい。地放しや〱と捻合ふ間に。父起きなほれ猶を便りに取付き這ひ上らん〱とする所を女房放せと突退け。打つて蹴すも不孝の罰の鋼先狂ひ。父が耳の根かはと打込む鍬のかねや冴えたりけん。地覺えず恐いと引く力水も溜らず親の首。すんばと切れて飛んだるは。ワッと劍にかけたる如くなり。地女房夢の心地にてはあとばかりに絶え入れば。傍若無人の巨旦も呆れて顏の色違へ、わな〱顫ひうつとりと氣もフシうろ。たへて見えてけり。詞エヽ恨めしい罰も咎めもない物と。女房の意見を餘所に聞き今思ひ當つてか。地刃もない鋤鍬で人の首が落ちるとは。日頃の惡業惡心が積つて鍬も劍となり。親殺しの科人とは天道よりなし給ふ。又此の罪が胎内の、子に報はんあさましやと口說き。泣くこそ無慚なれ。地巨旦すんと立つて裾捻ぢからげ脚踏みしめ。詞よい〱胸がすわつた。皆女奴が口ばしからと取つて押伏せ。地腰の手拭口に捻込み押込み。頤かけて引括り。帯引つ解き後手に縛り上げ。詞こりやとても惡人の名を取つた此の巨旦。父の死骸を蘇民奴が畠に埋め、地科を弟に塗つてくれうと鍬提げ。善惡二

つの畦境。果は我が身の敵石地を掘返し〱。ほるより深き罪科の。土も砂も身にかゝる後の報いぞ フシ恐ろしき。土掻上ぐる向ふの道。牛追うて來る人は弟の蘇民將來。ヤアこれはならぬと胸騷ぎ。骸を取つて引きずり寄せ。血性が脱けて早い骨の硬りやうと手足押しまげ骨打折り。首投入るゝ苫の下。やう〱埋み踏付け踏付け掻きならし。足跡かくす畠

土。是惡業の種蒔と フシ思ひ知らぬぞ愚かなる。地猶も近付く牛の聲素振りでも見られては。身の一大事何處に隱れん木蔭はなし。道は一筋行くも行かれずいぬるにも稻叢の藁引退け女房引立て押入れて。上には藁を引繕ひ我も木蔭を狩場の雉子のオクリ命〽大事と身を忍ぶ フシ忍ばぬ世さへ。貧しきに。地蘇民夫婦が情深く。素盞嗚尊に假の御宿參らせ。フシ今日出雲路に八雲立つ。道も野飼の牛の鞍。お腰を暫し掛卷も。冥加の爲とナホス フシ送り行く。地夫が牛の綱とれば。賤機御笠簑を持ち。主君の如く敬ひし。オクリ心の〽內ぞ フシ賴もしき。地蘇民牛を引きとめ。詞見え渡りたる此の野邊は殘らず親の讓りの我が地にて候ひしを。兄巨旦に掠められ我等の地とては是限り。兄の地を我が牛に踏ませんも如何なり。地是よりは御徒歩にて何國迄も御供と存ずれども。兄に取られし惡鬼の手形を取返し。跡より追付き奉らん。詞出雲の國鍬の川手摩乳が妻足摩乳は此の賤機が叔母なれば。かくと告げて御宿召され候べし。地暫しも別れ奉る御名殘こそ盡きせねと。スヱテ夫婦頭を地につくれば。地尊牛より下御成つて。ア、扨も世の人の心には品々あり。過ぎし雨の夜旅づかれ巨旦に宿を求めしに。つれなくも追出せし其の恨み。如何なればお事夫婦。斯くまで深き志。何時の世に フシ忘るべき。我寶劍を取返し三種の神寶揃ひなば。此の恩は報ずべし。それ迄の契約一つの祕事を傳へんと。詞畔の柳を手折らせ給ひ是を削り小札となし。紅の房を付け蘇民將來子孫なりと書付け。幼き者の襟につけよ。疫病瘧病疱瘡麻疹。一切の惡病を免るべし。地無道の巨旦が掠取つたる疫神の手形。彼等が爲には守りとならず。其の身に災難來る事三日は過ぎまじき。正直の人にこそ守りの驗も フシあると知れ。地百姓をさして天の下の御寶とは天照神の御神託。農業耕作怠るな。さらば〳〵と簑笠携へ出で給へば。夫婦は盡きぬ御名殘り。御機嫌よく御本望やがて〳〵と見送るも聲も。霞に別れけり。詞何と女房。有難い不思議に高位のお宿を申し。蘇民將來子孫とあらば惡病難病拂ふとのお詞。末代の寶とは此の事。殊に百姓を御寶と大神宮の御託宣。耕作怠るなと結構な敎へ。地稼ぐに追付く貧乏なし。サア〳〵油斷ならぬと耒耜の。牛と思ふな牛の尾もべらつきや遲い。牛の角文字急げは急ぐさせいほうせい出せば。野らの荒地も上田とオクリ妻の賤機立寄りて。地身の上に引く田の草も茂る榮種の畦合を。一鍬かへす土の下これなうこちの人。詞それ其の畠に人の手足が生出た。やれ滅相いふな女房と。地ふり返つて橫手を打ち。詞こりやどうぢや。大事の畠何者の仕業と。地鋤鍬入れて反返す瘦軀。我が親ぞとも白髮首鋤にはねられ蘇民が身に。はたと當つて落ちけるをよく〳〵見れば我が父なり。地ハアはあとばかりに鋤鍬捨て。體に抱付

きわつと泣き。顔を見てはわつと泣き如何なる奴が手にかけしと。駈出しては立戻り走出てはどうと伏し。夫婦足すり身を悶え。島の土に轉び打ち大聲あげてぞ歎きける。地巨旦轉來驚いたる顔付きにて 詞ヤア〳〵蘇民。昨夜より父が見えず人を配つて尋ねしに。見付けた〳〵親殺しの大惡人後日の罪科あらがふなとぞ罵いたる。ムウ兄じや人。我殺して我が畠へ晝中に埋まうか。世話やきやるな其の五音で殺手は知れた〳〵。知れたとは誰が殺した。ヲヽ殺手はわごりよぢや。ヤア孝行第一の巨旦に塗つたとて塗らせうかと。地爭ふ中稻叢搖ぎ。積んだる藁はどさ〳〵と。崩るゝ中に嫂が聲立てられぬ身の辨 賤機是はと走寄り口の轡も縛目も。かなぐり捨つれば片息に。詞是蘇民様の所爲でなし夫の不孝惡逆。證據は連添ふ女房。是は大事の寶の守り是を戻せば心にかゝる事もない。地さぞ憎からう巨旦殿。人を恨むる事はない。詞皆此方の慾心から。身にも及ばぬ寄の寶を押取つて。巨旦大王といはれうなどとは口ずさみにもいふ事か。寢覺にも思ふ事かいの。地其の慾心の報いが。積り積つて切れよい鎌で親を切る。詞其の慾心のもとはといへば胎内の此の子ゆゑ。地此の子は如何なる惡人ぞ。手を出して殺さねど腹の内から祖父殺し恨めしい子を宿したと。思へば掻き破つても捨てたいもの。まだまだと月日を待ち產落して嬉しからうか目出度からうか。詞此方の敵は此の子ぢやが合點か。折しも稻叢に鎌のありしは。連なつた親子夫婦が罪滅せとの神の教へ天のあてがひ。死んで見せる是で心改めて。親子の者に無駄死させて下さるなと。地腹に突立て引廻す。母が鎌の左褄賤機是はと駈寄つて。留むるかひも涙の玉 フシ草葉の露と消えにける。地蘇民も劍横たへこれ女房。詞命にかへぬ御守り持つてのけと聲かくれば。地賤機心得身に引つ添へフシ宿所をさしてぞ走りける。詞エヽ辛い憎い面もない兄ぢや人。とつく恨みいふ事は此の蘇民も知つたれども。兄弟の禮といひ父に苦をかけまいと。地我が身一人誤つて道る月日に時節も來て。一度父の機嫌よい顔見よう〳〵の。頼みもけふにふつゝと切れ。今日から赤の他人。詞覺悟で出合はうか但し鋤の刄を喰ふかと詞を荒して罵つたり。詞ヤ汝に先をせられうかと。打ちかくる鍬の柄からりと受けて打拂ひ。地ひらりと廻つて打つ鋤に。巨旦が小鬢打裂かれ崖より下にどうと落つ。上手より重ねかけ打たんとする弟が。向脛くわらりと打裂き。小膝を突いて下り様に。兄が太股貌の日程切りさげられ。のつけに返せば突懸り。臼搗打に打つ鋤が除つて向ふへ越す所を。起直つて弟が顔先より。肩口まで引つかけて引く鍬に。よろよろ〳〵と フシよろめきながら。地兄が天邊を打裂けば弟も髻を打破られ。兩方數ケ所の手疵を受け。兩眼に血は入りたり。コハリ

岸の小笹に。刈藻掻く伏猪の騷ぐ音迄も。御心を碎く端となり。柾の葛青つゞら。フシ歩み亂れて行末に瀨の淵。江戸古木を焚き。青山雲を煎するに。硯を潤す便りもなく。猶人里は遠ざかり。何故急ぐ雲の脚。詞嵐山颪松風がばらん。〳〵と吹き音信るれば峰の。木の葉が。ハヅミざら〳〵〳〵と。ちり〳〵。ちり〳〵水の音にさへ。假寢し夢を驚かし寢ぬ夜寢る夜を重ね來て。苫に片敷く袖師の浦磯に寄來る浮藻玉藻を。打混せてまだ。みるめ和布を打混ぜ。〳〵いろ〳〵の。フシ淺や鵜を疊むらん。眞砂交りの濱傳ひ。汐のされ貝空背貝。置惑はせる春の霜。フシさながら刄の如くにて歩み疲るゝ。玉鉾の。矛先に向ひては。惡魔も恐れ鬼神も拉ぐ勢ひにも。御身一つの雪をさへ拂ひ。かねたる蓑笠や。身の憂き事を繰返し數へ。〳〵て思ふにも。理は持ちながら心から簸の川。上にぞ 三重へ 着き給ふ

詞蝶鳥の花ぶ尋ねて雌。求むるしほらしや。蝶鳥も。花には濡るゝに。我が身は。何と椿の葉の。露にも濡れぬ獨り寢や。彈きすさみ手を盡したる。フシ大和琴。音に聞えし。地出雲の國手摩乳長者が獨子。稻田姫は此の頃熱の差引き冷め口は。お風邪召すなと花見幕。簸の川岸の櫻狩見らるる花も見る君が。妾の花にフシ恥ぢぬべし。地旅の疲れのふら〳〵と居睡りこけし岩が根の。怪な上の物の音に尊は御目に覺めながら。スヱテまた寢た顏の笠の下。地瞬く眼許石叩く鶺鴒の鳥飛び來り。堤の芝に羽を休め足も尾先もせはしなく。はつと立つては又飛下り。日蔭に餐るとり〴〵に。詞女房達美しい優しい鳥。彼の尾使ひのせはしなさ。地あれ程に尾を動かしては フシ鳴くそな物ぢやと笑ひける。物をも言はす稻田姫つく〴〵見惚れおはせしが。詞いやいや笑ふことでなし。忝くも女神男神天の浮橋に立ち給へば。あの鶺鴒の鳥來り妹背の道を教へしより。地夫婦契りをなし初め此の葦原を產み給ひ。それより世の中の父母夫婦の道顯れ。自らや方々が。生れ出でしも フシ此のいはれ。扨こそあの鶺鴒を庭來鳴庭叩。戀教鳥ともいふぞとよ。詞教へても習うても賤御持たぬ自らが。地習ふかひもないわいのとても師匠になるからは。男持たしや今捕へて籠に入れ。たいじよ立して放さんと心詞もしどけなく。そろりそろりと手を上げて。押ゆればふはと立ち又押ゆればばつと立つ。アヽ辛氣やとて尊の召されし笠押取り。彼方へ押へ此方へ押へ逐はへ。逐はゆる笠の羽風に恐るゝ鳥は。行き方知らず思はず知らず尊の上へ。轉びかゝれば驚き起きて。ぢつと見交す顏と顏互に領く花薄。ほの字を中に籠らせて鳥の敎へし緣のはし。爰にも天の浮橋の。夫婦の始めとなりにける。地戀にこりたる尊の心又惚れ〴〵となり給ひ。詞御覽の如く卑しき旅人。やんごとなき上﨟の人目もある其處退き給へと宣へども。地姫はとかうの

應答もなく。ぞつと寒氣も忽ちに顔色は朱を注ぎ五體に大熱ほとほり出で。尊にひつしと抱きつき悶え苦しむ其の有樣。女房達も立騷ぎ尊も見捨てがたければ。手を引きかゝへ蕭うと オクリ 幕の〽内にぞ入り給ふ フシ母は驚き。地屛風押退け今日はよもやと思ひしに。又もや熱のさしけるよと。スエテ樣々に看病し。詞何方かは存ぜねども。旅のお方の御介抱身にも餘りて忝し。問ひとはるゝも値遇の緣粗忽に申す事ならねど。此の國此處に八岐の大蛇とて大蛇あり。地何時の世よりか年毎に。色よき娘を人身御供に取らされば。一在所祟りをなす。詞其の印には。山宇津木の折枝が。鳴渡つて棟木に立ち。家の柱より血潮流れ出で。其の瑞相には前方に。必ず取らるべき娘が熱病を病む知らせあり。地それ故に一在所娘持つたる者ごとに。風邪でも引いて熱させば。若し家の棟へ山宇津木が立たうかと。親々の心遣ひはいかばかり。それに此の子が熱のさし引樣々の看病驗もなし。若しもそれに極つて大蛇が餌食となるならば。二人の親はいかならん行方も知らぬ旅人に。語るも云ふも悲しさの。心に餘る故ぞとてスエテかつぱと伏して。泣きゐたる。地八岐の大蛇が物語尊とつくと聞召し。詞若しや方々は。手摩乳長者の一家の人にてはなきか。吉備の國蘇民將來が敎にて。手摩乳夫婦を尋ぬる者よと宣へば。地ナウ其の手摩乳とは夫の事。妾が名は足摩乳此の娘は稻田姫。蘇民がしるべのお方とあれば外ならぬ所緣もあり。憐み給へ旅人と又さめ〴〵と泣く涙。地娘が苦しむ玉の汗。時雨村雨夕立の一度に降り來る如くにて。尊の旅の蓑笠も フシ重ねて濡るゝばかりなり。地尊包むに包まれず名は聞きも知つつらん。詞素盞鳴とは我がことよ。身を燒き骨を焦す大熱なりとも。忽ち退け得させんと宣へば。地母は恐れて飛びしさり。スエテ頭を下げて敬ひける。地尊枕に立寄りて腰の御劍をするりと拔き。詞抑此の日本は日の神の御國にて。陽氣盛んにして暖かなること。天地の内に並ぶ方なき國土なり。地されば伊弉諾尊軻遇突智といふ火の神を御誕生ありし時。其の軻遇突智が火焔に燒かれて神逝りまししも。内に大熱の火を包みし故なり。詞故に日本に生るゝ者は。十六の夏迄は。兩袖の下を闕腋の脇明にして熱を漏し。凉しみを受けさすれば國と人と相應せず。地然るを父母愛に溺れ。さなきだに實熱深き稚子を綿に包み錦に卷き。熱に熱を添ゆる故。寵愛却つて愁の種と フシなるぞかし。地今より日本の貴賤男女我が詞を式となし。闕腋を着せさせば。見よ〳〵無病延命疑ひあるべからず。いで其の證を見せんすと熱氣冷す氷の御劍。閉ぢたる左右の袖下さらりさらりとたつ所に。わきあけより燻り出で中天に煙滿ち〳〵て。渦卷き去ると見えけるが。顔色さめて白々と心地凉しく見えにける。末代和國闕腋は フシ此の。御神の敎

お蔭で助かれども。どうも遁れぬ命よなァ。所の衆頼みます。どうぞ助けて下されとスエテ抱き付いて。泣きゐたり。詞ハテ悪い合點な長者殿。誰が慘い目が見たからう。斯ういふ我々から來年は誰が身の上であらうやら。地合點づくでは渡されまい。サアござれと押分くる手摩乳押留め。詞粗忽せられな。我が子ならば所の法を我一人破らうか。此の子は別に親がある。たつた今大山祇といふ人に養子娘にやつた。おれが娘でないからは人身御供に立てう筈がない。地爰に置く故やかましい養子親に手渡しゝよ。娘よ來いと手を取つて駈出づれば百姓ども何處へ何處へ。詞それではそつちの勝手はよかろ。其の樣な事で濟むなれば大蛇に娘を取らるゝ者は一人もあるまい。存じの通り遲うてさへ在所中へ祟りが來る。長者殿でも手摩乳樣でも。地是ばかりは除けられぬとあらけなく引立つる。夫婦は煩悶え縋りつき誤つた在所の衆。待つて下され

人身御供に立てしませうと。漸うに引留め娘を中に取廻し。顔つく〴〵と詞なくせき上げ〳〵歎きしが。足摩乳髮搔撫で。地毎年人身御供の時分になれば。若しやこちの娘にも當らうかと。幾瀬の思ひする内に。詞今年は餘所へと聞く時は。アヽ嬉しや遁れたよ。來年はどうあらうと案ずれば今年も又遁れた。嬉しや〳〵と地人の子の取らるるを悦んだ其の報い今年といふ今年こちの身に報い來た。せめて病で死んだらば骸なりとも殘らうもの顔見せてたも稻田姫。ナウ此の美しい顔を。大蛇の餌食になすかいのと。抱きよせ咽び入り立つも立たれぬわしや足摩乳。此方にもがれた眞の手摩乳。どうしましよいのと縋付き聲も。惜まず泣きゐたり姫も。現の心なく。大蛇の餌食にならん事。悲しい上は フシなけれども。所の作法は是非もなしと諦めもあるぞかし。お年寄られた父母に長い歎きをかけまする。是が悲しいばつかりと。縋りつけば

抱きよせ。涙爭ふ親子の樣。在所の者も一同に手を取られしは身に知る雨。我が身にかゝらぬ人迄も フシ袂を絞るばかりなり。地素盞嗚尊白小袖御手に提げ。とう〳〵と搖ぎ出で。詞是こそ丸が望む時節。大蛇を討つて本意を遂げ。國の歎きを救ふべしと宣へば。百姓ども口々に。大蛇をどうした物とか思ふ。頭が八つ角が十六。眼も十六見通しの變化。男にも女にも形は自由自在の物。地殊に男たる者刄物を持つたる影を見せても命がない。手に覺えあるならば滅して一在所の。末代迄の難儀を救はれよ。詞必ず〳〵怪我をして恨み給ふな。アヽいはれぬ腕立。地命の懸換あるさうなと フシ一度にどつとぞ笑ひける。地知らずや我こそ天照神の弟素盞嗚尊。大蛇を討つべき我が手だてよつく聞け。如何に自由を得たりとも龍蛇は必ず酒に惑ふ。八つの甕に毒酒を湛へ。稻田姫が影を映し呑干す折を見合せて。討つになどか フシ討たざらん。詞ヤ

ア稲田姫。此の白き衣服の袂。外を圍く縫はせしは刄の反を隱さん爲。大蛇が間近く來らん時鬪腕の此の所より。劍を出し腮を刺せ。地我其の時走り着き。大蛇にもせよ毒蛇にもせよ一ひしぎに取つて伏せ。奪はれし寶劍やはか取らで置くべきかと。はゝぎりの名劍を渡し給へば稲田姫。戴く劍を鬪腕の袖に包んで衣がへ。太刀を一振隱せしより。鬪腕を振袖とは フシ此の時よりぞ始めける。地手摩乳夫婦も生死の頼みは尊の詞の末。松にかゝれる命の露。數の土民に引立てられ。憂をかり行く稲田姫。夫婦は涙にくれ方の時をつれなく別れの道。見返れば引立つる駈出づれば引留む。名殘りを末世にとゞめくる事も愚かや稲田姫は。祇園少將井大山祇は三島の明神。開耶姫は富士權現。瓊々杵尊は外宮の相殿神と。神との振合せ袖の。緣こそ久しけれ。

第五 八雲猩々

詞既に時刻も夜半の雲。天を焦せる篝の煙。谷深うして嶺聳え。山水滾る簸の川上。詞八つの甕に毒酒を湛へ。影を浮べる高棚に。五重の荒菰注連を引き。地贄の少女を据ゑ置きたり。祭文無慚なるかな稲田姫。昨日迄も今朝迄もオクリお乳や。乳母に侍かれ。荒き風にも。當てぬ身をつれなく一人捨てられて。說經父よと呼べば谷の聲母よと呼べば松の風。斯るべしとは。夢にさへいさ白小袖の振袖も。ナホス絞りかねたる フシ哀れさよ。二人地時に コハリ山鳴り震動し。谷の水音さゞなみ立ちあれ〳〵遠に雲起り。俄に降り來る雨の脚。鳴神稲妻ナホス天地を返し大蛇が姿 フシ現れたり 三人ハルフシ消ゆるとすれど。吹上げて。又山風が焚く篝。簸の川上に年を經て住めど濁るは濃き薄き。酒にもまるゝ九十九髮 亂れ心は何故ぞ。我寶劍に心をかけ。スエテ岩長姫とは生れしが。蛇道の緣は切れやらず。惡女と生れ人に笑はれ憎まれし。美女は惡女の婚の種。よしとは言はじ葦原や。スエテ八島の浦の外迄も。地眉目よき女を取盡さんと。簸の川上に隱れ棲み八つ岐の大蛇と成つて。人を取ること多年なり嬉しや今宵ぞ廻りくる〳〵姿は女。心は如何に。鬼とも蛇とも フシ見えわかず フシ見る目も暗き。心の闇。消ゆるは露より心の玉。耀く大蛇が眼の光。フシあれこそ今宵の我が贄ぞと。三人コハリ笞を振上げ紅花の舌をふり立て振り立て。歩むとすれども毒酒の薫に引留められ。立寄る一つの甕の影。地爰に女はあり〳〵〳〵。あり有明の。月夜にあらぬ桂女の姿は一つ。影は二つ。三人三つ四つ五つ。七つ八岐の大蛇が魂。八つの甕に八つの形。いで飲干して底なる女を。贄に取らんと飲んでも亂る酒のさゞ波。寄り來る〳〵寄せ來る面。フシ面を浸し頭を下げ。飲めども〳〵盡させぬ泉。次第に傾く大蛇の影面色變じて茜さす。コハリ角は珊瑚の枝をふり立て忿怒の醉に足引の。山もくる〳〵野もくる〳〵踏留むれば よろ〳〵〳〵。立上ればたぢ〳〵た

ぢ。かつぱと伏せば亂れ心は只一身。ナホス地返す〴〵も恐ろしや。三人亂瀧の響きは鼓。松風笛の音。雫と積りて菊水消え流れ、竹の露の甘露、月は影有明。朝霧夕霧。添へて汲むは玉水。面白の夜遊や。歌やあん楊柳枝。楊柳枝、南天龍膽金銀花咲いた。銀杏金柑楊梅寒梅瓢箪鳳仙花ゝやあん鐵仙花。鐵仙花。栴檀沈丁花。芙蓉林檎長春半夏草。ゑゝすゑ。ゑゝゑすりよゑゝすゑすゝりよきこんりよう。

ゑすゝりよこんりよこんちんこんりやうこんちんかう。ころ〴〵轉び。起きては寝び。＋ホス己がフシ心の戯れは。二人ハルフシ人の命の。仇敵捨てたる身さへ若しや又。遁るゝたけはと見廻せば。此處の山陰彼處の嶺。八岐にまたがる大蛇が姿コハリ東南西北四面四維。霆雷霹く內。八つの形は顯然たり誠の女はあれこそと、執念き顔吐く息は巖を穿ち古木を倒し。落ち來る木の葉ははら〳〵〳〵。地あら腹立や〳〵コハリ偽る人の心の酒。盛りて侮ゆるとかひあるまじ思ひ知らせん思ひ知れと。八つの姿は附纒はつてくる〳〵〳〵手繰れば千尋の大蛇が形。眼は火輪炎の背。鱗を鳴らし角をふり立て雲を卷上げ卷下し。高欄ナホス目懸け蒐りしはすさまじかりける三重へ勢ひなり。地姫はあるにもあられぱこそ。死するに二つの道なしと只一筋に思ひ切り。谷へかつぱと飛びおるればつれなき玉のおのづから。土手の平沙に下り立ちたり。嬉しや生きる道筋と目指すも知らぬ草の原フシ亂れ亂れて迷惑ふ。地大蛇は怒りの鱗を立て猛火の腮は利劍を吐き山岳草木動搖し。河水を覆し大地を蹴立て追立て追詰め三重へ追廻り。地弱腰を引㧾へ只一呑みの毒蛇の口。遁れがたなき世の譬へフシ哀れ果敢なき有樣なり。地せきにせいたる尊の顔色氣黑になつて駈來り。姫が敵天下の仇何時まで遁し置くべきぞ。寶劍出せと身體髮膚に力を入れ。小脇にうんと抱締めゑい〳〵〳〵と引立つれば。勇力和光の勢ひ強く。弱る蟲をどうと投付け頭にしつかと踏跨り。劍を返せ姫返せと角を摑んで捻付くる。時に胴骨動き出で。大蛇が背を顧の內よりさら〳〵と切りさばき。稻田姫朱になつて顯れ出で。尾筒に隱せし十握の寶劍やす〳〵取つて候と。右と左に寶劍利劍。二振袖に提げてにつこと笑ひし其の顔。尊御悦喜淺からず。天の叢雲の御劍と名付け大日本寶フシ揃ふぞ目出度けれ。地尊大蛇が頭より寸々に切伏せ〳〵亡し給へば。天兒屋根を先として大山祇蘇民將來手摩乳夫婦。日月の御旗眞先に押立て。御迎ひの諸軍勢野に滿ち山に敷島の。歌に和らぐ君が代は八島の外の國迄も。日本の威を振袖の。人民無病延命に五穀は。家に滿ちにける。

七行大字直之正本とあざむく類板世に有といへども又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくなからず三蔦烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直之正本にあらず故に今此の本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左のごとし

竹本筑後掾 竹本 博教

正本屋 山本九兵衛板（壹印）

大坂高麗橋壹丁目 山本九右衛門板 印

曾我會稽山

近松門左衛門作

照射する火串の影の狙ひ獵。狗は獸を追うて殺し人は其の處を指し示す。今諸君は功犬なり。蕭何が如き勝つ處を指し示すは。功人なりとの故事の心を爰に狩衣。裾野に暫し御宿陣右大將家の御威勢は。富士より高き鎌倉山。建久四年五月二十八日と。明くるも寅の一點に虎の御門ぞ。開けゝる。御留守なれども式日の御禮は御臺所に與奪あり。竹取の間に出で給へば。和田畠山千葉上總。大老執權の北の方を始として工藤梶原宇都宮土肥佐々木三浦黨。昵近高家の內室達。其の外御譜代由緒ある家の子の妻女迄。夫々の格に任せ座次を亂さず參列して。二十八日の御禮一度にあつと拜謁ある。袖の縫物綾錦高燈臺に輝きて。金泥砂子竹取の翁が娘の彩色も光を恥づる許りなり。斜ならざる御氣色にてなう方々。富士の御狩の御留守に。幼稚の賴家いひがひなき自ら各とても女の身。鎌倉を靜謐に持固めしも大將殿武威目出たき故ぞかし。あの庭上に並べし御狩の中の勝れ物とて送られし。射手の譽も顯すため。それ〳〵目錄と宣へば。中原の吉之が妻承り。男文字に和訓を付けて。天爾波巧みに讀んだりけり。御帳面の第一の筆も夏毛の蟇は。大友の市法師まだ十五歳の小腕の矢先。就中御褒美たり。番鹿は秩父の六郎。三町五反の尾上を隔て。纖細かき鹿子まだら御行縢の料たるべし。牛とも象とも紛ひて三刀かき切つたる肋骨。仁田の四郎忠常が世上の美談に乘つたる猪。御狩一の功名なりし。長沼五郎が兩眼さすや岡邊に蓬喰。呦々と鳴く小牡鹿の角。二つに引裂きて是を手取りの證據とす。捷は土肥の彌太郎。巖に躓く狼その。喉首を踏んで叩きとめたる一擊の。力鐵鞭恐ろしき。虎狼より盛長が組んで仕留めしあら熊と。名は明けき月の輪も浮んで薄の波走る。番ひ兎の登り坂。駒馳違へ長刀に。のせてとめしは小山の判官。皮に疵なく山豬の眉間の骨を射摧きしは。淺利の與市が神頭の弓勢。愛鷹山に足くらべ追ひも。追うたり二十八町。息の限りを追詰められ。狐は死して岡部の六彌太。是も手取の功名たり。兒玉の太郎が鑓玉に上げて突きしは飛鳥の業。雁股早く飛鹿の。もと首射きる安田の三郎。竹の下の孫八左衛門向ふ猪に矢はたゝず。打物にて切りとむる宇佐美の左衛門川越太郎。相馬の小太郎結城の友重。土屋平山千葉宇都宮各矢先の功名あり。外に牡鹿一頭。工藤左衛門祐經秩父の郎等本多の次郎親經。一の矢二の矢の爭ひ。鹿一疋

に矢二筋。祐經太腹本多は草分六分の勝に候へども。鹿論未だ落居せず二本の矢は射付けの通り。仍て終りに記す者なり。地御狩場の別當和田の義盛判と讀上ぐれば。何候の女中面々の殿御の武藝を身の手柄。御臺所も御機嫌の フシ御前。ざゝめくばかりなり。地祐經が妻阿古屋の前進出で。詞聞き憎き御帳面。秩父の郎等陪臣の本多輩。我が夫祐經と鹿論さへ慮外なるに。本多が六分の勝とは義盛の依怙最屓。末世に残る御記錄祐經一人射留めしと。書改め願ひ奉ると憚りなく言上す。義盛の北の方巴御前聞きもあへず。是阿古屋殿。本田の次郎親經は秩父の家來といひながら。武藏源氏の歷々。軍の場數は御出頭の工藤殿も及ばず。此の度の御狩にも。鷹屋奉行夜廻り御直の御用承り。御近習の御家人並。女房にも御臺所御對面ある程の筋目。誰に恐れ負けてゐるん。義盛が依怙とは工藤殿の奥樣。ちと口上が出來過ぎたと膝元に摺寄つたり。阿古屋色を變へ。いや昔は王の孫にもせよ。今は秩父の步行若黨。そもじも昔は朝日將軍木曾殿のお部屋御臺巴御前。大力の子胤を取らんと和田の義盛申し受けられ。今は我々同輩。其の時々の身の程知らぬ無用の本多が系圖だて。しかも金泥にて。工藤左衞門祐經と矢印あり。本多が矢には家名もなき平頭の的矢。狩場の法も知らず慮外千萬の鹿論。地御帳面書るか本多が名を消さるゝか。いつ迄もお願ひと額髮押し撫でて。まばゆからぬ張臂構口。末座に着きし本多が女房常夏。詞これ／＼阿古屋殿。慮外といふは馬の乘合座敷の廊下。盃の前後などの事。捕は戰場にても目上の敵には太刀打も慮外と。後を見せて逃げられたゝな。地弓矢の道不案内で。小賢出た批判かたはら痛しと嘲笑ふ。それ／＼／＼。詞慮外といふが其の事よ。イヤ上をも上とく 地其の方が慮外よと。兩方聲もあら木の眞弓 フシ弓絃にいひはりける。地御臺所御聲高くあれ喧められよ人々。詞老中さへ理非を分かぬ鹿論女の批判及ばぬ事。されば蒲の御曹司範賴入道殿。今遁世長袖の身ながら賴朝公の御弟。折しも在鎌倉こそ幸ひよ。地北の丸に請じ互に遺恨なき樣に。中分の扱ひ御料簡に任すべし。地巴宜しう沙汰せられよと御褥を立ち給へば。阿古屋つつ立ち工藤左衞門祐經と。西夫下郎の本多と。中分の扱ひとはお恨めしい御臺樣と。御裳裾に取付く所を常夏引留め。詞西夫下郎とはどれどの口から。コレ三箇の庄の主近江八幡なんど本多程の者は。家來に持つた大名の御前樣。下郎といふが不思議か。チヽ其の大名の御前樣。地息の根止めんと爪紅皿はしる摑みあひ。百花亂るゝ女中の騷ぎ巴御前すんど立ち。兩足宙に倭がへし。小脇にかい込みゐいやつと締めたる大力。眉も鬘もばらばら涙 フシ鼻息ばかりたえ／＼なり。詞ホウむつちりと抱心地よい甘さうな肉合。祐經殿の御祕藏が尤さりながら。御臺樣の御

前で。餘り慮外な口がさがない。乘物下馬近巳が逆る。地我が儘がいひたくば祐經殿歸られて。夫婦閨の私語。無理も我が儘も譫言は御勝手。人中で我が儘いへばまつ此の如く。地痛いか〱。詞痛い目に逢ふぞやと。地締付け〱ャ片荷づつて力に足らぬ。相手の不祥常夏と。片手に取つて引寄せ横たきしめたる弓手の小脇。下髮垂れて薄化粧二つ頭の顏の色我が顏共に三つ巳。太鼓の御門明け六つの雲ほの。ぐ〱と 三重

〽白旗の フシ流れは同じ。詞源の蒲の御曹司範頼朝臣。天下の疑晴さんため修善寺にて御出家あり。法名源雄と衣を墨に染めながら。鎌倉殿の御舍弟世の覺え重けれども。身持は輕き駕籠乘物只一僕を侍にも。草履よ杖よ吳竹の フシ藪醫に紛ふ風情なり。地大名小路の升形より引馬に五つ道具。乘物の戸八文字に開かせ布袋乘に乘つたるは。梶原平次景高なり。地範頼の御乘物道を讓つて片付けば。梶原が近習ども蒲の入道殿

の御通り。下馬なさるべきかと伺ひける。詞世捨坊主に何の下馬と顏突出し坂東聲。それなるは蒲の入道殿な。工藤と本多が扱ひのため北の丸へ御參か。我等如きの御留守役の大名小名相詰め申す。出頭第一の祐經と。陪臣の本多が鹿論は挑灯に釣鐘。鶴の毛の先程も祐經ひける扱ならば。お為によく御座んまい。乘物やれ。地參れと傳へて八枚肩。徒歩臑脛やつこらさ。鑓をはねて跳馬の人を蟲ともはい〱。地埃蹴かけて通りしは。フシ存外至極の無禮なり。地掘拔井戸の方より二十ばかりの若侍。編笠ぬぎ捨て兩手を土に蹲うたり。詞蒲殿御覽じ。浪人か主持か此の方への會釋ならば。お通りやれ。地〱と手を出し給へども。只あつ〱とばかり差俯向き スヱテ忍び。涙にくれ居たり。蒲殿も斷はかりの無怪しと乘物を。おりゐの衣立寄つて如何なる人の何故に。用ありげなる落涙見捨てがたしと宣へば。涙に沈む顏打上げ直に申すも恐れ

ながら。口惜しの世の中や候。詞殿は忝くも賴朝公の御弟。九郎判官殿諸共に平家追討の御代官。五萬騎の大將軍。地一の谷の大手生田の杜を攻破り。武功と申し御連枝の六十餘州に冠たる御身。梶原が末子なんど我は馬の鞭打ち。御無念察し奉る。詞我等が主人も伊豆相模に名を得し者の末なれども。運の變によつて一族に父を討たせ。本領は其の者の秣刈場となり果てゝ。地昔の劍錆浪人貧しき家には故人疎く。世にも人にも侮られ。何時花咲かん フシ埋木の。地身の無念存じ合せて不覺の涙。問はず語りも御恥かしと又。涙にぞ咽びける。地入道殿小聲にて。詞扨は曾我兄弟が下人よな。地年月の堪忍さぞあらん。祐經が館に詣り。諂を勤めと紛らし世に蔓り。鎌倉武士の風儀を棄す佞人。ヱ、齒痒し得討たぬな。詞入道昔の範賴ならば天晴力を添へんずもの。地もどかしさよと宣へば。地奇童の上は包むに及ばず。曾我が下人鬼王と申す者。

今度の御狩を武運の時と兄弟忍び巡りしに。昨日の朝山敵祐經尾越す鹿に目を付け。弓矢番ひ追ひかけしを。茂みの蔭より五郎時致眞直中をと急きに急いて放つ矢が。敵の竹笠射かすつて鹿の草分ずんばと當り。地祐經が矢は太腹。難なく鹿は止まりしが。詞時致は隱れなき大力。箆廻り太く矢束も拔群。殊に名乘り家名の印もなく。既に矢穿鑿に及ぶべかつしを。秩父殿の執權本多の次郎親經。我こそ一の矢射たんなれと本多と祐經鹿論に取りなし。地大事の難は遁れしが。今度の御狩に討ち漏らさば何時の世にか優曇華の。曾我が天運開くべき。御賢察とばかりいひさしてスヱテ頭を下げてぞ泣き居たる。地蒲殿も涙ぐみ。あつたら勇士ども世に埋もるゝ不便やと。懷中より札二枚取出し。詞是は北條時政大江の廣元兩印にて。鎌倉殿の御前迄も內意を達する割符なり。地祐經が用心構へ頼朝を後楯。尺寸側を去らぬと聞く。兄弟に是を貸す何處迄も恐れなく。鎌倉殿の膝許にて晴業の敵討。花やかにして無念を散ぜよ。必ず隱密々々と別れ給へば鬼王有難しとも冥加とも。詞は足らず御厚恩忝涙つゝめども。心に漏るゝ籠乘物伏拜み〳〵てぞ 三重 別れ行く。地北の丸の大廣間工藤本多が鹿論。蒲殿に扱はせ穩便に濟すべしと。巴御前承り鹿を庇に昇きすゆれば。御留守番の大小名遠侍に相詰め。フシ蒲殿をこそ待受けけれ。地梶原平次景高祐經が一子犬坊丸。郎黨八幡の三郎相具し御廣間にのさばり出で。八幡の三郎目鼻を顰め。詞掠々つない大矢御覽なされ景高公。小兵の本多が射たればとて一間も飛ぶものか。是を射ん者昔ならば鳥の海彌三郎。當代は淺利の與市殿。然らば矢印ある筈名を書かぬは合點。阿呆力の曾我の五郎時致といふ饑渇浪人。主人祐經一門の端毎度の無心合力。何貸せ彼貸せもらかせの騙り事も人食はねば。狩場で小盗みせんため紛れ入りたるに疑なし。地和田殿の不興兎角梶原殿御父子にかけねば。明白ならずとこそやされ。詞ヲヽサ別はない。重ねて本多めに射させて見れば忽ち化が顯はるゝ。地此の矢は景高預つたと拔かんとすれば是梶原殿。詞其の矢に指でも觸るが最期腕を巴が引拔くと。地腕捲り臑捲り紅梅もるゝ雪の膝ぶし。骨太々と練絹に フシ岩を包みし如くなり。地惡しかりなんと梶原先づ蒲殿が來せて扱ひの術に依つての事。詞ナウ女の力と首のない石佛。外の用に使はれぬ。何の役に立たぬ物と フシ御書院にぞ通りける。地物に堪へぬ朝比奈の三郎。斯くと聞くより御番所の柘の棒提げて。駈込む所を母飛びかゝり。棒の物打確かと取りヤイがきめ。詞御殿中を知らぬか。騒ぎを止め穩便に納めよと御意を受けた巴が子。此の棒で誰を撲つ。ヲヽ曾我殿原を盗みよ騙りよ。父義盛の不詮議と吐かした奴等。素頭撲碎く怪我なされなと捻上ぐる。コリヤ撲碎く程なれば汝は頼まぬ。

地あんばく者め又捻り餅喰ひたいかと。片足あげて眞中より棒をはつしと踏折つたり。梶原め八幡め毆殺して退けんと飛んで出づるをむんづと組めば。朝比奈兩手をさし込んで親子四つ手に取組んだり。ニハリ母も母なり子も子なり汗を貫く頬髭と。風に亂るゝさげ髪のすべり出でたは母の腹。今は我等が腹櫓と三尺ばかり釣上ぐる。巴兩足踏放し我が身を重りに持上ぐれば朝比奈も朝腹に。大力の母倦み果て。釣下しつ釣上げしは龍の氣ざしの六々鱗。滾つて落つる水の勢鰭を敲いて龍門の。瀧登りとも謂つべく。母跳返し一放れ大の男をひつ擔ぎ。どうと落す其の響き。ナホス祇園精舍の釣鐘を切つて落すも斯くやらん フシ御殿も搖ぐ許りなり。地泣顔にて朝比奈。むづ／＼起きる胴骨膝に引り敷き、詞エヽ疎ましの荒者め。親に世話を揉まするな。ア頑固に會我を引く故は贔屓の引倒し。文武二道の弓取とて強いばかりが武士でない。又しては切つての投げてのと手習ひは否がる。物讀みは嫌ひで和田の家が嗣がるゝか。地サア今から手習するかと太股を。ふつ／＼と抓られて。詞あ痛／＼あ痛手習ひしましよ。物讀みするか讀みましよ／＼あ痛たた。母がいふ事聞かねば又是ぢや。あ痛／＼捻餅の味忘れな／＼と。地ふつ／＼抓り引起し行儀ようして遠侍に相詰め。何事あらうとお廣間へ差出て慮外したらば又是ぢやぞ。まだ怖い目付やめぬか。身柱に一炷すゑうかと威されてお次へ立つ。灸嫌ひの髭男短慮の病母親の。フシ意見ぞ藥艾なる。地程なく蒲殿御入りと廊下番衆取次げば。梶原始め犬坊八幡出迎ふ。蒲殿暫く庭に目をとめ莞爾と笑ひ、詞なう巴御前。實を爭ひ地を爭ふは人間世の欲心。それとは變り是は優しき弓矢の藝。其の爭ひは君子なりと孔子も是を褒め給ふ。位爭ひ歌爭ひ春秋の詠を爭ひし。雲の上人の風骨にも劣るまじ。地心憎さよ優しさよ爰に一つの物語。昔の／＼とつと昔の其の古へ大和の國天の香具山といふは女山。又畝傍山耳無山此の二山は男山。香具山姫の艶なる形に想をかけ。我が妻にせんいや我こそはと山と山とが妻爭ひ。夜毎に谷峯震動す。出雲の國に在します阿菩の御神是を救ひ止めんと。詞御船を走らせ給ふと聞き二つの山は中直り。阿菩の神は播州印南野に神とゞまり在ます。此の三つ山の爭ひ中の大兄の御歌あ。地萬葉集には載せられたり。今の世迄も眉目よき女をお山といふも。此の香具山の フシ謂れなるべし。地總じて物の扱ひには心なき山のかひもある。況んや文武の工藤本多。入道が扱ひ不足はあらじ。爭ひを親みの始めにて。上下相和することこそ。源氏長久國家安穩の基なれと。御詞に花實を交ぜ面白可笑しき御扱ひ。巴悦び小領きお次外様遠侍聞傳へ／＼ フシあつと感ずるばかりなり。地莞爾ともせず梶原イヤサ濟まぬ濟まぬ。詞第一本多めが讒に似ぬ大笑、殊に

的矢は業の矢とて。親の敵を射る故實あれども鹿を射る法はなし。サア矢の主の詮議詮議とせり懸くれば。地蒲殿も當話の返答猶豫して見えけるを。犬坊八幡聲を揃へ但し本多が親を鹿に突殺され。其の敵射たるか何と〳〵とやりこむる。お次に朝比奈堪へかね襖半身出でんとす。母きつと見て又な〳〵。捻餅身柱一炷するゐうかと。ねめ付けられて身を縮め フシ引込む顔こそ殊勝なれ。詞蒲殿ちつとも臆せず、百様知つて一様知らぬとは御邊が事。的矢を業の矢といへばとて惡業の業と心得、親の敵を射る事と故實を一遍に覺えしな。是常に射なれて矢業よきゆゐ。わざの字の聲にて業の矢といふ義なり。靱胡籙に的矢一手入るるは侍所瀧口の骨法。親の敵に限らず鳥をも鹿をも射る時あり。長袖となりたれども家に生れ弓馬の道は入道こそよく知つたれ。詞謂はれざる詮議推參なりと御氣色變つて宣へば。イヤサ主人祐經を曾我兄弟が、親の敵と狙ふ由念を入るゝが僻事か。ヲヽさもあればこそ頼朝の膝許離れず用心する祐經。曾我兄弟に逕はなし何を知邊に御前近く忍び入るべき。地用心無用と仰せも果てぬに梶原イヤ〳〵、詞祐經が出頭を嫉みそねむ者多く、曾我を引き御前通路の割符の札。彼等が手に入るまい物でなし。御身の方にも彼札二枚受取りて置かれしが。散さず手まへにあるならばサア。只今是にて一見せん。ヤア御邊に咎められ。是に候梶原殿とておめ〳〵と出すべきか。大事の切手汝等には見せぬ〳〵。地扨こそ〳〵見せぬは曲者、曾我に割符をくれたは必定推量は違はぬ蒲殿、ヤヤ蒲燒殿蒲燒の鰻入道殿、ぬらくら拔けても拔けさせぬと、惡口雜言手詰になれば蒲殿も。無念餘つて一世の浮沈急き逆上したる顔色。巴御前は根元知らず。何事やらんと氣を盡し フシ心を配つて控へたる。詞これ梶原、入道が受取りの割符紛失せば何とする。ヲヽ曾我は伊東が末天下の御敵の引入れ。よい仕合で切腹々々。ムウ入道が切腹には冥途の供を召連るゝが合點か。洒落臭い誰を供に。梶原平次景高を連るゝわと衣の下の薄氷。地一尺二寸拔討にはつと飛退く梶原が烏帽子のまねきを切落され。後障子蹴破つて同じく迯けて犬坊に。續いて迯ぐる八幡が肩骨脇つぼ迄切下けられ。うんと反を取つて押へ胸元を三刀刺し。死骸にどうと腰打掛け。一息ついで立ち給へば。地お次外樣の騷動上を下へと返す音。巴御前大音上げ。詞蒲の入道殿仔細あつて八幡の三郎をお手討ち騷ぐな〳〵。御所へ走り御臺所へ注進申せ。御用なき者此の内へ一人も叶はぬと 地戸口に立つて呼ばはりしは。木曾殿の後家義盛の フシ北の方ぞと物々し。地其の隙に蒲殿衣脱捨て齒嚙みをなし。詞エヽ打物短く殘念ゐを切損じて口惜し〳〵。八幡輩五十人百人成敗せしとて誤る筋はなけれども。地割符の札の御詮議一度は切らで叶はぬ腹。世に健氣な

る曾我がため捨てん命。遁世の身の悦び導き給へ南無歸依佛と、小脇に突立て引廻し返す刀の切先咥へ、眞逆樣に貫かれ、三十五歳五月闇 フシ短き夢と消え給ふ。地御墓所の御使者として重忠の北の方、銀杏御前徒跣足にて馳付け、詞榛谷の四郎重朝二の宮の太郎安清を召出し。榛谷は死骸ども御預け。二の宮は富士野へ早打。蒲殿御切腹曾我兄弟御狩場に紛れある由。狼藉なき中急度御詮議遊ばせとの御口上。晝八つの時切り半時の半時違うても越度過怠仰付けらるゝとの御意大事のお使早う〳〵。地畏り奉ると駈出づる刀の鐺榛谷の四郎確と取つて引留め。詞こりや待て二の宮。御分は曾我の姉聟小舅の難儀する御使。眞直には得いふまい。役替へして死骸受取れ。地富上野へは身が罷ると引戻して駈出す。榛谷が鐺二の宮搔攫んでから〳〵と笑ひ。詞和殿は祐經と相聟祐經を引く心から此の二の宮を疑ふな。似合うた〳〵 ヤイ一門緣者の好みと御奉公とは格別。ム、疑ひを晴して見せんとどうと引据ゑ。地床の硯引寄せ三行半にさら〳〵去つて去狀。裏さしの笄暇の印と巻きこんで家來の侍呼寄せ。詞宿所に歸り女ども三世の緣の切目なりと申し渡せ。地富士野の御使曾我と他人の二の宮太郎といひ捨てて駈出す。榛谷むんずと抱留め。詞人に心を許させんとさつぱり立受取らぬ。お使は榛谷の四郎重朝が受ける。是非にやらぬと引留めたり。地エ、面倒心急き五つの時に程もなし。二十里に餘ろ道二時切の早打天狗の翅をも借りたい所。時刻延ばして二の宮に腹切らせん巧みよな。腕ぶし斬放す奴なれど互に御用蒙る身。騷動の上の騷動命に勝[illegible]妄放せと。捻ぢても押しても榛谷少し力增し。縋付いて動かせずお次に朝比奈身を揉んで。齒痒く間疎く遣戸口より身を半分。齒噛みをしても母の怖さずつと引込み。によつと出しては、ずつと引込み。業を沸かして睨む顏。巴御前きつと見て。詞やれ朝比奈ちやつと突一働け〳〵許す〳〵。ヲヽ地まつかせと踊出で。母の御免ぢや忝しとつつとより。榛谷が兩腕取つて捻上げ。サアお往きやれ二の宮。地急用のお使物申すも暇惜しとツン、ひ捨て駈出し走り行く。詞二の宮を遣るからは我等に何の言分。妾を放せ朝比奈。ヲヲ二の宮は時切れおのれを宥すも時切れ。地知行潰しの米櫃飯櫃かけはんがい。片手に足らぬ中は空との明はんがい。御時分能からう朝比奈が握拳の握飯。喰らうて見よといふ空の霞におつる鐘の聲。ごんと鳴ればぐわんと喰らはせ。又ごんと鳴るぐわんと撲る。二つ四つ五つ頭の頭で數とる拍子取る。次手に初夜後夜晨朝入相寂滅爲樂に跡はひらく頭の骨碎けて百八ぼんのくぼ。攫んで小庭へどうと投げ。思へば〳〵梶原め釣髭の釣鐘面。捌碎かいで殘念至極。よし〳〵今は逃がすとも我見込んだは鰐百倍。一度はとらで置くべきかと。日數を泳

ぐ生死の海。淺瀨は波も朝比奈が待來る寄來る磯の波どう。〳〵。とゞろ〳〵と踏鳴らす。女波男波の足早く緒を並べてひとももつれ共に。御所へぞ參りける。

第　二

地片削の千木や內外の曇りなき。宮も五月の二十八日式日の御祝儀に。二の宮太郎安清出仕の留守の間には。夫に代る武士の妻心の障り身の不淨。手水の水に灌ぎ捨て。スエテ袋棚より取出し。紐解く大聖不動の尊像五月なり緣日なりと。床に移せば女子どもも供へのお神酒お鏡に。向ふ心の眞直なる。フシ冥慮ぞ暗に有難き。二の宮の姉御前心靜かに合掌し。夫の武運長久御狩の御留守預りて。大切の役目禍のない樣に。取分け弟曾我の祐成五郎時致。一萬箱王と申せし時不動を工藤と聞き違へ。勿體なくも尊像を。切り奉らんと迄思ひ込んだる親の敵。工藤左衞門祐經を首尾よう討たせたび給へと。只一筋の念願は フシ感應。嘸と著し。

家來白崎八平次遽しく。詞旦那より火急の御用　參りつけねど御書間へと。御免なと はず大息ついで畏る。地女房驚き何の御用か氣遣はし。御口上はと問ひければ。詞何れも同じ御奉公とは申しながら。斯る御使身に取つての大難と。地巻込む暇の印の筥一通を差出せば。開いて見るや見もわかずはら〳〵涙の顏振上げ。御身も息災御武運も長久と祈りしはたつた今。御出仕の折迄も云ひ語らひし數々は。捨詞か空言か恨めしの心やと。巻いては解き讀んでは泣き。去狀顏に押當て〳〵。思はずかつはと身を投伏し フシ聲も惜まず泣きゐたる。在合ふ腰元下女はした樣子知らねば泣かれもせず。互に顏を見合せて溜息。フシついたるばかりなり。詞コリヤ八平次。地どうした事で隙やると御口上はなかりしか。樣子は知らぬか知つたらば聞かせてくれと氣を急けば。詞委細の事は存ぜねども祐成樣御兄弟。蒲の入道殿に方人なされ。賴朝公を討奉らん企てと。梶原殿の言葉によつて入道殿には御切腹。それゆゑ旦那は御狩場へ御注進の御使。八つ切との御[illegible]を請け榛谷と又口論あり。地お暇の狀印の筥。渡し申せと仰より外には何も存ぜずと。いはせも敢ずムウ聞えた〳〵。詞安清殿は最早狩場へござつたか。イエ〳〵御前で口論最中。地今頃お立ちも存ぜすと聞き捨てゝすんと立ち。腰高々と帶引締め。詞誰ぞ足早な女子ども。地薙刀持つて追付けと云ひ捨てゝ駈出す。各慌て縋りつきお里へではあるまいし。詞恨み云ひにお出で遊ばすはお道理といひながら。殿のお歸り待受けて詫。地なさるゝがよい筈と。止むれば振放し退去もある習ひ。詞我が身の事は兎も角も。其の儘狩場へやりましては今の恨みつらみより。増つた歎きもあらうかと思ふゆゑ。搔きたくる短氣が急くもの。地まだ〳〵待つて居られうか。八平次お留守大事にせい。皆の者ども賴むぞと下婢一人引具して。振擔げたる

薙刀の道をそ。らせて 三重へ鳴る鐘の。フシ空四つあがり。地藤澤や澤邊の水に富士映る。雪さへ暑き フシ夏の旅。空尻馬も徒歩人も。蒸し來る雲に雨を乞ひ一吹さつとくださるゝ。涼風價千金と。行惱む道の傍に葭簀圍うて。杉葉葺く。清水堰入れ水車。フシ筧の竹の糸筋に。滴る水の。柳蔭。小オクリ暫しとてこそ旅人の。立寄る所 フシ天下一。根本仕出しの家と看板冷やり氷室山。氷つき出す染付けの。南京すゞし錫の皿。樗折りしく青楓 フシ楢の葉もりのたゝりなし。霍亂藥咽にはや秋風通ふ見世商ひ。主は陸上の禪師坊。今度の御狩に給仕時致年來の本意を遂げ。富士野は兄弟の命の露の置所と。便り密に寺を出で御骨なりとも拾はんと。懸髻髪に姿を變へ十日餘り此の營み。御狩場見舞の諸方の使。大磯通ひ鎌倉の。商人旅人暑を避けて上り下りの其の中に。祐經が家來近江の小藤太鎌倉への歸るさ。見世に立寄りコリヤ／＼亭主水くれいとぞ橫柄なる。詞易いこと同じくは。心太になされたらそつちもこつちも後藥。暑氣を去つて渴きをとめ二日醉ひのよろ／＼も一膳喰へば心太。地賴朝公も聞召し大名小名御相伴の御膳料理。前代未聞のところてん扱も甘しと舌を卷狩。隨分商ひにせこを入れ。往來の人の腰錢を狩取るべしとの御諚にて。詞見世さきに富士を作り御狩の體を人形にて。水機關に仕掛けて御目にかくる。地サア只今始まりと。聲可笑くて拍子とり。地御寮の其の日の御賞翫。青葉涼しき心太おなかよしげに一二膳。白皿受けて フシ召されたり。御相伴には五郎丸。赤繪具須手の錦皿下し賜つて是で喰ふ。詞價は八十五文が所燃立つ腹を冷やりと。四尺八寸の水船一尺八寸の突出し。地十文字に突くまゝに。白木の丸箸右手の小腕に持添へて。フシ酒も過し奉る。秩父殿は精進汁花柚散らして進まれたり。コハリ和田の一門九十三膳。代物合せて三百八十四文なり。千葉小山宇都宮いづれも辛子はお嫌ひにて。砂糖豆の粉のつこ此の。この／＼この高すゐての暴れ喰ひ。皿も錫猪口も錫箸打つ音がざざめいて。さしもに廣きナホス富士の裾野にオクリ膳の へ据場はなかりける。地さる程に三千人の列卒の者。三日前から仕過しの。借上は眞逆樣。巾着振ひ底を叩いて是で。御免と詫びるもあり。身の櫨紅葉色々の品を並べて人形に。人の氣を汲む水車。水機關も鹽梅よき フシ舌を廻して語りける。地亭主もほつと息つぎに上下を見廻し。詞あれ／＼／＼東から乘物に綱付けて人足が引いて來る。ムウ乘つた人が笑止や腸が揉み切れう。ハア、急な用さうな。地飛ぶわ／＼といふ方より順風の帆懸船オクリ坂をへ下れる車の如く。ゑいさ聲してはや乘物見世先にどうと下し。人足に戸を開かせ乘手は白布に。胴骨卷いたる仰々しさコリヤ／＼亭主。詞鎌倉から富士野へ乘物でも馬でも早打は通らぬか。隱さずとも申せ

といふ。ハテ損も得もない事見たらば何の隱しましよ。早打にも遲打にも今朝からは此の乘物ばかり。よいわく水一つと振仰向いたる顏と顏。小藤太鮑度見付けて梶原平次景高公。さいふは近江の小藤太な能い所で行逢うた。地 咄す事あり近う寄れと招き寄すれば禪師坊。是ぞ聞及ぶ敵の家來樣子は聞きたしところてんがうする顏で。によつと突出す鼻のさきこりや何しをると梶原が睨みつける眼は皿鉢。皿打落し豆の粉はいに砂まぶれ。ひら皿御免と フシ入りにけり。詞 してくく狩場に別條ないか何方へと問ひければ。さん候主人祐經 本多と矢を爭ひし大鹿鎌倉へと承り。風聞如何聞いて參れと申し付け。鎌倉へといはせも敢ず。其の鹿ゆゑに祐經殿降つて湧いたお仕合せ。蒲の入道にも辯舌を以て腹切らせた。曾我兄弟の奴原も。此の筋から罪に落し縛首打つ工面。さりながら氣の毒は二の宮太郎御注進の使。八つ切に御狩場へ行く筈。女房を去つて曾我と縁は切れたれども。彼を追つては兄弟が事惡うは御前へ申すまい。地 其先へ駈拔けて眞直樣に申上し曾我の根を絶やさんと只今狩場へ行く所。二の宮がまた此の所を通らぬこそ重疊々々。詞 御進はあの藤澤寺へ登り住持に逢うて申さうは。工藤梶原兩人が賴入る。今日九つの刻限を八つに打替へ給はらば。恩賞せんと賺し込みあの高所から下を見下し。馬でも籠でも早打と見るならば八つ鐘を撞かせよ。地 其の時は我分別あり。萬一又住持が否といはゞ片端に引括り。御邊鐘を撞いだかよしト下人も連れて。急げやッと最高に。ウシ心太屋に入りにけり。地 近江は僕を引具して見上ぐる寺の棟構へ。數十丈に山聳え。常に參詣稀なれば。偶々登る人とても。フシ道は木の根の足たまり。眞砂交りに石高く。赤土坂に踏辷り。岩角荒き荒男。手な引き腰押しやうく門外に吐息つき。詞 ハヽア見ゆるは三保の松原淸見寺釣船も漕いで行く。扨涼しいわ氣が晴れるわ海道は糸引く如く。嶺から見れば麓の人が小さう見える。地 下から見るも斷くぞとは。我が身を知らぬ愚人ども方丈に案内す。詞 住侶立出で對面ある近江の小藤太慇懃に。しかじかの旨相述ぶれば住僧更に心得ず。工藤梶原の御賴みとも覺えぬ物かな。鎌倉には猶ヶ國の撞鐘を以て。御番所役の常規とし。當寺の鐘は二十里四方。上總人商人。地 往來通路の刻限を極め。昔より寺領頂戴す。私に刻限を違ゆるは萬民を迷はす大罪。勿體なしく叶ふまじといはせもあへず飛びかゝり取つて捻摺る。詞 御出頭の工藤梶原殿のお賴みを聞くまいとは。家來ども坊主めら一人も殘さず引括れ。地 畏つて取つては締付け捻倒し。一人も洩らさず猿繋ぎ。鐘立てさすな一所に追込み錠おろせと。フシ 引立て奥へぞ入りにける。地 嶺は吹きまく靑嵐海道は蹴上げの土煙。一文字に來る人は二の宮の姉御前。夫の安否か暇の

狀。三行半分讀む目も闇く涙絞つて鉢巻しめ。恨みを夫に思ひしら柄の薙刀掻込み。走る道芝照付けて火を踏む如き燒石原。下女は附き兼ね息切らし詞申し奥様ちとお休み何を申すもお身があつての事。地目が眩ふ／＼息が絶えると呼ばはり呼ばはり行く先きに。舁据ゑたる梶原が早乗物。さあおれが我が夫と。女房乗物取廻し詞これ太郎殿安清殿。今朝曉の鳥鐘も一つ枕に聞いた中。何を惡目に離別とは女の夫に去らるゝは。單に後を見せた同然。側つても此の恥辱は遁れぬ。日陰者の曾我が姉。御勘氣の音の末などと。傍輩の侫人どもに云ひをはされての去狀か。地何れの道にも直に返事が聞きたいと。薙刀構へ立つたる所に。恭星の床几をそろ／＼と梶原平次景高。薙刀の柄をむづと取り。詞此の乗物を二の宮と見違へて。己れと名乗る因果晒し。梶原平次景高を知らぬかと。地呼ばはれば下人どもも一度にはらりと取廻す。南無三寶人違へと。胸は騒げどさらさぬ顏。薙刀を掻拔し飛びしさつて身構へす。詞コリヤ女。侫人の傍輩とは誰が事。サア誰々をさして侫人。總じて曾我に縁みの奴輩。中にある者を指し猜む僻み根性。安清が今日の不首尾も直にはいふまいと。地某遮つて急ぐ御用に對して狼藉者。[illegible]打つて懸る。詞ヤア此を出し拔く梶原。薙刀の刃を避けと。地八間に振つて踏み止め押下に女。殿の刀拔放し大勢相手に主從二人。切結ぶも女業。こつちへ任せ是こそ望むところてん。商人が手並を見よと山椒の粉胡椒の粉。テン辛芥子それより辛い韓紅。唐辛子の粉を摑みこむ。水桶に醤も醤油も攪交ぜ／＼。突出しを水彈き。群りかゝる雜人羅顏を目當にしゆつと突出す胡椒芥子の水鐵砲。唐辛子の石火矢弓手へ廻つてしやつぷり。馬手へ廻つて又しやつぷり。鼻を突拔く嚏吃逆。辛い涙に目玉も飛んで。咽はひい／＼火花を散らして三重防ぎける。地口もあかれず眼も眩む。詰替切料理に打立てられ。ところてんどう敗亡し。梶原主從八方散々逃失すれば餘さじ遣らじと禪師坊。ヤツシ跡を慕うて追駈けるヤツシ中村宿の地方よりも馬煙を蹴立て矢を射る如く乗り來るは。夫の太郎安清殿サア生きるか死ぬるは此の所。あの馬止めよといふ程も宣乗に乗拔け稲妻走り尾筒を弓手にから始けば。下女は鞍をかい摑み。止めても止まらず十間餘り引きずられても堪放さず。詞上る馬に輪を懸けて。轄つよに轉へしはシ迸り付けたる如くなり。詞安清はつたと睨んで。二十里を三時切のお使仕損じては一期の不覺。恥を知つたる男子なるぞ。地尾龍王雲と乗出すを引止め轡に縋り。詞れないぞや二の宮殿。恥を知るは男子御ばかりか。去狀受くる女の身是に上こす恥辱はなし。二人の弟が豫ての大望後見は石鐵の楯よりも。賴みに思うたかひもなく。お暇とあるからは兄弟が事も賴まれぬ。地見

る影もなき曾我殿ばら。よしない縁を結びしと悔しい顔の色目も見せず。もてなし給ふ心に惚れて忝く。起臥起居一命懸けての宮仕へ。見落しでもある事か。貢き曾我の悪目が。今日といふ今日見え初めしか。兄弟への面當か兄弟を見放す氣か。侘しき身なれど河津が娘。道理が立たねば暇の狀は受取らぬと。馬鬣に投付け縋付く。憂さと恨の諸手綱 フシ絞る。涙ぞ哀なる。地安清急いたる顔色にて。ひらりと飛下り木の根にどつかと腰打ちかけ。詞暇をくれた女。詞も交さぬ筈なれども今迄の好み。聞かずや今朝北の丸にて曾我兄弟より事起り。蒲の入道殿御切腹鎌倉の騒ぎとなり。御詮議の筋目によつて。兄弟が命の大事となる仔細あるにより。密に老中の耳へも達し。首尾能く事を治めたく。心は先へ飛ぶ折ふし御臺所より。狩場の御注進八ッ切との御錠。願ふ所と有難く畏つてお請け申す所。榛谷の四郎差構ひ。曾我に縁者の此のお使心許なしと。押へ爭ひしより心付き。北の丸の殿中にて見事に去狀書いたるは。縁者を離れ諸人の疑ひ晴らし。他人の義理合ばかりを以て。思ふ樣に曾我が肩を持たん爲の離別。地飽きも飽かれもせぬ妹背の中。此の外安清に別心なし。詞往還驛路に姿を晒し吠廻る程添ひたくば。元の如く二世も三世も變らぬ夫婦。然る上は見苦しけに縁者の依怙贔屓罷りならず。兄弟老母の身の上どうなりても構はぬぞ。地必ず我ばし恨むるなと云ひ捨てて駈出す。待つて下され去られませう。武士の情の離別とは夢にも心付にこそ。去狀を見てはつと急き安清殿と縁切れては。祐成や時致が片腕を落されたも同じ事と。悲しいやら口惜しいやら一途に腹の立つばかり。外の讒なき樣に他人になつて兄弟が。力にとの誠の心。涙が溢れ忝い。縦へ此の身には不義ありとなりとも如何なる瑕を付けてなりとも。兄弟の爲ならば離別してたべ去つてたべ。暇の狀をたべなうと引止むれば見苦しゝ。と言へば斯く言ひ時切の。御使仕損じ腹切るが見たいな。なう情ない事いふ口で。去ると一口いはれぬか詫言しても夫には。添ひたいが女の習ひ。望んで去らるゝ。あさましさ男も女も曾我一家の。是程運の悪さはとスエテ包みかねたる。涙のさま。下女が目荒き帷子に フシ涙の玉をふるひけり。地安清不便に堪へかねヲ、神妙にも聞分けし。今日より他人の證ぞと。受取渡す名殘も袖もふり切り出づる頭の上。一聲驚く鐘の聲。詞二の宮はつと指折つて三つ四つ五つ六つ七つ八つ南無三寶はや八つか。地九つの鐘を何としてか聞洩らせる。寒雲鐘を隔つといふ事を忘れしか。富士野へはまだ程もあり。刻限違へば榛谷との口論無下となり。一生爰に極つて曾我の運命我が運命。一時に盡きたよな。口惜しや無念やと。大地を摑み拳を握り。急きくる涙 フシ止めても止め。かねて見えにける。地梶原平次景高餅ひの

足輕數十人眞黑に駈付け。詞ヤア〱二の宮時切の早打。刻限相延び御注進の手筈相違。其の科輕からず切腹させ。首を富士野へ持參せよとお留守居中の評定極り。檢使は梶原承る腹を切れとご罵りける。いふ迄もなく刻限違ふは安清も覺悟。人の腹を借つても切らぬ人にも切つて貰ふまじ。首持參迄もなく。賴朝公の御前にてさつぱりと切つて上覽に入るる首。御邊などが苦勞にもおよばぬと又駈出すを待て〱〱〱腹切りかぬる臆病者。家來ども引包んで打殺せ。地承ると奔けば女房同じく二の宮に引添うて。打合はさんとせし所に。禪師坊何時の間にかは登りけん。藤澤寺の岩頭に大音聲。これ〱〱麁忽なされな時が違うたと呼ばはれば。與力の下人聲々にヤア面倒なる下司め。住持を始め司宿迄寵は解いて助けをる。地投殺せ踏殺せと摑付くを取つて引寄せ。ゑいと擔いでうんと投ぐればころ〱と。二の宮が足の前轉び落つるに梶原が揃ひの足輕。扨こそと安清も上を睨んで突立つたり。續いてかゝるを組んづ轉んづ眞逆樣にすでんどう。小首を土に打折つて フシぎやつとばかりに死してけり。詞小藤太怒つて汝に負けてよい物かと。放逸無慚の瞋恚を張つてしがみ付く。地禪師坊二天四天の嵐をかつて組合うたり。上になり下になり起きつ轉んづ組合ひしが。片岸を踏崩し中ごし迄。ころび落つれど兩方放さす放しもせず。さす股に踏張つて フシ暫く息をぞつぎにける。地下には安清姉御前身を冷して待懸くる。サア來いと聲をかけ。一揉み二揉み枯木を倒す如くにて梶原が目の前。地響き打つてどうど落つる。遁さす近江を取つて押へ馬乘に跨れば。平次景高はつと驚き。長追せば猶氣味惡しと フシ蹤をも見すして逃失せける。地二の宮續いて追ひかくる。暫く〱。詞一大事の御用先逃けば其の儘逃がされよ。なう二の宮殿姉御前と瓔珞かなぐり捨て。我こそ弟稚名はおん坊陸上の寺にて法師になり禪師坊と申す者。地樣子は緩々申すべし梶原が指圖にて。詞當山藤澤寺の時の鐘。九つを八つに打替へ安清殿に腹切らせんとの企て。地空は曇つて見えねどもまだ日は晝に傾かす。早く狩場へ御出といへば二の宮はつと嬉しく。詞近江は刻限を違へし大罪人法の如く討棄と。取つて引寄せ首打落し。地これも曾我の敵の小枝。暇の印と投出し一さんに駈出す。二人も跡を見送りて泣いて別るゝ雨雲の。絶間に洩るゝ鐘の聲。數へて見れば二つ三つ四つ七つ八つ。地又九つと勇み行き。遠ざかり行く駒の足。戀せぬ身にも思ひ知る胸かぬ。別れの曉の。鐘に涙はかかるとも。夫の武運長久と又逢ふ事を待宵の鐘に。契りて別れける。

第三

二段 小牡鹿の。いる野も山も聲々に。列卒を揃へて。狩にけり 引。地工藤左衛門祐經打まぜの狩には鹿論も事喧しと。便りよき

岡邊に場を構へ。手の者組徒に鹿猿狩らせ。遊君黄瀬川の龜菊と。床几をならべ酒肴前につらね。詞ヤア／＼者ども。色ある君が見物。豚でも鹿でも一疋生捕り。龜菊が髪筋にて繋いで見たし。地精出せ／＼褒美を呉れる。畏まつた手捕りにせよと我が身知らずの猪武者。猪に駈散らされ鹿に突かれて吠るもあり。熊と組んで眞逆樣にこけざるが。頬骨掻裂く血まぶれの。面は猿より赤恥かいて逃ぐるもあり。口は手柄の・ゑい／＼聲喚き。叫んで三重／＼狩り暮すフシ獵のきかぬも。地時の興祐經盃受けながら。詞なんと龜菊。諸大名の假屋々々。呼ばるゝ傾城白拍子も多からん。身に揚けられたは仕合せ。鹿狩肴に酒盛とは。鎌倉殿の御臺所も叶はぬ榮耀。か程に思ふ祐經に廻り樣がさうでない。そでない地シシ／＼と寄添へば。いや／＼上べばかりの眞實なしとは是此の殿。地毎夜々々龜菊には留守させて。詞お前は御所の假屋に寢て。つひに寢姿見せもせず。地思ふとはしら／″＼しい。鎌倉の奥樣の關の戸が嚴しいか。詞奥樣の文をそれ肌に付けてぢや。地狩場では此の龜菊が關破りと。懐に手を差入るればハアア拜む／＼。詞ゆめ／＼悋氣の文にてなし。祐經が身に取つて一つの難儀。いでさらば懺悔咄して聞かせん。定めて大磯の虎化粧坂の少將が噂でも聞きつらん。曾我の十郎五郎某を親の敵と。狩場の群集に紛れ入つて狙ふと聞く。地易々と徒奴等に呉れる命でなく。身用心の爲君のお側を離れず。夜は御所のお次に寢る其の窮屈さ。詞生れついた鼾かき。地嗜めば咽に塞つて鼻へは出す。耳で鼾ちかくの仕合せ。詞然るに鎌倉に殘し置く女どもが。志の過分さ氣の働きの利發さ。曾我兄弟が胤變りの兄。京の小四郎といふ物にならずの野良者を賺し。金銀取らせ曾我の老母が方へ。間者に入れて附置きしが。地母は血筋の恩愛に騙され。何事も隱さず曾我が家内。箸のこけた事迄京の小四郎が内通聞くは皆女どもが智謀。詞此の上にまだ悦び。彼老母十死一生の大病にて。死目に逢はんと兄弟を呼戻すとの内通。十郎も五郎も孝行な奴聞くと堪らず。最早曾我へ歸りつらん。地神明佛陀の守り。目深き祐經。疫病の神送つて心は武藏野爰は裾野。世間廣く今夜からどこに寢ても安樂世界と。語るを聞けば曾我の噂虎少將の所縁には。我も誼は外ならずスエテ耳に。應へて疎まし。列卒の中より八幡の三郎が弟八幡の四郎。三股角の大鹿荒繩かけてひつ縛り。詞背ごうの兀けたる盜人鹿。總構への柵を潜る所を。大勢下り合ひ生捕りて候とひつ据ゆる。地其の形頭胴體鹿の丸皮にて身を包み。咽の下に人の面。見知りのある曾我の譜代の團三郎。はつと見る目も濁江の。沼に漂ふ龜菊がフシ土にも入りたき心地なり。祐經元より目かど強く。詞周の武王は渭濱の獵に太公望といふ賢臣を生捕り。孔子は魯國の狩に麒麟を得られし。

工藤左衛門祐經は富士の御狩に。曾我兄弟が下人鬼王が弟。團三郎といふ四つ足を生捕つたるは。武王孔子に劣らぬ某。ヤイ畜類。御吟味嚴しき總構へ鹿の皮を被り忍び入らんとせしは根ざしたる所存あるよな。眞直に白狀々々。偽るに於ては盜賊類になし。見苦しき刑罰に行ふべし 地吐かせ。フシやつとぞ睨付くる。團三郎少とも臆せず。詞鹿の皮を被り。畜生の眞似する程の不肖の身。見苦しき刑罰を。さのみ恥辱とも存ぜずさりながら。盜賊類に落されては。浪人の主人兄弟が惡名も悲しければ。仔細包まず語り申さん。地祐成時致は御狩拜見の爲。情ある大名達の組下に交り。此の狩場に罷在り。故鄕に殘す一人の母老體に俄の大病。時を待つ間の命の中子供の顏を一目見て。末期の水をも受けたきとの歎き。詞夜前夜半過に曾我を出で。山川分たず馳付けては候へども。慌しく不思議立つ面付にては。總木戸の御番所御咎めを憚り。雜人の屠り捨てたる鹿の皮を身に纏ひ。檮を越えんとせし所を見付けられ。多勢是非なく此の有樣。なうお女郎。地各は情ある流れの身知る人も多かるべし。知邊もあらば兄弟に此の趣を告げ傳へ。今はの母に親子の對面。臨終の望み叶へなば。身の功德ともなり申さん。エヽ團三郎が一生の奉公を仕損ぜしと。血走つたる兩眼に淚をはらはらとぞ。流しける。詞ムウ老母の病氣につき。兄弟を呼戻すとは此の方に。割符の合ふ事爲ならず。地其の外尋ぬる仔細あり。所詮鎌倉殿御前にて吠えさせよと。ひつ立てんとする所に五郎時致。何としてか見付けけん坂を下りに駈來り。列卒の兵五六人ひつ摑んで。手鞠の如く打付け〳〵。團三郎が繩も皮もひつちぎり八幡の四郎をはたと蹴倒しどうと踏まへ。梢も搖ぐ大音にて。詞鹿の皮被きし人を。鹿と見るは愚かの眼力。曾我の五郎時致は。形は人にて魂の鹿をよつく見る。地鹿こそ通れ十郎殿下り合ひ給へと呼ばはれば祐成續いて走付き。兄弟揃うて珍しき對面と。太刀の柄に手を懸くれば。祐經が郎等主を討たすな餘すなと。二重三重にかけ隔て引摑んで立騷ぐ。團三郎わつて入り。詞アヽ〳〵旦那麁忽なされな。今日のお命團三郎が預かる。御一生の大事のお使。故鄕の御老母一昨日の夕暮より。俄の御病氣次第に重り只今も測られず。千に一つも御本腹あるまじき御覺悟今生の名殘り。兄弟に一目對面せん爲事を振捨て立歸れ。地是に背かば時致は元の如く。十郎諸共生々世々勘當と。絶々弱る御聲を聞捨てゝ駈付けしと。聞くよりはフシつと力も落ち。兄弟目と目を見合せて。寢ぬに。夢見る心地なり。詞アヽ御思案所でなし。京の小四郎の不所存人さへひつ添うて看病。此の人にお二人が孝行劣り給ひては。地冥途迄の御恨み天の冥加も恐ろしし。祐經殿に和を乞うてお立ち〳〵と勸むれば。祐經大きに力を得これ〳〵兄弟。詞父

の河津は流れ矢に當りしとも。股野の五郎が討つたりとも分明ならぬ親の敵。差當て祐經を狙ふとな。地よし〱さもしげに言譯はすまじいぞ。サア。打懸けよ切懸けよ音に聞く程にもなし。怯れたか曾我殿ばらと兄許見たる廣言。五郎たまらず神妙候祐經と踊り出づるを押止め。詞母の便りを何と聞く狂亂か弟。いや〱〱。微塵粉灰になればとて。敵に聲を懸けられ悄々立つては骸の恥辱。放されよ十郎殿。ヤイ。身の譽も恥も捨て。婆婆と冥土の父母を悦ばせ奉らんと。幼少より今日迄兄弟が念願はや。忘れしか時致。ハツアさうぢや。エヽ殘念至極。口惜しい祐成殿。無念な時致。あさましき曾我の運命やと。涙の齒切り身を顫はし。握り拉ぐ太刀の柄。抜きかけ〱はつし〱と鍔打は。鎺切羽も一時に フシ碎け散るべう見えてけり。地龜菊手に汗握りしが。兎の時より善惡の事に揉まれて驚かず。しやんと立つて申しお二人様。

詞顔を赤めてなんぞいの。たんと無念さうに見えるぞへ。廓通ひなされし程にもない。是が何の恥ぞいの。謂はれぬ差出か知らねども。他事ないゝ虎様少將さん。龜菊が一座に居て。うつかりと見て居たかと思はんすも氣の毒な。地お侍の義に迫るも浮世の慾に身を砕くも。命懸けるは同じ事。假令ば酒の意趣ある中二日心か公用か。酔うてはならぬ首尾もある。詞其の足許を見て張台懸けての平强。得て是に手を取るわいな。そこらを千疋繋いで。恥をかくが手柄の基。さあ飲み伏せたと油斷させ。地心を許す門立か思ひがけなき朝込。ずつと仕掛け差引ならぬ手詰の盃。腕を捻上げ首を押へつぎかけ〱〱奈落の底迄飲伏せ。引起して止めの盃一獻さいて。フシしやんと取り。詞是を本望本酒の手柄といふわいな。さりながら此の菊も。いつぞや山下宿で三日三夜。和田さんの大寄に朝比奈さんの無理酒には。地誓文とんと息ついたと。笑うて其の座を寛げしは。フシ物に馴れたる仕打なり。地此の詞に兄弟差詰つたる氣を開き。母の疾病心ならず參會は重ねてと。立たんとすれば暫く〱。詞孝行の程感じ入る。祐經も一家の端餘所の樣には思はず。本海道は遠ければ。山路の近道急ぎの爲。地某が秘藏の名馬。狩場まで引かせしを兄弟に餞せん。外道月毛婆羅門栗毛是へ〱。あつと答へて引出す其の丈八寸餘り。肉十分に筋高く蒲芡に口こはく。乘入れもせぬ野髮の馬一樣の鞍皆具。遣繩追繩口取繩。つらを振れば六人の舍人もよろめきひつ立てられ。前脚かいて齒をたゝき人を嚇して鼻あらし。髮より洩るゝ眼の光 フシ角なき鬼の如くなり。兄弟急度目配せし。必定此の馬に駈落させ。殺すか不具か恥かゝせん謀。辭退せば猶恥辱と祐成會釋し。詞天晴れ名馬候。斯る名馬を申し受け。浪人の我我飼も舍人も不足なれば。地路次の間借用と。外道月毛を引きよせ乘らんとするに寄

せ付けず。鞍に飛れば鞍そばへ。前へよれ
ばすつくと立ち。後へ廻れば跳散らし。踏
立て蹴立て高嘶き乘せんず氣色はなかりけ
り。地南無三寶。前に大敵後に母の臨命終。
一代一度の身の大事。コハリ弓馬の氏神鶴が
岡。當所には富士淺間、箱根兩所駒形權現
分身は。百和龍王右鵲王左鵲王。本地大聖。
文殊菩薩の獅子の駒御手の如意は鞭とな
り。不動明王の縛の繩。手綱に變じ給へや
と慈救の偈を繰りかけ〳〵轡の立ぎきむん
ずと摑んで。ゆらりと乘るにナホス恐れなく。
頭を垂れて身を伏せしフシ佛神力ぞ有難き、
時致嬉しく蛇に繩付けても乘らん物と。波
羅門栗毛の口によれば跳上り。棹立尻込み
あたりを蹴立てる馬煙り。つつと入つて太
腹を裂けて退けとはつたと蹴る。さしもの
惡馬もよろ〳〵〳〵。ひるむ所を引寄せひ
らりと打乘つて。兄弟鐙踏ん張つて轡を並
べ扣ゆれば。祐經案に相違して。只うつか
りと大口をフシ呆れ果てゝぞ見えにける。

地祐成勇めば時致きほひ。詞ヤア〳〵團三
郎。汝は是より秩父殿和田殿。其の外の方
方へ一禮申して假屋を仕舞へ。サア來い五
郎。いざござれ、地十郎殿と一鞭くれて乘
出すも。日脚も早き午未。我が身の運も上
刻と、八卦占方八つ響く鐘に。誘はれ三重
〳〵風さそふ。フシ朽木の櫻。地春過ぎて又い
つの世の花をだに。待つにかひなき曾我の
里。痛はしや母上は河津に別れし夕より。
二十餘年の物思ひ貧しき上に世を忍ぶ。兄
弟の子の成人を急ぐは親の老と死を。フシ
急ぐと知らで身に積る。地雪折れ松のむず
をれに。俄病の萬死の床。樂しみは似ぬ孫
晨が藁屋の紙帳漏りくる風。そよと寢返り
息つぎもフシ今を。限りと聞えけり。地折
しも大磯の虎化粧坂の少將。狩場の留守の
お見舞も見捨てがたなく止まりて。詞様々
心を盡せども馴染なき身は病人の。お氣扱
ひと差控へ。團三郎は富士野の使二の宮へ
人を走らせても。夜明より夫婦ながら留守

とばかりに否應もなし。打つにも舞ふに
も京の小四郎紙帳によりては鼻息窺ひ。ま
だ歸らぬか祐成時致、扨も遲しと表に出で
ては南を見やり。足を空に驅廻り。詞これ
これ二人の女中。我等は現在母の腹より出
たれども。五郎十郎とは胤變り。殊に久し
く通路もせず漸う此の頃來懸つて。出來し
顏の孝行だては兄弟衆の思はく。世間共に
譯立たず。馴染なけれど兩人は嫁といふに
頭振られず。年寄られても女子どし遠慮な
しに賴入る。第一が臨終の勸め〳〵といふ
に付け。地扨はや此の世の賴みも切れた
かと。心細さの胸詰らしく紙帳ごしに口差
寄せ。詞追付け御兄弟お歸りに間もあるま
じ。地それまでも先づ一筋に後生の事をお
心に。お忘れなされな南無阿彌陀と。涙に
濁る聲の色。母上息も苦しげに。詞されば
よ老の病の床。地後生忘るゝにはあらねど
も臨終の一念に攝取の。光明を期しフシ十
念の。枕の上に。聖衆の來迎を待つ事も此

の世の念を拂ひ捨て。詞一心亂れぬ上にこそ本願にも逢ふべけれ。地我が子の絆に纒まれて闇より闇に迷ふ身は。二尊の來迎より懐しの祐成や。二十五の菩薩より床しの時致や。過ちでもしたるか心許なやあら遅やと。物ごしも早弱々と。子故に惱む狩場の雉 フシおのが命は忘れけり。夕暮毎に。兄弟を。待侘れしには彌増して。虎少將が氣ち急かれ心も空に日は傾く。詞ハアあの鳴る鐘は早七つ。なぜに遅いと走出で。地表に立てば内氣遣ひ内には心落付かず。門の出入幾度か フシ鐘の數々繁かりし。地仇は却つて情の馬沓我兄弟が孝の鞭。切所難所の六里半。只一時に駈けさせ馬を道に乗捨て。つつと通れば虎少將そりやこそと歸りなう申し。詞御病氣賴み少なくかういふ間も危いと。地聞くも悲しく胸騒ぎ。ヤ小四郎殿。親切の看病忝しと。挨拶一禮そこ〱の足音靜かに床近く紙帳のつまに手を添へて。地祐成歸りて候時致歸りて候。御心は如何ぞやなど御藥は參らせぬ。北條殿より賜りし奇妙の藥是にあり。我々不便と思召さば此の藥召上られ。一日も御命延ばへてたべ母上とスヱテ涙を隠し申しける。地何兄弟が歸りしとや。近う寄れ此處よれと紙帳のつまより兄弟が。手首をしかと取る手もゆらぐ玉の緒に。まだ力ある物ごしにて虎御前少將。詞晴々と此の紙帳取つてたべ早う〱と宣へば。あい〱返事するまも老人は。いとゞ心も短き釣手。手もむすぼれて急げば廻る。あら鬱陶しやと押退け出づる母の顔。目の中憶に色合も常に變らぬ息ざしに。病人よりは側の人 フシはつと心ぞ煩ひける。地母は怒りの目に涙。詞ヤイ兄弟賤しげに北條殿の御藥何にせう。母が病とは呼び返さん爲の空言。假令ば他人でも友達知音の大病死病と聞く時は。萬事を捨てて駈付ける是が人情世に住む習ひ珍しからず。地母が末期と驚きて即時に歸るを孝行とばし思ふか。譬や外の用とて母が呼ぶには歸るまい。殊に今度の御狩の供は工藤左衛門祐經を討たん爲の謀叛とな。詞五郎めは勘當宥して昨日今日。此の意見は幾度か色を變へ品を變へていひ盡し。今更同じ事いふに及ばぬ忘れはせし。詞兄が勸めたか弟が勸めたか。合點の行かぬ五郎めが面魂始めの氣が直らぬな。當時祐經は一國の大名何百騎といふ大將。そもお事等に討たれうか。地一僕連れるか連れぬ身を祐經方のあぶれ者。忍び討ちに討ちたるとて其の時誰を恨むるぞ。いふも愚か河津殿は坂東一の勇者兩國かけし大名なれども。詞奥野の狩の歸り足騙し矢は詮方なく。地命を失ひ給ひたる父の最期を手本にして。昔思へば老の身の此の頃子供の狩場の留守。あられう物か推量して。母も親の内ならば。可愛と少しは フシ思ひやれ。詞母が此の病といふも爲の誠ぞや。地五藏六腑の病ならで病はなしと思ふかや。雨風の氣に當り物の祟りの病には療治もあり藥もあ

り。子ゆゑの闇の病には唐高麗の名醫をよせ。萬卷の醫書を搜しても藥の方はよもあるまじ。藥になるも二人の子病になるも二人の子。起臥立居明暮に病となつて痛めんより。鴆毒となつて一思ひに殺してしまへ兄弟と。かつぱと伏して泣き給へば祐成時致虎少將。こは勿體なき御詞と疊に頭を打着けて。沈み入つたる連涙。無智無慚の小四郎が義理にも泣くぞ道理なる。祐成袖を絞りかね。御教訓と申し御不便餘つて御恨み。暫しが中御心を苦めし段後悔恐れ入り候。敵を討つて命を捨つるも。父の孝養母を悦ばせ申さん爲。御機嫌損ひ命を捨てゝ益もなし。祐成に於ては敵討の事ふつつと思切つたるが。五郎いかにとありければ。不承々々に佛頂面。ハテ生きるとも死ぬるとも一所と言交した。兄きの分別變るからは獨り物にも狂はれまい。どうなりと勝手次第お返事なされと尖り聲。あれ／＼あれこそ母が病の神元の如く

勘當と宣へば流石時致。ヘヽ憎い聲付同に物のいひ様で。あゝ畏つたとついなんどりとろ受けはならぬ事かはと。諫めても猶面縫祐成大聲上げ。母上のお顔の障の御勘當に懲りぬかと。叱られて喰懸し。口でまだ／＼申さんより誓文の爲只今御前で企うたふ。ヲヽ尤いで金打と兄弟拔劍打合せんとせし所を母手に縋り押止め。ヲヽ出來したり／＼。生先祝ふ名香とも。金打はせぬ事ぞ。其の眞實を見るからは最早心も落付いたり。嬉しゝ／＼今こそ世が榮となりし二人の子。元服させて此の方の痞が下りたと悦びの笑ひ顔さへ哀れなり。總じて若き男子に妻子といふ絆を早く持たせねば。身持を輕く命を塵とも思はぬもの。虎御前や少將とは深き契約ありこそせめ。押出して自らか嫁と呼ばねば定まらず。娶る時は必ず父母に申すと禮記とかやにもありと聞く。今夜是にて祝言の盃取囃し。祝うてたべと枕の文匣に疊み置

く。直垂二領。是は兄弟が爰はの晴れと嗜みし。一世一度の妹脊結び二人の嫁御。衣紋風よく着せ給へ。狹くともあの部屋を嫁入御殿になぞらへ。脊は悦ぶ打掛。折しも二の宮の姉がくれたる小袖をも。心で結ぶ蝶花形は待儲の前に置て。河津殿の位牌諸共にさゝんざの聲聞かせてたも。ヤア京の小四郎おのれは方々寄方多し。今夜は歸つて重ねて來い。あれ日も暮れかゝる里の迎ひも來ぬさき。兄役に祐成共婚部屋へ／＼。あつといへども立ちかねて恥ぢて赤らむ横顔を差込む虎が袖の下。是は／＼大人氣ないかみ様のお世話になる事か。手管の逢ふ夜思ひ出し手ばしかうやらんせと。手を取交はし入る振りを五郎見やつて扨も兄き厚い和郎。こちやならぬウヽ恥しと俯向きて。疊に喰付き身を縮む。これ申し少將が若うて殿御の思ひ樣。嫂に劣つたと姑御の思召も迷惑。サアござんせと引立つれば。いやこちや否

ぢや。否といふて濟むものか。それでも母ぢや人の見てぢやもの。あれ彼方向かしやんした。地いやぢや〳〵も否ならぬ。閨に引摺り入相の鐘睦じき夕べなり。オクリ月なき。〽宵の雨霽り。地京の小四郎部屋の體を窺へば。今宵ばかりはたつぷりと燈心太き燈火の。影に廻らす盃に可笑しや何を目的にて。八千代を結ぶ夫婦の縁。親子の縁の纏合からむ岩根のさゞれ松。濱松の音はざゞんざ フシ千箱の玉とぞ謠ひける。地小四郎が思ふ壺甘しく。地假令兄弟鬼神でも。母と女房に斷ち絆打たれては。脛骨立たずの腰拔。祐經公一代の疫拂ひ。此の足で注進し御褒美は何であらう。知行であらうか若し金銀を下されたら小商まだるい。とんと小判にかゝらう。地小判々々と獨言口に金の フシ舌を嘗めてぞ出でにける。揚屋の窓櫺。山里に。地今日は蚊遣に燻へ替へ二つ並べし羅もの、。蚊帳も紙帳と所體めく。宵は果なき浮世事。フシ心を延ぶる種ならし。甘宮の床の上に契りを千年の鶴に譬へ。恩愛の莚の上には快潤たる母の詞恐れざるにはあらねども。詞時致が年月の念力やはか今宵を過さんと。地少將を醉臥させ出づる紙帳の戰ぎにも。祐成の目や醒めんと心締めたる高からげ。母の形見と直垂拖込み身を潜めたる差足は。我が身ながらも野狐の フシ罠を窺ふ有樣なり。地言ひ合はせねど同じ心に祐成が虎を酒に寢入らせて。今生にあつてこそ母の恨も有るべけれ。今宵限りの命ぞと直垂身に添へ拔足に。燈火晴き人影を弟は兄とも知らず。兄は弟とも知らで互に忍び足。ちらと見付けてつつと寄り時致か十郎殿か聲高し〳〵。詞かの一大事を今宵と思ひ定めしな。我とても其の通りよつく兄弟が心の斷く迄合ふ事は。本望遂げんは手の内なり。兎につけ角につけ。地痛はしきは母上悦び寢入りの御枕。嬉しき夢かな見給ふらん醒めての後の御歎き。今見る樣に悲しやと奥を見やりて兄弟が フシ忍び涙ぞ哀れなる。地祐成涙を止め。詞かねては今宵假屋にて心靜かに書置きし。形見も殘さんと思ひしが是より宙を馳けるとも。富士野へ着かば夜半も過ぎ。なか〳〵思ふ外なるべし。地歎きの中の御慰み一筆殘さん尤と オクリ床の〽硯を引寄せて。地料紙取る間もあらばこそ恨みなとてぞ書きつくる。スヱテ紙帳に涙拭へとや。乳房啣へし昔より。二十餘年の身の思ひ。悲しさも嬉しさも。フシ書綴りゆく藻汐草。フシ心餘れど。盡くされぬ。地祐成はともすれば。虎が情の忍びがき。時致が筆の運びには箱根の別當の御事。母の御不興宥され申し。俱不戴天の敵を討ち名を後代にあげん事。偏に母の御慈悲とぞ其の外同じすさみにて。地今日賜る直垂は。最期に着し冥土迄母上に添ふ心地にて。父尊靈に逢ひ奉らん有難さよ。詞脱捨てし着ならし衣形見と御覧下さるへし。地弓と靱は二の宮殿。机に殘せし萬葉集法華經は時致

が。八年讀誦し手に觸れし。姉御前に参らする。守袋は禪師坊。諸神諸佛の誓を直に後世の。引導頼むぞや。鬢の髪は虎少將ゝの。クリ千筋と。なでし數々の。念佛申し手枕の。移り香しめて忘るなよ。鞍と鐙は鬼王團三郎に取らするなり。我々が身に代り母上の宮仕へ。頼む事は是一つ。建久四年五月闇。天は暗しと申せども思ひは晴るゝ下旬八日。祐成判。時致判と書止め。からり〳〵と筆を捨てスヱテ聲をも立てず泣き居たり。地名殘はいつか盡きすべき短夜や更けぬらん。いざ來い五郎と先立てば續いて出づる時致が大力の踏む足に。年經る家の落緣をかばと踏拔きどうと落つる其の響。障子の煽ざは〳〵〳〵。紙帳の騒ぎに目を覺し。詞ヤア十郎様がおはせぬぞ五郎様もござらぬぞ。地表よ奥よと立騒ぐ見付けられては悪しかりなん。やり過して跡より抜けんと頷き合ひ。荒れたる庭の萩薄フシ引被いでぞ隠れ居る。地なう此の紙帳の書置扨は今宵討死とや。たつた今結びの盃して直に離れてあられうか。かみ様のお歎きお腹立ち。追つついて留めて見てつまりは共に死ぬる分と帶引締め裾短か。褄かい褰け走り出でんとする所に。奥より母上簾押取り用捨も波の簾腕も。共に折れよと打立て〳〵。ヤレ思ひ切のない奴とてはたと打ち未練者とて丁と打つ。詞廓にては流れの身こゝにては武士の妻。夫の親の敵討母が目顔を忍んでも。共に見立て出してこそ弓取の女房なれと打敲き〳〵。詞母は寝ても寝入らず書置するを物間より。見て泣く涙はいかばかり。そこを耐へた親心思ひやれやとばかりにて。簾をからりと投捨てて轉びふして泣き給へば。垣越に聞く兄弟。宵には似ざる御心又もや御意の變るかと。立ちも離れぬ夜の蟬。取付く露の崩れ垣フシ忍び音になく哀れさよ。地二人の女かき暮れて。詞敵討つを曲事と御叱りの間もなく。止むる我等をお咎めはゞ狼狽て猶氣が迷ふ。地合點の上で諸共に思ひ切るなら切りたいと。スヱテ恨み顔にて口説き泣く。地母君いとゞ目も開かれず。口は廻らず心は急く。仔細もいはず杖棒當てて恥かしい。詞昔を知らぬ人々の不審なもことわり。兄弟の子供が五つや三つの頃より。地父を討たせ無念なと思ひ込うだる魂。成人に隨ひ增りこそすれ顯さぬ。弓矢取る身の念力母が留めて留まらうか。詞それ知り乍ら可愛そに死目に逢ふと驚かせ惑はせ。邪魔を入れて呼戻す其の邪魔は誰がさすぞ。恨しめや妾が腹貸した。京の小四郎といふ亂變りの大惡人。地慾に耽り襟に付き敵祐經が家の子同然に身を寄せ。此の頃爰へ來りある事ない事間者になつて嗅出し。内通すれば用心し討つべき透間もなきと聞く。病と僞り呼戻し憎う辛う叱りしは。詞惡人の兄めに聞かせんため。彼奴めに聞かするは祐經に聞かせ油斷させて。易々と討たせん爲の親の慈悲。心碎くはいかばかり。地一萬といひし

時よりも兄十郎は老成者にて麁忽せね生れつき。箱王の時より五郎は氣がさ者すはといへば氣が逸る。腕の骨の固まる迄人にも油斷させんため。出家にすると箱根へ登し置きたるに。詞元服したる科ぞとて此の頃迄の勘當は是も敵に肌許させ本望を遂げさせんと。地勘當も親の慈悲父の爲に捨つる命。惜まぬ子には孝の道あり義もあり。討死すると知りつゝも勸むる母は何の道。根のしの身の上や助かれといふ情はあれど。死ねといふ慈悲はなし。親の死を歎かぬ不孝の子は多けれど。孝行な子の討死を厭はぬ母は我ばかり。若き子供を先立て跡にさがる冥土の道。夫の河津殿へ言譯は何とせんと涙の限り聲かぎり。口說き給へば虎少將も絕入るばかり。母の愛心兄弟が身に應へ胸にしみ悲しさ詮方遣る方なく。伏拜みては泣き沈み。歎き入つては伏拜み思ひ。隔つるフシ破れ垣いとゞ。涙に朽ちぬべし。地不便や可愛や兄弟がよしなき母にからまれ。さぞや道をフシ急ぐらめ。地さりながら現世の望み叶ひなば。來世はなほ頼みあり。箱王を出家にせんと袈裟衣迄營みて。佛に契約申したる其の詞を違へじと。代りに母が出家して其の袈裟衣身を放さず。是見よや嫁達と上の單を脱ぎかくれば。下は墨染五條袈裟一度にあつと手を合す。庭と上とに四人の願ひスヱテ四弘誓。願こそ有難き。詞子を先立てゝの弔は逆さま事とて其の子に罰の當るとや。身は箱王が代りにて今日より我こそ箱王法師。地十郎は我が兄五郎は却つて我が親ぞや。いざ虎御前少將初夜の勤の頃なれば。親五郎殿兄十郎殿の菩提を祈らん持佛へと。泣く〳〵誘ふ御姿兄弟此の世の暇乞。名殘り牡鹿の狩場へと急ぐ足さへ跡へ引く。立止まりても面影を。中に隔つる小萩垣。物越もはや聞かせじと耳驚かす初夜の鐘。諸行無常を今迄は餘所に聞きしも我が身の上。母は我が子の上に聞く。一つ響きを別路の涙。涙に關分けて。又逢ふ夜なき親と子の袖の。露こそ重たけれ。

第四　虎少將道行

フシ妻戀ふ鹿の。身の果も。戀の文書く筆となる。あつてかひなき老の身は死して髑の置所。同じ裾野と心ざし。スヱテ馬に任する道知るべ。是は若駒乘手は老の。姑一人嫁二人踏みも習はぬ雙鐙。流石夜道の力とや。油煙も細き提灯に。足元ばかり照されて。オクリしをれ〳〵出づるぞ哀れなるフシ先はいづくと。眺むれど。富士さへ見えぬ闇の夜の今宵一夜は十五夜の。月にぞ替まほしの影ギンオクリちら〳〵。ちら〳〵螢火か。いや兄弟のフシ亡魂よ。結び止めんと下がへの。褄吹き返す夜嵐に。長地はつと消えては狐火の我と我が身を迷はする雲より上の。一聲や。又二聲や三聲とだにも啼捨てていづち行くらん鵑やよや待てなれよ冥土の鳥ならば。死出の山路に關据ゑて。フシ先立つ我が子とめよかし。心覺えの。道程

も弓手は秩父の山おろし。松の響か磯打波か。晝六ツ三保ノ山清見寺鐘かう〳〵と フシほの聞え。猶も心ぞ急がるゝ。きらめく露の玉澤村。塔はあやなし梅澤村オクリ二村。過ぎて行狂ふハヅミ駒の蹴上の。鞠子川衣紋流しの。アヽ曲もなや。フシ此の駒の。道の街に行泥み。地打てどもあふれどもなど進まぬぞ歩まぬぞ。哀れ一足に千里もがなとこがるゝとは。思ひ知らぬか白月毛の。駒に恨みの涙の鞭。打つにかひこそなかりけれ。○地いやなう駒に科はなし。此の別れこそ大磯道。夕暮ごとにお二人がしやんと乗されて通路の。戀の知邊の馴れ〳〵し。今宵はそれに引替り。乗手も道も替るとは。知らで止まる フシ可愛さよ。二人地御兄弟の御形見今一度里の方へと押向けて。△引立てゝ見れば不思議やな元の如くに歩み行く。引戻せば立ちとまり慕ふは誰ぞ。△我が夫。○我が子との生別れ 二人フシ共に悲む優しやと。鞍の前輪に縋り付き。

スヱテ歎けば共に聞入れて。耳を伏せ尾を垂れて フシ人諸。共に泣く涙おのが。毛色も染めぬべし。パルフシ歎くな駒に。せい付けてハイシイ。足柄越は風荒く。露を萠葱の箱根山。フシ今行く道も。つひに行く賽の河原のいつとても。大人童の隔てなく。歌罪は重たし迷ひは深し。何か菩提の。道と。なる懺悔。懺悔々々懺悔ゑ。何か菩提の道となるさんげ〳〵〳〵ゑ色にそみ叉。フシ香に愛でて。拾ひ洩らせる後世の種。フシ闇の闇路を。如何にせん照らせ三島の宮所。御燈の光。しん〳〵と心も。清き瑞籬に。馬上の母は手を合せ。祈る願ひの百千千をいはで心に駒急ぐ。ハヅミフシ老木の。松は情なくて。初咲櫻接穂梅。盛りの花の嫁達の身には如何なる神無月。早月の雨の何時の間に涙の時雨そめ手綱。絞れど乾く隙ぞなき出行人に後れじと。笠取りあへず杖取らず常の姿を其の儘に。スヱテ今來て見れば旅衣。裾野も。近くなりにけり

フシ星さへ見せぬ。松林。下は野澤のちりちり水襦は茨が綻ばし。足は草履が杭や杙株小石原。一寸先は暗のうたてや小提灯。細蠟燭もほの暗く駒の躓き氣遣はし。御狩場もはや程近し。詞是から二人がお手を引き地いざそろ〳〵お歩ひと。抱きおろすもおろさるも フシよろめきながら下り立ちて。詞なう嫁たち。乗つてさへ草臥れる我が身で思ひやらるゝ。もう何時ぞ心のわくせきする故か。地鐘は四つやら夜半やら聞捨てて數へもせず。更けた樣に覺ゆるに狩場の方に物音は聞えずや。兄弟が生死も誰か聞かせん便りなやとスヱテ歩みもやらず立ち給ふ。詞お道理やさりながら。我々が妹分黄瀨川の龜菊と申す者。祐經が氣に入つて狩場へも呼ばれし故。地御兄弟の御事を身に引締めて頼みしが。詞若けれども龜菊は侍勝の氣性といひ。義理強いは傾城の習ひ 地よもや如才は致すまじ。あはれかし龜菊に逢ひたい事やといふ中に。草の葉越にちら

つく火影あたりを　フシ照して見えければ。そりやこそ事よア、氣遣ひ。一走りいて見てこうか。跡も危なしあれ〳〵と。心ばかりを碎く間に次第に近付く提灯に。女交りの笑ひ聲。詞エ、氣遣ひない〳〵。皆廓の駕舁ども。假屋々々へ呼ばれた女郎衆の戻りと見た。地若しあの中に龜菊のゐやるかいざ待合せて問うて見よ。母君は先づ暫しと草の繁みに隱し置き。小提灯の心切りしめし待つとも知らでざゝめきて。一節謠ふ聲のあや。歌三年以前の早月闇。鴫立澤の歸るさに。禿小さんか誰やらが。螢を取つて遊びなば。面白かろではあるまいかと。謠醉を勸めし夜半の風。今の氣色にナホス。フシ吹きおくる。地駕舁が辯は駕でふり。螢は光る淺瀬川。跨げちやまつかせコハリ乘物の。乘手は知れた提灯に。上と下とは磚花中に二重の松皮菱。地ナホス黄瀨川の三浦とて。年まへの太夫大彌太殿とは深い中。是も狩場へ呼寄せられ繋れ松山美しい。跡から見ゆるは誰ぞいの。コハリ問はれて駕の簾より。招く扇や開き扇は朝霧樣。狩場の露でしつぽりと。濡れさんしたの〳〵。濡れた印の三本傘雪折竹は奧州樣。五十餘人の松の中ナホス手管の上手の見たぞ遣らぬぞ。ヲ、惡口いふは誰ぞいの。問はれて言ふはむの字ながら虎でござんす。少將ぢや。地珍しい問ふに及ばぬさし合くらず。中よしの兄弟御の假屋へか。龜菊樣とも一座してお噂たら〳〵。近い內逢はうぞゑ。先づおさらばと道を早めてそれそこへ。コハリいたら貝は岩崎樣ナホス網の手は菅原殿。舞うたる鶴は茨木屋のコハリ左門殿。龜甲は輪違屋の花咲が。一座の座配逢ふ夜のわけ大一大萬大吉と。我を折烏帽子立烏帽子白一字黑。一文字屋の山の井殿。竹に。雀は仙臺屋の陸奧殿。地遣手は露の幸ひ菱。覺むる眠りの梅ばつちり。コハリ並んで二つ提灯は大和屋の唐土。名も高橋の紋所地二人が心相駕籠で　フシ追々に舁來る。地急かる、心に虎少將詞をかけねば答もなく。過ぎ行く跡から龜菊が。印は紛ひも嵐吹く紅葉流しの紋提灯。詞コレ龜菊殿。虎少將ぢや物問はう。乘物暫しと止むれば。地待つてたも駕籠の衆と。忙がし中をせはし夏草　フシわくせき草にぞおろしける。詞なう逢ひたかつた二人樣。此方とても其の通り。して御兄弟のお身の上はどうぞいの。さればいな。地いうても〳〵御運の弱い御兄弟。お袋樣の御病氣とて俄に曾我へお歸り。京の小四郎とやらが內通。何やかやで祐經とんと心を許しもう樂ぢや。詞今宵から假屋に足を伸して。御狩中は緩りと酒盛しよとの前巧み。地是はよい首尾御逗留の間には。どこぞで本望遂げさせましよと心力のありし所。詞今日晝過ぎ八つがしら鎌倉より。二の宮の太郎殿といふ人早打のお使。賴朝樣の弟蒲殿とやらが腹切らんしたといの。是も御兄弟について入譯あつてぢやげな。それで假屋々々の騷動踊りの崩れぢやと思は

んせ。それゆゑ頼朝様も今宵八つにお立ち鎌倉へお歸り。若し雨が三粒でも降れば明日五つにお立ちが延びる筈。降つてもお先手は八つ立ちとのお觸。荷を締めるやら何やらやくたいのあることか。地私らが樣に假屋々々へ呼ばれた女郎衆。俄に里へ戻さるゝ此の有樣見て下んせ。抱へる樣に思うても御運の悪い御兄弟。お知人にならねどもおふくろ樣もおいとしい。詞こなさん達お二人の心が察し遣られて。私や涙がこぼれる。さり乍ら悔々と思はんすな。來らぬ時節は是非がない。私も運が悪いば。まあ二三日狩場にゐれば。白兎の子貰ふもの。地何も時節と思はんせ。もう別れんす其の中えと。大事の咄ひつ撮みしどけ半ばに云ひさして。フシ駕籠を早めて急ぎ行く。地母君堪へ兼ね轉び出で。詞龜菊とやらんの咄聞きました。ヲヽそなた衆も悲しい筈母が心も推量あれ。地いふ事なす事ぐりはまになり曾我の運。ながらへて幾何の憂目をか重ね見ん。命長きは恥多し。嫁御さらばと守り刀を逆手に拔き持ち。南無阿彌陀南無阿彌陀佛と稱名の。聲より早く飛びかかり挘放し。胴慾な御袋樣。命を捨てゝ御兄弟のお爲になる事ならば。二人が命惜まうか望みさへ叶はぬに。母御に自害させまし。不孝の罪は子に報い。一生御運は開けまい御兄弟がいとしくば。思ひ直して給はれとスヱテ縋り歎けばわつと泣き。詞死んで憂事聞くまいとは子を思はぬに似たれども。母が身にもなつて見や。子供の爲にと病を作り。地思ひ設けし母が慈悲は フシ仇となり。地雨さへ降らねばお立ちは今宵八つ立ちとや。顔振る間もある事か假屋假屋の騒がしきに。若し近寄りて見咎められ盗賊なりと搦められ。却つて憂目に逢はうかと。案ずる程身も顫はれ。自害せずとも死に兼ねまい。頼朝公の鎌倉入を止むるは雨ばかり。アレ〳〵星もきら〳〵と雲の一筋あらばこそ。何ゆゑ雨が降るものぞ降らずば望は叶ふまい。五月雨は五月の雨一日過ぐれば六月よ。今宵二十八日の五月の雨はなど降らぬ。月日に偽りましますかと。勿體なや天道迄恨み申すも此の母が。命の情ない故ぞかし空目して死なせてたも。乃物たもれと縋りつく其の手を直に抱きつき。三人一所に顔見合せ。思はずわつと聲を上げ悶え焦れて歎きしが。詞少將樣なんと思召す。雨さへ降れば明日五つの御立ちとや。其の間には御兄弟御本望は必定。お二人の名を下すも。名を上げるも雨一つ。地夫を慕ひ石になりたる女もあり。身こそ賤しき流れの女となりたれども。一念は誰に劣らうぞ。天道地神龍神も。流れの女は守るまじとの誓もなし。詞命に換へて天道へ雨を祈る志。そなたはなんと。ヲヽ我とても其の通り。死ぬるに二つの道はない。地サア〳〵早うと勇み進めば母君も。頼もしき心ざし思ひ込うだる念力天道納受なからんや。我も共にと立ち給へば。虎御前中

に立つ心の疑ひ夏草を結んで幣と禮拜し、眼をふさぎ心中に南無や三島の大明神。傳へ聞く古曾部の能因法師。苗代水にせき下せ。 フシ天くだります。神ならば神と。詠ぜし歌は國土のため。日の本照らす日の御神も。雨寶童子の御名は普き天の下。咎めて陳ねし フシ大和歌。例もふりし雨乞の。小野の小町も女なり。 フシ我も亦女なり。三十一字は陳ねずとも。妾が僞りなき心百首千首の和歌となつて。感應の雨を下し願ひを叶へおはしませ。日頃信じ奉る普門品の天龍八部。阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅。其の外南海下界の龍神。二人の願女が一身の血を搾つて雨となし。 夫の大望母の歎きを止め給へ。慈意妙大雲澍甘露法雨。怖畏軍陣中念彼觀音力と。虎少將が小指を喰裂き流るゝ涙諸共に。コハリ袖に浸して虚空に散らし。一身五體に汗を流し足を爪立て肝膽碎き。 地天を禮し地を拜し祈る フシ心ぞ無慚なる。 地諸天も感應過たず。コハリ晴天忽ち常闇と虚空に閃めく電光。愛鷹山に雲覆ひ。涙の雨を誘ひ來て。 地俄に降り來る雨の脚オクリ篠を亂すが如くなり フシ人人嬉しさ。 地有難さ濡るゝも厭はず伏拜み〳〵。御本望の末頼もしく。袂を母に打覆ひ狩場の方へ焦れ行く。されば五月二十八日に。今の世迄も降る雨を。虎が涙や少將の夜の。雨とも 三重〽 名に高き フシ富士の裾野の。 地御狩の御遊鎌倉の騷動にて。急ぎ歸御あるべしとの時刻も雨に事延びて。假屋の騷もいつしかに辻の篝も影薄く。書の疲の手枕に短き夜半を鐘の聲。 フシ夢より夢を結びける。 地時節よしと曾我殿ばら。鬼王兄弟を故鄕へ歸し。出立つ祐成が裝束は。母上より賜りし。秋の野に草盡し縫うたる練貫の單衣。村千鳥の直垂の袖を結んで肩にかけ。黒鞘巻の太刀を佩き竹の子笠の紐強く。上に下部の青合羽陣松明に道照させ。先に進めば五郎時致。是も母より賜つたる白綾に鶴の丸縫うたる褂衣。揚羽の蝶の直垂赤木の柄の腰ざし。別當より賜つたる。源氏重代友切丸肩に打掛け紙合羽。しめたる笠の後れじと跡に フシ續いて出立つたり。詞いかに時致。 母の御恩を徒に今宵敵を打たずんば。不孝といひ世の人口生きたるかひもあるまじきに。天の惠か降る雨に。御寮の御立は延引す狩場の用意も事鎭まる。殊には浦の入道殿貸し給つたる此の割符 地賴朝公の膝元へも通路自由と聞くなれば。祐經を討つは案の內。假屋には定めて遊女數多あるべきぞ。罪作りに手な負うせそ 地雨はいつも降りながら。今宵の雨ぞ身にはしむ。討死せしと聞えなば思ひ切つたる御心にも。母の歎きはいかばかり悲し。さよと涙ぐむ。詞仰にや及ぶべき。祐經は籠中の鳥網代の魚。やはか洩らし候べき。恐らくは此の時致天魔破旬に出會ふとも。ちつとも怯まぬ魂今宵の雨は身にかかり。ぞつこん徹つてわぢ〳〵と物悲しう罷りなる。 地敵に出會ひ働かば所々の死を

遂げんも量られず。最期の盃一つ飲うで賜れと。腰に付けたる懸烏帽子に降りくる雨を受溜めて。祐成が手に渡せば。なう七度結びて兄となり。六度契りて弟となると聞く。死にかはり生きかはり兄弟の緣は切るまじと。さらりと乾して差しければ時致とつて押戴き。詞兄は親にて候へば母上の御盃も是に籠り。天の甘露仙家の醑。此の酒に勝らんやと。地受けては飲み〳〵降りくる雨は恩愛の。親と妻との血の涙。親子夫婦の血を飲むと思ひ フシ知らぬぞ哀なる。地五月雨の一頻りおだゆみて空さりげなく星々と。北斗の光鮮かに晴れ渡れば。詞安西の彌七郎新開の荒四郎。旅裝束に下部を引具し。雨も晴れて候ぞ。君は明日五つの御發駕先手は追付けお立ちの用意と。地呼ばはらせ打つて通る兄弟はつと顏見合せ。此の騷に亂れ入り。討つて本望遂げせんと フシ袖すり違へかけ通る。コリヤ〳〵〳〵。詞何奴なれば御假屋の側近く。断りもなく忍び行く。馬盗人か盗賊かそれ留めよとひしめけば。祐成騷がすイヤ苦しからず。鎌倉より祐經殿へ密々の御用の使。咎立して方々が所領の仇ばしし給ふな。疑はしくば見られよと首に掛けたる通路の割符。地是見られよと差出す兩人びつくり詞を替へ。詞存ぜぬ事とて雜言申せし御免あれ。新開安西咎めたりとは。祐經殿へ必ず沙汰なしに賴み入る。地假屋へは此の辻を左へきれ。行當りの大構へいざお通り候へと。馬鹿慇懃の空輕薄。結句敵の引入れをオクリ仕濟し。顏にぞ別れける。地兄弟遁るる鰐の口虎の威を借る此の割符。蒲殿の御恩ぞと。御寮の假屋の傍近く フシ忍び入るこそ危ふけれ。地左右の假屋騷ぎ立ちお先手は發足の御觸あり。合羽は取置き腰錢を取落すな。馬よ鞍よと犇めけば兄弟いよ〳〵氣も急かれ。祐經が假屋とてもさぞあらん。是迄忍びしかひもなく此の雨の降りやむ事。神明にも見放されよつく武運に盡きしかと。拳を握り齒を鳴らしスヱテ虛空を。睨んで立つたる所に。詞秩父の執權本田の次郎親經小具足に身を堅め。本陣の夜廻りしてげるが。曾我殿ばらと見るよりも近々と步みくる。地兄弟たそと咎むれば波に搖らるゝ沖津船。知邊の磯は此方ぞと呼く聲に祐成はつと嬉しく。詞重忠公の御情又は御身の御懇情。此の度に限らねども。地御禮申す事もなく禮儀知らずとや思されん。詞今宵年來の大望遂げせんと存ずる所。俄に雨晴れ假屋々々は出足の用意。此の騷には覺束なし此の儘歸つていつの時をか期すべき。無二無三に切込んで兄弟屍を曝す所存。地重忠公へ一生積る御禮は。貴殿の執成賴み入るといひければ兄弟が耳に口よせ。詞氣遣ひばしし給ふな。祐經は明日君の御馬の御供。夫ゆゑ假屋も寢靜まる。地こなたへ〳〵靜にと道の案内の杖柱 フシ嬉しき類ひはなかりけり。地是こそ祐經が臥床なり。心靜に本意を遂げ會稽の恥を雪がれよ

と。いと怨の詞に縋り。詞御案内の程五百生の體を燒くとも。いかでか報じ盡すべき。隨つて通路の此の割符。蒲の入道殿より密かに拜借申せしかど。御切腹の跡なれば返辨申さん樣もなし。地我々が死骸にあれば。蒲殿こそ御勘氣の伊東が末の曾我に與し。反逆の族よと死後の虛名に御骸を瀆さん事。御恩を却つて仇にて報ずる道理。親經殿に預け置く然るべく賴み存ずると。二枚の小札を手に渡せば尤々親經に任されよ。主人重忠惡しくは計らひ申されまじ。老母の事もゆめ／＼麁略候まじ。今暫くと存ずれども役目なれば知らぬ顏。弓矢の禮儀是迄とフシ本多は。假屋に入りにけり。今は何をか期すべきと兄弟合羽かなぐり捨て。本多が敎へし敵の假屋は是なりと。木戸蹴寄せを飛越え跳越え兄弟につこと打笑ひ。天にも上る心地にて難なく臥床に討つて入る。詞次に臥したる宿直の侍足音に目を覺し。すは盜人よと呼ばはつて逃出づる。地假屋々々に聞付けて。ソリヤ盜人よ御立ちよと。騷ぎの上に又混亂。相圖響かす太鼓鉦かん／＼どん／＼どん／＼くさい。又雨が延びて來たお立が降ると入るもあり。雨の足音さつさつさ人の足音どろ／＼／＼右往左往に三重もてかへす。地其の隙に兄弟は敵工藤祐經を思ひの儘に討畢せ。門外に走り出で袂を絞つて喉を濕し。勢ひ猛に立つたりしフシ心の內こそ嬉しけれ。詞エヽ心地よい時致。年月の思ひに較ぶれば敵を討つは易かりしな。餘り嬉しさ心急いて忘れしが。祐經に止め刺しつるかと問ひければ。あれ程に切る上は何の仔細か候ふべき。いや然はなし跡にて實檢あらん時。敵を討ちは討つたれども。地止めを刺さぬは狼狽たりといはれんは。骸の上の恥辱ぞかしフシ五郎いかにとありければ。尤と打頷き。誰をか恐れ忍ぶべき。のつさ／＼假屋の步みぐわつた／＼踏鳴して引返し。障子襖はら／＼と蹴放し。祐經が死骸にどうと跨り。詞よつく聞け祐經一念の瞋恚によつて敵となり味方となる。地六根の罪障消滅し不退の彼岸に到れよと。腰の指添ひん拔き。詞そも此の刀は箱根にて初めて見參したる時。得させたる赤木の裁刀。御邊元の主なれば鐵の味は知つつらん。地只今返す受取れと右手の耳の下よりも。弓手へ徹れと刺す程に耳と口とを一蓮托生。南無阿彌陀佛と回向して。元の所へ立歸るにフシ手指す者さへなかりけり。地祐成待受け落ちば此の儘落つべけれども。隱れ忍んで一生を暮さんは生きたるかひはあるまじ。一足にても逃ぐるとは弓矢の恥辱。殊更我々ゆゑに御生害ある蒲殿の御恩。御供申さで叶はぬ命。浪人の我々が鏽太刀と奉公日の出の殿ばらが。刃を試して討死せん尤と。二人等しく大音上げ。詞伊豆の國の住人伊東の次郎祐親が孫。河津の三郎が二人の子。曾我の十郎祐成同じく五郎時致。親の敵工藤左衞門祐經を討留めたり。賴朝公の御內

に弓取りはなきか。下り合ひて討留めよと呼ばはつて邊を睨んで控へたり。地闇さは闇し雨は降る。假屋々々にすは夜討と弓一挺太刀一振に。五人三人取付いて我よ人よと奪ひ合ひ。繋ぎ馬に鞭打つて遅しと急る所もあり。鎧に辷り甲に蹉き。小手を脛當草鞋を笠。上を下へと犇けば御馬屋の德竹大聲上け。詞物の黑白も見えざるに松明出せと呼ばはれば。地二千軒の假屋より。箙靭蓑竹笠。傘簾に至るまで火を付けて投出せば。裾野の闇は忽ちに百千の朝日影。一度に照す如くなり。騷ぎの中より名乘りかけ〳〵。切つて出づれば兄弟は小柴垣を小楯に取り入替へ。〳〵名乘りかへ。火花を散らして雨交り揉立て。〳〵三重〳〵戰ひける。地腕首切られて引くもあり頬先肩先尻こぶた。弓矢の太股馬手の足首。矢場に切られて死するもあり。されども兄弟薄手も負はず血氣に進む時致は。假屋の人種絕やさんと御所の間近く切つて入り。祐成は柴垣の蔭に息をぞ休めける。假屋々々の松明も降り來る雨に打消され。東西暗き木蔭より。緋縅の鎧着て二尺餘りの打刀。三尺五寸の大太刀横たへ。四十足らずの武者一人のつさ。詞〳〵と搖ぎ出で。抑是は先年上意を蒙り富士の人穴に入つて。地獄の底迄名を顯し。此の度の狩場には虎より猛き猪を乘りとめ。日本無雙の譽を一天に輝かす。仁田の四郎忠常とは我が事。物々し曾我殿ばら。思ふ敵は祐經一人。木の葉武者五十百切つたるとて何の益かある。地仁田の四郎が手にかゝり御勘氣の者の末孫と。獄門の恥を受けたくばいざこいやつとぞ罵つたる。詞ヲヽよい敵ごさめり。仁田なればとて必ず勝つにも極らず。人穴の地獄の鬼。猪なんど相手にしたとは違ふべし。十郎祐成手並を見よと打つてかゝる。地エヽ無分別者是非なしと。閃く太刀影雨夜の星フシ電火を飛ばして切結ぶ。地更に勝負もなかつし所に。花やかに鎧うたる武者一人。坂東聲を打上けあら穢らはし。詞我が名を盜む曲者功名を貪るか。伊豆の國の住人。仁田の四郎忠常とは我が事見參せんと呼ばはつたり。祐成飛でしさり。六十餘州は廣けれども。賴朝の幕下に仁田ならで武士はなきかあら仰々し。地痩浪人一人か二人討たんとて。彼も仁田是も仁田似た〳〵しき表裏者。二人共に餘さじものと打つてかゝる。詞ヤア跡から出て仁田とは人眞似か。地祐成は討たせじと懸隔たれば搔潛り。打ち付くれば懸隔て。祐成一人に仁田は二人入亂れて揉合ひしが。陽に開いて打つ太刀を後の仁田が陰に閉ぢ。受流して裾を薙ぐ。祐成が馬手の高股膝口かけて切落され。弓手ばかりの片足立ち二打ち三打ち打つかひも。百手を碎く氣も弱り。フシ犬居にどうと轉びしが。弟の時致はいづくにぞ祐成こそ討たれたれ。死出の山にて待つべきぞ。いふ事も是迄サア。いづれなりとも首を討て。怯れたるかと。聲かくる。詞イヤ討手

の賓否紛らはしく。黄泉の障りも悼はし、。誠の仁田が面を見せ。名字盗を面縛させせん松明出せと呼ばはれば。地忠常が下部ども提灯取つて差上ぐる。仁田と仁田が顔さし合ひヤア。詞二の宮。以前仁田と名乗つつるは御邊よな。扨あさましやヤイ。兎死すれば狐是を悲むとは。同じ類に禍の來らんことを悼むゆゑ。元縁者の端くれ。御咎めの飛沫掛らんことを痛み。祐成を討つて一味せぬ身の言譯とははてよい思案。女房を離別せしは。他人になつて兄弟が力とならん心底尤。斯くあるべき事と感心せしに。さては立身の爲の離別か御分別〳〵。地よしなき仁田呼ばりが奇怪さ。思はず駈合せあつたら若者を。手に懸けし殘念さよと大きに怒つて恥しむる。詞二の宮から〳〵と笑ひ。獼猴が帝釋天を嘲るとやら。おのれが足らざるを以て。人の大智を計らんとして却つて愚痴が顯るゝ。二の宮が曾我を討たんと思はゞ。今日迄何の待つべきぞ。

地なまなか功ある男子と思ひ名字を借つてぼつちらし。某他人になりたる徳天下晴れて匿へ置き。時節を待つて世に出さんと手を取つて。引かぬばかりにあしらへども。祐成退避かねば詮方なし。詞手柄はしたし怖くはあり。二の宮が聲を後楯に駈合せ。地毀れ幸ひ指果報。地あつたら若者を思はず討つて殘念などとは。義を知つた武士の云ふ事。猪に乘つて功名とする獵師風情の言分には。過ぎた〳〵といはせも敢ず。詞ヤア小舅を仕留めんとする程の不仁者。武士の情は存じもよるまい。地祐成が首は御邊急ぎ討つて手柄にせい。詞イヤ人に貰うて手柄にする安清ならず。御邊討つて手柄にせい。イヤ二の宮討て。仁田討て。二の宮地討てと責めかけられ。チヽ小舅の曾我を討つ刀。二の宮は持合せず。是で討たれば御邊討てと祐成と切合せし。太刀をからりと投出す。忠常おつ取り提灯に透かして見ればこは如何に。物打ちより切先まで刃を石にて叩き潰し打ちみしやいだる提灯然。詞ム、最前より此の太刀にて討つ眞似したるか。アツア頼もしとも優しとも。弓矢取る身の手本ぞや。地互ひに御免二の宮殿。詞それこそ互ひに御免仁田殿。祐成の如く情ある友を持ちたる五郎十郎。地御分の如く誠ある縁者を持ちたる曾我殿ばら。一生花實も。ノシ咲かざりし。天運の拙さよと。二人不覺の落涙に フシ鎧の袖を絞りける。地今を限りの祐成起直り。詞縁者と申すも元は。他人の二の宮殿。好みなき仁田殿御芳志は。五百生生替り死替るとも忘るまじ。地御手にかゝり討たるゝこと。祐成はなんぼう果報の者。首討つてたべと〳〵と。いへども二人涙にくれ。差俯向いて居る所に御所の方より聲々に。詞曾我の五郎時致御前近く亂れ入り。御所の五郎丸が組止め。御假屋安穩なりと呼ばはる聲に祐成。あれ聞き給へ。地時致は召捕られしとや。祐成が最期いかにと案ずべし。疾首討つて兄

が最期湇かりしと。悦ばせてたべ仁田殿頼入る。南無阿彌陀佛。彌陀佛と首差しのべて目を閉づる。名ざしの上は承る御心易かれと。太刀拔き持つて後ろに廻り。振上ぐれば祐成が。首は前にぞ遠方に早曉の八つの鐘。鳥も啼く〱人も鳴く フシねをなく千鳥の。直垂に首よ涙よ包みても。洩れて名高き富士の嶽曾我。兄弟が會稽山。骸は裾野に埋めども譽は三穗の松の風。他の國迄吹傳へ昔。語りを今の世の。人の眠りを覺しける。

第五

地運關三百六十輪。天運三千六百周頼朝卿の武運に和し。御狩の御遊建久四年五月二十八日。晝夜十二時に事終り。同じく二十九日の鷄鳴梶原平次景高朝比奈の三郎義秀。フシ御迎として參上す。地鎌倉還御の御供揃ひ廣庭に出で給へば。秩父北條和田岡崎何れもお供の出立にて伺候あり。因幡守大江の廣元。奏狀訴狀口書等數通御前に持參し 詞是は御狩中諸人の願ひ訴へ諸檢使の覺等にて御座候。鎌倉へ歸御あつて御裁許あるべく候や。但今朝聞召上らるべうもやと伺へば。御覽聞召され鎌倉へ歸つては留守中の訴へも多からん。地狩場の間の事どもは只今是にて沙汰せんず。廣元讀まれよとの御諚にて逐一にこそ讀んだりける。詞五月二十八日曾我兄弟亂入の刻。御家人手負の檢使竹下孫八左衛門。同じく安田の三郎檢分の覺一つ。太鼓の平馬之丞頼先深疵。但右の方なれば逃疵の事。一つ愛甲の三郎弓手の腕。馬手の肩後疵二ケ所。一つ安西の彌七郎右の横腹深手腸すた〱に切り。存命不定に相見え申候一つ。臼杵の八郎頭を割られ即座に討死。一つ新開の荒四郎小柴垣を破り逃け候刎竹のひつ削にて左の眼突潰し申し候。但自身の怪我の由口上。地次を讀まんとする所を頼朝暫く〱悉く聞くに及ばず。詞鬼神なればとて兄弟二人に見苦しき働き。假令薄手かすり手負うせたりとも討留め組留めずんば。功名にあるべからず。末代の批判諸家の恥を殘すに似たり。地御前に於て是を引裂き燒棄てらる。フシ大智の程ぞ尤なる。地次の一通押開き。詞伊豆の國の住人仁田の四郎忠常恐れながら言上。一つ二の宮太郎安淸專ら忠義を存じ。曾我兄弟が縁者たるを恐れ女房を離別致し。猶以て祐成所存を察し己が名を隱し、某が假名を致し祐成を喰留め申し候刻。横合より下り合ひ首を取り申し候。某此の度の功名は全く二の宮功名にて御座候。此の旨披露願ひ奉り候以上月日。頼朝大きに感じ給ひ。鎌倉の早打時を違へず重々神妙の仕方。親殺し主殺しの外一家に祟る法はなし。女房も以前の如く相具し兄弟が老母介抱等。地少しも憚るべらず老中此の旨沙汰せられよ。扨仁田の四郎が功名は今に始めぬ事ながら。譽を他に讓つて身を謙る勇者。感じても餘りあり。恩賞は鎌倉にて計らふべし。フシ次は〱と宣へば。詞恐れながら

言上。拙僧儀は藤澤寺の住持瑞阿上人と申す者にて御座候。今晝時分工藤左衞門祐經殿家來近江の小藤太と申す仁參られ。梶原平次景高殿仰せに候間。日中九つの鐘をさし置き八つに撞き申すべき旨申され候ゆゑ。叶ひ難き由申し候へば拙僧を初め寺僧ども殘らず搦め。自身鐘を撞き近在隣鄕刻限混亂仕り候。後日の御咎めを恐れ言上仕り候以上月日。地賴朝大きに御氣色損じ住持が訴へに限らず。隱目附の者ども宵に耳へ達したり。詞蒲の入道が切腹も相手は景高と聞く。鎌倉に於て急度詮議相遂ぐべし。地それ迄は和田の義盛に預け置くぞと宣ひも果てぬに平次景高。此の儀は段々申譯といふ所を朝比奈の三郎義秀。小腕を取つて捻するゑ。言譯あらば追つての事。今日から親仁が預りぢや。北の丸で榛谷が朝食の相伴に。汝が面をはり殘して殘念と。地四つ五つはりこかし羽搔締に引括り フシ家來がにぞ渡しける。地廣元一通又取上げ。詞曾我兄弟胤變りの兄京の小四郎恐れながら言上。右祐成時致豫々の企承り及びじ數度意見に及び候へども許容なく。御狩場の狼藉至極上を憚らざる次第恐れ入り存じ奉り候。是に依つて老母並に大磯の虎化粧坂の少將と申す遊女。兄弟一味の者ども以上三人搦め置き申し候。私同心仕らざる所聞召分けられ。御褒美頂戴仕り候はゞ有難く存じ奉るべく候以上。君御顏色損じ惡い京の小四郎が訴狀。よつく當代を詮議暗しと見立てしな。兄弟が力に成る程こそなくとも。祐經が内通の間者となつて老母が方へ入込みしといふ事。賴朝聞かであるべきか言語道斷諸人の見せしめ。地老母二人の遊女急いで繩を許し。捕手の者ども其奴め召捕り來れ。畏つて罷立たんとする所を朝比奈の三郎又つつと出で。詞何の彼奴めに捕手の者我等に仰付けられかし。ヲヽ兎も角も。地忝しと立出でしが立戻り。詞若し異議に及ばば搦殺して棄て申さんか。イヤ〳〵問ふべき仔細あり殺す事は無用〳〵。地はつと答へ立出でしが又立歸り。詞然らば死なぬ程に。骨々ほつき〳〵捻折つて參るべきか。ヲヽ其の段は兎も角もと宣へば。アイ忝いコリヤ 地面白からうぞと フシ小踊りしてぞ入りにける。地賴朝重ねて日も長けなば鎌倉入り明日になる。路次の經營も如何なり。相殘る訴へは鎌倉にて聞くべきぞ。先づ時致を引出せ一目對面せんとぞ仰せける。お次に控へし御所の五郎丸時致が繩引立て御白洲に引するゑ。詞兄弟狼藉の餘り此の者御寢所近く切入り。御命危かりし所。某難なく組留めて候と嚴しげに言上す。五郎居丈高になりヤア御尋ねもなき口上だて。地時致言上する事あり。耳を澄ましてよつく聞けと御前の方を振り仰向き。詞恐れ多き申し條にて候へども。弓馬の家に生れて親の敵を討ち候事。僻事とも狼藉ともよも御不審は候まじ。只今召出されしは御所の假屋へ切入りし御咎め候な。時致も好む所

には候はねど。下り合ふ兵頭はりに逃足強く。一人も手に立つ者候はず。御所の内にはよき武者ぞ宿直仕つらん。功ある武士に出會ひ討死せばやと奥深く切入り候所に。詞扨々當代のきれ物は化物と功なる武士。以前我が君討つて出でさせ給ふ音。年にも足らぬ大友の一法師が御物の具に縋つて。詞我兄弟鬼神なればとて御手を下されんは源氏の御恥辱。殿ばらに仰付けられ候へと諫言申すを遥かに聞き。地殊勝や優しやさすが大友の家の總領。あはれ此の一法師が手に渡り討死せばやと存ずる所。詞是なる五郎丸薄衣被き取つたといふて確と抱付きし。頭付は童なり是こそ一法師ごさめれ。望む所と嬉しく易々と搦められ。地今の千悔萬悔おのれとだに知つたらば蹴殺し捨てんもの。よし／＼申して詮なき事疾疾首を召さるべしと。スヱテ詞すゞしく言上す。地五郎丸聞きも敢へず。詞ヤア生れた跡の早め薬口ばかりの廣言いふな／＼。既に我が手に入りたる時一代一世の力を出し。振放さんと足手をもがき。許せ／＼と大聲上げて吠えたれども。悄りとも動かせず取つて引締め繩かけたを忘れたか。よしない口を聞く手間で念佛申せと冷笑ふ。五郎くつ／＼と噴出し。心あつてかゝつた繩おのれが力でかけたとは。體より口の廣い奴。とても死なんず命よしない力みなれども。時致が僞りと君の思召諸大名の蔑視も無念なり。地おのれが力に搦められぬ證據。是見よと筋骨に氣を込め。一搖搖つてゑいやうんとはつたる。高手小手の繩ふつつふつつと切れたるは。三歳の童が フシ燈心切るより易かりける。地飛びかゝつて五郎丸を膝の下に取つて引伏せ。ヤア 詞夜前おのれが力にて。地搦めたが定ならばま一度御前で搦めよと。胴骨を膝節にてひしげて退けと押しければ。聲は出でず兩眼に溢す涙は雨やさめ。フシ油を搾る如くなり。地斯る所へ朝比奈の三郎小猫を提げたる如くにて。京の小四郎が細首撮んで駈來り。御前にどうど打付くる。詞頼朝御覽じ汝は親兄弟に逆らひ。敵に與せし無道者。此の世に祐經が居ぬからは未來へ參つて奉公せい。地それ／＼暇と宣へば時致謹んで頭を下げ詞明かなる御政道先立ちし祐成さぞ有難く存ずべし。さりながら亂こそ變れ兄は兄。命召されんをまざ／＼と見てゐんも不仁の至り。地助命願ひ奉るとスヱテ思ひ込んで言上す。地時致に免じ命は許すぞ剃りこぼつて追ひ拂へ。承ると朝比奈剃刀も刃物の内。おのれに當てるは穢らはし。義秀が手剃刀戴けと髮くる／＼と手にから巻き。一引ぐつとあ痛たゝ。詞チヽ痛い筈一引きが千僧供養。二引きが萬人の惣笑ひ。地烏の毛を引く芥子の花摘ぐずんぼろ坊主。ねつたい坊主鉢坊主。是がお寺の長助と フシ笑うてこそは追立てける。地時致五郎丸を引起し三間ばかり取つて投げ。申す事も是限り今生に用なき男。サア寄つて繩掛けられよと

後手になつて　フシ待ちければ。地雑色ども早縄持つて立ちかゝる。詞アヽ暫し〳〵と御聲を懸け給ひ。日本無雙の兄弟助け置きたきものなれども。兄祐成が討たれし上は助かれといふともよも助からじ。頼朝が父義朝を討つたる長田の庄司めが首。討つたる時の嬉しさは。平家の一門が首百千にもかへざりし。彼等が今日の心の悦び命の何か惜しからん。地國の憲法是非もなし鷹が岡へ引出し。今生の暇とらせよさりながら。一騎當千の兵雑兵に縄掛けさせんは。弓矢の冥加も恐れあり。頼朝が縄掛けんと忝くも御大將白洲に飛び下り。眞紅の房打つたる御鎧の總巻取つて押したぐり。詞頼朝が右の手には西三十三ヶ國。左の手には東三十三ヶ國。六十餘州の力を以て懸けたる縄ぞ恨むるなと。地御聲の内よりも時致わつと聲を上げ。ナウ伺候の大名小名秋津島を海に譬ふれば。雫程もなき數ならぬ時致が。親の敵討たずんば日本の大將軍。頼朝公の御手より縄を受け。斯る情の御詞を聞くべきか。父河津聖靈先立ちし祐成もいかばかり　フシ悦び奉らん。地哀れ今一度生れかはり御馬の先にて討死し。此の御恩報じたや三寶佛陀も憐み給へと聲を。あけて泣きければ。地滿座の諸武士感涙し鬼を欺く朝比奈も。羨しや時致果報者よ時致。有難の我が君やとすゝり上げ〳〵。涙の内の悦は　フシことわりとこそ聞えけれ。地和田秩父千葉上總　心あらん者どもは縄に手をかけ結縁せよ。御立ちざうと呼ばはれば御門に控へし虎少將。母を誘ひ走入り。君を禮し時致が縄に縋つて悦び泣き。門に御馬の嘶ふ聲假屋の木戸も明七つ谷七郷の鎌倉へ。目出たく還御なされける。今日一日の十二時。〳〵つもり積つて百千年。盡きせぬ源氏の繁昌こそ民安。全の國土なれ。

七行大字直之正本とあざむく類板世に有といへども又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直之正本にあらず故に今此本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本筑後掾（印）博教

正本屋　山本九兵衛　版

大阪高麗橋壹丁目　山本九右衛門　版

傾城酒呑童子

近松門左衛門作

序詞千度看れば千々の意密し。一度見るに一つの憐い事深しとは。張文成が仙女に契りし詞。日々に衣寛び朝な〳〵に帯緩ぶ。愁の腹寸々に斷つとは文成が仙女に別れしうらみ。天上下界なほ戀慕の闇を出でず。況んや心を種として和歌に和ぐ日の本の。色香にそめる梅櫻オロシへ花山の帝と。申すこそ。地風雅なる御本性尊貴なる御容。潘安仁が外戚の甥にも譬ふべかんめれ。女御後宮數多さぶらふ其の中に。大納言爲光が娘恒子の姫。一朝に選ばれ弘徽殿を御局にて。比翼連理の御語らひ三千の寵愛只一人。六宮の粉黛も色を失ふ日蔭草。其の嫉み草身に生ひて。つひに病の床の内フシ短き。夢と消え給ふ。地帝不覺の御歎き朝政し給はず。雲の上何となくいまいま〳〵しげなりければ。月卿雲客せめてはと弘徽殿の御姿。繪にうつして奉る容はありしに似たれども。物云はず笑はず却々思ひの種ぞとて。晝は夜の大殿に御涙を友とし。夜は南殿の月に御心を傷ましめフシ歎かせ給ふぞいたはしき。折ふし帝は。萩の戸の。地御階に悄々下りさせ給ひ。人やある人やあると召さるれど。宿直の公卿も程遠く御應へ申す人もなかつし所に。常陸之介平の安盛瀧口に候ひしが。安盛と敕答して御庭に跪づく。近う〳〵と間近く召され。詞汝は武士の身なれども桓武天皇の御葉末。雲井を出でて遠からず物の情は知るべきぞや。地弘徽殿に露程も面影似たる女あらば。尋ね出して我が思ひ。晴せよかしとばかりにてスヱテ又御涙にくれ給ふ。詞安盛謹んで承り。さん候中納言高房が娘三の君は。顏容心ばへまで弘徽殿に見かはすばかり似たる由。御所中の取沙汰叡聞にも達しまゐらすべし。此の頃承れば鳥飼の少將後の三の君を戀慕ひ源の賴光が郎等渡邊の綱を仲人に賴み。近々に婚禮取結ぶとは申せども。普天の下王土に住んで。勅諚と申さんに誰か違背仕らん。地安盛不肖の身なれども御文一つ賜つて。彼の姫に與へ父母に申し聞かせなば。今宵の中に伴ひ參り弘徽殿の御忘れ草。宸襟を安め奉らんとフシ忍びやかに奏すれば。地主上仰せありけるはいさとよ朕も聞きしかど渡邊の綱が仲人にて。鳥飼の少將にまみゆるとな。然れば主ある女ぞかし。讓位の後は例もあり在位の身にて正なき事。上一人の善惡は下萬民の鑑ぞや。後代の誹りも恥かし此の世の戀さへ叶はぬを。まして冥途の人戀しき思ひはいかなる思ひぞと。十善天子の御身にも。世を辛

しとの御述懐戀路の習ひわりなさよ。詞安盛重ねて宣旨恐入り候へども。さりながら一夜も夫の家に入り。夫婦枕を並べてこそ主ある女とは申すべけれ。未だ契約ばかりにて親の家を出でざる女。何條事か候べき殊に仲人渡邊の綱。羅生門の鬼神を斬りし愼とて。物忌に籠り傍輩の對面も仕らぬと承る。地然れば祝言の日限ものびく\と覺え候。これ屈竟の折から仕畢せて參らせんと。勸め申せば主上もしるべ嬉しき戀の山。踏み通ふべきかけ橋せよと宸筆もこまごまと。艶書あそばし此の度の恩賞は。望み次第と宣旨ある安盛烏帽子を地につけ。詞只今源家の繁昌にて滿仲より頼光まで。鎭守府の將軍に任ぜられ平家はあれどもなきが如し。地此の御使仕畢せなば頼光が將軍職を。某競望仕らん最早夜も更け候ひなんず。宿所へ歸らず是よりすぐに參らんと。御文賜り上書見れば上々とても痴話文は。別に變らずさま參る身よりとばかり薄墨に。御筆立のうづ高さ。御文臺までさゞさぞと。思ひ梨地の御文箱蒔繪に照りし菊桐の。麿が思ひは深けれど人は情も朝霜に。置き惑すなと傳へよと常寧殿に入り給へば。主殿司の宿直守。御格子。參る 三重 一セイへ 扨も渡邊の綱は。假初の人の詞の爭に。羅生門に行向ひ。茨木童子が腕切取り。詞三七日の物忌に。門戸を閉ぢて 地愼みしフシ武勇の程こそゆゝしけれ。地一人武者保昌は綱が徒然尋ねんと。舍人馬添只二人肌に腹巻如月や。空もおぼろの月毛の駒門前に手綱かいくり。平井の保昌が御見舞申す物もうとぞ呼ばはりける。詞門を固めし堤の彌惣。唐居敷を飛んで下り。地に鼻をつけて御出の由申し入るべく候へども。主人綱事羅生門にて鬼神の片腕切取り。三七日の物忌に籠り候へば。門外にて拙者承り帳に記し。一門他門共に對面仕らず。然るに一昨日渡邊の叔母。久しく逢はざる懐さゆかしい戀しいなんどとて。七十に餘る身がさまぐ\歎き恨みしを。變化の業とは思ひも寄らず。恩愛捨て難く門を開き對面せしに忽ち惡鬼と現れ腕を盗んで天井より。地あれ御覽候へあの如く。搏風を蹴破り黑雲に入つて失せ候。綱は是を無念に存じ切腹のお暇申すか。一期の浮沈と籠居の節帳にとめ置き後程申し聞かすべし。近頃無禮千萬と慇懃にぞ述べにける。詞保昌搏風をきつと見上げ。ムヽウ聞きしに違ひなかつしな。さりながら鬼の腕を取返され。それが無念な口惜しい切腹せうといふやうな。不覺人の渡邊に逢うて何の用もなし。地左様の男と知らずして馬の足費して。見舞に來たる保昌まで不覺者と人や見ん。門に立つも穢はしと駒引返し。歸らんとする所にまてく\保昌用があると。聲をかけて渡邊塀の上につつ立上り。詞ヤァ珍しい保昌。御邊と某御前にての爭ひ故。其の夜羅生門にて鬼神の腕を切つたる事定めて音にも聞きつらん。三七日の物忌過ぎば。鬼の

腕を御邊が面へ投付んと思ひしに。地口惜しや腹立や化生の業は力なく。やみ〳〵と奪取られ渡邊程の武士が。鬼神退治の證據を失ひ表裏者の名を取らん。弓箭の恥辱せんかたなし人間業にて此の無念。晴さん事叶ひがたし某も腹切て。共に變化の鬼神となり再び腕を取返し。御分が眼に晒すべきぞよい所へよう來たナア。詞渡邊の綱が腹切るをよつく見置いて賴光へ。御物語仕れ今生の對面是限り。地生を替へて茨木が腕取返し逢ふべきぞ。必ず〳〵其の時に變化と思うて喫驚すな。昔の誼に取つて嚙むとは云ふまいと。飽くまでに廣言し既に刀に手をかくれば。詞保昌大聲上げてかッらかッらと笑ひ。やれ腹筋や腹の皮、鬼の腕を切つたるが何程の高名ぞ。それを手柄と思ふ故又奪はれしも恥辱と思ふ。エヽあさましやかはいやな。此の保昌などは。切つたを手柄と思はねば奪はれても恥ならず。變化鬼神を鎮むるは禰宜山伏行法の。出家の加持の數珠さきにて祈り伏するも珍しからず。地弓矢取る身の功名は。鬼より怖い朝敵大敵を滅し。生捕分捕譽を子孫に殘すこそ手柄とは云ふべけれ。是しきに腹を切らうと云ふやうな。馬鹿侍の切腹を見て居るやうな目は持たぬと。引返し駈出づる太刀の鐺を渡邊塀越しにしつかと取り。詞ヤアさは云はせぬ保昌。左程侮る渡邊を見舞に來たは心得ず。笑はん爲か褒めん爲か。地聞かでは得こそ返すまじ。留れとこそは引いたりけれヤア一人武者保昌が。歸るといふを天津風雲の通路吹きとぢて。天地を動かす勢ひにもとまらば留めて見よやとて。鯉口鍔に握り添へ鐙ふんばり乘りすゑたる。ヲヽ汝は聞うる歌人にて大内にての花盗人。華奢風流の口ずさみ辯舌は利いたりとも。鬼神を取挫ぐ渡邊との力づく。ちつと慮外と夕闇の羅生門にて我が兜の。まつかうこそは引いたれとしやくつて引けば保昌は。振放さんともぢり引く。留まれとまれのうなり聲コハリかなはじ物と怒り聲。磯の松風巖うつ波。兩頭の大蛇が常山の山の腰。きりゝ〳〵と卷締めて頭を並べ引合ふも。是にはいかで達ふべき兵庫鎖の白銀作り。筋金蛭金剛の金かへり栗形裏がはら。中は如何なる名作の干將莫耶ござんめれ。鞘と一つに綯交の繩になさんと左へ捻ぢ。卷かれじものと右へ捻ぢえいや。〳〵の地力聲フシ太刀の帶取りくつろぎて。飾の金具搖ぎ出でからり〳〵からり〳〵と鳴る音は。地コハリ諸漏已盡の大阿羅漢神通力を試さんと。須彌山を動かす時色界に風起り。四王忉利の大伽藍百億の寶鐸。那由陀の羅綱八萬恒沙の瑤珞華鬘雲井に散つて鳴渡り。響き渡るもかくやらん。此の世に譬へん物はなし。保昌は古兵太刀捐じては惡しかりなんと。するりと拔いて帶取をふつゝと切て切放し。馬乘放しすつくと立てば綱は鞘を持ちながら。塀の上に突立つて睨み合うたる地面魂。阿云の仁王に異らず。

フシ凄じ。かりける勢なり。地龍虎と挑む其の中に段模様の染被衣。供の女が頰被御所の抜粋。二人が中へ怖氣もなくしやんと分入る追風や。茨の枝に初花の フシ一輪咲きたる如くなり。地兩人怒つてヤア誰かある。詞此の女引摺りのけと睨めつくれば。被衣押退け何と渡邊久しいの。其方は音に聞く保昌の。我こそ中納言高房が娘三の君。これ渡邊。そなたは武士か 侍 か。鬼の腕は切りやらうが侍とは思はれぬ。鳥飼の少將殿と自らが祝言は。後の二十八日とは仲人した其方の極め覺えがあらう。二日も三日も手前から萬事取持ち肝煎るは仲人の役ならずや。今日で十日に餘れども何の便宜音信なく。父上は腹を立て使を越しても門を閉ぢ。取次ぐ者もないとある。コレ世間の娘に問うて見や。十六七になつてから嫁入を急ぐか急がぬか。せかぬ娘だあつたらば二つともない首賭け。地少將樣も若い殿。駈出る馬をとめるやうにお心も急かうし。我も思ひの溜り水身も湧き出づる池水に。人目堤の切れ口はいかな留めても押へても。思ひ流すに流されずサア返答聞かんと仰せける。詞渡邊も至極につまり御尤千萬なり。さりながら東寺羅生門の變化を討ち。三七日の物忌に引籠り出仕をさへ仕らず。殊に常陸之介安盛と源平武勇を勵む時節。地不覺の批判受け候へば源家の油斷と身を愼み。御祝言の御挨拶日限までも延引。追付首尾なし申すべし聊か如才是なしと。云ひもあへぬにアヽおきやおきや。詞如才なしとは云はれまい。自らは弘徽殿の女御樣に似たとやらん叡聞にて。未だ祝言せぬ内に大内へ召されんとて。平の安盛お使只今館へ來る故。地我も乳人一人つれ漸うと逃出でたり。今宵の中に嫁入せねば明日は内裏へ召さるゝ筈。其の褒美には賴光の官職を削り。安盛を鎭守府の將軍になさるゝ由。我々思ひ叶はぬのみか源氏のひけと云ふものよ。かゝる大事のありとも知らず。傍輩喧嘩の保昌も保昌。是は如才であるまいかいや油斷では有るまいか。如才ない〳〵と口でばかりは子供も言ふ歌さんさ如才は御座らぬゑ。歌にも謡ふ聞きやらぬかと フシ恥しめ。恨み給ひける。地保昌横手を打つてなんと渡邊。姫君のお咄は正八幡の御託宣。遲なはる處でなし。思案はないかと云ひければ。ナヽ思案と云うて姫君を鳥飼殿の御館へ。入れ申すより外はなし御分と我とのいさかひは。根も葉もない内證事お手前賴む。少將殿へ參つて片時も早く迎の輿を。賜るべしと申してくれたら滿足せんと云ひければ。ハテ此の上﨟を内裏へ上げ安盛に威をつけては。我が君の御恥辱いづれも我が身にかゝつたこと。然らば我は馳付けん先づ姫君を奥へ入れ。隨分大事にかけ申せ必ず人に逢はするな。渡邊の叔母が又來たとも。毛の生えた鬼の腕姫君には一本も。なしと答へと戯れてオクリあなり〳〵打立て フシ走らする。地渡

遂は姫君を奥に請じ門々を。なほも厳しく篝提灯星の如く。婿君の迎ひの輿今や。今やと 三重 待つ程に フシ小夜もやう〳〵。地ふけにけり稍あつて表門。忍びやかに音づるゝ何方よりと應ふれば。詞鳥飼の少將實衡が雑掌 花垣權頭。保昌殿の御内意によつて。三の君の御迎ひ儀式の車は追つての沙汰。地先づ御乘物取敢ずとこそ云ひ入れけれ。待設けたる家來ども門を開き入れければ。綱は悦び姫君を婿殿へ。渡せば珍重氣遣ひなしと。兎角しつらひ乘せ參らせ乳人は輿に引添うて。堤の彌惣主人の代腹卷打ちかけあたりを守護し。迎の諸太夫駕輿丁と。共に乘物引つ立てて フシ飛ぶが如くに急ぎける。地五六町も往きつらんと思ふ所へ。保昌大勢引具して一文字に乘歸り。詞少將殿の雑掌花垣權頭。輿を持たせて御迎に同道せり。地とく〳〵姫君渡されよと勢かゝつて云ひければ。綱は大きに驚き弓矢八幡安盛奴に誑られ。三の君を奪はれし天が下にて此の渡邊を出し拔いて。片時も生けて置くべきか掴み拉いでくれんすと。詞跳り出づるを保昌捕へて。詞こりや物に狂ふか渡邊仔細を語れと止むれども。地いやまだ〳〵と阿呆らしい。咄さるゝ事でなしと。飛んで出づるを押留むる若黨ども口々に。詞たつた今少將殿より。顔も衣裳も寸分變らぬ花垣殿。姫君を迎取り此方よりも堤の彌惣。附けて送られ候處又只今の御迎ひ。かた〴〵不審に候と。云ひもあへぬに保昌はつと肝をけし、ヤヽ是は渡邊せくも道理。疑もなく安盛奴が花垣によく似たる人を。豫てこしらへ深き巧みと見えたれば。卒爾にては此の方が。天子に敵對傾光の御爲ならず。地堤の彌惣が附くからはさ迄不覺も取るまじきぞ。心を鎭めて追駈けん此の保昌が加勢ぞと。人數の手配り手を合せ。水飼ふ馬の轡を並べてこそは 三重 打たせけれ フシ堤の彌惣。地忠時は乘物守護し行く空の。春雨しきりに風落ちて雲の足さへ定めなく。南北に飛び東西へ。フシ戻橋に着きけるが。地コハリ黒雲道を障つて雷火電光震動し。前後を忘じて立つたる所に迎と見えし者どもの或は一角一眼または三目八臂の鬼形。枝ある角に赤頭火焔の如く見ゆるもあり。異類異形の鬼神となつて乘物蹴破り姫君を。引出さんとする處を南無三寶と堤の彌惣。打物拔いて切拂へども雲霧に。眼も眩み腕弱り切つても突いても水を切り。風を切るが如くにして踏みもためず欄干に。うんと云うて反返れば召具の者ども堪り得す。弓手馬手へぞ伏しにける乳人是はと取付くを。二つにさつと引裂いて姫君を引攫み。惡風吹きかけ焔を降らし。虚空にどつと笑ふ聲 フシ雲に 殘りて失せにけり。

あなり打立て三重 打寄する。フシ岸の漣玉走る。誰が堀江で水高き。矢を射る如き川の瀬を。戻橋とはフシ附けぬらん。地川岸に積みたる村木の中に薪は交れども。火の氣なければ

暗き夜に。地思ふ殿御に逢ひに行く姿ぞ女子一生の。締ひもなく三の君。花紫を戴いて。びらりしやらりの町風も。帽子に漏るゝ衣の香の。娘は同じ娘にてフシ御所こそ色の司なれ。地綱が郎黨八十の吉平次。跡に續いて見え隱れ姫君の御供し。女の足の急げとも。十町餘りを行惱む。道はか行かず一條の戻橋に行きかゝる。先にのさばる懐手。肩で切る風馬鹿臭く。身の程知らぬ高聲も。辰巳上りに嗄れて。歌高い山から谷底見れば。おまん可愛やナ布晒す。ナ布晒す。詞コリヤお上﨟どこへ夜道を。ござるは戀じやの〳〵。戀人は誰か知らぬが。此の鼻が一寸地間しようかいと。縋りつけばア、うるさいと。そつと退けば又縋れ。しんぞ其の風たまらぬと抱付けば又外し。取付く處を吉平次腕取つて撥ね除け。詞これ眼をつぶれ。此の女中は恭くもうぬが小錢で買ふやうな賣物でない。ほで惡戯かはかずと。通れ〳〵と言ひければ。汝や此の女中の附者か。盲め。身を鉢坊主と思ふか通れとは。

通るまいが何とする。サア何とすると仕かくれば。吉平次も大事の伴僚へて見れども堪らず。チヽ是で通して見せんずと。地拳を固め目鼻の間割れてのけと丁と撲つ。ヤ汝撲たれてゐようかと。松の木腕たゝき廻す。手頸を取つて振放せば。突つかゝり捻合ひ摑合ふ處へ。綱が弟三田の源八。吉平次ばかりは氣遣しと。御跡慕ひ來りしが。遙に見つけゆらりゆらりと立寄つて。相手の肩骨ひつ摑んで引除け。詞これ若い人。此方を見れば女中同道。お主が叱つて手柄にもならぬ事。殊に少しこちらは酒氣もあるさうな。參りかゝつて男が廢ふ。堪忍してお通りやれ。イヤ馬鹿め。身體自慢に人らしい扱ひとは。ほんの男の出入。わい等が知るこつちやないと打つてかゝる。小腕むずと摑んで得手物。ヤこれはいな腕車にどうと投げたりける。地橋詰に積んだる割木の木蔭より。馬屋の總五椊の割木おつ取りのべ。源八が眞甲欺し討二つになれとはつしと打つ。打たれてひろまず總五を取つて差上

げ。こりや〳〵。割木の中へ投込んで。詞ヤレ吉平次怪我がある側へ寄れ〳〵とフシ言ふ處へ。地こゝかしこの割木の蔭より十人ばかりむら〳〵と。手ん手に割木提げ〳〵押取り廻す。詞ハア、知れた〳〵。扨はうぬ等は平の安盛が郎黨ども。町人の行きかゝりに紛らし。姫君を奪はん爲の喧嘩のしかけと見た。見た。三田の源八渡邊の綱が弟。汝等では相手に足らぬ安盛は何處にある。姫君のお供なれば隨分蟲を殺して太刀刀は拔放さぬ。地汝等に振舞ふ物が此方にある。櫓持出し肩ずかし。負投懸投腹櫓と。尻ひつ褰げ四股を踏み。朱に染みたる前髪は。赤熊の如く打亂れ。大手を擴げヤア勝負。いざござれと喚きしは。フシ只雷電の如くなり。詞チヽよい推量平の安盛。三の君を置いて行けと打ちかゝる。地敵は八方我が身は一人。同じく割木おつ取つて。てつぺいそつぱう肩骨胴骨天窓の骨。割木限り腕限り。打合ひ〳〵投合ひしは。風に揉まるゝ古家に柹の散るが三重〽如くなり。地源八獅子の

勵みかなせども。嵩にかゝつて打ちかくれば。もう斬らればならぬとするりと拔いて馬屋總五が胴骨ぐつと刺通せば。うんとばかりに死したりけり。すは斬つたはと呼ばはる聲。吉平次堪られず躍り出で。眞先に進んだる矢島の傳平が片腕どうと切落し。逃足したる大勢を二人が中に押取りこめ。太刀と割木の金尅木。火花を散らし三重 切立つる。地此の勢に怺へずして。北へ走り南に飛び。聲も高き橋も高き。フシ闇を分けてぞ逃失せける。詞渡邊の綱平井の保昌。息を切つて馳着け。我々兩人少將殿の御館へ參りし處。姫君御入りなしとある心元なさ。是迄迎ひに來つたり。廣綱は傷を負うたな。エヽ言ひがひなし卑怯千萬。盜賊の業か口論か語れ聞かんと睨付くる。卑怯とは情ない。平の安盛三の君を奪はんとの催し。樣子は緩々申すべし。それ吉平次姫君を兄きへ渡せ。地保昌殿御苦勞と。一禮そこ〳〵姫君も。怖いやら悲しいやら。一期の憂い目見たぞいの。詞其方衆に逢うたれば。胸の躍も鎭つた。地早う館へ連れて往て。少將樣に逢はせてや。大抵撫でもらはずば。お腹の痞は下りまいと。フシ言ふも笑ふも戀なれや。地お道理〳〵いざ此方へといふ雲の。俄に天地震動し。綱保昌が姿は其の儘鬼神となり。姫君を掻抱き飛去らんとする處を。南無三寶と吉平次打物拔いて切拂へば。廣綱も一世の大事。疵も忘れて打ちかくる。雲霧に眼眩み腕弱り。切つても突いても水を切り風を切るが如くにて。踏みもためず欄干にうんと言うて反り返れば。鬼神は姫を引摑み。惡風吹きかけ火焔を降らし。虛空にどつと笑ふ聲。フシ雲に殘りて失せにける。

地雷鳴る騒ぎに綱保昌あはやと驚き馳着け見れば。乳人が死骸乗物も散々に引捜し。

(廣綱は朱に染み吉平次ものた打つて一本)

三(り)よコまましまさず漸う堤を呼び助け。事の樣を尋ぬれども變化の所爲は力に及ばず。無念々々とばかりにて フシ言說正しからざりけり。地綱は怒つて齒ぎしみしエヽ口惜しや保昌。詞必定是は羅生門の。執心殘つて我に恨をなしゝよな。地微塵に碎いて棄てんずと。天を睨み大地を踏み身を揉み猛り廻れども。翼なければ虛空も飛ばれず。怒れる眼に怒の涙。峰の夕日に夕立のスヱテ雨を灑ぐが如くなり。地かゝる所に平の安盛平家の一族五百餘騎。橋の兩岸おつ取り卷き。詞やあ〳〵それなるは渡邊の綱宣旨なるぞ承れ。高房の娘三の君帝より召さるゝ所。遮つて是を押へ剰へ失ふ段。朝家を輕しめ奉る罪科によつて。搦取つて參らせよとの綸言。違背に於ては首討つて擧せよとの御事なり。恥を思はゞ腹を切れと 弓杖突いてぞ呼ばはりける。綱は莞爾と打笑ひ。やれ〳〵嬉しや相手ほしう思ひしに。平家の大將安盛とやそれこそ綱が 地口なめずり。變化より先づ己れをと。躍り出づれば保昌やれ待て渡邊。平家にもせよ。敵にもせよ宣旨とあれば勅使なり。上へ對する朝敵と云はれては一大事。先づ穩便に引取つて負けて勝つ思案もぞ。鎭まれと制すれど

もいや〳〵聞かぬと駈出づる。詞安盛は勝る軍兵引つ掴み。取つては投げ〳〵安盛を土足にかけて踏んだろこと只今直に奏聞す。地にのり。地しばれく〻れと下知をなす三方宙に引つ立て引きずり出し。詞欄干にどう詞をつがうた評ふなと云ひすて〻引返す。地論議の眞中へ。坂田の公時例の大太刀前下ど打付けやい嘘吐奴。綱が討手の勅諚と公時其の頤引裂かんと飛んでかゝるを綱保りにさしほらし。のつさ〳〵と歩み來る安は何の王樣の勅諚ぢや。日本の王の仰せで昌。洛中變化の騷動に取りまぜて事やかま盛はつと色ちがひ。肩身をすぼめ軍兵のフシないはたつた今頼光。禁中で聞かれた大鷄し。先づ鎭まれと制すれども公時はたつた今。中に屈んでかくれけり地公時は橋板も踏のもがり奴。此の公時は閻魔王の勅諚にて。詞夜食を喰うた食ごなし變化も鬼神も惡人抜くばかり立はだかり。詞たつた今まで此己れ等が討手に向うた地獄で手間の入らぬも。地一ごにしまふと駈出づる留まれ止まれの所に平の安盛が見えたが。搔消すやうに樣に。地粉に碎いてやるべしと元首押へていや放せ。放せとゞまれとり〳〵の鷄の八失せたるは是も變化の業なるか。變化を斬胴骨を。ゑいやうんと踏付け。〳〵さいな聲や鐘の聲。夜はほの〴〵とあかねさす。公るは綱が得もの。又人間のぶう〳〵をひねめばア丶詞痛や苦しや。免してたも公時殿時が顔朝日の色につれて。御所へぞ上りける。り殺すは此の公時か好物。何處へ失せたとりとは云ひ乍ら。帝戀慕の御歎きいさめん

第　二

睨め廻はし。ヤアそこにか。これ此處へ御爲の忠節。證據は爰にお文もあり。さりと地心の底の悲しさを涙の外は知る人も。亡座んせ盛樣。それはわけが惡いぞゑ。怖いては誤つた免してくれと泣きければ。地保昌き俤は忘られず三の君の父母。高房夫婦の事はないわいな。御座んせなあと地小手招渡邊すがりつき假にも天子の御使。勅書を御歎き未だ生死は知れねども。失ひし日をきフシ鬼の痴話かと氣味わるし。詞安盛も懐中せし者に足を當つるは後日の越度。あ命日と。回向追善今日もまた。フシ墓參りこは〳〵ながら。さいふは坂田の公時な。やまるからは免してやれとやう〳〵にもぎして歸らる丶。地お供の腰本下婢まで愁に我は天子の御使下郎の側はけがらはし。云放し。サア歸れと引つ立つる命拾うて安盛沈む其の中に。右近と云ふは姫君と同年にふ事あらばそれから申せ云はれぬ所へ出しは。足はやに立退きしが立歸つて大音上げ。て。殊更中よく手習絲竹の道までも。一つやばつて。側杖にあはん不便やと地顔ひ顔詞宸筆勅書を持つたる人には三公だにも下におふし立ちければ。スヱテ其の身の歎き父ひも口へらす。公時たまらず暴出でて前な馬する作法。頼光が郎等ども勅筆の御文を。母も。やれ右近よ。病で死するは世のこと

わり。火葬は骨土葬は身體殘れども。變化にとられし三の君。兄弟とてもあればこそ何を形見に慰まん。おことも姫も同い年繼遊び石な取り。振分髪より仲よしで主從のやうにはなかりしぞや。今日より我々養子にして。姫が再び歸りしといふてなりとも栄よん。お事も父上母樣と フシ いうて。くれよと泣き給へば。いや御歎きは同じ事。髪を下して姫君樣御菩提をとばかりにて。フシ 夫婦主從すがり付き。ハスヱテ 聲も惜まず泣き給ふ フシ 物の。あはれの至極なり。地 かかる所に常陸之介平の安盛。公用によつて高房卿御夫婦の。内意を得んと案内す。詞 忌の内にも公用ならば先づ此方へと請ぜらる。安盛やがて對面し。詞 今度は不慮の御仕合言語を絶し候。それにつき忝くも帝には。弘徽殿の御歎きに又三の君まで失せ給ふ。いやましの御愁歎浮世の無常を思召し。十善帝位を振捨て先月廿二日の夜。貞觀殿の小門より王宮を忍び出で。山科の花山寺にて。世を捨人の御有樣花山の法皇と申し奉る。されども御息女の事猶忘れさせ給はず。右近と申す腰元御息女と同年にて恰好も似たる由叡聞に達し。三の君と思召し御座近く召されたし。詞 貴方猶子として上げられよとの。院宣なりと述べければ夫婦あつと頭をさげ。詞 有難や冥加なや今も今此の者を。娘が形見我が子にせんと申し慰む折柄。地 何か違背申すべき歎きの中の悦びと。泣く〳〵お請け申さるゝ安盛悦び。早速の御承引我等迄の大慶たり。詞 扨右近に申しふくむるは。君は今に弘徽殿の事のみにて外へ御心移らねば。御身をお寢間へ召す事は難かるべし。隨分弘徽殿を惡しざまに云ひなし。三の君を失ひしも。嫉妬の恨に弘徽殿の死靈のわざ 夢に見ゆる目に見ゆると恐ろしさうに申されよ。時には君も愛想盡き弘徽殿を思ひ切り。御身の腹に若宮の御誕生もある時は。地 其の身は則ち准三后高房卿も任槐あり。此の安盛も鎭守府の將軍。第一君の御爲方便の僞りは。罪にあらずと佛さへ虚妄の御法を說き給ふ。世間忍びの山家の御所ひそかに迎へ申すべし。悲しき跡は悦びあり各の末繁昌と。後先しめて辯舌を。飾る詞の花の山花山の。院へと 三重
〽分入りし（以上一本ナシ）
フシ 雲井の月も。山樵の。軒端に曇る御住居。松の柴垣竹の簀戸 ハスヱテ 錦の褥引きかへて。苅穗の庵の草席。主殿司の菖蒲草 オクリ 葺かねど。〽軒に生ひ茂り。主水司の フシ 初氷。佛の閼伽と。碎かれて。地 曉の雁夜の鹿。いづれ哀れのたねならぬ西の一間は御佛殿。弘徽殿の繪像をかけ。中尊は釋迦牟尼佛佛も我も十九歳。これは衆生濟度の道。是は戀路の闇に入り。なほ三界を フシ 出でやらす。地 佛は心穢しとさぞ見給はん恥かしと。懺悔に絞る花衣 フシ 苦の。袂と朽ちにけり 地 參り仕ふる者とては中納言義懷。左中辨惟成ならで下部の一人も置かれねば。二人水汲み朝菜摘み。名聞はなれし御遁世 フシ

戀故とこそ哀なれ。地義懷惟成御前に出で。詞内々平の安盛申し上げし。高房が召使右近と申す腰元。三の君に似たるよし則ち高房猶子となし。御徒然をいさめん爲。安盛今宵御庵室へ密に伴ひ申さん由申し越し候。地若き女の男の中。女の連も候はでは初々しくも頑固にて。却つて不興と存ずれば。京の御所より女孺かお末か一兩人。呼び候はんと申し上ぐれば。いやとよ王位を振捨て内裏を出でて世を遁れ。左樣の音づれ都の誹り世にうるさし。右近とやらんが伴ひには。詞此の山科の里人土民の妻子賤の女にても。密に語らひ何方へも漏れぬやうにと宣へば。地ア丶誰をがな雇はんと二人談合とりどりの。折に折焚く柴つけ馬オクリあの山。〽越えて。ギン此の山樵がオクリ八瀬や。大原木黒木束木。フシ柴召されとぞ賣りにける。詞惟成見付けてなう義懷。あれは御所へ柴入る丶朧の清水のお嫁でないか。地何と今宵あの者を賴むまいか。是は幸ひ

柴買はん柴買はうと呼入るれば。あいと答へて内に入り不思議さうに顔を眺め。詞是は〳〵見たやうなと思うたが。京の御所で再々見たお公卿樣達ぢやはにや。誠に聞けば上樣も内裏をお出なされて。お位は宮樣へ參つたと申すが此處に隱れて御座りますか。地何くらからぬ王樣の宮殿樓閣打捨てて。わしらが住居同然に御内の衆も無さ丶うな。是はまづどうしたいはれお借錢かなあつてゞあろ。不自由を推量しておいとしさまや勿體なや。親祖父代々お清所へ柴入れた冥加の爲。薪は嫁が續けませう。なんぼお位高うても借錢には勝たれぬ。本の位倒れぢやとフシ淚を流すぞ殊勝なる。詞義懷惟成打笑ひいや〳〵左樣の事ではなし。あれに御座なさる丶こそ今迄の帝樣。御髮を切らせ給ふ故花山の法皇と申し奉る。其の方が心ざし叡感なりとありければ。地ア丶有難やと手を合せ其のえいかんとは私が舅。九十六の錢百で一昨年死なれ。戒名は淸容

永久と。語れば君も堪へかねてフシどつと笑はせ給ひけり。詞兩人重ねて。今宵昔の御慰めに女中一人參らる丶。御祝言の倣びしたけれども我々は男勝手知らず。待上臈も何もかも。萬事そちを賴むとあれば。地アアつがもない。内裏樣の嫁入とは五緒車の御入内。一度拜んだばつかり作法は夢にも知らぬはにや。いや〳〵左樣の儀式でなし。此の住居の事なれば祝うてさつと形ばかり。地其の方達が嫁入と同然に入用の物整へて。御挨拶も申してくれ平に〳〵と賴まるれば。それならば易い事八瀬や大原の嫁入は。大抵祭同然酒は濁酒の手造り。高野川の鮎の鮨干餅のむしり物。芋と蒟蒻煮しめて三種の肴が入りまする。詞落付きはお雜煮餅は大方一人前。三升あてに搗いたれば地大概に行渡る。冬なればさつぱりと洗濯夜着も入るけれど。暑い時分はこれが德青柴一把ふすべれば。蚊帳つらずの新枕閨の内は其の身の氣轉。私等が若い時分は祕密口傳

も入つたれども。詞山家の奥の奥までも今の娘は一人食み。五日歸りする迄は朝晩のかき膾。地お汁には何なりと尾鰭のついた燒物。尤も飯は上置なしの　フシ生飯なりと云ひければ。地扨も目なれず聞きなれぬ佗ひたる賤が物語。聞くも山家の珍しさとフシ叡感限りなかりけり。詞はや安祥寺の入相の音羽の峰に夕づく日。傾く笠の女姿平の安盛同道にて。御庵室に伺候し詞かねぐ〜奏せし中納言高房が養子。右近の前御宮仕と奏すれば。地義懐惟成出迎ひ能くぞ能くぞ此方へと。笠を取らせ引き繕ひ。玉座に近付け安盛も　フシ同じく御前に伴はる。地安盛憚る所なく。詞三の君の身の果餘り本意なく。せめての所緣と此の女を御宮仕に奉る。叡慮にもかなひなば。御恩賞には鎭守府の將軍職ひとへに願ひ奉る。これ右近の前。日頃怖や恐ろしやとおぢ恐れたる夢物語。御咄し申し上げ弘徽殿に負けまじと。隨分お氣に入り給へ後程御機嫌伺はんと。御前を退出し　フシ旅宿へこそは歸りけれ。地右近は幼き時よりも公家奉公には馴れたれども。王位に押され身もふるはれ顏に紅葉の秋津君。共に御心恥かしくスエテ御詞もあらざれば。義懐惟成氣の毒がりサアこゝらが男の困り物。お嫁どうぞ御挨拶萬事は賴うだ任せたぞ。我々は花山寺の和尙の方へ外すぞと。表へ出づればチヽそれぞれ跡は私が請取つた。先づは閨のお盃酒買うて來ませう。こんな時には兎角酒。酒は情の露雫　フシ德利さげて出でにけり。地右近はなほもさし俯向き。君も何を打付けに云ひかけ給はん詞もなく。詞盆にはさぞ踊りつらん。踊が好きな地顏つきぢや。京と違うて踊もなき。此の山里の淋しさは　フシ住みうからんと宣へば。詞いえ〳〵物靜なお住居。地御殊勝な佛樣。私は是が好き此方なは釋迦樣。彼の繪像の佛はなんと申す佛やら。悋氣深いいたづらさうな佛樣ぢやと云ひければ。詞チヽあれこそ麿が涙の種。弘徽殿が面影よ。地位も身をも捨てたれど契は思ひ捨てられず。回向をなしてくれよどてスエテ御涙にぞくれ給ふ。地右近も哀れを催せしが。ヤ忘れたり安盛の。云ひ敎へこゝの事ぞと思ひ出し。詞ヤア弘徽殿の御影か。地なう恐ろしや悽じや夢幻に見たとは違ひ。顏ばせは美しく魂は蛇身。見るも怖やと逃け惑ふ法皇驚き。こは何事ぞ仔細を申せと宣へば。詞さればこそ此の間ある時は夢に見え。又幻に現れ弘徽殿が怨靈なり。汝君へ召さるゝ筈妬まし。腹立や。三の君を取殺しおら嬉しやと思ひしに。おのれが枕を並べんとや思ひもよらず叶ふまじ。君に近付く女あらば取殺し〳〵。日本國の女の種枯野となして絶やさんと。鬼とも蛇とも譬へなく追廻さるゝ其の苦しさ。身につまされておいとしや三の君の御最期まで思へば御主の敵ぞと。安盛が敎の通りフシ違ひなく〳〵語りける。地法皇誠と思召し大きに驚き逆鱗あり。存生にては嫉みな

く賢女貞女と作りなし。臨終にも異女に思ひ忘れて慰めと。よくも／＼僞りし。戀も思ひもさめ果てたり釋迦牟尼佛も聞き給へ。三世の契り是まで世々永劫の勘當ぞと。繪像を取つて投げ給ひ。是につけても二の君が最期の心不便やな。形見には右近の前。閨へ來れと打萎れ　フシ入御なるこそは是非なけれ。地右近繪像を取上げ。佛壇に掛け置きて。さりとては情なやお爲になるとありし故。敎の通りは申せしが死したる人になき名負うせ。我が詞一つにて緣を切らせ勅勘ある。恨をゆるし給へとてスヱテ涙を流し詫びけるが。地コハリ不思議や繪像ゆるぎ出で身の毛もぞつと忽に。地繝を放れ形を現じ右近とやらんたしかに聞け。地生身の寃罪も辛からずや科なき屍に勅勘うけ。寃罪に妹脊の中絶えし思ひを思ひ知れやとて。懐に飛入ると思へばうんと魂切りて。我ならなくに我が心スヱテ弘徽殿と入替り。姿は右近の橘の昔の契りは忘れじもの。彼の驪山宮長生殿のさゞめごとも。君と我が中にあら。／＼。あらかねの七重の鎖は切るゝとも。緣は切らじと手を伸し引けば。ひかるゝ御切髮。亂れ引かれてよろ／＼よろ／＼よろぼひ柳髮りなく。風に揉まるゝ御有様。天に引つ立て地に引つ据ゑ。君が心は飛鳥川　フシ我は三途の渡杭。朽つる世迄は朽ちせじと。三界六道つきめぐる足弱車くる／＼／＼　ハツミフシ苦しみ。給ふぞ哀なる。地大原のお嫁はかくとも知らず。酒を求めて歸りしが法皇右近は亂れ髮。つかみ合ひ給ふ體こりやなんぞ。詞はや夫婦いさかひか。今からそんな身持で此の憂世帶は持たれまい。王様も王様ぢや。内裏の格が此處へはむかぬ向ひ隣の聞えもある。地男は裸百官の上に立てば女御様。今で申さばおか樣ぞや。夫婦いさかひ世帶の毒。フシアヽおとましやと云ひければ。地とかく右近は狂氣ぞやよく計らへとの仰せにて。奥へ入らんとし給へば。何處へ／＼と玉體を。引廻し引伏せて。なう狂氣とは世にある人。我は形も夏草の。蔭に焦るゝ螢火の。聲を立てねばそれぞとも岩に堰かるゝ　地岩間水。二つにさつと打ちわれて。波に碎かば碎けよとスヱテさめ／＼と泣きければ。詞是おか様なんぢや割つての碎いての。二つにも三つにも鍋釜は此方の。割れても私は構はぬが。世帶の毒とはそこの事。擂木一本箸片し只では出來ぬ錢が入る。但しあの王様の細工に見事あそばすか。たとへそれでも勿體ない。地王様の擂木にや　フツ擂らりやせまいと喚きける。地いや愚かなり戀路には。王位とても隔なし。現世の位は未來の仇。心に思ひ身に忍び口に戀しと焦るゝも。身口意業の三業の其の三業を知らずやと。縋り付けばなう悲しや。詞三業とは小褌のことか。小褌三合持つたらば入聟すなとは男のこと。地是は女の一念の。其の玉葛這ひまつはりて這ひかゝり。コハリ遁れ難なや遁さじと寄りては放れ放れては。又引

害する戀慕の纒くるし。苦しと夕闇の。そら恐ろしく賤の女も。惱み伏せば玉體もつかれ轉ばせ給ひしを。猶も放れぬ恨みの涙 フシ凄じかりける次第なり。地義侠惟成此の音に何事やらんと馳付けて。抱き起し參らせ是は／＼とばかりにて。驚き騒ぐ其の處へ賴光の代官として渡邊の綱。安信の晴明誘引し逸散に馳け來り。詞今夜晴明天文を考へ候へば。讓位の帝死靈の惱す天變ありと奏聞し。攝政兼家公の仰によつて。則ち晴明召具し候。賴光は禁裏守護に候故。渡邊を以て言上とこま／＼とぞ述べにける。地法皇叡感斜ならず。とく／＼加持し申せとの院宣。晴明右近に近付き六甲・六丁の祕文を唱へ。天津金木天津菅麻を。千座の置戸に置足らはして。祓ひ申し淨め申せば忽ち願ひ口走り。我こそ弘徽殿の亡き魂よ。君に恨はなけれども平の安盛。將軍職を望まん爲右近に教へて寃罪を云ひかけ。三の君の命も我取たると奏せしは。跡かたもなき僞り三の君は丹波の國。大江山酒呑童子といふ鬼神の所爲。疑はれて物助ゐるし契をたがへ給ふな。さらは／＼と云ふ聲に靈化は失せてさめければ。女御の姿ありありと フシもとの。繪像にうつりけり。地右近夢の心地にて安盛が詞のたくみ。言上すれば死靈の告一言一句違ひなし。皆安盛が惡逆と逆鱗殊に甚しく。今宵當所に宿する由搜し出して搦め取り。賴光が心に任せ計らふべしとの。院宣も終らぬに平の安盛參上し。詞右近の前は叡慮に適ひ候か。何の爲參りしと地云はせも果てず渡邊。院宣なるぞと胸板をかつぱと踏付け。乘りかゝり繩をかくればこはいかに。詞忠節勵む安盛を搦めよとの院宣は。心得がたしと立上るいや科は云ふに及ばす。おのれが心に覺えあり。言譯あらば賴光の御前にて申すべしと。地面骨を五つ六つ續け打ちに打ち付け。それ／＼と引立つるなほ／＼玉體安全の。御祈禱を晴明が千早振てふ祝詞の聲。君は女御追善の御經の聲打変り宛然。神も影向し佛も來迎あるばかり。佛法王法神道も。共にさかりの花の山今に。古跡ぞ殘りける。

第三　東寺の西口茨木がつかむ八百兩の金札

詞戀と呼ばすと。行かずに置こか。君が見たさの フシ鏡山。地ひらぎの長が土藏作風にも散らず日に枯れぬ。黄金花咲く松と梅。百に餘りて園端。二百餘人の玉葛。夕々に產み出だすてゝなし金の攫み取り。茨木童子と名に高く。性根は總領太四郎が。揚屋女郎屋親子して。錺商金銀は フシ錺屋と溜りける。地爰に加藤氏綱といふ浪人あり。身にも髪持ちながら。未だ時にも栗田口淨世を忍ぶ柴の戸に。去んぬる彌生やすらひ花。一人娘を見失ひ足手限りに身を碎き。尋ね廻れど影も見ぬ フシ鏡の宿にぞ着きにける。地見なれぬ里の賑しさ。行きかふ女郎の年倍好同じ程なを見るにつけ。若し此の里には居ぬ事かと尋ぬるも面伏。聞かね

ば心落着かず揩り違ひすれ縺れ。一つ所を行き戻り案じ佇みゐる所へ。北向のつまがはが袖を控へてこれ君さん。詞旅のお人か近付もなさゝうな。局へごんせしつぼりと知る人になりんしよ。ヲヽ過分々々客にもならうが。先づ密に尋ねたい事があると。言はせもあへず尋ねたい事合點ぢや。私が位かゐ。極つた通り五分でごんす。安い物ぢや這入らんせ。イヤそんな事ではない。此の廓に居る禿子供の親里所は知つてかや。ムヽ／＼私や禿使うた事は無し。女郎のさもしいそんな事何の知ろ。まあ這入らんせと引止め。此の三十日客せねば賣物で無いやうな。味な所があるぞゐ。地まあフシござんせと引留むる。いや先づ重ねて重ねてとむしやぶり付くを捥ぎ放し。鬼一口を遁れし心。目を塞ぎ鼻抓み オクリ ひらぎへ屋へこそ入りにける。地内には見馴れぬ風俗の。胡散らしげな大小に流石袖にもあしらはず。亭主太四郎揉み手をして。詞誰

方かは見馴れぬお人。我等はひらぎ屋の太四郎と申す者御用は如何と言ひければ。拙者は京都浪人者。一生に傾城と物申した事ござらねば。揚屋衆に近付なし閻魔の廳の訴に。たつた一夜太夫といふ者買うて見たし。路銀の餘り一兩二分是を貴殿に渡し申す。然るべきやうに頼み入ると述べければ。太四郎手を打ち扨打明けた仰しやれやう。それが結句野暮の粹女郎にお望みは御座らぬか。いかな／＼。太夫でさへあれば誰でも構はぬ。申し。女郎と申すは面々に間夫と申す戀がある故。夫への心中大方初手は振りまする。其の手管でお目を偸む事もあり。左様の時に得手のお方が今宵一夜は俺が物。一寸側を放さぬと堅くろしいお方が御座ります。そんな事も御料簡なされますか。構はぬ／＼。振りたくば振らつしやれ。神樂の鈴程振らつしやれ。只氣立の能いびかしやかせぬ太夫を頼む。太四郎悦びこりや女子ども。俵屋へ往てせんよ樣呼んで來

い。盃持て來い。小座敷の炬燵へ火を入れい先づ此方へと奥座敷。地私は隱居へちよつと見舞うて後方お目にかゝりましよと。雪踏も足の横町の フシ こそ／＼宿へぞ走り行く。地ひらぎ屋よりと聞く嬉しさせんよは心たぐり行く。地手禿も後からと。引舟入らず走り込み客の事も問はばこそ。詞これ龜殿。太四郎さんは何處へぞ私が來ると知つてかや。ヲヽ／＼成る程／＼旦那樣の御合點。障りないお客さん。お座敷は中の間へ。地せんよさんお出でと引合せ。位のある松の床柱。とんともたれて寄添ひの無い事有る事しやら聲に。上する女子の取りフシ露も打ちたき風情なり。龜が勝手へ立つ廻し盃ばかり投入の。鼻紙袋にあり合はばを見て加藤兵衛居直り。詞先づ以て今日はお出で忝い。我等太夫樣方を呼びまする風體な者でなく。身は都に住みながら。女郎達とは詞を交せし事もなし。況して此の廓の誰方が誰方とも名も存ぜず。亭主太四郎

とやらが心得を以て。不思議にお目にかゝる事返すぐ\も忝し。一見と申し武骨者。なれ\しき事ながら盲蛇に怖ぢずとやら身に迫つての物語。我等が兄弟より親しき者。當春十五の一人娘三月より行き方知れず。地狐狸の所爲かと夜な\の太鼓鉦。人買人賣の手にも渡りしかと。京都伏見の遊女町。山々谷々捜しても今日迄行き方知れず。詞殊に母も無き者父の歎き御推量。死したるに極らばせめて身體なりともと親は狂氣の如くに成る。子が存らへ在るならば親の悲しむ一倍と。地親子の心思ひやり我等が身同然に。斯樣に尋ね申すなり。禿子供に思ひ當りの方あらば。お尋ねも申し度く扨こそ氣立の能きお女郎とは望みしぞや。詞色もなく戀もなく。大事の女郎に立入りし御物語。さぞ譯知らずと思されん。地是も心のやる方なさ。不調法は御免なれと フシはら\泣いて語りける。地せんよは鼻紙手に取つて。ナウ始めてのお客に。

泣いたは是が フシ始めぞや。地ちつと逢ふか逢はぬか。女郎の成立は皆それに似たる事。親御の歎き御懇の中ならば。さこそと思ひやられて。私が昔も今更に袂を絞るばかりぞや。詞此の廓の女郎屋私が親方始めとして。禿ども多いと申して廿人か三十人。地肝煎口合ある内に。親許慥の判を取り。吟味に吟味が廓の作法。此の太四郎樣の母屋は。詞ひらぎ屋の長とて隱れもない大宗八。太夫ばかりが五十人天職が七十餘人。圍の端のと二百人に餘つて。禿どもさへ百人餘事の多い中なれば。地どの筋からどうこけて。お尋ねの娘御のござるまいとも申されず。アヽどうぞ知らせて上げたやとスエテしみ\泣いてぞ語りける。地表口から急がしげに走つて來る禿の聲。俵屋のせんよ樣は奥にかえと。つゝと通つて鼻紙の中から出す延の文。コレ太四郎樣の。お前へ進ぜとおしやんすと。文を渡せば讀む隙も呻けば呻いて。頷き合ひし横顏を。よく

よく見れば尋ぬる我が子の横笛。はつと嬉しさ抱付くばかり。親は爰にと言はんとすれども人目あり。人の思ひ我が思ひ。汲みかへ\心の水 フシわくせきするぞ道理なる。地せんよが心は戀一筋。臨の顏には目もつかず。ちよつと往て來ませうと。文引つ裂いてせゝくしやの小褄はら\立出づれば。共に跡をも振返らす。連立ち急ぐ我が子の振。詞コレ禿來々々。ちよつと此處へ借りませう。地あいと見返りヤア父樣かいの。アヽ高い\。可愛の者や。ゆかしう御座るとばかりにて。抱付けば引寄せて。聲を呑んだる濕り泣き親子の。樣ぞ哀れなる。詞加藤兵衛涙を押へ。春より今日が日迄。尋ね餘つて最早此の世に無いものと。思ひ極し上ながら若しやと此處へ來りしに思ひも寄らぬ此の體。何としてあさましい。君傾城に使はるゝ禿とは誰がなしたるぞ。如何なる者に騙されしぞ。地不便の者の有樣やとスエテ聲打ち。しをれ言ひければ。詞

と丶様に歎きをかけ。我が身も憂き目見る事は私が心の愚さゆゑ。過ぎし彌生やすらひ花の歸るさ。白髪頭に赤ら顔浪人らしき親爺めが。ヤア。加藤兵衞が娘か。小い時に逢うたれば定めて其方は覺えまい。扨も〳〵成人加藤殿へも無沙汰した。長の浪人笑止な。其方を賴光樣の御臺所へ御奉公に出さう。親の立身身の出世たつた今加藤殿とも談合し。お上を爰迄迎ひに來た。ちよつと逢はする人ありと騙すとは夢にも知らず。地とつ樣の合點ならどうなりともと連立つて。舟に乘せ駕籠に乘せ。此處ひらぎの長へ連れて來て。五十貫とやらに私が一期を賣り渡す。ヤア其の筈でないさうでないと泣いても喚いても聞入れず。長が手に渡りしより。間がな隙がな逃げて退けう。逃つてくれうと心がける素振を見て。慳貪邪見な親方が五十貫に買うて。詞一萬兩にもするやつぢや。其の根性を直さぬかと。地縛つて長押に吊下げらるゝ時もあり。詞柱を横に渡して。足に石を括り付け木馬とやらに乘せられ。地夏の夜は裸にして。植込に括り付け蚊に責めらるゝ時もあり。食を止められ撲ち敲きは常の事。詞泉水へ身を投げて死なうかと思へども。せめてとゝ樣に此處に居ると知らせたく。不繁昌な女郎衆はわし同然の責め呵み。木蔭へ寄つては兎角命が大事ぢや。地獄へ墮ちたと思やと傍輩衆の情にて。地一日々々暮せしが抓りたゝかれ小刀針。身内に明所はござらぬと。語る子よりも聞く親の。心に釘針刺す如く共に。歎き沈みしが。詞エヽ憎い奴輩しやつ人商人。其の親爺めが名所は聞かなんんだか。手形の時見ましたが。北白河の廣文といふ奴ぢやげな。ムヽなに北白河の廣文とや。地名所さへ聞いたれば政道明らけき賴光へ訴へ。其の廣文め獄門にかけ。其方は廓を易々と取出すは今の事。詞さり乍ら其の間にも必ず〳〵。一夜でも遊女の勤して身を穢せば。地重ねて武士の妻とならず。一生の大事ぞと語れば横笛又泣き出し。サア詞それが悲しうござんする。かゝ樣の御臨終に貞女兩夫に見えずとて。夫一人の外とては男に手をも取らさぬもの。女の大事は是一つとくれ〴〵の御遺言。胸の守りに懸けてゐる。さりながら近い内格子へ出す。太夫にするとの用意を聞けば。責に逢ふより悲しうて死なうと思ひ詰めましたに。今お目にかゝれば心に力賴みもあり。片時も早う取返して下され。ヲヽ氣遣するな今の事。地それ迄は親の名も人に語るな漏すなと。言へども漏るゝ親子の涙フシ止め兼ねて居る所へ。地遣手の鍋が藥罐聲。煮え返つたる顏付して。此方のしんべは爰らへは見えぬかと。奧へ通つてこりや爰にぢや。詞はや今からのらかはくか。わが身が爰へおぢやつて。もう背丈が伸びたとて。一日も太夫樣がたに付きもせず。供はしやらず。眠たいめはしやらす。朝晩仕事は研ぎ磨き。もう半年もゐやれば。アノ氣立な旦那樣の

手數を忘りやつたか。又しては遣手がぬるい〳〵と 地棒の側杖喰ひさうな。なにのらかはいて爰にゐるヱ、因果めと フシ揃りこかす。詞おりや遊びにや來ませぬ。太四郎樣からせんよ樣へ文持つて來ました。それそれが木馬の元。若旦那の太四郎樣には。京からござつたおゆら樣といふ。歷としたお内儀があるぞや。コレ此の眼に見えぬか。せんよ樣と若旦那のこそ〳〵ゆゑ。おゆら樣とのもや〳〵が此の耳へ入らぬか。内の紛擾が面白いか。地惡魔めとてははたと打ち天狗めとては突伏せ。下がへに手を入れて太股を。捻上げ〳〵捻上ぐれども聲立てず。痛さを堪ゆる憂き涙聲に落ちてはら〳〵と。スヱテ齒ぎしみしても加藤兵衛出づるにも出でられず。言へば言ひ負け武士の娘を下司女に。見す〳〵親の見る前で呵まする無念やな。飛びかゝつてや突通さん眞二つにや斬殺さんと。刀に手をばかけたれども。詞斬つて誰がため遣手には科もなし。

地腹立つる程我が子のひしと。せき立つ心押鎮め。詞コレ遣手衆憎いは道理々々。地其方は娘は持たずかと聲を涙に曇らせて フシ見ぬ顏するぞ哀れなる。詞こりや。客樣達の手前もちつと恥かしいと思へ。且の放任な根性で今から多くの殿達に。しつぽり〳〵やらるゝか。地とつとと往せうと引立つれば。詞申しお客樣。餘所の娘が折檻に逢ひをる。不便な者やと苦に持つて下んすな。わしや痛うも 地無いぞやと。笑顏にかゝるはら〳〵涙 フシ追立てられてぞ歸りける。地加藤見送り立ちつ居つ跡に焦るゝ親心。サア〳〵在所は知れた賴光の御前への訴は。上り下りも日數を取る。今宵一夜も見捨てては親も命がたまらぬ。詞親方ひらぎの長と太四郎とは親子とや珍重々々。長が邪見無得心の者なりとも。鬼でもあらず畜類にもあらず。彼奴も子を持つたれば親子の哀れは知るべきぞ。某が大地に手をつき頭を下げ。膝を折つて口說くならば。地指いたる我が大小の義理にも迫つて。聞分けぬ事よもあるまじと。亭主が歸るを松蔭る フシ小庭に佇みゐたりける。地間夫の後妻打つ波の。おゆらは夫太四郎かこづか胸ぐら摑み合ひ。敷居で轉ぶ雪踏は飛ぶ。引摺り込んで上り口。どうと打付けこれ太四郎殿。詞せんよ殿とのもや〳〵知り拔いて居るぞや。今日も今日此方が門を出て行くと。せんよ殿を呼びにくるやら合點ぢやと。裏の路次からそつと出て。こそ〳〵窓へしかけて一から十迄見屆けた。此方衆親子の商賣は何ぞいの。女郎屋と揚屋と。内の女郎と餘所の揚屋と間夫したら。此方衆親子がきよろりと見てはゐまいがの。まつ其の如く。餘所の大事の立物の太夫と。揚屋の身で間夫狂ひ。廓にぱつと沙汰あれば第一商賣の妨。女房がうつけぢやとゆらが鼻毛がよまるゝわいの。今ばかりいふぢやない。何ぞいへば氣の通らぬ悋氣かと一口にいひこめ。なんと。粹は悋氣せぬのもとの何處か

ちの法度ぞ。誰方からの極めぞ。サア地言や〳〵とむしやぶり付けば取つて突退け。胴骨を踏付け〳〵。己れがどこへ女房呼ばはり。詞其の腹持つても女房か。七月の京土產。既に此の太四郞に。男の一分捨てさせうとしたな。女房でない出てうせう。去狀が望みなら千枚でも書いてやろ。地男ども女ども引ずり出せとひしめけば。家內騷ぎ立ち先づ親旦那呼んで來い。座敷へ聞ゆる門に人がたかります。アヽフシうとましやと騷ぎける。詞ゆらけら〳〵と打笑ひ。ハア改つた事ばかり。此のお腹が今見えたか。わしも京にわけ有つて。此の處へは下るまいと言ひ切つてゐたれども。此方の親御が。懷妊大事ない。其の子は太四郞が子にして俺が孫に極める。茶屋揚屋の嫁にそこらは構はぬ是非に於て貰はうと。とつ樣との固めで嫁入つて來た私なれば。此の腹な子は此方の子。地親旦那と三つ鐵輪でけんほくぼはれで產んで見しよ。人の浮名立たうより此方の浮名嗜ましやれ。詞イヤ此奴嘘つきめ。女房早魃はゆくまいし己ればつかりが女か。此の澤山な女子に。懷胎な合點ぢや嫁に取らうといふ。阿房な親がどこにあろ。地大恥かゝぬ中出て往せう。さなくば取つて引摺り出すと小腕取つて引立つる。門口より親長は默れ〳〵喧しい。詞太四郞だまれ。ゆらもだまれ。こりや。せんよに勤めをさするによつて間夫のなんのと喧しい。とんと請出して本妻にせい。町の分限者どものする程の事此の長が仕兼うか。とうに內證聞いて置いた。八百兩では今でも埒の明くやうに。俵屋と談合しめて置いた。コリヤゆら。汝が親と言ひ交した言葉一言も違へぬ。京の東では住吉屋のゆらというては名を取つた娘ぢや。アヽどうぞこつちの格子へ出したれば。大儲するものぢやと。見込んで親へ貰ひかけたれば女郞には賣りませぬ。殊に大盡の子を懷妊してゐるというて埒が明かぬ。そこで此の長が思案を以て。爰へにも懷妊にも構はぬと。一杯くはせ先づ嫁に貰うて。跡では其の腹な子を瑕にして勤させうと。此の長が胸一つでかうからくんだ。さうなうて六貫匁といふ禮銀を。何の價に出さうぞやい。此のやうな手練をせねば分限者にはなられぬ。これが俺が商賣ぢや。其の腹な子を下せ。今宵から此方へ來いといへばゆらは返事なく。スエテ只伏沈み泣きゐたる。太四郞聞きかね進み出で。詞せんよを請出し下さるゝ御恩は海山有難し。ゆらめに勤させうとは。それで此の太四郞が若い者の一分何と立たうと思召す。歷々のお付合京都迄も聞えた。ひらぎ屋長は嫁に勤をさするわ。息子太四郞は女房に流れを立てさすと。惡名を立てられうより。同じ恥をかく手間で妊婦をかづいた方が遙にまし。地ゆらめに卒產致させ私の子と致し。お前の言葉も立てませう其の上で何事なう。親へ戾して下されと。いはせもあへずヤア氣の弱い。詞彼

奴を親へ戻して。せんよを受出す八百兩は何處から出る。總じて憂い目を見まいと物の哀れを知つたり。人の恐れ世の中の。義理順義を知るが最期貧乏神が乘移る。此の春抱へた廣文が口入れのしんべも。明暮はえ廻れども叩き込み責め伏せて。五十貫をやがて五千兩にして見せう。コリヤ此のゆらも前出した六貫匁。せんよ請出す八百兩五層倍にせにや置かぬ。地男ども。ゆらをこつちへ連れて來いと。立たんとすれば太四郎止めて今暫く。詞申し親父樣。ゆら一人がなければとてお前が貧乏なさるゝか。たとへあれゆゑ金銀の山を築けばとて。太四郎樣の內儀といはせた者に道中させ。私は生きて得居ませぬ。子を產まして波風立てず去るに何の手はつかぬ。地明日より此の太四郎に人交りをするなとか。御料簡頼み奉るとスヱテ手を合せ詫びければ。ゆらも只御恩には。京へいなして下されと泣くより。外の事ぞなき。地我が子の恥を聞入れてそんならどうなりと。詞墮胎なりと產ませなりと埒明けて京へいなせ。今宵の中に俵屋と通屈して。せんよを明日から呼び取り。此の八百兩の戻る程餘の女郎どもをせつちやうせいと。酒呑童子も其所退けの。茨木童子がつかみ面　フシ片腕切りたきばかりなり。地加藤兵衛聞けば聞く程力落ち。ム、あの心では泣いても口說いても聞入れはよもあるまじ。なまなか言出し仕損じて後日も如何。兎角賴光へ訴へ御威光でなくんばと。思ひ定めて座敷を立ち。詞これ御亭主。勝手も殊の外取込みと見受けたり。我等も今日守山迄參る用事ゆゑ。地お暇申すと笠おつ取り。重ねてお出といふ聲もフシ聞捨てゝこそ出でにけれ。地長跡を見送つて。詞あのやうな奴客にすな。何の二つや三つ宿をしたとて塵埃。こやかましい置いたがよい。アヽもう行なう。コリヤどいつぞ來い。猿め。先へ行て善哉餠言ひつけよ。小豆は舌に觸る。京の龜屋が羊羹をすりつぶしてせいといへ。地太四郎も來いと立出つる。今の榮華は喜見城。女郎の爲には恐しき鬼が。城へと　三重へ　歸りけり。地東宮懷仁親王七歲にて御位に卽かせ給ひ。攝政兼家朝政を正し　武將源の賴光非常を警め給ひしかば。聖の御代の九重や民の訴なかりしが。永延二年の頃よりも訴訟沙汰人日日に增し。賴光の門前は夜の中より群集して。　フシ御門の明くをぞ待ちゐたる。地夜も明け行けば賴光決斷所に出で給ひ。季武貞光執筆の役檢非違使左右に着座して。庭に隨兵兵具を携へ御門開けば訴訟人。我先にと込み入りしを貞光進んで。詞ヤア騷がし〱。御批判は後程名を指して召出さん。先づ面々が訴訟の品を帳につけ。それ鎭めよ。地承ると隨兵鐵鞭振廻せば。しいと鎭まり蹲ひてスヱテ皆々帳にぞ付けにける。詞恐れながら私は。上京西陣織殿屋の孫三郎と申す者。十七になる年季の織手。一昨日の暮方より行方知れず失せ候。親請人に尋

ぬれば却つて此方を恨み口。御瀧光を以て御穿鑿御を願ひ奉る。地奴等は鎌の小路の者と口上の趣をフシ頼光様にぞ留めにける。地我等は二條室町綿萬の吉次と申す者にて候。一人の倅に一門中より嫁を取り。里歸りの道にて見失ひしと申して。今に戻さず候へば御詮議願ひ奉る。地我等が爲には姉が小路の針屋。從弟同士と繰返せばフシ同じく帳にぞ留めてけり。地次に年頃六十餘りの女房は。柳の馬場のあこうと申し縞つみ敎へる寺子とり。十二と三になる弟子が二日に二人の行方知れず。お慈悲に御詮議給はれかし人の小娘失ひて。未來のつみ絹親々の恨みはさながら眞綿にて。首締めらるゝの思ひなりとフシ涙を流して訴へける。地私は宇治の里梅田と申す茶師にて候。十八歲の娘閨の内にて姿なし。側に臥したる下女に問へばこちや知らぬと申すなり。細かに詮議下さるべしとぞ願ひける。私は今熊野貞月と申す比丘尼のお寮。廿三四の弟子二人勤進に出で今日七日。今に歸らぬ御訴訟則ち其の比丘尼の名。一人は貞林一人は又フシ貞觀々々とぞ申しける。地是は深草土器師明けて十四の小娘。何者の仕業にや首も腕も引拔いて。腰より下は殘れども骨は碎けて候と。泣きこがれて申すもあり音羽山の待物師。女房が頭の鉢打割られしといふもあり。油の小路の傘屋が女房武者の小路の具足屋の母。御室の糀屋吉田には八百萬屋。御幸町の稚兒菅者六條の豆腐屋。七條の袈裟屋狼谷の衣屋。[illegible]通の紙漉押小路の紺屋。三條の取上婆娘を失ひ妻を奪はれ。叔母は姪を尋ぬれば妹は姉を見失ふ。兎にも角にも御詮議あり妻の行方を知らせてたべ。娘に逢せて給はれなう御慈悲なるわと聲々に。泣き悲しむ有樣は閻魔の廳に罪人の。罪を悔むもかくやらんフシ目も當てられぬ次第なり。賴光も落涙あり此の頃の訴訟人。爭論出入の事は無く妻子を失ふ訴へ。春より帳面八百人に及べり。詞ヤア汝等。是は丹州大江山酒呑童子が所爲なる由。弘徽殿の告によつて某討手を蒙れども。幼主御卽位大內守護にて延引せり。近々に大江山に分け入り。生きたる者は連れ歸らん。死したる者は敵を取つて得さすべきぞ。目に見えぬ變化なりとも。源氏の威光弓箭の德減さであるべきか。地靜謐の御代となし追付け歎きを止むべし。罷り立てと仰せければアヽ有難やと一同に。わつと叫びし其の聲はオクル大路に〳〵響き哀れなり。地爰に四十ばかりの男子幼稚の下につつと出で。詞某は粟田口の貧者加藤兵衛と申す者。横笛と申す十五歲の我が娘。當春賀茂のやすらひに參りそれより今に行方知れず。度々訴訟申せども變化の業とて追歸さる。これ御吟味の暗き所。變化流行を幸に人商人の蔓り候。此の御心付かざるは御政道の失ならずや。御穿鑿下さるべしと憚りなく訴ふれば。季武聲を荒らげ。御政道暗しとはあつぱれ汝は烏滸の者。して汝が

娘人賣に取られし證據やあると睥め付くる。加藤兵衛些とも臆せず。さん候。江州鏡山ひらぎの長が許にて。娘を見付け候ゆゑ詮議を遂げ候へば。北白河の廣文と申す者より。料足五十貫文に買取ると聞くより早く。廣文が宿所を尋ね候に。此の頃他國へ仕る由。さるによつて恐れながら御威光を借り奉り、武將よりお召しなるぞ廣文が妻子召連れ來るべしと。地所の庄屋に申し渡し候へば追付け引連れ參るべし。對決願ひ奉ると憚りなく言上す。詞頼光聞き給ひ神妙々々。汝が詞上を蔑するに似たれども、却つて政道を勵す一助。我何ぞ下聞を恥ぢんと宣ふ所へ。地北白河の土民ども。廣文が妻子連れて參りしと四十餘りの女房。十四五ばかりの子庭上に畏る。詞頼光御覽じ。廣文が妻子は汝よな。夫の廣文粟田口の加藤兵衛が娘を勾引し。鏡山の遊女に賣つたる條紛れなし。定めて汝もよく知つつらん。夫が宿所に居らぬ由斷落か。但し行く先知つたるか眞直に白狀せよ。少しも陳ぜば拷問させうずるわと宣へば。女房聊かわるびれず。夫の惡事を女の身にて存せねばとて。同罪遁るべきやうなく候へば。陳じても益なき事左樣の事は夢にも存ぜず。地いかさま過ぎし春の頃古傍輩の合力とて。浪人の營を助かりし事も候へば。詞若し其の子な賣つたる價にてやあるらん。それも詳しく存ぜず。又駈落かとのお尋ね。たとへ首を討たるゝとて。逃げ隱るゝやうな夫にては候はずさりながら。地一夜に變る人心夫婦の中とは申しながら。スヱテ計らひ難しとぞ申しける。詞ヲヽ健氣なる申しやう。天子大嘗會の前なれば死罪は宥め助け置く。北白河の庄屋年寄。廣文を尋ね出し娘をきつと渡させよ。加藤兵衛も鏡山に同道して受取れ。地違背せば連れ來れ庄屋其の旨承れと。御座を立たんとし給へば親も庄屋も言葉を揃へ。其の間妻子とも逃け走りも氣遣はし。とても事に廣文出づる迄此の女。牢舍仰付けられしかとぞ願ひける。詞頼光打笑み給ひ。ヲヽ逃ぐるといふとも唐土天竺へはよも行くまじ。津輕合浦筑紫の果王土の限りは武將の下知。僅かに圍ふ牢屋ばかり牢屋とはいふべからず。頼光が免すといふ詞を出さぬ其の内は。千里が野邊も牢屋たり逃げば逃がせ。地頼光が一言は千筋の繩ぞ譬立てと。簾中に入り給ふ文武の德の堂々と。威あつて猛からず實に。名將の源の。水上清き印には世々に。流れて家々の。平橘藤原や八百八十氏は多けれどめぐり。〳〵て盡きしなく猶。源の御代に仕む民に。幸ありとかや。

第四　植込い大江山茶華は大格子の唐様

月も日も。庭より出でて。庭に入る。地廓の内の武藏野や。スヱテひらぎの長が廣庭の。光琳風の築山を。フシ見渡す目さへ遙々と。谷の岩組葛折。筑波の山もはづかしの。森と茂りし植込は華麗を盡す。フシ物數寄の。松の作り木。作り枝　小オクリ　底の〽松風三味

緑の縁手に通ふ三重廊下。數寄屋が軒の南天に。長唄珊瑚珠緊く珠簾蔵は宮城野鄙園が岡崎や櫻の花盛り、天より四季の仕着して。手形の外の色ずくめ。金ずくめなる身の榮花。金の冠を被ぬばかり フシしやくは持綺にありとかや。地豫て催す檜舞臺も成就し。今日こそ爰を晴の能三番過ぎて中入の。熊野より直にお行水臺所にはどや／＼と。五色の赤飯蒸し立つる。鍋釜ありたけ炊け炊けと女子呼びつゝ男ども。見物場掃く水を打つ樂屋に續く衣裳場に。お出入の鍛冶針立。算用足らすの懸硯れ傳授覺えて手は利かぬ。古鼓のならすもの。其の外萬能一心の家業なし。詞扨も出來た遊ばす／＼。米とる能太夫も跣足ぢやと。地慶庵とり／＼御機嫌伺ふ折ふし。湯殿の内よりお上りいと呼ばはれば。アヽイと答へて禿ども。緞子縮緬天鵞絨裏の繻虎の蒲團三つ重ね。沈の脇足煙草盆。湯殿を出づるひらぎの長頭の鉢に立つ湯氣は。富士の煙の上もなきフシ

はとび過ぎたる湯上りの。地お側ともがお髭の興。詞扨も熊野の面白さとうも／＼。よい衆のお客達が先づあの衣裳の結構さ。大名もかなはぬとの御評判。地お行水なされて追付け松風、皆待ちかねてござります。詞イヤ行水心が悪い。水ばかりに五人三人かゝつて居つて。京の水を切らしてかゝり湯に逢坂の水を使はせをつて。扨肌のあんばいの悪さ。金次第でならぬ事はなけれども。汲みたての京の水と嵯峨松茸のとりどり。此の二種が心に適はぬ。アヽ松茸時分に上り度いが道中が大儀な。舟いやなり馬嫌ひ。駕籠はふらつくヤア福庵。お主は地體京生れ若し貧乏公卿に近付があるならば。地御所車一輛貫うてくれ。地乗つて歩こと方圖もなき。月蓋長者の隱居 フシせられし如くなり。見に來る人の容貌は。匂ひ渡りし橋懸二三の松を煙り來て。樂屋にちゝつたんほゝの調も伽羅に埋れて。スエテ鼓の音さへかをり來る。詞あれ鼓を調べるはもう次

を始めるか。俺が案内する迄始めるなというて來い。此の間いづれも勝手へ立つてしたゝめ／＼。我も飯食はう膳を出せ。地そりやこそお膳と呼ぶこどり古金襴の膳覆ひ。嚴しからぬ取沙汰も嘘で御座らぬ本膳は。春正蒔繪の價千金。かけ盤高坏二汁七菜手を盡す。餘所の振舞ひらぎ屋の フシ朝夕とこそ揚豆にけれ。地七度鍋に七庵箒。誰が水晶を飯にして精白厭はぬ白蔵の。せゝり箸して不機嫌顔。詞なんと世界にもう食ふ物は無いかい。明けても暮れても鯛の鯉のと食はれぬ物ばつかり。此の二の汁の鳥は何ぢや問うて來い。イヤ問ふに及びませぬ何がな珍しい物をとて。生鶴のお汁といふよりくわつと色を損じ。鶴といへば結構な物かと思うて。今時分の鶴脂が無うて喰はるゝ物か。打明けて犬に喰はせ。今特つて來た平皿は何ぢや。アヽ是は生鮭でござりんす。態々若狭へ飛脚を立て取寄せたと申されます。ムヽ若狭へ取りにやつた。こり

や出來したと地機嫌を直す食好み。朝暮珍物高直の魚鳥は直に小判かむ。フシ歯骨も茨木童子なり。地思ひ〳〵の大盞の。妓の威勢を劣らじと能の祝儀の贈物。オクリ花とはへいへど木々に咲く花の。時節は。杉折の。雲足蝶形洲崎形五つ重ねの島桐の。紋を透しに手をこめて奥州が名を忍ぶ客。三五に義理を播磨潟。鹿様よりとフシまためかす。花紫が深い客。長堀の粋様。金絲の網をすきかけて髭籠にこめし祇園坊。半ぶ御贔屓弓も引方靱のお客といふもあり。銀の毛彫の飾壺宇治の花香をそのままに。つめし昔も今橋と。逢夜がフシ客の名に渡る。瑠璃白玉の。玻璃鐺に南蠻酒泡盛藥と汲むや玉の井が。お客方よりぞと我一に。コハリしづか巻絹金太夫。長門薄雲初紫色品つくす進上に。能い客持つて全盛と。先づ親方のナホス機嫌とるひどさぞ。思ひやられたる。地長大きに笑を含み。詞ムヽ是は太夫達のお客方より今日の花か。扨々懇な過分々々。是といふも其方衆が精出し客に週つて。親方大事に勤むる故。さりながら勤め〳〵と思ひ酒過して煩うて下さるな。ヤお客の側でさぞ氣づまり。地ちとの間なりと寢轉んで休息なされ。親方と思ひ氣兼は無用。我等が大事の金箱達と。ふはと乗せても樂馬のフシ轡に手綱ゆるされず。地中にも長門は姉女郎なう奥州さん。詞半ぶ様いづれも。旦那さんのよい御機嫌今の御訴訟申さうではあるまいかとつつと出で。折がな〳〵此のお願と傍輩殘らず申し合せ置きしは。あの病人白妙殿の事。旦那さんも油斷なう醫者衆も替へ養生は樣々なれど。次第々々に病も重り。鐵の鎖で繋いでも。此の度はあつち物と醫者さん達のお話。其の身は時節是非に叶はぬ事ながら。痛はしいは彼の西國の吉様といふお客。新造からのお馴染は我々も存ぜし事。とても死ぬる道ならば。一日なりとも廓の外で死なせ度いとの歎き。我人果敢ない勤の身。兩方の心思ひやられます。地此の事は井筒屋から。度々お耳へフシ入れし事。地今日は別して總太夫中天神衆殘らずの御願ひと。半分言はせずアヽこまたるい。後を聞く迄もない。詞料簡して白妙に暇くれといふ事か。ならぬ事。白妙といふやつで何ぼう損をする。三十日餘り煩うて。勤はせず藥は喰ふ。人手は取る。地體此の吉とやらいふ田舎客めがきたない奴。六百兩で暇くれい暖かに。千兩の小判耳が缺けてもならぬ。定めて今日は此の客が見物に紛れて。逢ひに來る手管があると推量し。あれあの鼻の先の數寄屋へ病人めを打込んで置く。皆見舞に行く事無用。禿め等局の奴等でも。白妙に水でも喰はしたら棒縛り。新造の横笛め浪人の娘とやらぬかして。賴もしだてすると聞く。地數寄屋の側へも寄つたらば。縛り始めに括し上げてくれるといへ。客が大事いけ〳〵と。始めの笑顔引替へ。忽ちに閻魔顔フシ面を破替る如くなり。地奥州ちつとも怖氣なく。

詞こりや旦那さんとも覺えぬ。お客から千兩出る程なれば。私等が何の口たゝきやしよ。餘りそれは情ない。慘うござんす旦那さん。何この長を情知らぬ慘いとな。扨は客に頼まれくるに成つて訴訟か。六百兩に付けるを千兩といふ身どもより。慘いといふは客の事。知るまいと思ふか。白妙めは其の客の子を孕んでけつかる。見すへ我が子を持ちごもつて死ぬるを見捨て。まあ四百兩惜む物知らず。是が慘うあるまいか。妥を引張つて千兩取るか。但し千兩損するか。妥らを氣強うかゝらねば傾城屋はならぬ。一人に情かくれば跡々の例になる。地情知らぬ親方と拗ねはたばつて勤め粗末にする奴等。棒の先で勤めさしよ。言ふな默れと睥めつくれば。詞なんぼ默れとあつても此の長門は默らぬ。千兩の損得は白妙殿一人の上。私始め數多の女郎。アヽ忝い頼もしい慈悲な親方と思へば。心健しう一人の客も取り外さず。內の爲になるやうにと身を忘れて勤める。ほんにいふぢやなけれど能の囃子のと榮耀榮華に誇つて。朝晩王樣の上がるやうな。二の膳三の膳酢いの甘いのは誰がいはす。ヤア旦那さん。總々の女郎の心が反れたら。五千兩や七千兩の損か見たい迄。その斷が三間程横町へ飛びやんしよ。地ヤア旦那さんとぞせりかけらる。地どいつもへ憎い奴。詞女郎のお蔭で榮耀するとは。世界中の亡八屋に。せめて長か三分一眞似る者が何處にある。持つて出た身の果報でする榮耀。地斷が三間程歪むか歪まぬか。是見よと立上り兩足にて蹴て蹴て蹴散らす本膳二の膳。刺身の鯉は煮物に躍り。練味噌かぶる牛蒡どろぼう。鯛のあへ物飯も汁も和雜膾。劍に置いたる フシ茗荷の程ぞ恐しき。地在り合ふ女郎わつとばかりに逃げんとす。詞こりや一人も動くな。遣手ども男ども繩もて來い棒もて來い。頭取は長門めと。地小柄摑んで引寄する。一子太四郎鼓片手に素襖袴。アヽこれへ舞臺へ聞えると走り出で。先づ御堪忍へと捥ぎ放し。きつと睥めつけこれ女郎ども。詞なぜ御機嫌を損ふ。面々の御客を捨て白妙が妥へ出る事か。重ねてぐつともいうたらば此の太四郎が堪忍せぬ。慮外ながら親父樣も親父樣。今日は歷々方の集り。家內にての我が儘に點打つ人はあるまじと思ふは我が身一分の理。世間の人が許さぬ。其の證據御覽なされ。只今我等此の鼓を調べしに。御存じの折居の胴。打つて見ればほとへと桶の底を叩くやうなり。肝を潰し革を外せば何者の仕業にか。胴の中にお前の惡事。一家の惡口を料理の獻立能の番附。二通に書いて入れ置きし。エヽ地無念千萬此の如く。後指をさゝるゝとは知らなんだ。一分が廢つた。讀むも淚が零るれど。詞これお聞きなされ料理獻立。お汁世上の人を淡味噌。自慢くさい葱。面の皮牛蒡二つに切り鯛。明日御めし。煮物は傾城打擲の棒鱈。燒物は取沙汰魴鮄。人間の葛醬油かけ

て。驕る者久しからづけの香の物。引れて嫁菜。さるほう。はち蠟の吸物。抱への女郎伊丹の諸白。エヽ口惜しい皆迄まだ〳〵讀まれぬ。是また能の番附。大きな(翁)千歳さん〴〵そう。脇能身の程白髭。八島のくづれ。諸道具のけばの梅。兩の手に鐵輪。世間で善知鳥。親子籠太鼓。跡は天鼓微塵。聞かつしやれたか親父様。親子の耳へ入るからは國中は一杯。地なんと恥を雪がうぞ。エヽ〳〵口惜しい無念やと。寸々に引裂き。疊に打付け〳〵てスヱテどうと坐り。泣き居たり。アヽ詞氣の小さい其の心で長が跡は繼がれまい。此の榮耀の叶はぬ奴等が皆猜んでいふ事。何年か此の方人の噂に乘る男。それ程身代殖ゑて來る。ひよつと人に譽められては跡の身持が難しい。いふ奴にはいはせて置け。地構はぬ〳〵おれ狂言が始つた。松風の用意せう。裝束ども持て來いと。怯む氣もなき氣の强さ。そも人間の皮一重下は恐ろし上皮は。先づ美

しき上﨟の面を。持たせて三重〽入りにけり。フシ妻に囁す。地松風の姿にも吹いて白妙が。身に浸み渡る病の床。誰わくらはに問ふ人の數寄屋といへど隙間なき。障子一重を開くるさへ。力なじみの彼の人の。顔見る事の叶はずば。せめてどうかと一言の便が聞いて死に度いと。知らぬ來世のフシ闇よりも涙。中有に迷ひけり。地人に心を置鼓、横笛が幼名を直に附けたる竹の名の。身は川竹とフシ成るためし。地衣裳の模樣は仕立口。着馴れぬ物を無理やり手が。歩き振にも非難いふ。人目を盗みわくせきとフシ急ぎにけらし。白妙が。病の枕に立寄りて。お目あいてかやと言ひければ。重たき目許にじろりと見て。ナウ横笛殿かいの。よい女郎に成つておぢやの。奇特に見舞うて下されし。見る目嗅ぐ鼻より恐ろしき親方の目を忍び。よく〳〵心にかゝればこそ。年もいかいでしをらしい嬉しうござんす忘れはせぬ。暇の事を傍輩衆が身に代への

訴訟。端々聞えて志の嬉しさと。親方の辛さとは如何なる世にか忘れうぞ。地吉様に逢ふ迄ちつと生き度い〳〵と。今朝迄も思ひしが物いふ事も力なく。此の胸の苦しさは大方今夜が往生。これ此方賴むぞや。詞此の抱いてゐる紋付は彼の人樣の形見の袷。棺に入れて下さんせ。地持ちこもりて死ぬる身の目を塞ぐと其の儘。井筒屋迄知らせて彼のお人の回向が。受け度いわいのとフシ打伏して泣く。涙さへ弱り行く。詞ヲヽそんな事氣遣ひせず。心慥かに持たしやんせ。私は常にも申す通り。嫁入する迄身を自墮落に持つなと。かゝ樣の遺言立つまいかと。それは〳〵悲しうて死なうやうにも存ぜしに。長門樣の才覺にて。此の度の水あげとやらいふ事を。彼の吉樣をお賴みゆゑ。私に帶も解かせず御主は閨をかへ床の側へも寄せ付かぬ樣になされし故。今日迄身を穢さず。親の遺言違へぬ。地此の御恩送りにはたとへ内へ漏れ聞え。つたづ

たに刻まれても。詞ちよつとなりとも生き世の中。逢はせましたさ能見物に紛らし。顔隠してあれ迄と。地言へば覺えず起直り。アヽ有難い忝い早う逢ひ度いどれどこに。あれ／＼あれにゐさんすと。這出づるをこれ申し。詞何おしやんすあれは庭の松の木。吉様ではないわいなと。地抱き止むれば。詞アヽ扨は目もはや眩んだか。地もう死ぬるに間はあるまい。死際の顔を見せ。嘆かし様が悲しかろ。私や又それが悲しいとスエテ又伏し沈む。ばかりなり。地横笛見る目もやる方なく。早う逢ひ度い見度いと心のせくは理ながら。あの入込みの人々の目を忍び。橋懸の椽の下より。泉水の際を廻らねばどうも爰へは參られず。物數言はず聲低に。お二人が顔ばかり見つ見らるゝを樂しみに。聲立てて下さんすな人が聞付け見付けては。吉様は大事のお身後の詮議が喧しし。必ず靜かに／＼と囁く中に笛鼓。あれ能が始まる此の紛れに。首尾して連れましてやと行く振は。長地いつの間にやら里馴れてしやんとかい取る飛石の。三つ地五つ地一聲のナヲリ音に紛らす忍路や。ハルフシ忍び男の。忍び風。頭の上は橋懸。謠ふ謠の松風に。ギン身は村雨と袖ひぢて小オクリ涙に。絞る頬被。鼓も耳にびく／＼と。秋風越ゆるは須磨の關フシ越すに越されぬ金の關。地盗みせぬ身も盗人の。忍ぶに似たる篠竹の枝折戸に佇めば。白妙待兼ねナウ吉様かいのと起きるにも腰立たず。立上れども足立たず。男も垣に取付いて聲を忍べば抱き合ひ。心を中に通はせて年を隔ての天の河。涙を淵とせきかくるフシ稀の逢瀬ぞ哀れなる。地白妙やう／＼椽際迄這出でて。ま一度逢ひ度い／＼と思ふ念が届いて。嬉しう往生しますれば思ひ置く事なけれども。大事の子を身に宿し浮世に殘し置きもせず。未來へ連れて行くわいのと。スエテ又さめ／＼と泣きれば。ヲヽそれも前世の約束。引手數多の身なれば面々の果報により。大名貴人の北の方とも成るべき人。思へば此の吉は其方の出世の妨。あれあの謠を聞きや。ワタと身にも及ばぬ戀をさへ。すまの餘りに罪深しとはフシ我が事よ。地此の下に襲ねしは二人寢し夜の其方の寢衣。形見に肌を放さぬぞや。ナウ我とても同じ事。過ぎにし事を思ひ出せばなつかしや。三歳は爰で馴染をかけ。何事も皆夢と成る。此の形見の紋付ばかりはフシ殘れども。遣同音是を見る度に。いや増しの思ひ草葉末にむすぶ露の間も。忘られればこそ味氣なや形見こそ今は仇なれ是なくは。忘るゝ隙もありなんと地〽あれ謠にうたふも理。一日も夫婦とて世に住むかひのあるにこそ。忘れ形見何にせうぞいの謠同音捨てても置かれず取れば俤に立ちまさり。起臥わかで枕より。跡より戀のせめ來れば。詮方涙に伏し沈む事ぞ悲しきフシ〽折も折なる松風の謠が泣かす二人が中。横笛内へ立廻り。詞いとしや側へ寄り度いかまだ五段の舞がある。地

此の間にちよつと戸を明くれば。吉助前後の辨へなく。是はとばかり走入り抱付けば抱締めて。語る事ない言ふ事ない。極樂でも地獄でもついて往き度いばつかりぞ。エヽ添うござんすと。互の肩に互の顔。打ちもたれ合ひ フシ咽せ返り泣く。忍音に横笛も。つねて。袖をぞ絞りける。地男やうやう涙を押へ疊を叩いて。詞エヽ心に任せぬ成れば成り行く身の果かな。とても死ぬるに極らば。一日でも一夜でも身が手へ引取り往生させ。今生の名殘に人前も醜體も手にかけんと。思ふ心一筋に。六百兩と言ひかけしに。無得心の長めに足許見られ。千兩なくては暇くれまいと言ひ募つて埒明けず。吉助が子を懷妊すれば本妻同然。僅か四百兩惜んで。廓の中で持ごもりに殺した。穢い奴と。人でなしの長めに蔑まるゝ此の無念。地身を切裂いても晴れやらず。ごくに立たぬ身の上噺。語つて益なき事ながら。詞我が親迄は人に知られし名ある武士。仔細あつて浪人し。我五歳の時西國今の親の養子となり。氏を變へ商賣を捨て。算盤秤を取りしより。地生みの親とは音信不通住所も知らぬはましして生死の便も聞かず。今の親は商人の一錢をあだにせず。手代どもの算用嚴しくて。詞金銀は我が物ながら水の月。目に見るばかり手に取られず。されども指いた一腰は實父の讓り。大國二箇國三箇國の價ともなる名劍。實は身の指合代なして。其方が身の代と方々主を尋ぬるに。ナウ是非もなや。我が冥加に盡きたるか。千兩とも萬兩とも限り知れぬ此の太刀を。漸う三百兩五百兩。六百兩より上に直を付くる者なければ。地神を恨み佛を恨み。唐高麗へも賣られず。詮方更にあらばこそ。むざ〳〵と廓の中で身を果さす。ふがひなき男持つたよな。今の恨みは此の太刀我が腹に突立てば。人の命は取るべきが。白妙といふ女の身一つを助けぬ物。實とは誰が名付けしぞ竹の篦には劣りしと。柄を叩き鍔を打ちかつぱと伏して泣きければ。白妙も手を合せ餘り冥加恐ろし。數ならぬ此の身の為重代の寶を散そとは。左程私が可愛いか。因果な者に馴れ染めて苦勞させますおいとしやと。二人が繰言 フシ悔みごと盡きせぬ。涙ぞ道理なる。地側に聞きゐる横笛涙に沈む顏振上げ。あれはや能の切果てると其の儘衣裳脫ぎに。あれからは一日なり。咎められてはどちらの爲にもならぬぞや。チヽいつ迄も同じ事。今が末期の暇乞。さらばでござんす。來世で逢はう。さらばやとスヱテ立つて見居て見羽拔鳥。冥路の鳥も聲々に夢も跡なく夜も明けて村雨と聞きしも今朝見れば松風ばかりや殘るらん〳〵 地へ そりや果てた南無三寶始めの道は人立あり。樂屋からは猶ならず。ハアヽどこから戻しましよ。それ〳〵其處へ親方が裝束で。隱るゝだけは先づ奧へと。白妙が夜着の裾に押隱し。横笛上に打凭れ フシ障子はた〳〵さしこめたり。地

長は風折水干。後見お出入どや〳〵と。詞ハハア出來た〳〵。殊に舞の内我も木蔭にいざ立寄りての思ひ入れ。地息がはづむと大團扇煽ぐやら擦るやら。先づ面脱がせませ。汗を拭へと寄りたかる。長烏帽子被ながら。詞なんと松風出來たか。此の裝束で直に愛で自然居士をして見せうかの。脇の人買が櫓櫂を以つて散々に打つ。ウタと身には縄目には綿の襷をはめ泣けども聲の出でばこそといふ所を面白うして見せう。地男ども樫の木の棒持て來いやいと呼ばはれば。常の氣知りて下人ども。フシ一言と呼ばれず走り來る。詞只今揚幕入りさまに。面の内からちらりと見た。病人めが居る數寄屋へ。何者か這込んで。障子をさすを見付けた。あれ捜して引きずり出せ早う〳〵。用捨せば共に片端喰はすぞ。はつちや怖しと會釋もせず。障子を明くれば横笛が。身を縛はしてゐる所を。旦那の御意ぢやと荒氣なく人のもてなす花盛り。花霞幕に引出す。肺の臟強き大音にて。詞こりやびりめ。此の長が日頃の手並知りながら。今から野太い根性さけ。後には己れ何になる。病人めに何用あつて誰に頼まれた。地サアぬかさぬかと振上げて。一二三十めつた打ち起直ればはたと打ち。居直れば丁ど打ち。髪も頭も分かなく。簪笄打折れて鼈甲飛んで亂れ髪。フシ骨も散るかと哀れなり。地横笛穿も涙にくれ。詞白妙樣へ見舞うたは誰にも頼まれませぬ。餘り見る目もいとしさ故。今死ぬるお人にちよつと見舞に行つたとて。科緩怠に成るならば。殺しなりとどうなりと餘りな旦那殿と。地言はせも敢ずうぬが口から賤呼ばり。詞それ眞裸にして庭の松へ括し上げい。地はつといふより情なく帶引解けば一家の女郎。それ程の科もない人を。こりや餘りな旦那さん。新造は撲たさぬと駈寄る所を棒横たへ。詞一つ穴の狐どもと十方滅方撲ち廻せば。地撲たれて左右なく寄り付かず横笛骨も碎くるばかり。弱る心を取直し。詞ナウ傍輩さん達怪我して下さんすな。わしが事は構はずと置いて下さんせ。これ殿といふた腹立に。恥かしい裸にして縛りやつたの。なんぼでも言ひ止まぬ。旦那殿どの〳〵どの。地エヽ情ない死なしやつた母樣ならで。友達にも見せぬ女子の肌を口惜しい。此のよな姿は地獄の繪に見たばかり。詞鬼め童子め茨木童子め。地白妙さんと此の横笛が妄念が。其方の身に報はうと。涙交りの雜言は フシ人の泣くより哀れなり。詞エヽにつくい奴め。それ男ども臺所の大根一本持て來いと。地又五つ六つ續け打ち打たれて雪の裸身も。フシ消え〳〵とこそ成りにけれ。詞申し旦那樣此の大根何になされます。何になさるゝとはそれ捻ち込め。此の大きな物どこへ捻ち込みましよ。頓けた叩く口へ捻ち込め。詞畏つたと口押割らんとする所へ。數寄屋の障子蹴破つて吉助堪らず飛んで出で。大根取つて下部が面はたと打ち。横笛が縛捻ち

切れば。半死半生これ傍輩達。勝手へ連れて看病あれと取つて押退け。長が前にどうど坐し。詞こりや長。白妙と二世の契約せし。西國の吉助といふ男。白妙が病氣見舞ふが科ならば。横笛よりも先づ此の男打殺して腹を癒よ。サア撲て撲たぬか。長地忍ろしいかなぜ撲せぬと責めかくれば。詞ヲヲ己れとても商ひ物に忍び逢ふからは盗人よ。此の長が撲ち兼ねうか。サア腰の刄物を渡せ。ムウ此の刄物が怖さに得打たぬな。ヤイ此の刀はちつと由緒あつて。うぬらが如き根性の穢れた。犬同然の奴に抜く刀ぢやない。氣遣ひせすとも寄つてぶて。但し怖いか。地なんの怖いと打つてかゝる棒の先。しかと取つて拂ひのけ。つつと入つてかつぎ上げ大の法師を蜻蛉返。ぎやつとのめらせ馬乘りに。どうと跨り握拳に息吹きかけ。七つ八つ十二三。フシ頭も砕けと搦廻す。地一子太四郎飛んで出で。そりや親父樣投げた打殺せ大事ない。まつかせと立ちかかり

家内が寄つて棒すくめ。フシやう／＼長を引退くる。地吉助は只一人取付けば捥ぎ放し。頬がまち椽がまち。腕骨腕木障子の腰骨。肩膝足の踏みどなく。誰が撲つやら喰はすやら棒に別ちは。なかりけり。地足は立たす目はくるめく。衣類も裂かれ髮亂れ。心ばかりの亂れねば己れいつかに傾城屋の法なればとて。掏兒強盗を打つ如く。よつく恥を與へしな。我が親の世なりせば。一獄門にかくる奴なれど。詞町人のあさましさ女郎屋へ忍び込んだる誤なれば。地エエ此の儘毆き殺さるゝ。ヤレ白妙死出三途を連れ立たんと。廊下傳ひの欄干を。力に取付きたぢ／＼たぢ。這上つてはよろ／＼よろ。オクリよろぼひ。／＼歩み付き。數寄屋に入つてヤア白妙ははや息絶えしか。先立ちしかといふ聲に。家内はつと驚く折柄。遣手の龜が慌しく。詞ナウ新造の横笛樣が剃刀で自害して。まだ死に切らねど深疵。かう申す内も危しと色を違へて言ひければ。

地さしも野太きひらぎの長。フシぎよつとしてこそ見えにけり。

第　五

地〽かゝる所に北白河の廣文。親子夫婦在所の者。加藤兵衛伴ひつか／＼と入つて。詞なうなう長殿先程より。公用に就いて御意得る如く。度々申し入るれども取合はれず。當春我等が賣りし横笛取戻して。本親へきつと渡すべしとの上意に候へども。其の時の五十貫今更一錢なければ。取戻さん力なき故。此の琴柱と申す我等が娘を代りに取り。横笛を此の親父加藤兵衛殿へ渡してたべ。地其のため所の庄屋組中。同道致すと述べければ。詞長不興顔にて。ムヽ此方が横笛が父御か。此の方商賣の作法で。元銀に十倍増しても取戻すの代りのといふ事致さねども。そこは身が料簡してやらうが。其方の娘はたつた今自害して。十死一生。それとても換へたくば此の方は換へ得相手同士の詰開き／＼。地加藤兵衛はつと

ばかりに氣も狂亂。詞いやさ命あつての詰開き。死なぬ内先づ會はされよとせきければ。地遺手ども口々に。其の身も父御のお出と聞き逢ひたい望み。只今是へと手負を閨の床ながら。そろ〳〵舁いて出づる體。父は目もくれ走り寄り。ヤレ横笛父なるわと朱の血汐に抱付き。手足を廣げ身を撫でて。疵もとつくと見屆け自害の疵より棒の跡。死したる母が美しう。生み付けたる肌を空所なく撲たれしは。自害せずとも死ぬべきに是を無念の自害かや。寧そ毆き殺されば。敵を取つて腹癒んもの。可愛や逸まつて思ひをかけてくれるかと。人目も恥ぢず フシ聲を上げ伏沈み。てぞ泣きゐたる。地横笛父の手を取つて。ナウ撲ちたゝかるるは常の事。今死ぬる病人さへ憎い辛い親方な れば。我一人無念なと思ふでは。フシなけれども。流を立てて母様の遺言背く悲しさに。あらぬ歎きをかけますと父を見上げ見下して。泣聲もはや息切れして最期。近くぞ見えにける。地廣文が娘側に寄つて涙を押へ。おいとしや皆我が親の所爲故。此の春よりの憂さ辛さ御身の上を思遣り。自らが代りに殘り御身を戻さんと。是迄は參りしに敢ない死を遊ばす。詞なう父上たとへ此の身が代らぬとて。あのお方の最期を見てすごすごとは歸られまじ。家を出づるより覺悟ぞや。我を庇ひ給ふなとさも潔き言葉の末。地チヽ出來いた〳〵と取つて引寄せ刺通さんとする所を。母暫くと押止

め。人の子殺して我が子を助けうではなけれども。世には療治もある事。此の子殺して若しあの子の本復あるならば。こちの娘は誰が生んで返さうぞ。なう横笛様。地助かるも死ぬるも一人と思へど二人の命。氣を慥かに持つてたべ。看病してたべ人々とスヱテ悶えこがれ泣きけれども。地女郎遣手も哀れさに。どこぞでは此の家に大きな事が。出けう〳〵と思うたと。フシ袖を絞らぬ者はなし。地今を最期の横笛。なう父上必ずあの子を助けてたべ。是のみ黄泉の障りぞや。わしや來世で母様に久しうて逢ふが嬉しい。南無阿彌陀の一聲も眠れる如く息絶えたり。加藤は死骸に抱き付きスヱテ前後不覺に取亂す。地廣文娘を引寄せ既にかうよと見えける所。加藤あわてて抱き取りいかな〳〵思ひも寄らず。詞不便の娘が只今の遺言。父母の遺言より默止されず。此の子を某申し請け名を横笛と呼ぶからは。我が子が再び蘇つたる同然。地我が子に指もさゝせぬと。猶だきしめて放さねば。夫婦あつとフシ悦び涙。地廣文何とか思ひけん胸押寛げ抜いたる刀。腹にぐつと突立て脊骨をかけて引廻す。人々是は狂氣かと驚き騒げば。詞アヽ騒ぐまい〳〵と押鎮め。ナウ加藤殿。我も昔は弓矢打物取つて。誰に劣らぬ身なりしが。主君の諫言耳に逆ひ。勘氣を受けて此の態。若かりし時忍び妻の腹に男子一人儲けしを。商人の養子となし。其の後此の娘一人は持ちたれど

も年寄るに従ひ、世に力なく便りなく。兄めを他人にくれすば弓矢の家を興し。老の樂み浪人の憂き目は見まじいもの。惜しや悔しや子程の寶は無きものと、我が身の上は見ゆれども、人の上には盲同然、地洛中變化蔓つて夜な／＼人を失ふ由。これ幸の紛れにもいと、思ひ初めたる一念が。地獄の道の門出なり。詞なう加藤殿其の子が素性もきたなからす。平家の大將常陸介安盛が執權、八郎權の頭秀國とは我が事よと、地いふ聲に言葉覺えず、馬下を飛んで出でなう父上か、我こそ商人の養子となりし、本名は右馬之允と縋り付けば、寄るまい／＼。詞子ではない右馬之允といふ子は持たぬと。地眸めつけられて聲をあげ子でないとは情なや。詞御無沙汰の不孝は御免あれ、何僞りを申すべき。紅葉狩の此の太刀を證據にて。地親よと子よと只一言御詞を、頼み奉るとスエテどうと伏して泣きければ。ヲヽ詞太刀に傷なければとて親子とは何事ぞ。五つより其の年迄人と成りしは誰が養育。地玄冬素雪の寒き夜、九夏三伏の暑き日に老いたる親を養ふより。子には心の碎かるゝ。その憂き苦勞を人にかけ。まんまと育て上げさせ、誰の親よ實子よと親しみ寄り、養ひ親の心に滿足せうか。何と嬉しかるべきか。飛びしさ

た子ではない、詞なう加藤殿、とてもの事に此の母も其の子が乳母となしてたべ。これ兩人。加藤殿へ恩を重み我を親と思ふな云。一遍の念佛も親と思はば受けまじきぞ。他人と思ひ回向せよ。一日の精進も養ひ親への無證なり。涙一滴零しなば七生迄の恨みなり。地お暇申す加藤殿横笛殿さらばやと。刀を抜けば紅の。紅葉における秋の霜っ、消えて果敢なく成りにけり。地女房娘右馬之允遺言重んじ泣かぬ顏。加藤兵衛所の者前代未聞の義士貞女。死骸どもは跡より母横笛は先へ歸れといひければ。長大聲あけどこへ／＼。詞横笛が代りにて名も横笛と呼ぶからは。そのまゝこつちの抱への內。手形の通り勤めさす。暇が欲しくば五十貫に廿割增し千貫目積め。男ども横笛をとめ、地親兄弟樣すくめにして追出せ、鼓き出せといふ所に俄に表騷がしく見世も格子も打割るばかり。我国の今時眞先に貞光季武渡部保昌、山伏出立に込入つて。上意々々と金剛杖ぶち伏せ／＼。詞誰かある親子共にあれ捕れ。地承ると加藤兵衛吉助踏付け／＼縛り付けて引据ゆる。渡邊の綱進み出で。詞やい長承れ。己れが奉公人の抱へやう人買同然の仕方、其の上折檻嚴しく傍闇をまなび。殊には甑々の町人さへ。愼む程なる驕身の程知らず世を憚ら

ぬ我が儘。其の外數箇條の罪科、とつくに召捕らるべき所酒呑童子退治に弓箭の御用。繁多の間宥免せられしなり。童子島々退治あり御歸洛の道より直に。我々御を蒙りたいと言ひ渡す。地比時奧に出でし女郎せぶつて摑み取つた一歩小判の金が詞。地覺えたかとこんと喰はす頭の鉢。ゝあたりも響くばかりなり。地長頭を下げ一々誤り奉る。世上の人も聞き捨へ驕る者久しからず。我人に辛れければ人亦我に辛しと。口にはいへど心に知らず。かう炎難の來る時知めて悔むにかひもなし。地重罪は我一人あの悴助けトされと、シ涙に沈むぞ心地よき。地鬼鬼は都の御沙汰ぞと警固嚴しく引立つる。酒呑童子茨木童子、退治あるも世の爲め、政道正しく嚴そには朝參院參お振舞。ギン京近國の悦びたる。賑ひたるに酒樹にだいだいの。御代こそめでたけれ

酒呑童子

博多小女郎波枕

近松門左衛門作

上之巻

歌 船を出しやらば。夜深に出しやれ。帆影見るさへ氣にかかる。フシ長門の秋の。夕暮は歌に詠むてふ門司が關。下の關とも名に高き西國一の大湊。北に朝鮮釜山海。西に長崎薩摩潟唐和蘭の代物を。朝な夕なに引受けて千艘出つれば入舟も。日に千貫目萬貫目。小判走れば銀が飛ぶ。フシ金色世界も斯くやらん。地沖に何待つ檜垣造り十四五反の廻船に。船頭舟子は褞袍着て足踏延す舵枕。四五人の乘衆ども櫓の上につゝくつく。そよと波音船影に。心を付ける蚤取り眼物案じ顔も頬すいたる。中に頭の毛剃九右衛門。生れは長崎國訛り。詞コリヤ汝達。また市五郎三藏が舟は見えいろ。心許なかばい。心たまきりや夜さとくなつて。身だまんじりともせない。首尾よからうば筑前過へ此の舟廻し。博多のしやう〱て上方さなへ突走る。表の間借切つた上唐人。船頭が聞く筑前近乘せなけりやたらぬといふ。仕果せにや筑前へはゆかぬ船門出よか〱。よか便聞かうばい。表の乘衆呼うでわたい咄どもして紛らさん。地あつと答へて平左衛門呼びにおるれば其の跡は。鬼とも組むべき男ども擂片取つて敷かすやら。茶出しに唐茶摘み込む。注出す色は薄けれど頭を頭と敬ひし。禮儀ぞ仲間のフシ花香なる。地表の乘衆小町屋惣七生得都育ち。呼ばれて櫓に踊膝し。詞船頭贔屓に押付けての便船。御遠慮なくとも御挨拶申す筈。無禮御免と手を突けば。ア、堅い〱。同船致し一つ釜の食事喰べるは一門同然。サア御手上げられ。此の五人は我等が仲間。他事ない咄し明かす中。近付になつてお咄しなされ。斯う申す某は長崎者。九右衛門と申してこつと致いた唐商賣。是は同國の平次と申す仁。次は上方小倉屋傳右難波屋仁左。其許呼びに參つたは。阿波の德島平左衛門と申して髮月代致さる。船中の事缺き心措かずとお賴みなされ。して其許は何處何方。我等は生國長崎。作の時分親に連れて生れ所を引越し京住居。父が名は小松屋惣左衛門。同名惣七と申す者。賣買のため筑前へは毎年の下上り。どなたも船中平くわい御免。地よいお近付き求めしと禮儀仕舞へば膝崩れ。詞直せば暫時間はや千年の馴染程。心解けたる朝霜の。フシ奥底もなくなりにける。詞九右衛門顏色打ち付けて。詞船中の淋しさ物語り稀伽になる物はない。俺どもが二十七の年。薩摩者と喧嘩した咄。騷ちやなかはん聞かつしやれ。九月の七日九日は氏神

の祭。本踊りいろ唐子踊いろ。見事なことばん。本興善町といふ所で石御器に二三杯。肝の束へ諸白を引かけた薩摩二歳。肥滿男であつたばん。諏訪へ踊見がい行く行違ひに。長か赤鰯の小鐺が此方の。俺どもが脇腹さなへ當るが最期。引撮んで壁へかいなすらうと思ふて。小尻を逆手にやつくるり。それは〳〵見事な事であつたがなう。他國者に投げられては國へ歸つても成敗。死ぬる命は何處でも一つと。二尺八寸ひき拔いた。コリヤン。ほたゆるなと又引擔いて投げたがの。角のある溝石でくさ。頭の顱骨が粉々微塵に打割れた。ヲ舟では割れたといふは忌々しい。頭の顱骨が走つた〳〵。血が走るいろ涙が出るいろ。頭抱へて雇人に擔はれ。小宿さなへ往んだがの。今で思へば無慚らしげに。其樣にせでも大事なかたん。上方衆は氣がよかけん。此樣な事は地あるまいと。仕形交りの高咄 フシ皆安閑と聞きゐたる。詞サア 詞京のお客お咄しなされ。次第々々に所望せん。上方は色所定めて深い譯があろ。地お咄しあれと口々に乗すれば乗つてされば〳〵。詞親惣左衛門吟味強く。京大阪では鐚半文我が物で我が儘ならず。毎年の筑前通ひ幸に柳町の小女郎とは。抑より互に逆上り。是非當年は請出して。女房に持たるゝ合點持つ約束と。半分聞いてア、おつしやるな聞く迄ない。我等も博多へ參る者此の一座五人が。小女郎殿の身請の幇間。地大盡くわつとおはづみと毛剃が起きて膝立つれば。よう〳〵身請の大盡樣こりや誰が大盡ぞ。小女郎樣の大盡と一座がはらりと取廻し。座興も過ぎればむつとして。嬲るか但し侮るかと。心くる〳〵喘たぐる胸を押へて。ゐへんゐへん。今朝から風引き頭痛致す。跡の咄は後刻々々。何方も是にと挨拶し。思ひ惱みつ立煩ひ漸う フシ下へ這下るゝ。地身請する程內證が暖かで。風引いたとは何處やら足らぬ和郎さうなと。惡口苦口小倉口より。波押切つて來る早船此の船目當の一文字。眞黒になつて フシ漕付けたり。地九右衛門初め立騷ぎ。詞ヤア三藏市五郎。首尾は〳〵。近年の拍子よく。荷物受取金渡し彼方も機嫌此方も仕合。荷數手形に引合せ渡しませうと聞く嬉しさ。船頭起きよ。地舟子も來い荷物請取れまつかせと。心も勇む虎の皮百五枚。仕合せすれば氣の藥。海老手の人蔘五箱で三十斤。仕損ずるは手廻しの緞子七種二百本。船から船へ移しの麝香四十臍。何と遠見に見付けられはせなんだか。けもない事いはしや縞絽が十五箱。さりながら五紗綾の繻子が十二丸。世話入つた漆七桶。運の强いは一昨日の夜の月影。照のよい龍甲百斤。地まつ斯う仕濟し歸りました。天地の惠み明星程な珊瑚珠が八十粒。手形の表是迄渡しました。此の一通は來夏舟の割符。迎船にお出でなされとの言傳と。地渡せば取つて押戴き。手柄功名休みめされ。二人の衆にも酒おませ。詞お目出度いお頭

様。御褒美をしつかりと。地御酒も祝うて下されうと。オクリ皆本〳〵船に フシ乗移る。地九右衛門相仕等招き寄せ。小聲になつて何れも見ずや。詞荷物を船へ積む折から乗合の京の奴。垣立より顔差出し。合點行かぬと思ふ面相。生けて置いたら傾げた叩き。後日の難儀見る樣な。切殺しては大事の門出血を見るが忌々しい。縊殺して海へ投たり込め。地下人奴もありさうな油斷するなまつかせこんだ。皆の衆抜るな心得たと。鉢巻褌尻褰げ。腕骨試し力試し。合の舳際を小楯にて時分を窺へサア來いと。櫓下るゐも忍び足。處は沖津汐風の外は一味の船の中。聞く人もなし見る人なし。人は知らじと思ふこそ。フシ結句身の上知らずなり。地下人が喚くまつかせ聲。櫓の上へ躍り上るを追續いて。彌平次傳右衛門二人が中に取巻いて。宙に指上げ是わいなと。投り込む波の哀れや下人 フシ底の水屑となりにける。地サア一人はしてやつた。詞惣七奴が見えぬ探せ〳〵。地コリヤ〳〵爰に傳馬込にといふ聲に。惣七水棹追取つて狂ひ出で。詞ヤア海賊奴等。樣子一々見屆けた。地死ぬるとも一人死なうかとそつぼう滅法打立つる。後へ廻つて市五郎。隙を窺ひ攫付けば取つて投げ。投げられながら足首をしつかと取り。眞逆樣にずでんどう。〳〵と響く波音に捲りかけ。大勢かゝつてだんぼらほ。邊も知れぬ海の中眞逆樣に打込んで。詞サア仕濟した目出度いと笑ふ聲。地惣七はつと心付き見れば傳馬の中々に。物音せば惡からんと、纜解いて櫓を押立て。惡魚毒蛇の口よりも遁れ難き場を遁れ。一反ばかり漕出で〳〵。ヲヽ皆々骨折々々。詞惣七是からお禮申す。地此の返報は重ねてと。心急けばゐいさつさ。ゐいや運は傳馬にあり。押すや櫓腕の續くだけ命。限りと 三重

いひきにて。〳〵。すいちやゐんちや。すはひすふいてう。ひいたらこまいみさいはんや。さんそ。うわうわう〳〵 詞アヽおきや〳〵。なう欲市殿其の拍子では踊られぬ。錢太鼓の三味線知らずば知らぬと頭からいうたが好い。長崎の伊左衛門樣ゝとは違うたもの。もう踊らぬぞや。それで藝が上るものか。三味線彈き止むまでサア〳〵踊りやといひければ。なんぼでも踊らぬ。三味線やめて此方も石碓か蹴ひかしやれ。何ぢや蹴ひけ。盲目と思ひ侮るな。地目二つ持つた汝等に。いで物見せんと三味線振上げ フシ聲をあてどに追廻す。地亭主奥田屋四郎左衛門臺所から立出で。詞こりや何ぢや欲市。嗜め大人氣ない。禿どもも跪いたら遣手に告けて叱らすぞ。ヤイ重之丞。今日は小女郎樣の母御の十三年忌。追善のため身揚りして。小女郎樣は奥の間に經念佛してござるでないか。附いて居る太夫樣の親御の事。線香でも立てうと思ふ氣はなうて。盲目相手に何事ぢや。否々妾ども二人錢太鼓稽古して居たりや。欲市の三味線で

邪魔しやりんす。フシ其の錢太鼓が猶惡い。地物の稽古も時がある奥へ往て附いて居よ。二人ながらとつとと往け。詞コリヤ欲市。表の二階に宰府の源樣が來てござる見舞うたか。地やつちや一角せしめんと。人の巾着當にして。貰はぬ先の締結りフシ宰府の客へと取りに行く。百年經ねど。衰へは。今身の上に小松屋惣七。下の關の大難に命一つを拾ひ得て。長地博多へこがれ着きしかど身に附く物は手足より。他に何の當もなく。知邊の方へも身を恥ぢて訪ひ音信は絶えしかど。小女郎が情忘られずオクリ戀しき。風の吹立つる。本フシ柳町には來たれども。金銀なければ肩すぼり己れと心奥田屋の。門を覗いつ退いて見つ案じ佇み居る風情。内には乞食と尖り聲。詞餘り物は遣つて了うた通りや。フシ〳〵と慳貪なり。地扨ははや物貰ひと人目には見ゆるよな。成り果てたり仕なしたり。此の風俗で小女郎に逢ひたいといううたりとも聞入れじ。聞入れてから小女郎が恥。思ひ切つた顔見まいと立歸る後より。チヽ待ちや〳〵と重之丞。詞コレ今日は太夫さんの志の日に當り。施の一錢と差出しながらハア此の乞食は絹布を着てゐると。地顔差覗いてヤアお前は京の惣七さん。なう太夫さん惣七さんの乞食に成つてごんしたと。呼ばはれば搔伏つて逃ぐるを往なさぬ待たんせと。帶に縋つて止むる間に。家内も驚き駈け出づる小女郎は表に走り出で。笠かなぐつてほんにさうぢや嬉しやよう來て下んした。此の有樣はどうぞいのと。何の樣子もスヱテ聞かぬ先から泣く涙。詞コレ四郎左樣奥へ連れまして咄したうござんす。地如何にも〳〵お馴染の惣七樣。御用あらば御意なされと亭主が情に打連れて。オクリ入るより〳〵早く縋り付く。戀しゆかしはいはいでも知れた二人が中。此のお姿は親御樣の御勘氣でも受けての事か。樣子がなうては叶はぬ筈。お前の心に此の小女郎はまだ傾城ぢやと思うてか。此の身は廓に居るとても心は疾から女夫ぞや。肩裾結び手を引いて。人の戸口に縋るとも交はした詞違やせぬ。詞今日は母樣の十三年の命日。お前に逢うたは親達が。あの世から手を取つての引合せ。地女房健に暮したかと一口いふ事ならぬかと。眞實見ゆる涙の玉男もはら〳〵聲顫ひ。詞小女郎息災にあつたの。一年ぶりに顔を見て。よい姿も見せよい事も聞かす事か。聞いてたも。毎年の如く諸色を仕込んで下る所。下の關にて海賊船に乘合せ。家來は眼前海へ沈めさせ。我が命さへはふ〳〵の仕合にて此所まで逃げのび。商賣の荷物衣類は其の儘船に捨置き。肌に一錢貯へなければ二度に二つの下着を賣つて。今日迄の露の命を繋ぎしぞや。地此の度の下りには請出し。女房に持たんとの深き契約其の金銀も人手に渡し。詞を違へ望みを叶へぬ我が本意なさより和女が恨みん心の不便さに。言譯やら顔見にやら。見苦しき身も恥ぢす。

爰へ來て面目もなき物語と フシ涙に聲を曇らせり。地よう打明けて下んした。寶は湧物お命さへあるなれば。わしや嬉しうござんする。わたしが心でお前一人は如何なとなるおいとしや肌寒かろ。お顔がたんと細つたと。着ながら上着ふはと着せ フシ抱締めてこそ泣き居たる。地表に血氣の下男。大盡樣の御來臨と鳴り喚くヤレ人が來る此方へと。男の手を取り身を寄せてオクリ奥の〳〵一間に入りにける。地容は過ぎつる海賊ども。まつ先立つて毛剃九右衛門。彌平次傳右仁左平左。市五三藏サアござれと。引きずる雪駄の金にあかした衣裳つき。各さるぜ羅紗すためん。かるさいらんけん繻子天鵞絨。下着上着も渡り物。頭は日本胴は唐との襟堺。ちくら手くらの一夜檢校。終に目馴れぬ出立ちばえ。奥田屋に搖ぎ込み。座敷に居流れ毛剃が諸色受込んで。差配らしげに勿體顏。詞亭主薄々見知りがあらう。廓の縱横十文字。昨日迄端ぜせりした我々。俄分限は見らるゝ通り。今日からは太夫狂ひ。來る途次見て置いた一文字屋の江口。丸屋の勝山同じ家の薄雲。油屋操和泉屋小倉。車屋の大磯此の六人を請出して。是に居らるゝ人々の物言伽。詞明日迄待たぬ今日の中に首尾させい。地是は厳いと四郎左衛門飛んで出づるをやれ待て〳〵。亭主が留守では興がない。云付けて呼びにやれ。畏つたと硯引寄せ書附けて。呼びにやる足走書早う往て來いお吸物。大座敷も一つにせい。子供泣かすな女房どもに薬飲ませ。詞ヤ何ぢや花車が煩ふか。それ挾箱持つて來い。油斷召されな人蔘用ひて養生が第一。地持合せたはづまうと蓋押開き一包。一つ選の大人蔘一斤餘り投出し。詞四郎左子供は幾人ある。娘か一人男が二人ござります。ヲヽよい子持。小さけれども此の珊瑚珠。對て秤目が八匁二人の子に提げさしやれ。お娘が着る物に有合せた緞子三本繻子五本。此の紗綾縮緬裏に好からう。地綿の代迄相添へて。投出す擲出す頂くに亭主か フシ腕ぞ草臥れける。地四郎左衛門悄として。詞お禮より先つ肝が潰るゝ。何時の間に此の樣な地大分限者にお成りなされたと。問詰められて間に合ひ詞。詞きついか〳〵。江戸通ひ間緩く。佐夜の中山無間の鐘。撞當てた福々長者さりながら。此の鐘撞くには行法がむつかしい。長者經とて。寺に傳はる縁起の目錄聞かせたいと打笑へば。亭主横手を礑と打ち掃有難いお經。我等もちつとあやかる樣に。其のお經投げ下されとせがみ立てられ。地然らば聽聞仕れと何やら知らぬ懷帳。殊勝らしげに取出し吝い事の噓八百。長者經と擬へ聲張上げて讀みにけり。

長者經

地そも此の。無間の鐘の濫觴を尋ぬれば。天竺の大金持。月蓋と名に高き。さつても吝嗇い フシ長者あり。佛是に示さんため朝な〳〵の頭陀の行。鉢々も空耳潰し呟ところ。

すんともフシいはれぬ佛の方便にて。光はさながら。一歩小判の山吹色。金と見るより吝嗇長者。佛の箔を剝がさんと。欲から入るゝ手の內を釋迦の手管に仕掛けられ。惜しや悲しや南無阿彌陀佛。此の撞フシ鐘を建立す。されば穢い長者が心末世の今に止つて。先づ初夜の鐘を撞く時は。諸行無常に惜しやフシ〳〵と響くなり。後夜の鐘を撞く時は是生。滅法な事とフシ響くなり。晨朝の響きは。生滅滅多に入用知れず。フシ寂滅入らざる鐘の聲。一文惜しみの百八煩惱此の鐘の音を聞く人は。現世にては分限の金持未來にては。無間の釜煎り斷る。不思議の撞鐘を。疎かにフシ撞くべからず。扨行法の次第といつぱ絹も紬も着る事ならず。木綿蒲團も榮耀の至り荒菰引いて起臥の。フシ身は慣はしの奈良茶粥。精進潔齋菜入らず。晝夜にたつた二度の節季は尻褰げ。往來の中をちよこ〳〵走り。ちよこ〳〵〳〵〳〵脫けて。落ちてある物フシ只置くな。轉けても土をコハリ摑んで起きるは七つ起き。質を取らずば金貸すな欲しい物は買はぬが德。月夜に夜作はせぬが損。稼ぐに追付く貧はなし芥子を手にも割木の焚樣。必ず灰を取る事なかれ。捨てる物は何にもない。鍋の煤煙では細眉作り。楮の切は褒痺の妙藥。水なき井戸は梯子の入物。鼠の尾まで錐の鞘。ナホス指せ干せ傘。人に貸すなフシ鰹魚節。擂粉木擂鉢砥石臼藥研まで。目にこそ見えね貸す度に。フシ減らずに戾る例はなし。コハリさて其の外は愛嬌つき合ひ。始末貯蓄讀書算盤秤目の。上を見れば方圖がない我より下を手本として。右の條々ナホス守るに於ては微塵積つて山となり。長者の金言疑なし無間の鐘とは名ばかりにて。現世も未來も背かねば自然と榮ゆる福德緣起聽聞。あれと語りけり。地否とも應とも申されぬ。世界中が此の通りに身持つたら。私等が商賣はフシ取奧田屋とぞ笑ひける。地座敷の隔ては障子一重。彼方の騷ぎ〳〵と小女郎が身に應へアアある所にはある物かな。詞五人六人の太夫達請出さう。何遣ろ彼遣ろ是遣ろと地金銀財寶は塵埃。父樣や母樣の貧な暮しを見た時も。能はぬ金が欲しいとは夢程も思はずして。今日といふ今日あちらの身請が羨しく。妾や金が欲しうなりました。仕合せのよい人を。妬みは道でフシなけれども。如何な男ぞ顏見てやと。障子の隙よりさし覗き。ヤアありや妾が近付。まさかの時は心便りになりましよのと。力を付けてくれた人。金借つて來やせうと進出づるを引止め。詞近付は內證人も聞く。女郎の口から金貸してと身の恥は思はずか。恥を包むも事によるたつた今いうた事。來月は筑後の客が前の下りを月よ星よと待受けたりやこんな私を請出すと。出口の佐渡屋と薄約束。お首尾。人手に渡れば妾や生きて居ぬぞや。金借つたとて返せば恥にもならぬ事。地妾次第と振切れば遣るも淚行く淚。隱して座

敷へ繰歩み。毛剃が側へ坐ればばつと衣の香の。四邊の人はうろ〳〵と。顏を見合はす荒男俄に嗜む衣紋付。フシ鬼が花見る風情なり。詞毛剃さん久しいな。妾や此方樣へ無心に來た。此方に大きな葛藤が出來て。急に身請をして貰はねば。ならぬ首尾になりたれど肝腎の物がない。地かね〴〵の詞もある此方の才覺調ふまで妾が身請の成る程。金貸して下んせ賴みやするといひければ。詞日本一の粹樣金貸して下んせとはいひ憎い事。二言と聞かぬ。お前の用なら千兩でも萬兩でも。コリヤ亭主。小女郎樣も一所に身請け行きたい所へ遣りまする。地金は毛剃が飲込んだ。女郎方の見ゆる內。小女郎樣借りました。フシ飲めや謠へと騷ぎ立つ。地アヽ待たんせ〳〵あの障子のあちらに今いうた。大事の男が來て居さんす。連れて來て逢いはせます程に。詞毛剃さん。詞違へて下さんすな忝。男冥利商冥利虛言ござらぬ。地お供なされの詞にいそいそ立

歸る。太夫さん御出と呼ばはる聲。門から色の摑み取り勝山江口大磯に。寄來る波の大騷ぎ。座敷に一杯入込んで。薄雲さんみさを樣ン小倉さん。三人はお跡からそりやこそお敵と色めいて。毛剃が連ども現を拔かし。フシ顏に餘念はなかりけり。詞九右衞門聲かけコレ〳〵亭主。爰にはちつと用がある。妓樣方口の座敷へ。跡から見ゆる太夫方も爰へは無用。地おつと此方へ來給へと。亭主に連れて立廻る フシ女郎も田舍は穩當なり。地出るも如何出ぬも如何。小女郎に引かれて惣七は。障子押明け立出づる顏と顏。互に見合せヤア。詞小女郎が馴染の男。今思ひ出した其方が事な。地ヲヽ汝等に逢ひたかつた。ヤア人はないか此奴等は下の關の。跡いはせじと毛剃が連ども大聲上げ。頰桁きかすな打殺せと。獄立つる盃燗鍋の。轉けて疊にたぶ〳〵〳〵。濡れから起つた喧嘩さうな。大事にはなるまいかと上する女子下男。ちろつく顏も青ざ

めて フシ生きた心地はなかりけり。地毛剃一寸動きもせず。詞アヽ騷ぐまい〳〵。此の九右衞門が思案がある。彌平次。殘らず女郎衆の側へ行け。跡はおれが受取つた。いやさうでない我々が相手になる。親仁一人心許ない。ヤア此の毛剃ひけ取る男と思ふか。汝等が居れば喧しい。とつとゝ行けと睨め付くれば。そんなら行きます。地親仁次第と打連れて。オクリ表の。座敷へ出でにける。地小女郎は跡先知らす。惣七に引添うて二人の目許に氣を配る。詞コレ若い人惣七殿。此の中の事一言いうても物がないぞおつしやるな。此の方どもの商賣言はずとも見られた通り。何事も身が大事と思ふから。此の中のこと怺へさしやれ。いやといはしやりや事になるヤ。怺へさしやれ。小女郎を此方へ請出すと此方の詞が反古になり。小女郎も可愛や此方々々と心中を立通し。女郎の口から金貸せとまで恥を捨てゝの志。無にしてやらしやるはそり

やいかい邪慳。惡い事はいふまい此方の仲間へ這入らしやれ。小女郎も此方に添はせ。五十貫目や百貫目の金は取換へて。親御の息がかゝらずとも物の見事に取立てましよ。仲間が多うなる程此方は損なれど。運を力にする商賣運弱うては埒明かぬ。此の中の樣な場を遁れた命冥加な運强い此方。九右衞門が力になる人と見てコレ手を下る。地仲間へ入つて下されと詞はさけても居やひ腰。いやといはゞ切りかけんず フシ氣色面に見え透いたり。地惣七も手詰の返事仲間へ入れば家の大事命の仇。いやといへば小女郎を。人手に渡すのみならず命迄取らるゝ。何れの道にも死ぬる命國法をや愼むべき。小女郎にや添ふべきと。二つの心身一つに定め。かねてぞ居たりける。詞申しこれ惣七樣。あなたの商賣は知らぬが。駕籠に乘る人駕籠舁く人。地品は變れど行く道は同じ事。金も取換へ何から何迄世話やかうとの心入れ。お身に惡い事でもなし。あつというて仲間になり。早う妾と起臥を一所にしようとは思さぬか。お爲にならぬ筋ならばいやと返事をいひきらしやんせ。此方さんに添はれねば生きて居る小女郎ぢやない。女房にしなと殺しなと。いやかおうかゞ生死の。大事の返事でござんする。急く事はないぞゝと懷に手を差入れ。ヲヽ此の汗わいと。鼻紙ありたけ拭き捨てる。濡で破るゝ人の身の。フシ嗜み難き道ぞかし。惣七はつと打首肯き。詞得心致した只今より仲間になり御指圖は背くまい。承り及ぶ長崎には物の堅めに血酒飲むとや。地僞りでない惣七が心底。腕引いて誓を見せんと。片肌脱げばアヽ見えました〳〵。詞人にこそよれ何の此方に僞あらう。改めて盃事 地皆來い〳〵と フシ呼び集め。詞 小女郎殿嬉しかろ。亭主身請の惣代金何程ぞ。書付是にと差出す。追取つてさらりと讀み。小女郎殿共七人の。身請代金千四百五十兩な。端金があつてやかましい五十兩は亭主に遣る。千五百兩是受取れと。詞 一兩二兩の七百五十兩方目出たい仲間入り。皆兄弟より他事ないやうなされ謠へ〳〵。歌 おんらが在所はの。奧山のてゝうちの。でんぐり〳〵栗の木の。木の根を枕に轉寢。此の小女郎戀する山家の。品物で南無阿彌陀佛帶解いてこれ。ござれ抱いて轉寢。面白いぞと フシ樂みける。地町の夜番あわただしく。詞人をあやめ法を背いた科人が。此の廓へ入込んだと上の町から客改め。一人も客衆外へ出る事なりませぬ。地捕手の衆がはや爰へといひ捨てゝ。亭主を連れて駈出づる。動ぜぬ自慢の九右衞門始め。六七人がぐんにやり〳〵。俄に顏色茹菜の樣にしを〳〵と。コリヤ堪らぬ。どうぞ舟へ行く道は外にないか。金の出るには構はぬ。土の底へは這入られず。天へ昇る梯子はないか。隱蓑隱笠があら欲しやと。我が身一つを片付け フシ案て顫ひ居る。地惣七小女郎が手を取つて。門口に顏を配り固唾

を飲んで居る所に。内か隣りかぐわた〳〵〳〵。捕つた捕つたと喚く聲なう悲しやと一同に。腰を抜かして魂の フシ身に添うたるはなかりける。地亭主四郎左立歸りアア氣遣ひない〳〵。詞此の博多の殿町で。飛脚殺して金取つた奴。壁隣の揚屋で捕へた代官所へ引きました。地此方の事ではないないといへば一度に顏を見合せ。アヽ有難いヤレ忝い。可惜肝を潰したと溜息ほつとついたるは。世並の惡い疱瘡に フシ一番湯かけし如くなり。詞長居は無益惣七殿。京へ上ろサア〳〵皆々いなう〳〵。地女郎衆は駕籠で舟場まで。一口いうても八人が亭主さらばと立出つる。七人一度に身請とは。聞くも及ばぬ大々盡。詞お一人々々顏に書付け張付けたい。地ナウ磔刑と聞くもそゞ髪嫌や〳〵。お手前のお名が顯れう。顯れるは猶氣がかり。何にもいふなと出でて行く。男自慢は七人の鼻に。顯れ 三重

〽、市たて〻。地屋財家財の額賣捨賣に相場なし。屏風箪笥や長持。燭臺衣桁家具喰物椀に俎板佛前机や狩野の三幅對。表具ばかりも百貫に繪燈提灯。南京の八角か丸角を。露に見込みの中脇差。鍔も笄も揃ひ鑵子も。疊も上げて粗道具。筍の子の竹の細道具。ありとあらゆる物臭も疎ふ。値も値打ににやん兔。五分と フシ飛んで時鳥 フシ守本尊懸硯。鼠棄壺ら罷り出て。金になれとやハリ口々に付けて澁る〳〵 ナホス羅市に。町内騒ぎ 三重〽やかましゝ。地家主菱屋嘉右衛門與覺め顏にて馳來り。詞是は〳〵狼藉千萬何事ぢや。此の家は我等が貸家。主は小町屋惣七といふ。西國商人。夫婦連で十日ばかりの逗留で大阪へ下る。跡にはあの婆たつた一人。留守の事はお家主頼みますといひ置き。今日か明日は戻られう。お姥もお姥。留守居とは何の爲これ親父。先つ和御寮は誰なれば。よい年をして京の町の作法知らぬか。町所へも斷りなく。人の留守に踏込み疊迄賣拂ひ。捌きは何とする事。此の心淸町一町の束ねをする年寄。則ち家主うつかりと見て居よか。地姥も一所に詮議する隣りが町の會所。サア〳〵歩びやと喚けども。姥は涙に頭傾け親惣左衛門手を束ね。詞お家主と申しお年寄御尤々々我等は惣七奴が爺。小町屋惣左衛門と申して生國は長崎。二十ヶ年以來上方居住致せども。資本なければ商賣も捗取らず。地山科邊に逼塞致し。故郷力に惣七奴が西國通ひ致せども。仕合したとの便りもなく。どうかかうかと思ひ暮す折節。詞端々人の取沙汰小町屋の惣七は。西國で大きに儲け。博多の傾城請出し。心淸町に檜造り俯なしの見世を張り。風體は無人の暮しでも。内證の榮耀は千貫目持と。噂する程心得がたく。地夜前始めて尋ね參り沙汰に違はぬ内の諸道具。代物に積り致し。詞姥めに問うても委しき樣子は知らぬと申す。地爺も商人我等も七十八迄商ひで食べた者。胸迄

しの利なればとて儲けるには方圖がある。詞僅か十兩十五兩儲けてさへ吹聽して悦ばせた正直孝行な惣七奴。一人の親に隱すからはろくな銀とは存ぜぬ。後に募つてお町内お家主へも難儀をかけ。地其の身も人並の死をせぬ奴。今斯う致すも親の慈悲。邪の銀は身につかぬと申す事。骨身に泌みて思ひ知らせ。憂しほ踏んで正道の商に取付く心付けん爲。俄に道具屋へ走るやら古鐵買を呼ぶやら。心急いてお町内へ無禮。お家主へ付屆け申さぬは。眞平々々幾重にもお詫言。貸家札出して下されませ。お家は明けます〳〵ばかりにて。フシ下ぐるは金柑頭なり。詞御親父のいひ分承り屆けたさりながら。惣七殿には口合家請もある仁。後日の念に御親父の一札。留守居の姥も判を取る。サア地會所へ同道いざござれと門の戸はたと引き立てゝ。天の岩戸にあらねども爰にも紙の貸家札。殘らぬ千早古道具フシ明家とこそなりにけれ。フシ博多小女郎は。町風に。地馴れし夫の惣七が。色地あぶなき分限波の上何百里とも知らぬ火の心づくしを過ぎし身は。京大阪は隣にて フシ夫婦打連れ歸りしが。地暖簾はづし大戸を締めて。墨黑に貸家札こりやどうぢや。ハツ〳〵と云ふより詞なく。潜戸押明け入りたるに湯水を飮まん鍋釜も。疊もあけて閑古鳥。泣くにも泣かれず興さめ果て フシ口を。明いたるばかりなり。地惣七心は足の裏の瘡にこたゆる小笹原。實の子にどうと坐しければ。地小女郎せいてこれ申し。詞綴りとして居さんす所であるまい。懇にする家主殿。内儀樣と妾とも親しうて。先度下る時にも。土産に大阪の三好下駄頼むぞやとおしやんした。地それ程他事ない中で譯の惡い仕方。妾や屹度詰開かうと。走出づるをこれ〳〵〳〵。詞女子のいうて濟まぬ事貸家といふは名ばかり。破れ家を手前普請根太も追付け張る筈で。板も買置く。家賃といへば二ケ月三ケ月先へは遣れど滞らす。町義交際愚もなき身。地家財迄取られ姥が行方も知れぬは。如何でも下の沙汰でなし。方々に預置きし金銀荷物に就いての事か。何れの道でも命ある中一夜も爰では明かされず。エヽ是非に及ばぬ惣七が運も是迄。詞こりや女子ども男ども。見る通りの仕合力に叶はぬ。主從の緣も是限り。大阪の遣ひ餘り一歩細金少々あり。地三人寄つて分けて取れ暇を遣る。さらば〳〵金更紗の財布ともに投出せば。お笑止とも何ともお辭儀申すもお慮外。又の御緣と口上を。捻つて見れば手にさはる。一歩小判も八九兩。はつと寢耳に水臭き。半季一季の名殘なくオクリ連立ち表に出でにけり。地物音隣へ聞ゆれば姥が會所を拔けて來て。なうおとましや〳〵。詞昨日の晩から親父樣がお出でなされ。中々でもないこと。あさましい欲心に海賊の仲間に入り。道に違うた銀儲けを結構な事と思ひ居る。木の空に引張るゝは今の事。菜大根肩に置いて

も。正道な儲けは三文でも。身に付くといひ聞かせた詞反古にして。何で出來た屋財家財。地是が我が子の敵ぢやと。おいとしほや涙片手に道具屋集め。二足三文に賣捨て家も明けて其の上に。詞隣の會所で町衆の前に畏り。何やら斷りいうたり。地皆お前故の御苦勞と。スヱテ涙ぐめば涙ぐみ。詞これ姥掛硯に入置きし割符の手形。是があれば一大事。入物ともに道具屋の手へ渡つたか。いや／＼掛硯は賣れたれども。其の割符は殘して親父樣の鼻紙入に收めてたや。そんな事氣遣ひせず早う町をのけましたい。地ハア會所から呼びさうな姥は最う往きます。詞命あらば御縁次第お二人ともに御無事でやとフシ歸るぞ是も名殘なる。地茫然として惣七。親父の耳へ入るからは。世上に知れたに極つた。詞四日市には思ひ寄る方もある。地伊勢路へ向けて遁るゝだけは遁れて見ん。地最う七つに下つた。サア用意といふ所に。詞惣七宿にか。早い門の鎖し樣と。地潜戸を明けてつつと入るは毛剃九右衞門。惣七狼狽へ。詞ヤ珍しい何と思うて。地先づ／＼是へと煙草盆持て來い。茶持て來いよといふ程九右衞門胡散顏。詞默りや／＼惣七。大阪で逢うたは四五日前。追付け上る京で逢はうといひ合せ。こりや宿替と見えた。地何とした仕だらで何方へ立退きやる。氣遣ひなりと言ひければ。詞イヤ／＼氣遣ひな事でない。たつた今上つてまだ洗足も使はず。老體の親別住居も窮なものと。一所につぼむ眞合で諸道具を引くやら取込んだ最中旅宿は何處ぞ其の中此方から便宜せう。地休んで往きやと出でんとす待ちや／＼。詞ハテきよろ／＼女夫ながら飲込まぬ素振り。これやがて折貴賤分。此方も明日國へ下る。仲間中から預つた自分の割符受取りに來た。其の割符を貸して往きや。ヲヽ如何にも／＼其の割符は大事にかけ。箱に入れ封を付け親父に預けた。地追付け是から持たせて遣らうと。云ふより九右衞門色を變へ。詞三千兩を腕にかけろ此の仲間。命代の割符を親父に預けたとは。何處へうまい事いふな／＼。仲間を脱けて一人儲しようでな。音沙汰なしの俄に宿替へと。丁度算盤が合うた。此の割符は其の肌に付けて居る。知れた事。地受取つて見せうと。大戸潜戸の鎖樞機、慥かとしめて伸し上れば。小女郎あわてこれ九右衞門樣。詞魚と水とのお仲間何の嘘がござんしよ。此の割符は二三日中妾が乾度渡しましよ。地先づ歸つて下さんせと。押出す小腕むずと取り。ヤヽ面倒なと簀の子にどうと投付くる。卑怯な女を痛めずとも。いふ事は身にいへと脇差に手をかくれば。詞や腰を打つて轉しても割符を取らずに置かうかと。地ずばと拔けば惣七も飛びしさつて拔合せ。兩方腕は狂はねども鐔目も弱き古簀の子。まばら朽ちたるしのべ竹。踏込む足を踏みとめて。右へ拂へば左へかぶり。左を切れば右を踏込み、打合ふ切先春の日

に解け行く氷踏む如く。地小女郎は中に身を捨つる掃溜の簀籠に。持つて開いて相手の刄物打落さんと立廻る。裾を簀の子にしがらみて。かつぱと轉ぶ頭の上閃めく刄ぞ三重へ危けれ。地四邊隣に聞きつけても恐れて態と知らぬ顔。堪り兼ねて惣左衛門何をいふも子の可愛さ。割符を渡す怪我すなと。表へ廻り門の戸を。押せど叩けど明くにこそ。樞機の穴から覗いてはハアヽ〳〵悲しや危なやと。フシもがいて裏へ駈廻る。地内には小女郎障子を外し中の楯。相手の刄物を押へんと前に塞がり後に開き。隙間を見て打ちつくる。足踏みためず障子を我が身に負ひながら。どうと伏せば九右衛門すかさずかくる片足を。がはと踏込み小女郎が上に重り伏し。障子越しに突かんとす。詞突いたら汝一打ちと。地上に閃く惣七が切先 フシ危き中の危さなり。地親は憧れ隣り壁打毀ち〳〵。手の出る程に壁下地引破り。割符を出し閃かす親の手つきの物いふ

ばかり。惣七きつと見付け。詞ヤイ九右衛門聊爾すな。割符渡す言分あるまい。こつちも差す。地サア差せと鞘に納めて眼前に。助かる命も親の慈悲と手共に取つて押戴き〳〵。詞是々慥に受取れと。地渡せば篤くと見屆け。詞ムヽ別條ない受取つた。これ惣七。互に命がけの身過ぎ。魂を研く仲間の法。切り結んだ劒の下から睦じうなるも魂。遺恨は殘らぬ。氣苦勞のある顔色ぢや。山が崩れかゝつても。狼狽へぬ心持たねば此の商賣はならぬ事。地いつもの時分に又下りや。國で逢はうと暇乞ひ フシ出でて行くこそのぶとけれ。地惣七小女郎を引起し今のを見てか忝い。親の慈悲此の壁の。崩れをせめて拜みやと泣きければ。詞アヽ有難い御恩徳。慈悲心を受けながら。壁一重彼方の舅御の御面體見る事も叶はぬか。地ハアヽ息切れて物いはれぬ。水でも湯でもと苦しめども。茶碗一つ杓一本あら氣の毒何としよと。云ふ聲隣りに響き入り。

茶碗に溫湯壁越しに。情の親の手つきを見て。ハアヽ冥加ない有難いと夫婦わつと泣出し。茶碗に縋り手に縋り。お盃とも藥とも氏神の御神酒とも。此の上のあるべきかと。フシ二人戴き飮交し。詞申しお手は取れどもお顔は知らぬ。私はお許しなけれどお前の嫁。どうぞ御機嫌直して。惣七樣とも詞を交し。地一期の見始め見納めに。お顔を拜ませ下されと。舅の手を我が顔に。押當て〳〵泣く涙。親の歎きもあらはれて フシ腕顧ふぞ哀れなる。地盡きせぬ涙の手を振放し。銀財布一つ投出し。早う出て往け〳〵と云はぬばかりに門の方。致ゆる手さへ引入るれば。今は親よ舅よと便り名殘りも切れたるかと。スヱテ又絕入つて泣きけるが。詞ナウ不孝至極の惣七に。是程のお慈悲。路銀まで下さるゝお心背くは猶不孝と。地財布を女夫が戴き〳〵。はや人顔も見えまい是が本の名殘りぢやと。互に身用意裾引上げ泣く〳〵表に出でけるが。隣りの門

を遥かに見入り。詞ヤレ姥只一日親父様を。小女郎に見せてくれ。地路銀のお禮も申したいと小聲にいふも聞きつけて。姥が出づれば惣左衛門。詞こりや姥何をとぼ／＼する。今の銀は隣の道具賣つた銀。直に隣へ投込んだ。禮受ける筈がない。惣左衛門が子には商ひこそ教へたれ。非道の身過ぎする子は持たぬ。地あさましや不便や天道も日月も。神も佛も罰は當てはなされねど。此方から罰の下へ當りに往くとは知らぬかや。詞生身には餌食あり。人間一人生るれば。乳房といふ天道の御扶持方。正道の家職勤むれば分限相應々々の。天の乳房が備はる。正道にない銀儲け。榮耀する樣なれど天道の乳首に放れ。三界の捨子となり。地野倒死するは幾人か。猫は炬燵に寢臥する犬は土邊で物喰へど。炬燵な猫の眞似せぬは。身の分量を知つたる故。畜類に劣つた身の程知らず。成れの果を思はれ。不便さに腹が立つわいやと包み。かねたる涙なり。詞ヤイ惣左衛門が子になりたくば。手鍋提げても正道に。あさましい死をせぬ樣に。命全う何卒親を先に立て。惣左衛門が葬禮に喪服を着て供して見せ。其の時は我が子ぢやと。棺の中から悦ぶ。地早失せうとばかりにて。わつと泣入りフシ泣聲の耳に。殘るを形見にて別れ。行くこそ 三重

下卷　惣七小女郎道行

歌戀と。小袖は。一模樣。身に。引締めて合うてこそ。寢心もよく着心もよく。能く／＼見限り果てられて追出されしフシ我が宿の。四邊に顏を見られじと。戸口も店も明けやらぬオクリ星も。夜深き親の恩重ねて着たる其の時は。いとゞ心も輕かりし。スヱテ今朝肌薄く行く道は。フシ肩背へ苦しき。フシ身の行方 フシ心柄とは。いひながら。情馴染の京の町。三條小橋で知る人に粟田口かと思ひしも。先へ心の關寺に。身の褒への フシ恥かしき。今の小町屋惣七は。博多小女郎がならし竹スヱテ何時も心に懸けて置く。歌親の甲斐絹に綾錦。最早都を見ん事も。又となるまい限りといへば。共に泣く／＼晝き黑繻子の。絲の斷れざる辨柄縞り。愚痴なさらさら左樣ではないに。羅紗もない事。いはしや綸子な。ナホス先へ行く子に尋ぬれば。拔け參宮の頭字が耳に止まる神心。守り給へと再拜の。スヱテ袖に神樂の鈴鹿山。八十瀬の川に濡れ初めしオクリおれと。和女が初戀に。二世も三世もかはらじと登り。冷泉詰めたる。坂の下。今零落の身と知らば。ざつと淺黄に染めうものフシ裏表ない。心から僞紫の色惡う。地憔れ顏見る悲しやと絞る袂の涙の露野邊の草葉も色づきぬ。泣いて心を亂せとか。かた樣ならで。歌賴む博多の小女郎がなくば。世帶の花も縮緬と。こんな姿にせまいもの。紙幻の此の世かな。未來々々も夫婦ぞと。ナホス襯り付いてぞ フシ泣きゐたる。歌關の。お地藏は。親よりましと。地聞くなれど。優さらぬ此の世の舅御の。機嫌直して給は

れと頼みを直に救ひ乗せ。共に助かる駕籠舁の。フシ駕籠遣りませうと言ひ來るウ地尾張へ行く者。先の宿迄駕籠賃替シテ石藥師迄は道は二里ある駕籠賃こゝろりワキこゝろりは知らぬシテ知らずば錢百ワキそれは高いシテ負けて行きましよワキ七十々々ニ人地よいわ負けたとフシ駕籠下す。道は一筋駕籠に一挺。二人思ひを抱き乗せて。打ち見るよりは肩重くシテ詞小川ぢやワキそこせいシテかたせいワキまつかせ二人地杖突坂小谷大谷打過ぎて日影も。我もフシ行く空の。末果しなき。旅衣昨日今日とは思へども。鄙を出でて日數さへ。四日市にも程近き追分にこそ三重ハ着きにける。

地正しかれと心中に頼みをかけし辻占の駕籠舁が詞のはづれ惣七が胸に應へ。かゝらぬ縄に氣を縛られ向ふの人は下るれども。我が心から身をすくめ。下りもやらずコレ小女郎。詞先づ和女から乗換て先へ往きや。そんならお先へ参ります。四日市とやらで待つて居よ。地駕籠の衆早う連れましてやとおりゐの駕籠の河合村。小女郎は何の氣もつかずフシ駕籠に任せて乗換へ行く。地石藥師から來る駕籠の者聲かけて。詞女中の連衆乗せた駕籠は是か。うちも聞いた駕籠換よい。おつと幸ひサア立てい。旦那殿換へまする。おりて下されと駕籠の簾を打上ぐる。地相手は駕籠をはや下りて提げたる風呂敷包。身輕い出立の袷襦引手錢脚絆に身を堅め。腰に早縄見るからぞつと惣七が。餘所見る顔は我が顔を見せじと忍ぶ頬冠り。心早に下り立つて。駕籠の衆太儀と乗換ゆる。駕籠の儀我が手に取つて引き下し。急ぎの者ぢや増やらう。サア駕籠やつたといふ聲はフシ人の耳にも顫ひけり。地小町屋惣七捕つたと聲を打ちかける。駕籠により孛の細引綱。中に是はと驚けども翼なければ飛ばれもせぬ。駕籠の鳥かや惣七は中に音を泣くばかりなり。かねて相図の小屋の者。十手提げくる〳〵と押取り巻き。詞科は心に覚えがあらう。其方共に仲間八人。分明の仰を請け我々捕りに向うたり。尋常に召捕らるゝか。踏付けて縄かけうかと地いへども念佛の聲の外。何の答もあらざれば。实は道中次の宿迄直の儘連行き。縄かけて誡へひけ。それ駕籠遣れ心得ました。とても遁れぬ命ぢやに爰で縄をかゝらいでと。呟き〳〵立寄つて駕籠舁き上ぐればがば〳〵と。駕籠から漏れて流るゝ血は。大地に毛氈引く如く乗客はうんうん喚くにぞ。詞やれ駕籠の内で自害した。地出合へ〳〵と駕籠投捨て逃れて側へフシ寄りつかず。地役の者ども立ちかゝり綱引退け。簾上ぐればこは如何に。一尺五寸切羽際まで突込んで。刃先は弓手の脇腹に虫の息眼はぎろ〳〵フシ呆れて詮方なかりけり。地斯る所へ小女郎が身にもかゝつた縛の縄。引かれて來る身の悲しさより此の有様を見る悲しも。流れし血潮踏みしだき。駕籠の内へ顔差入れ。小女郎が來まし

た妾も今縛られた。縄かゝりましたぞや。昨夜までも一つ枕に起臥して。一所と契り交したに。此方様一人が先立つて存らへ物を思へとか。苦しうござろじゆつないかと。いふも涙に掻きくれて前後も。覺えず泣き居たり。地惣七苦しき目を見開き。詞ヲヽ縄かゝつたか小女郎。國法を破り親に不孝の大惡人。廣い世界に狭められ。所の住居もならぬ様に身を持ちなし。落付く方なく當所なく。地此の所まで迷ひ來て天の網地の縄に搦められし此の惣七。故郷に引かれ死罪に遭はば一門の面に血を濺ぎ。親へは不孝の上塗と思ひ定めての自害。詞毛剃九右衛門が海賊に與し。今迄身に纏ひし繻子繻緬。和女に着せた綾錦の冥加に盡き。蒙る身に成り果てた。地夫につるゝ慣ひとて和女まで縄をかけ。名を流させ憂目を見するは我が一心より事起る。此の惣七がなかりせば今の憂い目は見せまいもの。不便やさぞ フシ悲しかろ。地長くも添はぬ物故に命の妨までなしたよな許してたもれ小女郎と。いふ聲もはや息ぎれしスエテ賴み。少なく見えにける。地暫く見ゆる捕手ども。獄屋へ渡しては叶はぬ事人は互に兩方名残惜ませよとフシ料簡するこそ優しけれ。地聞けば聞く程猶悲しく。詞其の起りは誰がさすぞ。小女郎を人手に渡すまいとの御心から。親御に換へ命に換へ女房に持つて下されし。地それ程妾が可愛いか。冥加ないとも恭いともお前に禮をいふ詞。日本は愚かの事唐土天竺にもよもあるまい。此の手が自由になるならば。拜んで死にたうござんすと。夫の膝に顔さし寄せスエテ消入り絶入り咽せ返れば。此の世で逢ふは今ばかり。來世も變らぬ女夫ぞや。南無阿彌陀佛の。聲も微かに脇差ぐつと拔くより早く息絶えたり。小女郎わつと聲を上げ。待つて下され連立ちたい。遲いか疾いか殺さるゝ我が命。皆様お慈悲に今爰で殺して下され殺してと。フシ狂ひわなゝき駈廻る。地斷る所へ検非違使の某。眞先立ち。此處彼處にて召捕つたる海賊輩。傾城交り縄付ども一座に彼處へ引き來る。詞検非違使一札押開き。國人どもに申し聞かする趣。有難く承れ。一沖がかりの大船に通路を求め。波を潜り水底を拔け船へ近付き。諸色を奪取りし事。國法を背く大罪武士に仰せて死罪あるべき所。當今御即位の御悦びによつて死罪一等を勅免なりと。地聞きも果てず縄付ども。蘇生たる心地して フシ一度にあつとぞ勇みける。地重ねて傾城どもに打向ひ。詞汝等は流れの身。彼奴等に添ふは勤の慣ひ科にあらず。行先とても構ひなし。地縄を許せとありければ畏つて雜色ども。立寄り解く縄の跡吹撫り撫擦り。詞王様の御氣方は又格別な物ぢやないか。地此の手が自由になりたれば廓の門を出た様なと。フシ笑ひ悦ぶ其の中に。地小女郎は始終しく／＼涙留め兼ねたる顔ふり上げ。地良人の惣七殿斷る御慈悲を待受けず。妾を捨て此の世彼の世へ飛び去りて。地比翼の鳥の片翼今が博多の此の小女郎。生きてかひなき命ぞや。お慈悲に殺してたべなうと聲も。惜まず泣きゐたる。詞ヲヽ尤々。夫惣七同類とはいひながら。色に迷ひし若氣の至り。罪の輕重明白たり。地自害せしは其の身の不祥汝夫に成り代り。親惣左衛門に孝行盡し後世を弔ひ得さすべし。彼に任せ彼奴輩それ追捕へ。重ねて惡事を止めの。顔に[illegible]入牢。耳殺ぐ鼻削ぐたゞみどろちんがい追捕ふ。[illegible]傾國萬人博多。小女郎が物語語るも聞くも後代の永き。噂を殘しけり。

平家女護島

近松門左衛門作

序詞 籠の中の鸚鵡檻に隨つて伏仰ぎ。宮を窺つて跼蹐す。紺の足丹き觜綠の衣翠き衿。金精の妙質火德の明輝辯才聰明にして。能く物言ふ靈鳥いかんぞ時のさかしきに逢へる。放たれたる臣。捨てられたる妻。思ひを爰に同じうす。平の朝臣清盛入道相國の。四海に覆ふ驕慢のオロシ綱には洩るる。かたもなし。地家に誇ふ子なければ家正しからずとかや。小松の内府所勞によつて致仕し給ひ。教訓も憚れば驕奢暴虐心の儘。第九の姫君は高倉の帝の中宮にて。殊に此の頃御懐胎の御悦び。執柄華族の公卿も平家に諂ふ御進物。或は馬太刀卷絹織物。綺羅みち〳〵て殿中花の如く。門前に市をなし。萬寶一つとして闕けざれば。禁中も仙洞も フシ是には。過ぎじと見えにける。

地 爰に子息三位の中將重衡。南都の軍に勝利を得。奈良の都の八重櫻今日九重の梅が香と。鎧の袖に勝色見せ御前に畏り。詞去る二十八日。轉害般若坂の櫓逆茂木押破り。興福寺東大寺諸伽藍殘らず放火せしめ。奈良法師の首七百餘。猿澤の池に切りかけ。大將分の首五十餘級。並に大佛の頭燒落ちしを。衆徒の首と共に車に積んで凱陣仕る。外に生捕一人。急ぎ實檢あつて生捕の罪。御沙汰あるべうもやとぞ述べらるゝ。入道相國笑つぼに入り。惡法師ども源氏に心を寄せ。當家に敵對我が威光に恐れぬは。佛を甲に着る故。惡徒の張本大佛の首をも取つたるとは手柄々々。扨又源氏肩入れの大惡僧。文覺法師南都に隱れ住むと聞きしが。生捕とは文覺かそれへ引けと宣へば。重衡しさつて弓袋より。白骨一つ取出し。是は源氏の大將故左馬頭義朝が髑髏。かの文覺東大寺の二階樓に壇を構へ。源の義朝公と書き記し本尊に立て。地平家調伏の行法紛れなき所。四方を包んで攻めすくめ候へども。たゞ者ならぬ文覺太刀刀燃ゆる火も事とせず。焰を潛つて落失せ殘せし所の髑髏。奪取り候と聞くよりつつ立ち齒がみをなし。詞エヽ憎や〳〵。此の禪門を滅さんとせし義朝。白骨となつても再び足下に來る。地入道が威勢思ひ知れと髑髏も碎け檜扇も。折るゝばかりに丁々ど打つては小躍し。はたと蹴散らしがはと踏み。一門の人々是を見よ。二度の朝敵討つたりと。殿中響く高笑ひ フシ忿より猶凄じし。地扨生捕とは何者面を見んと御諚の中。繩目血ばしる弱腕指まで同じ紅鹿子も。奥樣じみて面やつれ三十ばかりの亂し髮。盛り過ぎたる夭桃の春を傷める姿にて。引かれ出でたる百の媚列座の一門目を動かし。烏帽子ひら〳〵

ひらめけば入道も氣を取られ、おく齒向ふ齒まばらの大口くわつと開け。フシとろ〱見とれおはします。地重衡進み出で。詞此の女は鬼界が島の流人、俊寛僧都が妻あづまやと申す者。南都法華寺の尼寺に隠れ住み。平家に敵對小長刀を以て某が陣を窺ひしを、搦取り候と披露も聞かすムヽ。色よき花は匂ひも深し。みめがよければ心もやさしく健氣なり。俊寛法師は尊げもなき妻帶坊主なれども、二萬石の寺領を與へ僧都になして崇敬せし。詞清盛が恩を忘れ、法皇の謀叛に與したる罪科、詞女房に科はなし。それ故に當家を一旦の恨みは殊勝々々。地向後我に宮仕へよ。年寄りし禪門が起臥の撫擦り、介抱に預らんそれ繩解けと宣へば。地瀬尾太郎兼康、繩を解かんと取りつく腕もとずんと立つてはたと踏み。慮外なり青侍、院の昇殿を許りし法勝寺の執行俊寛僧都が妻、地軍の慣ひ雜兵にも搦めらるるは是非もなし、我が夫と膝を組みし平家の前。引かるゝさへ口惜しきに。此のあづまやが身に汝等が手を觸れさせうか、羽あらば空をも飛び夫諸共と思ふ身を、命助かり宮仕へとは情知らぬ清盛公。エヽ昔の世が世ならば斯る無念は聞くまいもの。神佛の罰利生も人によるか入道殿と。スヱテはつたと睨む目に涙フシ包みかねてぞ見えにける。詞いや入道を情知らぬとは料簡違ひ、此の髑髏義朝が妻、常磐が我にあまえる不便さ。牛若なんといふ子供を助け置きしは何と、俊寛を島より戻さうと戻すまいとお事が心にあるべき事、地それ局々の女ども、あづまやが繩を解き西の對にて隨分勞の馳走して。酒宴音樂舞ひ踊り。望むこととして慰めよ禪門が祕藏の客人。もてなせ〱と宣へば。上中臈の女房達手々に繩も打解くる。人々の執成しにて夫俊寛の若しや歸洛の種もやと。心にそまぬ輕薄のフシ空賴めこそ理なけれ、地チヽ梅櫻にも勝つて散ること知らぬ入道が閨の花。老後の眺め壽命の薬、皆重衡が忠孝手柄々々。詞奈良法師の首に此の髑髏を添へ、大佛の頭をも六條河原に獄門にかけ。地難波瀬尾警固して見物の群集の開く前。首帳を讀み立て諸國にかゞむ源氏ども。聞傳へにも威をくれ平家の威勢を顯せ。若し奪はんと近付くか。胡散な奴ばら切棄てにせよ。やつと長絹のそば引抓み。帳臺に入り給ふ六十有餘の老木櫻、我慢の色に咲き出づる心の。花やヽ重へ春の水フシ六條河原に、地高垣結ひ廣遮那佛の御首に。義朝の髑髏を並べ中央に掛けゝれば。照日の影も金色に五十餘級の衆徒の首。光明に照されて累々と連なりしは、梢に實のる佛餉のフシ按摸羅菓とも謂つべく。地洛中の貴賤踵を接ぎ。近國他國の老若男女道去りあへず立集ひ。五天竺の堂塔を一日に滅却し。八萬四千の僧尼を殺せし弗沙彌多羅が惡逆を。末世の今に見る事よ。奈落の底には刹利も首陀もかはらぬもの。怖や凄やの髏々は巷に充ちてフシ髑

し。地瀬尾の太郎兼康入道相國の仰せによつて。首帳開きスヱテ高々とこそ。讀上げけれ。地第一の物始坂の四郎法師永覺。山科寺の大倉坊鐵拳の式部卿。是等は六宗に名を得し惡僧。軍神の祭とす。コハリ戒壇院の富樓那沙彌。詞戰惡口に寄手も口を喰ひしばる。西大寺の苦口法眼反魂坊。二月堂の荒若狹吉祥院の婆羅門佐渡。南大門の貫の木日向釘ぬき周防。南圓堂には八角目玉の眼光法師。地傳法院の今韋駄天今毘沙門。鉾を取つてはならび名取りの。法師武者倶舍唯識維摩の學頭にて。智惠殊に勝れば。今文殊ともフシ字せり。鎭守堂の鰐口因幡猪和泉コハリ虎禪師。是等は早業隼の飛鳥の影に先だつて。風を追つかけ嵐を追つめ楯割り。石割り。岩切坊ナホス發志院には蜻蛉返りの通明法師。矢くりの小聖コハリ夜叉新發意。榎木寺に鈍僧正元興寺に鎌僧都。管領中將熊手快源黑不動赤不動。十五大寺七大寺の荒法師惡法師。野晒の首は源の義朝。金色の大頭は聖武天皇の御建立。逆徒の大將金銅の盧遮那佛。前佛去つて後佛を待つ首數都合五十六級。七千萬歲彌勒の世迄治る平家の御代の大數かなひ畢んぬ。從三位右近衞のナホス中將平の朝臣重衡フシ是を討つとぞ讀みたりける。地往來群集目をそばめ。恐ろしや勿體なやと皆手を合する折から。六波羅の早使。下司の次郎友方。鞭鐙を合せ馳來り。難波瀬尾に遂べけらは。詞常磐御前より義朝の髑髏を申し請け。持佛堂に安置して經讀み回向し弔ひたきとの願ひ。叶へられては又新參の俊寛が妻。あづまやが何事をか望まんに。叶へられずばかたみ恨み。地所詮此の髑髏事やかまし。打碎き加茂川へ流し捨てよと御一門一統の仰。いで計ひ申さんと脚榻を踏んでのび上れば。あら不思議や大佛の鼻より。大手を以て下司が頭をむんずと摑み御首の中に聲あつて。義朝が髑髏よりおのれが素頭はり碎かんと。握り固めしかな拳鉢も割れよと二三十。腦も烏帽子も打裂かれ眼も眩みこれ死にます〳〵。お助けとほゆるも構はず前へかつぱと突伏せ。其の手をのばし髑髏つかんで御首へ引入れしは。再び爰に羅生門。茨木童子か腕骨にてフシ相手が綱には似ざりけり。地難波瀬尾肝を消し。詞今度の兵火に燒落ちし此の中に。狸野干も栖むべき樣なし。黃金の交りし金佛。金の精と覺えたり。地序に御首も打ちひしぎ。鑄潰して公用に達せんそれ〳〵と。荒子中間立ちかゝり。大槌大杵鐵挺なんどごう〳〵くわん〳〵百千の銅鑼鈞鐘。河瀬にひゞき漣立ち木草も搖ぐばかりなるに。裳なし衣に種子袈裟かけ。六尺ゆたかの大坊主御首の中より踊出で。詞槌も杵も踏散らし蹴散らし。ヤアやかましいうんざいども。音にも聞くらん高雄の文覺といふ源氏の腰押。此の髑髏はもと我が物。取返さうばかり佛の頭踏みあらした。地罰は平家利生は源氏。清盛にまつかうフシ吐かせと立ち

出づる。それ盗人坊主雜波瀬尾を知らぬか。一足も遁さじと大勢どつと取り巻いたり。詞やれことく〵し。那智の瀧に千日うたれ。龍神と相撲取り。愛宕高雄の大天狗と腕押ししたる坊主。地手並を見よと獄門柱ゑいと引抜き振廻し。河原の院の古道より。長講堂の裏筋を追かけ。追込みなぐり立つれば眉間眞甲。腰骨膝骨打ちみしやがれ。あたりに近付く雜兵なし。詞ヤア口程もなき雜波瀬尾。頭はられて堪忍するか。地下司の次郎下り合へ出合へと馬の尾にて柄まいたる九寸五分。よらば突かんず面魂。フシ恐れて寄付く者もなし。ヲヽさもあらん。詞うぬらが主の清盛は國土を惱ます大惡魔。此の文覺は惡魔降伏。國土安穩を祈る。大行者を苦しむる惡逆。地遠くは三年近くは三月に思ひ知らせん。此の身は則ち不動明王。詞南謨三曼多縛日羅報。戰拏摩訶路遮拏薩破吒也吽怛羅ナホスあんだらどもとつ。どつと笑うて立歸る。勇猛力ぞ三重ハ春風も。

庭は踊の。秋の露さつさふれく〵。ふるや小褄はいとしゑ。ゑいく〵ゑいく〵縁に引かゝる柳の糸の。雪に折れぬも風には靡く。竹は戀しり幾夜も靡く。なびきくるく〵栗栖野の萩野分の薄。尾花靡きてやつちりナ。ちりり縮み髪も油とろく〵櫛の齒に靡く。歌たんく〵丹波の酒呑童子もサアヱさすぞ盃飲めさ醉ゑさ。醉うたまぎれにな君と寝てさ。オクリ歌ひ。踊つて上臈達。地局の椽に腰打かけ。申しあづまや樣是見さしやんせ。詞時ならぬ踊も御奉公。入道樣の仰せ隨分お心慰め。お盃の相手。お寝間の添寝も遊ばす樣に致せとて。あれ彼の亭に御座なさるゝ。地いざ氣をうかして我我が。踊りにつれ御前へお出で。サア踊りとざはめけば。詞アヽいやく〵。自らをいさめの踊り笑ふではなけれども。世にありし昔は妓踊子婢まじり。樣々のかはり踊。やゝ子踊木曾踊小町踊伊勢踊。地見せたい物は都踊のぬき拍子。詞ムヽ見たいく〵い

ざ一をどり所望々々と浮かされて。フシ恥かしながら。地斷うした振りに若衆出立の目狹笠。金鍔鹹閂指で。歌たんだふれく〵千代の松坂越えてヱ。松は千歳の フシ色ながら。地惜しや小松は。雪折れて老木かれせぬ六波羅踊が所望だが合點か。歌平家々々と千草も靡く。扨は居よいか住みよいか。居よも住みようも慈悲も情もしやんとしよ。地ナホス我は身一つ。泣き暮らす。歌踊りとが見たくば。昔に返せ世の中對の浴衣しやんと着た踊りふりがゆかしい。吉野初瀬の花よりも。紅葉よりも。戀しき夫が地見たいもの。うたての踊やな。情には申してたべとばかりにてスヱテかつぱと伏して。泣き給へば。地踊子の上臈達。げに理痛はしとフシ皆々袖をぞ絞らるゝ。地踊の聲の聞えてや亭の内より越中の次郎兵衛盛次。御使として局に入り。詞なうあづまや殿。此の間御一門衆入替り立ちかはり。樣

謀叛せらるゝに系引なきも見たからぬ。詞身とても謀叛ならず。今日本にて西を東と宣ひても、背く者なき入道殿、然ればこそ我我迄御頼み。時世に付くも一つの道目つは身の果報、常盤御前の仕合せ是ぞよい證據。女たる身の望む所と思はずか。地サアく、よい御返事をとすり寄れば身をしさり。詞エヽ主人達から内衆迄人らしい人はない。常盤御前の仕合せとは武士の口から聞きにくい。夫義朝の白骨迄踏みたゝく敵の。手かけ妾となる樣なすけべいの淫奔者と。此のあづまや較べらるゝも口惜しや。地八重の汐路の鬼界が島、雨露も凌ぎかね餓鬼同然になりはてし。殿御を愛しや戀しや。逢ひたやと思ふより外望みはない。身の果報何にせう。何も聞かぬ聞きともないと。兩手にて耳ふさぎ。武士の情にはせめて泣かせてくれるなと。わつとばかりに俯伏して沈み入りたる有樣に。瀨次も詞なく フシすごく奥へ入りければ。地ひつ續いて齋藤

別當實盛、白髪鬢ひそらし。詞我等六十に餘り色氣をはなれ。其方女中を預る實盛といふ者。お寢間の勤は兎も角も。御前へちよつと出る分は年寄の惡い事申すまじと。いひも切らせずアヽくどやくどや。昨日も來て同じ事くどくと長口上。地聞き入る耳がないと愛想なければ手持わるく。詞拙者生國越前近年御領に付けられ。武藏の長井にありし故。地それで長居は御免あれと フシ紛らしてこそ入りにけれ。地胸にせまれば聲に出で。恨めしの世の中や。囚人となる程ならば桔械牢獄屋にも入れられず。情まじりの憂目を見る水責火責の苦みも。心のつらさは劣るまい。此の上にお使立たばスヱテ何と返事も詮方なし。詞なう上臈達。我が内には有王丸とて音に聞えし大力の若者あり。若し忍んで尋ね來るならば今生後生のお情。ひそかにそつと知らせてたべ。地有王を力に此の地獄が遁れたい。有王がな來れかし有王は來ぬ事かと。立ち

てはくどき居ては歎きの折から。瀨尾殿に足音して能登守教經。童の菊王相具しつゝと入り、詞俊寛が妻あづまやとは汝よな。某などは朝敵退治の大將か、其の外天下の大事ならで斯樣の大人氣なき小節に。詞も加ゆる能登守にあらねども。入道殿の仰せは某とても背かれず。先づ入道殿を諫とか思ふ。一門の棟梁國家の固め。如何なる非道を宣ふとて汝等風情が理を理に立てさせ。淸盛入道が理を枉げて天下の仕置き立つべきか。さりながらおことが女の操を守つて。二張の弓を引くまじとは。弓取の義にも劣らぬ魂感じ入る。地匹夫匹婦も志を奪はずといへり。屍の上まで恥辱なき。貞女の道は能登守が立てゝ取らせん。詞又おことは一旦入道殿の御詞。急度立つべき御返事。地サア只今々々と フシ道理正しき詞の末。涙に フシかきくれ。手を合せアヽ有難しとも嬉しとも。申し上ぐる フシ詞なし。地平家の中にも小松殿か能登殿かと。一二とい

うて二のなき文武二道の御大將。數ならぬ下司女に道を立てゝ取らせうとの。海山の御恩德夫の名をも穢さず。生れての本望死しての譽。詞いで自らも清盛公のお詞の立つ返事をと。地懐の守刀するりと拔いて肝先にぐつと突立て一抉くつて申し敎經樣。詞あづまやが死ぬれば平家の御意を背く者此の世にない。御意を背く者なければ。入道殿のお詞は立つたぞや。お詞立つるは此のあづまや。あづまやが道を立てゝ下さんすは敎經樣。地御恩は忘れぬ。アヽ忝いとフシ是を最期に絕え果てたり。地驚き騷ぐ女房達突き退け押し退け。出かいた女と首打落し詞これ菊王。此の體門外に捨て置けと。地髻摑んで首提げ。御前間近く欄干に謹んで。詞御心を掛けられしあづまや。敎經がくどき落し連れ參る。御望み叶ひ候。地急ぎ御酒宴〳〵と呼ばはり給へば。入道殿障子も御簾も引きのけはや〳〵笑顏。つれなきあづまやを靡かせて來たとや。能登守は

弓矢打物ばかりか。戀の中立ちの名將功名功名早う逢ひたし。詞彼の君はいづくにぞ。地則ち是に候と袖の下より生首。御膝元にさし置けば入道くわつと顏色かはり。詞ヤア腹立ちや忰め。首斬れとは誰がいひし。年寄つて色に耽ると嘲つたる仕かた。親同然の伯父に向つて緩怠至極。地返答せい能登守言譯せい敎經と。日頃の短氣增長して。摑みつかんず荒氣にもちつとも恐れず。詞是は近頃御無理千萬。もと此の女の心だて善惡は御存じなく。面體美しき妍き色を戀焦がれ給ふゆゑ。その顏ばせをお手に入れし敎經。御感はなくて御立腹はむたい千萬。彼は法皇の御謀叛に與し當家を亡し。一門の首取らんとせし俊寬が妻。地折がな時がな夫の仇と。心に劍を含んだる女。御寢間近く寵愛は。鴆毒に砂糖甘蔓をつけて唇に寄せ味ふ如く、命がけの戲れ大將たる身のせざる所申すに及ばず御存じの上。詞兎角お心掛けられしは。あづまやか目鼻口元よ

り外はいらぬと存じ。くどきおほせ顏ばかり連れて參つたり。地サアお盃の相手それ御銚子御肴。但し御寢間の新枕かと生首を膝元へ。押しやればさすがの入道顏しがめ身を縮め。ハア、今日は安藝の嚴島の御緣日、精進を忘れた敎經明日々々と。座を立ち給ふを是は鬪慾。あづまやが思はく餘り不興とフシ止むる折から。地御門はたく〳〵締むる音遠侍騷ぎたて。詞俊寬が召使有王丸と名乘り。十八九のあばれ者。淸盛公へ直見參と御所中を切散らし。御座危く候と追々の言上に。地いよ〳〵倒顚能登殿甥御賴み入る。伯父は老耄敗亡とフシいひ捨て奧に入り給ふ。地荒れに荒れたる有王丸當番の詰侍。放免の役武者所牛に虻の付く如く。寄れば蹴散らし縋れば拂ひ。大床に立つて大音上げ。詞淸盛相國は主人俊寬が妻の首と。婚禮ある由たつた今聞いた。よめり御寮は首ばかり。聟殿に胴が有つては片ちぐで似合はぬ女夫。入道の胴を切つて

入滅の仲人。よい所に有王丸聟殿に見參と、地八方に眼を配り振散らす前髪は。時雨の雲に風あれて フシ暮山をめぐる勢なり。地下司の次郎友方丁稚め遣らぬと縋り付くを、首筋掴んでぐつと引寄せ。文覺法師がはり和らげたる頭。手間は入らずと刀の柄にてはつたと打てば。柘榴を割つたる如くにて フシ抱へてはふ〳〵逃げてけり。地近寄つては叶はじと難波瀬尾が無分別。巻轆轤の大綱を兩方四五間引はつて。巻いて取らんと犇いたり。詞ハア、子供遊びの綱引きか惡あがきする餓鬼めら 地是見よと片足上げやあうんと氣をこんで。間物をふつつと踏み切れば。瀬尾は武士のきづ難波。西瓜まろばず如くにてフシ ころ〳〵轉びうつたりけり。地此の上は能登鯖を一口喰ふまで。能登殿〳〵と駈入る所を。菊王丸とんで出でどつこい慮外な能登よばり。詞旦那には手に足らぬ。童の菊王サア來いと四つ手にむんずと取組んだる。コハリ兩方年は十八さゝぎ。力は藤こぶ藤づるの。捻合ひ締合ひ絡み合ふ。有王が大髻菊王が大童。亂しかけ振りかけ。下手上手に押合ひてナホス フシ勝負は互角と見えたる所に。詞ヤア〳〵過すな菊王。汝等が手に敵はじと取つて引退け、地教經が一拉と組付き給へば。望む所と有王が腕がらみに差込んで。一押しぐつとこりや〳〵こりや。捻ぢ付くる大力にさしもの能登殿よろ〳〵〳〵。ヤ前髪めに負けうかと踏直せばはたとつき、エエ口惜しと取付けば振解き、組めば捻ぢまげ引廻され。平家一番の大力と音に聞えし能登守。大腰に地響きうたせ フシ尻居にどうと投据ゑたり。詞有王めには教經も敵はぬ。一人も出合ふな手並は見えた。汝も歸れと宣へば。イヤ生きて歸る命なし。入道と刺違へんと。地駈入る所を立上り。上帶掴んで狼狽たか若者。詞汝等五人や十人は。教經が片腕にも足らねども。情の負と知らざるか。鬼界が島に流人の主を持ちながら。犬死するかたわけ者。地誠の力是見よと片手に掴んで、車寄せの築地越投越す力風を持つ。桐の一葉のふうはふはひら〳〵ひらりと。下り立つて。フシ恩を感ずる感涙落涙。地うはべは色だつ敵と敵、にらむも德に入るの門。能登守は入道を諫めて德に入るの門、六波羅の大手門總門樓門冠木門。扉は金石鐵壁の隙間の風も通さねど。さはらで通る弓矢の情助くるも道殺すも道。さらば歸れ有王。お暇申すと禮儀は身の上殘る恨みは主君の上。拳を握り牙を嚙み。しどろ足にて歸る波。内には義理を立波の音に聞え名に聞きし。能登殿の弓勢勇力學ばずして。學問力も有王丸引かれて。名をこそ傳へけれ。

第二

地我が門に千尋ある蔭と詠ぜしも。平家に繁る園の竹。入道相國の御娘中宮御產の當月。御座所は六波羅の池殿にて。豫ての御祈禱御室東寺天台座主を始め。御願寺十六

り書かれたり。地是ぞ難儀と出せば取つて披見あり。詞チ、是ぞ猶心安し。二の字の上に能登守が一點加へて。流人三人關所異議なく通すべき者なりと讀上げて。地渡し給へば丹左衛門請取り此の上もなき善根。關所もやす／＼御產もやす／＼。瑞相よき門出いざ立たれよ兼康と。いへども瀨尾しぶ／＼顏。詞女童のする樣に。慈悲善根なんどで子が生るゝ程ならば。世に難產はあるまいが。地產の道ははなれ物此の上に中宮の。御身に怪我のあつた時能登守教經と申す弓取。愚痴文盲のお名が流れん笑止笑止と。舌も引かぬに六波羅より早使。詞中宮御平產皇子御誕生赦文のお使。地悅んで急がれよと呼ばはる聲に瀨尾の太郎がむつと顏。詞これ瀨尾女童のする樣な慈悲善根の奇特あれ聞きたるか。教經が文盲の名を流さんかとの氣遣ひ。汝等は智惠あつて人の上迄心遣ひ太儀々々。さりながら智惠も除り働けば。後には其の智惠も落ち。つれて首も落つるもの。地用心して道急げと詞も胸にはつしとあたる。小松殿の大悲の弓。能登殿の義信の矢。海山越えて末遠き筑紫の空や 三重 詞もとよりも此の島は。鬼界が島と聞くなれば。鬼ある所にて今生よりの冥途なり。假令如何なる鬼なりと。此の哀れなどか知らざらん。此の島の鳥獸も鳴くは我をナホス フシ問ふやらん。地昔語るも忍ぶにも。都に似たる物とては。フシ空に月日の影ばかり。花の木草も稀なれば。耕し植ゑん五つの穀物もなく。詞せめて命を繫けとや。峯より硫黃の燃出づるを。釣人の魚に換へ波の荒布や干潟の貝。地みるめにかゝる露の身は憔悴枯槁のつくも髮。肩に木の葉の襤褸させてふ蟲の音も。枯木の枝に。よろ。／＼。よろ／＼と今は胡狄の一足とかこちしも。俊寬が身にフシ白雪の。地つもるを冬消ゆるを夏風の景色を暦にて。春ぞ秋ぞと手を折れば凡日數は三年の。言問ふ物は沖津波磯山おろし濱衛。地涙を添へて故鄕へいつ廻り行く小車の。轍の跡の水を戀ふ憂目もなか／＼に。くらべ苦しき身の果の命。フシ待つ間ぞ哀れなる。道具屋フシ同じ思ひに朽果てし鶉衣に苦深き。岩の懸路を傳ひ下りわづらふ有樣。詞我もあの姿かや。諸阿修羅等故在大海邊。そも三惡四趣は。深山海づらにありと御經に說かれしが。地知らず我餓鬼道にや落ちけんと。能く／＼見れば平判官康賴。アヽ我も人もかくも衰へ果てしかと。心も騷ぐ濱邊の蘆。かき分け／＼來る人は丹波の少將成經。詞なう少將殿なう康賴。地こは俊寬か僧都かと招き合ひ步み寄り。伴ふ人とては明けても康賴。詞暮れても少將。地三人の外なき物を何とてか音づれ絕え。山田守らねど世にあきし。僧都が身こそ悲しけれとスヱテ手を取りかはし泣き給ふ。かこちは道理。フシ さりながら。詞康賴は此の島に。熊野三所を勸請し日參に暇なし。三人のともなひも此の頃四人になりたるを。僧都は

未だ御存じなきか。何四人になりたるとは。扨は又流人ばしあつての事か。イヤ左樣ではなし。少將殿こそやさしき海士の戀にむすぼれ。地妻を儲け給ひしといふより僧都にこ／＼と。珍しし／＼。配所三年が間人の上にも我が上にも。戀といふ字の聞き始め笑ひ顏も是始め。詞殊更海士人の戀とは大織冠行平も。磯にみるめの汐なれ衣。ぬれ始めは何と／＼。俊寛もあづまやといふ女房明暮思ひ慕へば。夫婦の中も戀同然。地かたるも戀聞くも戀。聞きたし／＼語り給へとせめられて。顏を赤むる丹波の少將。三人互の身の上を包むにはあらねども。數ならぬ海士の茶船押出して。戀と申すも恥かしながら。詞なうかゝる邊國波濤迄誰が踏分けし戀の道。あの桐島の漁夫が娘千鳥といふ女。世の營みの汐衣。汲むも燒くもそれはまた濱邊の業。地そりや時ぞと夕波に可愛や女の丸裸。腰にうけ桶手には鎌。千尋の底の波間をわけて海松布かる。和布荒布あられもない裸身に。詞鱧がぬらつき鯔がこそぐる蝤蛑がつめる。餌かと思うて小鯛が乳にくひ付くやら。地腰の一重が波にひたれて肌も見えすく。詞壺かと心得蛸めが精をうかがふ。地浮きぬ沈みぬ浮世渡り。人魚の泳ぐもかくやらん。汐干になれば洲崎の砂の腰だけ。踵には蛤ふみ。太腿に赤貝挾み。指で蚫起せば爪は蠣貝黃螺のふた。あまの逆手を打休すみ黃楊の小櫛も取る間なく。蠑螺の尻のぐる／＼わけも緣ある日からは玉鬘。かゝる島へもいつの間に。結ぶの神の影向か。詞馴れ初めなじみ今は埴生の夫婦住み。夫を思ふ眞實の情深く哀れ知り。詞木の葉を集め縫綴り針手きゝ。地さよの寢覺は睦じむ肌に引寄せ。聲こそは薩摩訛り世にむつましい睦言。詞うらが樣な女ら。歌連歌にべる都人夢にも見やしめすまい。緣あればこそ抱いて寢てむぞうか者ともおもしやつてたもりめすと思へば胸つぶしうほや／＼しやりめす。親もない身大事のせなの友達。康賴樣は兄丈俊寛樣はてゝ樣と拜みたい。娘よ妹よ兎せろ角せろとぎやつてりんによがつてくれめせかしと。ほろと泣いたる可愛さ。都人のござんすより。りんによきやアつてくれめすが。地僧都聞入り感にたへ。扨々おもしろうて哀れで伊達で殊勝でかはいゝ戀。先づ其の君に見參いざ庵へ參らうか。いや郎ちあれ迄同道。千鳥々々と呼ばれてあいと蘆かき分け。竹のおふこにめざし籠。かたげた振りもオクリ小じほ。らしげな眉目がよければ身に着たる。襤褸も綾羅錦繡を。恥ぢぬ形はあたら物フシなぜに海士とは生れけん。詞僧都も會釋の挨拶。やさしい尊承つて感心。康賴は疾く對面とな。俊寛は今日始めて親と賴みたいとや。此の三人は親類同然。別して今日より親子の約束我が娘。あはれ御免蒙り四人つれて都入。丹波の少將成經の北の御方と緋の袴着るを待つばかり。エヽ口惜

しい。岩を穿ち土を掘つても一滴の酒はなし。盃なし。（地）めでたいといふ詞が三々九度ぢやといひければ。（詞）ハア此のいやしい海士の身で緋の袴とはおやばちかぶる事。御人に緣を結ぶが身の大慶。七百年生きる仙人の藥の酒とは菊水の流れ。それをかたどり筒につめたも此の島の山水。（地）酒ぞと思ふ心が酒 此の鮑貝のお盃戴き。（詞）今日からいよ／＼親よ子よ。（地）てゝ樣よ娘よとむぞうか者とりんによぎやアつてくれめせと。言へば各打ち笑ひけに尤と菊の酒宴。あはびは瑠璃の玉の盃さいつさゝれつ飲めうたへ。三人四人が身の上を硫黃が島も蓬萊の。島に譬へて汲めども盡きぬ フシ泉の酒とぞ樂みける。康頼沖をきつと見て。（詞）ハア、漁船とも覺えぬ大船漕來るは心得ず。（地）あれよ／＼といふ中に。程なく着岸京家の武士の印をたて。汐の干潟に船繫がせ。雨使丁にあがつて松蔭に床几立てさせ。（詞）流人丹波の少將。平判官康頼やおはする

と高らかに呼はる聲。（地）夢ともわかず丹波の少將是に候。俊寬康頼候と。我先にとふためき走り二人が前にはつ／＼と。手をつき頭を下げ蹲る。（詞）瀨尾太郎が首にかけたる赦文取出し。是々赦免の趣拜聽あれと押し開き。中宮御産の御祈によつて非常の大赦行はる。鬼界が島の流人丹波の少將成經。平判官康頼二人赦免ある所。いそぎ歸洛せしむべきの條件の如しと。（地）讀みも終らず二人はつと平伏せば。（詞）なう俊寬は何とて讀み落し給ふぞ。ヤア瀨尾程の者に讀み落せしとは慮外至極。二人の外に名があるか是見よと差出す。（地）少將判官諸共に是は不思議と讀返し繰返し。もしやと禮紙を尋ねても僧都とも俊寬とも。書いたる文字のあらばこそ入道殿の物忘れか。そも筆者の誤りか同じ罪同じ配所非常も同じ大赦の。二人は赦され我獨り誓の網に漏れ果てし。菩薩の大慈大悲にも分隔てのありけるか。疾に捨身し死したらば 此の悲 みは あるまじ

き。もしや／＼と存らへてあさましの命やと。スヱテ聲も惜まず泣き給ふ。（詞）丹左衞門懷中の一通出し。とつく申し聞かせんずれども。小松殿の仁心。骨髓に知らせん爲暫くは控へたり。是聞かれよと聲を上げ。何何鬼界が島の流人俊寬僧都事。小松の內府重盛公の憐愍によつて。備前の國迄歸參すべきの條。能登守教經承つて件の如し。何三人ともの御赦しか。なか／＼。（地）ハア／＼はあと俊寬は。眞砂に額をすり入れ／＼三拜なして嬉し泣き。少將夫婦平判官夢ではないか誠かと。踊りつ舞うつ悅びは猛火に焦げし餓鬼道の。佛の甘露に潤ひて如清涼池と歌ひしもフシかくやと思ひやられたり。（地）雨使詞をそろへ。（詞）最早島に用もなし。仕合せと風もよし（地）いざ御乗船尤と四人船に乗らんとす。瀨尾千鳥を取つて引きのけ。（詞）見苦しい女め。見送りの奴ならばそこ立ちされと睨付くるイヤ苦しからず。此の少將が配所の中厚恩の情を受け夫婦となり。

歸洛せば同道と堅く申しかはせし女。御兩人の料簡を以て着船の津迄乘せてたべ。子孫々迄此の恩は忘れじと手をすつて詫び給へば。思ひもよらずやかましい女め。誰かある引きずり退けよと犇いたり。地ハテ料簡なければ力なし。此の上は少將も此の島に止つて都へは歸るまじ。サア俊寛康賴船に乘られよ。詞いや／＼一人殘し本意でなし。地流人は一致我々も歸るまじと。三人濱邊にどうど座を組みスヱテ思ひ定めし其の顏色。丹左衞門心ある侍にてこれ瀬尾殿。詞斯樣にては君御大願の妨。女を船には乘せずとも一日二日も逗留し。とつくと宥め得心させ。地皆々心能くてこそ御祈禱ならめと。いひも切らせずヤア、そりや役人の我儘。詞船路關所の通り切手。二人とあるこの字の上に能登殿が一點加へて三人とせられしさへ私なるに。四人とは何方の赦し。地所詮六波羅の御館へ渡すまでは我々が預り。乘らぬとて乘せまいか。詞俊寛が女房は淸盛公の御意を背き首討たれた。有王が狼藉囚人同然の坊主。地雜色ども郞等ども三人共に船底に押込め動かすな。承ると匹夫ども千鳥を突退け三人の小腕。引立て／＼狩人の餌畚に小鳥をつむるが如く詮付け／＼。嚴しく守る瀬尾が下知。船出せ／＼乘り給へ左衞門殿。但し御使の外私の用ばし候かと。理窟ばれば力なく同じく船に乘り移る。不便や濱邊に只獨り。友なし千鳥鳴きわめき。武士は物のあはれ知るといふは僞り虛言よ。鬼界が島に鬼はなく鬼は都にありけるぞや。馴れそめし其の日より。御免の便り聞かせてたべと。月日を拜み龍神に願立て祈りしは。つれて都で榮耀榮華の望でなし。詞蓑虫の樣な姿をもとの花の姿にして。せめて一夜添寢して女子に生れた名聞と。是一つの樂みぞや。エヽむごい鬼よ。鬼神よ。女子一人乘せたとて輕い船が重らうか。人々の歎きを見る目はないか。聞く耳は持たぬか。地乘せてたべなう乘せをれと。聲を上げ打ち招き。足ずりしては フシ伏し轉び人目も。恥ぢず歎きしが。地海士の身なれば一里や二里の海怖いとは思はねども。八百里九百里が。泳ぎも水練もかなはねば。此の岩に頭を打ち當て打ち碎き。今死ぬる少將樣名殘り惜しいさらばや。念佛申すむぞうか者。りんによぎやアつてくれめせと泣く／＼岩根に フシ立ち寄れば。地やれ待て／＼と俊寛よろぼひ／＼舷を。漸うまろび走りより。詞これ船に乘せて京へやる。今のを聞いたか。我が妻は入道殿の氣に違うて斬られしとや。地三世の契りの女房死なせ。何樂みに我一人京の月花見たうもなし。二度の歎きを見せんより。詞我を島に殘し代りにおことが乘つてたべ。時には關所三人の。切手にも相違なくお使にも誤りなし。地世に便りなき俊寛我を佛になすと思ひ。捨て置いて船に乘れ／＼と。泣く／＼手を取りひつ立て／＼。詞御兩使賴み存する此の女乘せてた

べと。地よろほひ寄れば瀬尾の太郎。大きに怒り飛んで下り。詞ヤアづくにふめ。左樣に自由になるならば赦文もお使も詮なし。地女はとても叶はぬうぬめ乗れと啀みかゝれば。それは餘り料簡なし兎角お慈悲と驅し寄り。瀬尾が差いたる腰刀拔いて取つたる稻妻や。左手の肩さき八寸ばかり切り込んだり。うんとのれどもさすがの瀬尾差添拔いて起き直り。打つてかゝるもひよろ〳〵柳。僧都は枯木のゐざり松兩方氣力渚の砂原。踏込み踏拔き息切れ聲を力にて。フシ爰を先と挑み合ふ。地船中騷げば丹左衛門舳板にあがり。詞御帳面の流人と上使との喧嘩。落居の首尾を見屆けて言上する。下人ども助太刀すな。地脇より少しも構ふなと眼もふらず檢分す。千鳥堪へかね竹杖ふつて打ちかくる。詞僧都聲をかけ寄るな〳〵。杖でも出せば相手の中科は遁れぬ。地差出たらば恨みぞと。怒れば千鳥も詮方なく心ばかりに フシ身をもんだり。地血まぶれの手負と伽に疲れし痔法師。はつしと打つてはたぢ〳〵〳〵。刀につられ手はふら〳〵。組みは組んでもしめねば左右へひよろりと離れ。砂にむせんで片息の兩方危く三重〽見えけるが。地瀬尾が心は上見ぬ鷲。攫みかゝるを俊寬が雲雀骨にはつたと蹴られ。かつぱと伏せば這ひ寄つて馬乘りにどうど乗つたる刀。止めを刺さんと振上ぐる。船中より丹左衛門勝負は急度見屆けた。詞止めを刺せば僧都のあやまり科重なる。止め刺す事無用々々。ヲヽ科重なつたる俊寬島に其の儘捨て置かれよ。いや〳〵御邊を島に殘しては。小松殿能登殿の御情も無足し御意を背く使の越度。殊に三人の數不足しては。關所の違論叶ひ難しと呼ばはつたり。されば〳〵。康頼少將に此の女を乗すれば人數にも不足なく。關所の違論なき所。小松殿能登殿の情にて。昔の科は赦され歸洛に及ぶ俊寬が。上使を切つたる科によつて。改めて今鬼界が島の流人となれば。地上御慈悲の筋も立ち。お使の越度いさゝかなしと。始終を我が一心に思ひ定めし止めの刀。瀬尾受取れ恨みの刀。三刀四刀肉切る引切る首押し切つて立ちあがれば。船中わつと感涙に少將も康頼も。手を合せたるばかりにて フシ物をも。いはず泣き居たり。地見るに付け聞くに付け千鳥一人がやる方なさ。夫婦は來世もあるもの。詞わしが未練で思ひきりのない故島の憂き目を人にかけ。地のめ〳〵船に乘られうか皆樣さらばと立ち歸る。縋り止めて是。詞我此の島に止まれば五穀にはなれし餓鬼道に。今現在の修羅道硫黄のもゆるは地獄道。三惡道を此の世で果てし。後生を助けてくれぬか。地俊寬が乘るは弘誓の船浮世の船には望みなし。サア乘つてくれはや乘れと。袖を引きたてやう〳〵に抱き乘せければ。せん方波に船人は纜といて漕ぎ出す。少將夫婦康頼も。名殘り惜しやさらばやといふより外は涙にて。船よりは扇を上げ陸よりは手を

上げて。互に未來で〳〵と呼ばはる聲も出舟に。追手の風の心なく見送る影も島がくれ。見えつ隠れつ汐ぐもり。思ひ切つても凡夫心。岸の高見に駈上り。爪立てて打招き濱の眞砂に伏しまろび。こがれても叫びても。哀れとふらふ人とても。鳴く音は鷗天津鴈誘ふは。己が友千鳥。一人を捨てゝ沖津波幾重の。袖や濡すらん。

第三

地 顔回は早く夭して終に四十の花を見ず。盗跖は命長うして既に八十の霜を踏む。生死不定の理は上智博識も辨ずべからずとや。小松の大臣重盛公。御所勞日を追つて衰へ給ひ。和丹両家の典薬配劑露案を盡せども。更に其の驗なく既に大事と見えければ。嫡子維盛を始め通盛知盛重衡資盛。其の外一門の老若寝殿に居流れ給へば。廣庇には主馬の判官盛國。筑後守貞能。彌平兵衛宗清なんど。フシ 心を惱し並み居たる。詞 御典薬和氣の法印奥より立出で。今朝の御脈夜前の通りに相變らず。謹んで御容體を考へ奉るに。是ぞと名付けん御病氣なく。只七情に破られ給ひ。御氣の疲れ御心の結ぼほれ深く見えさせ給ふ。何にても興ある御慰を催し御覽に入れ。地 暫しが内も面白しと御心晴れ給はゞ。御保養となり薬力もめぐり候はんかとぞ申しける。詞 維盛聞き給ひ。實にさぞあらん。祖父入道殿邪の御振舞。歎きは父重盛只一人。一天四海を引受けて御身一つの病となるも理かな。地 何をかな氣もはれて心に叶ふ慰み。方々も思ひ寄り頼み存ずると宣へば。各はつと頭を傾けどうかなナ。ハア何とがなと思案 フシ 評定取り〳〵なり。詞 新中納言知盛進み出で。御慰とて常々目馴れ給ふ事はさして興にもなりがたし。彼の白樂天か酒興山の景氣を倣び。庭前に酒の泉を湛へ美女を集め。琵琶琴調べ謡ひ舞ひ奏でさせば。終に御覽なき事にて。御心の開くる事もやとありければ。越前の三位通盛聞きもあへず。遙向珍しゝさり乍ら。平生酒宴亂舞好み給はぬ重盛公。却つて御氣に障らんか。通盛か存ずるは。同じ酒を用ゆるとも。庭に大竹小竹數千本植ゑさせ。酒の甕をしつらひ七人の樂人に。胡飲酒酣醉樂など舞樂を奏し。竹林の七賢が樂みを倣んでは如何あらん。地 相詰めし者ども存じ寄り遠慮なく申して見よとぞ仰せける。詞 主馬の判官盛國つゝと出で。恐れがましく候へども。我が君常の御戯れにも上を敬ひ下を憐む御心より。毎年御北の御庭に方一町の田をひらかせ。領内の土民を召され。地 耕し植ゆる賤の手業民の辛苦を御覽ある。今年も荒田はすきかへし候へども。御所勞によつて未だ田植の御沙汰なし。地 折しも此の頃の雨に潤ふ早乙女の田植を御覽に入れられれば。御心にも叶ふべしと言上すれば。詞 知盛實に是も興あらん。所詮目錄に書付け伺はんと。詞 人々相具し大床の。フシオクリ 御床の間へ〳〵さして出でらるゝ。地 十返りの霜には朽ちず一

時の。無常の風に枝枯れて。スヱテ頼み少き小松殿。地父入道を諫めかね。世を思ふゆゑ身を思ふ思ひ積りし日蔭の雪フシ消ゆる。間を待つばかりなり。維盛枕に近づき。詞御病中の御慰と一門の心ざし。御望みあれかしと目錄を奉れば。地助け起され脇息にフシかゝるも暫し。玉の緒の。弱りを見せぬフシ親心。披見あつて打ち笑み給ひ。詞重盛が病氣を悲しみ。各心を盡さるゝ返す〲も淺からね。地此の書付の内早乙女に田を植ゑさせんとの物好き。我毎年の慰みにて庭の田の面を見るにつけ。去年の田植もなつかしゝ。用意させよ見ようずるわと宣へば。地盛國畏つて罷立つ所へ。詞熊野本宮の別當湛増白木の箱を携へ周章しく御前に出で。本宮の社壇修覆のため。神體を假に宮遷致す所。いかなる者の所業やらん此の箱をこめて置きたり。私に開かん事後難測りがたく御注進とぞ述べにける。よし何にもせよ推量の詮議無益の至り。それ開け承ると貞能蓋こぢ放せばこはいかに。厚板を削りならし衣冠束帯の人を畫き。總身に四十九本の釘胸板首に矢の根を打ち込み。日本第一三所權現に申し奉る。小松の内大臣平の重盛が運命を縮め。源家の弓箭を擁護し給へ。兩箇の所願偏に冥慮を仰ぐ者なり。願主蛭が小島の住。源の頼朝と書き記し。地調伏の願書を添へ置きたりけり。人々是はと手を打つてフシ呆れ果てゝぞおはしける。地重盛怒りの御涙を。はら〱と流させ給ひ。扨も〱天恩知らずの愚人めやな。去んぬる平治の合戰に既に誅すべかりしを。池の禪尼と重盛が身に代へて願ひ助けし故。扨こそ。流罪してはあれ。彼の唐土の獨角獸といふ獸は。水上の惡毒をおのれが角にてそゝぎ消し。國民の命を助くれども獵師は恩をわきまへず。獨角獸を殺して角を取る。これ頼朝めに相同じ。敵味方となるならば鋒先は磨かずして。重恩の重盛を調伏とはあさましや。此のたび我が病氣は父の惡心やむまじくば。我が命を取り給へと熊野權現に立願しての死病なれば。死するは小松が願成就。詞それとは知らで頼朝が。己れが願成就と。地悦び思はんフシ愚かやな。地重盛空しくなるならば。見よ〱源氏の白旗を秋津洲に飜さん。エヽ恨めしきは入道殿。はかなきは平家の運命一門のなれの果。思ひやられて口惜しやと。怒れる眼に涙を浮べ御聲ふるひ枕をつかみ。スヱテ歎き沈ませ給ふにぞ。御前伺候の人々も實に御道理ことわりやと。フシ各袖をぞ絞らるゝ。よし〱盛衰は天にあり。悔むまじ恨むまじ。時こそ移れ耕作を見物せん。疾々と宣ひて既に。田植ぞ三重早苗とる。フシ水のみどりも。青々と。御簾も障子も明け渡り。いつに勝れし御機嫌と。上下悦び勇みけり。地折から愛宕の里の長手には持てども心には。くはない顔の白髭を土にすらせて色代し。詞なう〱早乙女おじやらしませ。翁があら田をとろりつとならし濟

いて。萬歳 五穀成就君萬歳。民も千秋々々と。詞 水口も祭りすまいた。地 田をばぞんぶりぞ。〳〵。ぞんぶり〳〵〳〵ぞサアナウお田を植ゑよ。はつと答へて早乙女は着つれて笠のおくれじと。手ん手に早苗取りはやす。外に類ひも シテ あら金の。地 土によごれぬ田植歌。シテ うゑい〳〵早乙女。めでたき君がお田植。苗代におり立つて田を植ゑば笠買うて着せうぞ ワキ 笠買うてたもるならば猶も田をば植ゑうよ。シテ 詞 いかに早乙女。想夫恋がほしいか。失せた夫がほしいか ワキ 詞 水上が濁りて。下の歎きが目に見えぬ。地 夫返してたもるならばなんぼ嬉しからうよ シテ 詞 男が見えずばそれなりに。當代のはやり物。地 後家狂ひせよ眉目わる ワキ 詞 エ頼にくの男が。いうたる事や腹立ち シテ 腹が立つならば水鏡見よかし ワキ 水鏡見たれば顔のよごれた世の中 シテ 朱雀の御所の築山に。花の咲いたを見たるか ワキ 實にきつと見たれば シテ 戀の花や ワキ いたづら花やうちや匂ひ渡つた シテ 地 植ゑい〳〵早乙女千町 ワキ 萬町 二人 億萬町の早苗より兄や弟や。妻や子を返してたもるなら民も豊に君が小田は 二人 謡 實のるぞ程なかるらん實のるぞ。オホス 程なかりける。謡ひ終れば一座の人悦び。ざゝめき給ひけり。地 重盛御耳を歛て。田な植ゑさせそあれとめよ。問ふべき事あり早乙女等具して來れ。畏つて雜色ども。御用あるぞ早乙女ども御前へ參れど呼ばはれば。ひつしよ形振り早乙女の手足も土にひれ伏せり。詞 近く寄れ女ども。夫をかへせ子をかへせと訴訟ありげの田植歌。汝等誠の早乙女にあらず包まず申せと宣へば。鍬取りの翁頭をもたげ。仰の如く斯く申す翁を始め誠の早乙女に候はず。君知召されずや。入道相國のお妾常磐御前のまします。朱雀の御所の邊を通れば貴賤に限らず。男たる者かいくれに行方なく。地 再び影も見る事なし。狐狸の所爲とも申し。詞 又は常磐御前往來の男を呼び入れ。放埒いたづら狂ひとも申し。地 兄に別れ弟を失ひ。かゝり子に放れ路頭に立ち飢死する親もあり。夫をとられ泣きこがれ狂氣する女もあり。五十人か百人こそよむに數がぎりもなし。洛中洛外の苦み上にはお耳にたゝぬか。但し知つても知らぬ顔か。詞 此の翁が直訴し重盛公のお耳に達し。御詮議願ひ奉らんと男失ひし女ども。地 何れも早乙女に出立たせ斯くの仕合。推參は御免あれと申し上ぐれば。詞 女子ども聲々に。私むすこは坊主墮。ろくに生揃はぬ物常磐が何にせらるゝぞ。地 我等が兄は提灯屋。張替もないたつた二人の兄弟。詞 こちの夫はから碓踏み。腰から下の強い男 地 惜しい事致したと。誰に恐れも泣き喚く。女心のひとむくろ フシ 思ひやられて哀れなり。地 大臣御息ほつとつぎ。詞 我病に臥して政務を辭し。民の訴を聞かざれば。地 はやかゝる事の出來るは。當家の德の薄きより洛中の騒ぎ。後の禍輕からず。きつと糺し得

さすべしヤア〱彌平兵衛宗清。詞汝常盤が館の次第とつくと見屆け吟味せよ。狐狸の業ならば獵師を以て狩り取らせよ。常磐が不義放埒に極らば。きつと實否を糺し。入道殿へ言上なし御指圖に任せよ。又末々平家の仇となるべき事と見るならば。誰に問ふ迄もなし。入道殿の思ひ者とて用捨な。地常磐なりとも討つて棄て詮ずる所はこれ第一。心得たるかと宣へば。詞宗清謹んで畏り。御諚違背申すにてはあらねども。もと某は源氏重恩の侍。殊に相具し候女房は先年離別の後に相果て。地今生になき身と申しながら。藤九郎盛長が妹。かた〲源氏に好みの筋目。詞剰へ一人の娘を女に付けて別れしが。只今成人していかなる源氏方に緣を組みしも測りがたし。地彼是以て常磐御前の詮議には。源氏無緣の他人に仰付けられ然るべしとぞ申しける。詞小松殿聞き給ひ。地苦しけなる顔ばせに。立腹の色顯れ。詞心得ぬ事をいふ者かな。源氏譜代の汝なれば常磐が常の行跡。心入れも能く知つつらんと思ひよつての事。明日にも源平鎭を爭ふ時。源氏譜代の宗清。軍の御供用捨あれといふべきか。よもやさはいふまじ。源氏昔の恩を思はゞ。今又平家の祿を食む其の恩賞よも忘れじ。地義ある武士と見定めし我が眼力。重盛が臨終も今明日に極つて。明日の夜迄は不定の命。病みつかれて眼くらみ最期に人を見違へしと。死後に小松が名をくだすな。早急け宗清と床の緞帳。フシ御簾もさつとおりければ。宗清あつと頭を下け。詞文武二道の賢將義ある武士との御詞。生前の面目武門の譽。地あはれ御命全うして御馬の前にて討死し。御恩報ぜぬ殘念至極。もし宗清狂氣して御眼力を違へなば。冥途より御手を下郎にかされ。歩に首をさけ給へはやお暇と罷立つ。源氏の恩平家の恩。ひかれ撓まぬ梓弓やたけ心ぞ。三重へたのみある。フシ圍女とや惡口に。地是をもいへば夕づく日朱雀の御所は女護の島。むかしは源氏の春の園義朝の花紅葉。今日は平家の秋の庭。清盛の月雪と。本フシ見手はかはれど變らぬは。常盤御前の起臥の獨りで足らぬ御身持。お腰元の笛竹お髮上の雛鶴が。男見立ての仰せを受け裏の小門の物見の亭。往來の人の風俗を見おろす簾捲上げて。今日も替らぬ役目とて口へも入らぬ善惡に。フシ男待つ風しどけなし。詞なう笛竹殿。いつぞは〱と思ひしが幸ひ外に人もない。常磐樣はお氣合が惡いとて。床も離れず藥もんぢやくいつ浮き〱ともなされぬに。來る日〱も二人か三人か往來の男呼び入れて。お精の強い上々には何がなる物ぞ。あれではお煩ひもなほらぬ筈。地清盛樣へ聞えてはお身の大事。わしらや此方もよいとはあるまい。怖うてならぬと顫ひ聲。詞アヽ氣遣ひない〱。笛竹が何も飲み込んだ。今日は何時より通りが薄い。それでもよい男せめて二人程つらねば其方もわしも一分たゝぬ。地

ヲヽ合點といふ所へ。素袍袴に掛烏帽子こりや歴々の侍。但し公家方の諸太夫か。詞あれ程の人體に破れ扇は不都合な。エそりや儘よ。是そこな烏帽子殿。地ヤアヘ／＼と招かれて小腰かゞめ聲はり上げ。拜ハヤメ萬戸が其の日の裝束には。阿耨菩提の腹卷に。隨求陀羅尼の小手をさし。斷惡修善の臑當をあくち高にしつかと穿き。大唐練小唐練。二振の劍十文字にさす儘に。神通自在の葦毛の駒。歷劫不思議の浮沓はかせ其の身かろげに乘つたりける。ヤツアイエイイヤアホヽ萬戸將軍雲宗とて。／＼。詞アヽしんき。此處へおじやしつほりと言ひたい事がある。地先づ待ちや／＼と雛鶴亭よりおるるを見て。詞エ扨はしつほりか御所望か。拜あら痛はしや蜑人は。海上にうかみ出で。乳の下をかき切り玉を押し込め申したり。乳のあたりにないならば。疵のありたけどこもかも探つて見給へ我が君と只さめ／＼と泣き居たる。詞ム扨はまひ舞か。まひ舞でも蜘まひでも大事ない。是御門の内へおじや。結構な目に逢はせう。地こんな事じやと耳に口よせ。斯ぢや／＼と囁けば。まひ舞色ちがへ。拜ハヤメ萬戸此の由聞くよりも。あら怖や恐ろしや、是龍宮のつゝもたせ三百目の玉搭に。其の外惡魚しかけ物。遁れがたしや我が巾着とフシ跡をも見ずして逃げうせる。詞なう笛竹殿。むだ骨折つたぢやないかいの。いや／＼一のうらは六陸路かろげにそれそこへ。地狀箱かたげ飛脚の足淀から三里に灸もなく。脇差一腰フシさしもぐさ。燃立つ汗にむくつく髭もすけべいの。への字なりが面白い。腰骨太い達者づくり是がお上の好物男。やれそれ遁すな呼び込めと。雛鶴飛ぶより足早に。袖を控へてしみ／＼と囁けば甘い奴。じろりと見た目にほやりと笑ひ。フシ連れて内にぞ入りにける。フシ跡に續いて聞ゆるは。地小歌うたふか何いふぞ。顔見ぬ先の聲のあや。詞鯵やさし鯖かは鯨めぐろ。鯛のすき賓干かます鰹節。干鱈鹽鯖だら／＼と。フシだらつき聲にて通り行く。それ雛鶴その魚賣呼びやいなう。詞イヤ／＼今日は義朝樣の精進日。せめて冥加に魚賣は遠慮なされといふ所へ。地旅する武士の高からげフシ股引脚絆頬かぶり。南の方からそれ來たぞ。まつかせやらぬと雛鶴が囁く顏をふり切つて。行き過ぐるを縋りつき。猛き武夫の心をも柔ぐる。歌も戀路を種と聞くハオクリいかなる。武士もいな船の押すに押されぬ。此の道を。フシとまらせ給へといひければ。詞さすが岩木にあら男。心弱くも立ちとまる。所は朱雀の御所の門オクリつれて入る日もくれ過ぎぬ。フシ常若御前の。帳臺の夜の光りは雲井にも。劣らぬ露の奧座敷あひの。詞廊下を笛竹が晝の飛脚の手を引いて。フシ案内をてらす燈火に。地動きもやらず立ち止まり。詞こりや何處へ連れて行きめすぞ。地白癩歸してくれられよと齒の根も合はぬ胴ぶるひ。詞これ怖い事何

にもない。此の奥に御座なさるゝは聞及びもあろ。千人中から百人選み。百人中より十人えり出し。十人の内に一人勝れた常磐御前とて。それは〳〵美しい君。そもじにたんとほの字ぢやと嬉しいか。これ。地こんなめに逢ふ事と囁けば身を捻ぢて。低につくろつぼ〳〵口。詞エ嘘ばつかり。おらが様な者に此のかま髭で。頬ずりは痛かろものわしやいや。エ氣の弱いこれ地此の帷子着ていきやと。帶引きほどく肌は鍋の底氣味わろく。詞こりや何といふ帷子。ムヽ柔かな身について動かれぬ。いはぬ事はわるい此の帷子も着取り。我等が身の廻り一色も散らす事ならぬぞや。地それを氣遣ひする事か。夜ふけぬ内に爰からと杉戸開いてつき出せば。一足行ては蹶づきすべる飛脚の臑つはぎ。さるにても我千里を股にかける商賣。一度も歩みかねぬ身が。一足も動かれぬ。智惠こそあれと四つ這ひにオクリはふ〳〵明くる障子の内フシ燈火幽かに寝姿を。見るよりぞつと身もしびれ。蚊帳の外に蹲り。伽羅の薫にむせ返る。地蚊帳の内より常磐御前。手を引きよせ是待つて居るサア爰へ。此の手のきやしやな事わいのと。じつとしめられ現をぬかし。こりやあんたる因果骨。めき〳〵いたす御免あれ。お辭儀申さぬ申さぬと。蚊帳引きあげてぬめ込む常磐は押へて。詞アヽ待ちや〳〵。眞實抱かれて寢る氣なら。我がいふ事を背くまい。他言せまいと此の誓紙に血判すゑて上の事。物も書くらめ是見よと。地袂の内の一巻を渡せば取つて押しひらく。杉戸の外には笛竹が耳を欹て息を詰め。窺ふ内のひそ〳〵迄フシ洩るゝ方なく聞ゆらん。地讀みも終らずわな〳〵顫ひなう恐ろしい文言。是に判形存じもよらず命が大事と駈出す。大事を知らせて行なさうかと引きとむる常磐の小腕取つて突き退け。爰を大事と足はやく。走る杉戸に額打つやら當るやら。やう〳〵に押開きぬつと出れば笛竹が追取刀につつ立つたり。つとわなゝき身を縮めフシ二度顫ひあわてける。詞コリヤ男。常磐御前に頼まれて源氏の方人申したか。奥の様子をサア語れ。なう勿體ない今の世に見る影もなき源氏に頼まれ。平家の咎め何とせう。思ひもよらずと言はせもあへず。地抜打に向ふさま天邊より太腹まで。節々込めてから竹わり二つにさつと笹の露。散る魂のもぬけの殻。廊下の敷板こぢ放し掘置く土の穴かしこ。人には見せじと骸を取つて引きずり込む。音に驚き雄鶴刀提げ出で何と首尾は。詞されば〳〵見かけによらぬ卑怯者。いつもの如く切つて棄てた。一味して戰場に討死するも死は同じ。地愚人め故に今日も亦思はぬ殺生南無阿彌陀。エヽまだるい念佛どころか次の男がもう爰へ。いつも通り死骸は埋む。跡を首尾よう〳〵とオクリ縁の〳〵下へ這入れば。地笛竹手水の水汲みかけ。流す血汐のからくれなゐ神代も聞かぬ女業。あたりに目を付け

目の鞘はづす刀の血痕。押し拭ひ〳〵袖にをさめし顔容。權輿なりふり引きつくろひ物音うかゞひ立つたるは。昔神功皇后の娘の時もかくやらん　フシ外に比ひもなかりけり。地續いて以前の侍人目忍ぶの頬かぶり。笛竹に近付き。詞誰鶴とやらの物語に。奥の樣子承る。よい年をしてなんど蔑視も恥かしゝ。地頬かぶり御免なれ御案内と述べければ。詞アヽ御案内申すまでもない。此の廊下をと戸を開けば。地月さへ洩らぬ長廊下たどり〳〵て閨の内燈火そむけかけ香やそら薫物ふすべられ。蚊は一疋も夏の夜の　フシ蚊帳ぞ閨のしるしにて。地忍へん〳〵打ちしはぶくも聲清めり。詞待ちかねしものこれ男。思はせ振りの咳なんぞ。どなたの花か知らねども。地今宵ばかりの一枝は折りも盗みもお許しと。蚊帳越に抱きつけばとかうもいはず振り放す。エ詞憎く。もがかせて慰む氣か。地清盛といふ人なくばいつそ女房になりたい。ハア鐘が鳴る夜が更ける。爰へと蚊帳押しのけいつ迄包む頬被りと。取つて引きのけ顔見合せ。詞ヤア彌平兵衛宗清か。地なう恥かしやと押しうつむきスヱテ消えも入りたき風情なり。地宗清常磐に目もやらず顔打ちふつて獨言。詞あつぱれ宗清は今小松殿といふ能い主取つた果報の武士。古への如く源氏を主人と仰ぐならば。世間に恥辱をかゝん物。ハアヽ嬉しや〳〵。俊寛が妻のあづまやが最期の詞。常磐が如き汚れた根性さけまい物。道知らず淫奔者と笑ひ誹つて其の身は伊弉冊尊以來。貞女の手本を世に殘し。刄に伏して空しくなる。地思へばあづまやは四相を悟る女賢人。小松殿も賢人。詞平家の仇となる事あらば常磐とて用捨すな。討つて棄てよとの仰せ。地淫奔に極れば平家に弓引く仇にもあらず。其の身ばかりの恥辱か義朝が屍の恥。詞牛若といふ倅が生先源氏一統の恥辱。恥さらしさりながら。今宗清が主でなければ構はぬこと。狐狸が人をばかし失ふにもあらず。地常磐が不義放埓と申しあぐる上の事と。ずんと立てばなう暫くと引きとゞめ。詞常磐が不義とは情なや。俊寛が妻の自害は身の貞女を守るばかり。死んで源氏の爲にならばあづまやづれに負けうか。生きて心の辛抱は。アヽ恐らく常磐には及ぶまい。牛若を助けんため清盛が心には從へども。病と偽り帯といて一度も肌を汚さぬ者。そもやそも往來の人を呼び入れて仇の枕を並べうか。詞牛若は日陰者誰を便りに詮方なさ。往來の人を呼び入れ色に迷ふは男の習ひ。騙し賺したらし込み心を見屆け。地從ふ者には源氏一味の血判させ。牛若に義兵を上げさせ。平家一門の首を見ん爲と。いふ詞を打ち消して ぬかすな〳〵。詞嘘つきの常磐め。今おのれが不義を見付けられ。當惑しての造り言。地聞くも弓矢の汚れなりと。立つて行くを又引きとめ。詞いや常磐に不義のない事は聞いても聞かする。聞かでも聞かすると。地む

さほりつくを取つて突き退け。エヽ平家に敵たふ常磐ならば。討つて棄てよと御意を請けた宗清に。僞り者恥知らずと懐中の巻絹。一捻ねぢて丁々々。淫奔者とてはたと打ち不義者とて丁と打ち。詞さけがみ黒髪を フシ寢くたれ髪と打ち亂す。地杉戸隔て笛竹が南無三寶顯れしと。裙はし折つて杉戸蹴放し。袂の下の二尺三寸隙をあらせず切りかけたり。老功の宗清抜き合せ渡り合ひ。ふみ込み／＼打合ふ音。常磐驚き杉戸はづし引つかゝへ。あひの小楯と身を捨てて前におほひ後にへだて。とめてもとまらず抜けつ潜つつ。太刀と／＼の閃く影。暗夜の稲妻流るゝ汗 フシ軒の雫の如くなり。地常磐御前聲をかけ。詞おとなげなし宗清。はやまるな牛若丸母がいふ事聞かぬかと。地制せられ飛びしさり。詞エヽ無念な源の牛若が。大事を思ひ立つゆゑに母上と心を合せ。下女腰元に樣を變へ心を盡すと聞くならば。忠節をなすべき所。主君たる母君をなぜ打つたなぜたゝいた。ヤア主君とは舌長なり。彌平兵衛宗清が今の主人は平家の大將小松殿。平家の仇となる者は討つて棄てよ。義ある武士と見極めしと御目がねを以て向うたる宗清。不義放埓の常磐手を以て打つも腕の汚れと。地肌身も放さぬ此の雜巾を以て打ちたるは。有難しとは思はぬか。不義者の恥知らずに廻り逢ふ事あるべきかと。隱し置きたる此の雜巾。親子の恥を押し拭ひ／＼。早立ち退けと巻絹取つて。牛若の額にはたと投付けたり。詞エヽ推參なりいで切り裂いて捨てんずと。引きほどけばこはいかに。地正八幡大菩薩とあり／＼記せし源氏の白旗。二人ははつと押し戴き。詞我々にめぐり逢ふ迄と肌身も放さず持つたるとや。地今此の旗を拜する事父義朝の蘇生とも。千騎萬騎の味方とも此の上のあるべきか。奥深き宗清の心を忖らず卒爾の雜言。許してたべ宗清と親子手をさけ。頭をさけスヱテ伏沈み給ふを見て。色には出さず宗清も。つれなの人界や譜代の主人に手をさげさせ。冥加なし勿體なし痛はしとさへいひやらぬ。奉公の身のあさましやと思へば胸も裂くるばかり。萎るゝ瞼を見開き／＼。せき來る涙を飲み込み／＼。フシ澁面つくるぞ哀れなる。詞ヤ主人顏して怪我するな。牛若と聞けば遁されぬ。宗清を一太刀討つて親子共にはや立ち退け。地サア立ち退けとせきければ。ヲヽ誠ある宗清の詞は父の教訓。いざ立ち退かん尤と走り出づればこれ／＼。詞小松殿御眼識の宗清。おめ／＼と見遁して我が武士道立つべきか。此の宗清を一太刀うて討つて立ち退け／＼と呼ばはつたり。地ムヽ尤と牛若飛びかかり太刀振りあぐれば。常磐は縋つてやれ情なや。心ざしの宗清に太刀をあて天の咎め氏神の御罰。苔の下なる義朝の御照覧も恐ろしゝ。たとへ親子が此の儘に一生を朽ち果すとも。道を立て義を立て誠を盡す侍に。何と刄が當てられフスヱテ許し

てくれと泣き給へば。詞ニヽいひがひない。薄手も負はず落しては。宗清が武士が廢るが。いやそれでも切らさぬ。いや討て。地いや討たさぬと義を爭ふ。詞エヽ曲もない。腹を切るは易けれども。敵を見てぬく〳〵と腹切つては逃げたも同然。地小松殿の御詞昔はともあれ。今は平家の祿を食む。詞我が死後迄も眼識を違へな。畏つたと請合し一言は須彌山より猶重し。地彌平兵衛が一生の廢ると知らぬ恨めしやと。睨みつくる血眼に涙も交る聲の下より緣の下。敷板のはづれより宗清が弓手の高股ぐつと通す切先は。フシ朱に染みて顚れたり。地人々はつと驚けば宗清につこと打笑ひ。詞ハヽア誰かは知らず我を突きしは源氏の忠臣。サア宗清こそ牛若に出合ひ。深手を負うて討ち洩らした。ヤレ退け〳〵と呼ばはる隙に。地牛若緣の敷板引きのけ給へば。雛鶴が顏も容も朱に染みて這上り。なう懐かしの父上や。一歳母上に連れて別れし娘の松が枝。今の名は雛鶴ゆかしう御座ると フシばかりにて縋り。付いて泣きけるが。地母上に後れてより常磐様に仕へても。我宗清が娘とは今日といふ今日いひ始め。最前よりのお詞始め終りを緣の下にてつく〴〵聞き。お主の命も助けたし父上の武士も立てたく。親の身に刄を當て八逆罪を身に請けしは。親と主との フシいとしさゆゑ。詞サア牛若様常磐様。早うおのきなされませ。なう父上しるしばかりにちよつと切らうと思うても。推當の切つ先が 地悲しや思はぬ深疵。たつた一言許すといふ。詞をかけて下されと。血を吸ひ拭ひ フシ疵を撫で聲も惜まず泣き居たる。地宗清も諸共に フシむせぶ涙を押しかくし。離別の母が娘なれば。詞親でなし子でなし。女なれども源氏の郎等。平家方に刄を當て許せとは何事ぞ。源氏方には誰ならん。藤九郎盛長が姪松枝ならずや。緣の下より突かずともなぜ名乘りかけては討たざるぞ。地宗清が怖いか卑怯者め腰拔め。とはいひながら出來しをつたと フシ引寄せて縋り。付いて泣きければ。地常磐御前も牛若も扨はおことは宗清の娘かや。血筋程有る心ざし子といひ親といひ。斯る忠義の武士の敵になつたる源氏の運。此の行末も如何ならんと。四人顏を見合せてスヱテわつと泣き入るばかりなり。宗清は猶泣かぬ顏。詞ヤイ慰みに人切るか。主君を落す爲ならずや。地お供申して立ち退けほえな〳〵と突き退くれば。詞いかにもお二人落しましよ我が身は殘つて父上の。地看病させて下されと。又立ち寄るをはつたと睨めつけ。詞母さへ離別したるもの。看病とは狼狽へしか。手負に心を揉まするな。勘當といはぬを嬉しと思はぬか。地但し勘當請けたいか不孝者めと呵るも涙。アヽアアお供しませうお供せう。アレ父の心ざし立ち退いて下されませと。なく〳〵涙も顏の血も。押し拭ひ〳〵先に進めば親子の人。身の大事をも思ひやり。宗清父子が忠節も

思ひやる方 フシ涙ながらに出で給ふ 地宗清つゝ立ち。詞牛若やらぬ常磐やらぬ。地エ足が立たぬ口惜しやと。態とよろ〳〵どうど轉び。おのれか程の薄手にひるみはせぬと又立ち上つて太刀を杖。よろり〳〵とよろめく姿。見かねては立ち戻り遁さぬ遣らぬは聲ばかり。兩方泣き顏睨む顏。閃くばかり刄向もせぬ。勇者の振舞情あり恩愛あり哀れあり。分別あり仁義ある心は太刀の光りに見えて。義理にひかるゝ牛若君。親にこがるゝ雛鶴が翼しをるゝ涙の雨。常磐の森の木の葉の露落ちて。行くこそ哀れなれ。

第四 舟路の道行

フシ頃は文月。なかばの空。都方にはなき魂を。迎へて歸る槇の露。是も都へ歸り行く。船にぞのりの誓ひにて。スエテ鬼すむ島を遁れ出で。少將成經康頼は。歸洛の船の。旅衣 フシ今着て見るこそゆゝしけれ。アミドフシユリ千鳥。ひとりは。泣きこがれ。假初に親と頼みし俊寛を。跡に殘しておきの島。又あふ島を漕ぎ放れ。餘所に見捨てゝゆきの島。長地硫黄が島より地の島まで海上七々四十九里船繫ぐべき磯もなく。蒼海天に連つて。雲に漕ぎ入る沖津船オクリながめも。遠く漫々と。北は三韓。フシ壹岐對島。南は香椎宇佐八幡。そも〳〵此の三御神は。すべらぎの御代始りて十六代の尊主。應神天皇。御裳濯川の底清く神德普き夢想の告げ。鳩の嶺に鎭座あり。他の人よりも我が人と。誓も固き フシ石清水。今すみのぼる我々が。二度帝都の雲を踏み。九重の月をながむる事 皆神明 の擁護ぞと。スエテ おのおの法施を奉る。波の白木綿青幣。フシかゝる遠國。波濤にも。名所は音に響きの灘鐘が岬にあけ渡る。箱崎の松宰府の梅末は蘆屋の。浦傳ひ蟹の。漁火影もなく。松吹く風の聲ばかり。今行く船に通ひくるオクリ苫より〳〵くゞる滴は。小倉の雨の糸に似て。セツユリ波も縮や織る。らんと心を フシ結ぶ。中空に。初雁がねの雲間よりちら〳〵。〳〵散し書。フシ誰が玉章の文字が關。和布刈の明神ふし拜み。朝の滿干の玉島に。つゞく光や茜さす周防灘とは是かとよ ホオクリ濡れた。妾のあの姫島はナたが恩。はくの所緣ぞとナ沖のかぶろに。フシこと問へば。灘の男波が打ちよせていつも添寢の床の島。京とまりては上の關。フシあすは都も。程近く阿伏兎御手洗ひ久留米島めでは。四國の海面を。走る兎の月を越え。暮れては明くる日の烏かろ。〳〵たる海の原島々。浦々幾港風に任せ艫に任せ。スエテ船は備後の敷名の浦。汐待。してこそゐたりける。

地俊寛僧都の郎等有王丸。主人の遠流赦免ありと聞きしより。夜を日についで備後の國 フシ敷名の浦に着きけるが。地磯に寄せたる登り船すはや是かと渚におり立ち。詞是々御船へ物問はう。鬼界が島の流人歸洛の船は何國迄參りしぞ。類船などはなされすか。地俊寛が郎等有王丸と申す者。御存

じならば敎へてたべ。なう是こそ尋ぬる流人船。丹波の少將成經平判官康賴と。舳板に踊り出で給へば。詞御堅固の歸洛重疊千萬。法皇の院宣小松殿の情によつて。主人も赦免と承る有王丸御迎に參りしと。地憚りながら御傳へと聞くより二人は打ちしをれ。千鳥を呼出し引合せ。詞是こそ俊寬の養ひ娘。僧都と思ひ宮仕へせられよと。地有りつる島の物語。有王はつと途方にくれ。詞エヽしなしたり口惜しや。あづまや御前の最期にも。一足違うて御命助け得ず。腹切つて申譯と思ひしかど。地島に僧都のましませば無念の命ながらへ。待ちおほせたるかひもなく。よつく佛神にも捨てられしか。娑婆の奉公是迄。腹かき切つて冥途の忠義急がんと。既にかうよと見えければ千鳥陸に駈上り。詞なうはやまるまい。此の度歸洛なきとても。死失せ給ふお身でもなし。地御先途見屆けうと思ふ氣はないかとスヱテ縋りついて止むる所へ。浦守の下人

駈來り。詞コリヤ〳〵其の船漕いで行け。嚴島御參詣。此の浦に御船がかゝる筈。地やれ其の小船漕ぎのけよ。急げ〳〵といひ捨てゝフシ次の里へと走りゆく。地丹左衞門尉基康。有王丸を船近く招き寄せ。詞成經康賴歸洛の趣清盛公へ訴へん。此の女性を同船の事咎められては事むつかし。地俊寬が養子娘なれば汝が主人屹度預くる。是より陸地を同道して都へのぼれ。アレ舟歌の聞ゆるわ。はや御船も程近しとフシ船をかたへに漕ぎのくれば。地有王千鳥を介抱し。一村繁る蘆蔭にかくるゝ程も波の上。はや御座船の棹の歌。舟唄やんれ龍頭鷁首の金の。樋やア玉の棹綾や。錦を帆に上げてやらんやら。鱚釣る磯邊にナホス錨をおろしける。地流人船漕ぎよせ。詞丹波の少將成經平判官康賴を召具し。丹左衞門尉基康只今歸洛仕る。御披露と訴ふれば。地御簾あげさせ船館に法皇安座ましませば。席

をならべ清盛入道。詞我が下知を背いて俊寬も歸洛させよと。病ほうけたる重盛をたらし。赦文くださせたる者ありと聞く。俊寬も連れ歸つたるか。御諚の如く一所に歸洛すべき所。瀨尾の太郎と不慮の口論によつて。瀨尾を討つたる科に任せ俊寬は直に彼の島に殘し置き候と申し上ぐる。地法皇はつと御驚き。入道くわつと色を損じ。詞しやつ憎い俊寬め。首取つてはなど歸らざるぞ手ぬるし〳〵。地成經康賴も心ゆるされず。汝に預くる連れ歸り。屹度守れ急けやつと怒りの顏色。畏つて船押切りフシ基康。都へ歸りける。地清盛法皇をはつたと睨み。潮も逆卷く大聲上げ。詞ヤア位ぬけ殿法皇殿。保元平治より此の方朝敵に捕まされ。天下暗闇となりたるを悉く切り鎭め。法皇といはせた入道が恩を忘れしな。動もすれば平家を滅せ入道を殺せなんど。俊寬を始め人を語らひぬつくりとした事たくまれし。地今迄は常磐といふ女人質に取り置

きたれども。詞牛若冠者めが奪ひ取り東國へ逃げたれば。一寸も油斷ならず此の後平家追討の院宣など。賴朝牛若に地やられては飼犬に手をくはるゝ道理、海へ投込み人知れず殺さんため。嚴島參詣と僞り是迄はつれ來れども。詞根性腐つても王は王。手にかくるは天の恐れ。地自ら身を投げ給へば清盛に罪はなし。サア身を投げ給へ早う〱と極惡聞くに堪へかねて。磯には千鳥有王丸出るも出られずさし覗き。只はあフシ〱と身をひやす。法皇御衣に御淚を掛けながら。天照大神に見放され奉ると思へば。フシ世にも人にも恨なし。地神武の正統八十代自ら身を投げし例を聞かず。入道が心に任すべし。只末代こそ心憂けれとばかりにて昔を慕ひ行末を。忍びかねては咽せ返り歎き。沈ませ給ひける。詞入道が心に任せよとあるからは。殺せとの事な。ヲヲ院宣は背かじと。地勿體なくも取つて引寄せ。兩足かいて眞逆樣フシ海へざつぶと投込みたり。コハリ汐に引かれて玉體は、沖に誘はれ磯に打ちよせ浮きぬ。沈みぬ漂へば。地千鳥はつと走りいで續いて海に飛入りしが。足立つ程は立ちおよぎお命すくひ奉らん。必ずお身をもむまいとコハリ乘越す汐には拔手を切り。泳ぎのぼればさら〱さら。さゝ波高く押し流され。ナホス見る目を力にたぐりくる〱漲る波を巴の字に開き。ハツミ渦卷く。逆卷く波枕。地海に馴れたる海士の業ずつと水練に姿も見えず。船には弓鎗太刀長刀。刄をならべ眼を配り浮かば切らんと待ちかくる。陸には有王身をもめども烏が鵜の眞似せん方なく。拳を握つて控へたり。詞清盛いらつてヤアうつそりめら陸を見よ。俊寛が下人有王丸。先づ彼奴から打殺せ。地畏つて飛びおり〱命知らずの前髮首。さら、落して根付にせんと憎體にのさばれば。詞有王くつ〱と打笑ひ。口有る儘にほざいたり。物ほしい折からよい地慰みと。面もふらず割つて入り磯打浪のまくり切り。木の葉を誘ふ山おろしもみ立て〱三重〽きり散らす地有王に切りまくられフシむら〱ばつと逃げ散つたり。地難なく千鳥法皇を肩に引かけ浮み出づれば有王丸。詞ハアヽお命安全めでたし嬉しゝ。地こつちへ任せと波打際におり立つて。背中に潮を淨めの垢離。法皇を肩に負ひ奉り。フシ足に任せて落行きける。地其の隙に清盛長熊手押取りのべ。千鳥が頭にさつくと打込みえいや。〱と引き汐にさからふ千鳥が浮きくるしみ、舳先にどうど引上げ背骨を踏まへ。詞誰に賴まれ憎い海士め。引裂いてくれうか。エヽ腹立ちやと胴骨をしつかと踏まへて睨付くれば。オヽ踏殺せ喰殺せ。俊寛が養子千鳥といふ薩摩の海士。あづまや樣は母樣同然。母の敵父の敵の入道。法皇樣は一天の君。地お命に代ると思へば數ならぬ。海士の此の世の本望。殺されても魂は死なぬ。一念のほむらとなつて。皮肉に分入り取り殺さいで

置かうか。エヽ無念やと怒りの齒ぎしみ恨の涙。磯打波に村雨の フシ篠を亂すが如くなり。肝の太い入道に取りつかんとは。詞蟷螂が斧鉞より是見よと。地さそくに掛けてえい／＼。フシ頭微塵に踏碎き。かはと踏み込む波逆巻き。コハリ潮の響き震動し。死したる千鳥が軀より顯れ出づる瞋恚の業火。淸盛の頭の上車輪の如く舞ひくるめく。そつと身震ひ色かはり。ナホスうんと一聲顚倒し フシ目口をはつて戰きける。地隨身雜色是はと驚き抱き起し。藥よ水よと呼び生くれば。すつくと立つて邊を眺め。詞汝等は何も見ぬか。ヲヽ氣味わるし／＼。法皇も逃げば逃がせ。地命が物種都へ歸らん船急げと。水主揖取玉の汗。海は水玉火の魂は。離れず去らず都の空慕ひ。行くこそ 三重へ 恐ろしき。地身亡びんとする時は災害ならび臻るとかや。扨も入道相國御心地例ならず。殊更御所中さま／＼の妖怪。或は家鳴光物色々の姿顯れつ 物怪しき事限りなくいか樣變化の業ならんと晝夜をわかつて宿直の武士。そよと物音風音に火鉢の白灰の動くをも。フシ心を配つて守りける。地常に外樣の男とは顏見合すも法度にて。互に心おく女中。二十三四の色ざかり町の風とは一位。顏も姿も格別に。土器瓶子携出で愛想らしく手をついて。詞私は入道樣の御臺所二位の尼君樣のお使。今日はいつ／＼より心を付けてのお宿直。化物も顯れずお心の騷ぎもなく。上にもすや／＼お鎭まり一しほ二位樣の御滿足がり。酒一つめされて。地いよ／＼御番油斷なき樣に申せとの御事なりと述べければ。各はつと頭をさげ。中にも番頭難波の次郎經康。詞冥加にあまる仕合せ御禮は使のお取りなし。ついては外樣の我々。御不例の御容體しかと存ぜず。憚りながら御物語りと尋ぬれば。さればいな。過ぎつる嚴島の御下向より夜晝に四五度つつ。只身が燒けるあた／＼とばかり御意なされ。お熱のさす折からはあたり四五間の熱さ／＼。眞夏の土用に百二百のお釜を。一度に焚く樣なと思はんせ。御看病申す私始め一人もお側へは寄付かれず。せめて御心も凉しい樣と。御覽なされあの如くお庭に水船を据ゑ。比叡山千手井の水は日本一の冷たい水。毎日々々汲みよせてあの筧から流し込み。ずつぼりと水に浸り。お頭からさつさと。音羽の瀧にうたるゝ樣になさるれど。その水さへ沸湯の樣に成りまする。地お熱のささう知らせには此の御所が鳴り渡り。あそこの隅がめき／＼／＼。爰の隅がぐわた／＼／＼。半分聞いて一座の者そろり／＼とにぢり寄り。詞して其の跡は何と／＼。此の跡が猶怖い。かう並んで居る疊の下がむく／＼むく。何がお目にかゝるやら。空を睨んで。ヤイ又來たか。地ソリヤ來たわ遣らぬとてはがさ／＼／＼。遁がさぬとてはどた／＼／＼。それは／＼恐ろしい事と。語れば座中色青ざめ フシ片息になつて聞きゐたる。

地難波の次郎氣層者。詞いやさ變化ばけ物は臆病な氣を見すかして業をなす。難波かくて候はゞ天狗にもせよ鬼でもあれ。障碍思ひもよらぬ事。地あはれ化物かう言ふ内に來れかし取つて捻ぢふせ手取りに致し。樂いらすにさつぱりと御快氣を見せ奉らんと。目に見ぬ先の口廣言。女につゝと會釋して。詞天狗の鬼のといふ迄なし。誠は我はあづまやとて 地俊寛が妻の幽靈ぞや。サァ手取にして見よといふより姿はつと消え。忽ち人の髑髏座中 フシ一ぱい充ち滿ちたり。詞には似ず倒顚し。ヤレ恐ろしやなう怖やと駈出す裾を引つ咬へ。追廻し追ひすくめ逃げもやらず居もやらず。念佛陀羅尼お題目一つごつちやに髑髏。上になり下になり轉びあひ轉びのき。火鉢の中へ飛び入り／＼ぱつと燃ほる煙の内。一塊に山の如く頭一つに目は百千。睨む光りは流星の渦巻きあがる如くにて。わつと戰き肝を消し轉けつ轉びつ逃げちれば。俄に家鳴り震動し フシ大地も崩るゝばかりなり。地能登守教經萠黄匂ひの腹巻。上には狩衣引違へ重籐の弓張月。星切斑の尖り矢搔込うで大床に踊出で給へば。女の姿又顯れ。詞珍しや教經殿。我あづまやが幽靈なるが御身臺目を以て。我を追退けんとの 地弓矢の威光に壓され。情なや入道に近付く事叶はねば。恨みを報ぜん フシ樣もなし。詞情ある能登殿に恨みはなし。地弓矢をふせてスヱテ歸つてたばせ給へとよ。詞何あづまやが幽靈とはことをかし。化損ひの古狸。正體顯せさもなくば能登が一矢と引きしぼる。地後に女の又すつくり。我は千鳥といふ女和殿に受けたる恩はなし。歸れといふに歸らずば。入道諸共同じ憂目を三瀬川。來れと響しつかと取り忍いと引かるゝ梓弓。教經聽せず拂ふ本弭末弭に恐ろしや三十番神まし／＼て。魍魎鬼神は穢はしや出でよ。／＼とせめ給ふぞや。腹立ちや思ふ人をば取らで剰へ神々の。責を受くるか口惜しやとスヱテかつぱと轉べば大音上げて正四位下能登の守平の朝臣教經と鳴弦し。きり／＼と引きしぼりひやうと放つ矢叫びに。二人の女も行方なく。忽ち障碍消え失せて。御所の震動安全たり。地二位殿悅び帳臺を出で給ひ。今に始めぬ教經の弓矢の德お手柄／＼。詞是に付けてもなう過ぎつる夜。地我が見たる夢ばなし能登殿近うと招き寄せ。聲をひそめ目は涙。いふも語るも忌はしや。詞音に聞く火の車といふ物か。牛の面馬の顏なる鬼どもが。猛火の燃立つ車一領御所の内へやり入る。恐ろしや此の車にいかなる者を乘するぞと夢心に尋ねしに。平家の太政入道殿惡行超過し。閻浮第一の大佛を。燒亡し給ふ科によつて無間地獄へ沈めよと。閻魔王の仰にて迎ひの車と答へしが。地夢は其の儘さめつるぞや。神明の守も絶え三世の佛の綱もきれ。ながき苦患や見給はん今度や娑婆の限りかと。思へば氣も消え入道殿より自らが。命ぞ先へとばかりに

太刀抜き放し。現の人に詞をかはすゐいやつとう。虚空を相手に八方無隅受けつ流しつ切り合ひしが。飛びしさつて身がまへしヤア。詞此の大首は何者。何ぢや奈良の大佛ぢや ハヽ〳〵ハヽ〳〵事をかし〳〵。清盛に燒潰さるゝ身を持つて何の恨み。何の仇歸れ〳〵。地何歸るまいとは又あづまやか遁さじと。ちらめく焰に打つてかゝれば後より。引戻すは千鳥が妄執その魂がつきまとひ。引付くるを事ともせず切拂ひ〳〵。衣服脱ぐ間もあら遅やと水船に飛入つて。頭をひたし身に浴びかけ暑さを凌ぐ有様は。劍に鍛ふ燒鐵を水に入れたる如くにて。フシ殿中ふすぼるばかり。地すは又響く家鳴につれあづまや千鳥二人の姿。筧の上に顯れ出で。詞さなきだに女は五障三從の。相ノ山重きが上の。憂き思ひ夫は。いづくと不知火の筑紫の。果や國の果。合鬼界が。島に。流されて。跡に。こがるゝ閨の内。祭文辛苦せねども顔やせて。戀しゆかしの日に添へば。今は心も。亂れ髪夫の。歸洛を。いつかはと。待ちかねし身を。むごらしや解けとせつきし下紐の。解かれぬ義理に ナホスフシ身を捨てゝ。地永き別れとなしたるも不義より起る心の劍。我と身を切る最期の一念。盡未來際生々世々。放れじ退かじとはつたと睨む眼の光。矢を射る如く照輝き フシ五體を劈くばかりなり。地我を土足にかけまくもしづみし君を助けたる。科とて殺す心の刄。非道の 蹴 大地を劈き。島に殘せし父上も今は冥土の友千鳥。汝も冥土の友鳥同じ闇路の苦患を見よと。頭をつかんで引きおぐれば。天にもつかず地につかず。中有の呵責を今爰に。瞋恚の猛火は雨と降り來るくる〳〵〳〵。まつ倒さまに落ちて奈落の苦みを。思ひ知れやと怒りの顔ばせ恨みの息つぎ。照日にうつろふ明鏡の。フシ光り渡るに異らず。地父の憎しみ身の敵妻の罪障身のほむら。今こそ最期といふ聲許り姿は消えてもえ立つ焰。筧に入ると見えつるが流るゝ水の忽に。焰となつて落來る音。コハリ渦巻き上る黒煙に御所中俄に闇となり。目前焦熱大焦熱。ナホス火盆地獄の有様も斯くやと フシ覺えて凄まじし。地入道叫んで発せ〳〵熱や〳〵堪へがたや。苦しやのやれあた〳〵と身をもがき。漸々に這上り小袖引きぬぎ裸身を。もしやとずつぶり石船に浸せばくら〳〵。コハリ水は其の儘湯と成つて滾返り煮え返り。湯玉虚空に迸り。業火の筧心火の瀧。五體に焰をいたゞけば百節の骨頭。爛々燃上り。爛裂けてナホス炭の如く。一世の悪逆身に積り年も積つて六十四。治承五年閏二月四日の日に。熱や〳〵の焦れ死生火葬とは是やらんフシ哀れはかなき最期なり。コハリ依正兩輪の火の車雲中にとどろけば。清盛の胸中より車輪の様なる光り物。顯れ出でて虚空にあがり。ナホス車に乗ると見えつるが。無の字の筆畫あり〳〵と無間の底に沈むべき。二位殿の夢の告げ今こそ 三重

へ思ひ知られたり。地今こそ本望遂げたりと虚空に上る二つの玉。邪見の長柄を押立て〳〵立去る車の響きに驚き。二位殿あわて出で給ひ。見れば敢なき面影のいぶせくも悲しくも。空を仰ぎてわつとばかり歎き。沈ませ給ひける。地人々立寄り諫め參らせ奥にいざなひ奉り。清盛の御骸を津の國兵庫の名にし負ふ。經が島にぞ納めける天子の外祖とかしづかれ。此の世に極る位をふみ六十餘州に威をふるひ。古今獨歩の人なれども。又かへり來ぬ死出の山三途の河瀬中有の旅。つくりし罪より友もなき妻子珍寶及王位。臨命終時不隨者の。佛の金言目のあたり。身の毛も立つて世の人の永き。敎へとなりにける。

第五

次第 思ひやるさへ遙かなる。〳〵東の旅に急かん。詞是は高雄の文覺なり我伊豆の國の流人。右兵衛佐頼朝をすゝめ。平家追討の義兵を起させばやと思ひ。ひそかに院宣を申し下し。只今伊豆の國蛭が小島へと急ぎ候。ナホス詞ア、づなう草臥れた。意地にも我にも百里足らず。二日にはきつい道。とろ〳〵と見知らして又一息にやつてのけよ。さらばころりと臥柴の。地枕にかりの頭陀袋。寢るより早く高鼾フシ地雷かと疑はる。地時に文覺假寢の魂コハリ忽ち體を顯れ出で。今目前にあり〳〵と亡ぶる平家の有樣を。ナホス夢ともわかず現ともいさ白旗を三重〳〵ひるがへす。地扨も兵衛佐頼朝公。關八州を切り從へ。其の勢既に十萬餘騎御舍弟九郎御曹司義經。秀衡が勢を驅催し。奥より切つて伊豆の國。心も勇み浮島がフシはらから御陣をめされける。地時に文覺法衣を改め二人の中に立ちはだかり。詞和殿は聞きおよぶ牛若丸な。今元服して義經とは。チヽ眼の内の賢しき生れ。久々にて舍兄頼朝に對面嘸滿足。先達て頼朝には平家追討の院宣申し下して參らせつ。和殿にも見參の引出物致さう。是は故左馬頭義朝の髑髏。二度の朝敵と六條河原に曝せしを。奪ひとつて肌を放さず。頂戴あれと前に置き。地念珠つまぐり座をくめば。兄弟床几をまろび下り。中にも義經。詞チヽ情なや口惜しや。運を計り時節を待つとは云ひながら。早速御敵清盛を討ちもせず。一度さへあるに二度獄門の末に曝させ。地御名を汚せし不孝の恐れ。早く平家の一門が首取つて大路にさらし。父上の修羅の妄執。今生の仇を報じたやと踊上つて怒りの涙。頼朝は默然といはで歎きも一入に。二人の心思ひやり。伺候の軍兵目を見合せフシ皆哀れをぞ催しける。地かゝる所へ有王丸大汗になつて馳付け。詞俊寛が郎等有王と申す者。君しろし召さずや。木曾の冠者義仲。北陸道より討つて上り。一戰にも及ばず平家は悉く西海へ逃げくだる。地法皇のまします籠の御所に亂れ入り。是をも一所に西海へ連れ參らせんと計りしを。有王やう〳〵に盜み出し。法皇は當國三島の

明神迄供奉仕り。某一人訴のため参上とッシ大息ついで述べければ。頼朝甚だ驚き給ひ早速の注進過分々々。同じ源氏の一類なれども義仲に平家を討たせては頼朝が末代の恥辱遁れがたし。我は有王を召具し法皇の迎のため。三島へ馬を馳すべきぞ。詞我が代官として義經六萬騎の勢を引率し。夜を日に継いで都にのぼり。地平家の一門根をたつて早く凱陣あるべしと。たえて久しき白旗を。雲井の外迄なびかせて出陣。あるこそ三重ゆゝしけれ。フシ然るに平家。榮華を極め暴惡を。恣まゝにせし其の天罰。めぐつて木曾の義仲に靡れし都を追出され。落ちて行方も赤間が關安徳天皇を始め奉り。女院二位殿一門以下皆入水と聞えしかば。コハリすは勝軍と源氏の武士船よりつくる鬨の聲。水のしら玉たまの緒も。共に消えゆくナホス船軍今日を限りと見えにける。詞能登守敎經端舟に取り乘り。義經に見參と心を配つて漕廻る。地源氏の方より安藝の太郎實光。同じく次郎光行と名乘つて敎經の舟に漕並べ。手取りにせんとしつかと組む。敎經怒つて左右に二人を取つて引きしめ。コハリいさうれおのれら能登が最期の供せよと。うんと締むる小腕を取り放れん。放さじ退かう退かさじゑいや／＼。と組合ふ音舟を踏みしめ踏みはなし。逆巻く波はとう／＼／＼。三人一所に海中へどうと落ちたる水の泡。消ゆるとひとしく海の面。ナホス思ひもとの宇津の山磯打つ波と聞えしは。草の葉渡る風の音。義朝の頭枕の上眠りの。夢は覺めにけり。地文覺むつくと起き上りあたりを見廻し。詞ムヽ聞えた／＼。邯鄲の枕に五十年の夢を見し。それは唐土是は又。義朝が髑髏を枕にしたる一睡に。地平家の滅亡源氏の榮を見たる事。夢にあらず現にあらず正八幡の告ぞかしッシ頼もしし頼みあり。地見よ／＼平家に泡ふかせ。源氏一統の御代となし。天下泰平國繁昌五穀成就民安全。めでたい盡めにして見せんと。袋おつ取り首にかけ勇み勇んで急ぎける。百億萬歳末かけて靡かす。動かず傾かぬ源氏の御代の守神は。六神通の文覺が從ひ守る神と君久しき國こそ樂しけれ。

七行大字直之正本と而もむく類板世に有といへ共又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし然く予が直之正本にあらず故に今此本は山本九右衛門治重所に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本筑後掾（藤印）〔竹本〕〔博教〕

正本屋　山本九兵衛版

大阪高麗橋壹丁目

山本九右衛門版[illegible]

傾城島原蛙合戰

近松門左衛門作

序詞是に似たる非ありと註せし程明道の言葉。盛なるかな爰を以て知んぬ。佛を說くの法正に似たる邪あり。君に仕ふるの道忠に似たる姦人。玉と欺く白露の淸濁る世を明けく。流れを正す源の氏の再興。六十餘州の總追捕使。大納言賴朝卿オロシ〽威權四海に儀型たる。地文治の帝後鳥羽の院不思議の御夢を御覽あり。御夢の吉凶國土の治亂にかゝる趣、安倍卜部の勘文武家に是を考へ政道正さるべしと。御夢の全體を繪圖に寫し。鎌倉に下し賜れば。問註所の南向上段の床にかけまくも。畏つて御拜見大江の廣元和田畠山千葉梶原。同じく拜して面面に。工夫をめぐらす夢判じフシ凡慮の。及ばぬ所なり。地賴朝甚だ怪み給ひ詞能く見られよ方々。僧とも俗とも別け難き異人。兩足に日月を踏んで雲に乘り。口より五色の虹を吐き。大地の草木黃金の花咲きたるとの帝の御夢。吉凶如何心を殘さす評定あれと宣へども。地短才不學の身を恥ぢて各詞なき所に。事知り顏に梶原平三景時進み出で。詞異な事に御心を費さる。元夢は元氣の虛心の影體も性もない事。夢合せ夢判じなどは覡陰陽師の渡世。鎌倉殿の問註所にて。歷々集り眉を顰め夢評定。智ある者の笑ひ草と一口に言ひ消せば。地君を始め滿座の人々フシ赤面してぞ見えにける。地畠山の重忠景時が。過言を聞きかね。詞これ梶原殿。此の評定を智ある者の笑草とは。此の重忠は其の笑ふ人こそ可笑しけれ。地旣に周禮の占夢に。六種の夢を擧げて占ふ旨を記せしが。聖賢の書をも笑草にする人は。如何なる智者か承らんと詰められ。詞なう書面ばかり聞きはつり。義理を知らぬは外題學問これ笑草。但し學りある重忠殿此の夢何と占はれし如何に〲と言ひ募る。いや御邊の尋ねに及ばず心を殘さず申せとの仰。某が考ふる所能く聞き不審あらば難ぜられよ。そも此の夢日は日本神道。月は月支佛道。佛神二つの道を王法左右の翼として。世を保ち國を治め民を敎化し給ふなり。地陰陽家には仙宮の蛙息を吐いて虹と成ると沙汰せり。蛙は卽ち蝦蟇仙人が仙術。不思議自在の奇特を顯し衆生を迷はす。道に似て道にあらず。詞儒には是等を異端と嫌ひ佛家には邪法と破す。此の邪法國に起り日月の翼を踏み折れば。王法忽ち覆り地に墮つる瑞夢ならずや。地昔揚雄が甘泉の賦を作り文章に案じ疲れ。寐し夜の夢に五臟六腑を吐くと見て。其の朝より心神疲れ果てしとかや。智は身の内の寶棚引く虹は國土を濕す。雨露の氣にして天地の

寶、天の寶を吐き盡せば天の氣衰へ國土も枯るゝ道理。詞國に弓箭動き兵亂の兆には。陰陽の木先づ亂れて。草木に金銀の異形の花咲くと鷄林玉露に見えたり。地彼此引合せて考ふれば。邪法を弘むる異人窃に諸人を懐け徒黨を結び。王法を傾くべしと佛神の御示し。最も御愼みの御夢候と。例を引き書を引き義理明々と述べらるれば。大將あつと感心あり辯口我張りの梶原も。非難打つべき詞なくフシ頂を下げて聞き居たる。地頼朝暫く御思案あり。今儒佛盛んの神國に邪法を弘むる者なンど。よもあるまじとは思へども。詞九郎義經が郎黨常陸坊海尊仙術を學び。高館落城にも其の行方なし。地所詮横目の武士を選み京鎌倉の町屋に住む。諸浪人の詮議させん。役人には誰々か然るべき人柄。沙汰せられよと宣へば。地伺候の人々一同に浪人改めとは御尤の御政道と。役人の評定あり。重忠は足立右馬之允然るべしと申さるれば。景時は又富樫の左衛門こそ一器量ある勇士。是非富樫をとフシ進つて言上す。詞重忠重ねて。いや〳〵富樫の左衛門は一歳領分安宅の關を預り、判官殿の造り山伏を十二人迄見損ぜし無眼力。御役柄不相應とありければ。景時大きにせいてヤア某がいふ程の事打込む氣か。足立右馬之允は先づ年若し。殊に上意も伺はず、葛西の清重が娘と縁組の約束したる我儘者。御分が足立を引く如く此の景時は富樫贔屓と。地顔を赤め聲を張る重忠あざ笑ひ。詞天下の御政事に贔屓とは梶原殿ちと御麁相。諸大名の婚禮先づ内談極つて。其の後伺ふ掟なれば。葛西が娘と縁組の契約足立には些か誤なし。地富樫が關所の不吟味は天が下に隱れなし。大事の公用貴殿の贔屓なればとて。少も憚る重忠ならずと。諂はず飾らぬ賢者の詞。景時又閉口しフシ御前白けて笑止なり。地頼朝卿天性人を捨て給はず。富樫も今は先非を悔み役義に不念もあるまじ。詞足立富樫兩人に申し付けられよ。若し相詰めあるならば是へ召せとの御諚。地折ふし足立右馬之允景久。富樫の左衛門宗重。侍所の當番にてオクリ召に〽應じて出でければ。地近う〳〵と御座近く召され。京鎌倉町屋住み諸浪人吟味の事。二人に申し付くる條委細老中の下知を受け。詮議を遂げよと宣ふ所へ。詞御廣間の取次罷出で。今度奥州秀衡が子供討手の軍兵。御味方大きに勝利を得凱陣仕り。先手の軍大將葛西の郡司清重。梶原源太景季八田の知家なんど。大佛の切通し迄罷着く。直に鎌倉へ入れ申すべきや伺ひ奉るとの訴なりとぞ申しける。地頼朝御悦喜淺からず。錦戸兄弟四人の首は平家同然の大敵。詞誅伐する事先祖の威光源家長久の兆。討手の者ども早速對面すべけれども。帝御夢の愼み。鵺が岡に奉幣使を以て御湯神樂を捧げ。地夢違への神事を思ひ立ち火水を清むる鎌倉。血を流せし軍兵畏れあり。暫く切通に控へさせ則ち景時。汝頼朝が名

代として出向ひ。敵錦戸の太郎泰衡。伊達の次郎國衡。四郎高衡樋爪の五郎兄弟四人が首を見屆け。味方の者ども功名の實否を糺し。後日に違亂なき樣に記し置け。二人は近郷立別れ巡見せよとの御諚にて御暇賜り。扨若宮の御代參神事の御沙汰細かに君が信の德廣く。雲井に渡る鶴が岡神感も。増して 三重 〽 ます鏡。フシ 萬代照す。若宮に。地 鐘の緒も解く夢も解く夢違への御神事と。世上に響く鈴の聲 スクリ 神樂の。笛のあな尊やと老若悦び沸返り。湯立參らす鎌倉の。本フシ 谷七鄕が袖はえて。ハルフシ 紫淺黄。うこん紅梅鶯の。縫ふてふ花の名にし負ふ。葛西の郡司清重が。スエテ 祕藏娘の琵琶の姫。右馬之允景久と。妹背の緣の許嫁。父の郡司は奥州より。はや凱陣と聞くにつけ。嫁入は何時ぞ。アヽ辛氣々々で夜の目もろくに差異もなき。夢の氣がかり祈らんと。乳人腰元氣に入りの下女のお福かよぢり服。徒歩を歩へば足長の。フシ 鶴が岡にぞ着き給ふ。地 外を見つけぬ奥女中これは〳〵賑かな。賣物見世物鳥居の奥に鼓太鼓が聞える。御神樂が始まつた。サアお急ぎとそゝれば姫君アヽ待ちや〳〵あれを見や。詞 下馬に乘馬を繋いだは旗本大名の參りか。若し知る人の方ならば嫁入前の自らが。地 善惡の評判受けるもいやらしと宣ふ折柄。破れ烏帽子に白張裝束御幣肩げて來る男。乳人立寄り袖を控へ。詞 これ禰宜殿。あの馬は誰樣の參りぞやと問ひければ。月毛に靑貝の鞍は富樫の左衛門殿。黒栗毛に蒔繪の鞍は足立右馬之允景久殿。二人共に大役を承り其の悦び門出の社參。神主殿へ銀百枚。社家中へ十枚づつ。こちらが樣な禰宜仲間三十人へたつた錢壹貫に三升樽。地 其の代りに強飯が喰ひ放題と言ひ捨て通れは腰元中。詞 さつても御緣深い許嫁の殿御樣と一時の神參り。あの馬にお姫樣のお心ついたもこれ不思議と。地 言へば下女のお福が。ハテ右馬之允樣の馬ぢやもの。お姫樣のおなかへ フシ 應へる筈ぢやと笑ひける。地 姫も嬉しく遣瀬なく。八幡樣の引合せ是を序にお顏も見度し。詞を交そサア皆おじやと。進み給ふがいや〳〵。詞 氣の毒があるわいの。同道なされし富樫の左衛門。自らを妻にと父上に貰ひかけ。梶原賴み威勢を以ていひかけても。足立殿へ先約とて御承引なき恨み。父上に顏を振る。武士に似合はぬさもしい心。妨なすは知れた事止めにしよ。ニイまゝよ行てお目にかゝらうか。大事の殿御の 地 浮名や立たんエヽ邪魔な奴。名もとが〳〵しい富樫め。寸善尺魔胸の癪。心に足のあるならば フシ 神の忌垣も越えぬべし。地 神樂終れば足立右馬之允裝出立きらやかに。長羽織の徒士の者。詞 旦那お下向お馬引きませいお馬〳〵園介雁介。地 參れと呼べども油斷の馬取方々取つて出合はず。地 便りに引かるゝ琵琶の姫馬取これに。罷在るとは女とも見えず。男裝の染手拭小褄きりゝに結短か。一振ふり出

す手付腰付ハイドウ。口縄解いてたぐりくり〳〵膝くり栗毛の胡馬北風に フシ嘶えいなゝく。君が御馬にとつ付いた。千里も萬里も二世も三世も添うて離れぬ御馬ぞひいざ。いざ〳〵。フシ召しませいとぞ引廻す。地一目見るよりそれとは知れども餘所々々しく。詞扱々おやさしい是は何方の姫君ぞ。中間どもがのらをかはき近所になきをお笑止がり。情と申しお心利き。千萬千萬忝しさり乍ら。足立づれの端侍がお姫方に口取らせて乗るならば。罰が當つて 地落馬致すは定の物。彼の僧正遍昭が女郎といふ草花の罰當りて落馬して。我落ちにきと。人に語るなと詠ぜし歌を聞くにつけなう。詞十七八の娘の罰はあらたなもの。地お放しなされと引取る手綱放せとは他人向きかいの。詞夫と師匠は主同然。張良とやらいひし武夫も。師匠の沓を フシ取りしぞや。地女房の身で夫の馬の口取るに何の辭儀の入る事ぞ。思ひ焦れて氣が騒ぐいつそ

此の身を鞍にして乗り鎮めて下さんせと。前輪に縋りなう右馬様〳〵と。言へば馬は己れが事と頭を垂れて フシしなだるゝ。地右馬之允も憎からず琵琶の姫とは見つれども。言上を經ね間は互の遠慮。舅郡司殿もはや大傳の切通し迄凱陣。近々に言上し呼び迎へて其の夜から。足立右馬之允景久が妻女房ぞ。先つそれ迄は葛西の郡司殿の姫君。御手を穢し慮外至極と鞍越しに手を取交し。戴き合ひ締め合ひにつこと目許にこぼるゝしほ。馬の背重き戀の重荷 フシやかて嫁入の兆かや。地かゝる所に鳥居の内人騒ぎ。朱鞘の大小編笠目深の若者。走り出でて姫に縋り小聲に成つて。詞なんと久しや妹兄源六郎清治覺えてか。ヤア 地兄様か年月案じ暮せしに。是はどうした態ざいの。詞されば〳〵始めて父の名代大番に上り京珍しく。傾城狂ひに身を持崩し放埒無法の行跡ゆゑ。勘當受けて遠國に漂泊し。地今度奥州御征伐父諸共に向ふべき身が。弓

矢神に捨てられし親の罰。地歎き悔むに フシかひもなく。當社の神力を祈り勘當の訴訟せんと參詣せしに。富樫の左衛門それ浪人ふと取廻す。鎌倉追放の某詮議にあうては身の難儀。何とぞ思案あるまいかと語る間に富樫が郎黨。目を光らして驅廻れば。負うた子より抱いた子先づお姫様大事ぞと。腰元つぎ〳〵引つ包み。餘所にや森の下道を フシ人目忍びて歸りけり。地程なく富樫かけ來り。詞そりや以前の奴遁すなと前後を圍んで左衛門大聲あげ。編笠着ながら神前を拜し世を忍ぶは浪人に紛れなし。出所住所假名實名具に申せ。主持ならば誰が家來包まず申せ上意によつて詮議なり。地なんと〳〵とぎしめけども身の上も名乗られず。陳ずべき當話も出ず。一期の沈浮と引つ詰ひ フシ死に身に成つてぞゐたりける。地足立始終は聞きたれども。相役なれば用捨もならず。詞エヽ手ぬるし富樫殿。笠をたぐつて面を御覽ぜ。地尤さうと笠打落せ

ば廿二三の屈竟の男子。誰見知つたる者もなし。右馬之允横手を打ちや。詞汝は身が槍持の灘平め。言語道斷の曲者。病氣と僞り奉公引き。主人も恐れぬ遊山ありき。手討にしたい奴なれど公用の門出赦し置く。富樫殿御覽なされ。下々に慈悲をなせば結句主を侮る。地重ねては首が飛ぶ以後を嗜み供せいと。裏は情表は劍の詞の五音源六は夢見し心。富樫二人の目色に氣をつけ。詞合點參らぬ足立殿。鎗持に似合はぬ刀の拵へ。前髪面を見たやうなと言はせも果てず。ム、尤ようお心付けられた。三年の切米にも叶はぬ大小の鍔線がしら。前髪より召使ひ家の法度を知りながら。博奕したるに疑なし。エヽ地憎しと仕込杖おつ取りのべ。腰のつがひを碎けてのけと。打つ杖は痛からで武士の情の骨にしみスヱテ頭も。上げず泣きゐたり。地左衞門ほとんど疑晴し。詞拙者が扱ふもう御堪忍〳〵。といふをしほにてこりや。詞お詞ゆゑに赦し置く。あ

の奴が持つた道具汝肩げて供をせいない。とばかりに武士の道あり仁ある心の底を。斟んで鳥毛の假槍持。安宅の關にて判官摸ちし武藏坊にも懲りもせぬ。愚痴は其の身の富樫の左衞門別れてこそは三重へ向ふたる。地奧州討手の諸軍將。葛西の清重比企の能員梶原源太景季八田の知家。切通しの松蔭に面々の印大幕打たせ。鎌倉の左右を待ちければ。一家一門迎の衆持たせの行器悦の酒肴。濱松の音ざゝんざの聲。酒にあうても兵の。勇みある今日のフシ酒宴なり。鎌倉より梶原平三景時御代官として。幕前に案内せさせ。其の身は床几に威儀正しく。詞今度各粉骨を盡し強敵一時に亡びし事。多年弓馬の嗜顯れ御感斜ならす。重ねて恩賞御沙汰あるべし。在所々々へ歸つて休息せられよ。則ち某御名代首實檢と述べければ。地幕の内より比企の能員洗革の鎧。同じ毛の甲を高紐にかけ。弓手の膝をついて不肖の某。詞錦戸の太郎が平泉の

城を受取り。手痛く攻むれば泰衡たまらず。國分原に迫詰め討取る首に候なり。地げに拔群の功名古今に比類なし。大將分の印として君より授け賜つたる。金の采配ゆゝしく子孫に傳へられよと賞すれば。能員勢天にも到る。半月の印を持たせフシ我が本城にぞ立歸る。次の幕より八田の知家。伏繩目の鎧烏帽子かけして。射向の袖をゆりかけ。某も。伊達の次郎が江戸ノシ立籠る。阿津賀志山の山城を。一揉に攻落し。打取る所の次郎國衡が頭候。神妙々々當世の英雄誰か肩を比べん。御許の金の采配握つて天下に憚りなしとの褒美の詞。忝しとゆふづけの鳥の羽の。印をはつとのし立てノシ己が館にぞ。歸りける。隣の幕より備子源太景季。褐布の錣直垂さわやかに着流し。詞不堪の我等僅かに父の箕裘を繼いで。樋爪の五郎が籠つたる。鳥の海の城郭を乘崩し。五郎俊衡が首地見參と。いふより景時扇を上げ動き

〱。汝は一歳一の谷の大手生田の杜の手柄といひ。日本無雙の勇士景時が子なるぞや。金の采配子々孫々に取傳へよや梓弓。矢筈の印立てさせ親子床几を並べしは厳しう。こそ見えにけれ。稍あつて景時大聲あげ。〔詞〕錦戸兄弟四人の敵に味方も四人の大將。四郎が首は誰が取つたるぞ實検時移る。何事に隙取るヱヽ馬鹿らしいと罵つたり。〔地〕三蓋笠の印立てたる幕打上げて琵琶の姫。鎧にあらぬ卯の花染。裾の蹴廻し〔フシ〕草摺長に。梶原が前にしやんと坐し。〔詞〕人々凱陣の歡び迎へ。我も〱と親子兄弟集れども。〔地〕葛西の郡司は一人の男子源六は勘當。褻にも晴にも琵琶と申す娘。自ら迎に參り。〔詞〕最前より父の詞。ヤイ琵琶よ。なぜに男と生れてくれなんだ。〔地〕男子ならば物の具させ打連れ向ふ程ならば。今の悔はあるまいもの。實検に入れる首がなければ見參して何の詮もない。まつ此の通り申せと父郡司が口移し。聞き給へやと伸び上り。〔詞〕そも葛西の郡司が向うたる仙北の城郭。一方は海一方は深田。後は嶮岨の山高うして鳥も通はず籠りし敵は。四郎高衡凡夫を誑す邪法を行ひ。形を隠せば水の月日には見れども手に取られず。術をなす事魔法の如し。されども郡司は老功數度の軍に立渡る。霧の晴間に能つ引いて放つ矢。四郎が右手の膝口。篦深に射付けてどうと伏す所に。御子息源太殿の郎黨大河七郎兼任。首を取らんと走り寄る。郡司押へて無禮なり匹夫。我が主の場所を捨て餘所の攻口。他人の射留めし首取らんとは。法を知らぬ烏滸の者とせり合ふ中に。幻術自在の四郎雲霧に紛れ失せてけり。郡司苛ちに苛つて塀も櫓も乘崩し。堀を埋め。山を壊ち。五十四郡を探せども行方なく。〔地〕無念の凱陣諸人に面も。〔フシ〕合されず。〔地〕弓矢取る身は相互君の御前は景時殿。幾重にも頼み奉る。〔詞〕これより打立ち四郎が首提げ。會稽の恥辱雪ぎ度きとの申し樣。〔地〕親の歎きに子の歎き私とても同じお願ひ。〔詞〕畠山殿和田殿歴々ありても。御前の執り成しは梶原樣。雀の千聲鶴の一聲〔フシ〕頼みまするとぞ語りける。〔詞〕源太が勢の中よりヤア嘘つかせぬ。大河七郎是に在り。〔詞〕四郎が膝口に射付けし某が矢。我が攻口の城の大將。首は郡司に取らせてくれとせり合ふ間に落失せた。直に急度詰め〔地〕聞かんと。〔詞〕躍り出づるを立隔て。〔詞〕女なれども使は琵琶といふ清重が子。〔地〕言ふ事いへサア聞かんと。肱を張つたる男勝り。幕打上げて父の郡司ヤアヽ構ふな姫。〔詞〕蟲のやうなる下郎めと諍ひ勝つて何面目。武運盡きたる清重か。腹切る樣を〔地〕君へ申せ梶原どの。刀を拔けば景時是はと走り寄り。〔詞〕一徧千萬むざ〱と腹切つては。金の采配取上げられ。武士道永く廢つて。葛西の家の破滅笑止笑止。爰に一つの料簡あり。豫々申す此の姫の事。右馬之允が先約を變改し。景時が仲人富樫の左衛門にめあはされよ。返禮には

金の釆配。家に傳はるやうに御前は某請取り申す。右馬之允が義理一つ缺けば和殿が武門の家も立ち。頼まれし景時が身分も立つ。地萬一足立がこねるとも上へ申して仕やうは様々。景時に任されよと呟く中より。ぐつと怒の額の筋。はつたと睨んで喧しい景時。詞武士と武士との義理を違へ。娘が緣付のお陰を蒙り。武門を立つる葛西でなし。御邊なんどが取合で。金銀の釆配千本持つても蠅拂ひに劣つたり。此の釆配は忝くも君より拜受。地娘に譲るといひ捨て。刀を肋骨にがはと竪横十文字。返す刀の切先を。口に咬へ眞逆様俯伏に フシ成つてぞ死したりける。なう情なやと琵琶の姫スヱテ歎くにかひのあらばこそ。詞梶原えせ笑ひ。不覺者の無念腹切り損く。地武名廢つた印釆配召上げらるゝと引つたくる。いやく命に代へし釆配渡しはせぬと取付くを。突退けく追はへ行くを追拂ひ。梶原親子 フシ主従立歸れば力なく。父の死骸に抱き付き前後も。分かず泣きゐたり。地葛西の清重切腹と近邊取沙汰。聞くより右馬之允源六打連れ走り着き。ハツくく南無三寳と。驚くばかり詮方なく。源六は勘當の親の身に手も觸れられず。身體の前に蹲り。わつと泣いて立上り。相手は梶原主従と。駈出でても當どなく。立戻つても堪られずエヽどうかせん如何せん。子は有つて有りがひなく。かゝる禍の御最期我一人の不孝の科。お慈悲に御免と五體を投げ大聲上げて歎きしが。詞これ足立殿。敵四郎が幻術を行はば。我また念力を以て討留め父が恥辱を濯むべし。御身は妹連れられはやお歸りといひければ。右馬之允かぶりを振つていやく。言上も遂げぬ契約は内證づく。釆配召上げられし。地武名廢りし葛西と一家の緣を結んでは。末代足立が家の瑕思ひも寄らず。詞四郎を討つて武運開くる其の時。改めて結ぶ迄はふつつと緣切る。地暇の印は其の鐺と詞も名殘も振切つて立歸る。袂に縋り琵琶の姫。成り果てし我々ゆゑ。大事の弓矢のお家の名字。連れて下すも フシ勿體なし。御前様奥様と言はれ度い望もない。奉公人と名付けて。お寢間の御用に召使うて下さんせとスヱテ涙ぐむも痛々しゝ。詞これなう。譬へば禁酒する人が酒鹽と名付けても。飲む口は同じ酒。その如く奉公人と名付けても。寢間の用とは酒鹽の奥様。ならぬく。ムヽ御尤々。そんなら傾城白拍子は遊び者。其の身にならうが必ず逢うて下さんすか。地エヽ繰言行先までの約束は。緣切らぬも同じ事夫婦の緣は運次第と。詞を形見に引別れ行く姿。見切れて二筋切れぬ涙の絲。琵琶の姫も源六も。無念さ悲しさとりぐに思ひ。亂れて立つたる所に。詞大河七郎眞先に。梶原が郎黨數十人半途より取つて返し。ヤアあの若い者は。必定郡司が勘當の倅源六な。琵琶の姫を富樫にめあはさねば。主人景時一

分立たずはや〳〵渡せ。地但し引つ立て歸らうぞ一日返事と呼ばはつたり。なう兄樣あれこそ父の功名盜み大河七郎と。聞くより源六鑓の鞘外し躍り出で。詞よい目利。葛西の源六靖治。女房もらひの詰開きは存ぜず。長々在京して傾城にきぶれ。傾城の貰ひには隨分粹な男。廓の出入はやりが捌く。地ナヲ返事は此の鑓先と三段に フシまくりかけたりけり。生溫いぬくわか。鑓の柄切つて切り折れと。喚いてかゝるを左右に受け鑓一本に數知れぬ。刀を拂ひ打落し急所々々をえら突。手に立つ者も 三重へ 無かりしが。地七郎が弟大河九郎。跡に廻つて石突本を確と取れば。七郎は印付の環をかけて捉つたり。ム、ウ奴等これ何とする。まつ斷うすると兩方より打ちかくる切先を。頭を振つて受け外し。鑓引上げて一振ふれば左右へばつと退きながら。直に切込む二人が打物。石突と鉾先と本末に受け流し。二間を五間に使ひなせる は手利の祕術。逃げても逃がさず打つも打たせず。追廻し追靡け二人が胸板。はた〳〵はつたと突かれて同じ枕に反る所を。おつ取り直して止めの鑓。金輪際迄ぐつ。〳〵。ぐつと通りし念力に。時の敵は討つたりと兄弟顏を見合せて心を含む淚と笑ひ。夫の暇の印はそつちへ鑓一本。日本に敵は四郎一人。戰術劍術魔法邪法吒枳尼の法。雲霧の城に籠るとも親の讓りの身體髮膚は我が城郭。骨は石垣肉は塀。眼は矢狹間五臟六腑の高櫓。手足は軍兵力あり〳〵あらゆる武藝懸引。進退。下。知の大將我が一心と。一念固めて身は輕く。天が下をば笠宿り。印の笠も三がい坊と行方。定めず別れけり。

第 二

地小善は益なしとして爲ざる故に善積まずして名を成す事なく。小惡は害なしとして去らざる故に惡積つて身を滅す。爰に奧州泰衡が弟四郎高衡。仙術を學び兄弟討死の劍の下。膝に矢疵を受けながら。鎌倉勢の目を眩し霧に隱れ水に棲む。蛙の聲の囂き。伊香保の沼のいかゞしてフシ東路を遁れ出で。地今は都に樣を變へ。荷ふ朸は細けれど心は太き大望。來る時節を松茸ぞ。詞茸松茸午蒡山の芋青豆生薑コン。人蔘藥人蔘やイ。地選人蔘は立身の後藥病七草四郎と呼ばれ。利にかまはねば算用も大宮通を櫛笥町。行き拔けの裏貸家小家は口の嵯峨松茸。フシ松茸さうと賣りにける。地笹垣したる小庵敷より松茸買はう。おういと答へて管陵籬。顏差入るれば四十許りに鬚ある男。能く見れば昔の郎等獅々木佐仲太。内よりも小手招きつゝと通つて是は〳〵。詞いつから爰にぞ。されば申し鎌倉より浪人改めとして。足立右馬之允富樫の左衞門上京致せし故彼の七條通の家を追立てられ。十日許り以前に是へ移り則ち今日宿茶と申して。家主始め相貸家中へ酒を盛る約束。地是ぞ幸の參會。相借屋中婆嚊迄も勸め込む企。扨其許の御首尾ども承りたしとぞ申

しける。詞四郎打笑み、久々の對面に吉左右聞いて滿足。此の方にも油斷なく。コレ此の如く色々に樣を變へ町人百姓勸め込み、別けて當所島原の傾城。更級といふ太夫。此の親に智謀ある武士の浪人と聞及ぶ、先づ頃より島原に通ひ更級に馴染み。近々に請出す極め。時には親とは對面。因を以て我が法に勸め込む程ならば外の人も入會り、地其から隨分精出せ愚痴な女共勸め込め、は、皆かゝる者も其手に連る、地世の中兎角金を撒き散らせと。籠の底なる山の芋でびつくり足つく革袋。詞又此の鏡は師より授かる秘密の寶、裏表に仔細あり能く見別けて人に拜ませば、地如何なる者も嘴喜すべしヤ。詞隣は壁一重シイ〳〵。地此の荷は爰に置いてくれ是から直に島原。なんと此の差替への刀爰にもあるが如何にも〳〵大小衣小袖お羽織も戸棚に入れて見の間で、召替へられいと案内する間に東隣の[illegible]いそがしげに申し〳〵。詞お家

主殿始め長屋中殘らずつらりツと觸れました。どれも皆お出での筈。ハアゝたんと青物召したどれ午蒡貰はう、人參摘よと蹈へば。いや〳〵皆お出でなされて手づからの切り刻みも一つの馳走。地其の儘置いてま一遍廻つて参ぢ存じますというて、ま一遍廻つて追付けお出でなされと。二三遍も四五遍も同じ觸れ廻つてたも、フシ早う早うと追出し。地サア〳〵人は無い此の隙にと四郎が忍ぶ變へ姿、坂東武士の荒有りも此の頃京にすみ前髪。深編笠の歩みぶり。人蔘午蒡の土氣取れて島原風の。フシ扱苗なり。地程なく大矢野松右衞門先に立ち、相借家の女夫連日傭手間取、隣の師匠鍼按摩久庵洗ひ張師の蛇の目後家。鹿の子結ひのお雪が娘打連れ立つて。詞今日は御造作お辭宜申す筈なれど、お親みのため拙者は一軒彼方の數醫、藥を盛つても違ふゆゑ森宗以と申す者。地我等が商賣こがしにて山善平白髪天窓の額にちよつと。私は戀路の

商賣殿達方はふッとつつに出逢うて、大きな腹を持ちかけられまい物でもない。此の指一本でおろす程にける程に。藥研婆と申しますと。心々の挨拶咄フシ乘合舟の如くなり。地打揃うて森い獨り住みの我等、御馳走は心ばかりゆるりとお咄し。先づお茶一つと釜の下焚付け。詞此の頃下値な薪求めしが各もお買ひなされ。地德な物と小隅より彌陀藥師觀音なんど。木佛五六躰掴からげ引つ解き。小鉋取りのべめツき〳〵とそとうめき〳〵。釋迦も地藏も大日も。其に阿彌陀の四十八割碎きて釜の下。煙に眼ふ觀世音枯れたる木とて火花吹く、いづれか火坑變成池一座の男女色違へ、胴顫ひ冷汗しハッ〳〵フシはつと驚くばかりなり。地大矢野松右衞門腕を取つてこりや佐仲太。詞面々二世を賴む本尊、地佛を侮るはかりでない。人をうつけにするは醉狂か風氣かと。聞きもあへずから〳〵と笑ひ。詞さういふ各が醉狂よ風氣よ。念佛申す乞食非人

幾人かあれども。終に乞食を遁れぬのたれ死。各が阿彌陀よ釋迦よ。觀音よと。經讀み念佛召さるゝがどれ。金持になつたか大名に成つたか。其の借裏屋住み。未來活計歡樂の便宜聞いた者一人もなし。地佛法に騙され億萬劫身を苦しむる人々に。今宵の御馳走我等が本尊拜させん。近く寄つて拜まれよと厨子の戸開けばこは如何に。木の葉を着たる荒法師。雲に乘じ口より虹を吹く繪像。ヲヽざんない佛樣やと一同にっシ南無阿彌陀佛と唱へける。詞佐仲太怒つていま〱し念佛。忝くも此の本尊は九郎判官殿の家臣。常陸坊海尊仙人。長生不死の術を學びて。歡樂無苦の仙人と成り給ふ。其の法を今傳へし人は奥州五十四郡の主。秀衡の四男今の名は七草四郎殿。此の法に信服し神も佛も打捨て。一心不亂に仙術に傾く人は病苦なく貧苦なく。金銀米錢に飽き充ち。國主城主公家高家にも望み次第。地保つ壽命は一千歳無二無上の大法。此の法に信じ趣く人には。當座の褒美に與ゆる黄金是なりと。革袋開き積み重ね。辯を並べて勸むれば。愚痴無智の男女氣を奪はれフシ心迷ひて見えにける。詞痛はしや方々。佛に誑され畜生道に沈んだる證。仙人の明鏡に照らされ佛法の罪顯るゝ其の證據と。地祕密の鏡の裏を開いて欄にかけ。サア主主の顏を見よあつと各押合ひへし合ひ。鏡に向へば情なや我等が顏は馬に成つたかこちや牛ぢや。私や犬か狐に成つた。猫ぢや鼬ぢやあさましや悲しや。皆畜生に成り果てたエヽ阿彌陀めに騙された。助け給へ仙人樣敎を受けて只今より。法を持ち奉らんと皆々一度に手を合せフシ隨喜の涙限りなし。詞扨は家主殿始め一念發起なされしに僞はないか。地座敷なりの間に合に心に僞ありとても。鏡に急度顯るゝなんと〱と言ひければ。詞アヽ御勿體なや。あらたな奇瑞を拜みながら。疑の念恐ろしや。地許させ給へと平伏す有樣。詞ヲヽ果報者達目出度い〱。然らば向後法の爲には命を惜ます。七草四郎殿へ從ひ奉らんとの連判の上。地直に金子を與ゆると卷物出せば一座の男女。二言とも言はす我先にと印判書判或は爪形筆の軸。指先より血を出し徒黨固たまる決定心。サア御褒美と十兩包ぐわらり〱と投げ出せば。我劣らじと立重り。戴く拜む木綿褞袢の懷に。今日ぞ始めて陸奥のフシ黄金の花ぞ咲きにける。地かゝる所に町の番太慌しく。詞申し〱松右衞門樣浪人の改めとて。富樫殿の御内栁瀬權藤六といふお侍。大勢連れて地はや爰へと。呼ばはる中に權藤六つつと入り。詞七草四郎が徒黨獅子木佐仲太とは其の方な。鎌倉殿の仰を以て尋ぬる事あり動くなと。地奥に踏ん込み是何だ。惡魔の形か化物か人民を誑す惡人めと。繪像おつ取り引裂く所を佐仲太飛びかゝり。しや物見せんと椽先にどうと投付くる。詞狼藉者切れ括れと拔連れて取卷いたり。佐仲太大音あげ。仙術

の大敵今日歸状の人々。あれ撲殺し四郎殿の御感に預れやつと下知すれば。地大江千東森大矢野隣の妙心向ひのお爺。尼も沙彌も杁より棒熊手鳶口。横槌擂木提げ／＼誠法やたら。追つつ返しつ喚きしは犬の嚙み合ふ 三重〽如くなり。地案内知らぬ裏屋の奥。溝に踏ん込み井筒に躓き下部が腰骨膝の皿。權藤六も眞甲割られ。フシ塵捨場にのめり伏したりけり。地佐仲太徒黨に勇みを付けお手柄／＼。詞仙術の末繁昌さりながら。役人を殺しては跡がむつかし。家財諸道具取納めすはと言はば。我等一所に立退く用意肝要。先づ各の發起心佛法の罪消え失せ。御本尊仙人御受納の證拜ませんと。地鏡をひらりと表にかへしサア禮拜々々と。聲に從ひ立ちかゝり向へば映る畜生の。影引換へて玉の冠玉の簪 フシ忍辱柔和の。地天人天女の顏容あり／＼。アヽ有難や命を捨てゝ惜しからぬ。南無仙人樣仙人樣と夕月に鐘も。暮れ行く 三重〽雲の足。出口

の柳。こき交ぜて。松と梅との縱緯に戀を。冷泉 織出す。島原や。ぞめきは梭を綜るに似て 小オクリ 町の。六筋に結ほれ絲の。いとしからぬは フシなき中に。別きて名に照る更級とて。桔梗が本の太夫職七草四郎が思ひ草。俄に根引極りて。さらばやいのの暇乞。今日突出の妹女郎唐琴を引連れて。揚屋々々を顏見せと。廓名殘の二道中。長 地品は變れど一つ前掴みからげに脛見えて。裾に露散る玉川屋。馴染の揚屋に入りにける。地ソリヤ唐琴さん更級さん御出でと。家内喚けば亭主立出で。詞ハアヽ見事新造樣。廓廣しと申せども恐らく／＼御全盛の折紙道具。扨日出度いは更級樣。言ひ出す其の日に身請とは傾國開闢の初物。地手形の埒もさつぱり七草樣も疾うから御出で。あの二階に長う短う待たせまするも今日ばかり。明日から鼻を突合せ。春は早々七種薺の若生え。とゝかゝ／＼おぎやあ／＼を聞きませう。千秋樂と フシ取囃せば。詞よ

う祝うて下さんした。今宵廓を出ると思へば嬉しい半分名殘も半分。心殘りは此の新造の唐琴殿。生れは遠國京には知るべ所縁もなし。私とても馴染なけれども眞實の妹のやうにいとしうて。地此の度の水揚も七草さんのお世話にかけ。二十日も三十日も引廻す心でありしかど。詞私は身請今日限りさぞ力があるまい。今宵からでも粋なお客を引付けて貰はして下さんせ。行末かけて賴むぞえ。廓の名殘唐琴殿。地主さんいざ酒にしようぢやあるまいか。そりや酒との御託宣神は二階へ上らせ給へ。禿衆御神酒／＼。我等は酒の神主と フシ戲れ諍手へ立出づる。二階は名殘の一節を。歌月は笠きて西へと急ぐ。とつつく御供の罷奴。朱雀細道とび足どつこい。押せやれどつこい。露は嵐にちりつてとん。ハツフン三筋の絲の。地音に引かれ末社はいきつて先走り。玉川屋に大聲上げ。大盡お出でと鳴込めば亭主はお迎ひ門口に。這ひ踞ふを目もやらず。

座敷にのさ〳〵富樫の左衛門膝を捲つて大胡座。詞汝や亭主か。大名の名は隱しても知れるもの言ふに及ばず、身は富樫の左衛門宗重さ。公用の憂さ晴し傾城狂ひに來りしなど沙汰は無用。今此の里の名に高き、花月高尾吳羽なんど堪らぬ妓と聞及ぶ。地此の內際なを今宵の緣それ フシ引つ摑めと言ひければ、詞仰の君達誰方も指合また四五日もお隙なし。幸ひ今日突出し女郞。唐琴樣と申す太夫職旦那の威勢で貰ひませうか。突出しとはまた手入らずな。地珍重珍重コリヤ働けと投出す。くれぬ粹より遣る野暮に廻りの强い花車。旦那くわつと見事な儀、追付けお供と罷立ちざゝめき騷ぎの最中二階。上り氣に成つて富樫の左衛門。座敷にとほんと待つ間程なく亭主二階を踏んで下り。首尾よう貰ひ新造樣それお出でと、聲に引かるゝ唐琴が、知らぬ男に フシ顏曝す。辛いぞ憂いぞ此の身に成つて悔しや。フシ玉手箱梯子。半分下りて思はずも。

宗重に目を見合せ。くわつと熱く氣にこたへ下りも。上りもスエテ足も心も踏み迷ふ。地日かど强き富樫の左衛門つつと寄つて腰抱き締め。詞ヤア珍しい。念力かけたる島內の郡司が娘琵琶の姬。何としてのお傾城。地芥逡へて黃金の釜の掘出し物。請出して身が御前樣ヤイ亭主、唐琴が身請十萬兩でも引かぬ大名。早く往せて埒明けいと呼ばはれば琵琶の姬。詞エヽ聞きにくい胸が惡い宗重、右馬之允樣とは。夫婦で夫婦に成り惡い。武士の義理。傾城は遊びもの。寢ても逢うても我が夫の。名字に瑕は付かぬと思ひ人置きの緣を求め。地今日始めて此の里に唐琴といふ浮名を取るも、右馬之允殿に一夜なりとも逢はん爲ばつかり。詞安宅の關守門番づれが。唐琴を身請とは些とすしなぞ推參なぞ。地エイけたいの惡いと聞くより富樫くわつとせき上げ。ずんど立つて引摺り下し髻摑んで。門番づれと吐した此の頰げた掛り歪めてくれんと。振上ぐる腕首しかと取り。詞エヽ憎や待て汝というたばかり詮方なく。腕にはつかりちぎれてのけと喰ひ付かれ。宗重堪らず振放し汝女め戀も情も是迄と、すばと拔いて打ちかくる。テヽ切殺せ死ぬとも獨りは死ぬまいと氣は逸つても及物はなし。拔けつ フシ潜りつつ女業。七草聞付け梯子ぐわた〳〵鳥より輕く裾はし折つてつつと入り。富樫が持つたる柄共に斷も切れよと腕先上に 取つて引つ据ゑ大小捥いでぐわらりと投げ。詞新造を貰ひ席しと亭主が段々の願ひ。此の里の遊興は互づくと料簡してくれたるに。尾籠至極の狼藉たて冥加知らずの罰當り。地此の膽骨を戴けと蹴上る足首踏まれじものと富樫の左衛門。しさつて見れば右の膝口に尖り矢の鏃ありありと。四郎が繪圖に少しも違はず。彼奴四郎高衡ござんあれ。大勢催し生捕らん。してやつたりと心も勇み。フシ逃げて往なんと身をもがく。地唐琴も立廻りに同じく見付くる矢疵の跡。ヤア汝

は奥州の四郎と言はんとせしがちやつと言ひかへ。詞汝は四郎。素人な傾城と侮つて我儘いふな。彼方へ詫言して取らす重ねて爰へ足ぶみすな。地もう堪へてやらんせと七草が手を取り引退くれば。宗重むくむく起上り。睨んで見ても彼奴が面付たゞ者ならず。仕損じて我が命のがれ刀も臨差も。捨てて跡も見返らず フシ足をばかりに駈出す。地七草何の氣も付かず新造何處も痛まぬか。さり乍ら痛い目するも水揚の祝儀祝儀と打笑ひ二階へ上る後影見上げ見下し。嬉しや富樫は往なせたり。我が手にかけて四郎が首取り。父の恥辱を雪げば葛西の家の武士立つて。思ふ夫と比翼連理。佛神の宛行。富樫が捨てたる刀取つて落し差。落しつけても心逸りに身はわな〳〵。よろつく足を踏み締むれば板間はめつきりめつきめき。氷を渡り火を踏む思ひにて。窺ひ上る箱梯子。明けんとするに手は顫ひ嵐の叩く襖戸はごと〳〵〳〵〳〵。さら〳〵〳〵

さつと明くれば更級が。此方へ出つる姿を見てあつと飛ぶやら走るやら。元の所に身を縮め フシいとど顫ひぞ増りける。更級立寄り。詞合點いかぬ新造殿。女の際に刀差いて二階へ上り。誰に恨みで誰を切る。譯も無い事仕出して身を失はうといふ事か。人の知らぬ中私にそつと心底明かしや。かういふも其方がいとしさ。誓文くされ明日出る廓を得出す。居腐りにする法もあれ何なりとも聞分け。腹の癒るやうに肝煎らう。心を鎭めて腹の立つ一通語つて聞かしや。地なうとまし人やと小聲になつて鎭むれども。只あい〳〵と フシばかりにて暫し。詞もなかりしが。詞更級さんにさし當てどうも言ひ惡けれど。御誓文が忝いこれ。人に恨みも腹立も何にもない。此方を請出す七草を切るわいの。ヤア、ウそりや。何故にヲ、肝の潰れる筈。私には幼いより許嫁の男あれども。言ふに言はれぬ障あつて添ふ事ならぬ。今でも七草の首を切れば。

障も晴れて夫婦に成る。餘りわりない事ながら女は互。此方は神の結ぶ縁の男。深い仲でも七草は請出す金の男。地サアひそひそいふも漏れてはならぬと駈出す。先づ待つてたもと[illegible]。詞七草様[illegible]と[illegible]か付いたれば面白い。私も貢來曾迄と契約の男がある。鎌倉に隠れもない[illegible]内の源六清[illegible]殿。何と肝が潰れるか。おいとしや私故父御の御勘當。地行む方のあるも知れず。逢ひ度い見度い添ひ度いと思ふばかりに過ぎ行く月日。憂きふしに責められ年を切り増し〳〵廓の勤が重い。源六様に添ふ時節は無い所に。詞思ひも寄らぬ七草様ンが請出してくれうやれ忝い。此の廓さへ出たらば。地心あつて暇をくれずば逃げても走つても。遂には源六様に添はうものと思ふ頼みの七草さん。此の金の男に別れ、は。貢賃の男源六さんに別れも[illegible]事誓文の罰當らうと當れ。見ぼつりと[illegible]て貫はねばならぬと手[illegible]

は兄源六様のと言はんとせしがいや〳〵。傾城は賢しく人の上を我が上に言ひなして。難を遁るゝも知れぬ事。言はぬ所と分別し。詞これ更級さん。料簡して貰はうとはあちらこちら。料簡はそつちにあり。サア料簡して下さんせ。イヤそつちに無ければこつちにも料簡ない。七草さんの代りに。此の更級が首取らんせ是が料簡々々。なう慮外ながら此の唐琴は武士の娘さうは狼狽へぬ。斬るべき者は得斬らず役にも立たぬこなさん斬つては詞犬猫斬つたも同然と。いふより更級富樫が脇指。取つてほつ込み裾小短かに帯引上げ。犬猫斬つたも同然とは誰が事いうた。地傾城の先祖をいふは恥なれど。浪人でこそあれ我が親は。朝日將軍木曾殿の御家老筋手塚の何某。請出さるゝは嫁入の心。幾千悦ぶ今日の今宵。あたゝかに七草さんに指もささせぬ。身請の土産に其方が首を持つて行く。地サア來いと抜放せば。エヽ小ざかしう邪魔する女用捨は無いと渡り合ひ。互に年も相生の松と松との共擦れに。餘所を忍びて聲立てず打手も知らず力は無し。ひらめく紅絹裏劒の光。目鼻の先にひら〳〵とフシ亂れ散るこそ危けれ。地四郎聞付け。何をあがく傾城めらとひらりと飛下り。ほでてんがう置きをれと二人が刀踏落し。唐琴が項ひつつまんで。投退け。詞ひそ〳〵ぬかすをろくには聞かねども。七草が首欲しいとな。我が首は知行になる國にも成る。金にも成るによつて日本國の武士が皆欲しがる。いかな〳〵。萬民を靡け王法を奪ひ四海を一呑と思ふ七草。我術を行はば。廓中の燈火を一度に打消し。長夜の闇となす程の業。うぬらが腕には推參。捻り殺すは易けれども纔の事に大義の妨。雀威して鶴失はんよりはと命を助けた。これ更級。地あいつ一人物に狂はせ今宵廓の名殘の床。サアおじや〳〵と打連れ上る二階より。踏鎮めたる氣の強さ言ひ伏せられて琵琶の姫。息せい張つたかひもなく。エヽ口惜しの身の上やとスヱテ涙。五體を絞りしが。地どうでも今宵は遁されずチヽそれよ。右馬之允様富樫共に在京なり。告げ知らせて討たせんもの屋敷を尋ね一走に往てくれう。アヽよも大門は通すまじとやせんかくやと分別も。築山のゐざり松塀に靡きし片枝は天の教へ。塀の外は朱雀道。枝傳ひにと思ひ込んだる植込は。目指すも知らぬ闇こそよけれ松が枝に。傳ひ登るも。わぢ〳〵〳〵顫へばふるひ落されて。枝の露ふる年ふる松を飛下りんと向ふを見れば。數十本の高提灯こは如何に。丸に梅鉢富樫が紋南無三寶。最前四郎を見付け右馬之允殿を出し抜きの抜駈な。彼奴に先を越されては矢も恥辱望も絶ゆる。天道も神佛も何が憎いぞ何の祟り。かう迄運も盡くるものか無念口惜しやと。塀の屋根に抱き付き聲をも立てず泣居たり。いやいや泣いても叶はず踏込んで。四郎めと死なんものと塀をひらりと、フシ飛下りたり。地

程なく富樫組子組下百人ばかり提灯四方をおつ取巻き。詞奥州の四郎高衡を召捕れと鎌倉殿の御諚によつて。富樫の左衛門向うたり出合へやつと呼ばはれば。地廓中は子を逆様。遣手禿は泣き喚き上を下へと返す所に。コハリ不思議や風も吹かぬに提灯燈火殘らず一度にばつと消え。ナホス前後も見えぬ眞暗闇虚空は人馬馳せ散る音。松吹く風は鬨の聲。大地の震動鐵砲をつるべ放つ如くにて。揚屋の座敷は忽ちにフシ島原陣ともいひつべし。地四郎更級手を引合ひ。左衛門が鼻の先斷廻れども知らばこそ。暗いぞ〳〵同士討すな二三人づつ立別れ。聲をかけて驅出せとフシうろ〳〵四方に別れける。地四郎囁き時分はよいぞ更級。辻の門より木へ登り。東寺の塔を目あてに屋根傳ひにはや落ちよ。いや暗うて何處も見えませぬ。ハテよい頃に明を見せる。心得溜桶踏まへて取付く垂木ばな。軒端に裾を引つかけて危や轉びこけら葺き。見上げて行ふ四郎が術消えたる提灯一時にはらはら〳〵。くわつと點りフシ宛然晝の如くなり。詞あれこそ四郎。餘すな逃すな搦め取れと。大勢どつと取巻くを。地少しも動ぜず屋根に向つて吐く息は青黄赤白紫に。渡せる橋はなんの虹ぞや問へど答へず目の前に。四郎が形は掻き消す如く虹のとまりは屋の棟に。其の魂は更級と共に連れ立ち飛ぶ蛙。あれ打殺せと拳を握り礫よ石よと騒ぐ間に。影も遙かに遠ざかり行き方。更に白雲の。棚曳き響く夜明の鐘。音に聞きたり唐土に。形を吹出す鐵枴仙。蛙を愛せし蝦蟇仙人のギン法を傳へて末の世に目をおど。ろかすばかりなり。

第三

地花に鳴く鶯は聲に笙篳篥の調をなし。桐の古木の丸木橋それさへ琴の音に通ふ。されば當今後鳥羽の聖主。月待つ夜半の管絃の御遊。風俗催馬樂朗詠も珠簾深き聲漏れて。主殿司の立てあかし光の數も百敷や。大宮人の袖はえて雲井に響く絲竹の。フシ直なる御遊樂めり。地足立右馬之允景久浪人詮議の在京の序。禁中非常の守護仕れとの宣旨によつて。萩の戸の簀子に伺候して見廻せば。鎌倉の勤番とは事變り。御格子あけ渡して御簾の隙々漏り來る上臈の。衣のおとなひフシはら〳〵と。蘭麝の匂。打薫り。地聞き馴れぬ物の音も流れに響く御溝水。流泉啄木の曲を操るとは。スヱテかゝる事をや夕立の。地空さりげなく澄む月に。御池の蛙二つ三つ鳴き出せば七つ八つ。次第々々の諸聲は扨囂し蛇ばし出でたるか。何にもせよ喧しし。御座に響かば御遊の妨げこゝらが御番の心掛。追散らし叡感に預らんと。袴のそば挾んで聲をしるべに御垣が原の。ウタヒ柳の翠蔭深き。御池の澤潟杜若。あやめも別かぬ水籠に。這出づる蛙幾千萬。數も限りもあら夥しフシ凄じや。地池水を東西にさかつて立別れ。萍水草に飛びかふ有樣目を驚かすばかりなり。是なん

蝦蟇合戰といふ物な、昔には聞けど目に見始め。いて奏聞と立歸りしが。詞いやく\御遊の興ござまし。地始終をとつくと見屆け御尋の時奏せんと。フシ眼もふらず守りゐる。地池の面は漣高く左に備へし蝦蟇の陣。コハリ一道一順長蛇の如く頭を打ては尾に纏ひ、尾先を打たは頭に包む首尾を計つて控へたり。ナホス右は水火木金土 五行の陣勢ありくと中にも尺餘の コハリ大蝦蟇。これ大將といひつべくのたり。く\と現れ出て互に齒をとき縛せす。兩方聲む蟇目のを矢を射る如く輝けは、數萬の蝦蟇聲はかり鳴立て。くさながら鬨の聲。入違へ入亂れ喰ひつ。喰はれつ飛び違へ追廻し。御庭に死ぬるは捨てかへる。駈倒されて起きかへる。腸を噛まれてちんがちがちんば引くひきかへる。身内は血みどろ赤たいる。追はれて色も青かいる弱れば手もなく川中であまかへる。跡をも見ずして逃げかへる。手負は背に助け乗せよい。く\

く。く\飛んでかへるもあり石を蹴飛ばし砂を蹴立て、奥には篳篥笙を吹く、叟には虹を吹立てく\蛙の歌は引換へて、がまんの池波岸打つ音。ナホス一足去らず喰合ひしは凄じくも亦 三重へ不思議なり。地池水變じて虹にさしもの景久氣を奪はれ、うつとりと見とれ休らへば。又一しきり雨交にどつと落ち來る嵐につれ、御殿俄に動搖しありつる蛙は行方なく消えて。形はなかりけり。地御遊も半に打止みて。上達部上童立騷ぎ、詞訊に御惱御典藥よ吉がよとひそめく聲々。地只事ならずと景久憤ゐ宿直守る所に、鎌倉の傳奏吉田の中納言經房卿立出て、右馬之允を召され。詞今宵非常の宿直はお事よな。只今蛙の鳴聲御耳に入ると等しく、玉體火熱以の外の御惱不思議千萬に御池の邊見て來れと宣へば。景久謹んで、重ねて見申すに及はず。御池の蛙數十萬兩方に屯を構へ、互に喰合ひ爭ふ有樣正しく鬪諍合戰の勢。地池水も血汐となし

風雨震動して消失せし有樣。具に見屆け候と申し上ぐれば。詞經房頭横手を打つて。疑もなく蛙軍。唐土にて漢の武帝元鼎五年蛙鬪つて北狄起り。本朝にては推古の御代蛙鬪つて蝦夷の一族謀叛せり。地何れも不吉の例殊に主上御夢に。詞仙人日月を踏んで虹を吐くと御覧ぜし、蛙の吹く息虹と成ると陰陽の輩申すに違はず。地今宵の御惱此の障碍疑なし、然るに七草四郎といふ者蝦蟇仙人が法を傳へ。樣々の幻術を以て萬民を惑はす、もと此の四郎は錦戸の太郎が弟、武士の浪人ならずや。富樫と御分浪人詮議に在京して。地など四郎は捕へぬぞフシ油斷なりとご仰せける。右馬之允承り。詞御役錬略致さねども、彼の四郎形を種々に變じ人力に及ばず。然るに島原の傾城更級と申す女を相具し。夫婦共に行方知れす候故。地此の更級が親手塚幡樂と申す者、詞江州志賀の里に隱者と成つて遁れ住む由承り。密に召捕り尋ね問はんと存じ。忍び

の者を遣して候と。地申しもあへぬに大理の廳の官人罷出で。詞足立殿の手の者手塚幡樂を召捕り參り候と訴ふれば。地幸ひ幸ひ傳奏の御前にて糺問せん。是へ引かせよあつと答へて埋門の扉を開けば七十許り。頭の雪に埋れ木の。いつの花實と存らへて一度は子故に悅び一度は。子故にぞ苦しき今の縛り繩。フシ御前に引据ゆる。地右馬之允階下に立ち。詞幡樂が娘遊女更級。七草四郎に相具し夫婦共に行方なし。汝は親子舅能く知つつらん。ありの儘に申せ斯くいふは足立右馬之允景久。堂上に在すは吉田の中納言經房卿。武家の傳奏鎌倉殿の御前も同然。陳ずればいやながら拷問するごとありければ。幡樂顏を上げ。事あたらしき御尋ね。娘を賣つて命を繋ぐはさながら我が子の肉を喰ふ人外。畜類に同じき某。起請誓紙を以て申すともよも誠とは思召すまじさり乍ら。水責火責の拷問に逢ふとても。存ぜぬ事は存ぜぬと申すより外詞なし。

地永く御疑ひ受けんよりとく〱白髮首刎ねられよ。詞ハテ扨此の御尋ねと候はば早速進んで參るべきに。宿所を賺し出し道にて繩をかけ。盜賊の體に成りし事。地一生の殘念これ一つと。詞淸しく目の中にスエテ無念淚ぞ浮みける。詞經房卿聞き給ひあれ聞かれよ右馬之允。幡樂が僞なき心底詞の色に顯れたり。如何に老人。汝は助け歸すべし。七草四郎は朝敵といひ天下の大罪人。在所を知らば告げ來れ。急度御褒美せらるべきぞと宣へば。幡樂居丈高に成り。人を御覽じ違へしな。たとへ四郎が聟でない。他人なればとて命助かり御褒美に引かれ。訴人する幡樂に候はず。親子三人同罪なれども。國靜謐の爲とあるならば遁れても遁れぬ大罪人。見付け次第聞き次第訴人いたす儀もあるべし。地いや只事むつかし。所詮首を刎ねられよと。地思ひ切つたる顏色に右馬之允おつ取つて。詞尤々。上には長袖御慈悲餘つての御意。

一天の帝並に武將鎌倉殿へ忠節を盡し。名を殘す老の本望として訴人せられよ。地連る緣の同罪其の方とても遁れぬ所。天下國家のため命を捨てられよ賴入るといひければ。詞ム、一命をくれよ賴むとの詞。僞りなくば右馬之允殿御誓言。ヲ、再び鎧を肩にかけず鑓の柄握らず弓矢取るまじ。地それ繩解け詮議は是迄幡樂罷立て〱と。下知に從ひ繩取が解いたる繩を幡樂取つて手にたぐり。詞エ、あはれ我が身の未來記を知るならば。とつく親子三人飢につかれ死なんもの。地貧苦に責められ詮方なさ。娘に乞食の憂き目を見せん不便さ。傾城の身は男づれ如何なる果報もあるものと。可愛さ故に子を賣りて。末賴もしく フシ思ひしに。地引替へ男の緣につれ今は天下の科人と成り。親は訴人の身と成つて親の解かれし此の繩の。聟と娘にかゝるべき因果の繩是なりと。大地にはたと打付け。お暇申すと首を下げ淚を白洲にすり付け〱押隱し。

莞爾と笑ひ立歸る尾羽は枯れても荒果てても。昔ながらの武士の道。立つる詞の花園や志賀の。里へぞ 三重〽 行く先も。住めば都の名に古りしフシ志賀の浦波。餘情なき。地隱者住居の フシ離れ庵。地主幡樂は大内の召によつて京上り。年寄つても女の留守寢ても夜の目をまんじりとも。明六つ五つ小オクリ四つに。過ぐれば今日でもないか待遠やと。戸口に立つて西東見廻す外面の籔垣。詞是は是は何處の野良犬が破りしぞ。たつた一夜の夫の留守犬迄婆を侮る。地憎や〳〵と小竹捻寄せ押縮ね。結ぶ繩ふし竹の節。フシ是も世に住む憂きふしなり。地急ぐ心に幡樂か任せぬ足を漸に。歸り着いたる我が屋の門。詞なうお歸りか待兼ねし駕籠にでも乘りはせず。地先づ〳〵内裏の御用とは何事ぞやと言へども答へず。詞お婆垣を結ひ圍して何時迄の栖家。ごくにも立たぬ事する人と。地いひ捨て通れば續いて入り。詞今の五音は氣にかゝる九年十年顏見ぬ娘が身請したけな。近々に夫婦連で來るであらう。地障子の破れも繕ひくれと内を出る迄いふた人。戻り〳〵浮世捨てたいひ樣は。何事が出來ましたと問へば幡樂打笑ひ。詞人間世は天地と同じく今迄照る日が俄に雨に成る如く。昨日思ひし事今日變る。變易の理に暗ければ時々驚く。必ず肝潰さるな身は今日腹切つて死ぬると 地聞きもあへずヤア丶。定めなき世の習ひとも大抵の事かいの。譯を聞いてこちの胸も定め度い。仔細を語つて下されと心を揉めば。されば〳〵。詞長う言うて詮ない事。つまる所は娘が夫。七草四郎は王法を覆す天下の朝敵。見聞き次第夫婦共に訴人致せと。禁中北の陣とやらんいふ所。鎌倉殿御名代の公家衆。足立右馬之允といふ武士の大名と。理を詰め義を立て問答の上。地更級とも七草とも耳に入るか目に見れば。ちつとも庇ひ隱す事ならぬやうに成り切つた。なればとて幼いより人手にかけ。苦勞させた娘何の科何の恨に繩をかけ。是首切れよとて出されうか。身こそ貧なれ武士の道を守りつめ。ひけを取らず譏られず。七十の老の坂浮世の峠を踏越え。此の上に何處の高嶺何國の峰。何の目あての花もなし。生きる程業曝しと思ひ極め切る腹。かくいふ中も因果のめぐり娘が來ない物でない。持佛に燈明香立てたも。本來空の故郷へ歸る旅立せんと座を立つを縋りとめ。詞聞く中から私は死んで居る。子故に死ぬるは父も母も同じ事。五十餘年連添ふ仲獨り殘れか怨めしや。地此の春の便に親達の寢卷にと。くれし古着の白小袖 地着れば親子連立つ心。共に〳〵と思ひ極めし涙の目許。詞道理々々母の身でまだ〳〵存らへ悲しい目も見られまい。同じ刄と覺悟めさと。地内より門の戸錠卸せば女房持佛に火を揭げ。燻らす香も我が命も。消ゆる間近き薄煙オクリ打連れ。納戸に入りにけり。フシ折もこそあれ。更級が。地忍ぶ手綿の頬被り。道

を問ひ〳〵家をとひ見知りは元の藪垣。走り着いても戸は明かず。押したり引いたりしやくつたり。聲を細めて母様申し。詞しながあ來ました父様更級でござんすと。地いへども更に音もせず。ムヽ寺參りなされしか。詞外には錠も卸さず。内で締まるやうに賢いからくり爰で待たう。地早う歸つて下されかしと フシ待つ間や心せかるらん。地父母かくとも白小袖に涙をかけてくどくどと。詞可愛や娘が模様の物は廓風。派手でお氣に入るまじ此方や母が好いたやうに。染めて着よと孝行でくれしもの。地血に染めるとは思ふまいと悔み歎けばお婆。詞愚痴な事言はずとも此の態見や。二人の死骸を人が見て。幡樂が浮氣な心中したといふであらう。若し草双紙に作らば外題は心中友白髪と。地命を塵とも最期の戯言 フシ心健氣に哀れなり。これ朝暮頼みし觀世音普門品一品讀誦し。御經の終りが命の終り女夫が顔の見納め。隨分小聲に〳〵と顔も涙も同音に。詞種々重罪五逆消滅自他平等。妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第廿五爾時無盡意菩薩卽從座起偏袒右肩合掌向佛而作是言世尊觀世音菩薩以何因緣名觀世音佛告無盡意菩薩と 地吹き來る。本フシ風が取次ぐ經の聲。詞ヤアお二人の看經か。申し父様母様爰明けて下さんせと。地呼ばはるも親子の緣。胸に響きて母はきよつきよと耳欹て。父は紛らし聞かせじと涙に咽ぶ聲張上げ。詞一心稱名 觀世音菩薩卽時觀其地音聲の高く成る程あこがれて。これ娘か來ました娘ぢや明けて下さんせ。詞悲しやあれ娘といふわいの。イヤ娘が何の來るものぞ。娘ではない。無盡意菩薩無量百千萬億に 地思ひを碎く夫婦の歎き。フシ御經も跡や先。地堪へ兼ねて駈出づる母。帶を控へて止むる父。泣く〳〵念彼觀音力振放して走り出でて戸に取付き。詞悲しい所へおぢやつたの。其方の夫四郎は國を騷がす大惡人。連れ添ふそもじも一所に見付け次第。縛つて出せと鎌倉殿の御意が出て。地いとしや廣い世界を狹い身になりやつた何とぞ身を遁れて一日も命生きてたも。それに增す孝行ない惨い目が見ともなさ。父も母も今死ぬる。二親の命日忘れず夫は佛法削るとも。そつと隱して回向しや。それが身の冥加身の光とも成るぞいの。父様は武士の義理一言も交されぬ。詞サア今が最期念佛唱へてはや歸りや。地エヽ門の戸一重隔てて十年ぶりの娘が顔。見ずに死ぬる悲しやとわつと叫びて入りければ。なう母様待つて下さんせ。詞四郎は私が男でない。本の男は別にある。七草とは緣を切る譯を言ひに來ました。地必ず死ぬまい〳〵と苛ち喚けは幡樂聞付け。詞何ぢや四郎と緣を切るとは嘘ぢやないか誠か。なんの嘘いひましよ男は別に有るわいの。それが定なりや娘一人拾うたと。悦び勇み飛んで下り錠明けるやら捻切るやら。親子が顔を見合せて扨も大きう成つたの。ホウヲウいかい白

髪にならしやんしたと。三人手を取り縋り合ひ嬉しとも戀しとも。わきて別ちも泣く涙フシ思ひ遣るさへ哀れなり。扨四郎が外に眞實の男とは。京都の町人か但し百姓か。いや〳〵今流浪の身とはいひながら。鎌倉大名葛西の源六清治殿、内裏大番の御在京に馴染を重ね。末々堅い約束迄致せしが。御親父樣の勘當にて逢瀬も便りも絶えし折しも。七草四郎が請出す談合。やれ嬉しや此の里をさへ出たらば。地歎きをいうて暇を取り源六樣に添はんものと。隨分廻つて廓を出で。色々樣々斷立て暇はくれる筈なれど。詞爰に一つのうたてい難題。其方が親の手塚幡樂は武勇の譽ある者。暇をやる代りには親に我が法を勸め込み。味方に靡け從へよ其の時暇をやるとの事。地大事の親をいま〳〵しい恐ろしい。惡人の徒黨となし。現世後生も勿體なく。其の詞を聞捨てにそつと逃出で。詞源六樣に逢ふ迄先づ鎌倉への思ひ立ち。あんまり父母のお顔が見たさ。お暇乞に立寄りしにま一足で危や〳〵地觀音經が聞えずば此の世で父母見られうか。有難いお經の力とつ樣かゝ樣拾うたと。スエテ伏拜みてぞ泣きゐたる。地幡樂顔色打解けて。詞我を仙術に勸め入れ度きとや。成程々々徒黨に與し暇取つてとらせん。地同道せいと言へば母も娘もなうあさましい事いふ人。氣が違うたかと興さめ顔。詞ハテ愚かな誠に一味するものか。幡樂が表裏の智略眞實一味の色を見せ。近付き寄つてむんずと組まば。彼奴は若者力量者我は老體骨は枯れ木。微塵にはたき碎かるとも摑みついたる手は放さず。下にならば下より突き上にならば上より突き。後を組まば我が胸板より串柿ざし。四郎が胴腹突き貫き國土の地怨敵討滅し我が身は死しても佛法王法に忠節の名を末代に遺さんと。言ひも終らぬ中よりもぞつと惡寒に更級が。色は木賊の眞蒼青に。苦しやなうと悶え伏し手足は氷額は霰の玉の汗。身を顫はし身を縮め息も絶え〳〵苦しめば。父母驚き痞が出たか氣の盡きか。フシ藥よ水よと立騒ぐ。詞アヽ病でない藥は入らぬ。恐ろしや四郎が術念をかけては千里も見通し聞きぬいて。形を吹出し仇をなす。父を勸めて一味にと騙した僞。四郎が胸に徹してかぞつとすると等しく。四郎が來て身を責むる。地見て下さんせと上の襟押開けば。あらいぶせ恐ろしや頭に角ある大の蝦蟇。雪の肌にひつたりと四足を張つて肉を締め。ぎろつく眼は鋼の鋲を打つたる如くにて。胸に喰入る双の齒音フシ鑢をおろすに異らず。地父母二目と見もやらず娘が苦痛うめく聲。病ならねば藥もなく。いで摑み殺さんと近付けば幡樂に。毒氣を吹きかけ眼を眩ます。狼狽へ歎く夫婦のさま。スエテ目も當てられぬ次第なり。幡樂涙押拭ひよし〳〵未來奈落も合點。今日より仙術の法に歸伏し徒黨全く僞なしと。詞につれて喰ひ放しひらりと飛んで蛙踞ひ。紅花の舌をひらひら〳〵と蝕

出す面付。さしもの幡樂ぞゝ髪堅ち詞某發起し一味の上は。地はやく／＼歸れといへども更に動ず。母は泣く／＼アヽ思ひつけた。詞仙術に入る誓文には佛の像を踏まするとやら聞及ぶ。其の望かと地いへば悦び嬉しげに鳴く蛙の聲。ヲヽ易い事踏んでのけん持佛堂の佛々と。父の勇みは猶悲しく。私が苦痛を助けんとお慈悲は有難けれども　邪道に墮すは私が罪。その儘置いて喰殺させてフシ下されと歎き。沈むぞ道理なる。地親子夫婦が一生の大慈大悲の繪像を下し打敷に廣げ奉れば。蛙は猶も目を放さず。エヽ罰も利生も皆一心踏んでくれんと立ちかゝり。足を上げは上げたれど忍辱慈悲の觀世音　曠劫不思議の尊容廣大智慧の御眸「明暮恭敬禮拜して願をかけし御本尊」只今土足にかけん事如何なる惡業惡因と。思へば目もくれ心消え踏みもやらす退きもせぬ。足に蛙は眼を着け上ぐれば見上げ下せば見下す惡念力。涙をすゝつて幡樂大聲上げ。口惜しあさまし。泥水に這廻り。下駄の歯にも踏殺す小蟲一疋に惱され。詞今生はなぶり物來世は墮獄の佛罰と。わつと叫び入りければ。母も娘も諸共に御罰は我に我こそと聲を。ばかりの喞ち泣き理。とこそ聞えけれ。地蛙は毒氣の虹を吹きかけ忿の相。是非に及ばす是迄と足を上ぐる頭の上。棚に積んだる瀬田柴の暫し／＼と踏散し。やあゐいと飛んで下りたる若者。幡樂が足を取つて押退け。詞我等は葛西の郡司清童が嫡子。同苗源六清治。息女更級とは最愛の契約ありながら。漂泊の浪人心に任せず。更級安否聞かまほしく。今朝未明に藪垣を破り忍び入りし慮外眞平御免。地此の七草四郎蛙は我等が名字の敵。親の敵も同然とはつたと睨み。地やい蟲め汝蛙の形で切るは殘念ながら。武士の刀有難しと頂戴せよと」地むんずと摑んで刺通す刄の下ついと飛びぬけ。納戸の内に入るよと見えしが。忽ちに實の七草四郎が本體。間の戸蹴破りつつ立つたり。源六彈をかけ望む所よう來たと。切りかくればかい潜り更級が胸ぐら確と取つたる人質に。左右なくも討ちかけず幡樂夫婦も仰天しフシせん方。盡きて見えにける。詞ヤイ爺よつく聞け。過分の金子に代へた更級。生けうと殺さうといふに及ばす四郎が物。但し今仙法に歸服し徒黨すれば。助けて直に暇をくれる。あの藪潜りの木櫛さがしの鼬めに。與するといふや否やたつた一刀。否なら否應なら應。地一言の返答と。フシ退引きさせす詰めかくる。地一世の大事と源六これ幡樂。詞更級の爲に父が勘當受くる程大事の女なれども。家の敵には代へられず。あの蚯蚓喰ひの泥蛙めに。一味すると聞くや否や。蛙め共に更級も眞二つ。地有無の返答一言々々とぎしみかゝれば幡樂むつとし騷かず。詞ムヽウしらさ海老にて鱸を釣り。麥飯で鯉を釣るは子供の業。武勇だてする若者が娘を餌にして親を釣るとは。娘を娘

をむす〳〵ムウハア〳〵〳〵〳〵腹筋千萬やい。左樣の事にかまけてうろつく幡樂に非ず。出直せ 地〳〵と恥ぢしめられさしもの四郎猶豫すれば。源六も刀引つ側めつシ兩方ためらひ控へたり。地いで幡樂が望ありと床に立てたる白木と塗木の弓二張。鷹の羽と鶴の羽の征矢二手爪よりし素引して。二人が前に押分け。詞サア此の弓矢持つて兩方に立別れ。一度に放せ武藝を試み。射勝ちし方は則ち聟なり一味なり。相討は面々の不運得心なるかと投出せば。地元より源六望む所四郎も更級突放し。弓と矢取つて立向ふ更級はつと身を冷し。詞いや〳〵弓矢は放れ物。源六樣とて必ず勝つにも定まらぬ。地母樣とめて下されと親子あわて立騷ぐ。詞阿呆めそれ矢に當るなと。地二人を父がひん抱かへ押しすくめ押し止むる其の隙に。四郎源六互に弓と矢打ち番ひ。きりきりと引きしぼる。詞むさと放すな見物するぞ待て〳〵。やれ 地待て〳〵と聲をかけても保ち兼ね兩方一度にひやうど放つ。鏃と鏃が眞中にてはつしと中り。二本の矢柄は颯と成り微塵に碎け散つたるは、ノシ揃ひも揃ひし手利なり。ホヽウ 詞天晴矢業勝負は乙矢と二人を押退け。地中腰に成つて見物す移りさうと源六。南無八幡大菩薩と心中に立願すれば。四郎も心に蝦蟇鐵拐海尊仙人と觀念し。矢束十分箆かつき迄引詰め。暫し保つて放れ際呼吸の拍子の眞中へ。幡樂飛入る矢は放るゝ左右の肋骨に二本の矢。はた〳〵すつはと受留め。血煙はつと射手もハツ〳〵はつと弓投捨て。娘は驚き縋り付き スヱテ泣くより外の詞なく。地母は猛つて四郎は四郎ともいふべきか。詞曲もない源六殿三寸か二寸こそ。手先狂ひと許しもせん。地是程目當が違つて弓取と言はるゝかと。恨み歎けば幡樂目を開き。詞アヽ〳〵婆恨いふ事少しもない。なう兩人。始めの一矢の當りは細かなれども的が外れた。誠幡樂が望の矢壺に。ひつしと中りしは此の受留めし二本の乙矢。的に成りし某が物狂はしき樣なれど。皆娘が不便さゆゑ。四郎に與すれば娘共に源六が討たんといふ。源六に從へば四郎が娘を刺殺す。我此の矢先にかゝらずば人質に取られし娘。何とて命助らん。なう源六。冥途の郡司殿お事をいとしと思はるも。幡樂が娘可愛いと存ずるも。詞人の親も我が親も親の心は親が知る。地よも狂氣とは思すまじ。詞なう四郎殿。多くの金銀にて娘が傾城の苦をぬぎし。大恩報ぜんにも一錢の貯へなし。金も返さず一味もせねば幡樂は大盜人。其の盜人を射留めさせし是が誠の望の矢壺。地娘に暇をくれてたべ。エヽ 詞言ひ度い。〳〵言ひ度い事多けれど口が動かぬ〳〵と。地いふ舌も強張つて顏もそこね弱る聲。親子は前後取亂し。まちつと生きて下されと。抱きかゝへ身を悶え聲も。惜まず泣沈む。地源六つつ立ち。一命を捨てられし上は四郎が恩は相濟んだり。是から

は目前の舅の敵遁されず。サア來い勝負と拔き放す。地四郎すつくと立ちエヽしをらしい志。我が法は廣大にして人を殺さず。一人も仙術に勸め入るゝを本とする故。太刀打せず助け置く。此の情を思ひ我城郭に立籠り。一天下を引受け合戰の時味方に來い〳〵。但し是非に只今討ちたくばサア討つて見よ。地チヽ餘すまじと打ちかくる。刀の光に陽炎の形は。見えず成りにけり。詞エヽ口惜しや父といひ我といひ。二度迄討漏らすよし。地一念の惡鬼と成り。父子の無念を散ぜんと既に自害と見えける時。弱る聲にて幡樂。ヤレあれ止めよなう〳〵源六。詞犬死めさるな最期に申す事あり地是へ〳〵と近く寄せ。詞舅の敵との一言。嬉しゝ〳〵さり乍ら。全く四郎に取られし命でなし。彼奴と夫婦の娘同罪遁れず。急度訴人致さんと足立右馬之允に向つて言ひ放したる幡樂が詞。土灰に成つても違へられず。地あはれ暇を取る金かな緣を切り度し〳〵と思ひしに。今天地晴れて葛西の源六清治が妻と成り。詞娘は世間廣くなる。金に替へし一命は娘にこそやつたれ何の敵のあるべきぞ。地氏の世話に雁一羽さへ矢は三錢の譬。一本の矢にて金に替へぬ娘婿けた悦び。源六が舅との一言臨終の耳に聞く事は。勸むる六字に劣るまじ。十箇年の夫婦が命娘が憂き身の膏にて繋ぎしもの。始めは娘を産み出す今は娘が安養世界へ。我を産み出す命の親の着せられし白小袖。極樂淨土に生れ出づる幡樂が今の フシ産衣ぞや。地なう聟殿。重ねて四郎退治の時。詞軍門出の餞。吉左右の矢を聟引出と。地二筋兩手に引つ掴みぐつと拔いて差出し。莞爾と笑ふも老木の花見る間も夢と息絶えたり。親子わつと死骸に取付き父よ夫よと呼返し。泣叫びては聲限り縋り付いたる手向草。返らぬ水にあこがるゝ親の別れ夫の別れ。敵に別るゝ本意なさも共に世上の愛別離苦。結びそめたる夫婦の緣。結び縫がれぬ裟婆の緣 ギン二つの緣を一筋に。歪まぬ法の誓願力。彌陀の國迄武士の永き。譽を殘しける。

第四

地鳥は高く飛んで矰戈の害を遁れ。鼷鼠神丘の下に穴掘つて人の薰ぶる患を遁るとかや。扨も七草四郎高衡。筑紫七草の城に立籠り。足立富樫の兩大將數日是を攻むると雖も。四郎が仙術に寄手度々敗北と。早馬を以て鎌倉へ注進櫛の齒を引くが如く。此の度は秩父の重忠七千餘騎を引率し。其の身は錦の陣羽織裏打頸の唐革小笠。雲雀毛の駿足馬の背撓わに跨つて。隨兵小具足前後にむら〳〵村濃の。旗の足並西の宮 フシ須磨の上野に着き給ふ。地後陣の方よりなう〳〵と呼ばはつて。二人の女わきせきと重忠の召されたる。馬の絡頭しつかと取り用ありげに息つきあへねば。近習ども聲々に。詞ヤア見苦しし女輩それ引退けよと立ちければ。重忠御覽じさなせそ〳〵と押止

め。コリヤ／＼女。重忠に何用ある語れ聞かんと宣へば。二人は兩手を土に跪び恥かし乍ら自らは。葛西の郡司清重が娘琵琶の姫。詞又是なるは兄源六清治が妻更級と申す人　地父清重の切腹本領を召上けられしも。七草の四郎より事起り。兄弟の者の身の上は御存じのわけ申すに及ばず。兄源六は七草の四郎を討たん爲。詞筑紫へ下り樣樣心を盡せども。四郎が不思議の幻術にて。今に得討たず徒に日を暮らす由。詞此の度重忠樣筑紫へお下りなされなば。手間隙入らず七草の城を攻破り。四郎を御手にかけらるゝは案の內。詞餘人に四郎を討たせては兄源六が本領に立歸り。葛西の家を相續の願ひも絕え。地一天四海の物笑ひは。身の悲しみ。フシばかりでなく。地先祖の恥辱父への不孝。自らも亦足立殿へ嫁入の緣も切れ。自害致すは兄弟ばかりか。詞更級樣お前一人生きてはよもや。すりや三人は死ぬるより外思案ちなく憚りも願す。地お馬に縋つてお歎きは源六諸共我々が。七草四郎を討取る迄に道中御逗留。ゆる／＼なされて下さるれば葛西の家をお取立。三人命助かる事お慈悲とばかり兩人はスエテ土に。身を伏し泣きゐたる。詞重忠馬上をひらりと下り。ムヽ扨は清重の娘達な。父も切腹に及ばず本領沒收迄は無き事を。側の梶原が依怙の沙汰。年月の悲み思ひやる。地殊更女の餘儀なき賴み重忠が身に取つては。迷惑ながら聞捨てんは不便々々。詞今日より兄源六に日を二日汝等達が女足。道中を急ぐともさぞあらん。地一人に二日づつ二人に四日合せて六日は重忠が。情を以て道中隙入りフシ得さすべしとありければ。地二人ははつと頭を下げ。アヽ有難や忝や。生中お禮は冥加ない。サア更級樣一足もと悅び勇み馳出づれば。詞ヤレ暫く／＼と呼戾し。四郎が術は鬼神も同然。酒呑童子以來の朝敵。足立富樫數萬人の手に及ばぬ者。汝等三人が力には勇むともかひあらじと。地懷中よりくりしめの注連繩取出し。詞是は江の島の辨財天にて。朝敵退治の祈禱として。千座の大法祕法を修せられ。地鎌倉殿夢中に授かり給ひし注連繩更級に得さするぞ。神明佛陀の擁護によらば。いづれの敵かフシ滅さざらん。地琵琶の姫には重忠相傳の此の陣笠四郎を討つ迄足を貸す。詞父の郡司は浮世の夢の破れ笠兄弟は世を忍ぶ笠。詞葛西の家の三蓋笠は絕えたれども。今より兄弟が三蓋の笠に此の陣笠を取交ぜて三蓋笠の家の指物天が下に押立て。四郎が首を提げたる悅びの對面重ねて／＼さらば。地／＼と立ち給へば二人はあつと押戴き。殘る方なき御厚恩此の注連繩のくり返し。申す詞もなくばかり跡伏拜み／＼。情の笠を甲に着て旅立つ。筑紫の　三重

旅の素足

歌君に逢はねば。解かれぬ物は。二人結びし下紐と。戀しゆかしのむすぼれ心。それ

で慕うて ナホス フシ ひかれ引く。地 琵琶の姫更級は。重忠の情にて六日延びたる日數に り。いとゞ心は急がれて。スヱテ 月も明石の浦傳ひ。寝ぬに亂るゝ。黒髪の フシ むら〳〵千鳥。濱千鳥。餘所の寝覺の夢にたゞ見知らす知らぬ國越えて ナホス 筑紫に着き七草の。フシオクリ 城へと〳〵尋ね行く。道の フシ 先を急がぬ。旅ならば。此の浦山の名所をば。本フシ 訪うて眺めて道の記に。腰折歌の一首をも詠まば硯のうみづらに。これ〳〵見さんせ美しや。走書する追手館。長 地 門司が關より便船し豐前の國の黒崎に上る朝日と打連れて我も西へと心せく。苅萱の關朝倉や。小米峠にさしかゝり。スヱテ 櫛田の神にぬかづけば。きねが鼓か神樂太鼓か。それでないぞや貝鉦の音も間近く響き來る。ヤヲ なう氣遣な更級樣 俄に不思議の鉦太鼓何であらうの詞の下。上の山路をしどろ足。シャ 地 更科耳を傾けて、詞 ム、聞えたあの拍子は。軍陣の押太鼓

扨は秩父がぬつけりと私等を騙して筑紫への寄手の勢に紛れない。地 エ、たらされた後悔と見る程もなく軍兵の影は見えねど亂先に。二人ぬつと振出す連枷を二本からげて打碎く。ちちか村の數右衛門と腕續に書き記す。足手纏ひの蓑帽ども。人數八百五十人鎮尾口の持主と。土氣放れぬ本太は否かた〳〵四郎が味方。何樂みに籠城の。せんもない鎌山杁目籠のあらき木綿旗。風もたまらず森權八。くさか村の徒黨の勢。[illegible]を押立て引續く野臼衛の旗印。[illegible]割り立割りに。手並を見せんと呼ばはつて聲も高旬の真後十郎。口の津勢を籠催し。シ ざゝめき渡る足の下。土を蹴蹴竹さらへ貸を旗物に不吉の印。敵の落城疑ひも中津の一族蜷川忠太と墨黒に書いたる筆の命毛も程は嵐に誘れて。スヱテ 落ち來る鐘と諸聲に 歌 鉦を叩いて。佛にならば。てんと。鍛冶町は。皆佛。やれ皆佛。てんと。鍛冶町は皆佛。夜明の鳥。高い山から。ころ〳〵

と落ちて。見たも。皆いたもしなだんご。目に ナホス 手杵の フシ 持印は。詞 佐藤忠信に付く勢ど。ちぎれ〳〵に走り來る。コハリ 其の外蓑笠はね釣瓶。所領稲扱千石通龍骨車鋤鍬鎌車。農具は家の物じるし。上つら。下つら。ふつかつき浦 ナホス 村里の土匙ともしどろに成つて。馳せ過ぐる フシ 跡は春吹く。松の風。柄。蟬。村鳥と。聲をしらべの琵琶の韻いき此の時に打納れ。男々城へ忍び込み四郎を討たうぢやあるまいかと言へば頷く稻の穂の案山子に立ちし萬言ひ。二人は肩に打ちかけて忍ぶ。姿も花薄。荻は亂るる淺茅が原かき分け。踏み分け行く道も跡を。慕うて 三重 急ぎける。

地 抑七草の城郭と申すは。城の廻り一百四十一町餘。二方は海浪漫々と。嶮岨は屛風を立てたる如く。船を寄すべき手岡きもなく。一方は斷崖八十餘丈。ナホス 下は深田の フシ 要害に。地 築地を高く矢狭間を切り。

雑兵三萬六千人旗鉾弓槍旗鐵砲。不時の貫
の寨を固め。四郎は主居の本丸に。龍蛇の
勢さながら天に蹴り。雲井に飛ばんと
蟠れり。南の大手は葛西の源六。東の山
手は富樫の左衛門。大軍を以て攻圍み。時
時貝鉦鳴らし遠巻に日を暮せば。西の山手
は足立右馬之允景久日々夜々の鯨波兵糧の
道斷切つて。重忠の下向を待ち。スヱテ空
しく數日を送る所に。地何とか思ひけん富
樫の左衛門。手勢の中よりすぐり立てたる
兵廿騎許り召連れ。田尻口の松原を。七草
の城の搦手に フシ物音もせず急ぎける。
富樫が執權東田傳藏息を切つて走付き。地
數度の軍に味方の御勢。悉く打死し敵は十
分勝ち誇つたる競ひ口。僅の勢にて押寄せ。
犬死せんとの御所存か。地いざ御歸りとい
はせもあへずイヤさうでない〳〵。詞鎌倉
より秩父の重忠近々に下ると聞く。彼に功
名させて何と富樫が立つものぞ。城中はは
や兵糧につまり。大半は餓死。牛馬を喰ひ
革篭を囓り。弓引く力もなしと聞く。コリ
ャ抜駈の手柄此の時。四郎が首は此の腰に
握つた。地城を乗れ〳〵續けや者どもと堀
に手をかけ既に乗らんとする所に。地城中
には合圖の半鐘打立て〳〵。數千の軍兵顯
れ出で手んでに大石を打ちかくれば。南無
三寶と此方へ寄れば大木を投げかけ〳〵。
砂を撒きかけ引くも引かせず。乗るも乗ら
せず石子詰。一騎も殘らず打ちみしやがれ
逃ぐる富樫が頭の鉢。七つ八つに打割られ
手覺もなき手柄たて。敵の手柄と成りたり
し フシ討死の程ぞ哀れなる。地城中の諸軍
勢心は一致に逸れども。兵糧には盡き果て
せめて一日の糧があらば打つて出で。打死
せんものを餓死する事かと。爰に寄つては
エヽ無念。彼處の方にはエヽ口惜しと。立
つる腹さへ背に着きてスヱテ物いふ。力も無
き所へ。地大將四郎乗馬の口引立て。二の
木戸迄軍勢を招き。詞かうなる迄心を變
ぜず。我が宗門を尊ぶ事過分々々。寄手よ
り兵糧詰に逢うたれば。草木の根を掘り薬
を煎じ。犬猫は言ふに及ばず。城中の牛
馬一疋も殘さず喰ひ盡し。殘る物とては此
の馬一疋。是を手づから切つて方々に與ゆ
るは。四郎が身を切つて振舞ふも同然と思
ひ。ちと力づけ一方を切破れ。地追付け寄
手を討滅し甘い目に逢はせうぞと。引寄せ
て馬の鞅際押切り押切り。サア喰へ〳〵と
言ひければ。餓鬼に水を見せたる如く。ア
ア有難い忝いと摑み喰ひむしりくひ。詞此
の御恩は忘れぬ。お志を内の嬶にも嫁にも
頂かせんと。地陣所々々へ持歸る。かゝ迄
邪法に浸み込みし。フシ惡因縁ぞ恐ろしき。
詞かゝる所へ獅子木佐仲太罷出で。詞ちと
は村の勢の内に女二人紛れ込み。城内を忍
び窺ふゆゑ。召捕つて候と引据ゆれば。四
郎きつと見。ヤア珍しや更級琵琶の姫。爰
は野武士ども何萬騎か取卷いて。日夜に攻
むれども落されぬ城中に忍び入り。何とせ
うといふ事。城中は糧に盡き牛馬迄喰ふ所

へ生物到來。地御當地珍しい肴括つて置き。更級が太り肉。後程切つて賞翫。底味の甘い所。豫て四郎が覺えてゐると オクリ せゝ笑う〳〵てこそ入りにける。地エヽ腹の立つ仕損じて。牛馬と同じう喰物になるが。なんと更級樣口惜しうはないかいの無念にはないかいの。詞無念なとも口惜しいともエヽ腹の立つ。見ればこなさんの繩は延びてある。コレ妾を喰ひ切つて下さんせ。早う〳〵ヲヽ合點と更級は。地つつと寄つて琵琶の姫の高手の繩。齒も折れよ齒莖も裂けよ。一世の大事と噛切り〳〵。しゝ切る念力佛力や加はりけん。コハリ さしもに締めたる高手の繩。ふつつ〳〵と喰ひ切れば。小手の繩も緩まりて。ナホス 縛左右無く解けにけり。地今は琵琶の姫手は自由立寄つて更級が。繩を解くやらほどくやらア、嬉しい有難いコレ。詞彼の注連繩樣も懐にござる。これが守りと成つたであろ。地此の神力で切入らば四郎か鬼神でござらうが。

首は二人が手の内に。サア フシ 切るまいかと氣をせけば。詞更級押へて。いや〳〵。二人ばかりでは言はれぬ二度のかけ。あの西の松山は景久殿の御陣所。東の森は源六殿の陣所ぢやげな。あれへ矢文で知らせて外から攻めさせ城中の騒ぎを見て。地内から二人裏切せば。四郎を討つは掌の内。妾から矢文で〳〵と。二人は小袖の下褄押切り。筆が欲しい硯がな。ならぬ望に隙を入れ見付けられては大事ぞと。互の小指喰破り。長うは書くまいつい一口。早う〳〵知らせの血文。一人が卷けば一人は立つて高櫓の。弓矢取出し矢の根にしつかと括り付け。更級は清治に琵琶の姫は景久へ。互の夫樣參る。ひやうふつとと切放す思ふ日當は違ひなく。二人の矢先は遠鳴し フシ 陣所の庭にぞ落ちてける。地サア此の内に四郎が在所。搜せ〳〵と帶引締め。刀も携に有難しと。取つてははつ込み氣も勇み。フシ 城中深くぞ進みける。地夫を思ふ血の矢文見るより二人は心に徹へ。景久清治時も違はず一陣に進み出で。諸卒を下知して東西より釣瓶放つ大砲に。神明擁護の彈丸鋭く。さしも固めし二つの櫓。コハリ 石垣塀土居楼瓦。くわら〳〵ぴつしやり崩るる音。百千の雷霹靂頭の上に落ちかゝり。須彌の四州に風あふれ。四大海の荒波を。ナホス 一度にどつと吹卷く如く フシ 大地も裂くるばかりなり。地軍勢に先立つ景久清治二の丸に乘込んで。十方に切捲れば。獅子木大矢野森千東。高何ちゞはの郷民ども拔連れ〳〵討つてかかる。二人は是を事ともせず。左右に別れ亂入り手を盡してぞ 三重〽 戰ひける フシ 鷲に兎。地鷹に雉猫に鼠の出逢ひし如く。二人が手にかけ六人ながら 落花微塵に切散らせば フシ 敢て刃向ふ者もなし。地往に鐵爪し賊民ども。音に驚き堪り兼ね陣屋々々を這出づる。是は蟷螂が斧。手には杖つく力さへ。泣く〳〵轉びにじるとすれど。頭は地に着き腹は背につき這ひ蹲ひ。命を

お助けお助けと動くは目玉蟲の息。フシ此の世に居るも名ばかりなり。地清治きつと見。コリヤ餓鬼阿彌も同然ながら。邪法一味の方人等切盡さんと立ちかゝれば。アヽ情ない胴慾な。立つて手向ひするにこそ地轉びました御免あれ。お慈悲／＼と絶え絶えに。土に摺り付き泣きゐたる。詞景久押入つて。切らずと死ぬべきうんざいども助く／＼。地足手縛ひ屈んでゐるをオヽと呼ばはれば。詞アヽ有難いお助け。轉ぶといへば助かるさうな。地ころび／＼とよろめいて。フシ皆々陣屋に這入れば。地外には味方の寄せ太鼓。一度にどつと鬨の聲。景久清治力を得。あれあれ後陣も續いたりいざ本丸へ。もと。天にも上る心地して。フシ城中へこそ切入りける。地四郎 夜叉の荒れたる如く。琵琶の姫更綴が髻髮。兩手に絡卷き中に提げ躍り出で。詞誰が縄免して推參至極。寄手の勢を引入れしも。汝等が仕業よな。エヽ地につくい奴。我が邪法にて寄

手の軍勢微塵になし。うぬ等に見せて吠えさせうか。但しは捻り殺さうかと掴き付くる脇の下。コハ不思議や更綴が懐中より金色の光矢を射る如く。黄色の蛇現れ出で。頭を擡げ紅の。舌をちら／＼差向へば俄に四郎うんとばかり。眼くらみ腕も痺れ。二人を突退け踏ん反りかへり。苦しむ息の中よりも。蛙の姿飛び出づれば二人の女も動顚し。物陰に立忍べば蛙は雲を霞に鳴き。大地に形を掘り入らんと。恐れてフシ逃ぐるを追廻す。蛇は宇賀の御魂。四郎が邪法蛙の術。虹を吹きかけ身を包めど手だても忽ち蛇の。惡氣に吹消し吹拂はれ。互に喰はん喰はれじと。追つつ追はれつ狂ひしは目も當てられぬ 三重へ 風情なり。地神明守護の一口に蛙をぐつと呑むよと見えし。蛇の姿引替へて。辨財天の御注連縄フシ虚空に。ひらめき失せ給ふ。地四郎むつくと起上り。茫然たる隙を窺ひ。琵琶の姫更綴太刀抜き持ち。詞大惡人の四郎め邪

法の蛙はたつた今。蛇に呑まれたを知らぬか。術がならばして見をれ。地[illegible]フシ所望と嘲れば。詞四郎はつと心付き鬼の如く覺えしが。地扨はと心驚きて秘文を唱へ。虚空に向ひ口を揃めども手に入らず。雲を招くに下らばこそ。エヽ口惜しや我が術は盡き果てしか。腹立や無念やと怒の眼に涙をそゝぎ。拳を握り立つたる所へ。足立右馬之允景久一文字にかけ來り隙をあらせず討つてかゝる。四郎ひらりと身を外し。弱腰つかんでどうと引敷き。詞邪法こそは盡きたれども。うぬ等如き五人三人纏蟲とも思はうか。首引抜かんとする隙に。地琵琶の姫更綴駈寄つて切付くるを早速にかけ。うんと蹴飛ばし フシ既にかうよと見えたる所へ。葛西の清治走りかゝつて四郎が首。水もたまらず討落し景久を取つて引立て。莞爾と笑うて立つたるは。フシ心地よくこそ見えにける。地なう兄樣か我がたか。秩父殿の御厚恩情の笠は此の時と。兄弟の

笠重忠の笠。取添へて三蓋笠。絶えて久しき指物をどつと押立て大聲あげ。詞佛法の仇王法の敵。父が恨所領の敵。七草四郎を葛西の源六清治が討取り。朝敵滅び失せたりと。地高らかに呼ばはれば。秩父の重忠御馬を乗込め。ヲヽ目出度し手柄々々。梶原が取上げし金の采配今重忠が得さするぞ。家に傳へて大將の子孫の榮え更級。夫婦が中の精次第。琵琶の姫も景久に仲人は秩父の重忠。吉日選べ婚姻せよ。地ツメいざ凱陣勝鬨と早々直す旗の足。勵む勇みの高嘶き。朝敵邪法は絶え果てて。絶えたる家は引起す君臣和合の道廣き。惠も廣き武藏野に。再び譽を顯せり。

第五　松竹梅嫁入雛形　雛形

地千早振る　フシ女神男神の。御祝言。爰にかたどる大館。足立右馬之允景久葛西の源六清治　二親言を一座敷聟は心の浮橋に。嫁入御祭のあなにへやうまし雛煮も味甘り。逆鉾々々と　フシ賑へり。ツレお客がたへの饗應とて数多の藝者藝女郎。お里は京の色所あやかりものと身の上の。二人松と梅との君達より。松竹梅の色直し。スエテ京染小袖の部屋見舞。ツレ或は縫箔織物の。模様づくし手をつくし文章豐に書き記し。やまとほのめく藝女郎。目録をこそ讀上げけり。シテ進上。ツレ島臺。シテ島臺　二人あやかつて贈り參らせ候の松は。禿の縁より。子の日根引の御壽盛。末は尾上の友白髪に。ばゝに成る迄紅絹裏や。十筋右衛門も聟付の。梅花油のかをり來る床は。天職梅の花。二股竹の相生に。千竹根強く節強く。ナホス枝葉も榮え給ひけり。地先づ上着のお小袖は。千代を染込む松葉色松に群れゐる千羽鶴。十二の雛を飼ひ育て。君が幾代の友鶴と。壽きてこそ　フシ染めにけり。扨又千草の褶衣。歌肩にかゝるもの花折りかけて裾に。いのじが寝た所え。ゑい〳〵ゑい風景の筆立に。心浮島　フシ飛ぶ螢。澤に澤瀉水桔梗。光琳松の三徳が崎。墨繪の雪に。煙立つ富士の。姿も清見寺撞かぬ。フシ鐘さへ響き來る。しやんとして扨美しや。シテ ハルフシ肩から裾を。二人吉岡に。御簾に葵をかけられしは。ツレ思ひ出でたり其の昔賀茂の祭の車爭ひ。シテ ウタヒ車の前後に。ツレばつと寄りて　二人人々轅に取付きつゝ人給ひの奥に。ヲヽ〳〵押しやられて物見車の力もなき。身の程ぞいとほし。ナホス フシらしけなり。牧に爪とぐ驛馬の。尾髪を嵐に吹きみだき野邊の若草踏み散らし。蜿蜒を穿つて眞下り或は谷より峯に追つかけ。追つ立て高嘶き友を　トル三重集めて　トレ〳〵狂ひ馬。フシ是をくゝしの。摘み染　二人 相ノ山一村。しげる柳陰肩は。すぬひの薄霞。飛びかふ鳥。七つ八つ夜明を。告ぐる有様は憎や。逢夜の仇かたき見果てぬ。夢やさますかと。ツレ 歌餘所の戀路を身の上に。思ひ知らるゝ風情もあり。地黑模様に　シテ歌たどり行く。二人尾上の鹿の。亂れ角。末の松山つまこひかねて。紅葉踏みわけ。け

いくほろゝと。鳴くわゐさりとは通ふわの。はて焦れての。これ〳〵〳〵誰もいな。あのや業平はこれさ。〳〵。は豆腐屋の果かのほんえ。しんぞまめにはこれさ。〳〵。打込んだ。文弥朝も夜さりも。水なぶり。官位器量も捧。にふり。シテタタキ武藏の國の果迄も。ツレ顔をよごせし隅田川。シテ伊勢をの。ツレあまの。シテ汐えりも。二人つめれば心三芳野や。シテ色に身代宇津の山。ツレ高安。シテ齋宮 二人 文弥西の對。シテ二條の后の俤に。似たつきもなき戀の闇。さそひ出せし白玉を。ど。こぞと問へば芥川 ハエテしばしは。露の置き所。二人地伊勢物語の模様もあり三河にそめし。杜若。フシ花紫の。總鹿の子。紅鹿の子鶸鹿の子 冷泉梅に。短冊。花に樽。ハヅミ篭に鶯。フシ菜種に蝶。給に書く野邊に音するは。ギンハルフシ誰が乗る駒の。轡蟲草に亂れてちんから〳〵。松蟲の音はちりりん〳〵。綸子小袖のいたり染。シテ緞子天鵞絨。ツレ金更紗。シテ繻子は五色の コハリ 巻絹を。二人舟に山積む綿の原漕ぎつれ。〳〵入舟の蓬莱山とは難波津や。ツレ積んだる俵。シテ納むる黄金。二人輝く提灯明らかに曇らぬ玉のゐいころ〳〵。ころ〳〵頃は霜月や顔見世淨瑠璃大吉日。千秋樂は民昌榮。萬歳樂には命を延ぶ。相生の ナホス 松風さつさつの。聲ぞ目出度けれ。

七行大字直之正本とあざむく類板世に有といへ共又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直之正本にあらず故に今此本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本筑後掾 竹本 博教
正本屋 山本九兵衛版（壺印）
大阪高麗橋壹丁目
山本九右衛門版 囮

井筒業平河内通

近松門左衛門作

地むかし／＼昔は昔の今日にして。更に昔よりの昔にあらず。詞夏は殷の昔殷は周の昔。其の昔の禮によりて損益する所を知らば。百萬代の末かけて。天地と共に限なく。變らぬむかし久堅の天津御位五十六代。清和の帝の御兄。四品惟喬親王とて オロシ遁世の皇子。いまそかりける。地頃は貞觀十五年二月始つかた。御乳母の由有りて作の大納言宗岡。御外戚の親み散位紀の有常。日枝の山の麓 フシ小野の。閑居に伺候ある。フシまだ山里は。冴返り。フシ雪はこぼすが如くにて。地無媒の崖路を埋み。雲凝つて盤石頭に峙てり。人家の煙道絶えて朝來。一片の霞を呑むとは。かゝる所の フシ山居かや。吹雪にまじる勤行の。鈴の聲をしるべにて。室の戸に案内すれば。スヱテ

蘆の簾押しやりて。地立出で給ふ惟喬親王。香の煙にふすぼりし麻の衣赤木の數珠。行ひ入りたる御形珍しゝ方々。詞公の事繁きに雪踏み分けし音づれは。麿が爲の梅鶯山家の春を迎へたり。隱遁者のもてなしと。地榾を揭ぐる佛壇に。一連一具の髑髏頭に冠。手には笏。小葵の袍引きまつひ。詞そも是を誰とか思ふ。麿が外戚の祖父有常が爲には父。正三位紀の名虎の髑骨と。地仰も果てぬに有常驚き怪しくも悲しくもあつと烏帽子を簀子に着け。スヱテ心迷ひて見えければ。詞チヽ白骨を安置せしいはれ。大納言は知つたれども有常はよも知るまじ語つて聞かせん。事新しきいひごと乍ら。今の帝惟仁は第二の宮にて弟。麿は文德帝第一の宮。位に即べくき理運と祖の名虎心

身を碎きしこと。惟喬惟仁位爭ひと秋津島に隱れなし。名虎は大力弓馬の達者なりしかど。天の時至らず。競馬相撲の勝負に負け終に無念の此の世を去る。地あつぱれ其の時爭勝ち我十善の位に卽かば。名虎を攝政關白有常も任槐。宗岡を大將にもなすべ つしをと。思ひ悔むに其のかひなく。名虎に恩を報ぜん爲墓を掘き髑骨をつらね。詞私に正一位太政大臣を贈り。魂を呼返す招魂の祭をなすも。恩を報ずるばかりぞや。と。詞語り給へば有常父を慕ひ親王の御心。忝く顏をもあげず フシ直垂の袖は。涙に凍りけり。詞かゝる御仁心の德によつて御運開 事。此の扇の開くが如くと祝ひ奉り。當代の繪師百濟の河成が筆。地繪を御賞翫候へと。扇三本獻上す。親王御感斜ならず一々開き御覽ある。に。山水花鳥の類にあらず三本に三人の美女の姿。詞ハアヽアヽ美しや／＼と。地御目も消え／＼しみ入るばかり。墨の衣は

思に八ツ色に染めたる戀衣。地思ひこがれし御聲にて。詞聞きも置いたり異國の楊貴妃我が朝の衣通姫に扇の上に來りしか。地かゝる女も有る世ならば。遁世はすまじいもの給そらごとか但し。寫し留めたる人ばし有るかと宣へば。詞君知ろし召さずや。今の世日本の三美人と。及ぶも及ばぬも戀慕ふは此の三人。地柳の五ッ衣に紅の袴檜扇かざせしは。

詞中納言藤原の長良が娘高子の君。當今清和天皇の女御に定り。未だ入内なき先に二條の后と號し。色好みの業平が案内にて。童の踏明けたる築地の崩れより。帝忍び〳〵に行幸ある程の美人。地又井筒に水鏡見る姿は外にもあらず。詞則ち有常の息女井筒の前。在原業平に縁組とかや。詞委細は親父に御尋ね。詞又欄干に寄つて山の月詠むるは。地河内の國

高安左衛門が娘伊駒の姫。日本廣しと申せども美女と申すは此の三人。詞叶はぬ戀とは我等體の上。天子の御身にて人の妻とても普天の下に住む者。地勅諚は背かれず御心一つにて。今でも天子とならるゝ御身。何思召す事候と勸むる色は謀反の媒。有常はつと肝にこたへ南無三寶。詞毒氣を吹込む魔王何條佞臣め。地言ひ破つてくれんずと腕をもみ膝立直し向ひしが。親王は扇の繪顔に當てつ抱き締めつ。宗岡が辯舌に聞入りたまふ御氣色。いや〳〵なまじひの諫言だて。却つて娘井筒を上けよなど無體を請けては難儀。時節惡しと分別極め。詞大内の勤事繁し先づお暇と申せども。地さらばとだにも宣はず。大納言を後目にかけ御前を蹴立つる有常が。くわつとせいたる面は火焔。寒風に大汗頭のいきりに雪解くる フシ山路。踏分歸りけり。地親王遙に見送り。詞鷹が伯父なれども拗親に似ぬ小氣者。道を守るも時代による。既に孔子も道行はれずといへり。正直は阿呆の異名。かね〳〵汝に示す如く名虎無くては本望は遂げられず。地僧正眞雅が傳授招魂の法。今日百日の滿願いで一祈りと壇に臨み。獨鈷三鈷鈴錫杖 オクリ此の幣〵帛に打乘つて。地名虎が魄魂呼子どり鳴くをしるべに コハリ招魂の法。去職還來敎王經歸り來れ歸り來れ。抑東方には千仞の長人。魂を鑠す事恐るべし南方には蝮蛇蓁々として人を呑む。西方には赤き蟻象の如く。地玄蜂瓠の如く其の土人を コハリ爛す。北方には氷の山峨々として雪の淵。フシ千里なり。フシ天に八重雲九重の。虎の關豹の コハリ關。地下には土伯の三眼角觺々たり。天地四方にとゞまらず元の骸に歸り來れ入り來れ。空風火水の五輪五行に五大尊。八大童子は 地八職の オクリ道を。導く六地藏は六根に加被を コハリなし。擁護を加へ今爰に紀の名虎。再來せしめ給へやと金剛。安立の 地印を結んでせめかけ〳〵。祈請有り。フシ祭文經文。地鈴の聲日枝の嶺風雪おろし。谷の嵐を吹上げ吹卷きとう〳〵〳〵。さつと棚引く燒香は。反魂香の煙の中白骨動くと見えけるが。眼耳鼻舌明々と。髭髪生じ皮肉手足具つて。忽ち人體連續すれば陰陽の氣貫通し。壇をひらりと飛下り一揖して立つたりし フシ祕密の法ぞ不思議なる。地昔に變らぬ大音聲。詞アヽあかや〳〵明るやな。無念の魂幽冥の暗闇より。娑婆に歸つて本の名虎。清和天皇を追ッ下し君を南面の位に卽け。二條の后を女御に立てん事日を數へて待ち給へ。地心の勇氣腕脛の力。前生に百倍と片足ぢつと踏伸ばせば。沓脱の大石かつぱと踏返され。谷底千仞どた〳〵どうど響き打つたる山彦は。フシ雪にこたへて夥し。詞誠や天皇は二條の后の入内を待ちかね。築地の崩れより忍はるる由。通路に人を伏せて惱し。忍びの者を以て后を奪ひ取り。地親王は托鉢修行と欺き大内に推參し。無理難題を云ひかけ否

と勅諚あらんは必定。それを味方の詞質。洛跡は名虎に任せ置け都遠くて叶ふまじ。洛陽烏丸の古御所へ密に移し奉れ。宗岡やつと既に下山の用意有り。上求菩提下化衆生佛を學ぶ雪山の。修行を今の一ツ時に。碎く鉞小野の山跡しら。雪ぞ 三重 降りにける。フシ 東五條に。地 棟高き二條の后の御里御所。いつの間にやら童のちよつと築地の塵泥を。一寸二寸五六寸。都一ツぱい踏み廣げ オクリ 今は。惟仁親王の御通路と名に廣く。フシ 浮名とめよと關守の。打ちも寢ならで寢ずの番。フシ 夜晝嚴しく守りける。地 音に聞えし色好み在原中將業平朝臣。郎黨般若五郎仲則を召具し。常々君の御供して通ひ馴れたる築地の崩れ。立寄ればこはいかに。數多の仕丁座を列べ用心嚴しく守る體。案に相違し給へども般若五郎に目くばせし。築地を越したる梅が枝の。花見る體にもてなして フシ 行きつ戻りつ休らへば。地 番の者ども聲々に。詞 立つまい〱お通りやれ。お通りやれと寄せ付けず。木で鼻こくる男ども フシ 梅ばかりこそ色香なれ。地 業平五郎をかたへに招き。詞 取沙汰に違ひなく。惟喬親王の業と覺えたり。后の父中納言長良は老病心物の情知つたる人。伴の大納言宗岡が我意に任せ。番を付けしに疑ひなし。地 如何はせんと宣へばもとより無意氣强力の般若五郎。詞 惟喬でも鵰でも何の事。且那私の戀ではなし。勅諚を蒙り給ふ上番で有らうが關守で有らうが。片端つまみのける分。地 いざ御出でと駈出す。詞 ヤレ 待て五郎。其の勅諚云はぬ事。入内の儀式相濟み后内裏へ入り給へば。平人の夫婦同然戀も情もいらねども。地 君待ちかねさせ給ひかゝる築地の崩れより。十善天子の徒跣の忍路。其の媒は業平無骨の振舞末代の笑草。詞 業平は梅花一枝所望と表門より紛れ入らん。汝は番の者賺し除けよ。其の内に后を誘ひ此の所より忍び出で。地 直に内裏へ入れ申さん必す荒氣出すまいと鎭めて。フシ 別れ給ひける。地 般若五郎分別し番のあたり腰かゞめ。行戻り立戻り用有りげの體を見て。詞 コリヤお侍俯向いて鼻をひこ〱と。此の街道が臭いか早く通つた〱。御尤々々。たつた今此所で革袋を落いた。内に金子三十兩細金が一摑と。地 いふより番衆目の色變り。役目も番も打忘れ。あたりほとりをうろ〱と。フシ 大地を臭いで廻りしが。サアしてやつたと般若五郎。詞 ハア、思ひ出した。何某の院の櫻の下。うつかりと鞠を見て居たが。慥其の時落したと。地 聞くより番人我先と、落さぬ金を拾ふとて フシ 魂落して走り行く。地 窺ふ隙間の斑犬聲をも立てず背を伏せて。築地の穴より入らんとす。地 シヤ知れたり犬めと立隔て。睨み付くれば犬も尾を立てじり〱〱。引けばつゞき。のけばかゝり。付けつ廻しつ二三遍しさつて土掻き腮をむき。呻るばかりに吠えもせず我が身を庇ふ有樣は。丈拔群に立伸びて常に勝れし

大犬。ヤア心得ず一つかみと飛んで懸れば早速を踏み。築地の内へ駈入りしは フシ翼の有るが如くなり。 詞ハアテづ無う喰ひ肥えた野犬め。あつたら骨折り草臥た。 地番の者の歸らぬ内主人は御出でなされぬかと。内を見やつて待つ所に。館の内騷しく一犬吠ゆれば萬犬の。聲賴りに内よりも業平後に負ひ參らせ。築地を潜りに忍摺后は夢ともしら玉か。何ぞと咎む犬の聲露と答へて消えぬべく。 フシ姿しをれて出で給ふ。仲則急度見。ヤア最前の野犬めと尾筒を取つて引戻し。むんずと抱いて押伏せ。 詞サア忍路の犬仕止めた早うくと呼ばれば、 地中將今は心安し。跡より追付け仲則と フシ大内指して急がるゝ。 地敷かれながらぴやうくわんく跳ね返さんと身をもがけば。ヤア無用の長吠と面の皮引きめくれば。三十斗りの髮男。頭斗りが大男五郎かッらかッらと笑ひ。おのれが面見知つた。伴の大納言が家來一藤太基國。音に聞えた忍びの

上手。犬になつたは仔細が有らうサアぬかせ。ぬかせくときめ付くれば。 ヲヽ仔細無うて犬の皮被るものか。后を奪ひ取らんため。 地口惜しい小刀でも持つたならば。下よりぐつと突かんもの無念々々ともむ所を咽吭うんと一ひねり フシぎやつとばかりに息絶ゆる。 地番の者ども立歸り。 詞エヽ憎い何にも無いもの嘘つき奴。ハアヽ見ごとな番の衆。落したと云ふはうその皮のたん袋。左程革袋が拾ひたくば。似合うた樣に犬ひらひ。 地此の革袋拾ひをれ、馬鹿な面の革袋と笑うて。こそは 三重へ 行雲の。 地春の日數も二月の涅槃供養の音樂と。御垣が内の絲竹に雲井の外も聲すむ折から。大の法師糞掃衣の高からげ。鐵鉢捧げ錫杖つき郁芳門をつゝと通り。 詞當番の馬部吉上御遊の折から。何處の坊主罷出でよと咎むれば。 地耳にも更に聞入れず御階のもとに突立ち。 詞十方旦那の福田。宿植德本の沙門に齋料。 地はつちくと大音聲 フシ

管絃の調子も亂れけり。 地諸卿の老幼あれこそ惟喬法親王帝の兄君。 詞御運強ければ御位に卽かせ給ふお身。八つ目草鞋の徒跣。愚痴無智のはつち坊主同然の御修行。我々が着飾る綾錦は却つて地獄の種と成る。 地あのお姿が直ぐに佛の三十二相。八十種好も外にない。アヽ御殊勝や有難やと手ンでに黄金名香名珠。手向け給へと御鉢に投げ。皆南無阿彌陀とひれふして フシ圍繞渴仰申しける。 地親王施物をくわらりと投捨てあさましや凡夫身。金銀珠玉は今生一世の寶。却つて人を迷はす地獄の導きとは此の事。されば經には頭目髓腦と說き。又は捐捨國位僕從妻子とて。古へ異國の大王は佛法の爲に眼をくり。五體の筋を拔き王位を捨て妻子を捨て。法に歸服したる例有り。 詞雜人の施物受くれば内裏へ來るには及ばず。今日の施主は清和天皇手づからの志。 はつちくといひ捨て空嘯いてぞ居たりける。伴の大納言横手を打ち。 詞アヽ御尤々々。

一ッは御祈祷且は結縁、出御有るべしと奏すれば。地天皇御階近く出でさせ給ひ。こはそも殊勝の御有様。朕不思議に位に卽くと雖も。和上は兄朕は弟。もとは文徳の一ッ木末に連る枝。佛法不思議王對座とて佛の像に成り給へば。王位とても憚なし御望だに候はゞ。詞たとへ七堂伽藍なりとも建立し參らせん。金銀の施物を抛ち給ふ無欲の程。地實にや金は山に捨て玉は淵に投ぐべしと。聖賢の詞に叶ふ御心の淸らかさ、感ずるに飽足らずと。御冠の巾子を傾けて御手を合させ給ひける。フシ御有樣ぞ忝き。地心を合し大納言折よしとつゝと出で。詞これ〳〵勅諚に異議はない。七堂伽藍建立の御望か。イヤ僧正僧都の位が望か。イヤ。然らば知行の御所望か。イヤ經文の通り國城妻子が所望。大納言打頷きムヽ、妻子を施物に施せとは。扨は二條の后を御所望か。地テ、何も入らぬ二條の后。高子の君をはつち〳〵と呼ばはつたり。地天皇大きに驚き給ひ。扨はきやつ賣主坊主案に相違と物答なく。立つて入らんとし給へば宗岡飛びかゝり。御衣の裔しつかと取り。詞望を叶へんとたつた今の綸言。天子に二言なしと引きとむる。惟喬入道錫杖取直し。后を奪ひ取るは易けれども。おのれが縁を切らずんば。賢女立てして我が心に從ふまじと思ふての斷り。地サア后と縁切るといふ一言聞かずば。錫杖のむね打と〳〵。傍若無人の有樣既に危く フシ見えたる折ふし 地散位紀の有常執權桂金吾廣國を召具し。來るより早く天皇をもぎはなし。奥へ押しやり奉り。詞先度北山にて兩人の眼色唯事ならずと心を付け。まつかう有らうと思ひしと。親王の宮のと崇むるも君臣の道を守る故。我が姉の腹より出でた正しく甥なれども。頭を下げ腰を屈めてくやしい。地かゝる無道の惡僧鉢開の乞食坊主。アレ金吾引きずり出せ意地張らば打殺せ。承ると廣國錫杖もぎ取り振上げんとする所を大納言かけ隔て。錫杖の柄をしつかと取り。コリヤ 詞下司奴。一天の君さへ敬ひ給ふ惟喬親王。主が物に狂へばとておのれ迄が此の錫杖振上げてなんとする。地まつ斯うすると引つたくり今日の志。錫杖の一握り手の内報謝に戴けと。續け打にてう〳〵〳〵。爰な奉加場の世話やき。十方旦方法界の棒請取れと。同じく打据ゑ。サア出てうせいとねめ付くる。かゝる所に待賢門談天門騷ぎ立ち。詞先年死したる紀の名虎。再び顯れ出でたるは 地なう恐ろしや凄じやと逃廻る程こそあれ、荒れに荒れたる紀の名虎。火雷神の如く飛來り。廣國が胴骨はたと蹴倒し。詞ヤアまだるし惟喬親王。御身位に卽き給へば二條の后は言ふに及はず。空飛ぶ鳥地を走る獸 山河草木皆こなたの物名虎が再び娑婆へ出たるは何の爲。一百三十六地獄の司たる。閻魔大王にも身ぶるひさせたる某。僅か六十餘州小國の王位なんともない。天皇御簾の内に聞き給へ。冠脱い

で三種の神器を渡し。大内をとつく出られよと。地御瞼を睨む眼の鏡 フシ淨玻璃なんどといひつべし。有常も疑はしく狐狸の所化かと。暫しが程こそまがひつれ。見れば見る程父の名虎。あさましくも悲しくもスエテ落涙五體を絞りしが。詞大地を叩いてエヽ親ながら情なや。我が國の王位は神明の御計らひ。人間の力に叶はぬ事申すに及ばず御存じ。地それゆゑ一歳見苦しき非業の自滅。朝敵の名を娑婆世界に殘されしは。子孫の恥とはおぼされずや。せめて未來罪障消滅の爲。朝暮讀誦勤行忌日命日の弔ひは。冥途へはとゞかぬか弔ひ屆かぬ程ならば。由なき招魂とやらの惡法邪法はなどか屆きしぞ。再び三途に立返り惡に惡を積み業に業を重ねて其の身の苦み子孫の歎き。哀れとは フシ思はずか。地一向奈落に落ち給はゞ再び蘇生は有るまじきに。魂中有に有りし故と。思へばなまなかに。追善弔ひの悔しやと。理をつくし詞を盡し。フシ

泣叫びてぞ諫めける。詞名虎から〳〵と笑ひ。親に似ぬ悴奴。せめて我が心十分一持たせたい。惟喬の御世になし汝等を高位高官に昇せ。子孫の繁昌願ふ故、佛の說法聖人の敎聞かぬ程の此の名虎。汝が意見聞くべきか。天皇の爲には味方惟喬の爲には仇敵。地親には不孝者親子の契これ迄。踏殺してくれんずと躍出づれば金吾手をすり。詞ハア御尤コレ殿。親の慈悲思召し知らぬか。申し。爰は篤くと御思案の有りさうな儀と。地眼に知らせ詞に心を含ませて。大事の所と氣を付くれば。詞ヲヽそれよそれよ。天皇の御味方申せば。忠は立てども孝行立たず。又親の命に從ひ惟喬に味方申せば。忠孝の兩義立つ。地心を翻へし父の命に從ひ候と。云ひもあへぬにヲヽ出來した〳〵。それ大納言天皇を引きずり出せ。今日より親王御位と衣を脫がせ奉り。冠よ沓よとひしめしめく所へ。大納言立戻り。詞早風をくらうて天皇は。神璽寶劍內侍所

を帶し行方知れずと。御所中の女房立騒ぎ候と。いへども名虎ちつとも騷がず。今の間に何處へ行くもの奧に忍ぶは疑なし。地先づ親王を玉座にすゝめ。天皇を探せやと下知をなし各どつと駈入れば。關白左右の大臣百官百司かけ隔て。立ち隔つれども事ともせず公家も地下もいはせばこそ。かたはしに取つて引寄せ踏付け〳〵投倒し。[illegible]なく奧に亂れ入り オクリ上を〳〵下へと探しける。フシ人間を窺ひ。地紀の有常三種の神寶天皇に抱かせ奉り。衣被の女の體麗景殿の櫛形より。そつとぬけ出で何方よりや落つべきと。もとめ窺ふ折から奧に名虎が大音聲。詞有常が見えざるわ有常々々と呼ばはれば。地南無三寶とうろたゆる、立蔀の蔭より金吾是にとつつと出る。地獄で佛に逢うた心事急なり。仔細は云ふに及ばず玉體安穩業平に渡し奉れ。ヲヽ心得たまつかせといふより早く御手を引立て。無名門の透垣より フシ飛ぶが如くに走行く。宗岡

名虎猫の鼠を逃したる顔色。詞エヽ口惜しく〜。よし天皇は追放し一大事は三種の神器。如何はせんと身をもめば有常とほけた顔付にて。天皇なればとて翼は無し。但し天狗がつかんだるも存ぜず。地父は愛宕山宗岡は比叡の山。鞍馬山僧正が谷探されよ。有常は下の醍醐比良や横川を尋ぬべし。それにも見えずば太鼓鉦。稲荷山を狩るばかりテヽ。尤と立別れ足に任せて 三重〜急ぎける。 フシかくとも知らず。地業平主從后を安々迎へ参らせ。御門々々は人目繁し暮を待つて。局口より遷し申さんと窃かに忍ぶ加茂川堤向ふを見れば。桂金吾帝を供奉し免れがたなき毒蛇の口。虎の尾を踏む名虎が圍み。漸うと斷來り人々にはたと行逢ひ 詞ヤア業平公。今日大内の騒動御存じなきか。先年死したる紀の名虎再び蘇生し。件の大納言が内通にて大内へ踏込み。惟喬親王を押して御位に即け。既に天皇御命危かりしを。主人有常敵一味の體にもてなし。地漸うに盗み出し三種の神寶諸共。天皇是にと薄衣取れば。后是はと抱付く業平主從はつとばかり フシあきれて。詞もなかりけり。詞いや是あきれて濟まぬ事。アレ〜名虎が再來跡より急に追懸くると。地聞くより五郎伸上れば。韋馱天が足疾鬼を追ひかくる勢ひ。詞ハアカなし此の上は天運次第。命限り足手限り御邊と我等兩御所を負ひ奉らん尤と。地二人が背中さし向くれば。業平天皇の御肌に付けさせ給ふ内侍所。頂き取つて首に懸け。立上らんと振返り後を見れば。次第に追付く名虎が勢ひ。詞ヤア〜見届けたり。地あますまじいと呼ばはる聲。耳底に突通れば兩人あきれあれ見られよ金吾。詞かく聲をかけられ逃足見せては勝に乗り。此方は先とられ仕損ずるは必定。いざ踏止り先を取つて打ちかけ。是非の安否を定めん。地ヲヽ尤と天皇御夫婦業平圍ひ。二人は身構へ鍔打して立ちとまる。瞬く間に紀の名虎誠の虎より猶早く。土埃を蹴立て飛んで来るをやり過し。眞中に立挟み。詞ホウ珍しい娑婆の歸り新参。只今手にかけ逗留の間もなく。本の冥途へほつかへすら不便至極。詞金吾が爲には家の主君善悪の返答にて。娑婆世界の逗留か。但し立歸りか望次第と。鞘口 フシ抜きかけつめ寄つたり。詞名虎びつくともせず。愚人ともうつけとも。目前手に取る果報を知らず。無用の忠節に義だてに眼をほす汝等。冥途では有罪餓鬼。其の刀抜かば抜いて見よと。地くわつと睨む コハリ眼の稻妻。面に火矢を射かくる如く。腕すくみ氣も臆れ。覺えずしされば名虎も續いてとゞろ足にてつめかくる。跡より般若蹴を亂ひ狙ひよれば振返り。はつたと睨めば性根を奪はれ心ならず跡じさり。弓手馬手より狙ひかゝるをねめ伏せ〜〜蛙龍悪虎の勵みをなし。遁さぬやらぬと兩方より。一二の拍子に聲をかけて ナホス切りつゝる。小躍してひらりとはづし。二人が胸

板はつた／＼と左右へ蹴倒し飛びかゝり。業平の細首つかんで投げのけ。天皇后を兩の小腕にしつかと搔い込み。一しめしめてつつ立ちあがり。詞サアうぬら切先でも上げるが最後。きやつらを則ち締殺す。地そこのけやつと怒る聲。金吾も般若も心ばかり玉體危く持ちたる太刀もひらめくばかり。スヱテ牙をならして控へたり。后御息絶え／＼に我が命ばし庇ふな。天皇樣のお命救ひ申せと泣きこがれ給へば。いや／＼朕が身一つ助けんとて萬民を苦しめ何かせん。朕を捨て代をも位をも兄惟喬に參らせ。世界の亂を鎭め國民を助けよと スヱテ 御涙にくれ給ふ フシ 叡慮の。程ぞ有難き。詞チヽ云ふ迄もない日本はこつちのもの。汝等は冥途の王となれ。地サア只今と既に危く見えければ。其の隙に業平内侍所の御正體。からげを解いて名虎に向ひ差上げ給へば。コハリ あら不思議や神國清淨の神鏡。光明あたりに輝き渡り不淨不潔の名虎が五體を照し給へば。朝日の氷春の霜。髭髪皮肉消え／＼と爛れ失せ。頭は空の髑髏形は白骨連なつて。縮める龍刻める石朽木の風に破るゝ如く。ばら／＼と碎け散つたるは。前代未聞末代不忠議 フシ はあと一度に禮拜ある。詞金吾立寄り。根深く仕込みし惟喬の謀叛。地有常は何時迄も敵一味の色を見せ、すは御大事に及ぶ時は。窃に内通申す所存。兩御所一緒に忍び給ふは人の見る目恐れ有り。后は主人有常に御預け。あれ遠方の小路小路宗岡が軍兵充ち滿ちて。君を捜す鯨波事迫らぬ其の内と連理の枝を引分けて オクリ 別れ。別れに業平朝臣天皇の御手を引き。金吾は二條の后を供奉し。無念を胸に押包む人目をつつむ道よくる徑。細道傳ひ道。分け行く草の葉末まで。昨日の味方今日の敵。時に變じ日にかはる人界不定の心は淵瀨。風に從ふ雲水の大和。河内へ分れけり。

第二　業平歌念佛道行

林清 さる間。地對王殿。御臺所に近付き。生きとし生ける者ごとに。父も有り母も有り。巣に父といふ字は御座無きか。なう父こそあれ。勅勘を蒙りて。筑紫へ流され給ふと有りければ。其の儀にて有るならば。あかぬ暇を賜はれや。父を尋ねて參らばやと仰有る。地御臺所聞召し。さ程に思ひつめたらば。自らも尋ね上らんと。對王兄弟。乳母のうはたけ御供にて。國を出づるは何時頃ぞや。三月廿一日に オクリ 旅の〳〵裝束 フシ なされける。地山椒太夫が古事を今身の上に積みて知る。落人の身に フシ 業平は。墨の衣に投頭巾見る目忍べば日暮しや。人をすゝめの歌念佛。スヱテ 修行の僧に身をやつし。鳧鐘肩に打懸けて。眞紅の紐のかねてより。知らぬ拍子はうつゝなや。勿體なくも天皇を施物の箱の片々に。三種の神器を隱し入れ般若五郎も頰被り。擔ひし棒のおれそれも。御免を受けて隔てなく。フシオクリ 紛れ〳〵落ちさせ。給ひける

フシ部に残す。初冠。今日は頭の透額。オクリ窃に。井出の玉水の數はひいふうみかの原。フシわきて流るゝいづみ川。衣かせ山假初の。族と思へど君ませば　オクリ是も〽行幸のためしぞと箱に向ひて再拜し。御先を拂ふ警蹕の。長地聲は昔に變らねど變る水嵩の木津川は。誠淵瀬の類かや。朝出の賤の鋤鍬や。畔に草刈る人影に。スヱテ業平鉦を拍子とり。林清是は擲置き。對王殿や安壽姫。丹後の國由良の港。山桝太夫が買取つて。地渡す道具は何々ぞ。桶と柄杓と鎌扐。兄弟是を請取つて山と フシ濱とへ。泣き別れ。詞經無慙やな對王が。山風に吹立てられ嘸寒からん可愛やと スヱテ流涕。こがれフシ泣き給ふ。今は四邊に人もなし箱の内さぞお氣つまらんと。蓋を開けば天皇は。地吹傳へたる神風や。御裳濯川の濁り世に住むかひも無き身なれども。よしや世の中治まらば。今の情は忘れじといとも畏き詔。業平草にひれ伏して。地河内の國高安左衛門が娘生駒姫。業に和歌の指南を請け。文にて語らふ契もあり。地賴むに疎略候まじ彼處に忍ばせ奉らん。かゝらざりせば如何にして君が見るべき名所の向ふに霞む奈良坂や。牡鹿ならでも春日野の。枝に角ぐむ八重櫻。あれ〳〵御覽ぜ秋篠や外山の峰の松檜。葉末きらめく夕づく日。薄紅に薄萠黄。あかぬ詠は。如何にとも岩瀬の森は。フシあれとかや。鶴も重ぬる諸翼。齢も永き龜が潮の上を歩みて。行く道は道の道有るすべらぎの誓しこそ。花。曇りなれ。地叡慮を苦め給ふなと云ひも果てぬに群鳥の。はつと羽をのす其の音を人かとあわて天皇を。箱にあたふた引きしめて。林清ヤアいかに對王殿汝落し物ならば。追手かゝらんは治定なり。然らば近き寺を賴め出家は六戒を保つ故。其の身は果てゝも出さぬぞ。サイ〳〵急げ。此方も急げ仲則と。昔語を身の上に フシ箱を肩げてとつかはと フシ起立つ野路の。袖の露草の振摺忍ぶ身は。人目恐ろし鬼取山くらがり峠打過ぎて爰は。御燈の明らかに名も高安の神垣に響く。鼓を三重〽休めけり。地社内に人音賑はしく。高安殿のお下向お供のお乘と呼ばはる聲。業平聞付け給ひ高安殿の下向とは。後家の老母が孫の生駒姫か。若し伯父大炊之介が誰にもせよ。願ふ折から心を窺ひ賴まんと。般若五郎を傍にフシ忍ばせ待ち給ふ。地程なく下向の女乘物玉を飾りて花髻。二月の雪の振袖の腰元婢取卷きて。フシ徐に道を歩ませしが。地業平を見て女房達。あれ日暮の歌念佛お慰みにと輿立てさせ。詞コレ〳〵坊ン樣。ずんどあはれな涙のこぼるゝ樣なことと聞きたい。とてもなら山桝太夫が所望々々と呼ばはれば。詞業平頭巾眉深に鉦打鳴らし聲しはぶき。國分寺にて對王丸。お聖領むを身の上に。スヱテ引きなぞらへしご語らるゝ。林清さる程にいたはしや對王殿。山にて姉御に暇乞。谷峯越して落ち給ふ。是と申すも

山桝太夫惟喬が。邪見謀叛とフシ聞えけた。扉に掛けたる箱には。對王殿の守本尊。清和なる天皇様を入れられたり。かゝる所に宮参りする人に行き逢うた。頼んで見ばやと思召し。此の邊に在所はなきか。在所こそあれ。寺は無きか。寺こそ候へ。本尊は馬頭観音か。馬頭は馬の頭とかく。駒といふ字を名乗る人。跡より追手のかゝる者。よそにも人の聞くものを。某が名は申さぬなり業平にかくまひ給はれや。契もあれば申すなりなりひらに。〱と我が名をば。餘所に知らせて頼まるゝ。對王殿の心の内。聞いて推量なされやと。貴賤上下おしなべて感ぜぬ。者こそ無かりけれ。詞跡は段々お望み次第。女子衆聞いてか。哀なか地〱と。いへどもきよろりと女房達。詞涙が出さうで出でかねて。哀さうで地何ともない。フシアヽ泣きたやとさゞめきける。地乗物の内より局めく者召寄せて。何事やらんつど〱仰付けらるゝあい。

あい。〱〱〱と承り。業平のそばに立寄り。詞乗物に召したお方を御存じ有つてか。對王丸によそへ匿まへ申せとのお頼み。こなたの御名は合點ながら互におけて云はぬが祕密。地此の年月歌の點取りに事よせて。文の數々申せし如く。いつか〱と逢瀬を祈りし中なれば。早速かくまへ屋敷に伴ひ申したさは。飛立つばかりフシさりながら。振分髪の井筒とやら其の外お心多きが玉に瑕。御心底の奥底を聞きましたいとの御事と。辯舌さばけし長口上。業平扨こそ音に聞く。生駒姫と頼もしく。詞井筒のいの字は門柱に打つ看板ばかり。眞實は河内の河水に首だけ。もし心かはらば二度冠を戴くまいと宣へば。アヽ御心底見えました。地然らば直に御夫婦をお輿の中で抱合せ。連れまして歸るが御合點か、それこそ願ふ所是般若。詞其の箱荷うて先に立て。地我は姫の情にて相輿にて跡からと。立寄り給ふ簾の中より。我が戀叶ひしお嬉しやさらば抱いて乗せませんと乗物の戸押明けて。によつと出でたる其の形。生駒にあらぬ猫股の化損ひの古婆。白髪歯抜のちよぼ口して。ほいやりゐがほも舌たるく。なう戀男チヽ〱フシいとしと抱きつけば。業平ぞつと身ぶるひいやらしく。身を縮めても詮方なく腰元つぎ〱手を取り腰抱きお二人を。一つに乗すれば業平も年寄くさゝにむせ返る。山桝太夫のおひじりの對王入りしは古葛籠。是は古祖母乗物も戀の重荷にはい〱〱。道を早めて三重へ行雲の。フシ上芝其の名。高安の。左衛門が獨姫。三美人の其の一人と沙汰にのりたる生駒の前。父母は世を早うしあひたてなたつ祖母育ち。伯父大炊之介後見に不足なき身の乏しきは。閨に枕のフシ一つなり。地此の頃續く春雨に歌の句合せ糸竹も。スヱテさのみ心の變らねば。地腰元婢引連てフシ軒の玉水。雨だれ落ちて行水に。隈笹ちぎり舟拵へてさびしさ流す笹舟

の。さつさ流れて。思ひは沈む戀は浮かれて水馴棹。地先行く舟の影もなく跡の友舟袖濡れて。舟引直す指のさを 聲手飼ひの。猫の諸共に ナホスちよいと手出して フシ戯れば。詞アヽあぶな三毛よ川へはまるな。地可愛いものやと猫撫聲の。撫でつ擦ればしなだれて フシ餘念馴染のやさしさよ。地奥より婢馳け來り。詞御隱居樣の湯上り。姫に髮梳かせ香も留め。美しう結うて貰ひたし。地呼びませいとて只今お風呂に召しますと申し上ぐれば。詞ヲヽウ輕忽。あの祖母樣の白髮頭小枕髱も入る事か。誰の彼のと手嫌ひなされ。いつにない香留めての梳けのとは。たんとお氣が若いだ。但し誰ぞに惚れてかの。地皆知らぬかと宣へば。詞如何にも〳〵老にほれて御座んすと。地どうと笑うて姫諸共 オクリ打連れ〳〵奥に玉櫛笥。地鏡臺紅皿白粉筥。嗜み道具列べ立て待つ間長湯のとぎみがき。湯殿を出でて老の身の。浴衣姿をみつわぐむ鏡臺前にやあゐいと。膝を組み給へば可笑ながらも生駒の姫。スエテ櫛取上げて梳き返す。江戸もつれ日髮は フシすぢりもぢり。誰樣故ぞ誰が爲と。問はんも祖母の前髮の。分けて。かくとも フシ云ふに云はれぬ。髮の品さへ百歲に。一歲足らぬ九十九髮。梅花の油梅が香に 小オクリ黃楊の。小櫛は春めけど。けづればつもる。雪霜と フシ粉ふ白髮の影見れば。地憎の鏡や オクリ老いにけらしな。うとましや十九や二十の黑髮に。雙らで澤の付くならば。何か寶の惜しからん フシかの髮染むる。藥をと仰に任せ腰元達。思ひ筑摩の鍋墨を。油に溶きて揉み付け〳〵 オクリ染むれば。染まる黑髮の澤は烏のはね髻。柳のさげ髮ほたんつと。さも若々しく フシ結ひ立てて。地サアお年を八十取つて除け跡が十七花盛り。ほつとり者のしなもの樣。フシおやちよい〳〵とぞ譽めにける。地ためつすがめつ姿見の二つ鏡に莞爾と。詞ヲヽ上手によう結やつた。生れ付きの生地がよさに。少しつくれば水際が立つわいの。とてもの事に白粉頼む。地口紅付けてと差出す顏。ふつと噴出し堪りかね。詞申し祖母樣。けしからぬ身たしなみよもや戀はなされまじ。地何故にかと尋ねられ。詞ハテ戀ならで何の身たしなみ。高安の明神の緣結び給ひし。在原の業平樣。まだ祝言の儀式はせねど二世迄夫婦の契約。容姿つくるは夫の目によう見られたき女の因果。サアけな人ぢや。鏡でもろくに目が見えぬ。地化粧頼むと白粉溶きさし出せばぎよつとして。顏惡くも小腹立ち。詞皺の寄つた顏に白粉の付けやう存じませぬ。フウ愛想もない。皆來て白粉塗つてくれ。地腰元どもと呼集め片頰づつを分塗に。急ぎの普請の壁塗る如く。皺引張つてへた〳〵と。年古る顏に置く霜や白きを見れば夜目遠目。九十過とは フシ人知らじ。詞ドレ小袖に匂ひ留めたか。人の所體は衣紋が大事。下紅鹿子中八丈此の縫入れの染小袖。なんと

上着に似合うたか。地大幅繻子の後帶腰の小皺は伸びたれど。肌の皺のす火熨斗がな。ほしや〳〵も戀の欲さぞ我が夫のお待遠。詞是姫女子どもよく聞け。此の障子より奥の間へ。一足にても踏込まばすぐに追出す。地伯父に言ひ付け急度曲事々々と。小褄かい取り屈んだ腰を無理やりに。しやなら〳〵と。行く振りは。女郎狐の化をして男ばかすと樂天が。フシ詞も思ひやられたり。地姫は餘りに興さめて。業平樣は日本一の美男。歌の點取りに事寄せ心のたけを口說き。情のお返事度々にて。お顏こそ見ね七生五生變るまい。夫婦と胸を据ゑしもの。地其の事御存じあるかなきかは知らねども。三年たてばおとしも百大抵の婆かいの。京より伯父樣お歸りなされ現在の我が子に。そもや其の顏見せられうか。詞物が憑いたか狂氣か。業平樣は情人年寄の心を憐み。一夜二夜は慈悲の爲と。推量はしつつも色好みの物好き。若いより年よりの何處ぞに思ひ込みの有るまじとも云はれねば。地腹が立ち妬ましい。廿に足ぬ孫娘が百になる祖母と。悋氣いさかひ顏振合ひ。家內取沙汰世の口の端。業平樣の浮名の恥一門の恥はいかばかりかと。妬みつ恨みつ樣々に。スヱテ身を投伏して歎きしが。詞とにかく此の上は業平樣のお心一つ。眞實か僞りかどうぞ氣を落ちつけんと。地平髻を短册にオクリ思ひを。染むる紅粉筆や千々の心を三十一字。碎き詠んだる一首の歌。行く水に數書くよりもはかなきは思はぬ人を。フシ思ふなりけり。詞扨此の便誰をかな。女子供は祖母樣へ恐れて側に寄りつかず。地猫よ來い〳〵生駒が味方は三毛ばかり。屆けてくれよと首玉に。短册しつかと結び付け手玉に廻る唐猫よ。歌我が身は戀に迷ふとも。主なたがへそ此の短册の。ナホス行く手にしなへ　オクリしなへや。しなへと小手毬をついと投込み一はづみ。追うて小猫も玉につれ。フシ障子の內へぞ入りにける。既に其の日も暮れつ方伯父御樣お歸りと。下臺所賑はしく大炊之介奧に入り。なんと生駒。先づ母も機嫌よくお身も無事で滿足。扨金銀にて買はれぬ土產有り。地これへ〳〵と膝許に招き。地此の度五畿內の騷。淸和天皇都を逃け去り。惟喬親王十善の御位に卽かせ給ひ。美人の聞え隱れなし。生駒の姫を后に上げよとの宣旨を請けて歸りしは。家繁昌其の身の果報。此の上の土產有るまい嬉しいか。その上當國は。業平古への知行所の所緣。天皇を供奉しさまよひ行くは必定。詞搦取つて參らせよ和泉河內兩國を。下されんとの綸旨頂戴目出度いか〳〵。地扨何を聞いてか道すがら。業平と母者人夫婦に成り。天皇諸共かくまへ置かれしとの取沙汰。年にこそよれ世のあだ口。たは言とは思ひながら。常々お身が歌の批判賴みし業平。地いづれ形は有る筈。フシ包まず語れといひければ。地はつと胸にこたゆれど素知らぬ顏にて。詞いゝ。吾にも沙

汝にも聞かぬ事。祖母様に問うて見給へと。地立たんとすれば待て〳〵。詞母は昔人道だてばかりに身の欲知らず。談合のならぬ氣質。地そのとぼけくはぬ〳〵と引きとむる。エヽ伯父様御疑ひ深いお放しなされ。誰ぞ來い〳〵の聲に小猫がくわら〳〵と。なつきて膝にフシ駈上がる。詞此の頭たま付けたは文か短册か。地イエ何でもないと隱すを押へて引つちぎり。詞ムヽ歌の返し。行く水と過ぐるよはひと散る花と。いづれ待ててふことを聞くらん。是見違へぬ公家の筆。業平ならで何公家。伯父をぬく〳〵だましたな。サア地ぬかせとひしぎ付け睨み殺さん面付にもちつともひるまず。詞水責火責に逢ふとても。知らぬ事は知らぬ〳〵。エヽしぶとい女。水責にしかねうか。地言はせて見せんと夕暮の村雨しきる廣庭へ。宙にひつさげ飛んで下り地伯父を欺す天罰の天より下る水くれんと。地軒の筧の[illegible]筒樋踏みこぼし髻を掴んで。御向けに取つて伏せ口押し割つてさし向けたり。地折からしきる雨の脚漲りおつる雨垂は。連々としてうつすが如く。眼を明づれば鼻に入り。口を塞げば息ふさがり。のんどに詰まる苦しさに。両手に捲へばもぎ放す。動き働く亂れ足。風にもまるゝ露の玉。クリ消ゆる〳〵間近く見えにけり。地暫く霽るゝ雨の小止み。奥にざゝんざ濱松の音フシ三國一と謡ふ聲々耳を澄してあの酒宴は奥の書院。詞しかも祝言の謡ひ物。同家に居て知らぬとは嘘つき奴。ぬかさねばしめ殺すと細首押へてきめつくる。地ナウ人を苦しめ我も心労せんより。祖母様に問ひ給へ。祖母様なうと泣き喚けば。詞母に聞かせてよいものか。息ほね立てなと地せりあふ音漏れ聞えてや母走り出で。マア無法者の惡人めと。庭に飛び下り大炊之介が髻掴んで膝に引つ敷き。マレ女子ども生駒に小袖着換へさせ。心は如何と痛はらせ。詞憎や〳〵惡者奴おのれを生んだ母。九十に餘つて紅鐵漿白粉を染め。若い男を持つものが。大抵の婆と思ふか。はたらきだてめさると此の咽笛。常に放さぬ懐刀手をかけるが最後。京より今歸りがけ母の前へも面出しせず。何故姪を水責ぬかせ〳〵とせたげられ。日頃手並の母の威光。力自慢の荒男。眼をまぢ〳〵と言句も出ず。姫は見かねて。詞惟喬親王より帝様業平様を搦め取れ。恩賞せんとの綸旨を頂き。それ故御座所を白狀せよとの水責と。地聞くより母上さてこそ推が違はぬ。詞やい天道知らず。帝様は日の本の主。天照大神より傳はる三種の神器といふ。御寶を玉體に添へてましますもの。縛り搦め御罰當らぬ程ならば。月日に光もあるまいか。業平殿は此の婆が戀男。たつた今縁邊の盃取交はす。親でも子でも夫の敵。地此の世の暇と懐中に手を入るれば。詞アヽ御免々々母ぢや人。業平殿に御縁組と候へば。我々が爲にも後の父。親の罰神罰身を知らぬ[illegible]のあるべき

か。地只今より天皇の御味方。眞平々々と詫ぶるも聞かずから〳〵と笑ひ。詞やい左様な甘い事くふ母でなし。地慥に根性入れ替へる。證なうては突殺すと。きめつくれば御尤々々。詞則ち惟喬親王の綸旨是に有りと。地懐中の一通取出し寸々に引裂き捨てたりけり。ヲヽ満足々々此の高安は業平の御父。阿保親王より此の方在原氏の御領分。御厚恩の我々忠節とは斯様の時。業平様は後の父孝行も此の時。都より討手向はゞ一支へ支へ切散らし。帝を始の御位にかへし奉るこそ。家の譽身の冥加。出來したた〳〵業平様頼み上げ。折を伺ひ奏聞申さん。先づ部屋へ行て休息せよと云ひければ。此の上は千騎萬騎の御味方。業平公迄お執成し母ぢや人頼み奉ると。しを〳〵と座を立つて。フシおのが部屋にぞ入りにける。サア詞業人奴がど性骨こぢ直した。地姪こちおじやと誘ひて。座敷にての三々九度取納め。詞祖母が役は是迄。詞是からが新枕そなたへ渡す。地業平様のお寝間は奥の離の間。在所住居のお氣晴しそなたは積る念晴し。早や行て寝やとさゝやけば。詞ヤアイアヽ祖母様のよい加減な嘘ばかり。ふは〳〵と詞にのせ跡で迷惑させんとか。地お前の戀を勿體ない贏落す氣はないと。涙ぐめば涙ぐみ。詞お前の戀とはあさましや。地髪に百歳の雪を頂き腰に梓の弓を張り。志賀のさゞ波身に寄る皺。石塔に同じき身をもつて。後世菩提の外ならで何の因果に戀をして。地獄に落ちたかるべきぞ。業平公御先祖より御知行の地をせばめ。安穏に暮せし御厚恩此の度と思ひしより。詞底意の知れぬ伯父の業人奴。道を言ひ義を言うては釋迦達磨でも用ひぬやつ。業平公は我か殿御家の主と定め置き。精根強く氣の若い體を見せ。仰へん爲の老の分別。此の後とても表向の名前は祖母が夫。肝心の正味はそなたの殿御。地早や行て寝やと フシ有りければ。につと片頬に恥かし笑ひ添い事なれど。詞案内なしにお寝間へ参らば。女房が疑つたと御機嫌が惡かろか。氣遣に存じます。アヽつがもない何のいの。黍團子と饅頭はあなたの擬へ徳地はやいきやとォ クリ障子の〽内へ押入れて。地母は姿を二重にし。ヤレ女子ども腰元どもちやつと來い〳〵。詞屈んだ腰を伸したればちぎれてのく程なう腰いたや。白粉で顔がひつぱる。部屋へ行て洗ひ落し休息せう。地腰揉んでくれ肩打てと フシ奥の一間に入りにける。地誰する業とも闇の夜に大石小石四方八方。はつた〳〵と投込み投込み。雨戸障子閾鴨居打碎き打破り。軒の瓦も碎け散る天狗礫も。かくやらん。地業平驚き帝を供奉し端近く立出で。詞祝言の夜の石打は打固めるとて目出度けれども。是は餘りに目出度過ぎる。地玉體危し誰か有るあれ鎭めよと宣へば。詞大炊之介罷出で。我等は母が末子大炊之介。御祝言の上からは業平公を父と仰ぎ。一命擲ち一天の君に忠勤。地石打の

體惟喬親王の討手擬なし。玉體危く候へば當國志貴の山迄。一先づ落し奉らん フシ早とく〳〵と奏すれば。地業平悦びヲヽいしくも申せし汝。供奉仕れと君を渡せば大音上げ。詞ヤイ業平のうつそり。最前惟喬親王の綸旨と。引裂き捨てしは遊女の痴話文。母を始めおのれ等に一ぽんさせ。帝を奪はんとの大炊之介が趣向を見たか。序に業平も仕舞うてのけん 地おり合へやつと呼ばはれば。石打のあふれ者どつと喚いて込入つたり。般若五郎躍り出で。詞どつこい息子殿。御酒にたべ酔ひ前後も知らず沈酔し。己れに帝を奪ひ取られた是からは叉取返す。此の般若が趣向を見よと睨め付くる。地イヤ推參大般若でも摩訶般若でも。落人の素波羅密何ともないといはせもあへずヲヽ其の頸を此の足で。華厳阿含ほうと蹴返す。方等般若が手並を見よと。打つたる大石おつ取つてばら〳〵〳〵。微塵になれと打付くればたまり得ず。帝の御手を引立てて フシ皆散々に逃げてけり。地南無三寶帝を奪はれしと狂氣の如く業平も。討つて出でんとし給ふ所に。詞隙を窺ひ大炊之介業平に討つてかゝる既にかうよと見えたる所へ。地般若の五郎天皇を奪返し立歸り。かくと見るより飛びかゝりゑいと打伏せ足下にふまへ。詞性懲もなき不敵者。帝を奪ひ取りよう氣遣させたな。詞其の返報には首引拔かんと兩手を頸に掛けんとする。やれ待て殺すな。詞善惡共に親の習ひ。千代もと祈る子を殺し。地たとへ老母が歎かすとも此方の心こゝろよからず。唯追拂へと宣へば。般若五郎本意なげに。詞一度ならず二度ならず面恥掻いても生きたいか。地命の代りの膝骨と殘り多さの地踏韛踏み。續けざまに七ツ八ツ踏付け〳〵蹴とばせば。腰を押へてアイタヽタ。面をしかめて起上り。詞なんぼ踏まれても大事ない。命にかへ〳〵とはいかい大恩。地待つてゐよ此の恩は追付け仇で報ぜんと。フシ跡をも見ずして逃げ失せける。地どうでも生けては後日の仇。しまうてのけんと叉駈け出づるを引止め。鎭まれ発せとなだむるも。仁有り義あり情有り忠節有り勇力あり。不孝の子には天罰有り孝行の子に奪取有り母には智あり譽有り。文有り武有り花實あり道ある君が行末は。待つに心の賴み有り心まめしげ在原の。業平朝臣の物語傳へて。今に興じける。

第　三

然れば君に仕へ人。其の品々の多き中に。紀の有常は常よりも。世を愼みて心を碎き。君邊に ナホス仕へ フシ奉り。地敵にも心許されて我が本領に石上。布留の館は家榮え郎等所從に至る迄。詩歌弓馬の藝に富み。北の御方は氏なき直人と云ひながら。心氣高く才ありて兄弟の姫君も。鄙に恥ぢぬ奈良の京。本フシ春日の里も近ければ。フシ若紫の。色深く。數多の腰元女房達。長地行儀作法は武家の風上に好める歌の道。下に

も心有顔そ。さすがに業平の。舅君よゐと「なまめかし。今日は姉若井筒御前泊瀬の觀音御参詣と。内玄關に乗物寄させ。井筒の姫信心深き袂の中につまぐる數珠。口に大悲の御名を唱へ立出で給へば。北の方御覧じ。詞なう繰返し〳〵くどう云ふには及ばねど。二條の后高子の君をかくまへ参らせ。泊瀬寺に隠し置く事敵の方にはよも知ろまじとは思へども。此の度有常殿を大内急の御用とて都より召されしは。地もしや此の詮議かと心もとなさ氣遣ひさ。萬に一つ漏れ聞え二條の后を敵の手へ捕られては。有常殿一代ならず子々孫々迄不覺の恥。大事の上の大事なりで。詞急いで別當の御坊へ頼み置きしも此の一つ。兩人の家老ども伊勢八幡方々の代参も此の立願。そもじは猶觀世音に祈請をかけ。今夜はお通夜がてらに后のお心慰め給へ。下主の女や下部どもよしない取沙汰せぬ様に。地そばの者どもも油断せずいひ付けよ。殿のお留守家老ども迄留守なれば。いつよりも猶大事と下知は男も及びなき。フシ天晴高家の北の方。其の習はしに井筒の前。餘の佛菩薩千體に勝り給ふ千手の誓。詞我世の中にあらん限りは只頼めよとの御誓願。明暮信じ頼みをかくる上からは頼もしう思召せ。后様は觀世音様のおかくまへも同じ事。お氣遣ひ遊ばすな。若草。姉が留守の中手習しや。地歌もよみやと小褄かい取り乗物に。女房達がとり〳〵に裳かきよせ押入れて。お輿参られといふ聲に。あいと答へて對の六尺對の鉢巻。足並。足取も揃へて。フシ舁出だす。地お輿添の中居が。いつより白粉たつぷりと。菅笠さげて蒲に付きお供廻りは輕けれど。頼力重き泊瀬詣で。ヲクリ館へ廳ふ折からに。地廣間の侍奏使の女中を以て。詞只今都より勅使とやらんのお使とて武士一人。兩家老衆へ對面せんと。地御式臺迄参り候と申し上ぐれば北の方。詞ア丶心得ず。在京の有常殿へ。又京よりの使とは如何にしても覺束なし。兩家老留守なれば。金吾が妻の紅梅を呼びよせて挨拶さしや。地自らも餘所ながら御簾越しに立聞きせん。皆々行儀亂して京侍に笑はれな。餘りに馴馴過ぎて侮らるゝなと末々迄。心遣り戸を押明けて屏風の。フシ蔭に入り給ふ。地暫く有りて人物らしき髭男。直垂上下長刀指こはらし。使者の間にむんずと坐し。詞家老の人々に申し談ずる旨有り。地御意得べいとぞ權柄なる。流石一家の執權職。桂の金吾廣國が妻。おめたる色なく會釋して出迎ひ。詞紀の有常が家老と申して。一人は民部太郎俊綱伊勢兩宮代参申付けらるゝ。今一人は桂の金吾廣國。是も昨日より八幡住吉代参。何れも館に在合せず。則ち我等金吾が女房紅梅と申す者。女とても苦しからずば御口上仰せ置かれませ。主人有常は急の召にて。一昨日上京致されしを御存じなうてか。地京都よりとは何方のお使者。遠々御大儀お茶持て参れと フシあしらへば 詞如何に

もく〳〵有常の在京も合點。某は倅の大納言宗岡が家臣丹内兵衛といふ者。主人大納言勅諚を蒙り。有常を大納言宅へ呼寄せ。目の前にて書かせたる有常自筆の一通此の狀箱にあり。披見して今夜中に急度返事致されᐩ其の上にて此方へ請取る物も有る筈。明十八日の早天に違ひなく渡さるべし。是此の狀は。其方の主人紀の有常の狀。使は倅の大納言使なりとぞ述べにける。ハア御口上承り屆けしが右申せし通り。兩家老他行なれば早速のお返事申されず。歸り次第主人の文披見致し。お請は是よりお使者は先づお歸りなされ。此の由御上げられよといふをも聞かず。ヤア自由らしい紅梅とやら。遙々下りし丹内兵衛。小丁稚などの使の樣に先つ歸れ。此方より返事とは上へ慮外使者への無禮。此の家中に家老の外人は無きか。誰なりとも然るべき者披見するに何の事。門前の町屋に旅宿して待ち申す。追付け返事々々。地宣旨を請けたる大納言の使勅使同然。麁相に思はゞ有常の身の破滅後日に恨みめさるなといひ捨て フシ座を立ち歸りけり。思ひ寄らぬ使者の口上とかう思案に落ちざる所に。北の方立出で給ひなう紅梅。地始終聞くに付け如何にしても氣遣はし。先づ御狀箱の封を改め開くまいかと宣へば。さればなア。尤殿樣のお文ならば。いくらも有る侍中にお使仰付けらるゝ筈。敵倅の大納言が家來の使ては。此の文粗忽に開かれず。兩家老の衆も今日の日中。此の五月の永の日。遲うて今夜初夜迄には下向の筈。とやかくいひ延べ家老衆の歸りをお待ちなされぬか。いや〳〵。今の使者の言分家老の外に人は無きか。返事遲くば有常破滅と。詞に釘を刺いたぞや。ハテそなたは誰そ桂金吾の內儀よ。民部太郎は自らが現在の兄。そなたと我は金吾民部も同然。いざ封を切ろまいか。アヽ先づ〳〵先づ先づ待ち給へ。大納言方へ使を呼出せ。目の前にて書かせしと申すからは。往生づくめに如何なる難題書かせしも知れず。開いて跡の返事。北の方樣や此の紅梅などが。女の智慧に行からやら行くまいやら。氣違に弓と矢持たせし如く。何處へ矢先が飛ばうやら底の知れぬ狀箱。開かぬ先が御思案御思案。地ヲヽ云へばさうかと引寄せて。二人が中の玉手箱明けて悔むか悔まぬか。案じ亂れし黑髮に フシ年を寄らするばかりなり。時に廣間の侍騷しげに。丹内兵衛が旅宿よりお返事聞きに參らんか。遲し〳〵と使重り候と。申し上ぐれば北の方。あれを聞きや。最早思案所でない何とせう。ハテ是非に叶はぬ。地獄へ落つるか極樂か。二つ一つに封お切りなされませ。ヲヽ運次第と御厨子のはさみ切りほどく封の印。是殿の御判紛れなしと。改め開く狀箱の中の一通上書に。詞桂金吾殿へ。民部太郎俊觀兩人立合ひ披見すべし。紀の有常。ムヽ地御自筆に疑ひなしと掛紙披し押開き。書面の始終一々具に目をとゞめ。南無三寶ハアヽ。

はつとばかりに差置き給へば。紅梅取つて紙面の前後。讀み返し〳〵ぎよつと驚く眉に皺。なんと北の方樣。なんと紅梅。ムウ。ムウと手を組みて、フシ胸を。ついたる顏色なり。紅梅溜息ほつとつき。詞さりとては料簡もなき此の文體。二條の后をかくまへ。泊瀬寺に隱し置きしこと顯はれ陳ずべき樣なし。今夜中に后の御首討ち奉り。丹内兵衛に渡し明十八日早々京へ上せとのお筆。敵大納言文章好み。のつぴきせず書かせし文とは見えたれども。地お學問の智慧と云ひ案深き殿樣。何とぞ外に隱密の便なさるゝか。御心の通し樣も有るべきに餘り一途の御文體。ま一度讀まんと取上ぐる文筥の底。杜若の花一輪押入れて置かれたり。詞ヤア誠扨こそ〳〵。是御覽なされませ。アこれにはどうぞ心が有らうぞや。お側に在りしを幸に。人目忍んでそつと入れ給ひしものとは見えたれども。狀箱に杜若は如何なる義理ぞ。地日來數々の書に眼をさらし。和漢の故事に達したる有常殿深いお心有る筈。及ばずながら自らも判じて見ん。そなたも考へや。アどうかなあ。ア何とかなと額を傾け紅梅も。又紫の色々にフシ重ねて心を碎きしが。北の方文繰返し横手を打ちて。詞アヽ聞えた〳〵。。是なう紅梅。此の文の日附と杜若の花を隱語にして解いて見れば。似せ首をして后のお命助けよと解くわいの。エヽ。して其の心は。ヲヽ解いて聞かせん篤と聞きや。是此の御狀の日附。男の文には五月とこそかくべきに。あやめ月と遊ばし箱に入れしは杜若。地似たりや〳〵杜若花あやめとて澤邊に咲きし盛にも。何れあやめと引きまがふ。まして況や切ればしほめるかほよ花。誰かそれぞと見知るべき二條の后の花あやめに。似せて切れとの杜若其の名所は三河の澤。二かはといふに身替りの理はおのづから籠るを以て。扨こそ身替り立てゝ。地后のお命助けよとは解いたるぞやと。判じ給へば紅梅もあつと手を打ち感じ入り。かけもかけたり解きも解く京と大和と隔たれど。謎掛け渡す八橋や杜若の一輪にて。大事を知らする有常の作意もフシ和歌の威德なり。都の少し心も休まる所に取次の侍聲々に。使お返事聞きに是へ〳〵といふ中に。丹内兵衛首桶持ち。案内もなく次の間に踏込みうなり聲。詞返事は何と何時迄待たする。勅使同然の使者無禮至極と呼はつたり。地紅梅俄に心急ぎ。サア〳〵北の方樣事急に迫りしが。此の返事は何とがな。詞ハテ后のお首打つて渡さうと返事しや。殿のお心盡されし謎の心。そなたはまだ解けぬか。サアあやめの謎はとけても。似たりや〳〵の杜若はどれ何處に。身代りとても人の命咲いた花もぐとは違ふ。心易げに何者の首をかと。地ためらふ間も丹内兵衛返事フシ〳〵と取頻る。是花をもぐより心やすい身代りの命。自らが分別有り。御首急度相渡さんと返事して。地はや〳〵いなしやと宣へ

ば。紅梅頷きしづ〳〵と立出で。詞ハヽアお草臥の上お待遠は御尤。有常方よりの紙面。二條の后を泊瀬寺に匿へ置きし事露顯の上は。お首を討つて御使者へ渡せとの趣。主人自筆の墨付參るからは。地后を害し明渡お首を急度渡しません。それ迄は御逗留御苦勞千萬。先づ料理申付けませう。詞いや料理所望に存ぜぬ。然らば曉迄に后の首此の器に入れ。相違なく渡し召され。半時でも刻限違へば。地有常身命の破滅たるべしと。座敷をフシ蹴立て歸りけり。紅梅一圓心すまず小首傾け。詞御意に任せ使者の返事は致せしが。地故なき者の命を取り身代りなどとは。假初ならぬ重い事。御心底そつと聞かさせ給へと立寄れば。詞されば其の通り。壁に馬乘りかけ。誰をかうとの智慧もなし。寶は身のさし合せ。此の時の子寶娘有るこそ幸ひ。妹の若草は漸う明けて九つ若干の違ひ似もつかず。后樣と姉とは相生。地いとほしながら姉の井筒をと。

いふ詞の先折つていや〳〵〳〵。詞井筒樣には在原の業平殿といふ殿御有り。アヽ忝くも。夫有る娘は。地親の儘にもと云はんとすれば待ちや〳〵。詞其の業平は何人后の御家來。主君の代りに女房殺す業平地本望では有るまいかなんと。〳〵と詞の中よりくわつとせいたる面色。紅梅居丈高になり。詞身代りの分別有りとは其の事か。ヲヲよい分別のこれ。業平樣有常樣の爲に二條の后がお主なれば。此の紅梅が爲に井筒樣は。大事の〳〵のお主。殊に母がお乳を上げ。申さば乳兄弟重々の御緣。第一夫金吾が合點せぬ事。アヽ。家老殿が。アヽ慮外ながら。エヽ何ぞよい分別有るかと思へば阿呆らしい。鼻の先智慧な返事言はせ跡へも先へも行く事か。使者に向ひつがひし詞は取返されず。地首討つて渡さんといひ捨て駈け出づるなうこれ〳〵。首を討つとは誰が首を。ハテ誰で有う二條の后高子の君。ヤ。詞后樣を討つ程なれば思案も談合

も何も入らぬ。井筒を主と立つる上は自らも主は主。云付くる詞を背き何故井筒を討つまいとは。なんぼう主でも。邪僻事は云はせぬが家老の役。ヤそちが夫が家老なれば。自らが兄民部太郎も家老職。家老が止めうと誰が止めうと。娘は母のまゝ井筒が首討つて。地后の身代りに立てゝ見せうと首桶に取付くを。紅梅突退け肘を張つて涙を浮かめ。詞左程迄姉樣殺したいかいの。エヽほんに。人の讒議いひたうは無けれども。心と素性を顯すの。名を昆陽野というて。腹に宿した妹子にさへ樣を付けたは。また十年にならぬぞや。先御前樣の御病中お髮おろされ。其の身は佛の姿と成り其方を北の方と定め。まだ振袖の人を井筒樣のお袋と。親子の盃させられ。外樣侍の兄を引上げ。お家重代の蛙金吾と肩を並ぶる家老職。兄弟共に御家中の上下樣にさまを付け。敬ふ樣になされた御前樣のお心は。井筒樣を大事にかけさせたいばつかり。思ひ

出すも涙がこぼるゝ。微塵程御恩を思ひ義理を知らば。空事にも殺さうとは云はれぬ所。是を序に継子をしてやらうでなア丶。継母根性。恩知らずの成上り。井筒様殺すをまだ〱と見ては居ぬ。地それより先に后のお首此の器物へ入れて見せう。系圖有る侍の女房の手ばしかい働見ておきやゝ。詞系圖々々と喧しい。我我兄弟氏も無い成上りとは。おぬしが調べいでも知られた事。少も隠さぬ。是を

序に繼子殺す思案とは。系圖有る侍の奥樣には似合はぬ憎體。雜言といふ物。繼子惡むか惡まぬか。日頃の仕方明いた眼にかゝらぬは其方が盲よ。我が身を賢女よ貞女よと云はれんためむざ／＼と。二條の后を汚し紀の有常は不忠の臣。腰拔よ道知らずと一天下の誹を請け。萬劫末代家の氏を。汚すと知らぬ家老殿。まゝ母でも繼母でも母に母。娘井筒が首討へて后を助け[illegible]心得かれ[illegible]

すが有常の北の方といはるゝ女が。家の名を揚ぐる謎の解き樣見ておけよ。アハ〱〱〱ムウしやらな。なまなか謎を解立てして姫君殺し。身代りに事を杜若家の恥を杜若と解きそこなふを見ようわい。みごと見るか。ヲヽ見る。どの眼で。地此の眼でと立上り。睨んで別るゝかほよ花上氣變じて濃紫。是も似たりや杜若あやめも。わかね 三重〱 夕闇の。フシ青葉吹巻く高根颪の。烈しきに。五月の雲の八重立つ空や北の方。スエテ東の方に茜さす。ハオクリ月も出ぬさき人より先と。鞘口早き腰刀。フシせきこそのぼれ。初瀬川井手越す波のとんどろとう。とう。さつ〱と瀬々の川音物凄く。長地檜原が奥の暗きよりくらき闇路に迷へとや。死出の田長を伴ひて鳴捨てゝ行くほとゝぎす。聲をしるべに見上ぐれば。軒の蔓は。しん〱と斗牛の。星の影澄みて。寂寞たる登明は麓の岡のつゝじ原。光を請けて紅に フシ御燈の影をや添へぬらん。地思ひ定めし念力の祈るしるしは初瀬山。弓槻が隈に響き來る此の山寺の鐘の聲。花ならぬ嶺の雲散りてオクリ月ほの〲と出でにけり。地初夜が鳴る金吾が下向を待合すか。紅梅はまだ見えぬ。先づ是迄は念届く。夜も靜かなり參詣の人は無しよい時分。兒民部は下向なきやらん。驅着けてたべかし遲し〱と松の木の間にちらり。〱ちらめくは南無三寶人が來る。詞兒民部か但し紅梅夫婦か。地いや〱獨りの影もしや又。信心者の忍びて夜の參詣か。人や咎めん此の有樣問はれて何と岩たたむ。階の陰に立隱れ フシ息を。詰めてぞおはします。地我こそ先と紅梅が鮫鞘巻の打刀。さすが女の夜の道走るも今を初瀬路に。雲を山かと見上げてもまだ寺見えぬ半天の。フシ月を力の月影に顔を見られじ フシ知られじと フシ包む羅。空蟬の羽に置く露の木隱れに立ち。忍び〱。夫の金吾を待合せ。〱つゝ行く水の流れにつれてこうこうと。間近く。爰に フシ鐘の聲。地嬉しや是ぞ長谷寺北の方は見えぬよな。念力屆きし觀音の御利生有難や。夫の金吾を待つ間心靜かに念誦せん。南無大慈大悲觀世音と。唱へて上る石段の陰。紅梅待てと聲を掛けて北の方。すつくと立つたる月夜かげ。思ひがけなくぞつとして。身も顫はるゝを押鎭め。詞口惜しい夫を待つ間に先越された。恥しめてもおどしても聞入れないか。井筒姫とは幾つ違うてまゝ母根性。繼子喰ひの鬼よ。鬼女よ。紅梅といふ關守北の階片足でも踏むが最後と。地腰の刀に手を掛くれば北の方も鍔元くつろげ。詞惡な紅梅。ぬく〱と后のお首討つておじやと。此處を通さうか歸りや〱。手をかけて引摺りもどさうか。イヤそなた歸りや。地我歸れと諍ひ フシ挑 合ふ所へ。地民部太郎俊綱道中脛巾脱ぐや脱がず。息も休めず走りに走つて驅着けたり。詞なう〱民部殿。若草に渡し置いた文見てか。なか〱披見。

殿の御状使の口上。御両人の諍ひの次第一一に承る。是紅梅惡い呑込み。后を討つ程なれば。當春より殿の百千に。御心砕かれし御苦勞。我々神々の御代參も何の徒事。地代りに立つ井筒の姫。男なれば晴軍の討死同然。末世迄の譽。討つ我等は忠節首桶是へと引つたくる。詞いややらぬ。さ程思はゞ金吾を待つて何故兩家老相談せぬ。いやさ曉迄と時を切りし手詰の詮議。此の短夜にうつかりと。何時歸るも知れぬ金吾を待ち。談合評定に刻限違うての難儀は何と。イヤ兄弟ばかり頷き合ひ大事の姫君失ひ。殿様のおとがめに返答は。ヲヽ其の返答には此の俊綱が腹々。そなたが腹何萬何千切つても姫君は歸らぬ。地一足もやらぬと反をかへし取付けば引放し。突放しても押のけても縋り纒うて動かせず。扨聞分けなし是非もなしと取つて捻伏せ。刀振捨て腰に付けたる股立紐。細腕後に用捨もなくぐッ〳〵と。締むるも弱き若楓の下枝にしつかと縛付け。もはや邪魔はなし北の方いざ御座れと。兄弟打連れ石段に登る夜半の月かげも フシ山の端遠く晴れ渡る。地紅梅叶はぬ身節をもみ。詞ヤレ猿はまだしも。致ふれば犬も藝をする。此の年月歴々の侍を見習ひ。腹を切るの忠義のといふ詞は覺えても。犬の藝と同じこと。心がもとの畜生。忠義といひなし継子を殺し。妹御に威を付けお袋伯父御と仰がれ。御家中を下に敷くべしとの慾心。揃ひも揃ひし兄弟。地佛神もいつその事畜生並に思召し。罰も當て給はぬを己れが徳と思ふかあさましや。金吾殿は何してぞまだ下向ない事か。觀音樣もつれない姫君殺すをきよろりと見て。杻枷鐵の鎖も切れちぎるゝとの經文は僞か。此の組繩一筋切れぬか解けぬか。エヽ無念やと跳りあがり泣叫びしやくればしまる縛繩。涙干潟の捨小舟。フシ引くにかひこそなかりけれ。地桂の金吾廣國戻りかけ聞きかけ。直に馳着き泊瀬の山。脇目振らねばそれとも見ず。紅梅が側をつつと行拔け。坂口にかゝる後姿なう金吾殿。詞遲い〳〵はや北の方兄弟が。我を爰に縛り付け。井筒殿殺しに行たわいの。地かういふ間もあぶない早う〳〵と身をもめば南無三寶。地エヽ〳〵遲かりしと齒噛をなし解いてくれたき縛繩。一寸の間も氣遣はしく見捨てゝ上がる坂の上。地民部太郎首桶抱へおり來る。金吾坂口に踏跨り閻魔王の怒れる顔色。詞ヤイ脚洗ひ侍の馬鹿者。后の代りに井筒御前を討つと聞きしがはや討つたか。民部ぐつとせき上げ。ヲヽ井筒御前をたつた今討つてまだ温かな首。此の器物に有りといはせもたてず。地主の敵通さぬとずはと拔いて民部が太股。六寸許り切込んで二の太刀上ぐる其の隙に。金吾が鋒先耳の根かけて拔打に切付けられ。後飛に一丈餘りぞしさつたり。續いてひらりと飛下り疊み掛けて打つ刀。此方兩手のまくり切片手業に請けかね。草に首桶隱さんと立寄る所を拜打。

詞民部が肩口ざんぶと切られうんとのつけに反しながら。横に薙ぐる切先金吾が膝節。猪の牙かけ。是も尻居にどうと居て。地南方深手よろめきながらフシ氣は鐵石と打合つたり。地紅梅も心ばかり眼ばかりに網の鳥。繋げる犬のいがむが如く。エヽ無念なそれ／＼そこをふん込んで／＼。アヽ此の繩切つてほしいな駈出でん。／＼と騷げば騷ぐ梢木の葉がざは／＼／＼。夫は繩を切捨てん民部は女を胴切と。よろぼひ寄りて一度にはたと討つ刀。結目の下を八寸許りすつはと切つてぞ落しける。地二人は深手に身も紅。女の足は働けども繩に付きたる大枝に。釣引れ枷と成り。刀は業物手は利いつ命限り息限り。谷に落ちては這上り坂に登れば轉び落ち。一所に集り三所に別れ。廣大慈悲の御法の山。忽ち墮落金剛山修羅の岐ぞ 三重へ恐ろしき。鍔音足音叫ぶ聲。更くる夜の風の木魂内陣に聞ゆれば。后も井筒も心空に恐ろしく。おづ／＼立出で高欄より。見れば血刀月に閃き南相手朱に染み。身も紅梅が縛られながら。嘆き悲へる有樣怖やなうと一條の后。驚き給ふ御聲下にも驚き見上ぐる顏。井筒能く／＼見下し詞ヤア金吾民部ではないかいのと。地呼ばはり給へば金吾夫婦あれ姫君。井筒樣お命が有るかいの。ヤレ詞待つてくれ民部手向ひせぬと太刀投捨て。地夢ではないかと血も騷ぎ。數ケ所の疵より走る血はフシたゞ瀧津瀨の如くなり 地井筒堪へかね后諸共走り下り。あわてふためき繩解き給へば。金吾猶も怪しみゐざり寄り首桶開き。能く見れば北の方。ハアウ。地是はとばかり井筒の姫。母上を何故切つた何科に殺した。生けて返せはや返せと縋り給へば人々も。悲しとも痛はしとも辨へ涙一時に。スヱテ泣叫ぶこそ道理なれ。民部恨めしげにきつと見て。詞何と金吾。足洗侍成上者の手際を見たか。最前より紅梅が是非に后を討つとひしめき。御分我に討ちかくる。扨は彼奴敵に一味せしと思ひ此の仕儀に及ぶ。サア此の首でも用に立たば立てい。もし氏素性なき北の方。后の御身代りに成るまじくば。野邊に捨てて鳶烏の餌食にせいと。地咽にむせぶ涙より金吾が粗忽を悔の涙。此の手で死にたい フシ／＼といふより。外は詞なく。地紅梅も猶身を悔み是皆我等が誤。詞后の御首討つて渡せと敵よりの難題。殿樣よりはお身代りとの御内意に。井筒樣を殺さんと北の方のお詞を眞請にし。アヽ恐ろしやあさましや。詞繼母心と初一念の疑より。成上りよ恩知らずと口に任せ惡口し。いやいや井筒樣は殺させぬ后樣討つと言募り。地お身代りは此の紅梅と覺悟しても地下の女。后樣には似付くまじと恐れながらお顏を似せ。ぼう／＼眉とやら額に引き夫の刀を待ちたる姿。お首のお目は見えずとも魂に恨晴れ給へと。首に向ひ鉢巻とれば。引白粉の額際殿上眉の黛はさながら雲の上人。是程思ひ定めし身が何面目に存らへ。

此の簱がおめ/\とそも洗ひ捨てゝりよか拭ひ落さりよか。簱は洗ひはがすとも死にぞこなひの生恥。此の世では雪がれず夫の手にもかゝるまじ。民部殿手にかけ同じ及に北の方。冥途のお供と縋り付き絶入る許りに見えければ。后も井筒も諸共に。扨は我故自ら故と。あへなき首の髪を撫で顏を撫で聲も。惜しますず泣き給ふ。地民部が顏の血と涙。眞紅の絲と白絲と亂しかけたる如くにて。詞エヽ口惜しや。男も女も世の中の。人に交らふ程ならば氏系圖は欲しき物。人に蔑み疑はるゝも生れ素性のさもしき故。地侮るより疑はるゝ侮るも道理。詞昨日今日迄お供先に手を振りし。素足跣の徒歩奉公其の妹の北の方。さこそ最期も見苦しく。民部がおさへてかき首にかなしつらんと。人の疑恥かしや。兄弟氣はせく内陣へ聞かせじと。あの松蔭の芝の上我を招き。せめて一遍の念佛一偈の經も讀む間なく。科人よりあさましく草村に座を占め。民部

殿さあ只今。若草が生先姉樣に頼み下されと。最期の一句是ばかり。地首差伸べし顏ばせは。如何なる先祖筋目正しき人々にも。スヱテ劣るまじと思へども。詞檜の木作りの名作の佛より。佛師の刻みし伽羅の佛は。人尊み重寶 。地利益利生は勝れても。伽羅といふ氏系圖に佛の力も敵はばこそ。況して凡夫の今更産付けし親も變へられず。北の方の未來迄歎は是一つ。哀と思へ金吾とて。スヱテ膝にもたれくどき泣く。地金吾も共に伏沈み。氏系圖はともあれさすが高家の北の方詞上に立つ身の御器量。代々の執權なれど下に附く身の習はし。其の程々の顯れて。地底深き御心の水智慧の釣瓶の短くて。汲取らざりしフシ恥かしさよ。地天が下の女の司女御后に成り代りたる北の方。是に上越す系圖もなし。民部悔むな泣くな/\といひつゝ泣く。ヲヽそれ/\白が名と命に代るとからは。官も位階も打の名に添ひ。中納言藤原の業良が娘。清和

天皇の女御。二條の后高子の君は此の人。今日より我はたゞうどと忝くも御后。首の前に御手をつき傾くおぐしはら/\と。御涙にくれ給へば人々わつと聲を上げ。生れての譽死しての果報。此の上の有るべきか同じくは今のお詞を。最期の耳へ聞かせなば未來の悦び フシ如何ばかりいたはし。さこと聞え伏し。地歎きの中に後夜の鐘無常の響數添ひて。フシいとゞ哀ぞ増りける。詞南無三寶左更の鐘金吾聞いてか。實にも/\。時刻過ぎては皆徒事我々深手は隱密。御首は女房渡せ。敏に色ばし覺られな。地急げ/\と勇められ力なく/\紅梅が。器取繕ひ涙の袖に携へて。我は歸れど亡き人は中有の道に出て行く。野邊の送りの門火たく澤の螢とあこがれて。もう會ふことは叶はぬが此の世の名殘今一度。お顏が見たい見せてたべ。暫くなうと魂よばひ呼ばれて暫し立ちとまり。明けて見せたる佛顏わつと叫ぶを一生の。夢よ現よつはもの二目と

だにも短夜の。涙な添へそほとゝぎす。鳴くや五月の花菖蒲似たりや。似たりかきつばたの謎も開くる後の世の。迷ひ開くるほの〴〵明け別れて。館に歸りけり。

第　四

地唐衣きつゝなれにし妻しあれば。在所住居も珍しく高安の老母侍氣。業平を爭がねと君をかしづき奉れば。とりぶき屋根の雨よりも人目もらぬを頼みにて。忍びて皇居を フシ安んぜらる。地般若五郎仲則世上の安否聞かんため。忍び編笠の路地の戸けはしく敲く音。業平驚き走り出で。誰そとゝいはせず明けたく。詞晝中に門しめて世を忍ぶ段でなし。大事が出來たとつつと入り。京都の體を窺はんと。淀一口邊迄參りしに。あのあたりの取沙汰。有常殿より二條の后を討つて出され。敵の郎等丹内兵衛首を請取り歸京。人足よ傳馬よと大和路の騷ぎ十日餘り。以前の事と慥に聞屆け候と。語ればはつと詞もなく。地假の住居の障子一重天皇まろび出で給ひ。死なばやとのみ綸言にて スヱテ歎き沈ませ給ひしが。地外面に音なふ女の聲。詞鄙よりお出でなされし公家様方のお宿はと。地市女笠きて二人連。窺くを見れば金吾が妻の紅梅。あれ業平様后御供致せしと。申せば君も御夢心地。懷しやゆかしや是へ〳〵はや〳〵と。御衣に縋り袂を捨へ。悲みの涙時の間に フシ嬉し涙と變りけり。地紅梅御側近く參り。此の度敵の難題民部金吾が間違にて。手を負ひし忠心北の方の身代り。末代の賢女烈女とも。詞同じ女と生れても我々及ばぬ事ながら。地下が下迄君に命を惜まぬは。御運開くる瑞相と。始終をこま〴〵と奏すれば。君を始め業平も有常一家の忠節。道と義とに命を捨てし北の方武士にもまさる女ぞと。御涙せきあへねば物に動ぜぬ般若五郎も スヱテ聲を。上げてぞ泣きゐたる。地御落涙の隙よりも如何に業平。詞臣憂ふる時は君共に憂ふと云へり。地況んや皆朕故汝只今大和に越え。有常が喪を弔ひ朕重祚せば。北の方に位を贈るべき旨云ひ慰め。且は井筒もなつかしく朕をがな恨むべき。紅梅連立ちはや急げと。后の御手を取交はし フシ奥の。一間に入御なれば。地紅梅手を打ちア丶上は上程お情深し。井筒様は御ことのみ。折しも雨續き故かお庭の藤山吹。春よりましに咲亂れしを御覽有り。時ならねど庭の松には花咲けども。井筒が心の松には花も咲かぬとのお悔みに さぞお悦びサアお供と勸むれば。尤々勅諚の上延引ならず。詞是仲則心を付けて宿直致せ。地生駒の姫は父が命日とて聖德太子へ參詣す。戻らばかくといひ聞かせよ。詞如何な〳〵存じもよらず。常々あの悋氣深さ。井戸の端の童より井筒の端の業平。あぶない〳〵と寢言にも悋氣する人。あたゝかに合點致されまい。地チチ思案こそあれ何時も神事にこもれば。精進潔齋にて五日三日女に面を合はせねば。生駒も合點俄に神事とだませだませ。詞今

にも歸ればやかましし。道の用意も此のまゝ
まいざ紅梅と フシ打連れ急ぎ出で給ふ。詞
エヽ迷惑千萬帝の守護より悋氣の用心。小
むつかしい留守居やと。呟き〳〵掛金しめ。
フシ障子引立て入りにけり。フシ姫も程なく。
立歸り。詞申し業平様。たつた今下向致せし
と。詞路地の戸叩くに音もせず。業平様。
中將様。生駒が下向しましたと叩いつ窺い
つ是は扨。詞心得ぬ一足も外へお出でなさ
るゝ所もなしと。地喚き叩けば打割る許り。
仲則心得淨衣に烏帽子。御幣捧げて後向き
はしたゝ聞かせて。高天が原に神の留守居
仕る。千早振る〳〵。千早振る〳〵 フシ御
幣振る。地姫さし窺いてヤア。又例の御神
事かと。呼ばれば内に頷く。詞いや俄の神
事何の爲ぞ。よし御神事でも垣越は大事な
い。地此處へ來て顏見せ給へと呼ばはれば
いやぢやと頭振る。詞何ぢや否ぢや。さ程
俄にいやになる筈がないと。叩く響に掛金
はづれ。地扉くわつと開けたり直に駈入り
烏帽子かなぐり引廻せば般若五郎。扨こそ
な。いけまぢ〳〵と。業平様は何處へぞと
睨み付くる顏。一生怖い目知らぬ身も。が
ち〳〵ふるひどまくれ。詞中將殿は大和の
井筒。何ぢや井筒。いや井筒屋の神事で祭
に呼ばれ。爰は跡の祭ぢやと云捨て フシ逃
げて駈入りけり。地姫はこちらへすわつと立
き。エヽ恨めしやつれなや。片時半時油斷
せず守りつめしもの。今日は何とうろたへ
て取放せし。元より及ばぬ雲の上人。思ひ
そめしは身の因果。とは云ひながら フシ妹
背の緣。地天上の桂男といとしさかはいさ。
外の女にお顏見せるもいや〳〵〳〵。況し
て井筒が我が殿顏憎や腹立ちや。假寐の夢
にも若し井筒奴が見ゆるかと。寢た間も悋
氣晴れぬもの。行く男も行く男。今頃は行
着いて二人寢たか。積る睦事我がせしがご
とエヽ〳〵頰憎や妬ましやと。立つて見居
て見齒を鳴らしかつぱと臥して。歎きしが。
此の儘居ても焦れ死ね。よし道で死ね先で
死ね。追ひかけ行かん連歸らん。心輕しと
笑はゞ笑へ。コハリ狂女とも云へ心に連れ立
つ男出立の姿は是ぞと引き裝ぎ。結ぶ烏帽
子の紐さへ指に フシ付きまとはつては。離
れじのかじと夫の淨衣を身に引き重ねる花
すり衣。色も紫苑にまよひの煙。くらむ眼
に淚の霰はら〳〵。腹立ち燃え立つ龍
田越頭をしたりうて。三重へ追うて行く。フシ
足引の。地大和の國石上。紀の有常の奥庭
に。スヱテ五月雨晴るゝ南影。天地の氣應じ
てや。再び咲ける木々の花青葉が中の梅櫻。
業寄する藤蔭の。洗へば臉の翠滴ふ。八重
山吹も口なし色に ホオクリ春とはいはで彌生
山鶯ならぬ彈の聲。扨こそ夏とは フシ知ら
れけれ。有常易々敵を欺き館に歸り。北の
方の菩提の爲御經書寫し讀誦して。咲出づ
る花を亡き人の手向草ぞと觀念し。スヱテ淚
先立つ折ふしに。業平の中將殿紅梅が同道
と。伴ひ出づれば聟舅顏見合はする目に淚。
是へ〳〵と請ぜらる稍ありて業平。詞今度

北の御方一命を以て后の御難を救はれし段、蟬子井筒に對しては仁愛有り古今の忠死、昔御感涙淺からず。二度御位に立歸らせ給はば。女官を贈り給はるべしとの叡慮なりと述べ給へば。有常烏帽子を地に着け。詞君恥かしめらる時は臣死すと云へり。地君の爲に命を殞すこと。和漢其の例珍しからず。然るに贈官有るべきとの宣旨。苦の下なる白骨も如何ばかりの悅び。子々孫々の面目此の上や候べき。詞御覽の如く庭前に時ならぬ。草木の花二度春を見せしこと。往昔春日山冬の日に藤咲きて。朝家の吉事たりし古例。聖運開くる瑞相。地我々が歎をとゞめ上を壽き奉れと。死したる女が心の花咲き顯しと一入の悅び。詞目出度く奏聞し給へ。娘井筒も繼母が歎今にやまず。地夫婦の對面には憂を忘るゝ習ひなり。夜すがら語りいさめてたべ。いざ此方へと打連れて。オクリ奥の〵一間に入り給ふ。せき立つ足は。地に着かず。地空をも駈ける生

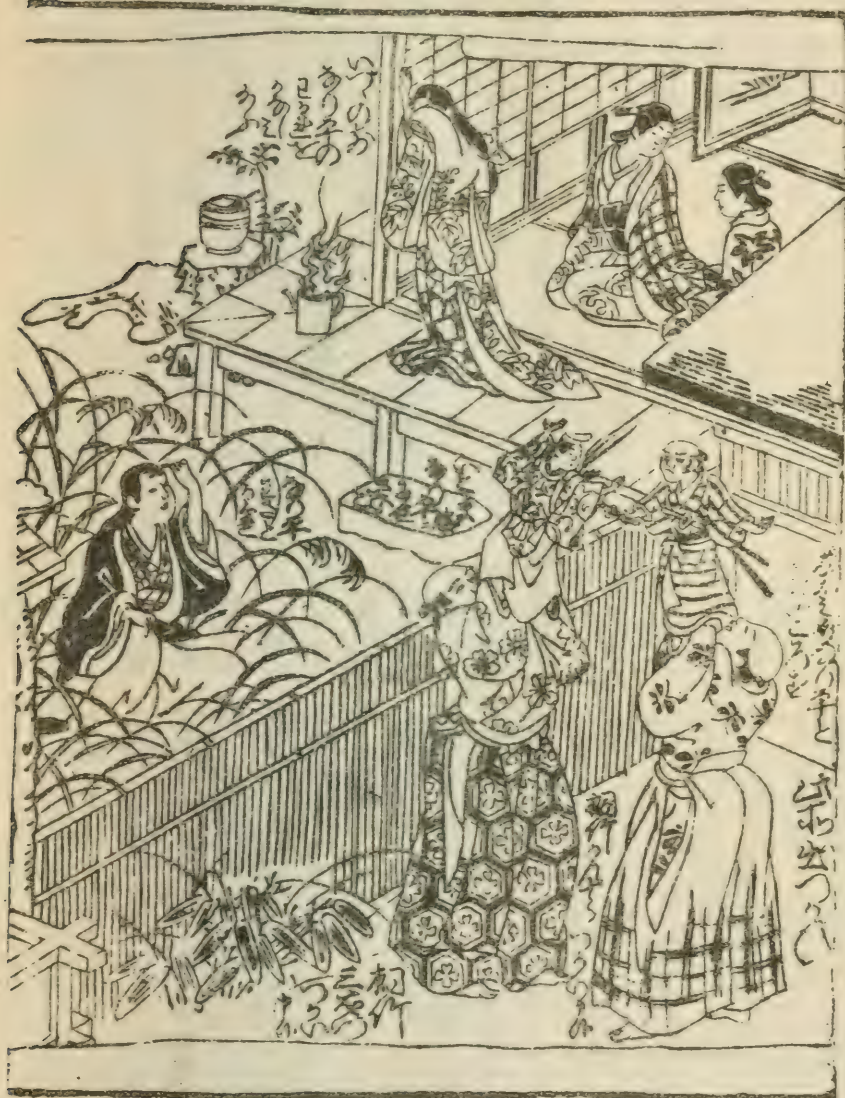
駒の轡。井筒御前の寢所の裏門。走り着くやら叩くやら賴みましよ〳〵。スヱテ誰ぞ賴まんと叫ばるゝ。廊下を通ふ婢女の。アヽせはしない誰ぞいのと簀戸を開けば。詞イヤ苦しからず業平の中將といふ者。地井筒にちよつと逢ひたしとつつと入るを待ちや〳〵。詞中將様は夙うにお越しなされ。お寢間で井筒様としつぽりのどうぶくら。何ぢや業平の中將、事觸の様な姿をしてすりかかたりか。地サア出や〳〵と突出し門の戸はたと閉め。なう〳〵怖やと フシ駈込みける。地なう情ない盗人かたりと見ゆるか。無理に内へ入らうでない。ちよつと爰へ業平様呼び出す事も叶はぬか。地今しつぽりの最中とは未だ日も暮れぬに餘りな。見ともない聞きともない。爰から喚くが聞えぬか隱笠かな蓑ほしや。小面憎い閨の有様一目見て。エヽ引きのけたいと打叩く戸は割れもせで。心を碎き身を焦す日影は山に日は涙。暮れ行く夏の宵闇の。空には降らぬ

五月雨振る身一つぞ。フシしをれける。地折節伯父の大炊之介業平來ると聞付け。つけ廻したる頰被心しめたる高からげ。足音靜に忍び込み。互の心の暗闇に振返り見る烏帽子姿。ヲ業平ごさんなれしてやつたりと詞もかけず戻り足。生駒姫が右手の肩先はらりすんと切下げたり。うんとのつけに身をもだえ。ヤレ人殺し〳〵とよろぼひ逃ぐるを。追つかけすかさず井戸の井桁に取つて摚ぢ付け。肝のたばねを南無阿彌陀十萬億土を一刀に。ぐつと抉る刄を摑み。扨は井筒めが云ひ付けて殺さすな。エヽむごいぞやつらいぞや。地妬は互のことながら殺さうと迄は思はぬもの。アヽ苦しい此の恨刄物はかりが命はとらぬ。干將莫耶の劍より生駒が今の怨念。取殺さいで置くものか。思ひ知れやと忿のはたゝき フシ涙は車軸雨やさめ。地生駒と聞くより大炊之介はつと驚き氣おくれして。手足がた〳〵がたつく膝節踏みしめ〳〵。詞ナヽよい推量殺せとは

井筒が云ひ付け。地井筒につけと刺通す無慚の切先邪険の刄。三途の川瀬水の泡終にはかなき死骸を直に。よい埋穴と井戸へすつぷりずぶ／＼。サアしてやつた。此の勢に業平をと裏を目掛け駈出でしが南無三寶人が来る。ヨよし今夜の中は過ごさじと。縁の下より高這し フシ奥深くこそ入りたりけれ。フシ手燭捧げて。業平の歸るさ送る女房達。中將樣のお歸り。お供の衆。親子御樣より御念入此方よりお輿にて。送らせませとの御事と申し上ぐれば。詞チヽ井筒もさはいひつれど。君さへ世の中忍びの御身時相館の歩にたし。供の童を垣の外面に待たせ置く。地さらば／＼と立別れ簀戸押開き立ち出で給ふが。又立止まり。詞アヽ心得ぬ井筒が今宵の有樣かな。河内の女と我が中を知ればこそ問ひつるに。地妬ましげなる顔もせずたま／＼逢ふ夜の今の別れ。また夜深さに又いつかはと色濃く止むる詞もなく。夜嵐はげしお風召すなとばかりに。

につこと笑ひし別れ路は疑もなく又踏分くる忍び路に。通ひ男のあるよな。河内へいぬる顔にて井筒が有樣窺はんと。獨り頷く薄原薄よりなほ身を細め。露深草のかた鶉 フシ妻ゆゑ佗びておはします。かくとは知らす井筒姫。相見る程は稲妻の。長地顔さへ見せぬあだ人を跡には枕ばかりにて。寢るに寢られず閨を出て。スヱテ其方の空よと打眺め。地爰より河内の高安へは。生駒の嶺を打過ぎて大道越や龍田の山。アヽすさまじき惡所の有りと聞くものを。覺束なくも夜の道。フシとやあらんかくや。渡らせ給ふらん。心許なや氣遣はしァヽ儘ならば行て見たやと。一首の歌にかくばかり風吹かば沖津白波龍田山。夜半にや君が獨行くらん。行けば慰む方も有り案じ暮す此の思ひ。何時かはてぞとかつぱと伏し思ひ餘りて泣く涙身もなが。れ行くばかりなり。紅梅奥より駈來り是は／＼爰へ出て。詞泣いたこがれたとて中將樣の道からお歸りなさるゝか、

おまへは誰ぞ御本妻。生駒はいはゞてかけ者一口にいはれぬお身。折角お供致せしもの。夜も晝も抱きしめとめて置けばとて何の恥辱。地御機嫌ようにつこりと笑顔してお暇乞。エヽはがいやと身をもめば。なう別れ路に笑ひしは。泣くよりもフシ猶苦し。悋氣嫉妬は女の瑕。詞夫にあかるゝ始ぞと母上の教訓一大事と嗜み。地思ひ殺し思ひ消し思ひ紛らし鎭めても。胸くるしむる妬ましや振分髮の頃よりも井筒に。丈を比べ來し。互に影を水鏡。美しい顔よい娘と相思ひに思はれて。たま／＼夫婦になりし中。生駒の姫に見替へられ。てかけが本妻の格氣とは神代も聞かすあることか。是も男のあだし心若しや胸が燃えこがるゝ。是見てたもと縋くつゝけ撫で下す。紅梅が手を取傷の如くあつや悲しや冷してたもと。水を提子に汲落へ。せめて暫しも助かると胸をさすせどなか／＼に提子の水は湯と成つて。又つぎかゆれば沸きかへり湯氣はほむ

らと燃え上る。これ見よや扇の子を十づつ十は重ぬとも。思はぬ人に身を焦す心の内の苦みを。思ひやれやとばかりにてわつと叫び伏し給へば。紅梅を始め女房達いとほしの思や痛はしの戀路やと。共にしをるゝ涙の雨ぬれぬ。袂は無かりけり。フシ聞くに堪へ兼ね。業平朝臣薄押分け飛んで出で。詞なう恥かしや思ふに逢ふ井筒の心。悋氣すべきを妬まぬは外に心も有ると疑ひ。高安へ歸るふりにち

てなし。隠れて事を
聞きたるぞや。地今
の詠歌の肝にしみ心
ざしの擣ゝ内侍所も
照覽あれ。此の後ふ
つつり生駒の姫を思
ひ捨て外心は持つま
じ。恨を晴れよなう
井筒と御手をおつと
しめ給へば。品なく
ひんと振放し。スヱテ
拂へばすがり抱き付
き。今迄妬の積る雪
解けて語らぬ其の内
は。放すまいぞや放
さぬぞ。フシならぬ
ぞ。フシならぬと引
きとむる。紅梅はづ
せば女房達あのゝも
のゝに夜が更ける。

口説にお床でノ\と無理にお寝間へ押しやれば。いやおやく\と云ひつゝ井筒。心はひつたり業平と スヱテ打連れ。寝所に入り給ふ。地既に更け行く遠寺の鐘青嵐の嵐颯颯々。コハリ北斗も建す丑三つの空物凄く前栽の。井桁に猛火燃上り天にほてり地にいなもの。土石草木動搖し。生駒の嶺の一ホス有りつる姿影と。顯れ三重ウヽと往事渺茫として夢に似たり。人生寂然として泉に歸す。是を現といはんとすれば。武帝の漢女を慕ひし煙。幻と見れば曹公が闍を求めし父の骸。皆一心に寄るとかや。

怨靈振分髪

地筒井筒。井筒の水は。濁らなど。かはせし。人は朧月入方。もなき我が思ひ。唯變らじと。一筋に。寝ても覺めてもいとしさの。あまりてもれてにくう成る。君と我とは戀仲なれど。にくや井筒が ナホスフシ水さして。あだに破りし。戀衣。肌に非道の刃に刺され一つ世にさへ。二世の緣。泡と消ゑほく、三つ瀬川。胸に。満ちく。千尋の岩波頭恚にせき入り思ひに淀み。流れずとまつて沈む體も盡きぬ妬みも共に井筒の。底一焦がるゝ。フン恨みの數も。絶えせぬや。思ひ出づればなつかしや。君に逢ふ夜は天の戸のあくるを恨み語らひし。今は無間の釜の蓋 オクリあくるを。待つにかひもなく。燃え立つ紅や緋縮緬繻子の下紐は。嫉にからまく我が絆撫でて。冷泉くろ髮。おもかけ。の。網代同ふ丸鏡。冥途に是を淨玻璃や。紅や白粉濃きふかき。是を見れば剣の枝。山と積む罪身に積る。妄執の雲無明の霞。あら腹立ちや フシ妬ましや。フシ圓ふ屛風の。打解けて。井筒がまゝに業平の。スヱテ問ひてかけたる常陸帶。あつかは女の二重三重。帶は解くとも心とかせじ ワキ添はせじ シテ寝させじ共に二人奈落の憂き目を見せん。來れ井筒と怒の息つき フシ焔と成つて飛入れば。帶は浮立つ雲の袂精の合ふ肌を離れつゝ。引かれて井筒は帶に取付きコハリ辿り來るく\、端離れし比翼の鳥の片翼。仇と情の思ひ羽劍羽皆、愛著の矢先と成り悉く身にたつか弓。引かるゝ苦患は添臥しの。ナホス闇に茂りし戀草を誰が蒔きし種ぞとは ハヅミ思ひ。知らずや拗戀りよ。地比は朧月の末つ方。よしなき緣を組みそめて。いとし可愛いに。からまされ冥途。跡を追うて來て終に劍に置く霜の。消えしも井筒故ぞかし。君と寝初めて一夜さも獨りは見せぬ閨の月。二つ二人が。顏を並べて。三つ見れども。四つよしなや。なつかしや。五つ井筒に。見かへられつゝ六つ昔の。馴染もどして。七つ泣いても。八つ九つ今宵は君が。どうで歸らじ戀しなつかし。うそつく鐘の。十一十二。十三峠宵に越えしが此の世の名殘。此の。一念は附添ひてのかじ離れじ影身に纏ひ。くるく\。苦しき胸のほむらの火に。五體をこがせば井筒姫。追ひは、れんと駈出し櫻の木かげに隱るれば。髻を取つて引戻し。もとより色有る花

の顔。情の櫻散りもせで花の木蔭に隱るゝは。妾は櫻の色添へて オクリ うつろふ。人に思はれんと。スヱテ 其の花心恨有り。見るも餘所目の妬ましきに。花のうはなりこれ見よと。櫻の下枝笞と振上げ追立て。ほつ立て フシ 追廻し。彼岸櫻の雪と散れ。煙となれや鹽釜櫻。汝に恨八重一重。フシ 今日九重の遲櫻。君に先立つ初櫻名殘も跡に有明櫻 シテ 打つとも去らじ ワキ 退くまじ家の 二人 フシ 犬櫻。因果の焰火櫻の コハリ 花も命も盛り一時根にかへれと。いがみかゝれば井筒姬。逃ぐるに途方なく／＼も命を繋ぐ藤かつら。松に ナホス 手とふを力にて オクリ 漸う。梢に ハツシ 這上れば。地 何處迄もと呼ばはつて虛空を睨み大地を蹴立て。コハリ 松の古木に寄るよと見えし廿尋餘りの縹の帶頭は忿怒の鬼女と成り。角を振立て梢を纏ひ花を吹散くはやち風。砂を飛ばする土煙猛火を吹掛け井筒を目懸け。梢遙に ナホス 追ひのぼすはすさまじかりける 三重 勢ひなり。地 井筒は梢に目眩き。枝も撓つて氣も絕え／＼。死ぬとも鰓にかゝらじと枝を離れて眞逆樣。大地へかつぱと飛下るれば。所こそあれおのが名の下は井筒の眞中へ ハツシ そこはかとなく陷りたり。地 續いて死靈もをちこちの山颪俄に震動し大地も。裂くるばかりなり。ワキ 地 音に夢覺め業平朝臣驚き寢所を躍出で。詞 井筒姬が見えざるぞ尋ねよやつと呼ばはり給へば。地 女房達右往左往其處よ此處よとひしめく所に シテ 井筒の內より瞋恚の猛火愛着の水湧立て。火玉水玉迸れば ワキ 業平御覽じ南無三寶。幻となく現となく生駒姬の死靈顯れ出で。井筒を呵責し苦むると思ひしは。夢にも非ず眞なり。誰が手にかゝつて果てたるぞ生駒姬に井筒姬。彼と云ひ是と云ひ。不便の者の身の果やと スヱテ 前後もわかず。取亂し フシ 歎き。沈ませ給ひしが。地 假令命は終るとも互に修羅の絆を離れ。成佛得脫の身となれと肌に掛けたる九重の守を。井の內へ投げ給へば シテ 地 忽ち水火穩に治つて。生駒姬の化したる姿井筒姬を宙に提げ。スヱテ 忽然と顯れ出で。地 御守の威德に祓はれ。妄執の雲霧晴れ朝に見れば恥かしや。我を討ちし其の仇は緣有る伯父の大炊之介。それとは知らで井筒の姬。憂き目を見せし フシ 悔しさよ。今こそかへし得さするぞ。死するは我が身の薄き緣心直なる井筒姬。露も殘さん恨はなし。ウタヒ 此の後又も來るまじ。再び仇をなすまじき。ナホス 地 夫を狙ひ我が身を殺し。重ね／＼の大惡人來れと呼ばはる聲につれ ワキ 手足を張つて大炊之介なう堪難やと狂出で。大地を摑み苦めば シテ おのれが邪險の刄にかゝり。沈みし井筒の溜水。底に沈んで幾奈落奈落の底の憂き目を見よと。取つて引寄せ眞逆樣。今こそ恨は晴れたりと。云ふ聲ばかり フシ 跡に殘して明くる夜も ハルフシ 東雲近き。八聲の鳥空白々ときはりも晴れ 二人 上中下に至る迄さゝめき。喜び繰返す。井筒の掛繩末永

くしつほり。〳〵床のうちとけ御語らひ契も深き妹脊の水淺から。ざりし縁なり。

第五

地大人は非禮の禮に拘らず。かるが故に義に因つて其の親しきを滅すとかや。扨も惟喬親王の賊軍三千餘騎。伴の大納言宗岡を大將にて。日月の旗眞先に押立て。大和の國都介野が原に陣取つたり。地官軍は鄕侍。野武士を集めて御勢三百餘騎。桂金吾民部太郎般若五郎三家老。日月の御旗を靡かせ。

三千餘騎を引請けて鯨の鯢を呑む如く。鬨をつくり貝鉦ならし。追つつまくつつかり廻し。ちらさず殘さず 三重 切りまくる フシ 軍半に。地 春日の社司。あわたゞしく兩陣の中に立ち。詞 なう／＼雙方共をとゞめられよ。過ぎつる夜大明神の夢想の告、神官の者ども一同に蒙りし趣。則ち告文に認め。上覽に供へ奉ると。地 未だ訴へ終らぬ所へ。詞 伊勢の與主中川三位。是も同じく告文を差出し。過ぎ

し七口の夜内宮の御殿鳴動し。皇大神宮のみ
んなきに乗移らせ給ひ。御託宣の趣此の一
通に 地候と フシ大息ついて述べければ。 地
大納言宗岡在五中將業平朝臣。陣頭に出迎
ひ二社の訴只ならず。互に拜見有るべしと
さつと開いて讀み上げたり。 詞我が子孫は
秋津島の主。萬民を苦むる事勿れ。軍をや
めて神明の直なる心に任せて。天津御位を
定めよとの御託を。讀み上ぐるも一同に
一文一句違ひなく。神と神との和光の詞割
符を合はする如く。二人もはつと信をなせ
ば。諸軍勢も恐入りつゝ耳を澄て鎮まれり。
地業平朝臣遠慮をはかり。なう宗岡殿。御
連枝御位の爭に。科なき人を殺さん事。神
明歎き思召し戰をやめ。何にても勝負に因
つて御位を定めよと。神の御告疑ひなし。
地是を思へば軍をとゞめ先例に任せ給ひ。
春日の神前に於て正直正路に他念なき。十
歳以下の童に三番一得の相撲を取らせ。勝
ちたらん御方に御位を定めんと存ずるが。
詞貴意は何と思召す。 ムゥ存分も有るなれ
ど。神明の告背きがたしともかくも。 惟喬
の御前は宗岡に任され。用意あれ業平殿。
地ナヽ其方にも御用意と。別れ分かるゝ旗
の足。修羅の巷も忽に吹きをさまりし 三重
へ神風や。 地伊勢春日の御託に任せ 十歳
未滿の童の力有るをすぐり立て。三笠山の
麓に勝負の地を占め土俵をつかせ。北は黄
に南は青く東しろ。西紅の緞衣に四本柱を
よそほひて。鎬の水引掛け[illegible]。西の棧敷
は惟仁親王御棧敷に入り給へば。紀の有常
業平朝臣兩家の雜掌。[illegible]民部太郎義
若五郎を始めとし。御前間近く非常を警め。
東の棧敷は惟喬親王伴の大納言宗岡一類。
兩親王の御位定め天下分目は今日と。相撲
を取るも取らさるも。心に我を張る力瘤 フ
シ睨み合うてぞ並居たる。 社僧は誦經し宜
禰が鈴いさめの神樂も事終り。早や西東の
土俵入り先に歩む行司志賀の兵庫之進。同
木村隼人之介年齡姿も一樣の。金紋紗の片
衣袙の小袴着くゝみ。團扇携へ御棧敷に一
禮し。土俵を祓ひ清めの鹽東西に立別れ。
相撲の由來を述べにける。 詞抑相撲の始め
と申すは。唐土岩が瀾と申す所にじやまん
がまんがんまくとて兄弟三人御座有つた
り。中にもおまんは力世に超え。我が力の
程を試しみるに。唐土四百餘州には手に立
つ者一人もなし。日本に渡り猶も力を試さ
んと。都七口に相撲取らんと高札を立て。
廿五間四方に埒を結はせたると承る。不思
議や夜の間に彼の埒を一所鼠が食ひ破る。
よし〳〵鼠が食ひ破りし所なれば。此所よ
り人の出入させんとて鼠木戸と名付け。今
の世に至つて諸芝居の鼠木戸と申すこと。
地此の時よりぞ。 フシ創まれり。 又四本柱は。
須彌の四州多聞持國增長廣目の。 フシ四天王
に象れり。 水引は。神明佛陀の戸帳なり土
俵の數は十六俵。是十六羅漢に擬へ兩方に
口を。二つ開けしは阿吽の二字。行司の持
ちたる此の團扇。日月の形なり。さるによ

つて御相撲は。佛神の内意に叶ひ。勝負に依怙の心あれば。五逆。罪にも。まさるなり。惣じて相撲の御大法。樣々有りと申せどもあら〳〵斯くの如く有るぞと聲を。並べて発しける。詞殊更今の相撲正直正路の童に。八百萬神乗移り御位定めの晴勝負。地心を正して土俵入サァ御座れと。左右に團扇差上ぐれば惟喬の御方より。コハリ鳥羽の牛松前頭。闘鷄跳岩松之介ずしり〳〵と揺ぎ出つ。兜山我慢三郎斯る時節に大關の。氣色我慢に練込みたり。劣らず西の片屋より。振分髪の前頭年も八九の節くれ立ち。藪の下の荒虎。負けまじものと子心に闘わき返る音羽山瀧之介。大井川の赤太郎是今日の大關と。一朝に選出され何れも三尺。四尺に足らぬ五體六根持ち作ら。十善萬乗の御位。踏定むべき四股踏む音。手先に振込む力瘤小腕小足の土俵入。三番一得相撃は。いざ御座れ。ナホス地やあといふより兩方に息をつめ固唾を呑み。眼もふらぬ勝負の吟味既に。相撲ぞ三重へ始りし。地勝つつ負けつ變方の勝等分。東西の棧敷氣を張つて次を〳〵と力む聲々。詞末一番は闘と闘二人の行司左右に別れ。詞東西々々東の方は兜山西の方は大井川。此方は大兵彼方は上手。さるによつて今日の大關。此の御相撲が位定め勝負は神の御計らひ。しつぽりといざ御座れと。開く團扇の風より早く。ゑいとはぬればしつとはづし十二の捻り十二の投げ。立かん居かん強みの腰。内掛外掛大わたし鴫の羽がへし小鷹の羽折り。猿の一飛夢枕うたせたけ馬さまたがへし。手を碎き心を碎き半時餘り揉合へば。勝負如何と西東棧敷の上下息をつめ。心に立てぬ願もなく手に汗握つて見給へば。兩方互に四つ手に組み。はぶしにどうとまろぶと見えし。詞行司聲かけ御相撲見えた勝負ない。相差し相投げとたんのわれ。勝負なしと引分くれば惟喬親王大音あげ。今の相撲を勝負なしとは盲目行司奴何を見る。我慢二郎か仕懸けの勝七分の勝に極つた。地位に卽くは此の惟喬ぐつともぬかさば踏殺すと。くわつと眼を見開いて筋骨いらゝげ罵れば。各太刀に手をかけ一度にはらゝと膝立て直す。般若五郎ちつとも擬せず。詞相撲の勝負は行司次第。二人かわれと見極めたれば相撲は何時迄も勝負なし。目玉に恐れて云ふことを云ふまいか。無理を云はば親王とて免しはない。素切下げんと踊出づれば廣國俊綱。地荒氣は却て神慮の恐れ鎮まれ默れと制する所に。廣國が一子幸若丸あけて八つのおつぼろ髪。二重廻りの下帯に腰を釣らるゝ裸身を。おめず臆せず土俵の中すなり〳〵とふり込んで。詞なま中二人こける故。勝負なしのわれのと。互のせり合ひむさい〳〵。五人が十人でも相手はきらはぬ。おれが獨りでひらひを取る 地御座れ〳〵と フシ突立つて。地晴れの足のうら若く櫻の梢の春の雪。さはらばおちん其の風情しほらしくも亦フシ危し。思ひが

けなく有常業平大事の勝負こはもの〳〵と。身を縮め給へば父の金吾は身を冷し。よし負けたらばそれ迄八方切死と心は我が子に飛び入る力。相手は進んで名乘を上げ。摑みひしがん氣色にもちつとも恐れず立並べば。西の棧敷上中下迄幾百倍氣を害め。土俵間近く詰掛け〳〵またゝきもせず三重見る内に。地云ひし詞に違ひなくひらひ三番續け勝。すは御位は惟仁親王萬々歲と祝すれば。惟喬親王地踏鞴踏みてせき狂ひ。詞ヤア聞きたくもない萬々歲。そつちは新手此方は疲れ相撲。今の三番勝負無い。此方からも新手を出さう改めて取り直せ。地それ鐵壁と呼ばはれば兼て用意や有りつらん丈拔群に夜叉の如く三十餘りの丸額。どさり〳〵と搖りかけて練込む臑骨腕骨は。岩を削つて付けたる如く如何なる相手がかゝるとも。フシたまるべしとは見えざりけり。廣國ぎよつとしコリヤなんぢや。詞頭は子供と見ゆれども體は七十の半男。

見す〳〵の胡亂者悴が相手に存じもよらず。外の子供を出されよと云はせもはてず宗岡。胡亂者とは男と思ふか。親は捩金といふ相撲取り。當年九つ然も年弱。相手にせねば相撲に及ばず。惟喬親王を位に卽けるが。一つ一つの返答せいと意地張つたり。般若五郎踊出で。前髮あればおれも子供。鐵壁とやら相手にならう。地サア來をれと土俵の中へにじり込む手を突出して幸若丸。伯父樣。相撲は時の放れ物。子供が大人に負くるにも極らず。相手きらはぬ鐵壁御座れ〳〵と小手招ぎ。呼ばれてフシすくむ大人氣なさ。惟仁親王有常業平生きた心もましまさず。賴みは神力天照兩大神春日。八幡住吉一心に。惟喬主從しすまし顏笑壺に入つて見給へば。行司の團扇引くより早くやつと聲掛け手合ひして。はぬればすかしかゝればもたれ王法守護の神力佛力。幸若丸が身に加はるとは人も知らず我知らず。大の男を惱ます事牛に食付く虻の如く。

鐵壁が指込む小腕取つてくる〳〵〳〵。くるり〳〵と三重引廻す。地拍子につれて鐵壁が。前髮鬘すつぽり落ち。絲鬢奴の剃立頭そりやこそ化が露れし。摑み殺せ捩ぢ殺せと金吾民部般若五郎一度にはらりと取廻し。引放さんともがけども幸若かつて動かせず。詞父樣男でも大事ない。地鬼でも蛇でもやろものかと。大の男の前ほろ摑み目より高くぐつと差上げ。見たか〳〵と二三遍土俵の中を持つて廻り。どうと抛出す其の響。三笠の山に木魂して皮肉も裂けて亂れ骨。浮世の夢の破れ笠棧敷群衆もざざめいて。西が勝つたと喚く聲フシ暫しは鳴も鎭まらず。惟喬宗岡に目くばせし。勝負はともあれ四海の主は惟喬親王。者ども出あへと呼ばはれば隱れ居たる軍兵ども。喚叫んで切つて掛れば三人も渡し合ふ。般若五郎が例の得物。土俵の柱これ幸ゑいやうんと引拔いて。當る者を幸に微塵になれと三重打ちひしぐ。地宗岡も敵はじと逃出づ

ゐを般若五郎。どうど引つしき首ゑいやつと引抜く所へ。金吾民部惟靍に縄をかけ。朝敵滅亡御代萬歳と呼ばはつて。再び遷幸まし〳〵て治まる空に出づる日の。淸く和らぐ大日本五日の雨に寶を降らし。十日の風に惡魔を拂ひ大地に金の花咲けば。海より無量の珠玉を捧げ。上一人より下萬民。福德壽命に飽き滿ちて何暗からぬ君が代の下に。住むこそ樂しけれ。

七行大字直の正本とあざむく類板世に有といへども又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直之正本にあらず故に今此本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左のごとし

竹本筑後掾　竹本　博教

山本九兵衛版（返印）

大阪高麗橋壹丁目　正本屋

山本九右衛門板

雙生隅田川

近松門左衛門作

序荊の宣王に江乙が答へ。狐虎の威を藉つて百獸を從へ。則ち其の虎を欺くの詞。一狐を以て萬世君臣の戒とし。君明かに臣直なる。御代傳へ來て七十三代。堀河の院御霊夢に因つて。山王權現二十一社の神垣に。二十一基の大鳥居御建立太敷立つる釿始。斧の柄長く神と君オロシ〱民を惠の功績なり。地吉田の少將藤原の朝臣行房。造營一式承り嫡子梅若丸。執權縣權正武國相具し。御普請場は漣や志賀の濱邊に假屋を打たせ。伊吹杣向木曾信樂の良材寄せられ。ずといふ事なく。地行房の小舅常陸の大掾百連。總奉行の宣旨を蒙り假屋に着座を列ねらる。詞權正武國御意を請け大工小屋に向ひ。釿始の御祝儀勤めませいと陳べければ。地木工修理の兩棟梁大紋の露結びあげ御假屋に一禮し。御酒散米の供へ物釿に幣を取添へて。祭文をこそ壽きけれ。夫。天闢け地凝り。伊弉諾伊弉册尊。男女夫婦の語らひをなし陰陽の道長く傳はつしより。生れます神の宮所建つる鳥居の二柱。フシ一人は立たぬ理を。人に敎の道とかや。天に日月夜晝の二柱。生あれば兩眼あり。松の二葉は常磐にて。嵐に脆きは。一本薄。されば大聖釋尊は因緣生死の二つを敎へ。儒には仁義の二柱敎へ治まる君が代は。神明和光の秋津國。一の釿に天長地久君コハリ萬歲。二の釿にて五穀豐饒民安全。三に山王御威光增益。鳥居成就御願圓滿ナホス千秋樂と。祈念畢れば幕の中數千の番匠賑ひて フシ既に。酒宴を始めける。地常陸の大掾百連大音擧げ酒宴待て〱。詞新始の今日より斯る不念にては。二十一の鳥居成就心もとなし。奉行も倶に迷惑せんより直に參内し。地此の趣奏聞し今度の奉行辭退致すと假屋を出づれば。少將驚き無骨なり大掾殿。詞心に入らぬ事あらば。これ〱の次第と內意を通ずるは傍輩の信。況や我が妻は貴公の妹。此の梅若とは正しき伯父。存じ違ひの事あらば心付け給はるべき所。地先づ行房が不念の條々承らんとせき給へば。詞チヽ婿舅なればこそ。前かどくれ〲申さぬか。今度は大事の御用家の規模。材木に念入れられよ。御邊の領分比良の嶽には大木の杉數多あり。四五月頃迄の雪嵐に揉まれ性固く木目善し。杣入れられよと申せしを聞きながし。此の材木目に見えぬか。地日裏陰山の雨晒し朽木同然。鳥居にして二年は保たず。詞先年奧州國司の時。金山貢物運上にて公家一番の金持。地下屋敷に珠玉を彫め班女といふ妾をする。松若といふ妾の子を攝家清華の御公達

も及ばぬ待遇。其の費十分の一入るれば皆遷宮も心易し。エ、詞歴々の家老ありながら私慾にばかり目が光り。諫言いふ術知らぬ。地町人に同じき主從とフシ一口にやりこむる。地武國堪へずつつと出で。詞百連公には鳥居の御奉行ばかりと存ぜしに。主人少將妾どもの事迄御奉行は御苦勞千萬。事多き中に此の材木朽木と見給ふも尤至極。此の方の領分比良の嶽の木を伐れば勝手づくには珍重さりながら。隱れなき魔所天狗の栖家往古より杣入らず。木の葉一葉一木の枝も折る時は。山荒れ人惱み必ず國の歎となる。地寶祚萬歳民安穩と勅願の鳥居。其の辨なく魔所の木を伐り祟あるまじとは凡夫の葉語合はれず。詞拙者が相役御存じの勘解由兵衞景逸は。是非比良の嶽の杉を伐らん我等は伐るまい。イヤ伐らう伐るまいと諍ひ彼が詞を用ひぬ故か。四五日病氣の由にて今日も不參。地比良の嶽の杉を伐らぬは主人少將存ぜぬ義。此の權正武國が下知奏聞なりとも言上なりとも遊ばせ。若しからずと詞ににべも輕薄もフシ荒木を伐つて投出したり。地百連何がないひたけに口動ついて見えたる所に。假に轟く地車えいやらやあの木遣の聲は礒打つ浪。人夫の足並地響して杉の大木程なく車引据ゑさせ。勘解由兵衞景逸主君少將の前に跪き。詞御奉行百連公の御指圖を重んじ。御領内比良の嶽に杣を入れ。大杉數百本伐り追々山出し。先づ今日の釿始に用ひん爲此の大木急に曳かせ候と。地申す詞に少將親子ハア　はつと恐れし興醒め顏フシ兎角の。挨拶なかりけり。詞景逸重ねて。殿の御挨拶進まぬは。粗忽に魔所の木を伐り後の祟りを思召す御顏色。少しも御氣遣ない事。勘解由兵衞がさ程の事辨なくて御家の執權と申さるべきか。地則ち比良が嶽の御神に祈誓し。祟を免し公用を勤めさせたび給へ。科あらば某一人を天狗の爪に掴割き取殺し給へと。命を拋ち御圖を取るに神納受の御圖あからせ給ひ。詞我こそ伐つたる材木ども。祟あれば我等一人天狗に掴殺さるゝまでの事。地御心安かれと尤らしき口上。元より心を合せ置きたる常陸の大掾。ハアヽ詞忠臣かな〳〵。一命を拋つて公用を大事にかくる眞心。神慮に叶ひ天狗の祟よもあるまじ。地權正武國と云ひ其の方といひ。少將殿よい家老衆持たれて仕合。梅若が生先まで賴もし〳〵と譽めあぐる。詞武國堪らず飛んで出で。譽めらるゝ人數に此の武國は除けて貰ひ申す。最前家老どもあり乍ら私慾にばかり眼光り。諫言いふ術知らずとはどの家老。返答はありとも聞くに及ばぬ。地天狗の栖む山杣人は不得手なれども。惡魔の差いた大掾殿の首筋へ杣入は我等が得物と。刀の柄に手を掛くる。詞慮外な言葉咎め刀拔かれば拔いて見よ踏み折つてくれんずと。踊出つれば行房朝臣ソレ梅若武國を制せよ。これ大掾殿。下官が家來お相手には不足ならずや。殊に

一大事の公用に私事を差加へ。叡慮を輕んずる誤。行房一人の罪。地是非御宥免と押鎭め權正も此の通。急度心得今度の公用行房に成り代り。總て汝が身に引受け成就までは我に奉公差止め。當山に逗留し宜敷經營仕れ。地景通らこれに止まり武國に力を添へよ。先づ今日新始の壽調ひ。貴公も下官も大慶これに過ぐべからず。奏聞のため一先づ歸洛と宣へば。百連もいざ御同道然らば御供と立ち給ふ。善と惡とは見別けても理非をばつけず兩方を。立つる鳥居の二柱朽ちもせぬ。御代の三重へ國廣き。人よ人フシ人の上には。品々の。行房朝臣の御臺所御心地例ならず。日毎に申の下刻より時をも變へずお姿の。二つに影の煩か。但は物の魅入かと。藥よ鍼よ御祈念のフシ數には淺るゝ神もなし。地奥家老淡路の前司兼成參上と。御寢間の障子明けければ前司御前近く畏り。詞只今御容體伺ひ奉らんと存ずる所の御召。今日の御機嫌は如何ゐ

やとぞ申しける。ヲヽ今日は少々快い顏見せて悅ばせんと。賴む事もあつての事。夜晝の心遣さぞ草臥。老人の慇懃なサア膝直せと宣へば。前司首を疊に着け。每度申す事ながら。忰淡路の七郎俊兼殿樣の御目を掠め。莫大の黃金惡狂に遣果し。縛首をも刎らるべきに。地御譜代の我等が子とて命を助け國違仰付けられしも。御臺樣の御執成御慈悲。忰が奉公一所に二人前の忠義。身を百千に碎いても御恩は報じ盡されず。詞お賴みとは勿體ない。其方が命入た事あり其所で死ね前司と。御意なされ下されかしと。フシ金柑頭を下げにけり。詞ヲヽ滿足々々いや氣遣な事でもなし。下屋敷の班女殿松若といふ子もありと聞く。地終におに目にかゝらねば朝夕ゆかしく懷しゝ。梅若公若兄弟顏を合させたし。度々殿へ申せども折を待てとて御延引。詞二人の家老は山王御普請の留守。殿も今日は御參内好い時節。其方自らが使となり。地班女殿松若共

に呼んで來て逢せてたもやと宣へば。詞前司御顏打眺めハア、賢女樣賢女樣。只今迄の御延引もしは嫉妬の御心もやと存ぜしに。地御一家和合御家長久の基すぐに參り。お二人お供仕らんとフシ悅び勇み走り行く。地御臺御機嫌斜ならなずヤイ女子ども。班女殿松若の見えたりとも隨分慇懃にもてなせ。自らが大事の客無禮があらば許さぬぞ。さりながら此の事を自らが兄大掾殿へ沙汰するな。必ず穩便々々と未だ詞も畢らぬ所へ。表使の婢女大掾樣の御見舞と申し上ぐれば御臺所。うたてや時も時のお見舞。月に叢雲と。お夜物に打凭れフシ心重げに臥し給ふ。地百連寢所に立入りなう妹。詞病氣とは聞きしかど山王の公用に取紛れ。見舞も延引病症は何。食事などは變る事ないかと地いへども只弱々と。御用多き内御見舞に及ばぬ事。物申すも氣むつかし變る事あらば此方より。歸らせ給へと宣へば。詞いやいや斯程の弱り見捨てては

歸られず。氣むつかしくば構ひ召さるな。行房は參內とな。歸りを待つて醫者などの談合々々と。奧へ通れば御臺は勇む氣も折れて フシ障子引立て臥し給ふ。妻戶に立添ふ。幼聲。御臺樣へのお取次賴みたし。誰そお取次賴まんと十二三なる少人の。花桶に草花折入れて持たるヽ花より持つ稚兒の。姿を花と言ひつべし。地局の長尾襖押明け何方よりぞと一目見て 詞なう輕忽や梅若樣。何處ぞ餘所のお使らしう。私をはめてお笑草にかはまらぬはまらぬ。地御臺樣へ申し上げ結句此方からお笑草と。立歸ればこれ〳〵女中。詞我を梅若とはいかい麁相。松若と申す者よと宣へば。まだいの朝夕お側離れぬ梅若樣見違へて宜い物か。地さう〳〵は騙されぬ何時の間に其のお惡意地覺えてござれと立歸る。袂に縋り引留め。これは迷惑とつくと見られよ。終に館へ參らねば形は見ずとも松若が名は聞いての筈。母の班女も追付これへ。地此の花桶はお慰。御臺樣へ御披露大義ながらとありければ。詞エお前が松若君かいの。扨も似たり。誰が見ても梅若樣。瓜二つに割つたやうなと喫驚して。地暫く後に梅若君何時の間にお出とも。思はず知らず顏を見て是は〳〵松若樣。詞今の間に此方へお廻りなされたか。お足許のお輕いおまめな事。地御取次申す內暫時これにといひければ。詞ヤイ長尾。麁相な我は梅若松若ではないぞや。何をおなぶりなさるヽ。たつた今見た松若樣見忘れてよい物か。あれまだ麁相な。松若はそれ詞そちらにと宣へば二度びつくり。兩方見合せ〳〵ほんにさうぢや。詞瓜を二つに割らずに矢張り丸ぐちぢやと。地呆れて奧へ入りければ。跡にも顏を見合せて フシふつと噴出すばかりなり。地扨は松若殿かいの自らこそ梅若丸。何時逢ふ事と待ち兼ねしによくぞよくぞ此方へと。手を取れば手を取替はし。詞お館に梅若殿と申す兄君あり。折を以て逢はせんと母の班女が物語。地など今迄は弟かと。お顏も見せて給はらぬ。スヱテお心強やと泣き給へば。詞懷しきは誰も變らぬもの。世界に幾億幾何萬の人あれども。此方の兄我が弟と呼び呼ばるヽは獨りづつ。地疾く逢はざりし口惜しさと互にひしと抱合ひ。連る枝の仲好げに フシ悅び泣くこそ殊勝なれ。地奧に御臺の忿の聲其の松若めどれ何處にと。襖暴はに朱の顏容花桶提げ搖ぎ出で。詞コリヤ松若とは汝が事か顏上げい。ムヽあの顏形が梅若に夫程似ずば何ぞいの。似る程胸が燃え焦がるヽ何の好みに爰へ來た。ムヽ推したり汝が母の班女は美濃の國。野上の宿の傾城の成上り。少將殿の子を產んだこれ見よがしにのさばり顏せうでな。色此の花桶の姬百合。色は美しけれども恐ろしや班女めが。まつ此の通り根性が鬼百合。手に取るも汚らはしなう怖やとかつぱと投げ。花の露吸ふ山蜂の。針ある詞に松若前後も泣叫び。お傍の女中も

聞辛く フシ呆れて。更に詞なし。地梅若丸溫和しくなう母樣。詞松若殿とても父上のお胤私も同じ事。生さぬ仲には猶恥あり。自ら同然においとしがりと言はせも敢ずそれ程の事知るまいか。差出まい梅若默つてゐよ。障子の内には兄百連殿も御座なさるゝぞ。地松若を引摺り出せ意地張らば撲て叩け女子ども。サア此方おぢやと手を引連れ。萎るゝ梅若丸打連れて入り給へば。局の長尾立寄つて。コレ詞松若殿。あい〳〵とは申せども撲ちはせぬ。泣かずとも早う去なつしやれ。地なう日頃に似合はぬ御臺樣のお腹立。怖や〳〵と呟きてオクリ皆々〽奥へぞ入りにける。地淚絞つて松若丸。逢ひたい見たいと呼寄せたは僞。詞母樣共に欺し寄せて殺さうでな。我も吉田の少將が子おめ〳〵とは殺されまい。地汝御臺め一太刀切らんと駈出しては立戻り。母樣はなぜ遲いと待つ間もあぶな幼心。亂れ惑ふ次の間より人音して母の班女。詞松若駈寄りなう母樣。今日爰へ呼寄せ二人を殺す御臺の巧。撲て叩けと樣々惡口の概畧を。地語る子よりも聞く母の。心もくらみ逆上し物をも言はず立つつ居つ。奥を見遣りてはら〳〵淚。エヽ詞上﨟に似合はぬさもしい。本妻か妾か名こそ變れ吉田の少將殿の妻は妻。地されども立つべき人を立てるが女の道と嗜み假寢にも。館を後には フシ寢ぬわいの。詞此の度の病氣も松若を總領に立てん爲。班女が調伏咀ひ事とお上屋敷取沙汰と。聞く度の口惜しさこれ淸い凉しい心の證據。何處からなりとも見て疑を晴れ給へと。松若丸の頭髮かなぐれば痛ましや。髻際よりふつつりと髢ばかりは手に殘り。何時刈捨の春の草情なや梳れば落つる一筋も。千筋と惜しみ撫でしもの。何故に斷られうぞ何しに出家にしたからう。家に望のない證呼ばれてあつと來た心は。松若が今生に父の館御臺所や梅若も。せめて一度は見せたいと思ふ心に惹され。殺されに來た口惜しい人手頼まず死んで見しよ。詞これ松若。無念な目を見て名の恥を受けんより立派に死ね。地心得ましたと渡す刀を取るより早く引寄せ胸に差當て。サア念佛といふ聲の後の障子をさつと明け。御臺所飛んで出でまあ〳〵〳〵先づ待つてたべ方々よ。佛神三寶を證據に今日呼寄せしは。使前司に言含めし詞に露塵僞なけれども。折惡しく兄の百連來合せて。アレあの障子の彼方黑書院に高い聲も聞ゆる。松若是へと聞きしより嬉しやと思ふ顔色を。地意地惡の兄に見咎められねすり詞の言譯に。態と苦口惡口を憐なや稚氣に誠と告げしか フシ恥しや。地誠ある海山の志生を替へても忘れはせじ。二人の心落付け長う疑晴るゝ爲。心の祕密を打明ける。詞とつくと聞いて下されと聲潛め。そもじの腹より悅びしは松若ばかりと思うてか。あの梅若も此方の産んだ子ぢやぞや。何つがもない。悅は一度の外身に覺は

無いもの。さればいの。十二年以前二月七日。難産の苦。身に覚はあるまい。産れたは雙兒も孖子二人ながら揃うて男の子。エヽチヽ肝が潰るゝ筈。其の折構に知らせては難産の後治らぬ。自ら狂はんかと一人は匿して我が手に取り、梅若と名を付け後まで雙子を隠さん爲。傭より養子と沙汰し置き此の事を知つたるは殿と自ら。扨は家老の權正。外には知らせず此の年月産んだる子より大切に。育て上げたる梅若丸一腹一種の松若、そもじを佑み疎み憎む程ならば。腹に宿した梅若を。フシそもいとしかるべきか。車の兩輪兩翼月日と頼む二人の子。自ら息の通はん内松若の出家思もよらず。今は恨を晴れ給へと心の雙子底意なく。明かし給へば班女の前御臺様のお情にて。また子を一人悦びし忝やと手を合せ。伏拜む手に縋付き。忝いは互の事お恨は晴らぬか。アヽ冥加ない何のいのと。聲を忍べば泣くまいと。抑ゆれば猶

流るゝ フシ涙が袖拭ひけり。アレ此の奥は長尾が局 暫くあれに待ち給へ。兒百連を首尾よく戻し何事も。心靜にいざ案内と打連れて明くる障子の一重だに。隔て七つの時計の聲りん／＼。とこそ三重 暮近く。行房御所より退出あり。廊下傳の植込に黒雲一叢どうどつと落來る松風の。梢に怪しき物こそ見ゆれ。下郎なれどもお實の軍介力量者。殿御覧なされたか。見たか軍介。嘴長く眼は鏡翼は蓋。扨凄じい鳥。否々鳥でない。天狗々々といふ内にひらりと飛んで火炎を吹き。御臺所の寝殿所に。一文字に フシ羽打入つてけり。扨は御臺様を此の天狗めが煩はす。ちと風變り此方から擒殺して與れんずと。躍出づるをやれ待て軍介。魔障の通力凡夫には叶はず。見屆くるからは黒雲なり。必す家中沙汰するな。勝手へ立てと宣へば。ニヽ天狗捕へ賴もしの銀吐出させずもの。殘多いと フシ呟き部屋へぞ入りにける。奥に女中の

聲々なう恐ろしや御臺様。又二人におなりなされた。怖や／＼と逃廻る。扨こそと歩猶そろ／＼と窺ひ寄り。障子をさつと、情れ馴したる御臺は二人。なう恥しい病を受け今生の恥曝しと。口説けば口説き泣けば泣き。はつと打伏す聲までも。何れを影とも實とも フシ擬ひ。惘れて在せしが。やうやう一人が顔振上げ アレあの如く我が影の僞せ者が。毎日七つ下刻より。附纏うて苦しむる追退けてたべ。我が夫と。いへば同じく顔振上げ 。アレあの如く我が影の僞せ者が。毎日七つ下刻より。附纏うて苦しむる追退けてたべ我が夫。いや追退けるとは其方の事。いや追退けるとは其方の事。アヽ怖や退いてくれ。怖や退いてくれ。苦し／＼と泣叫ぶ。顔も身體も聲色も、二つ鏡に見分けはすぬ形も影の病とも、フシ療治に困り入り給ふ。恨めしや少將様。十年に餘る妹背の中見離ふとは情ない。眼の前の化を殺す事は叶はぬか。苦しいわい

のと鎗付けば尤々見所あり。詞あれこそ魔障と飛掛り。小腕取つて捻付ける。なう悲しや少將樣。十年に餘る妹背の中。見擬ふとは フシ情ない。詞いやいふな〳〵。最前より汝先に詞を出さす。後について口眞似するは曲者。行房が見定しと。地御佩刀引拔いて氣息の束ぐつとさし。刳るに連れて手足も弱り。うんと一聲此の世の限り フシ遂にはかなく息絶えたり。詞少將は勇んで物怪を斬留たり。人は無きかと召さるゝ聲。地班女親子淡路の前司。我も〳〵と駈け着くる。御臺の惱天狗の障碍。ありし次第を語りも果てぬに。詞御臺所突立上りから〳〵と笑ひ。愚なり行房。斬つたるこそ汝が女房。我こそ比良の大天狗。住む山の木を伐つたる根猶盡きずと。異形と變じ車輪の翼。地松若丸を搔摑み雲井を。フシ翥ちてぞ飛去りける。地悲しやあれ留めてたべと。斑女は正體泣叫び淡路の前司も途方に暮れ。行房怒の目に涙虚空を睨んでわつと泣き。死骸を見てはわつと泣き。踊上り飛上り無念〳〵とばかりにてかつぱと伏して。泣き給ふ。地老功の前司が分別。詞これ天狗よりむつかしき百連奴にあり。只今の御對顏破れの端。一寸延びれば思案もあり。地斑女御前御同道。サア〳〵お下屋敷へ後はこの爺請取る〳〵。地尤々いざ班女來れと裏の小門より。フシ北白河へと忍ばるゝ。詞斬つた〳〵といふ聲百連聞付け走出で。ヤア斬つたとは我が妹。日頃の仕方思當る斬手は少將。行房出でよとすく〳〵と立つて怒をなす。イヤ主人は未だ退出なし。御臺所の影の病。御惱みを助けんと。一心に存じ込み天狗の所爲に化され。本體を前司めが手に掛けし狼狽者。詮ずる所主殺首取つて恨晴れ給へと。地指添引拔き鳩尾に突立て。南無阿彌陀佛の一息を。引きも返さぬ梓弓フシ浮世の弦は切れ果てたり。地百連ちつとも合點せず。詞前司が死骸をどうと蹴飛ばし。ヤイすつぱの皮め。談合づくの徒腹天狗のだし喰はぬ百連。身が供の家來ども。此の前司踏碎いても少將班女を搜し出せ。地承ると眞先に仁王の樣な猪の熊八郎。其の外武人踏込み〳〵板敷をこぼ放し フシ建具を碎いて搜しける地長屋に臥したる軍介はつ込む一腰鐶の弦。ぴんと反つたる髭八文字に搖ぎ出で。詞お供には草履取。御留守の時には當分出來合の大將軍介。泥臑一々引拔かんと駈込む間も無く。大將百連梅若引つ立て駈出づる。腕捻上げてこれ何處へ。何處へとは少將が出る迄の人質。ムヽ此の質受けた。どつこいと捥放し。百面百連大慾面と。腕がらみに引擔いでどうと投付け。しつかと踏へ既に柄に手を懸くる。猪の熊八郎駈付け。軍介が片足摑んで撥退け。主を引立てサアお退き〳〵。ヲヽぬからぬ〳〵軍介殺せ猪の熊と。フシ言捨ててこそ逃げにけれ。地猪の熊は軍介に汀優りの大男。詞うぬ草履取に似合うた此の臑骨蹴けと。

ヤレ景逸上分別に氣を奪はれ落馬も覺えず。地成程掛繪遣すべし盗み取るは汝が力くどうは頼まぬ。コリヤ手を合すおかけ〳〵。アレ向ふから人が來る見附けられては互の大事。歸れ景逸頼み存ずる景逸殿。家來參れと馬引寄せひらりと乘れば景逸も。上分別の圖に乘つて分れ。分れに三重〽此の外にフシ何樂みを。白河の。所も吉田の行房卿四季を一目の。下館庭に自然の。山河のフシ景色もえやは。岩疊む。千尺の瀧津白糸の結ぼれ。心解き流す花月雪の其の外に色と酒との懸造。巧みに巧み物好きに。フシ飽かせ建てたる軒の端。地斑女と叟に二人寝の閨に扇の。風入らず夏なき宿と。フシ住みなせり。地下郎なれども御氣に入りの軍介。奥の出入の玉箒庭の隅々掃清め。花を摘んで投入に心利きたる宮仕へ。芙蓉殿上中間にも茶道にもなり。お小姓にも。フシ草履取には惜しかりし。池の蓮の。初開き。水に錦を織り

榮えて。スヱテたゝまくをしき花盛。朝來の白露香を促して益々遠く。行房御夫婦立出で給ひ。詞ヤイ軍介。汝が綺麗好き言付けねども掃除氣味よし。此の投入も汝よな。沒義道な所一興々々。用あらば呼ぶべきに立つて憩めと宣ふ折節。地梅若丸珠玉を鏤めたる懸物箱。勘解由兵衛に持たせて立歸り。詞常陸の大掾百連より。鯉の懸物請取り歸り候と差上げ給へば。行房取つて押戴き先御室死去の時より。遺恨を含み仲悪しき百連。大方にては渡すまじと思ひしに事故なく請取つて歸る事。天子の御威光若が手柄部屋へ入つて休息あれ。地大儀々々と淺からず悦び奥にすゝめやり。詞班女も此の繪を遂に見るまじ。梅若が供して首尾よく歸りし褒美の爲。地景逸にも見すべしと箱押開き手づから床に懸け給へば。各立寄り拜見ある。ハア是は誠の鯉。寫繪とはさら〳〵思はれずフシ是は〳〵と感じける地勘解由兵衛とつくと見て。詞かばかりの御

重寶批言は畏多けれども。此の鯉に眼なきは不審にこそと申し上ぐる。ヲゝ好い不審詞のないが繪の高名。いうて聞かせんとつくと聞け。唐土漢の武帝の時昆明池といふ池に朝夕魚を釣る人あり。或る時鯉を釣り得しに絲斷れて魚は波に入り。命を免れ去つたれども針や鉤に殘りけん。武帝の夢に一人の老翁我が咽に釣鈎あり。苦む事堪へ難し取つてたべと歎きしかば。帝手づから針を取り苦みを助け給ひしに。珠一雙を奉り我昆明池に住む者なり。君が寶祚を守らんと其の儘鯉の形となり。去ると夢見し枕の上夜光の珠のあり〳〵たり。武帝其の鯉の有樣を自ら書き給ひしに。未だ眼を點れざる内忽ち尾鰭動きしかば。詞眼を點れなば繪絹を放れ必ず水に入るべしと。地諸き筆を留め給ひし其の鯉は此の繪にて。代代の天子に傳はれども遂に眼を點れられず。詞又日本へ渡りしは。元正天皇の靈龜年中我が先祖。下道の眞備といひし人安部の

仲麿に伴つて入唐し。是を傳へ歸朝して長く 地 日本の フシ 寶となる。其の故を以て三年宛百連が家と我が家。替る〳〵預つて是を守護する事先祖末代の恒例。吉田家の規模是に過ぎず。重ねては叶はぬ事立寄つて好く拜見せよ。ヤア 詞 長物語氣鬱々々。ナウ班女蓮の盛おれ見られよ。楊貴妃が行水姿大液の芙蓉に勝りしと。唐人の自慢我もそもじと同船して。地 班女が色に氣壓され芙蓉の花の色なしと。唐土迄も蓮を引かせんいざ船遊山と手を取れば。班女品なく振放し。詞 御臺樣の御最期百日になるならず。奧樣顔も否ならず殊更今日は風烈し。海の樣な古い池危や〳〵いらぬもの。地 いで女子どもに申し付け蓮の初咲手折らせて。御臺樣の位牌へと立たんとするを引止め。詞 愚痴かな〳〵。死んだ女に遠慮とはなんの事。地 早速立つて舟言付けよ。お身を乘せて人交ぜず行房が舟押さば。八幡どうも堪るまい。否とはいはせぬ來り

給へと乘らぬ心を打乘せて オクリ 神代も聞かぬ水馴棹 フシ 錦を舟や。渡るらん。實に面白の折柄や春の花皆衰へて。野山火を踏む夏の日に淸江。三面の水を湛へ 小オクリ 暑さ。涼してさんさ。吹くやな松の風。樣りに吹いて松風よ。主ある花な。ア散らすなよ夏衣。薄き契は忌はしや。只蓮葉の心もて久しかれ〳〵蓮の花刈れ。刈取らば波さぬ。浪に袖濡れて浮名や水に。フシ さらすらん。詞 いざ〳〵蓮刈らうよ。地 中將姫の古は。法の蓮の絲長く。五色に染めし曼陀羅に。本尊かけたる時鳥の一聲は。藍より出で〳〵藍に濃く泥より出でて色染めぬ。蓮は花の君が代に。こと。ふきていざや織るべし。フシ 惠遠法師が其の昔。廬山に結ぶ。交りは白き蓮の露の玉。素地 濁に染まぬ心もて胸の蓮の影照らす。後の世かけて フシ 織るべし。これなう爰に鯉鮒が。蓮の花笠 歌 しやんと着て踊る態がしほらし。石龜も地踏鞴。鰻鯰は不形なものよ。

是を來て見よかしのえ フシ 朝夕馴れし。風景も。替る雲水遠近の。蓮尋ねて岸廻り舟を心に。任せらる。地 百連に言合せし勸解由兵衞。天の與ふる時節此の際に鯉の。絡み盗み取り。百連公に奉らば百連は鶴の悅び。少將は蟷螂腹立ち其の布袋腹割抜いてやらんものと。心に呟き息を詰め氣を配り。木の葉に風の音するも。人かと心奧の間の床に怖々のしあがり。半分巻いたる掛物の鯉より躍る心魂。びつくり見れば南無三寶。梅若君。はつとばかりに飛退り フシ 掛物詠めて紛らせり。詞 心付かねば梅若君。詞 其方も懸物を見におじやつたのと。地 詞の中に分別し。詞 さればされば重ねて拜むは稀の事。見事とも何とも言句に及ばず。凡筆ならぬ所ありさり乍ら。眼を點ゑれば繪絹を放れ忽ち水に働くとは。餘り仰山な鹽らしい言傳へ。地 物は試し日頃遊ばす繪の手際。一筆眼を點れ給ひ唐土日本。二千年此の方の實否を糺し給へかしと勸むれば。詞

ア、あの人は勿體ない疑。地何の僞ある物ぞよし叉嘘にしや。糺して何の德がある。詞いやさうでござらぬ。何時知らぬ敷諚にて。眼を點れさせ叡覽ある時。此の鯉が働かずば誠の繪は失ひ。質物に替へたりとお咎めの時は。吉田のお家の大事一寸墨入れ試み給へと。地勧むる惡事は繪に瑕付け。親子自滅の　フシ詞を飾りてたらしける。詞それもさうなれど此の鯉が若し水へ入り。再び元へ歸らずばなう怖や此方や否々と宣へば。地よし水に入ればとて元が繪に畫いたもの。餘所の池へ行くまじ高が此の泉水、後は拙者が胸に〳〵ひらさら一筆遊ばせと。床の硯の墨潤流し退引させぬ入性根。幼心に尤と何の頑是も情なや。硯引寄せ筆染めて爰が眼と點墨の。寫ると齊しく黃金の鱗金の三十六鱗々逆立ち尾先に繪絹を叩き。搖ぎ放れて庭の池水四方へはつと　フシ潑散してぞ飛入りける。地梅若君色を變へそれ見やつたの。詞サア何とせんひよんな事した景迺。地頼む〳〵と泣けどもせん方波の底あれ〳〵居るわいの。父のお耳へ入らぬ間にちやつと捕へてたもいなう。詞エヽ忙しない。急にはならぬ御前の耳に入つたならば常々の短氣。御手討は知れた事。事濟む迄は何國へなりとも御身を隱し。地我等が使待ち給へあら恐ろしやと威されて。日頃さもなき若君の返す詞も涙に暮れ。悄々として出で給ふ。是を館の見納めとは　フシ後にぞ思ひ知られたる。地してやつたりと大聲上げ。詞懸繪の鯉の脫け出で行方知れず。下り合へ出會へと呼ばはれば。地上下驚き馳集まる行房御覽じ南無三寶。何者の腕てんがう眼を入れてかくはしつるぞ。天子の逆鱗異國迄の恥辱家の破滅此の時。エヽしなしたり口惜しやと。惘れ果てさせ給ふ所へ。婢の女遽しく。詞疎しや梅若樣の行方なく。お部屋にありし書置と。地いふより母上取手も遲く押開き。奧迄讀みも終らずヤレ梅若を留めてくれ。人に瞞され懸繪の鯉に目を點れしは若が所業。父の叱の恐ろしく館を出づると書いたるぞや。何地へ放ち遣るべきと。馳出で給ふを行房引止め。詞眼を開け班女。天下の大事我が家の破滅を知らぬか。此の懸繪元へ戻らねば生中梅若尋ねんより。此の少將ともに生きて益もなし。地エヽ何とせんこれまでと御佩刀に手を掛け給へば。軍介透さず飛掛り御手を押へ　詞御生害は詮の詰鯉の行方は此の池〳〵。水かへ淺へ捕ゆればとて何の事。コレ家老殿何をうつかりと。班女様にも勢付けて此の間に梅若君。尋ねうとは思はずか。エヽなまぬるい權正殿留守なれば一つも埒がないと。地氣をもめば景迺何がな立ち度い折に幸ひ。畏つたと足早に　フシ御前を立つて入りにける。地時に池水逆波立ち。現れ鰭振る鯉の形あれ〳〵一摑にして見せ申さん。詞帶解く間もあら面倒やと諸肌脫いで腰刀。背にくるりと廻ればお庭も程遠し。御免と言捨て一文

字に池へざんぶと飛入つたり。地 水に納の矢の如く馳廻れば追廻し近寄る透間の水放れ。ひらりと組んで ツシ 乗つたりけり。地 組まれて怒の鱗を立て拂ふ尾先に飛立てられ。コハリ 散るは水玉波の花玉藻水草を掻分けて拔手浮足跪みなく。泳ぎ上ればさらさらく流るゝ水の瀬に遊び。底を潜つてそことなく沈めば沈み浮けば浮き。鯉は尾鰭の力を振り此方は生死の境の水。ナホス 地 變を三途の川波と氣力を。拉べて 三重へ 挑み合ふ。地 龍は一寸にして昇天の氣を含み。鯉魚は凡にして龍に化するの勢あり況や古今一筆の鯉に與へし瀧の水。逆巻き落つるを事ともせず渦巻き昇る有様は。和國に鳴きし瀧津波。八十丈の龍門を フシ 昇りし鯉も斯くやらん。地 軍介きつと見。詞 言はれぬ鯉殿瀧昇り何國までも御供と。地 敵々たる艱難辛ひに踏縮むれば取所なく。葛を摑めば踏辷り。落ちては上り上つては。遁さぬ濟らぬと登瀧り ノシ 募つて巖に這上る忠義の手掛り。地 足立に何なく巖に這上り。鯉の顋を引摑み一息ほつと吐いだるは。フシ 前代未聞の働なり。地 行房御機嫌斜ならず眼を拔けば繪絹に戻ると口傳せり。軍介眼を潰せくと宣ふ所へ勘解由兵衛拔刀して逸散に駈來り。少將の胸ぐら取つて刀を胸許につき當て。これうつそり。常陸の大掾百連公に頼まれお身を殺し。吉田の家配分の契約。其の鯉の眼を突くと少將がほてつ腹突抜くぞと。地 聲を掛くれば軍介も南無三寶と控へたり。少將聲を上げエヽ無念や運盡き果て。蟲のやうなる人畜めが。計略に乗せられたるも天狗の障碍。よし我は死するとも鯉を二度繪絹に戻し帝へ捧げ。吉田の家さへ立てば本望。我には構はず鯉の眼を抉れく。詞 刳つたら刳るぞ。構はず刳れく。地 軍介と惜まぬ命は天下の忠臣。刳らぬも一家の忠臣、迷ふ心を一途に極め。鑿をぐつと突通せば。鯉は忽ち消え失せて フシ 元の繪絹に名筆の フシ 妙不思議ともも言ひつべし。地 エヽ死にたうて死ぬるたわけ者と。主人を引伏せ勿體なくも胸許を刺通しく。サア本望は遂げたり懸物は此方の物と。床にかゝつて巻き取らんとする所へ。谷を傳ひ軍介息を切つて駈付け。景逸が髻を摑んでうんと蹴倒し。詞 サアしてやつた。主人の手向に胸板を突かうか。鯉の眼へ眼を刳らうか。地 エヽよい氣味とせちかふ所へ。百連が加勢の雜人一群に成つて フシ 馳せ集る。詞 ヤア性懲もなきお客達。地 今度の馳走の献立見よと景逸を水の深みへ擲り込み。群りかゝるを事ともせず。取つては池へ投込みく人筏。めたたき鱠人の鮓。身體は水に冷し物。手際は古今の功の物敏は蝶味噌おつ立て汁。吉田の家をあへ物には入らざる世話の燒物口。不豊御無用くと睨む眼の壺皿より。無念の涙はらくく。はなからの子は生別れ。歸らぬ水行くも水。同じ派を二筋に暇申して若君の行方を。尋ね慕ひ行く。

第三

別を天外に求むれば蜀山の雲遠に隔たり。魂を地下に尋ぬれば巴陵の水轉流れて止らぬ。世を其の昔に返さんと行房の執權。顯權正武國。一通の訴状を懐中し。班女御前を乘物に忍ばせ。大理の廳の御門の邊に佇らひ。訴訟の便を伺ひし。忠義の程こそ淺からね。權中納言大江の匡房檢非違使の別當にて。衣冠繕ひ參内の前驅の前に跪き。我等は故吉田の少將行房が陪臣。權正武國と申す者。主人卒去に就き家督絶に及ぶ歎き恐れ入つたる御訴訟ながら。二人の男子在所知れ難しとは申せども。勅勘の身にもあらず父母の勘當にも候はねば。雲水を分けても尋ね出し申すべし。梅若か松若か連歸る迄。主人の嫡に家督續がせ申し度き願の趣。訴状宜しく御沙汰あつて。上廣大の御憐愍幾重にも仰ぎ奉る。則ち主人の孀女をもあれに相具し候と。沓の鼻に額をつけ合掌。なさぬばかりなり。匡房卿打頷き。さもあるべき願何とて延引しつるぞ。常陸の大掾百連、行房の家督を頻に望み、毎日々々の訴訟。幸ひ今日は評定日。百連に早參内と聞く。汝等も記錄所に召出し。對決の議もあるべし。慈悲を表の御仁政とはいひながら理を非に掠むる依怙贔屓は更になし。御前にてお尋ねの事申し上ぐるとも。少しも僞なく正直を元とする事。利運の種ともなるべしと。詞ゆゝしき大理の官。兼備へたる文武の兩輪御車寄にぞ入り給ふ。あれ聞き給へ油斷のならぬ伯父大掾の不道者。違つてお家の名跡望む由。今日の對決浮くか沈むか一生一度の瀬戸。只お氣強うと乘物より。助け下せば班女の前。いや終に見ねども。御前と聞けば慄然して恐ろしい。眼の前で叩かれつ縛らるゝ者もありげなり。それを見たらば眼が暈はう。怖や厭や身が顫ふと聲も戰く折節に。決斷所の小門より召使の下番走り出で。吉田の少將後家班女。同じく武國お召し。出ませい〳〵と呼ばはる聲の調子迄。耳にこたへてハア、とばかり消入る樣に見えければ。ニ、何とてお心後れし、假令相手が富權門の生れ替りでも。歪んだ物は歪んで映る。上は鏡正直の道理を以て、伯父大掾を牢へ入れうと思召せと、詞に勢をつくる中少將後家何故遲なはる。早う出ませい〳〵と。お召し重なる白洲の上。素足は未だ踏みも見ぬ。中門に刀拔き置き御前へ。こそは三重へ出でにけり。實に盛なる甘棠翦る事勿れと慕ひし聖代の政事を移され。記錄所の簾中に出御あれば。玉座に續いて大理庭上には刑部省の官人等。大江の匡房三公九卿八座七辨席を連ね。鐵鞭提げ縛繩手繰つて控へしは。閻魔の前の獄卒に角の生えざるばかりなり。未明より詰掛けし常陸の大掾伸上り。ヤイ横道者。何顏提げて罷出た。吉田の少將には外に縁者

川田隅生

ソ内こそ危けれ。(地)有職の公卿殿上人中原清原の學者。家々の名記古記を尋ねても。これぞといふべき例もなく。大掾生き〳〵いきり出し武國主從氣を落し。人心地もなき所に。(詞)大理卿大江の匡房匆取直し。遠く書を尋ねる迄もなく目前日本紀に出て誰も存じの先例數多あり。(地)先づ十五代の帝神功皇后仲哀天皇の御后。(詞)仲哀天皇崩御の後大日本の家督を繼ぎ。異國まで從へ給ふこれ一つ。三十六代皇極天皇これ二つ四十一代持統天皇は天武天皇の御后。十善の御家督を繼ぎ給ふ。君は一天四海の水臣下は潦の溜水。(地)四海を治め給ふからは溜水は其の身相應の家督。君を以て臣下の先例とするに何の難かあるべき。吉田の少將が家督後家に仰付けらるゝ。相續致せと仰せも果てぬ詞の中ハア。ハア有難しと平伏し三拜手の舞ひ足の踏みども知らず。大掾憚らず。(詞)アヽ御詮議が足らぬ〳〵。彼の女はもと美濃の國野上の宿の傾

城。乞食非人の娘も知れず。萬人に枕を並べ身の穢れたる女。勿體なくも神功皇后持統天皇の例を引き。公家の家督とは瓢簞に釣鐘。かけ組まぬ御評定と。(地)言へども諸卿聞かぬ顔是々武國。勅諚忝しと存じ早々、連れて立ちませい。あつと悦びいざお立ち。サアお立ちと引立つても南無三寶。(地)婦人の性の纖弱きに。今朝より樣々心を揉み。結ほれ解けぬ胸の中。はつと悦びはつと騒ぎ氣は逆上り亂れ狂ひ。寢覺の如く恍惚と。きよろ〳〵眼なる顔打上げ。(詞)ワハヽハヽ。〳〵。何が可笑しい〳〵。ホヽホヽ。〳〵あれ〳〵〳〵。それ〳〵〳〵。最愛やの。何時の間に誰がしたぞ。其の形見や。手に百八の數珠持つて。雪踏片足下駄片足。(詞)柏木の衛門は。都の内にて鞠ぶ蹴るアリイ〳〵。源氏は明石の鯛を釣る。山姥は山路にて。薪を樵らせ給ひける。(歌)知れぬは浮世ぢやナア。(詞)面白いぞ。(地)武國も惘れ果て。あさましや狂氣なされ

しな。せめて内裏の御門を出で道にてもおな事か。一大事の所を此の體は何事ぞ。よつくお家の御運の盡。エヽ口惜しし是非もなし。これ正體ない氣を取直し。妾立ち給へと引立つれば。(詞)何ぢや妾を立て。エイ推參な。太夫を知らぬか。野上の宿で全盛の太夫。海道一の振手。新造など連したとは。ちつと違はう。彼の簾の内なは誰樣ぢやえ。知つて居る〳〵。先刻に聞いた王樣ぢやげな。エヽ憎う。何故隱れさんす。其奥な禰宜樂頼む。首尾して連れまして來て下んせ。いざ往こ。さあ往こ。明日は廓の祭ぢや。祭は紋日。(歌)紋日々々を算へ〳〵て野上通を悋氣せまいと其所で鉦打て。鉦を打たいの。くわし〳〵と打たいの。鐘は曉。七つ起して別を送る。兎が振袖惜しや記念の袱紗落せし。あたら物を。中ちつくり茶巾程。紅葉に括して。端端に唐梅唐松唐花唐草。唐獅子を縫はせた。忘形見の我が子落した。花も紅葉も散

らば散れ〳〵。落せし我が子のあるならは。田舍も。ナホス住みよかるらん。詞其方へは行かぬか。其處にはゐぬか。あれあれ〳〵。それ〳〵〳〵〳〵地それ其處に。子供返せとかつぱと伏して。泣き狂ふ。地見る目いぶせく御簾颯と下るれば。諸卿もはらりと立ち給ふ大掾悦び。大内の汚れそれ打殺せといふ聲にフシ棒よ杖よと犇ひたり。地武國共に狂氣の如く取付けば打拂ひ縋付けば逆廻り。詞何狂女を殺せとや。殺してよくばそれも殺さんこれも殺さん。地我が子は何國に隱せしぞ。尋ねて行かん住家は如何に。家もよしなし宿もよしなしハヅミ奥の深山のその奥山の。地虎狼や鬼一口。雲井の餘所にとんどろとゞろとゞろ〳〵と鳴神も。分けて捜ねん天の川の星の數々戀しや子供。花の容顏秋待ち敢へず。ちり。〳〵。ちり〳〵になれば。母は冬野の末枯薄。夫故亂れ子故に狂ふ庭の。荻原野邊の菊。野分に騷ぐ狂咲狂ひ出づる。ぞ三重へ外國やフシ隅田河原の邊に近き埴生住。夫婦も本は都鳥あるかなきかの迫世帶。妻は手爪の賃仕事。スエテ小櫛取る間もなけれども。浮世の垢の落兼ねて。本フシ乘立ちもせぬ世渡の。憂身にとんと筆捨てヽオクリ針手。綴りの色紙短册歌人に似たるフシ譬草。地夫は詞を巧にしてよき衣着たる商人の。あるが中にも人商人猿島の惣太とて。貧しき家にも遙長刀鐵研立て。鐵の棒堅木の棒竹篦割付。鼻捻其の外子供の責道具ひつしと列べ。手下の者に働かせ其の身は庵にのさばり臥し。奥坂東の元締して。秋田酒田蝦夷八丈迄賣つつ買うつの人商賣。其の昔丹後の國山椒太夫が手細とて。蕃椒の惣太とフシ近鄰異名を付けにけり。地惣太枕を擡け。詞ナウ女房今日は三月十五日。上總浦の船日なれど。今朝から如何な一人も買ひに來ず。何國の誰が手柄とて鼻歪一疋も連れても來ぬ。今日の樣な商日に帳面が黑まねば。心持が臭まぬ。仕事止めて二三里ぶら〳〵廻つて。男の子でも女の子でも勾引して連れて來て。地今日の帳面祝うてたもと。いへどもふいと顏ふつて何の答もせざりしが。詞なう惣太殿人界の果報は品々。昨の落穗を拾うても暮せば暮す世の中。幾人といふ數もない人の子に憂目を見せ。身に應ぜぬ錢金の手に入りは入りながら。其の驗もない此の貧苦其の報とは思はずか。地あつたらお身を窶らし。成下るも皆我故といとしほく。鏡一つ手に取らず裸放す間もなく。足搔けども未だ此の上の苦は厭はぬ。とても長者にも成るまいならそろ〳〵營業變へる樣に。思案して下されと打萎るれば。アヽ詞知れた事をくど〳〵と誰がこれを好む物ぞ。よい〳〵昨日八丈へ賣つてやつた都者の色白め。彼奴が先に居付けば金十兩取る筈。地かたまつた金取つて殘る奴等は捨賣にしてしまふ覺悟。お内儀苦に持ち給ふなと戯るヽ所に。配頭の左次太夫

七八歳の坊主子に。猿轡嚙せ手を引立て。詞これ〳〵旦那殿。病氣の無さゝうな堅い坊主め。伯母の所へ行くといふ。此の子が伯母知つてぢやげな。地逢はせてやつて下されといへば惣太合點し。詞坊主よう來たな伯母はあれぢや。地あれ伯母々々と指せば女房を見て怪顚顔。頭振つて逃出づる。ませた餓鬼めと拳三つ四つ喰はせ睨み付けたる有樣は。鬼より増しの猿轡　スヱテ泣けども聲の出ではこそ涙ぞ。顔を洗ひける。詞さすが配頭よう釣るぞ。此の小坊主五百で置いて往きや。心に合はずと又何ぞで入合せてやらう。サ手を拍たうか。イヤそれならば今日上總船が出るにつき。十ばかり十一二の眉目のよい娘の子。二人がらり一貫づつに相場が極る。それでは我等もちと儲ける。何と遣る子供はござるまいかといひければ。幸々話したいものあり六つよ水瓜よ此處へ出よ。地あいと應へて何國の誰か愛し可愛いと撫子の。花も

凋める面窶れ　フシ眞面目顔にて立出づる。詞又吠えたな。これ何奴もよい生れつき。此の顔立で大磯小磯か江口神崎へも遣らるれば。百貫道具なれども。色里へ向ぬ大い疵物。臍が出臍大抵の事でなく。腹の上に一番水瓜置いた如く。こちらは左の手が六つ指。其の代に右の手が三本十に足らずの缺皿。どうも客の間に合はぬが合點か。ハテ見付さへよければ三つ足でも徳利子でも構はぬ。地サアさらり〳〵と手を拍つて女郎ども來いと引立てられ。申し御内儀樣さらば忝うござんすと。泣いて出づれば女房も見る眼に涙いぢらしく。可愛やこれを何が忝い。坊此方おじやと手を引いてオクリ納戸の中にぞ入りにける。地惣太獨笑して商拍子が直つて來た。此の勢には彼の都の色白童も落付いたは定の物。今に十兩握つて其の十兩をムヽかうと。かうと面白しと胸の算盤高合せて　フシ悦ぶ最中。地撥罠の彌藏若君の小腕摑み。家の内に投

込み。詞惣太殿此奴を八丈へ遣れば。此方も十兩我とても只は居ず。何も話計と此の頃骨折口叩き。さあといふ段になり腹が痛む背が痛いと意地張り。間がな隙がな逆仕度蓼酢でも行かぬ餓鬼。これ謎に返した金濟さいで仕合。地徒骨折らせた悴めと　フシ睨み付けてぞ歸りける。地惣太鑠のやうなる眼を射き乙に入つたる胴聲。詞蟲程な樣で親程な者に。息筋張らせる不敵者。惡う育たぬ奴とは見た。王の子でも神の子でも。百里二百里栄耀に狼狽歩うか。親許が分散か追放かろくな事で有るまい。頤養ふ有難しと鬼が島でも龍宮でも。遣る所へ何故往せぬ。地返事せい丁稚めと怒る聲は噛付く如く。臍に響きて梅若君多くの人に敬はれ。親にも主にも一生に荒い詞も言はれぬ身の命も縮める心地にて。八丈とやらんは日本の地を離れ。人の通はぬ島と聞く。せめて親達と同じ日本の地の内にと。手を合せ給へば。詞吐すな〳〵然らば

此の頃足利の辻放下が方へ何故往せぬ。足利は日本の地ではないか。地なう足利は是よりもまだ奥と聞く。一里でも半里でも都の方へやつて下され。死ぬるとも親の方へ向うて死に度い旦那様。御恩は更々忘れまじ御慈悲〳〵と聲を上げ佛を頼むばかりにて。涙を共に フシ手を摩れば珠貫く。數珠の如くなり。詞エヽ口で叱つてはいかぬ奴。小刀針で養生し。地ど性骨直さんと。九寸五分するりと抜いてずつと突出し。詞太股を突かうかハアヽ〳〵。尻臀を突かうかハアヽ〳〵。動くな。アイ。動くな動いたらほてつ腹突くぞ。アイ〳〵〳〵。眼珠を刳うか。脇腹を突かうかと地ちりり〳〵と附廻せば。身を冷し身を縮め涙も出でず顫ひ上り〳〵。逆けても逆さん透間も見せず。詞エヽ餘り酷い旦那殿殺さばいつそ一思ひ。地詫言して下されなう内儀様と叫ぶ聲。女房駈出でなう暫しや子供折檻も程がある。疵付いて誰が損と小刀を捻ぢて引つたくれば。掛けたる鼻捻提げ肩腰分かず力に任せ。疊掛け〳〵打つや空蟬の羽よりも薄き御肌。骨も折れ筋も切るゝ思にて。身を開けば足を打ち手を揚ぐれば臂を打ち。悲しむ聲も出でざれば女房打つ手に縋りつき。詞夫婦が命繫ぐも子供の蔭。煩はば醫者に醫者も掛くべきに。地殺して報があるまいかと鼻捻捥取り捨てたりけり。エヽ詞愚痴な事。こいつが此方の手へ入るも過去の約束。賣つて食ふ我等も過去の約束。八丈が島へ參らうと吐す迄叩くと。地堅木の素棒押取りのべ棒もしわ〳〵しわるばかり。聲を掛けて續け打ち棒は強く身は弱く。肋の急所にはつたと受け。うんとばかりに手足を縮め フシ色も變つて息絶えたり。地ハア悲しや可愛や死んだと女房。抱起し手足を擦り胸を合せて看病す。惣太もあきれ。フシ棒投げ。捨て詞なし。やう〳〵口に。氣付を含め水吹入れて。詞これ息がする最愛や痛いか。苦しいか。何處を指して行く人ぞ。地望あらば何なりとも明暮酷い辛い見て。ぶち叩かるゝ人よりも側で見る目は猶辛い。必ず死んでたもるなと スエテ泣き口說き勞れば。地涙を浮め手を合せ。息疾し氣なる聲細く詞我は都北白河殿ならぬものゝ子。父の昔の知遇を尋ね。一度奥州へとは思へども。身節碎け次第々々に胸苦しく。只今死ぬるに何の望み。地肌の守は生れし時六日だれの産髪。胎内よりの産髪は父母の生血にて。此の上の守はなしと。今日まで身を離さずお情無體と思召し。守一緒に我が體を土に埋み。墳に標をフシ植ゑてたべ。身命は朽果つるとも。父母の生血の産髪は生育ち。標の髮と茂らば親の御恩の片端も。せめては送る一つの孝行。アヽ母上の嘸嘆く。顔ばせを一目見て死に度い。惡しいも母様最愛しいも母様都の人の足手影も。アヽアヽ懐しや南無阿彌陀と。舌も縺れ目も變り。五體を慄はす打疵の。枝に刃を

川田隅生變

誰が付けて十二歳の玉の緒はスエテふつつと切れて［illegible］にけり。地夫婦は途方に暮れし所へ［illegible］に來れども、詞人買の惣太殿とは此の者が。詞［illegible］は上方者か［illegible］たしといふ風聞。［illegible］も連れぬ武士の旅人今も心得ず誰にも言はず［illegible］見られてはむつかしゝと死骸を隠す。［illegible］それ屏風々々それ鼻紙よ蓮よと、立騒ぐ間に御免あれと笠取つて入るを見れば。古主吉田の家の執權職の嫡正武國これは［illegible］。詞何と淡路の七郎。地これは不思議の御光臨。先づ〳〵これへと請ぜられ邊を見廻し。詞淡路の七郎俊兼と所の者に尋ねても。左樣の人は存ぜずもと侍衆ならば。人買の惣太と尋ねよと敎へられ來りしが。地扨は人商人になられたかと問はれて夫婦敗亡し。いや〳〵勿體ない〳〵。飢に勞れ四辻にのめり死ねばとて。人買などは存じも寄らず。アヽさう申す筈。十一年以前女故不忠を盡し。御勸氣受け斯くの體武具は少嗜めども一僕も使はず。もし人の入る時も傭へば賃が出る。懇の方より今日も人を借り明日も人を借り。再々人を借る故人借りの惣太と異名付けしを言誤り。人買にしてのけて迷惑千萬。ナウ〳〵女房ども。さうでないとかいひければ。地何やら彼やら憂き事聞きつらき目見るもお主の罰。昔の科を御赦免あり一度歸參あるやうに。お執成願ひ上げますと フシ打涙ぐむばかりなり。詞いや御代が御代ならば譜代相傳の御身分。召返さるる筈なれども。思ひがけぬ變によつて吉田の御家破滅し。お家に主一人もなきを知らずかと。地聞きも敢へず手を打つて。ハアハツとは如何にとは如何にと フシ仰天。するこそ道理なれ。詞始めて聞いて驚くは尤。尤。御臺所の兄常陸の大掾。我が相役勘解由兵衛と心を合せ。家を奪ふ計略。主君御夫婦不慮の横死。松若殿は天狗に捕られ梅若殿は行方知れず。歎きの餘り班女御前は狂亂となり。禁中より狂ひ出で給ふ。詞

［illegible］へ御邊の親父自害成。主君のお命助けんと敵の前にて腹切つて果てらるゝ。思案も［illegible］我一人。先づ梅若君を尋ねん。北國筋より奥方へと志す。若し思ひ當りは有るまいか。御事が見しは二歳の御時今年十二歳。［illegible］に色黒みても面體［illegible］れ。地園生に捨てゝも公家大名。衣裳は破れ垢つくとも世の常ならぬ被衣。肌の守には吉田の家の吉例にて、御誕生の六日だれの產髮を入れられしは。日本國に只一人それかと似たる物語でも聞かせてたべ。第一忠節第二は情。主人の有りたけ失ひのめ〳〵と存らふる心底。思ひ遣られよと スエテ涙に咽ぶ物語。聞く程ひつしと思ひ當り。父が最期にはつとする胸に胴突喉には。大盤石を押込む如く言葉も出でず只うろ〳〵と。女房を見れば見交す女心。思は朧に燒鐵刺す身も氣もそゞろに落付かず。地保ち兼ねて大聲上げ。大事があらう〳〵と案じたは此の事。悲しやなうとばか

知つての後は淡路の七郎俊兼。此の七郎が手を以つて主の敵惣太を一刀刺さすんば武士道は立つべからずと。詞側の刀を拔くより早く。左の肋を右の脇一文字に掻切つたり。地女房これはと驚けば武國つつ立ち聞えぬ七郎、地御太刀を我に何故打たさぬ。尤々我一つの所存あり、梅若の御事はいうて歸らず。天狗に攫られし松若の行方は天狗ならでは知り難し。今我腸を摑んで天に捧げ訴へ。十一年積りし我慢心。魔道に入つて天狗となり。地山々嶽々深山深谷あらゆる天狗の栖家を探し。松若君を尋ね求め吉田の家の二度の榮を見すべきぞや。腸を刳つての後すた／＼に切れ武國、詞ヤイ女房、夫の主の敵人買の惣太を一太刀切らねば淡路の七郎が妻でない。此の詞を忘るゝな。跡の死骸を土に埋むな灰にすな。往還に曝し主殺しの罪科人と。屍に恥を見ば梅若殿への志。地サア只今七郎が天狗になるをよく見よと。兩手を疵にぐつと入れ五臟六腑を摑み出し。コハツ天に拋つ朱の腸臟空に揚つて魔緣の猛火、はや三熱の魔道の驗。どつと吹き來る天狗風魔風旋風、ナホ、梢を鳴らし雲に轟き 三重〳〵 入りければフシはかなく消えし、地淡路が體、露なる如く絶え果てたり、地武國感涙止め兼ね不忠卻つて忠となる。武士の手本といひ乍ら弓矢の法は破られず、主君の敵と名乘りかけ、死骸の弓手を拔打にすつぱと切付け。詞サア内儀七郎が遺言何と何とゝ聲かけられ、地遺る方泣く／＼刀拔持ち右手の肩口丁と切れば、ヲヽ出來たお主の敵討つたか御内儀。ア、討ちました悲しや討つて退けましたと。夫の死骸に抱きつき聲を。限りの別れの涙。地共に死なんと取直す刀に縋り武國が。やう／＼助け宥むるも思は千々の此の黄金。里の長に預け置き松若出世の料とせば。亡魂の本懷、童どもは親里を、尋ね返すは放生供養、魂は魔道に沈むとも魄は冥土に梅若君、中有の旅の御供と二つの骸を一つ野に、墓を並べて父母の形見を遺す産髮は。延びて千筋の柳髮。佛の御手の糸となる是ぞ標の柳の糸、來る人寄る人往來の人手向の。露と茂りける。

第四

詞こりや大名のお通りだ。先退けろ。振込むさ。赤坂奴髭奴。年中振つても擦りやまぬ。文福茶釜に毛が生えた。茶筅で剃つても未だ剃れぬ。振り込めさ。火吹く茶呑もに隙がない。先退けろ。任かせておけろのよいやさ。フシよいやさ。よいや讃岐の。地金毘羅と。志したる一腰の。大脇差の身も錆びて金けも付けぬ軍介が。梅若君の御行方尋ね侘びにし長の旅、皆手馴れし七つ道具の宿入下馬前玄關前、仕方を今の路銀にて一錢二錢の袖奉加。やう／＼辿り多度の浦身の毛亂せし大鳥毛。世にふるフシ樣ぞ無慚なる。地村里の子供友達誘ひ聲々に。詞奴々鑓屋町へ遣つて退きよ。草

星振つたら錢取らしよ。地所望々々と寄り寄る。詞ナ、よい子供衆。草履見たいかまつかせろ。總じて草履に三箇の大事五箇の祕事。先づ聟入り舅入りには結ぶの草履。年頭八朔眞の草履。地女中のお供は手先やは〳〵品を振る。お若衆方は尻を振り櫻も八重の、奈良草履、今日九重の鼻緒には八練粒練ばら緒絢ひきぜ京草履。海山草履皮草履樣々ありと申せども。詞只今振るは下馬前地御馬の足もぴん〳〵〳〵。地拙者が臑もぴん〳〵〳〵。ひんと跳ねたる フシ跳ね草履。はねて直してない〳〵〳〵。詞是より殿のお門出大八文字の大跨ぎ。手先あがりの目八分。すつ〳〵〳〵。又戻り足すつ〳〵〳〵。地子供の顏に目をつけて振つて廻れど我が尋ぬる。梅若君の俤に似たる人さへ荒男。髭に淚の露時雨振る手も弱り力も落ち。土邊にどうとない〳〵〳〵 フシ泣いて。休むぞ哀れなる。地藁ども手を叩きあれ〳〵奴が泣くわ泣くわと寄りたかり。せゝりこそぐりま一つ振れ。ヤレ振れ〳〵とせびらかす。詞やかましい錢も出さず無駄骨折らせ。ほたへ過ぎた餓鬼めら。毛鑓の傍杖 地喰ふなと振廻せば。わつと逃げ。詞振らぬというてそりや振るわ。嘘つき奴に狗奴。黴の生えた地毛奴と笑うて フシ散り〳〵歸りけり。身に思ひある。長旅は足よりも先づ氣草臥。眠れ〳〵とそよ吹く風口は明いて居て夢を見る。詞ヤこりや眠たうて堪らぬ。行く先に日限はなし錢無し旅は是が德。ころりと一睡見知らせて目の醒め次第まからんと。地一丈餘りの四面の大石根からむ蔦の唐錦。邯鄲の枕〳〵と寢るより早く高鼾 フシ蟒蛇と聞きや紛ふらん。地是も供なく連なし旅の篠懸や。法螺貝持たぬ山伏の獨り嘯き來りしが。詞ヤア跡のふすぶ者往還の道に横たはり。のさばり臥したは何奴。ムム合點々々。盜人の晝寢何のあて。地此の頭の道づかれ。我等も少相伴と立寄つて。奴が枕の大石を何の苦もなく片手にちよつと引つ摑み。輕々四五間引退けて兩足ぐつと踏み伸し。寛に寢たる有樣は不敵にも亦フシ恐ろしし。地起すとなしに軍介枕さがりに目を覺し。眼すりすりヤ。野太い山伏。蹈んでくれうかいや〳〵。鼻明かせて置かんとそろり〳〵と差足し。片手に摑んで引戻す。相も劣らぬ力は互に眞似する如く、木石物は言はねども フシ鸚鵡返といつつべし。地山伏ひらりと起直り大石むんずと引止め。詞ヤイ。擂木天窓の味噌奴め。身が晝寢の御枕間へ踏み込むのさばり者。斷なしに何とする返しをらうとつつ立つたり。ムヽヽ。なう〳〵腹筋千萬。石の主は當山の山の神。我こそ先に假寢の夢己が物と我枕。括り留めうが。引留めうが。勝巾頭を主に着け。くれろと言はばいかな〳〵。我が物顏に返せとは物くさい。シテ取つて何とする。地まつ斷うするといふより早く引つたくり。ぐつと指上げ二三遍く

なく〳〵と掻毟し。片手放しに投懸くる。軍介中にてしつかと取り。詞テヽ子供よりちつと増し。サア地戻すぞと投返せば。取つては投げかけ投戻し。一二三度四五度せり合ひしは。勢進のふり〳〵や。毬杖手毬突羽根の。宙に木魂のどう〳〵〳〵。宙に閃く大石は フシ霰の走る如くなり。地軍介ほつと精援れ彼奴が力量我に抜群。暫しすませて一詞にしてくれんと。笑顔作つて空軽薄。ハヽ〳〵アヽなうお客僧。詞恐らく我に續かん者日本にはと思ひしが。存じも寄らずならぬならぬ。閉口致すと近寄れば山伏ふつと失笑し。其の手はたべぬ奴殿。騙し寄せて討たんとな。望みならば切つて見よと。地詞の下より抜打に能い推量と切付けたり。コハリ左手を打てば右手におり右手を切れば左手に飛び。裾を薙げば躍り越え。横に拂へば ナホスかい潜り切つても。突いても手にたまらず。軍介呆れて汗たら〳〵と フシ大息ついて詫然たり。詞男たる者刀を抜き血を付けずば差されまい。地コレ血を付けぬかと立寄つて。恥しむれば。詞いかないかな及びが無い許せ〳〵。及びないとは卑怯千萬流石高家の地奉公人後れたるか軍介。サア切つて見よ軍介と名指しに喫驚心付き。我が名を知つて軍介とはシャ聞く迄ない天狗殿。御主人の仇お家の敵。汝何處ぞで〳〵と日頃の念願。諸天善神の引合せ一寸も飛ばせじと。打ちかくる刀の柄手先ぐるめに確と取り。詞よい目利。成る程我は鼻高々。吉田の家に仇をなす見良が嶽の我ならば。今迄汝を摑み裂かいで置くべきか。地我はそれとは事かはり汝主君の行方を尋ね。世上漂泊の不便さに詞を交し見ゆるなり。汝が尋ぬる人々は。南海西海北陸道。四國にもましまさず。早く此の土を立去つて東の方に赴くべし。いさうれ軍介歸れやつと聞きもあへず。詞エヽ似つこらしい。鼻の先がひこ〳〵する。未だに仇をしたらいで若君西國に在す故。此の軍介を東へやりはつかりすかたんさせんとな。兎角汝が頭とはもんち〳〵に出る合點。地二人の若君送り返さば時宜により一命は助くべし。返答ぬかせと稽ぎ放す。詞鼻もすくんで働かず。エヽ口惜しい。鼻も羽節も切落さんと思ひ設けし此の腕力。汝が通力には敵はぬか。無念々々と齒ぎしみし。すく〳〵立つてぢだんだ踏み フシ聲まで。惜ます泣きゐたり。地テヽ奇特々々 額もし。我が身の上を語るとも。人界疑ひの念深くよも誠とは聞入れまじ。理を非にまげて東路へ。歸れといふ程我に張者。隙を見て只一討と不敵にかけ合ふ片意地に。天狗の通力自在にも。フシ持餘してぞ見えにける。詞エヽ情張者。よい加減で歸らぬか。くどい〳〵歸らぬ。目に物見するが歸らぬか。なに物見せうそれ好いた。どれ物見せよと意地張れば。地今は是非なし是迄と。夕立空の雲霞。詞霧間に姿入るよと見えし。

地 峨にどつと遠近の山峯巖も碎くるばかり。一當あてたる天狗風枯木吹折り吹きしわれば。心得たりと軍介は。大地を力にしがみ付き吹立てられじの力草。根からふつつり吹抜いて風に乘じて地を放れ。吹上げ吹き卷き吹返し。東の方へ吹送る。世の言草に是や此の。落付知れぬ旅人を風來。者とぞ 三重

狂女道行

サイモン 撰び清め奉るの釋迦は。羅睺羅の親仁にて。布袋は唐子のお傴役。閻魔は鬼の旦那なり。扨日の本の我が先祖。役行者と申するは惡鬼惡魔の鷲藥。今に傳へて跡腹を病まぬ山伏の境界は日待。月待。甲子に。福德延命長久の。代僧代待代參り。人の願ひは庚申 己の巳は雲水に。任する足の滿山を。ナホス 進めて東に フシ 下るなり。地 又爰に子を失ひ歎きの餘りに心亂れ。詞 行方を尋ね東路へ下る女性の候。見る目も痛はしく。此の二三日道つれしが。地 あれ〳〵あれへ狂うて正體なや。詞 問ひ慰めて參らせん暫く是に待受け。一聲 春の來る。空も霞か瀧の糸。亂れて名をや。流すらん。詞 なう道行く人に物問はう。梅若といふ十二三の幼子に。もし逢ひはなされぬか。何逢ひも見もせぬとや。乳のむ燕夏長けて。母戀しとも慕はずか。ふつつと歎かじ フシ 思はじと。地 思ふも弱る玉葛 オクリ 風に。散り〳〵。ヤツ 散り〳〵〳〵散つて揉まるゝ笹の葉に。幣切りかけて神よ神。逢はせてたべと願事の。胸に鈴ふる高師山九重霞む故郷を跡に見捨てゝ大井川。フシ 子故の浪に。浮き沈む。スヱテ 親の輪廻の足弱車 フシ 狂ひ。巡りて佇めば。ワキ地 法界坊心付き。詞 此の頃の教訓教化にて少しは心鎭まるべきに。惡鬼入其心と聞く時は野干の魅入りも測りがたし。地 いで一祈りと錫杖を。千早振々神おろし。二人 赤い天狗に白天狗。友禪染の天狗達をどつと擧めて招いた。詞 先づ筑紫には彥の山。深き頼みに四王寺。讃岐には松山 フシ 降積む。雪の白峯。扨伯耆には大山猶京近き山々。フシ 愛宕の山の太郎坊。比良の峰の次郎坊。名高き比叡の大嶽は オクリ 逢ふと。いふ字の耳に立つ フシ 心横河の。流れなれ。葛城や高間の山。山上大峰 フシ 釋迦が嶽。ワキ地 難行苦行のすた〳〵坊主。フシ すた〳〵いうてぞ加持しける。シテ いや四方に風なき藤枝の。我から狂ふ。梢とは知らぬ御停の。フシ 愚かさよ。二人フシ 馴れにし旅の友なれば。何に心を岡部の宿にたんだ一夜は轉寢。蔦の ギン 細道。宇津の山邊の フシ 夢は一富士。似たかよ蔦の山も外にはすつとん〳〵。走付く〳〵〳〵手鞠子に。沖津玉藻の年寄りて磯の白波由井蒲原や。田子の入海 フシ 底となく。箱根の蓋の富士の山。尋ぬる我が子に大磯の。名は僞りの懸子かと天に憧れ地に伏して。歎けば見聞く涙の玉 フシ 輪袈裟に露や結ぶらん。ハ

ルフシ恥も人目も。身をも人をも思ひ思はず戀し心かきよつ〳〵。きよつとなつては現なく〳〵。シテなう〳〵我が子がそれそこに。揃ひ浴衣に花かいらぎ。踊り振りの優しさ。物に譬へて得申すまいよの。いで自らも一踊りコレ山伏殿音頭々々。始めて三保の松原越えたゐ。二人松原越えたやつさ。クドキ松を木偏に書きそめて何時の月偏日偏よりか。物に狂ひの女偏我が詞偏𠮟してても。其の馬偏の耳偏に風が吹くとも聞き入れぬ。見る目糸偏山伏もとんと土偏と諸共に。狂ひ喚くぞ。是非もなき。是は昔の物語。されば難波の色里偏に。車偏屋の小里というて人の憎まぬ米偏なるが。其の美しさ天人偏の磨き立てたる玉偏故に。手偏さす人山偏なれどとても金偏なければならぬ。仇な口偏叩うよりは。愛でしやんこゝとな思ひきれさ。ナホス思ひ切れとは。フシ曲もなや。フシ唐天竺へは。よもも行かじ東は津輕蝦夷松

前、晨地西は九州薩摩潟南は紀の路熊野浦北は秋田路佐渡が島。虎伏す野邊の果迄も。尋ね還らであられうか。あら戀しの若や。よや梅若と呼び焦れ心そゞろにとつかはと。急ぐ程が谷打過ぎて或は。野に臥し山伏も。連れて狂氣に蘇民書札昔業の武藏野や。草の遂にいざ暫し暫し。とてこそ三重へ憩ひぬ フシ春に先立つ。冬梅は。雪を穿ちて芳しく。妻に後るゝ侘し身は。魂家とて立つかたもなし。フシ家もなし。タヽキ渉り流れの水鷗。昔の憂節を獨りして。筆に書きつゝ隅田川。地離れし夫の彼の岸へ到るは弘誓の渡し船。爰は武藏と下總の中に流るゝ隅田川。心は同じ渡船。婆娑と冥途は變れども。接待の船召されぬか。フシ旅人なうと漕寄する。シテフシ狂ひ還りて。母御前。ことゝ問ひかはせし山伏も。見捨てゝ何地行方のなく〳〵獨り彷徨ひて。千里を行くも親心子には果しのなかるらん。袖は涙に色變

へし。フシ隅田川にご着き給ふ。地船長侍受け何故女中の亂れ姿。詞思ひあつてか岸には。シテなしや。向ふへ渡る人ならば自ら越して參らせん。疾く〳〵船に召さるべし、う同じ世に同じ人ながら。變るは心々ぞや。爰より下の渡し船我をも乘せてと頼みしに。心強き船頭にておことは都詞狂女と見えし。面白う狂うて見せずば船に乘せじとありし故。地うたてやな隅田川の渡守ならば日もはや暮れぬ。船に乘れとはいひもせで船に乘るなと仰せあるは名にも似ず。ヲヽ野暮らしと一本させて參りしぞや。夫には引換へ疾く船に乘れ渡さうとは。しほらしやお嬉しや。亂れ心も思ひ子の生きてありとも。死んだとも行方在所の知れぬゆゑ途はゞ何しに狂ふべき。詞船にこそりて狹くとも。乘せさせ給へ渡守お慈悲ぞや乘せ。ナホスフシたび給へ。ツレ地實に業平の中將も。此の渡しにて。スヱテ名にし負はば。いざ事問はん都鳥。我が思ふ人

は。ありやなしやと我も昔の所縁をば。いざ事問はん都人折節外に人もなし。怪我なされなと助け乗せ。ギンオクリ押出す。地主從の縁船にさす棹の　フシ底より深き。ともいざや白波に　フシ跡の岸根は隔たりぬ。シテ詞コレ渡守の女性物問はう。向ひに松と柳を植ゑ二つ並びしあの塚は。様ありげなり聞かまほし語り給へとありければ。ツレ船長頻に涙ぐみ。向ふに並ぶ名所々々も問ひ給はず。塚に目をとめ問はせ給ふも縁ならめ。地此の船の着く間謂れを語り聞かせ申さん。一つは亡者の罪障消滅。自他平等　スエテ御回向。頼み參らする。詞扨も此の下總に住む人あり。元は都の御所侍傾城狂ひの金銀に。主君の目を掠めし科御勘氣を受け追出され。地夫婦東の知邊を頼み住家は爰ぞ本庄に。機織り糸繰り濯ぎ洗濯飯炊く業も知らぬ女。夫は弓馬の道ならで商賣算勘畫目も。暗き渡世の糸切れて　命を繋ぐ　フシ手術なく。あさましや

人買に成り下り。幾千萬か人の子に辛いめ見せし罪科と。スエテ子を失ひし親々の。歎きが積りに積つて身一つに重き天の譴め。詞去年三月十五日。遂に自害し世を去つたる塚は標の松一木。因果の日數巡り來て。しかも今日は一周忌。地命日に當り候ふぞや。又此方に柳を植ゑし御塚の謂れをいふも悼はしや。詞都育ちの。御稚兒の。十二三になり給ふを人商人の誘拐して。かの人賣に又賣り渡す。旅の勞れの御惱みを無性者よ强情者と。咸しの爲に打つ杖の急所にや當りけん。又定業にや在しけん既に末期と見えし時。歌苦しげなる聲音にて。我は都の者なるが。東の果の、土となる。母上かくとは知らずして、待ち侘び給はんナホスフシ悼はしや。地都の人の足手影も懷しと。是を最期の記念の詞轉寢の夢と消え給ふ。土中につき込め柳を植ゑしも御遺言。詞なう何よりも悲しきは。よく〳〵聞けば殺せしお稚兒は人買が譜代相傳のお主。そ

れとも知らぬは天命主殺しの十惡人。其の座を去らず自害せし二人の塚はあれぞかし。地今斯く申すも恥かしや。自らは其の人買の妻となるも。因果と因果惡人の妻よ女房よと。スエテ人にも疎み果てらるる。地生きての苦患に比ぶれば。死ぬれば佛の賴みもあり。生中世に存命へ水一滴花一枝。主君のお爲夫の爲誰か手向の知邊はなし。詞心ばかりの接待に旅人渡す法の船。上﨟も都人ならば柳の本にて一遍の御回向賴み參らする。ヤ。はかなき因果の長物語お船が着いて候ぞ。地靜かに上らせ給へとスエテいへども綿に伏沈み　フシ前後も。涙に咽びしが。シテ地なう只今の物語稚兒の名は聞き給はずか。ツレ詞稚兒の御名は梅若君、シテさて父の名は。ツレ吉田の中將行房朝臣。シテ地なうそれこそ尋ぬる我が子よ。あの塚の下にとや。いで顏見んと現なく三重船を飛ぶとも〳〵走るとも岸にひらりと駈上り。空しき塚に抱き付きやれ梅若よ母なるわ。

斯程焦れ迷ふもの何の悩みに母一人。跡には殘し捨てたんぞ恨めしや懐しや。あはれ夢にもなれかしと標の柳に身を投げかけ。塚にどうと伏し轉び聲も惜まず泣き給ふ。ツレ地 船長頸け寄り汝はお御嚢樣かいの。かの人買とは淡路の七郎。自らは女房唐糸よ申す者。夫が科の申譯梅若君の御最期を。語るにつけて先の世の。敵と敵が此の世にて主從となりしかと。シテ地 いへども母上は兎角の答へも泣き沈み。涙の雨や隅田川。フシ 水の水嵩も增さるべし。ツレ 御歎きお道理 フシ さりながら。彼の涙は火炎となり其の子の功德を燒くとかや。幸ひ祥月御命日只若君の御跡を弔ひ給へ。地 我も亦罪深き夫の後生の願ひ。光明普く十方の世界を照らし。念佛の衆生を攝取して捨て給はずと聞くなれば。念佛ぞ後生の杖柱と鉦鼓を母に參らすれば。シテ 撞木も取らでつくづくと標の塚を打ち眺め。なう今迄はさりとも逢はんと思ふを心の力にて。知らぬ東へ下りしに果敢なや此の世になき跡の。スエテ 標ばかりを見る事よ。扨も無慚や死の緣とて。生れ所を立ち去つて東の果の。道の邊の土となり。往きかふ人の蹴上けの塵かゝる身となる梅若が。後の世も フシ 嘸あらん。あさましの身の果や。無慚の標を見る事よと。大地を叩き聲を上げ悶え焦れて泣き給へば。ツレ地 これ皆夫の誤ゆゑ。免し給へと平伏して涙限りの叫び泣き。フシ 道理せめて哀れなり。シテ 我が子の爲と母上は鉦鼓取りあげ諸共に。南無西方極樂世界三十六萬億。同號同名阿彌陀佛。南無阿彌陀。南無阿彌陀。南無阿彌陀佛南無阿彌陀。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀 シテ地 これなう唐糸。只今幼き者の聲として幽かに念佛の聞えしは。正しく梅若が聲ござめれ。塚の内とは聞かざるか。ツレ 仰の通り塚の内所謂自からが念佛を止め母君ばかり申させ給へ。シテ地 隅田川原の波風も荒くなよせそ南無阿彌陀佛〳〵南無阿彌陀。南無阿彌陀佛南無阿彌陀。地 猶懐しき都鳥、今一聲の聞かまほしけれ南無阿彌陀。南無阿彌陀〳〵。南無阿彌陀佛南無阿彌陀。二人地 稱ふる聲と諸共に標の柳の蔭よりも。ツレ 現れ出づる稚兒の影。シテヤレ 梅若よ我が子かと。抱き付けば跡もなく消えみ消えずみ。シテ 見えみ。見えずみ 二人 隅田川。水の哀れや青柳の。枝に殘るは春風の フシ 音しん〳〵たるばかりなり。シテ地 悼はしや母上は生れ出でつ死に入りつ。生中見えずば見えぬ迄重ねて歎きを見するな。ふつつと歎かじ是迄と。川岸に立上り既に御身を投げんとす。ツレ地 一村叢雲中に。暫し〳〵と止むる聲も矢を射る 三重 如く。音に聞きたる天狗の姿。右手の腕に松若を助け乗せ。雲間を押分け踏分け忽然と顯れ出で。地 知らじ我こそ淡路の七郎。最期の一念によつて魔道に入り。主君の恩を報ぜん爲。假に山伏と變じ母君の旅路を慰め。

詞御歎きをとゞめ哀愁の念を拂はん爲に。地梅若君の幽靈と見せたるも誠は御弟松若君。雙兒の同じ佛は御眼にも違はねば。梅松若の二君とも此の君一人に恵み給へ。是こそ比良が嶽の大天狗の連れ行きし松若君。只今返し奉ると。シテ聞くも夢かと走り寄り抱き付けば。ツレ抱き付き。シテヤレ松若か。ツレ母上かと。二人死したる人の蘇生り。河水の龜や優曇華の。一つ稀の逢瀬ぞ縁深き。ツレ時におかゝる天狗の姿一團の野火と燃え上り、我が行く方を知るべにせよ若君出世の導きと。空に聲あり顔みある跡を慕ひて人々は。フシ父郷路に。立ち歸る元より魔佛一如にて。死生清淨天然と心動かぬ武士は。忠に止まり義に止まる親に先立つ葉末の露。夫に離れし床の海。思ひは千々に變れども止まる。所南無阿彌陀。南無阿彌陀佛の聲ばかり。跡に殘して今迄も硯の水の隅田川涙に。染めぬ袖ぞなき。

第五

地驕は愚人の病にして禍其の身に及ぶといへり。されば常陸の大掾百連邪正の理を以て。吉田の家を掠め取る暴惡偏る所なし。地驕る心は上見ぬ鷲秋また淺き北白河。流す花火の唐錦是ぞ酒宴の一興と。堤に大幕打靡かせ鷹中玉の酒肴。山も川も我が物顏。フシ横柄らしく坐しければ。地執權伴の藤内を始め近習外樣隔てなく。吉川岸に居流れて。オクリ暮るゝを。遲しと待ちゐたる。地中にも一家の人々は七郎天狗が逼方にて。程なく都に立ち歸り。敵大掾を圖らん爲。上地班女御前と唐錦が目馴れ覺えて下總の。花火を移す形容も。東女に似せ紫の。フシ頼被り。花火召しませ。地召さぬかと松蔭に立てゝ忍び寄り。詞此の筒は龍星と申す花火。水に入り雲に入り樣樣の仕掛あり。地御目に掛けんと班女の前。火繩を筒にかひ〲しく切つて放す玉藥。目的違うて藤内が肋骨。とうと打抜く鐵砲に。フシ血煙立てゝ息絶えたり。地百連驚きそれ狼藉者討ちとれと、抜きつれ〲討つてかゝる。群集の中より權正武國奴軍介躍り出で。詞故吉田の少將行房の妻子家來ども。百連誅伐の宣旨を受けて斯くの通り。地一人も餘さじと弓手に現れ右手に開き手を盡してぞ。三重〽切り盡す。地御敵亡び失せたりとにつこと笑うて立つたる所へ。中納言匡房卿松若を誘引あり。吉田の家督松若に勅許なると安堵の給旨渡さるれば。各はつと頭を下げ勇み悦ぶばかりなり。地かゝる時節に逢ふ事も匡房卿の御執成し。詞御禮申さん詞もなし。幸ひ仕掛けし餘の花火。詞御饗應にと班女の前。オクリ心を。盡し焚く花火。地先づ始の一曲は五穀豐饒の此の時に。廻り車の深草小町が數の。花車百夜車の飢車。浮名かき消せ淀川に。歌淀の川瀬の水車。誰を待つやらくる〲と。ゐいと。〲〲〲ツレハゐいゐいとんな。ツレハゐ

いとんなナオスサア。フシ浮世は戀の口車。次の花火は。朝顔の朝な〳〵に。咲きかへてフシ盛り千歳の。竹垣に露を含める如くにてハヅミ眺め。優しき風情なり。地花火の花の上漕ぐ船と詠み置きし其の歌枕。背枕に紫匂ふ檣[illegible]船の纜。フシ蘭の楫。フシ照す火影の。朱のそほ船船子とも舟歌やらん〳〵。目出たいは神の。フシ氏子の夏神樂。地波も色なる迎ひ提灯ちやうさやようさ渡り拍子の。鉦太鼓。天満宮の神事迄。火を以て作る水の面。手を盡したる舞扇。開く白地や白川の。家の要の松若君千代萬歳の若緑。枝葉榮ゆる常盤木の幾春秋をとこしへに治まる。國こそめでたけれ。

七行大字直之正本とあざむく類板世にありといへども又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚だすくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし悉く予が直之正本にあらず故に今此の本は山本九右衛門治重寫に七行大字の板を彫りて直の正本のしるしを紀せよとの求めにしたがひ予が印判を加ふる所左のごとし

竹本筑後掾　竹本　博教

正本屋　山本九兵衛版　（壺印）

大阪高麗橋壹丁目　山本九右衛門版　印

紙屋治兵衛
きいの國屋小春

心中天網島

近松門左衛門作

歌さん上ばつからふんごろのつころちよつころふんごろで。まてとつころわつからゆつくるくる／＼たが。笠をわんがらんがらす。そらがくんぐる／＼も。れんげれんげればつかゝふんごろ。ホステフシ妓が情の。底深き。是かや戀の大海を。かへも干されぬ蜆川。思ひ／＼の思ひ歌。心が心とどむるは門行燈の文字が關。浮かれぞめきのあご浄瑠璃。役者物眞似納屋端歌二階座敷の三味線に。ひかれて立寄る客もあり被目遁れて顔隠し。仕過しせじと忍び風俗居のきよが是を見て。ウタヒ身をのがれが來りける。三保の谷が着たりける。頭巾の錣を取外し取外し。二三度迯げのびたれども。思ふおてきなれば遁さじと。飛びかかりひつたり留めたる女景清錣と頭巾。地ついふみかぶる フシ客もあり。橋の名さへも梅櫻花を揃へし其の中に。南の風呂の浴衣より今此の新地に戀衣。紀の國屋の小春とは。此の十月に仇し名を。世に殘せとの フシしるしかや。今宵は誰か。呼子鳥。覺束なくも行燈の陰行違ふ妓の立歸り。詞ヤ小春様か何といの。互に一座も打絶え。貴面ならねば便も聞かず。氣色が悪いか。詞頬も細り窶れさんした。詞誰やらが噂で聞けば紙治様ゆゑ。内からたんと客の吟味に逢はんして。地何處へもむきとは遁らぬの。いや太兵衛様に請出され。在所とやら伊丹とやらへ行かんす筈とも聞及ぶ。どうで御座りやすと言ひければ。詞アヽもう伊丹々々というてくだんすな。それで痛み入るわいな。地いとしほなげに紙治様と私が仲。さ程にもない事を。あの贅こきの太兵衛が浮名を立てて言ひ散らし。詞客といふ客は退き果て。内からは紙屋治兵衛ゆゑぢやと堰く程に堰く程に。地文の便も叶はぬ様に成りやした。不思議に今宵は侍衆とて河庄方へ逢らるゝが。かういく道でも若し太兵衛に逢はうかと氣遣さ／＼。敵持同然の身持。詞と其處らに見えぬかえ。詞テヽ／＼そんならちやつと外さんせ。あれ一丁目からなまいだ坊主か。鐵諸念佛申して來る。其の見物の中に。のんこに髪結うてのらしい。達衆自慢といひさうな男。俺に太兵衛様かと見た。地あれ／＼爰へといふ間程なく炮碌頭巾の青道心。鼠の衣の玉襷見物ぞめきに取巻かれ。鉦の拍子も出合ごん／＼。ほでてんほでてんご念佛に仇口かみませて。道具屋樊噲流は珍しからず。門を破るは日本の朝比奈流を見よやとて。貫の木逆茂木引破り。布袋左顧虎討取つて。難なく過ぐる フシ

月日の關や。なまみだなまいだ。〱〱。
文彌フシ迷ひ行けども松山に。似たる人なき
浮世ぞと。泣いつエヽ〱。ワハ〱〱。
笑うつ狂亂の。身の果何とあさましやと。
芝を褥に臥しけるは スヱテ目もあて。られ
ぬ風情なまみだなまいだ。〱〱 歌ゐい
ゐい〱〱〱〱紺屋の德兵衞。ふさ
に元よりこひ染込みの。内の身代流行でも
はけず。なまみだなまいだ。〱。〱。
〱〱〱。アヽこれ坊樣。なんぞ。エ
ニいま〱しい。やう〱此の頃此の廓の
心中沙汰が鎭つたに。それ置いて國從節の
道行念佛が所望ぢやと。杉が袖から本謝の
錢。江戸たつた一錢二錢で三千餘里を隔て
たる。大明國への長旅は。あはぬだ佛あは
ぬだ。〱〱。フシぶつ〱いうて行き
過ぐる。人立紛れにちよこ〱走りとつ河
内屋に驅込めば。これは〱早いお出で。
お名さへ久しう言はなんだやれ珍しい小春
樣〱。はる〴〵で小春樣と主の花車が勇

む聲。詞これ門へ聞える。高い聲して小春
小春いうて下んすな。表にいやな李踏天が
ゐるわいの。地密に〱賴みやすと。いふ
も漏れてやぬつと入つたる三人連。詞小春
殿李踏天とは。ない名を付けて下された。
先づ禮からいひましよ。連衆。内々咄した
心中よし意氣かたよし床よしの小春殿。や
がて此の男が女房に持つか。紙屋治兵衞が
出すか。張合の女郎近付に。地成つて置き
やとのさばり寄ればエイ聞きともない 詞
え知れぬ人の仇名を立て。手柄にならば精
出して言はんせ。地此の小春は聞きともな
いとついと退けばまた擦り寄り。詞聞きと
も無くとも小判の響で聞かせて見せう。貴
樣もよい因果ぢや。天滿大阪三鄕に男も多
いに。紙屋の治兵衞二人の子の親。女房は
從弟同士舅は叔母聟。六十日〱に。問
屋の仕切にさへ追はるゝ商賣。十貫目近い
銀出して。請出すの根引のとは。蟷螂が斧
でござる。我等女房子なければ。舅なし親

もなし叔父持たず。身すがらの太兵衞と名
を取つた男。色里で當上いふ事は治兵衞め
には敵はねども。金持つたばかりは太兵衞
が勝つた。地金の力で押したらばならう連衆。
何に勝たうも知れまい。今宵の客も治兵衞
めぢや貰を〱。此の身すがらが貰うた花
車酒出しや〱。詞エ何おしやんす。今宵
のお客はお侍衆。地遊付け見えましよ。お
前は何處ぞ脇で遊んで下さんせと。いへど
もほたへた顏付にて。詞ハテ刀差すか差さ
ぬか。侍も町人も客は客。なんぼ差いても
五本六本は差すまいし。よう差いて刀脇差
たつた二本。地侍くるめに小春殿もらうた。
抜けつ隱れつなされても。緣あればこそお
出逢ひ申すなまいだ坊主のおかげ。詞アヽ
念佛の功力有難い。地こちらも念佛申そ。ヤ。
金の火入煙管の撞木面白い。ちやん〱。
ちやちやんちやん。歌ゐい〱〱〱ゐ
い。紙屋の治兵衞。小春狂ひが杉原紙で。
一分小判紙ちり〱紙で。内の身代すきや

れ紙の。鼻もかまれぬ紙屑治兵衛。なまみだ佛なまいだ。なまみだ佛なまいだ〳〵なまいだと。地暴れわめく門の口。人目を忍ぶフシ夜の編笠。詞ハア丶塵紙わせた。ハテきつい忍びやう。なぜ這入らぬ塵紙。太兵衛が念佛吐くな。地南無あみ笠を貰うたと。引きずり入れたる姿を見れば。大小くすんだ武士の正眞。編笠越しにぐつと睨めたる。眞丸目玉はたゝき鉦。念とも佛とも出でばこそ。ハア丶といへどもひるまぬ顔。詞なふ小春殿。こちは町人刀さいた事はなけれど。俺が所に澤山な新銀の光には。少少の刀も撓垂めうと思ふもの。塵紙屋めが淺蜆程な薄元手で。此の身すがらと張合ふは慮外千萬。櫻橋から中町くだりぞめいたら。何處ぞでは紙屑踏躙つてくりよ。地皆おじや〳〵と。身振ばかりは男を磨く町一杯に。フシ憚つてこそ歸りけれ。所がら馬鹿者に構はず堪へる武士の客。紙屋々々と善惡の噂小春が身にこたへ。思ひくづをれうつとりと。無挨拶なる折ふし。内から走つて紀の國屋の。杉が氣疎い顔付にて。詞只今春様送つて参りし時。お客様まだ見えず。なぜ見屆けて來なんだとひどう叱られます。地慮外ながらちよつと編笠押上げ面體吟味。ムヽこでない〳〵氣遣ひなし。跡つめてしつぽりと小春様。したゝる樽の生醤油。花車様さらば後に菁菜の浸し物と。フシ口合たら〳〵立歸る。至極堅手の侍。大きに不興しこりや何ぢや。詞人の面を目利するは身を茶入茶碗にするか。なぶられには來申さぬ。此の方の屋敷は晝さへ出入堅く。一夜の他出も留守居へ斷り帳につき。むつかしい掟なれども。お名聞いて戀慕ふお女郎。どうぞと一座を願ひ。小春も連れず先刻参つて宿を頼み。何でも一生の思ひ出。お情にあづからうと存じたに。いかなにつこりと笑顔も見せず。一言の挨拶もなく。臺で錢よむやうに指々俯向いてばかり。首筋が痛みは致さぬか。何と花車殿。茶屋へ來て産所の夜伽する事はつひに無い圖とぶつつけば。お道理〳〵曰くを御存じない故御不審の立つ筈。此の女郎には紙治様と申す深いお客がござんして。今日も紙治様。明日も紙治様と。脇から手ざしもならず。外のお客は嵐の木の葉でばらばら〳〵。のぼり詰めてはお客にも女郎にもえて怪我のあるもの。第一勤めの妨げとせくは何處しも親方の習ひ。地それ故のお客の吟味。おのづと小春様もお氣の浮かぬは道理。お客も道理々々道理の中取つて。主の身なれば御機嫌よかれが道理の肝腎かんもん。サアはつと飲みかけわさ〳〵わつさり頼みます。小春様はる様と。いへども何の返答も涙ほろりの顔振上げ。詞あのお侍様。同じ死ぬる道にも。十夜の内に死んだ者は。佛に成るといひますが定かいな。それや身が知る事か。旦那坊主にお問ひなされ。ほんにさうぢや。そんなら問ひ度い事がある。自害すると首くゝるとは。定め

し此の喉を切る方が。たんと痛いでござんしよの。痛むか痛まぬか切つては見ず。地大方な事問はつしやれ。ア小氣味の惡い女郎ぢやと。フシ流石の武士もうてぬ顔。詞エヽ春樣。初對面のお客に餘りな挨拶。ちつと氣をかへ。地どりやこちの人尋ねて來て酒にせうと。立出づる門は宵月の。影傾きて雲の足。フシ人足薄く成りにけり。天滿に年ふる。千早振る。神にはあらぬ紙樣と世の鰐口に乘るばかり。小春に深く大幣の腐り。合うたる御注連繩。今は結ぶの神無月。堰かれて逢はれぬ身と成り果て。あはれ逢瀬の首尾あらば。それを二人が。最後日と。名殘の文の言ひかはし。毎夜々々の死覺悟。ナホス魂拔けてとぼとぼうか〳〵フシ身をこがす。地煮賣屋で小春が沙汰。侍客で河庄方と耳に入るよりサア今宵と。覗く格子の奥の間に客は頭巾を被の。動くばかりに聲聞えず。詞可愛や小春が燈火に。背けた顔のあの瘠せた

事わいの。心の中は皆おれが事。爰に居ると吹き込んで。連れて飛ぶなら梅田か北野か。地エヽ知らせ度い呼び度いと。心で招く氣は先へ身は空蟬の拔殼の。スヱテ格子にだき付きあせり泣く。奥の客が大欠伸。詞思ひのある女郎衆のお伽で氣がめいる。門も靜かな。地端の間へ出て行燈でも見て氣を晴さう。サァござれと連立ち出づれば南無三寶と。格子の小蔭に肩身をすぼめ隱れて聞くとも内には知らず。詞なう小春殿。背からの素振。詞のはしに氣を付くれば。花車が咄の紙治とやらと。心中する心と見た。違ふまいの。死神憑いた耳へは。意見も道理も入るまじとは思へども。さりとは愚癡の至りの。先の男の無分別は恨みず。一家一門其方を恨み憎じみ。萬人に死顔さらす身の恥。親は無いかも知らねども。若しあれば不孝の罰。佛は愚か地獄へも暖かに。二人連では墮ちられぬ。痛はしとも笑止とも一見ながら武士の役。見殺しには成り難

し。定めて金づく。五兩十兩は用に立てゝも助け度し。神八幡侍冥利。他言せまじ。地心底殘さず打明けやと。囁けば手を合せ。詞アヽ忝い有難い。馴染好みもない私。詞御誓言での情のお詞涙がこぼれて忝い。詞ほんに色外に顯るでござんする。如何にも〳〵紙治樣と死ぬる約束。親方にせかれて逢瀬も絶え。差合ありて今急に請出す事も叶はず。南の元の親方と爰とに。スヱテ五年ある年の中。人手に取られては私は元より主は猶一分立たず。いつそ死んでくれぬか。ア、死にましよと引くに引かれぬ義理詰にふつと言交し。地首尾を見合せ合圖を定め。拔けて出でよう拔けて出よと。いつ何時を最期とも其の日送りのあへない命。詞わたし一人を頼みの母樣。南邊に賃仕事して裏屋住。地死んだ跡では袖乞非人の餓死もなされうかと。是のみ悲しさ私とても命は一つ。詞水臭い女と思召すも恥かしながら。其の恥を捨てゝ死にともない

お第一。地死なすに事の濟むやうにどうぞどうぞ頼みやすと。語れば頷く思案顔。そとにははつと聞き驚く。思ひがけなき男心木から落ちたる如くにて。氣もせき狂ひ扨は皆嘘か。詞エヽ腹の立つ。地二年といふもの化された。根性腐りの狐め。踏ん込んで一討か面恥かゝせて腹いよかと。胸ぎりきり〳〵口惜涙。内に小春が喞ち泣き。詞卑怯な頼み事ながら。お侍様のお情。今年中來春二三月の頃迄。私に逢うて下さんして。地彼の男の死にゝ來る度毎に。邪魔に成つて間を延し〳〵。自ら手を切らば。先も殺さず私も命助かる。何の因果に死ぬる契約した事ぞ。思へば悔しうござんすと膝に。もたれ泣く有様。詞ム、聞届けた思案あり。地風も來る人や見ると。格子の障子ばた〳〵と。立聞く治兵衛が氣も狂亂。エヽ流石賣物安物め。ど性骨見違へ。魂を奪はれし巾着切め。斬らうか突かうかどう障子に映る二人の横顔エヽくらはせたい踏みたい。何ぬかすやら頷き合ひ。拝む呟くほえるざま。胸を押へ擦つても堪へられぬ堪忍ならぬ。心もせきに關の孫六一尺七寸抜放し。格子の狹間より小春が脇腹。こゝぞと見極めゑいと突くに屆は遠く。是はとばかり怪我もなくすかさず客が飛びかゝり。兩手を摑んでぐつと引入れ。刀の下緒手ばしかく格子の柱に雁字搦みしつかと締付け。小春騷ぐな。覗くまいぞといふ所に亭主夫婦立歸り。是はと騷げばアヽ苦しうない。詞障子越しに抜身を突込む暴れ者。腕を障子に括り置く。地人立あれば所の騷ぎ。思案あり縄解くな。サア皆奥へ。小春おじや行て寝ようあいとは言へど見知りある骼指の。突かれぬ胸にはつと貫き。詞酔狂の餘り色里にはある習ひ。沙汰なしに往なしてやらんしたら。ナア河庄さん。私やよさゝうに思ひやす。いかな〳〵身次第にして皆道入りや。地小春こちへと奥の間の影は見ゆれど括られて。格子手摺にもがけば締り。身は煩惱に繋がるゝ犬に劣つた生恥を。覺悟極めし フシ血の涙しぼり。泣くこそ不便なれ。ぞめき戻りの身すがら太兵衛。扨こそ河庄が格子に立つたは治兵衛めな。投げてくれんと。襟かい摑んで引つかづくあ痛たゝ。詞あ痛とは卑怯者。ヤアこりや縛付けられた。扨は盗みほざいたな。ヤ生掏摸めどう掏摸めそては確と喰はせ。ヤ強盗めヤ獄門めとては蹴飛ばかし。紙屋治兵衛盗みして縛られたと。呼ばはり喚けば行交ふ人四邊近所も馳集る。内より侍飛んで出で。盗人呼ばはり汝か。治兵衛が何盗んだサアぬかせと。太兵衛をかい摑み土にぎやつとのめらせ。起きれば踏付け踏みのめし〳〵。引つ捕へてサア治兵衛。踏んで腹いよと足許につき付くるを。縛られながら頬かまち。踏付け〳〵踏みさがされて土まぶれ。立上つて睨め廻し。詞あたりの奴ば

らよう見物して踏まれたナア。一々に面見覺えた。地返報する覺えてをれと。へらず口にて逃出す。立寄る人々どつと笑ひ。踏まれてもあれの顔。橋から投げて水喰はせフシやるな〳〵と追つかけ行く。地人立すけば侍立寄つて縛り目解き。頭巾取つたる面體。ヤア孫右衛門殿兄ぢや人。アッア面目なやとどうと坐し。スヱテ土に平伏し泣きゐたる。扨は兄御樣かいのと。走出づる小春が腕ぐら取つて引つ据ゑ。詞畜生め。狐め。地太兵衛より先うぬを踏み度いと足を擧ぐれば孫右衛門。ヤイ〳〵〳〵。詞其のたはけから事起る。人をたらすは遊女の商賣。今目に見えたか。此の孫右衛門はたつた今一見にて女の心の底を見る。二年餘りの馴染の女。心底見付けぬうろたへ者。小春を踏む足で。うろたへた己れが根性をなぜ踏まぬ。エヽ是非もなや。弟とは言ひながら三十におつかゝり。勘太郎お末といふ六つと四つの子の親。六間口の家踏みしめ。身代潰るゝ辨へなく。兄の意見を受くる事か。舅は叔母聟。姑は叔母ぢや人親同然。女房おさんは我が爲にも從妹。結び合ひ〳〵重重の縁者親子中。一家一門寄合にも。己れが曾根崎通ひの。悔みより外餘の事は何もない。いとしいは叔母ぢや人。連合五左衛門殿はにべもない昔人。聟の舅御に倒され娘を捨てた。おさんを取返し。天滿中に恥かゝせんとの腹立。叔母一人の氣拔ひ敵に成り味方に成り。地病に成る程心を苦しめ。己れが恥を包まるゝ恩知らず。此の罰たつた一つでも行く先に的が立つ。詞かくては家も立つまじ小春が心底見居け。其の上の一思案叔母の心も休め度く。此の亭主に工面し。己れが病の根源見居くる。女房子にも見かへしは尤。心中よしの女郎。アヽお手柄。地結構な弟を持ち。人にも知られし粉屋の孫右衛門。祭の練衆か氣違ひか。遂に差さぬ大小ほつこみ。藏屋敷の役人と。小詰役者の眞似をして。馬鹿を盡した此の刀。捨處が無いわいやい。小腹が立つやら可笑しいやら。胸が痛いと齒ぎしみし。泣顔かくす塗面に小春は始終咽せ返り。皆お道理と。フシばかりにて詞も。涙にくれにけり。地大地を叩いて治兵衛。詞誤つた。〳〵兄ぢや人。三年先よりあの古狸に魅入られ。地親子一門妻子迄袖になし。身代の手鏈も。小春といふ屋尻切にたらされ後悔千萬。ふつつり心殘らねば尤足も踏み込むまじ。詞ヤイ狸め。狐め。屋尻切め。地思ひ切つた證據これ見よと。肌にかけたる守袋。詞月頭に一枚づつ取交したる起請。合せて二十九枚戻せば戀も情もない。こりや受取れとはたと打付け。兄ぢや人。あいつが方の我等が起請數改め請取つて。此方の方で火にくべて下され。サア兄貴へ渡せ。地心得やしたと涙ながら投出す守袋。孫右衛門押開き。一二三四。十二十九枚數揃ふ。外に一通女の文こりや何ぢやと。開く所をア、そりや見せられぬ大事の文と。取付くを押し

除け。行燈にて上書見れば小春様參る。紙屋内さんより。讀みも果てずさあらぬ顔にて懐中し。詞これ小春。最前は侍冥利。今は紛屋の孫右衞門商賣冥利。女房限つて此の文見せず我一人披見して。起請共に火に入れる。誓文に違ひはない。地アヽ忝い。それで私が立ちますと。又伏し沈めば。ハアヽ〳〵。詞うぬが立つの立たぬとは。人がましい。これ兄ぢや人。地片時も彼奴が面が見ともなし。いざござれさり乍ら。此の無念口惜しさどうも堪らぬ今生の思出。女が面一つ踏む。御免あれとつつと寄つて地踏鞴ふみ。詞エヽ〳〵しなしたり。地足かけ三年戀しゆかしもいとし可愛も。今日といふ今日たつた此の足一本の暇ごと。額際をはつたと蹴て。わつと泣出し兄弟づれ。歸る姿もいた〳〵しく跡を見送り聲をあげ。歎く小春もむごらしき。不心中か心中か。誠の心は女房の其の一筆の奥深く。たがふみも見ぬ戀の道別れて。こそは三重へ歸りけれ。

中之卷

ハルフシ福徳に。地天滿つ神の名を直に天神橋と行き通ふ。所も神のお前町營む業も紙見世に。紙屋治兵衞と名を付けて千早ふる程買ひに來る。かみは正直商賣は。フシ所がらなり老舗なり。地夫が炬燵に轉寢を枕屏風で風防ぐ。外は十夜の人通り見世と内とを一轍に。女房おさんの心配り、詞日は短し夕飯時市の側迄使にいて。玉は何してゐる事ぞ。地此の三五郎めが戻らぬ事風が冷たい二人の子供が寒からう。お末が乳の飲み度い時分も知らぬ、阿呆には何が成る辛氣な奴ぢやと獨言。詞かゝ樣一人戻つたと地走り歸る兄息子、詞ヲヽ勘太郎戻りやつたかお末や三五郎は何とした。宮に遊んで乳飲みたいとお末のたんと泣きやりました。さうこそさうこそ。こりや手も足も釘になつた。とゝ樣の寢てござる炬燵へあたつて暖まりや、地此の阿呆めどうせうとフシ待ち兼ね見世にかけ出づれば。地三五郎唯一人のら〳〵として立歸る。詞こりやたはけお末はどこに置いて來た。アヽほんに何處でやら落してのけた。誰ぞ拾たかしらんまで。どこぞ尋ねて來ませうか。己れまあ〳〵大事の子を怪我でもあつたら撲ち殺すと。地喚く所へ下女の玉お末を背中にお う〳〵いとしや。詞辻に泣いてござんした。三五郎守するなら地ろくにしやと喚き歸れば。詞ヲヽ可愛や〳〵。地乳飲みたからうのと同じく炬燵に添乳して。これ玉。其の阿呆め覺える程くらはしや〳〵。地といへは三五郎かぶり振り。詞いや〳〵たつた今お宮で蜜柑を二つづつくらはせ。私も五つ喰うたと。地阿呆のくせに輕口たてゝフシ苦笑するばかりなり。詞て阿呆にかゝつて忘りよとした申し〳〵おさん樣。西の方から粉屋の孫右衞門樣と叔母御樣。連れ立つてお出でなされます。これは〳〵そんなら治兵衞殿起そ。なう旦那殿起きさしやんせ。母

様と伯父様が連立つてござるげな。此の短い日に商人が。晝中に寢たふりを見せては父機嫌が悪からう。地おつとまかせとむつくと起き算盤片手に帳引寄せ。二一天作の五九進が三進六進が二進。七八五十六に成る叔母打連れて孫右衛門内に入れば。詞ヤ兄ぢや人叔母様これはようこそ〳〵先づ是へ。私は只今急な算用致しかゝる。四九三十六匁三六が壹匁八分で二分の勘太郎よお末よ。地はゝ様伯父様お出でぢや煙草盆持つておじや。一三が三それおさん フシお茶上げましやと口ばやなり。詞いや〳〵茶も煙草ものみには來ぬ。これおさん。如何に若いとて二人の子の親。結構なばかりほめではない。男の性の悪いは皆女房の油斷から。身代破り女夫別れする時は男ばかりの恥ぢやない。地ちと目をあいて氣に張を持ちやいのといへば。詞叔母様愚かな事。此の兄をさへ欺す不覺悟者女房の意見など暖かに。ヤイ治兵衛。此の孫右衛門をぬくぬくとだまし。起請まで返して見せ十日もたゝぬに何ぢや請出す。エヽうぬはなあ。小春が借錢の算用か。地措きをれと算盤おつ取り庭へぐわらりと投捨てたり。詞是は近頃迷惑千萬。先度より後今橋の問屋へ二度。天神様へ一度ならでは閾より外出ぬ私。請出す事は扨置き思ひ出しも出すにこそ。いやんな〳〵昨夕十夜の念佛に講中の物語。曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ白人に。天滿の深い大盡が外の客を追ひのけ。直に其の大盡が今日明日に請出すとの是沙汰。地賣買高い世の中でも金とたはけは澤山なと。色々の評判。詞こちの親父五左衛門殿常々名を聞抜いて。紀の國屋の小春に天滿の大盡とは治兵衛めに極つた。嫁の爲には甥なれどこちは他人娘が大事。茶屋者請出し女房は茶屋へ賣りをらう。若嫉きそげに疵付けられぬ間に取返してくれうと。地沓脱半分下りられしをなう騒々しい神妙にも成る事を。明さ暗さ聞屆けて上の事と押宥め。此の孫右衛門同道した。詞孫右衛門の話には今日は昨日の治兵衛でない。曾根崎の手も切れ本人間の上々と。地聞けば歸からは返るそも如何なる事ぞや。其方の父御は叔母が兄。いとしや光陰道淸往生の枕を上げ。詞聟なり甥なり治兵衛が事頼むとの一言は忘れねど。地そなたの心一つにて頼まれしかひもないわいのと スヱテかつぱと伏して恨み泣き。治兵衛手を打ち。詞ハアヽよめた〳〵。取沙汰のある小春は小春なれど。請出す大盡大きに相違。兄貴も御存じ先日暴れて踏まれた身すがらの太兵衛。妻子眷族持たぬやつ。金は在所伊丹から取寄する。とつくに彼奴めが請出すを私に押へられ。地此の度時節到來と請出すに極つた。我等存じも寄らぬ事といへばおさんも色を直し。詞たとへ私が佛でも男が茶屋者請出す。其の贔屓せう害がない。是ばかりはこちの人に微塵も嘘はないかゝ様。地證據に私が立ちますと。夫婦の詞割

符も合ひ扨はさうかと手を打つて叔母甥心を休めしが。詞ム、物には念を入れうこと。地先づ〳〵嬉しいとてもに心落付くため。頭固ろの親父殿疑の念なきやうに誓紙書かすが合點か。詞何が扨千枚でも仕らう。地いよ〳〵滿足則ち道にて求めしと孫右衛門懐中より。熊野の午王の群烏比翼の誓紙引換へ。今は天罰起請文小春に緣切る思ひ切る。僞り申すに於ては上は梵天帝釋下は四大の文言に。佛揃へ神揃へ紙屋治兵衛名をしつかり。血判をすゑて差出す。詞アヽ母様伯父様のおかげで私も心落付き。地子中なしても遂に見ぬ固め事皆悦んで下さんせ。詞テ尤々此の氣になれば固まる商賣事も繁昌しよ。一門中が世話かくも皆治兵衛ためよかれ。兄弟の孫どもも可愛さ。孫右衛門おじや早う歸つて親父に安堵させたい。世間が冷える子供に風ひかしやんな。地是も十夜の如來のおかげ是からなりともお禮念佛。南無阿彌陀佛と立歸る フシ心ぞ直に佛なる。地門送りさへそこ〳〵に閾も越すや越さぬ中。炬燵に治兵衛又ころり寢る布團の格子縞。まだ曾根崎を忘れずかと呆れながら立寄つて。布團を取つて引退くれば枕に傳ふ涙の瀧 フシ身も浮くばかり泣きゐたる。地引起し引立て炬燵の櫓につきすゑ。顔つく〴〵と打眺め。詞あんまりぢや治兵衛殿。それ程名殘惜しくば誓紙書かぬがよいわいの。一昨年の十月中の亥の子に炬燵明けた祝儀とて。まおこれ爰で枕並べて此の方。女房の懐には鬼が栖むか蛇が棲むか。地二年といふもの巣守にしてやうやう母様叔父様のおかげで。睦しい女夫らしい寢物語もせうものと。樂しむ間もなくほんに酷いつれない左程心殘らば泣かしやんせ〳〵。詞其の涙が蜆川へ流れて小春の汲んで飲みやらうぞ。地エヽ曲もない恨めしやと。膝に抱付き フシ身を投げ伏し口說き。立ててぞ歎きける。治兵衛眼押拭ひ。詞悲しい涙は目より出で。無念涙は耳からなりとも出ろならば。言はずと心を見すべきに。同じ目より零るゝ涙の色の變らねば。心の見えぬは尤々。人の皮着た畜生女が。名殘もへちまも何ともない。遺恨ある身すがらの太兵衛。金は自由妻子はなし請出す工面しつれども。地其の時迄は小春めが太兵衛が心に從はず。少しも氣遣ひなされな縱へこなさんと緣切れ。添はれぬ身に成りたりとも。詞太兵衛には請出されぬ若し金せきで親方から遣るならば。物の見事に死んで見しよと。度々詞を放ちしがこれ見や退いて十日も經たぬ中。地太兵衛めに請出さるゝ腐り女の四つ足めに。心はゆめ〳〵殘らねども。詞太兵衛めが威嚴こき。治兵衛身代息ついての金に詰つてなんどと。大阪中を觸れ廻り問屋中の交際にも。地面をまぶられ生恥かく胸が裂ける身が燃える。エヽ口惜しい無念な熱い涙血の涙。ねばい涙を打越え熱鐵の涙がこぼるゝと スエテどうと伏して泣きければ。はつとおさんが興さ

め顔。詞ヤアウハウそれなればいとしや小春は死にやるぞや。ハテサテなんぼ利發でもさすが町の女房ぢやの。あの不心中者なんの死なう。灸をする薬飲んで命の養生するわいの。いやさうでない私が一生いふまいとは思へども。地隱し包んでむざ〳〵殺す其の罪も恐ろしく。大事の事を打明ける。詞小春殿に不心中芥子種もなけれども。二人の手を切らせしは此のさんがからくり。こな樣がうか〳〵と死ぬる氣色も見えし故。地餘り悲しさ女は相身互ごと。切られぬ所を思ひ切り夫の命を賴む〳〵と。かき口說いた文を感じ。詞身にも命にも代へぬ大事の殿なれど。引かれぬ義理合思ひ切るとの返事。私やこれ守りに身を放さぬ。是程の賢女がこなさんとの契約違へ。おめおめ太兵衛に添ふものか。地女子は我人一向に思ひ返しのない物。死にやるわいの〳〵。アヽア、ひよんな事サア〳〵サどうぞ助けて〳〵と。地聞けば夫も敗亡し。取返した起請の中知らぬ女の文一通。兄貴の手へ渡りしはお主から行た文な。それなれば此の小春死ぬるぞ。アヽ悲しや此の人を殺しては。女同士の義理立たぬ先づこなさん早う往て。どうぞ殺して下さるなとフシ夫に縋り泣沈む。地それとても何とせん半金も手付を打ち。繫ぎ留めて見るばかり。詞小春が命は新銀七百五十匁呑まさねば此の世に止むる事ならず。今の治兵衛が四つ三貫匁の才覺。打ちみしやいでもどこから出る。地なう仰山なそれですまばいと易しと。立つて簞笥の小抽斗明けて惜しげもないまぜの。紐付袋押開き投出す一包。治兵衛取上げや金か。しかも新銀四百め。こりやどうしてと我が置かぬフシ金に目さむるばかりなり。詞その金の出所も跡で語れば知れる事。此の十七日岩國の紙の仕切銀に才覺はしたれども。それは兄御と談合して商賣の尾は見せぬ。小春の方は急な事某處に四々の一貫六百匁。ま一貫四百匁と。地大抽出の錠明けて簞笥をひらりとび八丈。京縮緬のあすは無い夫の命白茶裏。娘のお末が兩面の紅絹の小袖に身をこがす。是を曲げては勘太郎が手も綿も無い袖無しの。羽織も交ぜて郡內の始末して著ぬ淺黃裏。黑羽二重の一張羅定紋丸に蔦の葉の。のきも退かれもせぬ中は。內裸でも外錦。男飾りの小袖迄さらへて物數十五種。內端に取つて新銀三百五十匁。よもや貸さぬといふ事は無い物迄もある顏に。夫の恥と我が義理をスヱテ一つに包む風呂敷の中に。情を締めにける。詞私や子供は何着いでも男は世間が大事。請出して小春も助け。太兵衛とやらに一分立てて見せて下さんせと。地いへども始終差俯向きフシしく〳〵泣いてゐたりしが。詞手付渡して取止め請出して其の後。圍うて置くか内へ入るゝにしてから。其方は何と成る事ぞと言はれてはつと行當り。詞アツアさうぢや。ハテ何とせう子供の乳母か。地飯炊きか。隱居なりともしませうとスヱテ

わつと叫び伏沈む。餘りに冥加恐ろしい此の治兵衛には親の罰天の罰。佛神の罰は當らずとも女房の罰一つでも將來はようない筈。免してたもれと手を合せ口說き歎けば勿體ない。それを拜む事かいの手足の爪を放しても。皆夫への奉公紙問屋の仕切金。いつからか着類を質に間を渡し。私が簞笥は皆空殼それ惜しいとも フシ思ふにこそ。何いうても跡へんでは返らぬ。サアサア早う小袖も着替へてにつこり笑うて往かしやんせと。下に郡内黑羽二重縞の羽織に紗綾の帶。金拵への中脇差今宵小春が血に染むとはフシ佛や知召さるらん。三五郎爰へと風呂敷包肩に負ほせて供に連れ。金も肌身にしつかと着け立出づる門の口。治兵衛は内におゐやるかと。毛頭巾取つて入るを見れば。南無三寶舅五左衛門是は扨。折も折ようお歸りなされたと フシ夫婦は顚倒狼狽ゆる。三五郎が負うたる風呂敷もぎ取てどつかと坐り尖り聲。女郎下にけつからう。舅殿是は珍しい上下着飾り。脇指羽織あつぱれよい衆の金遣ひ。紙屋とは見えぬ。新地への御出でか御精が出まする。内の女房入らぬ物おさんに暇やりや。連れに來たと口に針ある苦い顏。治兵衛は兎角の言句も出ず。父樣今日は寒いにようお歩かしやんす。先づお茶一つと茶碗をしほに立寄つて。主の新地通ひも。最前母樣孫右衛門樣御出でなされて。段々の御意見熱い涙を流し。誓紙を書いての發起心。母樣に渡されしがまだ御覽なされぬか。ヲナ誓紙とは此の事かと懷中より取出し。阿呆狂ひする者の起請誓紙は方々先々。書出し程書き散らす。合點いかぬと思ひ〱來れば案の如く。此の樣でも梵天帝釋か。此の手間で去狀書けとずん〱に引裂いて投捨てたり。夫婦はあつと顏見合せ フシ呆れて。詞もなかりしが。治兵衛手をつき頭を下げ。御立腹の段尤とも御詫申すは以前の事。今日の只今より何事も慈悲と思召し。おさんに添はせて下されかし。諸人の箸の餘りにて身命は繫ぐとも。おさんは急度上に据ゑ憂い目見せず辛い目させず。添はねばならぬ大恩あり。其の譯は年月もたち私の勤め方身上持直し。お目にかくれば知るゝ事それ迄は目を塞いで。おさんに添はせて フシ給はれとはら〱。こぼす血の涙疊に。喰ひ付き詫びければ。非人の女房には猶ならぬ去狀書け〱。おさんが持參の道具衣類數改めて封付けんと。立寄れば女房あわて着る物の數は揃うてある。改むるに及ばぬと立塞がれば突退けぐつと引出し。コリヤどうぢや。又引出してもちんからり有りたけこたけ引出しても。繼きれ一尺あらばこそ葛籠長持衣裳櫃。是程空に成つたかと舅は怒りの目玉も据り。夫婦が心は今更に明けて悔しき浦島の。炬燵布團に身を寄せて フシ火にも入り度き風情なり。此の布呂敷も氣遣ひ

と引解き取散らし。詞されば こそ〳〵是も
質屋へ飛ばすのか。ヤイ治兵衛女房子供の
身の皮剝ぎ。其の金でおやま狂ひ。地いけ
どう掏摸め女房どもは叔母甥なれど此の五
左衛門とは赤の他人。損をせう好みがない。
詞孫右衛門に斷り兄が方から取返す。地サ
ア去狀々々と七重の扉八重の鎖。百重の圍
は通るゝとも通れ方なき手詰の段。チゝ治
兵衛が去狀筆では書かぬ是御覽せ。おさん
さらばと脇差に手をかくる縋り付いてなう
悲しや。父樣身に誤あればこそ段々の詫言。
餘り理運過ぎました。治兵衛殿こそ他人な
れ子供は孫可愛うはござらぬか。わしや去
狀は受取らぬと。夫に抱付きスヱテ聲を上げ
泣叫ぶ。こそ道理なれ。よい〳〵去狀入ら
ぬ女郎め來いと引立つる。いや私や行かぬ
飽きも飽かれもせぬ仲を。何の恨に晝日中
女夫の恥は曝さぬと泣きわぶれども聞入れ
ず。此の上に何の恥町内一杯喚いていく
と。引つ立つれば振放し小腕取られよろよ
ろと。よろめく足の爪先に可愛やはたと行
當る。二人の子供が目を覺し。詞大事の母
樣なぜ連れて行く祖父樣め。地今から誰と
寢ようぞと慕ひ歎けばチヽいとしや。生れ
て一夜も母が肌を放さぬもの。晩からは父
樣と寢ねしやや。二人の子供が朝ぶさ前忘
れず。必ず桑山飮ませて下され。なう悲
しやと言ひすつる跡に見捨つる子を捨つ
る。藪に夫婦の二股竹長き。別れと 三重

下之卷

へ戀なさけ。地爰を瀨にせん。蜆川 フシ流
るゝ水も。行通ふ。人も音せぬ丑三つの。
本フシ空十五夜の月冴えて。地光は暗き門行
燈大和屋傳兵衛を一字がき。眠りがちなる
拍子木に番太が足取千鳥足。フシ御用心御
用心も聲更けたり。詞駕籠の來いかう更け
たのと。地上の町から下女子。迎ひの駕籠も
大和屋の。潜りぐわら〳〵つつと入り。詞
紀伊の國屋の小春さん借りやんしよ。地迎
ひとばかりほの聞え。跡は三つ四つ挨拶の。
程なく潜りによつと出で。詞小春樣はお泊
りぢや。駕籠の衆直に休ましやれ。アヽ言
ひ殘したこれ花車さん。小春樣に氣を付け
て下さんせ。太兵衛樣への身請が濟んで。
金請取つたりや預り物。酒過させて下んす
なと。地門の口から明日待たぬ。治兵衛小
春が土に成る。フシ種蒔き散して歸りける。
ハルフシ茶屋の茶釜も。夜一時休むは八つと
七つとの間にちらつく短檠の。光も細く更
くる夜の。川風寒く霜滿てり。まだ夜が深
い送らせましよ。詞治兵衛樣のお歸りぢや
小春樣起しませ。それ呼びませは亭主が聲。
地治兵衛潜りをぐわさと明け。詞コレ〳〵
傳兵衛。小春に沙汰なし耳へ入れば。夜明
け迄括られる。それ故よう寢させて拔けて
いぬる。日が出てから起して往なしや。我
等今から歸ると直に。買物のため京へ上る。
大分の用なれば。中拂の間に合ふやうに歸
るは不定。最前の金で。其方の算用台も仕
舞ひ。地河庄が所へも後の月見の拂ひとい

うて。四つ百五十目請取とつてたもらうしと。詞福島の西悦坊が佛壇買うた奉加。銀一枚回向しやれと遣つてたも。其の外にかかり合はハアそれよ〳〵。磯市が花銀五。これはかりぢや仕舞うて寢やれ。地さらばさらば戻つて逢はうと。二足三足行くより早く立歸り。脇指忘れたちやつと〳〵。詞なんと傳兵衞。町人は爰が心易い。侍なれば其の儘切腹するであろの。我等預つて置いてとんと失念。小刀も揃うたと。詞渡せば取つてしつかと指し。是さへあれば千人力。もう休みやれと立歸る。追付けお下りなされませ。よう御座りまもそこ〳〵に跡は樞をごつとりと。フシ物音もなく鎖されり。地治兵衞はつつと往ぬる顏。又引返す忍び足。大和屋の戸に縋り。内を覗いて見る内に。間近き人影ぴつくりして。向ひの家の物蔭にフシ過ぐる闇暫し身を忍ぶ。地弟ゆゑに氣を碎く粉屋孫右衞門は先に立ち。跡に丁稚の三五郞が。背中に甥の勘太郞連れ。行燈目當に馳來り。大和屋の戸を打敲き。詞ちと物問ひませう。紙屋治兵衞はゐませぬか。ちよつと逢はせて下されと呼ばはれば。地扨は兄貴と治兵衞は。フシ身動きもせず猶忍ぶ。地内から男の寢ほれ聲。詞治兵衞樣はまちつと先に。京へ上るとてお歸りなされた。爰にではござらぬと。地重ねて何の音なひも。涙はら〳〵孫右衞門。歸らば途で逢ひそなもの。京へとは合點がゆかぬ。アヽ氣遣ひで身が顫ふ。小春を連れては行かぬかと。胸にぎつくり横たはる。心苦しさ堪へかね。又戸を敲けば。詞夜更けて誰ぢやもう寢ました。御無心ながらま一度お尋ね申し度い。紀伊の國屋の小春殿はお歸りなされたか。若し治兵衞と連立つて行きはなされぬか。ヤ。ヤ。なんぢや小春殿は二階に寢てぢや。地ア先づ心が落付いた。心中の念は無いどこに屈んで此の苦をかける。一門一家親兄弟が。固唾を呑んで臓腑を揉むとはよも知るまい。舅の怨みに我が身を忘れ。無分別も出ようかと。意見の種に勘太郞を。連れて尋ぬるかひもなく。今迄逢はぬは何事と。スヱテおろ〳〵涙の獨り言。隱るゝ間の隔てねば。聞えて治兵衞も息をつめ フシ涙のみ込むばか な り。詞ヤイ三五郞。阿呆めが夜々うせる所外には知らぬかと。地いへば阿呆は我が名ぞと心得て。詞知つてゐれど爰では恥かしうて言はれぬ。知つてゐるとはサアどこぢやいうて聞かせ。聞いた跡で叱らしやんな。毎晩ちよこ〳〵行く處は。市の側の納屋の下。地大だはけめそれを誰が吟味する。サア來い裏町を尋ねて見ん。勘太郞に風引かすな。詞ごくにも立たぬ父めを持つて。可愛や冷い目をするな。此の冷たさで仕舞へばよいが。地ひよつと憂い目は見せまいか。憎や〳〵の底心は。不便々々のうら町を。フシいざ尋ねんと行き過ぐる。影隔れば馳出でて。跡なつかしげに伸上り。心に物を言はせては。十惡人の此の治兵衞。死に次

第ともに捨置かれず。跡から跡迄御厄介。所詮なやと手を合せ。伏拜み〳〵猶此の上のお慈悲には。子供が事をとばかりにて暫し。涙に咽びしが。地とても覺悟を極めし上。小春や待たんと大和屋の。潜りの隙間差覗けば。内にちらつく人影は小春ぢやないか。待てと知らせの合圖の咳。エヘン。〳〵かつち〳〵えへんに拍子木打交ぜて。上の町から番太郎が。くる〳〵たぐる風の夜は。せき〳〵廻る火の用心。詞ごよざ。〳〵。地〳〵も人忍ぶ。我にはつらき葛城の。神がくれしてやり過し。隙を窺ひ立寄れば。潜り内からそつと明く。詞小春か。待つてか。治兵衛様地早う出たいと氣をせけばせく程廻る車戸の。フシ明くるを人や聞付けんと。地しやくつて明くればしやくつて響き。耳に應ゆる胸の内。治兵衛が外から手を添へても。心顫ひに手先もふるひ。三分四分五分一寸の。先の地獄の苦しみより。鬼の見ぬ間とやう〳〵に明けて。嬉しき年の朝。小春は内を拔け出でて。互に手に手を取交し。北へいかうか南へか。に。し。か東か行く末も。心の早瀬蜆川流るゝ月に逆らひて足を。ばかりに 三重

名殘の橋づくし

ハルフシ走り書。謠の本は近衛流。野郎帽子は若紫。惡所狂ひの。身の果は。斯く成り行くと。フシ定まりし。釋迦の敎もある事か見度し覺身の因果經。明日は世上の言草に。スエテ紙屋治兵衛が心中と。仇名散り行く櫻木に。ねほりはほりを繪草紙の。長地版摺る紙の其の中にありとも知らぬ死神に。誘はれ行くも商賣に。疎き報いと觀念も。とすれば心引かされて 中オクリ 歩み。惱むぞ道理なる。フシオクリ頃は〳〵十月。十五夜の フシ月にも見えぬ。身の上は。心の闇の印かや。フシ今置く霜は明日消ゆるはかなき譬のそれよりも先へ消え行く閨の内。いとし可愛いと締めて寢し。移り香も何と。冷泉流れの。蜆川。フシ西に見て。朝夕渡る。此の橋の天神橋は其の昔。菅丞相と申せし時筑紫へ流され給ひしに。君を慕ひて太宰府へたつた一飛梅田橋。跡おひ松の緑橋。別れを歎き。悲しみて跡にこがるゝ。フシ櫻橋。今に話を聞き渡る。一首の歌の御威德。スエテかゝる尊きあら神の。氏子と生れし身を持つて。其方も殺し我も死ぬ。オクリもとはと。問へば分別のあのいたいけな貝殼に。一杯もなき蜆橋。短きものは我々が。歌此の世の住居。秋の日よ十九と。廿八年の。今日の今宵を限りにて。二人いの。ちの捨て所。爺と婆との末迄もまめで添はんと契りしに。フシ丸三年も。馴染いで。此の災難に大江橋あれ見や難波小橋から。船入橋の濱傳ひ。是迄來れば來る程は冥途の道が近付くと。歎けば女も縋り寄り。もう此の道が冥途かと見交す顏も見えぬ程。落つる涙に堀川の フシ橋も水にやひたるらん。北へ歩めば。我が宿を一目に見るも見返らず。子供の行方女

男の。哀れも胸に押包み。ギンオクリ南へ〳〵渡る橋柱数も限らぬ家々を。如何に名付けて八軒屋。誰と伏見の下り舟着かぬ内にと道急ぐ。フシ此の世を捨てて。行く身には。聞くも恐ろし。フシ天滿橋。歌淀と大和の二川を。一つ流れの大川や水と魚とは連れて行く。我も小春と二人連一つ刄の三瀬川。手向の水に請けたやな。何か歎かん。此の世でこそは添はずとも。未來は。言ふに及ばずこんどの〳〵。すつとこんどの其の。先の世迄も夫婦ぞや。一つ蓮の頼みには。一夏に一部。夏書せし。大慈大悲の普門品妙法蓮華の京橋を。越ゆれば到る彼の岸の玉の臺に乗りをへて。佛の姿に身を成橋。衆生濟度がまゝならば流れの人の此の後は。絶えて心中せぬやうに。地フシ守り度いぞと。及び無き。願ひも世上のよまひ言。思ひやられてあはれなり野田の入江の。水煙。歌山の端白くほのぼのと。ハヅミあれ寺々の。鐘の聲こう〳〵。かうしていつ迄か。とても存らへ果てぬ身を最期急がん此方へと手に百八の玉の緒を。涙の玉にくりまぜて南無網島の大長寺。藪の外面のいさら川。スヱテ流れ渡る橋の上を最期。フシ所と着きにける。

地なういつ迄つか〳〵歩みても。爰ぞ人の死場とて定まりし所もなし。いざ爰を往生場とフシ手を取り土に坐しければ。地さればこそ死場はいづくも同じ事と言ひながら。詞私が道々思ふにも二人が死顔並べて。小春と紙屋治兵衛と心中と沙汰あらば。おさん樣より頼みにて殺してくれるな殺すまい。挨拶切ると取交せしその文を反古にし。地大事の男をそゝのかしての心中は。流石一座流れの勤めの者。義理知らず偽り者と世の人千人萬人より。おさん樣一人の蔑み。恨み妬みもさぞと思ひやり。未來の迷ひはフシこれ一つ。詞私を爰で殺してこなさん何處ぞ所を變へ。地ついと脇でと打凭れ口説けば共にくどき泣き。アヽ詞ぐちな事ばかりおさんは舅に取り返され。暇やれば他人と他人。離別の女に何の義理。道すがらいふ通り今度の今度のずんどこんどの先の世迄も女夫と契る此の二人。枕を並べ死ぬるに誰が譏る誰が妬む。サア其の離別は誰が業私よりこなさん猶愚痴な。身體があの世へ連立つか。地所々の死にをして縦へ此の身體は鳶烏に啄かれても。二人の魂つきまつはり。地獄へも極樂へも連立つて下さんせと スヱテ又伏沈み泣きければ。詞ヲヽそれよ〳〵此の身體は。地水火風死ぬれば空に歸る。五生七生朽ちせぬ。地夫婦の魂離れぬ印合點と。脇指ずはと抜放し元結際より我が黒髪。ふつつと切つてこれ見や小春。地此の髪のある中は紙屋治兵衛といふおさんが夫。髪切つたれば出家の身三界の家を出で。妻子珍寶不隨者法師。おさんといふ女房なければ。地お主が立つる義理もなしと涙乍ら投出す。アヽ嬉しうござんすと小春も脇差取上げ洗ひつ梳いつ撫で付けし。むごや惜氣も投島田はらりと切つて投捨つる。枯野の薄夜半の霜 フシ共に亂るゝ哀れさよ。憂き世を遁れし。尼法師夫婦の義理とは俗の昔。とてもの事にさつぱりと死場も變へて山と川。詞此の樋の上を山に準へ其方が最期場我は又。此の流れにて首縊り最期は同じ時ながら。捨身の品も所も變へておさんに立てぬく心の道。地その抱へ帶此方へと若紫の色も香も。無常の風に縮緬の此の世後の世の二重廻り。樋の組木にしつかと括り先を結んで狩場の雉の。つまゆゑ我も首しめくゝる國結。我と我が身の

死侮見るに目もくれ心くれ。詞こなさんそれで死なしやんすか。所を隔て死ぬれば側にゐゑも少しの間。地愛へ／＼と手を取合ひ双で死ぬるは一思ひ。さぞ苦痛なされうと。思へばいとしい フシ／＼と止め。かねたる忍び泣き。ヽ詞首縊るも喉つくも死ぬるに愚かのあるものか。よしない事に氣をふれ最期の念を亂さすとも。西へ／＼と行く月を如來と拜み目を放さず。只西方を忘らりやるな。心殘りの事あらばいうて死にや。何にも無い／＼。こなさん定めてお二人の子達の事が氣にかゝろ。アレひよんな事言ひ出して又泣かしやる。地父親が今死ぬるとも何心なくすや／＼と。可愛や寢顏見るやうな。忘れぬはこれ計かりと スエテかつぱと伏して泣沈む。地聲も爭ふ村烏塒放れて鳴く聲は。今のあはれを問ふやとて フシいとゞ涙を添へにける。詞なうあれを聞きや二人を冥途へ迎ひの烏。牛王の裏に誓紙一枚書く度に。熊野の烏がお山にて三羽づつ死ぬると。昔より言ひ傳へしが。地我と其方が新玉の年の始めに起請の書きぞめ。月の始め月頭書きし誓紙の數々。その度毎に三羽づつ殺せし烏は幾何ぞや。常にはかはいかはいと聞く今宵の耳へは。其の殺生の恨みの罪。報い／＼と フシ聞ゆるぞや。地報いとは誰ゆゑぞ我ゆゑ辛き死を遂ぐる。許してくれと抱き寄すれば。いや我故と縮め寄せて顏と顏とを打重ね。涙に閉づる フシ鬢の髪野邊の。嵐に氷りけり。地後に響く大長寺の鐘の聲。南無三寶長き夜も。夫婦が命短夜と フシはや明渡る。地晨朝に最期は今ぞと引寄せて。跡迄殘る死顏に泣顏殘すな殘さじと。につと笑顏のしろ／＼と霜に凍えて手も顫ひ。我から先に目も眩み刃の立てども泣く涙。アヽせくまい／＼早う／＼と女が勇むを力草。風誘ひ來る念佛は我に勸むる南無阿彌陀佛。彌陀の利劒とぐつと刺され引きすゑてものり返り。七顛八倒こは如何に切先喉の吭を外れ。死にもやらざる最期の業苦共に亂れて苦しみの。地氣を取直し引寄せて。鍔元迄刺通したる一刀。抉る苦しき曉の フシ見果てぬ夢と消え果てたり。地頭北面西右脇臥に羽織打着せ死骸を繕ひ。泣いて盡きせぬ名殘の袂見捨てて抱帶をたぐり寄せ。首に罠を引つかくる寺の念佛も切回向。有縁無縁乃至法界。平等の聲を限りに樋の上より。一蓮託生南無阿彌陀佛と踏み外し フシ誓し苦む。地なり瓢風に揺らるゝ如くにて。次第に絶ゆる呼吸の道息せきとむる樋の口に。此の世の縁は切れ果てたり。朝出の漁夫が網の目に見付けて死んだヤレ死んだ。出合へ／＼と聲々にいひ廣めたる物語。直に成佛得脫の誓ひの網島心中と目ごとに。涙をかけにけり。

七行大字直之正本とあざむく類板世に有りといへども又寫しなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚だすくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又遺失多かるべし全く予が直之正本にあらず故に今此の本は山本九右衞門治重新に七行大字の板を彫りて直の正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本筑後掾（壺印）

大阪高麗橋壹丁目　山本九兵衞版

正本屋　山本九右衞門版

後太平記四十八卷目　津國女夫池

近松門左衞門作

序詞笑を買ふ木のもと花已に老んたり。眉をゑがく窓の前月猶殘れり。優艶關雎の業み君穩やかに民安く。國傳へます秋津御代正親町の院の御宇。足利十三代の武將左大臣從一位。征夷大將軍源の朝臣義輝公。遠祖尊氏公の箕裘を續ぎ。國家の政道凶惡を退け。洛陽二條室町に殿造り　オロシ五美を尊み。給ひけり。地御臺所は大宮の大納言秋忠卿の御娘。去年の冬より御懷妊。既に永祿七年二月中旬。御着帶の御祝儀とて在京の諸大名我も〳〵と出仕あり。御座の右は四職の棟梁。三好長慶入道が嫡子淡路守國長。左は管領淺川左京の大夫藤孝を先として。武衞京極畠山仁木赤松吉良大館。其の外御譜代外樣の寄人迄。程につけつゝ居流れて。千歳を結ぶ襲帶の。行末永き例ぞと　フシ各あつと拜謁あり。地御簾なかば巻上げさせ君御出まし〳〵。御盃を奉らんとせし所に。當番の奏者罷出で　詞御舅君大宮の大納言秋忠卿勅使として。地御來臨と申上ぐれば三好國長御簾に向ひ。詞不時の勅使如何なる御用も承り難し。大宮殿とは御内緣と申しながら。勅使御對面はいつもの通り。君も御座を下らせ給ひ。然るべしと申せども答へなし　地御簾を卷きあげ申すべきかと。いへども更に答なく御膝うごめくばかりなり。勅使是へ唯今と表よりの案内。三好せいてずんと立ち御簾つかんで引除くればこはいかに。義輝公はましまさず御舍弟御曹司義昭。立烏帽子に小直衣さながら武將の御出立。詞ヤア是何ゆゑ。似せ將軍の化ぞこなひと。地御手を取つて引きおろせば。藤孝始め伺候の人々　フシ呆れて眉をぞ顰める。地一つの檻を廣椽に舁据ゑさせ。勅使上座に着き給へば。左京の太夫藤孝謹んで。詞義輝公は夜前より風邪の御所勞によつて。義昭名代として勅使を迎ひ奉ると。地首尾を繕ふ詞について。詞恐れながら宣旨を奉じて。兄義輝に申し聞かせ候はんとぞ述べ給ふ。亞相笏取り直し。此の度江州堅田の漁人。一身兩頭の龜を釣り得て朝廷に捧げ奉る。古への伏羲氏の天下に王たる時。神龜龍馬出現せしより。唐土にも其の例多く。我が朝には元正天皇。聖武皇帝即位の年。又[illegible]永明應年中不思議の龜の出現以上六ケ度。年號を靈龜神龜と改元迄ありしかど。地兩頭の出でたるは異國本朝其の例なし。菅家清家安倍卜部の勘文。善惡の理分明ならず。武家の評議たるべしとの勅諚。龜を一覽し吉凶包まず　フシ勅答あれと述べ給へば。地藤孝立寄り檻を開けば實に誠。一體に二つの頭餌を爭ひ喰

ひ合ふ有樣。命々鳥の類かや義昭を始め三好淺川横手を打ち。詞公家の御沙汰に及ばぬ事不學短才の荒武士。地善惡の評定恐れありと難澁してこそ見えにけれ亞相重ねて。詞義輝公御所務といひ御座のお請も輕輕し。地追つて勅答御保養踈略あるべからずと。座を立ち給へば中門迄オクリ敬ひ〳〵送り參らせて。地御座に入らんとし給へば三好御手を取つて引据ゑ。詞なう弟君。米は人の生命を養ふ寶なれども。藁は履草鞋となつて踏み躙らる。米と藁とは同根なれども。米の眞似ならぬが天地の定り。如何に御舍弟なればとて左大臣の裝束着し。征夷大將軍の座に着き。諸大名に威を振ふは押出しての謀叛紛れなし。兩頭の龜の出現は兄弟天下を爭ひ。亂逆となる兆。地天照太神八幡宮の御告げ。其の胸にひつしと當つて拔指なるまひ。國家の大事忽にならず詮議の間國長が宿所に預る。サアお立ちと引立つる藤孝おさへて粗忽千萬。詞先づ御親父長慶老にも相談。上意を伺ひ義昭公の御心底。一應も再應も尋ね問うて上の事と。いはせもあへずアヽあまい〳〵。斯る大事の企聞へばとて。チヽ謀叛發すといふ者のあるべきか。昔九郎判官腰越にて七枚起請を書かれても。賴朝許し給はず。地愚父長慶は正直一遍埒明かず。サア〳〵お立ち但し繩をかけうかとひしめく所に。御乳母子海上太郞兼盛。地隱の遣戶蹴放し躍り出で。三好が響烏帽子ともに引つ摑んでどうど投げのけ。詞殿中にて大口あき。身が殿を謀叛よ逆心よとは何を見付け。綱掛けんなどとはどの腕ぶしで。親長慶が賢人面の忠臣だて。義輝公のお服を打ちぬき身が殿を婿たがる。親子の心に一物も二物もある以前の通りま一度吐かせ直に聞く。ヤ天下の大事己れ體にいふべきか䑛立て。腮をこぢ明けても言はせて見せう。イヤ地いはれぬとせり合ふ高聲。藤孝制して兩方鎭まれ〳〵と。いへども更に聞入れず。義昭公海上をはたと睨んで。蜜し兼盛尾籠なり海上と押鎭め。詞方々よつく聞かれよ。不肖の義昭勿體なくも。君をまなび上段に坐し。諸士の歷々を欺きしを。謀叛と見たるは愚昧の眼には尤至極。折しも兩頭の龜出現して吉凶を示す事。兄弟天下を爭ふ瑞相といはんに返答口を噤むばかり。我誤りなき旨を云ひ開けば。兄の恥辱を諸大名に觸れ聞かするに同じ。地所詮一生兄弟面を合せじと。思ひ定むるばかりぞと指添拔いて角額。みどりの御髮ふつつと切つて投げ給へば。海上太郞も藤孝もフシ動顚。詞は なかりけり。地義昭座を打つて。詞エヽあさましや兄義輝公。天魔の魅入りか九條の遊女町へ。忍び〳〵の御遊山と聞きしに違はず。一昨日より御出で。今日の壽御臺所より人橋を掛けらるれども。醉臥して御正氣も無しとの便り。はや方々は出仕。奥には敗亡詮方なく。御臺所と相談にて此の拵裝。サア御恥をいひ散らし一時も御殿に足

は止められず。藤孝暫くておはすれば天下の政事に氣遣ひなし。我は是より三界坊ヤイ海上。共に發心お供などとてびくしやくせば。今生後生の勘當。藤孝に從ひ忠節を忘るゝなと。つつと寄つて髻の片首ずつぱと切り。サア此の上は爭ふべき者もなく。天下太平御代萬歳の瑞相と勅答せよ。藥籠の蓴紙の衾一鉢の設より。外を求めぬ身なれども此の髻は申し請け。池に放ち成佛の緣を結ばんと。既に出でんとし給ふ所へ。問註所の方よりなう若君申し〳〵と。父修理の入道長慶御所に平伏し涙を浮め。我等疾く出仕せば御髪は切らせまじ。曲もない藤孝殿海上太郎。縋りついてもなぜ止めましてくれませぬ。不忠無禮の悴ゆゑ六十に餘る入道が。數年の忠義も無になつたか。何を以て我等が心底御目にかけん。是へ參れ國長はつと答へて父が前。下ぐる頭を拔打ちに フシ水もたまらず打落し。是でお腹をいられ各ら疑ひ晴れてたべと。髻を摑んで差上ぐる義昭振返り。ムヽ長慶。これは其の方料簡違ひ。國長爲に當つて切る髪にあらず。所存あつての發心よし面うちに切る程なれば。數ならねども日本の大將軍。義輝公の弟源の義昭が。髪の毛一筋には親子が首を並べても替へはせぬ。汝に取らする跡弔へと見返りもせず立出でて。直に又入る法の道。聖の道も國民の治まる。道ぞ三重思ふこと。フシ御生の注連に。引く節の。叶はずばよもならじとの願みを賀茂の瑞垣に。玉依姫の其の昔別雷の御神を。御產の紐のやすらかに。スエテあやかる爲の御祈り。二月の空の フシ暖かに。日和義輝將軍の御臺所の神詣で。御伽は君のお手かけの梅枝白菊初雪を。妬み憎みも女子氣の。きどく帽子に顔つゝみ何れをそれと餘處目には。人の見知りも ノシ嵐吹く。柳が枝ともつれ合ひ徒歩おひろひもお身ごなし。外珍らしくともすれば行き休らひて道草を。摘めど何れを何れとも名さへ知らじな萌え出づる。草の色々問ひ問はれ。摘む春草のなに〳〵ぞ。御行繁蔞。佛座。菘蘿蔔。芹薺。世に災難も七種は。此の初春に。フシ摘み捨てゝ。野邊の千草の色見草歌人の家のことぐさは。千々の心を種として。萬の言の葉も茂り。又色好みの戀草は。忍ぶ夜すがら月見草とみにも人を夢見草。いとし人とし片敷けば。草の枕も綾や錦か。金襴緞子の夜著も布團もな。なん〳〵なつこりや入らぬ〳〵。締めて寝た夜の。フシ其の明けの日は。いとゞ思ひのまさり草。誰か嫁菜の寝よげにて萌置く。露の消え殘り。濡れた姿の姉ましや。我に摘めとて此の草の人に心を。フシつく〳〵し。茅花亂れて御生野のシテ櫻はまだし ワキ梅かをる シテ花にあこがれ草にめで 二人フシ宿をかすみの籬ならば。明日も明後日もまとゐして摘まゝ。ほしさに行きかねて フシしばし。やすらひ給ひける。景好き所に御座を設け御臺所を御運びに。

清瀧といふ女會釋こぼして。〔詞〕是はまあ〳〵どなたをどなたと申す中にも御臺樣。〔地〕御所でさへ土は踏ませませぬ御養生なればこそ。お幕の内でちとお休みといひければ。御臺御機嫌うるはしく自らが面白さに人もさこそと思ひやる。〔詞〕御所の歸りは夜をこめて。皆おじややいのと引連れて フシ幕の内へぞ入り給ふ。〔地〕御遊も半ばに末の女お幕の外に畏り。〔詞〕淺川左京の太夫藤孝殿の御使者。冷泉造酒之進と申す人。〔地〕御取次の女中賴み度きとの御事と案内す。〔詞〕清瀧斷〳〵と申し上ぐれば聞いた〳〵。〔詞〕藤孝の使者とは今日御詣の見舞ならめ。そち取次いで其の使者の口上も聞かうし。〔地〕いひたい事も話さうし皆見ぬ顏と宣へば。女中同志はざは〳〵と。今日の果報は清瀧殿遊山はさつしやる戀しい男の顏は見さしやる。見ぬふりしたら何さしやろも。ヲヽうらやましとフシ吐けば。清瀧も氣を上げて。〔詞〕口のわるい嗜ましやんせ。造酒之進殿とは御臺樣の御指圖で。末々夫婦の筈なれどさういはれてはどうも行かれぬ。〔地〕といふは嘘逢ひたいが眞ぢやもの。是が行かずに居られうか。少しの御話は御免なりませ皆樣と。怯めず臆せず立ち出づればどうする事ぞと女中達。フシ幕の物見に縋り寄る。〔地〕冷泉造酒之進房平。淺川樣の繼上下。鐺造りの長刀。さすが育ちも小姓上り年は二十の上越して。一つ二つ三つ指にて。草に手をつき頭を下げ。落付く程清瀧は戀にせかるる早瀨川。心たぎつて詞に餘り。〔詞〕御臺樣御詣。お悦の使者ならば取り繕うて申すべし。〔地〕其の手間に此の頃の積る話が聞きたいと。手を取ればもぎ放し。〔詞〕急の御使馬を飛ばせ。其方の濡より此の方の背中の濡。大汗を絞る仕合。主人藤孝申し越し候は。御臺樣にも御聞き及び。義輝公御寵愛の傾城大淀と申す女。三好入道が九條の町を請出し則ち彼が娘にして。今暮御所へ入る筈に相極る。入道がかね〴〵の仕業。悴國長が首を討つたるなど。君に心を許させん手段とは。藤孝見付け候へども是ぞと申す越度なければ是非を糺す迄もなく。〔地〕御諫め申せば。却つて入道を猜み妬みの讒言と御立腹。〔詞〕此の度傾城を御所へ入れては御家の滅亡遠からず。是を止むる事御臺樣の力ならでは叶ひがたし。〔地〕片時も早く御所へお歸り。お供申せと主人が口上。此の旨御披露賴み入ると述べければ。エ。〔詞〕是は又餘り與がる。〔地〕お側から腰押してもさうはさせじといふ内に。御臺幕より立出で給ひ。〔詞〕なう冷泉。使の趣かしこにて聞きたるぞや。藤孝の知らせ然る事なれども。諸侯に八人の思ひ妻はある習ひ。御所へ入れずば妬み悋氣と。〔地〕其の傾城の賤しき身に蔑まれんも恥かしゝ。君さへ御心慰まば大淀には限るまじと。歸つて申せ造酒之進と露も御氣に止めぬ風情。〔詞〕梅が枝さし出てこれ申し御臺樣。かう並んだ三人は皆殿樣の手かけの身。悋氣なされぬを惡いと申せば身

にいひかぶる様なれど。殿様より御臺様百倍のお情。我々も御臺様と奉つて。お詞を何が背きいはうではなけれども。傾城はぞんざいの擬り。近い證據は帯の祝ひの折から。殿様を留めて戻さず。義昭様の御出家も皆其の傾城づらめから。九條に居る内さへあれぢやもの。御所へ入れたらほんに／＼のさばり返つて手に入れ自慢。御臺様が不運と 地萬事を鼻であしらはゞ。十度に一度はお腹も立たいで何とせう。其の時お悔みなされても僕に悋氣もなるまいし。追ひださうにも動くまいしお修羅の種を見る様な。白菊様初雪様。清瀧殿さうぢやあるまいかと。君を思ふも フシ身を思ふ。地詞の内より御臺所焚付けられて燃ゆる火の。胸にあまれば色に出でお顔もあけの目に涙。いやればさうぢや入れては大事。供せよ冷泉皆もこい。ソリヤお歸りよお乗物。輿よ車とひしめいて。賀茂の御手洗川瀬の波。およぎ着く程氣もせかれ道を早めて三重へ立歸る。地海上太郎兼宣。乳兄弟の主君義昭公。御發心の供には具せられず。生中御所の奉公三好などが下に付き。外様並に追廻されんも口惜しゝ。詞されぱとて仁王の片方立てた様に。獨り肱を張つても濟まず。所詮義昭公の御行方 地尋ねんと思立ちけるが。君も御先祖代々我も親代々。相傳の主君の御殿。せめて御門より御暇乞の御禮と。近衛通を室町の御所の御門を見渡せば。扉八文字に開き、式臺には高燈臺星の如く歌の御會か御振舞か。何事やらんと門番の下役に仔細を問へば。詞今夜は忝くも新御臺様のお輿入れ。町々の辻固め。館の内は式三獻の御用意。赤飯蒸すやら餅搗くやら。膾かくやら庭掃くやら。地フシまぜますると語りける。詞して新御臺とはどなたの姫君。ハテ隠れもない九條の町の傾城様。大淀様と申す太夫。三好長慶様の娘分になされて。あれ／＼提灯が見える。道の警固は岩成主税殿。サアかたづいて踞うたく／＼。地立ちはだかつて鐵棒頂戴なさるなと。フシいひ捨て内にぞ入りにける。地元より堪へぬ海上太郎。詞いかに叱り手なければとて。幅の廣い傾城の請け様。新御臺とはほたへ過ぎたる女め。大事の主を坊主にし。うま／＼と御所へ入れては無念の無念。地主人の髪切らせた代り。其の女め素頭はり撲いてくれんずと夕闇に。振亂す大髻。重代の金剛兵衛四尺八寸。鍔元くつろげ横たへしは。反橋の欄干を フシ腰に差いたる如くなり。地時も移らず二條坊門の四辻。提灯つらなる行裝は。さながら姫宮政所の。御輿入ともいひつべく。輿添は三好が執權。岩成主税助重正。御弓頭馬淵團八郎友澄。徒士若黨迄子持筋の袴の町々。隅々に フシ眼を配つて歩み來る。先に手を振る徒侍。はつた／＼と左右へ蹴飛ばし。走りかゝつて乗物の棒端。ぐつと引つ摑み大音上げ。詞室町殿の御所が揚屋になり。傾城を請込むと今聞いた。扨々仰山な揚屋

入り。大淀には我も執心。買はう〳〵と存じた所。今宵は身が貰ひ申す。金銀とては持たねども、是見よ四尺八寸黒れ燒の刄金を持つて。腸ともに請出す。地サア引きおろし道中させて見物せん。こりや〳〵〳〵と四五間取つて突き戻せば。輿ら人も一くるめ大地にどう〳〵。フシどうと轉び重つたり。地岩成馬淵命知らずの狼藉者と。左右より取付く所を寄せも付けず蹴散らし。飛びかゝつて輿の戸はたと蹴破れば。思ひもよらぬ義輝公。跡に續いて大淀が。生きたる心も泣き沈み。御袖にすがり立ち出づれば。さしもの海上。ハアヽ是は存じ寄りもなやと スヱテ土にくひ付くばかりなり。地武將はつたと睨ませ給ひ。詞悴め推參千萬。幼少より義昭が膝元にて育ちし故。萬事寛宥して差置けば。程を知らぬ我儘。我が輿に向つて狼藉などとは。勅諚にも叶はず。地但し義昭がいひ付けたるかと フシ御氣色。變つて上意ある。詞ハア是は恐れながら上意とも存ぜず。海上狂氣も仕らず。我が君と見まずらば何の慮外致すべき。天下の主源の義輝公と申す大將軍。傾城の相輿に召さんとは。いかな曉の夢にも思ひかけなく此の仕合せ。君はあの賣婦奴ゆゑ九條の町に夜あかし日あかし。地それ故弟君の御遁世。御臺所のお歎き。御所中そは〳〵しく諸武士上を輕しめ。恐れねばおのづから御威勢衰へ。國家の大事となる事。鼻の先にぶらつけども。諫言申す人は七里けんぱい。毛饅頭の長覺狸大淀狐。どれぞ一疋踏み殺さんと存じての狼藉。我等が殿に遁世させた替り。あの賣婦髪の毛引拔きずんぼろぼうに仕ると。諸人の輕薄裸にして。フシ歯に衣着せずぞ申しける。スヱテ大淀もおろ〳〵涙。詞道々申すも愛の事。御臺樣への憚り。外に數多。お手かけ衆。いかな賢女も遠しかるまじ。外の誹りは御名の恥。御所の中へはわしやいや〳〵。地是から戻して下さんせ。歩行で供にますさらばやと。立たんとすれば待て〳〵。詞推參な小丁稚。攝政關白も冠下げらるゝ此の義輝。國家の政道汝に敎へらるべきか。餘人の見せしめ。地岩成馬淵彼奴撲て〳〵。承ると兩方より。杖振上ぐれば睨みつけられぢつと引く。振上ぐれば睨めつけ。睨めつくれば棒を引く。詞身がいひ付くる何と〳〵。地上意なりと聲をかけ。續け打ちに二三十。胴骨腰骨目鼻もわかず。めつた打ち。散々に撲つて撲ち伏せたり。詞エヽあつたら興をさませし。大淀是へ 地いざ祝言の盃と。フシ手を引き御門に入り給へば。地岩成馬淵下部迄。詞アヽよい態。一人物に狂はせよと。地御門の閂はたとさす音笑ふ音。興は千秋萬歳の。詞千箱の玉とぞ謡ひける。色海上御門をくわつと睨み。百萬の理を持ちながら。詞同然の奴輩に撲たれたる口惜しや。雷が落ちかゝつてもびつくとも思はぬ海上が。地上意と聲をかけられて。思はず頭がさがりしは扨も天下の御威勢は。斯程にも重かりし。

上下の違ひ是非もなやと。手鞠の樣なる涙をはら〳〵とぞ。流しける。地 見廻す築地の彼方より。此方にさしたる樓の枝を。登り傳ひてさゝがにのいとあぶなげに女業。取付く梢も花の香の。裾も小褄もかかりつ破れつ。下に見るとも白綾のひとへ帶。梢にかけて兩の端。手に取り絡み一思ひ。ついと飛んだる一はづみ　オクリ ひらりと。こそは　フシ 落付きけれ。地 海上すがさず走り寄り。詞 心許なさ。何者なりと咎むる聲。アヽ高い高いさういふは海上太郎か。我こそ御臺と聞きもあへず。ヤアヽ。御懐胎の大事の御身。夜中にお一人此の樓を傳うてあるまい事。御麁相至極と申しあぐれば。なう麁相とは。　フシ 曲もない。地 大淀といふ女めゑ。日頃お手かけ楽種枝初雪白菊などが。腹立つるをも樣々なだめ押へる程の自らなれど。今夜の體を見ては半時も御所には堪られず。詞 守刀を咽喉へ差當て見たれども。我一人の身ならねば。死もやらず何の當所もなう拔出で。實家へ歸るも猶口惜し。地 何處をどうとの知べさへ心に任せぬ身の上を。哀れと思へ海上と　フシ 涙にむせび入り給ふ。地 御道理〳〵よい折からに參り合せし。何方へも御供。御心安かれと申し上ぐればいや〳〵。詞 人に誘はれてなんと。ない名を立てられ猶無念と宣ふ間に。地 御所中騷ぎ御臺樣が見えぬわ。御臺樣〳〵と。女の泣聲上下の騷動。築地の外を探せ〳〵と呼ばはる聲々。南無三寶と御臺所。　フシ 行方も知らず落ち給ふ。詞 程なく御門さつと開き岩成主親。中間足輕四五十人。棒提げ走り出で。詞 こりや〳〵海上めまだけつかる。御臺樣の方人は彼奴め。お行方ぬかせと取廻す。ハアヽ知つたとていふものか。地 うまい奴等と片はしに。蹴散らし〳〵岩成が胸ぐらをしつかと取り。詞 うぬは能う上意ごかしに棄つたなア。早速ながら返禮と。地 礑と蹴返し打ちのめし。頭も碎け腹も裂けよと踏付け〳〵。詞 ヤイ手引してうぬが主の長慶に一目逢はするか。然らば助くるさなくば只今踏殺す。何と〳〵。アヽ〳〵命お助け下されば。主人長慶に逢はせましよ。しかとさうか。誓文誓文侍冥利。詞 サア案内と引立てられ。飛びしさつて大聲上げ。詞 主人長慶に逢ひたくば當年はならぬ。來る亥のえ猫の年。十六月朔日の。三つある時逢はせうと。地 云ひ捨てどつと斷入つて。フシ 門の戸はたと打つたりけり。エ憎くい鼯め。地 よし〳〵長うは生けぬ奴。いで海上も御祝言の祝ひの石を參らせんと。大下馬の道具止。四尺四面の立石。ゑいやつと引き起し。高く差上げ力に任せ。ゑいやうんと投付くれば。四方四維に地響きして。ほつかり打拔く櫓の扉。フシ 石火矢なんともいひつべし。地 いよ〳〵騷ぐ御所の中。馬淵團八郎扉の破れに首差出し。詞 冥加知らず命知らず。作法知らずの暴れ者。はや立去れと呼ばはる頭ひつ掴み。地 ゑいやと引けば團八も。コ

ハリ身を通れんと前へ引き。互にゑいやと引く拍子。咽喉のかけがね首の骨。がつくり折れて皮ばかり。ナホス一二三尺引伸し。一ねぢ捻てふつつと切り。近頃乏少輕微ながら。是今晩の進上と。館の前にかつぱと投棄て。夜も更け星も流るゝ御溝の水は南。我は北へと行く月も。西に入りくる東がしらむ。五更の一天烏もはら／＼鐘も鳴る。數は六つの巷の聲々。又立寄つて門の戸を。うつゝか夢かあけやらぬ恨みを。殘して歸りけり。

第二

地君が代につくともつきじ米麥の。都に通ふ鳥羽畷其の片里の七瀬川。やせたる馬の飼料とて淺川左京之太夫藤孝。三好修理之太夫入道長慶に賜つたる。秣刈場の領界境目の榜木眞中に。轉び伏したる女の死骸。頭は淺川足は三好の領分と。兩屋敷へ訴へ雙方の庄屋月行事。村のあるきは棒突き並べ。詞まあ一二尺東へ寄るか一二尺西へ行き過ぎるか。どちらへなりとも片付かで。地中有に迷ふ女の死骸。フシ米來もこぞと呟きける。地檢使のお出でと先走りフシ各。土に平伏して。待つ間ほどなく淺川の大臣冷泉造酒之進。三好が執權松永彈正久秀クリ供人。引具しフシ死骸の前後に。挾箱立てさせ。淺川三好境目の論。落着いかにと。手下の者フシ固唾を。呑んで控へける。詞なう冷泉殿。所の者ども呼出して仔細お尋ねなされまいか。貴殿御聞きなさるれば拙者も共に承る。御挨拶に及ばずいざ／＼。地然らば御免と松永彈正。淺川殿三好殿兩方の庄屋出ませい。詞さて始めて見付けしは何者。其の節外に怪しき事はなかりしか。殘さず申せ死骸檢分の上。相違あれば汝等。屹度曲事なりとありければ。庄屋罷立ち。見付けし人は三好長慶樣御領の百姓則ち是なる木六兵衛。地其の見た通り眞直に申し上げよと突出され。詞我等井出の水落しに。今朝とう出かけにふつと見付け。世間は暗し小氣味はわろし。何見居くる迄もなく其の儘逃げて歸り足。庄屋殿へ注進しそれから村中駈着けて。淺川樣の御領へも人を走らせ。お屋敷へも付屆け兩庄屋出合の上。地死骸に菰を着せたばかり外には何も存ぜずと。いひ分の趣。兩家の若黨矢立取出し口上書フシ一々記し留めけにける。地いざ檢分と兩人死骸に立ちかゝり。撥除くる菰の下下樣ならぬ女の風情。面の皮剝ぎむくれば。たとへ存じの者なりとも。面色たゞれてそれぞとは。誰が目に白き練の下着。上は地なしに素綸の袷。身内に兎の毛で突傷も。切傷とてもあら不便や。懷胎の女ござめれ臨月近き錦の腹帶。しめ殺せしに極つたり。詞造酒之進殿御覽なれ。此の女町人百姓の妻にあらず。公家か武家も國主方の御簾中。剝ぐべき衣服は其の儘に。面の皮剝いだるは追剝盜賊の業でなく。金水引のさげ下地。髮も亂れず死姿繕ひしは。殺して捨てたるに紛ひなし。地迂濶に取置く死骸でなし

さうは思ひ召さぬか。詞實にく\尤の氣の付き樣。地小袖の縫は將軍の御物好。俗にいふ室町模樣。下々の着る小袖にあらずと。いはせも果てずこれく\造酒殿。詞其の將軍で思ひ當る。御所を夜ぬけに行方知れぬ。御臺所も懷胎此の女も懷胎。髮のかゝり衣のあや凡人ならぬ所あり。地其の御方ではあるまいかと。言へばさうかと差寄つて又改むる屍の。顏にご人の見知りはあり。肚胃の面知れざれば何をどうとのあてもなく。二人ははつと差俯向き フシあぐみ果てたるばかりなり。地やゝあつて松永彈正。詞貴人高家の腹帶には。懷姙の月日姓名を記し。變成男子御產平安の守を納むる習ひと聞く。此の死骸にもあらば證據の第一と立寄つて。地疑ひ解く錦の腹帶。内に籠めたる五大明王六觀音七佛藥師の御產の守。願主征夷大將軍源朝臣義輝と記されたり。詞是々疑ふ所もなく御臺所に極つたり。詞家の騷ぎ天下の憂ひ何者の所業か。地果敢なき御尊骸の有樣やと。涙を啜つて立ちつ居つ騷げば共に騷がれて。驚きながら造酒之進。見れば見る程手足の不束。腹帶の印は兎もあれ御臺所に似ても付かず。松永が顚倒仔細ありと心に頷き。詞御臺所と分明に知るゝ上は。片時も猶豫なり難し。三好殿御領内の騷動。氣の毒ながら淺川が存ずべき旨趣もなし。立歸つて言上せん家來參れと駈出づれば。なうく\暫しと走り寄つて引戾し。詞淺川の難儀三好に塗付け。歸るとて歸さうか。棒木より西東淺川の領内に。死骸が大分かゝつてあるとは一目見ても知るゝ事。御身が眼にかゝらぬか。キイ雙方の百姓ども棒木を分けて兩方へ。死骸のかゝりの尺を打て。地承つて立ち掛り棒木の中より東西に。引く繩筋の歪みなき代代の掟の墨かねも。西の方淺川領に死骸のかゝり。詞一尺二尺三尺一寸五分。東へ三好の御領には一尺一二三一尺三寸はござりませぬ。兩庄屋立合見屆け。地一分も違ひ候はずと申し上ぐればあれ聞かれよ造酒之進。詞淺川領へは一尺八寸の上行き過ぎ。殊更に頭の方。一足ゆけば三好の領は離るる。大を捨て小に付く法やある。御尊骸も取納め。御敵の詮議仕らうと出直さねば。淺川の爲も惡しからんと。地主の威光のはねばかま嵩にかゝつて着せかくれば。淺川の民百姓すは我が地頭の敗なるわ。フシ村の造作と呟きける。地造酒之進からく\と打笑ひ。詞いやさ五尺三尺此方の領へかゝればとて。死骸の踏んだる足の下。三好殿の領内なれば淺川が知るべき樣なし。疑はしくば百姓ども。其の死骸の足動かせず引越してお目にかけよ。地はつと人より我先に三好方の百姓ども。死骸の足をしつかと抑へ手ん手にずつと引起せば。踏んだる足は三好が領内御覽なされ松永殿。此方の領分には些少の構ひなし。御尊骸も取納め御敵の詮議御肝要。此の旨言上仕る。言分はござらぬか。詞何とく\と迫りかくれど松

永一句の理に詰められ。返す詞も投首しァシ誤り入つたる風情なり。地死骸を抱へし百姓どもどうやらかうやら敗けになつた。あた面倒な死人やと。放せば東にかつぱと倒れ。いよ〱西に障り無き忠と不忠と善悪は。人間世の境間にて。是を分つは天道の直なる道を立別れ睨んで。左右へぞ 三重 へ別れける。フシ黄金の臺。玉の床。錦の褥に夜もすがら。歌さまと添寢の。夢を見た。覺めて悔しと一筋に。中太夫フシ調子合せて三つの緒の。フシ餘所にはかりの。泡沫を。爰にはぢきに起臥して。夏冬知らぬ室町の。ナホス御所ぞ榮華の フシ奥御殿。女中ばかりで濱松の音もねほれし大騒ぎ。障子隔てゝ次の間に連三味線の手もたゆく。本歌投節流行歌。彈いては歌ひ歌うては。聲も枯野の朝霜や フシ興の興をぞ催しける。俄に酒宴の座も靜まり。義輝公の御聲高く。詞昨日迄は傾城の大淀。今日は我が御臺所何事が氣に入らぬ。地ヤレ皆寄つて機嫌とれと廻らぬ舌を廻り聲。障子の外にも息をつめ内を窺ふ折節に。塀中門の車戸ぐわら〱と明け。走出づるは表使の清瀧殿是なう〱。忙がしげに何事ぞア丶氣遣と尋ぬれば。詞梅が枝様初雪様。お二人ながらお伽の役か聞かしやんせ。又お傾城様の機嫌が損ね。今朝からけがな莞爾ともせず。それ故例の機嫌直しの御成敗が又始まります。私が親の岩成主税之介に。其の切殺す人連れて來いとの呼使。地こんなお使するも因果。お役嵩る親の身も因果。御臺様の敵ない死を遊ばし。其の詮議も濟まぬ中是が先づある事か。氣も進まぬ歌うたひ三味線彈き。お伽もむやくしからうが。辛棒が大事傾城殿に睨まれて。憂事見せて下さんすなと フシ語り捨てゝぞ走り行く。聞いて二人は身慄ひし。なう梅が枝様。毎日々々むごい怖い哀れな事。見聞くではないかいな。詞今日切らるるは誰でござんしよの。ア丶昨夕から白菊様が見えぬぞや。地但し奴どもか馬取か誰にもせよいとしい事。ャ面々に命が大事。氣に違はぬ様にいざ役目の三味線と。餘所の哀れを身の上に。思ひ調べの糸よりも心は二上り三下り。撥もしどろに彈きなせり。サイモン昨日は人の身の上の。今日は我が身の。あすか川。罪なき。罪に沈み行く。水の哀れや。ヨサイ。ヨ。ヨサイサヨ白菊か。何を。科とてかゝるべき。覺えも縄にからまれて。ナホス引出さるゝフシ 御所の庭。後に岩成主税之介邪見の眼四方に配り。切つてくれんず面魂見るより二人は撥投げ捨て。庭に飛びおりなういとしや。又人を切ると聞きしがこな様かいの。かう三人は昨日まで高下もない御寵愛。如何に見かへらるゝとて。慰みに人殺すとはあんまり酷い情ない。詞此の世の暇乞ぢやぞや。白菊様なぜに物いはしやんせぬ。地や猿轡が篏めてあるわいの。エ丶胴慾な鬼鬼神。御臺様も定めて殺し手は外にあるまい。あれを聞き是を聞くに付け。此

の二人が當り番近付きましたと縋り付き。くどき歎けば白菊も。物いひたげに身をあせり。涙を今の暇乞ひ。三人顔を差寄せて泣き沈む。フシこそ道理なれ。岩成主稅二人を引き除け。詞隙入つては大淀御前の御機嫌如何。お手前達も今の中隨分口たゝけ。地追付け猿轡に間もあるまいと。惡口明けて塀中門フシはたと引きたて入りにける。なう初雪樣。地獄々々と來世の樣に思ひしが。大淀は鬼の大將あの門の彼方が無間地獄。馴染の白菊殿。最期を覗いていざ回向とおづ／＼覗く門の隙間。梅が枝樣あれ見さんせ。詞白菊樣を引据ゑて。繩を解くは助くるか。いや／＼兩の手を引張つた。地主稅之介が後へ廻る何とするぞと見る内に。どうと響く太刀音。なう悲しや。兩の手を切り落した。痞が胸へ差込んで私や動かれぬ。アヽ南無阿彌陀佛と。フシそゞろに慄ひわなゝけり。アレ初雪樣。今のを見て大淀めが笑ひくさる。アレ殿樣へ抱付いたと告ぐる内。重ねてどうと響く太刀音。梅が枝樣今のは何ぞ。いとしや首がとばかりにて。スヱテ身を投伏して泣きゐたり。梅が枝吐息をつく／＼と。思案をすゑてコレ申し。詞昔唐土に紂王といふ大王の后。妲己といふ美人人を殺す事をすき好み。地花の晨月の夕酒宴の上に。多くの人を切りさいなみ。民の歎きも顧ず。忽ち國を失ひしと話に聞きしを目の前に。大淀は其の妲己に勝りこそすれ劣りはせじ。遂には私等も白菊殿同然に。殺さるゝを待たうよりいつそ走つて退けまいか。いや斯うかいのと囁く後の御寢所に。何時の間にかは義輝公。大淀諸共ましましてお耳に入るとも知らばこそ。誰かある人は無きかと召さるゝ聲。二人もはつと敗亡し。逃げもやらず フシ居もやらず消えも入りたき風情なり。岩成是にと罷出る。詞二人の女成敗して。大淀が機嫌直させよと。地御意より早く飛びかかり拔き打ちに初雪が。右の肩先はらりずんと切り下げたり。梅が枝しさつて身構へし。詞エ殿。千萬無量の云ふ事もたつた一字に止まつた。今の恨みが何處へ行かう。ヤイ人喰ひの鬼女よ蛇よ。生き替り死に替り五百生々付き纏ひ。片時も安穩で立たせうかいな。地人に魂魄がある物かない物か。思ひ知れやと恨みの齒ぎしみ。涙一滴眼に浮めず。睨み詰めたる眼ざし。サア寄つて討て岩成と。首差伸ぶれば主稅之介こはごはそつと立寄つて。太刀振上ぐれば敵なくも フシ首は前へぞ落ちにける。詞大淀見てか面白いの。あはれ何處にも謀叛人が起れかし。そもじを連れて討手に向ひ。千も二千も引き並べて成敗の見飽させたい。地酒も過ぎたちよと寢よか。主稅死骸を片付けて休め／＼と宣ふ所へ。お取次の侍罷出で。詞いつぞや鳥羽の七瀬川にて。御臺樣を殺したる科人を。三好長慶召取り申されしが。只今御詮議なされんや。伺ひませとの御事と申上ぐれば。君大きに御悦喜あ

り嬉しゝ〳〵。舅大納言より姫返せ御臺返せと。毎日の難題に困る所よくしたりな。地大方の詮議ならず長慶入道左京太夫。藤孝兩職立合ひ屹度事を糺すべし。我も直に聞くべきぞ囚人牽かせと。御諚の趣相傳へ。兩人御前に詰めければ。松永彈正囚人護り御白洲にぞ引かせける。三十許りに小柄の男惡びれぬ面付。詞長慶ねめ付け。汝勿體なくも御臺所に對し奉り遺恨あるべき様なし。誰に頼まれ。何故に失ひ參らせし眞直に申せ。少しも爭はゞ矢柄責鐵砲拉ぎ。言はせて見せんと嵩にかゝれば。囚人御前を遥かに見やり。ハヽヽヽお久しやコレ殿。昔は君が打つ露に命を繋ぎし蟋蟀の佐傳。今見ぬ振はお情ない。太鼓持こそ致せ命は金で賣つた物。寸々に刻まれても申さぬ〳〵。お氣遣ひ遊ばすな。地其處等は立派に立つる奴と。名さゝぬばかりに君を見る眼ざし。御立腹の御氣色。並居る警固伺候の人々フシ手に汗握るばかりなり。長慶聲をかけ知れた〳〵。仇口きかすな松永、それ引立て首を刎ねよと下知をなす。藤孝押へていや〳〵。詞何故の恨誰に頼まれ害せしと。明らかに白狀もさせず。理不盡に首を刎ねては詮議揞し長慶老。ハテ物に馴れぬ不功なり藤孝。只今の詞に頼人は知れたり。そんじやうそれと名をさして白狀せば。却つて君の御難儀と分別し態と名を聞き切らず。但し跡のつまらぬ時御邊見事捌くか。ヲヽ跡は藤孝が捌く〳〵。ヤイ囚人。謎掛ける樣に吐かさずとも眞直に申せ。忝くも武將の御前。地長慶藤孝が詮議。眼を開けとありければ顔ふり上げし。地跡の御難儀構はぬとあるからは誓紙を破つていうて退けう。頼人はあの殿樣。御臺を殺し大淀御臺に定まらば。一廉大名に取立てる契約の印と。大判五十枚戴く是が證據と。地手を放したる白狀君甚だせかせ給ひ。御牙を嚙みならしスヱテ御身も顫ひ見えければ。詞なんと藤孝申さぬか。跡がつまらぬとは此の事。詞是非に及ばず御舅大納言殿へ誤り證文。御隱居の御思案。それ松永首を討てとせり立つれば。藤孝重ねて待て〳〵〳〵。憎い嘘吐め。同類の張本あり證據を以て詮議せん。造酒之進參れと高らかに呼ばはり給へば。記錄所の方より冷泉造酒之進乘物舁かせ走り出で。椽先に舁据ゑさせ。御詮議の元是に候と御乘物の戸を開けば。お腹にやゝをもち月の山の端出づる其の風情。伺候の諸武士怐り顔義輝公も御怪轉顔。入道が澁い顔御臺所の御顔は。上氣こうじて紫の藤孝の側を去りやらず。スヱテさし俯向いて坐し給ふ。豫て課し置きたりけん松永彈正つつ立ち。囚人の首水もたまらず打落す。藤孝大きに苛つて。ヤレ詮議の殘る大事の囚人麁忽の成敗。長慶御邊がいひ付けかと。問詰めてもちつとも騷がず。詞御前に向ひ涙をはら〳〵と流し。申し上ぐれば入道が人を猜む讒言に似たり。申さねば不忠是非に迷ひ候へども。天下の爲君の爲に

は。嫡子國長が首討つ程の長慶が。偽事とはよも思召されまじ。情なや御臺所に心を通はす。密通の男おびき出し隱し置いたりと承り。手段を以て乞食の孕女をもとめ。殺手をこしらへ斯の如く計ひしかば。地忽ち御臺所の御在所顯れしは。某が思ふ壺にあたる所。却つて罪を長慶に塗らんとする佞臣逆臣。理非聞召しわけられ長慶越度に極まらば。二言ともなく御前にて切腹と。刀の柄に手をかくれば。ア、早まるな入道。汝に些か誤りなし。善人惡人は我が兩眼に見分けたりと。御佩刀するりと抜き。不義の女不忠の男まつ此の如く打つて見せんと。御座の疊を背打にたゝみかけて七つ八つ。はた〳〵と打付け。ハア、心地よし長慶。汝に未だ寢間を見せず。一獻酌んで氣を晴らさん。サア來れと召連れられ。簾中深く入り給ふは フシにが〳〵しくも笑止なり。地御臺御氣も亂るゝばかり。エヽ口惜しや我も大納言の娘。腹立ちや不義といはるゝ此の無念。よし死なば死ね無實負うでは死ぬまじものと。駈入らんとし給ふを。ア、御尤さりながら。詞酒色に溺れし我が君御心蕩けし上は。理を申す程非に落つる。萬端藤孝に御任せ。これ造酒之進。汝と清瀧夫婦の約束あると聞く。地然れば麁略あるまじ。清瀧が局に御臺を忍ばせ隨分守護し參らせよ。承ると對の屋の フシ馬道を忍び入りにけり。サア惡入道が退出を待受け。手をすらせんか但御前の對決か。藤孝が一所懸命と駈出でかけ入り肺肝を碎き待つ所に。奥より出づる女の影ヤア傾城の大淀。詞左京様。藤孝様と尋ぬる聲。地藤孝是にと立寄りざま。左の太腹一太刀ぐつと刺すも抉るも一度の早業。うんとのつけに七轉八倒押へて上に乘りかゝり。詞汝故に幾人か殺されし人の苦み。地よい物か惡い物か此の劍に思ひ知れ。惡鬼毒蛇の變化にもあるまじ。人殺すを好みもせじ。三好入道に賴まれ謀叛の加擔人な。吐かせやつとひしぎ付くる。詞アヽ〳〵藤孝様。お名を呼んで來るは。なう其の事を申さん爲。在京の武士御所中の侍。皆入道に一味して。時節を見て。義輝様を殺さん〳〵と。様々怖い事ども。其のお氣もつかずうか〳〵と。お命は。風吹く夜半の燈火。地アヽあぶな。アヽあぶなと。危ぶむ私が。フシ心の。やる方なさ。藤孝様に知らせたいとは思へども。お側を離れお次の間へも出されず。いつそ私が惡人になり。愛想盡きて追出さるゝか。御意見申す人あらば。其の時萬事打明けんと女の果敢ない智惠だてにて。ひよつと一人殿様の御手に掛けさせ。につと笑うた其の時の。心の内の苦しみは。切らるゝ人の百倍とは。神ならで誰か フシ知るべきぞ。それでも諫むる人もなし。詞揮は外様へ知れぬかと又殺させても沙汰はなし。地情なや蚊を殺し。蠅を殺すも罪科。況して同じ人間悲しや思はぬ殺生と。自ら浮かぬ顏色を。機嫌直しと又殺さるゝ。其の度々の人

の恨み積る因果の惡業。生きながら額に角も生え。身に鱗も出來ずして今日迄君に思はれしは。冥途で苦患見せんとの佛の罰か情なや。詞賤しいさもしい勤めの女。將軍樣に枕を並べ。地文武二道の藤孝樣の御手にかゝり。詞何の命が惜しからう。地私ゆゑ死んだ人々の。恨みの念も晴るゝ爲弄り殺しにして下さんせ。御臺樣へ言譯し。御憎しみをゆるしてたべ返す〴〵も殿の事。〳〵をとばかりにて フシ遂に。果敢なく息絶えたり。思ふに違ひ神妙の女と袂絞つて立つたる所に。御所中騷ぎ仕丁下部聲々に。何かは知らず軍兵四五千騎。色々の旗押立て御所の四方に取圍み候と。いひも果てぬに追手の御門。貝鐘鳴らし鬨の聲 フシ天地も裂くるばかりなり。地案に違はず入道めが年來の企て。君の御機嫌惲り手を延ばして後悔至極。一先づ御臺を片付け。入道めと組まんずものと大音上げ。詞敵一味の侍畜生はともあれ。中間馬取にても。御恩知らば切つて出で駈散らし追散らせ。地命を捨てよと下知をなしてぞ駈廻る。主君の命に任せ冷泉造酒之進。御臺所の御手を引き清瀧も刀ぼつ込み。案内知つたる春日表小門の方へと心ざし。足を早むる鞠懸の陰。父岩成主税之介槍提げ。返せ遣らぬと追つかくる。清瀧かけ隔て。詞親子の好みは内證。主從の忠義は世間。末代の恥辱が恥かしい。相手になるが合點か。ヤア養ひ育てし恩知らず。地不孝の女郎受けて見よと。突出す槍をはつしと撥ねてつつと入り。岩より堅き岩成が首宙に打落し。サア親もなければ我一身。主君と夫に任せし命。冥途迄もと フシ吃き打連れ落ちてけり。地猶も近付く鬨の聲。つるべて放す鐵砲矢叫び。御束帶所の遣戶より長慶入道つつと出で。帳臺に向ひ御殿も響く大聲。詞愚かなり義輝殿。一子の首を切つて誠の心を見せ。色を勸めて氣を奪ひ。五年以來仕込んだる謀計武士といふ武士は我が味方。足利十三代の榮華は夢の覺め口。目覺しに冷やりと切腹切腹。地サア大將は籠中の鳥。八方より燒討に。蟻の子迄も餘すな洩すな切入り責めよと下知すれば。一味申して初戰適れ御用に太刀長刀。拔きつれ〳〵六千餘騎面もふらず切つて入る。味方は僅か御小姓御茶道下侍五十騎許り。中にも一騎當千の。藤孝大鷹熊鷹の雛子を。驅くる勢ひに。遁れた驅武者葉武者ども。追つつまくつつ入り亂れてぞ 三重〽戰うたり フシ敵は多勢を。地七手に分け火の手を上げて取圍めば。味方は殘らず討ちなされ彌猛に逸る藤孝も。今は是迄長慶がな來れかし。遁さじものと眼を配つて立つたる所に。何時の間にかは松永彈正。足利累代二つ引兩の御旗。郎等の須股權平太に擔けさせ。其の身は御首太刀に貫き大音揚げ。詞大將軍源の義輝公を。松永彈正久秀が討取つたり。地勝鬨上げよと呼ばはつて徐々と陣に入る所へ。左京の大夫藤孝大白牛鬼の怒りをなし。一文字に

取つて返し無二無三に打つてかゝる。そりや淺川よ藤孝よと主人が引けば郎黨も。我こそ先にと逃げて行く。返せ松永後を見するか彈正と。追詰め〲追詰められて度を失ひ。逃げ迷ふ權平太が綿噛摑んで。大地へどうとぶちつけ胴骨をしつかと踏まへ。持つたる御旗引つたくり差上げたる其の勢ひ。あれ餘すなとどつと寄る。ヤアものものし手並は最前知つつらんと。當るを幸ひ人礫取つては投付け投散らし。板屋の霰野分の風。木の葉の飛ぶが如くにて フシあたりに近付く敵もなし。地梁帝が龍を投げ項羽が山を拔く勢ひ。功名譽れも何かせん義輝公の尊骸に。首なや。果敢なや力なや。松を離れし藤孝が命は蟬の羽よりも輕く。惜しからねども存らへて主君の仇を討つ迄と。心の岩石鐵壁も碎けて涙はらはら〲。溢るゝ玉か唐土の。珠玉を鏤め日の本に。たくみに匠が建並べし。御所も一時の雲霞煙に。紛れて落ちて行く。

第三　旅の腹帶

フシ あらいたはしや。室町の。室に咲く花はや散りて。御臺所の御身さへこぼれかゝれる當り月。清瀧が懷に。はやめ藥やあま物や。五更の天も フシあけぬ夜に。造酒之進が御供にてオクリ都を。忍び行く道の。本フシ歩み苦しや足利の。フシそれとは見せぬ。とりなりも。餘の行く人にくらべてはかけうづ高き月の顏。雲井を餘所に天離る。フシオクリ御有。樣ぞ。哀れなる。フシ昨日は御所の。物見より。望遠鏡にて見し目覺えの。東寺の塔は問ふ迄も。及ばぬ景の秋の山戀塚四つ塚跡に見て。いつか歸らん鳥羽畷。今ぞ小枝の。橋柱淀の。大橋。フシ小橋をも。朝日に連れてと渡れば波に五色の。玉散りて水に錦や。流るらん人目。づつみの。松並みて千歲の下は通れども。赤子產まぬ間は存らへて有るが。有るにも定めなき。女は生死のさかひ川。鳩の峰こし詠むれば。和光の影は。しん〲と。日も陽炎の夏木立。江戸巖頭峙つて山聳え。谷巡り諸木枝を連ねたり。取りわけ神の。御誓ひ。他の人よりも我が人を。護りもかたき石清水。今濁の世の源を再び歸りすみ馴れし。詞八重九重も遠ざかる。なごり施法の涙の玉。ひろへば道も捗取りて。橋本近き八つの鐘。盡きぬ歎きの澱りが。心わろけに御臺所。地行惱み草に平伏して御息ら澀え〲に。夫婦驚き集ひ寄り樣々勞り奉れば。折こそあらめ御產の氣づき オクリやす〲。うみの產聲は卵の中の頻伽鳥。妾は玉の男御子。歎きの中の悅びと。世の言草も是やらん。シテ地アゝ扨果報拙き若が有樣やな。御所を離れて道の邊の空に一重の覆ひなく。地に膝入るゝ宿りなし涙產湯に引かせんより。柴折りくぶる便なき。是が征夷大將軍左大臣義輝の。總領君の誕生に。あるべき事かあさましやと溢るゝ。涙上々も。悔みは。女の習ひかや。ワキ詞冷泉立寄りいやとよ。往昔の例を引けば梓弓。正八

幡大菩薩筑紫に御生の折からも。石上樹下の吉例あり。地殊更所も男山擁護の畔程近し。御壽命は高良の神。武内宿禰が三百餘歳を奉り。詞御果報は御先祖尊氏公にあやかり給へ。地產屋は自然と天照す天に隔てのなき名將。上を踏まへし國土の主此の君ならで誰やらん。ヲヽ目出たしと壽きて。二人御臺所の御手を取り。勇み行方も天の川 フシ思ふが中の船ならで。フシ標野川岸。曳船の。綱手にかゝる青柳の風にひら〳〵牧方を過ぎ佐太を越え。歌川を隔てて向ひを見れば。里の賤の女ナンテモ〳〵襷かけて跣足でからげて水にひつたり布晒す。細布さらしのフシ里を過ぎ。けさ出の旅のひと日だに。憂き事の數身に積り時を。重ねてこれやこの。名にのみ聞きし大江の岸。渡邊の岸打過ぎて福島。にこそ 三重へ 辿り入る。

地 山の奥にも。フシ鹿ぞ鳴くなると。地 市にまじはる佗隱者。冷泉造酒之進房平が父文次兵衛長房。小知に腰は折るまじと水草淸きわたのべや。福島に閑居を占め妻は渡世の塗桶に。丸綿ほんぼりひたひ綿。色々ありと看板の綿を摘むには口傳も入らすオクリ手品。一つのひぢ綿や。引いて伸ばしてふは〳〵と袂の下の富士の雪。フシ婦人の能こそ優しけれ。地造酒之進房平誕生の若君を。淸瀧に抱かせ御臺所を介抱し。福島に尋ね着き内を窺ひ。詞則ち親父文次兵衛が宅。渡世の爲町人同然の體ながら武士氣は今に變らず。父母とも行儀づよき氣質。淸瀧と我等密通の夫婦などといふ事と。耳へ入らば慥かに勘當。鼻息にも地出すまいぞと。嚙く後の細道より。萬事無心なり一釣竿。三公にも替へず此の江山と口ずさみ。釣竿擔げ歸るは父長房。見向きもせずつつと入る呼び返して申し〳〵。詞我等造酒之進。御勇健の體を拜し大悦至極と跼へば。ムヽ造酒之進な。今度京都の騷動此の邊とても靜かならず。我も錆鑓提げ馳着け一働きと思ひしが。人も賴まぬ高名だて。知行ほしげに無益の事と。流れに耳を洗ひ樂む所。地君の大變おこことも嘸一方の御用に立ちつらんとこそ思ひしに。只今は何の用。詞眉目の好い京上臈をひけらかしに來たか。此の近邊は三好が領分。腰拔の片時も足を留むる所でなし。地早逃げ去れといひ捨て入らんとす是々申し。詞豈か我が身を遁るゝ爲に候はず。是は忝くも義輝公の御臺所。道にて若君御誕生といひも果てぬにヤレ聲高し。出來した〳〵。先づ先づ是へと地招き入るれば。母も聞付け出で迎へ。御代が御代にて輿車の御成より。世の數ならぬ浪人を御賴み。名字の譽れと蹲踞し フシ上座に移し參らする。地御臺所も御淚。思ひもよらぬ飼犬に手を喰はれ給ふ御運の末。存らへ殘るも口惜しながら。身二つになる迄と劍の山を遁れしも。造酒之進の働き賴むは親子夫婦ぞやと。喞ち給ふぞいたはしき。地文次兵衛謹んで。詞人間の吉凶天地の運は絢へる繩の如く。只今危

難に迫り給ふといへども。正しき若君ましませば當家の御運は一陽の春を待つ。雪中の梅に異らず。何條三好づれ一國に威を振ふとも。天下に比ぶれば雀の角、鼠の牙の災何事か候べき。地嬰兒ながらも義輝公の若君。三好誅伐の御旗揚げ給ふとある程ならば。五畿七道に跱ち立つたる武功の勇士。弓箭の名を揚げ祿を子孫に傳へんと願ふ武士。御味方と申さんに面を振る者一人もあるべきか。詞此の邸の隅にしつらひ置きし學問所の萱屋。暫時が程の御安座所案内申せ女房。燈火も細うして藪越しに覗かれなと。地義者の詞に心とけ。御臺所清瀧もオクリ誘ひへ奧に入り給ふ。地文次兵衞道南之進を近く寄せ。詞御臺若君は身が請取る。そちは彼の海上太郎を尋ねて。阿波淡路の軍勢を驅集むる一思案。然るべしといふ所に。地與さめたる氣色にて母立出て。詞なう／＼聞けばあの清瀧といふは敵も敵三好が家老。岩成主稅が娘なりとの物語と。地聞くより父も驚く面色。詞いや／＼お氣遣ひない事。幼少より御臺所に仕へ。女に稀なる忠節。親にも逆らひ岩成を討つたる程。義を守り道を知つたる女と。いへども猶眉を皺め。左程道を知る女親に不孝はよもあるまじ。地一度は主君に忠を勵み又一度は。親の仇を報い志を遂げ孝の道を立つる心と見た。さなくとも一門廣き岩成。殊に此の邊三好が領分。緣引手引を以て誑らば。流石女の誑られ。味方の大事となる時は一生の不覺我が武士は廢る。詞危きをせざるは軍法の第一。不便ながら其の清瀧。切つて仕舞へば寢覺やすく氣遣ひなし。地呼び出し挨拶する中道南之進。一刀に切つてのけい。それ女房呼んで是へ同道と。行燈押遣り座を組んだり。くわつと氣上り顔は天火。詞シテそれは只今か。聞取る程御臺所もお氣がたるむ只今々々。ハツあんまりな御用心。忠節の味方一人失ふは後悔の基。此の女二心なきは我等請合と。地いはんとせしが我が戀路。歎き父に悟られじとフシ包みて詞を控へける。詞いや／＼若い者の知らぬ事。佐々木が藤戸の浦人を殺せしも深き軍法。親子かくてあるからは。生中女の味方一人などあつて益なく無うて事缺けず。女房ども早う／＼。地是へ呼び出し口を問ひ。某が目交するを合圖に眞二つに打ち放せ。刀の刄に覺えあるかぬかるな／＼。あつ／＼といへども一世の身の難儀。心騷ぎ氣もどまくれ。詞刀は業物研立なれど。逢に女を試して見ず。萬一清瀧が觀音の變化ならば。刀が折れはせまいかと。地詞てん／＼上調子。エヽ連に立つ母者人も早合點と。奧を見遣れば清瀧が母に誘はれ來る有樣。有無に責死に來る。エヽ儀に御臺の御用もがな。暫時の命も延ばはれかしと。フシ遣る瀨遣る方なかりけり。地さあらぬ顔にて文次兵衞。詞清瀧殿とやら。御身は岩成主稅娘とな。忠義といひ乍ら。肉身分けし親。一門衆もさぞ懷しからんと。

地 心を引き見る其の中にも造酒之進は我が親の。目交が夫婦別れぞと。胸に迫るは涙と念佛。清瀧何の心もなく。詞 恥かしきお尋ね。私は元岩成が實子でなく。父母知れぬ捨子を。東寺の四塚にて拾ひ取りしと申せしが。地 殺さんと迄致せし故。恨みこそあれゆめ／＼慕ふ心はなく。所縁持たぬ果敢ない身頼みまするとと涙ぐむ。詞 イヤそれも岩成めが僞り。下心に何ぞ巧あつて。證據印もない捨子といひなし置きつらんと。念を入るれば。いや／＼嘘であるまい印には。襟に縫付けありしとて私にくれ置きし。守本尊一寸八分の不動樣。地 包みし袱紗に書判すゑて年號月日。本の親の形見と起臥肌をも放さず。則ち爰にと取出す。父母驚き押し開き。見れば見る程覺えあり。なうそもじを産んだは此の母。家重代の御本尊。此の判の筆者も是。眞實の父樣。なう／＼再び娘悦んだこれ造酒。詞 其方の妹あれ兄ぢや。地 苦勞しつらん可愛やと。夫婦引寄せ／＼歎けばうろ／＼夢見し如く。造酒之進は猶仰天。本の父樣母樣が。なぜ捨てゝ下さんしたと。父母に縋り付き恨み。泣くこそ道理なれ。詞 チヽ尤々。赤子に何の憎しみあつて捨てはせぬ。おぬしが生れしは造酒が三つの年。地 浪人のうき世路乳呑子二人の養育心に任せず。兄弟共に餓凍えさせんより。女は果報もある物と捨つる妹捨てぬ兄。可愛さ大切さ。何れ愚か フシ ある物ぞ。岩成が實子ならば造酒之進首討てと。たつた今合圖迄定めしに神佛の控へ綱。詞 やれ／＼危い加減に子を拾ひ。子は命を捨うたな。地 恨んでくれなと撫擦れば。扨は造酒樣は。眞實血を分けし兄樣かいの。ハアヽ。地 ハアツとより外詞なく。尻目に見やる目に涙。兄は顚倒五體に汗。結び初めたる困果の契り。悔んでも悲しんでも切れも離れも中々に。綱にかゝりし比翼の鳥の フシ しがらむ緣ぞあさましき。地 父母悦び。皆人らしう生立ち忠節盡す其の冥加。

地 親子兄弟廻り逢ふ御臺所も應御機嫌。先づ御前へと夫婦娘の手を引いて。詞 造酒之進は是にて四方に氣を付けよ。床の小銃に彈丸藥込んで置く。此の近邊は三好が百姓。欲に耽る人でなしの畜生ども。ごそともせば撃て／＼と。地 外を云ふにも我があて事かと。放さぬ鐵砲胸板に オクリ はたと〵受くるぞ不便なる。地 造酒之進只一人我と我が身を見廻し。詞 エヽ見事手足五體は人間と産み付けられ。征夷大將軍源の義輝公の。御直の御詞にもかゝりし。冷泉造酒之進房平といふ侍が。地 思はず兄弟夫婦となり四這ひに這ひ。尾の生えぬばかりの畜生界に落ちたるな。エヽ成り果てたり口惜し。口惜しと喰ひしばる齦。握る拳の爪際より。搾り出す血に泣く涙。フシ 錦を解く如くなり。地 よし／＼御臺若君を父に渡し置く上は。心易し生面下げて存らへ。親一門を犬鶏の眷屬となさんより。我一人畜生になつて身を果し。氏家名は汚すまじ是迄なりと

刀押取り。詞アッァ是は親の譲りの備前清光。地畜生切れとて譲らぬ物と又脇差に手をかけ。詞ヤ是も主君より拜領の行平。此の大小脇ばさみ物の具固め。大事の御陣の眞先駈け。敵軍の大勢を捲り立て馳散らし。打合ひ。切合ひ。切結び。名ある敵を取つて押へ。首取れとてこそ拜領もせめ譲りもせしに。地さはなくして畜生の腹を切る。二腰の銘の物末代武士の手に取らず。長く日本の廢り道具となさん事。よつく太刀刀の冥加にも盡きたりなァ。首縛り舌を喰ふも思へば人間のなす業。畜生の自害手本なければ如何せん。扨あさましき因縁やと。獨言して咽び入り。身を掻きつめりフシ歎き伏す心の。中ぞいたはしき思ひに。たきる清瀧が。地心を制し押へかね走り出では出でたれども。恥かしや抱きしめてあられぬざれのかの睦言の。假に夢にもならばこそ今は兄樣妹の。禮儀もあり指合を。苦しや側へも寄りにくゝスエテわつとばかりに。

叫ぶ聲。地兄も振上げ見かはせば衛士の焚く火は顔に燃え。身には消えつゝ玉の汗昨日の床に引きかへて。今日の逢瀬は背中どし フシ泣くより外の事はなし。フシ折もこそあれ。妻戀ふ猫の二疋連れ。庇の屋根に呼び交し。フシ泣きこがれ。歌戀に牡丹の眠りも覺めて。軒の柱をおりつ。登りつ戯れ狂ひ。人目も恥ぢぬ フシ聲々。地涙の眼に造酒之進乾度見遣り。詞牝牡同じ毛色は彼奴も兄弟。飛鳥にあらざれば飛鳥の心を知らずとはそれは人間。畜類は其の氣を知る我を己が友とする。エヽ無念や是非もなや。地見る目も憂たて鬱せしと吹き消す燈し。あの猫も兄弟かァヽ羨しい。兄妹夫婦と契りても。人も咎めず嘲られぬ。猫になりたい〳〵こちや猫ぢやといひつゝも。側へ〳〵と立寄るさし足。兄は遁れん〳〵とそろり〳〵の盗み足。屋根には猫の妻戀に焦れ狂ひもつれ合ひ。軒の筧を踏み外し庭の古井へ二疋つれ。たんぶと落ちたる水

の音。なう悲し可愛や助けてや遣りたいと見れども水の底深く。暫時はあがき苦みてフシ遂には聲も絶果てたり。肝に應ゆる猫の自滅。刃に懸らず首縛らず舌をも喰はぬ是畜生の自害の手本。何存らへん今宵の命淵にもあれ池にもあれ。行きあたるを我が自害の場と。思ひするても妹が。離れじ退かじ造酒樣と。聲で探すを外せば尋ね。四邊は暗闇戀の闇側にあるとも見ず見えず。知るべは足音行違ふ。袖の追風鬢の香をとめて。是ぞと取付くを引外して突倒し。走り出る門の口。私もなうと又取付くを振り放し。縋れば放れ寄れば退き。井堰にかゝるあら鵜繩縺れ。纏はれ三重〳〵しどろなる。フシ道とも畦とも。地案内知らず橫へ切るれば先へ抜け走り過ぐれば追ひ續き。纏ひ繋がれ振りほぐされ野道田道の幾筋か。繩の縺るゝ如くにて根からむ草に蹴躓づき。思はず二人どうと据り始めて。フシ息をぞ繼ぎにける。地清瀧猶も泣きやまず。

詞エヽむごい造酒樣なぜ俄に其の樣に。疎み隔てゝ下さんす。地畜生道に落ちしとて私が科でなく尤お前の科でもなし。過去の因果づく一人お果てなされしとて。夫婦と契りし浮名は死に替りても削られず。兄の一分立たねば妹は猶立たず。生きてゐよならゐよ程に。一人存らへかう〳〵せいと指圖して下さんせ。詞恥かしい事のありたけ打解け仕舞うた其の跡で。兄弟のさし合ひ喰つたとて何の詮もない事。地犬ともなれ猫ともなれ來世迄も夫婦の中。死ねるといふ今になりさし合ひ所へ行く事かと。スエテ抱き締めてこそ歎きけれ。詞ヲヽいへば其の通り。無念や造酒之進狼狽へたり。一人死なうが二人死なうが汚れし惡名雪ぐにもあらず。如何にも〳〵二人一所に死んでくれん。爰はいづく。地ヤあの一村の黑みこそ覺えあれ。天神の森宿所とは二十町餘りも隔たる。詞是々草叢に星の映るは池水。なう此方にも池水あり。地誠に願ふ所畜生の自害水に行當る。天の導き深さ淺さを試んと。石を拾ひ打込み打込む濁り江の。濁りも深き水の響きお身は其の池我は是へと立別るゝを引き止め。詞コレまだ恨めしい事ばかり。地手に手を取つて同じ水底同じ水が飲みたいと。又泣き出せばヲヽ可愛や道理々々。詞我もさは思へども死切り死骸も浮ぶ時。兄弟とも知らず夫婦とはなりたれども。流石侍人間の道ならぬ恥を知り。死を別々にしたりと父母へ申譯世上の稱へ。地水に物は書かれねど心の誠を現せば。也水は我が書置ぞや。詞此の上着は家の紋附お身が上着は御臺所召下しの拜領。何れも畜生の死骸に捲くは冥加なしとは思はぬか。地アヽ尤いざと帶を解けども二世の契りは猶引きしめて。君とならびの池にこそ身をも投げつと詠み置きし。古歌の名所にあらねども是も夫婦が竝の池の。岸の立木に打掛け〳〵。サア西は斷うよと指さす方の畑中。走來る松明後の方より小提灯母の聲にて。詞それへ見ゆる松明は文治殿か。おうい〳〵の聲々。地南無三寶死損うては恥の恥ぞと押分けて。隱るゝ蘆のふしの間もッシ待つ命こそ短かけれ。地提灯片手に御臺の御手引いつ引かれつ三人一所に走り寄り。詞間もなき中近邊に居ぬからは最早尋ねまい。兄も妹も一器量ある者ども。思はず畜生の交りに名を穢し。恥かしい口惜しいと思ひ詰め。家を出で生きては居ぬ筈。御臺樣にも若君抱きまし。恐れ多いお氣扱ひ。お供して早歸れ。エヽ惜しい奴等殘り多いと涙ぐむ。アヽ氣の落つる事いうて下さるなさう短う思はずとも。詞念晴らしに京道を尋ねまいかいの。ムヽそれ〳〵死骸を見屆け納めて其の後の覺悟。地皆々此方へと行き過ぐる。提灯の光に映る紅裏。詞是々何か爰にひらめくは。地なう悲しや夫婦の衆清瀧が小袖が枝に掛つてあるわいの。詞ヤア此の木の枝に掛りしは造酒が小袖。地扨は二人が此の池へ身を投げ

しに疑ない。死なずにも濟む事を差詰まりし心故。可愛や果敢ない死をさせし。せめて體が浮み出で死顔なりとも見せてたもと。御臺諸共池を廻り駈廻り。水を叩き草に臥し聲も惜まぬ口說泣き。勿體なや父母に孝行こそは盡さずとも。子故の難儀憂へをかくる皆逆樣と。不孝の罪を悔みの涙死おくれたか面恥と。猶身を隱す蘆邊より滿ちくる。潮の如くなり。地思ひ極めし文次兵衞さしあたる哀れに取亂し。涙に沈み居たりしが。池を覗いて大聲上げ。詞エヽ殘念や半時遲かりし。ヤイ造酒之進假令武家に生れずとも。男たる者の死骸とならば腹を切るか。切先を食へ貫かるゝか。下郎とても吭を搔く其の法を知らぬ若者にはあらねども。地不便や泥水を飮んで身を果せし。最期の心を察するに。詞思はず畜類の境涯に落ちし故。太刀刀の冥加を恐れ氏家名の恥を愼み。紋附の上着迄脫ぎ捨てし神妙さそれこそ人よ弓取よ。親は子に及ばぬ者人と思ひ御臺所若君を預けて死んだか情なや。我が心の無念ゆゑあつたらしい侍を殺してのけた女房。なう可愛や娘も心器用者。恥かしいと思ひ詰め盛りの花を池の藻屑となし果てたと。夫婦手を取り泣き叫べば。御臺所も聲を上げ百人にも千人にも。稀なる忠義の侍男勝りの清瀧に。今別るゝ若君の生先御運のあさましやと。御身に迫る御涙蘆の蔭より二親の。歎きを歎く フシ兄妹が涙。間近き蘆垣の隔つる。中ぞ哀れなる。地文次兵衞涙を押へ。花に淸香月に陰侍は氏素性。水底の魂魄も能く聞け御臺所も聞召せ。詞元來造酒之進と清瀧とは胤腹各別。まんざらの他人なれば夫婦となるに障りなく不義にもあらず。某が僞には養子でも又拾子でもなく。親子となりし因緣疾く語り聞かせで叶はぬ事。地時を延ばし日を延ばし一大事を怠り。今後悔の憂へを見。浮世の泥に醉うたる文治兵衞は四足にも劣つて。詞車の轍に彼の三升の水に濁ゑし。地小鮒雜魚とは我が身の上と。スヱテはら／＼と泣きければ。はつと驚く造酒之進。さては誠の親ならぬ親の高恩と フシ手を合せてぞ聞き居たる。詞エヽかひなき今の昔語。彼が眞の父は周防の國の太守。大內義隆の家人我等とは古傍輩。しかも同年駒形一學兼綱といひし覺えの武士。母は造酒之進を產み落し七夜の內に相果て。それより間もなく是にある我等が今の此の女房。未だ十七歲子の養育とて呼び迎へ。後つれの妻と定まりし其の頃は大內の世盛り。地家中は碁將棊茶の湯蹴鞠歌連歌。固より一學優男。花の本の門弟にて連歌を好み。同國朝倉の八幡宮月次の會の歸るさ。詞時しも五月上旬の五月闇右は並木左は小川。降りしきる五月雨に奴が提灯打消し。目指すも知らぬ後より如何なる遺恨何者の業とも知らず。聲をもかけず切りつくる。流石手利の一學連歌の附句にや案じ入りけん。拔きも合せず敢なく只一討ちに

討たれて遂に此の世を去り。早二十二年の光陰。思へば隙行くフシ駒なりし。二十に足らで孤兒を抱へさまよふ女。傍輩の好誼忍び難く。十五にならば親の敵を尋ね求め討たせてたべ。ヲ、討たせんとの契約にて。斯く夫婦となり國を立退き浪人し。割なき中に清瀧を儲けしが。兄は生先大望ある大事の男子。此の乳房天の與へと棄の中より水子の娘を捨て。實子に替へて育てしは約束違へず敵を討たせ。妻の本望一擧が亡魂の

修羅の妄執晴さんと。明暮心を碎きしに。詞思はず淺川公の御詮據なく。十三の春より召出され奉公人に勝れ。膝元去らずの出頭。過分の所領に付けられ時めくを見聞くにつけ。日頃の存念一月延び一年延び。忘るゝともなく武士の道に迷ひ。何時でも敵は討たるゝもの。まだ知行まだ立身させ。天晴國郡の主ともなさんと祈りしに。地國郡は扨置き二十間に足らぬ泥水の。主となつたる不便さよ。野狐が油鼠の餌に釣らるゝ類。我も悴が知行

の餌にかゝつて。侍の本意を忘れ約束違へし。人の皮着た野狐の最期場は此の池水。詞是女房其方は人間なり。我が最期を見て前夫の敵を取つて本望遂げたりと勇み。地御臺所若君に忠義撓まず。南部の叔父君を賴んで御運の到來を待つべしと。いひ捨て池へ飛び入るをなう狂亂か悲しやと。引止むれば蘆原戰ぎ。詞勿體なや暫し〳〵と地押分け〳〵走り出でたる兄妹。ヤア生きて居てくれたか出來した〳〵誠の黃泉歸りぞと。母も御臺も縋りつき フシ嬉し泣きこそ道理なれ。地兄は草に平伏し頭も上げず泣き居しが。死損ひし面目なさ。出後れ致しお心惱まし歎きをかけ。重々の不孝申上げん詞もなし。詞扨我等には父母四人あるよ由。承つて驚きしさりながら。七世の父母の恩より今御兩所の御高恩。塊に須彌山較べて比べ難けれども。御契約の筋を立つるも一つの孝行。地時を移さず討つて捨て實父の孝養。今の父母の本懐を達するは易いこと〳〵。詞母じや人申し尤敵今は名をも變へつらん。元の假名實名。若し住所知るゝ手掛りあらば。地よし虛說でも聞きたしと早雄の血氣盛り。そゞろに母は泣き出し愚かの事をいふ人や。名も在所も知る程ならば何しに二人の夫を重ね。うか〳〵と手を延ばさうか。稚き其方の小腕に刀を持添へさせても此の母が。中々人は賴まねども。詞何のあてもない故文次殿へ苦勞をかけ。地二十餘年以來契約とは フシいひながら。孤兒の養育敵を聞き出す心遣ひ其の恩は如何許り。今より其方成替り敵を討ち。親々の恩を報じてたも。二親さへあるものを又二親の孝行。詞苦勞めさるゝいとしやと スヱテ 又さめ〴〵と泣きければ。詞女房泣くな悅べ。敵の住所本名慥に知れたぞ。ヤアゝそれは何處の何者。チゝ駒形一學を討つたるは當國當所の住人。冷泉文次兵衛長房。ハアゝハッハッ地とばかりにて女房膝を立て直せば。御臺所は氣もきえ〴〵。兄は呆るゝ妹はやはか親は討たせじと。兄が目色に目をつくる驚くばかり一つにて。四人四つの心々 フシ氣色。變つて見えにけり。地文次一人は色も變ぜず。詞今に及んじ無用の詞數なれども。一學を討つたるは喧嘩でもなく。元の起りはあの女房。一家中に沙汰ある若盛りの艷色。我も二十三妻は無し。あはれ雁の翼もがなと。焦れてもいひ寄らん便りなく。幸ひ一學あの女房に知邊あり。詞只管に賴んで文を認め懷中し。逢へば却つて一學が。詞エゝ我に本妻なきならば。彼の娘を娶らんものをと戀話。地此方は後手になり空しく歸るは幾度か。書捨ての玉章千束に積り。胸に思ひの滿つる折しも。詞一學が先妻産後に死し。忌の中より呼取り婚禮。無念にも妬ましく堪忍ならず。手もなく討つて思の儘に夫婦とはなりたれども。地思へば劍と劍を抱合せたる女夫合。それとも知らず我を賴みに馴れ馴染むいた〳〵しさ。始の戀に百倍し

たる苦しみ。胸に包んで二十年來時かな來れ。造酒之進に討たれて朦霧を散ぜんと。待ち了せたる今月今日一生の懺悔是迄。詞サア討て造酒之進。ヤイ淸瀧親の敵遁さぬなどと。造酒之進に指でもさゝば勘當。先年棄てしも眞實は此の所存。サア討たぬか造酒之進。地腰が拔けたか怯れたかと迫られても。フシたゞ伏し沈み泣き居たり。詞ヤ我を討たずば汝武士は立つまいが。如何にも討たれしも親討つたるも親。地親の恩を辨へ知つて武士が立たずば立たぬ迄と。腰の廻りかなぐり拔き大小ぐわらりと投出す。母立上り刀押取りするりと拔いて聲をかけ。詞夫の敵文次兵衛恨みの刀請取れと。地飛びかゝつて眞甲耳の根迄すんばと切付け。詞サア敵討の儀は是迄。一學殿とはたつた半年の馴染。なうお前とははや二十二年の馴染なれども。武士の娘に生れた因果。地樣々の御苦勞請け恩知らず人でなしの此の女。犬畜生と思うて免して下されと。わつとフシ叫び伏轉び。あさましや憂たてや敵を討つて貢はん爲に身を汚し。夫を重ねし其の敵は誰ぞ。枕を並べ肌を觸れし後の夫。貞女の道を立てる〳〵と思ひしは皆道に背きしか。神に憎まれ佛に捨てられ。閻魔王に罪を問はるゝ時。如何な富樓那の辯舌もスヱテ何と言ひ拔け遁れうぞ。畜生の身の果見置いて娘あやかるなと。切先喰へ眞逆樣池へだんぶと飛び入つたり。人々是はと泣き叫べばよろめきながら文次兵衛。詞男を害し其の妻を娶る畜生殘害の此の體。地燒くな埋むな鼈の餌食になれと並びの池へどうと飛込む、左手の腕造酒之進確と取り。詞とてもならばお腹めせ御介錯は私と。地引上ぐればくわつと睨付け。詞いはれぬ肝精。汝が世話は御臺若君の御事ならで。日本に用はなし。地兩人忠義を忘るゝなと水中にて腰刀。拔くより早く我と我が腕の付根を切つて放す。胴は水底陸に止めたる其のかひなき。共に沈まん飛入らんと。慌てあこがれ裳を浸す浮草隱れ。あれ〳〵父よなう母樣なうと叫べば共に鳴く蛙の聲を力に抱上げ〳〵。抱へ引上げ身を付け肌に暖めても。其のかひなみの春の池フシ體は氷と冷え切つたり。地猶抱寄せ搔寄せて今目前の三途の川。共に瀕ぶみと歎けども忠義忘れぬ武士の。遺言深き濁り江に涙汲み添へ立歸る。暫しの敵も來世の女夫。暫しの兄弟此の世の女夫名は永き世の女夫池。池の玉藻を亡魂の形見に。茂る蘆眞菰語り傳へて言の葉の寄るべの。水とぞなりにける。

第四

地背くとて雲にも乘らぬ物なれば。心ぞ緣に引かれ行くよし足曳の大和の國。昔の京と奈良の里興福寺の片邊に。身を墨染の庵室あり。門設けたりといへども常に鎖せり。垣は苫蒸し蔦かづら。朝は亂るゝ萩の露。平等眞如の玉を磨き夕は。フシ戰ぐ荻の風。怨憎會苦の夢を破り。地閑窓の。

月に嘯けば。十萬の億地。掌の内に輝けり。時しもあれ夏も過ぎ。ホフシ木の葉の時雨秋闌けて。道は絶えけり。山里に。旦暮誦經の聲ばかり。スヱテ勿體なくも住人は。地武將義輝公の御弟義昭入道慶覺の。世を遁れます御庵 フシ殊勝にも亦いたはしゝ。地斯くて淺川左京之大夫藤孝。御臺所に巡り合ひ御誕生の若君を。清瀧夫婦に介抱させ。海上太郎が案内にて庵の外に耳を澄し。詞嬉しや御經の聲の聞ゆるは御他出にあらずいざ 地御 案 内 申さんと。入らんとすれば太郎暫しと押止め。詞某此の間申すには。早く御還俗あつて三好入道を討ち滅し。家名の恥辱を雪ぎ兄君の修羅の妄執晴らし給へ。且は御先祖の孝行と繰返し歎きしかば。とつくりと分別して返事せん。其の内參れとの仰せ。地還俗氣がつけば珍重先づ某一人入り。返答よくば方々も直に御禮。惡しくば重ねて願ひの奥の手。暫く爰にと枝折戸開き。庵室の庭に頭を下げ。詞海上太郎

兼盛參上とこそ訪れけれ。地慶覺御經に餘念なく見やるばかりに詞も掛けず。机に染みたる御顔ばせ海上が氣は苛つ。詞御還俗の否應御分別極まりしか。御返答とぞつかうどなる。ムウ其の事に來りしな。出家の身なれば兄の敵討たぬとて恥にもならず。先祖の孝行後世弔ふより上もなし。分別する程還俗は思ひもよらず。重ねていふな聞く事ない 地歸れ〳〵と宣へば。海上きよつとし。見れば垣の外面にも聞いて驚く顏の色。堪へかねて海上太郎駈上り。御膝許にぐつと詰めかけ。詞我等が短氣かねて御存じ。御返答を生死の境と一心を据ゑたる男。實正詞に違ひはないか。ハテいな事に念を入る。出家侍二言はない。エ、其の根性とは知らいでな。割つつ口說いつ無用の口に風引かせ。腸が燃え返る。家來でない暇取つた。主でなければ 地恐れもないと。机押取り泥坊めとてははつたと打ち。道知らず義も知らぬづく入めとては丁と打つ。音に

驚き藤孝始め殘らず庵に走入り。勿體なし海上。物に狂ふか兼盛と引きとむればいや〳〵放せ。詞生けて置けば修羅の種。浦々島々迄三好殿のお觸〳〵と。足利數代の政道をもどき。入道長慶が參内院參の。馬の口取り奴め迄ひん〳〵と跳ね廻り。いきり廻る面を見れば其のたび〳〵にむつ〳〵と。五臟六腑を捲り上げ。若君こそ御幼稚なれ。興福寺の弟君に還俗勸め。二つ引兩の旗眞先に押立て。地入道長慶が首取つて今の無念を晴さんものと。日月にも佛神にも肝膽碎き願ひをかけ。海上が賴み是一つ。詞酢の蒟蒻の と品付けて臆病第一のけづり廻し。詞踏み殺しておれも死に度いと大聲。上げて泣き沈む。地藤孝涙ながら若君を抱き取り。慶覺の前に据ゑ參らせ。詞是こそ先君義輝公の遺子。日本廣しと申せども伯父君甥君此の外に誰あらん。地誰か守立て後見し御代には出すべき。日夜内典外典に眼を曝し。朝夕善惡忠孝不義を勘辨の御身

なれば。大凡俗の身を以て申し上ぐべき詞なし。所詮還俗の科によつて。無間焦熱阿鼻大地獄の苦みを受くると思召し。此の若君を後見し。御親兄の仇を討ち足利の家御相續。我々が望みを叶へ下さるゝも廣太の御功德。詞サア御臺樣。染々と御歎きなされと。地藤孝が。聲を力に顔振り上げ。夫に離れし鴛鴦の恥しき世のうきねなれども。存らふも子の可愛さ。何事も賴み參らする。賴む〳〵の詞より フシ外は涙にくれ給ふ。地淸瀧夫婦さし寄つて。詞コレ若君樣。伯父樣へござれ〳〵の聲諸共。地何れをそれと嬰兒の。敎へられねど慶覺の。御顔を見てにつこりと笑ふ面ざし目鼻のかゝり。先君に生寫し。不便の者の有樣や。かひなき今の對面やと。スヱテ包むに洩るゝ御涙。扨はと海上進み寄り。詞甥は子伯父は親同然。流石御血筋なればこそ。胴慾な此方にほや〳〵と笑ひ顔。御目にはかゝらぬかいとしうはないか。いた〳〵しうは思はずか。ま一度分別して下され。地あんまりむごいと搔口說けば。慶覺やゝ打點頭かせ給ひ。假令八逆十惡の無量の罪ともならばなれ。地若が風情御臺の有樣方々が歎きといひ。いかでか餘所に見るべきぞ望みに任せ只今より。還俗せうわとありければ。何御還俗とやなう有難や賴もしやと。皆一同に頭を下げ。凋める花に置く露の フシ生き〳〵勇むばかりなり。地慶覺重ねて如何に藤孝。詞足利の家には先祖八幡殿石淸水の神前にて。御元服の折から授かり給ひし小袖といふ。鎧兜を着し敵陣に向ふこと方方も存じの前。其の鎧兜持參せしか味方に加勢の武士は誰々。語れ聞かんと宣へば藤孝はつと赤面し。さん候御鎧兜は將軍御生害の折節。敵入道が燒討に灰燼となつて。土に埋もれしか但し三好が手へ奪ひ取りしか委細存ぜず。又御味方の軍勢は君御還俗あつて。義兵を上げ給ふと告ぐる程ならば。地足利重恩の國主城主夜を日に繼いで馳せ參らんは案の內。御心易かれと申し上ぐれば慶覺くわつと御色變り。詞足利重恩の二好さへ君を弑し。天下を奪ふ賴みなき世の中。慶覺還俗して招くとも加勢の付くは覺束なし。何を以て三好を討たん麁忽なり藤孝。地是非なや數度の軍功譽れを現はし。和歌は古今の傳授を得文武二道と呼ばれし達人。思慮淺くなり果つるも。足利の運命盡き果てしあさましや。佛神にも恨みなし口惜しの世の盛衰やと。怒りの御目に涙を浮め泣く〳〵奥に入り給へば。始めの悅び忽ちに。萎れ入つたる有樣は オクリ目もあて。られぬ フシ風情なり。地海上太郎大きにせき。詞此の頃口手間入れさせ何の詮もない事 地差向ひにて聞き切らんと フシ奥をさして駈け入れば。地藤孝 あつと感じ入り。天晴先君の御弟。麁忽を戒め臍を固うする御氣質。傳へ聞く御先祖尊氏公。鎌倉御發向の餘風名將の萠し顯れしといふ所に。海上奥より走り出で。詞なう御坊は庵

室に在まさず。裏の藪垣切り破つたるは臆病神に引かされ落失せられしに疑なしと。地いへば人々又仰天驚かぬは藤孝一人。詞いやいや屈竟三昧に入る程の道念何の臆病。我々に氣を勵まさん爲の出奔と覺えたり。地諸國の大名を驅り催し。多勢の着到を御覽に入れば御還俗は必定。所詮御臺若君を清瀧に預け是より三人三所に別れ。詞御分は關東美濃路にかゝつて土岐齋藤を語らひ。夫より駿州相州に北條氏康今川義元。甲斐の國に武田信玄伊勢に國司北畠。尾張に織田。彈正の忠信長を頼み。軍勢を催し大和路より攻め上れ。地造酒之進は北國路越後の長尾謙信。會津に葦名佐竹の一黨。越前の朝倉が兵を進め近江の佐々木に手合せして。若狹口七里半より切つて入れ。此の藤孝は中國に至り毛利吉川小早川尼子晴久陶入道。筑紫に少貳。菊地大友龍造寺諸將を語らひ兵船を乘り連れ。〳〵南海西海の湊々に乘入れ〳〵。敵を中に取りすくめんは案の内ぞと歌人は居ながら諸國の手配り。手筈を取つて御武運再び引き起すべき梓弓。家の名に負ふ足利の足を。早めて三重 次第捨てゝも巡る世の中は。〳〵。心の隔てフシなりけり。兄將軍は三吉野の。梢の雪とノシ花散りて。御所も燒野とほの聞けば。せめては跡を記念にも都ゆかしく慶覺は。昔の跡を來て見れば爰ぞ御所の名殘とて。燒殘りし方もなく楚人の一炬に焦土となんぬ。咸陽宮の故事も身に染み渡る小夜嵐。草より草に吹き閉ぢて。朽ちぬ其の名を礎に誰見よとてや殘すらん。紋を据ゑたる軒瓦碎けて元の土とのみ。焦るゝ色は秋の葉の。散り〳〵になる御運の果。餘所にて聞きし口惜しさも今見る目には何ならで。人にいはれぬ思ひの數。包みかねたる涙の玉フシ袖と袖とに餘りけり。詞ヤまだ歎きに時移せしがあら笑止や。地何處に立ち寄り一宿せん所の人の來れかし。一夜の宿の假臥と心を盡す折からに。二十に傾く月の顏。淸らかなる若人の　フシ用ありげにて行き過ぐる。是々なうと呼びとゞめ。詞一宿の御芳志賴み入ると立寄れば。幸ひ我等此の邊にて人宿致す者なれども。三好殿より旅僧の御宿禁制と。地仰せ嚴しき折なれば痛はしながら叶ふまじ。詞是より少し彼方に足利の將軍義輝公の住居なされし古御所の御座候。地誰咎むる者もなければ彼處に一宿なされまいか。なう其の御所は三好入道長慶が爲に燒滅され。此の礎こそ御所の跡外にありとは誠しからず。不思議なりと咎むれば。今にあるか燒失せしか御覽あるより證據もなし。御道知るべ申すべしいざ此方へと夕露の。葎の宿は憂れたくとも袖片敷きて御泊りあれ。なう御僧と御所の。方へぞ三重〳〵入りにける。フシ斯くて慶覺。地所の人の案内にて。御所の御門を立ち入れば昔の臺其の儘に。義輝御生害の折からに三好が兵火に

焼けしとは。誰が僞りと白露の。宿りとなるフシこそ果敢なけれ。地棟門唐門塀中門。九十五間の遠侍大書院の障子押開けば。釣殿記錄所渡殿唐木。作りの千疊敷 オクリ 紫檀の。長押花欄の椽。伽羅木の床框。廣東北の違棚。積れる塵に フシ埋もれたり。

地是より奥は同じ館の内ながら。詞將軍の思ひ人女の住みし部屋々々とて。假にも入りたる事なけれど其の名ばかりは聞き及ぶ。梅枝が鳴渡の間。初雪が通天の紅葉の間。南表に白菊が住みし局は殘れども。地主は無殘の及に死し連理の枕比翼の床。片敷く人も諸共になき世の中の習ひとは。思ひ知れども今更に。止らで落つる涙の玉フシ念珠の數を添へながら。御殿々々を行きめぐる高殿。詞ヤ是こそ先君平日の御座の間よ。地戀しの昔なつかしやと。さつと障子を明け給へばこは如何に。小袖と名付けし緋縅の鎧兜。上段に立てられたり。ナウ是をこそ尋ね求めしぞや。敵の手にも渡らず爰にある事。足利の家起るべき瑞相と。悦び鎧に手を掛くれば。ロハリ俄に家鳴り雲暗く立木も草も動搖し。うんと一聲悶絶し。地さしもの慶覺階を眞逆樣にころ〳〵。フシ頃も二月。梅薫る御所の世盛り花盛り。影の如くに顯れしは夢か。現か 三重

千疊敷其の世語

謡庭には金銀の砂を敷き。四方の門邊の玉の戸を。出入る人迄も。光りを飾る粧ひは。誠や名に聞きし。寂光の都喜見城の。樂みも斯くやと思ふばかりの景色かな。平家西に。三十餘間に黄金の襖立てさせて。波に夕日を映されたり。東は三十餘間に。白銀の襖立てさせて。通天の紅葉かゝれしは。長生殿の内に秋更けず。不老門の前には。日も傾かず上もなき。富士に勝りし。ナホス色の山情の。谷の戸を出でて。鶯宿す梅が枝。二人籬の白菊露ながら。手折ればまがふ袖の初雪。タヽキ夜毎に召され朝毎の。君が枕に寢亂れし。其の黒髮の移り香も。何故枝に秋の扇と。フシ捨てられて。恨みは世をも人をも思ひ思はじ。只其の一人の大淀よどの淀の。冷泉川瀬の。水車。汲んだる水は盡くるとも。今の涙はよも盡きじ。フシあれなう又御座の二人寢。覗いて恨みを晴らさんと障子の蔭よりさし覗けば。シテ地我も共にと立ち寄りて目に煩惱の苦を見する。二人君は重なる盃の紅深き膝枕其の面。フシ影も腹立ちや。シテ枕に響く其の鼓。打てや鳴らせや。打てや鼓の フシ聲に紛れて身を忍ぶ。ツレフシ障子開けて。紅梅の天も花に醉へりや。庭も花に醉うたり酒は憂ひの玉箒。千金春宵一刻飮み。シテ御酒の機嫌も義輝公。お手に鼓の現か夢の鼾は大淀の。松の響か琴にも似たる膝枕。つめりこそぐりせゝり起されほや〳〵笑ひ。ハヽヽヽ。詞とろ〳〵寢る間によい夢を見た。二人寢よとて起された。ツレ誰樣と。シテおれ樣と。二人フシ折れや手折れや。庭の梅。目ざまし草と指をさす フシ梅が枝の。シテ詞香ひ

に移るあだ心。菊の下葉に置く露の。其の玉葛それよりも。九條の君の根引の花は飽かぬよなう。二人面白の花の廓や世界の色の上盛。出口には柳招いて入り來る客の揚屋の騷ぎにしろいお客はちり〳〵。西の洞院中の道寺ぞめかばぞめけ。上の下の町中の町の家並可愛ごかしに。粹が身を食ふ根引身請は金が巾する。口說諸譯は幇間請込む年增の娼婦は。紋日に追はるゝ禿は遣手を怖がる。實に誠中戸小宿でちよつきりちよつと間夫を切らるゝ乘

換への、女郎の根の夜夜を重ねて付廻したる。フシ恐ろし。シテ地猶妄執の沸返るあつい燗より飲むなら酒の。ひやつひやいィ。ツレコハリ日頃恨みの菊雪亂れて梅飛びかゝり。取りつき抱きつき君に縋れば。シテ詞何ぢやの見られぬ。ツレ詞後妻打つたる此の鐵杖は。シテ地煙管のらう〳〵。ひららう〳〵〳〵〳〵ちとららとち。らとらら〻。ツレ煙草の。シテひやとりとろろろろろろ。とろろろろろろ。地てる〳〵〳〵〳〵義輝公。あら正體も波

の鼓の調も解けて。一筋ならぬ二筋三筋。四筋につれて此方に靡けば。ツレ彼方の恨み。シテ是を慕へば。ツレ彼處の妬み。色と酒との醉心地 フシ魂くれて茫然たり。シテ詞思ひ出でたり其の昔。唐の帝の三千宮蝶の宿のさゝめ言。それを移していざ爰に花の香慕ふ蝶々の。とまりし袖こそ我が妻よ。ツレ地おう／＼お手に。手に／＼手折り折り取る花の枝。二人宿りの蝶の立つや霞にひら／＼／＼／＼。ふるは。羽色か櫻か雪か。こがれ羽思ひ羽ふうは／＼。露もこぼれてゐいごろころ／＼蝶々とまれ。此の枝にとまれふりはへ。かざし フシ揚羽の蝶。地羽を休むる大淀の。袖に寢よとの印は是。此の。比翼の蝶々。てうど抱合ひ閨に打連れ入る姿。あれを見よ。コハリ憎し妬まし此の念力の床の海。八苦の波と立ち隔つて寢るとも寢させじ。添ふとも添はせじ。怒りに身を燒く身を焦す。紅梅則ち無間の炎。ナホスぱつと燃立つ三筒の煙姿跡なし。

三重 シテ歌此方は今から殿樣やめて。内の嬶衆のだてこき／＼に。葛籠ありたけ打着せ着せて。連れて歩行けば足かる／＼や。跡へ下れば 詞跡から招く。フシほういほい シテ先に立たせてなうよい女房うまい腰付き縞廣帶で。因果め ツレ詞ヲヽいや。二人浮かれ浴衣の フシ菊の露。ツレ離々に香ひこぼれて亂れ咲き。シテ詞老いせぬや。／＼藥の名をも菊の酒。歌おれと。そなたは實生の菊よ。中の色香はドッコイ。人知らぬサウモセイ。そなた待つとて。胡麻殼焚いた。菊の下葉もドッコイ。折り添へて悔しや水を。フシ掬ぶまじもの。フシ花にも戀の仇敵。ませも籬も踏みしだく。コハリ大地俄に震動して。渦卷き上る猛火の影。名のらで知れやナホス白菊が フシ冥途の妻現れたり。シテ詞それ娑婆電光の境には恨むべき人もなく。地悲しむべき身にもあらざるに。如何にや汝いつ拗恨み。フシそめけるぞや。早黃泉に立ち歸れと。數屋に隱るゝ夏引の絲に繫ぎ

し玉の緒の。消えもやせんと身を冷す。ツレ二世とかねたる妹背の語らひあだには誰かなす業ぞや。非道の劍に此の身をさかれし其の苦み二人身を切る據さる其の恨み。退かじ放れじつき纏つてエイ／＼／＼。ゐいくる／＼。エイくる／＼。くるり／＼。未來永々憂目を見せん思ひ知れ。天に登らば天津風地に又沈まば土風山風。野風木枯さ。さ。さつ／＼さつたるはやちの風に。ツレ吹き立てられて續いて上る上段の。障子に映る呵責の相。無明の業火黑煙。ふすほり渡つて其の身を燒く。床は精銅棚は鐵城驕慢の。刄にかけて五體五つに切斷す。オクリ娑婆の／＼報いを フシ今爰に。あら堪へがたやといふ聲ばかり。殘るは銜松の風。姿果敢なく秋暮れて冬も日數をふる雪に。庭も梢も埋もれて皆白妙の。夕景色。二人歌君と淀とが。相合傘の袖と袖。煙草戀草伽となる。煙吹きまぜ。ちら／＼と。頭に雪の。置頭巾。歌殿樣々々寒そにござるに

火桶やりたや炭添へて。サンヤレ／＼。いつそ二人が。フシ雪ならば。フシ地降り重なりて氷付き。離れまいぞやいつ迄も。シテ爰は呉山にあらねども傘の雪の重さよ。いで傘の雪を拂はん傾く傘の動かばこそ。すは／＼重るぞ重たや重し。大磐石の碎け亂れて飛ぶ雪の。ツレ中に執念き初雪が。中有の面影忽然としてすつくと立ち。なう。恨みぞ積る八寒の雪に身を埋み。大紅蓮の氷に閉ぢられ苦しみ受くるも誰ゆゑぞと。天に叫び。地に吐く息も白雪の。ハツミ亂れて。姿は フシ消え失せけり。シテあら／＼恐ろしあら怖や。迯行く先に又初雪が ワキコハリ面色變じて茜さす。憤怒の顔容。共に來れといふ奈落の底に連れ行かん。ナホス行くも。逃ぐるも。迷ひに迷ふ衾の内。瞋恚の角の枝高き梅が枝爰にと梅花のほむら。コハリ二人 此方に向へば又白菊が。眼の光りは電光雷火の落ち來る如く邪淫飲酒修羅道の。ナヽス三つの車のくるり／＼と 三重〽追ひめぐる。地義輝御聲苦しげに。詞如何に大淀。汝が色に我を惑はし我又汝を苦しむる。地苦患いつかは遁れんと。叫び給へば鬼女は笞を振上げ／＼。煩惱業火の娑婆の妄執思ひ知らずや腹立ちやと。フシ聲聲。天地に フシ轟けり。ツレ地慶覺はつと御目を覺まし見れば夢とも面影ま。爰にあり／＼呵責の現相。若人欲了知三世一切佛。應觀法界性。一切唯一心と破地獄の祕文を唱へ。袈裟押取つて投げ付け給へば。佛力不可量不可思議の御法の聲を聞く時は。惡鬼心を和らげ忍辱慈悲の姿にて。佛土に至る嬉しやと形は消え／＼消ゆる と見えし。青黄赤白四色の玉。オクリ虚空に〽飛び去り失せてけり。シテ地なう懐かし法の人。宿の主と見えしも兄義輝ぞや。御身必ず還俗して若を守立て三好を討ち亡し修羅の苦患を助けてたべ。煙の中に殘りし足利重代小袖の鎧星兜。是を渡さんとばかりに。ありつる姿緋縅の鎧と フシ變じ給ひける。地慶覺足の踏所も忘れ悦び勇み取上ぐる。二人鎧の袖や墨染の袖にかゝるは フシ名殘の涙。頓生菩提の回向の威德鎧の威德。ツレ三好を亡し恥辱を雪ぐ譽も我も。天にも上る心地にて立ち出づる千疊敷。夜かと思へば シテ日はまだ高し フシ梅花開けば シテ菊の花咲けり ツレ秋かと見れば シテ雪も降りて。二人フシ四季折々の。地榮華の御所の上﨟達も宮殿樓閣皆消え／＼と 三重〽 シテ失せ果てゝ。地ありつる礎 の枕の上に。眠りの夢は覺めにけり。時に虚空を閃きて四人の女の四つの魂。淺川海上造酒之進。御臺所を誘ひ導き刹那が間に馳せ集る フシ幽鬼の仕業ぞ不思議なる。ツレ慶覺夢の御物語此方は諸國の味方を語らひ。加勢の着到合圖の旗思ひ／＼に奉り。二人昔に靡く足利の家に傳はる緋縅や。鎧の。小袖舞の袖。敵を討つて太平樂。還城樂や還俗樂。菩提の門を引きかへて文武の。門にぞ入り給ふ。

第　五

地脅の蘇秦がちうどくの仇計らざるに天是を罰すとかや。三好修理之太夫入道長慶。一旦の逆意運に乘じ。足利家を追崩し。朝日の岡に館を構へ。南表に大堀掘つて。石壁高く河水を湛へ。數十人の警固時を分つて油斷なく。北は千本の松茂り。岩倉山朗詠が谷に續き。獸も駈けるに便りなき。要害頼みに日夜の酒宴　フシ世を我が儘にぞ振舞ひける。地頃は永祿十二年仲夏下旬足利義昭公。先君の仇を討つて倶不戴天の恥辱を雪がんものと。淺川左京之太夫藤孝。海上太郎兼盛。冷泉造酒之進岩倉山を夜に入つて。三好が館に忍び着き。塀に梯子かけ渡し。進み入らんと氣を焦いたり。後陣に續きし　コハリ諸國の加勢。近江に佐々木六角判官。京極高成淺井長政。美濃に大館沼田の平次。伊勢に秋家。伊賀に金森一色藤丸。越後に上杉長尾の一族。越前に朝倉日下部義景。桃井小山宇都宮甲斐に武田の旗大將。高坂彈正原隼人。山本勘介道鬼入道。尾張に織田の股肱の臣。羽柴筑前守秀吉。相模に根越。五十嵐六浦駿河に氏康。信濃源氏武藏の七黨八平氏自身に馬を乘り進め。持槍小旗高提灯。塀の外面に隙間なく　フシ沓の子。打つて扣へたり。地其の隙に淺川海上造酒之進。難なく塀を乘越えて屋根の上に突立ち。中にも藤孝大音上げ。詞なう御加勢の御中へ物申さん。御芳志によつて是迄忍び寄つたり。思へば遺恨深き長慶。萬一各に討たせては年來の大望。徒らに君恩を報ずる所なし。我々が手にかけ申す内。暫く御勢を麓に屯し下されかし。事難儀に及ばゝ笛を吹いて知らせ申さん。それを合圖に駈着け。重ねての御加勢頼み入る。表門には主人義昭。中國西國の勢を以て寄せらるゝ契約。地時こそ移れと呼ばはれば。皆尤といふ聲して。先手より勢をまきほぐし。フシ山下にこそは控へける地さらでも氣早き海上太郎。詞なう案じたとは事變り。忍び入るも易かりしいで入道が寢間へ踏込み。地首引拔いて參らんと躍り出づるを藤孝押へ。詞ア不覺なり兼盛。思慮深き長慶如何なる事か巧み置き。地隱れ逃げんも測りがたし。詞物靜かに館の内を檢分し。駈くるも引くも三人一所。地せくな／＼と制する内。夜廻りの中間打連れ拍子木打つて來りける。是こそ天の與へよと。ひらりと屋根を飛ぶより早く。すつぱと切つて拔討ちにはつた／＼と切倒し。直ぐに拍子木かち／＼／＼。御用心と呼ばはつて　フシ館の内へ忍び入る。詞暫く奧も靜かなりしが。すはや夜討と松永彈正。詞表門には別儀なし。裏門より入りつらん。敵は姿を隱れんと提灯持つまじ。味方は殘らず用意の腰提灯。印を合せ松原へ誘き出せ。一人功名同士討すな。力を合せ討つて取れと。地聲の下より三好が勢。皆一樣の提灯に。紛るゝ方なく。淺川海上造酒之進名乘りかけ／＼。松原に木立を取り。獅子奮

迅虎亂入。飛鳥の翔の手を碎き。南無阿彌陀佛の拜討ち。何時の因果が今日の日に巡りあうたる車切。五十の命袈裟切に。野邊の草葉の露霜と。大刀風撫で切り拂ひ切り。刀は業物手は利いつ。はらり〳〵と［三重］〽切りつくし。［地］提灯奪取り三人が。腰に確かと奥をさし。［フシ］重ねて切込む其の跡へ。［地］命から〳〵長慶入道。［詞］なう〳〵悲しや表門も早打破り。大勢切り込む何とせう。何處に此の身を隱さうぞと。呟き〳〵逃け出でて。せめて命も助かるかと。［地］頼みは千歳の松の木に。傳ひ登るも老人の。手足わなわな身もふるひ。踏辷り踏外し［オクリ］はふ〳〵。梢に隱れける。［地］三人が手にかけて切殺せしは百人餘り。されども入道松永が在所も知れず首も見ず。大きに焦いて館の内。探す一間に松永彈正。踊出づるを造酒之進。［詞］サア松永は我に任せ。方々は入道が在所探し給へと。［地］呼ばはり〳〵受けつ。流しつ渡り合ひ［フシ］火水になれと戰うたり。［地］松永元より手練の勇士。踏込んで打つ太刀を。冷泉開いて受け外し。左の肩口三寸ばかり切りさげられても事ともせず。沈んで拂ふ切先に。松永が太股半分あまり切り込んで。漂ふ所をつつと入り首宙に打落し。［詞］松永彈正久秀を。造酒之進が切り止めしと。［地］呼ばはる所へ義昭公。藤孝兼盛諸國の加勢。高提灯を點し連れ。松原に大息つぎ御大將怒りの大音。［詞］館の内に一寸も探し殘せし所はなし。入道めに羽が生え虚空を飛んで出でんは知らず。何處にか隱るべき。今日討ち漏らして入道に再び逢ふは測り難し。［地］よつく天道にも見放され。弓矢の冥加に盡きたるか。エヽ口惜や腹立やと。萎れぬ御目にはら〳〵涙。藤孝も途方にくれ其の外並居る人々も［フシ］呆れ。果てゝぞ立ちたりける。［地］海上太郎劫くさらかし居たりしが。［詞］アヽ思ひ付いたそれよ〳〵。此の松の木が心もとない。てつきり梢に隱れて居をらう。一本づつ片端に引拔いて詮議せうかいや〳〵拔くも手間どほなり。火を付けて燒立てう。［地］尤々それよ〳〵一同に。火よ燃草よとひしめけば。入道梢に居るも居られず。枝より枝に傳ふ拍子。松の小枝に差添への。鍔引つかけて身は鞘ばなれ。大地にどうと落ちてけり。［詞］そりや〳〵梢に人こそあれ提灯寄せよと。［地］手々に長柄の鑓押取り。穗先を揃へてぐつ〳〵と。芋刺串刺めつた突き。主君を殺せし天罰は我と我が身に木の空で。煽ちはためき眞逆樣。落つる所を義昭公。隙かさず首討落し御敵亡びて悦びの。勝鬨あぐる名をあぐる。中頃絕えたる足利の。家踏み起す掘り起す。萬の寶に秋津國上下の活計歡樂も盡きせぬ。御代こそ久しけれ。

七行大字直之正本とあざむく類板世にありと雖も叉うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚だすくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも叉違失多かるべし全く予が直の正本にあらず故に今此の本は山本九右衞門治重新に七行大字の板を彫りて直の正本のしるしを糺せよとの求めに隨ひ予が印判を加ふる所左の如し。

竹本筑後掾 ［竹本］［博教］

正本屋 山本九兵衞版（家印）

大阪高麗橋壹丁目

山本九右衞門版

女殺油地獄

近松門左衛門作

上巻　道行みなれざを

歌船は新造の乗り心　サヨイヨエ。君と。我と。我と君とは。詞圖に乗つた乗つて來た。しつとんとん〳〵しとゝん〳〵。しつとゝ逢瀬の波枕。盃はどこ行た。オンド君が盃いつも飲みたや武蔵野の。月の。月の夜すがら戯れ遊べ。ナホス囃し立てたるフシ大騒ぎ。北の新地の。地料理茶屋。主人なけれど咲く花や。後家のお龜がうけこんで。客の變名は郎九とて生れは陸奥會津にて名代流さぬ金遣。此の頃難波此の廓へ登りつめたよ天王寺屋。小菊を思ひ。思はれたさに。鯰川よりゆら〳〵と。スヱテ野崎參りの屋形船。卯月半の初暑さ　小オクリ末の。閏に追繰りてまだ肌寒き川風を。酒に凌ぎてフシそゝり行く。昔在靈山名法華。今在西方名阿彌陀。娑婆示現観世音。三世の利生。三年積き。去々年戊亥の春は。裏屋せどやに罪深く。針箱や　數珠袋。そこに日の目も見ず知らぬ。フシ一文不通の衆生まで。千手の御手の。摑みどり。紫磨黄金の御肌に忽ち那智の觀世音。去年は和州法隆寺。シテ聖德太子の　タヽキ千百年忌。ツレこれ亦救世の大悲の化身。シテ續いて今年此の薩埵　二人櫻過ぎにし山里の。誰訪ふべくもなかりしに老若男女の。フシ花咲きて。足をそら〳〵空吹く風に。散らぬ色香の伊達參り。大人童も謡ふを聞けば　歌往くもちんつ。歸るもちんつ。又來る人もちんつちりつて。チリテツテ。ナホス傳を頼みの乗合船は。借切るよりも得庵堤。艫に舳をこぎつけて餘所も一つの船の内。客はこれ見よ顏自慢。やゝともすれば痴話事の。それに任せた身の上も。人も恥づかし氣づまりと。フシオクリ小菊は〳〵陸へ一飛にぴらりばうしのふか〳〵と。本フシ肩は隠せどとりなりの。町で名古屋の胸高帶は　小オクリ小笹に。露のたまられぬ始末算用世智辯も。人にこそよれ品にこそよれつ。冷泉もつれつ。道草に。人の言草ァヽむつかしく。うるさく憎くいやらしく。我が供船を小手招き。歌これの見さんせナ愛宕の山にヨエ。沈の煙が。三筋立つ煙がナ沈の。沈の煙が。三筋立つ。ナホス四筋に別れ。玉鉾の。これより辰巳奈良街道。丑寅隅は八幡道。玉造へは。未申。西はもと來し京橋や野田の片町。大和川。こゝは名に負ふ壽命の松。フシ御代長久の岡山を。歌には忍の岡とも詠み。さらゝ山口一ッ橋渡して救ふ御願力。無量無邊の聚福閣慈眼視衆生念彼觀音。身得度者の御誓。問ふも語ろも行く船も徒歩路ひらふも諸共に迷をひらく腹扇御堂に。

念誦を 三重〽 くり返す

フシ所を問へば。地本天滿町まらの幅さへ細々の。柳腰やなぎ髮とろりとせいも種油。梅花紙漉し荏の油 オクリ夫は。豐島屋七左衞門妻の野崎の開帳參り。姉は九ツ三人娘だく手。引く手に。見返る人も。子持とは見ぬ花ざかり。吉野の吉の字を取つてお吉とはたが名付けけん お清は六ツ中娘。母様ぶゝが飲みたいも折節そばの出茶屋みせ。フシこゝ借りますと休らひぬ。地是も同町筋向ひ。河内屋與兵衞また廿三親がかり。同商賣の色友達刷毛の彌五郎皆朱の善兵衞。野崎參りの三人連れ萬事を夢と飲み上あげし。ねざめ提重五升樽坊主持して北うづむ。小菊めが客と連立ちよし〱と下向するも此の筋と。のさばりかへつて來る道の。茶見世の内より申し〱與兵衞樣。こゝへ〱と呼びかけられ。詞ヤお吉樣子供衆連れての參りか。存じたら連になりましよもの。七左衞門殿は留守なさるゝか。いやこちの人も同道二三軒寄る所もあり。地追付けこゝへ見える筈。お連衆もマア是へ。ひらに〱と強ひられて煙草一服致さうかと。腰打かくるものんこらし。詞何と與兵衞樣。御繁昌な參りではないかいの。よい衆の娘子達やお家様がた。地アレ〱あそこへ桔梗染の腰變り。繻子の帶しやぢやわいの〱。詞ソレ〱〱そこへ縞縮に鹿子の帶。地たしかに中の風と見た又一位見ごとでは有るぞ。詞いかさま若いお衆が此のよな折に。あんな見事な者引連れ。贅のやりたいは道理。こな樣も連立ちたい者があろ。こんな折に新地の天王寺屋小菊殿か。新町の備前屋松風殿か。なんとようしつてゐるか。地なぜつれ立つて參らんせぬと。ばつと乘すればふはと乘り。詞殘多いあつぱれ今日は物の見事なことで。參りの群集に目を覺させうと。此の中からもがいたれど備前屋の松風めは先約が有つて。もらひも貸しもならぬとぬかす。地天王寺屋の小菊めは野崎へは方がわるい。となたの御意でも參らぬといひ切る。詞それに聞いて下され。小菊めが今日會津の客に揚げられ。早天から川御座で參りをつた。地田舍者に仕負ては此の與兵衞が立たぬ。小菊めが歸るを待つて一出入と。咄しの內から二人の連。腕押し揉んで力みかけ。フシ鬼とも組むべき勢ひなり。詞それ〱問ふには落ちず語るに落ちると。利口さうにそれが信心の觀音參りか。喧嘩仕ののら參り。買はしやんすお山も傾城も。何屋のたれ何屋のたれと。親御達がよう知つていとしぼや。そちへは與兵衞めが間がな隙がな入りひたつてをる。意見して下されとわしら女夫に折入つて口說事。こちの七左衞門殿も言やらぬ事は有るまい。定めしこな樣の心には。所こそあれ野がけの茶見世で若い女ごのざまで。入子鉢の樣な面々の子供の世話ばかりやきをらず。小さい出たと憎かろが。地此の諸萬人の群集を突退け押退

け目に立つ風俗。本天満町河内屋徳兵衛といふ油屋の二番息子。茶屋々々のわけもろくに立てず。あのざま見よと指ざしするが笑止な。質實な兄御を手本にして。商人といふ物は一文錢もあだにせず。雀の巣もくふにたまる。隨分かせいで親達の肩助けと。心願立てさんせ脇へはいかぬ其の身の莊嚴。詞ハア氣に入らぬやら返事がない。姉おぢや早う參らう。道でこちの人に逢はしやんしたら。本堂に待つてゐるというて下さんせ。地茶屋殿過分と袂より置く茶の錢の八九文。四分におもく五分には。輕々しけの物參りフシ別れてお吉は通りける。地惡性に上塗する皆朱の善兵衛。詞あの女は與兵衛が筋向ひのおか樣でないかい。物ごしもどこやら戀の有る美しい顏で。扨々堅い女房ぢやな。されば年もまだ廿七。色はあれど數の子ほど產みひろげ。地世帶染うで氣が質實よい女房にいかい疵。見かけばかりでうまみのない。フシ飴細工の鳥ぢやと笑ひける。かくとはいかでしろうとの。田舍の客に揚げられて。つれて オンドあるじの後家交り變りちんつの國訛り 歌やつしは甚左衛門幸左衛門が思案ごと四郎三が愁ひごと。ちんつ。〳〵。ちんちりつてつて 地日本一の名人樣やつちや〳〵と褒める歌より褒めさする。フシ金ぞ諸藝の上手なる。地そりや〳〵來たぞと三人が。手ぐすね引いたる顏色。小菊遠目にはつと驚き。詞申し花車さん。同じ道ばかり氣が盡きる。地姑の船に乘りたいと裾かい取つて立ち休らふ。前に與兵衛帆柱立跡に仁王の張番立。詞與兵衛せくな女郎と詰開いて男立てい。會津蠟燭が光りだてしたら。此方二人が心切つて踏み消してくれると。地草履を腰に腕まくり。客は顚倒花車も下女もうろたへ。フシ小菊を圍うてうぞぶるふ。詞小菊殿借つた。馴染の河與が借るからはいごかせぬと 地茶屋の床几に引きずり据ゑ。詞是賣女樣安お山樣。野崎は方が惡いどなたの御意でも參らぬと。此河與とつれに成るを嫌ひ。好いた客と參れば方も構はぬか。地其のわけ聞かうと理窟ばる眼玉の鬼門金神もなどやかにコレ河與さん。詞角が取れぬの。小菊といふ名が一つ出れば。與兵衛といふ名は三つ出る程深い〳〵と。いひ立てられた二人の中。つれ立つて參らぬもみんなこな樣のいとしさゆゑ。人に咬てられけしかけられ何ぢやの。地わしが心は誓文かうぢやと。スヱテひつたりと抱寄せ フシしみじみ囁く。地色こそ見えね河與が悅喜。エ忝いと伸びた顏付客は堪らず側にどうと腰掛け。詞小菊殿お身は聞えぬ。如何なる緣にか會津樣程いとしい人は。大阪中に無いと云つたぞよ。國許の外聞身の大慶と。大事の金銀を湯水の樣に川遊び。ちよがらかされにや來申さない。其の男が聞く前で。昨夕の如く言はないけりやどや〳〵通りの無耶々々の鬪。二度と越し申さない。どうだ 地〳〵と フシせめせちがふ。地言ひ合せし

二人の連つか〳〵と寄つて。詞ヤイもさため。此の女郎こつちへもらふ置いて歸れ。地但東土産に川の泥水振舞はうかと。兩方より立ち挾み投げてくれんず面構へ。阪東者のどう強く。詞何さぶい〳〵ども。人威しの腕に色々のほり物して喧嘩に事寄せ。懷中の物取ると聞及ぶ。貧乏といふ棒に臑をなぐられ。腰膝も立たぬ遊女狂ひ。上方の泥水より奥州者の泥足喰へと。地つつと寄り蹴上ぐる足首。刷毛が頤蹴違へられ。どうと轉んでころ〳〵〳〵小川へだんぶとはね落され。是はと取付く皆朱が大事の命の玉。縮み込む程蹴つけられ鳶が翔けた南無三と。呆れて空をみち〳〵〳〵。腹這ひ〳〵フシ逃げて行方はなかりけり。地友達投げさせ見てゐぬ男。逆樣に植ゑてくれんとむづとつかめば振放し。詞やちよこざいなけざい六。脇骨引缺いてくれべいと。地くらはす拳を受け外いては撲ち返し。叩き合ひ摑み合ふ。なら氣の通らぬ是どうぞと。中へ小菊が枷に入りアヽ怪我さしやんすな大事の身と。花車が圍へば下女も手を引き立て隔つ。そりや喧嘩よと諸人の騷ぎ。茶屋は見世をしまふやら。二人は絶體絶命の。撲ち合ひ組み合ひ堤の片岸踏みくづし。小川にどう〳〵落ち別れ。藻屑沙土まひこみ砂。互に投げかけ。摑みかけ打合ひ打付け扱ひ手なき相手勝負氣根。較べと三重見えにける。地折りこそあらめ島上郡高槻の家の子。お小姓達の出頭小栗八彌。馬上に上下御代參の徒士若黨。揃ひ羽織の濃柿に智惠の輪の大紋。手ぶりの先供はいはい。〳〵〳〵の聲をも聞かず與兵衞が。たぐりかけてうつ泥砂。出合拍子に馬上の武士の袷上下皆具迄。ざつくとかくるも時の運。栗毛忽ち泥付毛沛艾鞍も鎭まらず。與兵衞もはつと驚く所それのがすなと徒士の衆。ばら〳〵と取卷く中。相手は川を渡り越し小菊も花車も手ばしかく。フシ參りの諸人に紛れて退く。地徒士頭山本森右衞門與兵衞が。兩臑かいてぎやつとのめらせ。膝を脊骨にひしぎ付くる。詞アヽお侍樣怪我でござる御免なりませ。地お慈悲〳〵と吠面かく。詞こいつ慮外者。お小袖馬具に泥をかけて怪我というては濟まぬ。面を上げいと首ねぢ上げ。ヤア森右衞門殿叔父ぢや人。ムヽ與兵衞めかと地互にはつと驚きしが。詞ヤイ汝は町人いかやうの恥辱を取つても瑕にならぬ。旦那より御扶持を蒙り。二字を首にかけたる森右衞門。慮外者を取つて押へ。甥と見たればなほ助けられぬ。討つて棄てる地立ちませいと小腕を取つて引立つる馬上の主人ヤイ〳〵〳〵。詞ヤイ森右衞門。見れば其の方が大小の鞘口詰めやうが緩さうな。ふと鞘走つて怪我でもして血を見れば殿の御代參叶はず。歸らねばならね。下向迄は隨分鞘口に心を附けて森右衞門供をせい〳〵。地ハアはつとお詞忝く。詞汝下向には首を討つ。地暫しの命と突放し。隨分叔父が目にかゝるなと

言ひたけれども侍氣、聲せぬ夏の手ふり鷺はい〳〵。武家のいきかた泥まぬ御馬フシ足を早めて急がるゝ。地與兵衛うつとりと夢か現か醉ひたる如く。南無三叔父の下向に斬らるゝ筈。斬られたら。死なう死んだらどうしよと心は沈み氣はうはもり。迯げてくれうと駈け出で。詞ハアかういけば野崎。地大阪はどちらやら方角がない。こつちは京の方あの山は闇峠か。但し比叡山かどこへいたらば遁れうと。眼も迷ひうろたへア、どうかせう。何と加賀笠お吉と見るより地獄の地藏。詞ヤアお吉樣下向か。わしや今斬らるゝ助けて下され。地大阪へ連れていて下され。フシ後生でござると泣き拜む。詞イヤこちやまだ下向ぢやないわいの。七八町行たれど餘り人ぜり。こちの人待合せにこゝ迄歸つた。エ、氣疎なけな身も顔も泥だらけ。地氣が違うたか與兵衛樣。詞尤々喧嘩して泥を摑み合ひ。跳馬に乗つた侍に。その泥がかゝつてそれで下向に斬らるゝ筈。地頼みます〳〵と立去らず。詞エヽ呆れ果てた親御達の病に成るがいとしぼい。地向ひどしのけん〳〵ともならず。茶屋の内借つてふり濯いで進ぜましよ。詞顔も洗ひとつとゝ大阪へ歸つて。以後を嗜ましやんせ。又こゝ借りますお清よ。地ととと樣が見えたら母に知らしやゝと。二人葭簀の奥ながきフシ日影も晝に傾けり。地さぞや妻子が待つらんと辨當かたけかた〳〵に。姉の手を引く豐島屋の七左衛門。咽喉が渇けど飮むまも急ぐ。茶屋の前にて中娘。アレとゝ樣かと縋り寄る。チヽ待ちかねたか母はどこにと尋ぬれば。詞かゝ樣はこゝの茶屋の内に。河内屋の與兵衛樣と二人帶解いて。べゝも脱いでゝござんする。ヤア河内屋與兵衛めと。帶解いて裸體に成つてぢや。エヽ口惜しい目を拔かれた。さうして跡はどうぢや〳〵。さうして鼻紙で拭うたり洗うたりと。地聞くよりせき立つ七左衛門。顔色變り眼もすわり門口に立ちはだかり。詞お吉も與兵衛も是へ出よ。地但し出ずばそこへ踏ん込むと。呼ばはる聲にこちの人か。詞子供がお晝食の時分も忘れ。どこに何してゐさしやんしたと。地出る跡から與兵衛が。詞七左衛門殿面目ない。ふとした喧嘩に泥にはまり。色々お内儀樣のお世話。是も七左衛門殿のおかげ。地忝いといふ小鬢先髪の髷も泥まぶれ。身は濡鼠腹立やらをかしいやら。挨拶もせず是お吉。詞人の世話もよいころにしたがよい。若い女が若い男の帶解いて。さうして跡で紙で拭ふとは尾籠至極疑はしい。餘所の事はほかからかしてサア〳〵參らう日が闌ける。地チヽ〳〵待つてゐました詳しい事は道すがらと。姉が手を引き乙はだく。中は父親肩車に法の教も一つは遊山フシ群集を分けてぞ急ぎける。地與兵衛ひとり茶屋の見世。とほんとしてゐる所に。亭主を初めあたりの在所の者ども五六人。詞さきにからこゝな人は參りか下向か一ノ所にうろ

うろ〳〵と合點いかぬ。サア 地 追立つる。折からはい〳〵〳〵の聲に交はる轡の音。小栗八彌下向の徒歩立ち與兵衛うろたへ逃げ損ひ。押割る供先叔父の目に。かゝる不詳の出合頭ひつ捕へねぢすゑ。詞 最前は御參詣今は御下向傾しみなし。地 討つて棄つると刀の柄に手をかくる。詞 待て待て森右衛門。其の者討つて棄てんとはなぜ〳〵。彼奴は最前の慮外者。他人ならば少少は見遁しにも致し。御免なされ下し置かるゝ樣の執り成しをも申すべき所。彼奴が母は拙者が兄弟。現在の甥何とも 地 助け難しと申しもあへぬに。詞 シテ其の科といふは何事。御尊に及はず御服に泥を投げかけ。御身を穢しよごしたる科。いや〳〵此の八彌が身を穢せしとは心得ず。是見よ着類のいづくに泥が付いたるぞ。イヤ召替へられぬ以前のお小袖。されば〳〵。着替ゆれば泥をかゝらぬも同然では有るまいか。御意とは申しながら既に御馬の鞍鐙も泥にそみ。地 お徒歩でお歸りなさるゝは。旦那に恥辱を與ゆる慮外者と。申し上ぐれば默れ〳〵。詞 馬の皆具には泥のかゝる物故に。障泥といふ字は泥をへだつと書く。泥のかゝらぬ物ならば何しにへだつるといふ字の入るべきぞ。恥辱も慮外も科もなし。武士たる者の恥辱とはたゞ一滴の濁水も。名字にかゝるは洗ふに落ちず濯ぐに去らず。あれら體の雜人身が目からは泥水。地 泥より出でて泥にそまぬ蓮の八彌。名字は穢れぬ助けてやれ。ハアはつと又有難き。御意を大事に振る手を揃へ足揃へ行列。立てゝぞ 三重

中之巻

詞 揭諦々々々々波羅揭諦。波羅僧揭諦揭諦々々。波羅揭諦波羅僧揭諦。唵呼嚕呼嚕旋茶利摩登枳。唵阿毘羅吽欠。地 おん油屋仲間のノシ山上講。俗緣ながら數度のお山。院號受けたる若手の先達新客交り。十二嗣組吹き出す法螺のかひ〴〵しげなる金剛杖。腰に腰當首に數珠巾着代の水飲み。河內屋德兵衛店頭に立寄り。詞 何と與兵衛內にか〳〵。講中何事なう。お山勤めて有難い今日の下向は知れたこと。懇な友達は桑津迄迎ひにぢや。お主一人見えぬは氣色でもわるいか。忝い御利生見てきた。是が土產先づ話さう。西國者とやら。兩眼つぶれた十二三な盲が。大願かけて山上し行者樣を拜む中。兩方共にくわつと開き。小篠の坂を杖もつかずつゝつと下る。お山の衆が考へ。アヽ有難い。此秋から世の中直る御告。あれ合點いかぬか。小さい盲は小めくら。則ち米藏開いて。易々と下る坂はさがり口との教へ。地 手すきなら夕方おじや。色々お山の噺して旅の疲を晴らさうぎやてい。フシ ぎやてい〳〵とのゝめきける。親德兵衛走り出で。若い衆下向ヵ殊勝にござる。詞 こちのどろめは山上參りの行者講と。今年も身どもか手から四貫六百。願慶町の見丈兵衛から四貫。以上十貫近い。貫取

つてどれどこに通ひにも出居らぬ。神佛の罰も思はぬどろく者。友達がひに引締しめて意見。地頼みまするといふ所へ。奥より母親兩手に茶碗。なう〳〵目出たい下向。マア一ツづつ參れ。詞こちの與兵衛が山上樣へ嘘ついた其の咎めか。妹娘おかちが十日ばかり風ひいて枕上らず。地醫者も三人變へても今に熱がさめかね。節句は近付く聟を入るゝ談合極り。先からは急いでくる何かに付けて女夫の苦勞。みんな與兵衛ののらめが行者樣へ嘘ついた祟り。お若い衆お詫の祈禱頼みますと。しみ〴〵語れば講中の先達。詞いや〳〵お山の祟りなれば與兵衛に罰が當る筈。役の行者ともいはるゝ佛が。若聟らしうなんの脇がかりなされう。娘御の熱病は又外のごと。其の樣な煩ひには藥も醫者も入らぬ事。皆樣知らずか。あんまり奇妙で異名を。白稲荷法印と申す今の世の流行山伏。與兵衛も定めし知つてゐよ。此の法印を頼めば本復はたつた

一加持。地是からすぐに立寄り。頼むに否は有るまいと語れば悅びナウ〳〵忝い。これも行者のお知らせ私は醫者殿へ參ります。是でゆるりとお休み。〳〵と立出づればいや我々も面々の。親々妻子の顏も見たし。互に無事で悅びの貝吹く降伏惡魔を拂ふ眞言の。聲もちり〴〵ばら〳〵ぎやてい。フシおんころ〳〵に別れ歸りけり。地逆な弟に似ぬ心。順慶町の兄河内屋太兵衛用有りげにも浮かぬ顏付。詞ヤ太兵衛來てか。おかちが氣色見舞か。書出し何か忙しい時分。見舞には及ばぬ事と。いへば太兵衛そば近く寄り。母には道でお目にかゝり。立ちながら委しう物語り致せしが。高槻の叔父森右衛門樣から。たつた今飛脚の狀に。もつけな事がいうて來ました見さつしやれ。跡の月御主人の供して野崎參りの折ふし。極道の與兵衛めも參り合せ。友達喧嘩に摑み合ふ拍子。御主人へ段々の慮外。當座に與兵衛めを切殺し主も腹切る合

點の所。御主人の御料簡おとなしく。事相濟み歸つて後。御家中町屋是沙汰。のめのめと面さけて奉公ならず。暇を願ひ浪人し四五日中に大阪へ下り。再び侍の立つべき思案せずば此の分で刀はさゝれぬとの地文體なりと。いふよりはつと膝を打ち扨こそな。どこぞで大事しださうと思ふつぼ。かてゝ加へておかちが煩ひ叔父の難儀。まだ此の上にどろめが何をしださうやら。分別に能はぬと天窓を掻けば。イヤ分別も何も入らぬ。追出してのけさつしやれ。詞地體親父樣が手緩い。私と與兵衛めは。お前の胤でないとて餘り御遠慮が過ぎまする。腹に宿つた母ぢや人と連添ふお前。眞實の父上と存ずる。地やがて聟を取る程背丈のびた。おかちはぶちたゝきなされても。暗惰嬢めには拳一つ當てず增長させ。萬事に遠慮が皆身の仇。たゝき出して此方へ遣さつしやれ。どれぞひどい主にかけ矯め直してくれませうと。いへば親は無念顏。詞エヽ

惜しい。尤繼父なればとて親は親。子を折檻するに遠慮はない筈なれど。そなた衆兄弟は身どもが親方の子。親旦那往生の時は。そなたが七つのらめは四つ。ぼん樣兄樣。德兵衞どうせいかうせいというたを彼奴がきつと覺えてゐる。かゝも始めはおか樣の内儀樣のというた人。叔父森右衞門殿が料簡で。そちが家を見捨てゝは後家も子供も路頭に立つ。とかく森右衞門次第に成つてくれとだん〳〵の賴みゆゑ。地親方の内儀と此の如く女夫になり。親方の子を我が子として守り立てしかひ有つて。其方は自分の獨稼もめさるゝ。與兵衞めに商の手をひろげさせ手代も置き。土藏の一軒も建てる樣にとあがいても。尻のほどけた錢ざし。籠で水汲む如く跡からぬけ。壹匁儲ければ百匁遣ふ根性。意見一言いひだせば千言で言ひ返す。エヽ元が主筋下人筋の親と子。釘ごたへせぬ筈身の境界が口惜しいと齒を嚙ひしばれば。詞サアこなたの其

の正直を見拔いて。どろく者めがしたいがひに踏み付ける。親父樣のかげでこそ。親子三人橋にも寢ず。人の門にも立たず名跡立てて下された。其の恩德は本の親にも變らずと毎度母も其の悔み。子供に遠慮有るからは。現在腹に宿した母にも氣兼が有るかと思はぬ心置るゝ。因果曝しの物にならずに飽き果てた。太兵衞賴む。江戸長崎へも追下し死にをらば死に次第。再び面を見たうない。微塵も愛着殘らぬと。如來かけての母が言ひ分からは何御遠慮。地勘當なされと評議の聲に目を覺し。アヽ術ないかゝ樣〳〵かゝ樣はまだ歸らずかと。おかちが苦しむ屛風の内。門には物もう。河内屋德兵衞殿は此方か。山上講中賴みにつけ。稻荷法印御見舞申すと案内す。扨はおかちが祈禱なさるゝか一段々々。私は高槻の返事が急ぐ。お暇申すと表に出で。德兵衞宿に罷在る早々御出忝し。あれへお通り遊ばせと。太兵衞歸れば法印はオクリ端の〽間に

こそフシ通りけれ。踏みしめもなく。世の中を。滑り渡りの油屋與兵衞賣溜錢は色狂ひ。搾り取られて元も利も糟も殘らぬ油桶。フシ重げに見せる。汗は夏。中は涼しき空樽を。になうてフシ宿へ歸りしが。詞ヤ珍しいお山ぶ。此方は見知つた白稻荷殿。妹が病氣祈りの爲か。あの憑物が。そなた衆の祈りで退いたら此の與兵衞が首がけ。母ぢや人は藥取りにか。耆婆でもいかぬ死病いはれぬ氣骨折らるゝ。ヤこれ親父殿。おかちが煩ひより何より大事が有る。其の當座に母ぢや人には言うたれどそれよりはつたりと打忘れ。今日ふつと思ひ出し商賣止めて歸つた。跡の月野崎で叔父森右衞門樣に行逢ひ。わざ〳〵飛脚もやる所幸の便親達へいうてくれ。主人の銀四つ寶三貫目餘り引負ひ。此の節季にたてねば切腹か縛首一生の無心。兄太兵衞は義理も法も知らぬ奴。沙汰無しに三貫目調へ。與兵衞に持たせて下されと段々の言傳。地二貫目や三

貫目で叔父に腹切らせて。こなた衆の外聞世間が立つまい。けふは二日際というて明日明後日。萬事を差置き今日の中三貫目調へて渡さつしやれ。明日夜明けに駈出せば正午迄に往て戻ると。たつた今直筆の叔父の文の裏表。憎く可笑しく。詞いかな叔父でも。主の金引負ふ樣な侍。腹切らせたがまし。何ぢやごたくさんに三貫目。三匁もおじやらぬ。お主が商賣去年から一文も見せぬ。算用したら三貫目や四貫目は殘る筈。地追付け聟を呼びやりたくば其の金やれ。大事の娘が病氣鈍な評定する隙が入るる。大事の娘が病氣鈍な評定する隙がない。ヤ法印樣お待ちどほ。おかちが容態御覧なされ下されと餘の事いうて取り合はず。ヲヽ〳〵。手柄に聟が呼ばれうば呼うで見や。見物せうと親の前に足踏伸し。算盤枕の胸算用 フシぐわらりと違うて見えにけり。父がそろ〳〵だき起すおかちが顔の面窶れ。法印とつくと見。詞ムヽ年はいくつ。十五。病みつきは跡の月十二日。ムヽ藥師如來の縁日。十五は阿彌陀と地懐中の書籍くりひろげ指を折り。仔細らしき聲付。詞そも〳〵法藏比丘の淨瑠璃に曰く。阿彌陀と藥師は御夫婦と云々。則ち此の病は一時も早く婿殿を呼入れ。夫婦に成り度いと思ふ氣病に。地ちつと外の魅入有りといふより德兵衛もつとも顔。法印圖に乘り。稻荷大明神の使者白狐の數へ。髪筋程も違はぬ祈り加持も藥同然。神佛にも其の役々。熱病さましひやすには。比叡山の廿一社。温むるには フシ熱田明神。江戸あたまの病は愛宕權現。足の病は阿閦佛。走り人盗人。動かせぬは フシ不動の鐵縛り。咳氣を祈るは風の宮。老人達の老病には白髭明神白髪藥師。若衆の病のナホス祈りには大慈大悲の地藏菩薩。骨牌の緡のつく祈禱に麻布の明神釋迦牟尼佛。どう取の祈りは。四三五六社大明神。八講七の社。詞別けて此の法印が得物。錢小判俵物の相場商賣。上げうと下げうと高下は自由。地持のお方が値上したい祈りには。强氣に。上り高天が原の八百萬神。はたした衆の下りを祈るは。高きお山を時の間に麓に下る。嵯峨の釋迦。フシ安井の天神。コハリ持とはたと兩方一度の祈りには。高からず安からず中を取つて河内の國。フシホス高安の大明神。法力のあらたな事棚な物取つて來る如く。詞禮物は大方三十兩。何時でも受取る。地いで一祈りと錫杖振立ていらたか數珠 フシさらり〳〵と押揉んだり。地印をも未だ結ばぬに病人重たき顔を上げ。なう祈りも入らぬ祈禱もいや。おかちが病なほすには聟取の談合やめてたも。あの與兵衛が若氣故借錢に責めらるゝ。其の苦しみが冥土の苦患是ぞ呵責の責と成る。流れ勤めの女子なりとも。與兵衛が契約の思ひ人を請出し嫁にして。此の所帶を渡してたも。是非に聟を取るならばおかちが命は有るまいぞ。思ひ知つたか思ひしれと四邊をきよろ〳〵睥め廻し。アア術ない苦しいと悶えわなゝき漫言。父は

驚き色違へ。法印少しも臆せず。汝元來何處より來るとつく去れ〳〵。行者の法力盡くべきかと鈴錫杖をちりゝんがら〳〵。フシ急如律令とせめかくる。地與兵衛むつくと起き。何を知つて去れ〳〵。どう山伏置きをれと落間にがはと突落せば。ヤア山伏の法を知らぬか。驗を見せずば置くまじと。駈けあがりん〳〵鈴りん〳〵。引きずりおろせば又駈け上る不動の眞言どたくたぐわつたりばつたりだ。引きずりおろされ山伏も錫杖がら〳〵。フシ命から〴〵歸りける。地與兵衛親の側に跪まくり。詞是親父殿。今の漫言耳へ入れたか。死んた人を迷はせ地獄へ墮しても。此の與兵衛が好いた女房持たせ。所帶渡す事はいやかならぬか。ヤイ囂い。あたり隣も有るぞかしよつ程にほたへあがれ。此の徳兵衛は。死んだ人の跡式取らいでも。五人七人はゆるりと過ぎる術知つたれど。年忌命日も弔ひ。地獄へ墮さず迷はせまい爲に名跡繼いで苦勞する。和御寮が好いたお山請出し女房に持たせ。半年も立たぬ中。所帶破つて親方の弔ひもならぬ樣にはえせまい。さては是非聟取つて。妹に所帶渡すな。地ヲヲ渡す。ムウよういうた道知らずめと立上り。俯向けに踏みのめらし。肩骨脊骨うん〳〵〳〵と踏みつくる。なう悲しやあさましい兄樣と。妹が縋れば。おかち構ふな。あいつが腹のいる程。存分に踏ましや〳〵と。身も働かず座も去らず。妹堪へかね餘りな兄樣。わしは何も知らぬ者死靈の憑いた顏して此のよに〳〵いふてくれ。それからは商賣も精出し。親達へ孝行盡し逆ふまいとの誓文立て。それが嬉しいばかりに病みほうけた此のなりで。怖い〳〵恐ろしい死人の眞似して嘘つかせ。父樣を踏んづ蹴つそれが親孝行か。年寄つた父樣目でも眩うたら。それは〳〵聞く事ぢやないぞと縋り取付き泣き喚けば。詞いき女郎め。ぬかすまいと誓文立てゝ口がため。地につくいほゝげた。死靈より此の與兵衛といふ生靈の苦み。覺えてをれと同じくがはと踏み伏せたり。病み疲れた妹を踏殺すか畜生めと。取付くてゝ親はつたと蹴飛し。腹のいる程踏めというたな。是で腹をいるわいと。顏も頭も別ちなく散々に踏む最中。母立歸り。はつとばかり業投棄て。與兵衛が髻引つつかんで。横投にどうとのめらせ乗りかかり。目鼻もいはせぬ操り拳。詞ヤイ業曝め提婆め。いかな下人下郎でも踏むの蹴るのはせぬ事。徳兵衛殿は誰ぢや。己れが親。地今の間に其の臑が。腐つて落ちると知らぬか罰當り。おとましや〳〵。腹の中から盲で生れ手足不具な者もあれど。魂は人の魂。己れが五體どこを不足に產み付けた。人間の根性なぜさげぬ。父親が違ひし故母の心がひがんで。惡性根入るゝといはれまいと。さす手引く手に病の種。己れが心の劍で。母が壽命をフシ削るわい。詞己れ先度も高槻の叔父が。お主のかねを引負ひし

とようも〳〵此の母をぬく〳〵と騙したなア。たつた今兄太兵衛に行逢ひ。己れが野崎のあばれ故叔父は侍一分立たず。浪人して大阪へ下るとの便。己れが嘘が顯れた。其の時母がつか〳〵と親父殿へ話し。跡で知れては扨は親子のいひ合せと疑はれ。夫婦の義理も缺け果てる。地内でも外でも己れが噂ろくな事は一度も聞かぬ。其の度ごとに母が身の肉を一寸づつ。そいで取るやうな因果ざらしめ。半時も此の内に置く事ならぬ。勘當ぢや出てうせう。出去れ〳〵とぶつつくはせつ。たゝく片手に押し拭ふ涙フシ手のひまなかりけり。此の與兵衛がこゝを出てどこへいく所がない。ヲヽ己れが好いた。お山が所へ出てうせうと小腕取つて引出す。ナウ兄様追出しわしは此の跡取る事いや。こらへて進ぜて下されと取りつけば何知つて退いてをれ。是徳兵衛殿。きよろりと見てゐて誰に遠慮。エヽ齒がいゝたゝき出してくれんと。枴押つ取り振りあぐればひらりと外しひつたくり。此の枴で和御寮を撲つとはた〳〵と打ちつくる。徳兵衛飛びかゝり枴もぎ取り。續け打に七ツ八ツ息もせさせず撲ちすゑ。はつたと睨む目に涙。詞ヤイ木で造り。土をつくねた人形でも。魂入るれば性根有る。耳あらばよう聞け。此の徳兵衛は親乍ら主筋と思ひ。手向ひせず存分に踏まれた。腹を借つた生みの母に今の態。脇から見る目も勿體なうて身が顫ふ。今撲つたも徳兵衛は撲たぬ。先徳兵衛殿冥土より。手を出してお打ちなさるゝと知らぬかやい。おかちに入聟取るといふは跡方も無い事。エヽ無念な。妹に名跡繼がせては口惜しと恥入り。根性も直るかと一思案しての方便。あの子は餘所へ嫁入さする氣遣すな。他人どし親子と成るはよく〳〵他生の重縁と。地かはいさは實子一倍。疱瘡した時日親様へ願かけ。詞代代の念佛捨て。地百日法華に成る是程よろづ面倒見て。大きな家の主にもと。丁稚も使はず肩に棒稼ぐ程遣ひほつく。己れ今の若盛一働かせぎ五間口七間口の門柱の。主にと念願を立ててこそ商人なれ。たつた一間眞半の門柱に念かけ。母に手向ひ父を踏み行く先僞り騙ごと。其の根性が續いたら門柱は思ひもよらず。獄門柱の主にならう。親は是が悲しいとわつと叫び。入りければ。地エヽもどかしい徳兵衛殿。石に謎かける様に口でいうて聞く奴か。出てうせ〳〵。うぢ〳〵ひろがば町中寄せて追出すと。又押取つて母がつつ張る枴の先。怖い目知らぬ無法者。町中といふにぎよつとしてと胸つきたる怪顚顔。なう兄様出してわしは跡に殘らぬと。縋る妹を押止め。きり〳〵うせう。枴がくらひ足らぬかと。ふり上げこすり出されて。越ゆる閾の細溝も。本フシ親子別れの涙川。徳兵衛つく〴〵と後姿を見送りて。わつと叫び聲を上げ。あいつが顔つきせい恰好成人するに從ひ。死なれた旦那に生寫し。あれあの辻に立つ

たるなりを見るにつけ。與兵衛めは追出さず。旦那を追出す心がして。勿體ない。悲しいわいのと フシどうど伏し人目も。恥ぢず泣く聲に。憎い／＼も母の親晴む涙堪へかね。見ぬ顔ながら伸び上り。見れどもよその綸幟に影も。隠れて 三重

下之巻

葺きなれし。フシ年もひさしの。蓬菖蒲は家毎に。地 幟の音のざはめくは フシ男子兒持の印かや。娘ばかりの豐島屋は亭主は外の掛一まき。内のしまひと小拂と油賣つたり縫うたりに。三人の娘の世話。まあ姉からと櫛笥取出しとき櫛に。色香揉み込む梅花の油。歌 女はヤ髪より形より。心の垢を梳き櫛や。フシ 嫁入先は。地 夫の家さとの住家も親の家。鏡の家の家ならで家といふ物なけれどもたが世にゆるし定めけん。長地 五月五日の一夜さを女の家といふぞかし。身の祝月祝日に フシ何事なかれ。なで付けて 地 髪引く湯津の妻櫛の歯のハア悲し。一枚折れた。あきれてとんと投櫛は。別れの櫛とて忌む事をと。口にはいはず氣にかゝる フシなんぞのつけの小櫛かや。地 掛も十に七左衛門大方寄つて中戻り。詞 アヽ思ひの外早い仕舞。内の拂もさらりと仕舞ひ。兩替町の錢屋から燈油二升梅花一合。今橋の紙屋から通ひ持ちて燈油一升。當座帳に付けて置く。まあ洗足して早うお休み。明日はとうから禮に出さしやんせ。いや／＼早う休まれぬ。天滿の池田町へいかねばならぬ。フウ氣疎いもうよいわいの。池田町は北のはて。近所の掛さへ寄つたらば過ぎての事。こな人何いやる。節季に寄らぬ金の過ぎて寄つた例はない。今日暮れてから渡さうと詞番うた。つい一走りいてこう。此の打飼袋に新銀五百八十目。財布の錢も戸棚へ入れて錠卸しや。やがて歸ろと立出づる申し／＼。詞 そんなら酒一ツ姉。それ燗して進じやと。地 立つて戸棚へ徳利からちろりへ移せば。アこりや／＼。詞 燗せいでも大事ない。肴も盃も入らぬ。中がさ添へて持つてこい。夜が短い氣がせくそこからつけ。地 あいとはいへど坐しては手も屆かねば立ち上り。つぐも受くるも立酒をお吉見付けてそりやなんぞ。詞 いま／＼しい子供は頑是もないにせい。立酒飲んでたれを野送り。ア氣味わると。地 いはれて夫もちやつと腰かけ取直し。掛乞ひに行く門出にはか行の立酒。此の世に殘らぬ／＼と。祝ふ程なほあはれ世の フシ永き別れと出でて行く。母を見習ふ。姉娘。地 よるの衾をしき／＼に。歌 ござよ枕よ蚊帳の吊手は。長けれど 地 居かぬ足の フシ短夜や 地 おでんをろくに寢させて。かゝ様もちとお休みといひければ。詞 チチでかしやつたとゝ様もまだ遲かろ。蚊帳の内から表はかゝが氣を付ける。わが身もねゝしや。いえ／＼ 地 わたしはねたうござらぬと。フシ いひつゝ眠るもおとなしゝ。地 此の節季越すに越されぬ河内屋與兵衛。手筈の合はぬ古袷。心ばかりが廣袖にさけ

たる油の二升入。一生さゝぬ脇差も今宵鐺のつまりの分別。勝手知つたる豐島屋の。門の口覗く後より。詞與兵衞ぢやないか。ヲ與兵衞ぢやが誰ぢやと振返れば。上町の口入綿屋小兵衞。アこなたは順慶町へ行けば。本天滿町親御の所へといはるゝ。親御へ行けば追出したこゝにはゐぬとある。貴樣は留守でも判は親父の判。新銀一貫目今宵延びると明日町へ斷る。ハテこゝな人はいきかたの惡い。手形の表こそ一貫目正味は二百目。今宵中に濟せば別條ない約束ではないかいの。さればあすの明六ッ迄にすめば二百目。五日の日がによつと出ると一貫目。もと二百目を一貫目にして取れば。こつちの得のやうなれど。親父殿に非業の金を出さするが笑止さに。こなた最屓でせつくぞや。今宵きつと濟ましやゝ。小兵衞こりや念入るゝな。河内屋與兵衞男ぢや男ぢやあてが有る。雞の鳴く迄には持つていく。眠たくと待つてもらを。はて今宵すまして入用なれば。あす又すぐに貸すわいの。地こつちも商賣一貫目や二貫目は何時でも。其の男氣を見屆けたと。詞で與兵衞が首しめる フシ 綿屋小兵衞は歸りけり。地與兵衞見事に請合は請合ひしが。一錢の當もなし茶屋の拂ひは一寸のがれ。拔きさしならぬ此の二百匁。有る所には有らうがな。世界は廣し二百匁などは。誰ぞ落しさうな物ぢやと。後を見れば小提灯。河といふ小文字はこつちの親父南無三寶と。鎖いたる店に平蜘蛛のフシひつたりと身を付け身を忍ぶ。地德兵衞は氣もつかず豐島屋のくゞりそつとあけ。七左衞門殿お仕舞かとつつと入れば是は／＼德兵衞樣。詞こちのはまだ仕舞はず天滿の果迄いかれます。わたしは取紛れお見舞も申さぬに。ようこそ／＼。此の際は與兵衞樣の事につき。地いかいお世話でござんしよと。蚊帳より出づればされば／＼。詞こなたは幼い娘御達の世話。我等は成人の與兵衞に世話をやく。いづれの道にも子に世話をやむは親の役。苦勞とも存ぜねども。引付けて一所に在る中は氣も落付く。あの樣な無法者を勘當すればやけを起しあす火に入るも構はず。謀判實判一貫目の銀に十貫目の手形して。一生の首繋がるゝ例も有る事と思ひながら。地生の母の追出すを。繼父の我等輕薄らしうとめられず。詞聞けば順慶町兄が方にゐるとやら。もし此の邊へうろたへて見えましたら。七左衞門殿夫婦言ひ合せ。てゝ親は合點。隨分母に詫言致しどしやう骨入れかへ。再び内へ戻る樣に御意見偏に頼み入る。こちの女房おさはが一家一門皆侍。其のならはしか思ひ切つては見かへらず。義理固い生れ付それに似ぬ道樂者。地本親の旦那も行儀つよく。義理も情も知つたる人。二人の子供に心を盡すは皆故旦那への奉公。今與兵衞めを追出し。一生荒い詞も聞かぬ親方に。草葉の蔭より恨みを受くる無果報は此の德兵衞一人。推量なされお吉樣

と。煙草に涙スヂ紛らして咽せかへる。こそ道理なれ。詞ムウ思ひやりました。こちのも追付け歸られう。逢うてお話しなされませ。いや／＼いづかたも今宵のこと萬事のお邪魔。是此の錢三百。女房が目顔を忍びつい懐中へ入れて出た。與兵衛めがうせたらば追付け暑氣に赴く。きつぱりと肌の物でも買ひをれと。ゆめ／＼我等の名を出さず。七左殿の心付か。どうなりとも御氣轉頼み入ると差出す。地後の門口お吉様お仕舞かと。音づるゝは女房おさはが聲徳兵衛びつくり。ハツ逢うては氣の毒隠れたい。率爾ながら御免なされと隠るゝ蚊帳の後影。詞これ／＼徳兵衛殿我が女房に隠るゝとは何事と。地聲かけられて夫も敗亡お吉もどまくれ挨拶なく。外には與兵衛サア母のかまがわせた。何いはるゝと樒の孔フシ耳を付けてぞ聞きゐたる。地女房お澤腰打掛け。詞ナウ徳兵衛殿七左衛門様もお留守といひ。内の事はそこ／＼に。いつ逢はうとまゝの向ひどし。互に忙しい際の夜さ。こゝへは何の用が有る惡性する年でもなし。ムウ又與兵衛めがこと悔みにか。いかに繼しい子なればとてあんまりに義理過ぎた。眞實の母が追出すからは。こなたは名の立つ事はない。此の三百の錢のためにやるのか。つね／＼に身をひづめ。始末して彼奴にやるは淵へ棄つるも同然。地其あまやかしが皆毒飼。此の母はさうでない。サア勘當といふ一言口を出づるがそれ限り。紙衣着て河へはまらうが。油塗つて火にくばらうが。うぬが三昧。惡人めに氣を奪はれ。女房や娘は何になれ。サア／＼先へいなつしやれと。引立つる袖を振放し。詞エヽかかむごいぞやさうでない。生れ立から親はない。子が年寄つて親と成る。親の始は皆人の子。子は親の慈悲で立つ親は我が子の孝で立つ。地此の徳兵衛は果報勘く今生で人は使はずとも。詞いつでも相果てし時の葬禮には。他人の野送り百人より。兄弟の男子に先輿後輿舁かれて。あつぱれ死に光やらうと思うたに。地子は有りながら其のかひなく無緣の手にかゝらうより。いつそ行倒れの釋迦荷ひが。ましてフシおぢやるわと又むせかへるぞ哀れなる。詞ア與兵衛めばかりが子ではない。兄の太兵衛娘なれどもおかちはこなたの子でないか。地サア／＼早う先へと押出す。詞ハテいぬるなら連立たうそなたもおじやと引立つる。地母の袷の懐中より。板間へぐわらりと落ちたはなんぞ。粽一把に錢五百。なう情なや恥かしと我が身を覆ひ押隠し聲を上げ。徳兵衛殿眞平免して下され。是は内の掛の寄り與兵衛めにやりたいばかり。わしが五百盗んだ。廿年添ふ中隔心隔ての有るやうに情ない。詞たとへあの惡人めがお談義に聞く様な。地周利槃特の阿房でも阿闍世太子の鬼子でも。母の身でなんのにくからう。いかなる惡業惡緣か胎内に宿つてあの通りと思へば。不便さ可愛さは父親の一倍

なれども。詞母が可愛い顔しては隔てた心に。あんまり母があいたてない強張が強うて。いよ〳〵心が直らぬとさぞ憎まるゝは必定と。地わざと憎い顔して撲つつ叩いつ追出すの勘當のと。慘う辛う當りしは繼父のこなたに。可愛がつてもらひたさ。是も女の廻り智惠発して下され徳兵衛殿。わしに隱してあの錢をやつて下さる志。詞ではけん〳〵と慳貪にいうたれど。心で三度フシ頂きし。詞何を隱さうあいつは立派好もするやつ。取りわけ祝ひ月鬢付元結をとゝのへ。人交りもしたからう。生れて此の方節句々々祝儀缺かぬに此の月ばかり。身祝ひもしてやりたさ。見苦しい此の恥辱をさらすも。お吉樣頼んで届けんため。地まだ此の上に根性の直る藥には。母が生膽を煎じて飲ませといふ醫者あらば。身を八裂も厭ねども。一生夫の錢かね文字半錢ちがへぬ身が。子故の闇に迷はされ盜して顯はれた。恥かしゆござるとばかりにてわつと

叫び入りければ。道理々々と夫の歎き子を持つ者は身にこたへ。行く末思ふはお吉の涙折からになく蚊の聲もフシいとゞ涙を添へにけり。詞ヤ祝ひ日に心もない泣き喚き不調法。其の錢もお吉樣頼み。與兵衛にやつてお暇申しやと。地いへども女房涙にくれ。詞こな樣のやつて下さる其の深い志に。盜んだ錢がなんとやらりよ。ハテ大事ないひらにやりや。地いや免して下されと。女夫が義理のフシやるかたなさお吉も。涙止めかね。詞アヽおさは樣の心推量したやりにくい筈。こゝに捨てゝ置かしやんせ。わしが誰ぞよさそな人に拾はせましよ。アヽ添いとてものお情。此の粽も誰ぞよさそな犬に。地喰はせて下さんせと。スヱテ又泣き出す兩親の。地心隔てぬ潜戸も子の不孝より落ちたる樞オクリ開けてへ夫婦は歸りけり。地父母の歸るを見て心一つに打點頭き。脇指拔いて懷中にさいたる潛さらりとあけ。つつと入るより胸も樞も落し付け。

詞七左衛門殿はいづかたへ定めて掛も寄りましよと。地餘所の方からうら問ひける。詞誰かとこそ思うたれ與兵衛樣か。こな樣は仕合な。後ともいはずよい所へござんした。是此の錢八百此の粽こな樣へやれと天道から降りました。頂かしやんせ。地なんぼ浪人でも際の日の寶。まんが直ろと差出せば。詞與兵衛ちつとも驚かず。是が親達の合力か。ハテ早合點な追出した親達が。なんのこな樣へ錢かねをやらしやんしよ。いや隱さしやるな。先にから門口に蚊にくはれ。長々しい親達の愁歎聞いて。涙をこぼしました。ムヽそんなら皆聞いてかよう合點參りしか。他人でさへ目を泣き腫した。此の錢一文も徒には成るまい。地肌身に付けて一稼お二人の葬禮に。立派な乘物に乘せうといふ氣がなければ。男でも杭でもない。それを御背きなされたら天道の罰佛の罰。日本の神々のさか罰が當つて。將來がようあるまい。先づ頂いてと差出せば。

詞いかにも〳〵よう合點しました。只今より眞人間に成つて孝行盡す合點なれども。肝腎お慈悲の錢が足らぬ。というて親兄には言はれぬ首尾。こゝに賣溜掛の寄り金も有る筈。新でたつた二百匁ばかり。勘當のゆりる迄貸して下され。それ〳〵。奥を聞かうより口聞けどこに心が直つた。嘘にも金を貸してくれとはいはれぬ義理。世間の義理を缺いても。金借つて惡性所の拂ひして。跡からだん〳〵行かうでな。成程金は奥の戸棚に上銀が五百匁餘り。錢もありは有りながら。夫の留守に一錢でも貸すことはいかな〳〵。地いつぞや野崎參り着る物洗うて進ぜたさへ。不義したと疑はれ。言譯に幾日かゝつたやらなうとましや〳〵。歸られぬうち其の錢持つて早ういんで下さんせと。いふ程側へにじり寄り。詞不義になつて貸して下され。ハテならぬといふにくどい〳〵。くどういふまい貸して下され。イヤ女子と思うてなぶらしやると聲立てゝわめくぞや。ハテ與兵衛も男。二人の親の詞が心根にしみ込んで悲しいもの。なぶるの侮るのといふ所へゆくことか。何を隱しませう跡の月の廿日に。親仁の謀判して上銀二百匁。今晩切に借りました。ヤまあ後を聞いて下され。手形の表は上銀一貫目。借つた金は二百匁。地明日になれば手形の通り一貫目で返す約束。それよりも悲しいは親兄の所はいふに及ばず。兩町の年寄五人組へ先樣から斷る筈。今に成つて此金の才覺。泣いても笑うても叶はぬ事。自害して死なうと覺悟し。これ懷中に此の脇差はさいて出たれども。只今兩親の歎き御不便がりを聞いては。死んで此の金親父の難儀にかくること。不孝の塗上げ身上の破滅。思ひ廻せば死ぬるにも死なれず。生きてはゐられず詮方なさに見かけての御無心ぞや。なければ是非もなし有る金。たつた二百匁で與兵衛が命をついで下さるゝ御恩德。黄泉の底迄忘れうかお吉樣。どうぞ貸して下されといふ目の色も誠らしく。さうした事もと思ひ乍らかねての僞り是も亦。其の手よと思ひ返して。詞フウヽまが〳〵しいあの嘘わいの。まだ尾鰭付けていはしやんせ。ならぬというてはきつうならぬ。是程男の冥利にかけ。誓言立てゝも成りませぬか。ハァはあなんとせう借りますまいと。地言ふより心の一分別。詞そんなら此の樽に油二升取りかへて下さりませ。地それは互のあきなひ内貸し借りせいでは世が立たぬ。成程詰めてと賣場にかゝり。消ゆる命の燈火は油量るも夢の間と。しらで升取り柄杓取る。後に與兵衛が邪見の刀拔いて待てども見ず知らず。詞祝うて節句もお仕舞なされ。こちの人ともわり入つて相談。有る金なれば役に立てまい物でなし。地五十年六十年の女夫の中も。まゝにならぬは女の習ひ。必ずわしを恨んでばし下さるなといふ内に。燈油に映る刄の光お吉喫驚。詞今のはなんぞ與兵衛樣。地イ

ヤなんでもござらぬと脇指後に押隠す。詞それ／＼きつと目もすわつて。なう恐ろしい顔色。其の右の手こゝへ出さしやんせ。地おつと脇差持ちかへて是見さしやれ。詞何もない／＼と地いへどもお吉身もわな／＼。詞アヽこな様は小氣味のわるい。必ず側へ寄るまいと。地跡じさりして寄る門の口。あけて逃げんと氣を配れど。詞ハテきよろ／＼何恐ろしいと。地つけ廻し／＼出あへと喚く一聲。二聲待たずとびかかり取つて引きしめ。詞音ぼね立つるな女めと。地吭のくさりをぐつと刺す刺されて惱亂手足をもがき。詞そんなら聲立てまい。今死んでは年はもいかぬ三人の子が流浪する。それが可愛いい死にともない。金も入る程持つてござれ。助けて下され與兵衞樣。ヲヽ死にともない筈尤々。こなたの娘が可愛い程。おれもおれを可愛いがる親父がいとしい。金拂うて男立てねばならぬ。諦めて死んで下され。口で申せば人が聞く。心でお念佛南無阿彌陀。地南無阿彌陀佛と引寄せて右手より左手の太腹へ。刺いては刳り拔いては切り。お吉を迎ひの冥土の夜風。はためく門の幟の音煽ちに賣場の火も消えて。庭も心も暗闇に打ちまく油流るゝ血。踏みのめらかし踏みすべり。身内は血汐の赤面赤鬼。邪見の角を振立てて。お吉が身を裂く劍の山目前油の地獄の苦しみ。軒の菖蒲のさしもげに。千々の病はよくれども。過去の業病遁れ得ぬ。菖蒲刀に置く露の玉も亂れて三重／＼息絶えたり。地日頃のつよき死顔見て。ぞつと我から心も後れ。膝節がた／＼がたつく胸をおしさげ／＼。さげたる鍵を押取つて覗けば蚊帳のうちとけて。寢たる子供の顔付さへ我を睨むと身も顫へば。つれてがらつく鍵の音頭の上に鳴雷の。落懸るかと肝に徹へ。戸棚にひつたり引出す打飼袋。上銀五百八十匁宵に聞いたる心あて。捻込み捻込む懷中の。重さよ足もおもくれて。白氷を踏む火焔踏む。此の脇差は栴檀の木の橋から河へ。沈む來世は見えぬ沙汰。此の世の果報の付きどきと内をぬけ出で逸散に。足に任せて三重／＼おしてるや。フシ難波の春は。地京に負け京は難波の景色より。劣る水無月夏神樂。本フシくるわ四筋は四季共に散ること。フシしらぬ花揃へ。地妓の風俗揚屋のかゝり小オクリ富士も／＼及ばぬ戀の山。第一日本の名所なり一年三百六十日。紋日が三日足らぬとて亡八は歎く。女郎はそれほど客に厄介を。變換へに行く客も有り。好んで頼み頼まるゝ。客は一きはフシいかつけに。鴛籠を飛ばする揚屋客。扇で忍ぶ茶屋の客。一座遊びは女房めく。肩で風切る空ぞめき。位を問ふは田舎客。寢て物語る馴染客。太鼓過ぎてと。囁くは女郎の手もめの振舞客。親。親方の沒却有り。我が身上の滅却有り飛脚もまじり行き通ふ。道の間を暫くも口たゞ置くは恥らしく。役者物眞似地の物まね。小唄淨瑠璃口戯譃西口東口々

に。行くも歸るも障りなきゆふべ〳〵の大寄せは。フシゆたか成る世のいさをしなり。地されば山本森右衛門與兵衛が身持の知らせに驚き。暫く主人に暇乞ひ大阪へ立越えしが。女殺して金取りしも慥にそれとは知れねども。衆目の見る所與兵衛に指さす身の放埒。若しやと詮議も寄りつかねば先づ〳〵尋ねくるわの内。東口にて尋ねしにそんじよそことは教へしかど。いづれも同じ局のかゝり。こゝや備前屋。是や教へし備前屋かと。見まがひ佇みゐる折ふし。手にかさ高な文持つて西の方から來る禿。これ〳〵物問はう。詞備前屋と申す傾城屋はいづかた。其の御内に松風殿と申す傾城。御存じならば教へてたべ。我等當所不知案内。頼み入るとぞ堅くろし。フウ仔細らしい物のいひ樣。備前屋は此の家。西の端に戸のさいた。客の有る局が松風樣でござんす。コレお侍樣。左の足上げさんせ。ソレ〳〵又右の足も上げさんせ。ヲヽよう上げさん

した。いかい世話のと。地なぶつてフシひんしやんゆき過ぐる。所がらとて人になれ。エ氣輕いやつと打笑ひ。教へし局に立寄れば。内に火影は有りながら戸口ひつしと立てつめたり。扨こそ客は與兵衛に極まる。出づるを捕へ逢はんものと。待つ間程なく戸を開き。編笠かづき立出づるすかさずむんずとひんだかゆる。女郎も續いてこりや誰ぞ。率爾せまいと引分くる。詞苦しからず率爾でない。己れ與兵衛の隠れたならば逢ふまいかと。笠引つちぎり顔見合せヤア。こりや與兵衛でない人違へ。まつぴら〳〵面目なやと腰折つて手をすれば。地彼奴も忍びの戀やらん。頷くばかり顔隠しフシ東の方へ走り行く。詞河内屋與兵衛深い中と音に聞く松風殿。昨日にも今日にも與兵衛はこゝもとへ參らずか。氣遣のない用事有つて尋ぬる者。隠されては彼が爲ならず。サア眞直が聞きたい〳〵。まちつと先に見えまして。是から直に曾根崎へかなはぬ用と

てござりんした。なんぢや曾根崎へ南無三寶遲かつた。拙者も跡から參らずば成るまい。序にも一つ尋ねませう。五月の節句前か。後か。六月へ入つてはやう〳〵六日。其の間にこゝもとで金銀の拂ひ。金澤山に使うた事はござらぬか。是も隠さずお知らせなされ。どうござんすぞ金の事は存じやせぬ。遣手にお問ひなさりんせと。地いひすて局にフシついと入る。詞是は我等不調法。地よしそれとても與兵衛に逢へば知る事。道も知つたる曾根崎へたつた一飛び一走りと尻。三のづ迄ひつからげもみにもうでぞ三重〳〵歌君を待つ夜はよや〳〵よ。西も東も南もいやよとかく待つ夜は。フシ北がよい。さきにも待ちは待ちながら。こちからひたと行き通ふ。地道の犬さへ見知る程うつゝぬかせし河内屋與兵衛。小菊に逢瀬をたのもの節よ新町の。花を見捨てゝ蜆川こゝの花屋にたどりよる。後家のお龜出で迎ひたまへ〳〵見えるお客にこそ。ようお

出が相應なれ與兵衞樣はこゝが家。ちと風變り御出をやめて。詞戻らしやんしたか。小菊樣呼びましや。內は上下座敷もつまる。濱の床几で大きく酒盛きり〳〵と飲みかけましよ。地小菊樣サアこゝへ行燈に油さしやゝ。詞油の序に油屋の女房殺し。酒屋に仕替へて幸左衞門がするげな殺し手は文藏憎いげな。與兵衞樣まだ見ずか。小菊樣連れましてちとお出で。地やれお盃持てこいと フシたつたひとりでべり立てる。詞後家嗜めちと人にも物いはせい。生れて與兵衞こんなむさい床几の上で。酒飲んだ事なけれど今日は許す。東隣借り足して。與兵衞が座敷ぶんに一つこしらや。材木諸色諸入目見事に我等仕る きつい物か〳〵。エけびた 地此の蒲鉾の薄い切り樣はと。僭上たら〳〵あばれ酒 オクリしばらく〳〵時をぞ移しける。詞與兵衞こゝにゐるか。知らすことが有つて來たと。地刷毛の彌五郎床几に腰かけ。詞我を侍が搜すぞよ。ヤしてそりやどんな侍がと。地胸にぎつくり横たはるも心に包む惡事のかたまり。俄に顚倒うろ〳〵眼。詞ハテきよろ〳〵すないやい。昨日から兄が所へ來てゐる侍ぢやとやい。アヽそれで落付いた高槻の叔父森右衞門。地逢うては難儀こゝへ尋ねて來うも知れぬ。早う外して逢ひともないと思へど急にも立たれねば。何がなしほにと見まはし〳〵。詞アヽ思ひ出した。新町に紙入忘れて來た。中にうめくほど金入れて置いたつい一走り取つてこう。地刷毛も來いと立出づる小菊引きとめ。詞アざは〳〵と何ぢやの。在所の知れた紙入明日なと取らんせ。イヤさうでない〳〵。懷中が重たうなければつんと遊ぶ心がせぬと。地袖引放し二人づれ。ねから忘れぬ紙入の フシ空貧はいて急ぎける。地熱い茶四五服のむ程の。間もすかさず森右衞門行燈目當に花屋の門口。詞花車に逢はうこゝへ〳〵と呼び出し。河內屋與兵衞が跡追うて參つた。二階にゐるか下座敷か地罷通るとつつと入る。詞是々申し。新町に紙入忘れたとてたつた今お歸り。なんだ歸つた。まだ梅田橋越すかこさずか。是はしたり又跡へん。然らば明日にも與兵衞が參り次第。酒でも飲ませこゝにとめ置き。早早本天滿町河內屋德兵衞方迄きつと知らせ。只今參りがけ櫻井屋源兵衞へも立寄り吟味致せば。五月四日の夜大金三兩錢八百受取つたと有る。こゝもとへは何程拂つた隱しては其の方が爲にならぬ眞直にいへいへ。わたし方へも五月四日の夜に入つて。大金三兩錢一貫文。シテ其の夜は何を着て參つた。廣袖の木綿袷色は慥か花色かしつかりとは覺えませぬ。ウムよい〳〵。はひれはひれ 地と言捨てゝ。もときし道を引かへし又新。町へと 三重 ワサン變成男子の願を立て女人成佛誓ひたり願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國。詞釋妙意。地三十五日お逮夜の志。お同行衆寄集り フシ勤も旣に終りける。中にも同行中の老體帳

紙屋五郎九郎。詞昨日今日のやうに思ひしが。はや三十五日の逮夜に罷成る。廿七を一期として不慮の横死。地平生の心だて人に優れ。上人の御恩德報謝の心も深かりし。此の世こそ劒難の苦みは有れども未來はもろ〳〵の業苦を除き。本願往生疑ひはよも有るまじ。詞此の御催促に心驚き。いよ〳〵一遍の稱名も悅んでお勤めなされ。必ず歎かせらるな七左殿。殺し手も其の内知れませう。地只御息女の介抱が第一。先立つ人もそれをこそ滿足と。示せば有がた涙ぐみさやうとも〳〵。詞お吉が事は思ひ忘れ是も如來のお蔭と。信心堅固に悅びを重ね。地行住坐臥に稱名は缺かしませぬさりながら。詞乙のおでんめは二ッ子乳がなうては不便に存じ。死んだ明くる日金付け餘所へもらかします。姉はよういひ聞かせたれば合點して。香華のきれぬやうに佛壇についてばかりゐますが。なう中娘めが朝から晩迄。か〻樣〳〵というて。地ほえをります。是には困り果てましたと。ちやつと後の壁向いて スヱテ聲を。のんだる吸り泣き。地尤さこそと同行衆も。フシ濡さぬ袖はなかりけり。折ふし居間の桁梁。通る鼠のけしからず。蹴立て蹴かくる煤埃。反古をちらりと蹴落して鼠のあばれは鎮まりぬ。詞ソレ何やら落ちた七左殿。地誠に是はと取上げ見れば半切紙に一ッ書。詞十匁一分五厘野崎の割付。地五月三日とばかりにて誰から誰への名宛もなく。色こそ變れ所々血に染まつたる書出し一通。不思議の物と手に取廻し。詞是は誰やら見た手ぢやわいの。我等もどうやら見た手の風。ア、河内屋の與兵衛〳〵。地それよ〳〵と四五人の。口も與兵衛に極まれば思ひ出して七左衛門。詞誠に死んだ亡者が物語。四月十一日我等夫婦野崎參り致せし日。皆朱の善兵衛刷毛の彌五郎。河内屋與兵衛三人づれで參りしと話せしが。其の割付に極つた。お吉を殺し手も大方是で知れました。地三十五日の逮夜に當り鼠がこれを落すといふも。亡者が知らせに疑ひない。これも佛の御恩德。ア丶南無阿彌陀と平伏して フシ悅ぶ心ぞ道理なる。地氣味わるながら折々の訪ひ音づれも我がしたと。人にいはれじ悟られじ。一倍横柄そらさぬ顏。詞河内屋の與兵衛でやすとつつと入る。つい三十五日の逮夜になりましたの。殺した奴もまだ知れず氣の毒千萬。したが追付け 地知れましよと。我と口から向ふの吉左右。七左衛門尻ひつ褰け寄棒おつとり。詞ヤイ與兵衛女房お吉をよう殺したな。汝はこ〻へ縛られに來たか。遁れはないと棒振上ぐる。ア、七左衛門聊爾するな。シテおれが殺した其の證據は。いふな〳〵。野崎參りの割付十匁一分五厘といふ書付。所々に血も附いて汝が手に紛ひない。此の外に證據が入るか同行衆捕へて下されと。地つかみつかんその勢南無三寶顯れしと。つきあぐる胸の動氣ちつと押へて苦笑ひ。詞此の廣い世間幾人も

製た手があるまいものでなし。野崎參りの人用はおれがもめ。割付もなんにも知らぬ。よい年をして馬鹿ひろぐな。汝等までもおなじやうに。立騷いでなんとしをる。地まつかうすると摑み付くを取つて投げ。寄れば蹴倒し踏みこかし。一世一度の力の出し場。棒捻ぢたくり一振ふればわつと逃ぐる。隙を窺ひ逃げんとすれば。ソリヤ逃がすなと押つ取りまく。小庭の内を追うつ返しつ二三度四五度。隙を見合せ潛ぐわらりと逃げ出づる。門の前に。兩三人どつこい捕つたと胸がいつかんでねぢすゆるは。檢非違使の別當大理の廳の官人なり。後に續いて叔父森右衛門聲をかけ。詞最前より各表に立ち給ひ。家内の一々殘らず聞屆けられしぞ。必らず未練に陳ずるな。エ是非もなやな。世間の風說十人が九人汝を名ざす。聞くたびに此の叔父が心の內を推量せよ。地事顯れぬさき遠國へも落すか。さなくば自害をすゝめ恥を隱しくれんと。新町曾根崎行くさき／＼を尋ねても。跡へまはり跡へめぐり出合はぬは汝が運の極め。詞それ太兵衛其の袷これへ／＼。則ち五月四日の夜着し出でたる汝が袷。所々の際付こはばり大理の廳より御不審。詞只今證跡の實否汝が命の生死二つの境なるぞ。誰かある酒。あつといふよりちろり燗鍋手々に提げさらさらさつとこぼしかけ。かゝる甥持ち弟持ち心を碎く涙の色。酒しほ變じて朱の血汐。叔父甥顏を見合せてあつとより外詞なく。スエテあきれ。果てたるばかりなり。地與兵衛覺悟の大音あげ。詞一生不孝放埓の我なれども。一紙半錢盜みといふ事つひにせず。茶屋傾城屋の拂は一年半年遲なはるも苦にならず。新銀一貫目の手形借。地一夜過ぐれば親の難儀。不孝のとが勿體なしと思ふばかりに眼つき。人を殺せば人の歎き。人の難儀といふ事にふつつと眼つかざりし。思へば二十年來の不孝無法の惡業が。魔王となつて與兵衛が一心の眼を眩まし。詞お吉殿殺し金を取りしは河内屋與兵衛。地仇も敵も一つ悲願南無阿彌陀佛といはせもあへず捕つて引つ敷き。繩三寸に締めあぐれば。はや町中が斷着け／＼。すぐに引立て引出す身は千日千人聞き。萬人聞けば。十萬人殘る方なく世の鑑傳へて君が長き世に濟からぬ。名や殘すらん。

七行大字直之正本とあざむく類板世に有といへ共又うつし成故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直之正本にあらず故に今此本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本筑後掾　竹本　博教

正本屋　山本九兵衛版（登印）

大阪高麗橋壹丁目　山本九兵衛版

信州川中島合戰

近松門左衛門作

序詞 森々たる人品千丈の松の如し。磥々として節多く砢々として目高しと雖。大厦に施す時んば棟梁の功用大いなる哉。勇將は人を見智將は人を知る。是を兼ぬる名將新羅三郎十九代の後胤。甲斐の先生武田大膳太夫晴信入道信玄居士。御世子四郎御曹司勝頼君　オロシ〳〵家に紫蘭の。芽を出せり。地 此の度御父信玄の上洛。官位の願ひ成就武運長久の祈り。並びの國信州諏訪明神に參籠あり。寄進の繪馬に珠玉を飾り寫馬。舍人を引つ立て驅み嘶ふる狩野が丹青。馬も嘶願も懸け奉る御神前。禰宜宮奴は祝詞を繰りて幣帛を　大床に捧げ巫女乙女は裙帶を引いて。透廊に舞奏づる　スクリ儀式も〳〵更に神々し。地 勝頼庭上に再拜し。拜殿に上らんとし給へば。執權高坂彈正御袖を扣へ。詞 見申せば拜殿に褥を敷き座を構へ候。これ〳〵禰宜衆。あれは此方の爲か但し外の設けなるかと問ひければ。さん候越後の大守。長尾景虎殿の御息女衛門の姫君。地 あの松の木陰に春駒書いたる繪馬を上げ。追付け御社參の用意只今。神主方にお休息と申すにつけて傳に聞く。衛門の姫是幸ひに見まほしと思せども。高坂が女中同日の參合せ時節惡しと思ふ氣色。量り兼て在す所に。長尾の家の子直江大和之介時綱。する〳〵と立出で。詞 御遠慮痛み入り候主人景虎願ひありて上京につき。其の祈りとして參詣信玄公にも御上洛とや。定めて同じ御祈り茵も新調。御會釋に及ばず御着座ある樣に仰せ上げられい高坂殿。扨々御丁寧の至り忝し。地 此方は遲からず先づ姫君樣より。いや是非とも〳〵其方より。いや何時迄もと辭儀も半ばに衛門の姫。包む人目を洩れ出でてお辭儀のあるは男同士。殊に親御樣と我が身親水と魚とのお因とや。女なれども其の子なれば身を浮き魚の寄邊を頼む。誘ふ水は其方樣いざ拜殿へも一所にと。手を取れば取交す越後縮の雪洒落は。京も及ばぬ手觸りに。勝頼おめず打連れて一つに縋る鉦の緒や。互に見ぬ戀聞く戀の今こそ。諸願成就と神に誓ひの囁きは。如何なる仇の鰐口も　フシ いひ探されぬ中ならし。地 時に廊門の神人遑しく。詞 富國の殿樣村上左衛門義清公各へ對面あるべきとて。唯今是へと申し上ぐれば勝頼。地 應答もむつかし兩人逢うて挨拶あれ。我は何方へぞ外したしと。宣ふ間に村上が馬の嘶く聲。幸ひ此方の姫神主方に寄宿苦しからず此方へと。思はず知らず案内する。フシ 大和之介に乘移り此の仲人や諏訪の神。海より深き縁とかや　地 村上左衛門義清神

前迄道具立てさせ。詞莞爾ともせずやァ直江高坂。主達は一國の家老。弓矢の法存ぜずとは云はせぬ。假令道中筋にても他の分國を通るには。先へ使者を以て案内する法。況や當社は我が分内一應の屆もなく踏ん込む慮外至極。地凡そ繪馬は神馬を表する物なるにあれ見よ。信玄乘馬の毛色甲斐の黑駒。馬取りも止め兼ぬる駈馬の勢ひ。必定村上が領分へ馬を入れ。信濃一國押領の威勢を顯す爲な。殊に衞門の姫は親景虎に某所望仕かけ女房同然、然れば直江兄弟は家來分。主從の禮義知らぬかと。いふより堪へぬ若者何々と。直江兄弟を家來とは兄山城守實綱。此の大和之介時綱が事か。我々は越後の國守長尾景虎公ならで。天が下に主君なし。御邊に一粒の扶持は得ず。家來とは推參千萬ま一度いへ。地延びすぎた舌の根切り下げんと。躍り出づるを高坂彈正暫し〳〵。大事の姫君御供我等も若旦那の供。理の非のといふ所でなし平に〳〵と押し鎭め。詞案内なく御領内へ立越せしとの御憤り御尤さりながら。使者を以て御案内申さば。道筋掃除等傳馬以下御馳走仰付けらるゝ。御心遣を遠慮に存じ差扣へ。不念となるは心の外眞平御宥恕下さるべしと。手を束ね慇懃の詞に乘り。ヤァ拔句いふまい勝頼と衞門の姫密通し。某が領内を忍び合ひの宿にせられ。地鼻毛を算まるゝ村上ならず不義者の男女。落居する迄此の義清が預り置き動かせぬ。兩人共に置いて歸れ。身が者ども神主が邸を取巻き。大事の預り者油斷なく警固々々、繪馬踏み割れ叩き破れとひしめく所に。お供の局下女腰元なう情なや姫君樣勝頼樣。何時の間にかは行方知れず床にお文を遺されしと。差出す一通彈正おつ取り懐中すれば直江も仰天。村上いよ〳〵嵩にかゝり扨こそ扨こそ。詞神前にて不義の科顯れし。當國の神の利生を見よ。地主を失ひ武士は立つまじ剃りこぼつて願人坊主。鉢ひらけと嘲られ腹に据ゑ兼ね。切つて出づる大和之介を高坂押へて。詞武士の立たぬ事ちつともない。地彈正に任されよと野袴の裾高く挾んで身繕ひこれ村上。詞姫勝頼兩人は義清が預り置くと。一國の大名の番ひし詞失念はあるまじ。サァ預り者なぜ逃がした何國へ落せし。サァ聞かんサァ言へと地氣のつかぬ所の理窟詰。村上はつと當惑すれば大和之介も力を得。本人の行方隱すは相見に落せしな。科の元は預り主御兩所の行方知るゝ迄の人質。我が國へ連れ歸るサァ來い歩めとねだりたい程ねだられ。無念々々も澁面ばかり一言の返答なく。大事の科人直江殿いざ繩を掛けまいか。ヲヽ尤と手ぐすね引いたる英雄の面魂。詞ア、鬱憤道理道理。所詮宿したる神主めが不屆、腹癒せには神主始め禰宜めら殘らず。切つてなりとも搦めてなりとも。それに足らずば明神の社壇打毀ちなりとも。地此の義清構はぬ〳〵とフシいひ捨て歸るも足早なり。地高

坂直江遙かに見やり打頷き。一通を拜見すれば。詞かね〴〵商人の便りに文を通はし契約の中。義清に糺され恥を見んも口惜しく。暫く影を隱すとの書置。地兩人はつと呆れしがなう直江殿。詞申しても兩國守の姫君若君。御一門は廣し家來は多し。土民百姓を頼み給ひても御身を寄せらるゝは自由。御行先に氣遣ひなし。地兎角餘所の領分にて騷ぎ狼狽へ尋ねては。面々主君の恥辱を觸れ廻るに同じ。首尾よく先づ當所を引取り。萬事國境を越しての談合。召具せられし下女下婢お供の旅體亂れぬ樣に御沙汰肝要。此方の供廻り作法正しくはや行列と下知をなし。悠々として立歸る高坂彈正鎗彈正と。名に負ふ武士の一分別名將の家風芳しき。栴檀の林崑崙の石。玉の光の世世永き武田の。家ぞ三重類ひなき。地爰も昔の都ぞと名にし近江の湖や。言の葉に乘り船に乘り渡る北國七里半。廻船の問丸屋表には駄荷山の如く。濱には數百の船艤ひ。桐の臺の印立てさせ揃ひの荒夫馳違ひ。詞如意が嶽は早お越し。お先手はそれ其所へ。御荷物積んでなぜ舟に坐らないと。地北國訛りの半額領越後の國守長尾殿。滋賀の山越此の津よりフシ御歸國。とこそ知られけれ。大津八町の方より武田信玄の足輕。五十人組の小頭横田兵介問屋の門に大息つぎ。詞船支配する家は是な。亭主にはうと呼出し。音にも聞くらん甲斐の國の主。今日歸國米原迄船に召されうとの仰せ。新羅明神へ御參詣の爲。三井寺に御休息追付け是へ。大船二十艘小船六十艘。屹度用意申し渡いた急げ〳〵と呼ばはれば。亭主驚き越後の殿樣長尾殿より。先達て仰付られ御覽の如く。浦々の船迄驅集め。外には網船釣船ならで一艘も候はず。地御大儀ながら瀬多へお廻り。今日の船の御用御免と頭を地に着くれば。詞身が殿は新羅三郎義光公の末孫。清和源氏の嫡々。首尾よく參內院參忝くも大僧正に任官。足利の將軍も御尊敬の筋目。越後の長尾も上洛は召されしが。漸々將軍義輝公の輝の字を貰ひ。景虎を改め輝虎と名乘ればとてをこがましい。先祖は鎌倉の權五郎景政。代々源氏の被官筋。其の輝虎に船を貸し此の港に一艘もないと申されうか。船印おつ奪つて此方の印に立換へろと地どよめく內。輝虎の足輕進藤小平問屋の內より搖ぎ出で。詞聞きたくない。武田信玄が大僧正腰拔の坊主官。驕慢の體で身が殿を。信玄が被官船印おつ奪れとは。首がなくても奪られば地奪つて見よと。拔くより早く切掛けたり。ひらりと外し拔合せ口も腕も腕。馳拔け切拔け受けつ外しつ。命を露塵土砂踏立てフシ一寸去らず挑み合ひ。兩家の先手一時に來かゝりどつと落合ひ。漸く左右に引分け聲々に。詞甲州の御家來横田兵介。越後の御家來進藤小平喧嘩。それ御馬留めませい控へませいと呼ばはれば地急かぬ信玄血氣の輝虎逸散に馬乘り進め。兩方鐙踏放し

馬上に式禮下々迄 スエテ 列を揃へて蹲へり
詞相手ども是へ呼出せ。地畏つたと兩人を連
れ出づれば。兩將馬より下り立ち輝虎大聲
上げ。詞供先の喧嘩は普く諸家に禁むる所。
意趣討ちか時の口論か。品によつて主人と
主人の確執となる儀あり。次第眞直に申し
分けよとありければ。進藤小平愼んで。事
の起りは船諍ひ。長尾の家は權五郎景政の
末孫。源氏の被官との惡言堪忍 地罷成りが
たく。 斯くの仕合せと申す内より横田兵
介。詞信玄が大僧正は腰拔の坊主官と申し。
雜口聞かせし無念。御免を蒙り身命果し申
したくと。二人が詞有りの儘にぞ訴へけ
る。 輝虎呵々と打笑ひ。 お聞きなされ信
玄。被官筋が譽れを取り主筋が臆れを取る
事もあるべし。武邊は氏系圖によらず。輝
虎聊か恥辱とは存ぜぬが。 して何と思召
す。仰の如く腰拔の坊主官は愚か。座頭の
官でも弓矢の疵には少しもならず。信玄ゆ
め〱心に掛らずさりながら。足輕體には

奇特々々 地拔群の健氣者。彼等が遺恨も晴
るゝため進藤小平とやらん申し請け。愚息
勝頼が手廻りに使はせたし信玄に賜るまじ
や。詞ムヽ然らば横田兵介とやらん馬廻り
に召使ひ槍一本の用に立てたし。輝虎に下
さるまいか。何がさて進ぜいでは。過分過
分此方も進上申す。コリヤ〱今日より進
藤小平。武田の御家來。横田兵介長尾殿の
御家人ぞ。地はつと左右に入替り直に目見
えの禮儀あり和もあつて。詞なう武田殿。
船戰もなき此の濱さぞ御難儀。船中狹くと
も暫しの海上いざ御同船申すまいか。仰せ
なくとも所望の存念祝着と。地船の遺恨の
波風立たず スエテ 比良の暮雪と打解けて。
見やる堅田の落雁と。共に下り居る床几の
上。 威將の フシ 會ともいひつべし。 地時に
信濃の國。村上殿より御使者と輝虎の奏者
番披露して。使者は年頃天窓つき粕尾玄蕃
と名乘り。三荷三種の樽肴白銀卷物輝虎の
御前に並ぶれば。詞是へ〱御口上承らん

とぞ仰せける。玄蕃愼んで。此の度將軍家
より輝の一字を御拜領。年來御勳功の印御
家の眉目是に過ぎず。從つて御息女衛門の
姫君。主人義清度々所望致せども御許容な
し。年長くる迄緣付き遲き娘は。必ず不義
の浮名立つ。後には迎へ取る人なく。一期
孀となるのみならず。親一門の名を下す例。
若し左樣の事候ては長尾のお家の瑕。早く
義清が妻と定め給へば。世間の人口を塞ぎ
且は輝虎公のお爲。御入國を待たず道中迄
使者を以て賴みの御祝儀。地目錄の如く進
上目出度御受納冀ひ奉ると。口上も終らぬ
に氣早き輝虎はつたと睨み。詞北陸道に弓
矢を取つては。五畿七道に隱れなき長尾輝
虎を知らぬか。娘を所望すれども否應の返
事せず。契約も定めぬ尾籠至極な。押付け
て賴むとは信州の片隅に。輝虎が厩にも足
らぬ小城持つたると。傲つて我を侮るか。
緣付き遲き娘は不義の浮名立ち。親一門の
恥辱になるとは人も賴まぬ爲思ひ。我が娘

に不義あれば相手を紏し同罪に行ふ。越後の國風恥を雪ぐに義清は厭はぬ。道中なれば生けて歸す進物持つて疾く歸れ。地誰かある使者め引きずり戻せと。噛付く樣なる大音聲。荒肝取られ胴顫へどもめいらぬ顏。詞流石大國の大將とも覺えぬ無骨に候。信州に武士多けれども村上が譜代の家老粕尾立番。此の音物お氣に入らずば其方より使者を以て返辨あれ。地此の立番悄々持つては歸らぬと。立たんとすれば憎い親仁め。それ彼奴に負はせて歸せ承ると。若手の近習大小掖取り翼締め。樽肴進物ども一つに荷造り背中に負はせ。括げ付け〳〵。サア本國へ戻り馬駄賃は主の義清から請取れと。手足を取つて追出せば。詞エヽ無法な主人持つた故。思はぬ面目失うたと。地主のしがからさきに立て。家老の身にて意見せぬ。我が非は見えぬ鏡山 オクリ 面押し。拭ひ逃げ失せけり。地兩家の上下どつと笑へば輝虎も笑壺に入り。なんと武田殿。甲斐越後兩國に挾まれたる信濃の村上。貴殿我等の家風。聞き習ひも致さぬか。扨不作法千萬。さぞ家の自墮落推量致せしと。地詞の下より越後に殘されし。甘糟近江が方より時付の早飛脚。息を切つて輝虎の御前に馳着け。詞去る二十二日衞門の姫君。信州諏訪明神へ御參詣。武田勝賴と密通の戀慕にて。連れて國遠なされ直江大和之介御供より。直に尋ねに出て來た御在所相知れずと。地飛札を捧ぐる所に甲州の留守居板垣兵衞が方より。飛脚の早打信玄の御前に大息つぎ。詞去る二十二日若君勝賴公。信州諏訪明神へ御參籠。越後の姫君と豫ての戀路。御兩所連れて行方なく。御供の高坂彈正尋ねに罷出づる趣。地委しく是にと差上ぐる兩家の飛札。飛脚の口狀割符を合せし如く。兩將息を詰め給へば。諸武士も御機嫌量り案ね フシ しみ凍つてぞ見えにける。地短氣の輝虎齒を喰ひしばり。詞緣付遲き娘は必ず不義の惡名立つと。申し越したる村上。此の次第知つたか知らぬか。彼奴が詞にひつしと當つて此の方閉口。地長尾の家の侍大將にも。足らぬ程の村上輩に非太刀を打たれし輝虎が。一期の無念と面色變じて火の如く。此の恥辱何と雪がんと睨みやつたる信濃路や。頭に上る湯煙は フシ 淺間の嶽かと疑はる。詞信玄動ぜず。悴勝賴其方の姫は。いふに足らぬ若き者女性。地譽れも恥辱も親と親の間にあり。村上は喧嘩の行司構はぬ事。所詮御分と信玄敵對し人數を調練し。信濃の國を軍の場と定め。雌雄を決し信州はいふに及ばず。詞越後の國をも切取るか甲州を取らるゝか。其の時恥を雪がんに何程の事。地勝負は貴殿と信玄が軍慮の淺深にあるべしと フシ 事もなげに宣へば。詞ヲヽ豫て武田殿に對し。輝虎が弓矢も試みたく望む所。地只今より刄を爭ふ敵と敵。新參の横田兵介是へ來れ 地はつといふより信玄も進藤小平是へ出でよ。詞汝は元輝虎の家來。敵方の首取り始め。ヲ

ヲ汝は元信玄が家人。地軍神の血祭と。兩方兩人一度に拔討ち兩將つゝ立ち。詞サア入魂は是迄重ねて戰場對陣の外。地音信不通の印の盃。献いたヲヽ献すぞと提げたる首をかつぱと投合ひ。勇んで別るゝ武士の。矢橋の波の音替へて関の。聲とぞ 三重ヘ音に聞く。フシ名も山深き。信濃路や岩間は苔に埋れて。雲こそ雲を誘ひ行く。峰には伐木丁々として。谷の水音 フシ潺々たり。爰に三州牛窪の浪人。山本勘介晴幸といふ者あり。幼少にて父に離れ母の撫育に人と成り。學ばずして石公孫呉の兵術に通達し。其の名央々と隠れなく。近國他國の大名より招けども。頼むべき主君を選み諸葛臥龍が跡を追ひ。今此の國に影隠す片山人となら柴の。腰に草鎌山朸。フシ暫し世渡る。賤の男の木曾の麻衣袖狹き。草の細道傳ひ行く。フシ爰ぞ桔梗が原とかや。勘介眉に皺を寄せ。地當國信濃は山深く。常に雲は騒げどもやあら心得ぬ今日の雲氣。

地南は甲斐に續きて鹽尻峠。北は越後に隣つて烏井が嶽。兩方の頂上より二筋出づる。白雲の。中に當つて亂れ散り宛然軍の。フシ場の如し。察する所甲斐越後兩家の確執疑なし。信玄は良將輝虎は勇將。あら面白の雲の戰ひ。何れ勝つとも負くるとも。主持たぬ身の氣散じと。眺むる空も秋の日の短き煙管取出し。打石の火に立つ煙。淺間をらうに比べつゝ フシ煙草に餘念なかりけり。武田四郎勝頼。衛門の姫との浮戀路義清にいひ探され。諏訪明神より立退き爰に迷ひ彼所に隠れ。足も破れて血に染まる茨萱の根小笹原。野路吹く風も追手かと心は先に目は跡に。見返り〳〵衛門の姫勘介にはたと行き當り。アヽ御免なりませとスエテ恟り驚くばかりなり。詞勘介じろ〳〵尻目にかけ。若い女子若い男水入らずの二人連れ。ムヽ聞えた。親の極る緣はいや。貴様ならでと頷き合ひ聟の大事の誂へ饅頭。ほつかり割るは思案の外 地野でも山で

も此の道〳〵。此方もちやつと柴刈つて饅頭は喰はずとも。嬶が豆茶を賞翫致そとフシ打過ぐる。勝頼袖を引留め。詞推量に違はず我々は。親の許さぬ妹背の中人目を忍ぶ者なれども。互に妻なし夫なし聊か不義にはあらねども。地脇から邪魔の横戀慕。此の姫を奪ひ取らんとの敵ゆゑに漂泊せり。近頃理なき事ながら夫婦を隠匿させよかし。武運開かば武士となし今の恩を報ぜんと。生れ付いたる大名風。勘介につこと打笑ひ。詞我とても。胎内から柴刈りではなけれども。斯く荷瘤出來せしは獨りの母に孝の爲。すは奉公望む程ならば。恐らく百貫二百貫の所領は胸に覺えあり。さりながら主取りすれば討死し命を捨て。祿の恩を報ずるが是忠の道。地母孝行とて身をかばへば祿盗人の不忠者。孝を立つれば忠に缺け忠を盡せば不孝となる。此の理に迫つて刀を止め身は山猿となりたれども。母の寢覺めのよき顔ばせ。百萬貫にも フシ替へる

べきか。頼むとあるに身を引くも孝行ゆゑ。頼み少き浮世とて心短く持ち給ふな。詞此所は其の昔日本武尊。東夷征伐の御時。一葉を結んで占形とし吉凶を試み。聖運開き給ひしより。吉凶の聲を象り桔梗が原と申すなり。地爰迄落ち延び給ふ事行末目出度き瑞相。詞此の萱原を左へ行けば越後街道。此の道案内が我等の寸志。アヽ千變萬化の浮世やと朸擔げて別れ行く忠孝仁義の武士も。卞和が珠の埋れ居てフシ光なきこそ是非なけれ。地エ、天晴侍かな。大將たる身の七珍萬寶にも。替へまく欲しきは仁義の武士。家名を問はざる殘念さよいざ先づ敎へし道筋へと。萱踏分けて入り給ふが。屹度思案しなう衞門の前。詞武藏坊辨慶が。雪中の藁沓逆樣に穿きたる例。今此の草分くる跡に心を付け敵慕ふは必定。地此の茂りに伏して敵を誑り落ち延びんと。蓬葎を押分くれば萩の本荒下露れて。幾年經りし猪ののつたりと臥したる形。アヽ

怖やと衞門の姫スヱテ縋り給へば。詞大事ないく〳〵。凄じい猛獸なれど常は人に害せず。疵を受けては手負猪の千人力。さもなき中は彼方から人を怖がる證據。地狩人を恐れ踞み臥すと覺えたり。我も暫く隱れ家と並び臥猪の萩の床。草引き覆ひ忍ばるゝフシ憂目ぞ戀の習ひなる。村上が郞等落合藤太鐵砲提げ馳來り。あの尾上より見たはたつた今。どつちへ往せたと手々に探す足輕ども。こりやこそ爰に足跡あり。功名せんと追つかくる藤太押へて急くな者ども。此の萱原が物臭い試みに鐵砲くれんと。筒先下り打込み突込み二つ三つ玉とう〳〵とう。詞重ねて響く手答へ。慥に勝賴してやつた。地いで首取らんと立寄る草葉ざは〳〵〳〵。小山の如く背を持ち上げによつと出でたる手負猪。八幡免せ人違ひ御免御免と逃げ迷ふ。勝賴も姫を圍ひ打物拔いて差向へば。荒れに荒れたる獅子奮迅。眼を怒らし牙をむき。敵も味方も差別なく。巖

石鐵壁馳割り〳〵追立つれば。岸踏み外しころ〳〵〳〵。此所の岩蔭彼所の谷。右往左往に逃げ散りしは危かりける三重〽次第なり。道具屋フシはや夕陽の山の端の下枝眞柴刈集め。人の十荷を勘介が一荷にて。立歸る元の道。草踏み散し地を發き山を隔つる人聲の。谺に響くばかりなり。ナホスム、地扨は以前の若者敵に出合ひ戰ふか。あゝら心元なやと案じ煩ひ立つたる所に。尾先を廻る猪の。思ひ掛けなき後より左手の太股くわらりと掛け。一振振つたる猪首の力。フシ一丈ばかり跳ね上げたり。詞勘介痿まず足踏み直し。憎い畜生皮引剝いで蒲團にせん。地返せ戾せの聲に猛つて一文字。二の身をかはし遣過し。コハリ戾せば開き四五遍惱ましひらりと乘り。左手に尾筒右手に鎌。搔切る肋猪の血と人の血に。猪の毛變じて猩々緋乘せは付けじと古木にすり付け。ナホス岩に當つればどうと落ち。上になり下になり半時ばかりぞ三重

〽揉合ひけり。フシ勘介數ヶ所の。地獸の上右の眼を突き潰され。流るゝ血に眼も眩みたゞよふ所を牙にかけ。そことも知らぬ谷底へ落つると見えしが松が枝に。掛る手先も孝の德。ひらりと取付く早業は フシ木傳ふ猿ともいひつべし。猪は見上げて怒りをなし。木の根を穿つ鼻嵐吹き立て〳〵。石も砂も一捲り。土を返す勢ひは フシ唐鋤使ふ如くなり。若木の松が根次第に掘れて。ゆさ〳〵〳〵。大地へどうと着くより早くおつ取りのべ。總身の力腕に入れ薙り立てたる滅多打ち。打たれてたぢ〳〵。弱る平首むんずと締め難なく猪を組留めたり。勝頼すはやと見るより早く駈寄つて。猪の急所を三刀四刀指し貫き。兩手を取つて引立つれば。根氣勞れて正體なし。詞ム、道理道理。以前の情今又猪の害を避け。重々深き恩の人。我こそ武田信玄が一子四郎勝頼。地我は長尾輝虎が娘衛門の前。村上に妨げられ理なき戀路に苦むぞや。親にも勝る命の親心は如何にと宣へば。勘介一眼くわつと見開き。詞扨は兩家の公達かや。某は山本勘介晴幸と申す者。輝虎の御家臣直江山城。我が爲に妹聟 地かた〴〵縁あるお二人の。恙なきこそ珍重々々。詞村上が領分に片時も猶豫御無用。地早とく〳〵との詞の下。供人引連れ落合藤太あれ遁すなどつと來る。ム、打揃うて御太儀千萬もう草臥も休まつたり。刀汚しの蠅侍此の蠅打喰へと。松の木取つて片足飛び。ひつしひつしと打ち殺せば敗亡敗北大師講の。粥にあらぬ棒喰ひはつと一度に逃げ散つたり。藤太透かさず髯顔やらぬと切りかくる。振り返つてこりやさせぬ青蠅めと。横に薙ぐれば二つに斷れ フシ腸亂れ死してけり。地さあ〳〵敵の根は切つたり。國境迄お供といはんも此の足元。老母も氣遣ひ。御縁もあらば又重ねて隨分御無事で。其方も無事で。さらば。〳〵と一禮のべ。コハリ別れて歸る勘介が。仁は玄德智は孔明勇は關羽に並びなき。譽れは三國名は高き。富士を移して諏訪の不二 ナホス御狩の手柄は猪に乘る。それは仁田我は油斷。猪に懸けられ五體不具。缺くれば滿ち。滿つれば缺くる。弓張月や梓弓引くは。片足ちんがちか。跛の根本隻目のいはれは是。此の〳〵〳〵。猪を留めたる勘介が譽れを。代々に傳へけり。

第二

地頻繁として二度顚るは天下の謀計とかや。武田信玄大僧正徒士馬廻りを麓に止め。原五郎昌俊一人御供にて。又踏み分くる木曾山陰。降り積む雪に道絶えて山は水晶を植ゑたる如く。林は白銀を粧ふに似て人目もともに埋もるゝ。爰にも住めば住居する。山本勘介晴幸が フシ庵の門に着き給ふ。地原五郎雪中にかしこまり。詞此の寒氣に御馬にも召されず傘もさゝせず。何處へお出でと存ぜしに徽浪人の庵室。もし御用ばし候はゞ君の御成迄もなく。我等引立て參ら

んものを。甲斐の信玄といふ名將。地此の大雪に徒歩跣。慮外ながら餘り褒めた事でもなし。いざお歸りと袖に縋れば振放し。詞何を知つて若輩者。此の勘介は片目跛の小男見掛けは百姓。山賤の如くにて魂は日本の楠。異國の孔明孫呉にも劣らぬ軍者。諸方より招けども。主人の器量に擇り嫌ひして奉公せず。今信玄が軍師に賴まん者。勘介ならで日本に覺えず。地先月兩度此の庵室へ尋ねしかども他行とて對面せず。今日は是非にと志し。麓まで牽かせしは信玄が乘替へにあらず。勘介を乘する馬ぞ。師を求むるは神の惠みを求むるが如し。詞隨分禮儀を亂すな。但し寒くて堪忍なり難くば麓へ下つて誰そ替れ。エヽ地無氣根者めとやり込められ。是程の雪に何の事と雪に兩足踏込んで。炬燵に煖つて居る樣な疊年の兆やら。今年の雪は暖かなと。いふ唇も紫立ち フシ齒の根も合はぬ寒さなり。内にも積る。地頭の雪主の老母と思しくて。

地折り焚く柴の夕煙。地燻る顏も煎じ茶の。フシはな香も淸く聞えけり。ハヽア 地嬉しし今日こそは仕畢せたりと戸口に立寄り。詞卒爾ながら山本公の御名を慕ひ。先月兩度參りしかども御他行。直に申し談じたく此の大雪を踏み分くる。斯う申すは武田信玄。取次賴み存ずると事を愼み宣へば。ムム武田信玄とは聞き及んだ樣な。足冷えて焚火の許を得離れぬ。地用があらばそこ明けてと。手枕ながら フシあひしらふ。地然らば御免と戸口を開き入り給へば。起きも直らぬ老母の體原五郎くわつと急き上げ。詞大體人の尋ぬるに挨拶もあるもの。但し枕も上らぬ程蟲でもかぶるか。此の寒氣で寸白でも起つたか。地どれ其の寸白の蟲ひねり殺して本腹させんと。立たんとするを信玄はたと睨付け。詞彼方より呼ばるゝ我此方不行儀者。地退り居らうと叱り付け。詞聞きも及び給はん越後の國長尾輝虎と仔

細あつて鉾楯の中となり。此の信州を戰場にて近々に輝虎と對陣す。惜しいかな勘介。稀代の才智を空しく山林に朽果てん事殘念至極。地我が師範となり三軍を司り。弓箭の力を助け給はゞ百萬の士卒に優り。信玄が大慶是に過ぎず。萬卒は求め易く一將は求め難く。三たび是迄歩みを運ぶ志。御老母の執成偏に賴み存ずると。師弟の禮儀細かに低頭平身手を束ね。スヱテ世にしみ〴〵と述べ給へば。地老母起きも上らず齒の拔けたる口を明け。から〳〵と打笑ひ。詞ハア物好きな信玄殿やの。此方の息子は幼い時より山家住居。野飼の牛の手綱は取れど。掛鞍に一度腰掛けず。薪の枝は切れども人間の指一本。遂に切つた例もなく。地足は跛で遠道ならず。片目は偏盲で見る事不自由。背小さうて棚な物下すも。間に足らぬ山本勘介。詞軍の大將とはムヽ〳〵アヽ。此の國の大名衆から抱へたいというて來れど。取りあへ

もしませぬ。其の爲のお出でなら早う歸るがお手柄。地アヽ冷える事やと圍爐裏に踏み出す勘者。原五郎堪り兼ね。詞殿中さぬ事か。ごくに立たぬ素浪人。何も世間の風說。作法知らぬ婆めが子なら知れた／＼。地サアお歸りと立たんとするを信玄又睨めつけ。詞ムヽ主人の選み給ふと聞き及ぶ。信玄其の器量なけれど思ひ掛けし一念。地日の光が月に變り今日が明日。明日が明後日になる迄。主從師弟の契約致さぬ其の内は。信玄が骸を此の山に埋むばかりぞと。座を占めて在します賢者を求むる良將の。フシ心遣ひぞ類ひなき。地老母起上り。扨扨聞分けないしつこいお方。左程に思召さば事によつて勘介を。奉公に參らせんさりながら。詞鶴は枯木に巣をくはず。大魚は小池に棲まずといふ。勘介を抱へんと思召すからは。此方も主人の御器量を選ばねばならぬ。サア信玄公の軍法。如何なる心を以て兵を用ひ給ふぞや。軍慮の程如何に／＼と座を打つていひければ。地心得たりと突立ち自在の下に焚き捨てし。楷押しのけて柴の小枝を押折り／＼。焚き給へば。烈々と燃え上り。茶釜に沸る湯玉の音フシ連寄する如くなり。地信玄が兵を用ゆる事まつ此の通りと指し給へば。老母横手をはたと打ち天晴大將候よ。詞柔能く剛を制し。弱よく強を制す。黃石公が三略を得給ひし頼もし／＼。是は奇正の内にも正の軍術。扨心を以てする智謀は如何にと又問ひ掛くれば。地心得たりと外面に出で雪間に餌る村雀。一羽取つて手に握りフシ立ち歸り。如何に老母。我が手の内に雀あり生きたるか死したるか。いうて見られよと宣へば。アヽ天晴稀代の謀計。祖母が生きたりと申さば御手の内にて握り殺して見せ給はん。又死したりと申さば其の儘開きて放さるべし。これ敵によつて轉化し。どちらも外さぬ兩全の謀計。即座の答アヽ名將かな／＼。一子勘介が主と賴むは信玄公と謹んで一禮し。地いで御目見え申させんと一間に入れば信玄公。夜光の珠を得し如く。五郎も案に相違して。扨もきつい婆めぢやとフシ舌を。巻いてぞ見えにける。地程なく奥より山本勘介御目見え。たそ御取次と呼ばはつて齒朶革縅の緋毛の鎧。搖つて締めたる上帶も一重鎖の小手臑當。突盔頭の黑塗兜。猪首に着なす片足の。跛ちが／＼がつくりそつくりフシ凸凹の。地山本勘介晴幸御目見えと畏る。詞原五郎昌俊と申す者。御近付きにと躍り出で名にし負ふ晴幸殿。御目見えの印なうては叶ふまじ。太刀打か槍か扨は立身か。地いざ昌俊お相手と引き立つる腰のよろ／＼／＼。重き六具に五體を釣られかつぱと伏して足立たねば。鎧を着てさへ其の臆病。鯨波聞いたら目が暈はう。馬に乗ろより手短かに。棺桶に乗れ勘介とフシ大口明いてぞ笑ひける。地なうさのみ笑ひ給ひそ。詞勘介は此のたび猪に掛けられし疵養生。夫婦連にて箱根の湯元へ

湯治致し。只今内に在り合はせず。主從の御契約。留守と申すも恐れあり。地此の鎧兜は我が子の着用武士の魂。ハテ魂さへ御目見え相濟めば勘介も同然と。母が契約詞違へぬ印には。是此の鎧兜を着たる勘介母とな思召されそと。御前に蹲踞へば。原五郎ぐつともいはず。大將信玄御悅び フシ甚だ感じ入り給ふ。詞今より主從三世の契り。安堵の所領三百貫。地子孫に傳ふる弓矢の道。指南賴むとありければ。はつと頭を疊に摺りつけ。五體不具の勘介斯るお主を儲けし事。誠に一眼の龜の浮木ぞや。地武士は何時晴々しき出陣出仕もあらうかと。嗜みの打物衣小袖是御覽ぜと引寄する。破葛籠に疊み込む幌衣小旗陣羽織。腕も通さぬ衣々に子を思ふ親の褄辻を。合せて其の身が勘介に。成代つての受け答へ フシ親も親なり子も子なり。地原五郎謹んで。詞雪も頻りに日も傾く。早々御立ちと麓に向ひ。お供參れと呼ばはれば。地お徒士お小姓槍長刀。召馬引馬 フシ雪に斷えて引立てたり。地とても事に勘介も御供申させんと。脫いで差出す突盔頭主從固めの金兜。御手に取つて押戴き渭濱に釣りせし太公望。詞同車に乘せし帝を學び。勘介も馬上にと乘替の鞍壺に。兜を取つて打乘する山形鍬形忍びの緒。結ぶ庵を龍頭。天にも上る心地して地勇んで。甲府へ 三重

衞門姬道行

詮雪を踏んでは花かと惜む岨蔭の。谷水も靜かならで。騷がしき木枯の。山風に散る木の葉まで。追手の聲やらんと後をのみ深山路の奥深く急ぎ フシ行末の。便りなき身の便りには。身に引締めし旅衣。此處や彼處に着古せど生れ付いたる フシ衞門姬。女心の細道も。長地後强しや勝賴の影と我が影四人連れ。憂さも辛さも世の外の。跡に見捨つる桔梗が原。木にも草にも馴れぬれば。散る別れさへ惜まるゝ。あれなう御覽ぜ勝賴公。春の行方を尋ねかね。歌二つ連れたる雁がねの。夫持ち顏に飛び連れて。フシ餘所の孀に。恥ぢよと鳴くは面憎や。フシ身にオクリ好いた〳〵男と。連れて行く。フシ身には厭はぬ。聲なれど。あな喧し山々の。高根々々を見上ぐれば。スヱテ雲の波立つ諏訪の湖。深き情もアヽ在原の。中將なりける豆男。詮戀ゆる旅を信濃路や。ナホス淺間が嶽とつらねける。山の煙も我が思ひには。フシ丈も及ばじ。フシ富士の山。雪の肌に花の顏。鹿子斑の。雲の帶。肩に。素縫の。金紗のフシ千鳥。裾野の模樣望月の。駒の追風そよ〳〵戰ぐ。歌松の。葉のよな。狹い氣を持ちやんな。廣い。芭蕉葉の。氣を持ちやれトノヱ。よしや。辛氣や。其の裏戾せ。廣い。芭蕉葉の世は フシ夢と。覺めては昨日。明けて今日。暮れては明日の月日とも。賴みしかひも越後路も皆 三重故鄉と〳〵なし果てゝ同じ浮身の。人心。二つに割らば瓜生坂。江戸重嶺峨々と冬枯れたり。ナホス見え初めしは花の頃。夏の通路足早く

肩へ凉しき夕風に。荻萩薄穗に〳〵出でてナ。さんざらめけば。松蟲。鈴蟲。轡蟲。露も交りてはらりはらり紅葉。土産に秋も井に。氷は厚く我が袖は。碓氷峠の フシ 入日影。暮合近き群鳥。聲はあれども里の名・は。問はれずいはず櫛取らぬ。ハヅミ 黒髪。山の フシ 宵の闇。フシ 篠を突くなる。吹き降りに雨具は持たず宿はなし。野邊にいぶせき東屋も昔の玉の臺かと立ち寄り。休らひ 三重〳〵 給ひける。

地 直江大和之介時綱。姫君見えさせ給はぬゆゑ。主君輝虎の御憤り兄山城へも面伏。本國へも立歸らず若しやと三河遠江。尋ぬる甲斐の隈もなき月の入るより降る雨に。案山子の蓑笠身に纏ひ。目指すも知らぬ黒髪山 フシ 上州指して急ぎしが。地 鍬は拔ける泊りは遠し雨露凌ぐ木蔭もがなと。此處彼所透し見てこりや何ぢや。詞 ヤア辻堂屈竟々々。木賃入らずの上宿と。地 探り寄つたる緣の上旅人と見えし侍の。同じく蓑笠引被り踏み延ばしたる高鼾。詞 ム、世界は廣し我に變らぬ憂き旅人。相宿御免と足押しやつて腰打掛け。扨々歩く間は張合ひにて雨も風も身に浸まず。氣が緩む程勞れも出る。吹き放しの辻堂借らうというて蒲團はなし。地 斯樣の時の用意の酒許由が捨てし瓢簞も。我等が爲の夜着蒲團と。腰に付けたる水飲にだぶ〳〵と一つ請け。詞 一簞の食一瓢の飲。これ顏回が樂みと。地 一引き二引き惜み飮んだる樂み酒。傍に臥したる侍ましくしゝたる頭を持ち上げ。詞 相宿へ辭儀もなく羨りがらする不躾者。地 盜んで彼奴に鼻明かせんと。探り寄つたる手先に瓢簞大膽者。口から口へ一刻飮み元の所にそつと置き。空寢入りして臥したるはッ シ 可笑しくも又野太さよ。地 時綱一つさらりと乾し。詞 堪らぬ〳〵。自身の押へ最一つと。地 取りあぐる瓢簞のひよつこり輕きは不審ながら。注掛くれば雫もなし。詞 こりやどうぢや。溢れたか洩つたか吸うて取らんと撫で廻れば 地 旅人の息の酒臭さ。ムム扨は此奴と胸ぐら取つて引きずり下し。詞 ヤイ鈴盜人は音にて顯れ。酒盜人は臭氣で知る。隱しても隱させぬ。サア此の瓢簞の酒返せ。いやといへば首が飛ぶ。返答次第眞二つと。刀に手を掛け詰めかくる。ちつとも臆せずハテがい〳〵と喧しい。飮んだ酒を返せとは法を知らぬ侍殿。酒戾しはせぬ物。地 ならば二つにして見よと胴を据ゑたる詞の端。大和之介聞き咎め。詞 さいふ和殿は武田の郎黨高坂ではあらざるや。ム、我が名を知りし御邊は如何に。長尾の執權直江大和之介。ヤア大和殿。高坂殿 地 是は〳〵と手を取組み。暗がり紛れ危い事。互に息災珍重々々。詞 シテ勝頼公の御在所は。されば〳〵東山道を心掛け四五箇國尋ねても。今に於てお行方知れず。假令お二人腐り付いたる御中なりとも。一旦緣を切らせ。兩方引き分けお供して歸らでは。腹を切つても事濟まず。若し御短慮にて御身

を失ひ給はんかと。地いたはしさも先立ち案じ過しがせらるゝと互の憂さを語合ひスヱテ落涙するこそ道理なれ。地勝頼夫婦も此の辻堂。宵より臥して在せしが。扨は高坂大和之介我々故に苦勞の旅。逢はゞ緣を切らせんとの詞にはつと胸塞き フシ息を詰めてぞ忍ばるゝ。詞時綱重ねて今日暮前甲州境を過ぎし時。百姓どもが迯け騒ぎ。甲斐越後確執にて。近々戰爭の御用意と語るもあり。又兩家の不義の名を立てし元の起りは村上義淸。信玄も輝虎も先つ手合せの戰に。義淸を攻め給ふとも取々の風聞。何れにも聞捨て難く一先つ國へ歸る覺悟。慥な沙汰は聞かれすや。ヲヽ某とても慥に實否は聞かねども。夜明け次第本國へ罷立ち。主人と主人の軍に治定すれば。御邊とも敵味方。對談も今宵ばかりもう何時ぞ。八つか七つか雨も降り止む。地あれあれ南の山に雲ちぎれ。くわつと赤きは月日の出づる方角ならず。不思議々々々と見る内に。雲を焦せる兵火の光どん／＼響く攻太鼓。風に連れたる鬨の聲 フシ耳を突き抜くばかりなり。詞大和突立ち。聞きしに違はず兩家の戰爭と覺ゆるぞ。安閑と見る所でなし。尋ぬる主人は行方知れず。茫然と手振りで國へは歸られまい。今いふ通り主君と主君の戰なれば。地爰は御分と我が戰場こい兩人討果し。高坂が首を土産にするか。時綱が首を土産にやるるか。此の上に分別なし。サア立て勝負といひければ。詞ア、早まるな時綱。指す敵の義淸を差措き。武田長尾の合戰とは訝しし。あの火の手は村上が小諸の城の順道。敵の不意を討ち給ふ夜軍と覺えたり。兩人が首よりも村上が首取つて土産にするが近道。地ヲヽさうよ／＼本道は廻り遠し。直に打てば一里餘り。戰爭果てゝは詮ない事。いざ行くまいか尤々。時刻移すな時綱まつかせ暗いぞ。山坂高坂。合點ぢや。サアこいやつと。踏んだる足は阿吽の二天 フシ飛ぶが如くに駈けて行く。跡には夫婦。悄然と。身を悔みたるかこち泣き稍あつて勝頼。詞病は少し癒ゆるより起り。孝は少艾より劣るとは。ひつしと胸に思ひ知る。我が愛着に親親を修羅に導く不孝の大逆。あれ見よ子故に怒る瞋恚の兵火。勝頼程の者が色に迷ひ民百姓の苦みを。餘所に見んも本意ならず。爰に父の目はなくとも月日は父の兩眼。父と父とは合戰し子と子は妹背の語らひは。天の照覽恐ろしく。詞義を見てせざるは勇みなし是より夫婦引別れ。今迄積みし梟惡の非を改むれば。孝も立ち義も立つ。地互に心殘れども御身も輝虎の娘。輪廻の詞無用ぞと。すげ無くいへど目は涙。泣き崩をれて衛門の姫。せつなき戀を義に替へて添はれぬとの御詞。理なり フシさりながら。地親と親との戰やら村上との軍やら。誰が知らして誰か知る。父の軍に極まらば。詞成程添ふまい思ひ切らう。若し義清退治の上。互のお心打ち解け和談あるま

い物でもなし。添ふか添はぬか縁を切るか切らぬか。堺は夜明けて知るゝ事。地それ迄は變らぬ女夫。なんぼ不孝になるとても。半時や一時の眼離はない。何かなしに莞爾と互に倦く程しめ合うて覺悟させてと抱き付く。地エヽ時も時折も折未練至極と突放せば又取り付き。地彼方へ退けば此方へ慕ひ。縺るゝ袖に引かるゝ心。未練々々も戀慕の闇未來を照らす辻堂も妹背の臺と三重へ成りにけり。地既に五更の一點の鐘に落ち來る村上義淸。武田長尾の兩勢無二無三に切り立つれば。太刀も兜も打落され身に添ふ物は旗差一人。轉つのめつゝ泥塗れ命からぐ逃け延びて。溜息をほつとつぎ。詞エヽ無念口惜し信玄輝虎中違はせ。彼の鷸蚌の戰ひにて兩國を摑まんと。日頃の巧みぐわらりと違ひ。却つて彼奴に夜討せられ。家來を討たせ城を拔かれ。おめおめと存らふるも命が物種。此の恥辱を取り返す一つの計略能く聞け。信玄が領分は海邊なき國なれば。遠州鹽の運送にて諸人の喉を濕す。我遠州の氏直には豫て入魂所緣もあり。氏直に手を束ね賴み入り。鹽の手をとむる物ならば。地鹽に飢ゑて甲斐一國は戰はずして鏖。信玄坊主めしてやれば輝虎討つは手間入らず。三ケ國を横領し戀の敵勝賴め。搜し出して寸斷々々切り。詞衝門の前をぬつくりと抱いて 地寢るは案の内。何と思案はあるものかと語る後に聲をかけ。勝賴是にと切りかくる悲しや伏勢やれ逃げよと。一度の懲に二度の恥。投ぐる刀に家來が首。飛ぶより早く村上義淸 フシ はふ〳〵遁れ落ち失せたり。地何處迄もと駈行く袂に縋りつき。詞アノ臆病な村上何時殺さうとまゝな事。此の暗いに大事のお身怪我遊ばすな。何と私が申さぬ事か。今宵の軍は義淸退治に極つた。地アヽ嬉しや如何か斯樣かと幾瀨の思ひの痞も下り。落ち付きましたといふ折しも又改まる太鼓の調子。兵火熾んに數千の鐵砲。胸にこたへて勝賴持つたる刀がはと捨て。詞あれこそ父と父との軍今が夫婦の別れぞと。地心亂れて立騷ぐ姫も驚くおろ〳〵聲。何のさうではあるまいとフシ離れかたなく付き纏ふ。山間にちら〳〵と焰に映る旗の手の。色も定かに分らねば。延び上り飛び上り。氣も逆立ちし心の闇の黑髮山。夫が上れば續いて上り。焰は下に見下せども一天暗き眞の闇。旗の文色も見えざれば。未だ日は出ぬか明けよ〳〵と明くるを惜む氣。惜まぬ氣。詞エヽ如何に男なればとて餘りな思ひ切り。夜が明け旗の印も見え。兩家の軍に極れば添ふ事ならぬ身の上に。地夜が明けよとは胴慾な。今宵一夜を千萬年。日天樣のお慈悲に。出て下さるな夜も明くなとわつと叫び。伏し轉び歎くに。辛き東雲や。コハリ萬里を隔つる東海の。波に陽炎瞳々と。たなびき渡る雲の白旗幸菱。ナホス地あれこそ父よ武田の紋ハア。此方に焦るゝ 旗紋は緣切る桐の臺南無三寶。長き別れは長

尾の旗。彼方の戰ひ此方の思ひ。泣き明かしたる目も眞赤に出づる日の。コハリ五色八色染むる フシそら〳〵。雲の波赫々暉々たる太陽の。步行は五萬六千里。夫婦が間も幾千里。明けてはかなき夜床の霜朝日に。連れて別れける。

第　三

地葉公龍を好んで畫き刻めども。眞の天龍を見て魂を失ふ。是龍を好むにあらず。龍に似て龍にあらざる物を好むといはん。將の賢士を好む賢に似て賢にあらず。少い哉才賢の臣。然れば長尾輝虎。信玄と初度の合戰に勝利を失ひ本城に勢を引入れ。執權直江山城守實綱。甘糟柿崎宇佐美なんど。侍大將召集め。詞今度の戰爭味方三萬の人數を以て。武田が一萬二千に駈け崩され。地無念の敗北骨髓に徹す。日頃危き勝を好まぬ信玄。朝霧の紛れに大河を渡し。切所の細道より我が旗本の後へ押し廻し。無二無三に駈け破りし武略の鋭さ。信玄が胸中より出づべからず。如何なる軍師が敵に與し斯る奇計をなしけるぞ。汝等聞かずや知らずやと眉毛逆立て眼に角。以ての外のフシ不機嫌なり。甘糟柿崎詞を揃へ。詞我々も其の心付き間者を入れて窺ひ聞き候へば。山本勘介晴幸と申す浪人を召抱へ。備陣取士卒の駈引。一向勘介が下知と承ると申しも敢ぬに。ムウ音に聞く勘介。則ち直江が女房の兄ならずや。ヤイ山城。近き緣者の身にてなぜ我に勸めず。何と油斷して敵には取られし。信玄が千石くれば二千石。三千石やらば六千石。地五千石ならば我一萬石もくれんずもの。我が家を見限りしか。但し此の輝虎勘介が主に不足なるか。所存あらば言へ聞かんと フシ顏色。急いて見えにける。地直江少しも騷かず。詞御意なくとも申し上げんと存ずる所。尤彼が妹を相具し候へども。勘介には未だ對面致さず。地在鄕に引込み鋤鍬取つて自ら耕し。秋の田面の月に嘯き。薪を荷うて山路の花を友とし。世を諂はず祿を貪らず。天命を樂み義を堅く守る士。越後半國賜るとて。傳緣引を力に知行を望む勘介ならず。詞憚りながら君御短慮高慢にて。人に詞を下げ謙ること御嫌ひ。世の中八分に見下し。思ふ樣に知行さへやらば。樊噲張良でも抱へて見せんとの思召とは大きに相違。今度武田方になりたるは。必定信玄が上手を盡して招きたるに疑ひなし。某も餘りに殘念枕を割りし一手段。地短氣を鎭め無念を押ゆる御合點ならば。密々に申上ぐべしと恐るゝ方なく申しければ。さしもの輝虎理に服しほく〳〵頷き。座敷を屹と見渡せば。甘糟始め物大將 フシ殘らず御前を立ちにける。地輝虎色を和げ給ひ。詞これ實綱。智ある軍師を親師匠とも貴ぶは。古の法。勘介我に奉公せば。弓矢八幡臑を持たせても堪忍する。おことが思案は何と〳〵。さん候勘介幼少にて父に離れ。七十に餘る老母に孝心深く。廿四孝の追加と沙汰に聞

る孝行者。先づ母を贐けん爲。地女ども方より迎ひを立てさせ候と申す所に。直江が妻の唐衣遣戸口に差伺ひ。詞なう山城殿。母樣先程お着き。兄勘介殿の內儀樣も同道。地指圖の通り直に御城へ乘物入れさせ。お次の臺子の間に憩ませ置きしと。聞くより輝虎出來た〳〵。具に聞きたし是へ〳〵。御免ある近う參れと呼出し。色シテ母は年寄られしか。機嫌はよいかと問ひければ。長浪人の辛苦にや腰は二重天窓は雪。地十も老けて見えながら行儀作法は昔に變らず。勘介殿の御內儀。お勝樣にも始めて逢ひしが尋常な氣高い嫂御。詞一つの疵は口が吃で物いふ事も恥かしがり。請返答は皆筆先。其の上琴の上手筆にも書かれぬ急な時は。いふ事に節を付け琴に乘せ諷へば。如何樣の早い事も吃らずにいはるゝと母樣の物語り。地其の手の見事さ墨付筆勢。御家中の祐筆衆にも少い程の器用人。吃りが直して進ぜたいと。語れば直江一段々々。

隨分母の機嫌を取り。何時迄も逗留ある樣に待遇せ。さぞ老體の草臥れ。是へ請じ此の御座所に直して馳走々々。殿と我とは障子の蔭にて事の樣を計らひ。首尾を見合せ對面せんと フシ主從伴ひ入りにけり。折しも床の。大和琴。硯料紙も座敷に並べ。唐衣廊下の欄干に手を掛け。詞山本勘介殿の內儀樣。母御前連れまし是へお通り。地山本殿勘介殿の內儀樣母樣と。招待の聲聞ゆれば。音高し〳〵 フシ塒を出でし。老の鶴。子に逢ふ迄ぞ世の人の。問ふとも我は フシ名なし鳥。名を洩さんはをこがましなう唐衣。詞此の越後は勘介が主君。信玄公の敵の國。和女の夫は敵の御家老。其所へ此の母が來る義理はなけれども。地此の世の名殘に母の顏見たしとの文の面。詞我も娘戀しさ迎ひと打連れ。地言舌廻らぬ嫁を力に下女も連れぬ此の有樣。山本勘介殿の。母よ內儀よと聲高にはいはぬ事。ヤアゐいと坐せんとするを手を取つて。直に是

へと請ぜられ嫁のお勝が携へし。持刀膝に引寄せ怯めず場うてぬ白書院。綸物したる褥の上 フシ威も備つて見えにける。唐衣近く差寄つて。詞お禮申すはお勝樣。私が孝行をお一人に振掛け。年寄の起臥朝夕の御介抱。地此の度の道中雨につけ風につけ。山よ川よ噪お氣盡し。詞には申し盡されずと。いひかける程口籠り。只あい〳〵と笑顏ばかりを愛想にて。硯引寄せ赤らむ顏のはぢ紅葉。木の葉の時雨さら〳〵。世尊寺樣の走書讀手の フシ辭に讀め易き。唐衣取上げア、〳〵是は忝い。お筆の通り姉となりとも妹となりとも。姉妹と思召しお心隔てず賴みます。詞扨此の御手跡わいの。存ぜぬ乍ら見事々々。地此の半分どうぞ書きたい事やと。くる〳〵卷いて袖に納むる後より。直江裝束改め。狂紋の綾の吳服一重。肩にかけて立出で式代深く。詞拙者直江山城守實綱。お國元へ罷越し。親子の禮儀申し上ぐべき所。女どもより迎を參

らせ。遠路の御光駕祝着是に過ぎず。山本氏の御内室にもよくぞ〳〵御同道。お心易く御逗留ある樣に。態と御馳走は申さず。從つて此の小袖は。將軍義輝公のお着衣。二つ引兩の御紋付主人輝虎拜領致され。一兩度着せられしばかり。當國は寒國假睡の裾に置き給はば。輝虎も滿足たるべしと差出せば。起き直り莞爾と笑ひ。ヤレ〳〵。數ならぬ此の婆が來た事輝虎公のお耳へ入りしよの。扨は爰は聟殿の館かと思へば。御主人の本丸か。シテ此の小袖を婆に着よとかホウ御念の入つた事やの。扨々。結構な狂紋の綾といふ物か。流石將軍のお召料。さりながら。輝虎殿が一兩度も着給ふとあるからは輝虎の古着。此の婆は此の年迄。人の古着貰うて着た事がない。地なういや〳〵忌々しいと。詞に綾も艶もなく。呉服もフシ色を失へり。詞いや申し。母御に召せとは御挨拶。もと是は男模樣。勘介殿の土産になされよとの志。いや〳〵〳〵。武田信玄といふ主持つて何乏からぬ勘介。土産には越後の名物鮭の鹽引。歸るさの道には木曾川の鮎の白干。信濃梅の梅干。皺のよつた此の顏の無事を見せるが土産ぢや。地ヲヽ喧しや聟殿御免と足踏延し臂枕。直江も立つに立場なく勝手に向ひ手を叩き。たそ參れ〳〵。御持分がよし料理々々何として遲なはる。料理人め屹と申付けんと。料理を其の座の機にして母の機嫌の鹽梅加減オクリ窺ひ〳〵〳〵フシ立ちにける。程なく御勝手よしとほのめき。本膳の懸盤に種々の魚鳥。珍物の野菜美味を調へ。配膳の侍直垂繕ひ作法正しき疊觸り。御膳召上げらるべしと烏帽子八分にフシ差上げ。てこそ控へけれ。唐衣見れば主君輝虎公。はつと驚き是は恐れ冥加ないと。いはんとせしが仔細こそあらめと。なう母樣。御膳々々といふ聲に起き直り座を組めば。管領風の摺足にて膳の据振り敬ひ深く。通ひの座に手を突き。詞邊國の儀御馳走も心ばかり。召上られ下さるべしとぞ仰せける。老母會釋し。ホウ隔心がましい饗應。殊に仰山な神前に御供供ゆるやうに。烏帽子直垂の配膳は。近習衆か外樣衆か。常々女子どもに給仕さする此の婆。齒は拔ける口も乾く。慇懃な給仕では窮屈で喰べにくい。勝手へ立つて休息めされ。唐衣代れやとありければ。いや辭儀は却つて迷惑。子息の山本勘介殿。勇といひ智といひ。楠正成が再來とも謂つべき弓取惜いかな武田信玄に奉公とは玉を泥に擲ち。麒麟を繋いで犬とする如し。斯る英雄の御老母。地直江山城内縁を以て。不思議の御出で一國に優曇華の咲いたる喜。詞今日より我も母と頼み子となる證の。盃頂戴の望。かう申すは長尾彈正の少弼輝虎。地孝行始の給仕配膳と烏帽子を疊に着け給へば。嫁もはつとばかりスヱテ覺えず。頭を下げにける。老母膝を立直しけら〳〵と高笑。詞ハアヽ長生すれば珍しい事を見聞くよな。鎌倉の海には鹿の

角で涎釣り。攝津河の淵には麥飲で鯉を釣ると聞きしが。越後の國には老いさらぼひし此の婆を餌にして。山本勘介を釣り寄せんとはハヽ〳〵〳〵事可笑しや〳〵。凡そ大將は天より受けたる明命を顧み。正直自然の矩規を外さねば。天の時地の利に適ひ。諸卒是に和し遂には誠の勝利を得る。總じて物には相應あり。此の婆が給仕には腰元女の童が丁度相應。地鷄を割くに焉んぞ牛の刀を用ひんとは聖人の誠。人を瞞す僞表裏今日の振舞に顯れ。本心曲つた釣針に。釣らるゝ勘介ではおじやらしませぬわいの。此の膳部に手をも掛けては恩になる。輝虎殿と敵對の勘介が母。敵の恩を受けては我が子の鉾先に緩みが付く。義もなく勇もなき此の膳何にせんとずんど立つて。懸盤ぐわらりと蹴返せば。膳部亂れてひつた直垂。膝に味噌汁淵をなし。魚より驚く嫁娘ハア〳〵ハアと。フシ肝を冷して惘れ居る。地短慮の輝虎くわつと急上げ。

憎い死損ひ。詞小袖を呉るれば古着なんどと蔑視し。剰へ天子將軍にも給仕致さぬ虎輝が据ゑたる膳を。地臑に掛けて踏みちらす粗略。狂人同然と思へども堪忍ならず。皺首刎ねんと重代の小豆長光。二尺五寸に手を掛け給ふを。直江山城飛んで出で御手に縋れば。唐衣母に取付きお詫〳〵と心を揉む。何の詫言。聟の主人手向ひもせず詫もせぬ。サア手に掛らん〳〵と刀をかい込み立つたる擬勢。ヲヽ其の喉止めん放せ直江。これ〳〵〳〵。臑を持たせても堪忍するとの御誓言は何と。禮儀は爰と制しても。スヱテ身を震はして無念の涙。中にうろ〳〵嫂が。心急く程口廻らず拜んで廻りつ立つつ居つ。詮方なく〳〵涙片手に琴引き寄せ。琴柱を律に調べ替へ。歌免し給へ老の身の。相ノ山力に。足らぬ。吃りの。不具者を賴みに。預けしは我が夫。詞預かるは姑。歌かひなく爰に捨草の。露より脆き。命をや。空しく枯れし箒木を。

無常の煙となし果て。一人悄々。歸るさは。相ノ山拾ひし骨の。供をして夫には。何と語らん。ナホス地代りには我が命母を助けたび給へ。お慈悲ぞやお情とわつと叫び。彈き捨ての琴に。身を投げ伏し沈む。鬼を欺く輝虎も哀れに心の緩むを見て。直江押取りアヽ御免あるぞ女ども。母を誘ひ我が館へ〳〵。ハア、有難しと一禮に。お勝が嬉しさ物いひたげに。頭を振るばかり足もつかず踊節。歌情の花のヤレ御所櫻。枝はゑゝゑつちりな。ゑゝゑつちりな。ナホスゑつちり越後の御繁昌と祝ひ。勇みて三重〽日を送る。フシ北國の。爰にも己が時知りて。是より北の故郷を。慕ひてこそは歸る雁。況て老の身の今日歸る明日歸ると。怺へせいなき老母の心。隨分慰め止めよと殿の仰。御家老の姑女御前家中重んじ。毎日の進物四季草木の造り花。屏風掛物歌書物語或は囀る籠のとり〴〵。奧玄關の取次に所狹きまで積重ね。高田の局が披露にて

女房達の取り捌き。表使の進物帳フシ筆を摑く隙はなし。地時に信濃堺の番所より早使到來し。詞今朝未明右の目は跨。左の足跆跛の侍御關所を通り候故。何方より何方へ行く人と名を尋ね候へば。甲州山本勘介といふ者。御家老直江山城殿の御内證へ行くと申し。供の人馬をお國堺に殘して通られし故。地脇道より進つて先づお知らせと申しフシ置いてぞ歸りける。地局手を打ち是は目出度い。山本勘介様とはお客人様の御總領。則ち奥様の兄御様。申上げたら嘸お悦び其の間に腰元衆。お座敷綺麗に掃除しやと。フシいひ付け奥に入りければ。地手々に雑巾とりの猻等棕櫚箒。掃いつ拭うつ立騒ぎ。詞なうお大知つてか。勘介様は奥にござるお勝様のお連合ひ。隠れもない軍法者功の武士なれど。片目跛に跆跛ぢやげな。此方は吃り何と思やる。お寢間の睦言が不自由にはあるまいか。ア、何のいの吃りで物がいはれいでも。地肝腎の時はツ

イふん／＼で濟む事。男は氣轉で跛は愚か。兩方見えぬ眞の闇にも。夜軍の早業は手ばしかい。一番乗りにフシ拔け目はないとぞ笑ひける。地上臺所に局が聲奥様お城へお上り。板の間へお乗物廻しや。お供の衆とさゞめき裏門開く音して。高田の局立ち出で。詞これ何れも。旦那様今朝よりお城にお詰めなさるゝ。御相談の事にて奥様も今御登城。御夫婦御城よりお下りなき中。勘介様お出でなさるゝとも。必ず／＼母御様お勝様へは先づ沙汰なし。地此所でお茶あげ御菓子などで。御馳走致せとの仰せなりといふ所に。山本勘介様御出でと。小取次の撫子が案内にて。旅裝束の裁着に膝は捻れてちんがちが。たゞ跆跛に右跨。雪折松に星一つ。葉越しに見ゆる男振りフシ座敷に直れば。地女房達ふつと噴き出す可笑しさを。エヘン／＼に紛らしてお次へ笑ひに立つもあり。御茶小姓がくつ／＼／＼手を震はして茶碗の臺。フシ溢れたゆたふば

かりなり地細瑾を顧みぬ大丈夫。笑ふも誹るも何もなく。詞其方は局か。山城殿の御内室尼衣に。身が來た通り取次頼むとありければ。ハア公用につき夫婦ともに登城。未だ城より下られず。地先づ此所で御休息それお煙草盆。お菓子／＼とあひしらふ。詞ム、公用ならば歸りの程も知れまじ。山州夫婦に用はおりない。老母の氣色以ての外との便りに驚き。夜を日に繼いで罷越す。地早く母の顔見たし案内頼む。罷り通ると立たんとすいや申し。詞お袋様は一段と御機嫌よく。爰許へ御越しなされてより噓一つ遊ばさず。地御家中の持て囃し毎日花の鳥のと。數々の慰みといふ程氣遣ひ。詞然らば女房附に逢ひ申そ。いやお勝様も御機嫌ようお袋様のお傍に。追付け御夫婦お下りに間もあるまじ。地それお風呂急がしや少しお休みなさるゝ爲お枕上げましや。ハほんに氣が付かなんだ。お慰みに御酒上げましよとオクリ殘らず。立つて入り

ければ。（地）座敷には客人一人とほんとして手持わるく。（詞）ハテ心得ぬ屋敷の體。（地）母の大病十死一生只今の命も知れずと。女どもが自筆の文見るより前後辨へず駈着けしに。病人ある體とも見えず母は一段機嫌よしとて。女どもにも逢はせず。殊に公用につき山城が夫婦連れにて城へ上るとは。輝虎程の大將が女まじりに國の仕置き。軍評定するでもあるまじ。是ぞ不審の第一。（詞）ム丶ウムウ〳〵今氣がついた。母を囮にかけて此の勘介を。味方に招き取る談合鑛に掛けたる如し。血を分けし妹なれども夫を持つては夫の爲。主の爲を思ふ唐衣めは尤至極。大阿呆は女房の吃りめ。（地）輝虎の智略にて母を馳走し。一家中尊敬するに心奪はれ山城にたらし込まれ。息災なる母を萬事限りとの文を以て。我を釣寄せまんまと敵國の袋へ入れしよな。エ丶後悔千萬一應も再應も念入る筈の事。母の生顏ま一度見たし拜みたしと思ふより外他念を失ひ。ふか〳〵と踏み出せし勘介が一生の麁忽後代の笑草。いや〳〵片時も止る所でなし。母を奪取り立ち退いて鼻明かせんと立ちあがり。見やれば奥に間數も多く案内知らず。門を出て後の塀をや乘るべき。サア一代の難所我が爲の鐵拐が嶽鵯越。心の山坂蹉跎行きつ。戻つつ思案最中（フシ）誰が知らせてや。（地）女房お勝走り出で。コ丶ツ斯うとばかりに取りつく所を。物をもいはず後樣にはたと突きのけ駈け出づる。又引きとめて（詞）ナアナ丶丶アなゝんと何とウ丶ウロ〳〵〳〵ウ丶狼狽てござつた口こそ叶はね。コ丶ツ此方のニョウによん女房。勝が預つて來たからは氣遣ひちややつちやるな。やんがてぱぱぱッぱあちやまつれて拔けて歸る。（地）拔けて戻ると心はいへど詞には。ぬンゝぬんとばかりにて（スエテ）淚は聲に先立てる。（地）舌も廻らぬ頤から何と狼狽へ來たとは。（詞）三界にたつた一人の母今を限りといふ文に。狼狽ゆるが不思議か。夫の狼狽ゆる文書きしは何者に頼まれた。（地）サア誰に頼まれたといへども更に覺えなければ恨めしげに。夫の顏に指ざしし。ウ丶ウ嘘わいのと泣き沈む。（詞）チ丶嘘か誠か其の文箋に懷中せり。（地）汝が手跡是見よと投げ出せば。さつと披き見れば我が手跡。（詞）カカカ丶丶悲しやコッ此の手が腐ろ。カッ書きはせねども筆々フウ筆は私が筆と。（地）繰返し〳〵よく〳〵見て。（詞）ソ丶そでない〳〵ニィニ丶似せた似せ腐つた。似せ居つた奴穿鑿して。（地）生けて置かぬと走り入るをこりやまて阿呆者。（詞）穿鑿とは誰を穿鑿。元來似せらるゝが汝が過り。物を似せるに手本がなくて似せらるか。總じて敵の國へ入る時は擧動にも氣を付け。一言半句の詞をも愼み。油斷せぬこそ男も女も武士の心掛け。唐土蜀の單富が古事など。常に聞きながらうか〳〵と書きちらす故に似せられ。跡で穿鑿恨みいふ程恥の恥。（地）エ丶無念や一生敵の計略に乘せられぬ晴

幸。母といふ字に心眩み敵國へ踏み込みしは。汝が筆先不覺を取らせし。それでも山本勘介が女房とばし思ふかと。がはと蹴付けはつたと睨む片目の光り。月日と星の三光の一度に照すかと身に徹へ スヱテわつと叫び入りけるが。〔地〕アヽアヽあさましきは不具者の身。クウヽヽ國を離れて今日の日まで。ユヽ夢にもコッ心休めず油斷とてはナアなけれどもさすがヲン女子どしせヽセン煎じ茶の夕暮雨の夜のツヽヽヽ徒然度度に琴もヒィ彈かれず筆先の物語。ホウ反古を誰か拾ひ集めて手本とはナヽヽヽなしけるぞやシイ七年先のクワッ懷姙五月目に小產し。チヽ血の騷ぎに舌縮まり。ムウヽ生れもつかぬ吃りとなりフウ筆を舌にて物いひし。ヲウヲヽ思へば身の敵是が癒る物ならば。クヽヽヽヽ口側をキッ切裂き。シイ舌の根をヒッ引き出してもせめて死ざまに。彌陀の六字の名號を。マヽヽヽマンヽヽまんろくにトヽヽヽ唱へて死にたいと掻き口說き身を悔み。廻らぬ舌に急きかけ／＼繰りかけて吃らぬ。物は涙なり。〔地〕不具者を悔む身につまされ。天魔を欺く勘介もフシ不便彌增し淚ぐみ。〔地〕先年の小產より吃りとてそれぞ天命誰をか恨みん。〔詞〕我も猪の難より五體不具になりたれど。畜生に恨みなく魂は元の勘介。おことも吃りに心を屈せず。始めの根性を確かと据ゑ誠晴幸が妻ならば。〔地〕勝手は知つたり奥に入り母に知らせ盜み出せ。我は裏の塀を乘り易々と退くべきがおことは何と。〔詞〕ソウソヽッそれでは此方の。ニョニヨン女房か。おんでもない事七生迄も女房女房。ハアヽ／＼カヽヽヽヽウ忝い。カカヽヽヽヽッ〔地〕畏つたと馳け入る今のかゝ／＼は。フシ世界の嬶の手本なり。サア〔地〕心安し賢うぞ更めぬ旅出立ちと。勇みて出づる透垣の藤人聲して。〔詞〕勘介歸すな無體に歸らば討ちとめよと。十文字の槍先照る日に輝き犇いたり。〔地〕ヤ蜂に螫ゝれ益ない事と。庭にひらりと下りしも路次の木履片足。短き左に確かと穿き。跛に繼して兩足揃への高低なし。一つの目玉に八方見廻し立つたる所に。後を取り切る片鎌槍向ふよりは十文字。前後一度に突出せばまつかせと開く四寸の身。〔詞〕槍と槍とがかつしと當つて結んだり。ためらふ間もなくたぐり引き又突きかくる上下の穗先。下段に來るを木履の齒にてはつしと踏み止め。〔地〕上段に突く鹽頸もと右手を伸べて確かと取れば。取られじ物と堪ゆるを兩手を掛けてヤアぐつと引奪り。石突を押取り延べ二人が頭ばた／＼／＼。したゝかに叩付けられ槍を捨てて走込む。〔詞〕組んで留めんと無刀の男。大手を擴げ飛びかゝる。脇の下を搔落り太股摑んでどうと打付け。腰骨踏まへて小膝を突けば。〔地〕間も隙もなく七八人左右より組みかゝる。左手に擔いで右手に投越し。右手に擔いで左手へ投越し引擔ぎ／＼。筋斗打たする手利の早業。敷かれし男も肩

息にて フシ一度にどつとぞ逃散つたる。詞エ 無用の隙費し信玄公の旗下にて。討死する迄二人の主を取り。外の祿は喰はぬ勘介。地馳走しつ手込めにしつ。扨々揃はぬ人の心の照降りやと。フシ木履片足で追駈け行く。地實綱城より駈戻り。南無三寶はや歸りしか曲もなし勘介。詞當國に足を留めて貰ひたき主人の懇望。甲斐の國ばかりに月日の光あるでもなし。片意地も能い加減。地是非に歸らば此の實綱が首腰に付けてお歸りやれと。隈々尋ね呼びかけ慕ひ出でにけり。奥にはためく太刀音嫂小姑。互に白刃引そめば。詞恨めしいお務殿。和女の似せ文して兄樣を呼び寄せん爲。書き捨ての反古を集め。女子どもにも隱し忍び手習ひし。幾瀬の心盡しは夫に手柄させたいばつかり。地兄樣こそ武士の我強くとも。傍から和ぎ入れ。緣者一門睦じうするが妻たる者の道。折角呼び寄せた母樣迄奪うて歸らうとや。兄樣ばかりか唐衣が爲にも母。此の首は遣つても母樣は遣るまいが。詞エヽキウ聞えぬカッ唐衣。ドヽヽヽ、吃りの女アナ〳〵〳〵悔つてよう似せ文シイしたな。ナヽ涙が溢れてクウ〳〵口惜しい悲しい。預きやつて來たハヽッ母ちやま。ノヽンのめ〳〵とスッ〳〵スッ〳〵捨てては歸らぬ。ナヽ名殘り惜く首に地なつてお供せいと。はたと切るを請け流し打てば外し開けば切る。互に命を塵とも灰とも吃らぬ太刀筋曇らぬ刄。鍔音響く物見の亭。障子をさつと明けて出でたる老母の顏面。詞母樣止めて下さるなと聲を掛くれば。ヲヽ止めぬ出來す〳〵。切結んだ其の太刀兩方引くな動くなと。いふより早く眞逆樣我が身を二つの刄の上。兩の肋を貫かれ。背骨へ二本の切先は フシ朱に染みてぞ顯はるゝ。地ハアヽ是はとばかり嫁娘途方にくれて泣き叫び。家中の騷動勘介直江も取つて返し。輝虎も聞きかけ裸背馬にて駈付け給ひ。詞仔細ある敵國の大事の客人殊に老女。我が國にての落命他國の聞え。地難儀至極と大きに騷ぎ見え給へば。勘介涙にくれながら。詞武田信玄の家臣山本勘介といふ子を持ち。何か述懷御不足但し人に御恨みばし候か。地エヽいひがひなき御最期と。スヱテ手負に力を付けければ。顏振上げて我が子とも覺えぬ事をいふよな。詞人に恨みあるなれば其の人と刺違へ死ぬる迄。述懷を相手にして命を果す婆ではない。疾くに自からは輝虎公のお手討に逢ふ身の。存らへしは命の外。一國の大將の手を突き敬ひ御配膳。足に掛けて蹴散らせし。其の時の怒りの顏思へば能くも堪忍はし給ひし。地食は人の天なれば下人下女の据ゆるにも。膳に向へば禮儀あり法に背く慮外婆。車裂牛裂にもとさぞ無念御腹立。何時の世に忘れ フシ給ふべき。地お心に從はずふり切り歸る勘介。追手を掛けて搦め捕られ。母めが憎しみ此の時と。逆磔にも行はれ弄り殺しと聞くなら

ば。此の度母が死なぬ悔みは如何ばかり。詞坊主憎さに袈裟まで憎き世の譬喩。地唐衣迄如何なる憂目に逢ふべきと。思へば胸を裂く如く思ひ歎いて此の死樣。何に似たぞ能く見よや。磔の罪科人嫁娘の錆刀は。輝虎公のお仕置の大身の鎗。貫ぬかれ死するからは憎しみは是迄。勘介を恙なく本國へ歸し給はれとフシ執り成し。賴む直江殿。地扨も〳〵如何に不定世界とて。斯くも定めなき物よ。母が生れは尾張の國駿河の國にて人となり。三河の國へ嫁入して信濃の國に浪人住居。今甲斐の國に主取りし。爰ぞ我が露の身の置所往生所と定めしに。思ひもよらぬ越後の國の土となる斯く定めなき人界は。彌陀の淨土も覺束なやと淸き眼にはら〳〵涙。堪へかねて嫁娘わつと歎き伏しければ。地勘介心も目も眩み。獅子王の如き輝虎も。包むに餘る落涙にフシ目を數瞬いて在せしが。地堪りかねて大音上げ。詞ア、敢なや是非もなや。地我も人も武士の身は打見ばかり美々しく。はかなき物の上はなし。詞あの姿が一命を義理に捨てしも。地武家の名を惜む不便さよ。唯といひて魚を取る鳥あり。詞野鷹是に番ひ唯腹の鷹の子は。成長の後必ず母の業を繼ぎ。淵に躍る鯉を取る。地侍も其の如く胤腹揃ふは少なきに。天晴勘介が母なりし惜しや非業の死をさせ。方々が哀れを見る事も輝虎故とばかりにて。さしも我强き大將のスヱテそゞろに袖をぞ絞らるゝ。地ヤア何をかな追善と。指添拔いて左の手に髻摑み。元結際よりふつつと切り。詞家の弓矢は捨てずとも姿は發心。名をも今日より改め輝虎入道謙信。切つたる髮は佛にも捧げず。出家の手にも渡すまじ。勘介に取らする謙信が首取つたる心。地是ぞ母の香奠今はの心悅ばせよ。武士の武邊は珍しからず。汝が孝行を感じ入つてのフシ餘りぞやと涙に。くれて賜びければ。ハア、ハア有難きお情と廣緣に平伏して。涙肌骨を搾りしが。詞御心に隨はぬ恨みを捨て重々の御懇情。中上げん詞もなし。地形と心は信玄に仕へ御陣に向ひ。錆矢は射掛け申すとも切ての御恩報じ。頭ばかりは御法體の御供と。同じく指添するりと拔き髻摑んでずつかと切り。サア今日より山本勘介入道道鬼。道は道といふ字にて母を導く菩提の道。鬼は鬼と讀む字にて鬼神も挫ぐ道鬼入道。親の冥途の餞別と二つの髻を手に持たせ。血に塗れし膝の上。額を付けて忍び泣き。母は苦しき。目を開き。地生れ落ちて此の年迄六ヶ國を經巡り。遂に住所定まらず丁度七十二年目に。西方安樂國と永き住所定め。此の二總の切髮は瓔珞華鬘幡天蓋。住家を飾る樂しやな。詞大將にお暇とは恐れあり。地嫁よ娘よ聟よ子よさらば〳〵南無阿彌陀と。兩の手に二腰の刀を拔けば死出の旅。橇に乘らねど道急ぐフシ越路の雪と消えにけり。地人々はつとばかりにて泣く〳〵死骸に打掛くる。唐衣お勝は搔きくれて。絶

え入り消え入り亂るれど亂れぬ武士の矯。歎きは盡きず詞は盡きて互に目禮葬禮は。直江夫婦が涙の種勘介夫婦が別れて歸る。妻に謙信哀れを增し。詞ヤレ待て暫し母が追善。信玄へ土產せん。聞けば信濃の村上が甲斐一國の鹽止めして。人民士卒を惱まし鹽攻めにすると聞く。さもしし卑怯なり。謙信が軍は鉾先鹽攻めなんどの勝負はせず。地我が越後には海あり甲斐の。一國の鹽に事缺かせず馬車にて續くべし。軍兵の精力堅くして。我と合戰せられよと信玄に傳へよ。ハツァ重ね〴〵情ある詞のしほに身の歎き。涙滿ちくるばかりにて御暇申す武士の。情は情仇ば仇胸を二つに押し隔て。橫をりふせる甲斐がねの弱身を見せじと包めども。枯れてかひなき柞原。蔭を離れて別れ路は跡に。引かるゝ足弱車。片輪車や廻らぬ舌のドヽヽ吃りが盡きせぬ名殘。筆に書かれず謠はれず泣いつ。叫んつ足もどもる身もどもる。歩み。兼ぬれば力を付け。引立て引かれてコヽコヽヽヽツ心を殘してカヽカヽカヽン。歸りけり。

第　四

歌秋の山。紅葉の床に。牡鹿の寢たよ。しをらしや。合ノ手經緯に露霜織りし。錦は山の。楓葉。合ノ手楓葉の＋ホス流るゝ川を歌渡らば。錦中絕えん。エイソリヤ。牡鹿の。渡らば中絕えん。江戸地紅錦繡の秋の色。白根か麓の並木の紅葉。落ち來る鹿を射止めんと。心も猛き武士の。矢叫びの聲響き入る天目山の。フシ森の蔭。地高坂彈正原五郞。左右に別れ白木の弓に尖り矢番ひ狩廻す。信玄高殿の簾押遣り屹と見給ひ。詞ヤアけしからず。餘人の殺生をも誡むべき身を以つて放逸千萬。我が軍法工夫の此の高殿を建てん爲。當山を切開かせしに。山神の祟り天狗の障碍。狐狸の禍。天目山の變化化物と。一國他國恐れし故。地我山神を祈り當山殺生禁制の誓を立て。一千首の和歌を詠ぜしかば。誠に和歌は天地を動かし。()鬼神も感ずる威德にて。山神の忿も解け變化の祟りも鎭つて。詞高殿を始め休所まで悉く成就し。春の花の旦秋の紅葉に心を澄まし　地軍法の工風に紛るゝ方なく。思ひを凝らす所何ぞや弓矢を帶し。詞鹿を射んとは我が詞を輕しむるか。山神の祟り恐れずかさなくとも子を思ひ。妻戀ひかねて奥山に。紅葉踏み分け鳴く鹿の。地心は哀れと　フシ思はずや。地武士も物の情知る。後日をきつと愼めよと。弓矢に猛き信玄公。心解けたる顏ばせも。則ち　フシ和歌の德ならん。地高坂彈正昌信。御前近くさん候。詞我々御禁制を背き。鹿の子一つも射止むべき心底に候はず。態と君の御咎めに預り。それを序に勝頼公の。御不興申し開かん爲の手段。子を思ふ鹿の哀れをも知し召され。地男女の中を和ぐる和歌に御身を染めながら　掛替もなき若君を二年の御不興。痛はしや勝頼公。長尾武田は日月の如き中なりしに。詞數ケ度の鬪諍我が不行

跡より事起り。兩國の騷動民の歎き先非を悔いての御愁歎と。地密かに傳へ承る。一旦の誤りは御若氣。申さばあるまじき道にもあらず。家中の歎き勝賴公の御不興御免あり。姬君を呼びとり給へば兩國の悅び。科は臣等に免じ給ひ。御不興御免下さるべしと。額を土にすり付け／＼申せども。聞かぬ顏して返答なく。紅葉の梢打眺め フシ空うそ。ぶいて在します。地原五郎昌俊進出で。詞御不興の元は密通の憎しみ。餘所迄もなく御先祖新羅三郎義光殿。權の平太景成が娘に密通の不行跡。世擧つて存じの所。密通を强く禁め給はゞ。御先祖義光殿の御子孫は君を始め。人中へ面が出されうか。地免すとの御諚承らぬ其の內は。一寸も爰を動かじと廣言過言の大音上げ。信玄くわつと御色變り。詞ヲヽ能き事ならば新羅三郎を手本にすべし。如何に先祖なればとて。惡事を定規に勝賴が。不興免せとは不道なり昌俊 立ち去れやつと御機嫌損じ。

地高殿を下り給へば二人もはつと差俯向き。詞なく／＼立ち歸る。地抑は彼等は不孝の子は惠みある。父も養はずといふ本文を知らざりし。山神を祀る淸めの高殿。諸々の不淨聞かずといふ。大事の耳を穢せしよな。いで耳洗ひ淸めんと瀧の。流れに三重歌水を汲みやらばヨウヽヤ／＼小川で汲みやれ。小川小石川轉び合うて轉び／＼。轉びかゝるトヨエ。ナホス風の柵 フシ吹きよせて。魚も錦の下潜る。向ふの川岸を傳ひ來る。賤の女子の玉襷。肩に鹽を置手拭の。山下水を汲んで洗をよの。住吉の。ノシ住吉の。久しき松を洗ひしは。岸に寄せ來る白波の楓とかけてや洗ふらん。歌衣が白めばお色が黑むとよの／＼。手まづ遮る紅葉ばの。流れに衣を灌がんと／＼。合ノ手花色衣の袂には梅の香ひや。フシ流るらん。水に亂れて戀草の。干せども乾く隙もなき。スエテ我には辛き月日やと フシ憂世を。喞ち憩らへば。ツレフシ同じ思ひを。

打乘せて。草苅る籠の二つ女字牛の角文字直な文字。綱手苅手の千草原招く薄を呼ぶかとて。爰に憧れて來る賤の人目を忍ぶ賴冠り。互に顏を見つ見られ。シテヤア勝賴樣何時の間に。窶れし姿 フシおいとしや。ツレ詞懷しや衞門の姬。昔の面影なきぞとよ。地苦勞召さるゝ悲しやと共に萎るゝ涙の袖。絞らば フシ淵となりぬべし。シテ詞我も高坂昌俊が計らひにて。此の頃爰に隱れ住み。橋の逢瀨に此の日數。地積りし憂さの山々をせめて語らん其の橋を。渡りて爰へと招けども。ツレ詞アヽ愚かなり此の橋の其方は父の御領ぞや。免されもなく押し付けて。土を踏まんも天地の恐れ忌はし／＼。シテ地なう此の國の土も木も主は君より誰あらん。我ゆゑつらき忍路の御痛はしや情なや。自らそれへと打渡す橋に臨めば。ツレアヽ暫く。脆な渡りぞ渡るとも逢ふ事難き其の神の。誓ひに背くも天地の恐れ。シテ抑は渡るも及びなき目に見ぬ天の

架橋は。音になりとも聞き渡る。本フシ義
理に憂身を。からまされ心を。繋ぐ葛城や。
久米の岩橋中々に。夜の渡りも叶はねば。
顔見るばかりの フシ夫婦かや。ツレ詞我とて
も其の心。地傳へ聞く遊子伯陽は月に誓つ
て契りを込め。二つ夫婦の星となり今七夕
と世の中に。文月七日の私語變らぬ中を頼
みにて。末の逢瀬を待ち給へ。シテフシ實に
折からに。君が牽く牛の綱手のとり姿は。
彼の牽牛の姿よなう。其方は織姫此の橋は。
二人が中の烏鵲の橋 謡と渡る。風に山々
の秋を。吹き越す紅葉の橋 ツレ流れは如何
に。シテ天の川。年に一度の語合は絶えせ
ぬ中と聞く物を。我はそれには引替へて去
年も今年も打解けて。寢る夜なければ物い
はず又來る年も如何ならん。頼むは父の御
不興の免しは何時を限りぞと。二人はかつ
ぱと平伏して聲も。惜まず。泣き居たる。
ツレ地折節瀧の水上に集る鳥の羽打つ音。振
り返り見給へば。瀧本に座を占めて耳洗ふ
人の後影。疑ひもなき父信玄飛び立つ心の
戀しさも。跡に引かるゝ恐ろしさ。牛に負
はせし大小確かと脇挾み。牛を橋に追ひや
り〱。(詞せめて其方は此の牛牽いて草苅
る體にて父に近付き。地御不興御免の御願
ひ叶はぬ迄も念晴らし。我と一所にあるぞ
とは見付けられても葦垣の。隔てぬ中も心
から暫しは忍ぶ賤が家の フシ内に。見隱れ
入り給ふ。シテ地信玄 四方をきつと見晴ら
し。あら面白の瀧津瀬や。詞夏三伏の暑を
流し來る人稀に奥山の。地岩垣紅葉染め亂
れ錦裁ち切る心地して。譽れなき身の譽れ
には天晴住むべき山路よな。さるにても物
に遮る眼の前。姫は夫の緣に牽く。牛の手
綱を搔繰りて傍近く。詞なう物申さん。枯
木を枕苔衣。流れに口を嗽ぐとは火宅を出
でし沙門の境界。正しく弓矢取るお身の。
何故耳を洗はせ給ふ訝しさよと咎むれば。
ム、優しき女の理窟かな。流れに口を嗽ぐ
ばかり出家とはいふべからず。我が子の不
興免せとの理非辨へぬ人の詞。聞いたる
耳の穢れを。此の瀧に洗ひしが不思議なる
か。地實に御耳の穢れを洗ひし水なれば。
牛にかはんも穢れぞと折角寄る瀬の綱手
繩。しやんとたぐりて立歸る。女性暫しと
呼び止め。然らば我も不審あり。地穢れを
洗ひし水なれば牛にかはじと引き歸るは。
昔の巢父許由にもあらず。さもあれ如何な
る人やらん心ゆかしと問ひ給へば。申し上
ぐるも恥かしながら我は長尾謙信が娘衛門
の姫。勝頼樣と自ら親の許さぬ戀ゆゑに。
父と父とは合戰。餘所に聞きなし添はれず
と二年このかた引き別れ。今日迄面を合せ
ず痛はしや勝頼樣。詞父上御一人此の深山
に引籠り在します。若し雜兵なんどの忍び
入り御過ちも氣遣はしく。すはといはゞ駈
け隔て切拂はんと。地同じく山蔭に身を忍
べども。川より南は父の領分。勘當の身に
て父の御領の土を踏むを恐れなりと。川を
隔ててお物語聞くも見るも痛はしや。昔の

袖の花紅葉今は浮世の塵芥。妾へも自ら故今生のお情親子の慈悲。御勘當許されば笛による鹿火に入る蟲。夫故死する自らが命一つは惜しからずと。零るゝ涙落瀧津水の。白玉數添へり。詞何謙信の娘とや。身を捨てて勝頼が不興の訴訟は。地優しやしをらしや。さりながら彼に向ひて勘當といふ詞を出さねば。今許すべき詞もなく。詞何を感じて許すべき程の規模もなし。勝頼が事は兎も角も。御身の事は信玄何とも見捨て難し。村上左衛門義清が甲斐一國の鹽止めして。我が軍中鹽に盡き力を失ふ所。敵ながらも謙信の懇情。勘介入道道鬼が孝心を美賞し。數百駄の鹽を贈られし心入れ古今獨歩の弓馬の達人。信玄何を以て恩報ずべき所を知らず。せめておことの身の上。我が身に代へて申し開くべし。地先づ此の所に足を止められよ聊か麁略を存ぜずと。裏なき詞に姫君も。扨は夫の勘當も御免ある瑞相と。晦日の夜に滿月見付けし如くにて。

スヱテ只能い様にとばかりなり。二人フシ秋の慣ひの。暮早く。山と山との中空に。入る日は暗く出る月の。ハヅミ影をも待たず。ツレ枝々に。光揭ぐる燈籠は。夜見よとてやフシ照すらん。あれなう見給へ山々の。梢々を吹き閉ぢてちり〱ばつと。誘ふ嵐に亂れ亂るゝ楓葉は。錦織るてふ山姫の絲のほつしと。疑はれ錦上に花を敷く。老も若きも一時の愁を拂ふ夕景色。見て慰まん此方へと休み。所に入り給ふ。詞一セイ時に更け行く夜嵐の。梢を鳴らす谷陰より。頭に輝く輪燈を戴き。詞身に千草の葉衣を重ね。歩み來る足は大地を離れ。古木の枝の四方を拂ひ。化したる姿の恐ろしや。地勝頼きつと見御身を固め物陰傳ひに忍び寄る。化生すはと尻目に睨み。付けつ戻しつ踏み轟かす。コハリ眞砂絞りの小笹原さらさらどう〱ぐわら〱〱。躍立て踏み割り高殿目掛け驅け登る。ナホス登しは立てじと。聲を掛けてむんずと組むを事ともせ

ず。一振振つて勝頼の頭を摑んで上らんとす。ヤアやはか汝に負くべきかと。摑まれながら化生の眞中。突けども〱身を開き。横に薙れば五體を外しヲン〱〱と呻り聲。微塵になさんと弓杖三枚ばかりぞ投げ付くる。勝頼宙にてひらりと返し叉飛びかゝり確かと抱く。山も響く大音聲。詞丸ま天地開闢猿田彦の昔より此の天目山を住家とす。地腕立てして後日に祟り受くるな立ちされやつと呼ばはつたり。勝頼かつら〱と笑ひ。猿田でも猫田でも組留めらるゝは紛者。サア神通で消ゆるか。我が人力で打殺すか手際を見んと締め付けられ。あがく變化を引擔ぎ大地にうんとのめりを打たせ。投付けらるゝ拍子に連れ。頭の輪燈木の葉の衣。亂れて落つれば忽ちに。村上左衛門義清が誠の姿大音上げ。詞天目山に變化ありとの世上の風聞幸ひに。山の神の姿に似せ信玄を討ち取らんと巧みしに。本意を達せぬ無念々々。地父めが冥途の先

駈せよと面も振らず切つてかゝる。心得たりと抜合せ一足去らぬ劒の刄音。姫君聞きつけ、アレ麓に勝頼樣義清樣と危なやく\と呼ばはる聲。高坂彈正原五郎。躍り出づれば信玄公構ふなく\。行かば一所に勘當ぞと。いはれてはつと齒切し フシ麓を睨んで控へたり。地勝頼の打つ太刀義清が右手の肩先胸板かけて切り付くれば。うんと仰向に反りながら勝頼の高股薙り切り。兩方手は負ふ總身は血汐紅深き秋の葉の。紅葉を散らして 三重 切り結ぶ。フシあるにもあらず。地衛門姫麓を下りに駈け下るれば。加勢と見るより村上左衛門心どまくれ方角忘れ。高殿さして逃上れば續いて上る山の原。小石に滑り踏みくちらし草をたぐり木の根に取りつき。登む月影を知邊にて。遁さじやらじを力聲。跡を慕うて 三重 攀登る。地下には姫君身を冷し。上にはむんづと引組んで上になり下になり。起きつ轉びつ捻合ひしがはづみを打つて高殿より。遙かの麓へころく\く\轉び離れて。村上義清橋を渡つて逃げ延びんと。心は逸れど身は勞るゝ。歩む小橋の目にちろく\。半ば渡るを姫君勝頼 橋 の木口を手々に掴みゐいやく\とはね返せば。フシ川へだんぶとはね込んだり。地續いて勝頼かつぱと飛び込み。流れに隨ひ水に連れ。跡を求めて 三重 追駈くる。地義清も命からく\。難なく向ふに游ぎ着き又逃げ出づるを。逃がしも立てず取つて引敷き首ふつつと掻き落し。詞村上左衛門尉義清を。武田勝頼打取つたりと呼ばはり給へば。地父信玄思はずすつくと立ち上り。出來したく\それこそ我が子不興許すと宣へば。各はつと土に平伏し有難涙悦び涙。目に見ぬ鬼神の仇祟りも心に呑み込む天目山。甲斐の白根の動きなく猛く勇める武士の。心和らぎ楓葉の錦に。包む親子の中。男女の語らひも。皆此の道より情知る。千首の歌の御威徳。かの貫之が言の葉を仰ぎて。今も感じける。

第五

地百度戰つて百度勝つは戰の戰ならざる物といへり。武田信玄長尾謙信四度の戰ひ牛角にて。既に永祿四年九月十日。五ヶ度の戰劒の刄音天に轟き。人馬の嘶き大地を穿ち勝負を一擧に定めんと。川中島の南北を限り西條山は長尾の陣所。雨の宮は武田の備へフシ信玄。床几に著き給へば。詞旗本の左備へ高坂彈正昌信。右備へ原五郎昌俊衆を計つて控へたり。詞物見の軍將梁田三郎鐙に射付の矢を負ひ掛け。息を切つて馳着け。謙信が旗本板垣兵衛に切崩され。繰引に引退く。地後陣の大勢を以て取圍み給はば。討ち取るは案の内急ぎ御勢を指向けられ。然るべからんと告げ知らせ フシ又陣中へ立歸る。地信玄ちつとも聞き入れ給はず。詞いやく\武勇の謙信脆く引くべき樣なし。軍懸りとて先手より繰り引きに引き。旗本と旗本行合ふ樣に備へしは謙信が家の軍法。地重ねての物見を待ち動くなく\と宣ふ所へ。遠見の士卒息つぎ敢ず。詞敵筑摩川を夜の内に渡り。貝津の城の通路を取り切り赤坂山に兵を伏せ。地思ひも寄らぬ横槍に板垣三郎穴山主膳。討死なりと申上ぐる。詞さればこそ思ふに違はず。貝津の味方は敵の後を取切らざるか。旗の手見ずやと宣ふ所へ。地貝津に置かれし伏屍の兵立ち歸り。詞原隼人介正國謙信の後を圍み。志田源四郎大河駿河を討取り。板垣兵衛と心を合せ前後より挾んで切り立てく\。謙信は犀川を渡つて行方なく、軍は味方の御勝なりと申し上ぐれば。地信

玄團扇打振り〳〵此の勢ひを失ふべからず。時刻移すな昌信昌俊。急げ〳〵と宣へば。高坂彈正原五郎諸卒を引具し馬引寄せ オクリ 白泡。はませ駈出す フシ 思ひもよらぬ。地 岨蔭より長尾謙信是にあり。見參やつと呼ばはる勢ひ雲に羽を伸す雲雀毛の駿足。一文字に乘りかけ眞甲二つに切付くる打刀。信玄隙さず軍配團扇にはつしと受け。柴居を踏まへ床几を去らず退かば付け入る請身の勝。切り込む刀の虚々實々。謙信吳子が祕術を盡せば信玄孫子が心を練り。兩翼牛角の大將々々自身の働き生死の境。フシ 目覺しくも亦危し。地 拂ひ解す刀の餘り。信玄の肩先三寸餘り切り下げられ。流るゝ血は朧なせども御佩刀に手も掛けず。切らば切られん面魂。謙信馬を乘り放し。詞 臆したるか信玄。とても我に敵ふまじき所存ならば。甲を脫いで降參せよ 地 降參せよと呼ばはる聲に。谷蔭より武田信玄是にありと走り來る扮裝。形恰好ちつとも變らぬ信玄二人。見るよりぎよつと謙信も フシ 惘れて詞もなかりしが 地 よし〳〵二人の中一人は似せ者。何れか誠の信玄名乘つて尋常の勝負せよとありければ。以前の信玄床几を去つて。老

頭の甲かなぐれば。山本勘介入道道鬼。二人の中に涙を浮べ。詞 其御奉公に罷出づる折から老母申し聞かせしは。今甲斐越後戰ひの眞最中。汝を武田より召さるゝこそ幸ひ。長尾の家臣直江山城は妹聟。緣もあり心も合せ若君姫君を御夫婦になし奉れ。互に名將々々の義を爭ひ給ふ戰ひなれば。地 兩家の武勇に瑕を付けぬが軍法の第一。まさかの時は一命を拋ち御中直し奉れ。此の詞忘るゝなとくれ〴〵申し聞かせしも。今は老母が フシ 遺言となる。地 よつて數ヶ度の戰ひ。何時とても勝負は五つ〳〵に軍術を盡すといへども。詞 御中直し御緣を結ぶべき手段を失ひ。母が詞に背く悲しみ。勿體なくも信玄公の御姿に扮裝ち手向はず。地 一太刀切られしは主君の御身も恙なく。謙信の御憤を宥めん爲此の上の御憐愍。山本道鬼が首を召され。兩家戰ひを止め給はは黃泉の母が願ひを遂する悅び。生前死後の我が面目偏に願ひ奉ると。スエテ 歎き入つてぞ申しける。地 謙信はつと感じ入り實に賴もしゝ優しさよ。天晴弓矢の手本ぞや。一命捨てし道鬼が願ひ反古にせんは弓箭の恐れ。信玄は兎も角も謙信が戰ひは是迄是

迄姫が不興も許すべしとありければ。詞 信玄とても其の通り意趣も殘らず遺恨もなし。地 武勇も牛角軍慮も牛角。信濃一國五分々々の分取り。名を取り譽れ取り フシ 弓矢も既に納まりぬ。地 道鬼が悅び大音聲。詞 武田長尾和睦相濟み。若君姫君誘ひ申せと呼ばはれば。地 直江山城大和之介高坂彈正原五郎。姫君若君御供申し。皆萬歲と悅び聲 フシ 嘗しは鳴りも鎭らず。地 信玄の軍配團扇手に取り敢ず。今日よりは他ならずうちは〳〵と戲れて。姫君に下さるれば此の悅びも此の太刀の因緣厚き小豆長光。勝賴公へ聟引出甲斐と越後に信濃添へ。三國一ぢや親と子になりも鎭まる時津風。土も動かぬあらかねの替り治まる大日本。地から生物木に登物。百億萬歲末掛けて。何から何まで皆繁昌萬々。歲とぞ祝ひける。

心中宵庚申

近松門左衛門作

地花のお江戸へ六十里梅の難波へ六十里。百二十里の間の宿都離れて遠江。濱松の一城主淺山殿の御在國。町屋々々の賑ひ商賣にたゆみなく。武士は弓馬に怠らず隔日隔日のお鷹狩。上一人の勵みよりフシ犬も油斷はならざりし。お家相傳の弓頭坂部鄕左衞門。六十の歳の夜晝なく。お側去らずの野出頭今日も鷹野のお供にて。留守の屋敷は大手の見付お鷹歸りの御入りとて。晝當場より先案内給人若黨お出入の町人迄。降つて湧いたる忙しさお成座敷の替へ疊。床に掛物臺子の埃掃いつ拭うつ。お庭の掃除どつさくさ挽き薄茶挽く。茶道は引木に揉まるゝ。けに誠忘れたりとよ。門の盛砂小者はフシ箒にもまるゝ。臺所の板許には青物の淵魚鳥の山。献立は三汁九菜死らた肴を吟味の役人。こりや目出鯛を三枚におろし山葵は八百屋が請取。南京の皿蒔繪の家具フシ善盡したる饗應なり。地組下の二番ばえ金田甚藏岡軍右衞門大橋逸平。打揃うたる血氣盛り立てかけのんこの頭がち。据はお留守の勝手見廻り。詞いづれも御苦勞御苦勞。今日お鷹野より直ぐお腰かけらるるとな。急なお成でさぞ取込。お料理組もう出來たか早し〳〵。我々も幸ひ非番。用あらば遠慮無用と挨拶口々。地座敷口より小姓山脇小七郎。生花屑を花盆に。花の露うく前髪ざかりする〳〵と立出で。詞これは〳〵日頃の御懇意。お揃ひなされての御出で。主人鄕左衞門さぞ滿足。只今の殿樣先代と違ひ。何かにつけて輕いお身持。壁に馬乘りかけし今日のお成。主人はお供我我が當惑掃除等もそこ〳〵。書院の筆架飾り石。生花も不調法ながら間に合するも奉公。地御内見の上御直し下されと詞も風も出過ぎざる。若衆と糠味噌のフシ味は屋敷に極りし。詞金田甚藏岡大橋何か〳〵。君のお手際僻事があらうか。さり乍ら人に心をつくさせ無下ない心が一つの瑕と地目面も明かぬ取込に頷で睨みつ袖引きつ。手の中つまむも一昔古い仕掛がフシ田舍なり。坂部鄕左衞門衣服の綺羅も世につれて。戒むるとはなけれども。上に從ふ木綿羽織に紺股引。鷹野出立の凛々しけにすた〳〵と立歸り。詞家來ども掃除は出來たか。ヤアいづれもお見舞過分。いやさ〳〵年は寄るまいもの。岩松村岩水寺の門前よりお暇請け。たつた一飛と思へども氣情も足も心ばかり。さり乍ら殿には今一こぶし遊ばしお入りあるぞ。急く事はあらない。地先づお献立を一見と長々と書付けたる。半ば讀みさし大きにたまけこりや何ぢや。詞殿の御

膳は一汁三菜と先達言ひ越す所。三汁九菜の魚鳥盡し。身が身上を板許で切りはたくか。地此の献立は誰が指圖と。以の外の不機嫌に。フシ天窓も光りちらかせり。小七郎しとやかに。詞憚りながら此の儀はお侍中の指圖ならず。二三日以前よりお長屋に逗留致し罷在る大阪の住人。靫油掛町八百屋半兵衞と申して。元は御當地遠州生れ私とは腹變りの兄。樣子あつて五歳の時大阪へ立越え。町人に奉公し商人の養子となり。今の親は八百屋伊右衞門。實父山脇三左衞門は私が生れし年相果て。當年十七年親の墓への年忌參り。私事も懐しく。召使はる御主人へ御禮も申したしと。逗留致せし兄半兵衞。商賣は八百屋殊更料理利。幸と今日のお献立を致させし不調法は私。地お目出度き折柄御機嫌を直され。兄へもお會ひ下されかしと恐れ入つたる謝罪に。主人の顔も打解くれば。これ半兵衞殿よき折のお目見え。お献立も仕直すため早う〳〵と

呼立つる。聲を力に兄半兵衞魂は武士なれど。三十餘年町人に業も姿も浸付きし。料理袴を假初に御前といへば氣も臆れ。臺所の板敷けつまづくやら滑るやら。はふ〳〵這ひ出で手をつかへ。詞お國の御家風も存ぜず。お献立を致せしは無調法。先達てお使に一汁三菜との御意なれども。大阪藏屋敷留守居がたの振舞でも隨分輕いが二汁五菜。結構には段々。朝鮮人の饗應御堂へも雇はれ。七五三五々三。山影中納言の家の切方。料理一通りは承り傳へし故。申してもお大名の膳部。よもや一汁三菜とはお使の聞き誤りと。いはれぬ念を入れ過ぎしは猶不調法。お好みの一汁三菜。地我等が手際できりきりしやんと切立て炊立て。鹽梅よしの御機嫌よき。御意を松茸つけ竹の子生にかはらぬ仕樣が祕密と。口もフシ料理の鹽梅かげん。詞彌左衞門打笑ひ。ムヽ山脇三左衞門が悴なれば身が爲にも家來筋。親の廟參奇特々々。幼少より他國に育ち。

當御代の御風儀知らぬは道理。料理は勿論。衣類諸道具すべて無益の費えお嫌ひ。上方でも風聞は無いか。去年十月高師山のお狩場。身が相役佐野文太左。始めての御供に縮緬の羽織を着めされたを。殿がじろじろ御覽なされ。縮緬は風にしぶき面倒な。重ねておけろ是をくれると御意なされ。お手づから下された召替の木綿羽織。さしもの文太左はつと赤面。其の後此の事を工夫すれば。お供に參る文太左。縮緬の羽織を着めされうやうがおりない。豫て文太左にお謀し合せ。諸家中の見る前木綿羽織を下されしは。美麗御停止とはなく。自ら奢を止むる一家中への御意見。それを察せぬ御家中の二番ばえ達の態を見よ。木挽町堺町の役者から釣を取る衣紋付。己が身の分限も知らず。一概に殿がお吝い〳〵と勿體ない蔭言。綾錦を召されてもお大名。綿服を召されてもお大名。齋藤別當實盛が最期に。錦の直垂は着たれども。源氏を

捨て平家へ返り忠の武士。心は汚れし襤褸同然。又佐々木源藏は二君にも仕へず襤褸の肩を据に結び。賴朝の御代を待ちしは心の錦。今の武士の美麗を好むは實盛。佐々木が遺風を芳しと思し召す此の殿の御行跡は。下を寛ろげ世を豐かに。賣買を安くせん爲の御儉約。武士は元より町人の其方人等迄此の恩を忘るゝな。朝夕の御膳部も一汁三菜。酒も數を定められ三盃限り。今日の御饗應も麁相程御意に入る。献立も書くに及ばず。コリヤ食は赤まじりの古臭いをすつくりと炊かせ。かき立汁に小菜のうかし。向づけはおろし大根鰯膾。燒物は室の酢入。それも二つ切り。引いて古茄子の香の物。扨平にはヲヽそれよ。家來に持たせし山の芋地是へ〳〵と呼出せば。五尺許りの山の芋中間二人が指荷ひ。料理場の板敷へフシ孤を放して舁き上ぐれば。半兵衛横手を打ち扨ても副なし。御當地は御芋所か一生の見始め。詞大阪で見世物に致したら錢金の攫み取り。第一お家の吉相なぜと申すに。今日は殿のお成旦那の御出世追付け。地山の芋から鰻にお成りなされうと。輕薄ぬらくら口に鰻の油とろりと乘せかくれば詞されば〳〵今日の仕合。手下の百姓殿のお成を聞付け。身が歸るさの道料理にせよとてくれしは幸ひ。今日の御馳走これ一種。お身が自慢の庖丁隨分切形を出かしてくれ。地賴む〳〵と詞の下お成門の貫の木の音。すは殿の御入りとひしめけば。鄕左衛門も次の間に袴改めお迎へとて出でければ。山脇小七岡大橋フシ金田も續いて急ぎ行く。半兵衛料理に心はせく打つたり舞うたり身は一つ。薄刃押取り五尺の大芋三寸ばかり切り調へ。つい皮むいてちよきちよき〳〵。葛醬油の出し鹽梅煮かたは急ぐ殿のお顏も拜みたし座敷口より差覗けば。御城主も股引がけ上段に着き給ふ。一間隔てて近習の人々鷹匠犬引列卒足輕。玄關の小庭に居餘り。臺所口を押通り長屋長屋を休息場。奥には料理の勝手を急ぎ。主鄕左衛門殿の御膳目八分に持出づれば。コハリ思ひ〳〵に給仕の作法。詞お汁がかはるかへ食繼。初献の肴は鮹の足一切當の引重箱。二献めも御機嫌よくお盃が替つて平の蓋。有がたがための臺引物。定めの通り御酒三献吸物は殼蜆。思ひの外の無馳走に上には御悅喜ナホス納めの盃。坂部も丁ど下されてフシ首尾よく。御膳は取れにけり。地鄕左衛門板許に立ちはだかり半兵衛を睨め付け。詞今日の料理は芋一種。でつかい所をお目にかくるが御馳走。どのやうに切ればとて五尺餘りの大芋。一寸足らずに切碎く言語道斷。手打にする奴なれども他國者といひお成の時節。地屋敷に叶はぬ出て往せべいと。息詰つたる腹立はフシ詞ずくなに凄じし。詞半兵衛膝も動かさず。是は旦那の御意とも覺えず。今日のお料理は隨分切方に氣を付け。心一杯出かせしと一分自慢。御褒美はなされいで存じの外の御叱

り。總じて貴人大人へは何に限らず斯樣の珍しき物お目にかけぬが料理の習ひ。大名高家は大樣にて。一度お目に觸れられては澤山に有る物と思召し。隣國のお出會にも。身が領內には珍しき山の芋有りなどと。お國自慢のお咄の上。ふと餘國より御所望の時跡へも先へも行かず。國中を尋ねても有合せず。自ら殿樣を嘘つきにしてのける。そこを存じて常の如くの調味は。旦那へ御奉公と存ぜしに。地御機嫌に違ひしは身の不仕合。如何やうとも御存分に遊ばせと。どこやら詞のひつぱなし殘る所が武士氣質。鄕左衛門口あんごりムヽ。詞こりや尤。イヤ尤。誤り申したく。其方が言ひ分眞直に。地御前へ申すがまた御馳走。やれくく。山の芋で足突いたと。フシどつと笑へば。はやお立ちとお供廻りが振出す毛鎗。臺笠立傘大鳥毛。乘物引馬嘶き立ち御城內迄お禮の御供。鄕左衛門もお輿に添ひ。暮れぬ間の御歸城と氣も夕陽の

三重へ入日影。フシ座敷の仕舞は地侍がた庭の締りは中間小者。役目々々に立別るゝ。臺所には半兵衛一人庖丁眞魚箸薄刃組板取り片付け。煙管くはへて吹く息に。フシ鐵拐が皺をのばしけり。地二番ばえどもはらくと立寄り。詞拙者等は鄕左衛門組下の弓役ども。お身は山脇小七郎の舍兄とな。早速の無心。弟の事を賴むも馬鹿らしけれど。前髮姿にしんぞ爪先よりぎりく迄打込み。每日々々しづ心なき玉章。奉書の代も五百目ばかり。身上を紙に打込んでもつれない小七郎。兄貴是非所望申したこれ。軍右衛門が坐り申して手をつかへるこりやさ。拜み申すくれ申せと地たぐりかゝれば甚藏逸平コリヤ半兵衛。詞おゝと言つたらむつかしいぞ。外方にも惚れてがある。奉書代は愚かな事。君にかゝつて一貫五百が外郞積んだ此の甚藏。弓矢八幡身にくれろイヤサ地此の逸平にくれろうと。耳際にかみ付く如く惡風吹きかけ眼も眩み。フシ前

後忘するばかりなり。煙管も放さず半兵衛大胡坐。詞御城下の習ひ衆道御法度。おゝといへば弟が首が御座らぬわいの。イヤサ當國は女の淫奔は下々迄御政道。衆道にはお構ひなし。三人の內どれへなりと。地魂すゑて返事せろと フシもやつく後に。小七郎是迄受けし文一抱へ半兵衛が前に置き。詞兄ぢや人の手前恥かしながら地かう。成る上は隱されず。數ならぬ私に御執心とは振袖の身の思ひ出。忝いは山々なれど。一人ならず彼方此方の文の數。無下に返すも情知らずと請取つては置きながら。一通も封を切らぬがいづれも樣への立分。誰方に從ふ心もなし。詞兄半兵衛の存じられし事でなし。詞此の文封のまゝに御返辨。思し切つて下されと。男色立拔く フシ詞の優しさ。地其の意氣方に猶なづむとしみたるう取廻せば。詞半兵衛見兼ねてハテサテ聞分けもない方々。形こそ町人心は侍。拙者が目利で惚れての內へやりませうコリヤ。小

七郎。地装束せいと心を目にて知らすれば。あつと心得頷きて　オクリ部屋に。入れば半兵衛多くの文の上書讀み。詞ハア丶皆各の名書き。此の一括の上書に。小一兵衛とは誰が事御存じないかと問ひければ。三人とも口を揃へ。其の小一めは此の屋敷の中間。へ丶エ慮外な下司めが。地やりをつたわとえせ笑ふ。詞イヤさうでござらぬ。此の道に高下はない。其の小一兵衛も呼出し並べて置いて念者に頼む。イヤ〱下司め。身なども同座に置く奴でない。地殊に留守やら面も見ず無用々々といふ所へ。山脇小七郎白小袖に淺黄上下。フシ覺悟極めて座に着けば。半兵衛は取敢ず肴臺の三方に。抜身二振弟の前に置き。詞惚れ手は四人惚れられ手は弟一人。何方へ進ぜても残る三人の恨み。此の兄は他國住居行く末も氣遣ひ。いやと言はさぬ御所望。歴歴のお侍町人風情に手を下げてのお頼み退引ならず。弟に覺悟させての死装束。表面ばかりの戀慕でなく。未來迄も小七郎不便と思召すならば此の場にて刺違へ。人の構はぬ未來での念者若衆。サア弟をやる地誰方なりとも兄弟の契約々々と三人を睨付くる。思ひがけなき抜身の盃。死装束に喫驚してへゝん。〱と咳に紛らし身ぜせりし。フシぐつと言ひ手もなかりけり。道具屋御門脇の長屋より紺のだいなし。据七の圖迄引つ褰げ一振り。振つて振出すは。戀にこいとや小一兵衛三人の鼻先。尻つき出して　フシかつつ蹲び。詞兄御半兵衛様のお手前も。シヤお恥しいぺいながら。小七様にとんと打込み二合半の盛切お臺。喉につまつてぎつち〱辛いこんでごはりまする。今日君がお情をつん出して。未來ではやつがれめを。お念者になさるべいとは。有難いやら。悲しいやら。セ丶〱〱〱。唐辛子を五つ六つ喰つても。こんな熱い涙は。出ませぬでごはりまするで。ごはりますると　地フシ白刃を取つて立寄れば。小七郎も引寄せてすはやと見えし刀の中。半兵衛飛入りコリヤ。狂氣したか小一兵衛と二人を左右へ引分くる。詞コレサ上方のお旦那。麁味噌汁の御恩にかへたお若衆。爰で死なねば心中が見えまらせぬ。是非に地死なせて下されと立上るを引伏せ。詞男氣見えた。小七郎に誠の惚れ手は其方一人。爭ふ者があつてこそ大事の弟を地殺さうずれ。爭ひ手の無い若衆山脇半兵衛が挨拶。向後兄分に頼んだぞハ丶はつと悦び小一兵衛。詞お侍方と同座のならぬ奴めが。武士に劣らぬ魂ゆゑ。結構なお若衆の兄様とは忝い〱冥加ない。手付にちよつとほてくろしい事御免〱。半兵衛様も氣をお通しと地べつたり抱付く紺のだいなし白無垢に。フシ黒白粹の兄弟なり。詞岡軍右衛門は法界悋氣くわつとせき。コリヤ下郎め。地見苦しい置きをれと肩を取つて引退くれば。詞コリヤ何なさるゝ。ムヽ聞えた。お取持の御酒が過ぎたか。ム丶合點々々。流

石二腰のお心掛は格別。柔術の稽古遊ばすな。不調法ながらお相手と座興にもてなし。ずつと寄つて一當あて引つかづいてうんと投げ。ハヽ〳〵〳〵。こりや麁相でごはりまするで。ごはりまするとそらとぼけ。甚藏逸平堪られず一度に寄つて胸ぐら掴み。ぞんざいなる小丁稚め傍輩をなぜ投げた。返報に砂噛らせんと引立つる。扨々お心掛のよい。お前方もこりや柔術か。どりやお相手と立つ拍子。二人が息合はつた〳〵と蹴返せば板敷より眞逆樣。ハヽヽヽ〳〵〳〵こりや又麁相。御免御免といふを機三人ぐず〳〵起上り。エヽどんな所へ給仕に來て酒盗つて尻踏まれたと。袴の腰に痛い顏。悋へてこそは歸りけれ。半兵衛ぞく〳〵小氣味よく。扨も手際小一兵衛。我は他國便なき弟が事頼む〳〵。今日の料理の御褒美に。二人が事を旦那へ訴訟。權柄晴れて念頃さする其の仲立は半兵衛が八百萬代の神かけて結ぶ。契りぞ 三重

中之卷

五月雨程戀ひ慕はれて。今は秋田の落し水。軒の玉水とく〳〵。ござれしげく。ござれは。名の立つに玉水近き。山城の。村は上田に家富みて。庄屋に並ぶ茅屋根も内暖かに下女。並んでつむぐ綿車。手廻りもよくいくはへか庭に五つの穀。積む蓬萊の島田氏。平右衛門といふ大百姓。妻は去年の秋霧と消えても殘る娘二人、總領かるに入聟を鳥飼より呼び迎へ。妹ちよも大阪に歷としたる聟取つて。身の入前は上田の田畠の世話をやきやめば。萬事限りの俄病。姉のおかるは側離れず臺所には女子ども。何と今朝から仕事のはかもいたではないか ちと休まうお竹お鍋と呼びつれて。思ひ〳〵に立出づる。親のすや〳〵假寐の隙を窺ひ女房は。心忙しく奥より立出で。これ〳〵臺所に人が一人も無い。連合平六殿は淀川筋。新田開きの御訴訟に。大事の病人振捨てての京上り。男どもは皆野へ行くエヽ憎い女子ども。我が見る前ではちよびかはして。ちよつと立てば早どこへ。大切な主の煩ひ業一つ暖めうともせぬ。下々には何が成る園爐裏の下焚き付けぬか。次郎よ〳〵と呼び廻す門の口。駕籠舁きすゐて申し〳〵。大阪の新靱八百屋伊右衛門樣からと。駕籠の戸明くれば打萎れ目許しぼよる。縮緬の。二重廻りの抱へ帶涙の色に染めかへて。泣く〳〵出づれば駕籠の者。確かにお届け申したと言ひ捨て歸るも足早なり。親の家さへ女氣の。敷居も高く越え兼ねて佇む有樣姉は見付け。ヤアおちよおぢやつたか。定めて御病氣のお見舞ならめ。ようこそ〳〵何故駕籠の衆止めやらぬ。餘所外でもあるやうに隔心がましい。酒一つ進ぜて往なしやいの。それ呼戻しやと。いへども妹は差俯向き。歎けば共に歎かれて。チヽ道理々々疾う知

らせんと思ひしに。此の病では死なぬ。氣の取り惡い舅姑持つたおちよ。聟半兵衛も忙しい時分。聞いたりとも自由に來る事は成るまい。案じさするも不便沙汰するなとの。病人の氣にも逆はれず。地高麗橋の伯母樣常盤町へも知らせぬ。コレ詞氣遣しやんな京の御典藥に變へてからめつきりと藥も廻り。今朝も粥を中がさに三よそひ。病は請取つて直すとのお醫者樣の請合は。本復も同じ事。地其方の顏御覽なされたら。いよ／＼父樣の病はすつぺり直らう。嬉しい／＼お目にかゝりやとありければ。詞エヽ父樣はお煩ひか知らなんだ／＼。何時からの事でござんする。ヤ何ぢやお煩ひ知らぬか。そんなら其方何しに來た。何悲しうて泣くぞ。地ア恥かしや又去られてと スヱテ顏押隱し咽び入る。姉も驚く顏に血を上げ。詞なうおちよ。五度三度の聟入嫁入も世にある習ひとは言ひながら。惡い事は手本にならぬ。恥かしい恥かしいと口でいふばかりが恥を知つたと言はれうか。地そなたもかる／＼三度の嫁入。尤始めの男道修町伏見屋の太兵衛殿。心不情に身代を持ち崩し。佇みもないやうに成り果て飽かぬ別れ。其の次は死別れ互に離はなけれども。詞人は其方の辛抱が無い故に。去られた／＼と非難つけ。此の度の嫁入も追出さるゝに間はあるまい。忘れても島田平右衛門が娘の風下に居るなと。娘持つた人々は寄合茶呑咄にも其方の噂。ま一度戻つては親兄弟。地人中へ顏が出されぬとは知り拔いて。火に入り骨を碎かるゝとも歸るまい。ヲヽ必ず去られて戻るなと。念に念を番うた今度の嫁入。よう戻りやつた父樣お聞きなされたら。お悦びなされうぞお顏見せる折があらう。必ず聲高に物しやんな。詞して半兵衛が暇の狀取つて戻りやつたか。いや跡の月半兵衛殿。父御の十七年の弔ひの爲。生れ故鄕遠州の濱松へ。戻り次第道具に添へ暇の狀は跡から。先づ往ねと譯も言はず。地お腹に四月唯もない身を。姑御が手を取つて駕籠に引きずり乘せ。酷い辛いとばかりにて スヱテ歎くを見れば痛々しく。子の有るものを夫の留守隙くれる姑。心に一物あるわいの。詞伯母聟ながら其方の親分。高麗橋貳丁目川崎屋源兵衛殿差置いて。直に爰へ突付ける仕方も憎し。よい／＼こちの人が京からの歸りを待つて詰開かせ。大抵で暇は取らぬ。地とはいへ世上の女夫仲。去るといふ事誰こしらへ憂い目をさせる可愛やと。歎けばわつと泣出す聲。ア高い／＼障子の彼方とゝ樣の寢入りばな。泣くな／＼と言ひつゝも。傳ふ涙の血筋とて親は泣き寄り フシ哀れさよ。地平右殿御氣色今日は如何とつつと入る。同じ村の金藏おちよはちやつと姉の陰。見付けられじと身を隱せば。詞アヽ隱れまい隱れまい。たつた今堤の茶屋で。大阪へ戻り駕籠の咄で聞いた。おちよ殿目出たい。去られて戻らしやつたげなと。地口も氣儘の

途方なし。おかるははつと餘所よりも親の聞く耳憚りて。詞金藏樣嗜ましやんせ。聾はなし聲びくに言うても濟む事。ちよは去られは致しませぬ。親の病氣を見舞の戻り。地奧にはとゝ樣すや〳〵と寢てござる。目を覺して下さんすな。低う〳〵同じくは往んで貰ひ度いと。氣の毒がる程猶聲高。詞親に寢てか面白いなんぼ隱しても詮な事聞いてゐます。おちよ殿幾度でも去られさつしやれ。あれこれの聟達が踏み廣げた田地でも。百姓の女房には大事ない。詞俺が持つて一夜さも淋しいめはさせまい。去られて戻つた悲しいと氣を腐らし。必ず女房振損うてもらふまい。詞去ろ春貰ひかけた時。俺が方へござればよいに。惚れかかつた一念脇に足は止らぬ筈。入るまい入るまい戻るといふも。此の鼻に緣が深いからぢや。親仁殿にいひ込んで今日からでも我等請込む。地姉御大事にかけてもらひましよと。喚けば二人は死に入るばかり。冷

す心の奧に手を打ち。かるよ〳〵あい〳〵あい。詞南無三親仁起きられた。金藏が見舞うたといふて下され。地又明日御見舞申さうと歸ればかるは腹も立ち。詞これ〳〵去なずとちよをお貰ひなされぬか。地いやいやいうても大事の緣組。日を見て申し出さうと フシへらず口して立歸る。地とゝ樣お目が覺めたかと。姉が障子を明くる跡よりちよもおづ〳〵差覗けば。夜着に凭れて起臥も。スヱテ惱み苦しき老の坂。詞狩りすとはなけれども。落ちくる肉に顏荒れて フシ見交す親の顏と顏。地堪へ兼ねてなうとと樣。お藥あがつてま一度。達者に成つて下さんせと。思はず知らず聲立ててさめざめ。歎き伏し轉ぶ。父も見る目に涙ぐみ大事ないつつと來い。つつと寄れと腰近く。詞又去られて戻つたな。子に迷ふ親の心ゐながら千里萬里も行く。ましてや一つ家の内。寢ても寢られず最前より何事も皆聞きしぞ。地そも我ながら斯くも心の變る物

か。五十といふ年の内は行歩心に任せずながら。心は若かりし昔に變らず。氣も強く義理にも引かれ。地己れ重ねて去られたらば。顏も見るまじ物いふまじとの我もありしが。六十に足踏ん込んでは年ばかり寄るでなく。月も寄り日も寄つて病には絡まる。地身の衰ふる程彌增しに案じらるゝは子の身の上。三度は愚か百度千度去られても。去らるゝに定まりし前世の約束と思ひ諦むれば。悔みもせぬ憎うもない。笑ふ人は笑ひもせよ。譏らば譏れ指もさせ。子の不便さには代へぬぞと老の。繰言息弱り。詞半兵衛めは遠州へうせて留守の内とな。其の留守合點。萬一うせたりとも物いふな顏も見な。彼奴が身上百倍の所へ嫁入させる。苦に持つて煩ふな。地なう前下々は野へ行つらん。茶沸いてちよあに中食させてたもれやと。餘念なき父の顏。姉は悅びコレおちよ。詞案じたとつ樣の御機嫌日本一。お側離れず御介抱しや。地胸が開け

たと。障子を引立て〳〵 ギンオクリ 勝手へ。出づる フシ 折こそあれ。地 門に物まう頼みませう。何方と答へ入るを見ればちよの夫の半兵衞。扨こそ緣を切りに來たと。思ふ心に口どまくれ。去狀樣ようござつたと。いへども何の氣も付かず。旅出立のまゝ笠取つて沓脱に草鞋の紐。心も解けてヤおかる樣。詞 何方も變る事あるまい。國許へ參る時分は事急にて知らせも致さず。氣のつかぬ親ども留守の內にもさぞ御無沙汰。拙者も無事に遠州より只今罷歸ります。フウそれはな。御奇特にようお歸りなさるゝと。地 顏を背けて鼻あしらひ。男ども女ども誰ぞお茶でも上げぬかと。內にゐぬ人呼立ててむやくし顏の色合を。見て取りながら半兵衞。立ちも立たれず仔細は知らず。互の心隔ての障子さつと明け。姉樣お藥暖めてと出づるは女房ヤアおちよ。地 爰に居るかを聞捨てて物をも言はずつつと入り。障子をはたと フシ 引立てたり。詞 おかる樣あれ女房。いつから爰に 地 何故物は申さぬと駭けども。詞 物いはぬ筈聞き度くばこなたの心にお問ひなされ。人の知つた事のやうに。ハヽヽ、可笑しい事ではあると 地 そら笑ひ取つてもつかれず。ムウムウとばかり差俯向き フシ と胸。突くより詞なし。地 奥には親の息苦し聲。詞 夜短かで日の永いは老人の身によけれども。それも息災でかけ廻る時の事。病みほうけて日の長いは。扨々退屈で暮し兼ぬる。ちよよ閑な本下して何なりとも讀んで聞かせ。かるは何處に來て聞かぬか。地 我が伽せぬかうせぬかと。せはしく老の氣の苛立。あい〳〵爰に仕事しながら障子隔てて聞きますと。流石半兵衞を捨てても立たれず障子の側に立寄れば。ヤ親仁樣御病氣か。容態見たしといはんとせしが。ぶあしらひなる氣をかねて。詞を止め折を待ち フシ 共にすり寄り聞き居たり。地 ちよは數多の本取出し伊勢物語塵劫記。詞 とゝ樣の側にあるまい綱島の心中とござんする。徒然草平家物語なうとゝ樣、どの本がよからうぞ。姉が讀みさいた平家物語。祇王が段を聞かう讀みやれ。誠に紙を附けた所があると押開き。母の刀自泣く〳〵又教訓しけるは。天が下に住まん者兎もかうも入道の仰は背くまじき事であるぞ。千年萬年と契るともやがて別るゝ仲もあり。あからさまとは思へども存らへ果つる事もあり。世に定めなき物は男女の習ひなり。地 ほんにさうぢやと讀みさして。我が身にあたる フシ 憂き涙とゞめ。兼ねてぞ泣きゐたる。地 父も不便に目をしば〳〵昔も今も人の氣の。移り易き世上の習ひ。詞 コレ姉も聞け。平家物語をちよが身に引較べていふ時は。清盛入道は八百屋半兵衞。祇王はちよが身の上よ。その清盛が心變つて追出す。エヽ憎や清盛去年聟入せし折から。不調法な娘を進上致した。氣に入らぬ事あらば打毆き縛り括つても直させ。末々迄も見捨てず添うて下されかし。此の

度共に三度の嫁入。在所は一所どころにて。又歸つては平右衛門再び人中へ面が出されぬ。娘は氣に入らずとも我を不便と面倒見て必ず去つて給はるな。ヲヽ去るまい〳〵御臨終の折からは。先輿は平六殿。後輿は此の半兵衛。眞實の子を持つたと思召せ。今こそ町人八百屋の半兵衛。元は遠州濱松にて山脇三左衛門が忰。武士冥利商賣冥利。ちよは去らぬ氣遣するな。アヽ忝いと手をつき。地頭代官の其の外に。一生下げぬ頭を下げし互の契約。詞物忘れする老の身にも。其の時の嬉しさは骨身に浸みて忘れぬもの。若い形して忘れしか忘れぬ諺・據。其の身は實父の弔ひにかこつけ。詞遠州へ出かけし其の跡で姑に追出させ。養子の親に我が罪を塗付くる不孝者。義理も法も知つた奴か。地おれが何の武士の果。觔節の削り屑。人でなしめに縁組んであたら娘を捨てたな。ろくに吟味もせなんだかと死んだ母があの世から。恨みめされう口

惜しいと愼み深き堅親に。惡口交りの口説き泣二人の娘も正體涙。兎角男に縁の無い生れ性かとばかりにて スヱテ聲も惜まず泣きゐたり。地扨は女房去られて愛へ戻つたかと。始めて驚く半兵衛胸に樹石据ゑたる如く。呆れ返つて涙も出でず暫し詞もなかりしが。詞エヽ情ない女房。たとへ一晩一宿のつき合にも。人の心は知るゝもの。地まして足かけ二年の馴染。子迄なしたる夫の心。知つても言譯してくれぬか。親仁樣の御立腹申し開くは知つたれども。[illegible]罪を養ひ親に塗り付くる。不孝者との一言からは。ゆめ〳〵存ぜぬ。[illegible]ぬと申しわくる程不孝の上塗り。親仁樣につがひし詞違へぬ武士の性根を見せる。地[illegible]見て疑を晴れ給へ[illegible]り。おかるは早く縋り付きうよも驚きなう悲しや。こな樣に[illegible]走り寄り。とめてもとまらぬ[illegible]み上げますと。騷げど騷がぬ平右衛門 詞[illegible]

身が居るとは知つての當て言。耳に止つての自害か。ヲヽよい分別。自害して死んだらばあれ見よ八百屋伊右衛門夫婦。嫁を憎んで去りしゆゑ子は面うちに自害せしと。養子に惡名難をつけ。口々に取沙汰せば手柄々々。地とめるな娘存分に自害めされ見物せんとの一言に孝心深き肝を拉がれ。ハアさうおや誤つた眞平と。スヱテ額を摺り着け身を悔み。[illegible]御殿らよも同道いざお立ちやれ。エイ冥加の私を女房に持つて下さんすか。ヲヽたとへ死んでも身體も戻さぬ。[illegible]迄女夫々々。アヽ忝い。地父樣姉樣も悦んで下さんせと。はや締め直す抱へ帯先をたぐつてにじり寄り。父ははらはら涙に咽び。詞半兵衛これ見や此のしどなさ。歸らんといふ嬉しさに。親の病をかとも言はず。[illegible]悔しさを。[illegible]しての[illegible]まい。[illegible]つ親は老[illegible]

らず。黄泉の底迄も心にかゝるはもと一人。明日が日限塞ぐとも。姉夫婦にきつと言ひつけ。十二十の金の取違り。いつ何時でも事缺かせぬ。隨分商賣手廣くして親が事を フシ頼み入る。 契約の盃せん銚子銚子。姉よ酒を切らせしか親子の仲に遠慮は無い。酒と思ふ心が酒燗鍋に水もて來いと。盃の出る間も焦るゝは子ゆゑの闇。引受け〳〵ずつとほし。 詞半兵衛差さう親子夫婦が水盃。 地差いつ差されつ汲めども盡きず飲めども醉はぬ水酒盛。不便と思ふ親の氣は フシ餘りて色に出でにける。 地命があらば又逢はう死なば親子の末期の水。未來は八功德池の水此の世に思ひ置く事無い。二人ながらお往にやれ〳〵。さらばと夜着に打凭れ再び詞も交されぬ。 色地親の心に身を恥ぢて姉につど〳〵言ひ交し。思ひを述べて立出づる。 フシ暫しと父は。起上り。 詞姉なう重ねて戻らぬため。親うて内で門火焚け。忌ま〳〵しいとは思へどその親に從ふ焚火の煙。目出たう宴から焚きますと。庭にこがるゝ下もえの果は夫婦が無常の煙。灰に成つても歸るなと其の一言を此の世の名殘止る名殘行く名殘長き。名殘と 三重

下之卷

〽夏も來て。フシ青物見世に。水乾く。莚庇によけられし。日蔭のちよが舅の家は新靭。油かけ町八百屋伊右衞門。淨土宗の願ひ手了海坊の談義に打込み。開帳回向の世話やき仲間。見世は半兵衛に打任せ大阪中の寺狂ひ。女房は内外の世話に五つも年ふけて。朝から晩迄氣は苛立て。 詞養子の半兵衛は藏にべら〳〵何してゐやる。見世の賣物がしなびる。ヤイ松め。きり〳〵と水打ちをろ。コリヤさんよ。糊かひ物が干上がろがな。とりへて疊んで打盤出してちよきちよきと打て。ヤ其のちよき〳〵で夕飯のおねばきざめ。コリヤ松よ。今日は五日宵庚申甲子が近い。二股大根のけて置け。 地ソレさんよ茶釜の下が燃え出ると。商賣が八百屋とて八百色程言ひ付くる。口せかせかとせはしさは フシ大晦日の生れかや。 詞母に似ぬ甥の太兵衛が市通ひ。走りの付の子片荷には獨活生姜青山椒白瓜二つ。 詞これはさつても早い事でごんすよの。おれが戻るは。いつも遲い事でごんすよの。 詞コリヤ野良坊。今朝卯の刻から内を出て。何時ぢやと思ふ晝下り。何處で鼻毛をよまれてゐた。旦那衆の誂へ物日覆ひしてさへ傷む時。高い物を天日干し。 地商賣の[illegible]くらはせ魂に覺えさせんと取付けば。半兵衛走り出で母ぢや人のがこりや尤。 詞コレ太兵衛。どこにのら〳〵やつてゐた。杜町の徳屋から竹の子取りに矢の使。阿波座堀の丹波屋から栗おこせというてくる。朝倉屋からは青山椒内には切れる返事に困つた。大儀ながら母ぢや人の機嫌直し。つい一走廻つておぢや。ハテ私ぢやとて何の惡い所に這入つてゐましよ。横町の山城屋から呼

込まれ二つ三つ話したばかり。それも外の事でござらぬ。此方に誰やら逢ひ度いとて。今朝から爰に待つてゐるといふてくれとの言傳。地私や得意を廻つて來う此方もちよつと行かしやれと。誂へ物を取揃へフシ荷拵へして出でて行く。半兵衛は山城屋と聞くよりおちよが來たであろ。氣どられまいと空とぼけ。ハア山城屋からは何の用。どりや一寸いてかうと走り出づるをむずと捕へ。詞息子殿こりやどこへ。イヤ山城屋から逢ひ度いとチヽその山城屋合點。成りませぬ。アノぬつけりとした顔わいの。こちと夫婦は何にも知らぬと思うてか。氣に入らいで去なした嫁を。遠州戻りに在所よりよう咬へて戻つたな。常盤町の従弟が所に預けて置き。商賣にかこつけ。間がな隙がな女夫こつてり俺が知らいでおこかいの。さぞ俺が事護りやつつろ。十五年世話にした。親の嫌ふ女房に隨分と孝行つくし。親には不孝つくしや。地恩知らず

めと疊叩いて喚きゐる所へ。青布子の西念坊案内なしにずつと通り。詞熊野屋の權右樣から先達のお約束。宗味が刻鐘の開眼粗相な非時致します。講中皆お揃ひ旦那寺もとうお出で。御夫婦ながら 地只今と。言ひ捨て歸るそゝくさ坊主。フシ未來賴むはあぶなもの。詞アレ親仁殿。熊野屋から呼びに來た早よ行かつしやれ俺や行かぬ。地きり〳〵さしやれとつこど聲。親伊右衛門は後生一遍。詞ハレ嗅何を喧しい。又してもても〳〵。半兵衛さへ見れば敵のやうにいふ人ぢや。世間する若い者呼びに來まいものでもない。少々の事は聞き遁しにしやいの。ソレ其の結構過ぎたから。親を阿呆にしゐるわいの。現在俺が甥の太兵衛を差置き。赤の他人の此ののら殿に。家屋敷やる此の母邪は少しも無い。コレ嗅。それは誰も知つた事今更檢べる事かいの。そのよな腹の立つ時は念佛が藥ぢや。兎角如來の御方便。修羅燃す其方を呼びに來るも彌陀

如來參るこちとも彌陀如來。地機嫌直しやと宥むれば。詞イヤこち女夫が出ていて。跡へおちよを呼入れ。留守の間でほたへさす事は成りませぬ。此方一人參つて。私は俄に目が眩うたとなりと頓死したとなりと問に合ひにやらつしやれ。コレ嗅。たつた今西念坊が見ていんだわいの。此の伊右衛門に嘘つけかア勿體ない妄語戒。此の中さゐるお寺で五戒の割口說聽聞した。三百戒五百戒もつゞまる所は赤貝に止るとのお談議。半兵衛が叱らるゝも貝の業。地其方に俺が意見するも貝の業。一蓮託生の園のお同行とフシぢやれて機嫌を取りければ。詞そんならマア此方參らしやれ。此の樣な瞋恚の燃える時に念佛申せば地咽にすく〳〵立つやうな。心靜めて跡から參らう。エヽかてゝ加へてあた鈍な念佛講。こんな時はめかり利かして延したがよいわいの。ほんに〳〵こちの同行に。氣轉の利いたが一人も無い。と怖い目知らぬ我儘たら〳〵。チ

[illegible]死に行く跡からおちや。詞佛法と萱屋の雨は出でて聞けと。外へ出れば又有難い事も聞く。此の度生玉大寶寺の開帳に案山子を飾られたも。越後の川中島の四段目から出た事ぢやけな。こんな事も出にや聞かれぬ。地ア、有難い南無阿彌陀佛と。フシ輪數珠くりくり出でにけり。地半兵衛一言の誓もせず。スヱテ涙にくれてゐたりしが顔振上げ。詞申し母じや人。今めかしい申し事ながら。武士の釜の水で育ちし此の半兵衛。廿二の年から御面倒に預り。一人の甥御をさし置き家屋敷商賣とも。私へお讓りなさるゝ御高恩。肝に應へて空にも存ぜぬ。御恩の母の氣に入らぬ女房なれば。私が離別致してこそ孝行も立ち世間も立つ。所に此の度國許の留守の間に。八百屋半兵衛が母が嫁を憎んで姑去りにしたと沙汰あつては。萬々ちよめが惡いになされませ。判官贔屓の世の中お前の名ほか出ませぬ。母の惡名を立て、若い者が人中へ面が出されませうか。親仁樣にも面目失はすな。爰が一つの御訴訟。少しの間と思召し蟲を殺し、美しうちよめをお入れなされ。其の上にて私が。物の見事に去狀書いて暇やります。ホヽそこが男のかうけん。貴人高位の娘でも夫が去るに何と申す。時にはちよめが姑への恨みもなくお前を慈悲ぢやと言はせ度い。十六年以來たつた一度の御訴訟。地老少不定の世の中たとへ私が先立つても。如何なる跡のとひ弔ひ百萬遍の御回向より。聞入れたとの御一言。智識長老のお十念を授かる心とばかりにて。女房の親と我が親と世間の義理と恩愛と。三筋四筋の涙の絲たぐり出すが如くなり。母はいやりと笑顔して。詞ム、思ひ合うた夫婦合。誠らしうは思はねど嘘に涙は出ぬもの。眞實去るが定ぢやの。ハテお前を誑す程なれば此の御訴訟は申しませぬ。チヽ嬉しい嬉しい。俺も鬼には成りとむない。必ず去りやや。間に合いうてだましやれば。コレ此の母が今晩を、出刃包丁でもよいわやぞや。母殺すか女房去るか。それからは其方の勝手次第。アヽきらりつと穢土の苦が拔けた。此の世からの生佛とは俺が事。足輕う非時に參りましよ。地こちや未來まで退きさりせぬ閨の同行が。さこそ待つや焦れて。詞南無阿彌陀佛々々。さんよ其の形でつい供せい。ア南無阿彌陀。松よ、又見世の吊し喰ふな。アなまみだ。地南無阿彌陀佛に取交ぜて　オクリぶつぶつと言うてぞ出でにける。フシおちよがかさなる。五月の重き身ながら足許も。手もかろがろと帶の下。本フシ小褄引上げちよこ。フシノヽ走り。ハア久し振りで内を見た半兵衛樣。今日といふ今日廣う戻つたわいの。ア嬉しやと　フシ抱付けば。半兵衛ぎよつとし何として戻つた。詞たつた今母が出られた道で逢ひはせなんだか。さればいの、母樣の山城屋へ寄らしやんして。いつに無い門口からにこにこと。いとしや俺がちつとの思ひ違ひで苦

勞させた。今から往なそのいの字も言ふまいと心誓文立てた。娘は持たず天にも地にもたつた一人の花嫁。末期の水取らるゝも骨拾はるゝも其方。隨分孝行にしてたも。其方も俺がいとしがる。今お念佛に參るその内に早う戻つて。後に逢はう早う〳〵ととんと桶な物打明けたやうなお心。皆こな樣の言ひなし故と。ほんに男の御恩は戴いてゐてもあきはない。松よ久しいな。最早どこも蚊があるに。女房主がなければまだ蚊帳の吊手もなし。アノさんが居睡では袷どもの洗濯も出來まい此の戸棚の埃わいの。奧の傷も未だ塞がず。香の物も見廻たし 地何からせうやら氣がうろつく。ゐつけた所にゐて見よととんと坐りし茶釜の前。湯を沸かして水に成る フシ末知らぬこそ果敢なけれ。半兵衞とかゝの挨拶せず。詞コリヤ松よ。只ゐずとも藏へいて 地椎茸よれと人をのけ。おちよが顏をつく〴〵と見て涙ぐみ。詞エ、可愛や。利發のやうでも女心、母の詞を眞實と思ふか。いやる事が皆嘘ぢや。さり乍ら昨日もくれ〴〵いふ通り。佛法の端も聞入れ物の慈悲も知つた人。我が甥を差退け他人の身どもに。諸式讓る心からは根から歪まぬ是證據。人には合縁奇縁血を分けた親子でも中の惡いがあるもの。乘合舟の見ず知らずにも。可愛らしいと思ふ人もあり。人界の習はしかうしたもの。いとしぼなけに根からの惡人でもない母を。其方故に邪見者と言はせては、女夫の者が後生も惡い。母の機嫌よう一旦呼返し。改めて俺が手から去る筈ぢや。エエイ。すりやどうでも去らるゝか。ハテ肝潰す事かいの。死ぬるは二人が豫ての覺悟。養ひ親に貧もつかず在所の親の遺恨もなく。エヽ流石ぢや。見事に死んだと。未練者の名を取るまいため。母に向ひなんぼの詞を盡したと思やるぞ。書置も認め死裝束脇指も。荒布の荷へ卷込み。此の世の心がかりは微塵程もなけれども。金に詰つて死ぬる心中と。一口に言はれうかと。地是が一つの氣がかりとわつと泣けばわつと泣き。こなさんの孝行の道さへ立てば。私も心は殘らぬと。夫婦手を取り縋り寄り伏ししづむこそ道理なれ。母は念佛回向より。娘女夫の願以此功德氣がかり。餘所にゆるりとゐる空も見世さし頃によつと歸り。詞なうおちよ戻りやつたかさつきにも言ふ通り。ちつとした料簡違ひで物思はせたいとしやの。本の生如來が見たくば俺ぢやと思や。長うもない浮世に。酷い辛いめ見て何にせうないやの。コリヤ半兵衞。走りの出刃庖丁よう研がして置いたぞや。ちよいと觸つても劍ぢやぞ。ア南無阿彌陀佛 地〳〵と半兵衞に合圖の詞。娘は知らぬと思ひ込む。フシ是ばつかりは佛なり。女夫は機嫌顏。見れば此の世の本望と。思へど寂は雨と降る フシ涙隱すぞ哀れなる。詞コレ半兵衞何も忘れた事は無いか。日の長い時はえて物忘れするものぢや

よう思ひ出しや。おちよ泣かずと爰へおじやいの。まだ俺が怖いか。地爰へ〳〵と猫なで聲。アイ〳〵お側へ參りますと。立寄らんとする所を半兵衛取つて突退け。詞女房ばかりは親のまゝにもならぬ。身が氣に入らぬ。去つた〳〵出てうせい。コリヤさんも丁稚もよう聞け。半兵衛が女房去つたぞ。向ひ隣町内でも 母の浮名を立てたらば聞く事でない。地うろ〳〵せずと出てうせいと スヱテ眞顔に睨む目に涙。詞コレ嫁御おりや去らぬぞや。親のまゝにもならぬは女夫是非が無い。地俺を恨みと思やるなといへども何の返答も。泣入り〳〵しやくり泣き。詞ムヽ其の涙は。まだ母に恨みがありさうな。有るならいや聞きませう。イイエ。〳〵。お慈悲深い姑御に。地何の。〳〵と詞ばかりにてかつぱと伏して。泣きゐたり。詞チヽ汝がいふ迄ない。母ぢや人に何の恨み。地口手間入れる面倒なと。小腕取つて門口に引出す此の身も遂に行く。

後に〳〵と囁きて目まぜに宿の。フシ名殘の涙。弱る心を見られじと門口ぴつしやり見世ぐわつたり。鳴るは六つか早初夜か。時も時分も六々に。胸はわけなき五々八々フシ知死期近付くばかりなり。飽かぬ夫婦の生き別れ流石の母も挨拶なく。お上を立つて奧の間の罪亡しの鉦の聲。善惡照らす御燈の火を見るよりも居睡る下女。外に見るめも荒布の束中に隱せし一尺四寸。是が冥途の案内者魂こむる書置箱。地獄へ墮ちるか極樂か。末は白茶の死裝束。くろ〳〵包む毛氈も早紅の血を見れば。死に損ひはせまいぞと一心はすわれども。暖簾一重彼方にはすゝどき母の鉦の聲。胸にこたへて身も顫ひ。踏みど覺えぬさし足に。鉄はづす手もわな〳〵そつと出でたる。門口に。詞イヤアおちよかおいの。サア鍔の口を濟れた。地サアおぢやと手を引けば。詞マア待つて下さんせ。生中一度戾つて。こなさまの口から。退くぞ去るぞと言はれて

は未來迄の氣がかり。此の門口でたつた一言去らぬというて下さんせ。ハテ愚痴な事ばかり。今宵は五日宵庚申。女夫連で此の家を去ると思へばよいわいの。ほんにさうぢや手に手を取つて此の世を去る。輪廻をを去る迷ひ去る。地今日は最期の羊の步み。足に任せて 三重

道行思ひの短夜

歌名殘も夏の。薄衣。鶯の巢に フシ育てられ。子で子にならぬ杜鵑。我も二八の年月を。養ひ親に育てられ。子で子にならず振捨てて死にに行く身は人ならぬ。死出の田長か。フシ杜鵑。同じたぐひの。女夫づれ 小オクリ肩に。かけたる毛氈は啼く音血を吐く姿かや。覺悟極めし足許も。本フシ影ほのくらき薄曇り。卯月五日の宵庚申。死なば一所と契りたる。其の一言は庚申。スヱテ參りの人に打紛れ。フシオクリ忍び〳〵出づるも商賣の八百や萬を一文字に。半兵衛といふ名にも似ず。長地只ねぶかくも思ひつむ

若な心のつきつめて詞の義理に生薑や。智者は惑はず フシ勇者は恐れぬ。生れつき。流石は武士の フシ胤ぞかし。地ちよも今度が三度めの嫁菜ざかりもひねくれて。諸事をこまかな芥子辛子人のいふ事木耳や。スヱア夫の親を手にさゝけ。フシ〳〵晝夜孝行つく〳〵し。仰背かぬ給仕へ。氣のとつさかな姑に。せり〳〵いぢりたでられて。スヱテ命もなしやありのみの。谷川ふりに身を投けう。今日甘海苔にならうかと心は有頂寒天の。いつわつさびとしもせねば フシ斯く成る筈でござんせう。スヱテ何と生薑の身の果を 詞いうて。返ら。ぬ。水落の。姑去りで殺したと。詞悪名つけて世の人のわらひませうがお笑止と。悔めば夫は芋莖の涙。地なう其方さへ其の如く悔んでたもるに此の半兵衛。年頃日頃の御高恩送らで死ぬるは人の屑。罰をかぶらん恐ろしと。酸漿程な血の涙はら〳〵。こぼせば走り寄り。地私も病者なとゝ様を先へ送るが蓴菜を。却つてうき目見せまする。是も何ゆゑ相生の松茸ゆゑと抱付き。梢に知らぬ松の露。落ちて松露になりやせん。あれ一群に聲高く。下向の衆のぞめき唄見付けられじと影かくす。歌我が戀路は絃なき三味よ。なんのねもせで待ち明かすそれぢや〳〵。見れば思ひの雲の帶〳〵。さすぞ盃。ならずと一つまゐれ。いやとおしやるに。こちやも。それぢや〳〵。さうさんせ。それぢや〳〵。しかもよいこの。情盛りにちよきりこつきり小女房の。腰もしなへてやつくるり。くるりや〳〵やつくるりとぬめらしやんすは。二人が外に。名取川。チヽそれ二人と二人が名取川。それぢや〳〵ナホスフシそれ行過ぎしと立出てて。今の小唄の一節に二人と二人が名取川。チヽそれぢやと謠ひしは俺と其方が名取川。辻占がよい此方へと勇むは男の彌猛心。アヽ嬉しいと引連れて。共に急ぐは女氣の フシなさけするどに人絶えて。物しん〳〵たる。寺町を死にに行く身も暫くは。こゝ生玉の馬場先に法界。無緣の勸進所 スヱテ無明能化の門前に。念佛を。たより辿り寄る。

地なうおちよ。心隨萬境轉と聞く時は。心は境界に隨つて轉じ變る。詞其方もちよといふ名を。風覺良訓信女と改め。我も八百屋半兵衛を露秋禪定門と改め 地息のある內よりはや亡き人の數に入れば。死後の身體の置所も俗緣を離れ。寺の庭でと思へども門開かねば力なし。爰は奈良の東大寺大佛殿の勸進所。詞先年了海和尚衆生濟度の說法を。此の所に說き始め今遷化の跡迄も。地我が親は講中の第一にて由緒ある所なれば。最期を此處と思ひ寄る。但望みもありやと問へば。なう死ぬる身に何の望み。水の中火の中でも先の世迄こな樣と。女夫に成つてゐる所を。見立てて死んで下さんせと。さめ〴〵歎けばチヽ過分な 詞この書置にも書く通り。養子に成つて十六年此の方。十方旦那の機嫌を取り。隙ある

日には町中を振賣し。元は僅かの八百屋店。今では人々に少々の金貸すやうに儲け溜めても。地辛い目ばかりに日を半日心を伸す事もなく。死なうとせしも以上五度。恨みある中にも其方に縁組み。せめての憂さを晴せしに。それさへ添はれぬやうになり死ぬる身に成り下る。よしない者に連添うて半兵衛が身の因果。其方に迄ふるまひ。在所の親仁姉御にも悲しい事を聞かすと思へば。此の胸に鑢をかけ肝を猛火で炒るやうな。エヽ口惜しいと拳を握り。膝に押付け身を顫はし。涙はら／＼ フシ朝露につれて。流るゝばかりなり。地あれ又愚痴な事ばかり在所のとゝ様姉様は。こな様より諦めよい。水盃の其の上に門火迄焚かれしは。生きて再び戻るなと私に意見の暇乞。其の愚痴な事いふ手間で早う殺して下さんせ。アレ／＼／＼三方四方に半鐘が鳴る鐘が鳴る。人の來ぬ間に來ぬ間にと急ぐ最期の玉かづら。フシ夫に縋ひ泣き沈む。詞ヲそれよ／＼よしなき悔み。最早互に親の事兄弟の事言ひ出すまい。必ず其方言ひ出しやんな。地いざ此方へと毛氈を土に打敷きなうおちよ。詞此の毛氈を毛氈とな思はれそ。二人が一所に法の花。地紅の蓮と觀ずれば。一蓮託生頼みあり。親兄弟の書置も此の状箱に入れ置けば。明日は早々届くべし。サア／＼觀念最期の念佛忘りやるな。今が最期とずはと抜く。一尺四寸親重代我が身を切れとて譲りはせじ。かひなき半兵衛が身の果やと昔思へば手もふるひ。フシ不覺の涙せきあへず。地心覺えの西向にちよは合掌手を合せ。光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨。南無阿彌陀佛の聲より早く引寄せて。脇指喉に押當つる。なう待つてたべ待たしやんせと。身をすり退けば半兵衛。詞待てとは未練な。刃物を見て俄に命惜しなつたか。卑怯者めと睥め付くれば。いや／＼未練も卑怯も出ぬ。地今の回向は我が身の回向。可愛やお腹に五月の男か女か知らねども。此の子の回向してやり度い。嬉しやまめで生んだらばどうして育てうかうせうかと。案じ置きは皆徒事。日の目も見せず殺すかと。思へば可愛ゆうござんすと スヱテかつぱと伏して泣入れば。地男も聲をすゝり上げ。俺も何の忘れうぞ。詞若し言ひ出したら其方の泣きやらう悲しさに。地默つてゐたとばかりにて。一度にわつと フシ聲をあげ前後。正體泣叫ぶ。己も翼を並べながら人の最期を急ぐなる。八聲の鷄も告げ渡れば。サア／＼夜明に間がない。明日は未來で添ふものを。別れは暫しの此の世の名殘。十念逼つて一念の聲諸共にぐつと刺す。喉の呼吸も亂るゝ刃。思ひ切つても四苦八苦手足をあがき 三重へ 身をもがき。地卯月六日の朝露の草には置かで毛氈の。フシ上に無き名を止めたり。地年は三九の郡内縞血汐にそみて紅の。衣服に姿かい繕ひ妻の抱へを二つに押切り。諸肌脱いで我と我が鳩尾と臍の二所。うんと締めては引つ拈り／＼。脇指逆手に取持つて二首の辭世にかくばかり。詞古へを捨てばや義理も思ふまじ。朽ちても消えぬ名こそ惜しけれ。フシはる／＼と。濱松風に。もまれ來て涙に沈むざさんざの聲。三國一ぢや我は佛になりすます。しやんと左手の腹に突立て右手へくわらりと引廻し。返す刃に吭かき切り。此の世の縁切る息引切る。晨朝過ぎの勸進所目すり／＼／＼門番が。見付けて心中ヤレ心中。死んだ死んだと呼ばはる聲吹き傳へたる濱松風。枝を鳴らさぬ君が代に。類稀なる死姿語りて。感ずるばかりなり。

關八州繋馬

近松門左衛門作

序詞水は石が鑚に非ずして。泰山の霤巖を穿ち。索は木が鋸に非ずして。彈極の綆幹を斷る。積惡累德始めにある事なし。されば浸潤の譖膚受の愬。行はれざる明王の。御代傳はりて六十六代。一條の院未だ七歳の幼主として。五事七政を秋津洲に　オロシへ施し給ふぞ。有難き。地東三條兼家公萬機を攝政し。參議江文の爲成卿參り議るの職に進み。六孫王の嫡流鎭守府の將軍。源賴光父祖の業を繼いで。君文を以て四夷を撫で。臣武を以て八蠻を鎭めしかば。行く者途に棄てたるを拾はず。耕す者畔つて謳ひ。四門熈々として　フシ和らぐ。民とは此の時なり。地頃は永延二年更衣中旬。武將賴光別勅の召によつて參內ある。御供の武士には渡邊の綱。調度掛として雷上籐の御弓。坂田の公時箙の役。半臂に腹卷烏帽子懸し黑漆の。大太刀佩きて左右に隨ひ。フシ床子の座にぞ伺候ある。地殿下兼家公御座近く召され。詞召さるゝ條餘の儀にあらず。去んぬる頃より宮中に不思議の變化。形は尋常黑の駒。刻限も午の時。いづくより來るともなく御垣の許にあれ。左近右近の木の元に飛狂ひ跳ね廻り。殿上臺盤へも駈上らん勢に高嘶き。左右馬寮の官人馬部の仕丁組留めん。繫ぎとめんと追廻せども。眼に遮るばかりにて手に取られず。地有驗の高僧貴僧に仰せ大法祕法を修せらるれども。更に其の驗なし。君幼く淸濁を分たせ給はぬ叡慮に。不德の御誤あるべきやうなし。かゝる妖怪は攝政たる兼家が責一人に歸す。諫を奉り非を改むるは君臣の常道。所存殘さず　フシ奏聞。あるべしとぞ仰せける。地賴光愼んで。怪しきを見て怪まざれば。怪み却つて壞るとかや。詞古へ宇多の天皇の御在位。金岡の大納言が書きたる馬。夜每に出でて萩の戶の萩を喰ひ荒し。異國には吳道子が繪。主の僧を惱ませし類。名筆名作の畫圖。彫刻に魂入りし例數を知らず。地先祖經基孫王。鹿を射られし武功を傳へたる賴光。たとへ其の馬生あればとて天威を頂き。綸言と呼ばはつて蟇目一矢仕らば。やはか仕損じ候はん。況んや神にもせよ鬼にもせよ現す所の形は畜類。某が手を下すに及ばず。召連れし二人の武士たやすく計らひ候はんと。返答大樣大島の。羽繕ひする綱金時鬼でもござれ蛇でもござれ。相手の强いが好物珍物。勇みに勇む面魂。雲の上人力を得。此の頃怖がる牛飼舍人火焚の衞士に至る迄。誠に餅は餅屋ぢやと。フシ宮中悅び勇みける。地其の日も既に午の刻限。昨日

の頃ぞといふ間もなく。内教坊の後より断き出づる悪馬の相形。須彌の鬣蹄を隠し。耳は法螺貝眼は銅鏡鼻の嵐は海風の。千里の砂を吹立て〳〵。龍象の波を蹴立つる四足の働き。悪來が多力にも フシ止めつべうは見えざりけり。地公時苛つて踏んばたかり。平頸摑んで引寄すれば。ひらりと飛ぶを得たりやおうと渡邊が。障泥ずりをしつかと抱くかい潜つて駈出だす。二人が掛聲嘶うる馬牧の。野取の 三重〳〵如くなり 地頼光騒がず弓矢おつ取り大音あげ。詞清和天皇四代の孫。多田の新發意滿仲が嫡子。鎮守府の將軍兼攝津守源頼光と。地三度名乗つて鏑矢取つて打番ひ。よつ引き丁ど放せば過たず。龍馬の三高ずはと射拔かれ喚き苦しみ伏すと見えしが。俄に風おち電光形も消えて失せければ。月卿雲客射たりや射たり頼光。日本の養由と フシ上下さゞめき悦びあふ。地攝政殿立出で給ひ。詞頼光の武功今に始めず。地綱金時が勇カ

重ねて恩賞あるべし。但し化生の出所を知らず此の事卜占あるべしと。卜の博士伴の別當を召さるれば勅に應じ オクリ御階の下に伺候する。地參議爲成出向ひ。詞化生は只今武將の矢先に鎮つたり。此の變化の本體。障碍をなすに由來あるべし。占仕れとありければ。地別當畏つて懐中の祕書取出し。天地に俯仰し三才に繰り合せ暫く考へ。詞ム丶ウ震の卦を下にし。離の卦を上にす。噬嗑の卦と申すに當つて候易に曰く。頤の中に物あり。噬み嗑せて而して後に亨ると云々。是を以て考ふれば天下は口中物は悪なり。此の悪を噬み調へ天下の脾胃に入る時は。天晴國家の御大事。方角は御殿の辰巳に一物あるべし。地御詮議あれと フシ見通すやうにぞ占ひける。地詞に應じ大宮人大藏省の被官御藏を聞き尋ね捜せば一合の唐櫃に。頼光の放てる矢。鏑砕けて箆中迄こそ立つたりけれ。人々立寄り見給ふに。天慶三年三月日とばかりにて。

事の差別も分きがたく フシ重ねて不思議を増しにける地頼光具に明察あり。此の書付の年號年月を考ふるに。朱雀院の御宇。平親王將門が亡びし時に相當る。傳へ聞く將門が厩の邊に客星落ちて龍馬と成る。是我が身を立つべき吉相。相馬の家の軍神馬頭大明神と尊仰し。地其の由緒によつて旗指物の紋所。隠れなき相馬の家の繫馬。詞然るに承平年中より關東に蔓り。既に王位を覆さんとせし所。俵藤太藤原の秀郷是を誅伐し。其の證に献じたる將門が旗指物。地此の櫃に納まりしと存ずるに違ふ所あるまじ。詞彼の將門が末子成人し。密かに將軍太郎良門と名乗り。或は民家に押入り強盗。又は山野に山賊して財寶を奪ひ。籠城の端を顯す由。地頼光が諜の者ども告げ知らす。親子同氣を相求むるの奇特。將門が魂入つたる幕の紋の馬。此の時を得たると覺え候。免許を蒙り今日より。洛中を夜廻り致させ非常を糺し。將軍太郎が鋭氣を取

挫ぎ。いよ〳〵四海太平の忠勤を抽で奉らんと。辯舌流るゝ水鏡フシ行く先見拔き奏せらる。地晒攻殺を始めとして三公九卿八座七辨。百官百僚に至る迄武勇明察誠に清和の嫡孫やと。フシあつと感ずるばかりなり。地いで〳〵櫃を開き證據を顯すべしと。蓋を開けば頼光の。詞に違はぬ旗印。繋馬の幕の紋五幅がかりに染込みしは。相馬の家の總領のフシ印も見えて目ざましし。地猶叡感の天盃。幕旗印は江文の宰相に預け置かる。家に納めて守られよ。詞頼光は數代の勳功。國家の政道大小となく任せ仰せ下さるゝ。然れども未だ家督の定めなし。弟河内守頼信三男出羽冠者頼平二人の内。御邊が心に適ひし者家督に立て。地重ねて奏聞あるべしと氏の譽身の面目。世に類なき綸言に。悦びの袖を左右左の大内山に翻す。幕は相馬の紋なれど唐土迄も我が朝の。源氏の門に繋ぎ馬なつく。民こそ三重〳〵豐かなれ。地武將頼光將門が

執念の變化を治め給ひしより。威勢日を追つていやまさり。御舍弟二人の内家督たるべしとの勅諚。今夜其の沙汰あるべしと小寢殿の大床に。八幡宮を勸請あり白羽の矢三十三筋染羽の矢三十三筋。合せて六十六箇國の棟梁たるべき。表示をしめす御注連繩。和光の銀燭明々とフシ神慮も納受なからめや。地御臺所御座に着き給へば。平井保昌罷出で。詞仰に任せ御譜代相傳の諸武士。季武貞光を始め殘らず大廣間に相詰め候。但し綱公時兩人は洛中夜廻りの役人。不參に候と申し上ぐれば御機嫌よく。地兩人の御舍弟達劣らぬ御器量。頼光の御心に何れを何れと別ち難し。詞大將たる身は心行跡天に叶ひ。士卒萬民の歸伏の德備らでは。家督には定め難しとて八幡宮を勸請し。地源家由緒の諸侍を集め此の間の火を消し。供への矢を一人に一筋づつ。御鬮として採り取らせ。詞一筋にても白羽多くは頼信。染羽多くは頼平との定め暗闇の業。

私の贔屓偏頗もならぬ筈。皆神慮の御計らひ。此の御鬮の矢の取り裁きも。御家久しき其方。四天王の衆が承る筈なれども。男たる身は面々の私にて。豫て矢に覺えの印を附け置いたなどと。諸武士の褒貶やかましく。今宵此の場一通りの用事は其の小蝶に言ひ付けし。先づ頼信殿頼平殿。八幡宮の御拜なさるゝやうに申してたも。地委しき事は小蝶に萬事言ひ付けし。聞合せて御家督定め。首尾よいやうに頼むぞと御座を立つて入り給へば。保昌は御兄弟のオクリ御部屋〳〵に參りける。地小蝶が跡に獨り笑み。知れぬは仕合頼信樣に此の年月。砂地の雨滴ほれて〳〵惚れ込んだ忍び涙。上と下との恐れを憚り。色に出す折も無かりしに。詞八幡樣御拜に只今是へお出で。サア今宵こそ戀の花の開け時。頼信樣に折つてなりともちぎつてなりとも貰ひましたら。アヽぞつこんから嬉しかろ〳〵忝かろソリヤ地忝いがござるわと。ときめく内に

賴信朝臣。　裝束更め床に向ひ拍手の音。高天原に神とゞまりまします。詞烏帽子の殿ぶり中臣祓のお聲の色どうも堪らぬっとんとかう抱付いてのけうか飛付いて賴ずりか。チヽ辛氣。ちと此方向かんせかし地ちよつと觸つて戴く我が手。　御直垂の留伽羅。詞ムヽゆかしい薫や。フン〳〵ムヽいとしらしい匂ぢや。チヽ辛氣。なぜにやら氣がせく。顏もほかつく。地氣あがりもだ〳〵退いつ觸つつわなに油の若鼠。戲ゆる狐腰をよぢらす。　心をもぢらす亂れ足許。怪我の功名滑つた顏。もたれかゝつてひつたり抱付く。賴信驚き振返る顏と顏。スエテ何と詞の機もなく。詞アヽほんに私がやうな粗相な。ひよつと滑つて抱付きまし。お慮外なついお前に惚れうとした。地御免なしてとばかりにて　フシ差うつゝ向いてゐたりしが。心を鎭め小聲になり。詞いつぞは〳〵密に申上げ度いと心に積るばつかり。地お顏を見れば氣後れして。わけてはどうも申されずといへば賴信打頷き。詞ムヽ皆迄いふな合點々々。我に言ひ度き事ありとは此の方にも覺え有り。聞けば江文の宰相へ懇に出入るとや。彼の娘詠歌の姬と人知れず文を通はし。互の心は合ひながら。地賴信が此の身から輕々しくも忍ばれず。姬も心遣る瀨なく賴まれしは其の事よな。詞かね〴〵密かに四天王にも言ひ聞かせ賴光御夫婦の御耳へも入れ置きし。地今宵家督定めの品により。我が妻に迎へ取るべし。心せかず待たれよと懇に傳へてくれ。人も聞くかとくどからず。萬事小蝶に任せ置く。賴む〳〵と　フシ言ひ捨て奧に入り給ふ。地小蝶ほうど怪顏して。詞こりやどうぢや。是程にも當が違ふか。地そも思ひ初めしより御前へ出ては胸を焦し。局へ下りては心を碎き。　一夜も安う寢る間もなく。幾せの心を盡せども若しや〳〵の賴みばつかり。奉公も苦にならず。人に勝れ勤め神といへば願を立て。佛といへば賴みをかけ。千筋萬筋の佛神の願ひの絲。今宵一度にはらりつと切れ果てた。詞エヽ恨めしい詠歌の姬。常は裏なく目かけぶり。此の事ばつかりを隱し置いてよう出し拔かれた。地恪氣に位の高下はない。待て此の戀を妨げ一本させて腹癒せ。エヽ腹が立つと心の亂れ。身を削る櫛形の戶口よりスエテ何心なく賴平君。床の前に畏り。烏帽子を傾け禮拜の。直垂の袖そつと控へ。詞時節惡い事ながら。引かれぬお方に賴まれ屆けぬも如何と。お心も顧ず申し上げます。江文の宰相爲成卿の娘御詠歌の姬樣。たんとお前を思ひ込み。お煩ひに成る程私が參る度毎にお部屋へ召され。小蝶賴む。賴平樣と詠歌が中の妻迎へ舟。地年に一度は奢の沙汰。せめて一代に一度の逢ふ夜を。引き合せてくれと御意なされ。詞それは〳〵深いお心。地お情あらば私も共にと言ひも切らさず待て〳〵。詞詠歌の姬は白馬の節會のお庭で見初め。我も心にかゝれども。地兒

頼信深い中と聞くものを。それがどうもと赤らめ給ふ御顔はせ。詞アヽ其の御遠慮入らぬ事。尤かし頼信様。一兩度玉章は付けられしが。詠歎様も心に染ます。頼信様もしかとお心に取りしめた事でもなし。ほんの時の一興。若し眞實事なれば媒の小蝶が一分も立たぬ事。地お爲惡しうは致しませぬとさも有りつべう辯舌に。言ひ廻されて頼平君。詞ハテ道に違はず浮名の立たぬ事ならば。我も嬉しき渡りに船。地よいやうに小蝶頼むと宣へば。小蝶が重荷片荷は下りてがつくりと。氣草臥の漏刻オクリ初夜を。告げてぞ聞えたる。地御定めの時分よしと平井の保昌。季武貞光を先として。源家相傳の武士の中物頭分廿八人。詮素襖袴の袖を連ね。烏帽子を並べて我も〳〵と。フシ座に着けば。地上段に御臺所頼信頼平兩御舍弟。左右に並びおはします。小蝶御を蒙り。詞御鬮の次第は各豫て承知の通り。サア地只今火をしめすとさつと抜いて羅の。長地扇に撲つは秋の螢火是は冬の螢火ならぬ燈火も。消えて銀燭いたづらに。畫屏空しくフシ暗然たり。地人々互に辭儀もなく。聲をも立てず心々にオクリ立寄り。〳〵神に任する盲摑み。行きつ戻りつ立ち舞ふ内。渡邊の綱が從弟箕田の二郎續。御鬮の矢を取る床脇に坐したる小蝶が衣の空炷。なまめく薫に心ほれ〳〵。お廣間酒の三盃機嫌。覺えずすり寄り振り解けば付け寄つて抱付く。小蝶は頼信公へ脇心なき氣を見せたく。左の手に烏帽子の懸緒。取つておつと引伸ばし懐中の匕首抜くより早く結び際よりずつかと切り。取つて突退け大聲上げ。詞天下大事の御家督定め。神前といひ上々の御座近く。暗紛れの不行儀侍。誰かは知らず小蝶に戯れしなだるゝ不義放埓の曲者。證の爲烏帽子の懸緒を切取つたり。地たつた今其の人を顯さん。サア女中燭臺々々と呼ばれば。一座も是はと興さまし。續酒の醉もさめ南無三寶。腹切らんと柄に手をかけて見て。憎い女め刺殺してやくれん。我ばかりや死なんとせき悶ゆれども人知らず。面々烏帽子の懸緒を探り互の心を疑ひ合ふ。火を見る迄の續が身の安否。途方にくらむ彌猛心闇の闇路と成りたる所に。頼平君の側隱の御心に。續が爲の正八幡。入替り給ひけん御聲高く。詞ヤア〳〵頼平が思ふ仔細あり。率爾に燈火あぐるな。此の座の諸武士一人も殘らず。自身烏帽子の懸緒を切り。切揃ふと一度に各聲を揃へて案内せよ。其の時燈火あぐべしと。地いらち給へば違背なく。面々差添の小刀抜いて押切り〳〵。詞何れも殘らず切揃ひ候と地續も同然に申し上ぐれば。燈臺燭臺ばら〳〵〳〵。天の岩戸と開くれど。一座の武士に疵つかぬフシ大將の心ぞ頼もしき。地幽閑大度の御臺所懸緒の事は御沙汰もなく。各取つたる御鬮の矢是へ〳〵と御意の内。我も〳〵と御前に差上ぐる。人數廿八人白羽

の矢廿八本。染羽には一人も取り當らぬぞフシ不思議なる。一つに取つて頂戴あり。此の内に一筋も詞染羽のなきは頼信殿を御家督。さし次の弟御なれば世間の順道。正直の頭に宿る神慮疑ふ所なし。地頼平殿は天下の後見との事ならん。自ら女の身として只今極めて言ひ難し。奏聞を經て吉日選び目出たく仰付けられん。先づ〳〵今宵の悦び。詞保昌季武貞光。地神酒をひらめて酒宴あれと頼信頼平伴ひて。御簾深く入り給ふ動かぬ御代の固めぞと。末を白羽の八幡山氏子。榮ゆく三重〽鉢叩キオ等よき光ぞとかけ頼む。世の光ぞと。頼む茶のきよのきよひよん。御寺に田螺にきよひよん。ヲヽ井の澤の。澤の寒きさんやに。ていと打鳴す。三界を家とよ走り走り廻る鉢こくりが。ヲヽ〳〵。五郎三郎。田舎へお下りあろならば。此の程のなぐり情に瓢をなりとも置いて行け。小瓢をなりとも置いて行け。それはや女郎。易き間の事なりとよ諸國をでつるで。づでんど叩かうずるにも。瓢なうてはお笑止。極樂のホホ。前に流るゝ涙川。いかなる淵の。瀨になり天地の恩。國王の恩。よしや世の中寢てか寤めてか只何事も。後生なりけりなもうだ。なもだ〳〵彌陀頼む。彌陀の誓ひを頼む身の。人は雨夜の星なれや。ナホスフシ雲晴れねども西へ行く。地西の京より東の京北は一條南は九條。縱横九萬八千軒。足に任する坂田が夜廻り。洛中を苦しむる強盜どもを鎮めんため。十德頭巾に身を窶せば。人も空也の茶筌賣。公時が一生に唱へ初めの南無阿彌陀佛。なもだ〳〵の鉢叩き。フシ思案の底も叩くらん。瓢の音さへ冴えたる夜の月も落ちくる西三條。江文の宰相爲成卿の築地より。軒を打越す細紐に結び下げし水仙一本。行當り喫驚しコリヤ何ぢや。詞ムヽ疫病の呪ひか。但し洛中物騷の盜賊の呪ひか。病除の爲ならは南天と大蒜を吊る筈。アヽ聞えた。御公家衆は花車尋常臭い物は忌み物。大蒜の代りに。葱に似た水仙ぢやの。流石歌人のお見立て。地何にもせい家裏と手をかけて引きしやくれば。内に女のおとなふ聲。是は不思議と叉引く綱にあいあい〳〵と。返事も近付き切戸押明け。立出づる奥女中公時をすかし見て。戀なればこそ窶せしお姿。お館の思はく樣たんと待兼ねてござんする。いざお入りと呼ばれて公時合點行かず。詞戀ゆゑ窶すとは何の事。瓢箪一つの輕い世渡り。御用ならば一本が六文。青竹茶筌でお茶ちやと立つるを召しませい。叩きの一節。地面白いを添へますると瓢箪鳴らせば。詞アヽ殿達はじやれ深い。隙どれば人も見る。頼みたる姫君のお疑ひも氣の毒。地憚りながらお案内と手を取るを振放し。鉢叩キアヽ是は何とも心得ず。鍋の月代石の鬚。つひに見た事ない君が。しなだれ給ふは甘い事。我も岩木にあらねども。内に殘せし山の神。めつたむしやくしや悋氣するぢや

のちやのきよのきよひよん。お腹立つまゝきよひよん。チヽ怖やの。こはや〳〵寒き山野に。ていど待ちくらして。やがて迎ひにでずるで。すでんど撲たれぬ先に。フシお暇申すと逃行くを。走寄り縋りとめ。今宵忍ばん合圖の綱引捨て歸るお心は。おせかし振か憎てやと引寄せて差覗く。顔は朱塗の根來折敷目玉は皿鉢。はつと魂消え。鬼か天狗かなう悲しやと。フシ逃入りはたとさしにけり。地坊門通りの四つ辻より。一文字に三星の紋も輝く提灯。二行に鐵棒ひかせ嚴重に來る行裝。詞ムウ渡邊の綱が夜廻か。ハテ大さうな出立。地一本させて笑はんと頭巾深く瓢簞叩き。鉢叩キ大恩教主の秋の月。涅槃の雲に入るとかや。月夜に提灯外聞ぢや。一人歩くは怖いなら。なもだ〳〵彌陀頼め。公時頼めと ナホス地鼻の先。瓢簞によつと突付け。詞コリヤ渡邊これ見たか。君命を重んずる公時がやつし事。又しては智惠な〳〵と叱られても、出す所では智惠を出す。平親王將門が一子將軍太郎良門。山賊强盗を語らひ洛中を惱す間。片端から引つ括れと承るは兩人。綱が鎌鬚。公時が煎蝦色は常是が極印同然。日本國通用のしやつ面。此の如く形をかへ。ちやのきよのきよひよんでみしらしても。どこぞが公時臭いやら盗人どもが寄付かぬ。それに引換へけたゝましい提灯鐵棒。ちんからりが面白いか。地家來自慢の僭上ならば祇園會か放生會の。御輿の供せい渡邊と フシかつら〳〵と笑ひける。綱につこともせず。ホヽ。詞小智は大道の妨げ。大國を治むるは小鮮を煮るが如く。雜魚小鮒煮るにいらひ過せば。鱗も鰭も一つに崩れ其の魚の形を失ふ。公の政道まつ其の如く。 其の職に居て政道を取行ふ役人の心持。近う言はば重箱を擂木で洗ふやうにするもの。 國を重箱に譬へ政道を擂木に表し。彼の重箱を洗ふが如く。角々へやり屆けず大樣にもてなせば。器も損ぜず國全しこれ聖代の政。愚者の政道は細かにて 角角迄洗ひ屆けんとする故。重箱も損ね國危し。家に鼠國に盗人。百二百斬捨てても盡くる事なき湧き物。内に仁愛を施し。外嚴しく警固せば刃も用ひず德に隨ひ。自ら治まる道理。合點がいたか坂田殿。ちやのきよのきよひよんの分別。地とひよんもない無分別と一口に打込めば。公時顔はふくらせども道理に詰る返答なく。ちんぷんかん此方や知らぬ。重箱と擂木瓢簞と茶筌と。何れものかぬ御中なれど手柄は仕勝ち。きよひよんかとひよんか鉢叩きの。仕上を見いとへらず口 オクリ別れて。こそは行く水に フシ數書くよりも。はかなきは。思はぬ人を思ひ川鵲ならぬ翅のゆかり。本フシ小蝶を橋と踏み迷ふ。出羽の冠者賴平詠歌の姫に豫てより。思ひ亂るゝばさら髪烏帽子も堅しと脱ぎ捨つる。姿は如何に男とは。いさ白絹を打被き フシ築地の外面に忍ばるる。詞コレ小蝶。 媒の心遣ひ忍ぶ夜の案

門。地禮は詞に盡されぬいよ〳〵頼むと宣へば。詞アヽ何のお禮。もと此の戀は。此の小蝶が頼信樣に底心から。命かけて思ふ故。詠歌樣と頼信樣の。手を切らねば私が戀は叶はぬ。折に幸詠歌樣も頼信樣には見ぬ戀なり。餘りお心も進まぬ所を見付けて。お前の戀を取組んだ。さり乍ら先づ今宵の新枕は。頼平と極めずとも地信と平とをどぢぐぢに。頼樣々で紛らかしお枕二つのお床入り。一汗かいた其の上は尾が出ようが臍が出ようが。それからは此方の物これ此の築地が彼の樣の。花に引かるゝ合圖の糸と引けば引かるゝ頼平も。心はどき〳〵どきつき乍ら出汐に出船の乗りかゝり。小ざかしげに腰元がこちへと招く花薄。花に我が身を誘ひ行くフシ小蝶につれて入り給ふ。地玆に平井の保昌が弟右京之亮。藤原の保輔同じく一子右兵衛の尉齋明父子とも。心飽く迄姦凶にて。頼光に見放され一家に背く素浪人。黨を立て衆を結び洛中に横行し。元手入らずの切取追討剝へ。將軍太郎が幕下に屬し。王位を簒ふ大望。膽の太き同類廿四人引具し。並木の步み來る如く一樣の强盜頭巾。保輔齋明を近付け。詞是ぞ江文の宰相が館。主君良門殿家の御紋。繫馬の幕印爲成が預かる由。門一重踏破り奪ひ取るは易けれども。靑公家ばらと侮るは不覺々々。此の頃巷の風說に事よせ僞り入らん。油斷するなと門打敲き武將頼光朝臣より急用のお使。門開けと罵つたり。地館の内は寢入りばな何事やらんと騷ぐばかり。表は頻りに打敲く門番下部口口に。詞主人爲成卿宿直の御番お留守〳〵。御用あらば明日と聞きもあへず。イヤサ氣遣な事でなし吉左右のお使。河内守頼信公頼光朝臣の御家督に極り。詠歌の姬を御寵中になされんとの結納。善は急げと夜中ながら。渡邊の綱頼みの宰領に參上せり。地早開かれよと僞るにぞ愚かの門番靑侍ども。大門開けば易々保輔。フシ同類引連れ通りける。地奥へかくと告げたりけん頼平はつと氣も消入り。寢ぼれ姿に立出づる。袂を控へ詠歌の姬これ申し頼信樣。千束のお文は皆僞り淺い心のお歸りか。詞今聞く通り頼光樣より。綱とやらが祝言の。頼みの使に來たといな。地兄親樣からお許しの世間廣い夫婦ぞや。鷄が鳴かうが日が出ようが戾しはやらじと。引留められて出羽の冠者。其の祝言のお使が咽につまる。詞今は何を隱さん我は頼信にあらず。弟出羽の冠者頼平。地兄の戀路を知りながら切なき戀は我ばかりか。それなる小蝶も頼信に思ひは同じ思ひより。僞り枕交せしに存じ寄らぬ祝言の結納。詞宰相殿御夫婦。お請けあれば密夫同然。兄嫁水に溺るゝ時。手を以てせざるの理に迷ひ。親兄の禮を紊る。地頼平は。心からとも諦めんが貞女の道を背かせし。口惜しさよとばかりにて スヱテどうと坐して涙ぐむ。詠歌の姬もあきれ果てフシ暫し詞もかりしが。詞ハテ何とせう。

寝て了うての悔み言いうて返らぬ。一度穢れし此の身なれば頼信様に添ふ氣は無い。あの使の歸らぬ内こゝを連れて退き給はば。地不義の名も立つまじ取違へても變つても。殿御一人に添ひ通すが女の道。一夜の逢ふ瀬に父母と思ひ替ゆる自ら。見捨て給ふな頼平様と。抱付きしめ合ひてわりなき。中とぞ成り給ふ。ヲヽ出來た／＼詠歌様。両御所の首尾は小蝶が受取つた。跡に心を殘さずとも連れまして早お退き。夜明くる迄はお供せんはや／＼お出でと引つ立てられ。何處を當に頼平公詠歌の前に薄衣きせ。落行く先の憂き身より フシ跡のつらさやまさるらん。地門内俄に騒しく雨戸障子切裂く音。叫び懍く女の聲ヤレ盗人よ押入よと。言ひかひなき下郎ども小髪をはつられ眞甲割られ。下女も仕丁も朱にそみ命から／＼逃げて行く。爲成卿の御臺所萩の對かひ／＼しく。繋馬の幕右手にかい込み拔刀。保輔がたゝむ太刀受流し／＼門外へ遁れ出で。切拂ひ飛びしさり。詞ヤア世の常の強盗にあらず。金銀衣服に目はかけず。天子より預かりたる此の幕望むは曲者。呼吸の通ふ其の内はいつかな渡さん。長袖の女房と侮づり。地近う寄つて怪我するなと健氣には宣へども。詠歌の姫は何處ぞと一筋ならぬ胸の内。フシ落ちもやらず支へらる。ヤア娑婆に飽いたか女郎め。其の幕こつちへ渡さぬかと。又打ちかくるを切りほどき戰ふ後に。齋明つつと駈寄り。萩の對の太刀打落し取つて引つ伏せ捻ぢ付くれば。保輔陣幕ひつたくり押戴き。本望本望。そいつ刻めと言ひ捨てて門内へ駈入れば。髱引上げ搔首せんと刀逆手に取る所へ。東西より綱公時。陰陽の龍の雲を下る勢逸散に駈來り。公時すかさず齋明をもんどり打たせ踏付くれば。綱は御臺の塵打拂ひ フシ痛はり忍ばせ奉る。公時ふまへし腮掛上げ。詞ヤア保昌が甥の殿ならず者の齋明か。保昌が度々の療法で治らぬ盗人病。公時が細工按摩十四經。地ちつと痛いを堪忍せいと。首ぐつと引き拔き。渡邊諸共大音上げ。詞天命知らぬ國賊めら。速に非を改め。降參すれば命を助くる。地こはばらば手本は是と内へ投入れ。ちようど睨みし眼力は。フシ尺餘の築地も見拔くべし。地保輔門の屋根に突立ち。詞コリヤ此の幕を翻へし。將軍太郎殿を位に卽け。關白になる某降參せいとは舌長し。地高位に使ふ詞を知らぬ慮外者めと。口に任する存外雜言。詞ヲヽ結構なる關白職。座の高いが望みならばまつかせと。地綱公時つつとより扉門かためたる。左右の柱に立ち別れむんずと握り。ヤアうんと力に任せ押上ぐれば。さしも堅く塗り堅めし。築地四五尺崩れ落ち。門は念なう大地に倒れ二人が脊丈指上ぐれば。保輔飛ぶにも下は遙か。棟瓦にしがみ付き大聲上げ。詞アヽ申し綱様。高位高座も高過ぎて目がまふ／＼。地幕指物もこれ返す。命助けて公時様。お慈

悲〳〵と男泣き。涙しぶきの瓦ぶき。フシ雨やさめ〴〵見苦しき。地綱公時どつと笑ひ。ヤイ保輔の安屋根葺。漏らぬ様に葺きをれと。彼方へ持ち行き此方へゆすり。思ふ程苦痛させ。柱を左右へ引き放せば。コハリ門桁虹梁蟇股。垂木裏板土瓦ぐわら〳〵どうと地に落つる。ナホス保輔が天邊脊骨。二本の柱に打ちみしやがれ瓦礫と散つて失せにける。性懲もなき殘黨輩。一度に群り來る所を引寄せ〳〵首すつぽり。踏みつけてはぽんと拔き。南方毛拔釘拔まさりの二人の手先。一人も洩らさぬ拔首は。フシ酸漿ほるより易かりける。公時首を門柱に括り付け打ち肩げ。きよひよんとひよんのゐさめの拍子。鉢叩キ宵は瓢簞曉は。うち取る天窓の鉢叩き。フシ渡邊殿と囃すれば。地綱も拍子にのりの道。鉢叩キ大恩教主の釋迦だにも。涅槃の雲に入り給ふ。況んや怨敵朝敵を。などか一人も遁すべきな。もだ〳〵ナホス只頼め。主君の智徳我々が。武徳も勝る源氏の御代。假令朝敵將軍太郎。水練飛行の鱗翼を得たるとも。水に入らば水を分け雲に入らば雲を裂き。討取る印は此の幕の馬を味方に繫がする。綱公時が勇猛力。四天王の卷頭卷軸末世。の筆に止めける。

第　二

地都の富士を動かさず爰に引きよせ目がかりの。里の賤屋も植込の木の間に見せて山水の。唐繪を庭にうつし取るとんだ物好き飛石の。石は白川加茂川を筧に取りし手水鉢。乾の御殿は頼信公まだ獨寢の御部屋作り。今宵俄のお客とて座敷々々のはき掃除。フシ女子手業のはかどらぬ。上段書院圍の間床は寢覺が生花の。長押鴨居も拭き立つる。更級杉野が障子の埃烏帚。柄さし帚の差出口。詞晩のお客はどなたやら。めつたに目出度い〳〵の譯を知らねば悦ばれぬ。寢覺殿様子は聞かずか。ムヽ此方はまだ知らずか。お客といふは此のお館の嫁君。其の譯はの。かね〴〵頼信様戀ひこがれ給ふ詠歌の前。如何に戀なればとてある事か。弟御の頼平様が盗み出し。お二人連でお館を駈落。行き方知れぬ騷動洛中は是沙汰。院の御所様叡聞に達し。地伊豫の内侍様とて詠歌様に劣らぬ美人。頼信が宿の妻にせよとの院宣。今宵俄にお輿が入る筈。是といふも大殿頼光様の御威勢。頼信様のお勤のよいから目出度い御祝言ではないかいの。詞明日はお臺所の餅搗き。今宵はお寢間でしつぽりとお二人のおもつき。地アア羨しの伊豫の内侍様彌いよなうへうたんぢや。サアゐいと フシゐと〳〵おつきと打笑へば。更級がいき過ぎ顏。詞上々は尋常でお獨りの杵でもつい子餅が出來れど地も。こちとが臼は下用に使ふ味噌豆臼となまめき笑ふ女郎花。フシあなかしがまし口がまし。詞それはさうと此の小蝶は。今朝から爰へ顏出しせぬ横着者。地小蝶々々と呼びたてられ蝶は可愛や白粉を。泣きは

かしたるやつれ顔。頼信の御祝言胸に迫れば氣も浮かず。返事なく〳〵。フシ立ち出づれば。詞これこゝな人出來るぞや出來るぞや。上から下までお目出度事。猫の手も借りたい忙しさ。其の泣き顔は何ぞ氣色でもわるいか。地御新造のお部屋の掃除疎漏に致すなと。お局の言付け人にばかり骨折らせ。ぬつくりと陰ばひりか。アレ西山に日もちり〳〵お輿の入るに間もあるまい。詞こちとらが請取つた座敷廻りの掃除は仕舞ひ。そなたの役はお庭の植込み。蜘蛛の巣取つて落葉掃いて水打つて。地そしてからのらかはきやと叱らるゝ身も叱る身も。フシ私ならぬ宮仕へ。心に任せぬ憂きふしの竹竿取つて庭におり。蜘蛛の巣取るや取りまぜし思ひはつらき頼信君。外の女に添はせじと心一つ身一つの。胸に網張るさゝがにの梢々に糸引きて。八つ手に蜘蛛の閨作り寢覺が見付けそれ〳〵小蝶殿。詞それ見さしやれ。チヽ恐ろしい大きな青蜘蛛。人の口へ入れば其の儘死ぬる大毒蟲。嫁君のお部屋さき御膳廻りへ落入るまい物でもない。早う取つて捨てさしやと。地いふに小蝶か心付き。詞アヽほんに唇へさはれば人を殺す大毒。扨も姿に似せぬ怖い物と。地口には恐れ心には此の蜘蛛取つて内侍に與へ。我が戀の仇取らん物と一念萌す執着心。フシ蜘蛛の毒より凄じし。奥に局の聲高く。詞あれ〳〵表御門より先走の御案内。伊豫の内侍樣今お入り。お迎ひの手燭座敷の燭臺作法が大事。地女房達裲に髪さげて皆おぢや〳〵と呼ぶ聲に。アイ〳〵〳〵 フシとさゞめき賑ひ入りにけり。地跡には小蝶よき隙ぞと足を爪立て手を伸ばし。巣をはたと打ち拂へばいとはかなくも落ち來る蜘蛛袱紗におさへ押し包み。戴き〳〵天に捧げ呪咀の詞。詞抑汝が神通不思議人力も及ばず。野馬臺とやらん唐土の書に糸を引いて文字を導き。日本の譽れを顯はし蜘蛛がゝつて悦び來るといふ本文もありと聞く。地又人の命を取ること鴆毒蠱毒より速かにて。善惡に渡り妙を得たる性靈。寸に足らぬ汝が形に我が四尺の魂をしつかと受け留め。コハリ伊豫の内侍を今宵の中に毒害し。戀ひわぶる頼信公と此の小蝶が縁の糸を。結び合せて玉津島。神詠の印を見せよ急々如律令と懷に隱し入れ。小褄はら〳〵歩み行く外面似菩薩内心如夜叉。表面に見えぬ皮一重 ナホス地 フシ障子のあなたさゞめき渡り。地嫁君のはやお入りと數々祝ふ銚子島臺。松と竹との千代かけて。謠千秋萬歳のナホス千箱の玉とぞ 三重〳〵謠ひける。地世に謠ひしも一昔先年相州猿殿の城にて。朝敵となり亡びたる相馬二郎將門が。忘れ形見の嫡子將軍太郎良門とて。兇猛强氣の不敵者父が謀叛の緖を繼ぎ。天下を覆さん計略。同腹の妹の氏素性を隱し。小蝶と名付け頼光の奧方に奉公させ。館の樣を聞き合す便も細き寬の竹。駒の頭を兄妹が心通ずるさゝやき

竹ヽ館離れて水上の河原面に徘徊し。妹に知らせの短角出し高音を。そらして三重へ吹く笛のフシ音も更け渡る。地御館の内小蝶はかねて牒し置く。兄良門の相圖の笛心に應へ忍び出づれば。筧の水も人もたえたる離れ庭。樋口に口さし寄せ。詞兄樣良門樣お出でなされたかと。地吹き込む息は竹の筒ぬけ聞き取る兄は遙かの河原。妹小蝶は館の内耳と口とは隔たれど。間の筧は詞のかけはしフシ側で囁く如くなり。地良門竹に口をよせ。詞コリヤ妹。賴光の四天王のと鬼神の如くいはるれど。表裡を知らぬ一圖の大將。某足許にあるとも知らず手遠き所を尋ね探し。館には手に立つ武士一人もなしと聞く。是本望の時節到來。しかも今宵は賴信の婚禮。上下の武士ども酒に醉ひ伏し油斷は必定。地此の虛に乘つて忍び入り賴光賴信易々と討ち取り。帝を追込め王位を簒ひ。父が素懷を遂せんは此の時。案内はよく知りつらん手引きせよ妹と。語れば此方はと胸つき兄弟心を合はせ置く。巧みの筋もあだ花の色に引かるゝ小蝶が心。賴信君を今更に討たすもつらし引かれもせず。スヱテ返事に迷ふ戀慕の闇。フシ空さへ暗き。黑書院。地廣緣の下身をひそめ。傳ひ寄るは賴光の御臺所。小蝶が素振心得ず窺ひつけより給ふとも。知らぬ因果の囁き竹。詞なう兄樣。いまだ館も靜まらず仕損じては一大事。今夜に限る事でもなし。地必ずせくまい〳〵と一寸遁れに期を延せば。詞卑怯千萬後れたか。是非今宵は延ばされず性根をすゑよ妹と。地洩るゝ五音に北の方守り刀を拔くより早く。飛びかかつて小蝶が肩先一打ちに。切られてうんと反返り。詞何者なれば何の遺恨望みある大事の命。地助けてたべと逃げ行く髻手に纏ひ。取つて引き伏せ又一刀刺されてあつと叫ぶ聲。何事やらんと平井の保昌脂燭かかげ躍り出で。是はと驚く小蝶が深手。外には知らぬ將軍太郎竹の口に耳放さず。妹が返答今や〳〵と一時餘り。待ち堪へたる堪忍情。流石武將の北の方色も變らず小蝶をがはと突き退け。詞憎くい女めエヽ是保昌今宵まうけの嫁君。伊豫の内侍の饗の膳に蜘蛛を入れ毒害の巧み配膳給仕は此の小蝶。仔細こそあらんとつけて來るあの遣水。筧の外に同類ありと覺えたり。疑ひもなき盜賊の引き入れ。コリヤ陳じても遁れぬ命。地包まずいへと責め給へば小蝶苦しき目を開き詞盜賊の手引とは恨めしい御臺所。身を八つ裂きに刻まれても白狀する身の上にはあらねども。盜賊の名を受けては先祖の恥辱。兄弟一家の名折れ語つて死ぬる。事も愚かや平親王將門が娘。將軍太郎が妹は自ら。父の仇を報ぜんため間者となつて宮仕へ。狙ひ暮せし此の年月。地アヽはかなき女心賴信の御器量に絆され。大事は忘れ戀一筋外の女に添はせじと。詠歌の前賴平殿我が媒にて都を落し。一人の邪魔は拂ひしに。詞院宣にて伊豫の内侍

の祝言。重ね〴〵の戀の邪魔。毒害して妬みを晴らさんと思ふ内侍は恙なく。却つて我が身を失ふは。戀故先祖の仇忘れし親の罰兄の罰。地當らば當れ殺さば殺せ。生れ代り死に代り賴信と内侍の中。一念の鐵石七重八重の隔てと成り。コハリ思ふ儘には添はせじと夕闇てらす眼は明星。顏色朱に髮逆立ち。ナホス狂ひ罵り奥を目がけ飛び込む所。保昌ずはと拔き打ちに丁と切つたる拳の固め。首は飛んで敢なき最期女も遁れぬ朝敵の末。フシ天罰神罰目の前なり。地北の御方身を顯はし。詞内に入り込む奸人己れと名乘り自滅するも。神明の加護當家の武運長久の印。さす敵は將軍太郎。自らが術にてたつた今釣寄せん。地組手を用意し揃あられよ保昌と。筧の竹に口さし寄せ。詞これ兄樣館の内も寢靜まり。大酒にて正體なし前栽の外圍ひ。塀の切戸を明け置いたり屈竟の時節。地サア今々と宣へば妹と心得將軍太郎。でかした〳〵まつかせ其處へと言ひ返す。聲に保昌北の方牒し合せて鎹あけ。フシ點頭き合うて入り給ふ。地良門妹が教の如く外塀近く走り着き。内の樣體聞き耳立てし切戸を押せばきりゝと開く。仕濟したりと獨笑み入り込む庭の勝手は知らず。立木も人かと心を配る暗き夜の御殿の火影を目當にて。泉水築山切所を越え スクリ寢所間近く窺ひよゐる。地保昌女の衣打ち被き。味方の組手に相圖を取つて出で向へば。近々と寄つて小聲になり。詞小蝶か神妙の働き。親兄への孝行此の上なし賴信の寢所は是か。賴光はいづくにあるぞ。地サア案内々々と立ち寄る所を衣ぬぎ捨て。良門が弱腰しつかと抱くちつとも動せず。詞ホヽウ傍痛し。日本無雙の剛の者將軍太郎を誑つて。組みとめんとは態に似ぬ不敵者。四天王は他行。平井の保昌といふ木葉武士よな。いはれぬ事に腕筋捻ぢられ。地あら肝とばして恨むなと振りほどく大力。ヤア忰め咽の穴の廣過ぎたる廣言。詞いふ通り平井の保昌。出合ふ己れが運の盡き。動かれば動いて見よ。ゑいうんと締め付けて猶放さず。投げられてもひるまぬ力互角の荒武者上になり下になり人交ぜもせず揉合ひしが。地保昌が弓手の足松の古根に踏みくじけ。立直らん。立直らんとする隙に腕もぎ放し飛んで行く。向ふは組子の高提灯歸れば取り手の振松明。前後を包む火の光り。遁るゝ方なき死物狂ひ五人六人一摑み。豆撒く如く打付けられ四方へばつと逃げ散つて。フシ恐れて近づく者もなし。地よし今宵は是迄と元來し道に引つ返し立歸る。待ち設けたる保昌岩陰にぬはれ伏して遣り過し。横になぐる切先將軍太郎が肚腹をかゝれ。ひるめば得たりと太刀投げ捨て。乘つかゝり腕捻ぢ廻し。詞强敵を生捕つたり下合へやつと呼ばはつたり。コハリあら不思議や小蝶が死骸。執念き一心髑髏よゐるぞと見えしが。生けるが如き形となつてむつくと起き。

保昌が襟際摑んで引きのくる。ナホス妄執幽魂の神通力。五體を縛られ惱む間に。命冥加の將軍太郎。虎の尾を踏み毒蛇の口ァシはふ〳〵遁れ失せてけり。詞ヤア大事の敵を遁したる。地方人は何奴とふり返れば小蝶が屍さしもの保昌ぞつとして指折り放し突きのくれば。五輪の石の轉ふが如く首と體は引きわかれ。ぐわら〳〵どつと大地に響く愛着心フシ妬女の性根ぞ恐ろしき。地此の儘置かば又此の上如何なる仇をかなすべきと。ずだ〳〵に切り亂し。詞サア遠くは行かじ將軍太郎追駈けて討ちとめん。地者ども來れと勇みをなし振り立て行くや松明に。明け行く星の光を奪ひ跡を慕うて 三重

詠歌の前道行

武士の。弓胡籙は負ひもせで フシ戀の重荷に。賴平の。肩背厭はぬ詠歌の前。思ふに逢はで思はぬが。道具屋フシ情を盜み盜まれて。ぬよれり濡るゝ雪の笠。心變るな變らじと浮かれ出づるぞ。フシたゞならね。空は雪氣に鞍馬口。鬼一口に加茂山の。地雷さへ鳴りて雨降りし昔男の芥川。ちりも厭はぬ露の身を。草に置くてふ白玉か。問へど答へず消えもせず。見上ぐる顏も見合はすも。フシ一つ思ひに辛氣やと。いつそ下して石道を。歩むもほんに玉筐。フシオクリ二人〳〵連れたる。衣手の フシ袖から袖へ。手を入れて。歌直に比翼の フシとりなりを。盡きぬ契りと影映す。我が菩薩池ぞつとして。まだ日數經ぬ旅さへも。フシ思ひやつれのしどもなや。あれ〳〵峰に打ち靡き。雪に洗ひつ風に又。削りかけにし青柳の手ふれぬ髮も我が髮も。いづ取り上げて岩倉や 冷泉われて。逢ふ夜の。三下り 歌きぬ〴〵に。あけの睦言。今更に。うしや別れは。袖の海。なじまぬ。昔ましぢやもの。幾夜。重ねし情の末も。恨み焦るゝ身は戀衣。カンせめて一夜は。ア。來ても見よかしな。ナホス泊り定めぬ。フシ宿なれば。いざとて誰か松が崎 ホオクリ先て添ふやら添はぬやら。本フシ知れぬ此の身と侘びぬれば。今幡枝になにはなる。何のその〳〵みをづくし戀の。瀬踏の一入を。からくも染めて八鹽の岡。山もあらはに木の葉ふりァシ殘る松さへ。細々と。曉告ぐる。鐘の音に フシまだき烏の。寢所を。立ち行く數も三つ四つ二つ。又三つ五つ六つの花。其の花の頃いつ又壬生の。花盛り 三下り 歌壬生のお寺の社殿で。〳〵〳〵合。花の盛りも。人の盛りも 合夢の夜嵐しやでん〳〵。〳〵〳〵〳〵合。ナホス君ならずして誰と又。世に立榮え。フシ鉾枝村。三つせをかけて二の瀬村此方に續く普陀落寺道行く。振りにことひて。百夜も同じつれなさの小町が名のみ古塚を。小野とはいひて薄生ふ フシ市原。野にこそ着き給ふ。

地賴平そげ立つ顏ふりあげ。詞なう詠歌の姫。珠簾几帳の外見ずが戀なればこそ。雪

霜の寒い冷たい疲れも厭はぬ徒歩跣足。心中といひ姿といひ。兄頼信の打込まれたも道理々々。小蝶がお陰蒙らずは今頃は兄の奥様。ひつくり返つてつい弟嫁。念力の矢に當つたからくり的ぢやと 地跡先 フシ踏まへぬ戀の道。詠歌の姫も途方にくれ。世の中の不思議とて是程不思議の縁もなし。おの様と夫婦とは。結ぶの神のよもや粗相もなされまじ。前生の因縁か火の中水の底土灰となる迄も。添ひ果つるが女の操憂目つらきめ覺悟の前。詞私が事を苦になされず。世間廣う源の頼平とお身を立てゝ下さんせ。地女一人の身を庇ひ。お名ばし汚して下さんすなと スヱテ打ち涙ぐみ宣へば。詞チヽ我もさは思へども差當るあてもなし。鞍馬山の別當は祈念をさせし誼もあり。押し付け頼む心にて此處迄は來りしが。山中で雪に逢はゞ難儀至極。今少し是で見合さん。エヽ口惜しい此の有様。地冬田に殘るフシ鳥威。是を心の屏風几帳と。思うてたもと打ちかけ給ふ男泣き。いや我よりも大事の御身と又打ち着する袖と袖。顔を見合せ泣き沈む フシ涙凍りて。小笹原。フシ野邊の霰と亂れけり。地冬の日脚の晝も過ぎ八瀬へ別るゝ小道より。小山の樣なる男ども六七人。手々に背負ふ葛籠半蓋。錢箱挿箱鏡立。太刀刀鎗長刀も一つに付けたる牛の鞍。のつさ〳〵と近付くは。代官の宿替か フシ旅芝居かと疑はる。地曲者ども立ちとまり點頭き囁き荷をおろし。夫婦の側へのめり寄り。詞コレ女郎さん見事でやす。堪りませぬと 地帶際へずつと遣る手を叩きのけ。エなめ過ぎたいやらしと頼平に寄添へば。詞エヽ不粋な。いはいでも知れた事。なんぼ美しうても器量に惚れるこちではごあらぬ。其の結構な衣服に首だけ。かうくどき掛つてからは否でも應でも帶解かす。ホヽえい若い人。あつたら前髪早い落花。ハテ立派な腰の廻り。衆道女道どちらも好物。一刀しやつぶりいはせば着る物の價値がない。美しづくで裸になりや。目に角立て惨ういふも。此の様に笑ひ〳〵いふも剝ぐ所は同じ事。二つ取りには。痛い目せぬが其方の德。ナア皆の者。さうぢやないか。地なまみだ佛と詞できよくり。頼平とは白波の フシ直下に見るそはまりなる 地山賊とも山立とも聞きも知らぬ詠歌の姫。魂も消え〳〵。詞これ申し大事のお身。地必ず短氣出し給ふなと スヱテうろ〳〵顔の顫ひ聲。詞ハテ彼奴等風情に何の短氣。望みをかくる腰の物くれるからは別儀ない。地サア受取れと拔く間も見せず。先に立つたる髭男大袈裟にうつて打ち放す。ヤア侮つて先を取られた。刻めよはたけと聲々拔きつれ 三重〽切り結ぶ。地烏獲が腕先孫呉が術。兼ね備へたる血氣の勇者。弓手馬手へ切拂へば。命を惜まぬ強盜ども。手痛く拉がれ引き色に フシ見えたる所に。地張本と思しき大の男畔の蔭より ぬつと出て。詠歌の前を引掴み。詞コリヤ

若者强張らば此の女。一刀ぎやつといはすると切先胸に押し當つるア、是々聊爾せまい。氏系圖國郡に代へたる女房。粗忽するな早まるな。地手向ひせぬと刀投げ捨て給へども。氣もゆるされず手出しもならず。一生一世の進退浮沈心を焦す額の煙氣をあせる汗の玉水フシ五體をひたすぞ道理なる。詞張本くわん〳〵と打ち點頭き。今の働き。劍術稽古の手練ばかりにあらず。天骨自然の妙處感じ入る。眼中面色端武者にあらぬ見所あり。地我とても渡世ばかりの强盗ならず。御邊が如き武勇の達人を試み。味方に頼み招かん爲詞かくいふは平親王將門が一子將軍太郎良門。父が欝憤を晴らし。世を覆さんと思立ち。妹小蝶を頼光が館へ。忍び入れ置き内通せしに。顯れて敢なく討たせ。無念彌ましの骨に徹す。我に頼まれくれまいか。此の女の一命は。御邊が返答否か。應かの地間にありと人質取りし手詰の詞。頼平はつと顏色變じ呆れ。フシ果てゝ見えけるが。詞扨は小蝶は妹。御邊は音に聞えし朝敵の張本。平親王將門の一子將軍太郎よな。ムヽウ。其の女も遊君妓女の賤しき類にあらず。江文の宰相爲成卿の息女詠歌の姫。其の姫と語らひしも小蝶が情の媒。我こそ多田の滿仲が三男。出羽の冠者頼平。兄頼信其の姫に。心を懸けられしも憚らず馴染め。微服潜行の斷落者とはなりたれども。地御邊が如き朝敵に出逢ひ首取つて。それを眉目として兄頼光頼信の心を和げ再び館へ立歸らんと欲する所。大船を呑む鯨鯢も。鐵の索綱に閉まれしエヽ、無念口惜しやと。大地を叩き足摺し踏み碎く霜柱。百千本の劍の山フシ微塵に折るゝばかりなり。詞アヽ是頼平樣狂亂か狼狽へてか。天道に背き朝敵に與し。身も家も立つ物か。女一人を庇うて。お名を汚して下さんすなと今申せしはこゝの事。地短い契りと諦め此の儘我を見殺し。此の將軍太郎が首取つて功名遊ばせ。詞一味などなされては。必ず未練御卑怯と身を悶え。心ばかりをせき上げてフシ叫び。給へど動かせず。詞サア頼平。一味か但し女を殺すか。返答遲くて見苦し如何に〳〵と詰めかくる。エヽフシ是非もなし。地源の頼平がたとへ朝敵となり。一生を捨つればとて。召連れし女をむざ〳〵と殺させ。我一人の恥辱ならず。詞先祖六孫王迄源家の氏の穢れ。サア今日より骨肉親類の好みを振捨て。地違變なき一味ぞと。皆までいはせず打ち消し〳〵。物が憑いたか天魔の魅入れか頼平樣と。叫び給ふを息立てるなと袂を口に押込み良門大きに悅び。詞流石源の頼平果敢の思ひ切り卽座の一味。亡父將門冥途の大慶是に過ぎず。上臈。地さこそ苦しからんとつき放せども正體なく。スヱテ伏し沈みてぞおはします。詞チウ頼平。足下は淸和の庶流桃園親王の苗裔。我は桓武の正統葛原親王の後胤。王孫更に遠からず。王位を望むに憚りなし。地運に任せて義兵を上

けん契約の盃。銚子是にと牛引寄せ。差添抜いて耳際ずんとひつそぎ生血を。フシ合子に絞り受け。詞是こそ唐土春秋の會盟。牛の血を啜つて金鐵の誓の法。我が朝の起請神水同然固の盃。地年かさに良門よりとずんど干して頼平の前に合子をさし寄すれば。押戴きずつとほし。歃血の義を結ぶ上は盡未來變ぜぬ魂。千騎萬騎と思召せ。地早々思ひ立ち給へと。跡先踏まへぬ若氣の契約聞くも悲しき詠歌の前。詞これ。なう〳〵大將の一言は。地善惡の堺ぞやと止めても押へても。聞き入れなければ詮方なき。染めてかへらぬ墨子が白絲 フシもつれの末こそうたてけれ。地良門が物見の鬼同丸あわたゞしく立歸り。詞源の頼信宿願のため鞍馬詣。歸るさは此の道と承り候と大息ついで言上す。將軍太郎すく〳〵踊り。サアしてやつた妹が仇。彼奴を討取り軍神の血祭。何と頼平不同心か。ヤア只今の誓の上はお尋ねに及ばず。一味始めの證。兄頼信が初太刀を仰付けられかし。チヽウ満足々々コリヤ鬼同丸。此の牛を屠り。腹の中に深く忍び。地野飼の牛の死したる體に見せ頼信を欺き。一太刀刺せと懇にいひ含め。頼平伴ひ岨蔭に オクリ忍び〳〵待つとも白雪に。詞源の頼信朝臣。手廻り少々御供の。中にも一人當千の渡邊の綱。詞直垂の下に腹巻し。千段籐の弓に征矢取添へて。地御馬の口に添うたるは。さも勇々しけに。頼もしし。ナホス 文彌頼信袖を打拂ひ。〳〵。面白の景色やな。年ある御代の印には。野にも山にも積もる白雪と。古歌を吟じて行く駒の。蹄に花を踏ませては。是も惜むか。初深雪。地手綱をひかへあれ見よ渡邊。詞あの原に捨てたる牛の死骸。時々腹のうごめくは心得ず。地生なき物の動くにはあらじ。我が心の疑ひもやと宣へば。詞何條さる事の候べき。地怪しきを見ながら打捨て置くべき様なしと。弓取りなし弦道廣く引きしぼり。切つて放せば羽ぶくらせめ。ずつはと立ちし矢よりも早く。牛の腹より鬼同丸つつと現れ。エヽ仕損ぜし口惜しやと。頼信目がけ駈けりよる渡邊片手に引掴み。うんといはせぎうと踏みつけ。詞ヤアねつそりの牛盗人。ちよろい工のあめた牛。もう〳〵外に同類ないか。我が君を一突きとは犢のあべかこう。地天角地目天罰自滅。牛の最期は立ち所 フシ首捻切つて捨てたりけり。地山際に一聲響き。起り立つたる伏勢隙間もなく取り圍み。詞ヤアノ〳〵頼信妹小蝶が仇を報ふ。將軍太郎が恨みの劍。遁れぬ〳〵サア腹々と罵つたり。渡邊かつら〳〵と笑ひ。何腹とは腹の皮。一代ならず二代の朝敵。切平ぐる武將の役。王城守護の多門天。鞍馬土産は汝が首と地抜きつれて渡し合ふ。味方は主從三十餘人素肌武者。敵は十倍三百餘人鎧武者。喚き叫び入亂れ。打ち伏せ切り伏せ追ひまくる野風。山風吹雪を誘ふ。軍は花か フシ降る雪は。絮を飛ばしてひら〳〵〳〵。

暫時の内に野は眞白。白雪變じて紅の。死骸を埋む尺餘の雪。よろめき打合ひ戰ひしは。危かりける三重へ次第なり。地巷軍の瞬く間に多勢大半討ち取れば。味方に殘るは主從二人勇氣撓まぬめつた切り。敵はじ物と將軍太郎。殘黨引具し落ちて行く。詞ヤア何處迄もと賴信朝臣。地追縋うて追駈け給へば渡邊聲をかけ。詞盜賊半分の惡黨。大將の御手には勿體なし。某仕らんとかけ出づる。地雪折松の小蔭よりつつと出でてかけ隔て。詞賴平を見忘れしか。將軍太郎に加擔人と會釋もなく切つてかゝる。地思ひがけなき渡邊さすが主君と容赦して。受けながし組みとめんと。あしらふ刀勢に乘つて打つ刀引き外し打ち落し。むずと組んで取つて伏せ。弦袋の替へ弦しごき高手小手に縛め。詞こはそも如何なる天罰にか。地源氏の朝敵に與し家來に搦められ給ふ。名折れ弓矢の冥加に盡き給ふかと呆れ。果てゝぞ立つたりける。地起きつ轉びつ詠歌

の姬。雪踏み分けて走り寄り。なうあさましい繩目にかゝり給ふか。千萬いうても返るにこそ。情知るは武士よ。我を代りに千筋の繩。一分試しに切りさいなみ。賴平樣を助けてたもと歎きあこがれ給へども。渡邊は見向きもせず。賴平聽する色なく。詞斯かる大義に與するからは。首は獄門と覺悟せであるべきか。今更驚く繩目にあらず。源氏の嫡孫賴平が身の難儀に及び。手の裏返す根性さけ。末代の譏り無念至極。殺さるか助かるか。今日の落着極るまで我は啞聾。地サア無言ぞと齒を喰ひしばりフシ思ひ。切つたる眼ざし。地さゝ其のお心に定まるからは我とても一心する。一所に生死かたづく迄物いはじ聲立てじ。夫婦同じく無言ぞと。口をつぐみ目を見合せ言はで物思ふ音なしの。瀧と涙は漲りてフシ雪は霙と解けにけり。地時こそあれ賴平の乳兄弟箕田次郎纜。行方を尋ぬる旅出立。かくと見るより息を切らして駈け着け。渡邊

をはつたと睨めつけ。詞ヤイ慮外千萬。何科あつて我が君に繩かけし。詠歌の姬は賴信公。御心を懸けられしといへども。定まる御臺にもあらねば。賴平公に於て聊不義の誤りならず。一旦若氣の戀慕の習ひ。兄親の禮を愼しみ。陰をし給ふまでの事。地繩をかくる科なしと解かんとする手をもぎ放し。詞和主が母は渡邊が爲には指渡した伯母。然れば和主とは親しき一家なれども心安きは私。まさ／＼主君たる冠者殿に。麁忽の繩をかくべきか。慮外とは過言千萬。將軍太郎に與し。御兄賴信公の鞍馬下向を待伏し。たつた今大合戰紛ひなしの朝敵。指でもさゝば御分も一味。誤りなき伯母御前迄。罪に落すか。狼狽者と繩を持へ引つ添うたり。ナニ將軍太郎に一味とや。ハツ言語道斷の御所存。地情なやあさましやと。賴平に縋りつき驚動の涙にくれける所に。大將賴信將軍太郎を見失ひ。齒嚙みをなし歸り給ひてヤア箕田次郎。詞天下の

怨敵となつたる頼平を庇ふは汝も朝敵一味よな。顏色を損じ。朝敵一味かとはお目が明かぬ曲がない。もとより冠者殿の乳兄弟。大殿賴光の御眼識。頼平が後見と。仰出されし上は死するとも同じ枕の某。落ち失せ給ふも知らず。將軍太郎に與し搦め捕られ給ふも知らずしては。武名永く廢り世上の誹り笑ひ草。地一家の恥辱大將の御情。科の實否極るまで某に預け下さるべし。此の願ひ叶はずば腹搔破り。今生のお暇と申し切つたる荒訴訟。頼平つつ立ち箕田次郎をはたと蹴のけ。頼信の前につつと寄り。首討ち給へ首討てといはぬばかり。綱に向つて首差伸べ。命を惜まぬ勇氣の振舞。頼信目もやり給はず。詞ヤア箕田次郎。汝が申し分。弓矢取る身の尤千萬至極せり。朝敵に極つたる頼平。暫時も助け置くべきにあらねども。河内守頼信は女を奪はれし腹立ち。無體に弟を切つたるなんどいはれんも口惜し。殊に汝が老母は綱が伯母、事過つべき者にあらず。地お事が忠心に感じ頼平夫婦。箕田次郎に預け置く。これ頼信が私ならず。頼光の仰せと思ひ油斷なく守り。重ねて御下知を相待つべし。ハア、と悦ぶ額を雪に擦付け〳〵。冥土の人の歸りし心地。フシ繩もとく〳〵。地いざ御立ちと頼平の手を取れば振り放ち、コハリ積る雪をかき寄せ〳〵。三尺許りに押しかため。兩手に取つて差上げ。地親子兄弟の天倫を紊り。朝敵に與する上は。今日助かる命聊本望ならず。今降る雪は出羽の冠者が魂、其の仔細といつぱ。雪といふ文字にはすゝぐともきよむるともいふ訓あり。今こそ太刀刀をもがれ。丸腰無刀の囚人となつて。恥辱の雪に埋もれ。名を埋むといへども見よ〳〵。終には恥を以て恥を雪ぎ。惡名を以て惡名を淸むる、此の詞が通るか。違ふか。頼平が身の果を。よつく見よと頼信の膝許近く。かはと投ぐればはつと碎けて地ツメ散亂したる六の花。をちこちは皆白妙の雪か。雲か八寒八風。人の肌骨に砭し、齒を喰ひしばつて歸らるゝ。敵に取つて强からねば味方に。招いて益もなし。邪正一致善惡不二。一張一弛は武勇の根元傳はる。弓矢ぞたくましき。

第　三

地狐は尺寸の穴に隱れて千里の虎を圖り。一賢の唯々は千愚の囂々を塞ぐ。武將源頼光朝臣市原野の一戰。御家督頼信切り鎭め給ひ帝都穩かなりといへども。將軍太郎良門蹤を晦まし落失せしかば。五畿七道はいふに及ばず山林僻地の隈々迄。尋ね求むる配符の下知今や訴へ來るかと。玄關廣間評定所。一間々々の諸役人心を屈し フシ待ち居たる。地爰に詠歌の姫の御父江文の宰相爲成卿。北の方萩の對。息女詠歌の姫頼平に誘はれ都を出で。詞剰へ頼平朝敵となる、其の科逆鱗甚しく。朝家の裁斷として宰相夫婦。閉門の罪に押込められおはせしが、地今日罪科極り武將頼光に。其の沙汰

すべしとの勅諚にて。左右の將監將曹等前後を圍み。賴光の御館に來臨ある。卜部の季武碓井の貞光仰を蒙り受取れば。警護衛府の官人等 フシ大內にこそ歸りけれ。季武貞光夫婦の人を。決斷所に誘ひ謹んで。地出羽の冠者賴平野心を構へ。將軍太郞に一味により。賴信是を搦め捕り天機を伺ひ候へば。苟且ならぬ天下の大事兄弟の因は私。地朝敵征伐は將軍たる身の存ずる所。死罪か流罪か古例古法に任せ。賴光が所存の通りに計らふべしとの勅諚にて。詞賴平は斷罪に極り候。扨御前の御事は今日迄は朝廷の御計らひ。今日より武家に仰付らるゝ條。官職を削り冠裝束を剝いで。夫婦共に布衣跣足の平人となし。都の內を追放すべしとの綸言もだしがたし。賴光直に面談にて申し渡すべき所。右勅諚の上は今日より土民町人同然。我々兩人承り。烏羽大路にて追拂へとの下知。地イデ冠裝束剝取り申すと。兩人左右に取付けば是はとばかり北の方。押倒て聲を上げたゞ待つてたべ。此の度のお咎め御尤とは申しながら。宰相殿の身に取つて毛程も誤りなし。詞賴平に添ふ詠歎の姫。緣のつりとの事ならば是一つの申し譯。もとあの姫は宰相殿の胤にてなく。自ら異人に添ひて儲けし娘。地宰相殿へ嫁入しは詠歎の姫が五つの時。早より連れし我が子なるを。表向は宰相殿と二人が中の娘といひなし。今日迄育てしは申すに及ばず。誰々も能く知つたる事。我が胤ならぬ娘を隔てなく養育せられし。其の恩も報ぜず剰へ娘故に。家も身も滅す此の悔み。宰相殿は心恥かしく色にも出し給はねども。自らが心の中。悲しとも フシつらしとも。高きも賤しきも女は夫に威を付け。夫の恥も雪ぐこそ本意なれ。我ゆゑ夫の身の滅亡。此の憂き辛きは筆詞にも盡くされず。姫が親は此の母一人。如何なる刑罰死罪にも行ひ。宰相殿の御身の立つ申し譯。言上してたべ兩人と。人目も恥ぢず泣き叫び スヱテくどき給へば爲成卿。アヽ未練ない。胤こそわけね今日迄。娘よ父よといひ語らひしは必定。詞縱ば斯樣の災難なく。賴信殿の御寵中になり。世に侍かるゝ時は押默つて實父の顏。地我が子で無しとはよもいはじ他人さへ人の落ちめ。況んや隔てなく愛をなし。孝を盡せし詠歌の姫。今更我が胤ならずとは此の爲成は得いふまじと。制し給へど聞き分けなく。いや〳〵姫に實の父は無し。父にも母にも我一人。御訴訟賴み參らすと。殿上雲井の上臈の。家來ともいはん武士に手を下げ詞を下げ髮の。疊に打付け打亂れ。聲も容儀もくづをれて歎き。給ふぞいたはしき。地季武貞光哀れとは思へども詞を荒らげ。詞御卑怯至極。養子猶子も世の習ひ。縱へ胤腹變りても。一旦世間披露の上は親子の名は削られず。殊に朝廷にて其の役々の公卿大臣彈正臺の御詮議極り。解官追放との綸言。主人賴光違背叶はず。却つて違勅の罪を重ぬる

道理。地一先づ帝都を開き御詫言のことわり。幾重にもあるべきこと我々は勅命主命。つれなく思召されそと。すつと寄つて冠はたと打落し装束かなぐり。詞江文の宰相爲成夫婦御追放。地役人參れと呼ばはれば雜色放免。割竹鐵棒あたりを拂ひ。季武貞光跡を押へ。林を辭する狩場の鳥勢子に追はるゝ風情にて　オクリ歩み。給ふごンシあぢきなき。地百年の雪霜一身に積り。鬢髮氷の銀擶へ。朱鞘の大小古風に染める袴の襞顏の襞。一理窟ある持代親仁玄關に立ちかゝり。詞愚老は佐々目の少貳と申す者。武將賴光君へ直訴申す事あり。地罷り通るとずつとはひりの柳の間。櫻の間の番衆色立ちて。ヤア無禮者狼藉者。下れ退れとざはめけば　フシ返答もせず盤桓たり。大宅の忠正立出で。詞自分の伺候か但お使者か。御舍弟出羽の冠者賴平のお詫ならば無用。取次ぎ申すこと叶はず。地お茶でも參つてお歸りと。素氣なく立つて入らんとす。老人けら／＼と笑ひ。詞取次ぎ賴む程なれば。宿所に踏反り返り。娘や孫に足さすらせ。寢ながらの一筆啓上でも事は濟む。賴光の耳へ。此の口から言ひ込む天下の大事。玄關端近で打明けうか。よし／＼奥のとろくにひつかゞみ。人怯めずる大將に逢はんといふも無骨なり。御臺所に對面せんサア奥方の案内々々。女中々々と殿中響くしはがれ聲。忠正居丈高になり。詞ヤア緩怠至極。浪人か主持かいかさま雜人匹夫とも見えず。貴人の御殿。出仕退出の格式は知る筈。殊に武將の御館。地のさばり過ぎたる振舞醉狂か老耄か。引立てられよ當番衆。心得手々に取卷く鼻捻。鐵杷長脚鑽狼牙琴柱。白銀磨きこきらめく老眼。八方見開きにつこと笑ひ。詞怖し／＼。ヲヲこは。蝨の樣なる年寄に是程に立ち騷ぎ。まそつと強い若手の敵に出逢うては何程に騷がうぞ。鐵把長脚鑽が怖しとて。いふ事いはぬ少貳でなし。地サア打つて見よとちつとも怯れぬ勢ひ。將軍太郎が殘黨ひやうげ者に紛らし。我が君に近付きよらん謀。それ撲ち殺せ叩き殺せと犇めく所へ。御奥小姓聲々にこれ／＼　詞其の者荒く致すな我が君御見參との諚意。地シイ／＼といふ警蹕に。各持ちたる兵具を捨て。鎭まる内に御大將悠然として御座に着かせ給ひければ。無禮田夫の老人も。始めの一徹引替へて。フシ威儀を正し蹲踞する。稍あつて御大將。詞佐々目の少貳とは翁よな。終に名も知らねば面も見ず。譬へば遠き道を行くに。山坂海岸の難所あるが如く。上一人と下萬民の間は次第々々の取次ぎ。下の誠上へ通ぜずと思ふ。切なる心より所を忘れ。當番に對し我が儘を言ひたるにてぞ有らんな。自分の訴訟か。但し賴光が政道に。邪あるを諫言の爲か。氣を鎭め心底を。殘さず語れと御諚の中より。老人御前の疊に額を付け。泣き萎れたる顏をあげ。アツア有難い。無禮狼藉の御咎めもな

く。心を鎭め申せとの御慈悲心。地貴人と下人との心は斯程にも變りしか。柳に木傳ふ鶯鳩の小鳥が。九萬里の空を飛ぶ。鵬の大鳥を笑ふとは。爺めが身にひつしと存じ當る。フシさりながら。上天子大臣より。眞柴かる山賤藻鹽やく蜑迄も。變らぬ物は親子兄弟の恩愛。詞如何なれば我が君は。御弟を憎み給ふと。申しも果ぬに御氣色變り。つつと立つて入り給ふ。續いて駈寄り禁色の裾。しつかと縋れば怒れる御聲、詞何事をかいふと思へば。つきもなき親子兄弟の噂、推量に違はず賴平めが訴訟よな。何者に賴まれし。天下の鏡となる賴光が心。イヤ汝等が知るべきか案外なりと御諚ある。老人憚る色なく。イヽヤ弟を憎むを以て天下の鏡とは申されまじ。生れ年こそ跡先なれ。弟も同じ親の血筋。兄も弟も心に變りなけれども。若き時は血氣内に強く。兄親の心に叶はぬがち。其の度毎に血脈を捨てば。日本國天地人倫の道絶え果つるを。鏡にしては受取られず。中にも賴平殿は乙の若君。御母君の御愛子。是を殺しては御母への御不孝。不孝も天下の鏡か。其の上一代一度の訴訟は。何事にても叶へんと堅き契約の方もあり。武將の御身に契約を違へ給ひて是でも鏡か。愚老が目には破鏡。これ申し鏡の曇りは硏けば晴るゝ。如何な上手の鏡硏も。破鏡はつぐにもつがれず。天下を照らすは及びもない事。地どこぞ田舍の山寺の。鐘鑄の奉加に入れ給へと。齶ばかりのフシ大口明けけんら〳〵とぞ笑ひける。地賴光御座に歸り給ひ、弟を憎むとは筋なき事を申す者かな。賴平めに連添ひし。詠歌の前の父母江文の宰相夫婦。勅諚を以てたつた今追放。況んや本人たる賴平宥免叶はず。其の上一代一度の訴訟叶へんと。詞質を取つて我を蔑する胡亂者。其の契約は賴平に乳房を含めし乳母。則ち渡邊の綱が伯母。綱が未だ若年の時つれ來り。父母なき孤兒ながら筋目ある悴。弓取に守立て。召仕へとてくれたりし其の褒美。所領は受けず財寶は貪らず。訴訟あらば何事にても。一度は叶へんと契約せしは。渡邊の綱が伯母なるぞ。佐々目の少貳といふ者に契約せず。立つて歸れと宣へば。ムヽウしかと伯母には御契約ありしな。其の伯母こそは某。君にも覺えある故伯母が便りとあれば。一子箕田次郎幾度か參つても。御門より追ひ歸し御取上げもなき故に。地我等直に參りしも兩三度。表裡二ヶ所の御門御臺所迄も。詞伯母が參れば通されず。取次ぐ人もなき故男の形にまなび。潤ひもなき雪折の枯竹をため直す如くに。屈みし腰骨押延はし指も習はぬ太刀刀。地取次ぎ賴まず無體に御目にかゝらん爲の此の有樣。サア伯母が一代一度の。御訴訟とて此の上なし。サア御契約は何と〳〵と詞詰め。詞イヤ〳〵。賴光が契約せしは女なり。汝は佐々目の少貳にあらずや。罷り歸れ地とつれなき御諚。エヽ理窟過ぎたる御大將。女になつて見せ申さんと。つつと立

つて袴の紐引きかなぐり。ぐる〳〵解くか常陸帶。重ね衣裳ひらり〳〵と。脱ぎ捨つれば百年に一年足らぬ姥櫻。艶も枯木の裸身の。乳房は賤が干蕪瓢の湯文字の紅に。紅葉しからむ肋骨肉も落ちてさゞ波皺。いとゞ女は骨細の膝折屈め畏り。北山風吹通し疊も冷ゆる大廣間。五體も凍えがちがち〳〵。顫ふ齦をくひしめ大聲上げ。詞賴平公へ乳を上げお目通りに仕へし者。異國も見ぬく御眼力よも見忘れ給ふまじ。地佐々目の少貳と名乘ればとて。男と女御覧じ分けであるべきか。ようも〳〵お心づよう婆めに物を思はせらる。餘りむごき我が君やと。かつぱと伏して歎き居る姿は地獄の繪。竹の根を掘る罪人の。罪を悲しむ如くにてフシいた〳〵。しくもあぢ氣なし。伺候の人々袖引合ひ。詞最前の振舞といひ善惡に強き婆。羅城門の變化が渡邊の伯母に化け。地取られし腕取返せし。鬼さへ眞似る伯母なればフシ道理々々と呀きける。地奥にも斯くと聞ゆれば御臺所のお耳に立ち。取敢ず御出あり。なう渡邊の伯母か。珍しやゆかしや始めより聞くならば。直に奥へといはん物心には嘸恨み。若い時より愼み深いそなたが。百になつても女の肌身いとしやよく〳〵なればこそ。見る目も悲しいあれ早う物着せよ。あいといふより女房達下襲よ上着よと。着せても押しやり打ちかくれば押しのけいや〳〵。イヤ着せて下さるな。あの深山のこ猿が。形は人に似て皮を着る故獸。皮を剝けば寸分人に違はずと聞く。我も猿同然。大額にぬき上げ。男わけの白髪撫でつけ。詞此の上に皮着ては。君もお見知りなき佐々目の少貳といふ男猿。其の儘皮着ずに。お見知りある賴平の乳母。綱が伯母。御契約は違へらる。地誰か一人取合せどこへ取付く枝もなき。木から落ちた猿婆。凍え死なせて下されと顫ひ上り〳〵。恨みくどく唇うるみ舌ちゞみ。詞エヽ恨めしいつれない御夫婦や。血を分けぬ他人さへ氣を痛め。いとほしや詠歌の姫の物思ひ。我が子箕田次郎毎日毎夜御門に立つての御訴訟。地是等の憂目に比べては。母が裸はフシ數ならず。地此の世で綾錦八重九重の重着も養ひ君の命乞さへ仕果せず見殺しにする罪科。とても三途河の奪衣婆に剝取らるゝ。着て何せんとあたりの小袖。おしやり〳〵わつと叫ぶ聲限り。枯憔けたる瘦骨を。搾る涙は八寒の氷といてる計りにて。御臺を始め女房達。フシ共に袖をぞ絞らるゝ。地見る目に堪へかね御臺所立寄りてお手づから。小袖取上げ打着せ給へば。數多の女中立ちかゝり。袖を通しつ襟引き繕ひ前かき合せ。涙に沈む賤機帶結べば解く。伯母が手を取りお膝の上に引きよせて。詞なう乳を含めし誼にさへ左程迄の心盡し。產み落し給ふ御母尼公の草葉の蔭の御苦しみ。滿仲公の御子とては御兄弟只三人。高きも低きも乳の末とて乙は猶いとしき物。御母尼公御臨終

の今はの枕自らが手を取つて。亡からん跡にも頼平を小舅とばし思ふな。おことが胎内より產み落せしと思ひ。地憐みかけてとばかりにて。お目を塞ぎ給ひし面影は。今とても忘られず御在世の間は。六孫王の嫁君。御威勢といひお身の榮華。肩を並ぶるフシ者もなく。此の世を去り給ひ御弔ひ御追善。何に愚かもなき故に。自らが嫁仕の御奉公は一つもなし。せめて頼平殿の命を申し助けず。御位牌のいひ譯なく。ニ、いひがひなき女と。未來よりの御恨み悲しくやる方なく。樣々申し宥めても。詞二代の朝敵に與する頼平。私ならぬ朝廷の囚人。母の遺言とて許しては。國家の政道暗闇なりとの御立腹。地此の上は自らも思ひ切る。頼平殿の事とてはふつつと思ひ捨てゝたも。やいの〳〵と上はつれなき詞の裏。推量せよと心の目まぜ。御袖のかげに手を合せ。頼光の目を忍び伯母を拜み伏し拜み。頼むといはで頼むとは涙が。いふぞ。

フシ痛はしき。大將更に見遣りもせず默然として在します。御膝元につつと寄つて聲を荒らげ。詞エ、心强い我が君。强いばかりを勇士とは申されまじ。暴虎馮河して死するも厭はぬ大將に隨はずと。孔子も戒め給はずや。二代の朝敵に一味する。其の頼平の身寄の我々皆同罪。サア一番に此の婆御成敗々々。獄門の木を常よりは。五尺も七尺も高々とかけさせ。政道に私なき。武將の心を一天下に顯し給へと。膝立て直し憚りなく。フシ座を打つてこそ急きかけけれ。地頼光甚だ感嘆あり。言行揃ひし義者の振舞。渡邊の綱が伯母といはんに恥かしからず。詞始めよりさは見つれども所存計りがたく。佐々目の少貳と聞き流せり。頼平が罪科。明日首を討つに評定極り助け難き命なれども。一旦の契約志もだされず。今日は二十七日先考滿仲の御命日。今日より七日を限り來月四日迄。頼平が命をお事が爲に助け預くるぞ。其の間に敎訓し野心

なき心底世に顯れ。江文の宰相勅勘を免され歸參あらば。永く命を助くべし。さもなくば七日過ぎて四日の曉。八聲の鷄を限りに。討手を遣し首刎ぬるぞ。地其の時我を恨むなと御座を立つて入り給ふ。伯母ははつと頭を下げ。又繰り返す嬉し泣き。御臺所もフシ又伏拜み。地殺さるゝを助かる恩は乳母の母なり命の母と。悅ぶ内にも七日の日切暮るゝ月日は假寢の夢。二度の憂目を見ようかと思ひ過しの女心。コレなう氣遣ひ遊ばすな。惡に强きは善にも强し善と惡とは溜水。導く方へ隨ふ習ひ上々吉の和子樣に仕立上げるは婆が手際。詞箕田次郎詠歌の姫君さぞ待ちかね。長居も恐れ地ヤアゐい〳〵の聲ばかり居竦りて立ち兼ぬれば扶くる上臈女房達。褄引合せ一つ前。三つ子も同じ老の身は。帶も抱へも人任せ。姿は老女頭は親仁。下戶は無くとも妖物はフシ有る世なりとぞ噴出しける。なうこれ〳〵。地嵐烈しき道すがら。頭も冷えんと

お心付きし御着綿。御恩も深き丸綿帽子名殘は盡きぬ藜の杖。乘物にて送らせんそれ〲と宣へばァ、勿體ない。詞乘物まだるい氣が急ぐ。杖さへあれば今でも二十里三十里は。道りかねる婆ではおじやらしませぬよ。ナウ久しう腰をのして痛かつた。思ひの儘に屈めんとおしよぼからげの杖ほく〲。つく〲思へば茨木童子は伯母に化け。おのが腕を取返す今の伯母は男に化け。頼平の命を助け歸る姿は又伯母御。額を隱す渡邊の庵へ。こそは 三重 歸りけれ フシ天が下なる。人は皆。地君が田蓑の島近き。渡邊の伯母が言ひのぶる。七日も今日と夕露のあだの命の朝顔は。明日迄待たぬくだかけの。鷄限りこそ フシ果敢なけれ。浮世の頼み。今日の日に。皆腰折の詠歌の姬。母の讓りの増鏡向へば是も名殘ぞと。親には誰か 江戸つげの小櫛の鬢水と。涙はら〲はらやに落す フシ露の身の。最期たしなむ。夕化粧。映す我が身は フシ母の顏。詞ナウ母樣。是は〲御機嫌よい笑顏拜みましお嬉しや〲。詞私が事を苦にせずとも。御無事で存らへ下さんせと。ゆふべの烏夕雀塒求むる聲々は。フシ思ひもなげに羨し。地箕田次郎纜世の取り沙汰を聞合せに。今朝より出でて立歸り我が家を見入り頰冠り。猶引きしめ顏を包み作り聲。詞ヨウ〲見事々々。夕暮方の夕顏化粧。歌の文字は三十一字それを打ちこえ三十二相の詠歌樣。大唐四百餘州の美人の開山。楊貴妃虞氏君西施李夫人王昭君もそこら〲及びもない事。日本は六十餘州神の嫁御のこの〲この花咲くや姬。富士の裾野に竹取の翁が拾うた寶娘。衣通姬も跣足で裸で逃げさんしよ。天から降つたら下照姬海から湧いたら龍宮の乙姬。佐保姬織姬天人の藪入りか世界に響へる花もなければ。紅葉も及ばぬ翡翠の黑髮しんとろ〲三日月なりの目元の 地釣針。つり〲釣つた殿御はやれ扨ひら平樣世界の男の命の山賊。詞沖つ白波立つ名もわざくれ。體も屍も熨斗を付けて進上申す詠歌の姬樣。おや〲やつちや〲と フシ譽詞。地はつと興さめ詠歌の姬逃げ入らんとし給ひしが。能く〲見れば箕田次郎。詞イヤア纜殿か此方は本氣か。頼平樣のお命は曉の雞限り。年寄つた母御の心遣ひといひ。此の家内に人心地のある者は一人もない。時も時折も折今朝より邸を出ありき漸く今歸つていつにない大聲上げての戲言。人のいふ事も叱りさうな乳兄弟のこなた。私を天人か楊貴妃か。譽められたうない聞きたうない。地日頃の忠節だて皆僞り相手になるもいま〲しと。駈入る裾をしつかと取つて頰かぶりかなぐり捨て。詞此の纜が戲言つくす僞りいふと。此方の目にも見事見ゆるか。此方の眼に見えはせまい。此方に敎へらるゝ迄もない頼平公のお命。雞を限りとは七日前から知つて居る。若し頼光御兄弟の憐み七日というて明日へも明後日へも延

びるか。都方の取り沙汰聞かんと思ひ今朝より宿を出で、淀柱本の邊まで参りしに。なう武將の詞は綸言同然。頼平公の討手として。むいき者の坂田の公時罷り下るに付き。用船に標を立て川筋きびしき舟どめ。扨は頼平公一期の落着今宵にありと。息を切つて歸る所。客待つ暮の君傾城が姸自慢の紅白粉。只今褒めたは譏るの裏。詞で面をくらはしたが。ちつと胸へこたへたか。痛はしや頼平君廣き世界に御身をせばめ。末長きお命を今宵に縮め果す事。元の起りは其の姸ゆゑ。武將頼光を始め奉り。御兄弟御一門の恨みは御身一人。それのみならず御親父江文の宰相殿。勅勘受けて官位を削られ。追放の身とは何故皆其の紅白粉のゆかり故。誠女の道を申さば。討手の向ふ今はの際まで縋つて御意見申し。お命を延ばすが夫を思ふ眞實。此の眞實がないからは顔は美人心は佞人。其の水くさい心とも知らず絆され給ふ頼平の。

御運の程がいたはしい。エヽ見限り果てたる女中やと。歯にきぬきせず眼に角。姫君ちつとも驚かず。ハテ妥なお人はきやうとげな。頼平様のお命今宵限りとは。今更驚く事かいの。元の起りは詠歌故と御兄弟御一門の恨みとや。尤なれども自らが父母は。又頼平様ゆゑと嘸恨み悔みそれは互に人の習ひ。高いも低いも夫に連れ添ふ女の道は。一旦も二旦も御意見申し承引なければ是非がない。夫婦は一所善人なれば我も善人。悪人なれば同じ悪人。先へは死ぬるとも片時も跡へは後れぬ魂。コレお侍。討死と極めては。鎧物の具爽かに出立ち。見事に死ぬるでないかいの。まつ其の如く源の頼平が妻。詠歌の姫が最期に取亂し髪髱にも櫛の歯入れず。けはひ化粧も繕はず。見苦しい死骸といはるゝは誰が恥。亡からん跡まで流石頼平様の妻よ北の方よと。お名を汚さぬけはい化粧。客待つ暮の君傾城の夕化粧と。一つに見る箕田次郎殿。

いとしや此方の目は眩んだのうと一心すわりし。聲高く。漏れ聞えて頼平公。母は老妻戸荒らかに引明け氣色をかへ。若き武士に似合はぬ愚痴の意見。是にも非にも頼平が歯より外へ出せし詞は鐵石。金剛舍利は碎くるとも變ぜぬ心。女などの意見を聞くべきか。イザ詠歌此方へと振返る後より。伯母禪尼が弓杖の村重籐。おつ取りのべて丁々。名殘り情もなう悲しやと。取りつく詠歌を取つて引き退け叩き伏せ／＼。扨曲もない御身の詞は金石より堅く。此の婆が頼光へ。御意見を烏滸さんと番ひし詞は土か砂か。とつくに頭も剃りこぼつ筈なれども。甥子といひ養ひ君大事の弓取。もしもの事のある物と。惜しからぬ白髪の十筋右衛門に元結かけし其の徳に。此の度の訴訟を嫌ひ。關白殿の御使にも御對面なき頼光へ。婆が額に角を入れ。佐々目の少貳といふ男になりし故にこそ。七日のお命は

延ばしたれ。地最早浮世の望み是迄と剃りこぼちしかひもなく。直らぬ其の根性に瞋恚をもやす剃つて悔しい。乳を含めし此の婆こなたの片意地は知つて居る。善惡共にいひ出す詞變ぜぬ癖。そこを押付け強意見する婆が癖は覺えがござろ。詞サア耳ある證據に聞いてもらを。眼ある不祥に是見給へ。御父滿仲公朝敵退治の御弓。地不孝の忰を諫めの杖渡邊の伯母とおぼしたら。三五の十八大きに當がちがを。詞痛はしや所縁とてあの姫君の御父。江文の宰相爲成卿。勅勘官位を削られ。都の内を御追放のこと聞きながら馬耳風ぢやの。御身を世繼に立てぬといふ賴光への恨みか。兄賴信を妬んでの朝敵か。地金石より堅き心を婆が痩腕に。打砕いてくれんと又振上ぐる。腕に縋つて暫しとばかり。涙ながらに聲を上げ。詞二十四孝の伯兪が。父の杖の弱りを歎きしは孝行。今賴平が滿仲の御持弓に打たるゝは不孝の咎。理非善惡を辨へぬ我ならねど。地焦りたる種は芽を生ぜず落花枝に歸らず。たとへ命は助かりても嫂となるべき詠歌の姫を妻として。のめ〳〵と兄弟諸武士と座を連ね膝を組み。世上の後指生きたるかひのあるべきか。詞よし是は味方一家の恥ばかり。將軍太郎は桓武天皇の末孫。出羽の冠者は淸和天皇の流れ。互角の大將晴業の契約。牛の血を神水として言ひ交せし詞を變じ。地源の賴平が女を人質に取られ詮方なく。太刀打の勝負は叶はず僞りの一味をして。當座の難を遁れし臆病者。卑怯者源氏の武道の奧知れたりと嘲り笑はれ。他門に恥を殘してもおめ〳〵と存へて。兄賴光の御爲になるべきか。詞又我契約の詞を違へずあつぱれ源氏の殿ばらは。詞を變ぜず信を堅く守つて。討手を引受け仁義の刄に死したりと。譽を取つて死したるが賴光の爲になるべきか。地勿論親子の意見一々理に當つて尤なれども。武士の上には道に背きて道に當ること。詞譬へば黃金は寳の最上なれども。高山に登り喇渇して疲るゝ時は。千金萬金も一杯の水には劣つたり。地錦は上なき美服なれども六月の炎天には。一重の麻の太布に蜀紅の錦も及ばぬぞや。然れば何事も時ぞと思へ夏來ては錦に勝る麻の小衣と詠ぜし古歌も。武士の身にひつしと當る。詞市原野の合戰に雪といふ文字のよみごゝろ。恥を以て恥を雪ぎ惡名を以て惡名を淸めんと。兄賴信に雪を摑んで投付け。番ひし詞を無になしては兄弟はなほ弓矢の意地。泣寢入りには了はれず。此の間を料簡し片意地とばし恨むるな。地討手の武士は誰人か禮儀を以て向はゞ。我も禮儀を以て尋常に切腹し。首を討たるべしと思ひしに。武勇自慢の猪武者公時が向ふとや。詞定めて朝敵退治なんどと罵るは必定。其の時某將軍太郎良將が副將軍。出羽の冠者賴平と名乘つて。腕の力太刀の金の續かん程。思ふ樣に切り散らし。地恨みの腹十文字に切り破り末代に名

を殘さん。ナウおことが乳を含め養育して。人となせしは誠の母も同然。木石ならぬ賴平が志をむげにして。　恩を忘るゝ事はなし。恨みを晴れよとばかりにて伯母が袂に縋り付き。スヱテ聲も惜まず泣き給ふ。地御有樣の痛はしさ。地伯母は覺えず聲を上げ。ナウ其のお心をとつくに打明け給はぬ。あつぱれ御器量大將やそれとも知らず此の婆が。鼻の先の走り智惠。惡雜いひたる舌たゞれ打擲の鐵腕も。折れよ腐れよお主の罰天の罰。免させ給へ若子免して下され と。持つたる弓をからりと捨て抱き寄せ撫でさすり。泣き口說く老のくど〳〵は文字餘り文字足らず。詠歌の姬も纜も。共に涙の　フシ雨ぞそぎ座敷も。浸すばかりなり。詞ヤア泣くまい〳〵。此の曉の八聲の鷄。養ひ君の初陣目出たき折から。地女なれども家一番の老武者。討手の武士に無禮あらば直に此所を軍の場。　若子を初め一人も生き殘らん者はなし。地コレ箕田次郎。門にしつかと錠おろせよと。地涙を止めいざわつきりと最期の酒宴。詞御肴に婆が一さし舞はう。今こそあれ我も昔の十七八。地油とろりと紅粉鐵漿白粉。生れ付きの所體に。戀がありしゆゑ。いかな男もしなだれかゝる柳腰。今は海老腰ヤアゑい〳〵と立上り。涙に濁るむしやら聲。歌七つになる子がいたいけな事いうて。殿が欲しいと謠うた。殿よりも花よりも地養ひ若子のお命が。ま一つ欲しやいとほしやと。スヱテ又泣き沈むを取直し聲はり上げ。歌おらが若い時や腕になま疵たえなんだ。今でも二つや五つはあんだ。樊噲だ。張良だ。樊噲張良よそならずとオクリ打連れ入りし奥座敷。詮兵の交り今ぞ名殘の　フシ酒宴なる。　フシ風が持てくる。　一村雨。地窓打つ聲に打交り。用ありげに門の戸を忍びやかに叩く音。詞にこたへて詠歌の姬酒宴の座敷をそつと拔出で。走り寄り小聲になり。詞夜更けて誰ぢや何者ぢや。ムヽウ咎むる人は慥か娘の聲と聞く。詠歌の姬ではないかいの。ヤア扨はお前は母樣か。チヽ奇特に聲を覺えてぢや。成程そもじの母江文の宰相が妻萩の對。地おゆかしや久しぶりで。御無事なお顏が見たいゆかしいと。隙間を求め尋ねても。錠は堅く塀高しいつ蟋蟀の踏み明けし。壁の破れに差覗けど闇の夜の。村雨晴るゝ星影に見れば竹笠うなだれ。身は簑虫の蠢きて。サア明けて〳〵の囁きも娘の耳には雷の。スヱテ落ちかゝるより悲しくて。詞仰せなくとも明けてお顏も見たけれども。風も通さぬ貫の木海老錠。日こそ多けれ夜こそ多けれ。　今宵のお出では何事ぞ。地賴平樣のお命は此の曉の鷄限り。私とても遁れぬ命。詞聞けば悲しや私故に江文の家も絕え父母共に勅勘とや。地一災起れば二災起る何事も前世の因果と。思ひ諦め下さんせ。討手の來るに間もあるまい早早歸つて下さんせ。エヽおいとしやとばかりにて。スヱテ壁に取りつき。戸に縋り　フシ

聲をも。立てず泣き給ふ。詞さればいの賴平殿の今宵討たれ給ふとは。世間の流布に隱れなし。それに就いて來たわいの。宰相殿の勅勘もそもじに連れて。賴平殿の所縁ゆゑ母こそは血を分けたれ。宰相殿はあかの他人。種もおろさぬ子故の難儀。さすか公卿の心清く色にも出し給はねども。地母が身になつて見や面目ないとも悲しいとも。夫に向つて一言も泣くにも顏は上げられず。詞聞けば今宵賴平殿は首を討たれ給ふとや。賴光は武將の役目兄弟でも他人でも。朝敵討つは其の筈の事。珍しからず手柄にならず。長袖の宰相殿賴平の首討つて差上げ給へば。朝敵と緣切る證勅勘免許もとの官位に立還り。江文の家も立つべしと。地刑部省の內緣にて內證を聞きし故。討手の向はぬ其の先。賴平殿の首を貰ひに來たわいの。身に代へて夫を思ふ女心。母も同じ身なれば苦いも辛いも知りながら。酷い事いふと思やるな　賴平殿を討たすればそなたの方には孝行といふ道も立つ。詞サア手引して首尾よう討たするか。但し仕損ずる合點で踏込むか。地此の二つが叶はずば此の母が自害して。門外に屍を曝すともすご〳〵とは歸らぬ。時も移る短い返事どうぞ〳〵と打鳴らす。鐘音の夜半のこだまの胸先に。響き渡りて詠歌の姫我が夫の身の大事。今宵に迫る其の上に。又親の難儀何れを何れと捨てがたく返答にと胸つき案じ煩ふ間を待ちかね。詞サア〳〵返事はどうぞ。母が死なうか切り入らうか。今宵の半時は尋常の十二時より大事の刻限。地母が一世の賴みごと分別どころぢやあるまいと。急く程此方は狼狽へながら。いかに死身なればとて母の手にかけ夫の命取らせては。女の道は皆徒事背けば不孝と思ひ極めし初一念。五音をかへて笑ひ聲。詞申し母樣。其のお望みなれば能い所へござんした。幸ひ賴平樣最期の酒宴の大酒。アレあの障子の內に前後も知らぬ高枕。死人を切るも同然。さりながら箕田次郞親子の人の目が早い。私が燈火消すを合圖に忍び入り。暗處の印には賴平樣のおつむり。永々の愼み長髮のお月代。山伏の樣なが手に觸るを討てば少しも仕損じない。地必ずおせきなされなと聞きもあへずエヽ嬉しい〳〵。詞夫にかへて親への孝行。慥に母が恩にきる。地此の念力で塀を越すか。此の杉を傳うても本望遂げるは覺えがあるサア忍び入らうイヤ〳〵〳〵。詞八聲の鷄の啼く迄に聊爾があつては。預り人の不念越度。此の上に急く事ないと。地騙す內にも心迄せき來る淚の玉櫛笥。長地剃刀の刃より思ひ切る心の刃切れ惜しげなくつつと切りてうば玉の鬢の黑髮嬋娟たる髱も額も時の間に。苅り捨て薄露の間を待つも我が身の障子の內。ギンオクリ明けて。へ入るこそ　フシ哀れなれ。地門には母の萩の對姬の契約賴みにて。今や〳〵と胸にせく心に永きしだりをの。鷄を待つ間も久方

の空や明くると見渡せば南無三寶。詞討手の上使とおぼしく高提灯星斗の如く。地五十騎許りの人馬の音。見付けられては我が本望の妨げと。蓑笠取つて投捨て一足に小躍りし。塀の腕木にしつかと取りつきひらりと女の身も輕く。塀覆ひに打ち跨り。形を潜め息を詰めフシ忍び居るこそ危けれ。地程なく金時召具の兵士に鎖の肌着。鎗印馬印具足の唐櫃下人に負はせ。火影に輝く兜楯其の身ばかりは威儀を コハリ亂さず。烏帽子直垂枚を銜んで行くが如く。上下騒がずおとなしく。徐々と打寄せ門しとくと叩かせ。詞箕田次郎繊母が禪尼に案内申す。出羽の冠者頼平君將軍太郎に與し。今日七日に至りて非を改むる御心なきに依つて。御自害を勸め御首を討つべしと。坂田の公時上使として參着。萬に一つ各違亂あるに於ては。恐れながら是非なく一矢仕らん爲。兵具用意致すといへども是は世間の人口。武者の作法を塞がん爲ばかり。只今にも野心を翻し。御兄弟御和睦公時が願ひ此の上なし。さるによつて鷄を待たず前廣に參上致すこと。幾重にも御意見を加へられ各諸共に御歸洛の。御供願ひ存ずると神妙にこそ述べにけれ。地邸の内にはすは公時よ油斷すな。彼奴に似合はぬ禮儀の詞。詞猿の烏帽子狼の十徳くふなく。地慮外せば赤面首さらへ落せとひしめけども。門外には聞かぬ顔床几立てさせ袖かき合せ。悠悠としてフシ控へける。塀の上には萩の對背を伏せ内外考へ見て扨凄じや此の體にては。頼平の首よも我が手へは入るまじ。一番鷄は寢ほれて鳴かぬか。よし仕損ぜばそれ迄と塀の上にさし覆ふ。松の茂みに顔さし入れ息の限りに張上げ。鷄の啼く音を二聲三聲。家慶幸くと虛音を欺る人の聲。四境に聞えて誠の鳥もばらくく。はなやかにこそ 三重へ謠ひけれ フシ門外門内。地すはやと色めく其の隙に小庭にひらりと飛び下り見れば。闇の火は消えたり姫が合圖は是なりと。捜し寄る手に押明けて入るとも人は白張の。障子をさつと血に染めて。詞朝敵將軍太郎一味の随一出羽の冠者源の頼平を。江文の宰相爲成一の太刀を討つたりと。高らかに呼ばはつたる。地家内もあわてふためく音。公時大きに苛つて割るゝばかりに門打叩き。響き渡る大聲。詞討手を差置きなま公家を引込んで頼平の初太刀を討たする箕田次郎の法知らず。渡邊の伯母の婆婆塞げの。狸婆の生年寄。公時に鼻明かせ手振で都へ歸さうや。門明けに汝等頼まぬ。公時が手打の鍵是見よと忿いやと押す力に。地扉の肱坪腕がね搖ぐ所をかばと踏めば。貫の木中よりふつつと折れ フシ扉歪んで開けたり。地公時が提灯込み入つて庭上は白日。禪尼驚き走り出で一間の障子押開けばこはいかに。繊が右手の肩先したたかに切られながら。髮切りの詠歌の姫をかい込み 血刀持つたる萩の對同じく取つて押へられ。エ 仕損ぜし無念やと悔み悶

ゆる有様。禪尼も是はと動轉しフシ呆れて詞もなかりしが。地纜縁先に膝行し。詞母ぢや人も御上使も合點參らぬ其の筈〳〵。健氣にも江文の宰相殿の北の御方。賴平の首討つて差上げ。朝敵一味に緣を切つたる證を顯し。勅勘を申し開かんと姬君にわりなき賴み。痛はしや孝行と貞節の二つの道に迫り。其の身が母の手に懸らんと。髮を切つて男の頭に。倣び給ふ次第一々立聞きし。地親子の切なる志見るに忍びず暗處に。母君の手を取つて賴平の名代。一太刀切られし此の疵。詞誠の賴平こそ討たずとも。血刀を其の儘にて披露あらば。明らけき上の御裁斷勅勘御免疑ひなし。此の上は姬君御身を全う賴平の御先途を見屆け給へ。萩の對の介抱我が母と公時に任せ置くと。地親子をゆるめ押しのけ打刀拔くより早く。弓手の肋にがはと突立て引廻し。詞出羽の冠者源の賴平生害サア地首を討て公時ヤレ首をうて公時と。いへども更に合點ゆかず。さすがの公時きよろ〳〵顏母も是はと手を打つ所に。賴平走り出で給ひ纜が。膝の上にどつかと居かゝり。詞ヤイ氣違ひめ。最前より奧に控へし賴平を。臆れて出合はぬと思ひしか。公時が振舞を始終見屆けんと猶豫する內。無用の汝が身代り。我命を助かり逃げ延びんと思ふ程ならば。公時に鬼神が加つても。太刀先にて切り開き。やす〳〵と生延びるに何の事。身代りなどを賴まぬ誰が思にきぬ徒腹。地エヽしなしたり〳〵とスエテ齒ぎしみ恨み怒らるゝ。地纜わつと泣き出しエヽ情なや。夜光の珠に一つの瑕。今纜が切る腹御身代りと御覽ずる。御眼力こそ小さけれ。詞總じて主君の身代りなどと申すは。御幼稚の御曹司若君か。扨は上臈女性にこそ命代りし例もあれ。進つて死にたがる殿に何の身代り。源の賴平と名乘つて首討たるゝ纜は。天下の爲の生害人。地數ならぬ纜が天下の爲とは事をかしく。推參がましく思されん是には一つの物語。我が君も母上も。ヤア公時初め供人も。鳴りを鎭めてフシ聞き給へ。地物語の種是なりと。袖に入れし錦の袋より。懸緒の切れたる烏帽子一頭取出し。詞是はこれ。去年霜月御家督定めの召の時。纜が着せし烏帽子。其の夜は內戚外戚の歷々。四天王以下在京の武士役々所領の高下に隨ひ。一人も殘らず伺候の夜。小寢殿の燈を消され白羽染羽の矢幹の御鬮。御臺所上段に着かせ給ふゆゑ立ちまふ人は皆女中。其の中に彼の小蝶が艷色。並ぶ方なき情の風俗。若氣の某御勝手で一獻酎んだる微醉まぎれ。座敷も闇の現なく。小蝶が裳にひつたと縋つて戯れしに。彼の女おのが懷中の匕首を以て。ふつつと切つたる烏帽子は是。切られしは此の懸緒なり剩へ小蝶大音上げ。天下の御大事評定の座敷。誰かは知らず暗紛れに。此の小蝶に縋り戯れしなだるゝ不行儀侍。無禮放埒の證の爲。烏帽子の懸緒を切取つたり。サア女中火を

灯し懸緒を切られし。それを證據に御詮議あれとはしたなく喚き罵る其の間。南無三寶纜が武名は是迄 生きて恥を曝さんよりと刀の柄に手をかけしが。イヤ〳〵死しては恥辱を誰が雪がんと。思返せど死ぬる外せん方なく。五體の汗は直垂を通し百千萬に氣を碎く。折しも賴平公聞きつけ給ひ必ず〳〵率爾に燈火あぐるな。賴平が思ふ仔細あり。此の座の面々上下老若を限らず。一々烏帽子の懸緒を切れ。切り揃ふと一度に聲を揃へて案內せよ。其の時燈火あぐべしとの御詞。違背に及ばず片端より殘らず懸緒を押切り〳〵。我も各同音に。各切つて候と申し上ぐれば御前の女中。燈臺燭臺御座敷は日中と輝けども。殘らず懸緒を切りたれば誰が小蝶に切られしとも。互の心を探り合ふばかりにて。其の座の武士に一人も惡名恥辱は。地フシ取らざりし。此の御仁德情の御恩の忝さ。須彌山を挾んで大海を飛び越ゆる世はありとも。スエテいかでか報じ盡すべき。地あはれ此の殿朝敵退治の御進發もあれがな。御馬の先にて討死せんと。時節を待ちしかひもなく朝敵退治は拙置き。却つて朝敵となり給ふ。歎きは我が身一つぞと。纜が心の底を知つたる者は。天が下に此の烏帽子只一つ。產んだる母も今日が日迄かくといはねば知り給はじと。見やれば母も目を見合せ。ヲヽうい事したとばかりにて。平伏し歎けば姬君親子賴平君。無意氣と名を得し公時も。淚見せじと提灯の フシ陰へ廻るぞ道理なる。地聲いきどしくすたきながらコレ公時。詞天下へ拋つ纜が一命。牛溲馬勃敗鼓の皮惜しゝとは存ぜねども。地此の上にも殿のお心和らがぬ其の內は。我は修羅道の奴苦みを增すばかり。詞母ぢや人公時賴むは是一つ。地なき跡にも御意見絕えず。朝敵一味の契約を切り給へば。夫を修羅の矢先の楯につき。苦みを免れんと口說けば母もわつと泣き。詞ナウ賴平樣あんまり我强い曲もない。今生に息の通ふ內。將軍太郎に契約の詞を翻し。御兄弟和睦との御一言を聞かせてたべ。詞其のお詞を願の糸烏帽子の懸緒につぎ合せ。未來成佛の寶冠の紐として。極樂淨土へ着せて遣りたいわいのとて スエテかつぱと伏して泣きければ フシ共に淚の。顏振上げ。詞我偏屈に凝固つたる心より方々の意見を聞かす。あつたら武士を殺す事。賴平が一生の後悔今日かくいふも無益の詞。地將軍太郎と契約を打破り。只今より兄々の御味方ぞ。氏神正八幡も照覽あれ此の詞は違へぬ。恨みを晴れよと宣ふ內より。ハアはつと猶せきあへぬ親子の淚。とゞめて纜につこと笑ひ。詞悔みなく恨みなき悅びの死とは纜が最期。サ介錯介錯公時。葉侍の首をいかめしげに。武將の御覽に入るるは恐れ。我が首討つて溝瀆へも踏込み。只只此の烏帽子を上覽に入れ。此の趣の言上賴む。サア首討たぬか公時。地エヽ息がきるゝ氣をもますか。恨めしい

公時といへども白州にむずと坐し。地仁義忠孝揃ひに揃うた侍の。首の討ちやう俺や知らぬ。婆樣此方討つて下されと。地獅子王の如きフシ公時も不覺の。涙に咽ひける。地次第に五體の血はもれて沈み入る氣を猶息はり。詞ヤレ此の上は片時も婆婆に用はなしサなぜ討たぬ討つてくれぬか。ヨイ〱介錯頼まぬと。地腹の刀をすつぱと拔き首筋に押當て。兩手をかけて南無佛と口に佛名兩眼に。母の顏見る目を塞がずまじろかず。首に生顏殘しながら落つれば人人一同に。ワアわつと天に呼ばはり地に叫ぶ。さしもの母も前後にくれ。あへなき首を抱き上げ。なう五つ年の乳ばなれより。久しうて母に抱かれたナアと スエテ身に添へ歎き。伏しければ。地公時たまらず大聲上げ。手も口も揃うた武士の生粹。エヽ殘念や生け置いて。貞光季武綱公時に譽を加へ。頼光の御内の五天王といはせいで悲しい。あつたら者をと身もなえ〱。我々忘れてすゝり泣く。頼平君を始め姫君親子心なき。供の若黨仲間迄。顏打上ぐる者もなく フシ歎きを侘るご至極なる。地内は歎きのまだ夜深きに外は明けゆく隙白く。時も移れば頼平君涙ながらに烏帽子を取上げ。詞日本武士の頭に置くべき侍烏帽子。今月今日續が情かけ緒の誠によつて。頼平心を顯す段。公時具に披露して御免の御諚相傳へば。地其の時某舅宰相夫婦を誘ひ伺候せんと。渡す烏帽子を公時が首の用意に持たせたる。三寶に拾ひのせ。拳々服膺敬ひ捧げお暇申す母禪尼と。いへど答へずかこち聲。詞母とは誰が事子のある者こそ母とはいへ。地今日より子とてはありもせぬ孤獨の妻。無事な宣ひそと首を。肌身に抱き伏す姫君親子弔ひ涙。江文の家の立つこと皆此の人の御恩ぞと。いふより外はさらばともいはで信夫のあら鷹も。翼しをるゝ公時か。立端に迷ふほの〴〵明け袖の雫や朝露の。芝蘭の園に入る人は止めなど袖に涙あり。崐崙山の塊はみがかぬ玉の光りあり斯かる。忠烈賢臣の出づるも源氏の大將軍。文武の德の高きによると歎きを。とゞめ歸りけり。

第　四

地古の七の賢き人も皆。竹をかざすは變りなき御代を樂む心あり。坂田の公時太刀と烏帽子を臺に盛り。頼光の御前に跪き。詞某討手を蒙りし頼平君に御首二つ候。一つの首は天下の堅め。國家の柱礎の根據となる御首。まつた一つは朝敵與黨の御首。地則ち此の御首討取つたる印に。懸者なしの烏帽子一頭 血の附いたる拔刀は江文の宰相殿。朝敵與黨の縁切れたる印。委しき仔細申すもまだるく此の一通に公時が。詞快童丸の昔より手習ひ嫌ひ。がさくさ流の口上書。讀めかぬるは御推量に御覽願ひ奉ると。御前に差上ぐる。地大將繰返し〱熟覽あり。詞頼平は兄弟にひいて。公の御用にも立つべき器量と見屆けしに。思ひも寄

らぬ此の度の罪科。悔むに所なかつしに。いしくもしたりな。地人丸赤人の名歌も。聞く人なければ フシ歌人の名顯れず。伯牙が琴も鍾子期にあらざれば。 名を知るものなし賴平が德を感じ。恩を重んじて天下の爲に命を捨てし。箕田次郎續が心ばせこそ可愛けれと。 忝くも御大將 スヱテ涙に咽ばせ給ひける。爲成卿夫婦誘引の由。それ〳〵是へと御諚ある。公時悅びお次に立ち。夫婦を伴ひ フシ上座に勸め參らする。詞賴光御覽じ。長袖の御身ながら武士に劣らぬなされかた。 朝敵の緣切れたる證據委細に奏聞せば。地二度御歸京御心安かれと宣へば。夫婦はあつと手を合せ。只よき樣にとばかりにてフシ嬉しきも亦涙なり。遠侍に聲高く。季武貞光將軍太郎を生捕りしと。 地呼ばはり騷ぐ程こそあれ庭上にひつすゆる。 御大將甚だ悅び給ひ。詞彼奴音に聞く不敵のわつぱよな。父將門關八州に蔓り自ら僭して。 平親王

と號し百官百僚を立てたる程の逆意だに。我が朝神孫の神武に碎かれ。滅亡したる事聞傳へて懲もなく。前代未聞の朝敵天の責め逃るゝ所なし。一先づ獄屋に繫ぐべしと宣ふ所に。地賴平夫婦斬切髮にてかけ出で。御勘當御免の上は彼等風情の朝敵。誅戮は我が掌の内にあり。詞存ずる旨候へば彼奴が命暫く賴平に。 預け下さるべしと申し捨てゝつつとより。汝市原野にて詠歌の姬が一命を助けられ。 一味徒黨の契約を變ぜぬ證據。一旦の命を助け置く今より後は敵と敵。 戰場に鋒先をみがき汝が首を。 賴平が切先に貫くまで慥に預ける。 サア歸れと縛の繩引きちぎる。良門つつと立ちホヽウ見事々々。 地天晴源氏の大將。契約を變ぜぬ本心感じ入る。重ねての參會は一戰の時さらばといひて立ち歸る。賴光暫しと止め給ひ。 詞汝も鬼畜にあらねば善惡は知つつらん。親の恥辱を雪がん爲の逆心。しほらし優しいで汝に 賜せん。親將門が定

紋繫馬の旗印。陣幕源家には無益の長物。汝が爲の守神サア得さするぞと。地庭上に投げ給へばおつ取つて押戴き。詞古今獨步の名將と音に聞きしに違ひなし。先祖の遺寶を賜はる賴光の大恩。我仇を以て報ずべし。地是より直に葛城山に立籠り。時を移さず旗を上げん。外の敵對數萬騎ありとも。望む所は賴平一人。 體は源氏に歸るとも首ばかりは良門が。永き味方に付くべきぞ。ヲ、大言も廣言も命あつて後のこと。助け置くはちつとの間。首を預けた損ふな。汝が首も預け置く。ヲ、長吠えするな返答は。我が眼中にありと睨みつくればうんともいはず。眉毛も裂けよとくわつと見開く眼玉睨んで。 左右へぞ 三重 二上り 歌〽 ながかれと。何思ひけん。世の中に。名殘を雲に吹きとめよ 合。止めてかひなき花の香を 合。袖に包みし小笹の霰。こぼれやすさよ我が涙。共に鳴きつれ。歸る雁 合。餘所に見なして。思ひやるこそ。などか ナホスフシ 心も

かへるかな。お側の衆のつれ歌もたゞにはあらぬ多田の御所。　頼信の御臺所伊豫の内侍。過ぎし頃より例ならず打臥し惱ませ給ふゆゑ。渡邊が妻岩藤を始めとして。木幡らん菊おしやなの前打揃ふ四人連〻いはねどしるき四天王の思はく達。夫は兵是等は品者通り者。袿襠の裾長廊下。　フシ御寢所近く相詰むる。中﨟の少納言奥より出で。　詞何れも奇特の御機嫌伺ひ。内侍樣の御氣色。典藥衆の見立てにも及ばす。　夜晝となく暫くも御寢なればはや大熱。おびえ魂ぎりそゞろ言。　萬一嫉妬魅入れの業か。もし怖いお夢かなどと伺へども。とかうのことも仰なく次第にお疲れ見る目の悲しさ。各方の發明で面白をかしういひ廻し。御容態も聞かまほしゝ。又和氣の法橋見立には。もとお氣の結ぼほれ。　何がな興あるお慰み。御心だに放じなばお藥も廻らんとの事ゆゑ。　不調法な歌三味線。お氣は晴れずにお頭痛でも引起そかと是も氣遣ひ。何ぞ晴れやかな大ていなお慰み。皆皆つれ添ふ殿達から世間廣う見るお衆。どうぞ御趣向頼みますと。　地餘儀なき詞に四人の女房。一度にはつと頭をさけ。ハアどうがなあ。ハア何とがなと　フシ思案評定取々なり。　地公時が女房おしやなの前遠慮なくずつと出で。　詞仰せの如く此の度の御氣色。何とも心得がたきとて。　頼光樣御夫婦頼信樣の御氣遣ひ。鬼取りひしぐ我我が夫の武勇にも叶はぬは病論。寄合うては額に皺。女房仲間の評議には。どうでも是はお悋氣の凝り。男の手癖足癖も。私らが樣ながりはりは嚙付きも仕かねず。又下下の夫婦かけ向ひが悋氣諍ひは先づ叩き合ふくらはし合ふ。　地道具三つ四つ打割ればさらりと胸が晴れるげな。　上々方はうはずんべり。お心でばかりくよ〱〱〱思の積り。それにお氣晴らしとはアヽ聞えたお療治。　詞先づ私が存じより申して見ましよ。見す〱心を引立つるは相撲々々。先づお座敷に四本柱括り枕を並べ土俵をつき。四人の我々眞裸で。二人づゝ西東へ立分れて大關。腰元衆の内で關脇小結を選み。殘りの女中皆前相撲肌の物は男の逐り緞子繻珍の二重廻り。アヽさりながら。さがりを取つて引く時中にこたへの張合ひなく。脇へずつと外れては氣の毒か。いつそ夫も一景であらうか。季武貞光のお内儀。　地何とおぼすといひければ。らん菊木幡顔打赤め。ヲヽざんない一景も半景も。娘子供の時ならばこじほらしうもあれかし。持ち古した墨の肌。腰に廻した肌の物脇へずつと外れては。手負烏見る樣で　フシ凄じかろと噴き出す。中に木幡は才覺者。　詞すべての病人晝は紛るゝ方もあり。兎角暮れてのお慰みと思案致すに。毎年七月十六日。東山の大文字都では珍しからず。　地此の築山にうつし秋知り顔の夕景色。御覽に入れては何とばしあらんといへば岩藤。　詞二人の御趣向殘る所はなけれ〱。私は又思ふに

は。皆衣笠山に白布引きはへ。夏の雪を御覽ぜし帝もあり。お庭の梢に小袖をいくらも打ちかけ。四季の草木菊女郎花の染模樣。縫織紋の梅櫻。一度に咲ける風景お氣も轉ずる道理。是は何とお局樣。地ヲヽ何れも一趣向。兎角書付を以て伺はんと。人々を伴ひ御寢所の。オクリお次の。遣戸をそつと明くる屛風の中。夢現なき内侍の聲。わつと魘はれ呻き身悶え寢返りに。皆立寄りやう／＼と抱き起せば力なき。未央の柳よわ／＼と御髮重げの御息つぎ。女房たちも諸共に打萎れてぞ見えにける。詞岩藤謹めて。常々細いお心に何ぞ怖いお夢かな。必ずお氣にかけられな。神佛の夢想の外は皆あだ夢。　莊子といふ唐の博識さへ。地夢の中に胡蝶となりしと承ると。いひもあへぬに内侍はつと色變り。胡蝶の夢とは心得ぬ。扨は自ら夢の中に。まさな言はしいひしよな。恥かしさよとばかりにてそゞろ。涙の御顏ばせ。詞アヽお氣弱い。

胡蝶の夢とは詩歌にも數々。お心にかけらるゝは何故。總じて今度のお惱み心許なき事のみ。お心包まず仰せられ。地お胸晴るるが即ちお療治お藥もまはる筈。御慰の爲にとて何れも趣向物ずき。此の内お望み遊ばせと御覽に入るゝ目錄。繰返し打守り誠に各心盡し。返す／＼もフシ淺からず。取分け此の書付に。詞衣笠山の花小袖。梢に四季の花の光り。　共にゆかしき詠めならん。地急いで用意と宣へば。　承つて女房達。數の小袖を取揃へ。　梢々にかけにける。歌先づ初春の。　空色を。　これ此の枝へ。フシひら／＼と。文彌眞先かけて梅玉椿。かゝれやかゝれや藤波も。匂簾山吹の褶模樣。柳すゝ竹柳に燕。　あざみたんぽゝ。若。草を。かけし枝ぶり。吉野の初瀨の。　櫻も。爰に三河の。杜若。　五色の糸の。色々を縫の。牡丹に玉を取る。獅子の手毬小手毬團扇とも見よ。　紅鹿子。白い絞りは卯の花やかに。松も檜も杉も榎も。紅梅

もみ裏うこん紫。コハリうら吹き返せば淺黃櫻ひわ櫻。うす櫻八重櫻鹽釜櫻瀧櫻。一重櫻や小櫻のあまへて見ゆる姥櫻とも御覽ぜと。詞の花も姿の花も。春の山路秋の野邊目前の。フシ興ともいひつべし。いつに内侍の笑ひ顏。詞かう見た所は誠の花に變らぬ。目の覺めた物好き。殊に皆の衆の。思ふことなうわさ／＼わさ／＼地機嫌よければ。連れて心も氣も輕いと。手を引かれて築山にかゝりし小袖どれも／＼。しほらしい模樣やと。御手に觸れたる萩桔梗。菊に群れとぶ小蝶の縫お目にかゝればハアヽ怖。爰にも又小蝶かと。わつと一聲手足も顫ひ御色變り。スヱテかつぱと轉び伏し給ふ。人々あわて抱きかゝへ。オクリお寢間に／＼休め參らする。地四人あきれ溜息ほつと。詞中にも岩藤打頷き。合點した／＼。最前胡蝶の夢の話にもぞつとなされたお顏持。今又小蝶の縫紋にてお目のまふは只でない。地御病氣は小蝶が魅入れ合點か皆の衆それよと

一度に大聲上げ。憎つくい女め慮外な恨み。目に物見せんと立ち分れ駈廻つても何をあてど。又集つてどうせうと手に手を組合ひ頬づかへ。木幡卽座の工夫を廻らし。ナウこれ〳〵。詞屈竟一の思案がある。幸ひ今宵篝火の大文字。もと此の東山の大文字といふ事は。七月魂祭りの聖靈の。冥途の道を照して送り返す送り火。さもなければ魂娑婆に迷ひ止まるとて。十六日の夕暮は京中加茂川筋に群衆をなし。聖靈の送り火これについてお歸りや。〳〵と聲々に呼ばはる夫になぞらへ。娑婆に迷ふ小蝶が妄執の魂を送らば。妄念の雲晴れ立去つて内侍樣の御本腹。疑ひあるまじと思ふが何れもなんといへば。一度に横手を丁ど出來た〳〵。地サア時刻が來たぞはや急げ。柴よ附木よ松明と。手々に騷ぎ夕日影。はや暮れかゝる遠寺の鐘心も。すめる 三重〽 歌 聖靈の送り火是についてお歸りや。〳〵〳〵。

秋ならぬ秋こそ來たれ。黄昏時の淋しげに。フシ築山の陰。ほのめくは。群る螢か明星か。影は三つ四つ松明の。數も四人の女房達 フシ負けじ劣らぬ。山の腰 コハリ東西上下一どきに。一畫一點麓より。追上りては又峯より。傳ひ集り彼方の谷。此方のをさき一つに寄れば。地大文字 フシ赫奕たり。無明の闇を照らさんとの。高野大師の御誓ひ。方十丈の御筆畫 フシ今もあり〳〵有難き。安養世界淨土寺村。爰に移して彌陀來迎。助かり給へ南無聖靈。南無阿彌陀佛と回向して。フシ宿直所に立歸る。銀河晴れゆく初更の天。コハリ消えかゝる文字の内より。一團の火焔烈々と空中に翩飜し。ナホス落つると思へば忽然と。フシ小蝶が。姿顯れたり。次第浮きたる雲の行方をば。〳〵。風の心に任すらん。歌風の心も白雪の。消えかへりても落瀧津。岩波高く。せき返す戀慕の。フシ闇に呉竹の。夜毎に通ふ築山の我が身にもゆる片思ひ。人こそ知らね嫉ましやと フシ障子に。荒くおとづるゝ。ツレ内侍夢覺め胸とゞろき不思議や誰そと問ひ給へば。シテ詞是は院の御所に仕へ申す命婦にて候ふ。扨も内侍例ならざる由聞召し。唐の大和の妙薬を賜はり。自ら持つて參りしなり。地歎き疑ひ フシ給ふなとよ。ツレ地夜陰のおとづれ物凄く不審ながらも立出でて。見るも恐ろし夢の小蝶 スヱテ驚き。魂ぎり入れば追駈け怒れる聲。シテ愚かの人の有樣や。悩みをかくるも我がせこが來べき宵なりさゝがにの。蜘蛛の振舞かねてより我がなす業とはしらの。くるや千筋の絲筋に五體を搦め苦めて。ひつ立て〳〵引立てられ。ツレ逃げんとすれど亂れ足の。フシはひ纏はるゝ。蔦葛恨み包むも洩れやすき。囁き竹の直ならぬ。其の身を悔の千度八千度。シテこちは百度百千度。三人フシうきねに泣かせ泣き明かす。ツレなう恐ろしやをその蕩子悋氣はおのが。心の闇の水暗き。澤の螢火送火に付

きて立去れ歸れかし。シテいや如何にいふとも盡きせぬ恨の心の錆矢。怨念力の張弓に射て落さん連理の枝。二人瞋恚邪見の斧鉞を打立て〳〵。合。しつていく〳〵。伐木とう〳〵とう〳〵とう。枝も梢も打切り打折り打拂ひ。魔道に沈んでコハリ浮む世もなき我が眷屬の。長き奴とせんものをと。又引立つればナホス息も絶え〴〵フシ引かれ巡るぞいたはしき。君は嫁入の。花やかに。我は地獄の門出に。氷の刃は劍の山。ツレ綾や錦のとのゐ物。却つて焦熱大焦熱の。炎に身をば焦す苦み。シテ三三九度は二河白道。道具屋フシ渦巻く炎漲る白波。庭の梢のさつ〳〵〳〵。池の。水音どう〳〵〳〵大地。却つて潮り。高天碎けて落つると見れば猛火と燃え。電光激して雷霆すさまじ〴〵かりけるナホスフシ次第なり。フシすはや事ぞと四人の女房長刀かい込み飛んで出で。内侍をいたはり寢所に入れ眼を配り立つたる所に。シテうしろにすつくとフシ小蝶が形。一人六臂の變化を顯はし。道具屋汝知らずや我そのかみ。南閻浮州に縮り。葛城山に年を經る土蜘蛛の精靈なり。大日本を横領し魔界になさんと。將軍太郎が心に加被しかひも情の道に奪はれ。屍ばかりは泥土となんぬ。猶魂魄は五行造化の氣にとゞまる。一念只今思ひ知れとはつたと。睨むを怯まぬ恐れぬ四人の女。ツレ詞如何ぞ汝王地を侵す冥罰神罰。身を亡せし前車に懲りず。地後車の罪業生々はてなき惡毒虫。羈絆をハルといふより早く四人が長刀。裾を拂へば。シテ飛びあがり。ツレ右手を切れば。シテ左手へ開き。ツレ後をなげば。シテ前に忽ち。早業輕業縱横無盡。ツレやるな遁すなあまさじ。三重洩らさじ。聲を合せて四人が中に追取りまけば。二人形は失せて盛んの猛火。ハヅミフシ炎々燐々爆々たり。ツレ南無三寶仕損ぜしとスヱテ呆れ立ちたる庭の面。花も焦るゝ紅梅の。木の間にきよろりとけらけら笑ひ。霞を踏んで輕きは梅が香。ツレ重きは惡業。二人撓む枝々。フシ歩むともなく行くともなく。二人あれか是かと又影失せて。爰よ彼處と眼を配ればあれを見よ。二人御階の元ににょつきと立つて小手招き。此方へ戻れば雪か霰か雲間の月。四方八面前栽築山追うつまくつつ。隱れつ見えつ業通自在。ツレ長刀投捨て手取りにせんと馳寄れば。シテ化生も六臂に追つつまくつつ。今煩惱の犬追物。眼の光りは羅計火星。闇に向つてつく息はハヅミ虹の。かけはしフシ長廊下。五歩の細殿十歩の樓。尋るかたも築山の。二人コハリ山は鐵城水は精銅修羅の巷にいざ來れと。四人を一度に引縮め〳〵なぐれば留る振ればしがらむ。捻合ひへし合ひ山を劈く變化の勢ひ。陸地に船滯ぐナホス四人が力ゐいや。〳〵とひく息つく息。惡風吹きかけ砂を飛ばし。炎の煙の蔭に隱れてオクリ姿は〴〵忽ちフシ失せにけり四人の女も。地勇氣を碎き茫然となつたる

所に。シテ御家督頼信朝臣。平井の保昌相具し駈付け給ひ。桃園重代膝丸の御太刀。内侍の枕の守に立て。虛空に向つて大音上げ。詞怪は德に勝たずと知る。たとへ變化化生雨となり風となり。千萬に轉化して障碍をなすとも。地天孫附屬の天子の威光。源氏の武功に加へ四海に施さば。刄に血ぬらず戰はず他方萬里に追散らさんと。雲間を睨んで立ち給ふ。聲をひとしく山河草木動搖して。五百機たてる蜘蛛の糸。重なる雲に夕立の篠を亂すに三重フシ異ならず。フシ彼方此方に立ちまふ内。御寢所の内震動鳴動是はとあわて駈寄れば。二人コハリ膝丸おのれと鞘を拔出で。刄の電光猛火の稻妻。變化の眞甲はつしと打てば。血煙はつと漲る瀧津瀨。恐れて御殿を去るよと見えし。シテ今より又も來らじといふかと思へば忽ちに。フシ内侍の御氣色本復本望。人人悅びざゞめく聲。空には刄の閃く光り。二人逃行く化生を追駈けぼつつめ。雲に登れば續いて分け入り飛行自在の合。名劍寶劍。名も今の世に蜘蛛切丸と威德を。したひ血をしたひ。變化の根を切り葉を枯らし。治まる御代の。民安樂。十萬貫を腰に付け。千歲の鶴に乘り雍州の都に樂しめる其の。樂みを樂むも今此の。御代に生れあふ人は。猶こそ樂しけれ。

第　五

一聲土も木も。我が大君の國なれば。いづくか鬼の。やどりなる引地劍の威德に切拂ひし。土蜘蛛の血を慕ひ來る葛城山。平井の保昌討手を蒙り。麓を取卷く數百の軍兵フシ霞隱れに支へける。例の氣早き坂田の公時。變化流行の蜘蛛なりとも高が虫。太刀も刀も入るべきか。踏潰してくれんずと藪へし折つて竹帶。打ちかたげたる煤掃き出立ち フシ不敵にも亦剽けたり。地跡に嘶く轡の音諸軍に先立ち獨武者。萠黃匂ひの甲冑弓箭。とりかひ栗毛に一鞭あて歩ませしが。公時を遙かに見駒打寄せ大音上げ。詞討手の大將保昌が目に遮ぎるは變化の所爲か。君命の矢先受けて見よと弓弦しごいて討ちつがふ。アヽ麁相するな保昌。變化でも蜘蛛でもないコレ。俺ぢや。朝霞に顏が見えぬか赤ぢや〳〵公時ぢや。率爾するなと狼狽へる。保昌それとは知つたれども彼奴が持病の先駈。躾は爰ぞと頭を打振り。詞イヤ〳〵はぬ〳〵。變化の通力我が眼をくらまし。公時に化け近付き寄り引裂き捨てんとは愚か〳〵。よし又誠の公時にもせよ。大將の下知を待たず軍令を背く拔駈け。地射落して誤りならずと又引きしぼればこれ保昌。詞見知りごしにそりや胴欲。今からふつつり拔駈けしよまい。片意地もいふまいまんがちに首も拔くまい。其方のいふ事何でも聞こ。地もう堪忍してくれと天魔を欺く公時が。保昌にこなされ。荒氣も出さぬ誤り顏。蜈蚣に唾籠に フシ蓼皆夫夫の敵藥あり。地保昌はいだる矢先をゆるめ。詞危ふ候坂田殿と。地互にどつと大笑ひ。

貞光季武綱諸共後馳に近付き。詞是々兩人あれを見られよ。葛城山の絶頂に。繋ぎ馬の旗陣幕。將軍太郎が出張の城廓。賴信賴平御馬を出され搦手へ向うたり。地變化も敵も一日仕事。時刻よきぞ大手より攻めよ〳〵と下知すれば。法螺を吹き立て太鼓を響かせ鬨の聲々 三重〳〵 攻め登る フシ名に負ふ山は。地嶮難嶮岨岩に取りつき行先は。藤か葛か細引か引渡す蜘蛛の絲。大木古木十重二十重。張つたる網に月日も漏らさず。闇々暗き木の間より。コハリあら恐ろしや土蜘蛛の。眼は明鏡八つの手足に生る毛は。釘を植ゑたる如くにて出入る。息に火焔を吐き。地顯れ出づればわつと恐れ引返す。顔に蜘蛛の巣身をからむ絲に苦む軍兵ども。八つの足に引寄せ〳〵。血を吸取られ死するもあり。網にかゝつて惱むもあり。フシ誠に稀代の惡蟲なり。地坂田の公時走り寄り。詞ヤア執着深き小蝶が魂魄。兄良門が出張の城を守護するか。地蜘蛛の巣の亂杭逆茂木引破り。太郎めが首取らんと篠取りのべしけみ〳〵。巣をなぎ拂ひ打拂へば。又顯れて毒氣を吐き。腹に袋の子持蜘蛛。詞ヤア人民を殘害し。喰ひ肥えたる女郎蜘蛛。紙にひねつて袂に入れん。地一昨日來いと戯れて。飛びかゝれば形は消え。フシ殘るは。袋ばかりなり。地公時きつと見。詞態に似せて臍をまくと扨もでつかい子袋。大佛殿の炙の蓋と地蹴散らせば颯とさけ。其の色青蒼たる小蜘蛛ども。幾千萬の數をつくし這出づる。簇々と群がり集つては區々單々と別れ散り。這ふかと見ればすつくと立ち。蜘蛛かと見れば小鬼の形眞中におつ取り込め。小手に飛びつき足に纒ひ取捨て拂へど群り寄る。踏みのけ蹴飛はし薙立つれば。山蔭暗き梢を傳ひ。おのが身を燒く蜘蛛火の光り此處に灯しつ彼處に消え。殷の妲己が火を愛し。火山を盡すに 三重〳〵 異ならず。地我に張り者も持てあつかひ。詞三日風が吹かねば日本國を張り塞ぐと。いふも理仰山や夥し。地一つづつ殺すは手間費やしと。竹篠斜に構へさらり〳〵さら〳〵〳〵。岨蔭岩蔭撫寄せ〳〵掃き立つる。蜘蛛の足音竹の音。扨もはかゆき面白やと松風につれさつさと。篠にかけて掃き捨つる フシ風に蜘蛛の子散らしける。地公時がさらへる間に谷を隔てゝ渡邊の綱。貞光季武搦手へ攻め登り。朝敵與力の惡黨ども腕限り切盡くし。將軍太郎を餘さじと大手の坂へ追來る。先には公時待ち迎へ遁るゝ方もなき所に。コハリ不思議や小蝶がありし形。影の如く顯れて。良門に ナホス 地附添へども。四人が眼にさへぎらず太郎は妹の神通力。五體に加はる身は鐵壁。詞公時ござれ綱ござれ。季武貞光かゝれや〳〵と欺けば。四人目くばせよる所を事ともせず引抓み。地搔摑み右手へ投げのけ左手へ蹴散らし八方睨んで立つたるは フシせん方なくぞ見えたりける。地保昌を眞先立て出羽の冠者賴平。河内守

賴信公遙かに聲かけ。詞ヤアノ\其の者凡身ならず。小蝶が精魂土蜘蛛の通力加はると覺えたり。地今に始めぬ此の太刀の奇特を以て。切拂はんと拔き放し押戴き。詞源氏の氏神正八幡。哀憐擁護を加へおはしませと良門目がけて投げかけ給へば。地小蝶が形消え失せて眞の。フシ形蜘蛛切の。不思議を見るも神慮の加護。得たりやおうと綱貞光。將軍太郎を組みとむれば。公時季武土蜘蛛の。背に跨つて動かせず。賴平賴信走り寄り。朝敵退治土蜘蛛退治。仇も恨みも切りほどく。御連枝一所に賴光賴信賴平の。家富み榮え國繁昌盡きせぬ。源氏の御代永く萬々。歲とぞ祝ひける。

此の本は山本九兵衛治重新たに七行大字の板を彫りて直の正本のしるしを紀せよとの求めにしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本筑後掾　竹本　博教（壹印）

京二條通寺町西江入町　正本屋　山本九兵衛版

大阪高麗橋壹丁目出店　山本九右衛門版

七行大字直之正本とあざむく類板世に有といへども又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直の正本にあらず故に今

昭和二年三月二十一日印刷
昭和二年三月二十四日發行

日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第五卷
近松名作集 下
（非賣品）

編輯發行兼印刷者　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者　石川寅吉

發行所　東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番・一八四一番
振替東京一八四四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿六卷及追加篇二卷 書目豫定一覽

（但し種々の事情により多少の變更あるべし。）

第一卷第二卷 西鶴名作集 上下

○好色一代男 ○好色二代男 ○好色三代男 ○好色一代女 ○好色五人女 ○男色大鑑 ○武道傳來記 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○西鶴諸國咄 ○懷硯 ○近代艶隱者 ○日本永代藏 ○世間胸算用 ○織留 ○本朝二十不孝 ○本朝櫻陰比事 ○西鶴置土産 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○俗つれ〴〵 ○一目玉鉾

第三卷 芭蕉全集

【正篇】○蕉翁一代の句集 ○連句集 ○文集 ○句評 ○紀行 ○消息 ○遺語

【外篇】○冬の日 ○春の日 ○初懷紙 ○曠野 ○ひさご ○猿簑 ○深川集 ○炭俵 ○別座敷 ○續猿簑

【附錄】○枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○芭蕉翁繪詞傳

第四卷第五卷 近松名作集 上下

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習并新曆 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蟬丸 ○最明寺殿百人上﨟 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月紅葉 ○堀河浪鼓 ○卯月の潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○丹波與作待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧德 ○五十年忌歌念佛 ○栬狩劍本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴渡 ○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔曆 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川

○心中天網島　○津國女夫池　○女殺油地獄　○信州川中島合戰　○心中宵庚申　○關八州繋馬

第六巻 第七巻 淨瑠璃名作集 上 下

○雪女　○本海道虎石　○心中涙の玉井　○金屋金五郎浮名額　○金屋金五郎後日雛形　○椀久末松山　○お染久松袂の白しぼり　○八百屋お七　○笠屋三勝廿五年忌　○心中二つ腹帶　○傾城思升屋　○愛護若塒箱　○富仁親王嵯峨錦　○鬼鹿毛無佐志鐙　○大塔宮曦鎧　○須磨都源平躑躅　○壇浦兜軍記　○蘆屋道滿大內鑑　○苅萱桑門筑紫𨏍　○敵討襤褸錦　○御所櫻堀川夜討　○釜淵雙級巴　○ひらがな盛衰記　○鶊山姬捨松　○夏祭浪花鑑　○菅原傳授手習鑑　○義經千本櫻　○假名手本忠臣藏　○双蝶々曲輪日記　○一谷嫩軍記　○本朝廿四孝　○奥州安達原　○關取千兩幟　○近江源氏先陣館　○神靈矢口渡　○妹背山婦女庭訓　○攝州合邦辻　○新版歌祭文　○伊賀越道中雙六　○近頃河原達引　○絲櫻本町育　○繪本太閤記

第八巻 歌舞伎脚本集

○參會名護屋　○兵根元曾我　○源平雷傳記　○百夜小町　○傾城淺間嶽　○成田山分身不動　○中將姬京雛　○丹波與作手綱帶　○傾城壬生大念佛　○鳥邊山心中　○嫗髮歌仙櫻　○心中鬼門角　○伊勢音頭戀寢刃　○漢人漢文手管始　○五大力戀緘　○金門五三桐　○四谷怪談　○與話情浮名横櫛

第九巻 浮世草子集

○傾城色三味線　○傾城曲三味線　○傾城歌三味線　○世間息子氣質　○浮世親仁氣質　○世間娘氣質　○咲分五人媳　○傾城禁短氣　○商人軍配團　○棠大門屋敷　○鎌倉諸藝袖日記　○日本新永代藏　○御前義經記　○好色萬金丹

第十巻 怪談名作集

○御伽婢子　○狗張子　○玉箒木　○虚實雜談集　○怪談登志男　○近世百物語　○西播怪談實記　○茅屋物語　化物判取帖　○豐年珍話集　○實物語　○怪談實錄　○英草紙　○繁々野話　○雨月物語　○垣根草　○莠句冊　○近代百物語　○怪談記野狐名玉　○怪談名香富貴玉　○清誠談　○臥遊奇談　○深山草　○怪異前席物語　○古加良志草紙

第十一巻 黄表紙廿五種

○金々先生榮花夢　○親敵打腹鼓　○長生見度記

○唫多雁取帳　○狂言好野暮大名　○大悲千祿本　○江戸生艶氣樺燒　○莫切自根金生木　○文武二道万石通　○孔子縞于時藍染　○心學早染草　○即席耳學問　○盧生夢魂其前日　○馬鹿長命子氣物語　○世上酒落見繪圖　○桃太郎發端話說　○十四傾城腹之内　○金々先生造化夢　○忠臣藏前世幕無　○世諺口紺屋雛形　○稗史億說年代記　○御誂染長壽小紋　○的中地本問屋　○人間萬事吹矢的　○人間萬事吹矢的（草稿）

第十二卷　洒落本集

○傾城買四十八手　○契情買虎の巻　○嫖客三體誌　○娼妓絹篩　○遊子方言　○月花餘情　○百花評林　○大抵御覽　○異素六帖　○廓中奇譚　○辰巳の園　○和唐珍解　○通言總籬　○辰巳婦言　○令子洞房　○寸南破良意　○仕懸文庫　○猫射羅子　○道中醉語錄　○聖遊廓　○錦の裏　○三致色　○契國策　○眞女意題　○甲驛夜の錦　○田舍芝居　○婦美車紫鄽　○起承轉合　○粹町甲閨　○古契三娼　○滸都酒美撰　○夜半の茶漬　○志羅川夜船　○穴學問　○狂訓彙軌本紀　○娼妃地理記　○遊僊窟煙の巻　○女郎買糟味噌汁　○美地の蠣殼

第十三卷　讀本集

○櫻姬全傳曙草紙　○昔話稻妻表紙　○三七全傳南柯夢　○占夢南柯後記　○飛騨匠物語　○天羽衣　○本朝酔菩提

第十四卷　滑稽本集

○風流志道軒傳　○古朽木　○阿多福假面　○指面草　○人遠茶懸物　○無彈砂子　○小紋雅話　○奇妙圖彙　○浮世風呂　○早變胸機關　○客者評判記　○浮世床　○人間萬事盧誕計　○同上後篇　○假名手本藏意抄　○一盃綺言　○古今百馬鹿　○八笑人　○七偏人　○柳巷訛言　○市川評判圖會　○室の梅　○福來雀　○一雜話三笑　○言葉の花　○鯛の味噌津

第十五卷　人情本集

○春色梅曆　○春色辰巳園　○春色惠之花　○英對暖語　○梅見船　○閑情末摘花　○假名文章娘節用　○八萬鐘

第十六卷　第十七卷　第十八卷　南總里見八犬傳　上中下

第十九卷　膝栗毛其他

○東海道中膝栗毛　○木曾街道膝栗毛　○六阿彌陀詣

第廿卷　第廿一卷　修紫田舍源氏　上下

第廿二卷　第廿三卷　和文和歌集　上下

○眞淵歌文集　○蘆庵六帖詠草　○桂園一枝（景樹）

○うけらが花（千蔭）○琴後集（春海）○宗武歌集
○曙覽歌集 ○藤簍冊子（秋成）○言道歌集 ○良寬歌集 ○女流歌文集

第廿四卷 俳文俳句集

○五元集（其角）○五元集拾遺（同）○五元集脱漏（同）○雜談集（同）○類柑子（同）○玄峰集（嵐雪）○其袋（同）○去來丈草發句集 ○ひとりごと（鬼貫）○鬼貫句選（鬼貫）○七車（同）○とくとくの句合（素堂）○韻塞（許六）○風俗文選（同）○葛の松原（支考）○笈日記（同）○雜文消息（許六・野坡）○蛙合（仙化）○俳諧職人盡（蓼和）○鶉衣（也有）○蕪村句集（蕪村）○蕪村文集（同）○新花摘（蕪村）○寫經社集（同）○十番左右句合（同）○明鴉（几董）○續明鴉（同）○新雜談集（同）○井華集（同）○太祇句集（太祇）○春泥句集（春泥）○三春日記（蓼太）○芙蓉文集（耳得）○白雄句集（白雄）○骨書（樗良）○俳ざんげ（大江丸）○はいかい袋（同）○曉臺句集（曉臺）○佐渡日記（同）○おらが春（一茶）○一茶句集（同）○鼠の道行（成美）○成美家集（同）○蔦眼集（道彥）○鶴芝（士朗）○斧の柄（乙二）○續綺歌仙（宜麥）○屠龍の技（抱一）

第廿五卷 狂文狂歌集

○古今夷曲集 ○萬載狂歌集 ○萬代狂歌集 ○四方のあか ○四方の留粕 ○千紫萬紅 ○萬紫千紅 ○めでた百首 ○かくれ里の記 ○（石川雅望の作では）狂文あづまなまり ○吉原十二時 ○（風來山人のものでは）風來山人六々部集（前篇）○風來山人六々部集（後篇）○風流志道軒 ○（手柄岡持のものでは）我おもしろ

第廿六卷 川柳雜俳集

○武玉川十八篇 ○柳多留三十篇 ○誹風柳多留拾遺四篇 ○川傍柳五篇

追加篇 第廿七卷 歌謠音曲集

○義太夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。）

○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段）○艶容女舞衣（下の卷・酒屋の段）○戀娘昔八丈（下の卷・鈴ケ森の段）○桂川連理柵（下の卷・帶屋の段）○廓文章（吉田屋の段）○傾城戀飛脚（下の卷・新口村の段）○碁太平記白石噺（七つ目・揚屋の段）○花上野譽の石碑（四つ目・志渡寺の段）○木下蔭狹間合戰（七つ目・竹中陣屋の段）○蝶花形名歌島臺（八の切・小坂部館の段）○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段）○玉藻前曦袂（三の切・道春館の段）○八陣守護城（八の切・正淸本城の段）○生寫朝顏日記（宿屋の段）○壺坂靈驗記（澤市内の段）○近江源氏先陣館（八つ目切・小四郎切腹の段）○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切・碁立の段）

○河東節

○松の内　○神樂獅子　○隅田川舟の内　○禿萬歳　○灸すゑ巖の疊夜着　○酒中花　○水調子　○うかぶ瀬　○ぬれ扇　○亂髪夜編笠　○助六所縁江戸櫻　○常陸帶花桐　○道成寺　○淨瑠璃供養　○邯鄲　○熊野　○秦平住吉踊　○浮世傀儡師（外記物）　○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

○一中節

○辰巳の四季　○松づくし　○秦平船づくし　○高砂松の段　○神樂高砂　○畧繪の島臺　○萬屋助六心中　○自然居士過去物語　○源氏妹が宿　○夕霞淺間嶽　○尾上雲賤機帶　○源氏十二段　○賴光大江山入　○鉢の木　○與作小萬夢路の駒　○道行三度笠　○鵜飼石和川　○お夏笠物狂　○競牡丹　○源平妹脊の鷄合

○常磐津節

○老松　○子寶三番叟　○蜘蛛絲梓弦（仙臺淨瑠璃）　○積戀雪關扉（關の戸）　○四天王大江山入（古山姥）　○雨顏月姿繪（葱賣）　○戻駕色相肩（戻駕）　○帶文桂川水（お半）　○倭假名色七文字（源太）　○壽靭猿　○松色操高砂（太神樂）　○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢

木）　○寄罠娼釣髭（釣狐）　○後之月酒宴島臺（角兵衛獅子）　○恩愛瞳關守（宗清）　○願絲緣苧環（おみわ）　○忍寄戀曲者（將門）　○花舞臺霞猿曳（新うつぼ）　○薪負雪間の市川（新山姥）　○乘合船惠方萬歳（乘合船）　○其扇屋浮名戀風（夕霧）　○景清　○勢獅子劇花籠（勢獅子）　○釣女　○戻り橋　○三保の松　○松の島　○三世相錦繡文章（おその六三）　○大森彦七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）　○四十八手戀所譯（相撲をし島）　○百夜菊色の世中（關寺）　○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）　○其俤淺間嶽（淺間）　○道行戀飛脚（梅川忠兵衛）　○連理橋（蟲賣）　○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）　○花川戸身替の段（身替お俊）　○春夜障子梅（夕霧）　○新曲かぐら獅子（神樂獅子）　○徒髪戀曲物（松風）　○茂懺悔睦言（扇賣高尾）　○道行念玉葛（長作）　○幾菊蝶初音道行（忠信）　○拙筆力七以呂波（乙姫）　○草枕露の玉歌和（玉川）　○奈須野　○御代榮益穗富種（豐の前）　○高砂女夫

○清元節

○梅の春　○榮能春延壽（長生）　○北州千歲壽（北州）　○四季三葉草　○其小唄夢廓（權八）　○絲の五月雨（小菊半兵衛）　○深山櫻及兼樹振（保名）　○御名殘押繪交張（鳥羽繪）　○月雪花名殘文臺（玉兎）　○詠梅松清元（茶筅賣）　○色山解深川（待人）　○大和い手向五字（子守）　○色彩間刈豆（かさね）　○法

花姿色同（山歸り）○月花茲友鳥（山姥）○篭花手向橋（吉原雀）○復新三組盞（大山參り）○道行浮塒鳴○道行旅路の嫁入（八段目・おかげ參り）○六歌仙容彩（文屋・喜撰）○彌生の花淺草祭（惡玉）○おどけ俄煮珠取（玉屋）○道行旅路の花聟（落人）○再春菘種蒔（舌出し三番）○初霞淺間嶽（淺間）○〆能色相圖（神田祭）○造鈥菊朧言（菊畑三菊）○菊嬉聞睦言（お岩）○倭假名色七文字（手古舞）○重褄聞の小夜衣（白絲）○明烏花濡衣（浦里）○梅柳中宵月（清心）○日月星晝夜の織分（夜這星）○初櫓噂高島（三人三吉）○貸浴衣汗雷（夕立）○忍逢春雪解（三千歳）○色增艶夕映（雁金）○花雲助相肩（雲助）○青海波○助六曲輪菊（助六）

○新内節

○二重衣戀占（花咲綱五郎）○若木仇名草（蘭蝶）○千日寺名殘鐘（三勝半七）○眞夢血染抱袷（花菖平三）○歸咲名殘の命毛（尾上伊太八）○傾城音羽瀧（おとは七郎兵衛）○膝栗毛「赤坂の段」○膝栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪（浦里）○明烏後眞夢○累身賣の段

○薗八節

○道行相合巨燵（梅川）○桂川戀の柵（お半）○鳥邊山○花街の色糸（植木屋）○道行菜種の亂咲○江戸の繪姿（おひな吉三郎）○道行緣花房（お花半七）○口舌八景（小いな半兵衛）○小春治兵衛巨燵の段○夕霧

○江戸長唄（めりやす大薩摩を含む）

○矢の根五郎○無間の鐘○傾城道成寺○風流相生獅子（相生獅子）○二人椀久○英獅子亂曲（枕獅子）○百千鳥娘道成寺（さなきだ道成寺）○高尾さんげの段（高尾懺悔）○天人羽衣○京鹿子娘道成寺（娘道成寺）○英執着獅子（執着獅子）○風流妹脊の杜建（杜建）○門出京人形（水仙丹前）○亂菊枕慈童（菊慈童）○鐘入解脫衣（解說）○劍烏帽子照葉盞（劍烏帽子）○柳緣諸鳥囀（鷺娘・うしろ面）○初咲法樂舞（法樂舞）○ねこのつま○乘掛情の夏小立（與作）○鞭櫻宇佐幣○百夜車○姿の鏡關寺小町（關寺）○春調娘七種（七種）○童子戲面被（めんかぶり）○衣かづき思破車（やれ車）○童獅子○敎草吉原雀（吉原雀）○相生獅子○嫐染分紅葉（うはなり）○羂取安宅松（安宅）○御代松子日初戀（小松曳）○其容形七枚起請（こもそう）○關東小六後艷形（淡島）○其面形二人椀久○黑かみ○女夫松高砂丹前（高砂丹前）○菊壽の草摺○勢五大力○吹雪の雛形（雛形狂亂）○三重霞嬉敷顏鳥（三重霞傀儡師）○舞扇園生梅（舞扇）○濱松風戀歌（濱松風）○ゆかりの月○美面より○七枚續花の姿繪（汐汲・猿廻し・老女）○遲櫻手爾葉七字（花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・相撲蛋）○戀男調松風（調松風）○再春菘種蒔（舌出し三番叟）○戀畏奇掛合（犬神）○四季詠寄三大字（門傾城・鹿島踊）○閏茲姿八景（節季候・心猿・晒女）○正札附根元草摺（正札附）○寄三津再十二支（小原女・乙姫・四つ竹）○其九紿彩四季櫻（丁稚・天下るの傾城）○

○新獅子　○三升猿曲舞（猿舞）　○石橋（外記の石橋）　○老松　○不動　○七所御攝初鐵漿（西王母・叢入娘）　○大和い手向五字（官女・牛若）　○外記猿　○復新三組盞（初雁の傾城）　○廓三番叟（廓三番）　○歌へす〲餘大津畫（藤娘・關三の座頭・關三の奴）　○月雪花蒔繪の巵（月の卷）　○拙筆力七以呂波（芝翫の傾城・供奴・浦島・瓢箪鯰）　○八重霞賤機帶（賤機）　○後の月酒宴島臺（角兵衛獅子）　○御歳玉海老手遊（とんび奴）　○吾妻八けい（八景）　○六歌仙容彩（業平小町）　○姿花後雛形（小鍛冶）　○初子日　○俄獅子　○外記の傀儡獅　○初しぐれ　○巽八景　○花翫曆色所八景（助六・景清・新鷺娘）　○勸進帳　○花兄弟十二月所作（若菜摘・鐘道・雷）　○島臺　○軒端松　○士農工商　○秋色種　○雛鶴三番叟　○花見車　○手習子　○繋どの　○常磐庭　○鶴龜　○五色の絲　○今様小鍛冶　○柳糸引御攝（裸三番叟）　○壽　○鞍馬山　○翁千歳三番叟　○廓丹前　○菖蒲ゆかた　○喜三之庭　○紀州道成寺　○連薗　○時雨西行

○歌　澤

寅派、芝派の歌詞を全部收める。

○小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に尙唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

追加篇　廿八巻

謠曲三百番集

○脇能物

○高砂　○弓八幡　○志賀　○淡路　○御裳濯　○代主　○佐保山　○松尾　○養老　○老松　○白樂天　○放生川　○鶴龜　○東方朔　○白髭　○大社　○寝覺　○源太夫　○道明寺　○難波　○鵜祭　○輪藏　○富士山　○江島　○賀茂　○嵐山　○氷室　○逆矛　○要石　○和布刈　○竹生島　○九世戸　○岩船　○金札　○吳服　○西王母　○右近　○繪馬　○鱗形　○玉井　○内外詣

○修羅物

○田村　○八島　○箙　○忠度　○俊成忠度　○經政　○通盛　○兼平　○頼政　○實盛　○巴　○清經　○朝長　○敦盛　○生田敦盛

○三番目物

○野宮　○井筒　○芭蕉　○采女　○東北　○梅　○佛原　○墨染櫻　○身延　○半蔀　○夕顏　○定家　○江口　○楊貴妃　○雪　○二人靜　○千手　○六浦　○藤　○杜若　○羽衣　○誓願寺　○小鹽　○雲林院　○遊行柳　○西行櫻　○陀羅尼落葉　○源氏供養　○大原御幸　○吉野靜　○住吉詣　○松風　○熊野　○草紙洗小町　○山姫　○祇王　○胡蝶　○吉野天人　○鷺　○葛城　○龍田　○三輪　○卷絹　○檜垣　○關寺小町　○鸚鵡小町　○姨捨

○四番目物

○三井寺　○櫻川　○柏崎　○百萬　○飛鳥川

○雲雀山○隅田川○蟬丸○花筐○班女○加茂物狂○水無月祓○籠太鼓○富士太鼓○梅枝○玉葛○浮舟○三山○卒都婆小町○碪（佐）○求塚○水無瀬○藍染川○竹雪○鳥追舟○籠祇王○室君○初雪○花車○女郎花○戀松原○善知鳥○阿漕○藤戸○松虫○錦木○船橋○綾鼓○戀重荷○雨月○鐵輪○葵上○道成寺○木賊○景清○弱法師○俊寛○攝待○鉢木○土車○高野物狂○芦刈○盛久○春榮○小督○七騎落○仲光○切兼曾我○安宅○木曾○元服○曾我○小袖曾我○重盛○楠露○櫻井○正行○藤榮○放下僧○花月○自然居士○東岸居士○歌占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲○枕慈童○菊慈童○天鼓○咸陽宮○大佛供養○夜討曾我○橋辨慶○湛海○忠信○錦戸○禪師曾我○關原與市○現在巴○正尊○草薙○泰山府君○現在七面○調伏曾我○望月

○五番目物

○鵜飼○野守○鍾馗○昭君○松山鏡○壇風○烏帽子折○熊坂○鞍馬天狗○車僧○善界○大會○第六天○葛城天狗○殺生石○小鍛冶○鵺○舍利○谷行○雷電○國栖○春日龍神○大蛇○龍虎○愛宕空也○飛雲○現在鵺○大江山○土蜘蛛○羅生門○安達原○紅葉狩○船辨慶○山姥○項羽○碇潜○一角仙人○張良○皇帝○融○須磨源氏○絃上○海士（人）○當麻○來殿○松山天狗

○石橋○合甫○猩々○大瓶猩々○翁○大典閑曲曲舞獨吟○護法○響千○千引○常陸帶○空蟬○鷺龍田○阿古屋松○紫式部○羽○松滿物狂○鶴羽○布留○丹後物狂○牽牛花○十番切○笠卒都婆○匯鼓院○明智討○紫田○北條○吉野詣○高野詣○池贄○鞠○非　其他

以上日本名著全集、第一期出版「江戸文藝之部」全廿六卷及追加篇二冊は、第十一卷乃至黄表紙廿五種を第一回配本として毎月一冊乃至二冊宛を刊行するもので、豫約申込は、大正十五年六月十六日を以て一旦締切りましたが、會員數の增大に伴ふ多量製產の利得を以て、益々いゝ本を作らんがため、その後も、また現在も、おそらく當分は將來も、會員の御紹介による新入會員の申込を歡迎致します。

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて一圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので每月の會費とは別。從つて一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。

（終）